

東方Project —人生
楽じゃなし—

堀吉之助

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然、幻想郷の「外」に放り出された彼女達は
なんやかんやありつつも普通にくらしていた。しかし、世は楽しくも生きづらし。
そんな、彼女達のお話を、どうぞ。

目次

第一部

第1話

1

第2話

19

第3話

33

第4話

44

とりあえず、の落着

56

第一部おまけ 銭湯に行こう！

74

第二部

1話

86

2話

97

3話

111

4話

125

5話

151

6話

165

7話

179

8話

194

9話

208

10話

220

11話

234

12話

248

13話

272

現れたヒーローの名は！ 前編

286

現れたヒーローの名は！ 後編

1話	376	365	348	334	309
—	おまけ：優曇華事件	秋のおまけ：恐怖の忘れ小傘！	おまけ 赤毛のメイドさん 後	おまけ 赤毛のメイドさん 前	
420	おまけ：花の妖怪と三妖精	秋のおまけ：布都が帰ってこない			
	403	389			

第三部

13話	13話	12話	11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話
B	A			閑話								
636	614	590	575	560	544	531	516	497	479	462	448	434

さいの	18話A	17話B	17話A	16話B	16話A	15話B	15話A	行く	おまけ	14・5話B	14話B	14話A
——	商店街の小さな店の、	——	——	——	——	——	——	——	守矢の三人、太宰府天満宮に	——	——	——
850	小	836	822	808	787	769	747	714		692	676	656

25話B	24話B	23話B	22話B	22話A	1007	21話B	21話A	20話B	20話A	19話A	19話B	18話B
——	——	——	——	——	賢将、目覚める上	賢将、目覚める下	——	賢将、目覚める上	——	——	——	——
1103	1087	1070	1045	1022			990	967	942	919	888	868

4 6 話	1604	【番外】 董子のうままー 【挿絵付き】	4 5 話	4 4 話	4 3 話	4 2 話	4 1 話	4 0 話
1609			1589	1575	1558	1544	1530	1512

第一部

第1話

ある日。眼が覚めたら別の世界にいたらいいと思うのは、多くの人間が思うことだろう。それは普通ならば現実に起こりうるわけがないと分かっているとしても、心のどこかで考へてしまう幻想である。

それは現実逃避なのか、それとも純粋な異世界への憧れなのかはわからない。いや、それこそ人それぞれなのかもしれない。しかし、そんなことを願っている人の元に運命がやってきてくれるとはわからないのだ。

しかし、それが幻想郷の住人達に丸ごとやってきた。朝、目が覚めるとそこはいつもの場所ではなくなっていたのだ――。

目覚ましがけたたましくなる。

古明地さとりは眠たい眼をこすりながら、起き上がろうとしたのだが、何かに圧迫されて起き上がれないことに気が付いた。彼女は眼線を下にやると、胸に「足」があることに気がついた。横で寝ている誰かの足だろうが、小さな指が誰なのかを表している。

さどりの頭上で目覚ましがなっている、それでも他の「住人」は誰も起きる気配がない。自分だけ起きていることに不公平を感じることはないが、さどりは目覚ましの音に不快感を覚え、胸元にある足をどけて起き上がろうとする。

さどりは足を掴んで、横に置く。彼女が足から手を離れた瞬間に、突如として動いた足が顔にかかと落としを繰り出す。さどりは慌てて首を横に背けてよける。ばふんと彼女の枕にかかるとによる攻撃が来て、さあとさどりは青くなる。一瞬でも遅れていれば、と考えてしまう。

「……目がさめたわ」

さどりは起き上がって、ふああと大きく伸びをする。ピンクのパジャマを着た、桃色の髪の少女。それが彼女である。髪は少々寝癖が付き、横に跳ねている。片目はなぜかつむつており、開いたもう片方の目も眠そうであるが、これは元々だろう。彼女は目覚ましを叩くように止めた。まだ六時半にもなっていない。

さどりはいきなり朝から、蹴り殺されそうになっても怒りを覚えなかった。彼女の住んでいるのは三畳一間の狭いアパートで、そこにめいっばい安物の蒲団を敷いて、五人で寝ているのだから寝相が悪いくらいは仕方がない。ちなみにキッチンは一休型などと言われたことはあるが、普通に併設されているだけである。台所と言った方が似合っている。

さとりは「足」の正体を見る。昨日寝た時とは逆さまの格好で、お腹を出し、幸せそうに寝ている青髪の少女はチルノという妖精だった。涎を垂らして、「がいむう」とこのごろ覚えたヒーローの名を呼ぶ。その下敷きになってるのが金髪で紅いリボンをつけた妖怪であるルーミアだった。

「そ、そうなのかい」

チルノと寝言で会話するルーミアだが、純粹に重いのだろう。声に元気がない。チルノが彼女の背中でごろごろと転がるたびに、何かくぐもった声を上げる。逆にチルノはお腹を掻きながら「もう、たべられないよ」と心底嬉しそうに言う。

「ああ、起きていたのか……助けてくれ」

さとりが見ると、壁に張り付いたように寝ている長髪の女性がいた。彼女の名を上白沢慧音といいその背中を足で抑えているのが、かつては巫女として飛び回っていた博麗霊夢である。彼女は慧音の背中を足で押して、壁に張り付かせている。

霊夢は寝相が悪いほうではないのだが、この密着した空間で寝苦しさから慧音をできるだけ離そうと無意識に慧音を足で追いやっていた。ぐつと押すので慧音もどうしようもなく壁に張り付いたまま、身動きが取れないようだった。目覚ましが鳴っても誰も起きそうにないときさとりは思っていたが、正確にいうと慧音の眼は覚めていたが起き上がれる状況になかった。

さとりは霊夢の体を動かして、慧音を救出する。この家には二枚の敷布団の他は二枚のタオルケットしかない。それでもこの夏に扇風機もなく密集して寝るのだから、たまったものではないのだろう。

さとりはパジャマの首元を引いて、汗でぬれた下着に気持ち悪さを感じた。彼女はあとため息をついて、立ち上がる。その瞬間にチルノの足がさとりのすねを蹴る。寝ぼけている。

「……………」

さとりは声押し殺して、目元に涙をためながら自らのすねをさすった。こんな状況でも他の者が起きないように配慮している彼女は、優しいというよりは甘い。だが、さとりにも同情者はいた。慧音が立って「だいじよ——」と何かを言いかけた瞬間に、霊夢からすねを蹴られる。

「!!」

慧音も歯を食いしばって声を上げない。これは配慮というよりは体の小さなチルノに蹴られるよりはるかに痛いことから、声が出ないのだろう。だが、当の霊夢は夢の中にいる。彼女は何かがあっても朝はぎりぎりまで起きないのだ。それには理由がある。

慧音とさとりは眼を合わせて、ため息をついた。とりあえず、シャワーでも浴びようと彼女達は思った。

この奇妙な共同生活が始まったのは、数か月前のことである。ある日目が覚めたら、彼女達は幻想郷ではなくばらばらの場所ではあるが「外」世界にいた。それがなんなのか、なぜなのかなどは全くわからないのだが、それでも生活していくために身を寄せ合って生活するしかなかった。

知った顔を見つけては、助け合い、彼女達はやつとこのアパートに入ることができたのだ。幻想郷ではこの五人は一部を除いてほとんど交流がなかったのだが、この極限的な状況では互いに同じ場所に暮らすしかなかった。

さとりはシャワーを頭から浴びながら、思う。

(つめたくて、気もちいい)

ここはアパート共用のシャワーであり、さとりのような住民であれば入ることのできる場所だった。といえば、聞こえはいいのだが共用「風呂」ではなく「シャワー」である時点でコストを抑えたいという意図がありありと見える。しかも、お湯が出ない。だからこそさとりは冷たい水を頭からかぶっている。

冬はどうなるのか、想像には難くないのだが今は夏。さとりは心に思ったとおり、ありがたいと感じていた。さとりは風呂用のスポンジで体を洗う。それは一〇〇円

ショップで買ってきたという、悲壮感漂うものである。それでもごしごしと立ったまま、さとりは体を洗う。彼女の「第三の眼」はタオルで巻いて、濡れないようにしている。

「さとり、終わったら貸してくれ」

慧音がひよつこりと濡れた髪をポニーテールにまとめ、顔を出す。このシャワー室は仕切りが一つだけあり、シャワーが二つある。二つもあると考えるのか、それしかないのかと考えるのかは心の持ちようだろう。

ともあれ、慧音は仕切りから顔をのぞかせてさとりにスポンジを催促する。スポンジは一つしかないのだ。一〇〇円でも貴重な生活が今の彼女達の窮状を表している。仮にスーパーで特売でもあろうものならば、いつでも出向く。徒歩で。バスを使う金がない。

「はこ」

「すまない」

さとりは慧音にスポンジを渡す。無論、渡す前にシャワーで洗ってはいない。元々ボディーツープのような贅沢品などは使っていないので、泡などはついていない。体をそれらで洗うのは夜だけだ。

さとりはきゅっと錆びついた蛇口を締める。温度を調整することができるはずの

メーターが付いているのだが、いくら動かしてもその日の水温以上にならない。夏の暑い日の、それも昼限定でお湯が出る可能性はある。

さとりはシャワーのしきりにかけておいたビニール袋を手にとつて、中からバスタオルを取り出して、頭を拭く。ビニール袋は二重にしており、中には着替えなども入っている。濡れないようにしているのだ。脱衣所など最初からないので、できた生活の知恵である。ビニールをかける吸盤も一〇〇円ショップである。

「ごしごしと頭を拭いて、さとりは思案する。

今日の買い物のこと、朝ごはんのこと、チルノとルーミアの世話。それに霊夢をどうやって「説得」するかのこと。彼女はとりあえず、いろんなことを考えてから最後に思つた霊夢の問題に悩んだ。毎日のことではあるのだが、それをどうにかしないと餓死しかねないのだ。こちらの世界に来てから、著しく妖怪の力が落ちて、普通にお腹は減るし、怪我をすれば治るのに時間がかかる。

「ふうふうん」

横で鼻歌を歌う慧音など。頭からコンクリートにぶつかつて、治るまで時間がかつたこともある。それはどこぞの烏天狗と飲んでいた帰りだった。美人なのだが、こちらではどこか抜けた女性にしか見えない。

慧音が歌う中で、さとりは下着を着ながら考える。

☆☆☆

さとりは桃色のポロシャツに半ズボンのジーンズを着て、その上からエプロンをかけて。頭にはカチューシャがあり、味噌汁をお玉でかき混ぜながら、少しだけ小皿にとつて飲む。塩気が少し強い気がするがそれはわざとである。

もう夏も本格的に熱くなってきたのだ。塩分を取っておかなければ、健康に問題がある。さとりはその点では全員のことを心配していた。彼女の横では炊飯ジャーが音を鳴らしながら水蒸気をあげている。

『九月一日に日印での首脳会談が行われることとなり、内閣総理大臣は……』

さとのりの後ろでニュースが聞こえる。そこは今朝皆で寝ていた部屋である。すでに蒲団はたたまれていて部屋の隅に置かれている。そのかわり折り畳み式の円卓が部屋の中心におかれ、それを囲むようにして慧音と霊夢がミカン箱の上にあるテレビを見ている。

慧音は髪をポニーテールでまとめたまま、頭には小さな帽子をかぶっている。そして、しっかりとプレスされたワイシャツを着ており、下は黒のパンツスーツ、スタイルの良い彼女なので似合っている。

その横で霊夢はぼけえとテレビを見ている。彼女は作業服を着ていた。青いそれは一応、アイロンをかけられていてしわが少ない。普通ならばアイロンなどかける必要は

あまりないのだが、さとりは彼女の作業服を清潔かつキッチンとするようにしていた。

「ろつくおーん」

その二人の後ろで何故か慧音のベルトをつけたチルノが、何か決めポーズをする。ルーミアはゴロゴロしながら、チルノを見ている。紅い眼をきらきらさせる彼女の前で、チルノは腰に手をあてて、ふっふんと鼻を鳴らす。

「あたい、今日はらじおたいそーで一番だったんだから」

「そーなのかー」

さとりはそれにくすりと笑い。食事の用意を進める。この朝の時間はすさまじいほどに、大切である。命がかかっているといつてもいい。さとりは冷蔵庫を開いた、冷蔵庫といつても普通であれば、缶ビールなどを冷やすための小さなものである。

そこからさとりはもずくをとる、冷奴と行きたいところだがそんな金はない。

『が162キロのスピードを計測し……』

テレビの音を聞きながら、全員で円卓を囲んで食事をとる。さとりはチルノの横について、彼女が箸を適当に持ったびに、注意する。反面、ルーミアはお味噌汁を両手で椀をもって飲みながら、ご飯を食べる。

慧音はもくもく、霊夢はちびちびと食べ、質素な食事を味わう。慧音は時折、味噌汁

などを褒め、今日は久方ぶりに炊き立てのご飯だと言う。よく聞くと悲しい気もするだろう。だが、霊夢は終始無言で、ちらちらとテレビの時計に目をやる。

「あつ」

霊夢のそんな様子にさとりは気が付いた。もう8時になろうとしている、そろそろ霊夢の「出勤の時間」であるのだ。さとりは片目でちらと慧音を見る、慧音も気が付いたのかこくりと頷いた。ここからが戦いの時間である。

「ほんとさとりが咳払いをする。

「れ、霊夢」

「なによ」

「そ、そろそろ出勤の時間」

バツと立ち上がった霊夢はそのまま、部屋の窓から逃げ出そうとした。ぎらりと慧音が眼を光らせて、その腰を抑える。霊夢はわめきながら窓わくに手かけてそれでも逃げようとする。

「お、落ち着け霊夢」

「いやよおおおお、もう、刺身の上にタンポポを乗せるだけの仕事はいやああ!!」

「お、落ち着いて霊夢! あれは菊らしいわよ」

「どっちでもいいわよおお! 八時間もコンペアーから流れてくる、刺身にぽとぽとぽ

と……」

霊夢はそれで気分が悪くなったらしく。顔色を青くする。そう彼女はこの一家の大黒柱にして単純労働従事者なのだ。へたな技術職よりも精神がつかない仕事を毎日やっているのである。さとりはそれに申し訳なく思いつつも、彼女が逃亡した場合全滅することが明らかなので毎日このように説得しているのだ。だが今日は、さとりも霊夢を氣遣い、言う。

「だ、だったらまた転職する?」

「……いや」

霊夢は「転職」の言葉に反応した。

「いやよ……ミルクねじりパンを四六時中ねじる仕事は! あの親父! ねじる角度が違うって。同じでしょうがあああああ」

いつかの記憶に憤慨する霊夢。空想の上司に右ストレートをお見舞いする。そんな様子に慧音は言った。

「れ、霊夢。お前が働いてくれないとだな」

「うっさい! この無職!」

「ぐふう」

慧音はすさまじい苦悶の表情で膝をついた。かろうじて霊夢の腰は離していない。

ぱっと見るかぎりのキャリアウーマンではある慧音だが、その実態はノージョブであった。

チルノとルーミアはテレビを見ている。さとりと慧音と霊夢の不毛な言い争いはもはや理解の範疇を超えているのかもしれない。

「わ、私だって。毎日ハロージョブで仕事を探しているんだ……教職の仕事を！」

そう、慧音は仕事を子供に物事を教えることに限定して探していた。幻想郷で行っていたことなので、自信があるのだろう。実のところ、あまり才能のない事柄なのだが、彼女にも意地がある。

「な、何が事務職ならだ！ わ、わたしは」

慧音にもトラウマがあった。以前、塾の講師をしたときに、生徒全員を眠らせたことがあるのだ。話が面白くないというより、難解で長くしかも無駄に発音だけはいいのでよい子守歌になったようである。先の発言はその授業後に言われたことである。

ちなみにさとりににもその手の、話はある。トラウマというほどでは全然ないが、霊夢と一緒に面接に行つて落とされて、のちに霊夢から人事部の者が「ピンク頭」とあだ名していることを彼女は知った。落ちたのもそれらしい。以来、アパートでの家事全般はさとりの仕事になった。

霊夢はそんな二人の前で言う。

「も、もう幻想郷に帰りたいたい！」

そういいながら暴れそうな霊夢をなだめすかし、慧音とさとりは二人係でバス停まで彼女を連行した。弁当と水筒は忘れずに持たせている。

☆☆☆

バスが走り去っていくのを慧音とさとりが見送る。バスの窓から怨念のこもった巫女の顔がへばりついていることは見えたが、見なかったことにした。

慧音ははあとため息をつく。彼女はスーツをはおっており、その姿はどこからどう見ても「できる女」である。実態については二重に言う必要はないだろう。

「私は、ハロージョブでこのまま仕事を探してくる」

慧音はさとりに言う。彼女も頷いて、それを承認する。

「じゃあ、あまり遅くならないようにね？」

「いや……もしも、早くなりそうなら十六夜さんのところで資格の勉強をしてくるよ……SPIの勉強もしておかないといけないし……な」

「そう。わかったわ……それなら」

さとりはポケットからがま口を取り出した。その中から300円を取りだして、慧音に渡す。いつも行くカフェでのアイスコーヒーならば、それでことたりるだろう。慧音はそれを震える手でもらってお礼を言う。

「ありがとう」

慧音はお金に余裕がないことは重々知っている。それなのに自らの為に割いてくれたことに申し訳なささと感謝を感じる。

このことからわかるように一家のお金はさとりが管理していた。彼女は厳格な性格ではないのだが、公正、温厚で聡明であるのでお金の管理には適しているのだ。つまり霊夢が働き、さとりが管理し慧音、チルノ、ルーミアを養っている形なのだ。この構図からみても、慧音のストレスがわかるだろう。子供のような彼女達と一緒にいるのだから。

慧音もどこか背中を丸くしながら仕事探しにでかけた。

さとりは家に帰るために道を少し遠回りすることにした。家にはチルノとルーミアがいるのだが、ルーミアはああ見えて別に子供ではない。チルノの相手をしているから、同じくらい精神年齢にみえても、実のところは大人と断言していい。少なくとも留守番をする程度は問題ない。

だからさとりは商店街のほうへ足を向けた。その顔がだんだんにやけてくるのは彼女にも止めることができない。サンダルが軽快な音を立てる。

そう、さとりはこの現代に来てからなによりもうれしいことがあったのだ。それは彼女が歩くたびに、人とすれ違うたびに、第三の眼にその人が映るたびに確認できる。さ

とりは彼らが「何を考えているのか」がわからないのだ。

さとりは「心を読む」妖怪である。それは相手を見るだけで、心の声は無条件で聞いてしまい。聞きたくないことまでも聞いてしまう、そんな能力である。彼女の妹はその能力で心を閉ざしてしまつたほどだ。その妹は今、とある寺にいる。

さとりは軽い足取りでにやついたまま、道行く人の心を覗こうとする。無理だつた。それでうれしくなる。厳密に言えば凄まじいほどに集中すれば聞き取れないことはないが、そんなことはしない。

人の考えが分からないことがうれしい。さとりにはわからないその感覚を彼女はこれ以上ないほどにかみしめる。これが「外」の世界に来てから、毎日のようにさとりが楽しむことだつた。そのせいで商店街の者たちからは背中から赤い変なアクセサリーを付けた、桃色とあだ名されていることなど、彼女は露知らない。だが、それも愛されていることだろう。

さとりはそんな気持ちのまま、商店街に入った。アーケードに入り、彼女は左右に立ち並ぶ店を外から覗きながらいく。八百屋や肉屋、魚屋、花屋、その他もろもろのお店たちは幻想郷の住人であるさとりには何度みても飽きない。

「さとりちゃん。今日はきゆうりをやすくするよー」

八百屋のおばちゃんにそんな風に呼び止められればさとりは、立ち止まり。世間話を

しながら野菜を物色する。大抵は彼女があまり裕福でないことを知っているおぼちゃんにおまけをもらうのだが、さとりはさとりで必要な分はできるだけ決まった場所で買うようにしている。

「ありがとうねー」

そんな声を聴きながら、さとりは八百屋を後にして手に持ったビニール袋に詰まった野菜の重さを感じる。エコバックにしないのはビニール袋がほしいからだ。それも生活には欠かせない大切な資源である。地球温暖化など気にしている余裕などない。

「ふ、ふ、ふ、ふ」

さとりはとある店の前で立ち止まって、くぐもった笑いをもらす。そこには「本」と書かれた旗のたった店だった。朝はまだ早いのだが、もう開いているようだった。彼女は中に入っていく。

自動ドアを超えて、入り口近くには「黒田官兵衛コーナー」があつたが、それをちらりと見ながら、移動する。商店街の本屋にしては奥行きが広く、背の高い棚が並んでいる。棚の大きさは広いといっても、無駄なくスペースをしようとしているのだろう。

レジは奥にある構造なので自動ドアの音に反応した店員の「いらつしやいませー」だけが響いて、姿は見えない。さとりはそれでもお目当ての棚まで、歩く。その動きから慣れているのがわかるだろう。

さとりは恋愛小説のコーナーで立ち止まり、適当に取った本を読み始めた。昔から、その手の本は好きだったが「外」の世界にはそれがあふれている。だからこそ、彼女は毎日のようにここに通っていた。時間は短い。本に折り目は付けない。立ち読みなんてしたくはないのだが、なんとなくやめられない。

数週間後にとある人物から「図書館」を教えられて飛び上がった喜ぶさとりだが、今は申し訳なさを抱えて、本を読む。たまには何かを買ってあげないと、とも思っていた。だがその平穏な空気は、一つの音とともに破られることになるのだ。

ヴヴヴとさとりのポケットが揺れる。ぱちくりと眼をしばたかせたさとりは、電話だと気が付いて。本を置き、ポケットからスマートフォンを出す。無論ではあるが、格安のスマートフォンである。

一応、霊夢とさとり、それに慧音の三人はそれを所持している。電話代の関係上めつたに使わないので、さとりはいきなり鳴ったものがなにかと気が付かなかつたのだ。しかし、今画面にでているのは「慧音」の文字。

「何かしらっ？」

さとりはその電話を取ってから、ちよつと受け方を思い出しながら、出る。電話口でははあ、はあと何か荒い息が聞こえた。慧音が何か慌てているのだろう。

「どうしたのかしらっ？」

「た、大変だ！ さっき、電話があつたんだが、そ、それが霊夢からだつたんだ」

慧音は言う。とにかく無駄な言葉を省いて要件だけを伝えようとする。普段それができないから、塾の講師にすらもなれない彼女がそれをした。どれだけ焦っているのか、そこからわかるだろう。

慧音の声が響く。

「霊夢が、逃亡した——」

さとりはその場で固まってしまった。

第2話

やってやった。そう思いながら、霊夢は走っていた。仕事場の最寄りにあるバス停で降りて、行くべき場所とは逆方向に走ってやったのだ。慧音にはちゃんと「連絡」もしてから、着信拒否にした。

作業服の上から、からったりユックサックから、水筒が鳴っているのか水音が聞こえる。走りながら見上げると、青い空が広がっている。心は爽快。解放感は極上。毎日の仕事から背を向けて逃げ出すこの瞬間に、霊夢は笑いたくなくなった。

でも熱い。笑おうと開けた口に、むわつとした空気がはいってくる。霊夢はだんだんと走るスピードを落として、無意識に日陰を探した。少し先に公園が見えて、彼女はそこに入っていく。公園の入り口に差し掛かったときには、もうふらふらしていた。

「ぜはあ、ぜはあ」

霊夢は駆け込んだ公園の木によりかかって、息を整える。体が熱いのは、単に作業服のような保温性に優れた服を着ているからではない。霊夢が眼線を動かして、公園の奥

にある砂場を見ると、陽炎が立ち上っている。

玉の汗が肌に浮かび、霊夢は息が穏やかになつていくことに反比例して、体の奥から熱が湧き上がっていくのを感じざるをえなかった。彼女は地面に腰を下ろして、リュックを下ろす。作業服の胸元を開けて、汗にまみれたシャツがわずかに見えた。胸がわずかに上気する。

「あ、は、も、もうタンポポを見なくて済むわ」

刺身の上のタンポポ。それは俗説であり、実際には菊なのだが、霊夢にはそんなことはどうでもいい。あの空間にいて、長い時間拘束されなければ、何一つ問題がないのだ。霊夢は顔を流れる汗に不快感を覚えて、袖で拭く。拭いてもすぐに汗がわきあがってくるから、無駄だと思つてすぐにやめた。

霊夢は地面に手をついて、膝を曲げて横座りをする。恰好は作業服という、男のような形だが彼女も女の子なのだ。ただし、座り方が恰好にあつていないのは別の問題である。それでも彼女は座つたまま、首を上げて空を見る。

青い髪をした「にやけ顔」がそこにあつた。「彼女」は座っている霊夢の真後ろにいつの間にか回り込んで、霊夢が顔を上げた瞬間に中腰で見下ろしたのだ。霊夢は驚いて、体勢を崩してしまう。

「う、ずあわあ、て、天子！」

「あはははは。霊夢、あ、あははは」

比那名居天子はいたずらに成功して、お腹を押さえながら笑う。彼女は長い青の髪を両側で結んで、ツイントールにしている。恰好はなぜか、白のラインが入った青のジャージ姿で頭にはアデイダスの白いスポーツキャップをかぶっている。

霊夢は慌てて立ちあがって聞く。その顔が多少紅潮しているのは、驚いたことと奇矯な声をだしてしまった無様さからだった。

「な、なんであんたが」

「ひ、ひひひ、あははは、あははは」

「ねえ、ちよっと」

「あ、あはは、ごめん、なき、つぼに、はは、く、ぐるじい」

しまいには咳き込み始める天子。膝をついて、お腹を押さえながら笑うから、まだ息が苦しいのかヒューヒューと息をし始める。霊夢は流石に心配になって。その背をさすってやる。だが天子は彼女の顔を見ると、吹き出し。唾が少しだけ霊夢にかかり、彼女のこめかみに青筋をたてる。

霊夢は立ち上がって、冷たく天子を見下ろしながら言う。多少日頃のストレスから言葉も辛辣になってしまった。

「もう、そこで笑いながら死ね」

「あ、は、はは。ご、ごめん。み、みずでないで」

涙を目元のために、勝手に苦しむ天界の住人。霊夢はそこから踵を返して、立ち去ろうとするがその足首を天子に掴まれる。霊夢は足を引いて振り払おうとする。

「は、はなしなさいっ」

「は、薄情ものお」

天子と霊夢の意味のない言い争いはしばらく続いた。

ベンチに腰掛けて天子はアーク・エリアースをぐびぐびと飲んだ。彼女はペットボトルを傾けて、中のドリンクをすさまじい勢いで干していく。彼女が飲み終って、口からペットボトルを外すとぼんと音がした。桃色の唇が、少しだけ水をはじく。

「ぶはあ、やつ、やつと落ち着いた」

「……そりゃあ、よかったわね」

天子の横で霊夢が手に持った、お茶のペットボトルを両手で持っている。多少減っているのは彼女が飲んだのだろう。霊夢は水筒を持っているのだが、なんとなく飲む気がしなかった。その水筒入りのリュックは彼女の傍らにある。

天子はとりあえず空になったペットボトルを腰にさした。ジャージを引っ張ってそこにさすという、すさまじいほどに大雑把なやり方である。しかし、彼女は気にするそ

ぶりも見せず立ち上がって霊夢に言う。

「じゃあ、どこに遊びに行く?」

わくわくした顔で天子は言う。霊夢はいきなり言われて、はあと口を開けた。一瞬だけ何を言われたのか本当にわからなかった。彼女はかろうじて、声を出す。

「あそび?」

「そうそうそう。せつかく会ったんだから! 遊ばなきゃ損じゃない!!」

ぐつと霊夢の肩をもって、きらきらと輝く眼で彼女を見る。霊夢は困惑と呆れた気持ちで彼女を見返すが、天子にそんなことはなんら関係がない。それどころか、霊夢の返答など聞かずに天子は霊夢の手をとって引つ張る。

「さ、さー、いこう」

「い、いやちよつと待ちなさ」

霊夢はあわててリュックを取り、天子に腕を引かれるまま、走り出した。彼女は流石に、これから三kmほど走らされるとは気が付かなかった。

生まれたての子牛のように足をがくがくとさせながら、霊夢はぼけえと目の前の建物を見ていた。彼女の前には、めいっばい見上げないと「頂辺」が見えないほどの高層マンションがあった。しかもその中に、天子は入っていくのだ。

「れいむー?」

「はっはい」

何故か天子から呼ばれて敬語で返事をしてしまう。霊夢は大理石を敷き詰めたエントランスに入った。このエントランスだけで霊夢の家より大きい。彼女のアパートにはそもそもエントランスなどという洒落たものが存在しない。ドアを開ければ即、外出できる。皮肉を言えば、合理的であろう。

そんな中で、天子は、奥の自動ドアの前にあるモニターをタッチパネルで操作して、最後に指を数秒置く。それだけで、ドアが開いた。

「し、指紋認証」

伝説で聞いたことがある、という風に霊夢は驚いた。本当にこの世にあったのかと彼女は驚きを隠せない。というか、どこからどうみても遊びまわっていきそうな天子がそれを開けたことが信じられない。

霊夢は夢心地のまま、天子の後ろをおっかなびつくり進み。驚くほど音のしないエレベーターに乗って、上の階へ昇った。エレベーターはガラス張りで外の景色が急速に動いていく光景に霊夢は口を開けて驚く。

驚きはそれだけではない。エレベーターが停まり、霊夢と天子の降りた階の床は絨毯張りの廊下である。霊夢は「廊下が柔らかい」という未知の感覚になぜだかわからない

が戦慄を覚えた。ここで寝転がれば、畳の上で寝るより気もちいいのではないだろうか
と、彼女は思う。

「霊夢？　ハハハ、ハハハ」

とある部屋の前で天子は止まる。霊夢は天子に驚いているところは見せたくないの
で、できるだけ神妙な顔をして、こくりと頷く。腕を組んで、じつとりとしたその目つ
きは虚勢の現れである。

天子は「？」と頭に浮かべながら、ドアを開けた。鍵で開けた様子はないが、何かし
らの機能が作動して「ピーガチャ」という音がしたが、霊夢は聞かなかったことにした。
きつと空耳であろうと勝手に納得する。

霊夢はとりあえず、天子の後ろから部屋に入っていく。

後ろの廊下をおかっぱ頭のかぐや姫のような女性がだらしない恰好で、お腹を掻きな
がら歩いているのは、さすがの霊夢も気が付けなかった。

天子の部屋に入った霊夢はいろんなことを知ることになった。

とりあえずフローリングの床に自分の顔が映ることを霊夢は知った。ダークな色の
それは、しっかりとワックスがかかっているのか、霊夢が足を動かすと、すべるような
感触を覚える。この部屋には窓を多く作り、外の光を入れる構造になっており、フロア

リングに光が反射して、映える。

「ま、まあまあね」

訳の分からない強がりを言いつつ、霊夢は奥へと眼を向ける。そこにはシステムキツチンが——特に奥には何も無いようね、と霊夢は現実逃避しつつ、近くにあったソファアに腰掛けた。身が沈むような弾力のあるそれが、いいものであることくらいは霊夢にもわかった。

ソファアに座ると、目の前にはワイドなテレビ台とその上に何インチあるのかわからない薄型のテレビが置いてあった。テレビ台にはものが置けるようになっており、そこにはテレビゲームのハードだとか、ソフトだとかが置いてある。

テレビ台の左右に「棒」のようなものが立っていたが、それを霊夢は「スピーカー」だとは認識できなかった。これについては本当に知識として、頭にない。

「いっちに、いっちに」

驚きで頭の中がパンクしそうな霊夢とは裏腹に、この部屋の主はのんきにストレッチを行っていた。霊夢が走りながら聞いた話では、天子は日課としてジョギングをしているらしい、ジョギングをしなければ天子は、

「ロードバイクで遠くに行くかな?」

などと言う。

しばらくして、霊夢は天子に部屋のことを聞く決心ができたのか、口を開いた。なぜこんな場所を借りることができたのか、彼女じゃなくても気になるだろう。

「ね、ねえ。天子」

「ん、どうしたのかしら？」

天子は頭を縛っていたゴムを取り、ツインテールをほどく。それで青い髪が流れるように、ふわりと動く。留めていたのに天子の髪には癖がついてない。艶のあるそれは、太陽の光を反射してほのかに、光っているかのようなだった。

天子はキャップはすで取っていた。そのままジャージの上着を脱いで、霊夢の話聞く。天子は中に黒のインナーを着ていた。それは体のラインが現れるぴっちりとしたものだが、汗が滲んでいる。

「この暑いのによくやるわね」

見るだけで辟易した霊夢は言う。彼女の格好もかなり熱い部類にはいるのだが好んで厚着をして運動を行う天子とは、少々話が違う。方や健康のため、方や生活のためあるのだから。

「ん？ んー」

天子は何を言われているのかわからないといった顔で、ジャージのズボンを脱ごうとする。霊夢はぎよっとして、止めた。女の子同士でもいきなり、目の前で服を脱がれて

は困惑するだろう。

「な、なにしてんの」

は？ と天子も手を止めて、しばらく考えてから言う。

「お風呂に入る、のだけれど？」

天子はそのまんま、今からの行動を口にだした。簡潔かつ、必要十分な言葉に霊夢は返す言葉がない。だから天子は言った。

「入る？」

檜風呂が自宅にあるというのは、霊夢の心をくすぐった。お風呂場に入るとすぐに木の香りがして、湯気で霞んだ木の壁に霊夢は思わず手をついた。霊夢はそこに手を置いたまま、絶句した。水シャワーだけしかないアパートなど、この世に存在していいのだろうか。

霊夢は体にタオルを押し付けて、どこか恥ずかしげに腰を下ろした。床はタイルが敷き詰められている。それはまるで、高級旅館に来たかのような錯覚を覚える。霊夢は頬が引くつくのを感じる。どうしても戻らない。

「……」

湯船には満々とお湯が張られており、湯気が立ち上っていく。それでもお風呂場が完

全に白いそれが充満しないのは、換気が十分だからだろう。霊夢は手元にあった、おそらく檜でつくられているのだろう桶で湯を組んで、体にかける。タオルが体に透けながら張り付く。あつと彼女は思うが、ぼやつとしていて天子からもらったタオルを濡らしてしまった。

とりあえずタオルを取って、ちやぶと細かい足から湯船にはいる。じつくりと入りながら、霊夢はあることに気が付き衝撃を受けた。

「あ、足が延ばせる！」

檜の湯船は霊夢が腰を底に付けて、足を延ばしてもまだ余裕があつた。チルノならば泳げるかもしれない。水の妖精である彼女がそんなことをするのかは別としてもだ。ルーミアならば、喜んで泳ぐのかもしれない。

木の香りとお湯の暖かさに包まれて、霊夢は汗を額に浮かべた。風呂に入る前にはこの暑い日に入ること自体はそう気分がいいものではないと思つたが、だんだんと霊夢は体中が溶けていくような快感を覚えた。汗をかくのも、何もかも気分がいい。ほふうと息を吐いて、霊夢は肩の力を抜いた。濡れた髪が肌に絡みつく。

がらと天子が長い髪をバスタオルで巻いた姿で入ってくる。彼女は鼻歌を歌いながら、壁に掛けてあつた、シャワーで体を濡らしていく。それからこれまた木でできたバスチェアを取って座りシャワーを止める。

天子は鼻歌を止めずにボディソープを手を取って、そのまま体をこすり始める。いちいちタオルやスポンジにかけなくても、手で洗うことのできるボディソープがどれだけのランクのものかは霊夢にはわからない。いや、放心している彼女にはどうでもいい。腕、肩、胸、お腹と体を手で洗いながら、天子はすさまじいほどにだらけた顔をしている霊夢をみて、思わずシャワーを手にとった。体に付いた泡を取るためではない。温度を最低にして、圧力を最大にし、霊夢に向けて発射する。

「ぶっぶあわ」

水を顔に浴びて、変な声を上げて霊夢は立ち上がった。

「い〜い〜い〜」

手で顔を覆い、笑いをこらえている天子が霊夢の目につく。だからこそ、この黒髪の巫女の顔が見る見るうちに怒りに染まっていくのだ。ちなみに天子が笑いを堪えているのは、先ほどのように笑い死にそうにならないためである。

霊夢は木の桶を手を取った。天子はお湯をかける気だなと身構えた。もちろんその心は遊びに向かう子供用に、湧き立っている。霊夢と遊べるのが純粹に楽しいのである。だが、霊夢はそんなに甘くはない。

カコーンとお風呂場にいい音が響いた。

「いって」

ソファアに腰掛けた天子は頭をさすりながら、アイスを頬張る。がりがりとしたアイスで彼女はかじりながら、ぱたぱたと片手で団扇を煽ぐ。その髪はしつとりと濡れているのは風呂から上がってすぐだからだ。

エアコンはあるが、風呂上がりにはそれでは体を冷やす。だからこそ天子は窓を開けて、団扇を煽ぎながらアイスを食べる。この「外」の世界に来てから、少々体が弱くなつたらしく幻想郷で見せたような頑強さが今はないからこそ、彼女は自らの体にいいことを愉しんでいる。

天子は薄い桃色のキャミソールを着て、その胸元には黒のリボン。スカートはチェツクのフリルスカートを穿いている。彼女はできるだけ涼しい恰好で、これから出かけたのだった。

「ねえ、天子」

「お、おお。いいじゃない!」

風呂から上がった霊夢が、天子が用意した服に着替えてきた。デニムのショートパンツに黒のタンクトップの上から薄いブラウスを付けて、中の黒を「見せている」。それにいつもの赤いリボンを取って、黒髪を下ろしている彼女は風呂上りのためか、ほおが少し赤い。

天子はそれに満足したようにうんうんと頷いて、アイスの棒を啜えたまま、霊夢に言う。

「さあ、どこに行こうか！」

霊夢の返答など天子は待つ、という発想がないようだった。

第3話

靈夢は初めて持った野球のバットに握りしめて、いつか見たプロ野球の選手のように構えた。見様見真似の為か、初めての経験だが、負けず嫌いの靈夢は打ってやろうという気持ちが勝っているのか、足を開いて、バットを斜に構える。構えだけならばなかなか様になっていると喋っていいだろう。彼女の頭をヘルメットが覆い、黒く光る。

その彼女の前を、空気を裂いてボールが通過した。ボールは後方のネットに取らえられ、シユルルと回転をしてから、力を失った。靈夢はそのすべてが終わってから呆然とする。何が起こったの？ とその顔に書いてあるかのようだった。

「靈夢！ 駄目じゃない。バットを振らないと！」

ゲージの外で天子が言う。彼女は頭に黒の中折れ帽、少しオシヤレにいうならフェルトハットをかぶっている。その帽子には「桃」のワンポイントがついている。それに天子は赤い伊達メガネを何故か掛け、そしてその腰にはウエストポーチを付けている。

天子はその場でバツティングのフォームをマネして、靈夢へのアドバイスを行う。だが靈夢は目の前を通ったはずのボールの影すらも捉えられなかったのだから、打つどこ

ろではない。天子をじとつとした眼で見た霊夢は、言った。

「バッティングセンターなんて、初めてなんだからしようがないじゃない!」

霊夢は初めてでも打つ気満々だったのだが、打てなかった今となっては、そう言うしかなかった。端的に言うならば、負け惜しみである。

霊夢と天子は近場のバッティングセンターへやってきた。別段計画があつたわけでは全くない。天子がそれを見つけた、その十秒後には彼女達もその中にいたのである。すべては青い髪をした天人の気まぐれである。

施設内にはあまり客は少ないが霊夢達の他には、ちらほらと子供たちの姿が見える。彼らは肌を小麦色に焼いて、半そでのシャツにバッティンググローブを付けている。彼らは、交代交代にゲージの中に入り、打てば喜び。仲間が打てなかったら笑う。夏休みの一コマを愉しんでいるのが、霊夢にも見えた。

バッティングセンターはいくつかのゲージがあり、それらはネットで区画されている。その一つ一つにバッターボックスと球速の違うピッチングマシンが用意されているのは、詳しく説明するまでもないだろう。室内はバットがボールを打つ、金属音と笑い声が響く。

だが、霊夢の入ったボックスは次元が違った。

「ひん」

霊夢は小さく悲鳴を上げて、目の前をかすめたボールを数秒遅れてよける。ピッチングマシーンは機械だからとコントロールがいいとは、限らない。それは一日に長い時間稼働したことによる設備の消耗もあるが、霊夢達の場合別の理由があった。

天子はゲージの外で、霊夢を応援している。彼女の横には「200km/hに挑戦しよう！」などという不穏な看板が立っていた。その看板の端には緑の髪で牙を剥き出しにした「閻魔」と書かれたイラストが描かれている。それは地獄を表しているのだろうが、子供達もこのゲージには「近寄らない」のだから、その恐ろしさが分かるだろう。ちなみにこのゲージを選んだのは天子である。

シュツ、バシイイ。霊夢の耳にはそんな音しか聞こえない。正確に言えば、霊夢の15m程度前にあるピッチングマシーンにボールが入っていく時には、その白球が見える。それは霊夢の前を通過して、後方のネットに捕まるまでは二度と見ることはできない。たまに見える時があるにはあるのだが、それはつまるところ、コントロールが狂って霊夢の目の前を通過していくときである。ピッチングマシーンの特性として、速いほどコントロールが乱れやすい。

「れいむう」

不満げな天子の顔に霊夢は殺意を覚える。そんなことに頓着しない天子は口をタコ

のようにして、打つどころかバットを振りもしない彼女への不満を露わにする。だが、霊夢とて好きで見送っているのではない。初野球で大リーガーのトップクラスの選手を1・5倍くらいしたような剛速球を打てと言われて打てるわけがない。

「弾幕のほうが速いじゃない〜」

天子は言うが、幻想郷からこの世界に来てから、霊夢だけでなく大体の妖怪、妖精、天人の力は減退している。要するに弾幕より速かるうが、遅かるうが関係がない。だが霊夢はこのままでは悔しいので、バットを握りこんで次こそはと気合を入れているところに、最後の一球が目の前を通過した。普通に見逃したのだ。

霊夢は一瞬なにか起こったのかわからない。がっかりした天子の声と、少年達が

「あれ？今日エーキねえちゃんは？ カウンターにいないけど」

「なんかあそこの姉ちゃんたち見て、どっかいつちやったよ……なんか、すごい慌ててたけど、なんだろう？」

などと言う声が聞こえた。

「……」

霊夢は悔しさを感じつつ、ゲージを出る。逆に天子は霊夢へ帽子を預けると代わりにヘルメットを受け取り、中へ入っていく。彼女は機械にお金を投入すると、ゲージの外

にいる霊夢を振り返った。

天子は赤い伊達メガネをくいつと動かして。にやりと笑う。青髪が揺れて、自信に溢れた顔のまま彼女は言う。そんな気取ったようなポーズも、彼女がやれば様になつてしまふのだから、不思議ではあるだろう。

「まかせておきなさい！」

「……はいはい」

霊夢にとつては天子のポーズはうざいアピールでしかないのできとうに流して、ぱんぱんと手を叩く。天子はそれで満足したのか、ヘルメットをかぶりバットを上段に構える。まかり間違つても野球の構えではない。

「ふふふ、見切つたわ」

と言いつつ、天子の横を剛速球が通過する。シュウウウと後ろのネットでボールが回転する。そこで霊夢は気が付いた、天子は一から十までノリでやっていることを。そこで一切の期待を彼女は捨てた。

それでも天子はギギギと霊夢を振り返つてこういった。その顔には汗が浮かんでおり、何か信じられないものを見たかのようにだった。彼女はさつきまで霊夢とは違う視点でボールを見ていたから、実際にバッターボックスに立った時との差異に驚愕しているのだ。

だが、天子は言う。強がりながら。

「ま、まあまあね」

霊夢も数十分前に同じようなことを言った記憶があったが、そのようなことはおくびにもださずににやと口元を動かす。天子はそれにムカツとしたらしく、バットを構え直す。今度は霊夢のマネをしてなのか、野球の構えらしくなっていた。ただし、バットを握る両手が「離れて」いる。

ピッチングマシーンが動く。天子が来ると思う。すでにボールは後ろのネットにある。

何かを吹っ飛ばしたような、すさまじい剛速球に天子は驚いた。バッターボックスに入ってから、一度たりともバットを振っていない。それでも彼女は一度、バットを素振りした。よろつと腰の引けたそのスイングには、普通に考えるのであれば希望を持ちようがない。

そんな状況でも天子はバットを片手で持ち、ピッチングマシーンの上を指す。つまりホームラン予告である。彼女はふふと何か秘策のありそうな笑いをしながら、微妙に間違った構えを取る。やはり手は離れているのだ。霊夢はそのポーズ自体の意味が分からないが、たまたま天子を見ていた少年達がおおとぎわめく。このバッティングセクターで最速のマシンに挑戦する、女の子達は嫌でも目立つのだろう。

ピッチングマシンが動く、ごとごとと音がする。その瞬間であった。

天子がバットを振る。そう、彼女は見えないボールを眼で追うのではなく、バットで迎えようとしたのだ。つまり、ボールが発射されてから反応しては間に合わないのだから、その前にバットを振り、その軌道上にボールが来れば当たるといふ寸法である。ボールがどこに来るのかわからないといふ些細な問題を除けば、完璧な作戦であった。

ピッチングマシンからボールが発射される。すでに天子のバットは振られている。一瞬の交錯。天子のバットにカツツという小さな音を残して、ボールがネットに突き刺さった。

結果から言えば空振りである。よく言えばファールチップだ。だが、天子はぶるぶると肩を震わせて、霊夢を振り返った。その眼はきらきらと輝いている。

「か、かすったあ！ かすった！ 今！ 絶対、かすった！」

霊夢はうぐとなにか、敗北感のようなものを感じて、一步下がる。天子はホームラン予告をしていたのだが、そんなことは嬉しきからか天子は忘れ、霊夢はホームラン予告自体を知らず、見ていた少年たちはこの少女が200km/hに当てたことに感嘆の声を上げている。

「ねえねえねえ、霊夢見てた。今の！ 当たったでしょ!？」

「そ、そうね」

「靈夢は当たらなかつたのに！」

「ぐ、ぐぐ」

「当たった、当たった！」

無邪気に喜ぶ、天子。飛び上がって、花のような笑顔で知らずに毒を吐く。だが、彼女は気が付いていなかった。あまりにはしやぎすぎて、わからなかつたといつていいだろう。彼女は今「ホームベースを踏んでいる」のだ。その位置で天子は靈夢に向き合っている。つまり向くべき方向の逆を見ているのだ。

シュツと音がして、ピュツと天子の耳元で音がする。コンマ数センチ、それくらい天子の近くを剛速球が通過した。天子は笑顔のまま、だんだんと青ざめてよろよろとバッテリーボックスへ戻る。そしてそこでへたり込んで、言った。眼には知らずに涙がたま

る。「し、死ぬかと思つた……」

幻想郷ではまず感じる事のない、死への思いをこんな町のバッテリーセンターで感じるとは、さすがに天人でも思わなかつたようである。靈夢はその姿をあきれ顔で見

るしかなかつた。

天子と靈夢はバッテリーセンターを出て、ぶらぶらと歩いていった。彼女達は、やは

り計画など持っていないから、その足の向く方向に何があるのかなど、本人達でもわからないのだ。

天子は霊夢に預けていたフェルトハットをかぶって、両手で位置を調整しながら歩いている。どうすれば似合うかではなく、どうかぶればかぶり心地がいいのかを彼女は重視していた。反面、霊夢は帽子などという日差しを避けるものは一切付けていない。髪も黒髪で熱がこもる。

その上、天からは燦々と太陽光が照り付け、彼女達の歩くアスファルトは霊夢がサンダルを履いていてもなんとわかる程度に、熱されている。外に出る前に、風呂呂に入って汗を流したが、霊夢はすでに汗だくである。それは天子も変わらないだろうが、天子はそんなそぶりを見せない。

天子は帽子の位置が気に入ったのか、口元を緩めてぴんと縁を指ではじく。そして、霊夢をくるりと振り返った。それでスカートが揺れて、天子の頬はわずかに熱をもっているのか少し、赤い。

「……お腹減ったわ」

天子は言う。霊夢は特に空腹を覚えてはいないのだが、それでもどこか屋内に入れるのであればと「そうね」と軽く返事をした。だが、彼女は完全に勘違いしていた、天子は「お腹が減った」とは言ったが、涼みにいくなどとは一言も言っていない。気まぐ

れの彼女の言葉をよく聞かず、注文もしないということはどういうことなのか、霊夢はまだ理解しきれていないのだ。

「じゃあ、ラーメンかたこ焼きか、それともお好み焼きね！ イツチらんが一番だけど」

「……はっ!？」

霊夢は天子の言うラインナップに一瞬混乱した。この暑い中で、明らかに熱いものばかりをチョイスする天子の言葉は、自由奔放といつていいだろう。しかし今回ばかりは、霊夢も反論した。

「いや、あ、あついでしょ。さすがに今日は」

「そうかしら？ でも食べたいものは食べたい時に食べないと美味しくないから……食べたいし」

わずかな天子の言葉の中に「食」という漢字が何度使われたらうか、霊夢はこのまま天子に任せていると熱中症になってしまふとやつのことで理解した。そもそも天子はこの炎天下の中、徒歩で移動している。そのあたりにはまるで無頓着なのか、それとも普段運動をしているから彼女だけは耐性があるのか。どちらにしても霊夢は暑い。

「できれば、涼しいところに行きたいんだけど」

霊夢の言葉が終わって、天子はあつと声を出した。そして、霊夢の手を取って走り出

す。いきなりのことで霊夢は驚いたが、さすがに今言ったことくらいは聞き入れてくれるだろうと彼女は思った。

天子は街路樹の陰になっっている場所に来て、ウエストポーチからスマートフォンを取り出す。それを少し操作してから霊夢の肩に手をまわして、引き寄せる。

「な、なに？」

「いや、せつかくだから記念にと思って」

「は、え？ 何の話よ」

「まあまあ、はいちーず」

天子はスマートフォンを掲げる。その画面は「カメラ機能」が起動されており、天子は霊夢を抱き寄せたまま、ウインクをする。霊夢はいきなりのことで仏頂面だ。それでも二人の少女は仲良く一枚の写真に収められた。いや、スマートフォンであるのなら一枚の画像と言ったほうがいいのかもしれない。

「で、なんだっけ？」

天子は写真を撮って満足したのか、霊夢にさつき何を言ったのかを聞いた。彼女は霊夢の言葉を聞いてはいたが、右から左だったらしい。霊夢はその様子にはあため息をついた。

第4話

ここは商店街の小さなお店。何屋というわけではない。入り口に面した小さな厨房は狭いが、レジも一緒に置かれており中の店員が無駄に動かなくてよい良いになっている。壁には鍋やフライパンが掛けられており無駄がない。少し大きめの冷蔵庫も端に置かれている。冷蔵庫は数センチ壁と離れている。たこ焼きを焼く機材も小さいがある。

客側には「氷」の旗とかき氷機とその横にはウォーターサーバーが置いてある。

台も古いが、清潔にされている。考える限りには、この狭いスペースを有効に使っているといつていいだろう。だが、ここで働くのは「二人」である。いくら有効に使うが、狭い物は狭かった。

そのうちの一人物部布都は歌いながら、コロツケを揚げていた。銀髪のポニーテールが揺れて、何故か頭になっている烏帽子は現代とミスマツチしている。服装自体は黒のポロシャツと灰色の前掛けをしている。彼女は菜箸でフライパンから、薄いコロツケをひよひひよいと油紙の載せられたトレーに並べていく。

「あげたら、コロツケだーな……おい、キャベツはどうしたのだ」

布都は横でキャベツを切っている金髪の女性に言う。その女性は、少し癖のある毛ききをして、グリーンの瞳をしているが死んだ魚のように暗い。手だけは包丁を動かして、コロツケを包みやすいようにキャベツを切っている。

水橋。パルスイは布都と同じ恰好で働いていた。

「いま、やっているわ……」

「速くするのだ！ 我の布都コロツケにはキャベツがつきものなのだからなっ！」

パルスイはチツと小さく舌打ちして、それにこれっぽっちも気が付かない物部布都は薄いコロツケをひよいひよいと揚げていく。布都コロツケという身の細いコロツケには、薄く切ったサツマイモにサクサクの衣をつけた布都オリジナルのコロツケである。それを冷たいキャベツに包んで食べるのだ。

聞こえはいいのだが、布都がそれを作り出した経緯は、経費削減からである。サツマイモを薄く切っているあたり、その布都コロツケが出来上がった時の布都の心がわかるだろう。

「はーじめていの……おっ？」

布都は先ほどとは違う歌を唄おうとして、ガラス張りの扉の向こうに眼をやる。そこにいたのは、青い髪の少女である。中をじろじろと見ている。彼女、天子は布都と眼が合ってからにやりと笑う。それから半秒後にはカラーンと入り口のベルを鳴らして、中

に入ってくる。何故か腰に手をやって、足を広げての仁王立ち。顔には余裕が浮かんでいる、入店しての余裕なんの意味があるのかわからない。

「な、なにやつつ？」

ぱつと布都は右手を上げ、左手をぱつと開いて天子に向ける謎のポーズをする。天子は布都をみて、小さく笑い言う。

「二名、入れるかしら？」

「……い、いらつしやませ」

ただ単に今入れるかを確認するためだけに天子は来たのだ。それに布都は変なポーズで対応してしまった。パルスイはそんな二人のやり取りを見ながら、はあとため息をつきながらも天子の元気な姿に爪を噛む。表情は暗い。

「ややつ。博麗の巫女ではないか」

客席に付いた、天子と霊夢にお水を配りながらも布都は驚いた。客席といっても少し段が床より高くなっており、畳が敷かれている。そこには四つの机が置かれているのだ。天子と霊夢はその一つに座った、無論サンダルなどとは脱いでいる。天子は帽子もとっている。

机の真ん中には鉄板があるので、ここではお好み焼きもできるようだった。だが、霊

夢はそのことを知っている。なぜならば初めて来たわけではないからだ。

「なんか、驚いてるけど？　ちよつと前に来たじゃない」

霊夢が言うのと布都は、何故か急に真顔になった。

「来ておらんぞ」

「いや、きたでしよ。二、三週間前に」

「来ておらんぞ」

「あんたねえ……まあいいわ」

——えっ？　貴様らは五人いるではないか？　コロツケ三個？　五個で……あつ。え。そ、いや我も、そのなんだ……これはおまけだ。

「我はお前たち……いやお前が来たことなんて覚えておらんぞ」

布都はふつと憐みの眼を霊夢に向けて、すぐにぶるぶると顔を振る。その眼が何をあらわしているのか、その頭の中でどんなことを想ったのかは霊夢にもわからない。だが、彼女は言う。うさん臭そうにしながら。

「なんか……気味が悪いわね」

天子は二人が会話するのに合わせてそのくりくりとした眼を、話しているほうに向けていた。つまり布都がしゃべれば彼女を、霊夢がしゃべればそちらに紅い眼を動かして

いる。だが、会話に入れないことにうずうずしてきたのか、机に置いてあったお品書きをパラリと開く。

天子は墨で書かれたそのお品書きを見ながら、ふむふむと唸る。達筆な字ではあるが、書いたのは布都だろう、腐つても古代の豪族である。それなりの教養はあるのだ。コロツケを揚げようとも。

お品書きはでかかど「布都コロツケ」と書いてある下には、お好み焼きの種類別に書かれていたり、焼きそばやらうどん焼きやらと書かれている。最後のほうになると、大豆ハンバーグや卵ごはんといったりの統一性を欠くラインナップになっている。思いつくだけ書いたという感じが満々としたお品書きである。ただ、道教を信奉する布都だからか、肉類については書いていない。焼きそばは何故か「パルスイ」と書かれているので、肉が入っている可能性はある。

ただ、天人である天子は肉類がないことについては気にしない。彼女しばらくお品書きをみてから、ハイイと手をあげる。手首に付けたミサンガがちよつとだけずり落ちる。

「じゃあ、ラーメンとたこ焼きとお好み焼きのなんかおいしいやつで」

ぎよつとした顔で布都が天子を見る。霊夢も同じ顔である。布都は天子からお品書きを取ると、自らの書いたはずのものを読む。頭には「？」が浮かんでいる。彼女はし

ばらくしてから天子を見る。疑問は解消されてはいない。

ついでに天子の口から「布都コロツケ」がなかったところに多少不満げでもある。

「……ラーめんなどどこにも書かれておらんぞ?　　とうかそれを全て食べる気なのか?」

「まあ、二人で食べるから大丈夫でしょ。ラーメンはなんでもいいわ」

「い、いいわと言われても。私の店には……ないぞ?」

「カップ麺でもいいけど」

「えっ!?!……えっ?」

天子は目の前の鉄板でジュージューと音を立てている、お好み焼きに眼を輝かせながら、フォークで赤い字でロゴの書かれたカップヌードルを食べる。それは布都が夜食用に取っていたものを出したのだ。ずるずると音を立てて、天子は麵をすすする。

店には霊夢と天子以外には客がいないので、布都が彼女達の机についてヘラでお好み焼きをひっくり返ししながら、天子を見る。その横で霊夢がはあきれ顔で肘を机についていた。

「……なんか我、料理人として負けた気がする」

「あんたはいつから料理人になったのよ」

霊夢は少し困惑した表情をする。一応この物部布都も異変の中心部にいたことがあるのだから、いきなり自分から「料理人」などと言われては驚くだろう。霊夢は布都を見ながら、とある疑問を口にした。

「そういえば、あんたのご主人さまはどうしてるのよ」

「太子のことか？ 奈良だ」

「なら？ は？」

「奈良県に行っておられる。まあ、奈良県というか大阪府と京都府を回って、法隆寺などをまわってくるそうだ。つまり近畿地方の巡遊であるな……我らの時代とはかなりはかなり違うからその視察でもあるのだ」

「……なんであんたはついていけないのよ？」

霊夢は旅行などをしている余裕のある彼女達に、多少なりとも嫉妬しつつ当たり前のことを聞いた。この物部布都は「たいし、たいし」といつも言っているほどの忠義の持ち主であるのだから、霊夢が不思議に思っても無理はない。ちなみに話を聞きながら、パルスイが小さく「妬ましい……」という、誰にも聞こえてはいない。

布都は肩を震わせた。それからつとつと下を向いて黙り込む。鉄板でお好み焼きの焼ける音と、天子が何一つ気にせずにかップ麺を啜る音が響く。

「……たのだ……」

「なんですって？」と霊夢。

布都は眼に涙をためながら、霊夢に向き直る。それから叫んだ。

「じゃんけんに負けたのだあああああ」

あまりの剣幕に霊夢はびくつと体を震わせた。それでも布都は霊夢の肩を掴んでゆるする。

「あんまりではないか？ 新幹線とやらはほとんど割引が効かぬのだ！ あ、あの青髪と屠自古めがつ、く、くそおおお、なにがアイコンタクトだつ、奴らにはめられたとしか思えなぬ。そう思うであろう？ 博麗の巫女よっ！ そ、それを青髪のやつは駅まで見送った時にわざわざ振り返って……」

——悪いわね、布都。この新幹線は三人用なのよ。

「げ、現実にあんなことを言うものがおるとは思わなんだ！ 太子も中止にしようかと言われたが、せつかく太子がいかれたいのだから止められるわけがないではないか」

「ゆ、ゆらさないで」

がくんがくんと霊夢を揺らす布都を、天子は笑い。その後ろから、薄ら笑いを浮かべたパルスィが手に器に入れたたこ焼きをもって来た。何故か口元が緩んでしまうらしい。

「たこ焼き……できたわ」

「お、 おお」

布都はパルスイのたこ焼きを受け取って、多少クールダウンしたらしい。ふうふうと息を吐きながら、器にあった爪楊枝でたこ焼きをさして霊夢に食べさせようとする。多少クールダウンしよとも、まだ混乱しているらしい。

「さあ、食うのだっ」

「や、やめなさい」

わあわあど喚き合う二人。布都は霊夢にたこ焼きを食べさせようとして、それを突き出し。霊夢は顔を背けてよける。ぐぐぐつと意味の分からない死闘が繰り広げられる。布都が霊夢の上のほうにスキを見つけて、手を振り上げた。その手には爪楊枝と突き刺さったたこ焼きがあった

それを天子がぱくりと食べる。はっと後ろを振りむいた天子と、呆然とする霊夢の前でもぐもぐと天子がたこ焼きを噛み、ごくりと飲む。それから幸せそうに言う。

「うまい」

ほうと、息を吐く天子。外では蟬の声が聞こえている。

「たべた、たべた」

天子はお腹をさすりながら、だらしなく座る。霊夢は食後に出されたトウモロコシのお茶をすすりながら、くつろいでいる。霊夢達が来たときは、彼女達以外には客はいなかったのだが、ぽつぽつと子供を中心にした来店があり、少ない机は全て埋まってしまっていた。

霊夢のすぐ近くでも、プール帰りなのか頭が少し濡れた男の子たちが悪戦苦闘しながらお好み焼きを焼いている。あくまで布都が霊夢達に焼いてくれたのは、暇だったからである。本来であれば材料しか用意はしない。作り方はお品書きの後ろのほうに書かれている。

そのはずではあるのだが、世の中は思い通りにはならない。

「ふと。焼いて〜」

「ふーとー、みずー」

「ええい！ 貴様ら年上を敬え！」

「ふとー、ころっけー」

「あと、かき氷ー」

ふとふとふと子供たちに言われながら、次々に注文を付けられる銀髪の少女。彼らは常連なのだろう、布都に対しては遠慮会釈がない。しかし、コロツケを頼まれたのはまんざらでもないらしく「全く、なげかわしい」とにやけながらいい。コロツケ以外も

こともやっている。つまり、お好み焼きを手伝い、水を汲み、コロッケをだし、かき氷をだす。それで子供たちの近くに行くと、前掛けを引かれたりする。

ちなみに同じ子供たちは焼きそばを頼むときには、わざわざパルスイの前行って。

「パルスイお姉さん。やきそばおねがいます」

と礼儀正しくする。パルスイはびくりとしつつもこくりと頷く。それだけで、男の子達はどきりとする。パルスイの暗さも、ミステリアスに見えるのかもしれない。

「な、なんなのだ。この扱いの差はっ?」

布都はポニーテールを引かれながら、子供たちにじやれ付かれている。これはこれで一つの人気ではあるだろう。だが、布都としては不満である。だからこそ、彼女は言う。

「き、貴様ら。きよ、今日こそは……これのことを聞かせてやろうー!」

布都はポケットから何かのケースを出す。それから出すのは、子供たちに人気のカードゲームであるマジック&ウィザーズのカードデッキだった。なぜ、子供たちにとってを聞かせるためにカードゲームをだすのかはわからない。だが完全に子供の遊びに参加しているのは疑いがなかった。

子供たちもお互いに眼でコンタクトをとり、頷いてからプールのカバンからそれぞれデッキを取り出す。めらめらと布都和子供たちの間に火花が散り始めた。

「そろそろ出ましようか」

霊夢は立ち上がって天子に言う。天子は悔しげに「くっそーかーどを持つてくればよかつたわ」と言う。霊夢はそれにもあきれつつ、天子の首元を掴んで引きずり、パルスィに勘定をお願いする。

「ペンデュラム召喚!」

「な、なんだそれは! わ、我は知らんぞっ!」

後ろでは布都と子供たちの戯れる声が聞こえる。しかし、大体は布都が悔しがっている声は、驚いている声かである。霊夢は額に手をあてて、一つ息を吐いた。

お昼時の忙しさを乗り越えて。布都はぐびぐびと黄色い缶のジュースを飲む。微炭酸のそれが喉を少しだけ刺激して、清涼感と甘味が疲れた体を癒してくれる。彼女はぶはあと缶を唇から離して、腕で口元を拭く。

「まったく、博麗の巫女がくるとはな……」

布都はそれから固定電話に手を伸ばして、電話番号を入力する――

とりあえず、の落着

巫女と天人の奇妙な二人組は、気の向くまま、思いの向くままに、街の中を歩き回った。とはいってもそれを決めるのは巫女ではなく、青い髪の天人の気まぐれに左右されるが多かったのだが、それでも巫女はついていく。

天子はマイクをもって、カラオケモニタに映像が流れるのを見ている。そこには、奇妙な格好をした女性が、奇怪な生物やらなんやらと踊っているような情景が映し出されていた。まだ、歌詞は表示されていない。

カラオケルームには天子と霊夢の二人しかいないが、店側の部屋練りの都合だろうか、無理をすれば十人は入るだろう部屋にいた。天子の曲が流れ始めたあたりで、霊夢は入力用の小型モニタをタッチペンでつついている。

歌など、数分もあれば終わるのだが、二人しかいないので、次に歌う曲を早く入れなければと霊夢は内心で焦る。もちろんそんなことを知らない天子は、その場で立ち上がった体でリズムを取るようにしている。

そのうち、タイミングよく天子が歌い始めた。

「やーかに、愛して」

天子は唄う。透き通るような声がカラオケルームに響く。霊夢はいったんはつと手を止めてしまい。この後に歌うのかと、ぐむむと頭を悩ませる。カラオケなどほとんど来ないし、そもそも曲もほとんど知らない。初心者の悩みと言っていいだろう。

だが、一つだけ安心なこともなかった。たしかに天子の声はよいのだが、彼女の歌っている唄の奇妙な歌詞がそれを感じさせなくしてしまっている。それは忍者がどうのとか、巻物がどうのといういったい何を言いたいのかわからない歌詞だったのだ。それはそれで味があるのだが、霊夢の心のプレッシャーを多少和らげてくれる。

天子はたまに「しやつきーん」などと口で擬音を出して、片手横ピースを目元でする。それでニコツと笑って、ぱちりと霊夢にウインクする。それは「どうだ」と言わんばかりなのだが、霊夢はくすりと思わずしてしまう。

天子はそれから、おもいつきりといった感じで声を張り上げる。それでも音程は崩れず、耳に心地よい音が室内に響く。楽しんで、楽しんで天子は唄い終わった。彼女はもちろんといった風に点数採点は起動させている。

——テンシさんの点数は九十九点です！

画面にそう出てきて、天子はぱつと花のような笑顔になり、それから「ん？」と考える。て。

「あと一点だったのに……」

と最後は悔しがる。ころころと変わる表情に霊夢は気がとられて、何も入力していなかった。だから慌てて、項目をタッチペンでつついていく。それでも頭の中には、

「どれを唄うべきか」

「うまく歌えそうにない」

「これは、サビしか知らない」

と数々の懸念が浮かんでは消える。天子はそんな霊夢の横に来て、注文していたのだからメロンクリームソーダをストローで吸いながら、画面を覗きこんだ。時折、バナラがストローに詰まるがそれを頑張つて吸い出そうとする。普通はストローで食べるものではない。

「あつ霊夢。これとかいいんじゃないかしら」

「えっ。し、知らないわよ。これ」

「んーじゅあこれっ!」

「……知らないわ」

「じゃあこれー」

天子は次々に画面を指さして、霊夢に勧める。まるで押し問答のようなそれだが、霊夢もたまに知っている曲を指さされるので、それに対しては応える。しばらくして、やっと霊夢は曲を入れた。

彼女はマイクをもって、緊張した面持ちで立ち上がる。何故か背筋は伸びているのだが、それは慣れないからだろう。そもそもカラオケで「立つ」という行為をするのも、初心者か上級者に多い。無論、霊夢は前者である。

天子は指で口笛を吹き、霊夢に声援を送る。霊夢が入力に手間取っていることなど、何も感じていないように楽しげである。彼女はスピーカーから鳴りだした、音楽に手拍子を送りながら、ふと部屋のソファアの端にある「もの」に眼を付けた。

霊夢は汗ばんだ手でマイクを握りつつ、必死な顔で画面を見ている。画面から歌詞が現れるのを今か今かと待ちわびている、というよりは警戒しているという風情である。だが、そんなことをしているからか、出遅れてしまった。画面に歌詞が流れ始めた。

シャンシャンシャンシャンシャンシャンシャンシャンシャン
シャンシャンシャンシャンシャン

「あつ…ず、ずんず」

シャンシャンシャンシャンシャンシャンシャンシャンシャンシャンシャン
ンシャンシャンシャンシャンシャンシャン

天子は部屋に備え付けられた盛り上げ用のタンバリンを振る。そののほうの音が大きく。霊夢の声など聞こえはしない。だから霊夢は言った。

「う、うるさーい!!」

今日一番の大声で叫ぶ霊夢。きいんとハウリングの高音が部屋に響いて、天子の笑い声がこだまする。

次は雑貨屋に来た。いや、雑貨屋なのだがレストランも併設されているという「びつくりドン・キー・ホーテ」には霊夢も初めてやってきたのだ。ただ、もうお昼ご飯は布都の店で済ませているので関係ない。天子から、霊夢が聞いた話だとハンバーグがおいしいらしい。その天子も食べたことはないらしいので、情報としては曖昧である。

店内はまさに「雑貨屋」といった風情で、商品を満載した棚がところ狭しと並び、そのせいで客が通る通路は狭い。霊夢は肩が棚に当たらないようにして歩くが、天子はきよろきよろしながら歩く。少し危なっかしい。

「霊夢。これこれ。どうかしら?」

棚からとった頬の赤い、毛並みの黒いクマを抱きしめて、天子は振り向く。そういわれても霊夢は答える言葉はない。どう、と聞かれるほど答えにくいことはない。

「いい、いいんじゃない?」

それで満足したのか天子は、クマを棚に直す。ここは人形のコーナーらしく、ぎざぎざ尻尾の黄色いネズミや耳のない青い狸やこれまたクマの茶色い毛並みで涎を垂らし

ている奇怪なものなどでごったがえしている。霊夢は見上げると、天井すれすれまで柵が伸びて、商品が置いてある。そんな奇妙な光景に、多少面白味を覚えた。

「……あつ。博麗の」

霊夢はその声に後ろを振り向いた。そこには金髪で双子だろうか、よく似た二人の少女がいた。片方は紅葉の髪飾り、もう一人は赤い帽子にブドウの柄。二人とも、胸に丸に「ド」とついた前掛けを付けているから、店員なのだろう。だが霊夢はその二人に眼中に入らないのか気が付かず、はたと首を傾げた。

その間にも天子はずんずんと進んで、気になるものを見つけたたびに感嘆の声を上げる。ヘタをすれば、際限なく買ってしまったし、まいそなテンションだった。霊夢は天子とはぐれるのも面倒くさいので、後ろの声にまあいいかと思考を打ち切った。

霊夢は天子を早足でおいかける。

「お姉ちゃん」

「言わないで」

寂しげな声が、双子から漏れる。

次はゲームセンターだった。

ゲームセンターには天子は最初から行くつもりだったらしい、他のことにはついて

は、全ててきとうではあるが、これに関しては霊夢を迷うことなく連れてきた。

「あははー」

カーンとエアホッケーのパックをマレットで天子は打った。パックとはプラスチックの円盤で、マレットそれを打ち込む道具である。天子と霊夢はエアホッケー台を挟んで、睨み合っている。

シューとエアホッケーの台を空気に乗ったパックが滑り、霊夢の陣地へ入り込む。だが霊夢もマレットで打ち返す。今朝は人類最強でも投げることのできない剛速球に苦戦はしたが、この程度のスピードであれば弾幕ごつこの経験が生きる。

霊夢の打ち出したパックは、エアホッケー台の壁に当たって、天子の陣地へ突入する。エアホッケーは敵の陣地の奥にある、ゴールに入れば一点のゲームだからこそ、反射を利用しての攻撃がセオリーである。だが、天子もさるもので彼女は反射を讀み切って、一振りでパックを捉える。それが直線的な軌道で霊夢のゴールに迫る。

「甘いわよっー!」

霊夢はそれを打ち返そうとマレットを振る。そこで天子はにやりとした。その次の瞬間には霊夢はパックを「打ち損じた」。辛うじてあつたが、勢いのないそれが天子の陣地に戻っていく。絶好の打ちごろなのである。

「私のビギによいなっー!」

カーンと天子は漫画で覚えた掛け声とともに、打ち返し霊夢の一点を先取する。

——クレインゲームでは、取れずに悔しがる霊夢の後に、天子がどや顔で挑んで、失敗し悔しがった。

「あんたも駄目じゃない！」

「霊夢より、少し商品が浮いたわ！　アームに引つかかって！」

——戦地の絆では、チームプレイでのロボット同士の対戦だが、二人は性格的にもチームプレイなどでできず、そもそも霊夢がゲームに酔って、天子が実質的に一人になっても気合で勝った。

「ウ、ウウ。コノゲーム高いくせに、や、やりにくい」

「勝った……一人で。やり切ったわ……」

——クイズマジック&ガーデンというクイズゲームでは、現代知識の希薄な二人が協力しても、大したことはできずにおわってしまう。

「MDって何かしら？……天子わかる？」

「新しいCDのことじゃない？　問題に音楽がどうのと書かれているわ」

——ガンシューティングでは、二人は本領を発揮する。二人の動体視力が落ちていても、多少の動きには対応できる。それに天子はこのゲームを前からやりこんでいたらしく、ほぼ無傷である。クリアしたあとに天子は、霊夢に抱き付いた。

「やったー」

「は、はなれなさい」

天子はそれからも思いつくままに霊夢を連れて回り、遊ぶ。どこに行っても、何をしても彼女は楽しそうに笑う。天人として、天界にいた時には不幸ではないが単調な生活に飽き飽きしていたのだから、彼女は今の現代をこれ以上ないほどに堪能したいのだから。

それから夜のとばりがおおりて、二人の少女が遊び疲れたのか、公園のベンチに座り込むまで、買い物も洋服屋での天子による霊夢の着せ替えも、たまたま見つけたアイス屋でのおやつも笑顔のまま、流れていく。

「遊んだわ」

天子はベンチに座り込んで、天を向く。夜に星はない。それが現代の夜。眼を凝らせばみることはできるが、地上の光に隠された遠くの星々はそこにない。

「はあ」

霊夢はだるさと一日遊んだ充実感に包まれて、息を吐く。彼女も夜の空を見るが、なんとなく家のことを思い出してしまう。できるだけ考えないようにしてはいたのだが、

それでも仕事はサボってしまったし、連絡もしていない。

今朝の霊夢はストレスが心に突き刺さっていた。それは現実から背をそむけたくなるほどにつらいものだったのだ、それでも天子と遊ぶうちにその「針」は取れて、別のものが心に湧き上がってくる。

それは、罪悪感。

ずきりと胸が痛むのを、顔には出さずに霊夢は天子を見る。彼女は口を開けて、ぼけえと空を見上げている。この天人を見て霊夢は多少なりとも、嫉妬を覚えた。

天真爛漫。それがこの比那名居天子だと彼女は、霊夢は今日改めて思う。それは一日の間ずっと一緒にいたからこそ、わかることだった。それに何故かわからないが天子は裕福な暮らしをしている、それも多少妬ましい。

「まるで、あいつね」

霊夢はぼつりと、昼に見た妖怪を思い出す。そして、すぐに打ち消す。それでも、この天子のありようを見て、感じればどんな人間でも羨ましがるのがかもしれない。だが、それはただ知らないだけなのだ。

「霊夢」

天子は霊夢を見る。彼女は笑いを収めて、霊夢をじつと見ながら言う。それはどこか、怯えているようで、寂しそうな顔。

「また、どっかに行きましようね？」

「……？ そうね」

それで天子はまた空を見上げる。その口元が緩んでいることは霊夢にもわかるが、その笑顔と今日ずっと見てきた天人の笑いは違う気がして、わずかに戸惑う。それだけ天子は声を出さずに、心底嬉しそうににやけている。

「あつ、じゃあ。もう予定決めてもいい？」

ぱつと霊夢に向き直った天子は、きらきらした目で霊夢に聞く。霊夢が頷くと、天子はウエストポーチから分厚い手帳を取り出して、開く。付箋が大量に張っており、天子が開いた予定表のページには、大量に書かれた——バイト。の文字。

「うー。今週と来週はもう無理だから、そうね。あーここは無理だから……」

天子が指でなぞる、びっしりと書き込まれたカレンダーは真つ黒で、キレイとは言い難いが、そのページにはもう書き込む場所のないほどに予定が詰まっている。予定といても遊ぶのではなく、働くための。

「あつ」

霊夢は眼を開いて、気が付く。天子の暮らしについて、なぜそんなことができたのか。そして幻想郷での天子の姿を思い出す。目の前の青い髪の少女は、もっと傲慢で自分勝手ではなかっただろうか。それは幻想郷を危険にさらすほどに。

「あんだ。いったいくつバイト、してるの？」

「へ？」

天子は靈夢の質問に即答できず、メモ帳を膝に置いて指折り数える。メモ帳には「パン屋」「本屋」「カラオケ」「清掃」などと言う文字があるが、それを靈夢が見てもどれくらいしているのかわからない。

天子は言う。

「一八くらい？ かしら」

疑問形なのは本人でも把握しきれていないのか、それでも靈夢はその数に驚愕する。そして思うのの一つ。天子の今日一日の嬉しげな姿、そして先ほど見せた寂しそうな表情、そのあとのにやけ顔。そこで靈夢は思う、あの広い部屋で天子は、一人暮らし。

靈夢とまた会えるかと聞いた時の天子が靈夢に直感させる。もしかしたら、あの豪華な暮らしは、気を紛らわせるためのものではないかと、靈夢は思う。だからこそ、天子に聞いた。

「あんだ……もしかして、寂しいの？」

「……!？」

みるみる内に耳まで赤くなっていく天子。いきなり彼女は立ち上がって背を背け、高笑いする。腰に手を付けて、できるだけ愉快そうに笑う。

「あ、ははは。そ、そんなわけないじゃない！」

そう、霊夢に悩みがあるように天子にもある。それは幻想郷や天界ではなかったかもしれないけれども、今いる場所から空を見上げれば、星のない現代。人間の喜びも苦しみも悲しみも、余すことなく抱える世界。

霊夢は空を見ながら、今朝のことを想う。それはいろんな者に迷惑をかけたのだろう。それを少しでも慰めるために天子を羨ましがって見たが、彼女にないものは、自分にはある。

「そう……となりの芝生は青かったのね……」

天子の照れ隠しに霊夢は突っ込むこともなく、否定も肯定もせずに独り言をいい霊夢も立ち上がった。そして天子の後ろから、言う。帰る場所など一つしかなく、思い浮かぶ顔はいくつもある。

「今から、家に帰るわ。……あんたもついてくる？」

心細いのは霊夢も同じ。天子は後ろを向いたまま、頷いた。

アパートに帰ってくるのは簡単である。霊夢達がこの数か月間はずっと暮らしきた場所なのだから、だがそこに入ることは霊夢にも難しかった。天子は後ろで興味深げに

あたりを見ている。住んでいるところとのギャップが大きいからだろうか。

霊夢がいるのは、自分たちの部屋の前。扉を隔てて、中にはさとりたちがいるだろう。横に付いた小窓からはあかりが漏れているから、それは間違いないはずだった。

霊夢は一度大きく、息を吐く。扉の鍵を持つてはいるが、失踪していきなり部屋にもどるのは気が引ける。だからこそ、ノックをしようとしているのだが、なんとなく手が動かない。そもそも第一声はどうしようかと霊夢は考えた。

謝るべきか、強がるべきか。それとも無言でいいのか。霊夢の頭の中でぐるぐると回り、彼女は最後に思う。

「よしっ」

きつと力強い眼光を宿して、霊夢は手を動かす。彼女は、自分らしくない悩みを打ち切つてノックをしようとする。

その前にドアが開いた。部屋の前で声など出すから、気が付かれたのだ。

驚く霊夢の前に、桃色の髪をした少女が顔を出す。頭にヘアバンドをした、彼女は古明地さとりである。彼女と、霊夢は眼を合わせて、固まってしまった。

霊夢は怒られるかと身構えて、ごくりと息をのむ。だが、さとりは彼女の顔を見て、

——最初に、ほっと一息。

「よかつたわ、無事で」

——次に、そつと言。

さとりは怒ることも、責めることもなく。靈夢がただ無事に帰ってきたことだけに安堵した。靈夢は一度目を大きく見開いて、顔を背ける。それからぼつりと言った。

「ただいま……」

「おかえり」

さとりは靈夢の言葉を受けて、やさしく言う。元々から温厚な彼女だが、その声に靈夢は何も言葉を紡ぐことができず、さとりに導かれるままに中に入っていく。

「れいむー」

そこにチルノが突進してきて、靈夢のお腹に抱き付く。その後ろからとてとてとルミアが来て、にっこりと笑ってお帰りという。慧音がいないのは、探しに行っているのだろうか。

さとりはふと、外にいる天子に気が付いた。なぜ天人と靈夢が一緒にいるのかはわからないのだが、言う。

「こんばんは……。靈夢が帰ってきたから、今からご飯にするけど、一緒に食べるかしら？」

天子はうつとひきつつも、思い直して腕を組み、ちよつと偉そうにしながら言う。

「い、ただい、かしら」

といった。こんな、彼女にも天人としての見栄があるらしい。

最終的に霊夢が逃げ出したことによって、問題はなかった。

あの逃亡からさとりは霊夢が、急性のインフルエンザに罹ったことにして、仕事場に連絡した。それから慧音と二人で探したが、途中途中で知り合いにも声をかけて、見つけたら連絡してくれるようにしたのだ。その中には「物部布都」が混じっていた。

「ふーん、逃げ出したんだ、れーむ」

今までの経緯を聞いて、天子はにやにやしなから肉なしのカレーを頼張る。それはさとりが作ったもので、今は狭い円卓を天子、霊夢、さとり、慧音、チルノ、ルーミアの六人で囲んでいる。お互いに肩が当たりそうなほど、狭いが誰一人文句は言わない。

「霊夢に頼りっぱなしだったからな。私も……はたらかないとな、胃が痛い」

つい先ほど帰ってきた慧音は、ジャージ姿というラフな格好でカレーを食べる。彼女の霊夢が帰ってきたことにホッするだけで何も言わなかった。ちなみに肉なしは全員であるので、天子に配慮したものではない。単純に経費的な問題である。

「……インフルエンザだって言ったら……しばらくは休みなさい、といわれたわ。霊夢」
勤め先からの言葉を、さとりは柔らかく言う。感染症を口実にしたのは、さとりの機知と知っている。唯の熱なら呼ばれる可能性があるからだ。

「……」

さとのりの言葉に霊夢は思う。多少汚いかもしれないが、ここで言わなければ言わないだろうと。そう思ったから、彼女は言った。

「あり、がと」

少々照れながら言ったその言葉は、わざわざ休みを取れるようにしたさとりへ向けた言葉「でも」あるが、それだけではない。この声が聞こえた全員に向けたお礼の言葉だった。素直でないのは、霊夢とて天子と同じである。

「うめえ」

そんなことは別に口にカレーを付けて、チルノがスプーンを嘗める。それでさとりは軽く、肩を叩いて、いさめる。その横ではルーミアが以外にも上品に食べている。

内心で安堵した霊夢は、天子を見て言う。

「それよりも、天子」

「ん？ なにかしら」

「アルバイトを減らしなさい。体に悪いわ。代わりに、ここに好きな時にきなさい」

「……考えておくわ……」

天子の返答にとりあえず満足して、霊夢はリモコンでテレビを付けた。天子は口では「考える」と言っているが、口の端が笑っている。大丈夫だと何故か確信した。慧音とさ

とりは何を言っているのかわからず、チルノはカレーを「うめえ、うめえ」と食べ、ルーミアはもぐもぐ食べている。

ミカン箱の上にあるテレビがつく。ちようど音楽番組をやっているらしく、画面には緑色のドレスで着飾った。銀髪の少女が映る。

その少女は薄い口紅をつけ、少し頬を赤くしてマイクを両手で持つ。頭には黒いリボンをつけて、腰には何故か日本刀を差している。霊夢はその姿に顔が引きつるのを覚えた。

テレビの中で、少女が言う

『魂魄妖夢。歌います』

狭いアパートの中で、時が止まり。からんからんとスプーンが落ちる音が聞こえる。そしてその中でも氷の妖精は、影響なく。

「うめえ」

と心底嬉しそうに言う。

第一部おまけ 銭湯に行こう!

お湯につかっただま、さとりは体中の力を抜いて、背を浴槽の壁に預けた。足を伸ばすと、ちゃぶと肩のあたりでお湯が波を立てる。彼女は短髪なので髪が濡れることをあまり気にしなくてもいい。頭には巻いているのではなく、畳まれたタオルが載っている。

「……………」

何も言わずに、気の抜けた顔をする桃色の髪をした少女。頬が赤く、首が少し後ろに反るのは無意識だった。体の力を抜くと、自然とそうなってしまうのだ。

さとりたちは、いつも通りに近くの銭湯に来た。今では珍しい、昔通りの浴場と壁に書かれた「赤富士」の絵が風流といえ、そういえる。ただ、さとり達がここに来るのは、単によく利用する商店街内にあるこの銭湯では、常連のよしみで割引をしてくれるからだ。

それでも、お湯につかって一日の疲れを、お湯に溶かしていくようなこの時間がさとりは好きだった。うだるような昼の暑さの後にも、広く熱いお風呂で手を伸ばして、なんとなく腕を揉んだりすると、それだけで気分がいい。

そんなリラックスしているさとりの顔にばしやお湯がかかった。驚いたさとりはびくつとすが、さらにその顔にお湯がかかった。

「泳げる！ れいむー」

一瞬遅れて、さとりの前を青い髪を縛った天子が泳ぎながら、通りすぎた。バタ足を風呂場でして、水しぶきを上げる。そのしぶきがさとりの顔にかかったのだ。さとりはその少しが口の中に入ったのか、咳き込む。

「泳ぐなあー」

遠くで霊夢が天子を怒っている声がさとりには聞こえる。さとりははあ、とため息をついて、また体から力を抜く。意識的ではない。そうしていると心地の良い眠気が襲ってくるのだ。そうなる怒る気も起らない。ただ、さとりは元々温厚な性格なので怒ることもないかもしれない。

「ねたらだめだぞ」

さとりのそばに来て、慧音が肩を叩く。ハツとしてさとりは目元をぐしぐしとする。それでも眠気が少しある。慧音は頭にタオルを巻いている。流石に「角」を見せるわけにはいかないのだろう。それに、彼女は髪が長いので、束ねているのだ。

「少し……湯船から上がったらどう？」

「そうね……。そうするわ……」

さとりは慧音の言葉に素直に従い、浴槽の縁に体を預けてからゆつくりと立ち上がる。今まで、お湯の中に入っていた体が少し火照って、赤い。それでも肌が水をはじいて、少し天井の明かりを反射して輝いている。

さとりは、湯船からでると洗面台に行つて、眠たそうな顔で天子に濡らされたタオルを洗面器に入れて、蛇口をひねりお湯を洗面器に満たす。タオルを使う場合は濡らさないようにすることもあるが、それも天子に濡らされて、もはやどうでもよい。そもそもお湯が出ることで自体が彼女には贅沢であるからには、それを堪能したい気持ちもある。備え付けのポディーツープを手にとって、頭に付けるさとり。

「…………泡立たない…………わね?」

と意味の分からないことを言いながら、頭を洗う。完全に寝ぼけている。

「霊夢! カップーンつてならないんだけど…………この銭湯は壊れているのかしら?」
「…………?…………?…………」

天子の言うことの意味が分からずに霊夢は少し考えて、やっぱりわからないのできとうとうに返すことにした。洗面台に備え付けられたバスチェアに座つて霊夢は髪を手で梳きながら、言う。

「壊れてるんじゃない?」

天子はそれで残念そうな顔をしつつ、霊夢と並んで洗面台に座り、ボディークリームやシャンプーなどの備え付けの備品を手に取り、興味深げに見ている。そして何かを思いついたように、シャンプーを手に取り立ち上がった。

そして、青髪の少女が霊夢の後ろに立つ。

「！　な、なによ」

「頭洗ってあげるわ！」

「い、いらないわ、………よっ」

天子はシャンプーを手に取り、霊夢の黒髪をわしやわしやと洗い始めた。霊夢は椅子に座ったまま「ちよっ、やめ」などと喚くが、天子は口元をにやつかせて洗うのをやめない。霊夢の滑らかな黒髪に、シャンプーが絡んで白い泡になる。

霊夢はそのうちに抵抗をやめて、呆れた顔のまま、さすがに頭を洗われる。天子はそれなりに力を入れて、頭を洗っているのだが、それがなかなかマツサージ代わりになり、霊夢も気持ちよくなってしまふ。呆れ顔なのは、気もちいことを隠すためかもしれない。

——「これ、ボディークリーム……ソープ」

なにやら悲しい声がどこからか聞こえてきたが、霊夢は特に気にすることなく、天子が頭を洗う音を聞きながら、眼を閉じる。眼に泡が入れば、痛いからだ。

「痒いところはあるかしら?」

「ないわ……あつ」

天子はどこで覚えたのか、髪を洗う時のお約束の言葉をいい。霊夢は頭を押されるのが心地よくて、少し声を出してしまう。天子はその声に、きよとんとしてから、ニツといたずらっぽく笑う。

「霊夢?」

「ん?」

天子は霊夢へのいたずらを考えて、すぐには考えがまとまらない。だから、髪をそのまま洗うことになる。あまり客の少ない、この銭湯で二人の少女が仲良さげにしている。そんな風景になってしまった。本当は天子に至っては、霊夢にいたずらしたくてたまらないのだが。

そしてその仲睦まじ「そうな」光景は、天子たちの横でも繰り広げられることになる。

「うおおおおお!」

「あああああああ!」

チルノはタオルで、ルーミアの背中を本気で擦る。ごしごしと力の限り、本気でルーミアをキレイにしようとする。普段、あまりしゃべらないルーミアだが、今度ばかりは

声を出してしまった。背中がひりひりしてくる、今鏡に映せば赤くなっているだろうが、見るまでもない。

「洗い流すわよっ!」

チルノは洗面台の蛇口をひねって、水をだし、桶に素早くためる。それを見ていたルーミアは逃げようとするが、その一瞬前に背中に冷水を浴びせられる。チルノのかけた水がルーミアの背中についた泡を洗い流してから、少女の小さな背中を刺激する。

「……………!!」

ルーミアは声押し殺して、眼には涙をためて、身悶えする。チルノはその後ろで、腕で額を拭いて、一仕事を終えたすがすがしい顔をしている。彼女はきれいになったような気がするルーミアの背中に満足しつつ、自分の体を洗い始める。

「……………、このうらみ、わ、わすれないわ」

ルーミアが何か言っているのは、チルノには聞こえない。彼女は使われないがお湯とか出るのだ、すげえとチルノは思った。

がらつと浴場の入り口に引き戸が空いて、銀色の髪をした女の子が入ってくる。

その白い肌。くりとした大きな眼。光に照らされて、白に近づいた美しい髪。彼女は洗面台に近づいて、桶にお湯をためてから、体にかける。要するにかけ湯である。

左腕を彼女は。右手でなぞる。体についているお湯を払う仕草にも、気品が漂う。伏し目の麗しさにまつ毛の形の良さが、その美少女ぶりを表している。

「……」

その少女が、何かに気がついた。見ると天子が霊夢の頭に付いた泡で、たんこぶみたいなものを作っている。無論のこと霊夢は全く気が付いていないのだが、そのかわり霊夢も銀髪の少女に気が付いていた。

銀髪の少女の口元がほころんだ。その「綻び」がだんだん大きくなり、大笑いし始める。大口を開けて、霊夢を指さしながら、心底嬉しそうに笑う。

「ふはははははは、は、博麗の巫女つ。なんだ、その残念なあたまは!?!」

銀髪の少女——物部布都の声にハツとして、霊夢は天子に作られた変な形の泡をはらい落とす。天子はそれでいたずらに霊夢が反応してくれたのが嬉しくて、笑う。だが、布都のほうが大きな声で笑う。

「ふははははは。だが残念な頭もにあっているぞ!」

「いや、残念なのはあんたでしょ……」

霊夢は化けの皮の外れた布都を憐れむ。布都はきよとんとした顔で、首をひねるのだが。何を言われているのかわからない。何故かあたりを見回すが、近くにいたさとりが眼を反らし、後ろから遅れてやってきた水橋バルスイが薄く笑うだけであった。

慧音は騒ぐみんなを、湯船の中から見ている。

頭をタオルで巻いた彼女は少し蒸れるのを感じて、タオルを緩めるのだが、最初にしっかりと巻いたので、あまり意味はない。彼女は壁に描かれた赤い富士を見ながら、先ほどのさとりのように足を伸ばしてリラックスする。

——無職！

頭の中に嫌なキーワードが不意に現れ、一人でお湯の中に潜る慧音。こういった場合の行動は何かを考えているのではない。まさに衝動的な行動であった。彼女はしばらく、お湯の中に潜ってから、ぶはあと顔を上げる。ずぶ濡れのタオルから滝のように、慧音の顔へ水が流れる。

「うわっ」

慧音はせっかくのタオルを自らはぎ取って、長い髪を露わにする。瞬間的に頭頂の角が見えそうになったので、慌てて濡れたタオルを頭にかぶり、そのせいで顔に水が流れてくる。それだけでなく、ほどけた髪が湯に浮かんでしまう。

「……………」

完全に一人相撲で慧音は何も言う言葉がない。そこにさとりが湯船に戻ってきて、謎の行動をしている慧音に言う。

「だ、大丈夫かしら?」

慧音をさとりが気遣う横で、チルノが水風呂に入り、ルーミアがそれにつられて入ってしまう。無論、ルーミアだけが何かを叫んで、すぐに出た。

しばらくして、全員が風呂から上がる、

脱衣所で、服を着たさとり達はとある会議に入っていた。さとりと霊夢と慧音、それに天子が額を寄せ合って、一枚の「野口英世」を見ている。そう、言わずとした日本銀行券であり、俗に言う「千円札」である。福沢諭吉については、財布を握っているさとりは銀行から出さない。お金を出すときは千円単位で、手数料がかからないタイミン
グのみである。

このお金はなけなしの生活費から、たまに現れる贅沢用のお金である。普段ならば風呂から上がれば、すぐに帰宅するが今日は、霊夢の逃亡もあり、慧音のカフェ代などが余ってしまい、そして以前からの積み立てを合わせて、千円の余裕ができたのだ。よく聞けば、悲しい話である。

「風呂上りと言えば、フルーツ牛乳でしよう?」

と霊夢は真剣な表情で言う。彼女がちら見たその先に、冷蔵ショーケースがある。その中には、おそらくよく冷えているのであろうフルーツ牛乳が入っている。その値段は

「108円」である。

「できれば……マツサージチエアがいい、のだけど」

さとりが控えめにいう。財布を握っていようと、控えめな性格な彼女が強権を発動する気はない。ここはできるだけ穩便に自分の意見を通したいという、おそらく一番実行困難な提案をする。お値段は15分で「100円」。

「……わたしはいざという時の為に、我慢するのがいいと思う」

慧音はすこぶる現実的なことを言った瞬間に、靈夢がちつと隠れて舌打ちして、さとりがじとつとした眼で彼女に抗議する。声はない。だが慧音は流石に居心地が悪くなったらしく、風呂上りの体に汗を流して。

「……じゃあ、アイスを食べたい」

なんとなく要望を慧音は出す。しかし、彼女の後ろにはいつの間にか、ルーミアとチルノが仁王立ちしており、意見は三分化された上に、慧音も撤回できなくなる。その様子を天子は面白そうにみる、彼女は自分の財布を持っているので、この争いには入らない。ちなみにアイスクャンデーは一本「150円」である。

「アイスっ!」

「フルーツ牛乳!」

チルノと靈夢が言い争いをする。アイス派の総大将である慧音は、難しい顔で状況を

見ている。正直言えば、アイスを撤回してさとりか霊夢に肩入れしていいのだが、自らの味方が、チルノとルーミアという見た目幼い二人なので、なんとなく裏切れない。

さとりはその横で、小さく「マッサージ」と言うが、誰一人として聞いていない。天子はにやにやとヒートアップする話し合いを聞きながら、言った。

「……一緒のことするんじゃないくて、好きなことをすればいいんじゃないの?」

はつと霊夢、さとり、慧音が天子を見る。変な意地が、当たり前のことを考えることをできなくしていた。だからこそ、三人はそれぞれ唇を噛んで、お互いに顔を赤らめながら眼を背ける。チルノはよくわからないがとりあえずアイスを食べられそうなので。

「あたいのかちねっ」

と勝利宣言をする。ある意味では、最強だろう。

ルーミアとチルノは並んでアイスを嘗めながら、扇風機の前で涼んでいる。その後ろでは慧音がアイスキャンディーをがりがりと呼めるのではなく、かじる。

さとりとパルスィはマッサージチェアに座って、ごとごとと機械に肩を揉まれたり、叩かれたりと気持ちよさげにする。

最後に天子と、布都、霊夢はそれぞれフルーツ牛乳を一気に飲み干して、ぶはあと息を吐く。

とりあえず、今日は帰って寝るだけではある。

第二部

1 話

まだ、午前6時を時計の短針がさす。そんな早朝から、このカフェにはコーヒーの香りが漂っていた。こぼこぼとコーヒーケトルが沸く音がして、その横で一人のメイドがてきぱきと動いている。ちなみにコーヒーケトルとは長いやかんのようなものである。

そんなカフェのカウンターでレミリア・スカーレットは口に付けたコーヒーカップを、ゆっくりと離して、音を立てないようにカウンターの上に置いた。彼女は今飲んだコーヒーに不快感を覚えながら、カウンターの向こうでカップを拭いている、メイドを見る。

「どうなされました？ お嬢様」

「……このコーヒー、何を入れたのかしら？」

「甘いのがよいかと思いましたが、蜂蜜を少々」

「……………斬新ね」

「ありがとうございますわ」

「褒めてはいないわ……」

咲夜は主人の柔らかい抗議にも動じることなく、きゅつきゅと今日一日で使うカップを拭いては、並べていく。天井からつるされた照明からの、柔らかな光がカップを光らせている。傍らに置いたラジオからはクラシックが流れている。

レミリアはそんなメイドには、一つため息をついただけで、それ以上には追及も叱責もしない。ただ、幻想郷で変なお茶を出されることが多かったことから、こつちに來ても変わらないことに呆れるだけだった。しかし、咲夜がこちらに來てから煎れはじめたコーヒーは「たまにレミリアにも美味しくつくる」ので、朝の時間の小さな楽しみになっていた。

そんなことを楽しみにでもしなければ、レミリアは退屈だった。幻想郷でもそうではあったが、こちらでは平日は知り合いのほとんどが仕事に行っており、いない。妹もいるのはいるが、このごろは「ポケモン」だか「妖怪ウォッチ」だとかよくわからない単語を言うだけで、たまに外出するときは何故か倉庫に行くといいながら出ていく。どうにも漫画等が置いていっていると、あとでレミリアは聞いた。

「退屈ね……咲夜」

「あら。でしたら、お嬢様。もう一杯いかがですか？」

「もう、今日のコーヒーはいいわ。あとで紅茶をいれて頂戴……。それにしても、あなたはこちらの世界でも変わらないわね」

「お嬢様は変わられましたね」

「……………」

レミリアははてと首をかしげる。変わっているつもりはないのだが、咲夜は変わっていると言う。強いてあげるとするなら多少コーヒーを飲むようになったことくらいだろうか、それでも甘目のものしか飲み干せないし飲みたくもない。

レミリアは熱いコーヒーを飲んだからか、ブラウスを指でつまんで引く。少し肩からまわしているサスペンダーが伸びて、下に穿いた黒の半ズボンが上へ引き上げられる。レミリアは椅子の上で腰を少しだけ動かして、ブラウスを引いたことで、ゆがんだ首元のミニネクタイをなおす。動いた時に彼女の履いたブーツがカウンターに当たって音を立てる。

「……………咲夜、変ったって何がかしら？」

「いえ、お嬢様はお嬢様でしたわ。私の、早とちりでした」

咲夜はふふと小さく笑い、最後のカップを置く。コーヒーケトルからはゆるやかに蒸気が立ち上っている。彼女はそれに満足するようにうなずくと、最初から用意していたコーヒーサーバーとペーパーに引いておいたコーヒー豆を並べていく。この朝早い時間から、準備万端なのは、この十六夜咲夜がいつごろから起きて、それを為したのかを表している。

「なにをしているの？ 咲夜。まだ、コーヒーをいれても、お客なんていないわよ」「ひどいですわ、お嬢様。あそこにいらつしやるではないですか」

そう口を動かしつつも、手はコーヒーを淹れる用意をするメイド。彼女がスプーンに取った豆は深い黒さを持ったもので、それは苦味が強いことを思わせる。メイドはコーヒーサーバーの口にキレイに折り目をつけたペーパーをはめて、そこに豆を入れる。そして彼女は、コーヒーケトルを布巾で熱さから手を守りながら取る。

だが、レミリアはそんな優雅な咲夜の動作よりも、後ろにいる「お客」に眼がいつていた。少し離れたテーブルに一人の黒いシヨートボブの女性が座って、かたかたとノートパソコンを死にそうな顔で打っている。ノートパソコンにはUSBがささっていた。「ああ。もう6時を過ぎてる……まにあわないい」

眼の下にクマを作って、射命丸文は起動したエクセルに何かを打ち込んでいる。彼女は黒のスーツを椅子に掛けて、白いブラウスにパンツルックをしている。傍らには食べかけのサンドイッチが置かれている。

文はバッグからファイルを取り出して、それを見ながらエクセルに打ち込んでいく。何を書いているのかは、レミリアにわからない。それでもその必死そうな姿に、多少の哀れみを覚えた。

咲夜はコーヒーケトルを天高く上げて、お湯の弧を描いて、サーバーにそそぐ。それ

だけ高くからのお湯を入れているといふのに、一切こぼれることはない。それはもはや、熟練の技だといっていいだろう。ただし、レミリアは文を見ているし、文はパソコンの画面を見ているので、誰も見てはいない。

レミリアは咲夜を振り返った。その時にはもう、咲夜もコーヒークエトルを下ろしていた。だから、レミリアは咲夜のやっていたことに全く気が付くことができなかったのだ。だからこそ、それを不満に思うことも、疑問を浮かべることもできない。

咲夜はサーバーに入った黒い液体を少しだけ、小さなカップにとって飲む。口の中で味わい、頷いてからレミリア用のカップへ、コーヒーを注いでから砂糖を入れ、クリームを入れてからかき混ぜる。

「どうぞ、お嬢様」

「……」

レミリアの前に、湯気を立てて一杯のコーヒーが置かれる。クリームが入っているから、色の変わったその液体が入った、カップをレミリアは警戒しながら手に取る。今度は何を入れられているのかと、彼女は思ったのだ。だが、一口含んで、甘さが心地よく口の中に広がっていく。つまり「あたり」らしい。咲夜の場合は、意図的に「はずれ」を作るので、それが嬉しいのかどうかと言われれば微妙ではあるのだが。

レミリアは音を立てずに飲む。クリームが多少は、温度を下けているのか、ちょうど

よい温度になっている。そのあたりも、目の前のメイドは考えて行ったのだろう。

咲夜はレミリアの「蜂蜜入れコーヒー」を片付けて、また別のカップにコーヒーを淹れる。今度は砂糖もクリームも入れない。もちろんそれはレミリア用の物ではない。彼女は、トレレーにそのコーヒーを置いてから、文の元へ行く。

レミリアは紅い眼を動かして、咲夜の動きを見ている。

「……うう、電車の時間が」

泣きそうな声で文は起動させたエクセルにカタカタと打ち込んでいる。咲夜が後ろから覗き込むと、何かの企画提案書らしい。だが、彼女にはそんなことはどうでもいい。

咲夜はぼそりという。

「もう……7時30分ね」

「いつ?!?!」

文は慌てて後ろを振り返った。壁に掛けられた時計を見て、まだ6時30分にもなっていないことを確認して、ふうと安堵する。その横に、咲夜がコーヒーを置いた。

「毎朝大変そうね」

口調が少し崩れる。レミリアの対する時とは少々違う。

「……まあ、幻想郷でもやっていたことを、こつちでもできるのだから贅沢かもしれないのだけれど」

言いながら咲夜は文にコーヒーカップを渡す。文はなにか言おうとした前に、咲夜に「コーヒークップを持たされている」ことに気が付いた。今の会話も、そのためのカモフラージュなのだろう。ただ、渡されただけでは彼女の横で冷えていくだけだったカップが、文の手の中で湯気を立てている。

文は、はあと息を吐いて言う。人間にしてやられた気はするが、不快感はない。あの禿上司に比べれば。

「ありがとうございます」

文は、それだけを言っただけでコーヒーに口を付ける。苦い。肩が少しだけ震える程度に濃い。だが、それで頭が冴えていくのを感じた。口の中の苦味と頭の中の爽快感が、合わさって眼が覚める。

文は口を離して、ほのかに香るコーヒーの香りに心を落ち着かせる。少し余裕のある笑みを浮かべて、咲夜に言う。

「こんど、この店の取材でもしたほうがいいですかね？」

「どうぞ、自由」

咲夜はそれだけを言っただけで、文から離れていく。その白姿は幻想郷と全く変わらないメイド姿で、よく淹れていた紅茶の代わりにコーヒーを淹れることが多くなった。それ以外には変わりのない、彼女。

文はカップを置いて、食べかけのサンドイッチを口に入れる。それから、パソコンにむきなおつて。作業を開始する。指の動きが、少し早くなっている。なぜだが、焦りが消えている。

文は作業を終わらせて、USBにデータの保存をすると、それを抜いてからスーツの内ポケットに突っ込んだ。ノートパソコンは電源を切つて、カバンにしまう。彼女が見ると、レミリアはカウンターで新聞を読み、咲夜はテーブルを拭いている。

「牛丼屋で働くのも大変なのね……」

レミリアがなにか、世の中の世知辛さに言及しているのを文は聞きながら、咲夜に勘定をお願いして、店を出る。レミリアとは一度も眼を合わせることも、話すこともなかった。だが、それもいつものことである。

「今日は、あの無職はくるのかしら？」

文は後ろで吸血鬼の少女がメイドに聞いていることが、耳に残った。

オシャレな時間を過ごそうとも、これからの一日を頑張るために文は、駅で買ったリポビタンAを腰に手を付けて一気に飲み干す。タウリンなどが大量に入っている、栄養補助食品を飲むと、なんだか一日分の力が湧く気がする。

「やはりこれですね！」

文は飲み干した瓶を回収箱に入れて、なんだかあのコーヒーを飲んだ時よりも、元気な顔になった。朝の時間だから、カバンを持ったスーツ姿の人々が文の横を通っていく。彼女もそれに合わせるように、動いて改札の前で財布を出す。

財布から出したのは電子マネーのカード「Mer on」。それを改札に通して、文は駅のプラットフォームに降りる、人込みができていたので、文はそれに並んでから、スマートフォンを出してRhineを開く。トークアプリである。

画面に出るのは、とある少女の名前である。それは「姫海棠はたて」だった。文が何かを打つたびにポーンと音がして、やはり相手からの返信の度に音が出る。

↓「今日、飲みに行きましょう。明日から休みですし」既読。

↓「おけ」

↓「はたてのおごりで」既読。

↓「い、いやよ！ 文こそ、お金だけはあるでしょう」

↓「高い物じゃなくていいですよ。清い香りのする園で焼き肉に行きましょう」既読

↓「高っ！ 破産するわよっ!? 私が！」

↓「? 別にいいですよ」既読

↓「よくないわよっ!!」

↓「じゃあ。いつものところで11時でいいですよ、しかたありませんね。わがままに

付き合わされる身にもなつてくださいますよ、はたて」既読

↓

「あつ、既読無視してますねー」

取りあえず文は、できる限りおちよくるために、スタンプを送る。クマがうさぎの耳を引っ掴んで、吊り上げているようなスタンプを押して、スマートフォンをなおした。はたては反応がなくなつたように見えても、約束は守る女の子なので、文は特に気にしない。

ポーンと文のスマートフォンが鳴る。だが、文は反応することはなく、「既読しない無視」を行う。文はメモ帳を取り出して、今日の予定を確認する。

今から出社して、準備を行い、すぐに出発。それから外回りをいくつかして、昼から最近話題の日本刀系アイドルへの取材を行い、デスクへ帰つて資料と記事の編集を行う。文は頭の中で予定を組み立てて、スーツの胸ポケットからペンを出して、何かを書き込む。

そうこうしているうちに、遠くで電車の音がして、プラットフォームに入ってくる。いつも通り、満杯の車内が見える。文はそれを見て、辟易しながらも電車へ乗り込んだ。座れないどころか、つり革すらも持てない。それでも体のバランスが崩れないのは、

人が人を支え合っているからだ。

「なにが、弱冷房車ですか……また、スーツのクリーニングをしないといけなくなりますね……」

文は電車の壁に書かれた「この車両は弱冷房車です」のステッカーに悪態をついて、この夏の日にぎゆうぎゆう詰めの車内で汗をかく。ただ、運のいいことに今日は壁際だったので、ガラスに手をつくことができた。

「快速の止まる駅に行きたいです……ね」

烏天狗はそう言い続けている間にも、スマートフォンがポーンと鳴る。おそらくはただだろうから、とりあえず無視する。会社に着いてから、返信してあげようと彼女は思っているのだ。この状況で不用意にスマートフォンなどを出して、落とすものなら、眼も当てられない結末になることは明らかである。

だが、まだ射命丸文は気が付いていなかった。今日一日の彼女の行動が、これから奇妙な二日間を作り出してしまうことを。そして、その片鱗はすでに今朝からあったのだ。天狗、吸血鬼、メイドも巻き込んだ小さな事件はすでに始まっている。

2話

その少女も他の者たちと同じく、ある時、ある場所で自分が「外」の世界に来ていたのだと気が付いた。彼女は、白いシャツの上に濃い緑のベストとスカートを着ていた。その少女は、腰に大小の日本刀を差し、銀色の髪に黒いリボンを付けている。そして背中には白いもやのようなものが寄り添っていた。

彼女は自らが、「外」の世界に来たことを驚いたと同時にとあることに気が付く。

——自らの主人の影も形もない、そのことに。

彼女は探した。この右も左もわからない世界で自らの主人の姿を。だが、いくら探しても見つかることできなかった。彼女は幻想郷では力のあるものはそのほとんどがそうであるように飛行することができたが、この「外」では超常的な力のほとんどが使えなくなっていた。消滅したというよりは、弱体化したといつてよいだろう。

探しても、探しても見つからないが、それでも彼女が「半分」生きているかぎりには、お腹も減るし、疲れてしまう。だから、彼女は歩き回って見つけた幻想郷での顔見知りと行動を共にするようになり、生きるために働くことになった。

毎日、変な道化人形の置かれた店でハンバーガーなるものを売る日々。仕事で疲れた

体を引きずって、街を練り歩く日常。彼女は家に帰れば、シャワーを浴びて寝るだけの生活をしばらくの間、繰り返すことになる。しかし、それでも彼女はあきらめなかった。生真面目な性格は時に執念へと変貌することもある。彼女はまさにそれだったのだ。足が重かろうと、生活がハンバーガーとコーラだろうと毎日休むことなく主人を探し続けた。だからこそ「悪魔」の囁きにも耳を傾けてしまったのだ。

「あやや。魂魄さん、いい話がありますよ！」

悪魔は彼女に甘い言葉をささやきかけた、その内容はとある簡単な面接の紹介である。悪魔は言った。そして自分はマスメディアの関係者であることも。

なんでもこれに通れば、収入はあがりかつ日本中において、主人を探す手助けになるという。多少は怪しんだ彼女だったが、藁をも掴む気持ちでその面接に赴くことにした。悪魔からは事前に全ての手続きをしておくから、来てくれればいと伝えられた。

面接の内容は舞台の上で演武を披露する者の募集と悪魔が言った。だからこそ、その日の彼女は幻想郷から自らの魂とともにある、二本の刀を差して出かけたのだ。これさえあれば、どんな相手でも負けるきはしなかった。

面接の場所はそれなりに大きなビルの中にある。そこに彼女が向かう途中、職務質問に何度かであいそうになったが、見つかる前に逃走したため、ことなきを得た。だから、彼女はそのまま面接会場に入っていく。会場に行くときにオーディションがどう

のと言われたが、意味が分からなかった。

会場にいたのは彼女と同じか、少し下ぐらいの見た目をした女の子達ばかりだった。演武と聞いていたから、てつきり年配の武術家達が集まるのかと思つたが、そうではないので、

「楽勝ね」

と安堵した。そのあたりは自信過剰な性格を表しているが、そもそも彼女の容姿は群を抜いているといつていいから己惚れているとは一概に言えない。半分幽霊だからか、白く透き通るような肌に深い蒼の瞳。それでいて美しい銀髪。目立たないほうがおかしいといえよう。ついでに常に、煙のようなものがまとわりついてもある。それでいながら、自信たっぷり腕組したりしている。

面接は一人一人行われるということを彼女は当日に知つた。あの悪魔がそのあたりをぼかして説明していたので、詳しいことはまったく伝えられていないのだ。彼女は一人だったが、面接官は数人いた。スーツを着た者や、少々ラフな格好をした女性など少なくとも通常の仕事の面接ではありえそうにない光景である。

彼女は面接官の座る椅子と、その前の長机以外何一つない部屋の真中に立っている。その状況にはさすがの彼女も少々緊張してしまった。カバンに履歴書をもってきているが、渡すタイミングが見つからない。証明写真は一回撮ることに500円は取られる

ので、渡さないのは損な気がする。

履歴書を渡すタイミングが掴めずにいたが、彼女は目の前に座っていたサングラスをかけたロン毛で年配の男に聞かれる。

「えっ、えっと先ほど自己紹介いただきましたが……コーンパーク・ヨームさん？　まずは本名を教えてくださいだいていいですか。セカンドネーム（この場合、偽名）でなくですすね……」

まるでトウモロコシを栽培しそうなイントネーションで呼ばれた彼女は、少しうろたえて言う。流石に名前のことについて、何かを言われるとは想定外であった。

「ほ、本名なんですが」

「えっ!？」

「えっ?？」

男はまじまじと彼女を見て、眉をひそめたが手元に紙に何かを書いていく。それからまた質問した。

「ええつと、ヨームさん。普段は何をして過ごされていますか?？」

「職業は庭師ですが……最近ではファーストフード店で働いています」

「え?？」

「え!？」

男はこめかみを抑えて、今の会話を口で復唱する。それから「OK。OK」といって、質問に戻る。他の面接官も何事かひそひそと話し始めた。だがそんな状況でも、彼女は胸を張っている。この程度で負けるわけにはいかないのだ。

ロン毛の男が言う。

「髪をお染になられているみたいですね……あとそのカラーコンタクトは取れと言われば取れますか？」

加羅根拓斗。彼女は今言われた言葉がさっぱりわからずに困惑した。幻想郷から来てこつち、コンタクトなどに縁もゆかりもないのだ。それに輪をかけてカラーコンタクトというものについては、理解もできない。夜な夜な主人の幽霊を求めて徘徊し、現代の知識を吸収しなかったことが裏目にでたといつていいだろう。

「取らせませんよ。私は強いですから」

しかし、彼女は言った。堂々と、意味の分からないことを。取る取らないとは彼女のように剣術を扱うものにとつて、死活を意味することが多々ある。あるからといってよく分からないことに知つていて、対応しようとする、たいていヘンテコなことになる。

それでもこの場合は違った。ロン毛の男は下を向いて、肩を震わせる。そして言った。

「今は外されていますが、……腰に日本刀を差して来られているようですが……それは……普段からですか？」

「ええ、そうです」

「……それはなんででしょうか？」

「?……考えたことも……ないわ」

現代で日本刀を腰にさして街を練り歩く理由を考えたことないと彼女は言った。そこでロン毛は立ちあがり、彼女——魂魄妖夢を指さした。

「逸材でしょ。この人！ 天然記念物以上だよっ!! 絶対他にいないからっ」

即日の採用。ではなく「受かった」のだ。オーデイションに。

それからはトントン拍子にことが運んだ。踊りの練習も、そもそも剣術というものを体にしみこませた妖夢には、理解しやすいものであった。その上、基本的に武術とは呼吸法を大事にする。それは現代的なボクシングでも変わりはないが、妖夢の呼吸は武術家としてのそれである。

そして呼吸とは、歌うことの第一歩だといってよい。だからこそ、多少の手直しで彼女の歌はそれなりのレベルまで引き上げられることになった。だからこそ、面接で彼女を見出したあの男の眼力は確かだったと証明されることになった。

何か月もの訓練の後、妖夢はとある地方でデビューを飾ることになる。いや、元々そ

れは本格的デビューへの階段としての「顔みせ」程度でしかないはずだった。いうなれば地方活動とでもいいうべき地味な作業であるはずだったのだ。

大観衆とは程遠いが数百人の前で、ふりふりのきらきらドレスを着て、歌を唄った妖夢だが、その腰には日本刀が二本あるままであった。

その奇妙奇天烈かつ珍妙なアイドルは瞬く間にTwitter上で有名になった。ネット社会での情報の伝達速度は音より速い。たとえ会場に人が少なからうと、その少ない人々に連なる人の連鎖は広大であり、さらにそこから広がっていくのはユビキタス社会である現代の特性と言えよう。

そこからテレビ出演の仕事も舞い込み、全国ネットで、

『魂魄妖夢。歌います』

などと本名で自己紹介を行った。そのかわいらしい容姿に、全国の人々に少なからず、ファンを作る契機になったが、妖夢はそのころからだんだんと、こう思い始めていた。確かに、主人を探すのではなく、このように「探し出してもらえ」状況にしたほうがいいことは理解できる。

「……なにかが、違う……」

ライブが終わった後に、妖夢は控室でパイプ椅子に腰かけたまま、そうつぶやいた。

そんなこんなで魂魄妖夢がよくわからないうちに、全国でデビューを果たしてしばらくした今日に、あの悪魔が取材にくるとのこと、彼女は所属する事務所ですごい座って雑誌を読んでいた。恰好はいつも緑のベストにスカートである。傍らには常人では扱うこともできないであろう刀を二本置いてある。

「……………」

雑誌を読むということは基本的に娯楽が目的である。たまに政治的な話題を特集したりすることもあるが、それでも妖夢の読んでいるのは週刊のアイドル雑誌でしかない。しかし、彼女はそれを今にも泣きだしそうなほどに顔を真っ赤にして、下唇を噛みしめた表情で読んでいる。

開くページ開くページ自分の特集を組まれていては、そうなるであろう。実際には数ページにすぎなくても、あまりに強烈な衝撃が妖夢を包んでいた。

そこには白い水着を着た、「魂魄妖夢」なるものが片目をつぶって、可愛子ぶった写真が載っている。その傍らには「この夏は、ヨームで決まり！」などとあおり文句が付いている。それを見た瞬間に妖夢は雑誌を手放して、ソファの上で丸くなってしまった。いつも自信たっぷりな彼女は耳まで真っ赤にして全身で震えた。

「うあああああああながきまったのよおおあああああああああああああああああああああああああ」

くぐもった悲痛な叫びが彼女から漏れる。恥ずかしすぎて、今すぐにもテレビで見た、青狸のタイムマシンがほしい。そして悪魔を切り倒したい。事務所の者からは「この雑誌、全国で売られているよっ」などと嬉しそうに言われたが、その時の妖夢は変な笑い方しかできなかった。

妖夢はなんとか体勢を立て直して、雑誌を手にとって読み始める。どんなに恥辱であろうと、自らのやったことを見ておかないと心が休まらない。もちろん、あおり文句を書いたのは彼女ではない。

ちなみにこの雑誌は水着以外にも、ただクツキーを美味しく食べている写真や、刀を構えてカツコつけている写真など、妖夢の精神をズタズタにするには十分すぎるほどの破壊力を持っていた。それには全てあおり文句が付いている。刀を構えた横に「美しすぎる、その構え——」などと、こっぴどくかきかきしいことが書かれていた。

「……………」

いつの間にか、また雑誌を手放した妖夢は壁を爪でがりがり掻いていた。胸の奥からくるこの衝動を行動に表さなければ、恥辱でもう半分も死んでしまいそうである。時には自らの半霊を掴んで嘔むような奇行も行ってしまう。しかし、彼女は気が付いていなかった。自らの記憶に深く刻み付けられたものは、たとえ雑誌を見ていなくても頭の中でループするということを。

「……………!!」

妖夢はその場でソファアーの上でのたうちまわる。頭の中ではエンドレスに自らの水着姿が現れては消えて、から現れる。両手で顔を覆っても、頭を振っても無駄であろう。恥ずかしく思えば思うほどに、それは何度でもよみがえってくるのだ。

「ういいうい」

頭を抱えて妖夢は唸る。あの写真達は彼女もそんなつもりで撮ったわけではなかったのだ。遠泳をするからと海に連れられ、味見してくれとクッキーを食べ、おだてられて調子に乗り刀をぬいたらその場面が全部写真にとられて雑誌に載せられていただけだ。彼女の周りの人間は彼女の使い方をよくわかっている。まるで天狗に入れ知恵されたかのようなあつた。

「……………」

妖夢は、ゆっくりと身を起して。傍らにあった刀「楼観剣」を手にして、長い刀身を鞘から抜く。妖艶なほどに、美しい刀身に妖夢の顔が映る。普通に考えれば事務所の中で、刀を抜くなどということが許されるわけはないはずだが、妖夢は今日という今日はと覚悟を決めていた。

「いやあ、ちよつと早く来すぎてしまいたかね」

射命丸文は妖夢のいるはずの部屋の前で腕時計を見ながら、そう言う。彼女はこれから魂魄妖夢の取材の為に、彼女の事務所に来ていたのだ。彼女を推薦し、その伝手で彼女の取材を優先的に行えるようにしたことが、新米でありながら一人で行動する権限を上から与えられていた。すでにこの事務所の者とも顔見知りになり、案内などは自ら断っている。

文はこんこんとノックをする。中から「どうぞ」という声が聞こえたので、彼女はドアを開けて、中に入った。

「こんにちわー魂魄さん」

文の目の前に刀を上段に構えた妖夢がいる。

文はすばやく横に転がる。躊躇はない。

一瞬遅れて、文の立っていた場所へ斬撃が飛ぶ。

「からす、てんぐう」

初撃を外した妖夢はじろりと獲物を睨んだ。この状況を作ったこの悪魔を焼き鳥にでもしないと気が済まない。逆に文は妖夢を手で制して、真顔で言う。

「話し合いましたよう」

妖夢には話し合う余地などない。強いて言うならば射命丸文の恥ずかしい写真集でも作れば話は別だが、あまり現実的ではないので物理的に切ることにした。それは現実

的に可能ではある。後のことなど知りはない。

文は汗が止まらない。いきなり訪れたこの死線。彼女は頭をフル回転させて、今を生き延びる方法を探した。現状では幻想郷ほどの速度は出せないから刃物を持っている妖夢ほどの強敵はいないのだ。

妖夢が飛んだ、上段からの一閃を文は身を崩してよける。ソファァーが切り裂かれて、そこから漏れた羽毛が宙を舞う。文は狭い部屋で転げ、気が付いた。この場所では妖夢も上段による斬撃しかできはしない。楼観剣は近距離での突きには不向きであるし、長い刀身のせいで横から払うことはできない。それができたら、すでに文はすごいことになつていただろう。

「……」

文は倒れこんだまま、腰にあるものを掴んだ。その一瞬を逃さずに妖夢は一步を踏みだす。ここで決める気だった。とりあえず文の服を切り刻み、恥ずかしい恰好で帰らせるつもりだったのだ。

文はさらに体を深く沈めた、地面に伏せて、手に持った「デジタルカメラ」を構えて、撮る。まぶしいフラッシュが妖夢の眼をくらませる。その隙に文は立ち上がって、部屋から逃げ出した。彼女は去り際に後ろを振り返ってニコリと笑い言う。

「いいものをいただきましたー」

「ま、まちなさい！」

文は妖夢を下から撮ったので、妖夢のスカートがめくれて中が「見えそう」な写真がとれた。この烏天狗はただでは起き上がらないらしい。

数日後にこのことで妖夢はまたもや、のたうちまわることになる。

「いきなり切りつけてなんて、おかしい人ですね」

自分のことを全て棚に上げて文は言う。彼女は妖夢という危険人物から逃走して、近くにあったスーパーの前に来ていた。なぜここに来たかには明確な理由がある。空調が効いていて、飲み物が自動販売機より安いからだ。彼女は自動ドアを過ぎて、買い物帰りの年配の女性と入れ違いに中に入っていく。

文は目的のまま、飲み物のコーナーに歩き出す。店内では、

——まーいにちまーいにちぼくらゝは……

などと歌が流れている。それを聞きながら文は遠くで浮かぬ顔をしている店員を見つけた。緑の髪に三角頭巾をかぶり、店のエプロンをつけて試食の為だろうか、台の上に置かれたホームプレートでシャウエツフエンを焼いている。

その周りには三人の子供が群がり、彼女から試食用のウインナーをもらおうと躍起に

なっていた。

「ゆうかさん！ もう一本」

「駄目よサニー！ 私が先！」

「サニー！ ルナ！ 二人とも！ 私が先なんだから」

死んだような眼で、その店員は三人の子供からウインナーを防衛している。文は思わず、デジタルカメラを手に取ってかまえてしまった。それが自らの不運を招くとも知らずに。

3 話

風見幽香は憂鬱だった。毎日毎日、このスーパーマーケットとやらに出向いて、働かざるを得ない日常にうんざりしている。最近では「野菜をつめるのがうまくなったわね」と人間のおばさんから褒められることあったが、何一つ嬉しくない。

幽香は今日も、エプロンを着て試食用のウインナーをホームプレートで焼いている。この商品がシャウエツフエンなどと言うらしいが、焼くたびに誰か根こそぎ買っていつてくれないかと彼女は願っていた。

だが、現実はその甘くはないらしい。客はお昼と夕方のはざまの時間の為か店内にはまばらであり、売り切れるどころか、売れるかどうかすらも怪しい。そんな中、幽香の目の前にいるのは三人の子供だった。年齢から言えば、子供ではないが精神年齢では間違ひなく子供の三人である。もちろん購買力など望むべくもない。

「ゆうかさん！ もう一本」

と一指し指を立てている、少女はほつぺたがもぐもぐと動いている。金髪に縦ロールという、奇抜な髪型をしているが整った目鼻立ちがそれを感じさせない。眼は赤く、澄んだ瞳はウインナーを映している。その名をルナチャイルド（以降、ルナ）という。

「私にももう一本！」

ルナと同じようなことを言いながら、人差し指を立てている少女は、ルナと同じく金髪ではあるが、髪を結んでツインテールにしている。そしてそのほつぺたはもぐもぐと動いている。たまに見える八重歯が可愛い彼女をサニーミルク（以降、サニー）という。

「ここは私にもう一本！」

ルナとサニーと同じようなことを言いながら流れるような黒髪の少女は言う。指が二本立っているのは間違っているのか、ひそかに要求しているのかわからないが、その口の中にはウインナーが見え隠れする。頭の上には青色の大きなリボンをつけている。

最後の彼女の名前をスターサファイア（以降、スター）と言う。ぱつつんに切った前髪に大きな瞳はきらきらと光り、口元に光る涎は食い意地を表している。

三人はそれぞれ色違いのワンピースを着ているが、その小さな足に履いたサンダルは同じものである。つまりは同じ場所を買ったということだろう。

「……………」

幽香は無言のまま菜箸でホームプレートの中にある、ソーセージを焼きつつ。目の前の「三月精」を冷たい眼見ているが、それでも三人は彼女からソーセージを奪おうと躍起になっている。

それを幽香はまだ無言のまま、ルナが爪楊枝でソーセージを奪おうとすると菜箸でソーセージを鉄板の上を転がして逃がす。まるでじゃれあっているようだが、幽香は死んだ魚のような眼をしている。癖のある緑の髪が目元に影を作り、彼女の気分通り暗い印象を醸し出していた。

「しめしめですね」

射命丸文は物陰に隠れて、デジタルカメラを構える。幻想郷では最強の一角だと噂されることもあった花の妖怪が、スーパーの試食コーナーで働いていることに彼女は、面白味を覚えたのだ。そして、曲がりなりにもジャーナリストである彼女が「おもしろい」と感じたからには、それはネタになるのだ。

ペロリと舌で唇を軽く嘗める、鴉天狗。彼女はできるだけ幽香に気がつかれないように、デジタルカメラを物陰から出して、シャッターを押す。シャッター音はオフ。発光もオフ。そしてズーム機能を使つての遠距離からの撮影。これ以上ないほどの細心さで、文は幽香の撮影に成功した。

文はデジタルカメラを引っ込めて、画像を確認する。そこには、ついに奪い取られたのかそれとも幽香のやる気が尽きたのか、ルナがウインナーを食べながら、もらえていないサニーとスターからつかまれている写真が取れていた。呆れ顔の幽香が端のほう

に写っている。

「むむむ、これではまだ、面白味が足りませんね……」

仕方ないのでフォトショで改造しようと思はれたらその時は、あの本質的には凶暴な花の妖怪に何をされるかわかったものではない。

「今週の新聞の内容が決まりましたね」

文は少しにやけながら言う。ちなみに彼女が言う「新聞」とは、世の中で一般的に流通しているものではない。幻想郷から来て所在が分かっている者たちの間だけで流通している「文々。新聞」である。どちらかというと回覧板に近い。

その「文々。新聞」は無論のこと射命丸文が作っている。それぞれの近況などが簡略に書かれているので、なかなか幻想郷からの漂流者達にも重宝している。毎週、変な話題も入っているから興味本位で取っているものもいるようだ。

新聞は文のパソコンでフリーソフトとエクセルを駆使して、毎週発行される。一紙につき百八円である。

文は今回の見出しを「花の妖怪。おちぶれる!」にしようかと思ひ、胸のポケットからメモ帳を取り出して、思いついたことを書いていく。

スーパーマーケットは背の高い棚が並んでいるので、歩く彼女の横には醤油だとか、

お菓子だとか、カップラーメンだとか、幽香だとか、トイレットペーパーだとかの棚があり、そこを彼女は通り過ぎていく。

「ん？」

文はふと、後ろを振り返った。なぜだがわからないが、そうしなければやばい気がしたのだ。ここは、いろいろな雑貨の置いてあるコーナーである。

文の目の前でニコリと幽香が笑った。そして文の首を片手でつかんだ。

「ぐええ、えっ？ えええ？」

「いらっしやませ。お客様？」

「な、なぜここに。い、いや。こ、これは客へのたいおう、じゃありません」

幽香は額に青筋を立てて、にこやかに文の首を絞めてくる。口元が引くついているので、笑ってはいいるが、怒っているのかもしれない。文はじたばたとしようとしたが、幽香の指が的確に頸動脈を抑えてくるのでやめた。

「な、なんなんですか。わ、私にこんなことをしていいんですか。あ、あなたのいうとおり一応お客、ですよ」

「あら。鳥ごとときがいつからそんな口を利けるようになったのかしら？ それにまだなにも買っていないでしょう。それではお客とは言えないわ」

ニコニコとしている幽香の肌にだんだんと艶が戻っていくような気が、文にはする。

要するに鬱憤を文で晴らしているのだ。最初は文がデジタルカメラを使って彼女を無断撮影したことを怒ったのだろうが、文の目の前にいる風見幽香は楽しそうである。

「そうね。あなたがお客様だというのなら……何かを買ってもらわないといけないわね」

「そ、そ」

「あー、いいわすれたけれど、この場所を映す監視カメラは切っているし、こういう雑貨コーナーには、こういう中途半端な時間にはあまり人は来ないわ」

とりあえず文に絶望を与えていく幽香。地の利は完全に幽香にある。文の耳には「さかな、さかな」と店内に流れる変な曲がクリアに聞こえる。聴覚が鮮明化しているのは、体が命の危機を感じているからかもしれない。遠くで子供が「ゆうかさーん」と探し回っている声も聞こえる。

文は苦しげにしながらも聞いた。

「な、なにを、買わせる気ですか」

「……たいしたものじゃないわ。シャウエツフォンよ。そうね……とりあえず、三十三袋買ってもらおうかしら」

「さんじゆうさん!?!」

文はソーセイジを買うのは別にかまわなかった。それが二桁もの数でなければあ

る。それに幽香の言う数字が具体的なあたり、彼女は間違いなく文に在庫を全て売りつけようとしている。文はそれを察知したのか、なんとか要求を少なくしようと言う。

「……そ、そんなに買ったら、福沢諭吉さんが、一人お引越し、してしまうんですが……」
幽香は少し笑って、返答する。ぎりぎりと言文の首を締め付けながら。

「紙切れが一枚消えるのと、意識が消えるの……どっちがいいのかしら？」

文は悟った。この花の妖怪は自分をとことん苛める気であると。普段のストレスがたまっているのか幻想郷にいる時よりも、嬉々として人のことを責める。だからこそ、文は言う。

「わ、わかりました。こ、こんな状況ではどうしようも、あ、ありませんから、か、買います」

ぱつと幽香は手をはなす。文は軽く咳き込んで、バツと後ろに距離を取った。彼女はいつでも逃げる事ができるように半身になり、顎を上げて勝ち誇る。いわゆるどや顔であった。

「引つかかりましたね！ ウインナーなんて買いませんからっ！」

文は幽香のちよつと困ったような表情をしたのを見逃さなかった、彼女はさらに調子こいて言う。

「このことはお店にもクレームを入れさせてもらいますよつ。ふふふ。次の——」

急に幽香はニコニコしながら、片手にどこからか「とった」デジタルカメラを掴んで、文に見せつけた。

文の眼が開かれる。驚愕に表情がゆがむ。慌てて言う。

「か、買います！ ウインナーくらい、いくらでも買わせてください！」

「あら、無理しなくてもいいのよ、それにクレームが、なんだったかしら？」

「えっ？ クレープ？ な、なんのことですかっ？」

あわあわと慌てる射命丸文。顔に汗を滝のように流して、幽香の手に持たれているデジタルカメラを凝視する。幽香は笑顔を絶やさずに、そのデジタルカメラから指を離していく。手のひらの上に載っているかのようには彼女は持った。不安定なその持ち方に文はびくりとした。

「あ、ややや。だ、駄目ですよっ、そそれは」

「何が駄目なのかしら。ただ、こうしているだけでしょ」

ぽーんとデジタルカメラを手のひらで押して、わずかに浮かせる幽香。文はがくがくと震え始めている。もしも幽香が取り損なえば、間違いなく地面にたたきつけられることになるだろう。そうすれば精密機械の塊である、デジタルカメラはどうなるのかわからない。

「駄目ですっ！　そ、それは本当に高かったやつなんです！　いつ、一か月、お昼ご飯を『あたりめ』にしてやっとならぶものなんですよっ」

「へえ」

それを聞いて、幽香は心底楽しそうに笑った。その笑みは、邪悪さと残酷さを表しているが、彼女の場合はそれでも、美しい。

「これが、そんなに高いものなのね」

「は、はいそれはもう」

「大事なもののなのね？」

「本当に許してください！」

幽香は口元を緩める。ぞくりとするほどに妖艶な笑み。彼女の唇がゆっくりと動く。

「じゃあ、聞いてあげるわ？　ねえ」

「な、なんですか」

幽香は首をちよつと斜にして、紅い眼を光らせながら文に言う。その手はデジタルカメラをこれでもかと握りしめながら。

「何を、買ってくれるのかしら。鴉天狗さん？」

ありがとうございます。そんな声を聴きながら、文は両手に大きな袋をもって、

スーパーを出た。中には大量のウインナーの袋を中心に手当たり次第に、いろいろなものが入っている。中には「節分用」と書いた豆もあり、明らかに季節ものの売れ残りも入っている。

あれから文は、幽香に要求されるのではなく、「自分で買うものを決めさせられた」のだった。もちろんスタートはウインナー三十三袋からである。そこから幽香にゆるされるまでいろいろと増えに増えて、両手にはばんばんになったビニール袋があった。

「……………」

文はよろよろと袋の重みに負けそうになりながらもとほとほと歩いていく。幽香はその後ろ姿を店内から見つつ、どこかすつきりした顔をしていた。もう試食コーナーで新しく焼くものはない。普通に考えれば、在庫を一掃することには店側にはマイナスがあるが、幽香にはプラスしかない。

幽香はそれでもホームプレートを片付けようと、試食コーナーへ足を向けた。火は切っているはずだから、放置しても対して問題はないはずだった。群がるものがいなければ。

「ちよつとサニー、取りすぎよ」

「ルナだって」

「しつ、ゆうかさんが戻ってくる前に、あああ」

幽香はホームプレート上に残っている、数本のウインナーを取り合っている妖精達を見て、とりあえず手前にいたスターとルナの頭を掴んで力を入れた。二人は何か悲鳴を上げて、逃げようとする。幽香は文を逃がしはしなかったが、彼女達を簡単に離れた。スターとルナは涙目のまま、そそくさと頭を抑えながら、サニーの後ろに隠れた。サニーのことを頼りにしているというよりは、一人だけ無事だった彼女を盾にするつもりなのだろう。

「ちよつ、ちよつとお、おさないで」

サニーは他の二人に押されても前に出ないように踏ん張る。だが逆に幽香が前に出た。彼女はその紅い眼で三人の妖精を見下ろす。その威厳ある姿に、三人は息をのんだ。特に先頭にいるサニーは自分の心臓が鳴るのが分かった。

「……はあ」

幽香は一つため息をついて、ポケットからハンカチを取り出してサニーに目線を合わせる。そして、サニーの顔をハンカチでごしごしと拭き始める。

「ゆ、ゆうかさん」

「口元にケチャップを付けて……みつともないわ」

そう、三人の妖精は幽香がいない間に、ホームプレートのウインナーだけでなく、試食用に用意されたケチャップだとかマスタードだとかもウインナーに付けて、盗み食い

していたのだ。それで幽香が来た時には、彼女達はそれぞれ口元に赤や黄の「色」をつけていたのだった。

「ほら、あなたたちも」

幽香はハンカチを裏返してスターの口元を拭くと、それからルナの口元もハンカチの使っていない部分を折り返して、拭いてあげる。彼女は拭きながら言う。

「とりあえず今日は、帰りが遅くなるからあまり遊んでばかりじゃだめよ？ 蒲団の用意くらいはできるわね？」

「む、ぐぐ」

ルナは言われながらも答えることができない。口元をしっかりと拭かれているから仕方がないだろう。幽香は拭き終ったハンカチを器用に汚れた部分を「内側」にして、小さくたたみ直した。それからポケットに入れる。これならポケットの中が汚れることはない。

「ほら、返事はどうしたのかしら？」

幽香はルナの両頬をつねりながら言う。ルナは「ふあ、ふあい」と言うが、わざとではない、頬を引つ張られたらそうとしか声が出せない。

幽香はサニーと、スターを見る。二人はこくりこくりと声を出さずに了承する。幽香はそれをみて、立ち上がる。そしてルナの背中を押して、押し出すように入り口まで連

れていく。スターとサニーはそのあとを付いていくしかない。

「氷の妖精とでも遊んできなさい」

幽香は入り口から出て、三妖精の後ろから言う。三人は「はい」とか「えー」とか声を出しながらも、走っていく。

「公園にでも、いくのかしら」

幽香はポツリという。店内にはわからないが、入り口から外へ出れば蝉の聲が耳に響く。肌を包む空気が熱い。見上げると、一年でも最も熱い太陽がそこにある。

幽香は額に汗を流して、夏を感じる。暑いが、不快ではない。彼女はうつすらと笑う。頬が赤いのは熱を持っているからだろう。その笑顔はまさに「女の子」としての可愛らしさがあつた。

幽香は店内に戻ると、何故か涙ぐんでいるパートのおばさんと眼があつた。彼女はその年配の女性の名前を憶えていないが、同僚だということくらいはわかる。

おばさんは言う。

「幽香さん。シングルマザーでがんばっているのね……あんな小さな子供たちをもつて」

幽香の額に青筋が立つ。彼女は無理やり作った笑顔で言う。

「チガイマスヨ？」

幽香は苦勞している。

4 話

「ふ、へへ」

悔しさのあまり射命丸文は変な笑い方をしながら歩いていった。その両手にはばんばんになったビニール袋を持ち、重さに負けないように彼女は歩いている。

その顔は苦虫をかみつぶしたかのように歪んでいる。彼女は先ほどあった屈辱的な出来事を忘れようとしていたが、両手にあるビニール袋がそれを許さない。しかもこのビニール袋はエコだかなんだか文は知らないが、一袋「二円」取られた。無料ではないのだ。

「……………」

文は重量的にも心情的にも重い足取りで、駅へ向かっていく。これから彼女の働く会社へ戻っていかなければならないのだが、よくよく考えれば外回りに出て、帰ってきた時に大量のウインナーを持っているという状況は上司への説明に苦勞することは間違いない。

「あつ、そういえば飲み物を買ってません……………」

文はあのにつくき花の妖精が働くスーパ―へは、元々飲み物を求めて入ったのだが、

出る時にはウインナーを大量に買って出てきた。一応袋の中に「柔軟剤」は入っているが、液体だからといって飲み物ではない。しかも種類の違うものが二つ入っている。

文は喉の渇きを覚えて、さらに足取りが重くなる。すさまじくあのスーパード内慌ててしまい、恥ずかしいほどに取り乱したことも彼女には屈辱であった。しかし、伝統の幻想郷での「ブン屋」は転んでもただでは起きない。

「そうです！ はたてのところに行きましよう！」

思いついたように文は言う。ぐつと自らの思い付きにガッツポーズをしたかったが、袋が重いのでできなかつた。

現代では凄まじい勢いでコンビニエンスストアが数を増やしている。その「コンビニ」については、ほとんどの者には説明が要らないだろう。それがコンビニというものが、いかに世に浸透しているかを表しているといえる。

都会において最近では道を挟んで「同じグループ」のコンビニがあることなどもざらである。それだけ数を増やせば利益がでるということだろう。そして姫海棠はたてはその「歯車」の一つになっていた。

大通りに面したそのコンビニは青い外観をしており、狭い駐車場しかないが、それに人の出はいりが多かった。

店内はスタンダードなレイアウトで、入り口のすぐ目の前にはレジがある。その前に並んだ棚にはコーナーごとに固まった商品が置いてあり、外から見える場所には雑誌の置かれた棚が並ぶ。その奥にはATMが置いてあった。

「いらっしゃいませー」

姫海棠はたてはそんな店内で笑顔を作りながらそう声を出す。彼女は頭に小さな帽子をかぶり、白と青のストライプ模様をした制服を着ていた。彼女は髪が長いほうではあるが、ツインテールにしている。少々くせ毛なのか、緩やかなウェーブがかかっていた。

はたての前を、今入ってきたお客が通り過ぎる。彼女の横には「から揚げ様 紅」と書かれたPOPの張られた保温什器がある。それには鶏の絵も描かれていた。

はたては客が通り過ぎるのを見て、ふうとため息をつき、隠れてスマートフォンを取り出す。そしてトークアプリを起動して、今朝に話をした「射命丸文」の項目を開いた。

↓とりあえず！ 私はおごるお金なんてないからねっ

↓ちよつと、聞いているの！ 文！

↓ねえ、今日どうするの？

「既読つかない」

はたてはどこか残念そうな顔をして、スマートフォンをポケットへしまった。彼女は少し怒ったように頬を膨らませるが、もう一度スマートフォンを取り出して文からの返信を確認する。もちろん来ていない。それで残念そうな顔をする。

しかし返信は来てはいないが、射命丸文の「本体」はすぐそこまで来ていた。はたてが入り口をみると、自動ドアが開いて、両手に大きな荷物を持った女性が入ってきた。

「いらつしやませエ」

はたては最初にこつと笑ってから、挨拶をしようとしたが、入り口の人物が知り合いだったので語尾が上ずってしまった。それでも、内心では嬉しいらしく。その「少女」が見えないところで手をぐつと握る。

勿論のこと、そこにいたのは文だった。外の猛暑を重たい荷物をもって歩いてきたからか、額には汗が見えるが、彼女ははたてのところに来てから言う。

「どうも、はたて〜」

「はたつ……？ はたてっ！」

開口一番に人をおちよくり始めた文に、はたてはムキになって言い返す。だが、それすらも文には想定内ではない。文はふつと口元をほころばせると、はたてに近づいていく。言葉では言わないが、冷房の効いた店内は心地いい。

はたては呆れ顔のまま、文に言う。

「まったく。あんたは相変わらずね……ていうか、どうしたのよ。その袋」

「……実は今日の飲み会の為に買って来まして……」

「えっ？ 今日のはあのヤツメウナギばかりだすところじゃないの？」

「……とりあえず、今日ははたてのところまでこれを」

文は二つの袋をレジの台に下ろして、中からウインナーの袋を取り出す。そしてはたてに見せながら言った。

「はたての家で焼きましょう。確かホットプレートがありましたよね？ 懸賞で当たったとか喜んでいたやつが」

「あるけど……あんた、それを全部二人で食べる気？ なんでそんなに買ってきたのよ……。ちよつ、ちよつと何よその眼。な、なんなの歯を食いしばってまで怒ること言っていないじゃない！」

はたては何故文がここまで大量にウインナーを購入したのか、その経緯について全くもって知らない。だから、文の心をえぐるようなことを平然と言ってしまうのだ。文は少し涙の滲んだ目元を指で擦った。

「とにかく、はたての家でウインナーを肴に飲みましょう。ただしお酒ははたてが買ってきてくださいね。私は、もうこれだけ出費したんで。多分、十一時くらいには行けま

すから」

「……まあ、いいけど。だれか呼ぶわよ。そんなに食べられないし。てっ何よこれ」

はたてはレジの上の袋を思わず凝視した。中に見え隠れするものはウインナーだけではない。いろいろなものが入っている。

「何で……洗剤の詰め替え用ボトルが四つも入ってるの？ しかも、全部違う種類。あつ、なにこれ？」

そういいながら袋の中からはたての取り出したのは、洗濯ばさみセットである。はたては頭に疑問符を浮かべて、眼で文に問う。文は下唇を嚙んだまま、笑顔である。はたてに「なにこれ」と言われても文にこたえる言葉などない。

「……………」

「……………」

二人はレジで無言のまま見つめ合った。文は何故か悲壮な笑顔のまま、はたては困惑しながら。それでもこほんとはたては咳払いをして、文に聞いた。

「ま、まあ。これも必要よね……あ、あんたはなにか買わないの？ ここであまり話しているとサボリと思われるんだけど」

洗濯ばさみが飲み会の何に必要なのかは、言った本人にもわからないが、文を気遣うためにはたては謎の理論を展開する。それも一つの優しさであろう。このあたりでは

たても、文に何かあったことに勘付いた。

文ははたての憐れみに胃を痛くしながらも、少し考えるようにして、飲み物コーナーに向かった。その後ろ姿になにか言い知れぬものを感じたはたては、眼を背けてしまった。

文は飲み物を選びながらなんとなく、店内を見回した。しかし、その不用意な行為があるものを見つけて彼女はびっくりと、体を震わせた。

雑誌を読んでいるスーツの男性陣に混じって、大きなリュックをからい、青い髪で二つ結びの「河童」を見つけてから、文は足音を気取れないように後ろへ下がった。その青いレインコートのような服装から見間違えるはずはない。幻想郷での住民の内でも「出会ってはいけない者」がそこにいるのだ。幸いにも相手は気が付いていない。漫画に夢中になっているらしい。

「な、なぜ『奴』が」

素早く奥の飲み物コーナーで缶コーヒーをとると、文は物陰に隠れる。名前を呼ぶと気が付かれる可能性があるので名前は呼べない。気が付かれれば恐ろしいことになるだろう。文はそそくさとたての元に戻り、レジにコーヒーを出す。はたてはそれを取って、スキヤナーでバーコードを読み取る。ちなみに文の袋はレジの内側に入れられ

ていた。邪魔だったのだろう。

「なんで、本棚に『奴』がいることを言ってくれなかったんですか？」

「あ？ ああ……。あれね。単に忘れていただけだよ。はい、104円になります」

文は本棚のほうを警戒しつつ、財布からお金を出す。百円玉を二枚、はたてに握らせてから「おつりはいりません」と耳打ちして、コーヒーを取る。そのまま逃げるように出口から出ていった。「名前を読んではいけない奴」に気が付かれないように、素早い行動であった。

「ありが……。ん？」

はたては一応ありがとうごさいました。と言おうとして、何かを忘れている気がした。ふと、足元を見ると、大きなビニール袋が二つ置いてある。その中には大量のウイスキーが入ったままなのだ。

「!!」

はたては驚愕の表情をして、それから肩から力が抜けて、呆けた顔をした。今更あの射命丸文が戻ってくるはずがない。これはどう考えても計算の上でのこととしか思えないのだ。

文がはたてのアパートの前にたどり着いたのは、彼女の腕時計が十一時半を少し回ったころだった。夏の長い昼は、とうの昔に終わり、すでに空は暗い。それでも文は蒸し暑さを覚えた。だから少しだけシャツの首元を緩めて、袖はまくり、細い腕が見えている。すでにスーツも脇に抱えている。

アパートは二階建て。新築とはいいがたいが駅からは歩いて、十分程度。コンビニも近く、なかなかの立地ではあった。それでいて家賃は安い。はたてが借りる時にとあることで「命蓮寺」の者に霊的なことで助けを借りたことを除けば、最高だった。

文は今解放感に包まれている。明日からは「盆休み」らしい。幻想郷でも「お盆」程度はあるが、日本社会として休むのはこちらに来てから初めて知った。そもそも天狗社会は基本的には年がら年中、好き勝手できる。文が今働くようなタイムカード文化などないのだ。

文は、スマートフォンを取り出してはたてに電話する。インターフォンを押しても、彼女は出ない。出れば、宗教が集金かそれとも他の謎の勧誘なのかということくらい、幻想郷の者でも学習していた。つまり誰かが騙されたということである。

『文？ 遅いわよ、はやく上がってきて。開けとくから』

はたてが電話に出てそう告げると、すぐに切られる。意地悪をしているのではなく、それ以上は必要ないとお互いにわかっているのだ。文は外階段を上って二階に上がる。

そしてはたての家の前に来ると、遠慮なくドアを開けた。鍵はすでに開いていた。

文の目の前には少し驚いた様子のはたてがいた。構造上、玄関のすぐ目の前には台所があり、その向こう側に居間がある。はたてが文の目の前にいるということは、台所で何かを用意していたということだろう。彼女は部屋着の短パンにシャツを着ていた。そのシャツの胸元には「NEW YORK since 1937」と意味の分からない単語が書いてある。

「あつやつと来たわね。もう、始めようかと思つてたわ」

「すみません。仕事を休みの前に片付けておこうと思つたのもので」

文は言いながらも、軽く謝りながら部屋に上がった。台所の隅には、大きなスーパーの袋が二個転がっているが、文はそれを見ていないふりをした。ウインナーは抜かれていたのか、多少はふくらみがなくなっている。

「はたて、なにしてるんですか?」

「キャベツ買ってきたから、切つて洗つてボウルに入れていただけよ」

見ると、はたての手元に銀色のボウルに入った、青々としたキャベツの山があつた。ウインナーを包む気なのだろう。文はそれにおおとわざとらしく感心して「流石はたて」という。はたてはその様子にはかみながら、居間へ向かう。

居間は一人暮らしにしては広々としている。中央に台が置いてあり、そこにはホット

プレートが載せてあった。そしてその傍らで、手持無沙汰にしている赤毛の少女がいる。落ち着いた色のホットパンツにストライプ柄の赤いシャツ、それを袖のあたりでまくっている。

文はその少女を見つけて、言う。はたては台の上にキャベツを置いて、また台所にもどつていく。

「どうもー」

「おや、珍しい顔ですな」

軽い感じ文に挨拶したのは堀川雷鼓だった。はたてが誰か呼んでおくと文に語ったが、それは彼女だったのだ。幻想郷ではほぼかかわりがなかった三人だが、現代に来てから少々交流を持っていたのだ。

雷鼓はとくに何をするでもなく、部屋のテレビを見ている。おっとりとした顔立ちをした彼女は付喪神である。神様と言えば神様なのだが、文は特に敬う様子も見せず、彼女に言う。

「堀川さん」

仕事柄、というか現代社会に感化されたのか、文は人のことを名字で呼ぶことが多くなっている。はたてについては、幻想郷の時から多少にしる、いがみあった仲なので、下の名前である。

「もちろん今日は、なにかもってきてくれたんですね？」

文は聞く。雷鼓は「ニヤリ」として、彼女のものだろう部屋の隅にあったバッグを引き寄せる。そこから黒い瓶を一つ取り出した。表面には「玄霧島」と書かれている。焼酎である。

文と雷鼓は目を合わせて、不敵な笑みを浮かべる。そこにはたてが手に多くのシャウエツフエンの袋を持ってやってきた。

ホットプレートの上で、何本ものウインナーがじゅうじゅうと音を立てる。油がぱちぱちと音を立てて、ウインナーの表面に焦げを作っていく。

雷鼓はそのうちに一つをフォークで刺して、手にもったキャベツの間に挟む。そしてその青い野菜の上からかりっと食べる。あつあつのウインナーを冷えたキャベツでくるんで食べるとき、じゅわりと口の中に肉汁が広がる。

「あちち」

雷鼓はそういうがもぐもぐと、口の中で咀嚼してごくりと食べる。そして。傍らにあったビールの缶をもって、ごくごくと飲む。眼をつむってキンキンに冷えたそれを喉を鳴らして飲む。

雷鼓は口元から、缶を離す。

「~~~~~！」

声を出さずに彼女は、おいしそうに顔を綻ばせる。それからまた、ウインナーを食べるのだ。ちなみにお酒はお昼の打合せ通り、はたてが用意している。

文とはたても同じように食べている。ただはたてのフォークだけが、数が足りないから子供用なので赤い取つてが付いて、先が丸みを帯びている。はたてはそれがうまく刺さらないらしく、取り皿に取つたウインナーをフォークで刺そうとして油ですべり、ウインナーがくるくると皿の上で回っている。

「意外にこれは正解だったかもしれないねー」

文は雷鼓の持ってきた焼酎をロックで飲みつつ、言う。ほのかに頬が赤いのは、すでに何杯かを干しているのだろう。

「最初はこんなにウインナーを買わされ……買つてどうしようかと思いましたが、結構お腹にたまりますし」

文の言葉にはたてはウインナーに苦戦しながら言う。

「まあ、文にはしてはいい案だったかもね。あつ」

はたてが気を抜いた瞬間、彼女の取り皿からすべりに滑ってウインナーが飛び出し、床にべちよりと落ちた。はたてはなんともいえぬ顔のまま、ウインナーだけを手で取り。ティッシュを洗面所に取りに行く。余談だが、このアパートには風呂が完備されて

いる。しかし、現代ではないほうがおかしいのかも知れない。

「んー」

雷鼓がキャベツをしやしきしやしきと音を立てて、食べる。無論中にはウインナーが入っている。雷鼓は大量のキャベツでウインナーの熱さを軽減させているのだ。だが、文がそれを見て言う。

「ころころ。いけませんよ。あまり取りすぎたらなくなってしまうす」

ウインナーだけでも肴にはなるが、キャベツがあることに越したことはない。しかし、そのあたりには特に問題はなかった。なぜなら、

「ああ、大丈夫よ、文。結構キャベツは買ってきたから」

はたてが用意しているからだ。文はそれならばとポウルから手で取って、ウインナーを取る。酒との相性は上々である。雷鼓は下で赤い唇を嘗めながら、新しいウインナーの袋を開けて、どぼとホットプレートにぶちまける。ころころとウインナーが鉄板で踊る。

「あーああ。それはちよつと多すぎるわ」

はたてはあわてて菜箸でウインナーを散らす。その時、膝立ちになってしまったのだが、膝にべちよつとした感触を覚えた。先ほどウインナーを落として、その上から踏んでしまったのだ。

「……」

はたては無表情でウインナーを動かす。

「あははは」

雷鼓と文は焼酎だとか、はたての買ってきたウイスキーだとかを飲み込んで真つ赤になって笑っている。はたてはほろ酔い気分でカルウピスのチューハイを飲んでいた。彼女は目がとろんとして、ほおが桃色に染まっている。

文はウインナーを食べてお腹いっぱいになったのか、シャツの上からお腹を撫でている。雷鼓はまだ食べられるのか、むしやむしやと食べてはビールを飲む。幻想郷では日本酒、というのも語弊があるのかもしれないが、ともかく清酒が基本だったので現代のお酒は、彼女達には刺激的であるのだろう。ちなみにウインナーで開けてしまっても、残りの入った袋は洗濯ばさみで閉じてある。

それでもそろそろ退屈してきたのだろう。文は聞いた。

「はたてー。なんかDVDとかないんですかー」と文。

「えー、ないけどお。プレーヤーならあるわよお」とはたて。

文はロツクの焼酎を飲みながら、首を傾けた。酔いが回ってきたのか、そういう体勢になってしまうのだ。身体能力が減退しているということは、新陳代謝も衰えているの

だ。だから天狗としての酒豪ぶりも多少は軽減されている。それでも人間基準で考えるのなら、中々に「飲める」ほうだろう。

「じゃあ私は借りてくるわ。目の前のゲイオで」

雷鼓が不意に立ち上がったと言う。はたてと文は、酔いの回ったおっとりして口調で聞いた。

「なにかりてくるんですかあ」

「文にもわかる程度のやつねえ」

雷鼓はそれを聞き流して、乱れたシャツのまま外へ出ていった。酔っ払いにDVDを借りにかける暴挙に、同じ酔っぱらいの二人は危機を覚えなかった。文もはたても手元のお酒をぐいと飲み干す。

「かりてきたわー」

雷鼓が透明な袋にDVDを入れて戻ってきたのは、十分もたっていないころだった。それなりに早い帰りに文とはたてはそれぞれお帰りと言う。はたてはのっそりと立ち上がって、雷鼓からDVDを受け取ると、テレビの前に座ってごそごそと埃を被ったDVDプレイヤーを取り出して、テレビにつないだ。

はたてはDVDをケースから取り出して、眼を見開く。瞬間的に顔が真っ赤になる。

「あ、あんたこれ」

はたてが慌てながら雷鼓を振り返る。雷鼓は飲みものこしていたビールをあおつてから、またあの「ニヤリ」と笑う。それにつられてか文もはたてを見る。

「ここ、これ、これ。な。なんでこんなの」

はたてがしどろもどろのなっていると、文が近づいてきてDVDを覗き込む。表面にはタイトルが書かれている。文はそれではたての狼狽の理由がわかったのか、声を上げた。

「ああー」

「ああーじゃないわよっ文。こ、こんなの」

「まあ、いいじゃないですか。もしかして、はたて、恥ずかしいんですか?」

文は挑発するかのようにはたてに言う。はたてはそれではつと顔を上げて、返す。

「そ、そんなわけないじゃない! いいわっ、見てやろうじゃないの!」

ケラケラと雷鼓と文が笑うのを背に、はたてはDVDをプレイヤーに入れた。

——そういう風に最初は誰もが余裕だったのである。

雷鼓と文はウインナーを食べながら、画面をあははと笑いながら見ている。はたては正面から見るのが恥ずかしいのか、体を斜めして片目だけを開けてみる。

——5分後。

はたてはリラックス熊のぬいぐるみをぎゅうと抱いて、真つ赤な顔をそれで隠しつつ、見ている。文はいつの間にか体操座りして、黙り込んでいた。

雷鼓にいたってはこのあたりですでに酔いがさめてきたのか、あわあわと文とはたてを見る。はたてと文はただ「もってこられた映像」を見ていただけだが、雷鼓は酒の勢いに任せて「持つてきた映像」を二人とみているのである、あまりの恥ずかしさに顔が紅潮して、手で口を覆っている。

——二十分後。

はたては画面からできるだけ離れている。その手にはリラックス熊が首を絞めるかのように抱かれている。

文は膝に顔をうずめて、顔をちよつと出してみている。

雷鼓は両手で顔を覆って、真つ赤なまま、指のスキマから画面を見ていた。

——映像終了。

「……………」

「……………」

「……………」

はたてはDVDを取り出す。文と雷鼓は言葉もないが、完全な静寂でもなく、ホットプレートでウインナーが焼ける音がする。

「……あ、あの」

雷鼓は口を開く。それを文とはたてが見る。雷鼓はうぐと涙ぐんで、言う。お酒は情緒を多少不安定にするのだろう。それに彼女はこう見えても、付喪神として自我を持ったのはつい最近である。つまるところ、精神的な経験が薄い。

「ご、めんなさい」

雷鼓は立ち上がって、逃げるように部屋から出ようとする。あまりにいたたまれなくなったのだろう。だが、隣にいた文がその足を掴んだ。座っていたので仕方なく足を掴んだのだが、そのせいで雷鼓は体勢を崩した。

「あつあぶない」

はたてが倒れ掛かる雷鼓の下にヘッドスライディングを行う。文も、雷鼓の動きに引かれて、倒れこんだ。

はたての部屋にヘンテコな組体操みたいのに、三人はなってしまった。はたてが一番下の土台になり、雷鼓は片手を天に、片手を地に付けている。はたてを避けようとして、避けきれなかったからか、その変なポーズで固まってしまったのだ。文に至っては雷鼓の足の下に引かれ、その上はたての足が顔にかかっている。

一番下のはたてが苦しげに言う。さつき雷鼓が倒れ掛かってきたのを背中で受け止めたので、酔いがさめてきた。

「こ、こんな形で終われるわけないでしょ！ 後味が悪い！」

雷鼓はそのポーズのままなにかうめくが、声にならない。ちなみに雷鼓は先ほどのVDを店員に取ってきてもらったのだ。それすらも雷鼓の冷却された羞恥心を加速させている。

文はそんな雷鼓の足を掴んだまま、言う。

「そうですね。はたて！ 『あたりめ』はありますか？」

「は？ あるけど。イカが何ですって？」

「落ち着くにはあれがいいんです。もってきてください」

「わ、わかったわ」

はたてはもともと芋虫のように這い出ると、あたりめを取りにいった。雷鼓と文はその後ろ姿を見ているだけである。

しばらくして、はたての持ってきた「あたりめ」を三人で噛み始めた。ちなみにあたりめとは、イカの干物のことであり、噛めば噛むほど味が出るものだ。文はデジカメの資金を作るために、ひもじい思いをしている時に噛んで過ごしたから、そういう使い方

も知っていた。

そして人だろうが何だろうが、動物であれば物を食べれば、大抵は落ち着きを取り戻すものである。だからこそ、文ははたてに持ってこさせたのだ。

雷鼓、文、はたてはくつちやくつちやとイカを噛みながら、何も話さない。部屋には咀嚼音だけが響き、すさまじく雰囲気が暗い。確かに落ち着きを取り戻した三人だが、逆に勢いを全て失った。

はたてが固い身をむりやり噛み千切って、ごくりと飲む。そして文に言った。

「な、なんか変な空気になったじゃない！」

「あ、あれおかしいですね。これを食べているとなんだか落ち着くのですけど」

「いや、落ち着いてはいるけど。あれ、みてよ」

二人は雷鼓を見る。どんよりした顔で、もぐもぐとイカを食べているその姿には、哀れみすらも感じられる。それを氣遣ったのか、はたても今度は小声で言った。

「ど、どうすんのよ。これから、文」

「どうといわれても……」

「わかったわよ……」

はたてはぱつと立ち上がって、言う。

「ちよつとコンビニ行ってくるわ！ 文、火消しておいてね！」

コンビニ行つたはたてだったが、そうたいした時間はかけなかった。この蒸し暑い夜の世界を、走つたのか、帰つてきた時には汗をかいて、息を切らせていた。

はたてが買つてきたのは「プリン」だった。上にホイップクリームの載つたもので、近くのコンビニで買つてきたのか、雷鼓が触るとまだ冷たかった。

「とりあえず。甘いものを食べて」

そういうのはたてが雷鼓にスプーンを渡す。雷鼓は口の中でイカをまだ噛んでいたが、とりあえず飲み込んで、ペリペリとプリンの蓋をあけて、スプーンで掬う。

口に入れると、甘みが心地よく広がる。雷鼓は口元をほころばせて、「ん」と小さく声を出す。その笑顔が、どこか愛くるしい。

だが、はたても文もほつとした。

しかし、文も雷鼓の為に何もしなかったわけではなかった。あのDVDのケースに「返しといてください」とメモを張つて、はたての家の洗面所にそつと置いておいたのだ。雷鼓のことを第一に考えた素晴らしい行為である。約一名ないがしろにされるが、ささいなことだろう。

「それじゃあ、飲み直しますか」

雷鼓が落ち着いたことを見て文がビールを片手に言う。はたてと雷鼓もそれぞれ缶をもつてあつまる。三人は合図するでもなく、こういった。

「カンパニー！」

部屋の中に、カーンと音が響いた。

そんなこんなで射命丸文の一日は過ぎていった。彼女は、二時過ぎにタクシーを呼んで、雷鼓を送って帰った。べろんべろんに酔った赤毛の少女は「もう一軒〜」などと寝言で言っていたが、タクシーに乗ってからはやすやすと眠ってしまった。逆に文は、運転手に指示するために眠れなかったということである。

帰りに文のスマートフォンが何度か鳴ったが、それについて、文は気が付かないようにした。だいたい要件はわかっている。

雷鼓を家に送り届けて、文は自らの住むマンションに帰ってきた。

文の質素な部屋にはベッドと机、それに本棚程度しかない。無駄なものはなく、それが彼女の性格を表しているかもしれない。とりあえず文は、カバンを下ろしてスーツを服掛けにかけてから、そのまま洗面所に行く。そこで気合を振り絞って歯を磨き。シャツを洗濯機に放り込んで、ズボンを着替え、ベッドに横になった。

「もう。だめです」

文の視界が黒く染まって、眠れることへの充足感が体を満たしていく。すぐに彼女も寝息をたてはじめた、その吐息は起きている時の彼女から、想像できないほどに可愛らしいものである。

「ふあーあ」

文はベッドの上で伸びをして、こきこきと首を動かした。時計を見ると、まだ七時を回ったところである。彼女はそれでも、体を起こして簡単な体操をする。いつもの癖で一度起きたら、二度寝しないように行動してしまうのだ。

「あ……今日は休みでしたね」

文は気が付いて、冷蔵庫に歩いていく。そこから瓶の牛乳を取り出して、ごくごく飲んで、頭が冴えるような気はするがリポビタンAがほしい気もする。それも職業病だろうか。

それはそうと文は「文々。新聞」の原稿を作ろうと、壁にかけてある紺のスーツの内ポケットを探った。あの咲夜のカフェで使ったUSBには、「文々。新聞」の参考資料も入っているのだ。

あの中には「赤毛のメイド」だとか、「男性同士の恋愛小説を読む、桃頭」だとか、「工

場でタンポポの花を握り潰している巫女」などという、新聞に使えるネタと写真が保存されているのだ。そしてそれが、

「あれ？　ない…です…ね…？」

文の手元から消えていた。どこかで失くしたのだろうか。

カフェのカウンターでその少女は4DSをしていた。上下に分かれた二画面から「ポケモン」が飛び出してくる。それを見ていると楽しいのだが、眼が疲れてくるのだ。それを目の前の銀髪の女性に注意される。

「妹様？　ゲームは一日一時間までだそうですわ」

「咲夜…：…それ、絶対に間違っていると思うわ」

そう文句を言う金髪の少女だが、しぶしぶゲームを終わらせて、目の前にある冷たいミルクを飲む。咲夜はレミリアには変なものを飲ませるが、他の者には普通の物を飲ませる。

少女は口を離して言う。

「はあ、ねえ咲夜。なにか事件が起こらないかしら」
少女はレミリア同様に退屈そうだった。

5 話

レミリアは椅子に座っても、つま先しか床に付かない。固いブーツの先を、床でトンとついて、彼女は手元にカップを引き寄せて飲む。

中に入っているのはメイドの入れたコーヒー。黒い、それから香り立つ匂いを少しだけ楽しんで、彼女は口に含む。小さな唇を薄く開いて、音もなくコーヒーを飲む。甘い。今日のコーヒーは「当たり」だと、彼女は思った。

レミリアの居るのは、十六夜 咲夜の働くカフェのカウンター。このごろは彼女の、指定席になっているその場所。レミリアはカップをソーサー（受け皿のこと）に置いた。小さな波紋がコーヒーの表面を乱して、すぐに元に戻った。

その仕草は優雅としかいいようがないほど、様になっている。

レミリアは両肘をついて、指を組み、その上から自らの顎を乗せる。そして薄く笑いながら、彼女は目の前でコーヒー豆を挽いている銀髪のメイドに語り掛ける。

「咲夜。今日のコーヒーは、なかなかね」

「ありがとうございます。お嬢様」

咲夜は手を止めずに、にこっとレミリアに笑いを返す。レミリアはそれに多少満足し

て、こう思った。

(まったく、いつもこれくらいのを煎れてくれたらいい……!?)

レミリアは気が付いた。彼女の今飲んだコーヒークップには、彼女の見えていなかった裏側には絵が付けられていることに。今使ったカップはいつも彼女の使っているカップと似た雰囲気をかもし出すものだったが、それで別物だとやっとわかった。

レミリアがカップを手に取り、恐る恐る手首を返して、裏側を見る。

そこにはリラックス熊が書かれたイラストがあつた。そのクマは「あつたまりますね」とおもしろいようにコーヒーを飲んでいる。そんなイラストである。

「前言撤回するわ。咲夜」

「ひどいですわ。お嬢様」

レミリアは呆れて、カップを下ろす。今日はコーヒーによくわからないいたずらをしなかつたと思えば、今度はカップにきた。先ほどまでレミリアは優雅にコーヒーを飲んでいたが、咲夜側から彼女を見ると、可愛らしいカップで砂糖入りコーヒーを飲んでいようようにしか見えなかつたはずである。

咲夜はこのためだけに、レミリアも自分の愛用のカップと見抜けないほどの物を買ってきたのだろう。

「全く……」

レミリアは頭を振って、はあとため息をつく。咲夜はどこ吹く風とコーヒーを挽いている。レミリアの静かな抗議に「ひどい」と言ったが、それも冗談であろう。流石に吸血鬼の少女も言葉がなく、横の席に置いてあった新聞を手取る。それは市販の物ではなく、表面にデカデカと「文々。新聞」と書いてある。発行日は先週の物である。彼女はその薄い新聞を開いて、流し読みする。

「へえ。霊夢が逃亡したのね……。余罪を追及中……。お手柄天人？」

レミリアは脚色に脚色をされた記事を読みながら、疑問を思った。記事には仕事の疲れから逃亡と書いているが「余罪」とは何を示しているのだろう。そもそも目元の隠された天人の写真とインタビュー記事もあるが、それを総括すると「らーめんがおいしかった」とよく意味がわからない。

「ねえ。咲夜。この新聞とるくらいなら、駄菓子でもフランにあげたほうが有意義なんじゃないかしら」

「あら、なかなか面白いと思いますけど……先々週はたしか、例の『優曇華事件』を特集してましたし」

「ああ、あれね……」

優曇華事件。それは幻想郷の者たちが自らの力の減退を知った、衝撃的な事件であ

る。当のウサギは二度と思ひ出したくないと口を噤んでいるが、鴉天狗が関係者に聞き取り調査を行い、そこから事件の全貌を明らかにしたというものだ。

余談だが、ヨレヨレ耳のウサギはそのことで鴉天狗を恨んでいるらしい。

レミリアはとりあえず、新聞の内容を流し読んでいく。正確性はともかくとしても、暇つぶしにはなかなか使えないことはない。咲夜の言う通り、新聞の購読を続けるのも悪くはないだろう。

カランカラン。そんな音が店内に響く。咲夜が「いらつしやませ」と澱みなくあいさつする。その音が、入り口のドアに付けられた鈴の音だと、彼女は何度も聞いているのだから間違えるはずがない。

「どつとむ」

入ってきたのは射命丸文であった。短い黒のスカートに、白い半そでブラウス。そして胸元に赤い紐のリボン。昨日までの、きっちりしたスーツ姿とは少し印象が違う、私服姿だが、どこか幻想郷での服装と似ている。

射命丸文が頭を掻きながら、店内に入ってきた。彼女は咲夜とレミリアに挨拶すると、店内の床を一通り見る。時にはかがんで、机や椅子で陰になっている場所にも見た。

「？」

レミリアと咲夜はお互いに眼を合わせて、首をひねる。文は明らかに何かを探しているのだが。意図していることが彼女達にはわからない。だが、それを文に聞くまえに、彼女の方から聞いてきた。

文はかがんだまま、顔を上げる。

「このあたりに、USBが落ちてませんでしたか？」

咲夜は目をぱちくりさせて、から少し考えるように顎に手をつける。上目づかいのまま、彼女は思案するが、文を見て言う。

「知らないわ。……お店の掃除なら、私がしているから……たぶんここにはないでしょうけど。失くしたの？」

「ええ。昨日は間違いなくスーツの内ポケットに入れた記憶があるのですが……今朝気が付いたらなくて。とはいっても、仕事のデータは会社のノートパソコンにもありますし、盗まれて困ることはないんですが……個人的に新聞用のデータも入っているんですよ」

「そう、たいへんね……会社は？」

「二応朝早くに行ったのですが、ないみたいですね。休みなので、他の人には聞けなかったのですが。ほとんど昨日は社内になかったので、違うと思います」

文はそれで一つため息をつく。彼女の様子から咲夜は火急を争うことではないと察した。

「どうせ、今日は休みなんでしょう？　だったら昨日行った場所を回ってみたらどうかしら？」

「……」

文は咲夜の提案をもつともだと思つたが、そう簡単にはいかない理由があつた。その理由を他人に説明するとしたら特に難しいことではない。主に昨日文が「長居」をした場所は、三つしかないのだから、回るだけならば難しいことは全くない。他にも細々とした用事でいろんなところに行つたが、内ポケットの物を落とすような動きはその三つしかしていない。

だが、一つ目の訪問先は明らかに文を抹殺しようとしている危険人物がいる。紛失事件が殺鳥事件になりかねない。そして二番目の訪問先は逆に文が抹殺したい妖怪がいるが、無理だろう。しかも反撃を受ければ破産しかねないのだ。そして最後の訪問先が一番尋ねるだけなら容易だが、あまり軽率に訪問すると返却すべき「アイテム」を押し付けられる可能性がある。

「私の周りはトラブルメーカーばかりですね……」

文はそうひとりごちて、完全に自らを棚にあげる。咲夜はなんのこともわからずに、

また首をかしげてしまう。文は、この目の前にいる瀟洒なメイドを見ていった。もしかしたら、彼女を連れていけば何かしらの「敵」への備えになるかもしれない。

「よかつたらついてきてくれませんか……？」 理由があつて、できれば誰かついてきてもらわないといけないんです」

「えっ？ 私がかしら。……悪いけど、ちよつと無理ね」

「お店があるからそうですよね。後は」

文が目線を動かすと、そこにはレミリアがいる。彼女は肘をついて、二人の会話を聞いていたが、見られて反応する。最初の反応は拒絶であつた。彼女は首を横に振りながら言う。

「ただの落し物でしょう？ 私は行かないわよ」

レミリアは会話に参加せずとも、文の状況も、彼女がレミリアに何を望んでいるのかも理解していた。流石に文の「理由」が命と金と恥がかかっているとは見抜くことはできなかっただろうが、彼女は行く気などないとコーヒーを飲む。

だが、文としてレミリアを連れていけば、最初の危険人物もまさか刀を抜くことはないだろうという打算から、手を合わせた。頼みごとをするだけで、斬られる危険性が減るのだ。

「どうか、この通りです。横にいてくれるだけでいいんです」

「いやよ。めんどくさいわ」

「なにかしら埋め合わせはしますから」

レミリアはそれでも、首を縦に振らなかった。だが、文がその言葉を言った瞬間に、その音は響いてきた。どたどたと、何かが走り回るような音である。それはカフェの奥にあるドアから聞こえてきた。それは店に奥にある部屋につながっている。

さらにドタドタと音が大きくなり。カフェの奥の扉が勢いよく開いた。ばあんとドアが壁に当たって、音が鳴る。

そこには小柄で金髪の少女が立っていた。赤いワンピースに黄色のリボンを付けた、その女の子は何故か「トレンチコート」を着ていた。そして頭には小さな麦わら帽子をかぶっている。彼女はにやりと八重歯を見せて、言った。

「その話、聞かせてもらったわ!」

「フラン。ドアは静かにあけなさい」

「あつ……」

意気揚々と登場したフラン・スカーレットだったが、レミリアに注意されて、ドアノブをもって、静かに閉めた。それから。文たちに向き直って言い直す。

「さっきの話は……その、聞かせてもらったわ……えっと、その」

かみかみでフランは言う。一度テンションが下がってしまい、口調が戻らないのだ。

考えていたであろう、台詞もうまく出てこない。それでもフランは頑張ってつぶけた。「よ、要するに、そのゆーえすびーを探してあてればいいのね？ それだったら名探偵の私が手伝って……」

「だめよフラン。外は危ないわ。外に行くときは咲夜か美鈴と一緒にいきなさい」

「えっ……はが」

フランは言いかけてまたも、噛んだ。彼女はぶるぶると肩を震わせて、レミリアを涙目で睨み付ける。彼女はレミリアの少年のような恰好を見て、ぼそりという。それは静かな抗議だった。

「……えせんお姉さま」

レミリアはくすりとして。椅子から降りる。彼女は妹の方を見ることなく、言った。小さく笑った彼女だが、その笑顔には人を威圧するような迫力がある。ようするに今のフランの一言で怒っているのだ。

「フラン？ アニメマックスを解約されたいようね？」

「っ?!」

フランは一步下がった。最初は文の話だったが、そんなことはどこへやら、フランとレミリアはCSの有料チャンネルの話を始めた。それもアニメしか映らないチャンネルである。

「そ、それはひどいわ。お姉様！　いくらなんでもひどいつ。やるのがなくなるじゃない！」

「いい？　フラン。新聞に書いてあったのだけど。あまりゲームやアニメに影響されるとよくないわ。その証拠にこのごろはポケモンの話しかないじゃない。なによ、がぶりあすのめざめるぱわーとか言われても私にはわからないのよ？」

レミリアはフランを振り返って、腕を組む。その余裕のある態度からは想像もつかないが、凄まじくしようもないことを言っている。だがフランにも、反論の余地はあった。「妖怪……ウオッチだとしてるわ」

「ええ、そうね。この前映画に行ってきたわね。美鈴と一緒に。帰ってきたから、懸賞だかなんだか知らないけど、夜通しオリジナル妖怪のはがき描いていたのも知っているわ……あなたのつくった妖怪モケーレ・ムベンベが私に似ていたのも、ね」

レミリアはこめかみに手を当てて、はあと息を吐く。あまりにどうでもよい口論に咲夜と文は入ってこられない。しかし、当事者であるフランドール・スカーレットにとつては死活問題なのである。そう大切なものを守るためには小さなことに拘ってはいけない。例え、映画での懸賞の為に姉をモデルとした化け物を創作した冷酷さを彼女は持っているのだ。

「お姉さま」

きつとレミリアを睨み付けるフラン。彼女の鋭い眼光が吸血鬼の少女に向けられる。しかし当のレミリアは涼しい顔である。それでも、フランは彼女に「宣戦布告」した。

「勝負よ。お姉さまっ！ 私があの天狗のUSBを見つけることができたなら、そのアニメマックスの解約はしないで！ あとウオウオウとATXを契約して！」

「フラン……。家には見もしない有料チャンネルを二つも入れるような余裕はないのよ」

「咲夜も美鈴も働いているじゃない！ それに私がみるわ!!」

「そういうんじゃないわ……。でもそうね、これもいい機会だわ。これが勝負なら、フラン」

レミリアの口がゆっくりとひらく。赤い口に吸血鬼としての牙が光る。

「もしも見つけることができなかつたら、アニメマックスは解約するし、ゲームは禁止よ。そして今ある漫画もブックオンにもって行ってもらうわ。しばらくの間、パチエと一緒に活字本を読みながら、ティッシュにチラシを入れなさい」

フランの額に汗が浮かんだ。あまりに情け容赦のないレミリアの条件に戦慄を覚えたのだ。しかし、彼女とてここまでくれば引き下がることはできない。強く胸を張って、答えた。

「いいわ。お姉さま！ ねえ、その、天狗の」

文ははっと自分が呼ばれていることに気が付いた。彼女は片足をついて、愛用のデジタルカメラで黙って彼女達を写していたのだ。もちろんあとあと、新聞のネタにするためである。その横で咲夜が黙って立っている、少し眉がよつていいるのはその感情を表しているだろう。それはともかく、文はフランに反応した。初対面ではないが、特に親しいわけでもないから、名前を聞いているのだろうと思つたのだ。

「あ、はい。私は」

フランは返答を聞く前に、横にいる咲夜に眼をやつた。そしてつぶやく。

「アガサ……」

次に彼女はレミリアを見る。姉は冷ややかな目で見ている。

「ハイバラ……」

そして、もう一度文を見た。少し考えて、からいう。

「光彦ね……あとは、ゲンタだけど。居ないからしかたないわ」

「えっ？ ちょっとまってください。なんかひどいことを言われている気がするんですが」

文の言葉は無視して、よしとフランは頷く。彼女は麦藁帽を掴片手で掴んで、トレンチコートをもう片方の手で整える。レミリアはこの時、やつとフランが「探偵っぽい」恰

好をしていると気が付いた。わざわざ着替えてきたのかもしれない。ハンチング帽ではないのは、単純になかったからだろう。

「お姉さま！ 負けないからっ」

慈悲も何もない戦いが今幕を開ける。二人の吸血鬼の姉妹には、もはや骨肉の争いを避ける理由はない。この二人の戦いに、一人の鴉天狗は否応なしに巻き込まれていくのである。

文はバチバチと火花を散らす姉妹を見ながら、デジカメで撮った写真を確認している。そして、呟いた。

「まあ、私としては来てくれるのはありがたい話ですけどね……あのUSBには新聞に使えるネタがいっぱい入っていましたし……」

「そういえば、何が入っていたの？」

咲夜が画面をのぞき込みながら言った。文は特に気にすることなく、彼女に言う。顔はデジカメの画面を向いたままなので、無意識の行動なのかもしれない。

「ええっと、あの巫女の写真や……あと、最近で面白いのは、赤毛のメイドとか、ですかね」

「あかげの……めいど？」

咲夜はふむ、と考え込んだ。文は只々デジカメのデータの整理をしている。

6話

フランドール・スカーレットは数百年間外へ出ることがなかった。

暗い地下室に閉じこめられた少女。それが彼女だったのだ。それに自ら外へ出ようとしたことも、ほとんどなかった。外の世界に興味がなかったこともある。

それでも、少し前に幻想郷への紅魔館の移動に伴って起こった「異変」が彼女に僅かな変化を与えた。乗り込んできた巫女とただの魔法使いとの「弾幕ごっこ」を通じて、多量なりとも人と交わり持つきっかけになったのだ。

それでもフランは外へ出るようなことはしていない。紅魔館の中か、その敷地内で彼女が目撃される頻度が上がっただけである。それでも、数百年の間、引きこもっていたとすれば大きな変化だといって差し支えないだろう。

とあるパーティの時に、二匹のウサギに目撃されたという、噂もたつたこともあった。そのパーティは館の主人であるレミリア・スカーレットが「宇宙船」をお披露目したものであったが、その後の経緯もあり、レミリアもあまり語りたがらない。

それから、また少し時が進み。いきなり紅魔館の面々も「外」へ放りだされることとなった。強大な力を持つているはずの彼女達もそれには抗うことができず、ある意味で

厳しい現代社会に組み込まれることになった。使い魔達は何故かレミリア達にもわからないが、「外」へは出ていかなかった。幻想郷に残ったのかもしれないが確かめる術はない。

それでも、生活費的な意味と住居的な意味で十六夜 咲夜と紅美鈴の二人が中心になり、生活を立てなおした。単に労働できるのがその二人しかないこともある。紫の髪をした魔法使いは内職をすることで妥協した。

それでもフランは引きこもった。いや、住居のスペースが幻想郷よりもはるかに狭いアパートに移ったというのに、自らのスペースをつくりそこから出なくなつた。しかし、一日中なにもすることもない、生活でだんだんと金髪の少女は暗さを増していった。家にあるのは、通信情報機関紙や新聞や電話帳くらいしかないのです。部屋の隅で小さくなっているしかなかった。

そんな様子を見かねた者が一人いた。

「妹様。よ、よかつたら。これ……な、なんかおもしろいらしいですよ」

フランそういつたのは、幻想郷で門番をしていた女性だった。長く、赤い髪をした彼女がフランに手渡したのは、古ぼけた「ゲーム・ボーイ」だった。中古のゲームショップで買ってきたと門番は言う。お金のない生活でそれをしたのだから彼女は自分のことよりフランの為を思って、行動をしたのだろう。

だがくすんだ黄色いゲーム機は最初フランには理解できなかつた。そもそも目の前にいる「門番」自体、ほとんど話したことがない。名前は何だっただろうとフランは思う。

それでも門番はぎこちなく笑う。彼女もフランに対して様々な感情があるのだろう。それで変な笑い方と、変な顔になってしまった。それを見たフランはぱちぱちと瞬きをしてから、ぷつと吹き出してしまう。

「あ、あはは」

赤毛の女性も笑う。それで多少は緊張もほぐれたのだろうか、彼女は懐から裸のゲームソフトを取り出した。それは表面に金と赤の「鳥」の描かれたカセットである。ポケットモンスターとカセットの「鳥」が、ホウオウの絵柄だとフランが知るのももう少し先である。

「これをここにさして、こうして、使うらしいです」

門番はフランの手元にある、ゲームボーイにカセットを差し込んで、スイッチを押す。そのあたりの使い方も買ったときに聞いておいたのかもしれないほど、手際よく行う。しかし、ゲーム機はうんともすんともいわない。

「あ。あれ。お、おかしいな」

電池の入っていないゲーム機をもって慌てはじめる、門番。フランはその様子をじっ

と見ているだけで、何も言わない。そもそもゲームなどよくわからない。それよりも慌てふためいている目の前の女性の方が面白い。

門番はそれから試行錯誤を繰り返して、最終的に帰ってきたメイドに助けを求めてからようやくのことで、電池がないことにきがついた。いや、「電池」などという物の概念自体が希薄な彼女なので、何かを入れる必要があると理解したのだ。

「じゃ、じゃあ私はデンチイを買ってきますー！」

門番は変な発音を発しながら立ち上がった。フランはその動きを眼で追う。しかし、門番がフランに背を向けていそいそと出ていこうとすることに、何故か無性に寂しくなった。

「私も行く」

「えっ?」

門番は振り向く。フランは立ち上がる。メイドは驚く。

フランは門番に向かってもう一度言った。その手には黄色いぼろぼろのゲーム機がある。電池の入っていない、不完全なそれを彼女は大切そうに胸に抱く。

「デンチイを買いに行く」

まるでマスコットキャラに対するかのような発音で、彼女は言う。赤毛の女性はメイドとフランを交互に見ながら、汗を流した。どうすればいいのか、迷っているのだろう。

あくまでフランは主人の妹なのだ。

そこでメイド、十六夜 咲夜は言った。

「もう、日は暮れているわ。それに近くのコンビニまでなら、大丈夫でしょう?」

その一言で、全てが決まった。

夜風がフランの髪を揺らす。かんかんと階段を降りる音が耳に響く。

目の前には背の高い、赤い髪をした名を知らぬ門番。どこか緊張した歩き方に小さく笑いそうになる。フランは目線を上げて、空を見る。暗い夜空に星はない。それでも電燈があたりを照らしてくれる。

アパートの敷地から出て見える、大きな赤い箱。門番は「ジドウハンバイキ」と言つたが、それがなんのことか、フランにはわからない。だから立ち止まって彼女はそれを見つくりと見てみた。缶のジュースが入っていることはわかる。流石にそれを飲んだことはあるが、こんな箱に入っているとはフランは知らなかった。

門番はポケットからがま口を取り出して、そこから百円玉を二枚取り出す。それでも多少苦渋の表情をしたので、それが彼女の財布事情を物語っているだろう。それでも門番は自動販売機にお金を入れて、できるだけ甘くて炭酸の強い物のボタンを押した。

「ごごと」と音を鳴らして、ジュースの缶が取り出し口に出てくる。門番は、それを取

り出してフランに手渡そうとした。だがはつと気が付いて、一応膝をついてそれをする。敬意を払ったつもりなのだろうが、フランと「目線」を合わせた格好になる。

フランは門番から、ジュースをもらう。赤い缶にロゴの入ったそれをかりかりと指で開けようとする。しかし、片手にゲーム機を持っていてが開けにくい。だから門番がジュースを持ってあげる。それでフランは「開ける」だけでよくなった。

開けた時にぷしゅと音が鳴ったのは、飲み物が炭酸だからだろう。フランはジュースを持って、開け口で鼻をくんくんと動かす。それからぐつと飲む。喉を刺激する炭酸に彼女は目を開く。

「げほげほ」

フランは咳き込んでから、口元についたジュースを舌で舐める。その様子を門番はあわあわと慌てながら見ている。フランは、そこで思った。

「あなた。名前はなんていうんだっけ？」

「えっ？ な、名前？ えつと紅美鈴です……そ、それがなにか」

「めいりん。めーりん、美鈴ね……うん、わかった」

フランはもう一度ジュースを飲む。きつい炭酸を一気に飲み干して。美鈴の前で、ぷはと口を缶から離す。フランは口元を袖で拭いて、缶を美鈴に返す。

「おいしかったわ」

「えっ、あっはい」

不器用なコミユニケーション。フランは美鈴の前で、彼女が買ってくれたものを全て飲んでしまい、その「感謝」を伝えたかった。しかし、妖怪とも人とも交わりに慣れていないフランの表現は、わかりづらい。

それでも、美鈴は缶を受け取って。笑顔になる。それにつられて、フランも笑いそうになったが、それよりも「げつぶ」が出そうになって、あわてて片手で口を押える。んぐと口の中でそれをフランは抑え込んだ。

コンビニから単三電池を四本入りで買ってきた二人は、メイドが台所でなにかを調理している音を聞きながら、ゲーム機に電池を入れていた。一度目は「向き」が分からず、に失敗した。もちろん二人には原因がなにかわからない。

レミリアはパジャマのままホットミルクを飲みつつ、ソファで新聞を読んでいる。髪が濡れているので風呂上りなのだろう。だが、その眼は紙面にそそがれているようにでちらちらと妹を見ている。何故か美鈴と仲良さげにしているのにも、多少疑問を覚える。

フランと美鈴はそんな姉の視線には気が付かずに、何度か電池を入れなおしてみる。そして、何度目かに偶然電池の向きが正しく入れることができたの。だから、フランが

電源を入れた瞬間に画面が光った。

「ひ、光ったー」とフラン。

「お、おとお」と驚く美鈴。

ピコーンと音がして、開発会社のロゴが画面に映る。それでフランは嬉しくなって、ほおが紅くなるくらいに笑顔を作って美鈴を見る。赤毛の彼女もつられて笑うがまだ、ぎこちない。

その日からフランはゲームをやり始めた。美鈴が買ってきてくれた「ポケットモンスター金」に夢中になったのだ。ゲームとしては古いものだが、そんなものに触れたこともないフランにはたまらないほどに新鮮だった。

冒険の旅にでる、少年をフランはゲームの中で演じる。彼はいろんな町に行つて。森に、湖に、洞窟にとあらゆる場所に行つた。だが、時には不慣れからくるミスで全滅することもあつた。

その時フランは涙目でゲーム機を破壊しそうになつたが、ぱつと美鈴の顔が頭に浮かんで思いとどまつた。それも一つの成長なのかもしれない。能力の減退がなければ、もつと衝動的に破壊していたかもしれないが。

とにもかくにも、フランはゲームをやり続けた。ポケモンの名前を憶え、仕事から帰つてきた美鈴に話を聞いてもらうことも日々の楽しみになつていた。

フランがゲーム内で「チャンピオン」を倒して、殿堂入りを果たすと、彼女は飛び跳ねて喜んだ。それには美鈴もともに喜んでくれた。

しかし、ある日フランの世界をひっくり返す事態が現出する。

それはなんとはなしにフランが姉の購読している、新聞を手にとってテレビ欄を覗いてみたことから、それは発覚した。七時くらいに「ポケモン」の文字があったことを、この少女は気が付いたのだ。

「……」

幻想郷からフランがこちらにきて、一番驚いたことがコレであった。フランはその日の七時になるまで、そわそわしていつものレベル上げも手が付かず、四時間しかできなかった。彼女は午後六時を回ったくらいから、テレビの前に張り付いて待ち続ける。

フランは傍らにコケコーラとポテトウチップスにゲームボーイ。と完璧な布陣でテレビのチャンネルをリモコンで変える、それは「アニメ」が始めるまで、手持無沙汰を慰めるためにせわしなくチャンネルを変える。

そして七時になり、画面にピカチュウが映る。フランは何故か体操座りをして、画面を食い入るように見た。他のアニメは何度か見ていたが、心臓がドキドキするくらいに楽しみだった。

アニメの主人公はゲームの主人公とは違い「さとし」とかいう名前らしいと、フラン

は知った。だが、そんなことよりも、彼女はすさまじい衝撃を受けた。

『いけえヒノヤコマ！君に決めた!!』

画面の中のさとしがモンスターボールを投げてポケモンを出す。そこまでは当たり前。前の光景であるが、フランは眼を見開いた。

「ひ、ひのやこま???」

画面には雀のようなポケモンが映っている。無論「金」しかやったことのない、フランはそのポケモンを知らない。フランは思わず、ポテトウチップスを驚掴みにしてぼりぼりと食べる。それからコケコーラで流し込む。

ほふうとだらしなく顔を緩ませるフラン。美味しいらしい。

それでもアニメは続いた。その中でケロマツだとかガブリアスだとか、見たことも聞いたこと見ないモンスターが現れては消える。いや、今日のお話は「ジムリーダー戦」らしいが、そのジムリーダーをフランは見たことがない。

「……ど、どういうことなの?」

フランは疑問に積み重なっていく。そもそも、この舞台の地方は「カロス地方」とかいうらしい。それも訳が分からない。しかし、アニメはフランの疑問に答えてくれることはなく、EDに入った。

フランはその日の疑問を仕事から帰ってきた美鈴に聞いた。彼女は少し考えて、フランに言った。それが自らの不運を招くとは知らないから、美鈴は素直に答える。

「もしかしたら、新しいやつかもしれないね」

「えっ？ 今持っているのに続きがあるの？」

「ま、まあ、中古で、買ったものですし……それが」

「ほしい！」

「えっ？」

「めーりん！ それがほしいわー！」

「ええっいい、いや。あのそれは、その、ゲーム機が、ちがいます、から」

「ほしいい、ほしい、ほしい、ほしい、ほしいい」

フランはカーペットの上をゴロゴロと転がり始める。幻想郷であれば、部屋ごと破壊するかもしれないが、今は転がることはしかできはしない。しかし、目の前で転がりまわられて美鈴は冷や汗を流した。彼女は自分のがま口を取りだして中身を見る。

中には千円札が何枚かしか入っていない。新しいゲームを買おうと思えば明らかに足りはしないのだ。そもそも「がま口」などという財布を持っているのは、別に美鈴の趣味でも何でもない。単にあつたから、使っているだけである。そこから彼女がお金をあまり使えないことがわかる。

要するに美鈴に新品のゲーム機もゲームも買える余裕などないのだ。がま口に入っているのは生活費であり、勝手に使えるお金ですらない。しかし、フランは子供のよう
に駄々をこねて頼み込んだ。

「ほしー、ほしー！」

フランは美鈴に縋り付く。フランは少女としての姿をしているが、理性的に話すこともできる。このように美鈴に対して「甘える」のは一種の信頼の証なのだろう。

美鈴も最近、かなり明るくなり、ゲームばかりしているとはいえ、積極的に話をしようともしているその少女の頼みごとを何としてでも聞いてあげたくなつた。とはいつても全体の財政を握っているメイドに頼んだところで望みは薄い。殴られる可能性すらある。

美鈴は腕を組んで、ぐむむと考え込んだ。あまり、考えることなどない彼女だが、ここに至っては考えるしかない。そして閃いた。

「わかりました、妹様。一か月待つてくだされば、絶対買つてきます！」

「ほ、ほんと!？」

美鈴はドンと胸を叩く。フランは飛び跳ねて喜んだ。その感情のまま美鈴の背中から抱き付いたので、まるでおんぶしているかのようになる。

美鈴はそんな我儘とはいえ、可愛らしい少女ににこつと笑いかける。

一月後、美鈴は新品の4DSとポケモンのソフトを買ってきた。それにフランはまるで、盆と正月が一緒にきたかのように喜んだ。花のような笑顔をつくり、新しいゲーム機を持ったまま、その場でくるくると回る。そして美鈴に向かっていった。

「ありがとう、美鈴！」

「い、いやあ、あ、あはは」

美鈴は頭を掻いて、照れ笑いをする。しかし、これは序章でしかなかった。

フランは毎日ゲームに没頭した。それだけでなく、朝早くに起きてテレビの「オツハスタ」を見始め、最新のゲームからアニメ・漫画のコンテンツまで知るようになったのだ。無論美鈴からもらったゲームは毎日やっている。

そのせいでフランはあまり頻繁ではないが、たまに衝動的に駄々をこねることになる。

「妖怪ウオッチがほしいいい」

「駄目よフラン。今あるもので我慢しなさい！」

フランの様子に、レミリアはよく注意したが、見かねた美鈴がゲームや雑誌を買い与えたので、意味はなかった。完全に甘やかしている。そしてフランの趣向はエスカレートしていくことになる――

これがフランドール・スカーレットの最近の動向であつた。

7 話

フランは汗をかいていた。トレンチコートに手袋をして、それに日傘をさしてもらっている。複雑な表情で日傘をさしているのは射命丸文である。いくら自らの保身のために、フランの同行を了承したとはいえ、まるで従者のようなことをするとは思わなかった。

空には夏の太陽が燦々と照り付けている。無論であるが吸血鬼の天敵である。

吸血鬼は太陽の光を浴びると灰になる。それはレミアアやフランとて、変わることはない最大の弱点である。しかし、フランの姉、レミアもそうだが、直射日光を浴びなければ彼女達は「灰」になることはない。付け加えると、日に当たったからと言って瞬間的に蒸発するわけではないので「昼に行動する」こと自体は、フランにも問題ない。

それでも、凄まじいほどに厚着をしてフランは外へ出たのだ。彼女はカフェから麦わら帽子を深くかぶっている。それに加えて先に書いた通りの服装である。確かに「灰」にはならないが、熱中症になりそうな恰好であった。ちなみにその対策だろう、フランは首から水筒を下げていた、

文とフランの二人は、これから三つの訪問先に向かうために、とある駅のプラット

フォームにいる。それは何時も文が出勤するときを使う駅である。普段、文は切符など買わずに電子マネーで会計するが、フランの為に切符を買った。久しぶりに買ったので、値段を間違えて高めに払ってしまったことを除けば、フランも電車内で一息つけるだろう。

遠くから蝉の声が聞こえる。終わりに向かう夏を表すかのように、一際激しい声で鳴っているように、文は聞こえた。

文は遠くの景色をゆがませる陽炎を見ながら、夏のことを思う。毎年の幻想郷での夏とは違い、今年はいろんなことを知った夏であった。その中の一つを彼女は思う。

「……そういえば、コーシエンとかいうのも、もうすぐ終わりなんですわね」

「……ぜえ、ぜえ。お姉さまは、とーいん？ が勝つとか言ってたわ。お姉さまは毎日、あのよくわからない玉たたきをテレビで見てるから……ゲームできなくて、ほんと、うっと……」

フランはそこで言葉をいったん区切り。喉のまで出かかった言葉を飲み込み。そして、「コーシエン」に関係のある言葉を頭の中で探して言った。誤魔化している。

「わたしは、ぱわぶろしか知らないし……」

フランは文の理解できない単語を口にした。文は「ぱわぶろ」とは一体何なのかを考えたが、わからない。聞いたことがあるような気もするし、ない気もする。それにフラ

ンもそれを詳しく知っているわけではないから、話は続かなかつた。

しかし、そういうしているうちに、プラットフォームに電車が入ってきた。

電車の椅子に座つて、フランはごきゆごきゆと「ジバニヤン」が表面に書かれた水筒を飲んだ。口を付けて飲むからだろう、少し麦茶の滴が口元から流れる。フランは水筒をおろして、それから取り出したハンカチで両手を使い、存外にも口元を上品に拭く。

ただし、そのハンカチには丸っこい顔にくりつたした眼をして、さらに頭には大きなピンク色の帽子をかぶっているトナカイのイラストが描かれていた。その帽子には「X」のマークが大きく書かれている。端的にいうと子供っぽい。

夏の昼間の電車は空いていた。フランと文は隣り合つて座り、何を話すわけでもない。社交的な射命丸と非社交的なフランの組み合わせも珍しいかもしれないが、少なくともお互いに共通する話題がすくないことは双方ともに自覚している。

ごとごとと電車がゆれる。外は快晴。明るい景色が、電車の窓の外を流れていく。それでいながらも、涼しい車内では、言いようのない心地よさがある。それも外との気候的なギャップからくるものかもしれない。

文はなんとなく、話す。

「いい天気ですねえ。こんな日に空を飛ぶと気持ちいいんですけどね。今は、無理ですけど」

文が窓越しに空を見ると、巨大あな入道雲が眼に入る。蒼穹に浮かぶ白い雲の塔。文はうずうずとしてしまう。ここが幻想郷であれば、間違いなく空へ「散歩」に出かけているだろう。

その様子をフランはじっと見ていた。美鈴との時もそうだったが、彼女は相手の「挙動」を見る。たまにしか誰かと交わることがないからか、珍しいのだろう。

「ねえ」

「ん？ なんですか」

「あなた……名前はなんていったかしら」

「光彦ですよ」

文は根に持っていることを口にしたが、フランが「みつひこね」と信じはじめていたから、慌てて訂正する。

「あ、あやや。すみません。私は伝統の幻想ブン屋、射命丸文と申します」

「へえ、ブンヤシヤメイマル アヤね。変な名前、じゃあブンでいいかしら？」

「ち、違います。くつつけないでください！ 射命丸 文です」

フランは文がさらに訂正する姿をきよんとしてみている。それからくすりとした。それから「アヤね。わかった」とつぶやく。その姿に文はあ、と息を吐いた。危うくペツトみたいな名前を付けられるところであった。しかも「ブン」は「文」で表せる。

文は、入り口の上にある停止駅の案内を見た。目的の駅まではまだ、少しある。時間によれば15分程度かかるだろう。彼女はどうせならばと、フランに話かけた。

文は手にはメモ帳とペンを持つ、それは取材の恰好である。姉の方には会う機会は多いが、フランと会えることは少ない。この場所で情報をもらっておこうと考えるのは、新聞記者としての職業病である。

「そういうえば、普段は何をされているんですか？」

「……？ ゲーム」

「ははあ。なるほど。どんなものをされているのですか？」

「ポケモンとか……」

「なるほど、なるほど」

文はメモ帳に書き込んでいく。フランはそれを見ながら、ふと思ったことを言った。いや、どうしても文にやつてもらいたいことができただ。

「ピカチュウを描いて！」

「えっ!？」

フランがきらきらした目をし始める。文は目線を外して言う。

「え、えーと。そ、そうですね。いや。一応これは取材用のメモ帳なので」

「じゃあヒトカゲでいいわ」

「い、いやキャラの問題では無いですね」

「描いて！ 描いてくれないなら、USBを見つけても返さない！」

「……………」

文は渋い顔で、メモ帳に絵を描き始める。ページ上部にふざけているのか、本気かはわからないが「極秘」と書かれている。しかし、そのページの下部に文のペンによって生まれた「ピカチュウ」によって、どう見てもふざけているようにしか見えなくなった。黄色いネズミは丸っこい体にデフォルメされた可愛らしい眼をしている。それをみてフランは言う。

「う、うまいじゃない」

「そ、そうですかね」

「じゃあ、次はね——」

フランは文がメモ帳にキャラクターを描くたびに、次の注文を付ける。そして、文のメモ帳は「キャラクター帳」へと変わっていくのだ。たまに文もわからないキャラクターをフランが注文することはあるが、そこは文明の利器である文の「スマートフォン」で画像を検索して、描いてもらった。

時間はあるから、文は何体ものイラストを描いていく。最初はいやいやだったが、描けば描いた分だけフランが無邪気に喜ぶので、そのうちに楽しくなってきた。天狗は幾

分、気分屋でもあるのだ。

「むむむ。それは難しいですね」

「これはルギアっていうのよ」

フランが文のスマートフォンで調べた画像を指で示す。それを文が覗き込む。

一つの画面をフランと文は仲良く、見ている。そんな構図は幻想郷ではありえたのか、それはわからないが今この場にはあつた。

それから、4, 5ページ分のイラストを描き終つてから文は顔を上げた。

「え、駅を通り過ぎていきます！

彼女達は降りるべきの駅、その次の駅で下車した。その時に、文はメモ帳をばらばらと見て。思わず笑つてしまった。

『ラブ！ 恋をして』

画面に映つたその少女は、大声で愛を歌つた。彼女は肩口の大きく開いたドレスを着ている。スカートも丈が短い、足にはニーソックスを穿いているので、彼女の肌はスカートとニーソックスのわずかな隙間からしか見えない。

画面はどこかのライブ会場である。最前列に「YOU MU」というプラカードを持つ

た男性が大勢いて、彼らは片手に光る棒のようなものを持つている。そして、それとは対照的にステージ上のアイドルは片手に光る刀を持つている。

甘い、甘い歌詞の唄が画面から流れる。画面上の銀髪の女の子は「ワァーオ」とノリノリで歌っている。マイクを片手に、天を向いて声を張り上げている。最近では、アイドルといえども「ロパク」という手法でライブを乗り越えることがあるが、武術家である彼女はそんな卑怯なことはせずに、真向から歌っていた。

そんな情熱的な姿に、観客の熱も一層上がっていくことが、デジタルな画面からもわかる。

そんな映像が流れるテレビの前で魂魄妖夢は刀を研いでいた。場所は事務所の控え室である。ガムテープで補修されたソファァーが置いてる以外はいたって普通の部屋で、壁に妖夢のもう一振りの刀が立てかけられているくらいだ。

妖夢は研ぎ石で自慢の愛刀を「ザツザツザツ」と研いでいる。眼には大量の涙をためて、口を引き結んだまま、手を動かす。耳は画面から流れてくる音を聞いている。彼女は一旦、刀を持ち上げてその刀身に自らの顔を映す。眼が赤いのは血走っているのか、単に涙目だからだろうか。画面の少女が歌うたびに、死にたくなる。

『み、みんな。ありがとうございます……い……います……』

「これならよく切れそうね……」

画面の中の少女が観客にお礼を言っている時に、妖夢は刀の研ぎ具合を眼を皿にして確認する。いずれ、鴉をおろすために今の内から準備しておかなければならないと彼女は思っているのだ。昨日は失敗したが、今度こそは仕留めなければならぬ。

「ああ、今日はこないかしら？」

まるで恋する乙女のようなことを言う妖夢だが、現状の彼女はそんなに可愛い思想は持ち合わせていない。自らをこのような場所へ送り込んだ「お礼」をその身に刻んでやらなければ気が済みそうにないのである。しかも当初の目的である主さがしが遅々として進まない苛立ちもある。

妖夢の後ろで電話がなった。妖夢は刀を持ったまま、立ち上がり電話に出る。もちろん外からの電話ではない、事務所内の人間からの内線電話である。

「はい。私です」

『あつ妖夢さん。今射命丸さんが、探し物があるとかで来られているのでちよつと通してもいいですか』

「はい。」

嬉しそうに電話にこたえる妖夢の右手には研ぎ澄まされた刀が握られているのだ。まさか電話口に相手も、刀を握った状態の彼女と電話しているとは思わないだろう。しかし、妖夢は文が訪ねてきてくれたことがとても嬉しかった。なますにしてやる、と思

う。

そんな妖夢は数分後苦虫を噛みつぶしたような顔で文と対面していた。「斬る標的」が「斬れない理由」を持つてきたのだから、彼女の心中黒いものが渦巻いている。そう、その「二人」は修繕したソファアに座っている。妖夢は別から持つてきた椅子に座っている。

「いやあ、すみませんね。実はなくしものをしてしまいました」

「……」

文は手短かに妖夢へUSBを失くしたことを告げて、それがこの部屋ではないのかとも言った。妖夢はそんなことはどうでもいいいうえにUSBなど見ていない。文も彼女の様子からなさそうだと感づいたが、とりあえずあたりを見回した。逆に妖夢の眼は一点に注がれている。

妖夢は文の横にいる金髪の少女を見ている。

フランがストローで出されたオレンジジュースを飲んでいる。何故かこんな夏の日に厚着をしている少女を妖夢は、不思議に思う。フランのことを吸血鬼の妹らしいくらいしか、妖夢は知らないが、少なくとも子供のような彼女の前でスプラッターなことをするわけにはいかない。

「ねえ。文。こいつが容疑者なの？」

「へ？ ああ、そうですよ」

妖夢の目の前で文とフランが会話する。失礼なことを言われていることは妖夢にもわかるが、今はどうにもできない。只々、鴉天狗への敵愾心に燃える心を抑えることに必死だった。しかし、文は煽る。

「そういえばこのごろは、アイドル活動も好調の様子ですねー」

文はにっこりと言う。

「ありがとう。オカゲサマヨ」

妖夢は引きつった笑顔で返す。微妙に皮肉を織り交ぜているが、文は「それほど」とわざとらしく照れるので、妖夢はお腹が痛くなってきた。しかし、ズズズとオレンジジュースを飲んでいるフランの手前、何もできない。

これこそが永い時を生き抜く鴉天狗の知恵である。たかが半分生きて、死んでいる人間の魂魄妖夢の直線的な行動原理では、文には敵わないのである。

文はしゃがんで床にUSBが落ちていないか探しながら言う。

「ここで、誰かさんが暴れましたからねー。奥の方に落としてしまったかもしれません」
「……………」

ぎぎぎと妖夢は唇を噛む。文はちらと妖夢を見てから、もう一度ちらと見る。その行

動に何の意味があるのかはわからない。嫌がらせのようにも見えるが、手にはいつの間にかデジカメを掴んでいるから、単にシャッターチャンスをうかがっているのかもしれない。

ここまでは完全に天狗の勝利とわかっていい。しかし、どんなに緻密な計略であろうとも一点の綻びから破たんすることはある。そもそも勝負とは最後に笑った方の勝ちなのだ。

「トイレ」

フランは立ち上がった、部屋から出ていく。目的は手短かに告げている。文も妖夢もぼかんと口を開けて、彼女を見送った。しかし、妖夢はそれからぱあど笑顔を作って刀を抜く。長い刀身を狭い空間で抜く、その妖夢の技量は優雅ですらある。

「じゃあ、覚悟はいいわね？」

ニコニコして刀を構える妖夢。文は思わぬ方向から訪れた危機に冷や汗を流す。まさか、フランドールがこのような行動に出るとは思わなかったのだ、これでは本当に連れてきた意味自体ない。そもそもフランとレミリアの喧嘩は文には一片の関係もないから、フランを連れてくる必要性は保身だけなのだ。

だが、それでも文は斬られたくはない。彼女は妖夢を刺激しないようにゆつくりと立ちあがった。まるで獣を相手にしている時の対処法のようなのである。そして文は「打開

策」を考えて、実行する。失敗すれば死ぬことが聡明な彼女の頭脳をフル回転させた。

くるりと妖夢に向き直った文の顔には余裕があつた。演技だろうか、それとも自然に
だろうか、わずかに顎を上げているので妖夢を見下しているようにも見える。だが、何
故かそこには迫力がある。

「やれやれ。まったく。人間風情が私に勝てると思つているんですか？」

いきなり挑発を行う文。しかし、真面目な妖夢はその言葉に激昂してとびかかるので
はなく、むつとして文を睨み付ける。それすらも術中だとは気が付かない。文が恐れて
いるのはいきなり斬られることである。睨み付けられている間は、妖夢は「止まってい
る」のだ。

正確にいうと妖夢は人間ではなく半人半霊であるが、そんなことは文には些末なこと
でしかない。

文はポケットに手を入れる。そして今まで隠していた「切り札」を取り出した。白い
一枚の紙である。彼女はそれを妖夢に見せつけた。妖夢はそれに驚愕する。

「ま、まさか。それは」

一枚の紙切れ。それを妖夢は恐れた。いや、正確に言えば紙切れではなく、この目の

前にいる天狗を恐れた。まさかと今度は妖夢が冷や汗を流す。

「これが何かわかったようですね。そう、スペルカードですよ」

「なっ……！」

妖夢は文の言葉に身構えた。そして距離を取ろうと後ろへ下がる。そして刀を鞘に納め、居合の構えを取る。しかし、その表情は驚愕に青ざめていた。まさか、現代でスペルカードを使える者がいるとは思わなかったのだ。

スペルカードとは厳密に言えば単なる「お札」である。幻想郷での弾幕ごっこをする時に使う、力も何もない紙に過ぎない。しかし、それはそれを使う者が「力を行使する」前に提示するものでもある。

そして文は幻想郷でも強者の部類に入る妖怪であった。もしも本当に彼女が幻想郷上での力をその十分の一でも使えるのなら、妖夢とて勝てるかはわからない。だからこそ、緊張して構えるのだ。

だが、文は妖夢が下がった一瞬を見極めると、ゆっくりと入り口に近づいて妖夢に背を向ける。一瞬「ドやあ」という顔をしたが、すぐにドアを開けて出ていった。帰ってきたのだろう、部屋の前にいたフランは何が起こったのかわからないまま、文に連れられていく。

後に残ったのは居合の構えのまま、ぽかんと口を開けた魂魄妖夢とひらひらと舞い落ちる、一枚の「スペルカード」だけだった。文が逃げ出すときに落としかしたのか、それともわざと残していったのか。それは妖夢にはわからないが、彼女の前に力なくその紙は落ちた。

妖夢は自らの構えを解き、目の前に落ちた「スペルカード」を拾い上げてみた。

——缶コーヒー OYABUN 108円

妖夢は手に持った「レシート」を千切り、凄まじいほどに苦渋に滲んだ顔になった。まんまと鴉天狗の策略に乗せられてしまったのだ。しかし、このことが後に文を苦しませることになる——

8話

白髪の危険人物から逃れた文はフランを連れて、「マックロナルド」というファーストフード店に入った。それは、単純に昼食をとるためである。道化師の人形が置かれた入り口から文とフランは店内に入る。

無論のことだが、お金を出すのは文である。一応フランも使い古されたがま口を持っているが、中にはスーパーのゲームコーナーで使うメダルしか入っていない。いや、正確にいうのなら、包みに入った飴玉くらいなら入っている。

ゲームコーナーで何度もコンテンツニューはできるが、それ以外にフランは財力を持つてはいなかった。ゆえに文が全額負担になる。仮に後でメイドや姉の吸血鬼に請求したとしても返ってくるかは五分五分であった。

そこで文はあの半分幽霊を駆使して、昼のご飯を考えた。安さだけならばピカイチといていいここをチョイスしたのはそのためである。しかし、フランのことないがしろにしたわけでは決していない。

子供は基本的にわかりやすい味が好きである。だからこそ、お菓子やジュースなど甘味は子供に人気なわけではあるが。このようなファーストフード店で売られている「ハ

ンバーガー」なども濃い味付けも相まって、子供舌には堪らない。ただし安い。

文はそんな策略を練りながら、夏休みの子供達でござったがえす店内を歩き、カウンターまでフランを連れていく。

「いらつしやいませー!」

ニコツと笑つて赤い白地に「M」のマークのシャツを着た店員が言う。その頭にはパイザーを被つていて、緑の髪がちよつとだけ見える。しかし、輝くような笑顔と「山彦」のような明るい声が印象的だった。

文はカウンターに置かれたメニユーをフランに見せて、店員とは違う黒い笑顔で言う。

「ふふふ、どれを選んでもいいんですよー」

優しくフランに言う鴉天狗だが、その言葉とは裏腹に伶俐な金勘定を脳内で行つていなのだ。フランは年齢的にいえば、子供ではないのだが、精神年齢は姉と同じく子供といつていい。だからこそ安価で文句を言われにくいここに連れてきた。

フランはその紅い眼を動かして、カウンターのメニユーを見る。このようなところはあまり来ない彼女だが、その眼は好奇心で輝いている。しかし、それが一層強くなつた時に文は地獄を見ることになる。

フランは文を振り向いて言う。

「ほ、本当になんでもいいのね」

「ええ、いいですよ。あつても、アイスとかは一つまでですよ。それ以外なら、どれだけでも」

文はフランがそこまで食べないだろうと考えて発言しつつ、それでいてスイーツからの攻撃を封殺した。だがしかし、そんなことはフランにはどうでもいいのだ。

「ほかなら、ど、どれだけでもいいの?」

「ええ、大丈夫ですよ」

鴉天狗は言うが、フランはその邪悪な考えに気が付かない。いや、別に気が付かなくてもよいのかもしれないのだ。彼女の願いはただ一つである。それを大きな声で言った。

「じゃあ。ハッピーセッツを六個!!」

「えっええ?」

文は驚愕した。全く想定していなかった現象が起こり、目の前でフランは店員へ注文を済ましてしまう。ハッピーセッツは一つ一人用なので、フランは文を振り向いて、言う。

「アヤ。ほっとけーきとかちーずばーがーとか選べるけど、どれがいいの?」

フランは一応文にも選択権を与える。ハッピーセッツは別に決まったメニューでは

ない。基本のメニューにサイドメニューを付加する形なのだ。それを文に選ばせてやろうという、フランの優しさだった。地獄への道くらいは自分で選ぶべきかもしれない。

最近の、ハッピーセットのおまけは「妖怪ウオッチ」のカードである。これを完全に文は見誤った。だが、フランは見逃すような少女ではない。ハッピーセットのおまけを見た瞬間くどいほど文に確認を取ったのはこのためなのだ。

フランの願いはカードのコンプリートでしかない。お腹が減っているが、それは二の次である。そしておまけのカードは全六種。必然的に頼むべきセット数は六セット。計2,500円以上とはいえお得価格である。昼ごはんの値段としては多少割高ではある。

「ちよつ、ちよつとまってください。ど、どう考えても食べきれないですよ」
「たべるわ！ それに二人いればなんとか、できる」

フランはきらきらと期待に光る眼で言う。確かに二人で食べれば消化しきれるかもしれない。しかし、千円札が3枚ほどかかった文はなおも食い下がろうとするが、そこにフランへの援軍が現れた。

「ハッピーセット六個ですね！ アリガトーございまーす!!」

緑の髪の店員がすばやく注文を確定させる。文ははっと店員を見る。よくよく見る

と、この店員どこかで見たことがある気がする。その店員はフランを見て、にっこり笑った。

大量のポテトの山を文は一本一本口に運んでいく。黙々と無表情で「豪華な昼食」を食べているのだ。そしてフランはその前で、6枚のカードを手にもつてにやにやしている。実は、カードをもらえるところでも指定でもらえるわけではない。つまりランダムなのだが、フランはたとえ所謂「ダブった」としても、うふふと笑う。

それでもフランは子供らしくカードをポケットに無造作に入れると、チーズバーガーにかぶりつく。血を吸う吸血鬼の牙がケチャップで赤く染まり、肉を食いちぎる。

そんな形で、はむはむとたべるフランを文は見ている。小銭で重くなつた財布が懐にあるが、フランに請求したところでスーパリーのメダルコーナーで遊ぶためのメダルしか出ては来ないだろう。文はそう諦めて、六本あるジュースの一つを飲む。コーヒーなどという、苦いものはない。

「それはそうと、手がかりは見つきりませんでしたね」

ひとりごちるように文は言う。妖夢の場所でしたのは、あの半人半霊の少女がまず間違ひなく、鴉天狗を叩き斬ろうとしていることへの事実確認だけだった。文は妖夢の行動が理解できずに、首をふる。なぜ自分に切りかかってくるのだろうか、意味が分から

ない。

フランはそんな文を見ながら、もぐもぐと口の中の物を咀嚼してから、ごくりと飲み込んだ。食べ終わるまで話さないのは、姉の躰けの為か、貴族としての嗜みかはわからない。しかし、全てを飲み込んだ彼女は言う。

「そんなことはないわ。ありばいを聞き込みで確認したから！ それに証拠も掴んだわ」

「アリバイ？ それに証拠？」

文はふむと考える。彼女があそこへ行ったのは落としてものがないか探しているだけで、いるかどうかともわからない犯人捜しではない。強いて言うならば、文自身が犯人なのかもしれない。

それでもフランは「アリバイ」を確認したという。謎の行動だが、文は面白そうなので、聞くことにした。

「なるほど。聞き込み調査をされたのですね。そして、その首尾は？」

「あの白髪は……犯人かもしれないわ」

「そ、そうなんですか!! 魂魄さんがUSBを盗んだ犯人——」

「そう。あいつが殺人犯の可能性が高いわ」

「えっ!? ……そ、そんな重大なことが。そ、それこそスクープなんですけど??」

フランは文の驚く、顔を見てからふふんと鼻を鳴らす。そして食事中でも脱がないトレンチコートの内ポケットから、一冊の冊子を取り出して見せた。そこには「斬るノート」と書かれている。

文はそのノートを開いてみる。

——斬るべきもの

- ①・作詞をした者
- ②・作曲をした者
- ③・鴉天狗（最重要）
- ④・衣装担当の者

そのノートには恨みつらみが書かれている。たまに涙の跡のようなものが合ったりするが、文はノートの面白そうな箇所をデジカメで写してから、フランに聞く。たしかにこれは殺人犯としての証拠になるかもしれない。誰も殺してなくても、妖夢は殺人犯である証拠が出てきた。

「ハ、ハこれをどうして……」

フランは、にやりと笑って。話を始めた。少し得意げである。

——天狗と半分幽霊の死闘が繰り広げられているころ、フランは緊張していた。

フランは麦わら帽子を深くかぶって、壁に背を付け、ごくりと息をのむ。実は彼女は「トイレ」と言つて部屋を出た事自体がとある目的を持つてのことだった。その目的はただ一つ、聞き込みである。

探偵としての基本はよく現場を見て、よく関係者の話を聞くことである。そしてそれは、容疑者に感づかれてはならないのだ。この場合、白髪の少女に隠れて行わなければならぬとフランは思っていた。だからこそ天狗にも嘘をついて部屋を出た。

そのせいで天狗が命の危機に瀕しているなどは流石に想像はできない。

フランは事務所で務めている者たちの声が聞こえる部屋の前にいる。壁に背中を預けているのは、緊張していると同時に警戒しているからである。これから部屋の中にいる人間達に聞き込みを行うつもりだったが、普段から一部の者たちとしか話そうとしない彼女だから、どうしても部屋に入ることができない。

部屋の中からは何人の声が聞こえる。女性の声も聞こえるし、男性の声も聞こえる。事務所の人間だろう。つまりはスタッフの部屋である。フランはそんなことは知らない。

いが、人が大勢いることはわかる。

しかし、彼女は意を決して、ドアを開けた。人にものを聞くときの第一声はよくわかってる。

「あ、あれれー」

上ずった声でフランはドアを開けた。とあるアニメで手に入れた「話しかけかた」を実践しつつ、彼女は部屋の中に入る。中はデスクの並んだ、簡素なオフィスでそこにいた数人の人間が、いきなり入ってきたフランを見つめていた。その表情は驚いているか、呆然としているかである。

「あなたは、たしか文の連れてきた……名前は、なんと叫ぶたかな」

そのうちの一人は、白い髪をして髪型が犬耳のようになってる女性だった。そして何故か彼女は、どこかの巫女のように作業服を着ていた。そして手にはこれまた何故か、蛍光灯を握っている。

彼女はフランを「少女」と認識して、近づいてくる。フランに視線を合わせて、その女性は聞く。子供を威圧しないようにしているようだが、口調は固かった。

「どうしたのか。ここには何も無いぞ」

「えと、あの。その白髪のアリバイを、き、聞ききたんだけど」

「ん？ あり、ばい？」

女性も白い髪なので、引つかかるところを覚えたが、すぐに妖夢のことだと分かった。そもそも「同じ天狗仲間」が連れてきたフランは、妖夢に用があると考えた方が妥当である。そう考えられるのは、幻想郷の一員だったからである。

名を犬走 楯という。白い髪をしているのは、文とは少し種類が違うのであるが同じ「山」の者である。だからといって仲がよいわけでもない。特に現在の彼女の境遇も関係している。

「こほん。まあ、なんでもいい……聞きたいことがあるならば、手短に答えよう」

楯はフランをいったん部屋の外へ出して、言う。フランが出ていくときに、中の大人たちの微笑んだ顔がフランには見えたが、なぜそうなのかさっぱりと分らない。

それでも楯は固い口調でフランに対する。彼女はこれから用務員としての仕事があるのだ。蛍光灯を取り換えるのもその仕事の一つである。幻想郷では山の見回りくらいしかしていなかったが、こちらに来てからはありとあらゆる仕事を押し付けられていた。

それもこれも射命丸 文の『おかげ』であった。彼女は懇意にしている芸能事務所が用務員を募集しているからと、お金に困っていた知り合いを言葉巧みに誘いだして就職させたのだ。無論アルバイトである。

そして楯は清掃をしたり、今日のように備品を扱う毎日である。最近では幻想郷の遊び

相手の河童も忙しいので、オフにやることと言えばネットでの「将棋」くらいである。それはそれで楽しいのだが、休日の度に一日中パソコンにへばりついている自分には、權も思うところがあった。

——人間の雑用をしつつ、暇な時にはネット。私はこれでいいのか……？

權は考えないときははないが、それでも生活をしていくためにはどうしようもない。たまに訪ねてくる文が「あつ、用務員さん！」とこれ見よがしに言つてくると、クイックルワイパーの餌食にしてやりたくなることも多々ある。

「ねえ」

フランの言葉に權ははつと我に返る。そして、頭を振った。白い髪が揺れて、もちつとした頬が少し震える。口調は固くても、彼女もれつきとした少女である。その仕草にはどこか、愛らしさがあった。

しかし、口調は変わらない。

「すまない。ぼおとしていた。何だったかな？」

「あの、白髪は……殺人鬼なの？」

「……………ち、ちがうと思う」

「じゃあ、昨日は何をしていたのかしら」

「昨日？ ……あの幽霊は控室でくぐもった声を上げていたが……それくらいかな。あ

あ、そうだ」

権は懐から冊子を取り出した。それは例の「斬るノート」である。それをなぜ、権が持っているかというの一つしか理由は無い。

「これは、昨日夜に清掃をしている時に見つけた。多分忘れていったものだと思うが……」

言つて権はノートをも見る。誰が書いたのかも、誰に返すべきなのかもはつきりとしているが、凄まじいほどに返しにくい。ヘタをすれば、口封じを受けかねない内容である。今の権には妖夢の刀を受ける武器も力もないのだ。あるのは、片手に蛍光灯。ポケットにシヤチウハタ。ウエストポーチに工具と軍手くらいである。

そこで権はフランにノートを渡した。流石に子供から返して貰つても、妖夢は切りかかることはしないはずである。だからこそ、彼女は目の前に「子供」に言う。

「よかつたらこれを返しておいてくれないか？ ……くれぐれも文には見せないように」

「……」

フランはそのノートを開いて、きらりと眼を光らせた。これは間違いなく動かぬ証拠である。何のとは、大した意味はない。それから、彼女は権に向かつていう。さっきの注意など一切聞いていなかった。

「ありがとう！」

「あ、ああ」

フランはノートを内ポケットにしまい込んで、踵を返すと妖夢たちの部屋に戻っていった。権はいやな予感がしたが、仕事があるので妖夢の無事を祈りつつ、軍手をはめる――

「そうだったのですね。まさか権が、グルだったとは……」

フランの話を聞き終った文は、できる限り話を捻じ曲げて理解した。もちろん意図的ではある。しかし、それを目の前の少女は信じた。

「あ、あいつもグルなの？」

「ええ。残念なことに……」

真顔で嘘を吹き込む文。フランはそれでも「き、気づいていたわ」と強がるが、その隙について文はノートの主だった部分を写真に収めてしまう。ただし、「斬るべきもの」のリストの鴉天狗を白狼天狗に手持ちのペンで変えておいた。

そこで文はふと、思いついた。もしかしたら、この目の前に座っている少女は落し物を探したいのではなく「名探偵」になりたいのではないだろうか。

(……USBをただ探すよりも、この「名探偵」の取材をすれば、面白い記事が書けるかもしれないわ……次の、記事は……)

文の口元がにやつく、文はフランを見て言う。

「フランドールさん！ まだ、容疑者は洗い終わっていませんよっ!! あと二人、特に次の人なんてすごく怪しいですから、できるだけおちよく……いえ、しつかりと調査しましょう」

フランはいきなり言われて眼をぱちくりさせたが、すぐに言う。

「あ、当たり前よっ!」

頼もしい返事に鴉天狗は、復讐の時が来たと勘違いした。そのせいで、屈辱的なことになるはこの時点では思わなかった。

9 話

花の妖怪の朝は早い。

太陽の上る数時間までに起きだして。「子供達」がだらしなく寝ているのを起こさないように、アパートの部屋を出る。こつそりと出ていくのは子供を気遣つてのことではない。あくまで自らのプライドの為であった。

冷たい空気が彼女の頬を撫でる。夏の朝とはいえ、肌寒さを感じさせる。しかし、それが逆に心地よい。そこに多少の眠気がなければよいと彼女は想う。

しかし、不満ならばいつももう一つある。これが散歩だったら、ということであった。花の妖怪の朝は全くを持って優雅ではない。そもそも恰好からしてジャージ姿である。これも朝早くに出ていく理由の一つでもあった。同居している者たちにも見せない姿ではないのだ。無論、知り合いにも見せたいなど微塵も思わない。

やつていることは新聞配達である。自転車のかごに目いっぱい紙の束を詰め込んで。彼女は配達する。少なくともいつも太陽が昇る前には、絶対に終わらせるということをしていた。やる気があるのではない。とつとと終わらせたいだけである。

その配達先には、吸血鬼の家や、閻魔の家などがあるが、そこに近づくときは細心の

注意を払って、新聞をポストに突っ込む。たまに朝早くだというのに、メイドが外で体操をしていたり、閻魔がぼけえと空を眺めて悲しげな顔をしていたりするが、彼女は「寝てる」くらいにしか思わない。同情などしている余裕もないし、余裕があつてもしない。できれば新聞をポストではなく、庭にでも投げ捨てて帰ってきたいと彼女はいつも思っている。傍目から見れば、やる気が漲っているかのような仕事ぶりをする彼女も、その実やる気が全くないからこそ頑張っているのである。さっさと終わらせたいことと、誰にも見せたくないということが行動力の源泉であつた。

一度、女子高生のような月のウサギと出くわしたときは、背後から蹴り飛ばして。発覚を免れたことがある。幻想郷の人々の中で流通している新聞で「ウサギの朝歩き 危険!」というタイトルで特集をされたことがあるが、花の妖怪の家ではそんな「紙切れ」は取っていないので知るすべはない。どうにもカラオケ帰りではあつたらしい。

もちろん、花の妖怪とは風見幽香のことである。

朝の幽香はできるだけ早く帰ってくる。しつとりと汗に濡れて、緑の髪が額に張り付いて、ジャージの下は気持ちの悪さしかないのは何時ものことであるが、新聞配達が終わった解放感もいつものことである。ばれなかつたという一時でホッと胸をなでおろすことも毎日のことだ。

幽香は子供たちを起こさないように、アパートの電気を付けずに部屋へ入っていく。しかし、すぐにリビングに戻るようなことは絶対にせず。洗面所で顔を洗い、汗まみれのジャージをその横にある洗濯機に放り込む。下着も同様だった。

要するに帰ってきた時に、シャワーを浴びることが日課になっているのだ。幽香は狭いバスルームのドアをゆっくりと音を立てないように開けて、中に入る。床が冷たいがちよつとだけ顔がにやける。もちろん誰もいないからだ。

幽香はきゅきゅとシャワーの蛇口をひねる。冷たい水が最初にでてきて、彼女は手を洗う。少しずつ水が暖かくなっていくが、熱いほどにまではならないように調整する。体は火照っているのに冷たいほうが幽香もよかった。

幽香はよい温度になってから、シャワーのノズルを掴んで、頭にかける。汗が洗い流されていく気持ちよさに彼女の肩から力を抜かせる。白い肌にお湯が流れていく。幽香はバスチェアに座って、体の隅々までシャワーを浴びる。

それから大きく息を吐いて。シャワーを止め、ノズルを壁にかける。それから、ボディタオルで体を洗う。ボディソープは使うし、タオルも100円シヨップの安い物ではない。その点にはどこかの家族みたいな連中とは違うのだろう。

金銭的に余裕はないが、そこで無駄な節制をすることは幽香には耐えられないのだ。

幽香はじつくりと「朝シャワー」を愉しんでから、風呂を一度出る。脱衣所で体を拭いてからブラウスとズボンを着て、リビングに戻るでもなく、次の作業に移る。洗濯機に湯船の残り湯を入れる作業である。風呂を桶で汲み取ってから、すっかり冷たくなった風呂水を洗濯機に入れる。何往復かする作業でいつも子供が起きてこないか、幽香は少し心配だった。

重ねて言うが、子供のことを気にしてのことでは決してない。あくまでも、自分のプライドの為である。

それから、簡単に風呂を掃除して。夜に自動的にお湯を張る「予約」を機械で行う。ちなみに彼女は昨日の残り湯を追いだきして、再利用などしない。水道代はバカにならないが、いつもあつたかなくて、綺麗なお風呂に入りたい。

幽香はそれが全て終わってから、朝のご飯の支度をする。

台所に行つて、冷蔵庫からウインナーや卵を出して並べる。フライパンを洗い、清潔にしている布巾でそれを拭き、少しだけ油を入れる。そしてコンロに乗せてもまだ火はかけない。幽香はその前に、食パンを二枚取り出してオーブントースターに銀紙を敷いてから入れる。タイマーは時間をかけて、他の作業と時間的に調節する。

オーブントースターのドアを閉めて、お皿を用意しから、幽香はフライパンでウインナーを炙る。こんがり焼けたら、お皿に均等に盛り付ける。そして、冷蔵庫から牛乳やバターを取り出して、次の料理にかかる。手際の良さは、毎日の作業だからだろうか。作るのはスクランブルエッグである。幽香はボウルで卵や牛乳を混ぜてから、バターを溶かしておいたフライパンに流しこむ。このあたりで、トーストが焼けたようなのでオーブンから取り出して、程よく焦げ目のついたそれを取り出す。もちろん、やけどしないように手に新しい銀紙を持って、素早くおこなう。

そんなこんなで幽香は朝ごはんをつくる。いつも、子供達が起きだすのはこの匂いに釣られてからだ。ちなみにこの子供達は幽香から見て子供なのであって、短い時を生きる人間には途方もないほどの時を生きている。

トーストの上にスクランブルエッグを乗せて、ケチャップをかける。横には添えられたウインナーにそして、冷たい牛乳。幽香はそれらをリビングの台に並べる。その横では三人の女の子がカーペットに正座して、待っている。

三人は、三月精と言われる少女達だった。サニー、ルナ、スターは口元から涎を垂らして、何も言わずに座っている。彼女達は手伝うでもなく、幽香の挙動を見ている。

幽香が三人を見る。それに三月精はばあと笑顔になる、しかし幽香は何も言わずに眼

をそらす。それで反対に三人の少女はうつむく。すでに目の前には朝の用意ができて
いるのだが、食べる事ができない。

幽香は準備が終わっても三月精に何も言わない。じつと三人をみて、腰に手をあてて
見下ろす。三月精はチラチラと朝ごはんを見ては涎を垂らす。幽香はその姿にも眉ひ
とつ動かさずに見下ろすだけで、何一つ言わない。

マンションの一室は静寂だった。幽香は三月精に何も言わないし、三人の妖精は涎を
垂らして幽香を見ている。なぜこんなことをしているかと言われれば、理由は一つしか
ない。幽香が面白いからである。

しかし、静寂が破られる時が来た。

三月精のお腹が同時になる。幽香はそれで「よし」というと、三月精は歓声を上げて、
朝ごはんに齧り付いた。幽香はその姿に苦笑しつつ、まるで妖精を犬のように扱ったこ
とでわずかにストレスが解消されたのでくすりとする。

幽香も妖精達と同じ台の一角に座って、自分で焼いた食パンを両手で持って、さくり
と食べる。そのままでサニーが口元にケチャップを付けて、おいしそうにスクランブル
エッグの載ったパンを食べている。

幽香と三月精は簡素な部屋に住んでいる。簡素と言っても、部屋は2DKで二つの部
屋に分かれていますので四人で暮らしていても十分に広い。それは四人のうち三人が妖

精だからだろう。では何が簡素かというと、無駄なものが置いていないのである。

品のいいカーペットの上で彼女達は台を置き、食事をとっている。その横には薄型のテレビがテレビ台に乗っており、特にDVDプレイヤーなどのデバイスはおいていない。あくまで現行放送されている情報を取捨するために置かれているのだ。

窓際にはHDリバイバルパーフェクトジョング。

観葉植物などはおいておらず、意外なことに花もおいていない。それは幽香が狭い空間で植木鉢などに花を閉じこめるのを嫌ったからだ。ちなみに同様な理由により、花屋も花の妖怪は嫌いだった。

物が少ないことも先に書いた通り、花の妖怪の趣味趣向に合わせてのことである。昔は城に住んでいた彼女だが、最近はいろんなところを転々としている癖で必要最低限な物品以外は置かないようにしているのだ。

ベランダには洗濯物が干されている。ピンク色のパジャマは誰の物だろう。

ともかくにも、無駄なものは一切置かれていない部屋なのである。三妖精はその点が多少不満でもっとものがないのに、氷の妖精の家に行つて遊んだりしていることもある。たまに巫女もいるのでいたずらもついでにする。

「幽香さんは今日は何時ごろかえってくるんですか？」

黒髪の少女、スターが聞く。幽香は「明日までに」とてきとうに返事をする。嘘はついていないが、特定が難しいアバウトな返答にスターは頭を抱えた。こういった場合には追及しても無駄なのはわかっている。

「それよりもあなたたちは、今日も日が落ちるまでに帰ってくるのよ」

幽香そう言って牛乳を飲む。彼女は三月精が帰ってくる時間については、いつもうるさい。自分が帰ってくる時間については全く頓着しない。朝ごはんを作っているのは彼女だが、別に三月精は作れないことはない。幻想郷の神社の敷地で三人は暮らしていたのだから、家事は一通りできる。

ただ、妙な早起きを三人にされては幽香が困るのである。何を困るかという目撃される困るのだ。あくまで三人は妖精なので口も軽い。そこからバカな他の妖精に話が漏れると必ず話がねじけて伝わる。

「……」

幽香はもぐもぐと口を動かす。もうすぐに家を出なくてはいけないが、それを感じさせないほどに余裕のある挙動である。

幽香がお昼に働いているのはとあるスーパーである。親会社は昔はプロ野球球団を持っていたらしく、休憩中に幽香にもおぼさんのパートから話が振られることがある

が、彼女には興味がない。

幽香はエプロンに三角頭巾をしていろんなことを行い。いろんな事とは、そのとおり商品の陳列、野菜の袋詰め、レジ、試食コーナーなどなどである。朝をピークに幽香はテンションが下がり続けて、どんより濁った眼になっていくのも仕方がないのかもしれない。

しかし、生活がある。節制などしたくない幽香は働かざるを得ないのである。それに三人の大飯ぐらいを養う必要もあり、紅魔館の者たちのように四人で働いているのとはわけが違うのである。

「あのひじきみたいな髪の鴉天狗。今日は来ないかしら」

妖夢のように言う花の妖怪。しかし彼女の場合は半分霊の人とは違い、純粋な期待からの言葉だった。手にはお菓子詰まった箱を持っているので、その重さから多少よける。力も幻想郷から比べれば弱くなっているので、軽々とはいかない。

幽香ははあ、とため息をついてサンドバックの顔を思い浮かべる。頭の中では「へー幽香サマー」と土下座している黒髪の鴉天狗である。記憶のねつ造のようにも見えるが、幽香の場合はいつか「してやる」と思っていることなので、将来的に実現するかもしれない。

ちなみにこのことは幽香の中では、あの幻想郷での強者である天狗も脳内ランキング

が三月精以下なのを表しているかもしれない。

それはそうと幽香はお菓子コーナーで箱を下ろして陳列を開始する。妖怪ウォッチのお菓子から、彼女は始めた。おまけがついているお菓子である。

ぶるつと文は身を震わせた。訳が分からずにあたりを見るが、なにもない。厚着のフランが振り返って「？」と首をかしげるが、文にも今の寒気の原因などわかりはしない。彼女は手に持った日傘の影からフランが出ないようにしように思う。

「風邪、ですかね？」

文はそう結論づける。しかし、風邪ごときで今から行く場所を断念するわけにはいかない。この地球上で最近では因縁深い妖怪に一泡吹かせに行くのだ。それも文にはフランという、最強の盾があるから勝算は十分だった。

文はフラン言う。

「いいですか。今から行く場所にいる緑の苔みたいな髪をした人は、とっても悪い人なので根堀葉堀にアリバイを聞き出してください。その間に私は証拠写真を撮りますから」

文は先日取れなかった「働いている花の妖怪」を至近距離でカメラに収めて辱めやろ

うと考えている。ウインナーの恨みは深いのである。一人暮らしの社会人には福沢諭吉一枚と樋口一葉一枚がどれだけ重いか、天狗の心の黒さからわかるだろう。彼女はもはやUSBなどどうでもいい。

復讐の公算ににやりと笑う文の頭の中では、幽香が泣いて謝っている。まさか、幽香の頭の中で自分が土下座しているとは思わない。それも江戸時代の農民のような言葉を吐きながらである。

文は幽香の姿を幻想郷の全員に新聞で拡散するつもりだった。そんなことを知らないフランは彼女の言葉を鵜呑みにする。

「わ、わかったわ。その妖怪はとっても悪い奴なのね。あの白髪と同じように……」

「いえ、残念ですが。妖夢さんよりははるかに悪い妖怪です。……野放しにしておいては危険ですから私たちでとめないといけません。ついでに写真をいっぱいとってみんなに注意を喚起しましょう!」

それを聞いてフランは深刻そうな顔で頷く。彼女もすでにUSBについては頭の片隅にやられている。忘れていないのは姉の件があるのと、犯人を見つければ自動的に帰ってくると思っているからだ。

フランはきつと紅い眼を光らせる。それでも八重歯が可愛いので、恐ろしいなどとは誰も思わないだろう。しかし、彼女の心には燃えるような正義感が渦巻いていた。闇に

系統しているレミリアが聞いたら頭を抱えるかもしれない。

「さあ、いきますっ!」

「ええ。光彦っ!」

テンションが上がったフランに文はなんとも言えない顔をして、小柄な金髪の少女から日傘を外そうかと小一時間悩んだ。最終的にやらなかったが、彼女の耳には蝉の声も聞こえないほどの心理的葛藤があつた。

決戦の場所。スーパーの自動ドアが開く。店内から魚のBGMが聞こえる。

花の妖怪がそちらを見て、やる気のない挨拶をしようとしますがすぐにその眼が開かれる。それは歓喜からだつた。口元が開き、思わず口角が上がる。

そこには鴉天狗がいた。不敵に笑う、幻想郷最速の彼女。目的は買物ではないことは明らかで、彼女の瞳はまっすぐ花の妖怪に向けられている。その後ろでちよこんと金色の髪が見えるが、花の妖怪は気が付かない。

今、龍虎相打つ決戦——いや、花と鴉の相打つ、語呂の悪い戦いが始まろうとしていた。

10話

昼下がりの公民館は子供の声が響いていた。彼女達はドタドタと屋内を走り回る。しかし、その彼女達の表情は全くわからない、なぜならばその顔には「仮面」を付けているからだ。

「とうっ！」

一人の少女が叫んで、飛ぶ。着地した時に靴下としっかりとワックスの塗られた廊下がこすれて、すべりそうになるが、なんとか体勢を維持して。ポーズをとる。少女は仮面ライダー「ガйм」の仮面を被っているが、その青い髪は印象的で大きなりボンをつけている。

「ついに追いつめたわ！ 怪人ケロリン！ 今日が年貢のさげだめよっ」

最後のほうがてきとうな口上を述べて、少女はびしっと指を「怪人」に指す。そう、青髪の少女の指の先にはまた一人、仮面をかぶった少女がいた。その少女も仮面ライダー「アマゾン」の仮面をかぶっている。しかし役自体は怪人役なのだろう、腰に手を当てて笑う。

「ケーロケロケロ。それはどうかしら、むしろ罠にかかったのはバカなお前の方かもね。」

さあ、大魔王サーナエの供物にしてくれるわっ」

ケロリンは片手をあげた。彼女は金色の髪をおさげにして、頭には目玉のついた市女笠を被っている。しかし、その正体は全くわからない。ちなみに遊んでいる子供というよりは、保護者的な位置にある。要するに一緒に遊んであげているのだ。

金髪の少女が片手をあげると彼女達のいる廊下の両側のドアが開いた。そこから珍妙なお面を付けた者たちが現れてそれぞれ「サニ〜」「スタ〜」「ルナ〜」と変なイントネーションで言う。言わずもがな悪の戦闘員である。

三人が顔に付けているのは「希望の面」と言われる古代の皇族が自らをモデルに作ったお面である。それは河童が大量に生産した贗物に過ぎないが、その美しいデザインから子供達は満場一致に「悪の戦闘員用のお面」と決定した。

「くっ卑怯よー！」

青髪の少女が言う。しかし、ケロリンはふははと笑って、戦闘員達に合図を送る。それだけでワラワラ動きながら「希望の面」をつけた三人が青髪の少女を囲んだ。絶対絶命の危機だといつていいだろう。

「そ〜までだ……」

とてもテンションの低い声が響く。公民館の中は狭いので、それなりの声を出せば反響するのだ。戦闘員を加えた四人は声の方向を見た

そこにはノースリーブで緑のチェックの上着を着て、何に目覚めたのか赤いミニスカートを着た「キツネの仮面」の少女がいた。長い桃色の髪は彼女が動くとき、緩やかに動く。背丈は他の少女よりは頭一つは大きい。

「この私が来たからにやあ、もう安心だつ。てめえらみなごろしにしてやる」

テンションは低いながらも流暢に台詞を言うキツネのお面。ただし、その台詞を即興でつくつたのだろうから、青髪の少女を助けにきたのではなく第三勢力になつてしまつている。しかし、ばばつとポーズをとる姿は、幻想郷で「能」をやつていたからか流れるようだった。

しかし、このことが怪人ケロリンと青髪の手を結ばせることになつてしまった。互いの敵は、共通の敵。ゆえに手を組む理由はこれ以上ない。ケロリン達と青髪は一斉に「キツネのお面」にとびかかった。キツネのお面は悲鳴を上げる。

「ひ、卑怯だぞ」

青髪の少女が言ったことと同じ、キツネのお面の断末魔が廊下に響く。全員に取り押さえられて、くすぐられる彼女は哀れですらあつた。キツネのお面をがずれて、無表情の彼女の口から涎が出ている。

「元氣だねえ……」

公民館の畳敷きの部屋で伊吹萃香は寝そべっていた。肩の出たキャミソールに男の子用のハーフパンツを着た鬼のその近くにお盆に載った、麦茶とコップがある。そもそも今廊下で遊んでいる彼女達はこの公民館に麦茶をもらいに来たのだ。

萃香はさらさらとした長い髪を鬱陶しげにかき上げる。鬼としての立派な両角は隠すこともない。見た者の眼を引く角だが、現代ではおもちゃかなにかくらいにしか思われないと、彼女は経験から学習していた。ゆえに隠すことはしない。

萃香はふああと大きく欠伸をする。ヒーローごっこに付き合ってもいいのだが、今は多少眠たい。実は部屋の隅で、お面が足りないという理由でふてくされて寝ているルーミアがいるが、萃香は気にしない。

そこに一人の老人が近づいてきた。禿げた頭にユニクロで買ったポロシャツを着た彼は、萃香の前にソーダアイス差し出す。町内の老人なのだろう。

「萃香や……今度の子供会のけんじゃけどな」

「ああ、じいちゃん。たしか運動会だっけ……？」

萃香はアイスを老人から受け取って、かじる。がりつと小気味よい音を立てて、シャクシャクと萃香は食べた。冷たくておいしい。これでお酒があればいいのだけれど、と彼女は残念がった。流石に見た目からは成年には見えないのだ。

もちろんだが、萃香はこの老人よりはるかに長い時を生きている。だから彼女が「じ

「いちゃん」と呼ぶのは多少なりとも皮肉というか奇妙だが、萃香自身は中々に気に入っていた。幻想郷では人と交わることなどそうそうないのだから、新鮮ではある。だが、別段老人へ敬意を持つていないというわけではない。あくまで遊びである。

萃香は考える。この夏の過ぎ去った秋に町対抗で「運動会」なるものをやるというのだ。そしてそれは子供会のリーダーに自分でもなぜだがわからないが、収まってしまった萃香の仕事でもあった。見た目は少女だが、その中身は正反対であることを自覚している、萃香は苦笑する。

「運動会か……何をやるのか知らないけど。まあ、楽しそうかな」

萃香はもう一度、アイスをかじる。遠くからは反撃にでた、キツネのお面の声が聞こえる。鬼の少女はそちらをちらりと見て、言う。

「どうせやるなら、大勢集めたいわね……楽しそうで暇なやつらは全員参加ね」

萃香はまた寝そべって、頭の中で集める者を考える。

そんなこんなで一部は違うが「子供達」が遊んでいる時に、フランドール・スカレーツトは首を絞められている鴉天狗を指をくわえてみていた。

「どうしたのかしら？ お客様？」

「ぐ、ぐええ、い、いきなり話も聞かずに……」

につこりと笑う幽香の手は文の首をがっしりと掴んでいる。場所はあの雑貨コーナーである。幽香は意気揚々と店内に入ってきた鴉天狗が何か言う前に、その腕を掴んでこの場所まで連れてきたのだ。そしてあの日のように首を絞めた。ただ、文は自らのデジカメだけは両手で守っている。

「……話？ なぜ、私がひじきの話を聞かなければならないのかしら？」

「ひ、ひじき!? な、なんの話ですか」

「あら、まだ自覚していなかったかしら。だめよ。あなたは海藻の一種なんだから」

「???」

幽香はニコニコと首を絞める。とても楽しい時間であるから、今までの疲れが洗われていくかのようにだった。逆に文はじたばたと抵抗するのだが、幻想郷からこの現代に来て、彼女だけでなくほとんどの者が弱体化しているがゆえに「容赦のなさ」が力の尺度になっている。だからこそ幽香は河童と肩を並べるほどに「強者」であるのだ。単体では文に勝ち目などない。

だからこそフランを文は連れてきたのだが、そのフ金髪の少女は今文の後ろにいて固まっている。

フランはその鴉天狗の恥ずかしい状況を比喻ではなく、指をくわえてみている。いきなりの状況にどうしようもなく、頭が追い付いてこないのだ。しかし文を掴んでいる、幽香の髪が緑色なのでやつと彼女が容疑者の一人だと理解した。

「あ、あなた。アヤを離しなさい！ 弱い奴をいじめるのはいけないわ！ めーりんが言つてた！」

「……………」

文の心にぐさぐさと来る「救済の言葉」をフランは言う。幽香はこの金髪の少女の存在に気が付いてはいたが、ほとんど無視していた。しかし、フランが言った言葉に胸を打たれて、鴉天狗の首から手をはなす。文はげほげほと首を抑えて、咳き込む。

幽香はそれを無視して、フランに言う。

「そうね。弱い者をいじめるのはよくないわ……………弱い者は弱いなりに頑張つて生きていくのですものね」

「そうよ。よくわからないけれど、弱い奴をいじめるのは最低だつてよくテレビでも言っているし……………そういうのは苛めつて言うのよ。だからアヤを苛めたらだめよっ」

「わるかつたわ……………私が間違つていた。そうね、おちびちゃんの言う通りだわ。ねえ、ごめんなさいね、鴉天狗さん？」

ぎぎぎと文は何とも言えぬ顔をしている。幽香に謝つてもらつたというのに、唇を悔

しげに噛んでその眼は幽香を睨み付けている。それでいて顔が赤いので、泣きそうでもある。幽香はその顔を満足そうにみている。

フランは文の服を引いて、聞く。

「アヤ。大丈夫？」

「……………ええ、体は」

文は肩を震わせながら言う。体は文の自己申告の通り大丈夫だが、心は深刻なダメージを負っていた。しかし、文もここで負けて帰るわけにはいかないのだ。当初の目的を達成するために、文は今一度やる気を振り絞った。

「さあ、ここから反撃開始ですよ。フランドールさん！ 聞き込み開始です」

「えっ……………そ、そうね。あ、あなた。昨日は何をしていたのっ！」

幽香はいきなり、フランに聞かれてきよとんとした。文がUSBを失くして、その捜索にフランが協力していることも、彼女が探偵のようなことをしていることも知らないから、当然の反応と言えよう。しかし、幽香は澀みなく答えた。

「昨日は……………近所に住んでいると思うのだけど、とても弱い奴がきてウインナーを全部買って行ってくれたわ。ねえ、そうだったわね。鴉天狗さん」

「……………ソウデスネ」

幽香はにつこりと笑って、フランに向き直る。反対に文は苦虫を噛み潰したような顔

をしている。フランはふむふむと頷きながら聞いている。まさか話に出てきた「弱い奴」が傍にいるとは思わないだろう。

フランはさらに聞いた。

「じゃあ、このあたりでUSBなんて落ちてなかったかしら」

「ゆーえすびー？ 何かしら、それは」

幽香は首をひねった。彼女の生活は必要最低限なものしかない上に、ICT関係の機材など一つもない。一応携帯は持っているが、それもほとんど使用しない「ガラケー」である。ゆえに本当にUSBを彼女は知らなかった。

文の眼がきらりと光る。フランの後ろから彼女は幽香に近づいた。間にフランがいれば、急に首を掴まれることなどないはずである。

「あやや。もしかして幽香さん。知らないんですか？」

「……いきなり何かしら？」

「いやあ。もしかして、こーんな子供でも知っていることをあなたが知らないなんてことはないと思いませんか？」

にやにやと文は言う。幽香は青筋を立てて、につこり笑う。

文はチラチラと幽香を窺いつつ、横を向いて小さく笑う。それがあざけているかのようで、幽香の怒りを誘った。しかし、フランが真ん中で何が起きているかわからな

い顔をしているから、幽香も手を出せない。無論、汚い鴉天狗は理解している。

「意外に、物知らずなのですねえ。幽香さんは」

文はわざと呆れたように言う。幽香はその表情で唇を噛む。フランさえいなければ今ごろ、一羽の鴉天狗がゴミ箱に頭から入っていたかもしれない。だが、今は文と幽香の間にある意味無垢な少女が緩衝地帯になっている。

幽香はフランに言う。

「ねえ、あなた。あつちに漫画コーナーがあるから、ちよつと行って来たらどうかしら？」

「えっ。本当?！」

「ええ。そうね。数分で事は済むから。その間に行つて来たらいいわ。私はこの鴉天狗とお話をしたいのよ」

「わかつたわ。行つて——」

フランが幽香の指した方向に行きそうになるのを文は飛びついて止めた。その顔は必死そのものである。この場で妖夢の時のように、フランにいななくなれば命に係わる。それでなくても幽香に精神的に再起不能にされるかもしれない。

「だ、だめですよっフランドルさん。探偵が途中で仕事を投げ出していいんですか?」
フランははつとした。文の引き止める言葉には熱がこもっている。今彼女に去られ

ては本気で鴉天狗にもどうしようもないのだ。その間に花の妖怪に何をされるかわかったものではない。今現在、間違いない幽香は文へいい感情など持ち合わせてはいない。

「そ、そうね。今度にするわ」

文はフランの返答にほっとする。そしてにやりとして、幽香を見る。その顔はどうだと言わんばかりである。幽香はフランと文を引き離して、その間に鴉天狗を抹殺するつもりだったのだろうが、その計略は文によって破たんした。

現状戦況は文に有利。しかし、それは子供を盾にするという恥も外聞もないやり方に起因する。それでも幽香は面白くなさそうにしている。

文はここだと直感した。これ以上長いこと、戦いを長引かせてもなんら得はない。そう、このような精神的な闘争は有利な時に「勝ち逃げ」することが、正当な勝利なのである。だからこそ、文はフランに最後の言葉を耳打ちする。

フランは頭に「？」を浮かべながら、幽香に近づいた。幽香もなぜフランが近づいてきたのかわからずに、一瞬行動が固まる。それこそ文の望んでいた瞬間なのだ。

文は手にデジタルカメラを構える。幽香は気が付いたが反応が遅れた。その瞬間にフランは片手で幽香のエプロンを掴んで、もう一方の手の指を口に咥える。そしてその光景を文はデジタルカメラのシャッターに収めた。

「つー！」

幽香はフラッシュに一瞬目をくらませる。その隙に「幽香が子供に甘えられているかのような写真」を手に入れた文は、一目散に逃げ出した。フランもその後を追う。そう、文は先ほどフランに一連の行動と、その後の逃走を耳打ちしたのだ。

「あはは。完全勝利です。次の新聞を楽しみにしてくださいね！」

幽香を挑発する文。フランは言われたままに行動したが、文と幽香が何をしているかさっぱりわからない。それでも文と一緒に逃げる。彼女が後ろを見ると、笑顔で幽香が追ってきているから本能的に逃げなければならないこともわかった。

文はパンの棚を華麗にカーブして入り口まで走る。従業員である幽香を振り切るには、店内から外へ出ればいいのだ。少なくともあまり遠くには追ってこられるはずがない。だからこそ、文は追ってくる幽香に脅威を覚えない。

しかし、人生はそんなに甘くはない。全ては因果応報であり、やったことは全て身に帰ってくる。

何者かに文の肩がガツと掴まれた。文ははつとそちらを見ると、白い髪を犬の耳のようにたてた少女がいた。作業着の胸元を開けて、中の黒のシャツが見えている。

「やっぱり。文じゃないか、なんで走り回っている」

「げえ、椛。こ、こんな時に」

「な、なんだその反応は」

犬走 権。近くの芸能事務所に用務員として働いている彼女は昼さがりの今に、ちょうどお昼ご飯を買いに来たのだ。いつもは惣菜をてきとうに買って帰るだけだが、知った顔がいたので声をかけたのだろう。最悪のタイミングで。

権は状況をよくわからないから、世間話を始める。彼女は頭髪の関係で目立つので、幽香から見られないように避けられていて、彼女の存在も知らない。

「そういえば、この前」

「い、良いですから、もしじ。離してください」

「もしじって誰だ。そもそも何をそんなに急いでいるんだ」

「ああああああああああ、フランドールさん。これ、このデジカメをもつてできるだけ遠くに逃げてください。もうそれしか」

追いついてきたフランに文はデジカメを渡す。フランはそれを掴むと、何かに怯えたような顔をしてくるりと身を翻して、入り口から出ていった。傘立てから日傘を持っていくことは忘れていない。

フランは見たのだ、権の後ろから迫る、笑顔で殺気を放つ妖怪の姿を。後ろからはこんな声が聞こえる。

「ち、違うんですよ。あ、あまりにいい写真がとれ、ぐええ」
「な、なんだこいつ、て、てんいんじやないのあああ」

天狗が二羽やられてしまった。一羽は完全に巻き添えである。

11話

射命丸文は、白髪の少女の肩を借りて歩いてきた。その肩を貸している犬走 権も服が乱れて、中の黒シャツがはだけている。二人は疲れ切った顔をして、アスファルトの道をよろよろと歩いている。

二人の女の子が物理的に何者かに痛めつけられたのは明らかだが、それだけで二人を許すほどに犯人であるスーパーの店員は甘くなかった。それは文の片手に大きな袋が握られていることからわかる。スーパーのビニール袋ではない。つい先ほど購入したスーパー特製のエコバックである。無論有料だった。

エコバックには大量のお菓子類が詰め込まれていた。文と権が買ったのである。買ったといつても自由意思とは限らない。

「な、なんで私まで、泣けなしのお金を……あれはいつたい何なんだ……」

権は泣きだしそうな声を出す。彼女の後ろのポケットに入っている茶色の財布は異様なほど軽い。スーパーで中の「お金」を全て吐きだしたから、小銭の音すらもしない。彼女はただ昼ご飯を買いに来て、有り金が全てお菓子に変化したのだから泣きたくもなるだろう。最後は小銭の音がしないか、ジャンプまでしたのだ。

椛の衰れた状態から文のことは言うまでもない。

「……………」

文はうつろな目で歩いている。だが、時折薄ら笑いをするので椛は気味が悪い。しかし、文は狂ったのでなければ、絶望しているわけでもない。

「くっ、く。やりましたよ、椛。あの、あの妖怪には。花が咲き乱れる『異変』の時にもコテンパ……世話になりましたが、ついに弱みを握りました」

言いながらエコバックを握りしめる文。彼女の言う「弱み」とは、フランが持つて逃げたデジタルカメラの写真である。あれがあれば、現代のネット上の賢人たちが作ったフリーソフトでいくらでも加工できるのだ。そして、新聞で情報拡散できる。

そんな黒いことを考えている文を見て、椛はため息をつく。少し、口調が砕けるのはわずかに文への親しみからかもしれない。ちなみに幻想郷においての二人は仲が悪かった。多少なりとも親しげに話すのは現代に来てからである。異常な事態では知らぬ相手より、仲の悪い知人のほうがよいのだろう。

「……なにを考えているのかわからないけど、やめておけば？」

「な、なぜですか？ こんなにされてあなたは悔しくないの……ですか!？」

「……敬語が染みついてきた、な」

椛はだんだんと人の世に感化されていく己と肩を貸している知人にいろいろと思う

ところはあがるが、今は知人の「復讐」を止める気だった。天狗として悔しいと言われれば文の言う通りだが、現在花の妖怪と戦つても勝ち目は薄い。闇討ちをすれば別かもしれないが、普通に警察に直行する。公僕相手にはもつと勝ち目がない。

「たぶん文の思つていることを実行すると、報復を受けると思う」

「ぐつ、確かにそうです……」

「やつぱり、報復を受けるようなことを思つていたのか……」

多少カマをかけてみて椀はやれやれと首を振る。文はそれで少しうつむく。落ち込んだというよりは、カマに引つかかったことがそうさせたのだ。しかし、椀も油断していた。

文がうつむいたことで、多少なりとも椀は気が抜けたのか、不意にお腹が鳴る。椀はそれで一度目をつむつて、紅くなる。お昼時はすでに過ぎているのに、まだ何も食べていないのだから、それも当たり前だろう。

文は椀を茶化すことはせずに、小さく笑う。わざとらしく声をそつと出す。椀はハツと文を見て、複雑な表情をした。椀にとって文は胸襟を開いて話し合える友と言うわけではない。かといつてライバルのような関係でもない。だからこそ、椀は文にお腹が鳴つたことを聞かれて恥ずかしい。

それでも二人の天狗は並んで歩いてく。アスファルトから立ち上ってくる熱気が、二

人の肌に汗を浮かばせていた。

フランは暇だった。

スーパ―から逃げた方がいいが、外は光の満ち溢れる午後。日傘をさしておけば歩けるが、暑いので動きたくないと言われ、フランは思わずにいられない。それに文ともはぐれたのであまり遠くへ行くわけにもいかない。

フランは外へ一人で行くことなどほとんどない。ゆえにこういった場合はどこに行けばいいのかもわからないのだ。だから彼女は日傘をさしてあたりをぐるぐる回っていた。やることもなく、文も来ない。

「ゲーム。持つてくればよかった」

はあはあとフランは暑さで息を切らし、大量の汗をかきながら言う。手に持ったデジタルカメラは先ほど一度落としたが、特に傷がついていないので大丈夫だった。正確にいうと大丈夫だと思うことにした。

フランは大通りに出ずに小道を歩いている。周りは住宅地、右を見ても左を見ても誰かの家の門構え。そこを金髪で探偵ルックの少女が、日傘をさして歩く。頭には麦わら帽子をかぶっているが、それでも彼女は自分が日光に弱いと思っている。

少女は歩く。唯の住宅地を。

あまり車の走らないのか道に書かれた「白線」はくつきりで、彼女が遠くを見ると炎で景色が歪んでいる。普段は昼に出歩くことなどないフランは、それがなぜなのかからずに首をひねる。しかし、答えが出る前に彼女の興味は別のことに向かった、

フランは角を曲がる。するとそこには、手すりのようなものにかこまれた「水路」があつた。要するに用水路である。しかしフランにはそれが何かわからずに中をのぞき込む。

水が流れている。当たり前前の光景であるが、フランはそれがなぜなのかやはりわからない。彼女は手すりに身を預けて、しばし休息がてらに考える。吸血鬼は流れる川は渡れないが、流れる用水路に近づいても平気らしい。

「これ、飲むのかしら?……」

飲料水の可能性を考えるフラン。おそらくその通りであれば現代人の何割かは倒れるだろう。だが、用水路の近くに来てフランが止まった理由はあつた。多少涼しいのである。用水路には見た目だけは綺麗な水が流れて、底の方には水草が茂っている。その影に赤い物があるが、流石にフランも「ザリガニ」は知らない。

「ふう」

フランは涼んだことで歩き出す。用水路の横、水音を聞きながら。

日傘を差したまま、少女はお日様の下を行く。吸血鬼としてあるまじき行為なのかも

しれないが、フランは見るもの全てが新鮮である。よくよく見れば、道の両側の家々も色合いも大きさも違う。たまに中から人の声が聞こえる。

また、フランは角を曲がった。そこには小さな公園があった。住宅地の真ん中にあるといつても、人はいない。そこには小さなブランコと滑り台がある。あとは砂場がある。くらいの本当に狭い場所だった。

フランはその公園になんとなく入ってみる。彼女は砂場を見るが、それには興味をあまり示さず。ブランコをじろじろと観察する。

「……」

錆びた鎖に色あせた木の椅子がぶら下がっている。フランはそれに腰掛けてみようとした。純粹に興味、いや子供らしい好奇心が働いたのだ。だが彼女は今日傘をさしている。狭い鎖と鎖の狭間に傘が引っ掛かって、フランの手を離れる。

「……あつー！」

フランはあわてて傘を掴もうとして、できない。フランの視界が明るさを増し、太陽の光の下に彼女は曝け出される――。

「あれ？」

フランは顔を上げた。そこには生まれて、まじまじと見たことが一度もなかった太陽

があつた。彼女の足もとには傘が開いたまま落ちていて、風に転がる。フランは帽子に厚着をしているとはいえ、顔は何もつけていない。強いて言うなら咲夜が「日焼け止め」を塗りたくつたぐらいである。

吸血鬼は日の光に弱い。それは肌が弱いという人間的な弱点ではなく、自然の摂理としての弱点である。焼けるというのは比喩ではなく、吸血鬼は太陽の光を浴びると「灰」になる。だからこそ、フランもレミアも外に出かけるときは日傘を離さない。

正確にいうと、太陽光を浴びたからと言ってすぐに炭化するわけではない。徐々に炭化していくので、すぐに消滅するようなことはない。それでも光を浴びれば痛みを感じる、はずだった。

「?!」

フランは何も感じない。彼女が見上げた先には大きな入道雲が伸びあがった空がある。光に満ちた世界にフランは居るのだ。それが少女の疑問よりも、とても魅力がある。

少女は麦藁帽をとる。金色の髪が動いて、陽に輝く。白い肌が映える。無邪気な好奇心がフランを動かしたのだ。彼女はきらきらと眼を輝かせて、太陽を見る。嫌いで苦手なはずのそれが美しく見えた。

「すごい、すごいー!」

あははとフランは笑い、遠くから凄まじい形相で射命丸 文が走ってきているのが付かず、彼女はくるくるとその場で回る。トレンチコートの下は赤いワンピースを着ているから、その裾が揺れる。とても楽し気だった。

「なんで日傘さしてないんですかあ!？」

叫びながら文は公園に入ってくる。その手には服が掴まれていて、一直線にフランに突進してくる。

フランに文は楯からはぎ取った作業着の上着をかぶせて拘束する。陽の光から少女を守るためだが、すさまじい早業にフランはいきなり目の前が真っ暗になった理由がわからない。太陽に眼が焼かれたのかとすら思う。

「な、なに? 眼? 眼があ」

フランは作業着の下で叫ぶ。文はそれを眼が陽に焼かれたのだと勘違いする。単に文の目隠しにフランが混乱しているだけであるが、そんなことは文にはわからない。もちろんフランも現状がわけがわからない。

「えっ。眼がやられたんですか? ど、どうすれば。水とかぶっかければいいんですかね? ないですけど」

「急に目の前が真っ暗にいい!」

慌てふためく二人。会話など成立しない。

そこに顔を赤くして、上半身が黒のシャツをだけになった椀が公園に入ってくる。日傘を持たずにいるフランを発見した文が、急に椀から上着を剥ぎ取って走り去ったのだから、椀は追剥に会った気持ちである。ちなみにエコバックも彼女が持っている。

そんな椀は文がフランの頭部を上着で包み込んでいるところを発見して、小首を傾げた。

ひと騒動のあと、三人はようやくよく落ち着いて公園の端にちよつとだけある木陰に腰を下ろした。公園の景観用に植えられたのだろう、一本の木がそこにあつた。

フランはお尻にハンカチを引き、文は買ったものが入っていたスーパリーの袋を引き、椀は恰好からかそのまま座る。三人の中央にはエコバックと大量のお菓子がある。

文は「カーラムーチョーウ」の袋を開けて、一枚取り出す。赤いポテトチップスらしく、見るからに辛そうである。彼女はそれをちよつと観察して、袋を隠し椀に言う。

「椀。これを食べてみてください」

「……はあ。そうだな。今日はこれが私の昼飯か……あつ、なかなかおいしいな」

言いながら文に袋を渡されて、知らずに食べる椀。普段お菓子など食べないからか、この水のない状況で辛いお菓子を食べてしまう。最初の数枚は別に辛さは感じないが、あとあと効いてくるのだ。袋の絵柄を確認しないことも災いした。

文はてきとうに「コアラ」がパッケージに描かれたお菓子を手に取る。中にはこれまたコアラ形でクッキーのようなものが入っている。

「ん、これチョコが入ってますね」

文はかりかりと食べる。それを見てフランが言う。

「アヤ、それ頂戴！」

「いいですよ。はい」

数個、手に取って文はフランに渡す。フランはそれを受け取って全て、口の中に放り込む。がりがりとして食べて、とろけるように笑顔になる。彼女は何故、文と椀がお菓子を買ってきたのかわからないからこそ、何のしがらみもなく食べることができたのだ。

このあたりで椀が口元を抑える。そして袋の「辛さで火を噴くおばあちゃん」を驚愕の眼で見、文を涙目で睨み付ける。しかし、文はぼりぼりと「コアラ」を食べながら知らんふりをしている。

フランはごそごそとエコバックの中に手を突っ込んで、二つの箱を取り出す。それは片方に「キノコ」片方に「たけのこ」が描かれた、似たようなパッケージのお菓子だった。フランは両方を見比べて一つ、一つが大きいような「たけのこ」を残す。「キノコ」はエコバックにしまう。

椀は舌を出して、そっぽを向いている。変な顔を見られたくないのと、辛さからそう

している。文は「どうしたんですか?」と言いながら。「よっくん」なるイカの切り身の
ようなものを食べている。

抗議したい椀だが、したところで水もお茶もない。実はフランが水筒を懐に持ってい
るが、椀は知らない。

椀は気を紛らわすために公園の外を見た。大通りが近いとはいえ、住宅地の真ん中で
あるので人通りは少ない。しかし、一人だけ歩いていった。

ツインテールに、紫のリボンを付けたその少女は、スマートフォンを触りながら歩い
ている。手には何かが入ったビニール袋を持っている。そして彼女も文たちに気が付
いた。

少女はデニムのハーフパンツに白を基調とした胸元には赤字で「A u s t r a l i
a」と書かれたシャツを着ている。

「なに、やってんの? あんたたち」

姫海棠はたてはそう言いながら、公園に入ってくる。文は彼女に向かって聞いた。

「はたてこそ、何をやっているんですか。そんな変なシャツを着て」

「へ、変? ど、どこかがよ。それよりもなにをやっているかですって」

はたては文を睨み付けながら言う。

「レンタルビデオ屋からの帰りよ? 返却しないといけないものが、あつたからね!」

多少怒りのこもった声ではたては言う。文はそれが何のことか全くわからない「ふり」をして、お菓子を一つはたてに渡す。それは「ハッピー ダーン！」と書かれたスナック菓子だった、パッケージには黄色い顔のキャラクターが銃を持っている。

「まあまあ、これでも食べてくださいよ」

「えっ、な、なんでこんなところで……、ま、まあいいけど。でも、またなんでおかしなんか、こんなに大量に……な、なによそんな目で睨み付けられるようなこと、言つてないじゃない!」

事情を知らないはたては文の心の傷をえぐっていく。しかしはたてもひとつため息をついて、地面にポケットから出したハンカチを敷いて座る。それから自らが持つていた袋からペットボトルの水を取り出す「ヴォルビッグ」だった。

椀がいきなり、はたてに飛びつく。舌には辛みが浸透して、いい加減につらいのだろう。

「それをのませてください」

「うあ、あ、あんた久しぶりに会って、な、なんなのよ。ていうか吸血鬼の妹もいるし、どんな組み合わせなの?」

わあわあど喚く天狗達をフランはお菓子を食べながら見ている。彼女が今食べているのは大きなパッケージに入った、これまたスナック菓子で一つ一つは小さいが先が

尖った形をしている、それは裏が空洞になっていて指が入る。

とんがったそのお菓子を、なんとなくフランは自分の指にはめていく。まるで怪獣の爪のようになったその手を見て、彼女はなんとなく笑う。そして、自分の指についたそれを外さずに口で咥えて、食べていく。

「うわっ、このお菓子粉がすごいっ、おいしいけど、ぼろぼろ落ちる!」

はたてはそう言いながら手で粉を払いながら「ハッピー ダーン!」を食べる。

「迂闊だった。文を信じるとは……」

椀はまるで水あめのような、お菓子を食べるのではなく「練っている」。お菓子の中にはいろいろな材料があつて、それを混ぜて食べるという「ねりねりねーりね」である。丁寧なことに作り方の説明書まで入っていて「練れば練るほどおいしくなります」と書いてあった。馬鹿正直に信じた椀は練り続ける。

ちなみに辛さは水を飲んで緩和された。そんな姿を見て文が聞く。

「失礼ですねえ……清く正しい私を疑うなんて……そういえば椀は、幻想郷ではもう少し私を立てていた気がするのですけどね。形式的ではあつたんですけど」

「今のあなたのどこに尊敬する要素があるんだ?」

「……………椀? スヌーポーのぬいぐるみを集めていることを拡散してあげますよ?」

「! な、なななぜそれをしてる。ストーリーカーか!」

——そういえば、文。知ってる？ 椛がぬいぐるみを集めているらしいわよ、あのキャラクターはほら、このスマホフォの画面に映っているやつね。

はたてはとある時のことを回想しながら、顔を背ける。まさかこのような迂回ルートで文に情報が回っているとは知らない椛は、怒りながら水あめのようなお菓子を食べる。文はそれに勝ち誇り、ポツキーを食べる。

フランは、そんな彼女達を見ながら静かに楽しんでる。しかし、文は気にしていないふりをしながら「日に焼けない吸血鬼」のことについて考えていた。ありえないはずのことが、先ほど起こったのだ。それはフランをよく知らない椛も、先ほど来たばかりのはたても認識していないが、文は一人で考えている。

1 2 話

カフェの中は涼しい。現代では必須といえる空調が、静かな音をたてている。

十六夜 咲夜はレミリアに「おやつ」を出してから、言った。

「そういえば、よろしかったのですか？ お嬢様」

「何がかしら、咲夜？」

レミリアはいつものカフェで、いつも通りにカウンタ―に座って何故か、今しがた咲夜に出された「きな粉餅」を食べていた。一つ一つを爪楊枝で刺しては、口に持つていき。血を吸うためにある牙で餅を咀嚼する。もぐもぐと噛んでからごくりと食べる。

「それで？ 何かしら」

カウンタ―の向こうでコーヒーを挽いている咲夜にレミリアは言う。午後の昼飯時を過ぎて、店内にはほとんどお客がない。居るとすれば、店の隅っこで頭を抱えて「よくわかる！ 数学Ⅲ」と書かれた参考書を熟読している、長い髪の女性だけである。ちなみに彼女は一杯コーヒーで二時間粘っている。恥ずかしそうに。余談だが、その女性はレミリアがよく「無職」と言っている。

「いえ、妹様のことですわ。外に出して……それに勝負のことも」

「いいのよ」

レミリアは傍らにあつたカップを持って、口に持っていく。中には砂糖の入ったコーヒー。彼女はそれを少しだけ飲む。それから咲夜にこたえる。

「フランは、家にいるときにはずっとゲーム、ゲーム、からのアニメ、マンガ。……流石に姉としては、どうかと思うわ。これも全て美鈴が甘やかした結果ね」

「でも、お嬢様。こちらに来てからはかなり明るくなつたのではないですか？ あの門番には少々頭が痛くなることもありませんが……」

「それは、まあそうね……でもね、咲夜。私は別にフランへ意地悪しているわけじゃないのよ？ この機会にもっと外へ出てほしいと思つているから、ちよつと焚き付けただけ……。だから、この勝負に私は何もしないわ。フランがあ的那天の物を見つければそれでいいし、駄目なら言つたことは実行するだけよ」

レミリアは軽い口調で言うが、フランには約束を守らせると明言する。彼女がそう言つたからには必ず実行されるのだろう。彼女は頭の片隅で、有料チャンネルを入れた時の経費についても考えている。つまり、フランが勝つてもいいようには考えているのだ。

咲夜は手元でコーヒーの豆を手動のミル（コーヒー豆を挽く器械）を使って挽く。ハンドルのついたそれを彼女は何度も回し、ごりごりと店内に微かなコーヒーの香りと

ともに音が響く。そのままレミリアに言う。

「外へ出るのは、確かにそうですね。この頃は夜に美鈴が連れて回ることがありますが……たまにですし。でもお嬢様、私が言っているのは少し違いますわ」

「……へえ、何か他にあるの？」

「他にと申しましたも……」

咲夜は窓を見る。店の窓にはブラインドがかかっているが、外の様子程度はわかる。快晴と言っているだろう。道行く人々は日傘をさしているものや、何故かタオルを頭から垂らしているもの。いろんな「暑さ対策」をしている。しかし、咲夜が心配しているのはそんなことではない。

「お嬢様も、妹様も。この天気では……」

「ああ」

それで合点がいったとレミリアは頷いた。先ほどプリンを頼んだら「きな粉餅」が出てきた意味はさっぱり分からないが、これについては説明を受けなくてもわかる。強力な力を持つ、吸血鬼としての弱点を咲夜は言っているのだろう。

「陽に『焼ける』と言いたいよね？」

「はい」

レミリアはそれを聞いて、カウンターの椅子から降りる。サスペンダー付の半ズボン

だから、身は軽い。そのあたりも彼女はこの格好を気に入っている。力が弱まった状態で幻想郷でのいつも通りの服装は熱いし動きにくいのだ。

レミリアは端っこでここそこそと勉強している女性をちらりと見てから、入り口の前にいく。それからドアを開けて、日傘もささずに外へ出た。

「お嬢様！」

咲夜はその瞬間にカウンターの飛び出す。その前にレミリアの締めたドアについた鈴が、「からんからん」と鳴り。吸血鬼の少女は外へ出ていく。すぐに咲夜も外へ飛び出した。先に書いた通り、外は快晴。身を守るすべもなく太陽の光にさらされれば、レミリアとて無事では済まない。

だからこそ、いつも冷静な咲夜が慌てて、外へ飛び出た。しかし、彼女の眼には信じられないものが映る。カフェの中からいきなり出たので、少し光がまぶしい。

「どうかしら？　まあ、平気よ」

レミリアは店の前に歩道の真ん中に立っている。その身に太陽の光を浴びて、輝くような白い肌が、麗しい。彼女は両手を広げて、どうだと言わんばかりに赤い眼を光らせる。それに咲夜は困惑した。

「ど、どういふことですか？　お嬢様」

「あら、なんだかあなたが、うろたえるのは面白いわね。この頃は変なはずらばかり

だったから。でも何故か、なんて私も知らないわ。とにかく、陽の光は今の私には害じゃないわ。とはいっても、太陽なんて嫌いだけど」

レミリアは顔をあげて、光り輝く太陽をまぶしそうに見る。顔が熱くなる。

レミリアの横を、サラリーマン風の男が通り過ぎていく。道の真ん中で手を広げて何をやっているんだと顔に書いてあった。無論、それを注意などはしない。レミリアは子供のようだが、外国人のようでもあるので関わりにくいのであろう。ある意味日本人の特性でもある。

それでもレミリアは続ける。咲夜は困惑顔である。

「おかしいと思わない？ 咲夜。私たちが幻想郷に入ったのはつい最近よ。その前には外の世界で暮らしていたのに、なぜ私たちも他の連中のように力が落ちてきているのか……。それがぴゃー！」

レミリアが言いかけると、彼女のお尻のあたりから音楽が鳴り始めた。それは、彼女のポケットに入っている道具から出ていた。レミリアは変な声をあげてしまったことにバツの悪さを覚えながら、ポケットから「スマートフォン」を取り出す。

画面には「アリス」と書かれている。レミリアは咲夜の手前、切るかどうか迷ってから、出る。

「何かし……」

『何かしら？　じゃないんだけど。約束は三時だったわよね？　もう過ぎているわよ。そんなことじゃ、時給を減らしたくなるんだけど』

「……あなたがいくら儲けているのか、河童にリークしてもいいのよ？」

『……あなた。鬼？』

「吸血鬼ね、一応は鬼のような田舎者ではないけれど。……まあ、今から向かうわ。ちゃんと、茶菓子くらい用意しておくのよ？」

『私もい、一応の話で言えば、雇い主はこっちなんだけど。あなたが雇い主側なんて、信じられない言いぐさね。とりあえず、急ぎなさいよ』

「わかったわ」

レミリアはそれだけ言うと、通話を切る。ちらりと困惑顔のままのメイドを見てから、ふうと息を吐く。そして彼女はできるだけ何もなかったように言う。「アリス」との関係は咲夜にも言っていない。

「ちよつと用事ができたから、もう行くわ。……聞いているかしら、咲夜」

「あつ、はい。……なんだか、親しげにお話をされていたようですが、どなただったのですか？」

「ただの下僕よ」

レミリアは咲夜の疑問には明確に答えることなく、踵を返す。手をひらひらとさせる

のは、カフェには戻らないという仕草。その姿を咲夜は見送る。彼女も疑問は心の中にしまつてから、主人の後ろ姿に頭を下げる。

そのころ、文はフランから返して貰つたデジタルカメラに「さつきまでなかつた傷」があつたことで、心理的な修羅場に陥つていた。

「……………」

文はデジタルカメラを持つたまま、公園の中で固まる。彼女の前ではフランが怪訝そうな顔で文の顔を覗き込んでいる。彼女は自分が逃走している時にデジカメを「落とし」たことであつた傷に気が付いていない。

傷は小さなものである。カメラの端っこの方が少しだけ削れている程度であるが、このデジカメは文が一月間の昼食を犠牲にして、その上であらゆる節制を行ったことであつたものだ。そこにある小さな傷は、心の中に大きな傷を生み出す。

文の様子に後ろから椀が「キットカツツ」というチョコを食べながら覗き込んできた。

「どうしたんだ？」

「いえ、ここに傷が……………」

「どこに……………ああ。別にいいじゃないか、この程度」

文は傷を指さして、椀に示す。だがこの白い髪の少女は、全く文の心の機微に気が付かずに言う。まさか目の前の物を買うために、誇りある鴉天狗である文がいつも行くカフェのメイドから「パンの耳」を詰めた袋をもらっていたことがある、とは分らない。節制している時には「腹に入るもの」であればご馳走である。

だが、文は椀にわかりやすく説明した。文は笑顔である。心が愉快とは限らない。

「このカメラ、六ヶタですよ？」

「……………ろつけた？ 一、十……………ば、バカじゃないの!？」

文の言っているのは「値段」のことである。

やつと事の重大さがわかった椀が女性らしい言葉を使って驚く。それほど、彼女には金額が衝撃的であった。それもそうだろう、なぜならば椀の一月分の生活費がこのデジタルカメラ一つで賄えるのだから。それでも椀は恥ずかしさを隠してコホンと咳をする。驚いたことを隠したのだ。

少し離れたところでははたてが、あまり見たことのない「ブランコ」に興味を引かれて観察している。座ってみたりしているが、少し恥ずかしいのかそのまま遊んでみたりはしない。その様子をチラチラとフランは興味深げに見ている。

そのフランを文がチラチラと見ていて、文が持っているデジタルカメラを椀がチラチラと見ている。そして文とフランと椀が何を話しているのか気になるはたてがチラリと彼女

達を見て、変な流れが一周する。

文がフランを見ているのは、どうしようかと考えているからだ。責任を取らせるようなことはできそうにもない金髪の少女だ。彼女の姉に代償を払ってもらいたいような気もするが、恥ずかしい過去を拡散されるのは避けたい。

それでも文はこのままで終わらせるようなつもりはなかった。確かに椀が最初に反応した通りに傷自体は小さなものだった。しかし、文のデジカメは彼女にとって大切なものだ。子供がやったとはいえ、ただで済ませる気はない。

「椀」

「あ？ ん？」

いきなり文に呼ばれて椀が気のない返事をする。だが、文はそれに構わずにびしっとフランを指さした。金髪の少女はいきなりすることに、驚く。それでも文は続ける。

「フランドールさん！ おにごっこしましょう。『鬼』はこの椀です」

「えっ!? おにごっこ?」

フランはいきなりの文の言葉に眼を大きく開く。椀は一瞬何を文は言っているのかわからずに呆ける。しかも天狗に対して「鬼」などとは皮肉にすらも聞こえる。しかし、文はある目的を持って叫ぶ。

「さっ！ 早く逃げてください。あくまで公園内だけですよっ」

「う、うん」

フランはそれで「逃げ出した」。文は杖を振り返って言う。

「追いかけて！」

「あ、ああ」

文の剣幕に押されて杖も、逃げるフランを走って追い始める。文はそれを見ながら素早くデジカメを起動して、構える。そしてまず、一枚写真を撮った。そこには杖がフランを追う姿が映っている。

そう、文はフランを使ってとあることを思いついたのだ。確かに傷は手痛い、それを言い募るのははつきり言っても天狗として情けない。ゆえに、文はフランを責めることなく、彼女から「利益」を取る気になったのだった。

フランは走る。その後ろから杖が追う。狭い公園内は直線的には走ることができないので、フランの足でも杖から早々追いつかれることはない。それにフランはくねくねと蛇行しながら逃げるので、この天狗の用務員も苦戦した。

「ハ、の」

杖はたたと加速する。その伸ばした手がフランの襟首をつかみそうになってから、フランがいきなりカーブしたことで掴み損なう。そして勢い余って、彼女は足をつんの

めらせこけそうになる。

「うわつと」

椀は何とか踏ん張るが足が止まってしまった。横を向くと数歩先にフランがとどまって、彼女を見ている。その顔は何でこんなことをしているのかわからない困惑と、こけそうになった椀への心配が張り付いている。

小さな変化だが、フランは人のことを「心配」できるようになっていた。だが、往々にして純粹なものは邪悪なものに影響されやすい。

すすつと文がフランに近寄る。そして椀を指さしながら、フランに耳打ちをする。それで見える見るうちにフランが眼を輝かせても「いいの!？」と文に言う。もちろん、文は「いいんです」と返事する。

フランは椀を見て言う。その顔はすでに彼女へ対する遠慮はない。その代わりに自信と期待でにやけている。

「モミジ！」

フランは文に言われたのか、椀の名前を呼ぶ。

「このおにごっこで捕まらなかつたら。好きな物を買ってもらうからっ！ ちゃんと買ってくれないと文が『あのこと』みんなにばらすって」

「待て」

「絶対捕まらないから！ でもあのこって何？」

「待ってっ!」

椛は文に騙されている少女を止めることができない。このまま捕まえることができないかなし崩し的に生活が崩壊する。子供の欲しい物というのは、たいていがゲームだとか漫画など安価な物であるが、すでに椛の財布事情は「花の妖怪」により壊滅されている。これ以上出費すれば、死ぬ。

一応椛は、自分がとあるぬいぐるみを集めていることをばらされることをあきらめれば、生活は崩壊しない。代わりに羞恥心からいろんなものが崩壊する。

そんなことは露知らないフランは椛から距離を取る。椛は「まて!」と三回目の言葉を言いながら、フランを追いかける。フランは遊びであるが、椛は生活が懸かってしまっている。文はその様子を薄く笑いながら、写真に収める。

日差しの中で逃げるフラン、それを必死で追いかける椛。そんな写真が、デジカメのモニターに映る。とりあえず文はそれを保存して、彼女達の動きを観察する。また、よいアングルで撮れるように構える。

しかし、公園内は狭い。如何にフランのほうが小回りが利くとしても、体格的に椛のほうが有利なのである。身体能力は筋肉の質も重要ではあるが、純粹に歩幅の大きさなども換算される。だからこそ、フランが逃げるには工夫が必要なのだ。

フランは公園の真ん中にある、滑り台に上る。椀はやつと捕まえられそうになったところで、取り逃す。だが、小さくても椀には手の届かない滑り台も、逃げ場のない場所でもあった。

「はい！ こつち見てください！」

「えっ」

フランを呼ぶ声。それは文の声だった。フランは滑り台の頂上で振り返った。そこを文に写真に撮られる。それから文は椀に話しかける。

「椀。もう少し、右のほうに行ってください」

「右？ な、なんだいきなり」

反射的に椀は動く。その一瞬で文はフランにウインクする。片目をパチリとつむつて、合図したのだ。今、椀は文に気を取られている。右に動けと言うのは単なるブラフに過ぎない。フランもそれに気が付いて素早く動いた。

フランは滑り台から「滑った」。銀色の金属部をお尻で滑る。目の前には砂場、子供が怪我しないような設計なのだろう。フランはそこに降り立って、砂を蹴って逃げだす。

椀はそれに気が付いて、しまったと臍を噛む。文にしてやられたのだ。せつかく逃げ場のない場所へ追い詰めたというのに、虎を野に放つのではなく吸血鬼を広場へ放ってしまった。

「あやあ！」

「なーんですか？ ほらほら、捕まえないと大変ですよ」

腹黒い鴉天狗を楯は睨みつけてから、急いでフランを追う。フランはブランコ方面へ逃げて、ブランコを囲む仕切りを飛び越える。動くブランコに当たらないように作られているのだろう。しかし、楯はその仕切りのせいで、減速せざるを得ない。

「あんたたち何やってんの？」

はたてが逃げてきたフランに聞く。はたては先ほどからずっとブランコに座ったまま、蚊帳の外でフランたちを見ていた。だから、少々覚めたような口ぶりとは裏腹にちよつとだけ、笑っている。やつと輪に入れたような気がしたのだ。

そのはたてがブランコに座っている瞬間を文はシャツターに収めるが、誰も気づかない。それどころか仕切りを乗り越えた楯にはたてとフランの注意が向く。

フランははたての後ろに隠れた、つまり盾にしたのだ。楯ははたてが邪魔である。

「はたて！ 邪魔だ」

「なつ、なによ。その言いぐさ」

ストレートな物言いにはたては立ち上がる。いきなり罵倒されたようだが、楯は生活が懸かっているのだ。そんなことに頓着している余裕などない。邪魔なものは邪魔である。それでも楯ははたての後ろに回りこもうとする。逆にフランはそれから逃げる。

「まてっ」

「いやよー」

権とフランはぐるぐるぐるぐるはたてを中心に周回する。はたてはそこから一步も動くことができない。この奇妙な状況を文は、撮る。しかしその行為がはたてをはっきりさせた。

(よ、よくわからないけど。絶対文が変なことを考えているに決まっているわ)

付き合いが永いからか、はたては文のたくらみに勘付く。その内容は流石にわからないうが、ろくでもないことを考えているに違いない。だからこそ、この状況を終らせようとはたては手を伸ばした。フランを捕まえようとしたのだ。しかし、掴み損なう。

先に書いた通り、フランと権ははたてを中心に周回している。それはつまるところ、はたての腕を伸ばしたところに権が「走ってくる」わけである。それにフランは背が小さい、だからこそはたての手も少々下向きである。

「げふうお」

はたての腕が権のミゾオチを的確に攻撃する。正確に言えば、伸ばしたはたての腕に権が全力で突撃しただけである。だからこそ権は自らの勢いでダメージを受ける。もちろんはたても痛い。権はその場でお腹を抱えて膝をつく。

その間にフランはにげだす。権とはたての文は写真を撮る。

はたては椀を気遣って声をかけるが、椀の返答は、

「うえ、ええ?」

である。眼には涙がたまつて、息が苦しそうであった。冗談ではなく、辛そうであるが彼女は生活の為によろよると立ち上がる。はたてはそれに凄まじいほどの罪悪感を覚えて、椀にいう。

「あつ、えつ、し、仕方ないわね。私も加勢してあげるわ」

「……………」

余裕のない椀ははたてを赤い眼で見る。赤い眼とは妖力などで赤くなっているのではない、純粹に涙目なのだ。声を出すことはキツイ。はたてはその眼から逃げるように顔を背けて、頬を搔く。

「と、とりあえず。そのこの吸血鬼……あれ、そういうばなんで太陽の下で……ま、まあいいわ。覚悟しなさい」

「もじゃ毛も遊んでくれるの!?!」
「もじゃ毛!?!」

はたては多少ではあるが、くせ毛である。フランは名前を知らないからそう、彼女を表現した。だが、その顔には嘲りなどの侮蔑の感情はない。

フランはすでに遊ぶのが楽しくなっていて、勝つたらどうのということはどうでもよ

なくなっていた。彼女はくるくると太陽の下で、身を回転させる。動くことが、誰かと遊ぶことが堪らなく楽しい。

「いいですねー！」

文はそれも写真に収める。今の光景は記事にしてもいいかもしれないと彼女は思う。しかし、まだまだ文は写真を撮る気だった。後々に役に立つようなものをできるだけ、回収しておきたい。

はたてと椀は二人がかりでフランを追いつめる。しかし、中々にフランは曲者であり、小さな茂みや木陰を作ってくれている木を使って、賢く逃げ回る。天下の天狗が二人でかかっても捕まえることができない。

「そっちにいったわ、椀っ」

汗をかいてはたてはフランを追う。言われた椀はフランの目の前に立ちふさがる。だが、フランとて毎日のように姉が見る「甲子園」を見ているのだ。だから勝手に体が動いた。身を沈めて、足から滑り込む。

「なっ、スライディング！」

驚愕する椀の股の間から、フランは彼女を突破する。椀の肌にも玉の汗が浮かび、作業の前を開けている。すでに勤務中である椀の昼休みなど終わっているのだろうか、彼女も夢中になって忘れてる。

「ちよつと、どいて！ 椀」

「うわっ！ 来るなっ」

フランを後ろから追っていたはたては、勢い余つて椀に突つ込む。はたても身を飛ばっていたからシヨルダータツクルのようになった。もちろん椀のミゾオチに肩がクリーンヒットする。

「ぐふう」

椀はその場でうずくまる。流石にはたても周りの蝉の声がクリアに聞こえるほどの罪悪感を覚え、眼が泳ぐ。その様子もかまわずに文は写真に撮る。

先ほどと同じように見えるが、今度は少し違った。椀を抜いたフランだったが後ろを振り向いて、苦しんでいる椀を見つけると、心配そうに近寄ってくる。

「大丈夫？ モミジ」

「……」

椀は何も言うことはせずに、近寄ってきたフランの足首を「つかんだ」。それで鬼ごっここの結果は決まった。

「あっ」

フランはそのことに気が付いて、頭を搔く。下を見ると、また涙目になっている椀が口元に笑みを浮かべている。ちなみにこのことを狙ったのではなく、気力ではたてから

の攻撃に持ちこたえている時に、近づいてきたフランへ臨機応変な対応をただけである。最後は生活への執念が勝利した。

「な、なんだ狙っていたのね、さ、流石は権」

そんな権をほめているようで自己弁護をしているはたて。権が狙ってやったのなら、先ほどのことも問題はなはずである。しかし、フランは捕まったというのに、心底嬉しそうに笑顔になる。

「楽しかったわ」

その笑顔に、はたても権も毒気を抜かれてしまう。

「いやあ、たくさん写真が撮れましたよー」

文はぱちぱちと拍手をしながら、近づいてきた。三人は彼女の方をみるが、フラン以外は胡散臭げにみている。仲間、それも基本的に同じ種族にこのような態度を取られるのは、ある意味では才能であるのかもしれない。

「結局はあんたの思い通りだったのね、文」とはたて。

「ええ、もちろん。今日はとても良い日です。あの苔頭を除いてですけど」

「苔? まあ、なんのことかわからないけど、あんた。そんなにこの吸血鬼の写真を撮ってどうする気なの?」

「えっ?」

はたての言葉に文は笑った。屈託のない笑顔、のはずなのだがはたては彼女の後ろに闇が渦巻いているように見える。それもそうだろう、この鬼ごっこは文が「利益」を取るためにやったのだ。

だからこそ、文は黒く笑う。そしてその真意を話す。

「確かに、フランさんの写真もいっぱい取れましたけど……」

いつの間にか、親しげにフランを呼ぶ文。本人も無意識である。

「はたてと椀の恥ずかしい写真もいっぱい取れました!」

「!」

「!」

はたてと椀ははっと文を見る。そう、この鴉天狗は最初からフランだけを被写体にしてる振りをしていたが、その実仲間の弱みを握ったのだ。文のデジカメにはいい年した二人の女の子が楽しそうに「鬼ごっこ」しているデータが数十枚ある。

椀がよろよろと立ち上がって、真っ赤な顔で言う。今度は羞恥からそうなった。

「お、おまえ最初からそれが狙いで」

「おや、椀。お昼休みはいつまで続くんですか?」

「げっ」

やっと自分が勤務中だと気が付いた椀は慌てて、懐から懐中時計を取り出す。腕時計ではないのは趣味だろうか。ともかく時間を見て、彼女は脂汗を浮かべる。それでも文を糾弾したいが、仕事に戻らなければまずい。

「く、くそ。地獄に落ちろ、文！」

椀はそう言い捨てて、全力で公園から走り去っていく。文はその後ろ姿を見ながら、言う。

「地獄は勘弁ですね。鬼様もたくさんいるそうなので」

勝利からのほくほく顔で言う文。それを見てはたてはため息をつく。

「もう……今回はしてやられたわ。でも文、それ悪用するんじゃないわよ。するだろうけど」

「もちろん！ あっ、ところではたて」

「そのもちろんの意味が気になるんだけど、何？」

「実は私のUSBがないのですが、はたての部屋に落ちてませんか？」

「ないわよ。そんなの。あればRhineしているし」

「そうですよね……わかりました」

文ははたてを信頼している。それは信義といったたぐいの物よりは、彼女の性格上変な嘘は付けないと思っっているのだ。長い付き合いだからこそ、その性格は把握している。

ただ、フランははたての言葉を聞いて、言う。

「文、このもじゃ毛も容疑者なの？」

「ええ、もう一人赤い髪の人がいますけど、たぶん違いますね。だからこのもじゃ毛が最後の容疑者ですよ」

「あんたら、喧嘩うっているのかしら……」

フランははたてを無視して、顎に手を当てる。頭の中でパズルが出来上がっていく。彼女は今日一日遊んでいるようでも、ずっと鋭い感覚で物事を見ていたのだ。そしてフランは言う。

「文！ 犯人が分かったわ」

「えっ、でもUSBは見つかってませんよ」

「大丈夫よ。犯人は見つかったから」

「それ大丈夫なのですか？ 何も解決していない気がするのですが」

「とにかく容疑者を全員、集めて！ あっでも眠いから、明日」

「……」

文はそれで小さく笑う。ずいぶん悠長な探偵だとくすりとする。はたてはなんのことかわからない。彼女も夜ご飯を作るために、そろそろ帰らなければと思っていた。

夕日が世界を染めていく。

暗い夜に向かう前、最後の輝きを残して、太陽が沈んでいく。それでもなかなか沈まないのは夏だからだろう。

「花の、妖怪めえ」

文はふらふらとする足取りで歩いていた。財布の中からは一円もないから、電車など使えない。一応定期はあるが、フランを置いて行くわけにいかない。そして、そのフランはすでに文の背中ですやすやと眠っている。

「遊び疲れたんですね、本当、今日は遊んだだけな気がします……」

文はフランを抱えたまま、歩いていく。たとえ、フランが子供だろうと、重い物は重い。だが、その文の背中でフランが言う。

「……あやあ、それは、食べれない、わ」

「おやおや、夢の中で私は何を食べているんですか？」

寝言に聞く文。返答など期待してはいない。だが、フランは顔を綻ばせて言う。
「けむし」

「大丈夫ですよ、絶対食べませんから」

文はとフランは夕日の光を浴びて、帰る。

13話

妖夢は歯を磨きながら、テレビを見ていた。

淡い緑色のパジャマに濡れた髪。カーペットにだらしなく座ったまま、歯磨きをする彼女は、まさに女の子だった。多少疲れと誰も見ていないことで油断もしている。

芸能事務所から用意された、一人暮らしでのワンルームマンションにただ一人。そうはいっても、ほとんど家にはシャワーを浴びるためと寝るためにしか帰ってこないのだから殆ど物はない。

「ゼーロー」

テレビから「ゼロ」という音が聞こえて、ニュースが始まる。内容は政治から始まり、最後には今度アジアで大きなスポーツ大会が行われるといったものである。だが、それが全て終わる前に妖夢はテレビを消してから洗面台に行き、うがいをする。

妖夢は洗面台で歯磨きをしまし。眠たげな眼で寝室へと向かう。体が鉛のように重く、今すぐにでも眠りたい。しかし、彼女はそれでも眼をこすりながら、寝室のドアを開けた。それでもすぐにしつかりと整ったベッドへはいかない。

部屋に備え付けられたシンプルなデスクに向かう。妖夢はそこに座ってから、引き出

しを開ける。引き出しの中にも無駄なものほとんどなく、一冊のノートと筆箱が入っている。彼女はその二つを出して、ノートを開く。

——今日は、天狗がやってきた。斬り損ねた。次は必ず。

妖夢が書いているのは日記である。大体毎日の恨み言が書かれている。それも天狗の割合が多い。彼女は毎日忘れないようにこれを書いている、たまにノートを引きちぎりそうになったりするが、我慢している。

「あれ？」

つらつらと本日反省を書いていると妖夢はあることに気が付いた。彼女は机から立ち上がって、仕事場に持っていくカバンを引き寄せる。机の横に置かれていたのだ。

妖夢はカバンの中を探す。彼女は一冊のノートを探しているのだ。それも日記同様にあらゆる「想い」を書いたノートである。仕事場に忘れてきたのかと、妖夢はくりつとした瞳をぱちくりさせてから、首をかしげる。

可愛らしい動作だが、やりたいことは殺伐としている。彼女はおっとりとした主人から離れ、その上天狗詐欺にあり、全国区で恥をさらしたことで、いろいろとたまっているのだ。

「じゃにやったのかしらっ？」

もちろんのこと、妖夢の探しているのはフランの持っている「斬るノート」である。だ

からこそ探したところでありはしない。

そんな時に、妖夢のカバンの中からスマートフォンを着信音が鳴った。慌てて、妖夢はカバンの中を探して黒のカバーを付けたそれを取り出す。画面には「鴉天狗」と書かれていて、妖夢は眼を見開く。完全に眠気も吹っ飛んだ。

妖夢は電話に出る。

「はい」

『あつ魂魄さん！ こんにちは！』

「……ええ、こんにちは」

顔の筋肉が勝手に引くつく妖夢だが、ここはぐつとこらえた。電話の向こうの鴉をおろす手段はないのである。

『いやあ、今日はすみませんね。いきなり押しかけてしまいました』

「気にしないでいいわ。また、来てほしいくらいよ」

『もちろんまた取材にうかがわせていただきますよ。でもですね、魂魄さんにちよつとだけ御用がありました』

「なにかしら。できるならば会って話したいと思つてるところね」

話した後に斬るのは、この会話からは矛盾しない。妖夢はこの会話中に一度も嘘は言っていない。本当に会いたいと思つているし、本当にもう一度会いに来てほしい。ま

るで恋人への感情のようだが、そんなに生ぬるい話でもない。

しかし、そんなことは電話口の天狗とて理解している。

『いやあ、明日ですね。十六夜さんのカフェに来てもらいたいのですが、夜の8時くらいにですね』

「……なぜ？ 仕事があるから難しいかもしれないわ」

多少警戒し始める妖夢。ほいほいとこの電話の相手を信じたことで、全国の妖夢ファンの前で愛を歌うことになったのだ。会いたいのが、騙されるわけにもいかない。天狗の用意した場など罠に違いない。それでも妖夢は来ることになる。

なぜならば、撒き餌があるからだ。

『それはですね。私の知り合いの名探偵が、とあるアイドルさんのノートを見つけてくれました。それを返したいなあと思っっているんですよ！ もしかしたら同じアイドルの魂魄さんは……持主を知っているかと思ひまして、相談したいのです』

「……！」

妖夢は臍を嘔む。まさか、最悪の相手にノートがわたると思ってもみなかった。

『来ていただけない場合は……私としても持主さんに返すために新聞の広告欄へノートを載せてみようかなあ、なんて考えているのですが……』

妖夢は、苦虫をかみつぶした顔で明日何があっても行くと、天狗に伝えた。

シャープペンをくるくると回して、風見幽香は居間で家計簿をつけている。すでにその横では蒲団が敷かれて、そこに3人の少女が安らかな寝息をたてて寝ていた。幽香は電気は小さくして、彼女達が起きないようにしている。

それに家計簿などという俗的なものをつけているとは、幽香も誰にも見せたいなどとは思わない。彼女はキリの良いところで家計簿を閉じて、傍らに会ったレシートと一緒に金属の箱にいれて、それをテレビの裏に置く。その上から布をかける。

この行為を行う、幽香は、髪をまとめている。つまりポニーテールである。彼女は桃色の寝間着を着て、小さく欠伸をする。それでも彼女の足もとで寝ている、少女達を起さないように声はださない。

「う、ううん……」

寝ている一人、黒髪の少女のスターが寝返りをうった。幽香は腰をかがめて、そのお腹からずれたタオルケットをかけなおす。その顔はつまらなさげではあるが、手つきは細やかである。

幽香は静かに台所へ向かう。冷蔵庫をこれまた静かに開けて、中から麦茶を取り出して、コップに注ぐ。それを飲んでふうと少し、気の抜けた息を吐く。顔も少しだけだら

けているのは、妖夢と同じように誰も見ていないからだろう。

それでも明日も早いのである。幽香はコップを洗って、しっかりと拭いてから食器棚に戻す。それから彼女は自分も寝ようとして、携帯が鳴った。

「……………」

小走りで携帯を置いてある場所まで行き、電話を取る。誰が相手かは確認してはいない。もちろん確認して、この夜に電話してきたことを後悔させてやるつもりである。寝ている者が起きたら、そう幽香はめんどくさいのだ。

「どこの馬の天狗かしら」

『うまの天狗?! それを言うならば馬の骨じゃないですか??』

「ああ、なんだ。馬の骨か……こんな時間に何の用かしら」

電話口に出たのは今日も懲りずに来た、あの黒髪の天狗だった。だが、幽香は彼女を「馬の骨」という。ちなみに幽香は静かに居間から出ていく。

「こんな夜に電話してきたということは……それなりに緊急の用でしょうね? もしもくだらない理由はなら切るわよ」

『あ、あやや。切らないでください。用事があります!』

「あなたの髪を切るかは……内容次第ね」

『えっ? 切るって電話じゃないんですか……ま、まあいいです。明日の夜8時に十六

夜さんのカフェに来てください』

「いやよ。今度バリカンを持ってきなさい」

『じ、持参ですか!? く、くこの、い、いいんですか? あなたが働いているところの写真を私は持っているんですよ。それが拡散されてもいいんですか?』

天狗は、脅してしまった。花の妖怪を。

幽香はこめかみに筋を立てて、につこりと笑う。無論、電話の先にいる天狗には見えないが、声のトーンが少しだけ明るくなった。彼女は相手を敵と認識したら容赦などしない。その点は妖夢とは違う。

「わかったわ。必ず行くわ」

『……ま、まあ当然ですわ』

強がる天狗の声に更なる怒りを覚えた、幽香。めきめきと携帯が音を立てるのは、なぜだろう。それでも幽香の顔はさらに笑顔になる、心底楽しそうに口元を綻ばせて、言う。

「そうね、当然明日はあなたに会うわ。何があろうともね。そこにあなたがいなくても、家まで行ってあげる。ああ、そうだ。明日のお昼ご飯できるだけいいものを食べておくといいわ。夜からは食べられないかもしれないから……それじゃあ」

幽香は携帯に言う。その赤い唇が、小さく動く。

「明日、ね」

「負けましたー」

紅 美鈴はコントローラーを投げ出して、敷いた蒲団の上に寝転がった。その横ではフランが勝ち誇っている。蒲団は二つ、並んで敷かれている。その前には小さめのテレビ。そしてさらにその前には「ウイー！」というゲーム機。

フランはきらきらした目で言う。

「美鈴は、アイクを使うけど動きが遅いからもつと、速く動かないとー！」
「妹様は強いですから、私じゃもう敵いませんよ……」

美鈴もフランも互いに寝間着である。寝る前に一勝負とフランが言い出して「スマブラ」を起動させたのだ。それで美鈴はもう何度も負けている。実際の戦闘ならばともかく、ゲームではフランに勝てない。

しかし、フランは少し真面目な顔をして言う。

「だめよ、この前には咲夜が相手してくれたけど……負けちゃった」

「え、ええ？ あの人、本当に何でもできるんですね。……よし、じゃあ妹様」

「えっ」

にこつと美鈴は笑う。彼女は起き上がって、コントローラーを握り。言う。

「特訓しましょう！ 今度は負けないように……」

と言ったところで、美鈴は気が付いた。テレビの液晶が一瞬黒く反転した時に、見えた。その一瞬に「メイド」が「はよ寝ろ」と言う顔で美鈴の後ろに立っていたのだ。あわてて、美鈴は後ろを見る。

誰もいない。しかし、部屋のドアが少しだけ開いている。美鈴はぞつとして、息をのむ。まさか誰かいたのではと彼女は考えてしまう。

「めーりん。特訓ね！ さあ、やりましょう」

無邪気にフランは言う。だが、美鈴はこれ以上続けると何かとてもまずいことになりそうな気がした。だから言う。そろそろゲームはやめなといけないことはわかった。

「えっ、あつ。そ、それなんです、実は、妹様は今日どこに行かれたんですか？ なんだからすごく疲れてかえってこられたと聞きましたけど」

「えっ、うん。なんだかいろんなところにいったわ。白髪と緑の苔とあつ公園で椀と遊んだ！ あと、アヤともずつといたわ」

「は、あ」

美鈴は頭の中がこんがらがってくる。特に「白髪」「苔」「紅葉」とは何だろうと考え

る。おそらく誰かのことなのだろうが、フランの説明が抽象的すぎて全くわからない。まさか「権」とはぱつと頭に浮かばない。紅葉のことかと彼女は思う。

フランはあれから、射命丸 文に背負われてカフェに帰ってきた。それからまた、メイドの背に乗って帰ってきたのだ。そのせいでよく眠ってしまい。今は元氣いっぱいである。だからこそ、美鈴と遊びたいのだが、美鈴は遊んでいると身が危ない。

「妹様、よかつたら寝ながら話しませんか？ 今日のことを」

「……ゲームは？」

「あ、明日しましょう。私もサービスマスターとか、しているのであまり休みは取れませんけど。取れた時は一日中やりましょう」

「本当ね？ じゃあ、ね。そうだな」

フランはそのまま、話し始めようとしたから美鈴は慌てて、彼女に横になるようにたずなす。しゅしゅフランが横になると、ゲームとテレビを消して、消灯する。それから美鈴も横になる。

それでもフランも美鈴も寝るわけではない。

「それでね、アヤがこう、首を絞められてね」

「ははあ、その相手の妖怪は相当な手練れなんですわ……」

薄暗い部屋で、寝物語は続く。美鈴はフランの話の飽きることなく聞く。フランは飽

きることなく話す。流れる時間に時計の針が小さく音をたてる。それでも二人は、仲好く話している。

「だからね。私は、真犯人がわかったの！」

射命丸 文は湯船につかったまま、大きく伸びをする。今日一日の疲れがお湯に溶けていくような、そんな錯覚に陥るほどお風呂が心地よかった。それが逆に文自身が疲れていることを表している。

「ふああああ」

文は欠伸をして、太ももを手でもむ。張っている気がするが、原因はわかっている。長距離にわたって吸血鬼を担いで歩いてきたからである。どう考えてもそれが主な原因としか考えられない。

だから、文は湯船の中で自らの体をマッサージする。幻想郷ではここまで疲れたことは長い間なかった。それなのにこちらに来てからというもの、疲労は大なり小なりいつでもある。それはそれで、文としてはお風呂が楽しみになると思っているから、天狗は図太いのかも知れない。

「とりあえず、明日の手配はしましたから、ああ、後ではたてにもRhineを送つとき

ましよう」

文は濡れた髪を指でつまみながら、やるべきことが終わったか自問する。最後に小さく頷いて、湯船に口元までつかる。ぶくぶくと息を吐いてから、もう一度欠伸をする。たまにうつらうつらとなりそうなので、彼女は湯船から上がる。多少未練はあるが、純粹な眠気もある。

文は黒のシャツと半ズボンというラフな寝間着姿、ベッドへ寝転がる。体がベッドに沈み込んでいく感覚がとても心地よい。しかし、文はそのまま寝ることはせずに身をむくりと起き上がらせて、のそのそとベッドから離れる。

彼女はデジカメを取り出して、画像を確認する。

「いろいろ撮りましたねえ」

——魂魄 妖夢のスカートの中が見えそうな恥ずかしい写真。

——風見 幽香のエプロン姿。

——犬走 権の膝をついた姿。

——姫海棠 はたてのクビになったサラリーマンのごとくブランコに座る姿。

写真を見て、思わず文は笑ってしまう。一枚一枚が数週間に一枚取ればよいくらいのものであるのだが、今日は彼女の言う通り「いろいろ」撮れたといつていいだろう。そして文はさらに画像を検索する。そこにはとある吸血鬼の少女の屈託のない笑顔の写

真。

「これがいちばんですかね」

他に人がいれば言わないかもしれない素直な言葉を文が言う。彼女はデジカメを部屋の片隅にある机に置いて、言う。

「たかが一つのUSBで、とんだ騒動になりましたね……これなら、失くしてよかったです」

文は服掛けに掛けてあるスーツを見る。あの日は黒のスーツを着て行って、帰ってから服掛けにかけた。だからこそ朝に起きて壁に掛けてある紺のスーツの内ポケットを――。

「あれ?」

文は、何かに気づきかけて思考を打ち切る。いや、無意識に服掛けにある、黒のスーツを手にとって内ポケットを探る。そこには小さな何かがあった。文はそれを掴んで、ゆっくりと取り出す。

文の手元にUSBがあった。文は背筋が冷たくなっていく。勘違いとしか言いようがない。しかも明日、容疑者なる人たちが一堂に会するのだ。その中の二人は自分に敵意を持っているから、集まって自分が真犯人だとばれば命が危ない。

「……………」

文は何も見えていないことにしてスーツの中にUSBを戻して。はたてに連絡しよう
とスマフォを探す。明日ばれるわけにいかないと、彼女は想う。

さて、フランは真犯人を見つけることができるだろうか。

現れたヒーローの名は！ 前編

カフェに掛けられた、長時計がカチコチと音を立てる。短針はだんだんと八時に近づいていく。それは約束の時間が近いことを表している。

射命丸 文はスーツを着ていた。それでカウンタ―に腰かけて、コーヒ―を飲んでいゝる。ここはもちろん、十六夜咲夜のカフェである。いや、仲間内では「咲夜の」と言われているが、彼女は別に経営者ではない。単なるバイトであるのだが、もはやこの店は咲夜がいないと回らない。

文は前髪を指で払い、大きな瞳で時計を見ている。彼女は黒のスーツを着ているが、それには白いラインが入っている。どこか男性のような恰好ではあるのだが、細身の彼女には不思議と似合っている。大きな瞳も、黙っていれば可愛らしい。椅子の横にはバックが置いてある。

文の目の前では、咲夜が洗い物をしている。時間はもう夜の8時ともなれば、このカフェにお客としてくるものも少ないだろう。閉めていてもおかしくはないのだ。だがこれから数人の来客があるはずだった。

その来客は文の命運を握る者たちでもある。特に緑色の髪の少女とアイドル家業を

している少女の二人は、命に関わる。それを回避するためには、文は真実を隠しておかなければならない。まさか今日行われる、探偵劇の犯人が自分だとは気付かれるわけはいかない。

だからこそ、文は仕事装束でここに来たのである。それは本気を表している。彼女の足もとにはカバンもおいてある。それも普段から使っている物だ。

「……………おいしいですねぇ」

「そう？　ありがとう」

文はコーヒーを飲みながら言う、暎夜はちよつと笑つて返す。褒められても余裕のある返答が、店内に静かに響く。ここには今二人しかいないのである。主役の探偵もいない。だから洗い物のお皿が当たる音が、たまに響く。

そんな静寂で文は、自らの生きる道について考えていた。哲学などという高尚なものではなく、純粹に今日を生き延びるにはどうすればいいのかである。犯人とばれてはいけないが、どうせならば新聞のネタを収集したい。そこは仕事のプロでもある。

そんな時にからんからんと入り口の鐘が鳴る。そこから、灰色シャツにサスペンダーの半ズボンを着た少女が入ってきた。青みがかつた髪に赤い瞳、彼女はその眼で文を見つめる。

「ああ、もういたのね。……一応、結果については聞かないわ。それはそれで楽しみにし

ているから。もうあなただけでは、今回の勝負の結果が分かっているから……だまっ
てくれると助かるのだけど」

いきなり入ってきた少女は、レミリア・スカーレットである。彼女は文に「勝負の結
果」について言わない様に釘をさした。それで文はドキリとする。まさか、もう自分が
USB持っていることを知っているのかと思ったのだ。

「えっ？ な、なにを言っているんですか。レミリアさん？」

「何を言っているのよ、あなたはあの日にフランと一緒に、探しに行っただけでしょう？
じゃあもう見つかったか、見つかってないかなんて知っているはずじゃない」

はあ？ とレミリアは呆れたように返す。そこで文はレミリアとフランがやってい
るのは「USBを探す勝負」だと思い出した。元々犯人捜しではないのだ。しかし、フ
ランも犯人を捜し出せば「USB」は見つかると言い、どちらかというと犯人を捜して
いる。

それはともかく、文はほっとした。どうやらレミリアにはばれていないようである。
いや、わかるわけがないのである。と文は思った。

レミリアはいつもの席を文にとられていることに顔をしかめつつ。適当なテーブル
に座り、咲夜に紅茶を頼む。咲夜はそれに返事をして、用意をし始める。

咲夜は何かメモを取って、エプロンのポケットに会ったペンで何かを書く。そしてそ

れを射命丸に差し出した。一応レミアには見えない。

——USB見つかったのね？ その反応だと。

文はメモを見て咲夜を見た。少々油断した行為にしまったと心の中で思う。だが、文のどこかそわそわしている態度に咲夜は何かを察したのか追及はしなかった。

そんな時にまた入り口から誰かが入ってきた。

最初は知り合いの誰かだろうと文何気なしに見ただけだが、危うくコーヒーカップを落としそうになった。

マスクに合羽。黒いサングラス。本当に「誰か」が入ってきたのだ。その腰には大小の刀を差しているが、誰なのかさっぱり見当もつかない。

「き、きたわよ」

「だ、誰ですかあなた！」

不審者は文に「誰」と言われて驚いたのかあわてて合羽を脱ぐ。サングラスもとり、マスクもとると中から現れたのは銀髪で黒いリボンを付けた少女、魂魄妖夢であった。暑かったのか汗を書いているが、服装は何時もの緑のベストにスカートである。この格好を崩さないのはかたくなさを感じさせる。変装まがいの服装は、単にアイドルとしての「嗜み」であるのだろう。もはや彼女は出歩くときも警戒を怠ることができないのである。

妖夢は咲夜とレミリアを見て、ちよつと顔をしかめると「こんばんは」とあいさつする。本来であるならば、目撃者のいない場所で鴉天狗をあれしたかったのだが、それもできそうにはない。彼女はてきとうに空いた場所に行儀よく腰を下ろして。

「で、なんで私は呼び出されたのかしら？」

当然の疑問を文にぶつける妖夢。しかし、当の鴉天狗はコーヒーを飲みながら余裕ぶつた態度で、答える。

「まあ、まあ。役者さんもまだそろつていませんし。それに八時まで時間もありませんから、何か頼まれたらどうですか？」

「……」

妖夢は慥然とした表情をしたが、どうせ後で隙を見て斬ろうと思つていたので、咲夜たちの手前もあることからコーヒーを注文する。その間にレミリアも席について、いつも間にか用意されていたコーヒーを飲んでいゝ。もちろん砂糖はいれた。

レミリアが頼んだのは紅茶のはずだが、もはやこの吸血鬼の主人は一言も抗議しなかった。

それからしばらくして、また入り口のドアが開いた。顔を出したのは紅い眼をした、美しい女性だった。黒いシャツに白地を基調とした花柄のハーフ丈のスカート。それにすらつとした足にはヒールの高いヘップサンダルを履いている。

彼女も呼ばれた一人、風見幽香だった。今日は髪を一つにまとめ、ポニーテールにしている。肩にはトートバックと手にはいつの物傘を持っている。

「あ、き、来ましたね」

いろいろな感情から上ずる声で文が迎える。幽香は笑顔を作って傘を傘立てに入れて。それからトートバックからバリカンを取り出して――。

「ま、ままま待つてください。来てからいきなりそれはないでしょう!? お、かしいですよ買ってきたんですかそれ!」

「無駄な出費だったわ。本当に……ああ、でも安心しなさい。今朝テレビを見ていると高校球児も同じような頭をしていたから、恥ずかしいことはないわ」

高校球児の髪型というと一部例外を除いてほぼ8割は坊主頭である。それでも文がそれになって恥ずかしいかどうかは別の話だが、幽香の眼は本気だった。言っていることは単なる戯言だが、虚言ではない。

「お、落ち着いてください。きよ、今日呼んだのは他でもないんです」

「他だろうが何だろうがどうでもいいのだけど、これ使わないともったいないでしょう?」

「そうね、もったいないわ」と妖夢。

いつの間にか応援している半分霊を背景に幽香が文に近づいていく。その後ろでこ

そこそと金髪の髪の少女が店に入ってくる。しかし、文もただで坊主にされるほどやわな鴉ではなかった。咲夜は困り顔で、レミリアはわれ関せずと冷ややかに見ている。

「い、いいんですか。あ、あなたの写真をばらまきますよ。ほ、本当にいいんですか？」
「黒髪をばらまくわよ？ いいわね？」

文は「いいんですか？」幽香は「いいわね？」。わずかな言葉の違いだが、その強制力と実行への決意に大きな違いが存在した。だが、文の言ったとおり幽香と妖夢を呼んだのはもつと他の理由があるからだ。

「役者はそろったようね！」

突然の声。一同が見ると、部屋の隅の椅子に気取った格好で座る一人の少女。金色の髪に余裕のある笑み。トレンチコートはぶかぶかだが、探偵のようなたたずまい。フランだった。

「わあ、妹様いつの間にはいつてこられたのですか？」

わざとらしく咲夜もお膳立てしてくれる。それに満足するようにフランは頷いて、立ち上がった。その挙動をレミリアは見ているが静かにコーヒーを飲むだけだった。

フランはきらりと光る眼で文たちを見て、腰に手を当てる。そのまま自信たっぷりといった。特に前置きはなく単刀直入に叫んだ。

「犯人はこの中にいるわ!」

言い切った顔でフランは胸を張る。しかし碌に状況の説明をされていない幽香と妖夢は全く状況がつかめない。それでも聡明な頭脳を持つ幽香は、ここ最近でのフランと文の同行から見当をつけた。

幽香は文の胸倉をつかむ。

「ねえ、天狗」

「しゅ、種族名で呼ぶのはどうかと……」

「どうもでいいわ。それよりも、確か昨日、あの子を連れてきて『USB』がどうのと来ていたわね。それに犯人って言うのは、もしかしてあれかしら?」

幽香の手に力が入る。文のシャツにしわが寄る。

「あなたは私たちがそんなものを盗んだって言いたいのかしら?」

「……………」

幽香が真顔で文に聞いてくるが、その迫力にも鴉天狗は眼をそらしてしまった。そう、こうなることがわかっているからこそ文は「自分が犯人である」ことをばらすわけにはいかないのである。ばれれば二人がかりで殺られる。

妖夢もじろじろと見てくるが、文は「い、いやあ。私は単に名探偵の取材にきただけ

で、あなたたちを疑っているわけじゃないですよ」と長い言い訳をするだけである。

それはともかくフランはコホンと咳払い。彼女はそれから、レミリアに言う。

「お姉さま。ここで犯人を見つけたら。約束を守ってもらおうから！」

「……いいわ。フラン、逆も考えておきなさいよ？」

「だ、大丈夫よ真犯人はわかってるから！」

姉妹が静かに火花を散らしている時に、姫海棠はたてが入り口から入ってきた。八時五分前であるが、別の意味では遅刻している。彼女は胸倉をつかまれている文と睨み合っている吸血鬼の姉妹、それに手持無沙汰で仁王立ちしている妖夢を見て、状況が分からず困惑した。

「あれ、なによ？ どうしたの？」

聞くはたては入ってきて早々にいないもののように扱われてしまった。タイミングが悪すぎたといつてよい。さっきフランが役者はそろったといわれているが、彼女は換算されていないかった。

場を収めたのはレミリアであった。いや、収めたというよりは話を前に進めた。

「わかったわ。じゃあ話を初めてもらおうかしら。名探偵さん？」

「……」

レミリアの言葉にフランは頷く。幽香も仕方ないので文を離して、そのあたりに椅子

に座った。

フランが息を吐く。今から行うことに集中しているのだろう。だが彼女は目を見開くとびしつといきなり魂魄　妖夢を指さした。

「まずはあなたよっ」

「わ、私ですか」

「ええ、一番怪しいと思っていたわ」

いきなりの指名と突然怪しいと言われて妖夢は狼狽した。確かに文を鳥肉にしたいというささやかな願いはあるが、断じて物を隠したりはしていない。そんなことは武道をやるうえで許される所業ではないのだ。

「ち、違うわ。私はやっていない」

「……ええ、そうね」

あつさりと認めるフラン。それに拍子抜けた妖夢はほつと息を吐くが、文が口をはさんだ。

「えっ、何ですか。一番怪しいというのには同感なのですが？　フランさん！」

「この人じゃないわ……それはこの」

フランは懐から、一冊のノートを取り出した。それには「斬るノート」と書かれた妖夢の日記帳兼恨み節帖である。ぱらぱらとフランはそれをめくるが妖夢はそれが出て

きた時にみるみる内に青ざめて「ち、違うんです」と何かに言い訳し始めた。

「このノートが証拠は動かぬ証拠よ。この人が無実というね！」

「あ、あわああ」

無実と言われても、妖夢の顔色は悪くなる一方である。しかし、フランはとあるページを開いて「朗読」し始めた。妖夢の顔は土気色である。

『今日は鴉天狗がやってきた』多分これはアヤのことね』とても嬉しくて斬ろうと思つたが卑劣な策に引っかけかり逃してしまった。次こそは必ず』と書いているわ……。そうよ、このページはアヤがUSBを失くした日のページなのっ。書いてないのはおかしいわ！」

おおと咲夜と文が言う。文はメモを取りながら、ちらりと妖夢を見ると、全員の前で秘密のノートを朗読されて下を向いている。だがしかし、フランは徹底的な調査を行っていた。

「私はこのノートを全て読んだわ。毎日のように恨み言が書かれていて、こんなにアヤのことを恨んでいるのに、アヤの物を隠したことを書かないなんて、不自然よ……」

「びえ」

変な声をあげる白い髪の少女。フランはノートをぱたんと閉じて、それを妖夢に差し出す。返してあげるといふのだ。フランは笑顔で言う。

「だからあなたは無実よ」

「……ど、どうも」

恥ずかしさで悶え死にそうな妖夢だが、無事身の潔白は証明されたが、いろいろなものも証明された気分である。顔が熱くなり、今にも泣きだしたい気持である。これも全て鴉天狗が悪いとも思えて、恨みが一層深くなる。

その鴉天狗はいけしやあしやあと言う。

「で、では真犯人は誰なのですか？」

「慌てちゃだめよアヤ！ 次はそのアヤが『ミドリゴゲ』と言っていた、えつとなまえしらないけど、あなたよっ」

フランは風見 幽香を指さした。幽香はにこつとフランに笑いかけたから、フランもつられて笑ってしまう。

「私は風見幽香よ。吸血鬼の妹さん……へえ、その鴉天狗は私を緑苔と言っていたのね……覚えておくわ」

「い、良いんですよ。忘れてくれても」

「いいえ？ どんなことがあってもわすれないわ。あなたにはいろいろと償いが必要のようだけど、今のところは不問にしてあげる。まあ、お楽しみには取っておくべきよね」

「そ、そうですね。あ、あははは……」

フランは文と幽香の会話の意味が分からずに首をひねるが、しかし次にきっぱりと言った。

「ユウカも犯人じゃないわ！ 初めて会った時にUSBについてほとんど知らなかったし……それに、アヤよりずっと強いのにそんなことをする意味もないわ」

幽香はその言葉に満足したように頷く。文はぎりぎり歯を噛みしめて悔しさを隠す。衆人の前で「幽香>文」と言われてしまったのだ。また天狗のプライドにヒビが入ってしまった。だが子供の遠慮会釈のない言葉は相手など選ばない。

「ユウカはスーパーで働いている時に、もうアヤの首を絞めていたし……やっぱり犯人じゃないと思うの」

さらりと秘密をばらすフラン。幽香は笑顔のまま固まり、咲夜とレミリア、それにはたとえ妖夢の視線に不快感を覚える。「スーパー」で働いていることは、あまり大勢に知られたいことではない。ひくひくと口元が動くが、辛うじて笑顔は崩さなかった。

そして推理は進む。フランははたてを指さして言う。

「あの遊んでくれたのも、犯人じゃない気がする」

「た、確かに私は犯人じゃないけど！ な、なんか推理がてきとうじゃない?！」

はたては急に話を振られて、一瞬で終わったことに声をあげたが、フランは特に気にすることなく腕を組んだ。しかし、それでは犯人はだれなのかということになってしま

う。

文がそこを聞いた。

「じゃ、じゃあこの中に犯人はいないんですか？ このスーパーの店員さんとアイドルさんが犯人じゃないなら、もう容疑者はいませんよっ」

少し復讐を織り交ぜる文。幽香は「あとでシメよう」と思ったが、声を出さない。それにフランも首を横に振った。まだ推理は終わっていない。

「違うわアヤ。犯人はこの中にいるの。間違いなくUSBを持っていたはずで、まだ名前の拳がっていない……犯人が」

「そ、それは誰なんですか！」

「……」

フランは腕を上げる。指をのばして「犯人」を指さした。

「あなたよっ。アヤ」

「え、ええ!?!」

全員の視線が文に集中する。被害者が犯人とは殺人事件では起こりえないが、紛失事件では十分に起こりうる。しかも犯人は当たっている。だが、文も命は惜しい。慌てたふりをしながら聞き返した。

「そ、そんなわけないですよ。それじゃあただの狂言じゃないですか」

「いいえ。アヤあなたが間違はなく犯人よつ、全ての現場を回っても容疑者を洗っても出なかつた……それならあなたが持つていると思うのが自然よつ」

「い、いえ。それはおかしいです。何の証拠にもなつていません！」

文も食い下がる。認めた瞬間に冷ややかな目で見てくる花の妖怪か赤い涙目で見てくる妖夢にやられてしまうのだ。しかし、相手は名探偵であるその点に抜かりはなかつた。

「アヤ。このカフェにきたときに、あなたは咲夜からメモを見せられたはずよ」

——USB見つかつたのね？ その反応だと。

文ははつとした。あのメモはブラフなのだ。咲夜もフラン側だったに違いない。たしかにその仕込みをする時間など昨日から今日までの一日であつたのだ。フランはそれをを見せて、文の反応を咲夜に確認させたのだ。

「咲夜。アヤのそぶりはどうだつたかしら」

「妹様の言いつけ通りにしたところ、ちよつと挙動不審でしたわ」

やはり咲夜はすでにフランから指示をされていた。第三者と思つていたことが文のミスであつたのだ。フランはこれで決まつたとばかりに、もう一度言う。

「アヤ。やつぱりあなたが犯人ね。これでこの事件はかいけ——」

「ちがいますよ」

文はフランの言葉にかぶせた。その声はとても冷たい。確かに一から十までフランの言葉は正しい。それでも死にたくないのが鴉天狗である。この危機的状況で文は腹を決めた。

「私は残念ながらUSBは持っていません。ええ、たしかに十六夜さんからメモを見せられたのですが……ちよつと驚いてしまつて挙動不審になつたかもしれない」

「えつ、あ。あや」

文は無表情である。これこそが彼女の本気である。彼女のまつすぐな瞳が、フランを見る。

「それでも私は持っていません……。そうでなければこんなことはしないでしょ？」

容疑者を集める必要もないですし……。見つかりましたとフランさんかレミアさんに言えればいいのですから」

「た、たしかにそうだけど」

流石の名探偵も容疑者への収集の根回しをした後に文が自分がUSBを持っていることに気が付いたとは思わない。その情報があれば文の説明は筋が通っている。しかし負けることができないのはフランも同じである。

「で、でも咲夜の変なそぶりになつたのは本当のはずよ」

「はい。でも私が持っているとは、言つてませんし……。実際に持っていますから」

「そ、そんな」

フランは頭を抱えた。絶対の自信が天狗の詭弁に揺らいでしまう。それでも今まで黙っていたレミリアは立ち上がった。咲夜は困った顔だが、どうしようもない。

「どうやら勝負は私の勝ちのようね、フラン」

「ち、違うわ。お姉さま……」

「何も違わないわ。みつともない負け惜しみは言つてはダメよ」

レミリアが厳しい言葉を言うのは、底の底で妹を想っているからだ。フランはびくつと震えた。トレンチコートを抱んで「う、うう」と唸る。頭の中でいろんな情報がぐるぐると回るが、言葉にならない。

「負けたら、しばらくゲームは禁止。それに漫画は売ってもらおうと約束したわね。フラン」

「……で、でも。それじゃあめーりんと、あ、あそべない」

「仕方ないわ。この勝負自体はあなたが言い出したのだから……」

フランはさらに強くトレンチコートを抱む。今にも泣きだしそうになってしまう。彼女にとって「ゲーム」は大きな意味を持っている。それが僅かな期間の禁止であったとしても、とてもつらいことだった。

特に4DSは特別なゲームである。

「お、お姉さま。わ、わたし」

「いつもゲームを持ち歩いていくくらいは知っているわ。今だしなさい、フラン」

レミリアは厳しい。彼女はフランの前に手を出して、今持っているであろう4DSを出させようとする。咲夜がなんとか仲裁に入ろうとするが、レミリアは一睨みする。これは姉妹間での重要なことだと、威嚇している。

「早く、だしなさい」

「……う、うう」

フランはポケットからごそごそと4DSを取り出す。文と遠出した時には持っていなかったが、カフェや家の近くでは必ず持っている。それが仇になった。彼女は震える手でレミリアにそれを渡そうとする。

「あや、あや」

その光景を呆然と見ていた文にはたてが言った。はつと文は我に返ったようにはたてを見る。

「ど、どうにかならないの？ あれ」

はたてにどうにかならないか聞かれても、この勝負自体は文が頼んだわけでも提案したわけでもない。勝手に吸血鬼の姉妹が始めたことだったのだ。だからこそ、文は何も

いうことはないはずであった。

文の危機自体は去っている。場の空気の冷たさが彼女を守っている。この状況では幽香も妖夢も彼女の向かつては来ないだろう。しかし、心のどこかで文はおもっていた。

——「楽しかったわ」

不意に文の脳裏に浮かぶ、フランの笑顔。昨日公園を走り回った天真爛漫な姿。文は一度目をつぶって、何かを想う。それからたてに片目でウインクする。それはこの幻想郷以来の友人への合図。

文は一步前が出る。

「あつやややや。今回は犯人が見つからなかったようですね!! いやあ残念です」
「なんだとはたて以外の全員が文を見る。それでも文はわざとらしく両手を広げて、やれやれと首を振る。ちよつと彼女は妖夢を見る。」

「私はぜつたい、あなただと思っていたのですけれどね、どーみても怪しいですし。銃刀法違反ですし!」

「な、なん」

いきなり喧嘩を売られた妖夢はいきりたつ。しかし文はすぐに標的を変えた。幽香だ。

「この、お惣菜を作るのが似合いそうな人でも良かったのですけど……違つて残念とか言いようがありませんね。警察に捕まってくればよかったですのに」

「……」

幽香は片手で口元を隠す。眼は笑っていないが、口元がほころんでいるのを隠したのだ。わざとらしいその仕草に思わず笑つてしまう。それでも文は続ける。次ははたてだった。くるりと振り返つて文は言う。

「はたては、まあ影が薄いのでないとおもつていましたけど、あやや、残念」

他の者が見えないところでウイソクを繰り返す文。はたてはそれにはっとして、乗る。わざとらしくても乗るしかない。

「は、はあ!? 私たちよりもあんなの方が犯人に有力だったじゃない! ……あ、あんなおかしいんじゃない。自分が無実になりそうだからつて急に饒舌になつて」

「はたてえ。私が犯人だつていう証拠はあるんですか? 自分の物を隠して狂言的に事件をでっちあげるなんて……しませんよ! 私はいつもバックの中に大切なものは隠しているのですから」

やれやれ何を言つているんだとばかりに馬鹿にした態度を取る文。しかし、幽香はその言葉じりを捕らえた。

「バックに、しまつているじゃなくて。隠す? その表現はなんだかひつかかるわね」

幽香は文のメッセージを受け取る。それから促すように言う。フランにだ。

「ねえ、名探偵さん。おかしいと思わないかしら」

「えっ、う、うん！」

「あ、あやや怪しいことなんて何もありませんよっ!？」

くすりとする幽香。反対に文は慌てだす。後ろの方では咲夜が壁の方向を見て、笑いを堪えている。そしていちちはやく妖夢は文のバックを確保した。彼女も多少勘付いているが天狗への信頼感が零な彼女は本気で確保した。

「だ、だめですよ。魂魄さん！ それを開けては」

「何がだめなのよ。ん。パソコンが入って……それに刺さっているのは」

妖夢はバックを開けて中から一本のUSBを取り出す。それは「実際に失くした物」ではない。それでも外観は文以外は知らないのだから、それを指摘など誰もしない。それに文も大慌てで妖夢から取り返そうとするが、はたてと幽香に取り押さえられる。

幽香はまた、フランに言う。

「これで証拠はそろったようね。言うことがあるのじゃないかしら、名探偵さん」

「えっ」

フランは目の前で繰り広げらるることに瞼をぱちくりさせてから笑顔になる。彼女は元氣よく文を指さしてこう叫んだ。

「文、あなたがやつぱり犯人ね!!」

「ち、ちがうんです。ころすつもりはなかったんです!」

わざとらしく火曜サスペンスのようなことを言っとうなだれ、へたり込む文。しかし、フランは少し涙目でも笑顔でレミリアを振り返った。

「お姉さま!」

「はあ……こんな三文芝居が……」

一度レミリアは口を閉じる。彼女も無粋ではない。

「どうやら、犯人は見つかつたようね。まあ、一応あなたの勝ちでいいわフラン。有料チャンネルは入れないけど……」

その言葉にフランは飛び上がった。両手をあげて、歓声を上げる。

「やつたあ!」

「よかつたですね」

文はほつりと言う。フランの喜んでいる姿に、多少の満足を覚えた。彼女はへたり込んだままではと立ち上がろうとしたが、その両肩に幽香が両手を載せてきて立ち上がら

せない。

「さてと、あとはあなたの処分ね」

「……っ。い、いやあ、感動の場面でそんな、い、いらないんじゃない？」

「なにを言っているの？ あなたは犯罪者よ。それ相応の罰を受けないと駄目ね」

幽香が強く肩を掴んでくる。幽香が味方したのはフランにであって文にはない。そして文にはもう一人の敵がいる。

「そうね」

妖夢は文の目の前に腰を下ろす。やっと復讐ができるという歓喜と今までの苦労がかさなって睨んでいるのか笑っているのかわからない表情になっている。しかもそんな精神状態だからか文の目の前で彼女はいわゆる「ヤンキー座り」をしている。完全に無意識だった。

文ははたてに助けを求めるように目線をやった。天狗の仲間とはいえこの状況ではどうしようもない。だからはにかみながらこういうしかなかった。

「わ、私焼肉をおごってほしいわ、ね」

とりあらず罰を限定すれば、文の命くらいは助けられるだろうと思ったのだ。

現れたヒーローの名は！ 後編

射命丸 文は焼肉屋に来ていた。それはいつかRhineではたてに「奢って」と頼んだ場所である。まさか自分が奢ることになるとは文も思わなかっただろう。しかも、その人数の多さときたら天狗の顔が真つ青になるくらいだった。飲み放題と食べ放題もない程度の店であることも一層顔を青くさせる。

入り口に入っていく文の後ろには、幽香と妖夢がニコニコしながらついている。にこやかなその顔は絶対に逃がさないという容赦のなさと純粹に天狗への復讐の成就を喜んでいいる。特に半分幽霊はとても、とてもうれしそうである。

「あ、あの、なんだか増えてませんか？」

もちろんであるが、焼肉屋にきたのはこの三人ではない。あのカフェにいた者たちも着ている。レミリア、咲夜、フラン、はたて、パチエリー、伊吹萃香、チルノ、ルーミア、秦こころ、三月精。先の三人を入れても総勢で一五人程度である。

この大人数は大部屋に通されるのは当たり前なのかもしれない。そこは畳敷きの部屋で焼き肉用の長いテーブルがいくつか並んでいる。そこに敷かれた座布団にそれぞ

れがてきょうとうに座っていく。掘りごたつ式なので机の下に足を入れられる。

「な、なぜ? こ、この頃見ていなかった人たちがあ?」

やつれた顔で文が言う。なんだか泣きそうであるが、立場が弱いので何も言えない。それを心地よさそうに見て、幽香が応えてあげる。他の者たちは仲の良い者たちで固まっているが文は両脇に幽香と妖夢が座っている。ちなみに妖夢は何故か座布団を二枚重ねにして座っており、文は畳に直に座っている。

「あら、良いじゃない。宴会はみんなでするものでしょう? そこらへんにいいいたから、連れてきたのよ」

「い、いや。この宴会というか、なんというか。私の生活費がかかっているのですけれど」

「だからこそ、いいんじゃない?」

幽香は文の疑問ににっこりと答える。そこに長い髪に、そこからゆつと角を付けた女の子がやってきて、文の背中をバンと叩いた。小さな体に似つかわしくないほど、強い力を持っている彼女は、鬼の少女である伊吹萃香だ。

「天狗つてどーにも陰気くさい思ってたけど、この人数におごってくれなんて豪勢だねっ。今夜はお相伴にあずからせてもらおうよっ!」

「……は、はひ。……と、ところでなぜあなた様が……?」

「子供会の帰りね」

「こ、子供会?? ぜ、全然訳が分からないのですが、そ、そもそもあなたは絶対子供ではないですし……」

「細かいことを気にしたらだめよ?」

からからと笑う鬼に天狗は肩を落として、愛想笑いをする。幽香と妖夢に命を狙われている状況での逃亡は難しいが、鬼がいる状況で逃げると後が本当に怖い。文は自らの種族としてのしがらみを恨み、ため息をつく。その間に鬼は席に戻っていく。

ちなみにこの増えた者たちを呼んだのは風見 幽香である。彼女と三月精のラインから、さらに他の者たちを呼び寄せたのだ。もちろん幽香は深く聞かれないようにしれつと「そこらへんから連れてきた」と言っている。三月精と同居しているとは絶対に言わない。

「幽香さん! きよ、今日はお肉食べ放題なんですか」

幽香の下にきらきらとした眼で、三月精がやってくる。先頭でしゃべったのはサニーであるが、全員同じような顔をしている。要するに焼肉に期待をしている眼である。彼女達は色違いのワンピースを着ているから、誰かが同じ場所でまとめて買ったのだろう。

「ええ、そうよ。あつ。安い肉は頼んじや駄目よ。お値段の高い物を選ぶのよ?」

「えっ、へ、へんなことふきげふ」

「あらあら、暴れたら危ないでしょう。鴉天狗さん。ふがふが言っていないで、ただ口を押えて首を絞めているだけなのに……大げさね。あつ。飲み物とかアイスは適量に頼みなさい。冷たい物はお腹を壊すくらい食べないこと、いいわね？」

最後の方は本当に注意をしているように幽香は言う。三月精はそれぞれが向き合つて、涎を垂らすと幽香の言葉に「はい！」と元氣よく言う。守るかどうかは別としても返事だけはいい。彼女達はルーミアたちのいる席に戻つて、今言われたことを拡散していく。そこでは歓声があがった。秦ころだけは「おー」と無表情でやる気のない声を出している。

「げほっげほうっ。わ、私を殺す気ですか？」

「殺したら面白くないじゃない。馬鹿ね」

文は解放されてじろつと隣ですまし顔の妖怪を睨むが、その花の妖怪は全然堪えていないといったようにそっぽを向いている。

そんな様子をじつと観察していた、レミアは呆れたように文に言う。彼女は文の目の前に座っているのだ、横にはメイド服のままの咲夜と何故かいるパチュリー・ノーレッジがいた。

パチュリーは長い紫の髪を両肩のあたりでリボンでまとめている。それに桃色の

シャツに黒のジャンパースカート。足には白いニーソックスを穿いていて、胸元には鮮やかなリボンをつけている。まさか誰も彼女を日中引きこもっているとは思わないだろう。

パチユリーはあたりのことには興味がないらしく、手元にある文庫本を読んでいる。レミリアもそれについては何も言わない。いつものことである。

「……………」

そのパチユリーの横で4DSをしているのはフランであった。彼女は流石に着替えてきたのか、紺の七分袖のシャツにチェック柄の赤いスカートを着ている。首元には小さな赤いネクタイを付けている。オシャレな格好だが、選んだのは横の横にいるメイドである。

そのメイドはご主人様に前掛けを付けるのに忙しい。

だからではないがフランは誰とも話すことができずにゲームをしている。彼女の真後ろでは同じような年恰好の少女達が楽しげにお品書きを見ている。それを聞きながらもフランはなにも思わない。

ちなみにはたては妖夢の横に座っている。妖夢とはほとんど親しくなく、目の前にはパチユリーという寡黙な少女では、誰とも話すことができずに一人でスマートフォンを扱っている。

「ぼっパンおもしろいわ……」

はたては一人でミニゲームをやっている。

煤のついた金網の上でジュージューとお肉が焼ける。赤い肉はまだまだ。こんがり焼けた肉汁滴るお肉は、誰かの箸がすつと取っていく。網の下には黒い炭が赤い炎に焼かれて、白い煙を出している。

文はトングを手にして、金網の上からお肉がなくならないようにどんどん赤い肉を追加していく。野菜もほいほいを入れていくが、それを食べるのは大抵、咲夜だけだった。ただしかぼちやだけはそれなりに人気である。

飲み物については最初に頼んで、全員の手元にある。そんな中で萃香はコケコーラを面白くなさそうに飲みながら、焼肉を三枚くらい箸で挟んで食べている。現代では見た目が少女であれば、お酒を飲むことが難しいのだ。

「お嬢様、これは焼けていますよ」

「そこに置いときなさい咲夜。あつ、レモンだれはだめよつ、順番に食べるから」

レミリアの三つに分かれた焼肉の取り皿には、通常のたれと「みそだれ」と「レモン

だれ」が入っている。咲夜は菜箸でとった焼けた肉をみそだれにつける。レミリアは箸をぎこちなく使ってそれを食べる。ちよつと「みそだれ」が落ちたが前掛けに一点のシミができただけである。

それでも血を吸う歯で焼肉をおいしそうに頬張るレミリアはまさに少女と言っている顔をしている。

咲夜はそれからフランのところに行つて、お肉を取つてあげる。フランも前掛けをしているのだが、ゲームをしながら食べているのでよくこぼしている。横のパチュリーは黙々と食べているが本を汚したくないのかすでにしまっている。片手には御飯を持っているので、結構お腹が減っているのかもしれない。

余談だがパチュリーがこの焼肉屋に入つて喋つたのはレミリアに「そのにく、わたしの」だけである。幻想郷でもあまり人と付き合っていないが、現代でそれに拍車がかかったらしい。普段はティッシュの中に広告を入れる仕事をしているからニートではない。

「駄目ですよ、妹様。ゲームは食べ終わつた後です」

「う、うん咲夜。でも、今レポートできないから……」

「レポート？ とにかくこれは食べるまで没収ですね」

「あつ」

咲夜にゲームを取り上げられるフラン。代わりに咲夜はフランの皿に山盛りでお肉を載せていく。それをじいを見て、金髪の吸血鬼は急いで食べ始める。味わうよりもゲームがしたい。

咲夜はふつと小さく笑って、肉に齧り付くフランを見ている。少なくとも人とかかわりが増えたのはいいことだろうと彼女は想うのだ。多少釈然とはしないがああ赤毛の門番のおかげなのかもしれない。その本人は仕事で来ていない。後で泣くかもしれない。

「まあ、帰りに何か買って行ってあげようかしら」

頭の中で焼き肉を食べられずにしょんぼりしている門番に咲夜は困ったような顔で、そういう。それはそうと彼女にはとある疑問があるので、こんど確かめようとも思っていた。

妖夢は手元のスイッチを押した。それは店員を呼び出すために各テーブルに置かれて「呼び鈴」みたいなものである。しばらくして、部屋の引き戸が開いて店員がやってきた。黒いエプロンをした男性だった。彼は妖夢の素性に気が付いたようだが、営業スマイルを崩さない。その点はプロと言えよう。

その彼に妖夢はお品書きを見ながら言う。

「えっと、この『厳選信州牛の美味しい肩ロース』というのを……」
「はい肩ロースですね！」

妖夢はどうにも釈然としないものを感じて頷いたが、横で文の小さく笑う声を聞いて静かな怒りを覚えた。それで彼女は「追加で」と店員に伝えてから、お品書きを大きく開いた。

「店員さん。ここからここまでをお願いします！」

妖夢は手元のお品書きを指でなぞってそういった。目の前にきた店員は眼をぱちくりされる。同じように文も眼をぱちくりさせるが、やがて意味が分かった。

妖夢はお品書きの何か一品を頼んでいるのではない「書いてあるもの全て」を頼んでいるのだ。だからこそ指を端から端まで動かしたのである。流石の文もこれには焦った。

「あ、あやや。そ、そんなセレブリティなた、たのみかた見たことないですよ？」

「そうなの、じゃあ今日が初めてですね、文さん。うふふ」

突然のアイドルモードで言う妖夢。皮肉のつもりらしいが彼女自身も滑稽になっている。それでもぶにとしたほつべたが焼肉の熱気で赤く染めている彼女は、可愛らしい。やっていることは天狗への報復であったとしてもだ。

「あつ、私は巨峰チューハイ」

と便乗して飲み物を注文しようとはたてが手を上げる。文は思わず渋い顔で見ている。わざとではない。

「な、なによ。一杯目だけってのはないでしょ! だ、大丈夫よ。ほ、本当にお金がなくなったらか、かしてあげるし……」

ピクリとはたての言葉に文の肩が震えた。明らかに憐れみをかけられていることに気がついたからだ。だから彼女の心の中で何かが反抗するように燃え。それが口元の笑みに変わった。今の情けない状況からはわかりにくいだが、元来彼女は負けず嫌いで誇り高い性格なのである。

「貸す? ……私を甘く見ないで下さいよ、はたて。いや皆さんも、今日はいくらでも飲んでください、食べてください。私には痛くもかゆくもありませんから……」

「……文?」

文はにやりと笑ったまま立ち上がる。財布を取り出して、そこから一枚のカードを天高く掲げた。そのカードを電燈が光り輝かせる。横の妖夢や他の者たちも彼女を見る。チルノと幽香だけは黙々と食べている。

「なぜならつ、私にはクレジットカードがあるのですから!」

「え、ええ。あ、あんた審査に通ったの!?!」

はたては驚愕した。そう、クレジットカードには「審査」が存在する。幻想郷からやつ

てきた者たちは一部を除いてアルバイトで糊口をしのいでいる。普通であればクレジットカードの審査など通るはずがないのだ。しかし、はたても指摘する。

「ど、どうせ、あ、あんたのことだからあれでしょ？ どっかの無名のクレカでしょ」
「……………」

文はちつつちと立つたまま指を動かす。それからカードを口元に持つてきて、はたてに見せる。電燈の光がさえぎられてそのカードの面がよく見えた。表面に「V I Z A」と「J B C」の文字。つまり世界で使えるクレジットカードだった。

啞然とする一同と何を言つてんだと口を開けている店員。それに今月の文の家計に重大な打撃を与えられないと知った妖夢は悔しげにしている。それを満足げに見渡し文はカードをしまう。そして店員に告げる。

「生っ！ 一つ。それにこの目の前のあーいどるさんが頼んだ分はどんどん持つてきてくださいっ！ 皆さんも好きなものを頼んでいいですよっ」

隗より始めよ。との格言通りに自分の注文をつけてから文は大口をたたく。微妙に妖夢への挑発が入っているが、それでも、この宣言が宴の本当の始まりでもあった。なぜならば予算は青天井だと、皆が認識したからだ。そして天狗は気づいていないが地獄への道でもある。

宴は華やかさを増していく。大勢で笑いながら飲む酒はうまい。つまみは焼肉という豪華なものだ。それに大飯ぐらいも多く、どんどん注文しては皿を空にしていく。

「あつはつは。いやあ、魂魄さん今度も取材に行かせてくださいね」

「もちろんよ、今度は絶対に一人で来てほしいわ！」

仲良く肩を組んでお酒を飲む文と妖夢。何も知らなければ仲の良い二人にしか見えないが、よくよく聞くとお互いに棘のある言葉を吐いている。それでも両方が頬を赤くしてお酒を飲んでいるからには、中々に楽しいのかもしれない。

幽香はそれでも黙々とただ焼肉を食べては、適当に頼んだカクテルを飲んでいく。いずれは天狗もとあることに気が付いて絶望するだろうと思っているから、その時を静かに待っているのだ。しかし、彼女もゆっくりはしてられなかった。

遠くで三月精がワンピースをべつとべつにして焼肉を食べているのが見えたのだ。それで幽香はゆっくりと立ち上がって、部屋のサラダを取りに行くのか、お手洗いなのか外へ出ようとする。そして引き戸を開ける一瞬に、三月精の方を振り向いた。

ルナと眼があう。幽香は彼女を冷たい眼で見、小さく唇を動かす。そして部屋から出ていく。

ツインドリルで栗みたいな小さな口をしたルナは、幽香の言いたいことがなんとなくわかった。それがわかるからこそ、だんだんと震えが出てきたのだ。そう花の妖怪はこ

ういったように見えた。

——帰ったら……ね

「ちよ、ちよつとサニー。スター。ゆゆゆ幽香さんが怒っているかも」

「えっ」

スターとサニーが不思議そうに幽香を探すが、どうにも見つからない。どこに行ったのかも二人は見えていないのだ。だからこそ、恐怖などは生まれなかった。スターはもぐもぐと噛みながら返事する。

「どこにもいないじゃないルナ」

ちよつと心配しすぎじゃないの？ と肩をすくめて、黒髪の少女は食事に戻る。スターも手元にある「スプライトオ」を飲んで炭酸にむせながら飲み食いする。だからルナだけが怯える羽目になってしまったのだ。

その横では秦ころろが無表情のまま、キャベツだとか人参だとかを食べている。たまにトングで大量に肉を網の上に置いていくのも彼女であるが、肉自体はチルノとルーミアと萃香が争うように食べているから、あまりありつけていない。ちなみに萃香はノンアルコールビールと天狗の生ビールを交換して飲んでいる。名目的にはノンアルコールを飲んでいるということにしていた。

それぞれが和気藹々と一部は表面的に和やかに過ごしている中で、部屋の隅でフラン

はゲームをしていた。とりあえずはお腹を満たしたことで咲夜から取り返したのだ。

「……………」

フランは賑やかな場所が好きではない。だからこういう場所もあまり好きではない。しかし、彼女はなんとなく文の方を見る。彼女は妖夢と何かを話しながらビールジョッキを干している。フランはそれでゲームのほうに眼を落した。

フランの眼には映る二画面の世界。耳に聞こえる周りの雑音。知らない人が多くいる状況と親しい者達は別の親しい者と交流している。彼女は本来寡黙で内気であるがここ数日流暢にしゃべったのはあくまで少人数で気の許せるような者たちといたからだ。

それでも姉の下へ行くのは気が引ける。パチュリーは横にいるがそうそうしゃべるものではない。彼女はワインを飲んでいる。

なんとなく一人ぼっちな気分にはなっていく。それがとてつもなく悲しいような気もするが、別にいつも通りだと思えることもできる。フランは力なくゲームのボタンを押しながらそう気分を紛らわせた。

その顔にひんやりとした感触があたった。横を見ると、いつの間にかゲームの画面をチルノが覗き込んでいる。青い髪はフランの鼻をくすぐり、ふんわりとした匂いがする。

「お、おおう。これがゲームなのね、よくこころがやってる」
「!?」

ずいずいと画面に顔を近づけるチルノ、それでフランを体が密着する。最初はぎよつとしたフランだったがこの氷の妖精が誰か知らないが、その強引な態度にむかつとした。まさかチルノの家が常時火の車でゲーム機を買う余裕など微塵もないとは思わないだろう。

「あ、あのあなた」

「あたかもやりたい！　ねえこれ貸して!!」

「……だ、だめよ！　これは二人用じゃないから」

「ケチー！」

「なんですって!」

フランはチルノの物言いから完全に頭に血が上った。彼女はゲーム機を離して、チルノの口を持って広げた。

「ふが、やめろ」

「この、この」

チルノも反撃する。フランに抱き付いて、そのまま押し倒す。それから仕返しとばかりに顔をつねるのだ。

「いただ」

「思い知ったか！」

子供らしい争いをする二人。本当ならばチルノがこのようなことをできるはずはないのだが、力の弱っているのは二人とも同じであり、その割合はフランのほうが大きいようである。

「どうしたのですか、妹様。喧嘩は表でやらないとだめですよ？」

咲夜が二人の様子を見かねたのか、取っ組み合う少女達の前にやってきた。咲夜は本当に喧嘩を止めているのか微妙ではあるがフランとチルノは相手を指さしてはそれぞれ同じことを言う。

「だってこいつが！」

咲夜はお互いに眼を合わせてはあとため息をついた。この場をどうおさめたものかと悩んだのだ。しかし、そんな彼女の横にいつの間にか、桃色の髪をたなびかせたミニスカート少女が立っていた。顔は無表情である。

「ふ、ふ、ふ」

口だけ動かして笑う少女は秦こころ。彼女は片手に箱のようなものを持って、チルノ達に見せつけた。咲夜も見る。

「マリオカートで遊ぼう」

こころが持っていたのはフランと同じ4DSであった。実は彼女も持ちあるいていたのだ。いや、実のところすでにチルノが口を滑らせていたので持っていること自体は秘密でもなんでもなかった。それでもいきなりあらわれたのは理由があった。

「お腹いっぱいになったから。対戦しよう」

手短に説明するところ。チルノはそれで眼を輝かせたが、フランは何を言われているかわからずにぼかんとしている。しかし、現代にゲーム機でも対戦には二台以上が必要である。ちなみに最近のゲームはソフトが一つあればネット接続で対戦可能だ。

「えっ、あつと。まりおってあの」

なんとなくしどろもどろになるフラン。彼女の肩をチルノが掴んでゆする。その輝く瞳はもはや喧嘩していたことなど忘れているかのようだ。

「はやくやろう！ あたいはおとなだから、最初はゆずってあげるからはやく」

「あう、あう」

とチルノにゆすられて唸るフラン。彼女は助けを求めるように咲夜を見たが、その銀髪のメイドは柔らかく笑っているだけでもはや手を出す気も、口を出す気もないようである。だからなし崩し的にフランとチルノ、それにこころが向かいあつてゲームをし始めることになった。

「どっつやるのっ？」

やっていたゲームをレポートして、フランは恐る恐る「マリオカート」のやり方をここに聞く。ここは無表情のまま「フアイト」とアドバイスを行う。どんな時でもやる気は大切ではあるが、フランは渋い顔をせざるをえなかった。

少し離れた場所で大勢に囲まれている妹をレミリアは見ている。相手は妖精だとか付喪神だとかなのだが、これはこれでいいのだろうと肉を噛みながら思う。もう一度見るとルーミアや三月精とフランがゲームを取り合っている。

「……本当に子供みたいね」

「お嬢様も遊んでこられたらどうですか？」

「冗談がうまいわね。咲夜」

レミリアの横に咲夜が戻ってきた。優しく微笑みをかけてくるメイドに吸血鬼の少女はじとつとした眼で見る。静かに抗議をしているのであろうその眼を、咲夜は涼しげな顔で見返す。

「意味ないわね」

レミリアはそう結論付けて、もう一度フランを見た。彼女は少し目を離れたすきに何があったのかここにチルノと一緒に乗っかって、笑っている。その押しつぶされてい

るころは「ひきょうな」とよくわからないことを言っていた。

ゲームはルーミアとスターがやっている。帰ってきたのか幽香も後ろで覗き込んでいる。少し顔がほころんでいるのは気のせいだろうか。ただしその両手はがっちりとルナの肩を掴んでいる。

「……………」

レミリアはじつと見る。

「そっういえばお嬢様」

そこに咲夜が言った。彼女は外に出るときには手提げバックをいつも携帯している。大体は吸血鬼の姉妹の世話に必要なものを入れているのだが、今日はちよつとだけ違うものを出している。それはリボンのついた四角形の包みだ。テーブルの下側で渡しているから、

「実は妹様と同じ……色違いのゲーム機を『間違つて買つてしまった』のですけれど、お嬢様にお遊びになられますか」

「……………」

レミリアは包みと咲夜を交互に見る。いきなり言われてよくわからないといった顔をしている。しかしそれを理解した時に思わず言ってしまった。

「本当!？」

ぱあと少女らしいく花のように笑顔になるレミリアだが、如何せん声が大きかった。部屋中の目線が一瞬彼女の集まり、レミリアはだんだんと引きつった笑顔のままこぼんと咳払いする。まさか実は欲しかったなどは言えず、繕う。

「ご、ごころうね咲夜」

笑いを堪える咲夜が「はい」と返事する。

皿があき、コップは干されて、だんだんと宴は終わりに向かう。

文はほろ酔い気分で、先に会計だけを済ましておこうと、部屋を出ていく。すでに追加注文をするものは居ないだろうと思っただからだ。だから文が会計を終えれば、本日はお開きだということである。

「……」

わずかにふらつく足で歩く文。他のお客の喧騒が耳に響く。わずかな段差で転びそうになるが、その体を小さな手がささえる。文を見ると、角に隠れていたのかいつの間にか伊吹萃香がそこにいた。

「ああ、ありがとうございます」

「あぶないねえ。こつちにきたら、流石に天狗でも酔うことがあるんだね」

「……?」 結構飲まれていた気がしますが、酔われてはいないようですね?」

「ああ、私は大丈夫だよ。鬼だからね」

文は「ん？」と引つ掛かりを覚えた。仮に鬼だろうが天狗だろうが、ありとあらゆる妖怪だろうとも現代世界では力の減退は避けられないはずである。しかし、萃香はケロッとした顔をしている。彼女は文に言う通り店員に見つからないように、飲酒していたのだ。

「いやあ、今日はなかなか楽しませてもらったよ。そこでお礼と言っちゃんですけど、ヒントをあげようと思ってるのよ」

「ヒント？ 何のですか」

「まあ、まあ。大したものじゃないから受け取つてよ」

萃香は文の手を取り、何かを握らせた。硬い物であるが紙に包まれている。それからにやりと笑うと萃香は、踵を返す。

「じゃあ、私は先に帰るよ。今日はいい酒だった……それは大切にしないでいいから」

文は去っていく萃香を追うことはせずに、手の中にあるものを見た。一枚の紙きれに包まれた何かである。彼女はそれを開けてみると、黒い金属の塊がそこにあった。しかし、なんとなく文はそれに見覚えがある。

それに思い至った時に文は、ちよつと怖くなった。

「これ、ひしゃげた十円玉ですね」

すさまじい力で折り曲げられたそれは十円硬貨だった。辛うじて文様が見えたから、文にもそう判断できたのだ。これを押しつぶしたのが萃香だとするのならばと文は、疑問を深める。力が異常なほど残っているということだ。

そして文は、紙の方にも何か書いていることに気が付いた。

「なに、なに『付喪神』……これだけですか？」

文は、紙切れを裏返しにしたりしたがそれだけしか書かれていない。そこまでやって彼女は気が付いた。

「もしかして、このみんなが外に放り出されたことへの、ヒントですか」

もういない鬼に向かって文はつぶやく。

——鬼の力は何故かなり残っているのか？

——付喪神とはなにを意味するのか？

文は深く考えようとして、顎に手を当てる。いまさら萃香を追いかけたところで答えなど聞くことはできないだろう。だから自分で考えるしかないのだ。しかし、彼女には考える時間など存在しなかった。

「アヤ！」

「グゲ」

急にフランが文に抱き付いてきた。考え事をしてきた文は躲すことも身構えることもできずに、変な声をあげる。フランはそんな彼女の様子には頓着することはなく、言う。

「アイス食べていいかしら!? みんなで」

「……あ、アイスですか?」

「ええ、私レースに負けたから頼みに行くことになったの! でも食べたい!」

「みんな……ですか」

フランの言葉に文はちよつと笑ってから「いいですよ」と返す。疑問など今考えても酔いの残る状況では、よい答えは得られないだろう。だからこそ、文自身も冷たい物を食べたい気分になっていたのだ。

「やった!」

ぐつとガッツポーズをするフランは、くるりと後ろを振り向いて、遠くから見ているチルノ達に親指をたててウインクする。こっそりみていた「あの時の文」のマネだった。流石に彼女も気が付いていた。

そんなこんなで最後にみんなデザートを食べ、宴は終わった。

実はクレジットカードは飲食店では「一回払いのみ」の店が多く、この店もそれに漏れないという些細なことを除けばトラブルもなかった。それを会計している時に聞いた鴉天狗は「マジですか？」と青ざめた顔で店員に聞いたくらいである。

幽香とその後ろでニコニコ。妖夢は小さくガッツポーズをして、わざわざ文の下に來てから微笑み。

「いちぞうさまー！」

と屈託のない笑顔を見せた。ここに復讐は成就した。

——いつかの日。

とある公民館で青い髪のヒーローが危機に陥っていた。彼女は仮面をかぶっているから、だれかわからないが。周りには「希望の面」を付けた三人の戦闘員と、キツネ面を付けた一人の怪人少女がいた。

「くっ。あたいもこれまでか……あと100人くらいしか相手にできないわ……」

青い髪のヒーローは片膝をついて。余裕があるのかないのかよくわからないことを言った。しかし、状況は絶対絶命。どうしようもない今を自力で打開するのは難しかった。

「そこまでよー！」

突如として響く少女の声。怪人とヒーローが見ると、滑り台の上に立つ一つの影。

金色の髪をたなびかせ。赤いスカートが可愛い。それでもかっこよくポーズを決めても仮面があるから表情はわからない。

「ここからは、私が相手よっ！」

そう言つて滑り台を降りていく。

おまけ 赤毛のメイドさん 前

社会人の休日とはとても貴重なものである。日々仕事に追われる者にとっては日常の疲れをいやすために必要不可欠な時間であり、逆に平日にはできない事柄を行うことのできる時間でもあった。

しかし、たいいていの社会人にとっての休日とは「だらだらする」ための物であることが多い。貴重だからこそ、それをなにかの「用事」に使うことがもつたいたく感じてしまふのかもしれない。

それは幻想郷ではのんびり山の警護をやっていた犬走 楯には顕著に表れることになった。用務員として働く彼女には「祝日」がない。決まった休みもないから「土日」が休みかも運であり、他の者たちが朝早くに仕事へ向かうのをしり目にスーパーに買い物に行ったりするときもある。そしてかえってだらだらするのだ。

今日も楯は畳敷き4畳半のアパートで座布団を敷いて一人、将棋のオンラインゲームに没頭していた――

死んだような眼で楯は画面を眺める。モニターに映るのは電子化された将棋盤であ

り、相手方は「ハンドルネーム」という一種の偽名を使った日本のどこかの人間である。それでも河童くらいしか相手のいなかった樫には新鮮なことだった。

先に書いた通り用務員として働く彼女には決まった休みなどはない。一か月何日という単位で休日を「設定」するのである。彼女はその休日を何するでもなく最初は過ごしていたが、友人の河童が組み立てたというパソコンをもらってからは大体ネットサーフィンか将棋や囲碁やらのネット対戦で過ごすようになった。ネット代は家賃に含まれてもいることが幸いではあった。

外からは蝉の声が聞こえるが樫の部屋には扇風機の音とキーボード音だけが響いている。彼女は傍らにうおーいお茶のペットボトルを置いて、かちやかちやとマウスとキーボードをたたたく。

「なかなか……手ごわい」

樫は力チャと「飛車」を動かしてつぶやく。相手のハンドルネームは「Futo」という何をもじったのかわからないものだが、繰り出す手は定石にはないトリツキーな手である。守るべき時に攻め、攻めるべき時に守るという一見不合理な一手一手が樫の予想をことごとく覆していく。

「くっ、てきとうに打っているのじゃないのか？」

楯はペロリと唇を嘗めて、画面の向こうにいるはずの相手に話しかける。もちろん返事はない。チャットもあるが、そんなことをしている暇もない。相手の手に困惑する楯だが、幻想郷では将棋を打つ相手など限られていたから強敵との勝負は心地よい快感もある。

日本のどこの誰かはわからない。そもそも男か女かもわからない相手であるが楯はだんだんと眼を輝かせて、マウスを動かす。

相手も中々の強者ではあるが幻想郷の外に来てからの楯はネットで数百戦もの経験を積み、その打ち筋は格段に精度を上げている。

「王手だー」

ターンとエンターキーを押す楯。その顔は勝利の確信に満ちた表情をしている。事実相手も投了を選択したらしく、画面には「勝利」の文字が現れる。そこで楯は一瞬だけぱつと笑顔になって小さくガッツポーズする。

しばらくして楯はふうと息を吐くと背中から畳に倒れる。彼女は家にいることもあり、かなりラフな格好をしていた。薄手の白のシャツに黒を基調としてラインの入った丈の短いジャージ。明らかに外出する意思の感じられない恰好である。

仰向けに寝ている楯の眼には天井は見える。彼女は勝利の余韻を味わうよりも頭を

使った疲労感からぼんやりとそれを眺めることが好きだった。しかし、そんなことをしているから余計なことまで考えてしまうこともいつものことである。

「私は、このままでいいのか……」

いつもいつも退廃的の一步手前のような休日を過ごすたびに彼女は想う。一日中ネットをしていたのに「一日中なにもしていない」ような気がするのもいつものことである。だからと言って何をしたいということもない。

椀はごろんと寝返りを打つ、座布団が腰のあたりにあるので、それを頭まで持つてきて枕にする。椀は部屋にある大きな窓を見つめたまま、少しだけ眼を閉じる。別に寝たいわけではなく眼が疲れただけである。

だからすぐに彼女は起き上がった。シャツが少しはだけて肩口の肌が見えるが、ここは自分の家である。頓着などしない。昔は河童と一緒に暮らしていたが今は河童が「とても大切なこと」をしているので一緒にはいない。

代わりに部屋の隅に大きなスヌーポーがいる。ぬいぐるみである。

のそのそと椀はそれに近づく。彼女の上半身くらいはあるだろうそのぬいぐるみは、白い毛をした犬のキャラクターである。耳や鼻は黒いが垂れ耳で椀はそれがたまらく好きだった。数か月前に一目見て、惚れた。それからスヌーポーのキャラグッズを友人には内緒で集めている。

柩はそのぬいぐるみを引き寄せて、その顔に頬をすりすりときさせる。柩は心地よさそうに肌触りを楽しんでぎゆうと抱き付く。そう、「だきつく」ことができる程度の大きさのあるそれを柩は買う時に値段的な苦勞したが、逆にいえばどうしても欲しかったとも言える。

「ふふふ、お前はかわいいなあ〜」

普段であれば誰にも言わないだろうことを言う少女。相手はぬいぐるみである。彼女はその犬のとぼけたような顔をみては微笑み、頬を赤くして笑顔で抱き付いたり、一緒にごろごろとする。よく一緒にお風呂を入っているから、毛並みは綺麗である。

こんなことは家でしかできない。当り前であろう、こんな姿を誰かに見られでもすれば柩は真っ赤になってへたな弁解でも始めるかもしれない。しかし、柩はとある脅威に気が付けずにいた。

柩の部屋は狭い。いや、一人で住むならば別に問題がある広さでは決してない。どこかで同じくらい部屋の五人で住んでいる者たちもいるが、ここには柩しかない。しかし、問題はそこではない。

部屋が狭いということは玄関もこの四畳半の部屋に隣接しているのだ。そのドアは柩の癖なのかチェーンで戸締りされていた。反対に言えばチェーンだけしかかかって

いないのである。つまり人が入ることはできないが、ちよつとだけ開けて中をのぞき込むことができるということだ。

そのドアの隙間から覗き込む眼が、二つ。音もなくぬいぐるみと戯れている椀を見ている。そうとは気が付かずに椀はスヌーポーの鼻づらを撫でながら、その手足を持つてばたばたと動かしている。

「こんどはリボンでも買ってあげようかな」

椀は自分が付けもしないリボンをぬいぐるみに付けてやる気らしい。それも二つの眼はみている。じいと椀の恥ずかしい日常を見ている。

ころころと部屋の中でぬいぐるみと転がる椀。いつもは固い口調も今日は崩れている。彼女はその至福の時を堪能しながら、ふと玄関の方に眼を向けた。しかし、その時にはもうドアは閉まっていて、椀は誰かに見られていたことに気が付いていなかった。

姫海棠はたてはドアノブを掴んだまま、だらだらと汗を掻いていた。それは夏の熱さからではなく、冷や汗に似た類の物だった。彼女はごくりと息をのんで、片手に持ったビニール袋を握りしめる。中には大量のウインナーが入っている。いつかの残りである。

はたては黒い半そでのシャツに胸元にはなにかのキャラクターのイラスト。それに

スカートを着ている。彼女はとある目的の為に権の家を訪ねてきたのだが、インターホンを押す前に奇怪な声が部屋の中からしたため、こっそりと覗いてしまったのだ。

ちなみに用事とは以前に文は大量に置いていったウインターのおすそ分けである。流石にあの日に全て食べることなどできなかったのと、一人で処分できる量ではなかつたからはたては権にあげようと思ったのだ。

そのせいで友人の恥ずかしい一面を見てしまった。

「……………」

言うべき言葉がはたてにはない。普段の権とは人が、いや天狗が変わつたかのような姿に声音には驚きで思考が追い付いてこないのだ。それに今でも室内からは「毛がすべすべだね」と言う声がする。

ドアノブから手を離して、はたては考え込んだ。このまま帰るにはウインターの詰め込まれた袋を持って帰ることになるのだ。それは中々に重いため、あまりしたくはない。かといってこのままインターホンを押して、権に疑われるのもいやである。

「あつそうだ」

小声で言いながら、はたては服の中からスマートフォンを取り出した。

「ん？ 電話か」

机の上で椀の携帯が鳴った。彼女はスマートフォンではなく所謂「ガラケー」であった。単純に携帯代と機種代が安かったのが、選んだ理由である。椀はスヌーポーを優しく離すと携帯を取って、画面を見る。はたと表示されていた。

「はい」

『あつ椀？』

「どうしたの？ 電話をくれるなんて、珍しいけど」

文の前では固い口調な椀も、はたてにはどこか砕けた話し方をしている。警戒心が薄い証拠でもあり、仲の良い証でもあるのかもしれない。しかし、流石の椀も部屋のすぐ外ではたてが電話しているとは思わない。

はたては椀の家にいきなり行くのではなく、いったん電話を入れてから訪問したという「形」にしようとしているのだ。これであれば、少し待ってからインターホンを押して、何事も「見ていなかった」かのように会いに行ける。

『いや、このまえね。文が大量にウインナー買ってきたのがウチにあるんだけど、一人じゃ食べきれないから、よかつたらもらってくれないかなと思ったのよ』

「何しているんだ、あいつ」

文はすでに「あいつ」呼ばわりである。いろいろとたまっているものが椀にもあるのだろう。はたてもあまり気にすることなく言う。

『まあ、ウインナーでのパーティは楽しかったけどね。椀も呼べばよかったんだけど、あれね、次の日私たちは休みだったけど、あんたは違ったから呼びにくかったのよ』

休日が他の者と違うところという弊害もある。特に深夜まで飲み会などしよものなら翌日の仕事にはほぼ支障がでるのだ。

「まあ……呼んでくれてもよかったけど。それで？ ウインナーだったつけ？ くれるならありがたくもらおうわ」

『ありがと。それじゃあ、今から行くわ』

「いや、いいだろう」

いきなり椀の口調が変わった。声音も低くなる。

「さつきから、外から二重に声が聞こえてくるのだが、はたて。今どこにいる？ いや、質問がおかしいな。何でそんな小細工をしている？」

——はたてはぞくりと背筋が冷たくなる感じがした。確かに椀に電話を入れてから訪問するという考え方は間違っただけではなかった。しかし、家の傍で電話をしたのはまず

かった。

「な、なんのことからしら」

はたては声を小さくしてから、そう聞き返してみる。少し権も沈黙をしてから、聞き返してきた。

『わざわざそんなことする理由がよくわからないんだが、なあはたて。……一応聞いておくが何も見ていないな?』

「あ、当たり前じゃない!? なにも見ていないわ!!」

『その反応で確信した。なあはたて』

「なによ」

はたての耳元でがちやがちやと金属音がする。それから電話口からこう、言われた。

『横を見てみる』

ツインテールの鴉天狗が震えながら首を動かす。そちらにあるのは権の部屋、そのドア。先に説明した通りにチェーンしかかかっていないそのドアが、少し開いていてそこから血走った目をした白い髪为天狗がはたてを見ている。

それから、はたての耳にこう聞こえてきた。電話越しにである。

『見……た……な』

文ははたてに電話していた。駅の壁にもたれかかり、何度も続くコール音だけを聞いている。彼女は赤いブロックチェックのネルシャツとデニムのハーフパンツを穿いている。

何度もかけているがどうにもはたては電話にでる気配がない。だから文は諦め顔でスマートフォンをポケットしまいこんだ。それから遠くにいる、少女に声をかけた。

「フランキーン。そろそろ行きましよう」

文の声に金色の髪をした少女、フランがくるりと振り返る。彼女は白い半そでのパーカーで頭を多い、スカートを穿いている。パーカーは夏の暑い日差しを避けるために付けているのだろう、以前は陽の光に弱いから日差しを避けていたが、今は純粋に日焼け防止である。

フランは少し離れたところにいたから、駆け寄ってこようとした、しかしすぐに足を止める。その止めた足がシャーと滑って文のところまでやってくる。履いている靴の

裏にローラーが仕込んであるから、足を止めても滑るのである。

「電話、終わったの？ アヤ」

フランはくりつとした目で文を見ながら言う。それに文は頷いた。

「なんでか相手が電話に出ないのですよ。なにをしているかはわかりませんが……まあ、大丈夫です」

そういう途中に文の携帯が鳴った。彼女は返信が来たのかと思ったが、見るとRhineの着信である。しかし相手ははたと表示されているから、文もすぐに確認した。

↓た 既読

「た？」

メッセージは一文字だけである。流石に意味が分からずに文は首をかしげるが。おそらくタイプミスであろうと結論付けて、携帯をまたしまった。ミスであるならば、訂正した文が送られてくるだろうと思っただけだ。

だから文は当初の目的を果たすために、フランを伴って切符を買い。プラットフォームに向かった。

文の目的など単純である。フランに昼ご飯を食べさせて、少しの間遊ぶだけのことだった。依頼主は十六夜 咲夜であり、とある理由で深刻な金欠に陥っている射命丸

文に「千円札」を二枚ほど掴ませて承諾させていた。文がはたてを呼んだのは、以前におにごっこをフランとしていたからである。肉体的な遊びをはたてに押し付けようとしていたのだ。

「何が食べたいですかね？」

「パフェ」

「うーん、それはご飯じゃないですね」

文とフランは電車に揺られながら雑談をする。今日は単に昼ご飯を食べることと、それから夕方方くらいまで遊びに行くことが目的であるから、以前のようにフランも気取っているところはない。

文はふと、フランの好きそうなものを考えてみるが、ハンバーグやステーキのようなものは一食で千円札が一枚消滅する。かといつてももらったお金でフランに節約させるのも気が引ける、なによりも器が小さい気もする。

だからこそ文は考える。安くてもそれなりに食べることができて、フランも好きそうなものを考えているのだ。

「あつそうですね。あそこなら、きつと『割引』が効くはずですよ」

「なんの話なの？ アヤ」

「ああ、今日のお昼御飯がフランさんだけ安く食べることができるとも思う場所が

あるので、行きましようか？ 多分デザートとかもありますし」

「……いくわ。でも私だけワリビキできるってどこなの？」

「場所はわからないと思いますけど……まあ、知っている人はいるでしょうから大丈夫ですよ。私も行ったことはないのですが、何とも言えないのですけれど」

文は少し含みのあることをいい、フランもそれを感じたがよくわからないのでパークのポケットから4DSを取り出して、電源を付ける。考える興味を失ったのだ。

今から行く場所は、ある意味ではその4DSが「買った理由」でもある。

おまけ 赤毛のメイドさん 後

お金は降って湧いてくることはない。それは幻想郷からきた少女達も身に染みてわかつている摂理だということができるだろう。しかし、現実にお金が必要な時というのは絶対的に存在するのだ。

数か月前の紅 美鈴はまさにそんな状況にあった。

彼女はとある大切な「約束」の為にどうしてもお金が必要ではあったが、毎日の生活費を切り詰めても約束の履行は不可能だと分かった。

必要なのは数万円である。世の中のサラリーマンが一月働いてから「奥さん」というフィルターを通して渡されるお小遣いに匹敵する大金である。到底美鈴のようなものに揃えるお金ではないのだ。

それでも美鈴は約束したのだ、とある少女と「一か月後にゲームを買ってくる」と。だからこそ、できませんでしたとは口が裂けても美鈴には言えなかった。仕事を増やせば収入は増えるが、約束は一か月後である。間に合うとは普段楽観的な美鈴にも考えることはできなかった。

追い詰められた美鈴はとある決断を行った。

だけ赤くなる。もう、お昼時には遅いくらいであるから仕方ないことだろう。

文はくすりとして、雑居ビルの中に入っていく。エレベーターが入り口のすぐ横にあつたから、二人は乗り込んだ。狭いその中でフランはパーカーを取る、あくまで日光を避けるためにかぶっていただけでファッションなどという物ではない。

露わになる金色の髪と火照った頬、フランは首を何度か振って肌についた髪を振り払う。

「そういえば、今から行く場所って何が食べられるの？ アヤ」

「そうですねー。あつ、さつき言っていたパフェとかなら、食べることができるんじゃないですかね。あとは、オムライスとか……すみません。私も実は私用で行ったことはないので、よくわからないんですよ」

「ふーん」

そんな会話をしていると、エレベーターのドアが閉まって上にあがっていく。会話しながら文がパネルを操作していたのだった。フランはそんな文の背中を見て、なんとなく抱き付いたずらを想いついたが、お腹が減っているのでやらなかった。

夕暮れをおんぶしてもらって、帰ったことはフランも覚えているから、そんなことを想うのかもしれない。

「そうだ、フランさん」

くるつと文が振り返ると、びくつフランが肩を震えわせる。なぜそうなるのかは文にはわからずに首をかしげるが、まさか自分がいたずらの標的にされていたとは思わないだろう。フランが万全だったら、すでに文の背中に乗っている。

「……どうしたんですか？　ま、いいですけど。……今から行く店にはですね、フランさんも知っている人がいると思うのですが、できるだけ甘えてくださると助かりますね……そこを脅し……交渉次第で何とでもなりそうではありますから」

「？　わたし、甘えるようなことをしたことないけど」

いけしやあしやあと言うフランに苦笑いしつつ、文は「頼みますね」と小さく言う。どうせ、フランが店に行けば甘えるに決まっているのだから、あまり強く頼む必要性などないのだ。

そうこうしているうちに、指定した階に到着したらしく。エレベーターが止まりドアが開いた。その先には目的の店が、ある。

文とフランの降りた先はすぐに「カフェ」であった。シックなデザインの内にはテーブルが並び、紅茶のよい香りが、漂っている。客自体はお昼を少し過ぎたこともあり、ほどほどと言っているだろう。

奥の方には同じような髪をした二人の少女がケーキを食べながら談笑しているのが、

文には見えたがすぐに目線を他に移した。彼女の探しているのはそのような一般人ではないのだ。その二人は金髪で片方が紅葉の形の髪飾り、片方が傍らに葡萄の飾りのついた帽子を置いている。

「あつ咲夜だ」

フランがぴつと指さして言う。その指の先には、エプロンドレスを着ている女性がいる。彼女はくるりと振り返ったが、その顔をフランは知らない。フランはちよつと困惑したような顔をした。

フランの反応したのは女性自身ではない。その姿恰好にとある人物を結び付けただけである。

「フランさん。ここはメイドカフェという場所で十六夜さんと同じメイドさんがたくさんいる場所ですよ」

「えっ？　咲夜がたくさんいるの？」

「そういうと、なんだか違う気がしますけど……職業的には同じ人がたくさんいますね」

そんな会話をしているとたつたつたとメイドの一人がお盆を片手に走り寄ってきた。赤く長い髪をリボンで縛ってポニーテールにしている。それでもおさげは三つ編みのままだった。フリルのついたカチューシャもしている。

「すみませーん、いらっしやいませ。ご主人様」

とその女性は文とフランの前にきて、ぺこりと頭を下げる。長身ではあるが、ゆつたりとした黒く丈の長いワンピースの上からエプロンドレスを着ている。まさに「メイド」と言った格好をしている。

フランは眼をぱちくりさせて、その女性を見る。

「あれれ？」

いつか使った、誰かの口癖を思わず口にしてフランは考える。その様子に文は笑いを堪えているが、頭を下げているメイドは「頭をあげない」。彼女もやつと相手が「誰か」わかったのだろう。

「いもう……さまあ」

小声でうめくメイド。その声を聞いたわけではないが、フランはすつと膝を折ってメイドの顔を覗き込もうとする。だが、逆にその赤毛のメイドは顔を背ける。

フランはそれでもあきらめずに、メイドの顔の見えるほうへ回り込もうとする。しかし、メイドもさるものでお盆で顔を隠しつつ「に、にめいさまですがすか」とできるだけ声を低くして聞いてくる。

「おやおや。そのような態度でお客様を迎えようなんていいんですかねー」

面白がつて文は煽る。メイドは肩を震わせてお盆ごしに文を見るが、フランをここに連れてきたのは誰なのかを理解したらしく顔を隠したまま文に近づいてきた。そのま

ま文の右手を掴んで締め付けてくる。

「だ、だめです。折れます。だめ、ブン屋の右手は」

何か言いながら抵抗する文だが、掴んだメイドの手はびくともしない。しかしそんなことをしていたからかフランがまた回り込んできたことに気が付けなかった。

フランはハツとしてすぐにはあと笑顔になる。そしてメイドを指さしてから叫んだ。

「めーりんー！」

「いもうとさま」

涙目になっている赤毛の女性、紅 美鈴こそこのメイドの正体であった。フランに見つかったショックか何かで文を掴んでいる手にさらに力が入るが、無意識であった。「いたいたい」言っている鴉天狗の声など聞こえてもいない。

その上フランは美鈴の涙目にも痛がっている文にも頓着せずに勢いのまま、美鈴の腰に抱き付いた。ばふっとエプロンの中に入っていた空気が音を出して、フランがすりすりとおおを白い布に擦り付ける。

「…………ふう」

その無邪気なフランの態度に、美鈴は流石に隠す気も恥ずかしがる気持ちも薄れてしまった。だからこそ、彼女はにこつと笑った。鴉天狗の手首は離していない。

「おお、いたいたい」

文は己の手をさする。彼女はすでに席についており、フランもその前でメニューを開いている。椅子が少々高いらしくフランの足はつま先だけ床についている。そこにメイド服姿の美鈴がやってきた。

スカートの裾がゆらして近づくと、少し赤い頬に薄く付けた口紅は彼女の趣味というよりは店の方針だろう。彼女はフランだけに笑顔を向けて、水を二つ持ってきた。天狗の分は塩でも入れてやろうかと思つたが、客商売なのでやめた。

「妹様。ご注文は決まりましたか？」

「うー。この『どきどきメイドさんのオムライス』ってなに？」

「ろ、朗読されると、きついです」

美鈴はいつもは何気なく受けているメニュー内容を近しい者に言われて恥ずかしくなる。ここは男性をメインターゲットにしたメイド喫茶ではないのだが、それでもメイドを売りに行っているためこんな摩訶不思議なメニューになるのだろう。

「あつ。私は」

そこに割り入るように文が手をあげると。美鈴がフランに対するよりもすがすがしい笑顔で振り返って言う。文は自分の注文がしたかったに違いないのだが、そんなことはさせまいと美鈴が先手を打つ。口調はお客様用ではある。

「鴉天狗さんはスペシャルミラクルパフェですね！（2980円）」

「い、いやそんな甘ったるそうな物を食べる気はないのですけれど、どうか何も言つてませんよまだ……」

「腕をおしぼりしましょうか？」

そこではたと文は気が付いた。何故か彼女の脳内に浮かぶのは刀を持った不審アイドルの姿である。美鈴からは彼女と同じ「気」のようなものが伝わってくるのだ。その笑顔はよくよく見ると目が笑っていない。蛇足だが美鈴の言う「おしぼり」とは濡れた布ではなく、物理的に搾ることである。

「じゃ、じゃあそれで」

文は身の危険から逃れるために承諾した。メニューはフランが独占しているのでパフェがいくらなのかなど知りはしないが、どうせパフェなどというスイーツが高いはずはないと高をくくっているのだ。昼夜からもらった二千円もあるから大丈夫だろうとも思っている。

そんな文と美鈴の暗闘には気が付かず。フランは顔をあげて美鈴に言う。

「ハンバーグ」

注文したのは子供らしいもので、そのかわいらしさに美鈴の口元も緩んだ。普段から甘やかしているから一層可愛いのだろう。うんと頷いて美鈴はメイドらしく、ぺこりと頭を下げてにこつとフランに笑いかける。

「さくやみたい」

きらきらした目でフランは美鈴を「褒めた」がそれが賞賛の言葉だとは分かりにくかった。逆に美鈴は「咲夜さんには秘密ですよ」とフランに言った。

文の目の前に置かれたパフェは異常だった。テーブルに置かれているはずだが、その頂点は文の目線よりも高い。アイスクリームが山のように積まれており、その「山頂」にはさくらんぼの山ができています。一人で食べられる量ではないということとは明らかだった。

「それじゃあ、残さないようにね」

美鈴は持つてきた時にそう文に言つて、肩をぼんと叩いた。静かな脅し方はどこなぐメイド姿に影響されたのか咲夜と雰囲気似てきたような気もする。しかし、フランに対しては終始にこやかに対応して、紙エプロンを首元に付けてあげる。

それを少し恨めし気に文は見てからスプーンでアイスを食べ始める。イチゴ味のクリームが付いていて、一口目は間違いなく美味しかった。百口くらいで食べ終わることができらるだろう。

フランの前に置かれたハンバーグはただのハンバーグではない。ここはメイド喫茶なのである、いちいち通常メニューにもアクセントをつけることはもはや「あたりまえ」といつてよい。

更に乗せられたハンバーグには「顔」があつた。チーズやケチャップを使って「くまさん」型のハンバーグになっていた。まだつくられて間もないのか、じゅうじゅうと小さな音が鳴っている。

「妹様。くまですすよー」

「ほんとだつ。クマみたい。いただきます」

しかしお腹の減つていたフランはフォークを持ってクマの眉間にぶつさす。愛らしいクマのハンバーグが猟奇的な場面に早変わりしてしまい、美鈴は笑顔のまま固まつてしまった。フランはそんなことは気にせずきとうにナイフとフォークでクマを『解

体』すると、その一片を口に運んで、もぐもぐと食べる。

「んん〜」

おいしそうに食べるフラン。色気より食い気、クマより肉。そんな食事の風景に美鈴は戸惑ったが可愛いのでよしとした。完全に魅力に取りつかれて「フラン馬鹿」になっている。眼に入れても平気そうでもある。

その前で甘ったるいアイスをもしましや食べている鴉天狗。スプーン削り取ったアイスの中から出てくる練乳という伏兵がさらにお腹にたまっていく。まだ、食べていても美味しく感じる事ができる。

「あ、あのフランさん」

「何？ アヤ」

「それを食べたなら、このパフェをちよつと食べませんか？ いや、ちよつとというか90%くらい食べてくれもいいのですけどね」

「いいの?」

フランはわつと喜んで立ち上がるうとした。先ほどより文のパフェをちらちらと見ていたのは内心で狙っていたのだらう。文の方でもフランに与えるのであれば、紅魔館の赤毛メイドとはいえ文句は言えまいと思ったのだ。

「……」

文がちらりと美鈴をみると、ふうと息を吐いてしかたなきそうにしている。文の計略は当たったのである。しかし内心では「このパフェいくらなんでしょうか？」と疑惑が溶けない。2000円で足りるかもだんだん不安になってきていた。

「おなかいっぱい」

フランはハンバーグとパフェを食べてお腹をさすりながら言った。目の前では文が「お腹いっぱいです」と死んだような顔でうめいている。アイスに興味を示したフランではあったが、少女のお腹のキャパシティなど大したことはない。最終的にほとんどを文が食べるようになってしまった。

「もう、にとと、パフェなんていりません……」

文の苦しげな声。お昼ご飯としてはへビーすぎる物を食べて、一種のトラウマになってしまったようである。逆にフランは心地よい満腹感でいっぱいになっていた。

「食後のお紅茶ですよ。妹様」

そこにお盆にティーカップと丸いフォルムをしたティーポットを載せて美鈴がやってくる。文はその虚ろな目で彼女を見て、抗議する。

「紅茶なんて飲むお金ないんですけど」

「……これは私のおごりよ」

美鈴はフランに対する言葉遣いと文に対する言葉遣いが違い。それは彼女の中で主筋への敬意が関係しているのだろうが、文に対する口調が本来のものなのかもしれない。

並べたティーカップに紅茶を注いでいく美鈴。こぼこぼと音をたてて、静かに湯気が立ち上っていく。ハーブの香りがすることに文は気が付いた。そこで少し疑問に思ったことがあったので聞いてみた。

「これはあなたが煎れたのですか？」

美鈴は文を見て、少しにんまりとしてから「そうよ」と返す。どうやら多少なりとも自信があるらしい。働いて数か月の間にそれなりに練習したのだろう。

美鈴は嬉しそうに二人の前にティーカップを並べて少し期待した目で横に侍った。しかし、知り合いに飲まれるのが怖い部分もあるのかお盆で顔の半分を隠している。

「いいかおりですね」

文はカップを手にして、湯気ともに立ち上る香りを楽しむ。カップの中で揺れる琥珀色の紅茶を少し口に含む。砂糖は入れていないから程よい苦味が、文には心地よい。

「おいしいです」

天狗にしては素直な感想を漏らす文を美鈴は見て、お盆で手を隠してぐつと握る。見られると恥ずかしいので顔はポーカーフェイスを気取っている。口元がにやついているのは隠しきれてはいない。

フランも紅茶を口にして飲む。ハンバーグをフォークで刺したりする彼女だが、紅茶好きな姉のいる環境からか、その飲む仕草は優雅であった。しかし、砂糖を入れていないために顔をしかめそうになっている。

「お、おいしいわ」

強がりながら美鈴に言うフラン。赤毛のメイドはくすりとして、砂糖を入れてあげる。そこからはフランもおいしそうに飲むようになった。

文はそんな二人の様子を見ながら、ぽつりと言う。

「あなたのご主人様にも飲ませてあげたらいいんじゃないですか？」

「お、お嬢様に？ それは……そうね。いつか飲んでもらいたい、かな。咲夜さんに負けないように練習してから……」

文は少し慌てながらも、わずかに挑戦的でもある美鈴を見ながら、紅茶を飲む。

帰りに財布からお金が無くなるが、今はただ食後のティータイムを楽しんでいた。



夜にフランは咲夜のカフェでカウンターに座り4DSをしていた。

咲夜はそんなフランの傍らにホットミルクを置いて、一日にの締め掃除をしている。この頃はコーヒーを淹れることが自分でもうまくなってきた気が、彼女はしていた。

「そういえば、さくやー」

「なんでしようか？ 妹様」

「めーりんって紅茶煎れるのがうまいんだよ」

ゲームをしながら世間話をするフラン。あまり意識して話題にしているのではなく、ミルクをみてなんとなく話している。美鈴のバイトについては秘密にしてほしいと言われたが、紅茶のことについてはなにも言われていない。

咲夜はきらりと眼を光らせて、手に持ったモップの動きをとめる。

「今度おねー様にも、飲ませたいって。咲夜に負けたくないからっ」

「へえ……」

くるりと振り返った咲夜の顔は、とてもいい笑顔だった。

「妹様。そのお話は興味深いですわね」

咲夜は、静かに言う。

秋のおまけ：恐怖の忘れ小傘！

鈴虫の鳴く静かな夜。

秋の冷たい夜風と空にぼっかり浮かんだ、中秋の名月。

星の輝かない暗い現代の空の下、どれだけの人が月を見ているのだろうか、彼らは酒を酌み交わすのか団子を食べているのか。この秋の夜空をそれぞれが楽しんでいるのだろうか。

今日はそんな夜だった。

電燈が明滅する暗い道にかーんかーんと何かを打ち鳴らす音が響く。その後には調子の外れた声が響いた。あたりは住宅地であることもあり道にはほとんど人通りはない。たまに家屋の中から人の声が聞こえるくらいである。

「マツチ一本火事のもとー」

その声は可愛らしい響きを持つていた。一定のリズムでかーんかーんと何かを打ち鳴らす音がまた聞こえると、同じように防火を呼びかける声が夜の街に響く。伝統と言つてよい「夜の見回り」である。

しかし「声」の主は邪悪な考えを持つていた。いや、とてつもない野望だといつていいだろう。それも「彼女」の出自を考えると当たり前なのかもしれない。

道を歩く少女は奇妙な格好をしていた。

大きな紫の傘を器用に腕で支えながら首で押さえている。その傘には大きな「眼」の文様があり、舌のような巨大な飾りがだらーんと垂れ下がっている。それに取っ手の先は小さな下駄を履いたような作りになっている。

両手には「防火」と彫り込まれた拍子木（ひょうしぎ）を持つている。それは対になった木の道具で、打ち鳴らして使う物だ。少女はそれを一定のリズムで鳴らしていたのだ。

服装は白いシャツの上から、胸元を紐で結んだ青いベスト。それに水色のスカートには水玉の模様。そこから伸びた細い脚には何もつけておらず、直に下駄を履いている。

少し傾けた傘の下には肩まで伸びた青い髪にぱちりとした大きな眼。その片方の目はオッドアイ。赤い眼を不敵に光らせて、彼女は夜の闇を歩いている。

この少女こそ幻想郷の恐怖の妖怪、多々良小傘であった。

小傘は町内会で決められていた夜の見回りに自ら志願していた。現在は命連寺に寄寓している身としては、他の者と来てもよかったのだが先に書いた通り、彼女にはとある目的があった。だからこそ言葉巧みに一人で見回りに来られるようにしたのだ。

その目的とは道行く人を恐怖のどんぞりに陥れることである。

幻想郷での彼女は人間の恐怖を食べて過ごしていた。人を驚かせることによって、その恐怖を食すのだ。ただし、グルメであるのか彼女はよくひもじい思いをしていたこともある。

現代に来てからは普通に食物を摂取しなければいけない体になってしまった。だから人を驚かせる意味もなければ、実利もないのだが小傘は毎日うずうずしていた。

——人を驚かせたい！

それは小傘の日々の欲望であった。最初は聖白蓮が怖いこともあり隠していたが、どうしても耐えきれなくなり今回の計画を想いついたのだ。

やはり、妖怪といえれば夜である。そして魔性の月が欲しい。そんな条件のそろった日に小傘は誰にも悟られることなく外へ出ていかなければならない。そこで目を付けたのが「夜の見回り」であった。小傘もよく意味はわからないが「マッチ一本火事の元」と言いながら拍子木を叩くだけで外を練り歩けるのだ。

一人で外へ出れば後はこっちの物だと小傘はほくそ笑んでいた。普通ならば見回りは数人で行くところだが、どうしても一人で行くと言い張り、命連寺の面々からは怪しまれたことには気が付いていない。

「マッチ一本火事の元——」

それはそれとしても小傘は真面目に見回りしていた。カンカンと拍子木を打ち鳴らして、防火を近所の住人に呼びかけている。だが、小傘はこれではいけないと思う。元々ここにいる理由は自治体に貢献することではないのだ。其の為だけに幻想郷から着ていた一張羅をクリーニングに出して気合を入れたのである。

(そろそろかな? ふふふ、人間達よ恐怖におののくがいいわ!)

時期を見計らっていた小傘はにやりとした。ここからは妖怪の時間である。人間達は驚き、すくみ、恐怖に震えるだろう。だから青い髪の少女は手始めとばかりに高らかに言った。

「マツチ一本、うらめしやー!」

カンカンと拍子木を打ち鳴らす小傘。彼女は伝統にのっとり世の中へ恨みを込めて「うらめしや」と叫んだ。昔から人を驚かせる化け物の一言目はこれに決まっているのだ。ついでに防火を呼びかけられて一石二鳥である。

鈴虫の声が小傘には聞こえる。せっかく恨みを込めたというのに、全くを持って反響がない。そこにちよつとだけ不満顔を見せる小傘だが、彼女も歴戦の恐怖の妖怪。今まで怖がらせてきた人間の数は足の指を使わないと数えきれない。

しばらく歩いていると小傘はとある公園に差し掛かった。

そこはいつか天狗と吸血鬼が遊んだ由来のある公園ではあるが、もちろんのこと小傘

にはわからない。彼女はなんとなく公園の中を覗き込んだ。

そこには小さなブランコがあった。そして女の子が一人座っている。

頭に烏帽子をかぶって銀髪の少女がブランコに座って、月を見上げている。ほのかに蒼い月明かりに彼女の白い肌が照らされている。身じろぎをしているのかキイキイと錆びたブランコの鎖が鳴っている。

少女は、物部布都であった。こんな時間に何をしているのかというと、月見をしに来たのである。できるだけ暗い場所のほうがよく見えるだろうという考えから公園にやってきたはいいが、普通に怖くなって動けなくなっていた。

布都は半ズボンを着ている癖に、上半身はコートを着込んでいる妙な格好をしている。いや、烏帽子をかぶっている自体どうあがこうとも奇怪ではある。

小傘は布都を見て、思わずうずうずしてしまった。物陰にしゃがみこんで布都の様子を見舞っている。遠くから見るとただの美少女なのだが、彼女の知り合いになるとそのことを完全に忘れさせる程度の能力を持っている。

小傘はペろつと舌を出して、傘を小さく折りたたむ。その中に身を隠しながら公園に入り込んでいった。慎重に音を出さずに布都へにじり寄っていく。逆に銀髪の少女は月を見たまま動かない。視線を動かすとおぼけとか妖怪とかが出てきそうだからだ。

まさか本当に近づいてきているとはわからないだろう。ちなみに小傘は拍子木を首にかけている。

「ふ、ふふ。こゝ、今宵の月は綺麗ではないか……」

布都は強がりながら月をほめる。内心では月の光が唯一の救いなのである。尸解仙のくせに死者の霊が怖くて仕方ないのである。だが、小傘という恐ろしい妖怪が彼女の真後ろにまで回り込んでいることが、彼女の運のつきだった。

布都の肩をとんとんと誰かの指が叩いた。びくつと体を震わせて彼女は後ろを振り向く。

そこにはいたのはべろつと赤い舌を出した多々良小傘がいた。

「うらめしやー!」

傘を差してできるだけ怖そうな顔をしている小傘は力の限り叫んだ。傘のせいで顔に影が現れていて、布都を見下ろすような恰好になっている。それが布都には効果絶大であった。

布都の眼は小傘の顔を凝視したまま、だんだんとおおきく開かれていく。あわあわと口元が動き、彼女を指さしながら立ち上がった。

「ああああああわあああああああああああああああつあああああああああ!?!」

振り返つて一目散に逃げていく。目元には涙、走り方は両手を必死に振りながらのいかにも慌てているようだ。途中でこけそうになりながら、布都は叫びながら逃げていった。遠くまで行つてもその悲鳴が聞こえてくるくらいに驚きようであった。

ぽつんと残された小傘はポカーンと口を開けて舌を出したまま固まっている。見事としか言いようのない布都の逃げっぷりに圧倒されたのだ。しかし、小傘は自らに恐怖したのだと少しづつ理解できてきた。

そう理解したところでぼろぼろといきなり小傘は泣き始めた。大粒の涙が頬を伝つていく。彼女は茄子のような傘で顔を隠しながら言う。やはり泣く自体は恥ずかしいのである。

「あ、あんなに驚いてくれたの初めて……」

そう感極まつて小傘は泣き始めたのである。心が温かいもので包まれていき、今までの苦い思い出が洗われていくかのようにだった。近隣の住民はその子供に「悪い子にしている」と小傘ちゃんを、来ない」と言い始めているこのごろである。

だからこそ布都の驚きの様は小傘には感動的であったのだ。しかし、彼女は強く涙を払い、ぐつと気合を入れる。

「今日はいけそうな気がするわっ！」

そんなこんなで小傘は妙なやる気を出したのだ。

小傘は恐るべき計画を立てた。それは住宅地の角にひそみ、曲がってきた住民を驚かせようと思ったのだ。今日ならいける、それが小傘を突き動かす原動力であった。それに満月に暗い夜は妖怪にはこれ以上ないほどの絶好の条件である。

「……やつぱり、驚かせるのにはシユチュエーションが大切ねっ」

人を怖がらせようというのに、明るい声を出している小傘だが、彼女を批判できるものはいないだろう。なんといつても今宵の彼女は一人驚かせているのである。実績さえあれば多少のことは許されるのだ。

そんなことをしていると、道の向こうから哀れな標的が現れた。

小傘は高鳴る胸を抑えて、そつと曲がり角から顔を出す。歩いてくるのは赤い髪をした小柄な少女のようである。なぜ性別が分かるかという点、赤いスカートを穿いているからだ。それに長い袖の黒いシャツ。首元にはマフラーを付けているので、口元が隠れている。

「ふっ、ふふ。これから驚かされるとも知らないで……」

顔を隠して、小傘はほくそ笑み。本当に嬉しそうに口元を綻ばせる。それだけを見ればただ可愛らしいが、彼女は恐るべき妖怪なのである。

道の先からは赤い髪の少女がかつかつと歩いてくる。背は小傘より小さそうである。頭のは大きな紫のリボンをつけていることもわかった。小傘はタイミングを計りながらそおつと少女のことを観察している。

よくよく見ると手には「マツモトキヨハル」と書かれたビニール袋を持っている。明らかに買い物物の帰りなのであろう。しかし、こんな夜には軽率な行動しか言えない。そんなことだから小傘のような妖怪の標的にされるのである。

赤毛の少女は曲がり角に差し掛かった。小傘は今だつとばかりに飛び出す。くるりと大きな傘を回して、べろつと舌を出して少女に叫ぶ。

「恨めしやー!!」

「うわっ」

赤毛の少女は眼を見開いて身を引く。明らかに驚いている。先ほどの布都にははるかに及ばないが、小傘の心は充足感に満たされていた。やはり妖怪は人を驚かせてなんぼであると彼女は想うのだ。

赤毛の少女はのけぞって、首を動かす。そして、

首が落ちた。

比喩ではなく首が赤毛の少女から離れて、地面に落ちる。何が起こったのかわからない小傘は小さな声で「驚いた?」と聞いたが、もはやそんなことを言っている段ではな

力の限り叫びながら夜の道を走る小傘。眼からは涙、口からは涎、手に持った傘を壁やらゴミ箱やらにこすりまくって逃げる。逃げる途中で脱げたのかいつも何やら裸足になつており。走るたびにペタペタと音を出すのが少々可愛らしい。

それでも止まらなかつたのは後ろからは首なしの妖怪が追つてこないか不安で不安で仕方なかつたのだ。やはり、良い月の元には恐怖があるらしい、誰が恐怖するかは決まつてはいない。

こうして、人を驚かせようとした忘れ小傘の夜が終わりを告げた。本気で泣きながら裸足で「おてら」に逃げ帰つた時には何度か転んだのか、服は砂に汚れている。近隣に響く叫び声をあげながら帰つてきたから後日もっと恥ずかしい目にもあつた。おいてきた下駄も状況証拠にされてしまった。

小傘は唯ただ純粹に人を驚かせたいだけであつたのだが、
——それがこのざまである。

秋のおまけ：布都が帰ってこない

「ここは商店街の一角にある、小さなお店だった。

「おっ?」

そのお店にある冷蔵庫を開けて、物部布都は首を傾げた。今から布都コロツケを作ろうというのに、肝心要のサツマイモがどこにもないのだ。彼女は冷蔵庫に顔を突っ込んでさがしてみるが、焼きそばの麺やお好み焼きに使う具材などは綺麗に整頓して置かれているがイモはない。

布都の頭に載った烏帽子が冷蔵庫の縁に引っかかってずれる。彼女は「おっお?」と変な声を出してそれをかぶりなおした。なぜ現代においても烏帽子などをかぶっているのかはわからない。

布都は冷蔵庫を閉めて、店の中を見渡した。横ではつまらなさに前掛けを付けた水橋パルスイがフライパンを油紙で拭いている。お昼を過ぎて中途半端な時間ではお客もない。さつきまでは「太子」がいたが、既に帰っている。

「妬ましいわあ……」

フライパンをふきながら妬むパルスイ。その相手は「太子」であった。このごろはよ

く店に来ては布都の料理を食べていくが、基本的に会計は後に布都が自腹で行う。「太子」自身は払おうとしているのだが、布都は頑なに受けとらない。しかし、明日も来てくれと懇願するのが日課になっていた。

その主従関係も妬ましいことだが、それよりもパルスイは「太子」の内面もうらやましい。

見目麗しい姿に、大きな瞳。いつも余裕のある優雅な態度。会ってから何度爪を噛んだかもわからない。それに彼女の日常の情報も布都から耳にタコができるくらいに聞かされている。

どうにも新しいものの好きらしく、現代にある書物などを初めに、機械、施設、制度とありとあらゆるものを視察して回っているという。古代ではこの国にいろいろな技術や制度の基礎を築いた女性だとは聞いていたが、パルスイも実際に見てみるとその魅力の一端が分かるような気がする。

——太子はすごいであろう！ ふふん。

パルスイは不意に得意げに自慢してきた布都の記憶を思いだして、イラツとする。

——太子はこのごろ「ばそこん」に凝っておられるのだ！ ご自分で組み立てて見られたりもされておる。それに、羽なし扇風機などという摩訶不思議な物も買ってこられた。それだけではないぞ、へるすめーたーとか言う物も買われたし……ははは、ただ物

を買うだけでなく最近朝に「ランニング」をされておられる、やはり健康は大事だからな。

一日の自慢話の二十分の一程度を思い出してパルスイはげんなりした。「太子」が店に来るようになってからは毎日毎日このような話を聞かされるのだ。今では「太子」のフルネームも言えるし何が好きで、何が嫌いかもついでにいうとここ数日のスケジュールもパルスイは言える。

「まるでストーリーカーみたいだね」

パルスイは自嘲して、はあとため息をつく。それからフライパンを下ろした。とりあえず食器類や調理器具の洗浄は終わったから、布都に話しかけようとしたのだ。内容は特に思いつかないから羽なしだろうがなんだろうが「扇風機はいらないのではないかと伝えようとした。

パルスイはそう思っていたのだが、彼女はあれと眼を見開いた。

「……………え？」

いつの間にか物部布都の姿はそこにはなかった。



道路の両脇には街路樹が並んでいる。それは黄色く色づいた銀杏の木々であった。

たまに落ちてくる銀杏の葉が道に積み重なり。「彼女」があるくたびにくしゃくしゃと小気味よい音がする。

「へくしゅ」

布都は外に出ていた。サツマイモを近くのスーパーに買いに行こうと思ったのだ。商店街で買ってもよいのだが、スーパーで他の物を買いたい気持ちもあつたのだ。パルスイは何か独り言を言っていたので、そつとしておいた。まさか自分が原因だとは思わないだろう。

彼女は首にはマフラーを巻いて、茶色のPコートを着ている。それに半ズボンを穿いているので健康的であろう。靴はショートブーツだった。上から下まで一式は彼女が選んだのではなく、とある仙人が持つてきたものだ。

「うう、ここのとこるとみに寒くなってきたな」

布都は鼻を指でこすりながら言う。彼女が歩きながら顔を上げると、空には雲一つない快晴だが、それでも夏に比べれば太陽の光が弱い。

木枯らしが布都の髪をなびかせる。日に日に冷たくなっていく風が、冬が近づいてくることを教えてくれる。しかし、布都は今でも足元から震えるような寒気が這いあがってくる気がした。こんなに厚着をしているというのに今からこれでは本格的な冬の到

来が少し、怖い。

寒さに身を震わせながら布都は歩いているとある自動販売機が眼に付いた。普段は節約のためにあまり使わないのだが、今日は何か温かいものが欲しいと思ったのだ。た。

「……どれ、どれ」

わざわざそんなことを口に出して自動販売機に布都は近づいた。数多くの飲み物が並んでいるのを一つ一つ見ていく。そこで布都はとんでもない物を見つけた。

黄色い缶のサンプルがそこにはあった。表面に書かれているのはトウモロコシの絵である。言わずと知れた有名なスープの缶飲料だった。

「コーンスープだとい！」

ぼつと下がって布都は身構える。なぜこんなところにスープが売っているだと彼女は驚愕したのだ。普通であればレストランなどのスープバーか単品で頼まなければ来ないはずの物ではないのかと彼女は驚いたのだ。もしくはスープバーで粉を買わなければならぬはずである。

布都は冷や汗を流した。油断すればやられると思う。罠の可能性もあるのだ。コーンスープの下には「あつたかい」と書かれているがぬるいかもしれない。

でも飲みたかったので布都は気が付くとお金を投入して、コーンスープのボタンを押

してしまった。

「うまいではないか。うまいではないか」

両手で缶を持って、しやりしやりと中に入っていたコーンを噛みながら彼女は言う。ほつぺたが赤くなっているが、その顔は本当に美味しそうである。あまり隠し事ができない性格はこんなところにも出ているのだろう。

布都は缶を口に付けて一気に流し込む。あつたかいそれが冷えた体に染みわたっていくかのようにだった。しかし、所詮は缶である上に一般的な飲料よりは小さな容器に入っている。ゆえにすぐに飲み終ってしまった。

「……………」

布都はぺろりと唇を嘗めて、名残惜しそうに缶を自動販売機の横のゴミ箱へ捨てようとする。だが、その手はピタツと止まった。

布都は手に持った缶を振ってみると何かが入っているような異物感がする。彼女は飲み口を覗き込んでみたが、無論のこと暗くてわからない。しかし、何らかの物体が缶の底にたまっているような、そんな感覚が彼女にはするのだ。

「ま、まさか底にはまだ、こ、コーンが」

人々はみな箒を持って、公民館の広場を掃除していた。並木道には銀杏の落ち葉は多く敷かれていたように、広場にも多くの落ち葉があった。それを箒で掃きながら、何か所かに集めているのだ。集められたそれはまるで山のようになっていた。

布都は買ひ物のことは忘れて、広場へ足を踏み入れた。今日は近所の大掃除の日だったかと焦っては見るものの、掃除をしている者たちはどことなく朗らかな印象だった。

特に真ん中のあたりで掃除をしている、二人の少女は楽しそうに箒を動かしていた。まるで秋が来たことを喜び、楽しんでいるかのようだった。その二人はとても良く似ていたが多少服装が違った。

布都は近くにいた者に今日は何故皆が集まっているのかを問おうとしたが、その前に彼女の肩を後ろから叩くものがいた。彼女は振り返る。

そこにいたのは変人だった。

その変人は大きな茄子のような傘を持っている。その傘には「眼」が書かれており、べろんと赤い舌のような飾りが付けられている。それでなくとも「彼女」の容姿も奇抜だった。

青い肩まで伸びた髪に左右の色の違うぱっちりとした眼。それでも可愛らしいダブルコートにチェックの青いスカート。それに黒のタイツを穿いている。どこかの誰かの様に短パン生足などではない。

その少女は布都の前で顎をあげて、ふふんと鼻を鳴らしている。まるで何かを誇っているかのようだった。笑いを堪えているようにも見える。

——どやあ

布都はきよんとんととしてその少女の顔を見るが、いったい何の用なのかわからない。しかもいきなり勝ち誇った顔をされて訳も分らない。しかし、完全に知らないかというとなんかともなく、布都はその少女がクリーニング屋で働いているところを見たことがあった。

それで布都も聞いた。

「だ、誰なのだ。おまえは」

「えっ!? わ、私よ。この前の夜にあつたじゃない?」

「よ、る? 我は……」

布都は顎に手をあてて思案する。この頃外には出ていない。少し前に中秋の名月を鑑賞しようと外へでた時から、夜は危険だとわかった。あの日にとんでもない化粧物と出くわしたことが布都の教訓になっていたのだ。巨大な体躯をした化粧物が「うらめいやあ」と日本語のようなことを言って襲ってきたのである。

だから目の前の少女の言っていることは嘘だと布都はわかった。会っているわけがないのだ、最近夜に外へ出ていないのだから。

「我は、知らんぞ?」

「え、ええ? え? で、でも? ……そ、そんなあ」

何をがっかりしているのか少女は肩を落として、とぼとぼどこかに行つてしまつた。本当に何の用だつたのだろうと布都は思ったが、特に後を追うことはしなかつた。

そのかわり布都を呼びこえがした。

「おや、あなたも来たんですね?」

「!」

そこには黒髪の少女が立っていた。短く切つたそれがすつきりとした印象を強めている。頭には何故か錨のマークがついた小さな帽子をかぶっている。紺のパーカーには首元にラインが入っており、胸元は白いネクタイ状になっている。下にはスカートを履いている。

彼女こそ、幻想郷にて「宝船」を操船していたといわれる村紗 水蜜であった。彼女も手には箒を持っている。だが、それ以上に布都は彼女に対して身構えた。なぜならば水蜜の主人と布都の主人は昔敵対していたこともあるのだ。

「き、貴様。なにをたくらんでいる!」

だからとりあえず布都は相手が企んでいることにした。証拠とか、根拠とかと言つた物はないが水蜜も布都にとっては苦手な相手なのだ。なんといつても宗教が違ふこと

が大きい。ちなみに個人的な恨みは一切ない。

「い、いや。なにも企んでないですけど……」

「嘘をつくでない！ あのような破廉恥な格好をしていた奴を信じることなどできぬ」

「……！ 河童写真……あれは……一輪が悪い、です」

手で顔を覆う水蜜。指の隙間から見える肌は赤い。しかし、気を取り直して彼女は布都へ向き直る。もう二か月以上前のことなのだから、いつまでも恥ずかしがっているわけにはいかない。

「ま、まあ。近所の掃除に参加すれば焼き芋がもらえるということであつたんですけど……あなたもそうじゃないのですか？」

「や、焼き芋だとつ？」

「えつ、知らなかったんですか？ 落ち葉を集めてから、後でイモを焼くらしいですよ。けつこうももらえるらしいですから、寺にも持って帰ろうと思つていたので……」

「箸はどこだつ！」

「……これ、つかつてください」

一瞬のうちに水蜜への確執も忘れて布都は箸を受け取る。普通に「かたじけない」とお礼も言つてしまった。

布都はそれから広場中の落ち葉を掃除してまわつた。欲しいのは芋である。

わからないが、それでもいいことには変わらない。それゆえ彼女は一人で全てやらなければならなかったのだ。

たまに布都コロツケを頼まれると、戸棚の奥からサツマイモをだして作って دادした。いつもパルスイはそれを作ってはいなかったが、意外とやればできるものである。

おまけ：優曇華事件

夜。空を見るとまばらな星々と、満月でも新月でもない中途半端に欠けた月の見える日だった。とある少女は近くの24時間開いているスーパーマーケットに行こうと夜道を歩いている。

街灯が点滅しているのは電燈が切れかかっているのだろう。少女は「LEDにしなさいよ……」と最近覚えた言葉を使って呟く。幻想郷の美しい星々が見える夜でも怖いのに電燈がばちばちと点滅する夜道などはもっと怖いのだろう。

彼女は頭にキャップをかぶり、眼には黒い丸縁のサングラス。夜にそんなものを掛けられているからたまに足もとがふらついている。髪は長く、薄い紫色をしている。その艶やかな髪はほのかに月明かりで光りながら彼女が歩くたびに揺れている。

服装はシャツの上に黒のパーカー。それにホットパンツを履いている。だが太ももをさらけ出しているかというところはなく、レギンスを履いている。全体的に暗い。そんな姿だった。

彼女の名は鈴仙・優曇華院・イナバという。元々の名前はもつと短かったのだが、色々な事情があり妙に長ったらしい名前になってしまった。そして、彼女も他の少女達の例

に漏れることなく現代へ放り込まれていた。

それもつい最近のことなので、まだ社会に慣れてはいない。彼女の師匠は河童と協力して何かやっているようだが、そんなことは彼女にはわからない。もう一人の主人に至ってはパズルだがドラゴンだか知らないがいつも何かやっている。

「はあ……早く幻想郷に帰りたいなあ」

と鈴仙はぼやくが今すぐには帰れそうにはない。先の師匠は心配することはないと言っているが、それを信用しても問題の本質はそこではない。

夜道の向こう側から誰かやってくる。鈴仙はびくつと震えて、物陰に隠れた。するとスーツを着た男性が歩いてきて、すたすたと歩いていく。おそらくは何の変哲もないサラリーマンだろうが鈴仙は彼がどこかに行つてから物陰からでてくる。

「……いったわね」

ふうと息を吐く。鈴仙はともかく人間が苦手なのである。幻想郷では人里に来て薬を売つたり「ウルトラソニック眠り猫」なる奇妙な物を売りつけたりしているが、別に好きでやっているのではなく、孤立を恐れて行商をしているのだ。

幻想郷の人里には多少なりとも慣れがあるが、現代の社会ではそうもいかない。そもそも彼らはなにを喋っているのかよくわからない。「すまほ」だとか「かいらんばん」だとか「りさいくる」だとか「敷金礼金」だとかあまり聞いたことのない単語を使うので、

現代の住宅は防音がしつかりしていて昼ならともかく夜は静かである。それに住宅街は人通りがすくないから不気味でもある。

鈴仙は少しだけ怯えるように眼を動かしてあたりを警戒する。たまに後ろを振りむいて誰もいないか確認する。人は苦手で会いたくないが、いなければ怖い。それが鈴仙の今の気持ちだった。ともかく鈴仙は早足に歩いている。

「……………あつ」

鈴仙は声をだした。ちよつと先に二人組の人間がいたのだ。服装は青いシャツの上にジャケットを着ている。頭には大きなエンブレムのついた帽子を付けているようだ。鈴仙はそれを見て物陰に隠れてしまったが、逆に二人組が気づいた。

「こんばんは、お姉さん」

「えっ？ あ」

二人組が近づいてきてその片方が鈴仙に話しかける。よくよく見ると胸元には「警視庁」と書かれている。要するに警察である。彼らはパトロールの途中で鈴仙を見つけたのだろう。ただ歩いているだけなら話しかけることもなかったが、隠れた彼女を不思議に思つて声をかけたのだろう。

警官の片方は若い男でもう一人は髭の生えた中年だった。声をかけたのは中年の方で、つまり髭の警官である。

「えっえ？ こゝ、こんばんは」

いきなり声を掛けられて鈴仙はしどろもどろになってしまった。警官の二人は鈴仙の挙動不審な様子に顔を見合わせた。だからと言っても鈴仙の声はどうみても若い女の子である。あくまで優しく髭の警官が聞いた。夜道を女の子が一人で歩くのは純粹に危ないこともある。

「お姉さんは、こゝで何をしているのかな？」

「……………何を？ そ、そんなに大したことじゃないわ」

鈴仙はなんとなく隠してしまう。ぼかして答えるのは答えたくないときの常套手段だが、この場合はまずかった。警官の前で隠すということはあまりいい印象は与えられない。それどころか疑われる原因になりうる。

「……………お姉さん。名前は？ どこに住んでいるの？」

「……………」

案の定疑われたらしく少し問い詰めるように髭の男は聞いてくる。鈴仙も鈴仙で警戒してしまい、一步後ろへ下がってしまう。そもそも彼女は彼らが「警官」などということ自体あまりピンと来ていない。つまり彼女にとつての彼らは「不審者」なのである。もちろん鈴仙自身も警官から見れば「不審者」である。ある意味では異文化同士の交流なのだが、この場合は最悪であろう。お互いが不信感を持っているのである。

「お姉さん？ 身分証出してくれるかな」

若いほうの警官が詰め寄る。すでに彼らの質問は「職務質問」になっている。むろん鈴仙にそのようなことはわからない。だから無言でさらに下がる。サングラス越しに睨み付ける。そもそも身分証などまだ持っていない。

「……あなたたち。何者なの？」

鈴仙は聞く。何者もなにも公務員であるが、そんなものは幻想郷にはいなかったのだからわからない。彼女からみれば、夜道でいきなり話しかけてきて「身分」などというものを聞いてくる謎の二人組である。

そして鈴仙が相手に話を聞いたこと自体もとある考えがあったからだ。時間稼ぎである。

意味の分からない質問で困惑する二人の警官の前で鈴仙はサングラスを取った。彼女の瞳、怪しげに光る紅い眼。見た者を魅了しそうなほどに美しかった。

「わるいけど……少しだけ『狂って』もらうわ。手加減してあげるから、安心しなさい」
鈴仙はその紅き瞳で警官たちを凝視する。二人の男はその怪しさに魅かれるように見てしまう。それを見て鈴仙はにやりと笑う。「かかった」とほくそ笑んだのだ。

そう、鈴仙の瞳には力があつた。その妖艶な光の宿る両目を見ると人は狂気に陥るのだ。だからこそ彼女はサングラスを掛けて力をセーブしていた。うっかり何の魔力も

ない一般人と眼が合つては大変なことになるからだ。

狂気を操る程度の能力。それが鈴仙の力である。実際にはもつと大きな「波長」も操れるが、今は目の前の二人が「狂え」ば問題ない。

そして鈴仙の目の前で二人の警官は呆けている。彼女はうまくいったと思い、ふふんと得意げな顔をした。彼女の言つた通り多少感情の波を「狂わせた」だけで、手加減したから後遺症もないだろう。

そう思つて鈴仙は髪をかき上げて「狂っている二人」の横を通りすぎようとした。

「い、いや。お姉さん。どこにいくの?」

「ふえっ!」

その鈴仙の肩を髭の警官が掴む。月のウサギあまりのことに奇妙な叫び声をあげた。

「えっ? え。あ、あなた平気なの?」

「えっ? な、何がでしょうか? い、いきなりサングラスを外して意味の分からないことを言われても……」

鈴仙は眼をぱちくりさせる。どうにも目の前の男は平気そうである。それどころか彼らが呆けていたのは「鈴仙の意味の分からない行動」を見たからで、別に感情の波長に乱れなどない。そこではつと鈴仙は気が付いた。

「ま、まさか。何かしらの訓練を受けているの?」

「く、訓練ですか？ まあ、それなりに鍛えていますか……」

やはりと鈴仙は警官の手を力強くはらい、ぼつと身構える。まさか自分の能力が効かないほどの使い手だとは思わなかった。それに現代では空を飛べないから能力自体も減退しているのかもしれない。悪い条件が重なってしまったのだろう。

彼女はごくりと息をのんで、右手を上げて人差し指をのぼして親指を上にもひける。つまり指を「銃」のような形をしたのだ。

能力が効かないのであれば、実力行使しかない。鈴仙は右手を警官に向けた。それはまるで銃を突きつけるような恰好だが、警官たちから見れば指を指されているようにしか見えない。

「……動けば撃つわ」

「……」

「……」

鈴仙は人差し指を男達に向けながら、少しずつ後ろへ下がっていく。人間を傷つける気は全くなかったが、能力も効かない相手であれば仕方がない。彼女はいつも「弾幕ごっこ」で銃弾のような弾幕をつくるが、無論のことそれを人間に当てれば相当なダメージになる。

ゆえに手を「銃」の形にして脅したのだ。あくまで自分の能力も効かないほどに「訓

練」している二人に対しての非常手段である。しかし、髭の警官には彼女の行動の意図が皆目見当もつかない。

「あ、あのお姉さん。だ、大丈夫?」

警官は動いた。脅しているにも関わらず鈴仙の言葉を無視したのだ。だが彼女もいきなり本人を撃とうとは思わない。きらつと鈴仙の眼が光り、その右手が地面を向く。その指先から『弾丸』が発射されて、警官の足もとを穿つ――

――はずなのに何もでない。

「あ、あれ?」

鈴仙は驚愕した。弾丸がでない。確かに現代に来てから忙しいこともあり「弾幕ごっこ」なぞやっつてはいないが、それでもおかしい。

「……お姉さん」

「よ、よらないでっ」

鈴仙は手を髭の警官本人に向けてから、人差し指に神経を集中させる。でもなにも起きない。煙もでない。

「な、なんでよ!」

「なにがですか?! さつきから大丈夫ですかお姉さん? お酒飲んでる?」

警官が近づくと、鈴仙はびくつと震えた。能力が効かない、弾幕もできない。彼女はが

たがたと体が震え始めたのを感じざるを得ない。元来臆病であるのに「力」が使えないのであれば、それに拍車がかかる。

慌てた鈴仙は左手も上げた。そちらも銃の形を作って、集中する。しかし右手と同じく「弾丸」はでない。それで更に彼女は動揺した。逆に警官の達は彼女を心配して近づいてくる。それがなおさら鈴仙には怖い。なんで近づいてくるのか訳が分からない。

「ハ、ハのお」

鈴仙はぱつと下がる。眼には涙が溜まっている。両手は前に突き出して、二丁拳銃の構え。買ってきた食料のビニールはいつの間にか地面に落ちている。それでも彼女は必死に「弾丸」をだそうとした。鈍っているにしても身を守るにはなんとか出すしかない。

この月のウサギには迫ってくる警官が歪んで見える。涙で目の前がぼやける。そんな状態だからこそ、彼女は叫んだ。いや気合を入れればなんとか「弾丸」出るのではないかと期待したので。しかし、彼女の叫びは――

「ば、バババばーん!!」

口で銃声を叫ぶ鈴仙。静かな夜に恥ずかしい叫びがこだまする。

警官たちは顔を見合わせてぴたりととまる。もちろん「弾丸」は出ていない。しかし、鈴仙の行動は二人の警官に明確な変化をもたらした。

髭の警官が鈴仙に眼を向ける。憐れなものを見る目で、彼女を見る。

「……………」

鈴仙もそれに気が付いて、顔がゆでだこのように赤くなつていく。そろそろ自分の恥ずかしさが分かつてきたらしく、彼女は震える。先には恐怖で震えたが今は羞恥で震えている。

「ち、ちがうのよ」

涙目で顔の赤い鈴仙は言う。彼女は自らの手を警官の前に示しながら、言い訳する。

「こ、こころから弾丸がでるのよ……………」

「……………だ、んがん?」

ついに口で説明し始めた鈴仙。二人の警官の眼は慈しみに溢れた優しさを見せる。意味自体はわからないが髭の警官はニコツと笑つてうんうんと頷いてくればじめる。だが、流石の鈴仙にも自分が哀れまれていることは気が付いた。それで一気に目から涙をあふれだした。

「あ、あああああああああああああああああああ!」

あまりの恥ずかしさに鈴仙は身を翻して逃げた。後ろでは「あつお姉さんっ!」と聞

町にある交番で鈴仙は取り調べを受けていた。彼女は椅子に座っていて間に机を挟んで向かいに髭の警官が座っている。ただ詰問されているというわけでもなく、髭の警官の入れてくれた日本茶が彼女の傍で湯気をたてている。彼女は帽子を取っているから、頭にはヨレヨレのウサギ耳が見えている。

それを見た時、警察官たちは眼を見開いたがなにも言わなかった。

そこにあの若い警官が入ってきた。手にはラップを張った井を持つている。それを鈴仙の前にことりと割り箸と一緒においた。それを見届けてから髭の警官が言う。

「さっ、お腹が減っただろう。食いなさい」

「……………」

もう言うがままなすが儘に鈴仙は井からラップをはずす。いい匂いがした。

卵の絡んだカツが御飯の上に載っている。出前で取ったのだろうか、暖かい。鈴仙はそのカツを箸でつまんで、食べる。

「美味しいかな?」

「……………ええ、おいしいわ……………」

口の中に肉汁が広がる。美味しいからだろうか、涙の味がした。

交番の近くの電柱からその少女は顔を出した。

癖のある髪が肩まで伸びて、鈴仙とは違う綺麗なウサギの耳をした少女。

「は、はらが、よ、よじれる」

電柱をばんばんと叩いて声を押し殺す少女の名は因幡てゐ。彼女は暇なので夜道を帰ってくる鈴仙を驚かそうと待ち構えていたところ一部始終を目撃していた。それから連行される鈴仙を尾行してきたのだ。

てゐは一度笑いを抑えて、誰に言うでもなく言う。

「でも、力を使えないのはまずいね。これはみんなに教えないと」

にやにやと笑いながら彼女は夜道を走っていく。この夜のことだ。幻想郷の少女達に広がり、のちに「優曇華事件」と言われるようになるがその伝道者は、彼女だった。

おまけ：花の妖怪と三妖精

今から少し前に幻想郷の少女達の多くが現代社会へと飛ばされることになった。それはとある集団の思惑によるものではあったが、現代に來た幻想郷の少女達もあるものはそれを純粋に楽しみ、またあるものは望むものを手に入れようと躍起になったりもした。

それでも現代に來た妖怪でも巫女でも聖人でもその力は著しく減退しており、ほとんど人間と変わりが無い。それどころか現代の常識がないことにより、その生活の基盤が整うまでは四苦八苦、という言葉が彼女達の現状を表している。

仕事、住居と言った物から何とかして確保し、それでいながらも毎日の不安と現代社会の波に怯えて暮らすことになった。平安時代は殊に恐れられた、とある土蜘蛛などは人間を襲おうとして警察に補導された。以後絶対に人間を襲うことはなくなり、真面目にはたらくようになった。仕事場には見知った巫女もいたのでなんとかやっていけた。

そんなこんなで段々と少女達は現代での暮らしに順応していくことになったのだ。ただそれは、自活能力のあるものだけに限られた話である。

幻想郷の少女達と一言に言っても、個々の性格や種族は様々である。時には人間に恨

て来る雪。仕方なく住処とした橋の舌を吹き抜ける風。そもそも毎日の食べる物すらもない。ただただ知らぬ街をとぼとぼ三人で歩く日々。

たまに幻想郷で見たことのあるものを見ることもあったが、面識がほとんどないから関わることもなかった。それも当然である。相手は基本的に危険な妖怪だからだ。

それでも生き抜いたのは三人寄れば文殊の知恵とでも言うべきか。それとも人間達の好意と憐みによる「施し」の為だろうか。時には青い服を着た大きな人間に三人は追いかけてまわされたが何とか逃げ切ることができた。

しかし、生活が苦しいことには変わりない。そもそも「生活」といえるものもほとんど成立していないのだ。お金にしろなんにしろ、何も手に入らないのだ。ただスーパーなるものを回って、試食品を食って凌いだ。

とある日。三妖精はいつもの石橋の下で固まって休んでいた。お腹が減るのでできる限り動かないようにしていたのだ。空は曇天だが雨は降っていない。それでも彼女達にはやることはない。

だが、その日石橋の上をとある少女が通りかかった。

手には何かがつまめたエコバックを下げている。買い物帰りだろうが奇妙なこと
に、こんな曇り空の下で日傘をさしている。髪は緑色だが、その表情は傘に隠れて見え

ない。彼女はふと、石橋の下をのぞき込んだ。

そこには三人の少女が何をしてもなく座り込んでいる。「いつ見ても」変わりなくそこにいる。日傘の少女は別段何か言うでもなく、只々石橋の上から三人を見下ろしているだけなのだ。別に憐れんでいるわけでもない。可愛そうなどとも思っていない。

だが、この日傘の少女にはとある考えがあった。彼女は指をたてて三人に向ける。

「……風呂掃除」

妖精の一人を指さして、少女は言う。それは金色の髪を顔の左右でドリルにした妖精であった。

「……雑巾がけ」

今度は黒髪の少女を指さして、言う。

「……」

そして最後の一人を指さして黙る。「理由が」出てこない。彼女はちよつと考え込んでいた。

そうしていると、ぱちつと何かが鳴る音を日傘の少女は聞いた。顔をあげてみると、空からぱらぱらと雨が降ってきている。先の音は雨が傘を叩いた音なのであろう。日傘が雨傘として役に立つのは、奇妙ではある。

石橋の下で三妖精も気が付いたようで、何か喚きながらいそいそと石橋の下へ戻って

ただ三妖精は雨の中を歩いてきたのでどうにも汚れている。仕方ないので幽香は風呂を沸かして、三人を入れた。そうすると今度は着替えがない。これも仕方ないので、三人が風呂に入っている間に安物を買ってきた。近くにある「ユニシロ」とかいいう店はなかなかコストパフォーマンスがいい。ただ、幽香は自分では何があるうとも着ない。

帰ってきてても風呂場できやあきやあと長風呂をする声を聞きながら幽香はてきとうにスープを作った。腹が減っては戦はできないというが、腹の減った召使などなんの役にもたたないので、これも仕方がない。

「……………」

部屋の中にトマトの香りする。出所は幽香のかき混ぜている鍋である。部屋に備え付けられたガスコンロは安物だが、簡単な料理を作る程度ならばこれで十分である。

赤く、とろみのついたスープが沸騰してこぼこぼと小さな泡を膨らませては割れる。焦がすわけにもいかないので幽香はかき混ぜているのだ。たまに小皿に一掬い取って、自分で味見してみる。

口に含んだそれを味わいながら、幽香は何も言わない。「よし」とか「おいしい」とか肯定の言葉も言わないし逆に否定の言葉も言わない。ただ、無言でガスコンロの火を消して、風呂場で暴れている三人を怒りに行く。多少うるさい。

しばらくして2DKのマンションに引越すことになった。

立地や建物を選んだのは完全に幽香だったが、わざわざ2DKにしたのは部屋を分けるためであった。もう川の字になって寝るのもたまったものではない。暑いのだ。それに妖精が三人も纏わりついてきてうつつとうしいこと幽香にはこの上になかった。

新しい部屋はフローリングのしつかりとしたつくりで、人を呼びこともある意味もないでリビングはない。だが部屋が二つに分かれていて、片方を幽香の部屋でもう片方を三妖精の部屋にした。

「とりあえず……カーペットがいるかしら」

そんなことを言いながら、引越しの荷物を下ろした幽香は室内を歩いている。少しだけ頬が緩んでいるのは本人も気が付いていない。だが、そこにどたどたとした音が聞こえてきた。

「すーい」

雑巾がけことスター・サファイアを先頭に三妖精がフローリングの上で転がっている。黒髪の彼女は大きなリボンを頭にして、フローリングの海を仰向けで泳いでいる。フローリングの上でもがくと、少々滑りながら進めるのだ。キャミソールに短パンという薄着なので肌が床にこすれている。つまり服が汚れている。

「ちよつ、ちよつとサニー！　ここすげい。お湯が出る!!」

風呂場の方から声がする。「サニー」を呼んでいることと、幽香の目の前でスターがもがいているので声の主は「風呂掃除」ことルナ・チャイルドだろう。水音をもするので蛇口をひねってお湯を出しているのだろうか。

幽香はにつこり笑って黒い何かを背中からだし始める。自分が思案しているというのにとちよつとだけ思うので、目の前にのスターの足首を掴んでから、ルナへの注意に向かう。水を無駄にはいけない。

「ちよつ、ちちよつゆ、ゆうかさん、ぶっ」

「どうしたの？　ちゃんと滑らないと駄目よ？」

スターは足首を掴まれたまま幽香に引きずられている。つまりは床で擦られているのだ。足首を掴まれたまま早足で引きずられるとスターには思ったように動けない。それに角を曲がったり、敷居を跨いだりするときに体にあたって「ひげ」「ふげ」と声が出る。もちろん幽香には「聞こえない」ので、対処できない。

風呂場に行くとな案の定ルナが湯船の蓋をあけて、お湯を注ぎ込んでいた。まだ昼前である。今そんなことをしても「追い炊き」をしなければならぬ。それは幽香はあまり好きでない。

「ルナ？」

「あつ、幽香さん。ここ、おゆ……が、で」

ルナは左右の髪の毛をドリルにしている可愛らしい女の子だ。新しい家に純粋に驚いていたのだろう、彼女は「お湯が出る」喜びを伝えようと話しかけてきた幽香に振り返った。

そこでルナは眼を見開く。幽香は風呂場の入口に笑顔で立っているが、その片手にはスターの足が掴まれていて、その身動きが取れない哀れな少女は後ろでぐったりしている。

あつ。怒られる。ルナは直感した。何が悪いのかよくわからないが、彼女は栗の様に小さくて愛らしい口をぱくぱくと動かしている。

「そ、その。ご、ごめんなさい」

「……あら。まだ何も言っていないわ」

幽香は風呂場に入ってくる。裸足であったので風呂場の床でペタペタと音がする。彼女はルナの前で膝を折ってかがむ。目の前に小さな少女に目線を合わせてから、ゆったりと手を動かして湯船にお湯を流し込んでいる蛇口を締める。

「いい？ お風呂にお湯をいれるのは夜よ。それ以外つかってはいけないわ」

「は、はこ」

存外優しく幽香はルナに諭す。ただ、このドリルの少女は別の物を見ていた。幽香の

口調は柔らかいが、

スターを離してはいない。

風呂場の床でさらに擦られた哀れな黒髪の妖精が「ゆ、ゆうかさん」と力なく声をあげている。まるでルナには「もしも、悪いことしたらこうなる」と幽香から示されているかのようなだった。

「いいかしら？ ルナ」

「はい！ わかりました幽香さん」

とてもいい返事に幽香は満足げに頷くと、スターの足首を離す。やっと解放された彼女はよろよろと立ち上がった。

「そういうえば、サニーはどうしたのかしら」

とそのスターに幽香は聞く。まるで今まで何もなかったかのようなのである。スターも振り返って、ルナに目配せしたあと。

「し、しらないです」

と言う。アイコンタクトしているからには何かを考えているには間違いないのだが、流石に幽香にもわからない。ただ、ルナとスターを交互に見ると何かを企んでいるかうつすらと笑っている。少々わざとらしすぎたのか幽香には二人が示し合わせていることがわかった。

「しかたないわね……頭をねじるか……」

幽香は言いながらルナの頭を持った。とても恐ろしいことを言っているのだが、顔は笑顔である。にこやかに「吐け」とルナを脅しているのである。

「たまらずルナは叫んだ。」

「ししし知らないですつ」

「そう？　じゃあさよなら」

「ま、まっつてください！」

なんとなく本当にやりかねないところが幽香にはある。ルナもスターも彼女とこれだけの期間一緒に暮らしているが、どうにも恐ろしい。それも慣れるどころか段々と頭が上がりなくなっている。

ルナは首を振ろうとするががちりと幽香の両手に掴まれていて動かない。スターに助けを求めようにも彼女はこそこそと風呂場から逃げようとしている。

目の前には幽香の笑み。反対にルナは泣きそうになる。笑顔が怖い者は本当に恐ろしい存在なのだろう。

「スター！　ルナ！」

幽香、スター、ルナがいきなりの声にはつとした。声の主はサンドバックことサニー・

幽香は訝しげに聞く。すごいモノというが、彼女は無駄な物を家に置く気など全くない。

「それは、何かし——」

「幽香さんへのプレゼントです！」

「！」

幽香の言葉が言い終わらぬうちにサニーは言い切った。それでも幽香の表情は変わらない、ちよつとだけ指が二、三回動いただけである。逆にサニーは鼻をふふんと鳴らしているところを見ると、自信があるらしい。

そこにずだだつとスターとルナも幽香の後ろから走ってきた。彼女達もサニーと並ぶ。三人の可愛らしい妖精が勢ぞろいした形になった。いや、三月精と言った方が愛らしいかもしれない。

三人は目配せして、サニーが「せーの」と音頭を取る。そして一斉に言った。

「ゆうかさん、いつもありがとう」とサニー。

「いつもありがとうゆうかさん」とスター。

「ちよつ二人と、あ、ありがとうゆうかさん！」とルナ。

三人そろってバラバラの「お礼」。

「ちよつとスター、ルナ！ 打ち合わせとちがうじゃない!!」

「間違えたのはサニーでしょつ。最初はありがとうからだつたわ」
「ふ、ふたりに釣られて間違えたのよ」

すぐにぎやあぎやあとどうでもいい喧嘩をし始める三月精。

それに幽香はくすりとしてしまう。その笑顔は、本当に少女のようだった。だが、すぐにいつもの余裕のある表情に戻って、三人の間に入る。

「喧嘩なら、外でしなさい。三人のうち一人が生き残るまで帰ってこなくてもいいわ」

仲裁にバトルロワイヤルを提案する幽香。ただ彼女に喧嘩を止められると三月精もびたりと喧嘩をやめてしまった。これ以上すると別の意味でやばいことになるのかつているのだろうか。

サニーは言う。

「えつえつと幽香さん。これ」

「ええ。ありがとう」

幽香は膝を折って、しゃがむ。そして「布」に包まれたプレゼントを「見る前」にお礼を言う。それが彼女の本心であろう。もう、これが何だったとしてもどうでもいい。だが、せつかくなので包みを解いて中身を見ておかないもつたいない。

幽香は布を指でつまんで、ふと止まる。彼女は期待した顔の三人を見渡して聞く。

「開けていいかしら？」

「「えっ、は、はい」」

わざわざ聞いてくるとは思わなかった三人は慌てて答える。さっきはバラバラだったのに、今度はしっかりと同じだった。また幽香は口元を綻ばせて、指で布を払う。

そこに合ったのはただ一つのMS（モビルスーツ）だった。

巨大な図体に一つ眼の両側に角の生えた頭。青い肩当にスカートを穿いているように膨らんだバーニア。両手の指先はメガ粒子砲になっている。そして太い両足はしっかりと地面についている。

これこそジオン公国の栄光あるMSジオングの完全なる姿——パーフェクト・ジオングの雄姿であった。凛々しい顔つきといい、黒光りするフォルムといい美しいの一言である。要するにプラモデルだ。

——なにこれ？

幽香は動揺した。パーフェクト・ジオングのあまりに勇壮な姿に圧倒されたのか、眼が泳いでいる。多少のことには動じない彼女だが、目の前の現実を脳内で処理しきれないのだらう。ジオンの栄光の前には無理もない。

「どう？ 幽香さんっ」

サニーが聞く。幽香はこれほど返答に困る質問に会ったことはなかった。永い時間
いきてきたが、これが何なのか見当もつかない。

「え、ええ。あ、ありがとう。嬉しいわ」

幽香は言うど、三月精はそれぞれが向かいあつてにつこり笑った。それから、
「やったー！」

とハイタツチする。新しい生活の始まりに、ぱーんと景気のいい音が響いた。

第三部

1 話

ここは丘の上にある、野球グラウンド。両翼80mはある市営としては大きなものだ。内野にひし形の形に並んだベースは、俗にダイヤモンドと言われる。地肌を見せた「内野」はしっかりとトンボが掛けられており、穴どころかピッチャーマウンド意外には起伏すらもない。

外野は天然芝とでもいえばいいのか、どちらかと言うと雑草がそれっぽく生えている。しかし、それでも背がきつちりと並ぶように刈られていることも、このグラウンドを整備している者、正確にはその指揮をしている者が几帳面な性格をしていると理解できた。

「さあ、ばつちこーい」

そのグラウンドで今日も少年たちが元気よく掛け声を響かせる。それぞれの守備位置に散らばった少年達は白いユニフォームと黒い帽子をかぶっているが、膝や胸が砂で汚れている。いや、汚れているというよりは努力の後とでも言えばいいのかも知らない。

少年達は試合をしているのではない。バッターボックスに立っているコーチがその

ノック用のバットで内野に外野にと打ち分けている。つまり、守備練習をしているのだ。

カーンと快音が響いて、ショートとセカンドの間を絶妙な角度でボールが抜けていく。二遊間の二人の少年は追いつくことができずに、ボールを見送るしかなかった。だが、今の打球は取れないことはない。だからこそ、コーチが声を出した。

「セカンドはもう少し初動を早く。今の打球はショートはカバーに回りなさい」

「はいっ」

「はいー」

コーチは的確なアドバイスをしつつ。またバットを構える。現在の守備練習で想定されている状況は走者なしのノーアウトである。だからこそ、どこに打球が飛んでもおかしくはないという「想定」である。

コーチが目の前にボールを軽く放り、バットを鋭く振る。しかし、ボールは前に飛ばずに真上へ上がった。鮮やかと言うほかはない「キャッチャーフライ」である。ノックで最も上げることが難しい打球をこともなげに彼女は行った。

あわててキャッチャーの少年がマスクを取り、天を見上げる。ボールが日光に隠れて見えない。眼を細めて必死に探す姿はいじらしい。

「最後まで探しなさい」

コーチが少しだけ離れて、優しく声をかける。緑色の片方だけ長いおさげが風に揺れている。あれだけ見事なスイングをしていたというのにその黒いアンダーシャツを着て、厚手の野球ズボンを穿いた体は細く、しなやかであった。背は中学生くらいだろう。「はいっ」

コーチの声を聞いたキャッチャーの子供は見上げた姿勢のまま返事をする。その数秒後、その眼に一点の白球が落ちてくるのが見えた。彼は落ち着いてその落下地点に行き、腕にはめたキャッチャーミットを構える。

パシイ。と小気味よい音が響いて、ミットにボールが収まった。それを見てコーチは薄く笑みを浮かべたが、すぐに仏頂面を作つて嬉しそうにしているキャッチャーに言う。

「少し、直立気味になっていました。それでは膝がうまくクッションになりません」

顔は無表情だが、声音は優しい。そもそもじつとまっすぐ少年を見る瞳には只々少年を思う気持ちしか感じることができない。少年もそれに答えるかのようにきらきらとした目で頬の赤くなつた顔で彼女を見返す。

「そう、あなたはボールを捕るときに腰を高くしている」

それからコーチ兼地獄の閻魔王たる四季映姫は長いアドバイスを始めた。少年達は流石にこれさえなければなど心中に思う。



四季映姫も現代に突如として放り込まれた。

気が付いた時にはもう遅かった。四季映姫は鉄筋コンクリートで作られたビル街の真つただ中で空を見上げながら、そう感じた。

なぜ自分が外の世界に来ているのかの理由はわかつている。いや、正確に言えば「来ていない」がそれでもこの状況を打開することはできないと、映姫には理解できた。少なくともここにいる限り幻想郷に入ることはできない。

端的に言えば油断していたとしか言いようがない。彼女は自らの両の掌を見て、一度握る。そこには力をほとんど感じる事ができない。それは今現在の自分が人間と同じ程度の力しか持つていないということであると、彼女は冷静に理解した。

慌てることはない。物事に取り乱すようなことがあれば閻魔王として不見識極まる。もう、この異変に巻き込まれている時点で資格を疑われても仕方ないが、裁判自体は「問題なく行われるだろう」と結論付けた。彼女には何もかもが分かっているが、逆にそれは、

外の世界でしばらく暮さざるを得ない。

と言う見解に帰結してしまう。聡明だからこそ、今は帰る方法がないのだとわかつて

しまうのだ。

とりあえずは住居・仕事・その他生活用品の確保が最優先である。最短で三日くらいで餓死する可能性のある体になっているのであれば、急ぐ必要がある。

まず、映姫は質屋に行つて。持っていた「錫」を売り払つた。装飾もそれなりにされていたので、中々の値段で売れたが、一か月も持たないだろう。ちなみに閻魔としての重要なアイテムを簡単に売り払つた彼女には「これが重要ではない」ということもわかつていた。

次には住居である。この「時点」では住民票も何もない彼女は、そこをとある方法で解決した。

不動産屋はそれぞれ一軒二軒の「問題物件」を抱えている。流石の映姫も現状では暴力団絡みの物件は避けたが、霊的な問題物件を比較的すんなり借りることに成功した。幽霊など怖くとも何ともない。横で「恨めしや」などと言われれば、冷たく一瞥するか、説教するだけである。

最後に仕事である。これには流石の映姫も気を抜けなかつた。先に書いた通りに住民票などないのである。もつと言えば履歴書に書ける事柄もない。過去の職歴に「地藏」「閻魔」などと書くものなら一撃で落ちる。

バイトの面接が心理戦の場になるのは必然と言えよう。映姫には突っ込まれたら困

ることは山ほどある。終始しゃべり続けるか、はぐらかし続けるしかない。学歴には何を書けばいいのか全然わからない。小卒ですらもないのだ。

やつとの思いで手に入れたアルバイトはバツティングセンターの従業員であった。しかし、苦難はまだまだ続く。幻想郷から来たものは全員が直面した問題であるが、最初の給料までは本当に金がないのである。あるものは映姫と同じように売れる物は売り払い、スーパーの試食コーナーをうろつくなどと悲惨な日常を過ごすことになる。

映姫はそのような惨めなことはできるだけ避ける策を考え出した。その策は簡単である。もやしを育てるのだ。もやしは優秀である。なんといっても土も水も比較的にしろ少量で育ち、しかも腹にたまる。味付けは最低醤油があればよい。

一か月もやし生活という、どこかのテレビ番組に出れそうなことをして映姫は糊口を凌ぐことができた。毎日毎日しやりしやりと食卓に響く悲惨さを彼女は耐えきつただ。給料が入った日は危うく泣きそうになったのは秘密でもある。

このあたりから映姫はアルバイトの時間を暇な夜に移した。従業員として雇われたといつてもやることと言えば、客が危ないことをやっていないかという見張りとき折にしろ調子の悪くなる機械の整備である。それに夜のほうが時給が高い。

「……………」

ブックオンで買った本を人もまばらなバッティングセンターの受付で読む、それが映姫の日課になっていた。やるべきことは全てやり終わっているところが、彼女の部下とは違う。

あの世に行けば、有名な哲学者などはすでに転生しているか、それとも管轄が違うから会うことも少ない。だからこそ、岩浪文庫はありがたかった。彼女は毎日別の本を読んでいる。一日で読み終わっているのだ。

——戦争と平和

——君主論

——自省録

——ツアラトウストラはこう語った

——葉隠

——Kill me baby

——野球のイロハ!

——ホームランの打てるバッティング

——バッティング理論について

だんだんと読む書物が野球関連の物に近づいていくことは映姫も自覚していた。毎日

のようにバッターボックスで一喜一憂している人間達を見てみると、なんとなくそこに興味が向かってきたとも自己分析できた。

だからこそ、非番の日に彼女はバッターボックスに立つてみた。球速は120キロである。標準的と言つていいだろう。

理論は完璧である。最初の数球は眼を鳴らすために見送つて、バットを短く持つて構える。映姫はじいとピッチングマシンのボールの発射口を見て、タイミングを計る。一瞬白い影が発射口に見えると、映姫は腕に力を入れて、バットを振る。

きれいに空ぶる。

「……………」
映姫は無言で顔をしかめる。予想は完璧にしていた。自分の今の筋力では、理論などなんの役にも立たないということ。だが、それが悔しくないかという別である。

その日から四季映姫の日課に「素振り」が追加された。帰り路にある「テッポ」で金属バットを一本購入すると、彼女は近くの丘の上にあるグラウンドで納得がいくまで打撃練習を行った。

毎日グラウンドに行つてから素振り、バイトの少し前に銭湯に行く。そして労働の後は、今朝仕込んでおいた炊立ての白飯を食べて寝る。健康的としか言いようのない生活

を彼女はつづけた。

そのうち、丘の上のグラウンドを拠点に活動している少年野球チームのメンバーに「素振りねーちゃん」として認識され、なし崩し的にその活動に参加していくことになっただけになった。

夕日をバックに練習する。少年達とプラス一人。映姫の出自を知っている者にはこれ以上はないほどにおかしな光景に見えるが、姿かたちはまごうことなき少女である、彼女をおかしいと思う者は一人もいなかった。

それどころか、保護者との交流で信頼され始め。少年たちの監督からも平日の練習を委託されるほどに中枢に入り込んだ。少年野球の監督とは保護者の代表であり、普通に社会人であるために平日は忙しいのだ。反面映姫は平日の昼間から夕方までは暇である。

映姫は映姫でその生真面目かつ恐れる物を知らない性格から、元来部外者という立場でも少年達への確なアドバイスを行うようになった。このころになると、もはや彼女の読物は野球関連の物ばかりになっている。取るようになった新聞では「阪神」の文字も追うようになった。

当初の目的も忘れてはいなかった。時間の空いた日にはバッティングセンターに行つて。ピッチングマシンに挑戦を続けたのだ。すでに相当実力をあげていた四季映姫には機械ごときは歯が立たず。140キロ級のマシンも、カーブを投げてくる

マシーンも彼女の軍門に下った。

映姫は呼んでいないが、少年達もこのバッティングセンターに参加するようになった。そこで華麗なバッティングを披露する少女への尊敬の念を深めていったのだ。少
しだけバッティングセンターの売り上げも上がった、

しかし、ある日事件が起こる。それはバッティングセンターのオーナーの気まぐれからであった。

——200キロの剛速球を投げるマシーン。

この小さな町の小さなバッティングセンターには似つかわしくないハイパーマシンが襲来したのである。最初は面白がって少年達も挑戦したが、目の前を通り過ぎる殺人が可能なレベルの速球にことごとく敗北してしまった。

敗北した少年達はある希望を見出した。その名は四季映姫。

「エーキ姉ちゃん！ あれやってみてよ」

「……………いいでしょう」

少年達の期待のまなざしで詰め寄られてはささしもの映姫も断るわけにはいかなかった。いや、元々挑戦する気だったのだから、その時期が多少早まっただけである。彼女は使い慣れたマイバットを手にして、200キロの為に用意されたヘルメットをか

ぶった。

その小さな背中を大勢の少年達が見ている。

映姫はバッターボックスに立って、静かに息を吐く。集中する術は、この数か月で理解している。彼女は200円を機械に入れて、スタートボタンを押した。それからバットを構える。

構えた姿はどこにも力みのない優雅なフォーム。

心はただ、目の前からくるボールにのみ集中している。その耳には少年達の応援の声すらもきこえはしない。

——その映姫をあざ笑うかのように、速球が通過する。

「っ!？」

映姫は戦慄した。油断などしていない。それどころか最高のコンディションであるはずだった。しかし、そんなことは関係ないとも言えるかのように、一球目に反応できなかつた。

考えてみれば世界最高峰の野球リーグでも200キロ投手など存在しない。人間の限界を何段階も超えた超速球に当てるだけでも至難の業なのである。プロと言われる人種でもクリーンヒットは難しい。

それでも映姫は構える。その顔は窮地に似つかわしくないほど、涼しげである。彼女

子供が夏休みだろうが、大人は平日である。グラウンドには専業主婦などといった事情で来ている保護者を除いて、映姫くらいしかいない。それでも彼女は一時間に10分の休憩を必ず取らせて、水と塩を絶対に少年達に摂取させていた。そのルールを破ったら30分は説教なので誰も勝手な行動はしなかった。

少年達が休んでいる間、映姫のやることは保護者達との懇談やら、それからの練習のプランたてなどを行っている。最近めきめきと力をつけ始めたこの少年野球団の原動力になるのはそのようなところにあるのだろう。

そして、この夏はもう一つ強化プランがあった。これについては映姫よりも他の保護者の意向が強くなっていた。だから今日の休みの時間に一人の保護者が映姫の下にやってくる、言った。

「ですから四季さんに引率してもらったらと皆さん思っているのですよ」

「はあ。強化合宿ですか。場所は海沿いの……2泊3日の。確かに皆さんは忙しいとは思いますが……私だけが引率でよろしいのですか？」

夏の合宿こそが、このチームの強化のための重要な要素である。映姫に自分だけが引率でいいのかと聞かれた保護者は、大きく頷いて「四季さんなら安心よっ」と大げさに言う。そこでちよつと映姫もバイトの兼ね合いなどを考えて、返す。

「わかりました。少しの間皆さんのお子様をお預かりします」

映姫の頭の中には遠くの海に行けば、知り合いとは出会わないだろうという打算があつた――。

2 話

朝の陽ざしに眼を細めながら、雲居一輪は庭を歩いていった。

夏の早朝とはいえども肌を撫でる風は冷たい。しかし、それが逆に気持ちいいとも感じるができる。

一輪は袈裟を着て、頭巾をかぶっている。だから青い髪セミロングの髪はウェーブのかかった前髪しか見えない。首には赤い球体のついた飾りをかけている。実は袈裟の下にチラチラとフリルのついた白衣が見えるのは、隠れたオシャレだろうか。

一輪は「命蓮寺」の境内を見回ることを朝の日課にしていた。彼女の師はともかく、他の者はまだ起きていない時間だからこそ、なんの気兼ねもなくそれができるのだ。もう少し遅くに見回りをすれば「おはようございまーす!!」と大声で挨拶されかねない。返すのが恥ずかしいのである。

無論、ここは「命蓮寺」ではない。幻想郷でもない。

一輪達も他の例に漏れることはなく、幻想郷の外へ飛ばされてしまったのだ。しかし、そこは彼女達の頭である聖女「聖白蓮」の人徳もあり、とある幸運に恵まれることができた。

現代日本では「寺」などの継承問題が起こっている。昨今問題となつてゐる農業、漁業、林業などの一次産業の後継者確保問題と同じ問題が宗教機関の間でも起こつてゐるのだ。

ここ「命連寺」もその問題から逃れることはできていなかった。つまり、聖がやつてくるまではである。

元來的に仏教徒は禁欲的な教義を主とする。それは開祖たる釈迦自体が世の中から「解脱」を説いたから当たり前と言へるが、敬虔な仏教徒である白蓮もこの現代にきたときの貧しさには耐え抜くことができた。信仰心がそれを支えたともいえる。

もちろん船を操舵することを仕事としていた少女やネズミなどは、かなり苦労はしてゐたようではあるが、それでも幻想郷からきた他の者たちに比べれば「まし」だったのかも知れない。

そんな中で聖はとある真言宗派の寺である「命連寺」に立ち寄つた。

元々そこにいた住職も継承者に不安を覚えていたこともあり、深い仏教への理解を示す白蓮と意気投合した。そこから一行は居候をするようになり、数か月たった今では住職も寺の継承者として「聖白蓮」を説得にかかつてゐた。流石にまだ、受けてはいない。

女性の継承者を奇異に見る者もいるが、前例のないわけでもないうえに白蓮の人柄に一度触れれば皆が納得した。蛇足だが女性の住職で天台宗の聖地「比叡山」に勤めて、書

物を多く著している者もいる。

そんなこんなで白蓮一行は屋根のある寺に寄寓することができた。住職は別の家があるらしく、寺のことについてはほとんど白蓮に任せている。寺ということもあり生活整備も最低限の物しかないが、それでも幻想郷で七輪で飯炊きをして五右衛門風呂で生活していた少女達には何の苦にもならなかった。

「うーん」

一通り境内を見回ったあと、一輪は大きく伸びをして体をほぐした。彼女が振り向くと、本堂が見える。瓦葺きの一階建て木造建築は、伝統的な和様の寺院建築である。最近では鉄筋コンクリートで造ることも多くなっているから貴重な文化遺産ともいえる。

一輪はさらに大きく体をのぼす。袈裟を着ているから体のラインが分かることはない。まさか、数日後にとんでもないほど恥ずかしい目に合うとは現在の彼女は気が付いてない。

だからのんきに一輪は体操をする。見回りをするといつでも、何か目的があるわけでもないし。幻想郷のように妖怪が紛れ込むようなこともほとんどないから、健康的な日課くらいにしかなくていいのだ。

「おはよう。一輪」

声にはっとして一輪は振り向いた。そこには一輪と同じく袈裟を羽織った女性が立っていた。ただ下は黒衣を着ており、長い髪は頭頂が紫だが、下になるにしたがって色が変わり、毛先は黄金色になっている。その美しい髪が風に舞い、女性は手で押さえる。

「おはようございます。聖様」

一輪はかしこまって挨拶する。そう、この目の前に立っている女性こそが聖白蓮であつた。彼女は一輪のあいさつを聞いて、柔和な笑みを浮かべる。その表情を見るだけで何かに包まれるような優しさを感じさせることができるような、自然な微笑みであつた。

「精が出ますね……水蜜なんてまだ寝ていましたよ?」

「はあ……ほおつておくと、鶴さんよりも遅く起きてくることがありますからね」

一輪と聖はふふふと顔を合わせて笑う。身内のだらしない姿を思い浮かべて、思わず笑ってしまったのだ。そこで聖は微笑んだまま「少し、歩きましょうか?」と一輪を誘う。無論のこと、青い髪の少女には断る理由などない。

「お供させていただきます」

と頭を下げる。まさかこれが、自らの恥辱の始まりだとは思ってはいない。しかし、それは自らが撒いた種であるということは、少し後にわかるのだった。

聖と一輪はゆつくりと境内を散歩する。砂のざつざつと言う音だけが響く静寂が、どことなく心地よい。蟬もまだ寝ているのか、ほとんど鳴いてはいない。

二人は今日の天気だとか、昨日のことだとか、同じく修行している者たちの話だとかをゆつたりと話す。時折漏れる小さな笑い声はどことなく優雅で趣がある。

一輪はこの時間をなによりも好きだった。朝の時間が少しづつ過ぎていき、だんだんと周りがあたたかくなっていく中で、聖と会話する。それだけで心が清らかになっていくような気がする。

「そっういえば、一輪？」

「はい、なんででしょうか？」

聖はふと振り向いて、にこつと一輪に笑みを向ける。しかし、何故か一輪はぞくつとしたものを背中に覚える。笑っているはずなのだが、目の前の女性を恐ろしく感じるのは何故だろう。

もちろん理由はすぐにわかった。

「おととい飲んだ、チューハイは美味しかった？」

「……がおっ!？」

思わず後ろに下がる一輪。「チューハイ」とは酒類の一種であることには説明の要は

ないだろう。しかし、問題はそこではない、一番の問題は「仏教徒」である「一輪」が「飲んだ」ということが何よりも問題なのである。

「……な、なぜそれを」

汗をかいて震えはじめる一輪。彼女は堂々と酒を飲んだのではなく、隠れて飲酒を行っていたのだ。基本的に敬虔な仏教徒である彼女だが「禁酒」の戒律にだけは納得していなかったためである。だが、聖にばれていることで彼女の心臓がどくどくと音を立っている。

「河童さんが、昨日こんなものをもってきたのよ」

聖が懐から出したのは一枚の写真だった。そこにはわざわざ法衣を脱いでスーパーの酒類のコーナーを物色している青い髪の少女が映っていた。説明するまでもなく一輪である。

「……」

目が泳ぎ始める一輪。変装して、遠くの町のスーパーに行ったというのに証拠写真はばつちりと撮られていたのだ。もちろんこの後、隠れて飲酒をしている。それは一人でやったわけではないが、そんなことは今重要ではない。

「さて、どうしたものかしら……。この写真も一枚千円だったので……。これも弟子の更生の為に購入しました」

「つ。かつ河童め、ひ、聖様にう、うりつけるとは、ふ、ふとどきな」

河童に責任を擦り付けはじめた。しかし、そのような小細工が通用するほど聖白蓮は甘くはない。彼女は笑顔のまま、一輪に近づいてくる。普段温和な者が怒った時ほど怖いことはない。

だがしかし、ここで一輪も肚を決めた。昔からの疑問をぶつけようと思つたのだ。彼女はぐつと腹に力を入れて、多少挑むかのように聖に言う。

「ひ、聖様は禁酒の戒律についてどう思われますか？」

「……………」

「確かにわが宗教においては、飲酒は禁じられております。しかし、世を楽しみ、人のともにあるには『酒』という物が重要なのではないのでしょうか？」

「……………」

「度が過ぎたるは及ばざるがごとしと申しますし…………一切の禁酒となれば、それには弊害があるかと…………おも、う、のですが」

「……………」

目の前に聖がいる。笑顔のまま。一輪はだんだんと声が小さくなり、今にも泣きだしたくなってしまう。だが、聖の次に発せられた言葉は予想外の物であった。

「確かに一輪の言にも一理あるのかもしれませんが…………」

「!?」

聖はいわゆる原典主義者ではない。新たな考えを許容する大らかさを持っている、そうでなければ「妖怪を救済しようとして封印」などされるわけなのである。

「お釈迦様が入滅なされてから天竺より、唐（から）を通つて我が国にお教えが来るまで……いろいろな考えの変遷がありました、それは我が国でも平安、鎌倉の世にも多くの聖人により考えが深まりました」

聖は手を合わせて祈るようなしぐさで、静かに言う。まるで一輪に言い聞かせるかのように。

「その流れの中で仏様のお教えは体系化され、現代に至っています……たしかに嘆かわしいこともあります、それもまた一輪の考えの通り人の営みの上に成り立ったものなのでしょう……」

「そ、それではっ」

「はあと許されたかのような顔をする一輪は、聖が自分の意見を肯定してくれたかのように錯覚したのだ。だが聖の言っていることはそんなことではない。

「しかし一輪？ 物事をよく考えて行うことはよいことですが『やったことを後でやっ
ていい』と言うことは違いますよ?」

「あ」

駄目だ。一輪は思った。完全に墓穴を掘った形になっているとやつのことで理解したのだ。唯飲酒したのではなく、飲酒して「いいわけ」した形になってしまった。

事ここに至っては一輪には一言も言うべきことはない。それも言い訳に過ぎないのである。だからこそ彼女は素直に頭を下げて言う。

「け、軽率でした聖様。どのような罰もお受けいたします」

「そうですか……わかつてくれたようですね。それでは連れて行ってください」

「連れていく？ うわああ」

いきなり一輪は目の前真っ暗になった。いや隙間から光が見えるが、もがけもがくほど何かが体に食い込んでくる。しかし、その感触から一輪は自分が何にとらわれているのかを理解した。投網である。

「ひ、聖様こ、これは」

「一輪。あなたはしばらく寺の外に出します。河童さんたちの下で少し働いてきてください」

「……あ、そ、それは、な、なにさせられるかわからないではないですか!？」

投網の中でもがく一輪もまさか、自分が魚のように網にとらわれることがあるとは思わなかっただろう。そしてもちろんその投網を投げたのは聖ではない。物陰から青い

髪をした少女が出てくる。頭にかぶった緑帽子には「L」の文字。河童である、その後ろからも同じような格好をした少女達が現れる。つまり、河童は一人ではない。

一輪の網を持った少女達はぐるぐると彼女へ網をくいこませていく。人の力では網を引きちぎることなどできはしない。それこそ鉄でできた格子のほうが破壊できる可能性があるくらいだ。

河童の一人、河城にとりが聖の前に出てくる。大きなバッグには何が詰まっているのか膨らんでいる。

「じゃあ、こいつを連れていくよ！ しっかり働いてもらうからねっ」

「はい。どうぞお手柔らかに」

網の外で自分を譲渡する声を聞きながら、わっしよいわっしよいと河童たちに一輪は担がれる。彼女はくぐもった悲鳴を上げるが、網の中ではどうしようもない。マグロでも突き破れないそれをか弱い少女にどうこうできるわけなどない。

「ひじりぎまああ」

こうして、雲居一輪は河童たちに合法的形で拉致された。



比那名居天子はベッドの上でごろごろとしていた。手には漫画を持っているので、それを読んでいるのだが姿勢が決まらないらしく、ねがえりを繰り返している。漫画のタイトルは「メタル・アルケミスト」というタイトルだった。

天子は家にいるためか、シャツにハーフパンツというラフな格好である。太腿を組んで、寝そべったまま漫画を読むくらいしか、今はやることはないのである。最近はアルバイトの頻度は減らしたうえにいつもやつているランニングなどは今朝終えている。寺の近くを通った時に悲鳴を聞いた気がするが気のせいだと思った。

天子はぱっと状態を起こして、漫画を放る。それから両手をパンと合わせて、ベッドに両手を付ける。それからしばらくその体勢だったが、何もおこらないので怪訝そうな目で自らの両掌を見て、またベッドに寝そべる。

「暇ね……」

寝そべったまま言う。

外は快晴であるから、出かけてもいいのだが一人で行きたいとは思わない。彼女はあつと思いついて、傍らにあつたスマートフォンを取った。それからある人物に連絡する。

しばらく着信音が鳴って、がちやつと相手が出る。

『はい。何っ』

「靈夢！ 遊びましょ？」

『……………いい、いきなりね』

相手は博麗の巫女でありながら工場で働いている博麗 靈夢であった。依然とあることで遊びまわってから、ちよくちよく天子は靈夢を遊びに誘っている。今日もそのつもりだった。

『今日は無理よ』

「そ、う……………じゃあ、明日は？」

急にテンションの下がった天子だが、さらに食らいついていく。しかし、靈夢は少しだけ沈黙してから言った。

『今日から海に行くのよ。泊まり込みでね……………。別に遊びに行くわけじゃないけれど、それだからここ数日は無理ね』

……………

『ねえ、天子？』

……………

『あ、あんたも来る？』

「えっ!？」

ぱつと眼を開けて、にやつと口元を綻ばせる天子だが、できるだけ落ち着いた口調で返す。

「ど、どうしてもつて言うのなら、ついていってあげてもいいわ」

『はあ……どうしてもついてきてほしいんだけど、まあ人手は欲しいこともあるし』

「し、仕方ないわね」

天子は片手でガッツポーズする。もちろん電話越しには気づかれることはない。ちなみに顔はニコニコしている。これも相手にはわからない。いつも間にかベッドの上で立ち上がっていることも、霊夢にはわからない。

『本当に来るのなら、今日の二時までにはうちに来なさい。遅れたらおいていくからね？』

あと念を押すけど……遊びに行くわけじゃないわよ？』

「わかつてる、わかつてる。それじゃあ準備していくわ！ 泊まり込みなんですよ？」

『そうね。……本当に遊びに行くんじゃないからね？』

念を押してくる霊夢にまた軽く相槌をうって「あとで」というと、天子は電話を切った。

ベッドから飛び降りると、天子は体を折り曲げて嬉しそうな表情をする。電話を切ったから両手でガッツポーズもできる。

しかし、はつとして天子は旅行の準備にかかった。とりあえず持つていくものは、水

着とUNOとトランプと、本当に靈夢の言葉を聞いていたのかという感なものを部屋のあちこちから引つ張りだしてくる。

それに用意したトランクケースは大き目なものだ。中に入れるのは生活の為に必要な物よりも遊びに使う物が多い。「デッポ」で買ってから遊ぶ相手がいなかった水鉄砲も詰め込む。中々にスペースを取るが、そんなことはどうでもいい。

「……何しようかしらー！」

鼻唄をうたいながら、天子は準備している。靈夢達が何をしに行くのかなど、どうもいい。一緒にいければいいのだ。

3 話

ここはとある小学校にある屋外プールであった。

縦25m、横15mの比較的一般的な大きさのそれに張られた水に太陽の光が反射して、きらきらと光っている。その中で大勢の子供達がばしやばしやと水しぶきをあげながら遊び回っている。中には青い髪や金髪の女の子も混じっているが、仲良く遊んでいる。

空には太陽が燦々と輝き、大きな入道雲が遠い空に浮かんでいる。例えにわか雨が降ろうとも子供達の前には笑い話にしかないだろう。そう思わせるほど、このプールには笑い声が響いていた。

夏限定で開放している小学校のプールは基本的に無料で入ることができる。流石に入場は子供だけになっているが、それでもこれくらいの大きさがあれば遊び場には十分だろう。

だが、やはり子供は子供である。時折危険な遊びもしたくなるものである、だからこそ監視員が常に目を光らせているのだ。

「……………」

その監視員である古明地さとりは監視台に座つて子供達を見ていた。

実は小学校の監視員は教師がやることもあるが、外部から雇用することもある。期間限定でしかも雇用相手が公的機関ということもあり時給などについては中々よかつたりもするのだ。だからこそこの桃色の頭をした監視員はここにいた。

さとりは眼を皿のようにしてプールサイドから子供達を見ている。その恰好は黒いワンピース型の水着の上にパーカーと短パンを着込んでいる。短パンはスイミングウェアの一種であり、しかも上から下まで一式を比那名居天子に貸してもらっている。水着など買う金はない、ちなみに「眼」はパーカーの下に隠している。

「……サトー君。あんまり暴れない様に……」

さとりは手元のメガホンを使つてやんちゃな子供に注意を呼びかける。だるそうな声を出してはいるが、それは元々から任せられたからにはしっかり仕事をしているのだ。さらに子供の名前を憶えているところがマメな性格を表している。

サトー君と言われた少年は「はい」とときとうな返事を返してきたが、さとりはそれに頷いて監視を続ける。面倒見がよい性格からか、プールの端から端までくまなく見渡している。彼女の首元にはホイッスルがかかっているが、今日もそれを使う時が来た。

プールサイドの真ん中あたりでつかみ合いの喧嘩をしている二人の少女がいたのだ。

片方は青い髪で片方は金髪をしている。さとりはそれを見た瞬間、監視台の上で立ち上がった。

ぴいといとさとりがホイッスルを鳴らす。それからメガホンで怒気をわずかに滲ませて叫ぶ。先ほどの前のだるそうな声は鳴りを潜めて、少々激しい。それも身内相手には仕方ないのかも知れない。

「チルノ！ルーミア！ 喧嘩しないっ!!」

「ちがうっあたいたいじゃない!」

「チルノがっ!」

そう、喧嘩していたのはさとりの連れてきた二人だった。

何が喧嘩の理由かはさとりのもわからないが言い分をするチルノとルーミアに、さとりはじっと睨む。普段温厚で優しい気な表情をしているからこそ、威圧感があった。それに二人の少女はたじろいでお互いからフンと目線を反らす。蛇足だが彼女達はスクール水着を着ていた。借り物なのかチルノの胸元には「田中」と書かれている。

「……はあ」

そこまで来て、やっと腰を下ろしたさとりである。喧嘩の仲裁などをする気は今のところない、この数か月間一緒に暮らしてきてわかったことだが、あの二人は些細なことで喧嘩するが十分もすればケロリとしている。

それはともかく、さとりはこのやり取りで「実は怖い」という評価を他の子供達からもらうことになるが、そのことを知るすべは彼女にはないのだ。



午後に差し掛かる時間。空から照り付ける太陽が地面を焦がす。

小学校での仕事を終えたさとりは商店街の一角にある小さな店に来ていた。店自体は手狭だが烏帽子をかぶった奇妙な少女の作る料理が安く、そして速く食べられるという店であった。

ここには屋内の席もあるが、既に同じようにプール帰りなのだろう小学生たちに牛耳られている。中からは「ええい、貴様らあ。我の髪を引くなあ!」と聞こえてくる。

さとりはそれを聞き流しながら、外に用意された長い椅子に座っていた。背もたれはないが座布団が敷かれているから、座り心地は悪くない。屋根もあり、陰になっていて多少涼しい。

さとりは「アイランド・ヴィレッジ」で買ったシャツと以前から使っているデニムのハーフパンツを着ている。足にはサンダルと涼しい格好だ。先ほどまでの水着もパーカーも傍らにあるバックに入れていく。

それとさとりの横でチルノが食べている「かき氷」も暑さを和らげてくれる。

チルノは少しだけウエーブのかかった短髪にリボン。それに青いワンピースを着ている。手に持ったかき氷もブルーハワイという青尽くしではあるが、おいしそうに食べる姿にさとりはふふと微笑んでしまう。

「おまたせ……」

暗い声で前掛けをした店員がもう一つかき氷を持ってくる。それを取ったのはリボンを付けた金髪の女の子、ルーミアである。彼女はチルノよりは多少着飾っているのか、白いシャツに赤いミニネクタイ。それに黒のミニスカートを着ている。

ルーミアにはばあと笑顔になり、上にメロンシロップの載ったかき氷を持ってどっかり長椅子に座る。その間に店員はそそくさと店内に戻っていった。

チルノとルーミアはそうしてしゃくしゃくとかき氷を食べている。先ほどまで喧嘩していたとは思えないほど、仲良さげに肩を並べている。もしかしたらかき氷に夢中になっているだけなのかもしれない。

さとりは三時間ほど座って監視員をしていた疲れからか、ふうと息を吐く。パーカーの中に「眼」を入れていたから暑苦しくもあつた。今でもシャツの中だ。

さとりは自らの体にある「眼」を隠している。以前はそのままにしていたが、商店街の人間に「変な飾りを付けたピンク頭」という評判を聞いて隠した。その時心が読めれ

ば、簡単にわかったのにと思ったが、後々考えるとそのようなことを考えていた自分が可笑しくて笑ってしまつた。幻想郷では考えることは絶対にないことだからだ。

さとりはそんなことを思い出しながら、少し疑問も思い出した。だからチルノに聞く。

「さつきは……なんで喧嘩していたの？」

「けんか？ ……あたい、したっけ？」

がくつと肩を落とすさとり。チルノはきよとんとしていたが、やがて何かを思い出したかのように持っていたスプーンでルーミアを指した。ちよつと水滴が飛んで、ルーミアのシャツに付くと金髪の少女の眼がギョロツと汚れを凝視する。

でもそんなことは氷の妖精には関係ない。

「こいつがプールにまでリボンをつけていたから、とつてあげようとしたら。とれなかつたのよ！」

「それで怒っていたの？ ……ルーミアも」

「このリボンはわたしにも触れないのよ！」

いきなり怒り出したルーミアはチルノに掴みかかった。なぜ怒っているのかチルノにもさとりにもわからないが、氷の妖精は「なにくそ、いきなりなによっ！」と迎え撃つ。彼女は頭にきたのかこう叫んだ。

「アイシクルフオール!!」

かき氷をルーミアの顔にぶつけるチルノ。一瞬呆然となったルーミアだがふるふると怒りに肩を震わせて、チルノを睨んで向かっていこうとする。顔からはぼろぼろとブルーハワイ色の氷が落ちていく。

「どうだ、おもいしつたか!」

チルノはそう言うが、その両肩を背後からつかまれてしまう。はつと振り向くチルノだったが、その顔はすぐに恐怖に染まることになった。

「食べ物が無駄にしてはいけないわ……」

チルノの両肩を掴んださとりがそこに立っている。その顔は何時もと変わらないように見えるが、どこことなく暗い。見下ろす眼にはチルノの顔が映るほど澄んでいるのにチルノはかたかたと震えてしまう。先にも書いたが普段温厚なものが怒るときほど怖いものはない。

ついでになけなしのお金で買っているかき氷を無駄にした行為を見逃すわけにもいかないのである。家計を預かるものとしてもだ。

そんなさとりは肩を掴まれたチルノは汗をかきながら言う。

「えっ、えっ」と

「……………ルーミアに言うことは? チルノ」

蓮という住職代理と談笑して寺を出た。チルノとルーミアは畳のある部屋で寝ていたようだ。ただ、いつもは見送ってくれる尼の姿が見えないことが気にはかかった。

だが寺に在る間にルーミアはすこしぶかぶかなパーカーに着替えた。シャツは帰りがけにあるクリーニング店にさとりが出すつもりだったのだ。

そのクリーニング屋で働く店員はいつも笑顔だが、反面いつも傘を持っている変人でもある。それでもさとりはよく利用していた。近所の評判も上々で子供とも遊んでくれるという噂もさとりは聞いていた。

そんなこんな用の事を済まして道を歩いていたらいつの間にかルーミアとチルノは何かを話している。つかみ合いの喧嘩をしていたとは思えないくらい親しげに、二人は顔を寄せ合つて小さな声で話していたのだ。

それにさとりはくすりとしてからゆつたり歩く。仲の良いことは結構だがまさか自分の怒った時がどれだけ怖いかを二人の少女が言い合つていゝとは思わなひだらう。それでも共通の話題ではあるのだ。

「……かえつたらそうめんでも作ろうかしら」

さとりはほつりというが、それを耳聴く聞き取つた二人の少女が顔を見合せて笑ひ合う。チルノなどは口元から涎を垂らしているから、いろいろと早い。



さとりがアパートに帰つてくると、彼女達の部屋の前に誰かが立っていた。美しい銀色の髪を後ろで結んで、ポケットに手をつ込んだまま身じろぎをしていない。ブラウスの胸元を開けて、下は黒のすらっとしたパンツ。どことなくだらしない恰好でもある。

その少女は何かをのんびり待っているかのようにそこに立っている。両手を後頭部に回して大きく欠伸をすると、目元にちよつとだけ涙が見える。

「うちに何か用かしら？」

さとりは少女、藤原妹紅に近寄つて話しかけた。正確にいうと家に入るためには妹紅を無視するわけにはいかなかったのだ。しかし、いったい何の用で来たのか見当がつかない。慧音は今日いないのだ。

「おつ、やつと帰つてきたわね」

妹紅は少し嬉しそうに振り返つた、そしてチルノとルーミアを見てからさとりに言う。

「遊びに行つていたのかしら？　ちよつと慧音に用があつたから待たせてもらつたわ」

「……………そう、今日は慧音は……………忙しいのよ。でも、霊夢が留守番をしていたはずだから、中に入ればよかったのに……………」

さとりは慧音が「こんにちは！ 仕事」に行つていると言いかけたがすんでのところで踏みとどまれた。流石に彼女の友人に伝えていいかどうかは、慧音自身に任せた方がいいだろう。

しかし妹紅はあまり気にした様子は見せずに眼を閉じて、言う。

「ああ、じゃあ悪い時にきたわね。……あの巫女も部屋にはいなかったみたいよ？ 何度か呼びかけてみたんだけどね」

「いない？ 今日はお盆休みの延長で工場は休みだから、一日ぐうたらするつていつていたと思うけれど」

巫女の情報はべらべらしゃべるさとり。一応働いている大黒柱の情報ならば、伝えるところで恥ずかしいことはないはずである。それでもさとりは霊夢がどこに行つたのかわからなかった。霊夢は例えば比那名居天子などの所に遊びには行かない。むしろ天子がいつも来る。

それはともかく、さとりは妹紅と立ち話をしていることに少し申し訳なく思った。どんな理由であれ、せっかく訪ねてきてくれたのにこの炎天下では辛かっただろうと思つたのだ。

「……慧音も霊夢もいなくて悪かつたわ。よかつたらそうめんをゆでようと思つていただけど……食べていけないかしら」

さとりは妹紅にそう提案した。銀髪の少女は眼をぱちくりさせてから、にっと齒を見せて笑う。

「それじゃあいただいいていこうかしら」

その返事にさとりはちよつと嬉しくなる。自分が提案したことにニコツと笑って乗ってくれるとそんな気持ちにもなるだろう。気持ちのいい人だなとさとりは思った。

さとりはポケットからキーを取り出して、錆びついたアパートのドアノブを開ける。カチャツと音を出して、ドアが開いた。チルノとルーミアがさとりとドアの間をすり抜けて中に入っていく。プールの後はごろごろしたいものである。寺で寝たが、もう少し思っているのだろう。

さとりはそれに苦笑して、部屋の中に入っていく。そこで彼女はおかしなものをみた。

——中にはラフな格好で座禪を組んでいる巫女が一人いた。いないはずの霊夢がそこにいたのだ。その静かな姿はまるで何かに「気づかれまいと」しているかのようだった。

彼女はゆっくりと眼をあける。物音に気が付いたのだろう。

霊夢はさとりの後ろにいる笑顔の藤原妹紅を見て驚愕の表情をした。彼女はさとりをあわてて指さして叫ぶ。

「だ、騙されないでさとり！ そいつは河童の手先よ!!」

「えっ……？ か、かつぱの……？」

さとりは後ろを振り向くと、もはや「玄関にカギをかけることができない」位置に妹紅は立っていた。顔は笑顔のまま、ポケットには手を入れたままである。シャツのボタンが開いて、首元の肌が見えているが、それも暑さへ対策程度にしか思っていないのだろう。

さとりに見られた妹紅はゆっくりと眼を見開く。紅い瞳がきらりと光って、さとりと霊夢を射すくめる。チルノとルーミアは部屋影でタオルケットにくるまっている。

「手先……なんでひどいなあ。私は別に河童の手下じゃないわよ？ ただ、依頼を受けただけで……それにお二人さん。いやもう一人いるから、お三方と言った方がいいかしら？」

妹紅は切れ長の瞳をしているから、鋭い印象を人に持たせる。しかし、さとりはその柔和な笑顔に騙されたというより油断した。だから妹紅がパンツルックという仕事着

で来ていたことに洞察は及ばなかった。

妹紅は言う。

「払うもんは、払わないとね？ きつちりと」

妹紅は最初から仕事で来ていたのだ。ちなみに借金取りではない。

4 話

空に輝く太陽のように上白沢慧音の心は晴れあがっていた。

商店街のアーケードを早足で歩く軽快な足取りは彼女の機嫌の良さを表しているのだろう。その姿は何時もの通り、紺のスーツ姿。頭には小さな青い帽子をかぶっている。

しかし、その顔は普段からは全く想像がつかないほどにやけていた。

「くぐ、くぐ、くぐ」

気味の悪い笑い声を出しながら、上機嫌で彼女は歩いていく。その手にはそれなりに厚みのある封筒が握られている。それこそが慧音の心を軽やかにする最大の要因であった。

慧音はいわゆる無職である。働く意識自体は旺盛であるのでニートではない。

その無職の辛いところは「職のない」ことではない。それよりも何よりもつらいのは唯一つである。つまり「社会的地位が皆無」であるという一点にこそ辛さが凝縮されているといっていだろう。

その点で言えば上白沢慧音はここ数か月間、胃に穴が開かなかったことが不思議なほ

ど辛かった。幻想郷では一応というよりは、彼女の知り合いの中では最も働いていた。寺子屋という天職と本人は思っている居場所が心地よかった。

だが、幻想郷から放り出されてからの彼女は人に養われ続けてきた。その扱いは子供とあまり変わらない程度という真面目な彼女には周りに申し訳なさすぎる状況でもあったのだ。

だからこそ毎日のように就職斡旋の施設に入り浸っては、塾の講師や家庭教師などを中心に働きの口を探した。しかし、彼女はあまりに真面目過ぎたのだ。

基本的に幻想郷からきた少女達は皆が住所不定無職からスタートしている。それから血の滲むような努力を積み重ねるか、天狗のように他人（アイドル）を売って組織に入り込んだり、または履歴書にうそをつきまくって必死に生活基盤を構築した。とある尸解仙の少女などは「東大卒」などと自称したこともある。

慧音は嘘を付けなかった。それに人を陥れる天狗の狡猾さもまねできず、かといってなんでもかんでも妥協できるような性格でもなかったのだ。そうなる履歴書にはよくわからない経歴が並ぶことになる、それは如何に本人の心が清纯、誠心そのものでも企業としては取るわけにはいかない。現代での雇用は人物判断よりも肩書競争とでも言った方がいい。

そんな中で、寺子屋で子供達に教えていたなどと面接の席で喋ろうものなら落ちるの

は当たり前と行っていい。しかも経歴がへんちくりんなのであるからなおさらだ。

慧音はだからこそその無職だった。ある意味ではその状況は慧音の嘘偽りの付けない性格を表しているといえるが、現実には生活があるのだ。

「くふくふ」

しかし一時的とはいえ今日の慧音は晴れやかな気持ちだった。就職したわけではないのだが、彼女達の住んでいる隣町に臨時のアルバイトを見つけ、ここ数日の間だけ通っていたのだ。封筒はその給料が入っているのだ。それも福沢諭吉が数枚入っている。

臨時のアルバイトのよいところは、あまり長期雇用などは考えられていないため、給料は高い。それに欲しいのは長期的な人材ではなく単純な人手なので早くに応募すればそれなりに採用されやすい。ちなみに慧音のやっていたのは福引の手伝いである。

にんまりと笑いながら道を歩く慧音は、頬をほんのり赤くして子供の様に喜んでい

る。封筒の厚みを見るたびに知らず知らず顔がにやけてしまうことも、彼女には止めることができない。少なくともこれで生活に貢献することができるわけであるから、今まで

料」を徴収する手伝いをしてほしいと言われたらしい。だからこそ霊夢達のアパートの前で粘っていたのだった。

実のところさとり達が帰ってくるまでに妹紅と霊夢は接触していたが、霊夢が逃亡しアパートに立てこもった為、妹紅はのんびりと誰かが帰ってくるのを待っていたのだ。彼女が最初言った「巫女がアパートにいない」というのは嘘である。

そんな妹紅も今は必ずするとそうめんを食べては、もぐもぐと口を動かしている。生来のというわけではないが、のんびり屋である彼女には急いで河童の依頼を片付ける気もない。それよりも今は腹ごしらえだった。

「はい……麦茶」

「どつむ」

さとりが麦茶の入ったコップを妹紅に手渡すと、彼女はにっと笑う。その屈託のない笑顔には邪気が全くない。それなのに今日彼女が来たのはお金のことなのである。

妹紅はごくごくと一気に麦茶を飲んでからコップから唇を離す。それからふつと息を吐いてからポケットから出したハンカチで口元を拭く。そうしてから言った。

「じゃあ、本題に入りましょうか？ たしか5人分……でも、その氷の妖精と金髪の妖怪は割引されているから実質には3人分だから……四万二千円ね」

妹紅の紅い目がきらりと光り、それを受けて霊夢の箸が止まる。

「お金ならぬわよ」

霊夢は即座に言う。あまりに堂々としているので、藤原妹紅も一瞬だけ反応できなかった。さとりはその後ろではあとため息をつきながら、汗を掻いている。結構恥ずかしいらしい。

妹紅はやつと霊夢に言う。

「……え、えらく。堂々として言うわね」

「事実を言ったまでよ。私たちが月の中ごろに無駄金を持っているわけないでしょう？」

「そういう言葉は月末にいう物なんじゃない？」

「月末もないわ……ていうかお金はないわ」

こめかみを抑えて妹紅は小さく唸る。しかし、霊夢の言う通りこの部屋に金目の物も金もない。巫女は嘘を言っているわけでもなく、追いつくためにきとうなことを言っているわけでもなかった。つまり事実を述べているだけなのだ。

しかし、そのようなことを言われたからと言ってはいそうですかと帰るわけにはいかない。妹紅はため息をついて、肩をすくめる。

「まあ、私もいろいろと出費もあつて苦労しているからわかるけど……払う物は払っていかないとダメなんじゃないかしら？」

「払って餓死するくらいなら踏み倒すにきまっているじゃない」

霊夢はにべもない。しかしストイックなほどに達観している。生活が崩壊するくらいなら金は払わないという彼女は善悪よりも利害で物事を計算する冷徹さがある。

妹紅はそこで言葉に詰まってしまった。元々ただ単に河童からはとある料金の徴収の「手助け」を求められているだけなのだ。彼女は自分で無理やり徴収するようなことをする気もなかった。

だからこそ、妹紅はもう一つため息をついてからポケットから携帯を取り出して、どこかに連絡する。

『はい、河城商会のにとりです』

「ああ、こんにちは。例の巫女の部屋に来ているのだけど……どうにも払えないの一点張りで困っているのよ」

『しかたないなあ、じゃあ物品で押えよう』

妹紅が電話したのは河童の親玉だった。正確にいえば、幻想郷の外に放り出された河童をまとめている親玉である。彼女はその数の力と、技術力を使ってとあるサービスを提供しているのだ。その過程で資金を手にしており、最近ではいろいろなことをやっているという。

妹紅が携帯を切る。その数秒後、バンと玄関が開いた。

「はい、ここにちはー」

その親玉である河城にとりが玄関のドアを開けて入ってきた。彼女は携帯を持ったまま入ってきたのだから、すぐ外で待機していたのだろう。

にとりの姿は幻想郷と変わらない。その姿が気に入っているのか、緑色の帽子をかぶり青い髪は二つ結び。中にきた白いブラウスが首元から見えるが、青い上着にポケットの一杯ついたスカートを穿いている。さらに大きなリュックサックを背負っている。

いきなりのことにギョツとする霊夢とさとりであるが妹紅は驚いていない。そう、この状況は最初から考えられていたことなのだ。

妹紅の依頼されたのは重ねてにはなるがあくまで「手助け」である。そう、最初からにとりは自分で乗り込むつもりであったのだ。ただ最初から自分だけでくると警戒されて逃亡されるケースもあった。

数か月前には「今月はデジカメをかったんでお金ないんですよ……テヘペロ」などと嘗めたことを言った者を河童集団で追いかけてまわして取り逃がしたこともある。特にテレビか何かで得たのだろうスラングを使ってきたところがにとりには許せなかった。

以来にとりは料金の徴収には細心の注意を払うようにすることにした。妹紅を雇ってワンクッション置いたのはその一環である。

にとりは靴を脱いでから、部屋の中にずかずかと入ってくる。そして両手を組んで仁王立ちをする。霊夢達は座っているから見下ろす形になった。

「……あ、あんたが来てもうちにはお金なんてないわよ」

「それはどうかな？ 霊夢さん」

多少驚いた霊夢だったが、にとりが来ようと来るまいと状況は変わらないのである。そう思つてにとりに言つたが、河童の少女は不敵に笑う。何か秘策のありそうなその笑みに霊夢は不気味さを覚えた。チルノとルーミアと妹紅は部屋の隅にそうめんの入ったボウルと一緒に避難している。さとりは霊夢と並んで座っている。

にとりは腕を組んだまま口を開く。

「お金がないと言っているけど、それは口頭でしかないじゃないか！ そういうことを言う者に限つてあるもんなのさつ。家探ししてもないって言い切れるかな？」

「言い切れるわ」

「えっ？」

霊夢はきつぱり言い切つた。あまりに明快な答えにとりは素に戻つてしまふ。それを畳みかけるように霊夢がポケットから何かを取り出した。それは赤い財布だった。

「これが私の財布よつ。さとりも出して」

「えっ……」

さとりもポケットから小さな袋のようなものを出す。少し形は変だが財布らしく、中で硬貨のこすれる音がする。霊夢は立ち上がって自分ときとりの財布を合わせてにとりに渡した。河童の少女は渡されるままに受け取るが、はっと気が付いてふんと鼻をならす。

「ないって言っても、この中にあるに決まっているよ。それじゃあ見させてもらうからね」

「いいわよ」

自信満々と言った風情で霊夢は言う。にとりはそれに怯みそうになるが、まずは赤い財布を開けようとした。

——ばりばり

にとりが渋い顔をする。手に持っている財布はまず間違いなく「安い」。マジックアイテムじゃないのに「マジック」がついた素材が使われているのは間違いない。しかし中身は別だろうとにとりは確認する。

百円玉が数枚出てきた。あとは何かのポイントカードだけである。強いていうのならほこりくらいなら入っていた。

「……………これはもういいわ」

にとりは赤い財布を霊夢へ返す。「だからいったのに」と彼女は言い、がつくりと河童は肩を落とす。それでも気を取り直してもう一方の財布を持ち直した。こちらは中に紙のような感触がある、お札だろうとにとりは少し期待して開けてみた。

レシートだった。しかも束になっている。

一応で言えば二枚ほど千円札が入っているが、それでは全く足りない。小銭も多少はあるが、焼け石に水である。

「それ……今月の生活費の残り……」

なにか悲しげなことを言うさととり。博麗の巫女と旧地獄の管理者という幻想郷の要人二人合わせて三千円くらいしか持っていないのだ。一応すでに家賃や光熱費は払い終わっている上に、食料などは買い込んでるので生活できないことはないが、にとりにまわす金など一切ないという霊夢の言葉は実証された。蛇足だがにとりはあと一人には期待していない、無職という情報はずいぶん前から入っている。

にとりは無言でもう一方の財布も返した。なけなしの小銭を奪っても後味が悪いだけである。しかしだからと言ってもあきらめたわけではない。しかし、さとりは今日の帰りに二人の少女にかき氷を食べさせてしまったことを霊夢にばれずホツとしている。財布を出せと言われた時ちよつとドキツとした。

そんなことは知らないにとりはなお粘る。

「く、くく。甘いね霊夢さん！ ほしいと見せてくれる財布なんてブラフに決まってるよ。きつとこの部屋のどこかにへそくりが隠されているに決まってる——」

「どこにそんな場所があんのよ」

霊夢が呆れたように言う。彼女は目で部屋の中を見回す。ほとんど家具のない部屋であり、ミカン箱の上に小さなテレビと部屋の隅に折りたたまれた敷布団が二つ。それ以外は見当たらない。たしかに物を隠す場所なんてどこにもない。部屋の中にはトイレもシャワーもない。二つとも外に共用がある。

にとりは冷や汗をかき始めた。しかし、お金がなければ物品で補うというのは先ほど彼女の発した言葉である。そこで彼女はミカン箱の上にあるテレビに眼を付けた。

「……いい、いや。そ、そうだっ。このテレビ！ これなら多少の補てんに」

「それは八チャンネルが付かないわよ？」と霊夢。

「な、なぜえ？」

にとりはあまりのことに叫んだ。一応薄型テレビだから、地上デジタルには対応しているはずなのだ。だからこそ民放が一部だけ映らないなんてことはあり得ない。しかし、霊夢は肩をすくめていう。

「知らないわよ。リサイクルショップの倉庫に転がっていたものを格安で買ったら、そうになっていたのよ。ついでにいうなら、それ音量の調節もできないわ」

「なぜえ!？」

もう一度河童は叫ぶ。意味わからない。

「本体についているボタンが押し込まれたまま戻ってこないのよ、あつリモコンがあるからそつちからなら音量は調節できるわ」

リモコンがあるという普通のことを付加価値の様にいう巫女の言葉にとりは混乱した。しかしわかっているのはこのような物を押収しても一文にもならないということである。一部チャンネルが映らず、音量調節も不具合のあるテレビに値段などつくわけがない、これはテレビという名のスクラップである。

「…………ふ、ふふ」

にとりは薄気味悪い笑い声をあげて、テレビから離れた。それから霊夢とさとりの横を通つてキッチンに行く。彼女はその食器棚を開けて、言う。中には数枚の皿や調理器具が入っている

「はは、物が無いっていつでも食器くらいならいくらかはあるじゃん！ わるいけどこれくらいは…………」

そこで気の毒そうにさとりが言う。

「あの…………それ全部百円均一で買ったものだから…………あんまりお金にはならないんじゃないかしら」

「……」

にとりは何とも言えない顔をする。どういつていいのかわからない。唯一つだけわかつたことはある。

——何もねえ

あまりの貧苦ににとりも絶句せざるをえない。あとはさとり達の衣服などがあるが、そんなものはほとんど金にならない。服は買えば高いが、売れば百円にもなれば御の字である。だからこそ流石の河童も手の打ちようがなく、膝について肩を落とした。

その様子を見ていた霊夢は小さなつぶやく。ただ両手は組んでいるから、態度は大きい。

「勝ったわね」

即座にさとりが悲しげな声で返す。

「やめて霊夢。どちらかというと、私たちが敗者よ……」

少し離れて河童の敗北を見届けた藤原妹紅はやれやれと立ちあがった。どうやら、この案件から料金の徴収は無理だと思ったのだ。彼女の横では残りのそうめんをすすする二人の少女がいる。

妹紅はにとりに近づいて、ぼんと背中を押すと優しげに声をかける。

「今回はちよつと無理そうね、私も助けになれなかったからこの仕事についての報酬はいいわ。もう一件あることだしね。ねえにとり」

「……うう、あ、ありがとう」

妹紅は一度頷くと、さとりにそうめんの札を言ってから、玄関に向かう。その時一度振り向いた。

「まあ、来月には給料もあることだろうし、ちゃんとはらうことね。それじゃ」

妹紅はそれだけ言つて玄関から外へ出ていく。彼女はあくまで雇われただけであまり執着はなかつたのだろう。

——妹紅の姿はそれで見えなくなったが、外から声がする。

『あ、今帰り?』

『なんだ来ていたのか。上がっていかないのか』

『今しがたお昼をごちそうになったところよ。その包みはどうしたの?』

『大判焼きを買つてきたんだ……臨時収入があつたんだが一つやろう』

ぴくりとにとりの耳が動く。

『どうも、じゃあ私はいくところがあるから』

『そうか……また』

そんな会話が聞こえてきたあと、玄関の前でごほんごほん咳払いが聞こえる。明らかに上白沢慧音の声だったと霊夢とさとりは気が付いている。案の定慧音が顔を出した、その手には大きな包みを抱えている。

「た、ただいま。霊夢、さとり」

「お、お帰り」とさとり。

慧音はちよつと一度だけ眼を反らした。そうしてないと口元がにやけることが止められないのだ。しかし、二人には伝えたいことなので片手で頭を掻きながら言う。その表情は幸せがあふれるかのように、抑えきれない笑顔がこぼれている。

「い、いやあ。じ、実はだな、秘密だったんだが私はこのごろ臨時でアルバイトをしていたんだ。それで今日が、そ、その給料日だな。生活費の足しになるくらいはもらったんだっ！ それで大判焼きもチルノ達に……」

「ほう」

いつの間にかにとりがちち上がっていた。彼女は慧音と眼を合わせて、じりじりとかよつてくる。目的は明快である。目の前で親切にも説明してくれた「教師」の持つものが欲しいのだ。

慧音は眼を見開いて、がたがたと震え始めた。表情が笑顔のまま強張り、さあと青く

なる。

「か、わしろ、にとろ」

慧音はあまりの驚愕に嘯んでしまった。にとりはそれには頓着せず、彼女の前でにっこり笑って両手を突き出す。手のひらを上に向けてから言う。

「ありがとう！」

慧音は心が抜けたように口を開けて、突っ立っている。

5 話

それは、少し前の話である。

河城にとりは幻想郷のとある山、そのふもとの河原にある大きな岩に腰掛けていた。川幅は広くはないが、にとりの目の前を清流が静かに流れていく。彼女は裸足になってから足を水に漬けるとちやぶちやぶと水を蹴る。

いつもの緑の帽子をかぶり、首にかけている鍵のついたネックレスを揺らしながらつまらなさそうに水を蹴る。物が詰まって大きくなっているかばんは傍におろし、なんとなく見上げた空に雲はない。

にとりは退屈していた。人里で宗教がどうのという「イベント」があつた時には存分に商売をしていたが、今ではその熱も冷めている。いやにとりが冷めているというよりは、人里の人間達の熱気が冷めているから商売に結び付きそうにないのだ。

今では神社でよくわからない「能」などと言うものをやっていると聞いた。出店の一つは出さそうかと思つたが、巫女が自分で物を売っていたので追い払われた。しかし、人に紛れて妖怪が大勢神社にいたのにはにとりも苦笑せざるをえなかつた。

それはそうと、現在にとりにやることはない。機械いじりでもやればいいのだろう

が、今のところ考えるテーマはない。やはり、情熱的に商売に精をだしていたことが終わった反動でやる気が起きないのだろう、と自分では思っていた。

「あーあ。ひまだなあ」

ごろんと岩の上で寝そべって、わざとらしくにとりは言う。しかし短命な人生とは違って長い時を生きる河童生のほとんどが暇である。別に人間と戦争することもあるわけではない、それにしたくもない。かといって他の妖怪と張り合うようなこともしない。

「なんかおもしろいことないかな……」

清流の音を聞きながらにとりは思っていた。たまに混じる「音」は木々の葉が風にゆれる音ぐらいである。にとりはそれを聞いているとうとうとと眠たくなってしまった。ゆっくりと暇が降りていき、やがて小さく寝息をたてはじめた。

暇なら昼寝しているほうがいと彼女は想ったのだ。

——ねえ。河童さん？

「ふが？」

あれからどれくらい時間が経っただろう。にとりは聞きなれない声に眼を覚ました。

だがぼんやりと目元が霞んでいるのは、まだ寝ぼけているからだろうか。しかし、彼女は目の前に「赤い髪」の女がいることが分かった。

寝ているにとりの「目の前」ということは、赤髪は立って見下ろしているということだ。両手を腰についてにとりを見ている。ねぼけ眼では表情がよくわからないがニヤリと笑った気がした。

赤髪は白い服をきているような黒い服を着ているようなあやふやな感じに、ぼんやりとにとりには見えていた。幻想郷ではあまりみない服装のような気がする。

——外の世界に興味はない？ これから私たちはそこに行こうと思ってるのだけど。人手が欲しい……河童手が欲しいのよ。

「へ？ そ、と？ 人里の、こと」

ぼんやりとした意識の中で受け答えをしているからかにとりの言葉はときれときれである。だが赤髪は薄く笑って返す。

——いいえ、ちがうわ。外と言ったら外よ。

そこから先はにとりにもはつきりと聞こえた。赤髪はこういったのだ。少し興奮しているような気がにとりには感じられた。

「博麗大結界の外。人間のひしめく、人の世界よ！」

語った。

きゆうりうめえにとりは思う。

赤髪はこほんと咳払いして、むうとまたもや不満げな顔をする。彼女の背丈はそれなりに大きく、身なりは綺麗だがどこことなく子供っぽいところもあるようである。煮え切らない態度の河童に向かって外への「行き方」を話始めた。

さあと木々がざわめく。にとりはその中できゆうりを落とすそうになったが、なんとか持ちこたえて口の中に残りを放り込む。しゃきしゃきと食べてごくりと飲み込んだころには、にとりも考え込んでしまった。

なるほど、もしかしたらそれで外へ行けるかもしれない。そうにとりは思う。それにその方法ならたとえ失敗しても、危険は少ないだろう。しかもそれで機械のあふれる「外」へ行けるのだ。にとりはむくむくと好奇心があふれてくるのを感じざるを得ない。目の前では鼻を鳴らして、誇らしげにしている赤髪がいる。にとりは心中で「そんな大切なことを参加するとか言う前にばらして、バカじやないのかコイツ」と黒いことを想っていたが、口には出さなかった。

兎にも角にもにとりは赤髪に即答はせず、仲間と相談すると言いおいて帰宅した。返事は明朝にこの場所でするとも伝えた。赤髪も承諾した。

河童の住処に帰ったにとりは仲間を多数集めて会議をした。河童達は皆頭に帽子をかぶり、青い服を着ている。スカート状になっているそれには多くのポケットがついている。そこにはそれぞれの好きな工具などが入っているのだろう。

赤髪の話をもとめてにとりは話した、そして自分も外へ行ってみたいという所見も披露した。最初河童達は顔を見合わせて、疑い深げにしていたがにとりもさるもので保険を掛けた。それはもしも断る場合、赤髪がこのこやつてくるので集団でふんじばって巫女に届けようということだ。これなら河童に責任が来ることはない。

そんなこんな議論が開始された、それでもこの中のほとんどが「外へ行きたい」と考えている。なんといつても先進的な機械のあふれる「外」は魅力があるのだ。河童限定の魅力かもしれないが、それで議論も「外へ行くか否か」ではなく「赤髪に協力するか売るか」に主題が絞られた。

時折誰かがきゆうりをかじる会議は朝まで続いた。だがしかし、結論は最初から決まっていたのかもしれない。

結論の出たあと、にとりは一人で立ち上がった。他の河童は会議の疲れからか、思い思いに眠っている。それでも青い髪の河童は約束の場所に向かった。彼女の懐の中に

そして今日は河城にとりは集金をしている。本日こそはあの博麗の巫女から滞納分だけでも取り返そうと本拠へ乗り込んだのだった。しかし本気でなにもなかった。冗談ではなく、これ以上搾つたらやばいレベルである。

しかし、救いの女神がそこに現れた。上白沢慧音とかいう無職が今日に限ってお金を持つてきたのだ。にとりは即座にそれを抑えにかかったのだが――。

「さあ、とれ」

慧音は給金の入った封筒を河童に差し出した。しかし、その心には恨みはない。実質的に滞納していたのは自分達でもあるし、これも霊夢やさとり達の為になることだと言いや聞かせているのだ。

普通ならば多少の抵抗もするかもしれないが、慧音の持つ倫理観は常人よりも清純な物であった。つまるところ物わかりがよいのである。それに河城にとりは別に詐欺師というわけでもなく、彼女が居なければ生活が成り立っていなかったことは確実なのである。

にとりは一旦手を封筒に伸ばしたが、ぴたりととまった。慧音は不思議に思つて封筒を自らにとりに近づける。その近づいた分だけにとりは下がった。ちらちらと彼女は慧音の顔を窺っている。

「どうしたんだ？ 早く取るといい」

「う、うん」

慧音は促す。それでもとりは取ろうとしない。元々自分から「ちようだい」と言ってきたはずなのに、彼女はどうしても取れなかった。それはとりに視点になってみればすぐにわかることだった。

にとりから慧音見ると、この長い髪をした女性は目元に涙をためて顔を赤くしている、ふるふる震える姿は小動物の様である。

泣き落としてはいい。本気で泣いているだけだ。だからこそにとりもずけずけと封筒をとることをためらうことになってしまった。ある意味もつとも性質が悪いと言っているだろう。無論のこと、本人には悪気も何もない。

遠くからは蝉の声が聞こえてくる。もう夏が終わりに近づいていることもあり、必死に最後の声を張り上げているのだろう。にとりはそれを聞きながらごくりと息をのむ。ここでは心を天狗にしても卑劣にならなければならない。

「じゃ、じゃあいただいてたたた」

すつと封筒を取ろうとするにとりの片手をぐつと誰かが掴んだ。結構強めに握ってくるからにとりは思わず悲鳴を上げてしまった。全く予想していなかったのだから仕方名がないだろう。

「れ、靈夢」

慧音はにとりの手を掴んでいる者の名前を呼ぶ。単純労働で鍛えられた握力がにとりの腕を締め上げるのだ。しかし、その当人である巫女は少々困ったような表情で慧音を見ていた。つまり河童は無視しているのだ。

「慧音。それを渡すことはないわよ」

「あ、あたたた、れ、靈夢さんそれはないよっ」

にとりはあまりに傍若無人な言葉に抗議する。それで靈夢もはあと一つため息をついて、河童の細腕を話す。ばつと下がったにとりの頭でルイージ帽子がずれる。実は現代に来てから買ったものだったのだ。

慧音が靈夢の肩を掴む。どことなくおどおどとしている。

「靈夢。確かに家計は厳しいからお金を渡したくないのはわかるが……こ、この場合は仕方ないじゃないか」

「……誰か払わないって言ったのよ」

「えっ?」

靈夢は肩にかかっている黒髪をかき上げて、にとりに言う。当の河童は訳が分からずきよとんとしている。それも不思議ではないだろう、靈夢とさとりがほぼ無一文なのは先ほど確認したのだ。逆立ちしても無理であるし、バイトで巫女をしている天邪鬼を連

れてきても変わらないだろう。

しかし、霊夢には腹案があった。彼女はにとりを指さして言う。

「あんた、いろいろと商売をやっているんじゃないかしら？ この慧音のお金の代わりに代金分だけ働けば文句ないでしょ！」

「えっ。霊夢さん……そ、それよりも普通に払ってくれば……なにも」
「あ？」

びくつとにとりは身を震わせる。「あ？」と言った霊夢の言葉があまりにはまりすぎて怖い。ぎらつとした霊夢の眼光からにとりは眼をそむけてしまった。霊夢も現代に毒されている。唯一人だけ社会で揉まれているからこそ、多少のことでは怯まないしその上迫力がある。

それでも冷静な打算はにとりにもできた。確かにこのまま押し問答を繰り返していても回収ができない可能性がある。そもそもこの「集金」は表だってできる物ではないからこそ苦戦しているのだ。

それに慧音の封筒の中身がいくら入っているかなどわかりはしない。多少の補填になるのかそれとも全額集金できるのかも謎である。そこに行くと、慧音初め三人の人手を得られるとすれば十分元は取れる。

それに今、河童の事業には人手が必要なのだ。だから彼女は言った。ちなみに両手は

組んでできるだけ偉そうにはしている。

「わ、わかったよ。……私たちは今海だとあることをやっているんだけど。それに参加してもらおうかなつ。もちろん交通費とかは自腹だよ、制服とかは用意するけどね。それでいいんだね、霊夢さん」

「わかったわ。でも、私にも仕事があるからあまり長い日数は働かないわよ」

「……霊夢さん……すげえ」

「すげえ」とモノを言う霊夢に感嘆の声をあげるにとり。慧音とさとりはもはや空気とかしている。しかし、にとりは頭の中で算盤をはじいて言う。要するに利益が出ればいいわけであり「時給で働いてもらう」のではなくともいいのだ。

「う、うん。じゃあそれでいいよ。……あつ」

にとりは何かに気が付いたようにポケットから何か取り出す。それは一枚のパンフレットの様だった。くしゃくしゃになっていても「海開き」という文字がカラフルに書かれている。実際の海の写真と地図が乗っている。

「これが場所だよ。遠いけどまあ、電車で行ける範囲だから。働くのは明日からだよ。利益が回収できたら解放するから」

それを霊夢に手渡すにとり。巫女もこくりと頷いて、返す。

「わかったわ。でも工場の仕事はじめ——」

「じゃあー、そういうことで!!!」

さらに何か条件を付けようとした霊夢からにとりはあわてて逃走した。これ以上言質を取られるわけにはいかない。放っておいたらいつの間にか借金がちやらになりかねない。普通ならあり得ないがにとりはそんな危機感を覚えた。

ばたばたととりは玄関から出て、アパートを離れていく。それをドアから顔を出して霊夢は見送ったが、ちつと舌打ちして「値切ればよかった」と小さく言う。もしかすると幻想郷の少女達の中で最も凶太いかもしれない。

「れ、霊夢」

その声に霊夢が振り向くとぽかんと口を開けている慧音がいた。彼女は何かおこっているのかわからないといった顔をしている。今の状況で言えば、普通にお金を渡せば済んだ話であり、霊夢とさとりまでも河童の事業に参加させる意味などはない。

「な、なんで」

「……………」ただ生活費を河童なんかそのまま渡すのが癪だっただけよ」

霊夢はふんと鼻を鳴らす。しかし、その返答には多少の矛盾がある。だからますます慧音はわからないといった顔をした。しかし「わかるもの」はいるのである。

「……………」

さとりは部屋の隅で口を手で覆っている。その肩が小刻みに震えているのは、笑って

いるのだろうか。横ではチルノとルーミアが不思議そうに見ていた。蛇足だがルーミアは慧音を河童が泣かせているのを見て、今度町内の「仲間」を集めてアレしようと考えている。ただしルーミアはおくびにもだささない。我関せずといったすまし顔をしている。

「なによさとり」

むつとして霊夢が言う。さとりはあわてて笑いを収めて、返す。

「い、いえ何でもないわ……」

もちろんその言葉の裏腹に彼女にはわかっている。そう『心を読まず』とも。それが彼女には新鮮で、おかしくて微笑ましいから笑ってしまったのだ。

要するに霊夢は慧音が頑張って持ってきた「お金」を渡したくなかったのだ。霊夢も言葉には出さないが、慧音の頑張っている日常にもその苦悩にも思うところがあるらしい。だからこそ、渡したくなかった。

それは自分も同じとさとりは思う。

「そうね……とりあえず。働きに行く準備をしないといけないかしら？　ね、霊夢……。」

さとりはからかうでもなく霊夢に言う。いろいろと準備することはある。少なくとも遊びに行くわけではないから、ルーミアとチルノはどこかに預けていかなければなら

今日ならできる。

その少女は肩まで伸びたウェーブのかかった薄緑の髪をして、きらきらと光る瞳を持っていた。頭にかぶっているのは黒い小さなハットをかぶっているが、何故か服装は「じんべい」である。顔はどことなく「さとり」に似ているかもしれない。

彼女はとある寺の庭先で草履をはいたまま「道着っぽい」という理由で着ているじんべいを着たまま、腰を少しだけ落とす。そして両手を前に突き出して、その手首を同士をくつつける。

顔を風が撫でる。よい日だからこそ、今日なら出せるかもしれない。

「かあ」

少女は言う。そして両手を合わせたまま腰のあたりまで引く。手のひらはふくらみを持たせているから「気」が溜まるはずなのだ。

「めえ」

少女が言う。急激に力（リキ）が溜まっている、ような気がする。しかし抑えていないと地球を崩壊させかねない。それでも少女はカツと両目を開いて、さらに力を手中に集める。

「はあ……めえ」

すでに太陽系を吹っ飛ばす程度の力が溜まっている可能性がある。彼女は地球に当

ててしまわないように空に向かって両手を突き出す。

「はぁー!」

ちちちと小鳥の鳴く声がする。

少女、古明地こいしは両手を睨んで修行が足りないと思った。

「彼女は……いったい何をやっているんだい?」

「さあ、なんなんですかね?」

お寺の縁側に座って、不思議そうな顔でナズーリンは聞いた。相手は村紗 水蜜である。

水蜜は縁側に寝そべって、「ドラゴンなんか」と書かれた漫画を読んでいる。恰好はホットパンツにノースリーブのシャツという涼しげな格好だ。健康的な足を出しているのだが、ナズーリンには多少気に食わない。女性が肌を見せるのは、はしたないのだと、最終的に海で見せることになる彼女は想った。

6 話

今の日本の地域にはお年寄りが大勢いる。限界集落という言葉に代表されるように、少子高齢化社会という物を如実に表す減少と言えるだろう。しかし、やはり年配になると力は衰えて色々なことが億劫になる、または純粹にその能力が無くなるという事例がある。

例えば遠くに買い物に行けない。

例えば屋根の掃除ができない。

例えば、例えばと次々に生活に支障がある事柄を並べることができるように、やはり人間は老いればほとんどの人が純粹に「困る」のである。もちろん矍鑠として元気な老人も大勢いてもそれは全体から見れば少数派であろう。

ゆえに、地方には「何でも屋」が存在することがままある。それは何か決まった仕事を生業としているのではなく、報酬をもらって可能なことであれば依頼されたことをやるという本物の「何でも屋」である。

普通に企業がそれを担っている場合もあるし、地域の自治体で行っている場所もある。まちまちだが、それで多くの人々が助かっているのも事実だろう。

藤原妹紅は不死の少女だ。平安の世の中でとある人物と因縁があり、それから永い永い時を生きてきた。いや、他の妖怪たちもそうなのだからその点ではあまり変わらないのかもしれない。しかし、人間としては狂うに足りるほどの時間を彼女は生きた。

時には蔑まれて、気味悪がられて、自らの境遇を恨んだことも一度や二度ではない。それでも彼女は死ぬことはできないので、生き続けた。たまに現れる好意的な人物たちは先に死んでいった。

千年。その長い間に考えたことはのんきに生きている妖怪や妖精、それに短い時を生きる人間には想像もつかないほどの感情の波と言うべきものだった。彼女はその中で孤独や怒りといった感情を飲み干して、死にたくても死ねなかった。

それでも彼女はだんだんと心を穏やかにさせていった。根源的な恨みは消えなかったが、性格がのんびりとした物に変わっていき、幻想郷に來た彼女の趣味は「竹林での人助け」という形で集約された。

今では外の世界に放り出されたが、自治体のやっている人を助ける仕事に就けて彼女は嬉しかった。人助け自体は趣味なので、できれば報酬はいらなかったが腹も減るのでそうも言っていられなかった。

だから一仕事「千円」。妹紅はそれ以上取ることはないし、取り忘れることも多々あつ

かった。しかし、河童にはもう一つの依頼があつたのだ。それも博麗の巫女に対する依頼とほとんど同じ内容であつた。

だからこそ、妹紅は寺の石段を登っていた。そう長くないが、空から降り注ぐ陽光が肌にべつとりと汗を浮き上がらせて、ブラウスがひつつく。妹紅は首元を指で広げて、中に風邪を入れるようにしてみるが焼け石に水だろう。

「とつとつとつ」

変な声が上がから聞こえてくる。妹紅が見ると、淡い緑の髪をした「じんべい」を着た少女が寺門から出て、石段を下りてくる。だんだんと近づいて来る少女に妹紅はとりあえず挨拶をした。

「こんにちは」

「……おつすー」

一瞬目をぱちくりさせた少女だが、何故か片手でチョップを作つてさういう。それから言つた。全て考えるよりも前にやっている。しかし、少女のやったことは単なる自己紹介であつた。

「おら。こいし」

「そ、さう」

それだけ言つてこいしは石段を下りていく。何をしに行くのかは妹紅にもわからな

とは言っても外にはにとり傘下の河童の集団が待ち構えているからそれに引き渡すだけでいい。河童集団で暴れまわるのは彼女達にもイメージがよくないので妹紅に頼んだのである。

なぜ連れていくのかは妹紅も知らないが寅丸が「連れて行って」と言うからには仲間内でも公認なのだろう。ただ今朝この寺の尼さんが連行された時に、一網打尽にされなかったのには理由があった。

しかし、妹紅は「尼さん」のことも連れていく二人のことも知らない。それでもものんびりと寅丸の後ろを歩いていく。金髪の女性は本堂ではなく、庭の外れにある土蔵に向かっていく。遠くから麗しい声で念仏が聞こえてくるのはこの寺の住職代理の声かもしれない。

寅丸は言う。

「この土蔵に閉じこめています。まあ、仕方ないので縛っていますから……暴れることはできないでしょう」

「縛るっ？」

「ええ、嘆かわしいことですが無駄な抵抗をしまして……」

寅丸は口を動かしながら、土蔵のドアを開ける。金属の重々しい音が響き薄暗い土蔵の中に光が入ってくる。そこには二人の少女が縛られて重なり合うように寝ころんで

いた。

片方は黒髪でノースリーブのシャツにホットパンツ、片方は頭に丸い耳を持ったくすんだ灰色の髪の少女で黒いワンピースを着ている。

「げっ！」

「も、もうきた」

重なり合っている二人はただそうしているのではなかった。よくよく見ると黒髪を縛っているロープを耳を持った少女がガジガジと噛んでいる。つまり脱走を図っているのだ。そこに気が付いた寅丸は髪を逆立てて怒った。

「こらっ！ 往生際が悪いぞっ。ナズーリン！ 水蜜！ そんなことだから、飲酒の禁を破るんだっ」

そう黒髪は村紗 水蜜、丸い耳を持つているのがナズーリンであった。彼女達も頭髪がぼさぼさで衣服に乱れがあるから、おそらくここに閉じこめたであろう寅丸に反抗したのだろう。そう妹紅は思う。

しかし、縛られた二人は観念した様子も見せず寅丸に食って掛かる。

「ご主人様！ さ、さきっきのをみたでしょう!?! あ、あんなの着るくらいなら死んだ方がましだっ！」とナズーリン。

「そうですよ。あ、あれはあんまりです！」と水蜜。

「問答無用！ あのていど……」

そこで言葉を切つて寅丸はかあと顔を紅くする。それから取り繕うようにコホンと咳払いした。ただし、それを見落とすナズーリンではない。

「ほ、ほらっご主人様だつて恥ずかしいと思つているじゃないか！ あ、あれじゃ見世物だつ」

「う、うるさいですよナズーリン、元はと言えば貴方達が悪いのですからつ」

ぎやーぎやーと喚き合う主従を見て、妹紅は首を傾げた。どうにも要領を得ない。何かを見せられたらしいが、それが何なのかわからないのだ。ちなみに横で芋虫みたいに這いつくばつて水蜜が逃走を凶つているが足も縛つているので遅い

だから妹紅は水蜜には気にせず、寅丸一步近づいて聞こうとした。だが反応したのはネズミであつた。

「来るなああ、河童の手先めえ！」

本気で首を横に振つてずりずりと後ろへお尻で逃げようと這いずるナズーリン。妹紅はさらに謎を深めて、寅丸に聞いた。

「い、いつたい彼女達は何を嫌がつているのかしら……」

「あ、ああ。……実はもう一人不屈きものがいて、そちらを遠くに働きの出したのですが、彼女が河童の下で白状したのです」

「白状？」

「ええ、さつきムービーメールで送られてきました」

「ムービーメール？」

妹紅はおうむ返しに聞く。よくわからないのだ。だから寅丸は手元の「板」を妹紅に見せた。それはよく見ると液晶の画面を張り付けた板で、表面に「リンゴ」のマークがついている。

寅丸がその板についたボタンを押すと、ぱつと画面が光り多くの「アイコン」が現れる。つまりは「板」はタブレット端末だったのだ。金髪の戦神はタッチパネルをポンポンと押して、画面を変えていく。

妹紅はそれに素直に驚いた。

「あなたこんなの使えるのね」

「たいして難しい物ではありません。造作もないことです」

「へえ」

感心したように頷く妹紅だが、床に転がっているネズミがうめくように言葉を発した。

「ち、ちがう。ご主人様が見たCMをすごいすごい言うから……私が使い方覚えて、教えたんだ。買ってきたのも私だっ。使い方教えるのに本当に苦労したんだよ！」

——な、ナズーリン！　今のCM見ましたか？　手で触れると画面が変わるんですよ！

急に過去の自分を思い出して寅丸は無言で下唇を噛む。頬が赤くなり、ふるふると肩が震えるが何も言わない。妹紅も「あつ」と察して苦笑いする。要するに強がって見栄を張ったわけである。

「っ、これです」

寅丸は取り繕った表情を作って妹紅に画面を見せる。そこにはムービーが流れていた——。

そこには美しい女性が海をバックに正座していた。砂浜に直に座っているから、中々に熱いはずだがそれよりも気になるのか彼女は自らの体を抱くように両手で胸を覆っている。もじもじと恥ずかしそうに身をよじる。

太陽に輝く青い髪はウェーブがかかり整った顔立ちと相まって似合っている。それでいてその腕は女性らしく細い。摂生を普段から考えているからか、その体つきもしなやかだ。

なぜそんなことがわかるかというと、彼女は水着を着ている。上下ともに「紫」の妙に艶めかしいもので、トップスは首に引っかけるような紐の形であり、頭の後ろでリボン

のように結んで留めている。ただしその胸元は谷間が見えるように設計されている。白い肌が見えるのが恥ずかしいからこの女性は胸を隠しているのだ。

しかし、その下は正座した腰回りにはくびれができていて、合わせた太腿も剥き出しになっている。腰のあたりで紐を結んで支えるそれは、つまりビキニである。

『ひ、ひじりぎま』

画面の女性が涙目で喋る。赤面した顔が妙に可愛らしい。

『わ、私の思いが至らぬばかりに不届きな真似をしてしまい、も、申し訳ありません。だ、こ、これも修行の一貫として……た、耐えます。でも、い、いんしゅをしたのは私だけではありません。水蜜とナズーリンも一緒にし、しました』

画面に映っているのは雲居 一輪の変わり果てた姿である。謝罪ムービーというべきか懺悔ムービーというべきか、彼女はすさまじく恥ずかしそうにしながら座っている。普段長衣しか着ないからこそ、余計に顔が紅い。

『……だ、だめ。やっぱり恥ずかしいです！ ほ、ほかのことならなんでも、ゆる』

『あれ、おりんこれボタンどれ——』

変な声が混じってから、そこで映像が途切れる。おそらく撮っていた地獄鴉がボタン

を押し間違えたのだろう。しかし、この映像からわかるのは水蜜とナズーリンの末路である。

「うわあ」

同じく肌など見せない妹紅はそう言つて一歩引く。見ていて寅丸も顔が紅い。あんなものを着るくらいなら死んだ方がいいとネズミは言つたが、なるほどと二人は思う。

「た、確かにあれは恥ずかしいわね」

と妹紅は言うが、寅丸も頷きそうになつてあわてて顔を横に振る。それを認めていては話にならないのだ。

「ま、まあ。これも折檻の一部ですから。聖には見せられませんが」

はあとわざとらしく息を吐いて、寅丸は言う。彼女の額に汗が流れているのはあんなものを見るのは初めてだからだろう。自分がそうなればと考えればぞつとする。だが、床に転がっている二人は切実だった。

「ふ、藤原さん、み、みがしてください」

いつの間にか妹紅の足もとに水蜜がまとわりついて憐れみを乞っている。彼女にしてみれば縁側で漫画を読んでいたら卑猥なムービーを見せられて、同じようなことをしろと言われているわけだからたまらない。

一方のナズーリンは流石にプライドが邪魔して、人間に憐れみを恵んでもらう気はな

い。水蜜が許されれば自動的に自分も許されるだろうというネズミらしい姑息なことを考えている。

もちろん妹紅も困ってしまった。

「そ、そうはいわれても……」

「なんとか口添えしてくれるだけでも」

「それはだめですよ」

急に柔らく響く声が、土蔵に混じった。ハツとして全員が入り口を見ると、そこには柔らかく微笑むを浮かべた僧侶が一人、いた。髪の色が頭長が紫で先になるほど熟れた稲穂のような黄金色である。彼女は袈裟を付けている。

むろん、彼女は聖 白蓮である。確かに笑ってはいるものの、彼女の後ろには赤い怒りの炎が見える。だから、水蜜達は口を開けて呆けてしまった。

聖は土蔵に入ってくる。この騒ぎを聞きつけてきたのだろう。

「お話は全て聞かせていただきました……。私の弟子たちがそのような行為を皆で働いているとは嘆かわしい限りです」

南無南無と手を合わせながら言う聖。妙に怖い。誰も声が出ない。

「ですが、これも私の不徳の致すところ……弟子の教導ができないのも私の罪でしょう

……よいしょっと」

「ふあ!？」

つかつかと水蜜に近寄り、聖はその腰を掴んで持ち上げる。やつと声をあげた水蜜だが、見上げると聖の冷たい笑み。そのせいで目が泳いでしまった。

聖は同じように転がっていたナズーリンも片手で担ぎ上げる。

「な、何をするっ」

ナズーリンは他の面々とは違って聖への尊敬は薄い。しかし、怖いのに違いなくすぐに黙ってしまふ。

「ひ、ひじり様。何を!? 何をされているのですか!」

寅丸はハツとして言う。彼女が聖を呼ぶときは、本人に対しては「様」だが他人に言うときは呼び捨てである。それも寅丸と聖の微妙な関係を表しているのだろう。だが、そのような些事を気にすることはない聖は振り返って言う。二人を軽々と担いでいても表情には余裕がある。

「私も一緒に罰を受けます。これも弟子のみちびきができない私の未熟への戒めの為です」

「は!？」

「へ!？」

「あ!？」

寅丸、水蜜、ナズーリンはそれぞれ素つ頓狂な声をあげる。聖はそれにくすりとして、寅丸に逆に聞く。妹紅は妙なことになったと頬を掻いている。

「あなたはどうしますか？」

「えっ……!？」

「あなたは戒律を破つたわけではありません。それに……私が強要できるようなことでもありませんから」

寅丸は聖の言わんとすることはわかる。要するに毘沙門天として崇められている彼女は聖の弟子とはいえ、その言葉に対してある程度の自由権があるということだ。だが、生真面目な彼女はどんと胸を叩いて言った。

「何を言っておられるのですか。聖様がいかれるのなら私も行きますよ、はっはっは」

豪快に笑う寅丸に聖はこくりと頷いて、また軽く念仏を唱える。ちなみに寅丸は一度妹紅を振り返って「私は何を言っているんだ？」と悲壮な表情で聞いてきたが、妹紅はどうしようもなかった。

「じゃあ行きましようか？ お寺は住職様がしばらくおられるようですし……こいしさんやぬえさんも面倒を見てくださるそうです」

「そ、それならば安心ですね」

と「寺の留守番」という退路を断られた寅丸は安心したように頷いた。額には汗が浮

かんでいる。ちらつくのは一輪の姿である。それには気が付いていないのか聖は妹紅に向き直る。

「それでは藤原さん、御足労いただきまして申し訳ないですが……」

「いえ、別に気にしてないわよ……あと、外に河童がいるから」

「ええ、ありがとうございます。さっ行きましょう」

聖は妹紅に丁寧に一礼して、土蔵から出ていく。その手にある二人はわめくことでもできず、逍遙としている。それにその後ろからついていく寅丸は何とも言えない顔をしていた。

「これは……報酬をもらうわけにはいかない、かな」

妹紅は全員の背中を見送って、言う。最初から報酬などどうでもいいが、今日これからどうしようかとは思っている。

7 話

すでにお昼時は過ぎていても、ほぼ中天には太陽があつた。そこから降り注ぐ夏の日差しがアスファルトを焼き、そしてじりじりと空気を焦がすかのようだった。

「あ、あつつい」

霊夢は空を見上げて恨みを込めていった。彼女の両隣にはさとりと慧音がそれぞれ座っている。彼女達もこの暑さに辟易しているのか、肌に汗を浮かべている。

かといって動くわけにはいかない。何故ならばここは駅のプラットフォームである。歩き回っても意味がないし、それに改札口からも外へ出るわけにもいかない。

ここは最寄りの駅というわけではなく、歩いて行けるもつとも遠い距離にある駅に彼女達はいた。目的は河童の指定した海に行くことだが、だからと言って交通費が出るわけでもない。数駅分の電車賃を浮かすための行動だった。

そのようなことをするから、町はずれの駅になる。この駅の改札を出たらすぐにプラットフォームに直行し、電車の到着時間の書かれた掲示板があり。後は何も無い。屋根のような物もないから直射日光が降り注いでいる。ちなみに自動販売機もない。

駅の周りには田圃が広がり、遠くには町並みが見える。東京のような都会では見られ

ない光景だが、基本的に地方都市は少し大通りを外れると住宅地に入るか、そうでなければこのような田園が広がっている。一応ちらほらと民家は見える。

青々とした稲は、まだ秋に向けて風にそよぐ。

陽の光を目いっぱい浴びて、その穂先を実らすほどに頭を日に日に垂れていくのだろう。

霊夢が眼を向けると、田園の中で何をしているのかちらほらと農家の人間が何かをしている。彼女はそれを「まるで幻想郷のようね……」と感じた。慧音も同じような感慨を持ったらしく、彼女も遠くに眼を向けている。

その感情はさとりにはよくわからない。ピンク色のブラウスにスカート。それにサングラスという涼しそうな恰好をした彼女だが、元々は地底に住んでいたこともありこのような光景には久しぶりに出会う。

「……………」

それでもさとりは心からこの風景を楽しんでいた。無慈悲なほど容赦のない日光の間を縫って、田園を吹き抜ける風が頬を撫でる。僅かな涼しさから小さな心地よさを感じ、霊夢と慧音と並んで遠くに広がる蒼穹を見る。そこにある入道雲は見上げるほどだ。

光景と、出会う。それがさとりの心情を表しているのかもしれない。霊夢達にとって

は「再会」かもしれないがさとりには新しい友達のような、そんなもの。

そんな中で——三人は声をあげる。

「あつつい」と霊夢。

「熱い」と慧音。

「ふああ」とさとり。

感傷に耽ろうとも暑い物は暑い。一人口を開けて妙な声を出したさとりは頬を紅くして口を両手で押さえる。口の中にたまった空気を霊夢と慧音の声に合わせて外に出したら、そんな声が出たのだ。

霊夢はさとりをちらと見たが、それ以上は何も言わずに髪をかき上げる。黒髪だからこそ、熱がこもるのだろう。彼女はノースリーブのシャツにハーフジーンズにやはりサングラスという格好だ。

慧音は落ち着いた青のワンピースを着ている。体にぴったりとフィットしたものが、ただ胸元に大きなリボンが付いていてどちらかという可愛らしい。低価でこのような服を買えるのもこの三人の行きつけである。「アイランド・ヴィレッジ」は偉大であろう。ちなみに三人の荷物はそれぞれの足もとにある。

遠くで電車の「音」がする。霊夢が見ると、線路の先から、陽炎に揺らめく電車がこ

ちらに向かつてくる。それはごとごとと重量感のある音を出して、近づいてくるがすぐに彼女達の目の前を通り過ぎていく。ただ、プオオと言う音と少しだけ遅れた風を残してだ。

今通り過ぎたのは「特急」であろうか。そう慧音は思つて、掲示板を見たのが停まりもしない電車の情報など書いてはいない。しかし、次の電車までは10分程度かかることはわかつた。この目玉焼きでも作れそうなアスファルトの上に、もうしばらくいなければならぬ。

そこで慧音は一つため息をついたが、それを見ていたのかさとりが麦茶の入った水筒を差し出す。目ざといというよりは面倒見がいいのだろう。

「……水分はとつておくべきよ」

「あ、すまない。いただく」

水筒からコップを取つて、中の麦茶をいれる。それから喉が渴いていたのか慧音はぐつと飲み干した。喉が動くのは美味しいからだろう。彼女はそれで一息ついて、麦茶で潤つた唇を小さくなめる。

それからすぐに水筒を返す。まだ飲みたいという感情が心にあるから、貴重な麦茶はさとりに戻しておくべきだと思つたのだ。しかし、霊夢がそれを取つて、飲む。遠慮会釈もないがそれが彼女の性格なのだ。

ここにチルノとルーミアはいない。働きに行くというのにつれて行っても電車賃がかかるだけなのでおいてきたのだ。最初は寺に預かってもらおうとさとりが連れて行ったが、生憎のことで聖白蓮はいなかった。どこかに言っていると住職から聞いた。

そして仕方ないので、帰りに会ったチルノ達とよく遊んでいる三月精と吸血鬼の妹が「心当たりがある」とのことだったので、そのままさとりは二人を預けた。無論のことルーミアに慧音用の携帯を持たせているので緊急時でも連絡は取れるようにしている。

携帯をチルノに預けなかったのは、それを失くさないためである。ルーミアは本人も子供の様にふるまっているが、どことなく冷めた部分があり間違えることはしないだろう。

「大丈夫かしら……」

それでもさとりは心配である。三月精と吸血鬼はそれぞれ住処を持っているし、どうしようもなければ知り合いも多くいるらしい。この三月精が花の妖怪と住んでいることはこの前の「文々。新聞」に書かれていた。

——花の妖怪落ちぶれる！ まさかの子育て！

という見出しで少々さとりも驚いたが、こんな状況ならそれもあるだろうと考えた。

むしろ花の妖怪がスーパーで働いているという文面のほうに驚かされた。余談であるが、何者かが新聞を取っていない花の妖怪にも届けたという。犯人はわからない。

そんなことを考えているときよりは遠くから声がかかることに気が付いた。それは霊夢と慧音も同じで彼女達はそろって声の方向を見る。そうしてみると改札口でがつんがつんと大きくて茶色い皮のトランクケースをぶつけながら、必死の思いでそこを抜けた少女が見えた。

青く長い髪の上から麦わら帽子をかぶり、白いブラウスの胸元にはフリルが付いている。それでいてこの炎天下でも雪の様に白い手を霊夢達に向かつて元氣よく振っている。下にはダメージの入ったショートパンツを履いていて、よくよく見るとダメージの一部が星型なのは少しこだわっているのかもしれない。

「おーい！ れいむー」

比那名居天子はそうやって改札から出ると、もう一度大きく手を振った。足もとにはトランクケースがあるが、見た目を重んじたのか「ホイール」がついていない。つまり手で持つていくしかないタイプの物である。

天子の姿を見た霊夢は立ち上がって、叫んだ。多少怒気を含んでいる。

「天子！ おそい」

「い、今からそっちに行くからっ！」

天子は特に悪びれる様子もなく重そうなトランクケースを両手で持つてのろのろと向かってくる。彼女は元々霊夢達のアパートに向かい合流する予定だったが、結局は駅で集合の流れになった。

しかし、彼女は遅刻した。この炎天下で三人が待機しているのはそういう理由である。外に出るとさらに切符代がかかるので、出るに出られなかったのだ。そこで霊夢は一言いつてやろうとさとりと慧音から離れて仁王立ちするのだが、当の天子の足が遅い。

よろけながら天子は向かってくる。明らかに重そうで足もとがふらついている。のろのろと左右にふらつきながら来るから、危ない。そこで霊夢もはあとため息をついて、自分から向かっていく。

「あんた、何してたの」

「えげえ、げえ？ え？ 何が？」

額に汗を浮かべて天子は聞き返してくる。息は切れているから疲れていることがわかりやすい。要するに疲れて聞き取れなかったのだろう。彼女の遅れた理由も案外「荷物重い」という単純なことなのかもしれない。

「……ほら、ちよつと取っ手を片方貸しなさい」

「あ、ありがとう」

靈夢が涎を垂らして寝ている天子を見ながら言う。まだどこにも行っていないのに疲れたのだろう、口をむにやむにやとさせてだらしなく眠る。そんなことだから寝言まで言ってしまった。

「も、もう食べられない……」

「!」

「!」

「!」

三人が一斉に天子を見る。ある意味奇跡を見た顔をしていた。当の天子は変わらず幸せそうである。口元から涎が出ているので、仕方なく靈夢がハンカチで拭いてやる。その姿にまた慧音とさとりが微笑してしまう。どうにも天子には靈夢も甘いらしい。

だが、それに気が付いていた靈夢にじろりと見られては二人もびくりとしてしまう。そこで慧音はコホンと一つ咳払いをして、取り繕う。

「そ、そうだな。これから海に行くわけだが……実際何をするんだろうな。靈夢」

「知らないわよ……河童の考えていることなんて。たしか以前に同じようにどこかに連れていかれた奴は……看板を持って道の真ん中で一日中突っ立たされたらしいけど……」

「そ、それは何の意味があるんだ?」

「それこそ知らないわよ」

霊夢はぶつきらぼうに言い切る。事実その行為に何の意味があるのかわからないのだ。だが一日中立っているだけなのはいつも「ハルデスヨハルデスヨ」などと言っている少女にはきつかっただろうとは思った。

「は、はは」

慧音はちよつとだけ不安になったのか乾いた笑いを浮かべる。一日中この炎天下で立たされたら堪らないと思つたのだ。彼女は窓の外を見ると、市街地を過ぎていくところだった。たまに見覚えのある建物などを見て「あつ」と心中に思つたりもするが、それは手持ち無沙汰だからだろう。

そこは霊夢も同じで彼女は、寝ている天子のほつぺたをぶにぶにと指でつついたりしている。だが、そんなことではこの天人は起きそうにない。だから霊夢は飽きてやめしてしまう。

さとりは一人で文庫本を読み、後ろの席でこいしはお菓子を食べている。

天井をなんとなくさとりが見ると、吊り広告が電車の動きに合わせてゆらゆらしている。その内容は週刊詩の宣伝やまたは「チカン NO!」と可愛い白い髪の少女が怒つたような顔で映っているものだ。その少女は刀を持っているが、要するにチカンは報復するというイメージ広告だろうか。

「そういえば今何時なんだ？」

ふと、慧音は疑問をそのまま口に出した。裏も何もなく純粹に気になったのだろう。別に河童とは時間の約束などしているわけではない。ただ、今日は慧音も携帯を持っていないから時間が気になっても確認する方法がないのだ。腕時計も持っていない。

「……今、三時二十分ね」

霊夢は即座に返した。しかし、彼女は自分の物で時間を確認したわけではない。目の前で寝ている天子の腕に腕時計があったから、それを見て答えただけだ。それでも霊夢はとあることに気が付いた。彼女は天子の手を取って、その腕時計をじろじろと見る。

「こいつ、妙にいい時計持つてるわね」

「……うあ、ふい」

変な寝言を出す天子の腕時計。その銀のメタルブレスレットはともかく、時計の部分には霊夢にはよくわからないが小さなメーターのようなものがごたごたとついている。それによくよく見れば意匠も凝ったつくりをしている。

「どれどれ」

慧音も顔を近づいてみると、どうにもどこことなく気品を感じさせるような作りをしている。霊夢はじめ三人は百円ショップの時計を持っているが、使わないので家にあ

る。それでも百円時計に比べればその違いが一目瞭然だった。

「慧音」

「? どうした」

霊夢の問いかけに慧音は小首をくいと動かしてから目で問う。

「この時計に英語が書いてあるんだけど……なんて読むのかしら?」

「ん、たぶんメーカーの名前だろうな。この頃は英語も勉強しているから読めると思う……えつと、お……め……が……? と書いてあるのかな、たぶんだが、違ったらすまない」

「へえ、造りも凝ってるけど名前もつけたいなもんなのね」

「ああ、おそらく二万、三万くらいはするんじゃないかな。どちらにせよ私たちの物よりは数百倍くらいはするだろうさ」

「……」

いきなり霊夢は天子の頬をつねった。

「いだっ!!? ふ、ふあ。れ、霊夢なにをするのよっ!」

流石に起き上がった天子はさらに両頬を霊夢につねられて抗議するが、まさか自分が寝ている間に腕時計をまじまじと観察されてそのことで霊夢に攻撃されているとは気が付かない。

「……多分大丈夫よ霊夢。あれだけ目立つのだから……少し海辺を探せば見つかるわよ」

「それもそうね。幻想郷の連中は今の人たちに比べればわかりやすいしね」

そう疑問を解消して霊夢は天子を見る。いつの間にか近くにいたが、その眼は多少恨みが籠っている。だから霊夢もはあとため息をついてから片手を出す。取っ手をよこせ。そう無言で伝える。

天子は眼をぱちくりさせてから、ちよつと顔を紅くして、それでいながら何故かドヤ顔をしながら霊夢に取っ手を渡す。嬉しいのだが、それを馬鹿正直に態度に出すのは恥ずかしいのだろう。今更意味がないかもしれないが。

その二人を見ながらさとりはくすりとする。まさかこれから彼女にとっての修羅場が待っているとは思えないのだから仕方ないだろう。

四人は固まって改札を出る。駅を出ると、目の前がロータリーになっていて霊夢達とは違い海水浴に来ただろう人々が行き交っている。その中には水着を着ている者もいる。

海水浴場だからだろう、いろいろなところに幟（のぼり）が立っていて「おいでませ」とかこの海水浴場に来たことへの出迎えが書いてある。

それだけでなく「おいでませ！古明地さとり様ご一行！」と書かれた横断幕もある。
!????
」

思わずさとりは走り出した。今何か信じられないものを見た気がする。

だがロータリーの端で間違はなくさとりの名を使った横断幕が張られてあり、しかもさとりのイラストまで描かれている、彼女の顔が書かれていてその左右にピースサインが書いてある。しかも吹き出しまでついていて「いえーい」と書かれている。

その横断幕の傍に二人の少女が居た。一人は赤い髪をした三つ編みの少女。もう一人は長い黒髪を一つにまとめている。その彼女達は走ってくるさとりに気が付くとはあと笑って手を振っている。

「さとりさまー！」

にっこにこのこの二人にさとりは走っていく。説教。それしか頭がない。周りからは「あの横断幕の人よ、絶対」などと誰かが特定する声が聞こえてくる。あの目立つ横断幕はいつたいつから飾られていたのだろうか。

8 話

夏の太陽が砂浜を熱く焼き焦がす。

白い砂がきらきらとひかり、海へと続く緩やかな坂になっている。見渡すと空の青さと海の蒼さが大きな入道雲を脇に置いて、水平線でまじりあっている。

あたりではきやあきやあと多くの人々が遊んでいる。家族連れもいれば、若いカップルもいる。砂浜には彼らが立てたのであろうビーチパラソルが並んでいた。

ただ、お盆もわずかに過ぎて「ごったがえす」ほどの人はいない。だが、そんなことは関係なく彼女はその浜辺を歩いていった。

ウエーブのかかった青い髪をなびかせ、白い肩が太陽の光で映える。すらりとした体つきをしているが、少しだけ胸は大きい。普段ならそんなことはわからないのだが、今は彼女も「水着」をきている。

トップスはホルターネックという首にひもを掛けて留める形のものだ。もちろん背中でも留まっている。

胸元は大きく開いていて左右の胸当ては「紐」でつながっている。下のパンツは多少布の面積が少ないのか彼女は時折端を摘まんで直している。これもサイドが紐でつな

がつており、リボンが付いている。

彼女こそ雲居一輪。数日前に仏教における禁酒を破り、この地獄に落とされた少女である。彼女は小さなサンダルを履いて。もじもじ歩いているが、別に遊んでいるわけではない。その肩からクーラーボックスを掛けてこういつているのだ。

「つ、冷たい飲み物はいりませんかー！ 空いた容器は後で回収しますー！」

要するに一輪は「売子」をやっていた。河童に押し付けられたのだからそれがそれなりに売れている。つまりはそれなりに大勢からその姿を見られている。彼女の眼は涙でうるうるとしていて、顔が紅いので若い男性には毒かもしれない。

一輪が何かを言うたびに誰かが彼女を振り返るので、彼女はびくつと反応してから心の中で念仏を唱える。緊張と羞恥を紛らわすためにやっているのだが、まさかこんな可愛らしい売子が「観自在菩薩行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空……」などと唱えているとは誰も思わないであろう。

「な、なんでこ、このような恥辱を」

なんでもなにも自分がやったことの罰なのだが、流石に一輪はぼやく。いつもは尻らしく法衣を着込んでるので二の腕すらも人には見せない。だからこそ恥ずかしさが倍増している。

「お姉さん。コケコーラあります？」

「あつはい」

ただ根が真面目なので海水浴の客に呼び止められるとニコリと笑つて返す。いや、正確に言うならば顔が引きつっているのでニコリかもしれない。ともかく一輪は呼び止めてきた若い男性に飲み物を渡すと会計をする。

ただおつりを渡すときに間違えてはいけないので彼女は自分の掌に小銭を載せて「ひー、ふー、み」とたどたどしく数えてから渡す。大人っぽい恰好で子供のようなしぐさをするのでその若い男は困つた。何がと言えば野暮であろう。

一輪からすると貨幣経済の発達していない幻想郷の癖がでていだけである。それはそれで初々しいとでもいえるのだろうか。ともかく一輪はしっかりとおつりを確認して男に手渡す。彼女はそれからまた笑顔を作つてお礼を言う。

だいたいこんな形で雲居一輪は精力的に仕事に励んでいた。先に書いた通り根は真面目なのである。禁酒を破つたのはある意味では彼女の欠点というか愛らしさというか、ともかく諧謔的ですらある。

彼女としてはひっそりと仕事をして、ひっそりと帰りたいのだが皮肉なことにその容姿と恰好が災いしてこの浜辺の有名な人になっている。余談だが、この浜辺に来ている中で「電車」で来た者は「ピンク頭のなんとらさとり」も知っている。駅の前で昼過ぎく

いだけなのだろうか二人の正座している場所は道の隅でしかも木陰になっている。

「何かいうことはあるかしら、お燐。お空？」

「……にや。にやあ」

「……す、すみませんでした」

お燐と言われたのは猫顔の少女だ。名前を火焰猫燐と言う。長い名前の上に読みにくいので本人も周囲には「お燐」と呼ぶようにただしている。彼女が口を開いた時に尖った牙がちよつとだけ見える。ただ、それは八重歯のような物だろう。彼女は何故か鳴いた。

そして以外にも素直に謝っているのは霊鳥路空という。彼女こそお空である。長身だがどことなく幼い顔つきの姿からはあまり想像しにくいだが、意外にも言葉遣いは丁寧らしい。ある意味さとのりの教育の賜物なのかもしれない。

「お燐？」

だからさとりはお燐をじろつと見た。赤い髪の少女はびくつとして、さらに肩をうなだらせて「ご、ごめんなさい」と謝る。幻想郷では怨霊渦巻く旧地獄にいた化け猫もさとりには敵わないらしい。当たり前かもしれない。

しつかりと反省したような態度を見せる二匹にさとりはふうと息を吐いた。もはや

何を言っても詮無きことであろう。実はお燐とお空が目配せし合っているとは流石に気が付いていない。

そんなさとりの肩をぼんと叩いたものがある。さとりが見ると、慧音が居た。

「まあ、もういいんじゃないか？ この子達も反省しているようだ」

「……そうね。でも」

さとりがあたりを見回す。遠くでは霊夢と天子がベンチで何かを喋っている。いや、天子が霊夢に絶えず話しかけている。霊夢もいつも通りめんどくさげにしながら返答している。だがそんなことよりはさとりは、もつと気になるものがあつた。

霊夢達の近くの電柱に横断幕と同じくさとりの似顔絵の書かれたポスターが書かれている。「おいでませー！ さとり様」と描かれているのだ。その下には簡易な地図が書かれていて「さとり様ご一行」がどこに行けばいいのか一目瞭然である。

元々霊夢達が電車で来るとは確定していなかったたので、海にどこから来てもわかるような配慮であろう。お燐とお空も常にここにいたわけではないのだ。其の為に案内板としての役割を果たすのが「横断幕」と「ポスター」である。

「あれ、何枚張つたのかしら」

冷たい目でさとりがお燐を見る。お燐も「にや!？」と怯えて、おずおずと胸の前で手のひらを広げる。要するに5本指を立てたのだ。

「5枚？ お燐」

「(い、い)じゅうまこ」

「……」

さあと顔色を青くしたさとりがこめかみを抑える。といことは至る所に「さとり様」が浸透しているであろう。ただのポスターなら目立たないが、ピンク頭の少女は目立つ。これには慧音も乾いた笑いをするしかなかった。

ちなみにポスターは一枚原本を作って、コンビニでコピーしたのであろう。ある意味文明の利器を使いこなしている。河童もそれを黙認しているあたり、面白がっているのかもしれない。

「剥がしてきなさい。二人とも……早く」

「は、はい！」

同時に答えたお空とお燐は立ち上がって走り去っていく。さとりはその後ろ姿を見ながら、死んだ魚のような眼をしている。怒っても仕方ないが、ポスターがいろいろな場所にあることも恥ずかしい。彼女はアイドルではないのである。

「あ、あまい物でも食べるか？ さとり。きよ、今日は私が奢ってやろう」

「そうね……。お言葉に甘えさせてもらおうかしら」

少し誇らしげな慧音の言葉に古明地こいしもうんうんと頷く。甘い物は大好きであ

る。彼女は顎に手をあてて、何を食べようかと思ひ浮かべながらさとりに聞く。

「ところでお姉ちゃん。なんで今日は海に来たの?」

「……ああ、それはねこいしつ?!?」

さとりは驚いて飛びあがった。いきなりあらわれた妹に面食らったのだ。慧音も同様に驚いている。当のこいしは不思議そうな顔で、小首を傾げる。愛らしい仕草だが、何故か服装は甚平に下駄。いつもつけている丸帽子はかぶっている。

「ど、どうして……」

「? 同じ電車に乗ってきたじゃない。お姉ちゃんの後ろにいたよ」

さも当然のような顔でこいしはいう。そんなことに気が付かなかつたさとりは考え込むが、やはりわからない。居た気すらもしない。慧音に目配せしてみるが、彼女も首を横に振る。知らないのだろう。

しかしそんなことにこいしは構いはしない。いきなり彼女はばあつと花の咲くように笑顔になり困惑するさとりの腕を引く。その眼がきらきらと期待に光っている。

「それで、お姉ちゃん。なにか食べにいくんでしょ! はやくいこうよっ」

「え、ええ」

困惑していたさとりだが、実の妹には甘い顔を見せる。どうにも妹には弱いらしい。その間に慧音は霊夢と天子を呼ぶ。彼女達はのそのそと立ち上がって、重たい荷物を二

ぬカツパ・パワーを使ってこの浜辺にある海の家やその他、人手が必要なところに低賃金で働き手を派遣しているのだ。儲けも少なくなるだろうと考えるかもしれないがそもそも、河童達は共同体なので一人、二人で儲けるより全体の利益が多ければ裕福になるのだ。

その点でいえば企業というよりは江戸時代などの「商家」に近い。

それでも八月上旬の繁忙期にはとりもそれなりに忙しかったのだが、最近は注文も少なくなっている。だから一部の河童を町に戻して、反対に借金の形に連れてきた幻想郷の少女達を派遣している。

そんなにとりの目の前には一人の女性がいた。穏やかな笑みを浮かべていて、その表情を見れば「安心」してしまいそうな不思議な魅力を持っている。頭のとっぺんが紫色だが、緩やかなウェーブのかかった長髪は先に行くほどに鮮やかな小麦色になっている。

ほのかに甘い匂いがするのは、彼女の香りだろう。

聖 白蓮。それが彼女の名前である。寺で住職代理をしている彼女だが、弟子への監督不行き届きを嘆きこの海にやってきたのだ。にとりも彼女が他の弟子を連れてきて来た時には驚いたが、人手がふえることには賛成なので気にしなかった。

聖はニコニコしているが、その姿は何時もの恰好ではない。海に来ているのだから、当たり前のように水着をきている

肩から紐で吊った黒のトップスが彼女の胸をささえている。ただ胸元はちよつとだけ開いているので「谷間」が見える。そこに小さな黒子がひとつ。ただ、そんなものを気にするものなどここにはいない。そして胸元にはリボン。

下にはビキニの上からスカート状のスイムウェアを着ている。しかしスカートは少々透けていて中がうつすらと見える。お腹から腰に掛けてはくびれがくつきりとしている。要するに無駄な物が付いていない。

にとりはその彼女に聞いた。

「それで、今あなたの仲間に働いてもらっているわけだけどさつ。本当に給料はいらないの?」

「ええ。これも修行の一貫です。……それに施しを受けるのは仏様のお教えにあります。が、金銭で受け取るわけにはいきません」

にとりは「やрий」と小さくつぶやく。人件費が浮くことほど嬉しいことはない。聖は別に借金しているわけなので元々給料自体は払う必要があるのだ。それをいらないという聖はどこかの巫女とは違って話になる。「あれ」はお金を徴収する顧客として連れてくるよりも、仲間になりたいとにとりは思う。ずけずけ物を言う性格は使いよう

によつては巨万の富を生むだろう。

(ま、こつちで富を稼いでも意味なんてないんだけどね)

にとりは心中でつぶやく。ただ聖には伝えない。その意味を聞かれたら困るからである。彼女はそれからまた、聖に向き直つて言う。

「うーん。ま。いろいろと役所的にめんどくさい縛りがあるからさ。多少給料は払うよ。別にものでも払つてもいいけど……そんなじゃ、一応身元の書類がいるから」

にとりは手を出し言う。

「保険証だして」

聖は頷いて。近くにあつたポーチを引き寄せて。仲から財布を取り出す。そこから出したのは一輪を覗いた四枚の保険証である。表面には国民健康保険証と書かれてい

——聖 白蓮

——村紗 水蜜

——寅丸 星

——長宗我部 ナズーリン

この四人分の保険証をとりは受け取つた。それをじつと見ているが真贋をはかつてい

本物だということは彼女にはわかつている。

「んじや。あとでコピーしてから返すよ。……」

「ええ。お願いしますね……それじゃあ、私は何をすればいいのかしら」

「そうだね、お仕事をしてもらうのだけだ。料理は……肉を使うから駄目だね。それじゃあ、あー。あのムラサとかは客引きに出しているしね。……うーん。あつそだ」

にとりにはやりと笑って聖を見る。逆にこの聖女は不思議そうにとりを見返してくる。何をするのかわからないといった顔だ。彼女は聡明で、人を疑わないというほどに愚鈍ではないがそれでも表情は涼やかだった。

にとりはその聖と仲間達、それに今からやつて来るであろう巫女たちの人数を換算してとあることを思いついた。多少儲けることができるだろう。だから彼女はにやりと笑った。

「ただ働いてもらうよりも面白いことをしよう。それじゃあ。まずは……」

にとりは「けけ」と笑う。聖は多少その笑みに邪悪な物を感じたが、もしも河童が邪なことを考えているのであれば多少手荒なことになる、と考えていた。

外からは「おいしーおいしーとうもろこしだよー、あつ一輪お帰り」と村紗の声が聞こえてくる。少し間をあけて「な、なんでここに」と一輪の声もした。

9 話

海の家の店先で村紗水蜜はご機嫌でトウモロコシを売っていた。彼女の前には机の上に載ったコンロの上に載った銀紙の上に載ったトウモロコシがある。それは黄色の表面に黒い「焦げ」がついて、いい匂いをさせている。

水蜜はばたばたとそれを団扇で煽きながら「トウモロコシいりませんか」と道行く人に宣伝している。やる気があるかと言われれば微妙だが、そんなに嫌な作業ではない。

なぜなら、彼女に支給された水着は水蜜の眼からすれば常識的な物だったからだ。

水蜜は黒を基調として、胸元に白のラインの入ったワンピース型の水着を着ていた。最初は妙に布の面積が少ない一輪のような水着を着せられるかとびくびくしていたが、にとりは水蜜にこれを支給した。

それでも何百年も地底にいて、しかも海など存在しない幻想郷にいた彼女は「肌を見せる」ようなことはほとんどない。それこそ風呂にでも入るくらいでしか服など脱がないのだ。だから、体をすっぽりと覆う水着にすら抵抗はあった。

だが、海に来てみれば水蜜とそう見た目的な容姿（無論、彼女の方がはるかに年上）

の変わらない少女達が海辺で遊んでいる。水蜜もそれを見て、多少考えを変えた。少なくとも聖　白蓮や雲居一輪の着ている物よりは遙かにましであると。

水着を着た水蜜はしなやかな体つきにくつきり浮き出る水着で伸びを試してみた。動きやすくそんなに着心地は悪くない。多少体が締め付けられる気はするが、まあそれは仕方ないと思った。

ただ、更衣室でお尻のあたりの布を指で伸ばしながら、彼女はあることを気にする。ワンピース型と言っても背中が大きく開いている。そこから白い肌を見えているのに水蜜は多少恥ずかしさを覚えた。だから彼女はにとりに言った。場所はにとりと聖のいる海の家であった。

「あ、あの壁にパーカーがあるみたいですが……着ていいですか？」

「……え？　あ、いいよ」

思いのほかにとりは簡単に許可した。それにも多少驚いたが、水蜜はともかく水着の上から白いパーカー着込んでよいことになった。これでかなり恥ずかしさは緩和された。強いて言うなら健康的な太腿はどうしようもない。一応サンダルも履いている。

それで水蜜は気が楽になった。少なくとも一輪のような破廉恥な格好をしなくてもよくなったのである。あれだけは絶対に嫌だと思っていたから、彼女は飲酒の罰として与えられた仕事も嫌な顔一つせず行った。それが冒頭のトウモロコシ焼きである。

しかし、眞実とは時に残酷な物である。

聖 白蓮たちが海辺に着いたのは霊夢達よりも多少早い。なぜなら河童の用意したタクシーで来たのだから、荷造りして天子を待つてとしていた霊夢達よりも早くなるのは自明だった。

「何で、増えてんの？」

海に着いた一行を出迎えた河城にとりの第一声はそれだった。元々は飲酒をした水蜜とナズーリンの二人を連行する予定だったが、聖と寅丸 星もついてきた。別に人手が多くなる分にはにとりには全く異論などなかったが彼女の頭の中では冷静な「区分」が行われた。

——聖、一輪、星

——水蜜、ナズーリン

どこで区分したのかはにとりには言わなかったが、前者には多少色気のある水着を支給して、後者にはてきとうな水着を与えた。てきとうとはサイズを探して一番最初に見つけた物だ。だから水蜜がパーカーを着たいというなら着せた。働けば文句などない。それ以外にとりは彼女に期待していない。

寺にいる忘れ傘や「鶴」が居れば水蜜の位置も多少は変わったかもしれないが、今回の彼女は下の方なのだ。実際相手が悪い。



そうして何も知らないキャプテンこと村紗水蜜は上機嫌なのだ。真実は知らない方がいいのかもしれない。

「トウモロコシいりませんかー。飲み物もありますー」

トングで網の上にあるトウモロコシを転がしながら水蜜は客引きをする。暑い中でトウモロコシなど売れるのかとも思っていたが、結構男性客に売れる。水蜜は不思議に思いつつも客の一部を店内に誘導する。テーブル席に連れていくのも仕事の一つなのである。

ちよつと癖のある黒髪を片手で払って、水蜜は汗をパーカーで拭く。肌には玉の汗が浮かんでいる。着こんでいるから首ともから胸元まで湿っている。もう脱いでもいいかもしれないと思えるほど状況には慣れた。

海の家では河童達が働いている。彼女達は普通に水着を着て、上からエプロンをつけているが、それは恥ずかしいからではもちろんない。料理を作っているからだ。

「……………」

水蜜はそれを見て多少羨ましいと思った。涼しそうである。彼女は水着の胸のあたりの布を指で伸ばして、中に風を入れようとすが焼け石に水ならぬ焼け村紗に風である、意味などほとんどない。

彼女の師である聖はそもそも水着の上にはなにも着ていない。先ほどから海の家の中でにとりと何かを話しこんでいるが、それでも拭きぬけの建物内である。水蜜にも時折その涼しげな顔が見えた。

「脱ぎますか」

水蜜はパーカーを脱ごうとした。暑いのだ。しかし、ぴたりとその手を止める。

遠くから青い髪的女性が歩いてきている。紫の水着を着ていてとても恥ずかしそうに、もじもじと向かってくる。雲居 一輪である。彼女の姿を見た水蜜は「あれを着なくてよかった」と心中深く安堵しつつ、パーカーを脱ぐのもやめた。

一輪はそのまま帰ってくるかと思つたが、飲み物を求めている海水浴客に止められて立ち止まった。彼女の方にかかったクーラーボックスには飲み物が入っているのだ。大きさとしてはそう大きくはないから飲み物が切れるたびに補充しているのだろう。サイクルとしては一時間に一度帰ってくるにとりは水蜜達に言っていた。それが今なのだろう。

水蜜はトウモロコシを焼きつつ、一輪が帰ってきた時に言った。

「おいしーおいしーとうもろこしだよー、あつ一輪お帰り」

「な、なんで(ハハ)に」

一輪はぎよつとしていた。ある意味では当たり前前かもしれないだろう。しかし、理由

自体は明確である。そもそも飲酒をしたのは「一輪、水蜜、ナズーリン」なのである。だから罰して一輪が海に来たであらば他の二人も送られてきたもなんら不思議はない。

聡明な一輪もそれはそう考えたのだろう。水蜜がここにいる理由についてはそれ以上聞かず別のことを言い出した。

「水蜜。何を着ているのですか？」

「えっ？　水着ですけど……？」

どこかおかしいのかと水蜜は自分の体を見る。特におかしいところはない。ただ一輪はクーラーボックスを地面に置いて、近寄ってくる。そしてガツとパーカーを掴んだ。

「これ、はなんですか？」

「パーカーですよ」

あつと水蜜もわかった。破廉恥な格好をしている一輪にしてみれば、妙に露出の少ない恰好の水蜜に納得がいかないのだろう。だからパーカーを掴まれたのだ。そして水蜜も白々しく「パーカーですよ」などとご飯にかけるアレのように返答したのだ。要するに一輪の気持ちを察したが汲んでやる気はさらさらない。

「へ、へえ。これ暑いでしょう？　飲酒をした事が聖様にばれたからここに来たとおも

うのですが……熱中症になったらいけないわ」

「ご、ご心配なく。水分はしっかりとつていきますから」

にこやかにパーカーを引つ張る一輪。にこやかにパーカーを奪われまいとする水蜜。ぐぐぐとひつぱり合っているので白いパーカーが伸びてきている。

「……いい、いいえ。それでも水蜜だけが……いや、水蜜が暑いのは心苦しいですから」

「い、いや。大丈夫です。ちよ、離してください」

「いいから」

「よくありませんから」

「ずるいですよね？」

「ずるくないですよ？」

段々と本気でパーカーを引き合う二人。貌はにこやかだが、二人の後ろから黒い何かが出てくるような錯覚を覚えさせるほど黒い笑顔である。傍からみれば美少女が二人で戯れているようにみるが、実際は陰湿な暗闘である。

「ええい！ 脱げ！」

「嫌ですっ！」

ついにしびれを切らした一輪が本性を現す。元々人間でしかも女性なのに妖怪退治をしていた剛毅な彼女である。言葉遣いも荒々しくなっている。彼女は躍起になって水蜜のパーカーを脱がしにかかった。

と太陽の照り付けるアスファルトの道が見えるが、中は冷房が効いていて涼しい。

客もそれなりに入っているらしい。さとり達はとりあえず空いている席に座った。さとり、こいし、慧音、霊夢、天子という大人数なのでテーブルの周りを囲む形になった。

「さあ、なんでも好きな物を頼むといい」

すぐくうれしそうに言う慧音に甘えた一行はそれぞれが好きな物を注文する。元々はみようなことで傷ついたさとりを慰める為に慧音が「甘いもの」を求めてきたので、ほとんど全員がデザートを頼んだ。

だから、注文して店員が持つてくるまではそこまで時間はかからなかった。

天子はクリームソーダに載っていたチェリーを啜えてもぐもぐと口の中で動かす。それから器用に中身のない皮を舌にのせて言う。

「ほら霊夢、すぐいでしょ」

「はいはい」

霊夢は適当に返しつつ、手元には天子と同じ物を持っている。クリームソーダとは緑色の飲み物で最初は霊夢も警戒したが、飲んでみると中々に美味しい。それに上に浮いたバニラアイスも冷たくて甘い。

炭酸には現代に來たすぐに飲んで「くわっ!？」と奇怪な声を出しておどろいたことの

ある霊夢だが、今では慣れた。さとりもその時に一緒に飲んで膝をつけて悶えていた。喉が焼けるような感触には面食らったのだろう。

そのさとりは、先ほど店員が食べ物を持ってきた時に「ご注文は以上でしょうか、さとりさま」となぜか名前を呼ばれたので頭を抱えていた。どこまで広がっているのだろう。彼女の前にはあん蜜が置いてある。その横ではこいしがしやりしやりとブルーハワイ味のかき氷を幸せそうに食べている。

「どうしたのお姉ちゃん？」

「なんでもないわ……それよりもこいし、あんまり急いで食べないようにね」
「うん」

と言いながらこいしは器に山盛りになったかき氷をしゃくしゃくとスプーンで食べていく。中には練乳が入っているらしく、それを食べた時こいしの眼がきらつと光つてとろけるような笑顔になる。そしてスプーンを持ったまま両手を胸の前で組んで「んー」と可愛らしい仕草で眼をつむる。

しかしこいしには一つだけ疑問があった。

「お姉ちゃん」

「なに？ こいし」

「ブルーハワイ味って、なに？」

「……………えっと」

さとりはこいしの前にある真つ青なかき氷を見る。そこからヒントを得ようとしたのがだ、さらにわからなくなる。青い食べ物とは何だろう。

「わ、わからないわ」

「そうなの？ お姉ちゃんでもわからないなんて……。すごい」

うんうんとこいしは妙なことで感心する。彼女にとっては美味しいからこれが何だとしてもどうでもいいのだ。

そんなさとりとこいし、それに天子と霊夢を見ながら慧音はにやにやとしている。自分のお金で人に奢ることがここまで気分の良いことだとは思わなかった。数か月ぶりかもしれないのだ。

そんな慧音は霊夢に話しかける。

「なあ、霊夢。河城さんのところに急がなくていいのか？」

「あ？ いいんじゃない、仕事自体は明日からでいいって言われたんだし」

「ああ、そうだ……。言われてたな。あれ、じゃあなんで今日来たんだ」

「決まってるじゃない。仕事の給料なんて『時給』なんだから一日でも早く働いた方がさっさと終わらせて帰れるでしょ？」

「な、なるほど」

そんなもんかと慧音はうなづく。彼女は自分ではデザートは頼まずにコーヒーを飲んでいゝる。それはいつも十六夜 咲夜の働く店で一杯のコーヒーで粘りに粘るといふ日課からくる悲しき習性である。本人すらもその習性にとらわれているのに気が付いていない。

そんな慧音をじつとこいしが見る。彼女は慧音とはほとんど面識がない。顔を見たことはあるのだが、親しく話したことはない。だがさとり達と親しくしているのだから、悪い人には見えない。

こいしは慧音と仲良くなりたくなつた。思つたら行動は速い。

「はい、あーん」

「えつ？ あつ、え？」

こいしはスプーンに山盛りにしたかき氷を慧音に突き出した。それで口を開けるように要求する。慧音は何でいきなり「あーん」などと言われているのかわからずに戸惑う。しかしこいしの言っていることの意味は分かるので思わず口を開けた。

「むぎっ」

慧音の開いた口にスプーンが突つ込まれる。こいしは手首を返して容赦なく喉のあたりにかき氷を落とす。それから素早く引き抜いた。慧音は眼を見開いて、胸を叩くが辛うじてかき氷は零さなかつた。

「美味しい?」

「あ、ああ。ありがとう」

小首を傾げてこいしは聞いてくる。慧音はこくりと頷いてお礼を言う。だが一部始終をみていたさとりは慧音を気遣う。

「だ、大丈夫。慧音」

「い、いや大丈夫だ。えっと、こいしさんだったかな? 今日は何で私たちについてきたんだ?」

「見かけたから」

「……」

妹は大丈夫かという顔で慧音はさとりを見る。さとりもこめかみに手をやって顔をしかめる。流石にさとりは姉として注意しなければならぬと思った。行動が軽すぎる。ある意味ではそれも魅力なのだろうが、姉としては心配なのだ。

「いーし」

「お姉ちゃん!」

「な、なに?」

「前からお姉ちゃんとしたかったことがあるの。お姉ちゃんとしてできないことなの!」

「私しか……？ いったい何がしたいの？」

「もしかしたら幻想郷での力を取り戻せるかもしれないわ！」

「!!」

さとりは眼を見開く。霊夢と慧音も驚いている。

「すみませーん。かき氷くださーい」

だが天子は全然関係ないことを店員に要求している。すでに彼女のクリームソーダは空になっているのだ。それでもこいしをのぞいた三人は天子には何も言わない。霊夢のクリームソーダのアイスを天子が食べたが、それでも巫女は反応しなかった。後で、減っていることに気が付いて怒ることにはなる。

「こ、こいし。幻想郷でのちからをと、取り戻せるって」

「お姉ちゃんとならできると思うの。同じくらいの背丈で、同じくらいの力の二人じゃないとできないことなのよ。ごてんととらんくすもそうだったわ」

「ご……えつ？ 二人ですることなの？」

「ええ。そう。それをすると大したことのない戦士でもすごい戦士に早変わりするのよ」

「せ……んじゅ？」

妙な単語にさとりは首をかしげる。だが、こいしの眼は本気である。

「お姉ちゃん！ 私と試してみてもほしいのっ」

「……こいし」

「お姉ちゃんにしか……頼めないのよ」

うるつとこいしはきらきら光る眼でさとりを見る。その姿に姉としてさとりはくらつとした。妹が必死に頼んでいるのだ。それをむげにはできないだろう。それにこれが成功すれば幻想郷での力が戻るかもしれないというのだ。何をするのかは知らないがこれに答えてあげようと心優しいさとりは思った。

「わかつたわこいし。私ができることなら、やりましょう」

「ありがとうおねえちゃん！ 大好き」

こいしはがぼつとさとりに抱き付いて頬ずりする。頬をすりあわせて、二人のもちつとしたほつぺたが合わさる。だが、慧音たちの手前さとりは恥ずかしくなった。天子は新しく来たかき氷をイツキ食いたらしく頭痛でのたうち回っている。

「こ、こらこいし。は、離れなさい」

「えへへ」

さとりはこいしを離して、こほんと咳をする。それから聞いた。

「それでこいし。今から何をやるの？」

「それはね。外でやらないとここじや狭いわっ」

こいしは自信に満ち溢れた顔で立ち上がる。そしてふふーと鼻を鳴らして、笑顔のままさとりに言う。

「お姉ちゃんとならきつとできるわ！ フュージョンがつ!!」
さとりはこの後、地獄を見ることとなる。

10話 閑話

神社とは日本文化の象徴的ともいえる施設である。古い物になると、日本最古の歴史書である古事記や日本書紀、いわゆる記紀にも記述されているものもある。少なくともほとんどの神社は江戸時代には成立していると考えれば如何に日本人と共にあったかということがわかるだろう。

幻想郷にも神社はあった。明確に「神」を奉るための場所かという少々違うが、そこには巫女の少女が住んでおり、異変があるやそれを治めることを生業としている。ただ、自分が何の神を祭っているのかを知らないという奇妙な巫女ではあった。

とある日に幻想郷に外の世界から新たな神様が二柱やってきた。彼女達は自らの神社をお山の頂上につくり、巫女を一人連れていた。こちらは多少外の世界の巫女らしく、主人である神に対してどちらかと言うと忠実であった。

だがその神様達も二人も巫女も今度の異変に巻き込まれ、幻想郷の外へと放り出されたしまった。もちろん外の世界にも神社はあるが前者の巫女は工場での単純労働に就職し、後者の巫女は本屋で働いている。つまり専門の巫女の二人は外では一般人になったのだ。

萃香は左右に住宅のある往来をのんびりとした顔で行く。たまに開く口には八重歯が光る。一応で言えば「牙」なのであろうが、それには恐ろしさよりも彼女の愛らしさを引き立たせている。

無論本人にはどうでもいいことだ。彼女はちよつと目を細めて、遠くを見た。何かを見つけたらしい。

「おお、あつたあつた」

酒を飲んでも酔った様子のない萃香は言う。道の先には住宅が連なっているがその一角にひよつこり大きな木が見える。楠木だった。その周囲に大小の木々が連なつて、小さな森の様になつてゐる。

萃香はちよつとだけ速く歩いていく。急いでいるのではない、単に涼みたいのだ。鬼でも暑いものは暑い。彼女はひようたんにかけて紐を肩にかけて足を速める。

遠くからは木々しか見えなかつたが、そこには大きな鳥居があつた。要するに神社の入り口なのだ。立派な朱塗りのそれを見て萃香は感心したように言う。見上げた鳥居の額にもこの神社の名前が金泥で書いてある。

「はあーやつぱり外の世界は豪勢だね。霊夢のところよりも大きいや」

そうひとりごちて萃香は中に入つていく。鳥居の手前から石畳の道がすうと参拝客

を導くように伸びている。少し先に本殿が見える。

石畳の道の左右は土の剥き出しになっているが、綺麗に掃き清められている。そして柵で区切られた場所には大木があり、しめ縄が付けられている。

大木はいつからあるのか、しわを刻んだそれにはとところどころ穴が空いてるがすつと天まで伸びた巨体には青々と葉を茂らせている。萃香は顎をあげて、それを見上げる。先ほど彼女が遠くから見た木もこの大木だろう。

「おおきいねえ」

と感心したように言いながら彼女は歩く。それでも立ち止まることはしない。彼女には目的があるのだ。

そう、今日来たのは別にお参りしに来たわけではない。ここにいる者に声を掛けに来たのだ。実は先ほど博麗 霊夢の家に行ってみたが誰もいなかった。萃香は少々退屈していたこともある。海に言った彼女達と入れ違いになったのだろう。

そっちの巫女には会えなかったが、今日は別の巫女に会いに来たのだ。

萃香があたりを見回すと、近くでさっさと何かを掃くような音がした。見ると巫女装束の二人組が落ち葉を箒で掃いている。萃香はそれを見て、にんまり笑う。ちよつといたずらを考えた子供のようだった。

「いたいた。おーい」

幻想郷の者、いや物が他にいるとは思わなかったからさっ

ゆるしてくれよとカラカラ笑う萃香。その横に先ほどの二人の少女もいた。

彼女達は本堂の横にある、神社関係者の事務所の縁側に腰掛けていた。萃香は胡坐を描いているが、二つ結びの少女、九十九 弁々はため息をついた。

「いきなり鬼が訪ねてくるからなにかと思つたわ、ねえ八橋？」

「そうね、姉さん」

もう一人の少女は九十九 八橋と言う。先ほど自己紹介したときに萃香から「饅頭みたいな名前だね」と言われたので、軽く萃香を睨んでいる。無論気づかれたら怖いので、すぐに目をそらす。

ちなみにこの似ていない姉妹は血のつながりなどはない。少々特異な姉妹ではある。それは萃香がわざわざ言い直したように、彼女達は「物」だったのだ。自我を持った道具、つまり彼女達は付喪神である。付喪神になった時にたまたま近くにいたから姉妹を名乗っているのだ。

弁々は膨れ面の八橋を少しだけ見て、萃香に聞く。

「それで？ 今日は何の用なのかしら」

「用？ あんたらに用はないよっあつ、いやどうせなら、言つておいても損はないか」

ふむと考え込んで萃香は言う。

「来月くらいに町内会で運動会をするんだよ。それで参加者を増やしているから、あんたらも参加してくれないかな？」

弁々と八橋は顔を見合わせた。頭上には「？」マークがつきそうなほどきよんとしている。そして八橋が萃香に聞いてみた。

「うんどうかい。つてなに？」

「ああ、そうだね。幻想郷じゃ、やったことはない……まあ、弾幕ごっこがその代わりみたいなもんかな。みんなで勝負するんだよ。いろんなことで」

「はあ？　なんでそんなことを……でもちよつとおもしろそうかな……」

「だろう！　だからわたしが方々を駆けずり回って参加者を募っているんだよ。……どうせならにぎやかな方がいいからね」

ニコニコと話す萃香について八橋もつられてうんうんと頷いてしまう。彼女が自我を持ったのはつい最近だからなのか、少し子供っぽい。

「こほん」

そこに弁々は一つわざとらしい咳をした。それに八橋は気が付いて、姉を見る。

「どうしたのお姉ちゃん」

「……あんだ。勝手に巫女のバイトを休んだらどうなるのかわかっているの」

「はっ！」

から見えないが日陰になっていゝ場所だ。

そこに「頭」が地面から生えていた。その「頭」の横には「私はサボりました」と書かれた木の札が立てかけられている。

頭は黒髪と白髪の入り混じり、前髪の一部は赤いというちぐはぐな髪型をしている少女だった。肩まで伸びた髪、と言いたくても肩までしつかりと地面の中に埋められているからよくわからない。そんな状態でも眼は爛々としていて、紅く光っている。頭には二本の小さな角もあり、彼女が人間ではないことを物語っている。

その少女の名は鬼人 正邪。かつて幻想郷で純粋な反乱を起こした少女であり、最後の逃走劇を演じた少々有名なアマノジャクである。正確にいえばそのなれの果てなのかもしれない。

「くう……なんてこった。あのじいさん、本当に埋めやがった……」

正邪は身動きが一切取れない。土の中に埋められると本当に指一本動かすことができなないのだ。動くのはただ頭と舌だけだ。

「あのおいばれ……ここから出たら覚えてろ。逆に埋めてやるからな」

おそらく雇い主への言葉だろう。彼女は明らかに罰を受けているが、そこに反省しているような様子は全くない。只々復讐の言葉と悪態をついている。それでこそアマノジャクなのだろうか。

以前は参道に箒を使って「砂をまいた」時には木から吊るされたこともある。正邪はあの時近所の子供に笑われたことを思い出して、唇を噛んだ。その時も復讐しようとしたら雇い主に逆に刀を持って追い回された。

ある日にはお茶に「雑巾の搾り汁」を入れて雇い主に出したら、毒見させられそうになつたのでコップごと投げつけたら「すさまじい辱め」を受けた。九十九姉妹にも笑われたのは屈辱である。

「人間の分際で……くそ。絶対に……ん？」

正邪はふと、誰かがこちらにやってくることに気が付いた。三人組で二人は巫女装束を着ているから九十九姉妹だろう。しかし、背の低い角の生えた少女を見て彼女は戦慄した。

「伊吹 萃香……。な。なんでここに」

以前正邪は萃香にも追い回されたことがある。なんとか逃げ切ったが、鬼の力の一端をかいま見た気がしたほどの強敵であった。少なくとも積極的に会いたい人物ではない。それでも今の彼女には何一つ移動手段がない。

「ほら、あそこに埋まっているでしょ？」

二つ結びを揺らして、弁々が正邪を指さす。それに萃香は「おー埋まっている埋まつて

いる」と変な声を出す。正邪は顔を少しだけ紅くして、恥ずかしがるが口には絶対出さずことはない。

「ぶふー」

そんな正邪の様子を見て、いきなり二人の後ろを歩いていた八橋が噴出した。彼女は正邪を見た瞬間に堪え切れなくなったのだ。先ほどまでの態度は笑いを堪えていたのだろう。

「あ、はははははは、ひい、ひい。あははははは！　だ、だめあれ、な、なんどみても。

あ、頭が地面から生えてっ」

「だ、駄目よ。あんた。あ、あんまりわらったら、ぶ、く」

弁々も耐えきれなくなったらしくコロコロと笑う。二人はしゃがみこんで腹を抑えている。萃香はむしろその二人の様子にくすりとして、つかつかと正邪に歩み寄る。身長の高い彼女でも今の正邪は見下ろせる。

「久しぶりだね、天邪鬼」

「……………なんの用だ」

正邪は萃香を睨み付けている。ただこめかみに筋ができていたので、どこかの姉妹に怒っているのかもしれない。どちらにせよ萃香は正邪に言うことがある。彼女はどつかと地面に胡坐をかいて口を開く。後ろでは「ゼーゼー」という苦しい声が聞こえる。

笑いすぎるとなる呼吸である。

「いや、運動会に参加してもらいたくて来たんだ」

「運動会？ やなこった」

「まあ、そういわないでくれよ」

べつと舌を出して正邪は拒否する。人の言うことでも、鬼の言うことでも従う気など彼女にはない。萃香は苦笑して、続ける。だがその前にくいつとひょうたんの酒をあおる。口を潤しているといえれば少々聞こえがいいかもしれない。

萃香は少し小さな声で言う。

「今度の異変の犯人……。それが来るかもね」

「！」

「あんたも因縁があるんじゃないかな？ こっぴどくやられたらしいじゃないか」

正邪は眼をそらす。しかし、言う。

「なんの話か分からないな」

「へえ」

くつくつと萃香は笑う。

「まあ、私も本当に全て知っているわけじゃないけどね。そのうちの一人だけを知っているだけさ……。それでもやられつぱなしじゃ不意なんじゃないのかい？ 多人数で

やられたんだろう、卑怯だね。よつてたかつては好きじゃないなあ」

「……………ふん」

正邪は色のいい返事をしない。萃香もそれに多少呆れてしまいが、意固地なのは別段嫌いな性格ではない。嘘は嫌いだからアマノジャクとは合わないが、それでも今日は「切り札」があつた。

萃香は正邪に言う。

「お前は……………おしりぺんぺんされたそうだね？ 人間から」

「な、ま！ な、なんでそれを」

正邪は急に真つ赤になつた。そう、彼女は雑巾の汚水入りのお茶を雇い主にぶん投げた罰で、緋袴の上からお尻を叩かれたのだ。子供のようになり、それも九十九姉妹の前で。永いこと生きてきた上で最も屈辱的な出来事である。

「天狗から聞いたんだよ。アレは私にはけっこう正直になつてくれるからねえ」

ちらりと萃香は後ろで笑いすぎて涙の出ている九十九姉妹を見て、言う。

「誰かがばらしたんじゃないのかな」

萃香は九十九姉妹のことは知らなかつたが、今日きてみて正邪の秘密をリークするのは彼女達しかないだろうと思つた。しかし、誰が天狗に言つたのかはどうでもいい。「まつ。いずれは新聞にされて拡散されるとおもうけど……………止めてやつてもいいよ。運

弁々と八橋はお互いに顔を見合わせた。そしてにんまりと笑い合う。それに少し寒気を覚えながらも萃香は言う。

「それじゃあ。また来月。……天邪鬼も気が変わったらきておくれよ」

と言い置いて、萃香は踵を返した。その時に弁々がポケットからマジック・ペンを出して、にやにやと正邪に近づいていくのが見えたが、無視した。

萃香が境内を出ていくときに中から「どつらえもーんのおひげー」などと歌う麗しい声が聞こえてきたが、彼女は振り返らなかつた。悲鳴とかが聞こえないのは、我慢しているのだろう。

11話

寅丸 星はこそこそとしていた。まるでネズミの様に物陰に隠れて、人に見られないように動いている。ところどころに黒髪の混じった癖のある金色の髪の毛のせいであれなりに目立ってはいるが、そんなことは気にすることができないほどに追い詰められている。

浜辺から少し離れた場所には松の林になっていて、そこに僅かながら草むらがある。その草むらからあたりを窺う彼女の眼がぎらぎらと光っている。まるで猛獣の用であるが、実際の彼女はそのような危ない存在ではない。一応毘沙門天の代理であるのだが、現在の力はそう強くはない。

「ご主人様」

遠くからの声にびくつと寅丸が震える。見るとそこには、ネズミ耳の少女が立っていた。バイザーを付けたくすんだ灰色の髪、深みのある紅い眼。背は低い、そして手には「浮き輪ありますー」という幟を持っている。要するに宣伝しているのだろう。

そして当たり前のようにパーカーとハーフパンツを着ている。何故か水着を着ていない。

「すごく怪しいのですが」

「ひ、卑怯ですよナズーリン。なんであなただけ服を着ているのですか!」

「……………」

ナズーリンはそれには答えない。一応河童に水着を支給されたが、そんなものをおとなしく守る彼女ではない。河童の海の家で見つけた服をこそそそと着込んでいるのだ。そもそもナズーリンはこう思っている。

(この下に着ているじゃないか。こんな水着着て出歩くんなんて正気の沙汰じゃない)

ナズーリンは服の下に着ている。それを隠すために上にパーカーやパンツをつけたのだ。彼女はちよつと顔を紅くして、はあとわざとらしく息を吐く。彼女は毘沙門天の「従者」なのだが、寅丸に対しての敬意もどことなく業務的である。他の者に使わない敬語を使うくらいには尊重している。

ちなみにナズーリンの着ている水着は「正気の沙汰」として考えられるものではない。だからこそ卑怯と言われようともナズーリンは着込んでいる。

しかし、そんな心証を知らない寅丸はあたりを窺いながら草むらから出てきた。眼がちよつと潤んでいるがどうにも強がっているのか、表情自体は凜々しい。先ほどまでこそそそやっていたので、全然威厳はない。

「……………す、少し取り乱してしまいました」

取り繕うように言う寅丸だが、彼女は草むらから出るとすぐにおどおどし始める。強がりも張りぼてのようなものだった。それも当たり前なのかもしれない。

白い水着だった。ビキニのそれはスタンダードなものである。

トップスのストラップ（この場合、紐）は肩を通って、胸当てを支えている。胸元が広がっている、というよりは多少ストラップがきついのか「締め付けている」ようになり、俗に言えば寄せている。胸の真ん中にはリボンがある。

下にはパンツを履いているがそれは見えない。なぜならダブルフリルのついた白のミニスカートを上から穿いているからだ。寅丸はそのスカートの裾を手で押し下げたりして必死に肌を隠しているがあまり意味はない。

少女のような水着だが、寅丸には似合っていた。普段から摂生しているからだろう、美しい雪のような肌としなやかな体つきに合い。それでいて胸が寄せられているから、元々よりも強調されている。

「けっ」

ナズーリンは「ご主人」の見えないところでそう吐き捨てるように言う。なぜそうしたのかは彼女自身にもわからない。どうにもむしゃくしゃする。

当の寅丸にはそれに気が付く余裕など存在しない。下にスカートがあるので、一輪や水蜜のようにいちいち布を直す必要はない。それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。

普段着ている物は一輪と負けず劣らずの厚着である。しかも今まで生きてきて、人にも妖怪にも肌を見せることなどなかった。

寅丸はそのスカートを抑えていない手にはタブレッドを持っている。このような状況でも手放さないのであれば、かなり気に入っているのだろう。伊達に徹夜で操作方法を覚えたわけではない。「3G」とナズーリンから聞いた時には頭に「三人の御爺さん」を思い浮かべたアナログな彼女である。ただ今だ「W i | F i」の仕組みがわかってない。

ネットはつながるもの。そう寅丸は思っているから、どこへでもタブレッドを持っていく。

黒いカバーをしているが海には入らないよう、ナズーリンは教えている。

「こ、こほん。それでは仕事に戻りましょうか、ナズーリン」

「そうですね。さつきみたいに逃げられるとこまるので」

毒をわずかに含んだいいかたをネズミはする。そう、なぜ草むらに寅丸は隠れていたのかと言うと海水浴客に「話しかけられた」のでいたたまれなくなって逃走したのだ。肌をじろじろ見られては恥ずかしいのは当たり前である。

「わ、わかつていますよ。あれは……考えがあつたのです」

寅丸の言い訳になんの考えがあつたのか、とナズーリンはため息をつく。だが口には

しない、彼女は寅丸を「毘沙門天」として立てているのだ。ちなみに「仕事」とは海の家で貸し出している用具のレンタルの案内だった。だからナズーリンは幟を持っていく。

最初の内は真つ赤な顔をして堂々と歩く寅丸の後ろから、すまし顔のナズーリンが幟を立てて浜辺を練り歩いた。まるで武士が従者と歩くようだが、すぐに寅丸の方がぼろをだした。女性に話しかけられるといいのだが、男性に話しかけられるとどもるのだ。だからほとんどナズーリンが案内した。

つまり仕事をする上でナズーリン的は寅丸が居ようといまいとどうでもいいのだ。しかし、そこはネズミである。一人でいると今度は彼女がそわそわする。人間に囲まれた状況は実は「小心」のナズーリンにはストレスだったのだ。だからこそ寅丸が必要であつた。

「それじゃあ行きましようか、ご主人様」

「え、ええ。いやもうちよつと」

「……」

ふと、ナズーリンは考える。もうちよつとと寅丸がいうのだから、少しサボつてもかまわないだろう。彼女は命令されたほうであり、責任は寅丸にある。元々はネズミ一匹と他二人の飲酒によってこの状況になったのだが、ナズーリンは心の中でほくそ笑み、

サボることに決めた。

「そうですね。それじゃあ、もうちよつとゆつくりしましょう」

「……そ、それじゃあ。5分だけ」

寅丸は妙に真面目なことを言う。ナズーリンは「10分でも30分でもいいですよ」と誘導してみるが寅丸は「そうはいきません……」とにべもない。心中で「チツ」と舌うちしたネズミだが、自分からサボる提案はしない。それをすれば自分の責任になるからだ。

ナズーリンは仕方ないといった風情で腰を下ろす。草むらに座つてもハーフパンツなので気にならない。逆に寅丸は膝を抱えた姿である。お尻を付けるとひんやりして嫌なのだ。ねこ科は寒さが嫌いである。

お互いに話すことなどない。時間の流れもない。ナズーリンにはそれを気にする気など微塵もないし、寅丸は腕時計ではなく「シユツシユ」を手首に付けている。ただタブレットがあるので寅丸はそれを起動させる。

普段はネットをする寅丸だが、彼女の知っているサイトなど「ウィーキ・ペ・デーア」くらいである。よく上杉謙信とかを検索している。ただ、彼女には別にお気に入り機能があつた。

「ナズーリン。こちらをむいてください」

「えっ。ああ」

何かわかったようにナズーリンは寅丸から「顔を背ける」。何をされるのかわかっているのだ。

「それではいけません。撮れないではないですか」

「私は……あまり好きじゃないんですけど」

「これも記念です」

よくわからないことを言う寅丸だが、その瞳はちよつと期待したように輝いている。水着を着ると年齢が下がるのかとナズーリンは思うのだが、少し思うところもあり寅丸の方をむいてにこつと笑う。そして顔の傍でピースサインをする。

それに驚く寅丸だが、すぐにタブレットをナズーリンに向けてボタンを押す。カシヤとまるでカメラのシャッター音のようなものが出る、事実タブレットには写真の機能がある。それこそが寅丸のお気に入りの機能だった。

タブレットに映るのは草むらの中でお尻について、ピースサインをするナズーリン。可愛らしい容姿に後ろの方には海がちよつとだけ映っていて寅丸は気に入った。それをフォルダに保存して、電源を切ろうとする。

「ご主人様もとつてあげますよ」

「エ？」

古明地こいしの言う「幻想郷での力を取り戻せる方法」を実践するつもりだった。「いい。お姉ちゃん!」

青々とした海辺をバックにこいしは両手を腰にあてる。それを慧音と霊夢とさとりは見ている。何故か天子はこいし側において、彼女は数歩離れたところでこいしを見ている。協力を頼まれたのだが、何をするのか聞いてはいなかった。

「今からフュージョンの説明をするわ」

「ふゅーじょん……?」

天子ははて、と首をかしげる。どこかで聞いたことのあるような名前である。しかし、思い出せないのでやめた。こいしからは「私の真似をして」としか言われてない。

だが、さとりはこいしに聞いた。

「こいし……。フュージョン……とはなんのことなの? さつきお店もいってたけど……」

「メタモル星人がゴクウに教えた技よ。これを使えば二人の戦士が合体できるの!」

「め、めたもるせいじん?? ごくう?? がったい?」

さとりは慧音と霊夢に眼で問うが、二人は首を横に振る。訳が分からないのは同じなのだろう。しかし、やると言った手前さとりはこいしの意思を尊重しようと思った。正確にいうと後戻りできる最後の地点を通り過ぎてしまった。天子は不幸にも空飛びポ

ケモンジェットを見ている。ジェット機が空気を切り裂く音でこいしの言葉を聞いていない。

さとりはこいしに続けてと言ってしまふ。こいしも頷く。彼女は足を開いて両手を水平に横に向ける。天子もそれを見ながら真似をする、頭の隅に引つかかってこれが何なのか思い出せない。

「違うつてば、逆よ」

「えっ？ 逆？」

天子は意味が分からなかったが腕をこいしとは逆の方向に向ける。これでさとりから見れば二人は左右対称になっている。ここからが本当の地獄だった。

「いい？ お姉ちゃん。よく見ててね」

「ええ、わかったわ……」

こいしはゆっくりと動く、しかしその動き方が奇怪だった。両手を反時計まわりに動かしながらだばだばと蟹歩きしながら天子に近づく。口では「ふゆー」と謎の掛け声をしている。天子はここでこれが「何か」を思い出した、あわててやめようと思ったがこいしに言われる。

「早くっ！」

「あつ、え」

勢いに押された天子はこいしとは逆に両手を時計回りに動かしながらこいしに近づいていく。恥ずかしいことこの上ない。二人は一メートル程度離れたところで停止する。お互いに両手を最初に構えていた場所とは逆になっている。

そしてこいしは言う。いきおいよく両手をまた外に向けて、腰をひねり、片足を上げる。

「ジョン！」

その瞬間こいしと天子の息があつた。天子もこれが「何か」を知っているのでタイミングが合ったのだ。まさか自分がやることになるとは漫画を読んでいる時には思わなかった。今にも泣きそうである。

美しい左右対称。天子とこいしはかがみ合わせのように反対のポーズを取っている。

「お姉ちゃん、この時に腕の角度に気を付けてね」

注意をさとりはもう聞いていない。こいしは続ける。ラストである。

「はっ!!」

上げた片足を外側にピンと伸ばして、一指し指をそれぞれ伸ばした両手が円を描いていた。天子も同じポーズをとるから、二人の指と指がぴつたりと合う。こいしはそのポーズのまま最後の言葉を言う。

「ここに指と足を伸ばさないと駄目よ、お姉ちゃん！」

「……………」

以上が合体技フュージョンである。こいしはやり遂げた顔をして姿勢をなおす。天子は両手で顔を覆い、地面にしゃがみこんだ。こんな浜辺でやったのだから、いつの間にかこちらを見ているものが大勢いる。天人にも羞恥心はある。

何よりも衝撃を受けたのは古明地さとりだった。途中から口をぽかーんと開けて、珍妙なダンスを見ていたのだ。一種の現実逃避であった。じわじわと今からあれを自分がやるのかと思うと、ダツシユで逃げたい。

霊夢と慧音もさすがに言葉もない。彼女達も口を開けて驚いている。チルノが居れば興奮して「あたいもやるっ」と言いそうだが、悪いことにいない。居るのは古明地さとりである。

「お姉ちゃん。わかった?」

さとりはわかった。こいしの言葉をよく吟味せずに安請け合いた自分の愚かしさを。もちろんこいしはそんなことを言っているのではない。単に「フュージョン」しようと言っているのだ。

ざざつと砂を蹴りながらこいしが近づいてくる。さとりは恐怖した。妙に妹が怖い。思わず後ろに下がってしまう。しかし、こいしには悪気は一切ない、純粋な瞳でさとり

を見ている。だが、少々興奮している。

「私とお姉ちゃんがこれで合体すれば、強い戦士になれるわ。こいしンクスに!!」

さとりとこいしがフュージョンした姿「こいしンクス」。究極のパワーが手に入るような気がこいしにはする。いや、もしかしたら幻想郷での力も凌ぐことができるかもしれない。

「こいし。い、今のを、私が、やるの?」

さとりの声が震えている。こいしはその声に彼女が不安に思っていると確信して、言った。不安は取り除いてあげようという彼女の優しさである。

「大丈夫よ。合体できるのは三十分くらいだから。ポタラじゃないわ」

「ぼ、ぼたら?」

謎の単語が湯水のごとくこいしの口からでてくる。さとりはいつの間にか涙が目元にたまっていった。衆人環視の中で妙なダンスをさせられる、それは天子にすら耐えることができなかったのだ。それに心底怯えた。

古明地こいしは恐ろしい。

河童にも屈しなかった霊夢。それに天真爛漫な天子。旧地獄の管理者さとり。その錚々たる面子を気で圧倒している。皆が炎天下で凍ったように動かない中、彼女はさとりを差し伸べる。

「さ、おねえちゃん。やろ?」

天使の様に笑う少女。えくぼをみせた屈託のない笑顔。それこそがこいしの魅力なのかもしれない、彼女には悪意がない。さとりはその笑顔で観念した。唇を噛んで、その手を取り、振り向かずに言う。

「霊夢。慧音……その、あの。ちよつとどこかに行つててくれないかしら……お願い……」

「え、ええ」と霊夢。

「がんばって」と慧音。

霊夢達は恥ずかしさで悶える天子に声を掛けて、荷物を持って歩いていく。向かう先は河童の海の家である。さつきポスターを見たので目的地は大体わかるのだ。今頃猫と鳥が回収しているのだろうか、役には立った。

——ふゆー

しばらく三人が歩いていると、後ろから妙な声が聞こえた。「あれ、さとり様じゃない?」とかポスターで彼女を知ったのだろう聞いたことのない誰かの声も聞こえるが霊夢は、振り返らない。見上げた空は蒼かった。きつと古明地さとりはこの空を忘れられな

いだろう。

お姉ちゃんは大変である。

1 2 話

物事には必ず原因がある。古明地さとりがこの世の地獄を見てしまったことにも、もちろん原因があつたのだ。

「とうもろこしいりませんかー」

その原因たる少女、村紗　水蜜はとうもろこしの載つた紙の皿を片手に客引きをしていた。先ほど主人から怒られたが仕事もあるので短く切り上げてもらえた。そのまま主人と恥ずかしい恰好をした同僚は飲み物を売りに行つたのだ。

水蜜は本当にあんな水着を着なくてよかつたと思う。同僚こと雲居　一輪の姿を思い浮かべるたびにそう思つていた。彼女はパーカーの裾で額の汗を拭いて、道行く人に声掛けをする。

それでも彼女は水着などというものを着たのは初めてだった。少なくとも数百年間は地底に封印されていたのだから、彼女の活動していた時代に水着などという物はなかった。甲冑を着たまま泳ぐものはいたが、それは別の話である。

(あついで)

水蜜は網でとうもろこしを焼きながら売っているのとても暑い。一応のこと海の

家の軒先で商売しているので本当に気分が悪くなれば、中に入ることはできるだろう。彼女は一度とうもろこしを傍らに置いて、手で顔を煽ぐ。

汗がべとついて気持ちが悪わるい。目の前で海岸では大勢の人間が海に入って遊んでいることが羨ましいと感じた。しかし、これをサボればまた怒られるだろう。水蜜は気を取り直して客引きを続けようとした。

その前に遠くから歩いてくる三人組が眼に入った。その中の二人はよく知らないが、もう一人は「弾幕ごっこ」をしたことがある。それに主人である聖 白蓮とも多少因縁のある相手である。近づいてきた三人も水蜜に気が付いたようで、彼女を見ている。

「おや……博麗の巫女さんじゃないですか？ 何であなたもここに？」

「誰よあんた」

博麗の巫女こと霊夢は訝しげな眼で水蜜に向けて聞いた。水蜜は一瞬固まってしまったが、今の自分の姿を思い出した。水着だからわからないのだろうと思ったのだ。

「ほ、ほら。命蓮寺の。キャプテン村紗です。前に会ったではないですか？」

「ああ、聖の所のたしか船が勝手に動くからなんもしてない……やつだったわね」

「……ひ、ひどい覚えられ方だなあ」

水蜜はたはたと頭を掻く。それから彼女は残りの二人に眼を向ける。慧音も水蜜の視線に気が付いて軽く会釈している。もう一人の少女比那名居 天子は水蜜の手元の

とうもろこしを見ている。何も言わない。眼が少し本気である。

天子と霊夢は荷物を浜辺におろす。それを待つて水蜜は声をかける。

「そちらは？ 霊夢さん」

と水蜜が霊夢に聞いたが、慧音が一步前に出て挨拶する。自分で自己紹介しようとしているのだろう。慧音が動くとその青白い髪が太陽にきらきらと光る。水蜜はちよつとうらやましい。

「あまり会えたことはなかつたな。あなたのこと見たことはあるよ。私の名前は上白沢

慧音。……なんというか霊夢の同居人だ」

ペコーりと頭を下げる慧音。

「どうも。私は村紗 水蜜です。一応キャプテンをやっています」

「キャ……プ……テン？」

「ま、まあ。今は船がありませんけど」

「ああ。確か以前宝船が飛んでいるとかで……騒ぎがあつたな。アレの降りたところがお寺になつて……そうか、その命蓮寺ね」

「そうです。そうです。あの船を操縦していたのは私でした」

微妙に誇張して水蜜は胸を張る。ちよつと得意気だが霊夢は胡散臭げにしても何も言わない。なので水蜜は続けた。

「それで、上白沢さん」

「慧音でいいわよ」

「それでは慧音さん。あなたはお仕事は何をされている方なのですか？」

「さて、天子の方も紹介しておかないとな」

「えっ？ いや、あのご職業は……」

慧音は天子の肩を掴んでずいとお前に出した。「おっ？」と驚いた声を出す天子だったが、流石に水蜜に挨拶する。慧音がいきなり話を切り上げたことに水蜜は戸惑ったが、天子が挨拶して来たのでそれ以上聞けなかった。

「こんにちはともろこしさん。私は比那名居 天子よ。あつ話は聞いていたからあなたの名前はいいわ」

「そ、そうですか？ どちらかと言うと説明しておいた方がいいと思うですが……」

「？ 大丈夫よ。というよりも前に宗教がどうのつて霊夢達がなんかよくわからないけど喧嘩していた時があつたじゃない？ その時にあなたのことを見たことがあるわ」

天子はくりつとした目で水蜜を見ながら、小首を傾げる。何故名前を聞いたのにもう一度聞かねばならないのかと顔に書いてある。なので水蜜はそれ以上追及はできなかった。しかし彼女は一つだけ疑問がある。なので水蜜はそれ以上追及はできなかった。しかし彼女は一つだけ疑問がある。

「あれ？ 霊夢さん。さとりさんはいないのでですか？」

「さとりのは知ってるの? ……今は妹と遊んでいるわ」

「そりゃあ私は地底に封印されていましたから多少は。いや、それよりもこいしさんのお姉さんですから、あまり話したことはないですけどよく寺に来られますし、それに」と不意に水蜜は目線を海の家の中にやる。そこには一枚のポスターが貼ってあった。あのさとりポスターである。店の入り口に「おいでませ! さとり様ご一行様」とポスターがお出迎えしてくれている。

つまり店に入る全員にさとりがピースしてお出迎えしてくれるのだ。

「あんなの見てたら、今日来られるということはわかりますよ。誰と一緒に来られるかは知りませんでしたけど」

「……剥がしといてあげなさいよ」

霊夢ははあとため息をつく。慧音は無言でポスターに寄ると丁寧に剥がして折りたたんだ。破り捨てるようなことは彼女はしない。折りたたんだそれをポケットに入れて、後でお隣かお空に返そうと思っていた。

「あはは、なんだか頑張って貼っていたので剥がしにくくて……それにおもしろ……いや、あれがあるとわかりやすいかなーと思ひまして」

霊夢がうさん臭そうな眼を水蜜に向ける。やはりこの少女を信用できないと思ひ直して、ふと遠くから歩いてくる「ピンク」頭に眼が言った。両手で顔を隠しているのは

何故だろう。彼女はよろよろと海の家歩いてくる。近くにこいしはいない。

無論のこと彼女はさとりである。近づいてわかったが、さとりの耳まで赤い。霊夢と慧音、それにいつの間にかとうもろこしを食べている天子は近づいてきたさとりを痛ましげに見る。

ふらふらと霊夢達に近づいてくるさとりの背景に霊夢は闇が見えた。はつとして目をこすると普通に蒼い空が彼女の後ろに広がっている。気のせいかと安堵しつつ、海の家の前に来たさとりに声をかけた。

「だ、大丈夫なの？ さとり。妹は？」

「れいむ……あの子は途中であったお隣についていったわ」

顔を隠したままさとりは言う。絞り出すような声は地の底からか響くかのようだった。

「私は……二度とフュージョンはしないわ」

「そ、そうね」

どれほど辛い思いをしたのかはわからないが霊夢は頷いた。少なくとも天子とこいしが模範演武をしていたので、さとりがどんな恥ずかしい目にあっただけはわかる。あれを自分がやれと言われれば逃走しているだろう。

天子は自分の姿を思い出したらしく渋い顔している。ただ、水蜜はなぜさとりが恥ず

店の名前はブック・オンという。古い漫画本を中心に売るその店は、店内は広く明るい。音楽が緩やかに流れており、古臭いようなイメージは全くしない。それでいて店内にはびっしりと本の詰まった棚が配置されている。それも整然とだ、まるで図書館の様である。

以前吸血鬼の妹が本を売り払われそうになったときにこの店の名前が出てきた。つまりは気軽に入りやすいということでもある。

もう一つその店には特徴がある。店員が明るいのである。これは個人個人の適性というよりは社員教育的にそうなっているのだろう。

霊夢達の住むとある街にもその店があった。そしてそこには一人のキャプテンがアルバイトしていたのだ。

「いらっしやませー」

やる気があるのかなのか、水蜜は売る本に値札を付けながら声を出す。ポロシャツと黒のパンツ（ズボン）の上から前掛けをしている。彼女はカウンターに立って本に「値札」を付けている。ラベラーという専用の道具を使っている姿は様になっている。本人は嬉しくとも何ともないだろう。

店内には客はまばらである。水蜜が働いているのは昼過ぎから夕方にかけてであり。平日には一番客が少ない時間帯であったのだ。もちろん意図的にその時間を彼女は選

んでいる。夜は寝たいし、朝も寝たい。

彼女は本に値札を付けると、本棚に持っていき詰める。

「世の中、本がいっぱいだなあ」

などと言いながら、一冊一冊本棚に並べている。ほとんどが漫画である。なので、ここ数か月で水蜜は幻想郷の少女の中でかなり漫画に詳しいほうになっていた。彼女は基本的に活字本は読まない。

漫画はいろいろある。死神がいろいろな物と戦う話やラーメンの具のような名前の忍者が主人公の話。それにたまに少年漫画なのに、少し艶めかしい漫画を水蜜が読んでしまった時には赤くなって「わっ!？」と漫画を投げてしまったこともある、まさに事件というかトラブルだった。

水蜜は漫画をアルバイトの帰りに一冊二冊買って帰ることが日課になった。一冊200円程度であるから50冊買っても一万円である。彼女はそれを寺の縁側で寝そべって読むことが一日の楽しみになっていた。

「おーい」と歴史上の人物を呼んでいるような間抜けな題名の漫画にはまり。次には金だが銀だかの漫画に興奮し、「私を殺して」などというよくわからない漫画を知らず知らずに全巻集めてしまった。別に面白くなかったのに不思議であった。

次第に一日に買ってくる漫画の量が増大した。水蜜はそれでも自分のお小遣いのみ

でそれを買っていたので、誰も咎める者はその時点ではいなかったのだ。しかも彼女は手当たり次第に買ってくるので彼女の読みものが縁側の端っこに積みあがっていったのだ。

皇国を守る男の話や大きく振りかぶって野球する話。それに「笛」とかいふサッカー漫画。このごろ放映されたドラマに影響されて鬼の手を持つ男の漫画も買ったが、水蜜は幽霊の癖に怖くなった。それでも全部読んだ。

一番読むのに困ったのはドラゴンボールとかいふ漫画だった。買うことは難しくないが縁側に置いておくと「消える」のである。まるで誰かが持って行っているようであつた。

このころから古明地 こいしの挙動が何故かわわつてきた。重たい服やターバンを自作して着たりするようになっていた。三時のおやつが消える事件が寺に起こつた時には「魔」と書かれたメモが置いてあつたりした。

朝起きてはごろんごろんと日差しの当たる縁側で転がる水蜜。それが当たり前の光景になつている。しかもお昼までにはいるので、お昼ご飯を作るのは彼女の役目になつていたから立場が強くなつていく。まだ誰も片付けろとは言わなかつた。

そして本が積みあがっていく。たまに大きな傘を持ったクリーニング屋や、いつも笑顔の山彦も水蜜と一緒にごろごろして読んだ。別に水蜜は呼んでいない。これはあく

まで自分の趣味なのである。

水蜜の蔵書は増大し続けた。殆ど漫画で、たまにそうでない物もあるが単に間違えて買っただけである。彼女はさらに軽音学というものを漫画で知り、学園生活に多少憧れ。有名な北斗だかなんだかの漫画を買ってもみたが、買う時に最後の「いちご味」に気が付かずにそういう話だと理解してしまったりした。

たまに漫画に影響されて、アルバイトが終わった夕方に、縁側で起き上がった水蜜は遠くの夕日と地平を眺めながら言う。手に持っているのは三国志の話である。ぼろぼろで一冊100円だったのをまとめ買いたしたのだから、普通に面白かった。

「あの夕日の境はどこなんでしょうね」

誰も聞いていないのでは恥ずかしくはない。見ているのはこいしだけだった。

さらに蔵書は増えていく。縁側に積まれた本のタワーが並び、まるで書生が勉強しているようであるが、水蜜が読んでいるのは漫画である。もはや、この時には水蜜のテリトリーと称していた。

そこで怒ったのが寅丸である。流石に縁側に並べられた本の山に辟易したのだろう。一応は整然と積まれているが、邪魔である。

「水蜜っ！ 少し片付けなさいっ」

お母さんみたいないなことを言いだした毘沙門天に水蜜は困惑しつつ、頭を悩ませた。片

付けろと言われても場所がないのである。彼女は寺の座敷に寝ているが自分の部屋はない。だからといって本を処分する気もないし売る気もない。また読むかもしれないのだ。

そこで提案したのがナズーリンだった。

「寺の庭の端に小屋があるじゃないか。そこに全部移して、自分の部屋にすればいい」なるほどと思つた水蜜は聖の許可を得て、そのようにした。小屋と言つても「納屋」と言つた方がいいような場所である。狭い室内にはものが詰まっていたが、殆どを捨てた。だが漫画をそのまま置くのは汚いので水蜜は中を全て掃除した。

奇妙なことにナズーリンも協力した。それに雲居 一輪も縁側が広がるのならと積極的に参加した。聖も参加しようとしたが全員でとめた。

納屋が片付くと意外にきれいであった。水蜜達はそこにリサイクルショップから買つてきた椅子を用意して、ビニールシートを敷いてそこに本を並べた。水蜜ハウスのできあがりである。

水蜜と一輪、それにナズーリンにこいしは四人で喜んだ。古明地こいしがどのタイミングで混じつたのかは他の三人は気が付かなかつたがどうでもいいことだった。ちなみにナズーリンの提案でこの納屋には鍵がかかるようにしている。防犯の為だった。

もちろんネズミが協力するのには裏があつた。水蜜ハウスで彼女も水蜜と一輪に漫

画を読むようになった。こいしもドラゴンボールを何度も繰り返し返して読むようになっていた。この家に近づくのはこの三人と掃除をして愛着がわいたのか、たまに見に来るようになった一輪のみだった。

とある日のことである。水蜜は椅子に座って「一繋ぎの財宝」と書かれている漫画を読んでいる。ペらペらと不愛想に読むのも彼女の日課であるが、集中しているだけでもしろいとも感じているのだ。

ナズーリンは床に直に座りあたりを窺い。一輪は漫画を「左から右に」読んで頭に「？」を出している。こいしはドラゴンボールをいつものように読んでいます。すでに服装は甚平であり、たまに変なことを口走るようになっています。

ネズミはにやりと笑った。今日ならいけると。しかしこいしだけが問題なのである。だから彼女はこいしに話しかけた。

「ねえ、君」

「何？」

こいしが振り向きよんとした大きな瞳がきらりと光る。

「いや、いつもその漫画をよんでいるようだけど。最近では妖怪ウォッチだとかポケモンだとかが人気なんじゃないかな？ ほらこれだよ」

とナズーリンは本の中から「ポケモン」の漫画を取り出して立ち上がり、こいしに見

せた。表紙には黄色のネズミである。電気を出すことくらいはこいしも知っていた。

この純粋な少女はぱちくりとまばたきして、その漫画を見る。そして言った。

「よわそうー！」

にこつと笑って辛辣なことを言う。彼女の持っている漫画は「星」を消し去る力を持つキャラクターが大勢出てくる。規格外の力を持った者たちのお話であるのに、それに比べられる方がかわいそうだろう。

しかし、こいしは続ける。

「興味ないなあ。その黄色いのはサイバイマンにも勝てない気がするわー！」

「そ、そうかな。よくわからないけど。そうだ。実はいいものがあるんだ。リサイクルショップに売っていたのだけど」

ごごごととナズーリンはポケットから取り出す。それは手のひら程度の球体だった。オレンジ色の透明なその中に、小さな星が四つ入っている。それを見た瞬間こいしは口を開けて、眼を見開いた。ぱさつと漫画を取り落した。自分の漫画が床に落ちた水蜜は「あつ」と椅子から立ち上がりかけた。しかし、こいしには気にならない。

「ど、ドラゴンボールだあ!!」

そうナズーリンの持っているのは、彼女の好きな漫画の重要な「アイテム」だった。眼

をキラキラキラ光らせてこいしは興奮した。ネズミの持っているのは単なるゴムの玩具に過ぎないのだが、そんなことはどうでもいい。

「ほしい、ほしい、ほしいい！ 頂戴！」

どこかの吸血鬼の妹のようなことを言い出すこいし。ナズーリンはかかったとほくそ笑み。やれやれとわざとらしく呆れたような仕草をした。

「仕方ないなあ、これをあげてもいいけれど」

「本当っ!？」

「ああ、そうだね。あげるよ。でもこれだけじゃあだめだね。そうだろう?」

「た、確かに。七つ集めないといけないわ」

ナズーリンの持っているアイテムは七つ集めると願いがかなうという「設定」があるものだ。だから、彼女はそうだったのである。それも布石だった。

「実はこの石は」

「ゴム玉を「石」というネズミ。」

「寺の敷地から出てきたんだ、だからこれ以外にもあるかもしれないよ」

「!!」

こいしは真剣な顔になった。そこにナズーリンは畳みかけるように言う。こいしにドラゴンボールを渡しながら言う。

「探してみるといい、これはあげよう」

「うん！　ありがとう!!」

こいしはお礼を言うくと水蜜ハウスから飛び出して言った。その後にはナズーリンが笑顔で小さな幼児のような可愛らしい手をグーパーグーパーと動かす。「バイバイ」の意だろう。彼女はこいしが出ていったドアを閉めて、鍵をかけた。

水蜜と一輪は訝しげな顔でナズーリンを見ている。二人は流石にあれがおもちやだと分かっている。だからネズミの意図が分からなかったのだ。

「ナズーリン。いったいどうしたんですか？」

と水蜜がきいた。一輪も「しょうもない嘘について……」とあきれれる。しかし、ナズーリンは二人を見てにやりと笑ったあと。部屋の隅にあるいて言った。そこから箱を取り出す。パカッと蓋を開けるとビニール袋が入っていた。

「なんですか、それ？」

と水蜜。ナズーリンはその質問を黙殺して、袋を取り出した。そこには大量の缶が入っていた。

酒の缶である。ビール類やチューハイなど、または日本酒の缶もある。

「！　貴様つナズーリンっ」

「おいおい、やめてくれよ」

それを見て激昂したのは一輪。それを見やつてにやりと笑うネズミ。ここは寺である。禁酒しておかなければならない場所なのだ。しかしネズミは気にせず缶を一つ取つて、ぷしゅつと開ける。

それからごくごくごくくと飲んだ。

「あ、き、きき、ま」

などと言いながら生唾を飲む一輪。彼女はお酒を幻想郷でもこつそり飲んでいた少女である。目の前でおいしそうに飲まれるとたまらない。水蜜も同じような心境であつた。

そう、ネズミが提案したのも片づけを手伝つたのもこのためだつたのだ。ここには寅丸も聖も殆ど来ない。鍵もしまる。匂いも母屋まで届かない。絶好の場所であつた。

もちろんナズーリンがこの二人を巻き込んだのにも理由がある。彼女は幼い容姿をしているからお酒を買えないのだ。この袋の中身を確保するだけでも大変だつた。しかし、水蜜ハウスの為の水蜜。

そして見た目的に大人と言えないこともない一輪。彼女にお酒を買つてきてもらう気だつた。小傘や山彦は駄目である。寅丸に言えば本末転倒。聖に言えば怖い。当たり前前の人選であつた。

ナズーリンは呆然と立っている水蜜と一輪に今気が付いたようなとぼけた顔をして、言う。

「あれ？ 飲まないのかい？ それじゃあ私一人でのむしかないな、ぐくぐく」

「あつああ、あ」

しばらくしてわざとらしい声を出したネズミの飲みっぷりに、青い髪少女は落ちた。そして水蜜も同じようになる、彼女の方がそこまで気にしていないから、すぐに酒宴を愉しんだ。このことが後に大変なことを引き起こすとは三人はまだ知らなかったのだ。何度か繰り返すうちに河童に見つかったのが今回の浜辺送りの原因である。

「ふあああ」

深夜。欠伸をしながらぶかぶかのパジャマを来たまま寺の廊下を歩く多々良 小傘は傘を閉じて引きづっていた。眼はしばしばして髪にはちよつと癖がついている。さつきまで寝ていたのだろう。

人間を脅かしに行きたいところだが、眠い。クリーニング屋の仕事をやっているうちに、完全に朝方になっていた。おぼけとしてそれはいいのかと思うが、休み気もない。寝ぼけたままお腹を掻きつつ、一瞬だけ見えたおへそに肌寒さを覚える。彼女は起き

て台所で水を飲もうとしていたのだ。水蜜、一輪、ナズーリンは納屋で寝ていると聞いていた。

——かい……お……けん。

遠くから声がするはつと小傘は後ろを向く。地の底から響くような声。

——じゅ……ばい……だ

外から聞こえる。眼が覚めた小傘はおそろおそろ外の庭の見える縁側にきた。水蜜がいつも寝ころんでいる場所である。外には美しい月が浮かんでいる。

そこに、それは立っていた。庭の真ん中にいるのは黒い影。光る両目があたりを窺い、じりじりと縁側に近づいてくる。

「ひっ」

びくつと体を強張らせる小傘。傘をぎゆうと両手で掴んでちよつと足を震わせる。

そんな彼女に影が気が付いた。

——こ、が、さ

影が名前を呼んだ。小傘は自分の名前を影が呼んだことに心底驚いた。あんな知り合いいはない。そうであるのなら、まさか呪術の類や怨念から生まれる存在、怨霊であるかもしれない。

「や……」

小傘はだつと踵を返して寢室に戻った。そのまま自分の布団をかぶつてがたがたと涙目で震えることになる。少し蒲団の外を見ると部屋の押入れの襖から白い足が見えていた。

「……っあ」

蒲団の中で震えるおぼけ。ふすまの足は封獣ぬえの足である。かの猫型アンドロイド、ドラエまおんよろしく押入れに布団を敷いて寝ているのである。そんなことを忘れて。小傘は震える。山彦は八目うなぎを食べに行っていない。

「ひいこ」

外で古明地こいしはペっペつと口に混ざった砂を吐きだしていた。彼女はドラゴンボールを探してあちこち行く過程で、どろだらけになっていた。帰ってきていつもやっている「修行」を庭でやってみたが、夜は寒いし疲れていた。

「おふろはいろー」

こいしはそういつて寺の中に戻っていく。「影」が入ってきたとビビる少女が居たのは、小さな話だろう。



「まあ、そんなこんなでこいしさんは漫画にはまりましてね」

と水蜜が話終えた。途中自分に不利な話は端折ったが、大体は霊夢達、いや「さとり様ご一行」には通じた。要するに彼女こそすべての元凶なのである。本人はこいしに全く宣伝もしていないし、勧めてもいない。だが、そんなことはあまり関係ない。

「なるほど……」

と頷くさとりの眼が座っている。霊夢と慧音は何故か背筋が冷たかった。いつも優しいさとりの声がチルノのように冷たい。妹の教育もかかっているから、そうやってしまふのだらう。

「なるほどね」

と頷く天子の頭の中には水蜜への攻撃方法を思い浮かべている。一応彼女もこいしに恥ずかしい目にあわされたのだ。彼女は水蜜と同じく漫画を読んでいるので「筋肉バスター」をしてくれるように竜宮の使いにでも頼もうかとも思っている。

旧地獄の管理者と天人の確執を知らぬ間に醸成した一人のキャプテンは「あつはつは」と何も知らずに笑う。

黒い何かがこの空間に満ちていく。慧音はもちろん、「や、ばい？」といつも飄々とし

ている霊夢も汗を流して危機感を感じる。しかし、それを破る声が、この場を救った。「あれ？ 霊夢さん」

そう声を出したのは海の家から出てきた。河童、河城にとりだった。彼女は冷やしたキュウリを食べながら外に出てきた。アイスもあるが、やはり冷やしキュウリだ。

このままではどうもろこし焼き器が村紗焼き器になる僅かな可能性もあったが、その機会は先延ばしにされた。

「霊夢さん、明日からだったと思うけど、なんでいるんですか？」

「あしたっていうけど、私は工場があるから忙しいのよ。今日からにしないで」

「べ、べつにいいけど。あつ、そうか、ちようどいいんだ」

にとりにはやりと笑う。

「ちようど寺の坊主……尼？　ともさつき話を付けたんだよつ。明日はみんなであーとやるんだ！」

「宴会するの？　にとり」

「違う違う、みんなで勝負するのさ。それで集まった人間に品物売って、大儲けだよつ。霊夢さんたちにも参加してもらおうよつ。多分すぐに四万くらい稼げるからさつ」

霊夢は小首を捻る。よく意味が分からない。にとりはくつくつと笑う。聖や一輪、寅丸をビーチを練り歩かせていることの意味もこの言葉に集約されるのだ。美女に集

いろいろと複雑な気持ちだったが映姫は何も言わなかった。

13話 A

月の綺麗な夜のことだった。時は春、いつかの時代。現在よりもはるか昔。

いや、人間にとっては昔としてもそこにいる者たちには僅かな時間だったのかもしれない。何故ならばここは人の世界ではない。物の怪の領域でもない。

閻魔の裁判を終えた死者達が安らぐ場所、冥界であつた。

静寂がこの世界の普通。死者の白い魂がゆらゆらと浮かんでどこかに漂う。そこで暴れる者はいない。居るとすればすでに地獄へ落ちている。それでも冥界は広い。大勢の死者の魂を優しく受け入れる場所としては最適だろう。

広い草原、深い森、静かな湖。まるで現世のような冥界の風景。そこに浮かぶ魂がなければ見間違えるかもしれない。夜の暗闇を照らす月と星々を楽しむように、白い魂魄が至る所に浮かんでいる。

それはまるで蛍の光の様。すでに体はなく、その魂を安らがせるために彼らは浮かんでいる。夜の闇に流れていく。

そんな冥界の一角がほのかに光り輝いていた。優しく、美しい光。それは桃色にあたりを照らしている。自分から光っているのではない、月の明かりをその身に受けていじ

らしいほどに静かにそこに有るだけ。

そう、桜の木がそこに合った。

幹の太いそれは、枝に花を生い茂らせている。見上げれば心すらも洗われそうな澄明な美しさがあった。ふつと風が吹けば花卉がひらひらと舞う、静かな夜に小さな舞い踊っては散っていく。さあと音がなり、桃色の風になる。

桜の花びらは散りながら色を変える。最初は桃色、そして母なる幹を離れてからはただ一枚で月の光を受ける。散って落ちる僅かな間に白く輝いては落ちる。

その桜の下に一人の少女がいた。貌は幼い、銀髪の頭に付けているのは黒いリボン。白いシャツの上に緑のベストとスカートを着ている。しかし、それよりも彼女に不釣り合いなほど長い刀を手を持っていることが奇妙だった。それに肩には「半霊」が浮かんでいる。

魂魄　妖夢と彼女は言う。後年には博麗の巫女や数多の者たちと数々の「異変」に立ち向かうことになる少女であった。今はまだ自分の運命など知らない。そもそも彼女は一人前ですらもないのだ。

妖夢の持っている刀は長かった。ゆうに六尺はあろうかという刀身を黒塗りに鞘に納めている。彼女は桜の下で柄を握り、すうと抜こうとする。しかしうまく抜けずに手間取ってしまう。

それを見ている男が一人、少し離れた場所にいた。白い髪を束ねた総髪。永い時を生きてきたことを思わせる、皺を刻んだその貌。彼は黒い道着とその上から白い緑の羽織を着ていた。腰には大小二本の刀剣を束ねている。長いほうを楼観剣という妖怪の鍛えたつるぎであつた。

もう一方の刀は「白楼剣」という魂魄家に伝わる家宝である。迷いを断ち切る剣という霊剣であり魂魄家の者にしか扱うことはできない。

男の名は魂魄 妖忌という。彼は腕を組んで自らの弟子であり、孫娘でもある妖夢の様子を黙って見ている。それだけなのにあたりが凍り付きそうなほど、その眼光は鋭い。

妖夢はあわてて剣を抜く。長い刀身は「楼観剣」を模した物だろう。その程度のことので動揺する彼女はまだまだ未熟なのだろう。

彼女は鞘を腰にさして、構える。両足を開いてから、頭上で刀身を寝かせるように上段の構えを取る。吐く息を一定に保ち、只々心を静めていく。思うことは一つだが、頭に言葉では浮かべない。

——斬る

妖夢は踏み込み、打ち下ろす。シユンと空気を切り裂く音と共に真つ直ぐな斬撃を放つ。そして構えを直して呼吸を整える。刀身が動くたびに、月の光を反射させて青い残

光を残している。その傍を桜の葉が舞っている。

花の散る場所で妖夢はそれを繰り返すが、構えは毎回変わる。呼吸を落ち着けて、斬る。それを何度も繰り返す。桜の散る場所で彼女の修練は続く。唯々斬ることだけを幾度となく繰り返す。

一人の少女が桜の下で剣をふるう。何十、何百、何千とも刀を振り続ける。それも一閃ごとに集中して行うのだ。並大抵のことでない。その証拠に妖夢の額には大粒の汗が流れ、息が多少乱れている。構えた両手は刀の重さに震えている。

妖忌はそんな妖夢を見て、踵を返した。今宵の修練はこれまでということだろう。彼は何一つ言葉を妖夢に掛けることもなく、何を教えることもなかった。唯、見ていた。手取り足取り教えることを彼は嫌う、物ごとは見て覚え、考えて身に着けるものだと思っている。

「あっお師匠……さ……ま」

妖夢は乱れた息を何とか整えて構えを解く。それから鞘に刀を直して、つかつかと歩いてく師匠の後に続く。表情は暗い、自らの未熟さに妖忌が落胆していると感じたのだ。妖夢は真面目な少女で、その祖父の妖忌は寡黙にして嚴格。だからこそ妖夢のプレッシャーは大きい。

夜道を歩く二人、妖夢の下駄の音が音をたてて、妖夢は音をたてないようしずしず

と歩いている。ただ、歩く道が見えないということはない、月光が先を照らしてくれている。それを楽しむように靈魂が空を流れていく。

ふと、妖忌が足を止めた。わつと妖夢はその大きな背中に鼻をぶつける。すぐ後ろを歩いてきたから急に止まった彼に反応できなかったのだ。あわてて「す、すみません。お師匠様」と謝るが、流石にその程度で妖忌は怒らない。

ただ、妖忌は空を見上げている。そこに静かに浮かんだ丸い月がある。彼は妖夢から離れるように数歩前に出てから腰の楼観剣をすらりと抜き放つ、ことも何気に少年の背丈はあろうかという刀身がそこに現れた。

白刃、という言葉はこの剣の物。そういいたくなるほどに白い剣刃。優雅な抜刀とその剣の美しさに妖夢は鼻を抑えながら見ていた。妖忌はただ抜刀しただけである、だがあまりに自然なその動作には気負いという物が一切ない。だからまるで楼観剣はそこにあるべきだった、と妖夢は感じた。

そこで妖夢ははっとした。

剣は凶器である。その刃は人を斬るためにある。ゆえにどのような聖人が「刀」を持っていてもある種の威圧感があるはずだった。生物であるのならば武器には多少なりとも警戒するはずである。

妖忌にはそれが無い。どれだけの修練を重ねればそこまですることができるのだろう。そう妖夢は祖父への畏敬の念を深めた。そしてすぐに彼女は気が付いた。もしも妖忌が彼女を斬る気であつたのならどうなるのかと。

おそらく妖夢はなに一つ抵抗することもなく、呆けた顔で両断されるだろう。それがわかつて妖夢はさあと青くなつた。もちろん妖忌にそのつもりはないことも分かつてはいる。

妖忌は右足を若干後ろへ引いて、楼観剣を挿んだ右手をだらりと下げる。その動きはゆつたりだが妖夢に見せているのだろう。彼は深い呼吸を一つする。ゆつくりと吐く息は静かな夜に消えていく。

そして斬つた。

それは「斬つた」としか言いようがない。見ると妖忌はいつの間にか楼観剣を鞘に納めていたが、その斬撃も彼の動きも音もなにもなかった。だがそれを見ていた妖夢は「斬つた」と思った。何故そう思つたのかはわからない。おそらく妖忌は刀を振るつたのだらうが、見えなかつた。斬つたという結果だけ彼女は知っている。

ざああと風が妖夢の頬を撫で、前髪を浮かせる。彼女は目をぱちくりとさせてから、両手で目をごしごしと擦る。それは見上げた空に異常を感じたからだつた。

空に浮かんだ月に一筋の黒い線がある。さつきまではなかったはずのそれに妖夢は驚愕した。その線は数秒だけ映り、すぐに消えた。もちろんのこと煌々と輝く月はそこにある。

月が切れるわけがない。ならば妖忌の斬ったのは何だろう。妖夢は口を開けて、眼をまるくして空を見上げる。そして彼女は「ああ」と腑に落ちる答えを得た。

——そうか、空間を斬ったのね

妖夢は感じた答えに納得する。そしてふと、自分はそれができるだろうかと不安になる。「空間を斬る」ということを疑問には思わない。それは彼女の祖父への信頼なのだろうか。それも妖忌に心ごと「斬られた」のかもしれない。

おそらく妖忌は「斬る」ということを見せてくれたのだろう、言葉にはしないがそれが弟子への「教え」であった。剣士であれば「斬る」ことを昇華させなければならぬ。それ以外は些事である。

妖夢は驚いた後に、しゅんと肩を落とす。妖忌の行ったことを自分が行うとすれば、それはどれだけ永い時が必要なのであろう。いや、そもそも時を掛ければ届くのだろうか。そう思うととても悲しくなつて、視界が涙で揺らいでしまいそうになる。

その妖夢の頭にぽんと大きな手が載せられた。撫でるのでもなく、置かれたただけだ。無論手の主は妖忌しかいない。彼は一言だけ自らの孫娘に言う。

「励め」

それから手を離して踵を返すと、妖忌は無言で帰っていく。その大きな背中を呆然と見ながら妖夢ははつとして、触られた頭をもう一度自分で撫でてみる。それだけで何故かわからないがとても嬉しくなってしまう。涙目で口元を綻ばせる彼女の頬は赤い。見た目通りの少女がそこにいた。

彼女は一歩前が出る。それから言った。

「お師匠様、わたしは、わたしは——」



——私は頑張っています

妖夢は温泉に浸かりながらそう思った。白い肩を剥き出しにして、傍を大きな河の流れる田舎の温泉地。それが今回のロケーションの場所である。彼女は白いタオルで胸元から下を隠しているが、そんなことは彼女には何の意味もない。

石造りの湯船は露天風呂。見上げれば檜の屋根があり、良い香りを漂わせる。妖夢は

その中で湯船に浸かっているのだ、白い湯気が立ち上っては消えていく。

あたりは夜。山からの虫の音が静かに響く。川を見れば若干の蛍が飛んでいる。

『中継のこんぱくきーん。お湯加減はどうですかー』

そんな中で妖夢の耳元に付けたイヤホンから何か聞こえてくる。おそらくスタジオからの音声だろう。妖夢は顔を真っ赤にしながら、泣きそうになりながら返す。目の前にカメラに向かって。

「い、いいですよ……」

幸いなことに妖夢のアイドル生活は順調だった。今日はテレビの「全国中継」で温泉のロケである。九州のとある県にある、有名な温泉地でのロケーションに彼女が選ばれたのだ。彼女はそれが嬉しいのかカメラの前で涙目になっている。全国にその姿を映して貰って嬉しいのだろう。アイドル冥利につきるといっていい。

ゆったりとカメラマンが近づいてくる。温泉地紹介番組でアイドルの姿を映すのは当たり前である。火照った妖夢の顔が少し引きつっているが、近づいてみると潤んだ瞳がどうにも可愛らしい。

——ひい

妖夢は張り付けた笑顔のまま、心の中で悲鳴を上げる。近づいてくるのが少々恥ずかしいのかもしれない。彼女は少し離れた場所にいるディレクターに助けを求めるよう

に視線を送るが、そこにいた一人の男はぐつと親指を突き出して「グッド。大丈夫！」と言うように、力強く頷いてくる。根本的に妖夢の苦悩は伝わっていない。

湯加減がいいのは本当である。体から今までの疲れが流れだしていくような浮遊感があり、それでいて新しい精神的ストレスがドバドバと入ってきているのが妖夢の今の状況であった。

このような状況だから彼女は過去のことを思い出し出していた。つまりは現実逃避である。今エンドレスに「おもひで」が彼女の頭を駆け巡っている。

しかし現実からは逃れることはできない。今のお茶の間では彼女の顔がアップで映されているだろう。その愛らしい笑顔に白い首筋と浮き出た鎖骨はまだ彼女は少女であることを物語っている。

妖夢はそんな中で視界の端に「カンペ」を持った女性スタッフがいることに気が付いた。そこには「上がって。腰掛けて」と書かれている。つまりは湯船から上がって、座った姿を映したいのだろう。

妖夢は悩んだ。お湯が体を守るガードになってくれてもいるのである。それで恥ずかしさの数分の一は削られているはずではあったのだ。しかし残念なことに彼女は真面目だった。

「ハハハハは景色もいいですね！」

人がいる。

カウンタ―席もあり、その向こうは厨房である。頭にバンダナと前掛けをした店員がそれぞれ作業をしている。

奥のテーブルに三人女性が座っていた。一人は黒髪でスーツ姿。二人目は頭が真っ白でくりつとした紅い眼をしている。しかし何故か首元を開けた青い作業服を着ている。そして最後の一人は栗色の髪にツインテール。胸元にワンポイントの黒いシャツを着ている。ラフに見えるがワンポイントが「a d e d a s」というパチモノなので全てを台無しにしている。

その三人はそれぞれビールのジョッキを持って「カンパーい」と打ち合わせる。ジョッキがカーンと音をたてて、彼女達はぐいっと飲む。若い女性にしてはいい飲みっぷりで傾けたジョッキの半分はそれで消えた。冷たいビールが喉を通るのは快感なのは人間も「彼女達」も変わらない。

その全員の前にはチャーシューメンが置かれていた。無論卵は入っていない。黒髪の少女、射命丸 文が割り箸をぱちんと割って言う。彼女の話題は先ほどまでテレビに映っていたアイドルの少女のことだ。

「いやあ、魂魄さんも遠くの存在になってしまいましたねえ」

それに白い髪をかき上げながら犬走 権が応える。彼女は割り箸を口にはさんで片

手で割る。癖だろう。

「……どう考えても文のせいだと思うけどな。夜道には気を付けているほうがいいぞ」

可愛らしい容姿とは裏腹に武人然とした口調で言う。それでいて麺を箸で掬うとふうふうと冷ます為に息を吹きかけている。それから麺を一本だけ口に含んでちびちびと食べる。もぐもぐと食べるのにいちいち頬を動かすので小動物のようだった。

「言いがかりも甚だしい……」

いけしゃあしゃあと言いながら文はずっと麺を嚼る。そう「魂魄妖夢」がアイドルロードを歩き出すきっかけは彼女が作ったのだ。しかもそれをネタに会社に潜りこんでいた。ギブアンドテイクとは聞こえがいいが、彼女の取り分は多い。

「でもねえ」

ツインテールの少女、姫海棠 はたてが会話に入る。彼女は割り箸をパキンと割って左右非対称に割れてしまったので悔しさを覚えながらつつづけた。

「あれだけテレビに出てるんだから、芸能人とかと会ったことないのかな？ モコ・ロードとか……アイドルなら……興水とか。文なら知っているんじゃないの？」

「そうですね……基本的に会いませんね。私の会社はあくまで地方紙ですから、地方の著名人とかならあったことはありますよ。魂魄さんはたぶん会ったことはいっぱいあるでしょうけど……やっぱり興味ないでしょうね」

はたての言っている芸能人はそれなりに有名な者だ。モコ・ロードはよく料理番組「ロード・オブ・キッチン」に出演している。イタリア料理が得意である。しかし、文は会ったこともないが興味もないように答えた後はラーメンを食べるだけだ。

「それにしても文。なんで今回はラーメン屋なんだ？」

「椀はいやだったんですか？」

「いや、別にここでいいけど……でも月一の『天狗会』ならもつと高い店とかでもよかつたんじゃないか？ お酒も少ないし。それなら……」

ちなみに天狗会とは女子会をもじったものである。命名したのははたてだった。段々とミーハーになっていく彼女を文は面白半分と心配半分で見ている。それはともかく椀は言う。

「焼肉屋とか」

ぴたりと文は動きを止める。はつと気が付いたはたてが椀の裾を引くが、椀には訳が分からない。まさか十人くらいに焼肉を奢った経験が文にあるとは思わないだろう。しかもそれが尾をひいて、このごろ彼女は一枚の食パンを「朝、昼、おやつ、夜」に分割して蜂蜜を付けて食べている。

そもそも文が他の二人をこのラーメン屋に呼んだ理由は、単にお金がないから割り勘すらもきついためだった。しかしプライドの高い文はニコリと笑った。

「まあ、それはおいしい。それよりもはたて」

「な、なに?」

はたてが反応した隙に文は椀のチャーシューを奪う。あつと椀が驚いた時には文の口がもぐもぐ動いている。しかも白い髪 of 少女を見ない。反撃とばかりに椀も奪おうとするが、すつとよけられてしまう。

「はたて? 聞いてます」

「き、聞いてるっていうかあんた」

文は椀の攻撃をかわしながらはたてに聞いてくる。涼しい顔をしているのだが、元々食えない性格をしているので、それが余裕の表情なのかはわからない。はたては呆れるべきか感心すべきか悩んでしまう。

「前に堀川さんとお酒を飲んだの覚えていますか?」

「忘れるわけないでしょ? あんた、あんなものを残しておいて」

椀が二人の会話にびっくりと反応する。彼女は文に聞いた。ちなみに「堀川」とは堀川雷鼓という少女のことである。雷鼓は赤い癖のある髪 of 毛をした特徴的な少女で、文の言う通り少し前に椀を除いた二人と飲み会をしたことがある。

「あんなものってなんだ?」

「ああ、映画のDVDですよ」

「へえ、そんなものを見ているんだな……」

「まあ、それはいいんです。それよりも二人に見てほしいものがあるのですが……」

文はそういつてポケットから一枚の紙きれを出した。くしゃくしゃであるが、それは文がやったわけではない。もらった時からそうなっていたのだ。

それを文がテーブルの上で広げると「付喪神」と書かれている。これはあの焼肉屋の夜に彼女が伊吹 萃香からもらったメモである。

「なにこれ？」

はたては訝しげに紙切れを見つめる。意味が分からない。彼女は髪を指にくるくると巻いてぼつと離す。意識しているのではなく、なんとなく考え事をするとしてしまうのだろう。それを見て文も口を開く。

「私たちがこちらの世界に来た原因、おそらくその犯人のヒントです」

「えっ？ これが？」

「何っ！」

はたてと権は立ち上がった。がたんとテーブルが揺れて、ラーメンのスープがこぼれる。文はちやつかりと自分のビールジョッキだけは手に持つて避難させている。他の二人のそれがこぼれたわけではないが、この鴉天狗は抜け目ない。

「これは萃香さまからもらったものです。文面は付喪神と書かれているだけで炙りだし

でもなければ小さな文字も書かれていません。つまりは今回の異変……とでもいいましようか？ この現状を引き起こした者がいるのではないかとその手がかりですね」

「文……あんだ。そんな重要な物をこんな飲み会で……」

はたては呆れるが、椀もこめかみに手を置いている。彼女も同じく呆れているのだろう。証拠物は「鬼」の伊吹 萃香から来たものであるから信用できるが、文が持つてくると途端に胡散臭くなる。椀は文を見下ろしながら言う。

「しかし、文。これを今わざわざ見せるということは何か考えがあるんだろう？」

「もちろんです。それよりも座りませんか？ 椀、はたて」

「あ」

「あ」

急に言われて二人はあたりを見回す。店員が何事かとこちらを見ていた。その視線に気が付いて椀は赤くなって座る。はたては逆に爪先立ちで伸びあがって、近くの窓から外を覗き込む。つまり「私は窓から外をのぞくために立ち上がったんですよ」と行動で説明しているのだ。だが、すぐに無駄な抵抗はやめて座った。

「文！ これはさあ」とはたて。

「そ、それで文」と椀。

二人は同時にしゃべってお互いを見る。はたてがどうぞと手のひらを椀に向けると、

柩もどうぞとジエスチャーする。お互い譲り合いを行ってから、はたてがしゃべり始めた。

「それで、文。あんたの考えってなに？　もしかして雷鼓を犯人と思っているの？」

「さあ？　犯人かもしれないし違いかもしれません。一応彼女は付喪神だったと記憶していますからね。別の付喪神も当たってみるつもりではあります。それにこれだけの大規模な異変を彼女だけで起こせるとはおもえませんね」

「こほんと文は一呼吸置く。」

「まあ、それよりも私の考えですけれど。そろそろ博霊の巫女さんなどを焼き付けてあげたいんですよ。ヒントを形としてリークすることで、ぜひとも異変解決に動いてもらいたい。そう思いませんか、はたて？」

「……ああ、あの巫女はこの前に見た時は死んだ魚のような眼をしていたわね。コンビニに来てから何も買わずに出ていった時には、声を掛けようか迷ったわよ。……まあ、あんまり親しくはないけど」

はたてはとあるコンビニでバイトをしている。そこに巫女が来たことがあるのだろう。しかし、この少ない会話ではたては文の真意を理解した。それは論理的な結論でもなく、単に長い付き合いだからこそわかるものだった。

「あんた。それを取材して記事にしたいんでしょ？」

「……流石はたて」

「わかるわよ。解決したいっとかじゃなくて、そっちの方が面白そうってんでしょ？」

はたてははあとため息をつく。しかし、彼女はちらりと椀を見る。この白い髪の少女もはたてと同じ気持ちだったのか苦笑しつつも頷いた。要するに協力するということだろう。どうせ文の言うことなどそれに決まっついても分かっている。

「いいわ。いずれは幻想郷に帰らないといけないしね。今回は文に……いや『文々。新聞』協力してあげる」

「ありがとうございます！ はたて、椀。持つべきは『花果子念報』とかいうブログを毎日更新している友人といい年してぬいぐるみを収集している友人ですね!!」

協力の言葉を取った瞬間に毒を吐く文。はたては後ろに下がって、椅子から転げ落ちそうになる。椀はすでにばれていることは知っているので、ただ紅くなる。しかしはたては別である。

そうはたては幻想郷では文と新聞の発行部数で競い会った仲である。現代に来てからはパソコンを手に入れてインターネットの世界に活動を広げていた。つまりはブログである。文の相手は幻想郷の少女達だが、はたての相手は全世界である。ただし日本語の通じる地域に限定される。

はたてはそのブログサイトに設置した閲覧数を表示するカウンターが増えるたびに一人でにやにやと笑う日課があった。そこまでは文も知らないが、ブログの内容は全てチエックしている。そもそも幻想郷で発行していた新聞名をブログ名にした時にはたての運命は決まった。

「あ、あんたなんでそれを知っているのよ!？」

「いいじゃないですかはたて。毎日のご飯とかを写真でアップしたり……それにドラマの感想とかを長々と書いたり……毎日すごく楽しみにしています」

「あ、あああ」

「いやあ、『仲の良い友人』が焼肉を奢ってくれて嬉しかったと書かれた記事とかはよかったですね。お金のないことをすごく心配してくれたようで、ほろりときましたよ」

「うあああ」

自分の本音を書き募ったブログを「友人」に見られて両手で顔を覆って小さくなるはたてを文は満足げに褒め殺してから、椛に言う。はたてをからかうことに飽きたのかもしれない。

「そういうわけでとりあえずはさつき言った堀川 雷鼓さんを尋問しようかなと思ってます。椛、拷問は任せましたよ」

「だ、誰がやるか！ そんな役!!」

「まあまあ、それよりもラーメンが伸びてしまいますよ。明日の夜に近くの公園でお祭りがあるそうなのではたてが彼女を呼んできたところをふんじばりましょう」

「さらつとひどいことを言うな……でもお祭りか、こちらにもあるんだな。人の世界はどこでも同じか……あつ」

「どうしました？ 権」

「お祭りと言えば子供が来るだろう？ ということはあのスーパーの店員も来るんじゃないのか？ この前の新聞に一緒に暮らしていると書いてただろう？」

「ええ、それも可能性の一つに入れていきます。なーに三人でかかれば大丈夫ですよ。むしろ明日、やってしましましょう」

「最後の方だけ文は真顔になった。恨み骨髄に染みわたっているのだろう。彼女は豪快にラーメンをすすする。それは怒りを表しての武者震いならぬ、天狗震いかもしれない。しかし権は心の中で「負けそう」と思ったことは言わなかった。

「あつそうですね」

いきなり文はそういつてカバンから一眼レフのカメラを取り出す。せつかくなのでこの場の写真を撮ろうというのだろう。ある意味記者の癖のようなもので深く考えての行動ではない。はたてはカメラではなくスマートフォンでラーメンを映していたのであとでブログにあげるのだろうか。

しかし、文の持っているカメラを権は見たことがなかったので、聞いてみる。

「文。それは……また買ったのか？」

「そんなお金はありませんよ。レンタル品です」

「ずいぶん新しいけれど……」

「最近買ったらしいですからね。まあ、貸してくれた子は二つ持ってますしそれに——」

文はぎりりと歯を食いしばった。

「私のデジカメを……あの苔緑が……また……」

そう悔しがる文を見ながら権はただ「難儀だなあ」と思った。

13話 B

夕日が地平線の彼方に沈んでいくのを霊夢はぼけーと見ながら、口を開けていた。今でも自分の状況が信じられないのだ。

数時間前に河童の経営を代行している海の家にたどり着いた霊夢一行は「みんなでビーチバレーをしよう」という河童のたわごとを聞き流していた。それから霊夢が急かしたこともあり、さとりと慧音合わせて三人で仕事に取り掛かった。河童もアパートの三人も一人ついてきていることを完全に失念していた。

そもそもすでに着いた時には夕方近いこともあり、河童も着替えることについては不問にした。別に明日が本番なのであるから、急いで新たに来た四人の労働者に水着を着せることはない。それよりも河童のやっている海の家では仕事が山積みである。

そもそも海の家という物の本番は夜である。アルコールをとそのツマミを提供する時間こそが王道である。ゆえにお昼よりも人手がいるのだ。それに河城にとりの同志

である河童はこのビーチに4、5名程度しかいない。殆どが街で働いているからなおさら霊夢一行の合流はありがたかった。

夜の闇は深い。海の果てを黒く染めて、時折通る船の汽笛が遠くに響く。

星の光も、月の輝きも大海原に吸い込まれて蒼く静かな海をほのかに照らすだけだ。それでも浜辺は違った。海岸線の一角は煌々と人工の光がたかれている。そこは多数の「海の家」が集まった場所である。

店々が軒を連ね、吊り電球で店内を照らす。少々暗さを感じさせるそれが、妙に雰囲気盛り立てる。それは河童の店でも同じだった。

河城にとりの店は満員御礼である。店内のテーブルは全て埋まり、水着姿の男女が朗らかに笑い、杯を干しながら料理に舌鼓を打つ。もちろんレストランなどに提供されるような豪華な物でない。焼きそばやカレーやラーメンという、どちらかというとお祭りの屋台を思い浮かべると適當かもしれないだろう。

それでも笑い声に包まれて食べる食事、海風を感じながら飲む酒はうまい。それを表すかのようにテーブル席のお客は皆が幸せそうに笑っている。よくよく見れば家族連れも少なくない。小さな子供が紙コップに満たされたコケコーラを飲んでいる。

その客の一人が注文をしようと手を上げた。

「おねーさん、枝豆二つ！」

「は、はい」

にこおと引きつった笑顔を向けたのは青い髪の女性だった。その恰好はお昼から変わらない水着姿。ただその上に前掛けを付けている。そして両手に持った銀色のトレイには焼きそばや空のビールジョッキが載っている。

無論、雲居一輪のであつた。彼女は売り子としての仕事が終わつてからはここでウエイトレスの仕事を言いつけられていた。彼女のほんのりと赤い頬はこの後に及んでも恥ずかしさが抜け切れてないのだろう。

一輪はそれでも真面目に働いている。根が真面目なこともあるのだろうが、できるだけ笑顔で接客するので人当たりはいい。しかしどことなくぎこちなく、羞恥に顔を赤らめている彼女は良くも悪くも注目されている。

そしてウエイトレスはもう一人いた。虎のような目つきで店内を回っているのは寅丸 星である。白い水着にやはり前掛けを付けている。一輪とは違い、むつつりと黙っているがその眼で見られると吸い込まれそうなほどに澄んでいる。

「ビール一つと、カレーをお願いいたします」

「承知いたしました」

眼鏡をかけた客が寅丸に注文する。客の方が何故かえらく丁寧に注文しているのは

彼女の「威」に恐れをなしたからだろう。こんなところで恐れをなしてもどうということはないのだが、寅丸は寅丸で物腰柔らかだが偉そうである。

そんな寅丸は内心では逃げ出したい。両腕を組んでいる彼女は仁王立ちの様に見える、ただよくよく見ると胸元を隠しているという毘沙門天にあるまじきことをしている。誰にも気が付かれてはいないが腿が少し内を向いている。

寅丸は注文用紙に達筆な字で「麦酒 一」と書いて、考え込む。カレーとはどう漢字で書くのだろうかと考えてもわからないので「かれえ」とひらがなで書いておいた。手に持ったシャーペンは振って芯を出すタイプの者なので猫のように腕を振る彼女は可愛らしい。

と、そこへ

「うわっ」

と一輪の悲鳴が聞こえてきた。寅丸の眼がぎろつとそちらを見る。突然の悲鳴という不測の事態でも慌てないのは毘沙門天としての当然なのだろう。水着で恥ずかしいから逃げ出したのは彼女の中では違う。

「とっ、とっ」

一輪がトレイを持ってふらふらよろけていた。その近くで一人の子供がいる。どうやら遊んでいたのか一輪にぶつかってしまったらしい。それで一輪は転びそうになっ

ているのだ、トレイにはビールジョッキが載っている。

しかし、その子供はちらつと一輪を見て、そそくさと逃げようとした。それを寅丸は見逃さない。

「喝っ！」

よく響く声が店内にこだまする。一瞬の静寂が店を包んだ。全員が寅丸を見ている。それは逃げようとした子供も同じである、彼は逃げるタイミングを失っていた。

だから寅丸は逃げようとした子供につかつかと歩みよつて、自らの膝を折り目線を合わせる。その大きくて綺麗な目で見られた子供はびくつと震えた。そのまま寅丸はその凛々しい表情を崩さずに言う。店内の者がかたずをのんでみている。

「君、なぜ私が声を出したのか、わかりますね？」

諭すような言葉を厳しい声音で言う寅丸。子供は小さくこくりと頷いた。怯えているのかもしれない。彼は声を出さない、だから寅丸続ける。

「人にぶつかつたのなら、為すべきことがあるはずです。それも……わかりますね？」

寅丸は答えを言わない。唯々子供に悟らせようとする、その点で言えばまさに「仏」であるのだろう。しかも彼女の言葉には真摯な響きがある。それに寅丸は人をまつすぐ見ている、その大きな眼に映されるとその子供は何故かわからないが恥ずかしくなつた。

「ごめんなさい」

「私に謝つても仕方がありません。あなたが謝るべきなのは誰ですか？」

子供が後ろを振り向く。そこにはさっきの寅丸の大声で思わずビールジョッキを落としてしまい、絶望的な目をしている一輪が居る。彼女の足もとは酒で濡れて、その傍らに空のジョッキが転がっている。ありきたりな海の家 of 性質上、床はそのまま「砂」であるから音がしなかったのだろう。

子供はそんな一輪に頭を下げてこういった。

「お、お姉ちゃん、ぶつかって、ごめんなさい」

「え？ ああ、ええ」

一輪は謝られてどことなく上の空で返した。とどめを刺したのが寅丸なので、彼女も妙な気もちなのである。

しかし、寅丸は子供がしっかりと謝つたことに満足してその小さな頭に手をやった。そのまましがしと撫でる。彼女は満面の笑みで彼に言う。

「よくできました」

寅丸が本当に嬉しそうに言う物だから、子供の方も嬉しくなってしまう。寅丸の言葉にも態度にも嘘がないからこそ双方に「嬉しい」という感情を起こさせてくれるのだろう。至誠という言葉こそが彼女にはふさわしいのかもしれない。

そんな中でどこからともなくぱちぱちと手を叩く音が響いた。一部始終を見ていた客が手を鳴らしているのだらう、それは段々と大きくなつて店中に響き渡つた。寅丸はそのあたりで全員が自分を見ていることに気が付いて、笑いを引きつらせて体を隠すように腕組をする。無駄なあがきであつた。

「ええー、とうもろこしはいりますかー」

そんな店内とは反面にやる気のなさげな声を出しているのは村紗。水蜜であつた。紺のワンピース型の水着を着ている上に、白いパーカーを羽織つているから一輪に比べれば恥ずかしさはない。彼女は入り口近くでとうもろこしを焼きながら、道行く人々の声を掛けている。要するに客引きである。

「ふう、あついですね」

水蜜は別に恥ずかしくはないがじりじりと網の上で焼かれるとうもろこしの熱気とそのまま体を受けている。首筋に汗が溜まるのでたまに手で拭う。空気をいれようとして、わずかに肩ひもを引いたりもする。その時見えた肩ひもの下の肌は白い、陽に晒していた場所とは色が違うのだ。くつきりと線になつていよう。

しかし、そんなことはどうでもいい彼女は手元に合ったアーク・エリアースのベッドボトルを掴んでおる。ごくごく喉を鳴らして飲む彼女だが、心に思っているのは「ビールが飲みたいなあ」ということだけだった。

その点では中で接客している一輪も変わらないらしく。キンキンに冷えたビールジョッキを客の一人がごくごくと一気に飲んでいる姿をものほしそうな目で見てしまっている。ただしすぐにハツとして、トレイを脇に挟んで両手を使って頬を自分で叩く。

一輪はそれから顔をぶるぶると振って欲望を頭から払う。また彼女を呼ぶ声があったときには「はい」としつかりと接客してから、その客が冷たいお酒を飲んでいるので心がぐらついたりした。

厨房では一人のピンク頭の少女と河童数人が料理をしている。全員頭にタオルを巻いていて、着ているのは黒いシャツに白い字で「うみんちゅ」と書かれたものだ。下に穿いているのは一人一人違う。ピンク髪の少女であるさとりはハーフパンツにサンダルである。

さとりは両手にヘラを持って、鉄板の上で焼きそばを作っている。それを紙の皿に手際よく移していくのだ。現代に来てから家事、育児、料理の腕が飛躍的に伸びている。

これでも一応のこと旧地獄である地霊殿の主であるのだ。

「あおのりを用意して……」

地霊殿の主が河童に言う。そういつている間にもじゆうじゆうと焼かれてる麵をへらで巻き取って、混ぜてと余念がない。彼女も一輪と同じ真面目な性格ではあるのだが、真剣に焼きそばを焼いている地霊殿の主を同じく焼きそばを焼いている橋姫が見たらどう思うだろう。案外自分よりもうまく作っていることに嫉妬するかもしれない。

さとりは額に浮かんだ汗をぬぐいつつ、妹のことを思いだした。

心配とかの話ではない。彼女にはペットのことで信頼のおける二人がくつついているはずである。妹が妙な遊びを覚えていることには不安ではあるのだが、彼女が心を閉じていた時を思えば、千倍はいい。そう姉として思う。

そんなことを考えているからふと、さとりは古明地 こいしが自分の焼きそばを食べたらと思った。

『おねーちゃん、美味しい!』

さとりの頭の中でにつこりと笑うこいしに、現実の姉の表情も緩んでしまう。元々真面目にやっていた彼女のやる気がさらに上がり、動きが洗練されていく。傍から見ている河童達にはやけながら焼きそばを焼いている少女である。

海の家での仕事もあるが、明日の用意も重要だった。

にとりの店では浮き輪にしろ水着にしろ、水鉄砲にしろレンタルを行っている。他にもゴーグルやらなんやらの細々とした物も扱っているのだ。それらを店の裏で慧音とナズーリンが整備していた。

「ふううー、ふー」

慧音がスイカ型のボールに空気を送る。口から送るので彼女は頬を膨らませているのだ。

横で水道から伸びたホースを使って、盥に水を貯めたナズーリンが手で大量のゴーグルを洗っている。「ああ、たいへんだ、たいへんだ」とわざとらしく言っているが、ゴーグルを洗うことにそこまで意味はない。要するに次貸す客へ「洗いましたよ」というポーズである。それを彼女は時間をかけて行う。

要するにうまくサボっている。ナズーリンは別にこの作業を真面目にやる気などない。寅丸がいなければ逃げていたところだ。その点は完全にネズミである。彼女もさとりと同じく「うみんちゅ」と書かれたシャツを着ている。

慧音も同じ恰好だが、サイズが小さいらしい。少々窮屈なのか肩を回してみたりしている。それから慧音はナズーリンに話しかけた。

「ふう、しかしあなた達も同じだったとはね。知らなかったよ、今更かもしれないけど」
 「ん？ そうだね。私も君たちがやって来るとは知らなかったよ。特にあの巫女はネズミを馬鹿にしているきらいがあるから、苦手なんだよ」

「霊夢が？ ネズミを？」

ネズミを毛嫌いしているのはだれでも、と苦笑しつつ慧音は言う。

「あれでも霊夢はいい奴じゃないかな。どことなくつつけんなどところがあるけど、それでも私は信頼しているよ。口はわるいところもあるけど、付き合ってみたらいい」
 「……ふーん。そうかい」

興味なさげに言うナズーリン。しかし、内心では紅白の巫女はそれなりに人望があるのだと感心した。ただ顔には出さない。どことなく眠たげな顔をして、首を少しだけ動かす。紅い眼だけはこっそりと慧音を見ている。

「ま、私にはかんけないね」

ナズーリンは慧音に聞こえないようにぼそりという。彼女はあくまで毘沙門天の使いなのである、寅丸や命蓮寺の者に親しいところを見せても、外部に見せる義理などない。そういう意味では最もストイックな考え方を持っているのかもしれないだろう。

そもそも幻想郷では「命蓮寺」にすらも住まず、現世と幻想郷と冥界のほとりの池の

傍に掘つ建て小屋を作つて一人で住んでいたのだ。現代に来てからは生活費的な面で仕方なく全員一緒にいるが、元来では彼女は一匹ネズミである。

「あ」

といきなり慧音が何かに気が付いたように言う。ナズーリンは訝しげにしながら聞いてみる。

「どうしたんだい？」

「いや、あそこにいるのはさとりの妹じゃないか？」

ナズーリンが見ると少し離れた場所に古明地 こいしがこちらを見ている。傍にはお隣お空の二人が言う。ネズミは彼女達が一体何をしているのかわからずに疑問符を頭に浮かべたが、別にどうでもいいやと思考を打ち切った。それが彼女の明日の地獄への道を開くことになる。

こいしは砂浜にあげられたテトラポッドの上にいた。彼女の眼はナズーリンにのみ向けられている。後ろでは「ふっふっふ」と赤毛で三つ編みの化け猫ことお隣が笑っている。意味はない。ついでにお空も笑おうとして、くしゅんとちいさなくしゃみをす

こいしはさとりとの合体に失敗して多少落ち込んでいた。おそらく彼女と姉では少々力に差がありすぎたのだから失敗したとこいしは結論付けていた。であるならば、背格好が同じ程度で弱いを見つけなければならぬ。

絶好の獲物とはナズーリンのことである。彼女ならあるいはと考えて、こいしは眼を付けたのだ。お燐とも試したが無理だった。化け猫は乗り気であった。彼女が遊びの一つとしてこれを捉えている、お空は背が高すぎた。

お燐は言う。

「こいし様つ。あそこにいる奴はあたいとお空で明日には捕まえてきてみせます」

「そうそう、あれくらい奴なら核エネルギーを失った私で、も」

お空は自分で「核エネルギーを失った」と口走ってからぼろぼろと泣き始めた。幻想郷でひよんなことから手に入れた力を失って、彼女は一時期自信を失っていたのだ。このごろはそれも収まったが、たまに自分で自分の傷を抉る。わざとでない。

お燐はそんなお空をやれやれと見ている。お空はそれでも強く目元を拭いて言う。

「必ずあのネズミは必ず私が消し炭にするわ」

捕まえるという話はどこに行ったのか、そういうことになった。お燐も「その意気、その意気」と煽るので止めるものはいない。そう、いない。そこでお燐は気が付いたのだ。

「あ、あれ？ こいし様はっ？」

女がそれを片手で軽く払う。彼女の髪は左側だけ少々長い。

映姫の耳に聞こえてくるのは湯船に取り付けられたパイプからお湯が流れる音だけであつた。周りには誰もいない。幸運と言うべきかもしれない。だから映姫は肩の力を抜いて、天を仰ぐ。それから首に手を回した。

映姫のうなじは細い。彼女はそこに手をやって自分で揉む。首をマッサージすると少し気持ちがいい。彼女はそれから風呂の縁に寄りかかつて、体中の力を抜いてみる。火照つた顔は赤い。前髪についた水滴がぴちよつと落ちる。

映姫はしばらくそうしていた。少年団と共に練習しているが、今の彼女は見た目通りの少女である。頭脳はさげすまれているだろうが、身体能力的には線の細い体が発揮できる以上の物はない。ゆえに身体的には疲れも出る。

今は少年達に野球のことを教えてはいるが、あと数年もすれば体力的には抜かれるだろう。無論現代においての話である。

「……」

映姫はざぼつと湯船から上がる。その肌をお湯が流れる。少し考えすぎている気がするのだ。少年達の数年後など見ることはできないのだから、考えても仕方ない。

彼女が上がつたと同時に露天風呂の入り口が開かれた。映姫がゆつたりとした仕事でそちらを見る。すでに凜々しい閻魔の顔に戻っている。

「まったく、霊夢たちったら、わたしのことを忘れて」

ぶつぶつ言いながら入ってきたのは比那名居 天子だった。彼女は忙しい海の家で手持無沙汰になり、ここに風呂へ入りに来たのだ。浜辺にシャワーはあっても風呂はない。ついでに霊夢とにとり、それに白蓮もないのでいる意味もなかった。

「あれ？ あなたは」

天子も映姫に気が付いたらしく声をあげた。ただ、二人は殆ど接点がない。それでも互いに知っている。それでも天子は映姫が現代にいないことを知らないが映姫は逆に霊夢とバツティングセンターに来た彼女を見たことがあった。

天子はにんまりと不敵に笑った。彼女は湯船に歩みよってかけ湯をしてから入る。映姫は逆に出ていこうとする。体には置いていたのだろう、タオルを巻きつけている。

その背中に天子は言う。

「へえ、地獄の閻魔様も巻き込まれたのね？」

「……ええ」

「いつも私の所に死神を送り付けてくるのが祟ったんじゃないかしら」

「私に祟る？ そのような謂れはありません」

天人は寿命がないわけではない。迎えの死神を物理的に撃退しているから生き延びているだけなのだ。ついでに言えば閻魔を「祟る」物もこの世にあるかどうかはわから

ない。

「……なぜあなたはここにいるのですか？」

「お風呂に入りに来たに決まっているじゃない？ 疑うのなら白黒はつきりさせてみればいいわ」

「……………」

映姫の眼が動く。動揺などではない。少なくとも今の彼女には「白黒はつきりつける程度の能力」は使えない。厳密に言えば使う方法はあるのだが、映姫はそれをしない。ただ、彼女もとある「疑問」を口に出した。彼女の言う「ここ」とは風呂場ではない。「私が言うのもなんですが、今回の異変。殆どの者が幻想郷の住民です。現に冥界から殆どでて来ない者や強力な力を持った妖怪の一部は現れていない……………」

映姫は一度振り返る。

「それなのになぜ天界に住み、比較的にも強力な力をもった天人であるあなたが巻き込まれたのですか？ 私がきいたことは、この現代の話です」

「……それならあなたや地底の連中が巻き込まれたのもおかしいじゃない？」

「その通りですね。反論はありません。だからわざわざ聞いているのです」

「それで？」

映姫は一旦言葉を切る。それから言う。

「殆どの者がどこかしらのつながりがあるというのは作為的な物を感じます。全く知らない妖怪も人も混じってはいない。どの者も知人、友人、仇敵というつながりがある。何か目的があるのならばここまで大規模にする意味はないほどに、つまり犯人には愉快犯としての性質がある。そしてこの規模の異変を起こすのは一人でないでしょう」

映姫の眼が天子を見る。天子は湯船に入ったままだから、その背中に言う。

「正直に言えば私はあなたを疑っている。愉快犯的な現状、天人としての力……あなたと言う通り白黒はつきりとさせれば簡単ですが……今、この状況は犯人にもどうしようもないでしょうから意味を見出せません」

「……力があるなら、さとりでも同じなんじゃないかしら？」

「彼女はそんなことし——」

——いえい

映姫は思い出した、あの珍妙なポスターを。地底の主がピースしているあれを。彼女はあわてて手で口元を覆った。それから「今日はここで」といい、そそくさと出ていく。肩が震えているのは何故だろう。

残った天子は遠くを見つめている。

まさか変なポスターを思い出して閻魔がどこかに行くとは思っていないから、映姫に

ない。

隙を見てにとりを船から落そうかなと霊夢は思った。それに白蓮も河童の依頼でとあるものを作っているというから、楽そうで腹が立った。

14話 A

ぶかぶかのパジャマを着たフランドールは眠たげに眼をこすりながら廊下を歩く。僅かに寝癖のついた金髪から先ほどまで横になっていたのだろう。彼女は片手にピカチュウの顔の形をしたクツシオンを引きずりながら持っている。掴んでいるのはクツシオンの「耳」だった。

廊下をペタペたと歩くフランの足は裸足。小さな「あんよ」で彼女は歩く。とはいっても紅魔館に住んでいた者たちがいるマンシオンの一室、その廊下だから長くはない。彼女はリビングに通じるドアの前で立ち止まってドアノブに手をかける。かちやりと開ける。

リビングにはまだ明かりがついている。フランが中に入ると水の音がした。フランは少しまぶしそうに眼を細めて室内を見回す。ソファーには紫の後ろ頭が見える。本の虫だろう。フランはそれを無視して、目線を動かす。

リビングと台所は直結している。そちらからかちやかちやと音がする。見ると銀色の髪をした女性が洗い物をしている。フランから見ると後ろ姿しか見えない。だが、誰かなどと聞く必要性はない。

その女性は銀髪を三つ編みして横に流して、白い半そでのカットソーを着ている。黒カーキ色のハーフパンツは脛まで、そこから見える細い足には大きなスリッパ。それでいて腰にはエプロンをつけている。

言うまでもなく十六夜 咲夜であった。彼女は洗い物をしながら言う。

「どうしましたか？ 妹様」

「っ!？」

フランは眼を見開いて驚いた。咲夜はこちらを見ていないのだ。それなのに彼女はフランとわかり、しかも先手を取るように聞いてきた。よく見ると咲夜の傍に立ってかけられているガラスのコップにはフランが映っているがそれに気が付くものは咲夜だけだろう。

「咲夜。お姉さまは？」

はぐらかすようにフランが聞く。眠気は今ので取れたので、ピカチュウクツシヨンの耳を引き上げて抱く。流石に引きずることはやめたのだろう。咲夜は少しだけ息を吐いて答える。手は止めない。

「あの、人形師のところでお泊りだそうですね。……」

咲夜のどことなく声に元気がなくなるのはあまり「お姉さま」ことレミリアの動向が好ましくないと思っているからかもしれない。彼女はレミリアの従者だが、人形師と会

いに行くときは絶対に同行させてくれないのだ。何故かはわからない。

フランは本当はどうでもよかつたらしく「ふーん」と気のない返事をしながら、台所の冷蔵庫を開けた。そこからコケコーラの缶を取り出す。それは小さな缶に入っているタイプでフランにはちようどいい。余談だが冷蔵庫にはペシプとドクトル・ペツパーなる清涼飲料も入っているがフランは見向きもしない。特に後者は咲夜以外飲まない。フランは開けるのに邪魔なピカチュウをゴミの様に床に捨てて、コケコーラの蓋をプシュツと開ける。小さな目に見えない気泡がはじけて、フランの手に少しだけ付く。彼女はそのまま両手で持ってグイツと飲んだ。

ぐびぐび飲むフランの眼はぎゅつとつぶっている。炭酸は「覚悟」して飲まないとき込みかねない。だが寝起きの体に冷たいコケコーラの味は心地よい。フランは全て飲み干してからぶはつと口を離す。唇が少し濡れたので、ペロツと自分で嘗める。

「妹様。寝る前に歯磨きを忘れないでくださいね?」

咲夜はちよつと振り返ってフランを見る。その口から出てきたのは「歯磨きしろ」という釘差しである。吸血鬼が虫歯では恰好がつかないのだろう。フランは「うん」とま気のない返事をしてから、空っぽの缶を冷蔵庫の横にある専用のゴミ箱に入れた。それを作ったのは咲夜で、後日リサイクルボックスにまとめて捨てる。

「咲夜、あつ」

イトキヤップとはふわふわとした被り物である。

「うわ。なにこれ」

小声で驚いたフランは手を止める。ナイトキャップはずっと筆筒の中にあつたからか少しだけ「筆筒の匂い」がついている。彼女はくんくんと鼻を動かしてから、筆筒の上に眼をやった。そこにはスプレーが置いてあり「ファブリーナ」が置いてあつた。除菌用と書かれている。

フランは帽子にしゅしゅとスプレーをかけて頭に乗せた。しかしまだ準備は終わらない。偽装工作が必要なのだ。

フランが取り出したのは「ピカチュウのクッション」だった。彼女はそれを反対向きにして彼女の寝ていた寝床の枕に乗せる。そしてパジャマを人が寝ているようにおいて、その上から蒲団を掛ける。

見ると金色の何かが寝ているように見える寝床が完成している。耳が邪魔なのでフランは布団をうまく使って隠した。つまりはフランが寝ているように偽装したのだろう。つまりはこれで準備は完了である。何のと言えば簡単、

夜更かしである。

フランは物が詰まったポーチを肩に掛けて部屋のドアをそおつと開いた。廊下は暗

う新しい概念の店というわけでもない。とある幽霊少女の通っている本屋もその亜種であろう。

無論のこと幻想郷の少女達が暮らす場所にもそれは存在した。ここはその一つである。街を探せばいくつかのリサイクルショップはあるが、彼女達の行きつけは基本的に一店舗にのみ限られている。何故かといればそう難しい話ではない、その店員が単に幻想郷にゆかりの深い者であるからだ。

だからこそその客層は特殊だった。ある時はどこかの巫女がテレビを買いに来たりして、廃棄物のような物を買っていったこともある。

そもそも店員も癖しかないようなのしかいない。だから近所でも変な方向に評判の店になっていた。しかし、その店長は数日前に旅にでてしまい、いなくなっている。どうにも「秋葉へ」と言った次の日にはいなくなったらしい。なので今は別の人物が店長を代行している。

それでもすでに夜。今からくる客はいないだろう。ゆえに店のシャッターは閉まっている。ただ中から明るい声が響いてくる。それは数人の少女の声だった。店は二階建てになっていて、その上階の窓には明かりがともっている。

その店の前に一人の少女が現れた。金髪の髪にナイトキャップを付けた少女。フラ

ンである。彼女はあたりを見回して誰もいないことを確認する。それが終わってから、店の裏手に回った、そちらには勝手口があるのだろうと咲夜は思った。

フランは勝手口の前に来るとノックする。そうすると中から誰かが近寄ってくる音がした、そして勝手口が僅かに開いた。それでもフランを迎え入れようとはしない。代わりにこう声が聞こえた。

「山」

フランはあたりを見回しながら言う。

「かわ」

「よし、入れ」

と中からぬっと表情のない顔を出したのは秦　　ころだった。桃色の髪がしつとりとして、微妙に甘い匂いがするのはリンスの匂いだろう。そうフランは思ったが別にどうでもいいので勝手口から入っていく。ちなみにこの暗号を考えたのはころであった。何に影響されたのかはわからない。

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

フランが入ると同時に雄たけびが聞こえた。びくつとして、フランは声の聞こえ

る二階にどたとたと駆け上がった。二階に上がると、声のするそこはガラス戸になっていたのがらつと開けた。

部屋は畳敷きで狭い。蒲団が部屋に敷かれていてその上で青い髪の少女とフランと同じ金髪の少女が寝転がっていた。叫んでいるのは青い少女、チルノだった。無論もう一人はルーミアだ。

チルノは何かのコントローラーを持っていた。部屋の隅に置いてあるブラウン管テレビを凝視しながらチルノは体を横に傾けながら、叫ぶ。

テレビに映っているのは何かのレースゲームだった。しかし、かなりキャラクターはコミカルに描かれており、亀だとか姫様のようなものだとかキノコだとか、それだけでなく髭面のおっさんのようなキャラがゴーカートのようなマシンで争っている。

いわゆる「マリオカート」である。

どことなく映像が古くさいのはこのリサイクルショップに合った中古のゲーム機を使っているからだ。テレビにつながったゲーム機は黒い筐体で、コントローラーが四つ刺さっている。何の数字かはフランにはわからないが「64」と書かれている。

画面は三分割されているのはプレイヤーが三人いるからだろう。ルーミアもコントローラーを持っていて。そして分割された画面で動いていないキャラが一人いるが誰のキャラかは無表情で部屋に戻ってきたところが膝をがくと蒲団の上で四つん這い

になったことからわかるだろう。フランを迎えに行っている間にゲームが進行しているのだ。その絶望は深い。

悔しげに床を叩くころもチルノもルーミアもパジャマを着ている。ルーミアはフランに気が付いたらしくにぱつと笑った。それが挨拶なのだろう。可愛らしいが声を出さないあたり、ものぐさからのことかもしれない。

チルノとルーミアをここに連れてきたのはフランと三月精であった。何故この場所かと言うと、良く子供と遊んでいる秦　　ころろが住んでいるからだ。半ば無理やり泊まり込んだのだが、ころろは嫌そうな顔一つせず受け入れてくれた。実際ゲーム仲間ができて楽しいそうに床ドンしている。

ころろの家に今夜秘密で集まろうと計画を立てたのはフランである。三月精は夜歩きすれば「殺される」ということで来ない。それでここに来たフランだが、チルノとルーミアがゲームをやっている姿を見てうずうずしてしまふ。いつもは咲夜や美鈴と遊んだりするが、それとは少し違う。

「チルノ！　負けたら交代ね」

「あたいは負けない！」

る。それなのに遊び尽くしている。

とはいってもカセットの交換タイミングはできとうである。僅かなアクシデントがあれば「違うゲームしよう」となるのだ。

——ピンク色の丸い大食いの生物を操り、宇宙を旅するゲームをやった時は意外にルーミアがハマった。その物語はクリスタルが砕けたから集めてとかいうストーリーだったけど、アクションゲームである。

ルーミアはそれをうまくプレイするのだ。ピンク色の生物は敵を食べるとその能力を吸収することができるという特性がある。ルーミアはチルノが食べられたらなどと考えながらコントローラーを動かす。

「わかったわ。ここはこうミックスするのよ!」

「おおお、あたいたルーミアのこと阿保だと思ってたけど、頭いい!」
チルノの本音に渋い顔をした少女は無言になった。

——ロボットをカスタムして戦う対戦ゲームは白熱した。何故かというと妙にころが強いのである。明らかにやりこんでいた。このゲームは最初サイコロみたいなロボットが変形、人型になって戦うのだ。幻想郷で最強の称号を賭けて戦っていたころの心に触れる物があったのだろう。

フランが負け、チルノがシステムを理解できず。ルーミアが「違法パーツ」を使ってこころに惨敗した。三人は悔しげにこころをみると、彼女も逆に三人を見ながら言う。「ふっふっふ」

こころは不敵に笑う。表情は変わらない。

「もうさっきのようにはいかないわー。外に出る予定もない！ さあ、かかってこい!!」と勝ち誇った上で言った瞬間にゲームから種目が「プロレス」に変わった。しかもバトルロイヤル制の三対一である。つまり他の三人が一齐にこころに「かかっていった」のだ。

こころは「ちよ、ちが」と言いながら蒲団の上でもがきながらタップした。だが誰もプロレスのルールなど知らないのでやめなかった。

——そして「弾幕ごっこ」も行った。もちろんゲームのことである。

とあるキツネの率いる傭兵団が戦闘機に乗って宇宙を駆けまわるシューティングアクションゲームである。対戦よりもストーリーモードを一面ごとに交代でまわしていくことを四人は選択した。

ゲームの持主であるこころはともかく、他の三人はほぼ初心者だったが、これには適性があったようでフランがうまかった。元々この中で弾幕ごっこが「うまい」からの

かもしれない。

画面上でフランが操る戦闘機が敵機体を撃墜するたびに歓声上がる。八割はチルノである。彼女は誰がゲームをやっているも盛り上げてくれるのだ。口性はないが、それでも正直だからだろう。

そしてまた画面でフランが敵を倒す。「アンドルフオジサーン」という断末魔を残しながら撃墜数がプラスされる。それを見てフランもよしと小さくガッツポーズをする。

このあたりでこころは台所に引っ込んで、お菓子を両手いっぱいにつけてくる。しかし飲み物がないので、もう一度戻ってペットボトルを人数分持ってきた。

——ピッピカチュウ！

そんな可愛らしい声がテレビから聞こえる。そこには黄色いネズミがこちらをつぶらな瞳で見ている。このキャラはもちろんのことポケモンの人気キャラ兼フラン身代わりのピカチュウだ。これもゲームの一種だが、なんとこのゲームは画面上のピカチュウと会話できるのだ。専用のインカムが必要ではある。

チルノは耳にそのインカムをして、声を発する。

「ピカチュウ！ あたいの名前は！チルノ！」

ピカチュウが言葉を返す。

『ピッピカチュウ！』

につこりしてピースを指で作るピカチュウ。喋られるといっても所詮はプログラム。明らかに話を聞いていない。チルノはそれに激昂した。大声で叫ぶ。

「チ！ ル！ ノ！」

『ピッカー』

ピカチュウが何を勘違いしたのかアイテムの「玉ねぎ」を持っている。馬鹿にされているとチルノは感じてインカムを外す。

「だめね。こいつルーミアみたいっ！」

急にやり玉にあげられたルーミアはハツとして抗議しようとするが、フランがその前に言う。その言葉はルーミアに新しい現状認識を呼び起こすことになる。

「あんたの子分よりは頭いいんじゃない？」

「……………いぶん？」

ルーミアは考える。「子分」と「あんた」は誰を指しているのかを後者はチルノだろうが、前者はどう考えても自分である。彼女は意外に周りからは階級が下に設定されていることに頭を抱えた。いつからチルノのおまけになったのだろう。

実際のところはポケモン好きなフランからすればピカチュウを馬鹿にされるのはあまり気分がよくないので抗議したのだろう。もしもこの世の中でポケモンを全面的に馬鹿にするものがいれば許せない。

そんな中でこころはぼりぼりと「ポツキイイー」というお菓子を食べている。表情は変わらないがずっと画面のピカチユウを見ている。

——それからゲームをやり続けた。「万丈と数井」というゲームやゴリラの活躍する物、先ほどのレースゲームのキャラがテニスしたりパーティーしたり、それでなければ爆弾を投げつけ合う対戦ゲームをしたりと四人は心行くまで遊んだ。

フランが最初持っていた荷物には遊ぶ道具が多数入ってはいたが、それも遊ぶうちに忘れていた。子供の遊びではよくあることである。結局遊び切れないほどに彼女達は選択肢を持つている。楽しければそれでいい、それは少なくとも精神的に大人になれば消えていく感覚だろう。遊びにすらも目的を求めることを、子供はしない。



こころはテレビを消した。蒲団の上ではチルノがルーミアにかぶさって寝ており。その横でフランがコントローラーを持ったまま寝ている。すでに時刻は日付を跨いでいる。天狗すらも寝ているかもしれない。

こころは無表情でうつらうつらしながら、食べかすなどを片付ける。その時に部屋に誰かが入ってきた。女性である。すらっとした体にびったりしたシャツを着て、色の良

いジーンズを穿いている。これもびっちりしている。

髪の色は紫。肩より少し長い。それよりも透き通るように肌が白い。まるで陽の光を受けたことがないように。そう彼女は竜宮の使いであり、永江 衣玖ことリサイクル ショップ店長代理である。

「おわかりました？」

衣玖はこころに聞く。桃色の髪をした少女はこくと頷く。暴れまわったからかパジャマの首元がだらしなく緩んでいる。ボタンが一つ外れていた。それを見つけた衣玖は「ここ、外れてますよ」と首元を抑えてボタンを留めてあげる。

「それにしても元気な方々ですね。ここまですはおもいませんでしたけれど」

衣玖は「寝落ち」した少女達を見る。微笑を浮かべている彼女に悪意はない。形のいい唇からふふつと笑いが漏れる。そもそも迷惑に思っていたなら部屋に乱入してやめさせることもできただろう。それをしなかったのは性分もあるが、好意的に見ていたかもしれない。

「店長はまだ帰ってきませんかからね……。困ったことですが、この子達を明日明後日泊めるくらいは大丈夫でしょう」

こころはぐつとガッツポーズをする。衣玖はそれを見て眼を閉じる。店長代理ということはこの店に住む者たちのまとめ役でもあるのだが、そんな役は自分にはあまり向

後を付けておいて、場所を確認すると。近くのチェーンのカフェで時間をつぶしていたのだ。流石にもう遅いから迎えに来たのだろう。

衣玖もだいたい空気を読んだらしく。詳しく話を聞かずに家にあげた。フランからすれば咲夜たちには脱走が秘密かもしれないが衣玖にはそれは関係ない。

「夜分遅くにごめんなさいね」

二階に上がった。咲夜はフランをおんぶしながら衣玖に言う。フランはうーんと唸りながら、眠たそうにしている。それに「さ、妹様帰りますよ」と咲夜は問いかける。それに寝ぼけながらだろうフランが「帰らない……」と返す。

咲夜はちよつと考えて言う。

「妹様。美鈴が寂しがりますよ」

「……………か、える」

殆ど眠ったままフランは言った。咲夜は彼女にくすりとする、衣玖にもう一度お礼を言った。口調は砕けている。彼女は敬語を使うべき相手かどうかは見定めて使う人間なのだ。

「それじゃ。今日はありがとう」

「いえ、私は何もしておりません」

衣玖は本当に何もしていないが、ただこうは言った。チラリと他の寝ている少女達を

見てからでもある。

「よかつたらですが、明日近くでお祭りがあるそうです。その吸血鬼の子もまわつてみたらどうですか？」

咲夜は一瞬きよんとして、ああと何かを飲み込んだように言う。要するにフランがいなくて寂しがるのは美鈴だけでないということだ。だから衣玖としてもその者たちが寂しがらないように手を打ってあげたいのだろう。咲夜もそれに載った。

「それじゃあ明日、家のものに妹様を送らせるわ。その時はよろしく」
「ええ、私は……行くかはわかりませんが……」

咲夜は衣玖の言葉にまた薄く笑つて。階段を降りる。寝ぼけたフランが肩に噛みついてきた時にはびつくりした。

14話 B

飲食店には「賄い」という文化がある。それは店ごとに違う形式をとっているが、大体的には一緒である。従業員の食事を雇用主である店が保障するものだった。無料で提供するところもあるし、また「格安」で提供するところもある。

河童の海の家もそれくらいは行った。元々借金の方に連れてきた者たちと聖 白蓮が依頼して修行のような形で連れてきた者たちではあったが、河童にもその程度の温情はあるのだ。あとで材料費を請求すればいい。

すでに店に客の姿はない。波の音が浜辺から響いてくる。

日付の変わった深夜であるから、それだけこの海の家「夜」は長かったのだろう。それだけでその従業員達の空腹と疲労も推し量る事が出来る。青髪の少女と毘沙門天は常時水着だったので精神的にも疲れていた。

そんな疲れた体でテーブル席に座った雲居 一輪は他の者たちと同じく「うみんちゅ」のTEEシャツを着ている。流石に仕事が終わってから水着を着ている意味はない。正確に言えば中に着ているので、まだ脱いでいるわけでもない。下にはハーフパン

ツを履いていた。

ただ、妙に丈が短い。立ち上がるとお腹が見えてしまう程度の長さなのは単にサイズがなかったのだろう。元々からしてこの海の家で働いているのは妖怪の中でも小柄な河童達であつたから仕方なかつた。大きなサイズのシャツには限りがあるのだ。

その一輪はごくりと息をのみ、緊張した面持ちで座っている。いや、横には水蜜や寅丸も表情を強張らせている。彼女達の視線は一点に集まっていた。後ろの方ではわれ関せずとばかりにナズーリンがテレビを見ている。彼女は「子供がお使いをする番組」をぼけえと視聴しているのだ。

命蓮寺の面々が緊張するのには無理はないだろう。なぜなら彼女達が見ているのはその「長」である聖人、聖白蓮なのだ。彼女は一輪達の座っているテーブルとは別の場所に座っている。

緩やかなウェーブのかかった髪にぱつちりとした目。そして長い、睫毛。それでいて穏やかな微笑を浮かべているような柔らかな表情。そして「うみんちゅ」のシャツ。まさに聖人と呼ぶにふさわしい。

そんな白蓮の前に湯気を纏つた「料理」が置かれていた。説明する間でもなく「賄い」であるのだが、それだけで他の少女達が緊張するわけがない。問題はその料理だつた。

皿の上に野菜と一緒に置かれた丸い料理、皿の両側にはナイフとフォークが置かれている。

——ハンバーグ。程よく「焦げ」のついた丸いそれが、白蓮の前に置かれている。そして白蓮はその前で両手を合わせて「いただきます」と言う。手を合わせただけで絵になりそうな仕草は彼女の魅力だろう。だが、それも問題ではない。

肉を食べるといふのは仏教における禁忌である。正確にいうと殺生を含むような物を食べるのが禁忌なのだが、その中でもハンバーグなどという物は許されるものではない。しかし、彼女は食べようというのだ。

白蓮はナイフとフォークを持って、ハンバーグを切り分ける。意外に手慣れた手つきをしているのは練習したのかもしれない。いつもは箸である。細かく切り分けて、その一かけらにフォークを刺す。それから口に持っていく。

白蓮は食べた。口に入れてからナイフを置き、手で口元を隠しながら咀嚼する。寅丸などは口を小さく開けて驚愕の表情をしている。仏門の中では見る事ができない、いや本来であれば見てはいけないものなのだ。

——近藤、あうとー。

誰も一言もしゃべらない静寂の中、テレビからなんか聞こえてくる。ナズーリンはニコリともせず音量をリモコンで下げる。誰もそちらを見ないが、ネズミも場の空気を

壊さないようにという程度は考えているらしい。

当の白蓮は目線をテレビに向けながらゆっくりと咀嚼する。よく噛んでゆっくり食べるのは癖というよりは作法なのだろう。彼女はごくりと口の中の物を飲み込んで、くるりと振り向いた。

そこに立っていたのはハンバーグを作った者。古明地 さとりだった。皆と変わらずにシャツを着ているが頭にはタオルを巻いている。後ろでは同じ恰好の河童達が腕組をしている。

「さとりさん……これは本当に大豆で作ったのですか？」

「ええ、一切肉類などは使っていないわ……」

「……すいこ」

白蓮は感心したようにうんうんと頷く。そう今食べたのはある意味で現代の料理技術の結晶たる「大豆ハンバーグ」であった。これにはさとりが言ったように全く肉類を使っていない。それどころか仏門で禁忌とされる材料も使っていないのだ。

白蓮はそれを気にいったのか感心しきりでさとりに聞く。

「これには……しゃきしゃきとした食感があったのですが、これは？」

「レンコンよ……入れるとチルノが喜ぶから入れているの」

「なるほど」

て、胸元に赤いリボンを付けている。彼女は丘の上にあるホテルで風呂に入った後、坂道をゆつたりと歩いた。別にホテルに宿泊する気はない、風呂だけは別料金で入れたのだ。

夜の海が見渡せる坂。潮風が心地よい、街灯はないが月明かりがある。しつとりと濡れた青い髪を片手で抑える。彼女はふと、立ちどまって遠くを見ると海の一点が明るい。船が数隻浮かんでいて照明を煌々とさせている。イカ釣り漁船の群れだろう。

「あんなものも……天界にはないわ」

天子は思う。「イカ釣り漁船」など取るに足らない物だろう。だが、彼女は立ち止まって眺める。坂から見下ろすと湾曲した浜辺とその周りに茂る林も見えた。浜辺の一点にはまだ光があるのは河童の店だろう。

天子は眼を閉じる。そうすると潮のにおいがする。彼女は大きく伸びをした。月光に彼女の影が伸びて、コンクリートの上にくつきりと表れる。それを天子が見る事は無い、自分の影など見ることはできない。

「あつ居たな」

「？」

天子は声のした方に目をやる。坂の下には慧音が手を振っている。自分を探しに来たのだろうか。天子は思ったが、それより先に慧音が走ってきた。彼女はあの店のシャ

ツを着ている。珍妙な文字と天子は思った。

慧音は天子に近づいてから言う。

「全くどこに行つていたんだ？ やつと食事になったから探しに来たんだ」

「そ。ありがとう」

少々そつげなく天子は返す。彼女は慧音とはそこまで親しくはない。だからちよつとだけ態度が固くなつてしまつた。以前は幻想郷の者たちに「忠言」などという似合わないことを言つて回つたこともあるから、その時も固い態度を取つていた。

——ぐぎゆるる

だが、お腹は正直だつた。突如として鳴つた「お腹」を天子は抑えて、罰の悪そうな顔をする。僅かに頬が紅くなる。慧音もくすりとしたが、それには触れず言う。

「さあ、行こう。ご飯はみんなで食べた方が美味しい」

「……………」

慧音は手を差し伸べる。それに天子は考えるような、窺うような眼で彼女を見る。慧音は柔らかく笑みを浮かべている。それは自然で、見ていると安らぐような、安心させてくれるような顔だつた。天子は口を開く。

「そうね。そう、みんなで食べた方が美味しいわ。だからみんなで来たのよ。私も最初はそこまで考えていなかったけれど、それでも退屈するよりは良かったから、だから

……ここに来たの」

あまり考えずに来たと聞いて慧音は苦笑する。確かに海に来るときは彼女もあまり「考えていない」ように見えた。だが少し興味もある。天子は坂の上の何かを見てきたのだろう。歴史的建造物かもしれないし、何かお土産屋さんでもあったのかもしれない。だから聞く。

「この坂の上で何をしていたんだ？ なにか面白いものでもあるの？」

「……あるわ。見るだけで楽しいものが、たくさんね」

「へえ、じゃあ、私も朝になったら……あ、いや仕事があるか……」

慧音は「仕事があるか」と言って少し嬉しそうにする。仕事があることがそれだけで嬉しいのだ。天子は何故慧音が嬉しそうにしているのかわからないが、くすつと笑顔をつくる。それにつられて慧音も笑う。笑顔が笑顔を呼んでくれる。

「それで？ ごはんって何かしら？」

「あ！ そうそれだが、チルノが大好きなハンバーグで……あ、だ、大丈夫。肉は入っていないから安心してくれ」

「ハンバーグ？ なのに肉が入っていない……あつ、ササミハンバーグね！」

「……………」

慧音は苦笑いする。

いる。やはり焼けているらしい。

水蜜はパーカーを着ていたので腕も白い。前は開けていたがワンピース型のぴっちりした水着を着ていたのでその部分は日焼けしていない。彼女はむしろ日焼けした方がいいのかな、と少し思いつつ目の前でおいしそうにハンバーグを食べている一輪を見た。

幻想郷の者から見れば一日中破廉恥な格好をしていた彼女は、ナイフとフォークをぎこちなく使かっている。しかし水蜜は疑問に思った。

妙に肌が白い。一日中肌を見せていたとは思えない。少しは焼けている気はするが、あまり普段と変わらない。

「ねえ、一輪?」

「なにかしら?」

「なんだか、日焼けしていないような気がするのですが……なぜですか?」

一輪はフォークの先を口に咥えたまま、固まる。無言でそのつぶらな瞳をくりつと動かして水蜜を見る。何もしゃべらないのは何か考えているからだろう。日焼けしていないのは単に「日焼け止め」を念入りに塗っただけなのだが、よくよく考えたら何もそんな対策をすることがそういうことを気にしているようで、少し恥ずかしくなる。だから喋らない。

中では寺の者たちが食事をしている。一輪と水蜜が奥にいて。白蓮がこいしとタブレットで遊び、寅丸とナズーリンがラムネを飲んでいる。

探しているのは彼女達ではない。お燐はさとりを探した。厨房の方に足を向けて、覗きこむとそこには桃色の髪をした少女が何も食べるわけでもなく座っている。何かを待っているのだろう。

お燐はおそるおそるその少女に声を掛けた。

「さ、さとりさま。よ、よろしいですか?」

「……お燐。お帰りなさい。お空は?」

「えっ。あつ」

見るとお空がない。逃がっている。核の力を失ってから妙に自信を喪失した彼女は極端に打たれ弱くなっていた。一度手に入れた巨大な力を失った喪失感はずさまじかったらしく、一時期とても落ち込んでいた。今でも突如として「発作」が起こる。

「いつの間に、おくうう!」

「ど、どうしたの? お燐」

「な、なんでもありません。そ、それよりもさとりさま。ごめんなさいっ! こいしさまがどこかに行つてしまいました」

「こいしなら……あそこにいるけど……」

「えっ?」

さとりは指さす。その先に客席で白蓮と遊ぶ少女がいた。手に持っているのは「枝豆」の袋にどこからか持ってきたタブレッド端末。それを見ながら何か楽しそうに白蓮と話し込んでいる。無論こいしである。

「……あんなところに」

お燐はがくと膝をついた。探し回って疲れたこともあるが、ほつとしたこともある。ただこれからお空も探さないといけないので、それは気が重い。そろそろ自信を取り戻してもらわないといけないだろう。

そう考えるお燐をさとりは不思議そうに見つめる。何を考えているのかは「わからな

い」がさとりは膝をついたお燐の顎がいい位置にあることに気が付いた。だからさとりも座ったままそこに手をのぼして、撫でる。

「あ」

ごろごろごろ。本能的に目をつむってお燐は気持ちよさげにする。さとりは手馴れているのかくすぐる様に撫でる。お燐はそれで気分がよくなってしまふ。猫の本能には敵わないらしい。

さとりは撫でながら言う。

「今日は(ご)苦勞様……(ご)飯を作っているからお空も来たら食べなさい。それにもう遅い

彼女は外に出てきたのだ。別に馴れ合う気はない。

少し離れているだけで海の家の中は見える。こいしがお空に肩車されて笑いあっている。なぜそうなったのかはナズーリンにはどうでもいい。ただ、海の家から誰も出てこないことを確認したのだ。

ナズーリンは一人ではない。彼女の前には短い金髪を月に輝かせる「ご主人様」がいる。彼女を呼んだのはナズーリンだった。どうしても今日の内に聞いておきたいことがあったからだ。

ナズーリンは思う。

最初からというよりは、今日の夜から思っていたことだ。

それはご主人こと寅丸のことについてだった。彼女は何か違和感があるのだ。それも朝や昼にはなかった違和感である。今の寅丸は何か足りない。

くすんだ銀髪のネズミはそれが何なのか見当がついている。だが、それを全員の前で言う気はない。以前は宝塔だったが、まさかこんなことがおこるとは「実は思っていた。しかしタイミングが悪い。海に来る前にそうしてくれればいいの」と感じる。以前は星蓮船が動いている時にそれをした、そのせいでぼったくられたこともある。

「ご主人様」

先に書いた通り、ナズーリンは寅丸を海の家から出て浜辺に連れてきたのは他の者の眼を憚ったからだ。寅丸もなぜそこに来たのかわかったらしく何も言わない。だからナズーリンが続けた。

「タブレッドは、どこにおいたんですか？」

「……………なくしました」

ナズーリンはこめかみに手をやった。どこに落ちてきたのであろう。もはや寅丸の落し物癖を責めようとは思わない。しよぼくれているのを見るのも好きではない。やれやれとネズミは首を振って責めるでもなく文句を言うでもなく、探そうと思う。

しかし、どこに落ちてきたのであろうともナズーリンは思った。それが壮絶な戦いの幕開けとは気が付かなかった。

14. 5話 B

旅をする上で最も問題になるのは宿泊施設である。それは旅費の大部分を占めることが多く、そもそも確保できなければ大変なことになる。もちろんこの河童の海の家に働きに来たもの達も例外ではない。

だが、彼女達には準備などは欠片もしてなかった。それもそうだろう、寺の住民は拉致されてきたのであるからその計画などない。アパートの者たちは金がない。正確に言えば慧音が持っているが、本人も自分の財布にお金があるということを忘却しているくらいがある。それも染みついた「貧乏」がさせるのであろう。

だから食事を終えた一行は「寝る」という問題に突き当たった。海の家で泊まるというよりは、横になることすらも人数的に実質不可能である。何人かは砂浜にごろ寝となるだろう。それはほぼ全員が一致した見解で「嫌」だった。一人、聖人はそれでもよかつたが何も言わなかつた。

そこで妥協案を示したのがにとりという「首領」が不在の河童達である。彼女達はここで数日暮らしているから、別に海の家で寝てもいいのだが、寝床が狭いのはどう考えても「嫌」である。ある意味、さとり達「非正規労働者」と河童達「正社員」の利害は

一致した。これは稀有なことかもしれない。

そこで全員が決めたことは一つである。「河城 にとり」こと河城商会の代表取締役が帰ってくる前に宿泊施設を確保して、その上で領収書を切ってしまうおうというのである。こうすれば基本的に全て会社持ちになる。後でにとりが何か言ってきたら、それはそれで労働基準監督署に駆け込めばいいのだ。いろいろ守っていないことを逆手に取るという高度な戦術を最近の河童は覚えてきた。

余談だがこのころ河城 にとりは巫女の手の中で船酔いで死にかけている。

しかし、時間は深夜。チェックインできるホテル、旅館は限られている。それでも「寺」や「アパート」の住民はこのあたりの宿泊施設には詳しくないので、全て河童達の手ゆだねられることになった。

そういうことでやっとこきで見つかったのが丘の上にある小さな旅館であった。流石に一人一部屋などは無理だが、幸運なことに和室部屋が空いていた。普通ならば数人で泊まるべきものだが、寺、アパート、天子、河童と合わせると二桁を超える。こうなれば和室というよりは、タコ部屋といつていい。

とりあえず深夜に電話したことを河童達は詫びつつ、二部屋確保した。その程度ならばにとりも領収書を認めるかもしれない。認めないのであれば、その時はその時である。死ぬまで戦う。河童として一枚岩ではない。にとりはあくまで「盟主」であり「主人」

隣を見れば水蜜が日焼けのまま湯船に入ってからすぐに出て、タイルの上でのたうち回っているが一輪は無視した。

一輪の青い髪がしつとりと濡れている。体が少しぴりぴりするのは自分も日焼けをしているのだろう。日焼け止めをぬっておいてよかったと彼女は想う。それから全身の力を抜いて、湯船の壁に背中を預けた。

一輪は上を向く。ぽとつと真後ろにタオルが縁石に落ちたのが気にしない。彼女は細い腕を「うーん」と伸ばしてから、体をのばす。肌をお湯が流れて、照明の光にきらきらと光る。両手を上げて、腋を伸ばすようにすると湯船から体が少し出て、胸元をお湯が流れていく。

「明日……仕事したくないなあ……」

現実的なことをぼやく尼。リラックスするとじわじわと眠たくなるが、眠りたくはなくなる。なぜなら寝床に入れば「明日」だからだ。仕事が待っている上に「びいちばれえ」をするということには彼女は乗り気ではない。きついということよりも恥ずかしいからだ。

それでも一輪は顔をぶるぶると水気を振って払い、自分の右肩を揉む。体がお湯に包まれていると、眼がトロんとしてくるのは、疲れているからだろう。彼女は寝てはいけ

ないとぼんやり思いつつ、こくりこくりとしている。

その頭を誰かがぼんと押す。一輪が後ろを見ると、水蜜が覗き込んで来た。水蜜は日焼けをして小麦色の肌と「そうではない肌」がまじりあっている、ただ彼女は風呂に入っ
ては来ない。彼女はタイルに手をつけて湯船で眠りかけていた一輪を起こしたのだ。

「眠ってはだめですよ、一輪」

「……そうね」

といいつつ一輪はこつくりと首を傾げる。水蜜は少しむっつとして、自分の黒髪を指でつまむ。湯船に入っていないなくても湯気でしっとりしている。だが、どことなくくせ毛である。

水蜜が見ると、目の前で「船を漕いでいる」一輪の髪は艶々している。実は「むっつとした」のは注意したのに一輪がすぐに寝そうになっ
ていることではない。髪の質について水蜜はむっつとしたのだ。可愛らしい嫉妬と言っ
ていいだろう。

そこで水蜜はにやっつと笑った。今は一輪は無防備にも自分を背後にしなが
らうつらうつらとしている。だから、水蜜はそおつと両手を広げて一輪の両肩口から手を回す、そして彼女の前に手を出してそれを掴み、いたずらしてやろうとしたのだ。

白い歯を見せて、声を噛み殺す水蜜。顔には薄く笑いが張りついている。いきなり「掴まれた」ら一輪もびつくりするだろうが、別に減る物でもない。だから、水蜜はペ

ロツと自分の唇を嘗めつつ、そおつと手を動かした。

そこでびくつと一輪が肩を震わせた。水蜜に反応したのではない。自分が寝ていることに驚くように、眼を覚ましたのだ。

「はっ!? 危ないっ、今寝て……ふっ」

「あ、ああ、き、急に起きるからっ」

いきなり起きた一輪にびくりした水蜜は、回していた腕を反射的に締めてしまった。だから必然的に一輪をヘッドロックすることになる。「うげえ」と唸る一輪の驚きもひとしおである、というよりはいきなり同僚に首を絞められたのだから意味が分からない。

あわてて水蜜は手を離す。ある意味抱き付くような恰好だったのも恥ずかしい。ただ、一輪はげほげほと咳こみつつ、じろつと後ろを向いた。眼が光っているのは怒りを表しているのかもしれない。

「な、なんで首を絞めた……っ?」

「い、いや。今のはわざとじゃないんですよ?」

今のヘッドロックはわざとではない。この言葉を聞いて、誰が信じるだろうか。一輪はむかつと来て、立ち上がる。じゃばつとお湯が彼女の細身の体を滝のように流れているのが、その勢いを表しているだろう。彼女は近くに合った桶を持って、お湯をつめて

水蜜に掛けた。

水蜜は一輪が立ち上がったのに驚いて、お尻をぺたんとタイルにつけた格好だったので体中にお湯を被った。普通に考えれば単に「お湯を被っただけ」ともいえるが、今日の彼女はそうはいかない。

「ぎゅああああー！」

断末魔の悲鳴のような何かを出しながら、水蜜はタイルの上でグネグネとのたうつ。演技ではない、純粹に日焼けにお湯を被って痛いのである。むしろささやかな復讐としてお湯をかけた一輪の方が罪悪感を持つてしまう。

「ふ、ふん。そこで反省するんだな！」

それでも一輪はそっぽを向いて腕を組んで強がりつつ、ちらつちらつと一輪は水蜜に心配そうな目線を送る。天性、甘い性格なのかもしれない。



そんな水蜜と一輪の悶着を見ている紅い眼が二つあった。彼女は洗面台でバスチェアーにちよこんと座って、頭を洗っている。くすんだ灰色の髪にシャンプーを付けてごしごしと丹念に洗っている。時折泡が落ちて、体に付いたりもするがあまり気にしない。風呂場で気にする方が可笑しいのかもしれない。

彼女はネズミである。無論ナズーリンであった。

よく誤解されるがネズミは別に「汚いことが好き」なのではない。単にそういう場所に身を隠しているだけで、実際は綺麗好きなのである。そもそも汚いことを好む生物など殆どいない。

ナズーリンは一輪達を冷たく一瞥すると、シャワーのノズルを掴んで頭にお湯をかける。丁寧に、丁寧に泡を落とす。それが終わると頭を振って、水気を払う。その仕草はネズミである。それでも綺麗に髪を洗えたと、こつそりと誰にも見えない様に笑みを浮かべる。そのあたりだけは女の子として可愛らしい。

ところでナズーリンは一人ではない。彼女の少し離れた場所には短く切った金髪にシャンプーの泡を付けたまま瞑想している寅丸。星が居た。何故かわからないが彼女は、眼をつぶったまま背筋を伸ばしてバスケアアーに座っている。

微動だにしない寅丸。膝に濡れたタオルをかけている。

ナズーリンは一輪達を見ていたのよりも冷たい目で寅丸を見る。じとおとした紅い眼は何か言いたげなのだが、何も言わない。寅丸も動かない。だからナズーリンもはあとため息をついて、声を掛ける。

「ご主人様……もしかしてシャンプーが眼に入ったんですか？」

「……………はい……………」

寅丸は瞑想しているのではない。眼が痛くて開けられないのである。それにはネズミもやれやれと肩をすくめて立ち上がる。彼女の手にはお湯がでているシャワーが握られていた。彼女はとつと彼女に近づいてシャワーのホースが伸びる限界が来ると、「ほら、こつちを向いてください」

「? わっ」

お湯をご主人様に向かって掛けるネズミ。寅丸は手でガードするが仕方ないのでごしごしと顔をこする。それでも眼が痛いらしく、眼をクシクシと指でこする。

「駄目ですよ……眼をこすっては」

ナズーリンはシャワーを止めて寅丸に近づく。そして彼女の顔を覗き込んで「眼を開けてください」と言う。素直に寅丸が眼を開けると、少し赤い。

「赤くなってるじゃないですか……」

ナズーリンは一つため息をつく。それで彼女は寅丸の前の洗面台に手を伸ばして、据え置ききのシャンプーを手に取る。彼女はそれを小さな手にどろっと垂らして、寅丸の頭に付ける。

「な、何をするんですか、ナズーリン!」

「頭洗ってあげますよ。前向いて。ついでに眼はしつかりと瞑っていてください」

抗議しようとした寅丸だが、ナズーリンは気にせず「はいはい」とごしごしと手を動

かす。寅丸は少し背を丸めた。まるで猫の様である。ただ、シャンプーに負けても一応は毘沙門天なのだ。そしてネズミはその使いである。

「かゆいところはありますか」

けだるげに聞く毘沙門天の使いに毘沙門天は首を振る。随分とおとなしいのは気持ちいいのかもしれない。いつの間にか寅丸はバスチェアの上で姿勢を崩して、少し内またになる。実際ここまで素直なのは相手がネズミだからかもしれないだろう。気を許しているともいえる。

寅丸の頭を一通り洗い終えるとナズーリンはシャワーで洗い流す。泡の下から艶やかな金髪が現れて、ふんつとネズミは鼻を鳴らす。うまく洗えたことに少々得意気なのかも知れないが、彼女はそんなことを口に出すネズミではないので真意はわからない。

◇◇◇

一輪と水蜜とナズーリンと寅丸の四人は並んで湯船に入った。一人だけ歯を食いしばって何かに耐えながら、だからだと汗をかいている船長がいるがせっかく風呂に来たのに入らないのはもったいないのだろう。覚悟すれば耐えることはできる。

誰も何も言わない。ただ湯気が水面から立ち上って消えていく。一輪は自分の手を伸ばして、肩を撫でる。お湯が静かに流れて、彼女の肌を流れていく。

そして歯ぎしりをする船長。体の至る所が痛くて仕方がない。水着を着ていたとこ

ろは無事であるが、それ以外が痛いのだ。彼女こと水蜜はしばらく耐えたがたまらず立ち上がった。ざばあとお湯が跳ねて、一輪の顔にかかる。だが水蜜は気にする余裕もなく、湯船から上がった。

水蜜はぺたぺたと可愛らしい足音を鳴らしながら、脱衣所に向かう。歩きながら大きな欠伸を一つするあたり、彼女も眠いようである。元々トウモロコシを一日中焼く仕事をしていたので、疲れたのかもしれない。

彼女は脱衣所に出るつもりでサウナ室を開けて入っていく、寝ぼけているのかもしれない。幸いもう深夜とすることもありサウナ室に熱はこもってはいないので、辛うじて干物になる危険性からは逃れることができた。

水蜜がいなくなったのでナズーリンも立ち上がった。彼女は寅丸に「ご主人様」と言いながら、湯船から上がることを示唆する。寅丸も立ち。一輪もそれにつられて湯船からあがる。

三人は並んでペタペタと足音を鳴らす。濡れた足でタイルを歩けば、そのような音が鳴るのは必然であろう。端的に言ってしまうえば、中年の男性でも鳴る。



「あれ？　水蜜はどこ？」

と脱衣所の籠から下着を取りつつ、一輪はあたりを見回した。どこに行つたかと問われればサウナ室である。だが、ここにいる者はネズミを除いて誰も彼女の行方を知らない。実はネズミは水蜜の行動を見ていたが、止めることもせず呼びに行くこともしなかつた。

ナズーリンはさつさと着替えて、浴衣になつている。青の生地やささやかな「藤」の文様のはいつたそれは旅館からの借り物である。彼女は腰帯をしつかりと締めて、胸元を整える。白い胸元がちらつと見えた。ただ、直ぐに浴衣の前を整えた。

「さて、寝るか」

一輪が水蜜を探していることも、その水蜜が妙なところに入り込んだことも知つていて、自分のことだけを口走るナズーリン。彼女は着替え終えると脱衣籠を元合つた場所に収納して、一足先に風呂場から出ていこうとする。

その時チラリとご主人様である寅丸がバスタオルで頭を拭いているのが見えた。彼女は一輪達とは少し離れた場所で着替えている。だからナズーリンもやれやれと思ひ、脱衣所にあつた丸椅子に腰かけた。ご主人様を待っているのだろう。

その寅丸はバスタオルで頭を拭いてからナズーリンと同じように浴衣に着替えた。色とは違い深い藍色である。彼女はふうと息を吐いた。振り返ると一輪もナズーリンも着替え終わっている。ちなみに一輪の浴衣はナズーリンと同じものである。

「さて、部屋に戻りましょうか」

寅丸はそう二人に声を掛ける。一人減っているのにはあまり関心を払わない。もしかしたら彼女も疲れているのかもしれない。特に精神的には彼女と一輪の疲労は相当なものだろう。タブレットもなくしているのだ。

そうして三人は脱衣所から出ていく。火照った体で廊下に出ると、少し涼しかった。

◇◇◇

三人が去ってからひよっこり顔を出した女性はあたりを伺いながら、脱衣所に入ってくる。手には着替えの浴衣を持っているから、風呂に入りに来たのだろう。ただ、どことなくその女性の眼が輝いている。

長いウェーブのかかった髪は頭頂から毛先降りるまで、だんだんと黄金色になっている。もちろん彼女こそ聖人、聖 白蓮であった。何故か彼女は、己の弟子たちと風呂へ一緒にはこなかった。それには理由がある。

表向きの理由は彼女に課せられた仕事があったのだ。それはすでに終えて河童に引き渡している。明日の朝にでも公開されるだろう。だが、それとは別に理由もある。すなわち「裏」の理由である。

「……………ふふ……………」

柔らかく笑う白蓮。お昼の時の彼女とは別の表情である。まるでいたずらを思いつ

いた少女のような純粋な笑みを彼女は持っている。事実、純粋なのだろう。だからこそ妖怪を助けようとして人に封印された経歴を持っているのだ。

白蓮は脱衣籠の前に来ると浴衣をいれる。投げいれてはいない。そのあたりの作法はしつかりとしている。その着替え用の浴衣の上から、今まで来ていたシャツや下着を折りたたんでおいていく。丁寧そのものである。

白蓮は着ている物を脱いでから、浴場へ向かう。彼女が曇りガラスのドアを開けると、中から暖かな空気が体を包む。白蓮は少しくうきうきしているように軽い足取りで浴場に入っていく。

ドアを閉めて、白蓮はやってみたかったことの一つをする。

「あっー！」

と声を出す風呂場の壁に反響してくる。こんなことは大きなお風呂場でしかあまり味わえない。正確に言えば家庭用の風呂でも大声を出せばいいが、お寺で忘れ小傘が風呂に入っている時に大声で「ファンファントレイン」を歌って寅丸に怒られた。

ただ、ここでは気兼ねをすることはない。大声を出しても早々迷惑は掛からない。ただ、白蓮は反響することに「すごい」と言いたげな表情をしてからやめた。少しやってみたかっただけなのだ。

そしてまだやりたいことはある。そもそも彼女が他の弟子たちと一緒に来なかった

のは見られると恥ずかしいことをしたかったのだ。それならば旅先で、しかも一人でいると気が良い。

聖 白蓮は単なる堅物ではない。というよりは世の中で聖人だとか賢人だとか言われている者たちを「真面目」とだけ理解すると訳が分からなくなる。基本的に「聖人」などと言われる人種は破天荒なことをして名を残す。

仏教でいえば釈迦。またはその一番弟子で死に際に爆発四散した阿難。またはキリストとその十二使徒。彼らの実績を追えば到底常人ではできないようなことをする。思いつかないことではなく、「しない」ことをする。

ある意味、心のままに生きることを「聖人」と言うのだ。その点で言えば、彼ら彼女らは子供の様に純粹で無垢なのかもしれない。やってみたいことをする意思とやらなければならぬという義務感が彼らの根本である。本人達でもどうしようもなかったのだろう。だから「聖人」には悲劇が多い。妥協「できない」からである。

つまり今、この場における聖 白蓮は「少女・白蓮」なのである。やりたいことをこっそりしに来た可愛らしい少女でしかない。少なくともこの湯気に囲まれた空間にはなんの苦しみもなければ、悲しみもない。

白蓮は桶を取って浴槽からお湯を取る。片膝をつけて肩からお湯を流すと、暖かなそれが体を流れていく。かけ湯である。彼女はそれを二、三度してから湯船に入った。

肩までつかると「ああ」と白蓮の桃色の唇から声が出る。眼を薄く閉じて、体の力を抜く。だれもない場所、聞こえてくるのは緩やかな水音。それも心地よく白蓮の耳に響いてくれる。彼女はお湯の中で体を伸ばす。

そうしながらあたりを見回す。誰もいないことをしっかりと確認して、お湯の中で体を「浮かす」。彼女は壁を蹴って、反対側まで静かに泳いだ。広い湯船でしかできない贅沢である。普通ならやつてはならないが、他に誰もいないのであれば迷惑を掛けようがない。

つまり「広いお風呂で泳いでみる」ことをやつてみたただけなのだ。白蓮は反対側まで来ると、縁石に手をつけてふうと息を吐く。満足したのだろう。彼女の髪先からお湯が滴り落ちる。

しばし、彼女は考える。そういえばと。

——こら、泳いではいけませんよ？

自分が誰かに言った言葉を彼女は想いだす。それはずっと、ずっと昔のこと。誰かと一緒に、そう子供のころに信濃の山奥で温泉に入った時の記憶。白蓮には昨日のこのように思い出すことができる。まだ幼かった自分の後ろをとてとて着いてきた誰かのこと。

白蓮は思い出す。思い出してしまふ。今まで何度も何度も思い出してきたことを。

その「誰か」はとても聞き分けのよい子で白蓮のことを慕ってくれていた。彼女もまた、それに負けずその「誰か」を愛おしんだ。

それは昔話である。今の白蓮には届くことのない過去の出来事だった。彼女は顔を上げて、天井を見る。もう、「誰か」が自分を呼んでくれる事は無い。最後まで看取ったのだから、それは間違いがない。そうもう誰も――

「聖様？」

声があった。どきりと白蓮の心臓が鳴る。

白蓮は後ろを向く。そこには罰の悪そうな顔をした、黒髪の弟子がいた。何故ここにいるのかは白蓮にはわからない。まさかサウナ室にいたとは思わないだろう。そもそもなんでそこに入っているのかは訳が分からない。

「水蜜？……」

きよんとした顔で聞く白蓮。それから眼をぱちくりさせる。もちろん黒髪の少女が村紗。水蜜である。彼女は何故か困ったような顔をしている。白蓮はそこではたと思いつつた。

「見ていましたか？」

白蓮は水蜜に聞いた。にこおと笑みを浮かべながらだが、その顔は妙に怖い。ある意味では照れ隠しと取れないこともないだろう。水蜜はごくりと息をのんで、フルフルと

横に首を振った。師匠がお風呂で泳いでいたところなんて「見てない」と言うのだ。

「水蜜？　嘘はいけませんよ」

「えっ？」

諭すように言う白蓮。

「見てしまったことは仕方ありません。私も注意が足りませんでした。でも、誤魔化そうとして嘘をつくことは……水蜜？　どうですか」

「い、いけないと思います」

「はい。そうですね。わかってくれて私も嬉しいと思います。ですが、まだまだあなたには修行が足りません……そうですね、河童さんたちにも相談しなければいけませんね」

「え!?　ひ、聖様!?　そ、それは、どどどどういう」

「このままでは一輪との平等性もありませんし……」

さあと青くなるキャプテン。まさか、水着が変更になるのではと彼女は焦った。一輪が着ている気が狂った（少なくとも水蜜は思う）　ようなものは着たくはない。彼女は哀れを誘うような声で言う。

「ひ、ひじりさまあ」

白蓮を呼ぶ水蜜。この湯船に入った聖人は思う。いや、一瞬だけ脳裏に浮かぶ。水蜜

の姿がなんとなく「誰か」に重ね合わせてしまう。

——姉上

白蓮は一瞬だけ、笑顔の「誰か」が見えたような気がする。もちろん過去の記憶ではないだろう。それでも彼女は「ふふ」と愛らしく笑みを浮かべる。それから手に平を合わせて、水蜜を呼び返す。

「水蜜。精進しましょう」

にこつと笑ってから首をちよつとだけ動かした白蓮の仕草はいつかの少女がやってきたことなのかもしれない。その前には誰が居たのだろうか。

◇◇◇

和室の電気は消えて、窓から入ってくる月光が美しかった。

蒲団がいくつか敷かれていて、そこには赤い髪の猫や寝相が悪いのか浴衣の肩あたりが乱れた地獄烏が天人を下敷きにして寝ている。そう、ここは幻想郷の少女達が止まる二つの部屋の一つである。彼女達は今日の疲れをいやすためにお風呂に入ってから蒲団を敷いて寝ていた。

ただ古明地 さとりは寝ていない。彼女も浴衣に着替えて、ちよこんと蒲団の上に乗っている。その膝には妹が寝ていた。ひざまくらである。さとりはその妹を愛おしげに見つつ、手には本を持っていた。

少し前に古明地　こいしがさとりの元に来た。曰く「お姉ちゃん、本を読んで」と眠たげに言ってきたのだ。つまりは絵本を読んでほしいのだろう。それを読んでももらいながらこいしが寝たかったのだ。

もちろんさとりも承諾した。断る理由がなかったからだ。しかし、持ってきた本に問題があった。

「……へつきたねえ花火だ……」

さとりは複雑な顔をしながら声に出して読む。こいしが持ってきたのは旅館のロビーに置いてあった漫画である。それを朗読していると膝枕をされているこいしは面白そうに聞くのでやめられなかった。

だからさとりは「片付けておけよ、ぼろ屑を」とか「ドドリアさん」などと彼女の長い一生で一度も言ったことのない言葉を次々に口に出して読む。ついさつきキュイが爆発した。さとりはこの手に持った本はこいしの教育に悪いのではないかと本気で心配しつつ、読んだ。

「おね、えちゃん」

「……どうしたの？　こいし」

呼ばれてさとりは聞き換える。見るとこいしは眼を瞑って、静かに寝息を立てている。いつの間にか眠ってしまったのだろう。彼女の柔らかそうな頬が、小さく膨らんだ

りへこんだりしている。

さとりはこいしの髪を撫でてあげる。むずがるようにこいしは動くが、起きない。それにさとりは微笑を浮かべる。いつでも妹は可愛いものである。

「おやすみ。(こいし)」

とさとりはこいしを蒲団に寝かせてから膝を動かす。起こさないようにしているのだが、結構気を遣う。ただ、幸いこいしは心地よさげに寝息を立てている。さとりはそれにほつとして、彼女の読んでいた本を重ねて持った。何冊かこいしは持つてきていたのだが、返しにいかなければならない。

さとりはそう思つて立ち上がる。そして部屋から出ていこうとするのだが、その前に彼女は部屋の隅を見た。そこには浴衣を着た青い髪の女性が体操座りをして、こくりこくりとしている。慧音だった。

慧音は自分は寝ても問題ないのにわざわざさとりが眠りにつけるまで一緒に起きていようとしていたのだ。それでも睡魔には勝てなかったらしい。さとりは彼女に近づいて言う。

「慧音。もう布団でねむつてもいいわ」

「む……あつ、いつのまにか寝ていたのか？ すまない……」

謝ってくる慧音にくすりとするさとり。慧音のどこに悪いところがあるのだろう。

少なくともさとりには「わからない」のだ。

「……わたしはこいしが持つてきた本を返しに行くから、先に寝ていて」

「そう、か」

目を半分閉じた慧音は言う。

「……生きて……帰れ……」

完全に寝ぼけているらしい。慧音はみよんちくりんなことを言ってしまう。さとりは命がけで漫画を返してくるような大冒険はしない。さとりは苦笑して彼女も蒲団に寝かせる。胸元が少しはだけていたのでさとりは直してあげた。

「ふああ」

さとりはそれが終わると欠伸をする。疲れたのは彼女もいつしよである。もう昔のような気もするが彼女もお昼は「プールの監視員」の仕事をしていたので。それから移動してからの深夜までの労働が体を鉛のようにしている。

さとりはそれでもふらふらと部屋を出ていく。その後ろ姿を見ているわけでもないが、彼女の妹は眠ったまま言う。

「お姉ちゃん……だいき……」

こいしは幸せそうだった。

おまけ 守矢の三人、太宰府天満宮に行く

長い駅のプラットフォームに電車が入ってくる。車両を連ねた箱型の電車の表面は照り付ける太陽を反射して光っていた。キキイと高いブレーキ音を出して、車両が止まる。最前列の電光掲示板に表示された「大宰府駅」の文字がこの駅の名前を教えてください。

大宰府とは九州北部の地名である。過去は大陸との交易などで栄え、時の朝廷に九州の政治の中心地と位置付けられ「遠の朝廷」と呼ばれたこともある。つまりはこの地域の政治、経済の中心地であったと考えればよい。今ではその影もない。

その大宰府に作られた駅に入った電車のドアが開く。プシューと空気が抜けるような音がして、中で待っていた乗客たちが早足に降りていく。彼らは急いでいるわけではない。後ろが詰まっているから自然と早足になるのだ。それだけ乗客が多かったのだから。

「よ、よ、よ」

電車とプラットフォームの間の「溝」を飛び越えた少女もその一人だった。肩まで伸びた金髪を束ねて、顔の左右でおさげにしている。彼女はそれを揺らしながら歩き始め

る。黒のジャンパーは袖でまくって、白い腕を出している。下はスカート、それに背中には小さめのバックを背負っている。

ジャンパーの胸元にはワンポイントがある。白い線で書かれたそれは、目つきの悪いペンギンの模様であった。さらに小さく「M A R R U B A T U k u n」と書かれているが少女はそれが何なのかは知らない。

それよりも奇妙なことがある。彼女は「市女笠」を被っているのだ。その言葉を聞いてなんのことか連想できるものは少ないだろう。それに彼女の帽子は変な特徴があった。頂点にぎよろりと大きな「目玉」が二つ付いている。

そんな彼女の名前は洩矢 諏訪子、れつきとした神様であった。もちろん幻想郷からの来訪者であるのだが、彼女の場合つい最近に現代から幻想郷へ引越したばかりなので、どちらかというところ「里帰り」とでもいえるかもしれない。

諏訪子はプラットフォームの出口に向かって軽やかに歩く。小さく鼻歌を唄いながら、足を上げて、腕を振る。彼女を知らぬものが見れば、何かにわくわくしているような子供にしか見えないだろう。

「す、諏訪子様！ 先に行かないでくださいよー」

諏訪子の後ろから声がする。その可愛らしい声に、諏訪子は腰を回してくるつと振りかえった。その仕草は愛らしいが、そのあとやれやれと首を振る。

「諏訪子が見ると人込みをかき分けて一人の少女がこちらに向かってきている。元々電車の中では隣に座っていたのだが、とある事情で出遅れたらしい。」

背は諏訪子より高い。髪は緑色で長い。ただ頭には黒のキャスケット（帽子）を被っている。上着は七分袖で赤いタータンチェックのシャツ。それに深い紺のデニム。諏訪子の恰好よりは洒落に気を使っているのだろう。体のラインにぴったりと合った服装はスレンダーである。

その少女、東風谷 早苗はゴロゴロゴロとキャリーケースを引きづっていた。これが諏訪子から出遅れた理由であろう。だから諏訪子も「そんなものを」と呆れた仕事をしたのだ。

「早苗。そんなに荷物を持って来たらじゃまじゃない？」

「い、いや。これ諏訪子様と神奈子様の荷物も入っているのですけど……」

「そうだったっけ？」

忘れてたなあ、ととぼける諏訪子。しかし、彼女はちよつと思いついたらしく言った。

「それじゃあ神奈子の荷物だけ捨てよう。軽くなるわよ。ね？」

「……………い、いや、頑張ります。それよりも本当によかったんですか……………神奈子様にあんなことをして」

早苗は少し問うようなまなざしを諏訪子に見せる。なぜならこの「旅」にはもう一人

同行者がいたのだ。そう、これは「旅」である。彼女達は自分たちの住む町から離れて、遠くに来ているのだ。

それはそうと、もう一人の同行者こと八坂 神奈子は電車から降りてこない。その間に他の乗客が早苗と諏訪子の横を通りすぎていく。それでも神奈子は出てこなかった。そもそも彼女は「電車に乗っていない」のである。

これは諏訪子が早苗の言う「あんなこと」に起因する。そうはいつでも大したことではない。いたずらを仕掛けただけのことなのだ。

それは簡単なことであった。この大宰府駅に在来線で来ると「乗り換え」が必要になるのだ。つまり途中の駅で一旦降りて電車を変えなければならない。その時に諏訪子は神奈子にこういった。

『次の電車は20分後だって、結構待つわね。ねえ、今のうちに駅の売店にいかないかしら？』

その後、諏訪子は早苗だけを連れて5分後に電車に乗る。神奈子が気が付いた時は遅かった。すでに電車のドアは閉まり、動き出している時だったからだ。電車のドアについて窓から諏訪子はニコニコしながら手を振り、口をこう動かした。

「ほ」「あ」「か」

口には出していない。口を動かしたただけだ。だから悪口でも罵倒でもない。しかし、

何故か神奈子はなんともいえぬ表情をしていた。諏訪子はそれを見て、わざとらしく「どうしたの？」と言わんばかりにキョトンとした。

それがさつきまでのことだ。早苗はある意味では共犯であるのだが、彼女は巻き込まれただけでもいえる。

諏訪子はとりあえず「悲しい事件だった」と悲しそうな顔をして、踵を返す。過去を悔やんでも仕方がないから「神奈子の分まで生きよう」と言う。早苗は何と言つていいのかわからない。だから諏訪子の後ろをため息一つだけ吐いてついていくしかない。

駅の改札を抜けると構内は吹き抜けの作りになっていて、駅前のロータリーが見える。そこをバスやタクシーが利用しているのだろう。諏訪子は早苗に荷物をコインロッカーに預けてくるように指示して、自分は近くに合ったベンチに座る。

そこで諏訪子はぼんやりと考える。口を小さく開けて、虚空を見ながらとりとめのないことを考えるだけだ。癖なのか、一人になるとそうしてしまう。どことなくカエルの様だ。そうやって彼女は動かない。

しばらくすると早苗が戻ってきた。諏訪子はそれに気が付くと「よっ」と身軽にベンチから立ち上がる。ぼんやりしていてもそれなりに鋭い。

「早苗。荷物は預けてきたかしら？」

「え、ええ。す、諏訪子様、そ、その神奈子様も……」

「私も一緒になったからちようどよかったわ」

帰ってきた早苗の後ろに女性がいた。もちろん諏訪子も気が付いていたが、わざと無視していた。彼女は今気が付いたように「あつ」と声をあげた。

女性はボウ（長い布を蝶結びした物）付の赤いブラウスを着ていた。それにデニムを穿いている。髪は紫で艶やかであるが、後ろで結んで一つ結びにしている。そして白い肌と整った顔立ちが気品を感じさせる。

もちろん彼女こそ、八坂 神奈子である。腕を組んで毅然とした態度で諏訪子を見ている。少々視線が冷たいのは仕方ないことなのかもしれない。その片手にビニール袋が掛けられているのは「駅の購買」で買った物だろう。それを買っている間に置いてけぼりにされた。ここ最近で一番の屈辱であった。

そんな神奈子を諏訪子は見ている。意外に早く来たことに驚いたが、別に態度には出さず淡々と言葉を発する。

「あつ。来たんだ。それじゃ、いこうか」

「それより前に言うことがあるのじゃないかしら？　諏訪子」

「え？　特にないわよ」

神奈子にはにこりと笑う。諏訪子もにこりと笑い返す。お互い笑顔なのに、空気が重

い。早苗は帽子のつばを掴んで、少し顔を下に向ける。何故かはわからないが手に汗が滲む。しかし、この場を治めることができるのは彼女しかないのだ。

早苗は神奈子に聞いた。

「か、神奈子様。早かったですね……電車、すぐに来たのですか？」

「……タクシーで来たのよ？ 早苗」

「あ、ああ。それで早かったんですね！ よ、よかったです」

あははとできる限り明るく笑う早苗。神奈子もくすとして、気を取り直した。早苗が氣遣っていることがわかったのだろう。だから神奈子は早苗の肩をぽんと叩いて言う。その時、チラリと諏訪子を見たがすぐに視線をそらす。どことなく挑発的である。

「ふふふ」

と笑う神奈子。彼女は続ける。

「やはり早苗は私の味方みたいだなあ」

「えっ？」

神奈子の言葉にクエスチョンマークを浮かべる早苗。彼女は神奈子の敵になった覚えもなにもない。だから当たり前のことを言われただけなのだ、だから理解できない。しかし、神奈子がこの言葉を聞かせたかった「相手」は早苗ではない。

神奈子は手を早苗の方に置いたままチラリともう一度諏訪子を見る。諏訪子はいつ

屋」またはカフェ、それでなければお食事処と店々が軒を連ねている。人通りも多い。店の殆どが古民家風の作りをしている。瓦葺の屋根に漆喰で塗り固められた白い地肌を持つそれは、来る者に風流を感じさせてくれるのかもしれない。もちろん例外もある。

そんな大宰府の神社、その参道を歩いているのは二柱の「神様」と一人の「巫女」。カジュアル恰好をしている三人の本職をわかる物はほぼいないだろう。

「うわーすごいですね。ウチとは大違いです」

ソフトクリームを片手に眼をきらきらさせる巫女。確かに彼女が巫女を務める「守矢神社」と比べれば天と地の差はあるだろう。彼女は今日は女の子らしくお土産屋があれば立ち止まり、軒先に置かれたそれを物色する。

彼女はとある一軒のお店の前に留まり、何故か売られている木刀を持って振り返った。

「神奈子様、諏訪子様。帰りにお店を回しましょう!」

「……………」

「……………」

早苗が振り返った先にいた二柱の「神様」はそろって張り付けたような笑顔で立っていた。彼女達、諏訪子と神奈子は無言で早苗を見る。

「ど、どうしたんですか、お二柱とも」

少しおどおどしながら早苗が聞く。それには諏訪子が応えた。

「もう、早苗はここの子になつちやいなさい」

「え!？」

どこかの毘沙門天のように急にお母さんのようなことを言い出した諏訪子。もちろん冗談であるがそれにびつくりする早苗。彼女はそれでも意味が分からないらしい、だから神奈子が諭した。ちなみに「ここ」とは太宰府天満宮のことである。

「早苗。ここに来た本来の目的を忘れてはいけないのよ?」

「本来の……理由……ですか」

「そうよ。私たちここに来たのは目的はただ一つ」

そこまで言つてびしつと早苗に指を突き付ける神奈子。彼女は目を見開いて、きらつとした眼光を見せる。それから叫びように言った。

「市場調査よ!」

早苗は眼をぱちくりさせる。木刀を握りしめたまま、小首を傾げる。だが、ここに来たのはそんなに難しい理由などはない。つまり八坂 神奈子は「守矢神社」を経営する神様なのである。だからここは「同業他社」だと考えればいい。だからこそその「市場調査」なのだ。

神奈子は補足するように言う。その前にコホンと咳払い。

「いい、早苗。ここは日本でも有数の大神社よ。流石に伊勢神宮や出雲大社ほどではないけれど、神様に由緒もある」

「若造だけどねー」と茶々を入れる諏訪子。

「そう、だけど大いに学ぶこともあるはずよ。これだけの信仰を集めている上に」

神奈子はそこで言葉を切つてあたりを見回す。すぐそばをとある男性が通りすぎる、彼はなにか独り言を「英語」で喋つていた。同考えても彼が神道の信者であるとは思えない。つまりは純粹な観光客であろう。

「商売もうまくいっているようで……」

少し悔しげにする神奈子。何故かそちらに反応するあたり、本音が出ている。しかし、早苗を振り返つた彼女の眼はギラギラと光っている。まるで鏡のような美しい瞳が、彼女の心を表しているようだった。

「兎にも角にも我々も幻想郷に帰つた暁には、この神社を中心とした街を建設するくらいのお気概を持たなければならぬのよっ！」

情熱的な言葉を吐く神奈子。経営者向きなのかもしれない。一度現代で倒産して、幻想郷に移つてきた彼女をどう見るかは人それぞれだろう。力づくの博麗神社のM&Aにも失敗したこともある。

「あれ、神奈子様。これ……お寺……ですか」

早苗は気が付いた。参道の先に合ったのは「寺」である。神社は「同業他社」であるが、お寺となればそれは「競合他社」である。しかし、早苗にはわからない。神仏混淆と言われる日本でお寺と神社が同じ敷地にあるのは別段珍しくはない。それを神奈子は嫌いでもだ。

しかし、参道をまっすぐ歩いて行つて到着するのがお寺では意味が分からない。見れば参道の石畳は左右に分かれている。まだ、どこかに行けるのだろう。

「ふふっ」

早苗の疑問を受けて、どことなく誇らしげに神奈子は胸を張る。彼女は早苗に説明してやろうと口を開こうとして、ぱつと目の前に諏訪子が飛び出してきた。何故か腰には木刀を差している

「おっと、そこからは私が説明してあげよう！」

諏訪子の先手必勝である。説明の権利を奪い取った彼女は「早苗や」と笑顔で言う。間髪入れないその行動に神奈子は口を開けたまま固まってしまった。どうやら諏訪子はお土産屋で巫女を独り占めされたことを気にしていたのかもしれない。

諏訪子は左を見る。

「ほら、早苗。あつちが本当の天満宮だよ」

左手にはまた鳥居がある。そこへ続く石畳は奥の「橋」につながっていた。それはいわゆる中腹が反りあがった太鼓橋で朱塗りの手すりには擬宝珠が並んでいる。橋の下はもちろん池になっている。まだ「天満宮」は見えない。

「?!」

ますます早苗にはわからない。折れ曲がった道の先に本丸というべきものがあるのだ。何故だろうと考えていると、にやにやと諏訪子している。神奈子は牛の銅像を触りに行った。

「わからないようだね。早苗。それじゃあヒントをあげよう!」

ぴつと一指し指を諏訪子は立てる。ヒントが「一つ」という仕草であろう。

「早苗は家に入るとき、どこから入る?」

「えつ……。ひ、ひっかけですか?」

「ちがうよ。純粹な質問」

「玄関……ですか」

「正解っ!」

諏訪子はぱつと花が咲いたように笑顔になるが、こんなことに正解しても早苗は嬉しくない。だが、諏訪子は続ける。

「それじゃあ、もしも玄関のかぎが開いていて、そこに泥棒が来たら。どこから入ると思

う？」

「……………げん、かん。ですか」

「そうね。例外もいるだろうけど、わざわざガラス割ったりして入らないよ。それじゃあもう一つ問題」

諏訪子は言う。そうしながら彼女は今歩いてきた道を振り返った。遠くに彼女達がくぐった鳥居が見えて、店が軒を連ねたにぎやかな道がそこにある。誰も拒まない、自由な往来。

「神社の玄関は鳥居とその参道だね？　今私たちはそこを歩いてきたけど、悪い奴はどこから入ってくるでしょう？」

「同じ、ですか」

「そう正解！　私たちは誰が来るのも拒んだりしないけど、わるーい奴も入ってくることもあるんだよ。だから——」

諏訪子が親指をたてて「お寺」を指す。

「ボディーガードがいるのさ」

「あつ」

早苗は声をあげた。ここで諏訪子の言う「悪い奴」とは泥棒などの人間ではない。要するに悪意を持った妖怪や悪霊のことである。ゆえに参道をまっすぐ歩いてくると「お

だが、だからこそこのような時に自然に笑える。裏を使うかどうかは考えられるからだ。

そんな中で諏訪子は別のことを考えていた。

「ラジコンを浮かべられそうね」

神社の池で機械仕掛けのおもちやを使おうとしている彼女。最近では公民館で暇つぶしがてら子供と遊んでいるが、少し感化されているかもしれない。彼女は昔河童をこき使つて「非想天則」なるロボットもどきを作ったことがある。

その一連の事件でロボットを期待していた早苗に怒られ、現代に来てからは少しその方面を勉強しつつ、遊んでいる。ラジコンはその過程で詳しくなった。

太鼓橋を渡りきるともう一つ太鼓橋がある。小さな島のようなところに一度降りると、右手に社があつた。早苗はとりあえず、あいさつ程度にばんばんと手を鳴らしてお参りする。もちろん他の二柱はしない。

蛇足かもしれないがこの太鼓橋は仏教思想を元に作られている。このところも神社という物の性格を表しているのかもしれない。

そんなこんなで橋を渡りきると、あつと早苗は声を出して指を指す。

彼女の見ている先に赤い「楼門」があつた。つまりは巨大な「門」と言えばわかりや

が、手に心地よい。ただ手を洗った意味すらも彼女は消してしまった。彼女はどこことなく抜けているところがある。ただ、そこが魅力なのかもしれない。

楼門をくぐると「社殿」が眼に飛び込んできた。

駅から続く参道がすつと続いたその先、そこに佇む朱塗りの本殿は檜皮葺屋根。それが向拝（屋根が出っ張っていること）になっており、その正面には唐草模様と金色の飾りを付けている。そもそも周りを楼門に繋がった社務所を兼ねた建物と回廊で囲んでいる。それも守矢にはない。そして庭池と小さな石橋がありまたも、鯉が泳いでいる。本堂の左右には「梅の木」が植えられていた。東風に舞ってきたのかはわからない。

「これはすごいですね。ウチとは大違い」

神奈子の心にぐっさり来る言葉を早苗は吐く。悪気はない。

よくよく見れば参拝客も多いが、巫女服を来た少女達も忙しく立ち回っている。早苗はそれに興味をそそられたが、どうにも動きが悪いと早苗視点では思う。ふつと笑う早苗の顔は多少あくどい。

「まだまだですね。それじゃあ、私はお参りに」

と早苗はお参りに行こうとするのを神奈子と諏訪子が服を引いて止める。神社があればどこであれば手を合わせようとする早苗は、ある意味では典型的な日本人と言えよ

う。だが、他の二柱は、いや正確に言えば二柱は違う。

神奈子が言う。

「早苗。今日は遊びにきたんじゃないわ。別に手を合わせに行く必要はないのよ」

「か、神奈子様。でもとりあえずあいさつ程度に」

「一応……相手は商売敵なのよ？」

「う、うう」

じゃあいいかと早苗もあきらめる。別にこだわりがあるわけではないのだ。ただ、彼女は別の物を見つけた。彼女の見つけたのは「おみくじ販売所」である。とはいっても店ではなく、まるで柱の様に立っている自動販売機である。このような物も自動とはある意味では時代であろう。

「か、神奈子様」

「なに？」

「それじゃあ、あれをしましょう」

神奈子もおみくじを見つめる。神がやる物とは思えないが、おみくじも守矢で行えるだろう。だから参考がてらにやる意味はある。だから仕方ないと息を吐く。少し呆れているように見えるが、可愛い巫女の頼みをむげにする気はさらさらない。

「仕方ないわね」

おみくじは一枚百円。神奈子、諏訪子、早苗の三人で三百円である。ということとは守矢神社でもこれをやれば、収益にと神奈子が考えても仕方がないことではあった。

その神奈子の手には小さな紙片のような物が掴まれている。表面には「御御籤」と紅く書かれている。買ってきたのは早苗で諏訪子も同じものを持っている。

最初に開けたのは早苗だった。びりつとぞんざいに開けたから、中央まで破けてしまふ。神奈子はやれやれと困った子を見るように言う。諏訪子は「こうやるんだよ、早苗」と目の前で綺麗に開けてみる。

そして神奈子も開けた。彼女の細い指が、意外に繊細に開ける。

——御御籤。東風谷 早苗の場合

——大吉。願い・叶う

健康・よし、ただし気を付けよ

仕事・万事うまくいく。上司に恵まれず

金運・身を慎め。されば良い。

学業・捗る。続けよ。

転居・まだ。時期を見よ。

相場・上がる。

待人・来る。気長に待て。等

——御御籤。洩矢 諏訪子の場合

——大凶。願い・叶わず。

健康・おぼつかず

仕事・空振に終わる

金運・悪い

学業・うまくいかず

転居・すぐにおこなえ

相場・下がる

待人・来ず

——御御籤。八坂 神奈子の場合

——去れ

「やった！ 私大吉ですっ」

ぴよんと飛び跳ねて喜ぶ早苗。もももと邪悪な気を高めている二柱。そんなことは露知らず早苗は神奈子と諏訪子に話しかける。

「お二人はどうでした。私はだ・い・き・ちでしたよっ」

「……」

「……」

神奈子と諏訪子はぎぎぎと冷たい笑顔を張り付けて振り返る。ぶりっぶりっど手の中で御御籤を引きちぎっている。それを見て早苗はびくびくし始めた。

「ど、どうしたんですか。お二人とも」

「早苗え」と諏訪子。

「は、はい」

「マツチ持つてる？ 燃やそう、ここ」

「え？……ええええええ！？ だ、駄目ですよいきなり。国定の文化遺産を燃やしたら政府から追われますよっ!!」

「大丈夫、大丈夫」

諏訪子の眼が据わっている。やりかねないような顔をしている。だから早苗は神奈子に助けを求めた。

「か、神奈子様も諏訪子様を止めてくださいよ……」

「私の御御籤は印字がミスされていて、良く見えなかったのよ」

「え？」

「あぶり出しかもしれないわ」

よく見たら神奈子も眼が据わっている。そもそも炙りだす御御籤とはなにか、そしてそれには「火」がいる。要するに神奈子も諏訪子と同じことを言っている。早苗は二柱を止める。

「だめ、ですよ。ねえ、神奈子様、諏訪子様。も、もしかしておみくじの結果が悪かったのですか？」

悪いとか悪くないとかの話ではない。すでに神々の戦いは始まっているのだ。そこで諏訪子は早苗の疑問をあえて無視する。そして神奈子に話しかけた。

「そうだ、神奈子。せっかく来たんだから、ここの神に挨拶くらいしておこう。これで」
すつと取り出したのは一円玉。神奈子も頷く。二柱は黒い邪気を出しながら、拜殿に向かう。早苗は「あ、あああ」とよくわからないオーラを感じて立ちすくんでいる。どうやら参道の途中にある寺の意味はなかったらしい。

拜殿だけでも豪華である。中には祈祷を行う場が整えられているが、無論仕切りがあるので入れない。神奈子と諏訪子の二柱はぞんざいに手を鳴らす。二礼二拍手一拝というが、てきとうに手を鳴らしただけで頭など下げない。

そして二柱は同時にお金を投入する。一円玉が二枚宙を舞う。

無論お賽銭であるが、これは最低額であるといわないでもわかるだろう。売ってきた

喧嘩を「二円」で買おうというのだ。これが神の戦いである。慈悲も容赦もない。

投げられた一円玉がくるくると宙を舞いながら落ちてくる。太宰府天満宮の賽銭箱は大きく、年季の入った物なので外れることはそうそうない。だがここで、奇妙なことがおこった。空中で一円玉の軌道が少し変わったのだ。

そしてしゅつと神奈子の顔の横を何かが通り抜けた。それはかんかん一円玉二枚を弾き飛ばして、遠くに飛ばした。はつとした二柱が見ればそれは五百円玉である。黄金に輝くそれがアルミニウムの塊を弾き飛ばしたのだ。五百円は賽銭箱に入った。

二柱が後ろを見れば子供がふざけて投げたらしい。繰り返して言うが単なる偶然である。ただ、神奈子には一円玉が何故か虚空で動いた気がする、だから彼女はこめかみに青筋を立てる。諏訪子も同様ににっこりと冷たく笑う。

諏訪子は言う。

「よーし。菅原の奴に梅ヶ枝もちぶつけてやる！」

梅が枝もちとは菅原道真がお餅と「梅」が好きだったことに由来する名産品である。ちなみに「うめがえもち」と読む。それを諏訪子は彼の口にダイレクトに叩き込んでやろうと可愛らしい顔で思う。もちろん「菅原」とは新人のことである。古事記にも日本書紀にもでない分際だった。

「ははは。諏訪子。ちゃんとあつあつの物を買って来よう」

熱い餅を喉に放り込もうと神奈子は言う。笑顔である。二柱は、あはははと互いに笑いながら、拜殿から踵を返そうとした。その時、

ぱしーんと二柱のオデコに一円玉が二枚、突き刺さった。見れば幼稚園児くらいの子供が投げたらしい。それが「運悪く」ぶつかつたのだ。神奈子と諏訪子は幼稚園児に怒るでもなく、額から一円玉を剥がす。

幼稚園児はおどおどしている。罪悪感があるらしい。何故だか全然わからないが急に一円玉を諏訪子、神奈子に向けて投げつけたくなつたのだ。

「だめよ。君。他人に当てたら」

諏訪子は膝を折って、目線を合わせた上で言う。優しげな顔と頭に付けた市女笠のおかげで幼稚園児は泣くこともなく「ご、めんなさい」としつかりと謝った。

「いいのよ。悪いのはきみじゃない」

神奈子も許す。ただし別の物を許さない。しばらくすると幼稚園児の親らしきものが来て、彼女達に謝ってきたが、二柱にはそれを追及する気はない。笑って許して、むしろ感謝された。その間に早苗もやってきた。

「お二人とも、なんだかさつき何かが頭に当たっていたみたいですけど……大丈夫ですか」

「大丈夫よ。早苗。私も諏訪子も」

「……それならよかったです」

早苗は少し上目遣いで窺うように言う。どことなく神奈子たちの雰囲気を感じ取っているのかもしれない。だが、そんなことよりも神奈子達はまた別のことを言い出した。正確に言えば口を開いたのは諏訪子である。

彼女は拜殿の傍らにある梅の木を見つめながら、ぼそつと言った。

「枝を折るか」

ざざざざと風もないのに梅の木が揺れる。木と言っても背の高い木ではない。だから小柄な諏訪子でも十分手が届く。彼女は手をのばして、枝を一朶掴む。葉が揺れているのは、どうしてだろうか、ともかく諏訪子は黒い笑みを浮かべて手に力を入れようとした。

神奈子は止めない。止める理由などない。一応ご神木になるのだが、こちらは本物の神である。だが、ここに止める者いる。

「やめなさいっ!!」

声が響く。諏訪子はびくつと肩を震わせて枝を離す。彼女が振り向くと、ふうふうと怒った顔で早苗がいる。あまりに傍若無人な諏訪子の態度に怒ってしまったのだろうか。

「さ、さなえ。これはわた」

「いい加減にしてください。諏訪子様。大人気ない!!」
「ふえ!？」

きつと諏訪子を真正面から見つめる早苗。巫女が神を怒り出したというのは前代未聞なのだろう。あたりの人々や神社の関係者達も彼女を見つめている。だが、止まらない。

「いいですか。諏訪子様、それに神奈子様!」

「わ、私もか」

いきなり呼ばれて焦る神奈子。それでも早苗の剣幕にたじろぐほかない。

「神奈子様。たかが御御籤で悪い結果だったからって八つ当たりしてどうするんですかっ!」

「ち、違うのよ。早苗。これは八つ当たりじゃないの」

「問答無用です!」

神託を聞く巫女が「問答無用」という。職業否定にもほどがある。しかし、応援するかのように梅の木がざざざと葉を鳴らす。それを聞いて神奈子と諏訪子は歯噛みするが、どうしようもない。しかし、早苗は続ける。

「こんな子供のようなことをする神様なんて他にいませんよっ!」

とたんにしゅんとなる梅の木。どことなく元気がなくなる。その代わりに早苗が

ヒートアップし始める。一度興奮すると止まらない性格なのだ。そのせいで普段失敗することもある。だが、今はよかったのかもしれない。

「諏訪子様！」

「な、なに？」

「今朝からいたずらをし過ぎですつ。もつと神様としての自覚を持つてくださいい！」

「う、うう。いや、だからね早苗」

「なんですかー！」

がああと怒る早苗。まるで酔っ払いのようである。これでは諏訪子も反論できないような雰囲気ではない。彼女はしょぼんとして、肩を落とす。市女笠の目玉まで下を向いているかのようだ。

早苗は矛先を変えた。

「神奈子様！」

「早苗、何でも言いなさいっ！」

度量の大きいところを見せようとする神奈子。反論が無理なら可愛い巫女の言葉を全て受けいれる気だった。

「他の神社に嫉妬しないでくださいい！」

「ぐ、ぐぐぐ」

思つたよりきついことを言われてたじろぐ神奈子。早苗も今では容赦などできない。それには理由がある。何故怒るのかには意味があつた。早苗は顔を真つ赤にして神奈子に詰め寄る。

「神奈子様。お二柱が情けないことをされると、わたし」

神奈子の目の前に早苗の顔がある。だからその目元に涙が溜まつていくのもわかる。早苗はだんだんと湿つていく声で言う。諏訪子は「情けないこと」と言われてシヨックを受けている。

「わたしは、なんだか無性に、かなしくなつて」

早苗の眼からこぼれるように涙が落ちる。

そう、「怒る」という行為は特別なことである。

喜ぶことは一人でもできる。

哀しむことも一人でもできる。

怒ることは相手がいけないとできない。

それも「怒ることのできる」ほど親しいものにはできない。自らの思いのたけをぶつけても受け止めることのできる相手にしか、伝えることができない。早苗にとつてそれは諏訪子である、神奈子なのだ。だから彼女達が早苗から見ても「悪いこと」をしていたら、言わざるを得なくなつた。

いていて、餅にしては固めだった。諏訪子を買ってきた間に多少冷えたのか、手に持っても大丈夫だった。余談だが諏訪子を買って来た店で何故か「おまけ」をしてくれた。急に店長がしたくなつたらしい。

「ほら、早苗。食べようか」

神奈子が言う。早苗はすでに落ち着いたらしく、「はい」と答える。おもいきり怒った後は多少気まずいらしい。だから先に諏訪子が餅を口に入れる。香ばしい香りのするそれを、彼女ははむと食べる。

「あつ、これ尻尾までアンコが入っている」

もにもに口を動かしながら言う諏訪子だが、彼女の言葉に早苗は困惑した。彼女は手元にある自分の持ちちを見る。半円形のそれはどこが「尻尾」なのだろうか。

早苗はとりあえず自分のモチをがぶつと食べる。口の中に広がる甘い味は諏訪子の言うアンコであろう。しかし、ここで神奈子が叫んだ。

「あー」

「ななんふえすがかなごきぎ」

口に物入れて喋ると何を言っているのかわからない。それでも神奈子は言う。

「早苗。頭から食べるなんてかわいそうじゃないか……」

「え、えええ！」

頭、尻尾。何か別の物を連想する早苗だが、二柱に言われて慌ててしまう。一応は社の名産品であるからには、食べ方があるのかと思つてしまった。ただ、諏訪子が噴出してしまふ。

「あ、ははは。早苗は可愛いなあ」

「えっ?」

つられて神奈子も笑う。

「はははは」

やっと早苗はからかわれたということに気が付く、彼女はバツと立ち上がった。

「もう、二人ともひどいです!」

「あはは」

「ははは」

笑いはやまない。ただ、風が吹いた。

早苗は髪を手で押さえて、風来た方向を見る。

東からだつた。

15話 A

秦　　こころは綺麗な夕焼けを見ていた。ここはどこだと見渡すと、目の前には川が流れている。ここはよく遊びに来る町中にある土手だろう。彼女は どうして自分はここにいるんだと考えて空を見上げる。夜になっている。星の散りばめられた空。

「……………」

先ほどもオレンジ色の空が、今は暗い。星が光り輝いている空はまさに「夜」だった。こころは無表情で驚いて、首をかしげる。いったいどうなっているかと考えてみるが、すぐに答えは出た。

これは夢だ。たまに夢を見ている時に「夢」と自分でわかる時がある。それが今なのだろう。彼女は目を瞑って考える。昨日はチルノ達と遊んで、いつの間にか寝てしまったような気がする。いつ自分が眠ったのかは覚えてはいない。

目を開ければ暗い空で星がきらきらと輝いている。いつの間にかあたりの風景も変わっている。だだっ広いそこは土が地肌を剥き出しにしている。こころがあたりを見回せば滑り台やブランコがある。

いつの間にか顔をだした月がぼっかりと浮かんで足もとを照らしてくれている。月

が出てきてくれたのはところが望んだからなのだろうか、それは夢の「主」の彼女にもわからない。

「公園……」

ぼつりとつぶやくところ。そう、いつもここでチルノ達と遊んでいるから見知った場所である。記憶の中から出てきたのだろう。

こころはブランコにふらふらと近づいていき、座る。錆びた鎖につながれたブランコがキィキィと音を出して揺れる。

こころはそこに座ったまま、ぼんやりとしていた。夢だと分かっているても何をするともない。当然眠たくはないが、かといってやる事は無い。起きるまでは暇だ。

こころはそこで思う。現代に来て最初はやることなどなかったのだ。

現代に来たこころは「お面」を持っていない。幻想郷では感情を表すためにお面を携帯していた。それは彼女の感情にしたがって周りを浮遊したり、パツと出したり消えたりする事が出来たから持ち運べたのだ。だが、今はそうはいかない。

こころが幻想郷で持っていたお面は66種類。その一つ一つは大切な感情の現れである。とは言っても普段は数種類しか使わないがそれでも多い。

大量のお面を持って歩くことはできない。カバンに入れて必要な時に出そうとした

ことはあるが、それにもたついてしまい、実用的ではなかった。ならばと手に全てを持っていたこともあるが、それはまさに『手に余った』状態になった。

だから無表情で無表現でいることが多くなった。本来であれば「お面」が無くなったことで感情も不安定になるはずだが、現代に來た影響なのかそれとも他に理由があるのか、気分が変に高揚したりはしないことだけが救いである。

現代に來て早々にリサイクルショップに紛れ込んだ奇妙な考え方をしている「店長」に雇ってもらったから、生活には困窮はしなかった。ただ接客業をしなければならなかったのには参った。

「いらつしやいませ」

とところは無表情で言うしかない。その大きな瞳は傍から見れば可愛らしいが、目の前にすればじいとじいと見てくるのだ。それに気圧されて逃げるように帰った客も多かった。お面をしていればふざけていると思われるから難しかった。

店長は「気にしなくていいよ」と気軽に言う。だがこころとしては不本意なのである。自分の感情を有効に伝える術がないということはずごく、辛い。彼女は無表情だが、感情は豊なのである。

——ああ、そうだった

夢を見ている「こころ」は思い出す。ブランコに座った彼女の前で、無表情の「過去のこころ」がいる。それはいつのかの自分の姿だろう。リサイクルシヨップの前に佇んで、暗い表情で一人物を考えている。公園にいるのにリサイクルシヨップが見えるのも「夢」だからだろうか。

きいきい、とブランコを揺らす。段々と空が明るくなつていき、照り付けるような太陽が地面を焦がしていく。光り輝くそれはいつの間にか夜をどこかに追いやってしまったらしい。こころこころと変わる空は、まるでこころの「心」のようでいつだって定まらない。

無表情だからと言って。感じないわけではない。

無表情だからと言って。感情が無いわけではない。

無表情だからと言って。心が傷つかないわけではない。

本当に無感情であるのなら彼女は幻想郷で宗教戦争の発端になったりはしてないだろう。「希望の面」を失くす前にはすべての感情が備わって、何も興味を持ってなかったが今は違う。それからは違っている。だから感情を表現できないのは苦しいのだ。

ブランコの周りにぼたぼたと水滴が落ちてくる。「夢を見ているこころ」が空を見上げれば、厚い雲が空を覆い、そこから大粒の雨が落ちてくる。それはだんだんと強く

なつていき、どしや降りになった。しかし、不思議とブランコに座っている彼女は濡れなかった。夢だからだろう。

確かにブランコに座る「今のところ」は雨にぬれることはない。だが、それでも冷たい雨に身を震わせる少女が一人いた。

そう濡れているのは目の前にいる「過去のところ」だった。彼女は何時も着ていたチエツクのシャツを着たまま雨の中で空を見上げている。髪が肌に張り付いても無表情を崩さない。これは記憶の中の光景だから、いつかの雨の日に実際に有ったことなのかもしれない。

ブランコからこころが立ち上がった。そしてつかつかと目の前に佇む「過去の自分」に歩み寄る。過去の自分は暗い顔をしているわけではない。いつも表情は変わらないがそれでも何を考えていたのかは覚えている。

合わせ鏡の様に二人のこころが向かいあう。姿形も服装も、表情も一緒。ただ片方の頭上は晴れていて片方は雨。対照的な空は今の「心」の形なのだろうか。しかし「今のこころ」は立ち止まると、

——水平チョップを繰り出した。

過去のこころの首に一直線。素早い攻撃を繰り出す。しかし「過去のこころ」もさる

夏が近づいてきたころ、ものであふれたりサイクルシヨップにお客さんが来た。それは幻想郷では巫女をやっていた黒髪の少女である。こころは宗教家として彼女の姿と、現代に来て作業着を着こなしている姿を対比して「しよぎようむじよう」と無表情でつぶやいた。

巫女の傍に一人少女がいたが、こころは気にも留めなかった。

本来であれば接客をしなければならぬのであるが、今日は店長がいた。巫女はそちらに話しかけたからこころに出番はなかった。楽であるのでこころはホツとする。以前能楽を開く過程で協力してもらったが、今は感情を表す手段がなくて人としやべる気はない。

——……さん。テレビが欲しいんだけど。二千円くらいで

——それは値切るといふレベルではないね。あつ待つてくれ。

店長は何かを思い出したように店の奥に行く。行先は倉庫で巫女もそれについていった。

こころは店に一人、特にやることはない。今日は別のアルバイトはいない。竜宮の使いはふらふらと朝からどこかに行った。ろくろ首は朝に弱いらしい。

こころはなんとなく手に付けた時計を見る。何時か確認したというよりは時間を確認する仕草が現代に来て癖になっている。ちなみに時計はリサイクルシヨップに転

がっていたものを使っている。黒いデザインのデジタル腕時計。表面に「G—shock king」と書いている。

こころは椅子に座って時計を覗き込む。すると頭にゴツンと何かが当たった。

「!」

「いったあ!!」

こころは頭がジンジンと痛むのを感じて、目の前を見る。すると青い髪の少女がうずくまって頭を押さえている。彼女の頭が当たったのだらう。

少女は青と白のストライプのシャツを着て、短いスカートを穿いている。彼女は巫女についてきた妖精であった。名をチルノという。

「いったいわね! 気をつけなよっ!!」

涙目で立ち上がったチルノはびしとこころを指さす。痛いのはこころでもあるし、気を付けるのはどちらかというチルノであるが勢いに負けて、こころは頷いてしまう。チルノは「まったく」と言いながら、腕を組んで鼻を鳴らす。

「少しかっこいい時計を付けているからって、あたいに体当たりしてくるんで……」

「?!」

いつの間にか体当たりをしたことになっている。こころは困惑したがそれよりも気になることがあった。

「かつこいい、時計?」

こころはなんとなく自分の腕をチルノに見せる。そこに黒光りするデジタル時計が巻かれている。衝撃に強いことが売りらしく、無骨なデザインをしている。

「うおっ」

身構えるチルノ。何でかわからないが効いているらしい。だからこころは一步前に出た。腰を捻り、時計を付けた腕を頭上に高々と掲げる。以前宗教戦争で使った勝利のポーズだ。これでもかかと印籠のごとく時計を見せる。

チルノが眩しげに顔を背けて膝をついた。そして言う。デザインが彼女のストライクであつただろう。

「か、かつこいい」

こころは「勝利にポーズ」のまま固まる。何をやっているのかは自分でもわからないが「かつこいい」と言われて悪い気はしない。彼女は鼻をふふーんと鳴らして、無表情で勝ち誇る。それに気が付いたのかチルノは急いで立ち上がり反撃した。

「あ、あんた見ない顔だけど誰? あたいの名は最強!」

「最強?」

「あつ、違う最強だけどチルノ」

「最強チルノ?」

「そー」

どうだ参ったかとチルノは胸を張り勝ち誇る。どこに「参れば」いいのか、何故勝ち誇っているのかはわからないが、ここはメラと心の中で闘志が湧き上がってくることを感じた。何故ならばとある尼のせいで彼女は「最強の称号」をかけて喧嘩して回ったことがあるのだ。要するに「最強」とはNGワードなのだ。

ここはそのせいで勢いよく宣言した。彼女は逆にチルノを指さす。

「私と最強の称号を賭けて戦え！」

「受けてたつわ!! ついてきなさい!!」

話がトントン拍子に進んでいるが、二人ともなぜ戦うのかとは難しく考えていない。そもそもここは自己紹介もしていない。チルノも完全にノリで動いている。ただし本気であることには変わりない。

リサイクルシヨップを二人は勢いよく飛び出していく。これから「最強の称号」をかけて勝負しなければならぬのだ。ここは店番などやっていられない。チルノは巫女など待っていていられない。二人はたたと道を走っていく。

問題になったのは勝負の方法である。弾幕ごっこはできないし、本気で殴り合いをするわけにもいかない。それをすれば警察がくる。もちろん逮捕されるのはここであ

る。この場合は体格が大きいほうが「悪い」ことになる。

二人は考えたのは安全かつ、美味しい勝負であった。彼女達は商店街のとある店に向かった。そこには幻想郷の少女がいる。

二人の目的地は小さなお店であった。入り口から入って左を見れば厨房。右を見れば畳敷きの客席。床よりも少々段を高くされているから客席に上るときには履物を脱がなければならぬ。

その店にチルノはバーンと入り口を開けて、ドーンと客席にダイブする。そして間髪入れずに厨房にいる店員に言った。靴は脱いでいない。流石にチルノの勢いに吞まれたのか後からこころが静々と入ってくる。

「かき氷！　ありったけ!!」

「お、お前は。いきなり入ってきて……ん、博麗の巫女にくつついてる少女ではないか？　そんなに汗をかいてどうしたのだ」

店員が厨房でうろたえる。いつもこの店に入ってくる連中は妙な登場の仕方をするが、まだ天人と巫女が一緒に来るのは少し先の話だ。そして店員は銀髪にポニーテールをした可愛らしい少女だった。ただ、何故か烏帽子をかぶっている。

物部 布都。それが彼女の名前である。実はもう一人店員がいたが、チルノがダイビ

ングをしてきた瞬間にすうと奥に引っ込んでいった。逃げたのだ。ただ元気なチルノの様子に「妬ましい」と爪を噛んでいた。

布都は状況が分からずにチルノに聞いた。彼女は厨房から出てきながらエプロンで手を拭いている。

「か、かき氷を食べたいのか?」

「食べたいけど、じゃなくて勝負よ。あたいとコイツが最強の称号を賭けて勝負するのよ!」

そこでやっと布都はここに気が付いた。いつの間にか入ってきている。ここはここらで布都と眼が合うと無表情で固まる。お面がないからどうしようもないのだ。だからだと額から汗が流れている。どうしていいのかもわからない。

「お、お前は面霊気ではないか?!? なんて、ふげ!」

急に悲鳴を上げて布都が後ろにのけ反った。見るとポニーテールの先っぽをチルノが掴んで引いている。

「早く!」

「な、何をするかつ。私の髪を引くなつ。それに……勝負とは、最強の……?」

そこで布都はハッと気が付いた。これは許せることではない。

「最強は太子に決まっておるではないか! 太子を差し置いてそのような不埒なことを

考えるとは許せぬ！」

「なんだと！ タニシなんかにあたいが負けるもんかつ！」

「た・い・し。だ!!」

「こころを蚊帳の外に置いてヒートアップしていく二人。だがチルノは言った。

「わかつたわ。タイシだが体脂肪だは何だが知らないけど。まとめてかかつてきなさい

！」

「き、貴様ー。太子を愚弄するか！」

「グロウって何よ！ 美味しいの!? タニシだとかグロウだとか意味わかんないことばかりいうんじゃないわよ！」

「わなわなと怒りに震える布都はきつとチルノを見つめる。彼女は両手を構えて、着ていたエプロンをバサツと払う。ちなみにチルノは「体脂肪」という単語は知っているが、意味は知らない。

「そ、そこまで言われて黙っているわけにはいかぬ！ かき氷だと言っていたが、貴様にはたらふく私の自信作である布都コロツケを食させてやろう。残したらお代はきつちりいただく!! この前のような情けは掛けぬぞ!!」

「布都の言っている「この前」とはチルノとそと一緒に住んでいる連中が店に来て「人数以下のコロツケ」を頼んできたので、金銭的なことと察しておまけをつけた話である。

と自信満々に持ってきたものである。布都コロツケの大盤振る舞いである。サツマイモにサクサクの衣をつけたそれが彼女の自信作なのだ。少し後に彼女は自分を「料理人」と自称するようになる。

「謝るなら今の内だぞ、青髪の妖精と面霊気よ！」

「いただきます!!」

「聞け。私の話を!!」

チルノの元気の良い「いただきます」に布都が思わず叫ぶ。だがそんなことは意に介せずチルノは両手にコロツケを持ったままばくばくと食べ始める。ここもとりあえず両手に持ってもししゃもししゃと食べ始める。

その様子を見てチルノはにやりと笑った。そして言う。

「勝ったわ」

何に勝ったのかはわからないがこころの食べっぷりを見て宣言した。それが分かったからこころも無表情でむつとする。彼女はコロツケを三つ摘まむと大口を開けて、ばくりと食べる。

「お、おぉー」

布都が驚きの声をあげる。こころは口をリスの様に膨らませて咀嚼する。表情はないが、チルノをちらりと見る。だが青髪の少女もわかった。こころが「どうだ」とばか

りに自分に見せつけていることがだ。

「あ、あたいは四つよ」

「む、無茶だ、やめよ」

布都が何故か心配している。チルノはそんな声には耳を貸さずに四つ両手にコロツケを持つ。そして大きく口を開けて詰め込む。無論入らない。だが無理やり押し込み押し込みして、四つのコロツケを口に咥えた。食べたというよりは咥えたというほうがいい。

「ほうだふやふあか」

チルノはからコロツケの出しまま、勝ち誇る。彼女は「どうだ、参ったか」といったのだろう。それを聞いてこころはごくりとコロツケを飲み込む。大きな瞳でチルノをじっと見る。そして彼女も四つコロツケを取る。

「あ、ああ」

大量にコロツケを持ってきたはずは何故か一気に消えていくことに布都は不安にもった。材料を全て使い切ってしまったのはどう考えても誤りであった。今はまだ午前中である。これから来る客に自信作が出せない。

「ふ、ふん。貴様らもなかなかやるではないか」

それでも震えた声で強がる布都。彼女は勝負の中止を求めたりはしない。そんなこ

とをすれば豪族としての沽券に係わる。

誰も止める者のいないところはコロツケを味わうことなく口に放り込む。入らない。三個が限界だったのだろう。だが、負けるわけにもいかないので無理やり入れ込もうとしたら喉に詰まった。

「……!!」

胸をどんどんと自分で叩くところ。布都はびっくりして慌てて水を持つてくる。チルノは口を大きくコロツケで膨らませて頑張れとジエスチャーする。ところはそんな段ではない。無表情の目元に涙をためている。

「み、水だ。面霊気」

布都が持つてきた水をこころは貰うと口に流し込む。こぼれた水が頬を伝うがそんなことを気にする余裕はない。ごくごくと飲んで、彼女はふうと息を吐く。死ぬかと少し思った。

チルノもコロツケを食べ終わり、両手を自分の頭の後ろにまわす。そして少しだけこころをじつと見る。何故か先ほどまでやかましいくらいだった彼女が黙っている。

(な、なに?)

こころはその意味が分からずに戸惑う。布都は横から「ほらもう一杯」と水を持つてきてくれた。妙に優しいのは地なのかもしれない。だがこころの顔は物を言わずに

黙っている妖精に向けられている。

チルノは少しして口を開いた。彼女は想ったことをすぐにいう。

「あんたって、わかりやすいやつね」

「……………」

何でもないようにチルノは言う。しかし、彼女の言っていることはおかしい。こころはずつと無表情である。ニコリともしないし、怒ったり悲しんだりも顔で表現できない。だが、チルノはその疑問には答えずコロツケを食べ始める。しかし、こころはその意味を聞きたい

「お前何を言っておるのだ？ 面霊気は表情が変わらぬのだぞ？」

こころの疑問を布都が聞く。何故かこころも自分のことなのに頷いてしまう。しかし、チルノはそれこそ意味が分からないという顔で返す。彼女はこころを見ながら言った。

「はあ？ コイツってばあたいの強さに悔しそうにしたり、怒ったりしているじゃない」

「お、こる？」と布都。

「だーかーら。コイツ、顔なんて見なくてもなんかこう、わかるじゃない。あんた馬鹿ね」

「なつき、貴様に言われたくないっ！」

むきーとまた怒った布都の横でこころは眼をばちくりさせる。彼女はチルノの言っていることが理解できない。自分の表情が変わらないのはわかる。だがそれを「表情をお面」で表さなくても理解できるといふことがわからない。

チルノはもぐもぐとコロツケを食べていく。本当に味わっているのかというペースでその小さな体に詰め込んでいくのだ。彼女は一度こころを見て言う。その顔はにんまりしている。

「食べないのならあたいの勝ちね！」

いきなり言われてもこころに負ける気はない。だから負けるものか、とこころは無表情のまま気合を入れる。その時、チルノは言った。

「ふん！ どんなに気合をいれてもあたいに勝とうなんて十年早いわ」

こころは眼を見開く。そして聞いた。

「……なんで？」

「なんで、って決まっているじゃない！ あたいは」

チルノはバツと立ち上がって親指を自分に向ける。そして胸を張る。チルノは勝つのはいつだって自分であると確信している。だからいつでも彼女はこう言うのだ。

「最強ね!!」

てすやすやと眠っている。昨日ゲームを終えた後とは寝方が違うということは、ごろごろ動いていったのだろう。その過程でルーミアは枕にされ、こころはかかと落としの標的にされた。

「あ、あたいつたら最強ね……」

夢の中でも彼女は最強らしい。その様子を見て、こころは無表情で首をちよつと動かす。先ほどまで自分も夢を見ていた気がするが、全てきれいさっぱりと忘れた。起き方が強烈過ぎたのだろう。

こころは起き上がり、部屋のカーテンを開ける。まぶしい光が部屋に入ってくる。空は晴天である。こころの気分もいい。

昨日のままの部屋が明るく照らされる。置きっぱなしのゲーム機も、散らばったカセットも。食べきれず、開けなかつたお菓子もある。楽しさの跡、これからの楽しみの形。遊ぶ時間はたっぷりとあるのだ。昨日の続きを今日しなければもったいないだろう。

まばゆい朝日。その中で無表情のまま、こころはチルノとルーミアを振り返る。少しも変わらないその表情にはどんな感情が込められているのだろう。それがわかる少女は「もう食べられない……」と奇妙なことを言っただけで眠っている。

15話 B

四季映姫は旅館の一室で本を読んでいた。部屋の縁側には小さなテーブルと対の椅子があつて、彼女はそれに腰掛けている。電気は付けていない。クーラーも消している。ただ、月の明かりと網戸から入ってくる潮風だけが彼女の読書の「おとも」であつた。それだけで涼やかである。

彼女の緑の髪が揺れる。頭には閻魔帽をつけることはないから左側だけ長い艶のある髪に月光が反射する。

映姫は浴衣姿ではあるが乱れは一切ない。椅子の背漏れが少しだけ軋む音がする。

ぺらぺらとページをめくる指先は細く、しなやかであつた。それでもニコリともしないのが彼女らしい。表紙には「ルバイヤート」と書かれた岩浪文庫である。どこかのキャプテンのように漫画はあまり読まない。

「……………」

ぱたんと冊子を閉じる映姫。しおりを挟む様子はないのは、彼女はどこまで読んだのか覚えているからだろう。映姫はそのまますくつと立ち上がる。座つても立ち上がったも彼女の姿勢は良く、背筋が伸びている。

彼女は冊子を部屋の隅においていたバッグに入れた。座敷の畳の上には寝床が敷か
れている。後は寝るだけなのは彼女も同じなのであろう。明日からは野球の練習があ
るのだから、少しは寝ていないと堪らない。

余談だが彼女は夜更かしをしているのではない。引率してきた少年少女達が夜中ま
で部屋で遊んでいないか、一定時間ごとに見回っているのである。もちろんのことだ
が、見つければ説教が始まる。

ただ、映姫はふと喉の渇きを覚えた。彼女は特に独り言を言うこともなく。飲み物を
買いに行こうと決めた。外に出なくても旅館のロビーには自動販売機がある。ついで
に最後の見回りをしようとも思った。それで一石二鳥だが、別に子供達に「最後の見回
り」などと言う気はさらさらない。映姫がいつ寝たのかわからないくらいがちようどい
いのである。

とりあえず映姫は部屋のスリッパを履いた。少し大き目の物である。

☆☆☆

廊下に出ると映姫は静かに歩く。他の宿泊客に迷惑を掛けない為であるが、とある
部屋の前に来るとぴたりと足を止めてから、眼も閉じる。彼女は耳を澄ませて中からの
物音を聞いているのである。無論ここは少年野球のメンバーの部屋、その一つである。
ドア一つを隔てて映姫は中で「まだ寝ていない子」がいなか確認しているのである。

話し声等聞こえようものならば説教である。

幸いにして何も聞こえなかった。映姫は眼をぱちつと開けて、歩を進める。いくつかの部屋の前で同じ仕草をしながら彼女は進む。映姫が立ちどまって場所は引率してきた子供達の部屋なのだろう。こちらからも物音はなかった。

「……」

表情を変えずに映姫は廊下を歩く。良い子にしている教え子たちに対して、少々可愛らしく思う気持ちもあるが彼女の表情は変わらない。ただ、彼女はまだ甘いのかもしれない。普通夜更かしする子供というのは大人以上に用心深いのである。

深淵を除いている時、深淵もこちらを覗いているという哲学者の言葉がある。それと同じように映姫が近づいてくる時には、中で子供達の耳を澄ませていると考えられないこともない。しかし、その真実は映姫がドアを開けない限りはわからないだろう。

だが、映姫の前からやってくる一人の子供がいた。薄い緑がかつた髪をした少女が廊下を歩いてくる。映姫はその姿をみて、ふと立ち止まった。誰かに似ているが暗闇でよくわからない。

相手も廊下の壁を伝ってふらふらと近づいてくる。足もとがおぼつかないのは、眠たそうである。映姫ははあとため息をついて、彼女に近づいた。このままでは転んで危ないかもしれないからだ。

もちろん彼女は古明地こいしである。部屋で姉から物語を聞かせてもらっていたが、いつの間にか寝入ってしまったらしく、部屋には姉の姿がなかった。だから探しに来たのだろう。ついでにいえばまだ「漫画」は読むので置いていてほしかった。

ふらあとこいしはよろける。映姫はその肩を持ってささえあげた。ここまでくれば相手が誰かくらいはわかる。それも旧地獄を任せている者の妹とすればわからないはずがない。彼女は比那名居天子を見た時に旅館に誰か知人が来ることは想像していた。どうやらの中しらしい。

映姫が手に力をいれてこいしを立たせる。こいしは眼をしばしばさせて、目の前にいる者を見た。寝ぼけて視界がぼやけている。

「ほら、危ないですよ」

目の前の人影がこいしに話しかけてくる。女性の声だが、どこかで聞いたことがあるようなないような、まともにこいしは判別できない。

「……うん、おねえちゃん?……」

「いいえ。残念ながら違います」

どうやら姉ではないらしい。こいしは眼をごしごしして、相手を見る。だが頭がうまく動かない。相手の頭髮が緑色だということはわかった。そこでこいしは「あつ」と何かに気が付いたように言う。

「もしか……して」

こいしは自分のことに気が付いたのだろうと映姫は思う。しかし、これから彼女を放置しておく気もないから、どうせばれることだろうと思っていた。姉の方とも会うことにはなるだろう。それも致し方ない。

こいしは言う。彼女が認識しているのは目の前の者が「緑色の髪」をしているということだけである。

「びつ……」……ろさん……？」

「いいえ。違います」

こいしは寝ぼけているのか全くわかつてはいないらしい。そもそも誰のことを言っているのか映姫には見当もつかない。まさか自分よりも遥かに強い者の名前だとか気が付かないだろう。

こいしはこくと顔を動かす。今にも寝てしまいそうである。映姫にもたれかかってきてしまう。こいしは無意識に映姫の浴衣の胸元を掴んで、体ごとずり落ちそうになる。はだけそうになったが映姫はこいしの体を抱いて抱えたから大丈夫だった。

「仕方ありませんね」

特に動じることはなく映姫は言う。こいしが一人で泊まっているとは感じられないから、彼女の家族か仲間がいるだろうと考えて、半分眠っているこいしに肩を貸しながら

らロビーへ向かう。もしかしたら誰かいるかもしれないし、それでなくもロビーで従業員に聞けばいい。深夜にも当直はいるだろう。

だが、映姫は誰かを探すことはなかった。なぜなら直ぐに見つかったからだ。

☆☆☆

こいしがとある漫画にはまったのは少し前のことである。

とある晴れた日の縁側のことであった。お寺でやることもなかったこいしはアイスキャンディーを嘗めながらぼけっ空を見ていた。頭には丸帽子をかぶり、首元にフリルのついた淡いピンクのシャツを着ている。黒のミニスカートと黒の生地、白のラインの入った靴下を穿いている。

こいしは空を見上げながらぺろぺろとアイスキャンディーを嘗めている、縁側から足を投げ出し。両方の足をぶらぶらさせる。要するに暇なのである。靴下の指先がぐくぐくと動くのは彼女がその小さな指を動かしているのだろう。

青い空を見ているとなんだか眠たくなってくる。夢の中で眠たくなってくるとは不思議だが、そうなるってしまったのであるから仕方がない。こいしは大きく欠伸をして、縁側に横たわる。足をぶらぶらさせるのはやめない。

「御飯ですよー」

どこからか声が聞こえてくる。こいしはそのつぶらな瞳をくりつと動かして、寝ころんだままアイスキャンデーを口に咥える。がりつと囁んで、ごくりと食べる。甘くて、それに冷たくておいしい。

お昼に「御飯ですよ」と言うのは山彦か船幽霊しかいない。こいしは「はい」と声をだして立ち上がろうとする。ころんと寝転がったままうつぶせになる。腕立て伏せの要領で立ち上がるというのだが、口にはアイスを咥えたままと考えると器用である。

「あれ、これ何かしら」

こいしの目の前に漫画が十冊ばかり積んである。ここは縁側だから、船幽霊が置いていったものだろう。彼女はその漫画を手にとって読み始めた。当初は漫画というものも知りはしなかった彼女である。だからこれも絵本の一種だと思った。表紙には緑色の龍が描かれている。

「ふーん、どらごん……ぼーる」

こいしはつまらなさげにタイトルを呟く。興味が出たから読んでいるというよりは、そこに落ちていたから読んでいるのである。無意識の行動であった。そもそも漫画という物は現実を誇張した表現が多いが、幻想郷の住人であった彼女にはそこまで衝撃的なことはない。

空間を操る。心を読む。魔法を使う。そんな異能の力もこいしの傍にはたくさんあった。それだけでなく、死霊とか神様や吸血鬼なんて言う超常の生物も見慣れている。だからこいしはたまにテレビに映るアニメを「弱そう」と言って見なかった。

どんな存在でも姉やその周りには敵わないだろうという信賴のような物がこいしにはある。だが、それも今日までだった。

こいしが気が付いた時には夕方になっていた。遠くの山にオレンジ色の夕日が沈みかけている。彼女は漫画を夢中になって読んでいたから、気が付かなかったのだ。

手元にはいつ食べたのかわからないがお盆に載った空の皿が置いてある。こいしの口餅に米粒が付いているから、漫画を読みながら食べたのだろう。持ってきたのは誰だろうか。

そんなことより、こいしはどきどきする。胸が高鳴るのは恋をしたときの様であるが、むしろ激しい戦闘を見た後での興奮に近い。彼女は漫画を胸に抱きしめて呟く。

「……フリーザ……すごい」

何かのキャラクターをこいしは言う。彼女は漫画を抱いたまま立ち上がった。

目がきらきら、口元はにつこり。こいしはどたどたとどこかに駆けていく。途中廊下で靴下が滑り、こけそうになったが持ちこたえた。

まさにカルチャーショックである。流石に幻想郷でも星を破壊する力を持つ者はいない。だが彼女の持つ漫画にはたまによくいる。だからこそ古明地こいしの心を驚かすに似たのだ。この世の中でここまで強い者がいるとは思わなかった。

こいしは赤い可愛い靴を履いて、庭に飛び出した。何をしようと言うわけでもなく、心が湧き立って何かをしたいのである。特に力(りき)を高めたいと彼女は想っている。

「よし、みんな元気をわけてー!」

庭の真ん中で万歳するこいし。やりたいからやっているのではなく、もう体が勝手に動くのである。こいしはわくわくした顔で空を見る。夕焼け空に一羽の鴉が飛んでいくが、それ以外には何も無い。

「うーん。修行がたりないのかしら……」

腕を下ろして、両の掌をこいしは見る。どうやら「元気」とやらは集まっていないらしい。それでも彼女はぎゅつと両手を握りしめて、きりりと真面目な表情をする。その頬は赤く火照っていて、眼は爛々と光っている。

それからこいしの修行は始まった。一日中暇なので、一日中修行に明け暮れることができた。たまに幻想郷で見たことのある者たちがお寺にやってくるがこいしは接客な

どしない。会えば挨拶はする。

時には漫画フリークの船幽霊が新しい「ドラゴンボール」の漫画を買ってくると、矢も楯もたまらず読みふけた。基本的に邪魔をされないうために漫画を持ってお堂にもった。

そう、お寺の裏には小さなお堂がある。そこはつくりは古いが、仏像が安置されており熱心な檀家が年に数回お参りに来る。もちろん住職も来るが、このごろが代理の聖白蓮に寺を任せているので頻度は少なくなっている。つまり、あまり人は来ない。

そのお堂で仏様の前でこいしは漫画を読む。間違っても真言など言わないし、お祈りもしない。ただ仏像とは仲良くなったらしく、こいしはお堂に入るときに「オッスー」と仏像に挨拶をするようになった。

おたまに入口が開いてこっそりと聖人が見に来たが、くすつとして去っていく。こいしがどこかに行った時を見計らって聖人は戻ってくる。たまにネズミがくるが、お供えのお菓子を一つ二つポケットに入れて帰っていく。

一応毘沙門天や尼も来るが彼女達はこいしには気が付かない。こいし自身も誰にも話しかけたりはしない。集中しているからだ。ごくまれに忘れ小傘も来るが、こいしを見てからビックリして帰っていった。

こいしは心行くまで漫画を読んだ。同じシーンを何度も繰り返して読みつつ、できそ

うな技は真似してモノにした。

「ろうが！ ふーふーけんっ！」

その日も修行でお堂で両手をふるうこいし。まるで獣が獲物に襲い掛かるような激しい動き。爪をふるうようにこいしは動く。彼女はばたばたと暴れた後にふふと笑う。

「習得したわ。一番簡単な技ねっ！」

どすんとその場に座るこいし。彼女はふとスカートの裾を摘まんで思う。

「これじゃあ動きにくいわ……何か道着を探さないと……」

こいしは自分のファツションを動きやすい物に変えようと決心した。しかし、今日は疲れた。彼女はその場にころんと寝ころんだ。しばらくするとくうくうと眠り始めた。

しばらくするとこいしは眼を覚ました。お堂で寝たから体が冷えてもおおかしくはないのだが、何故か彼女の体にはタオルケットがかかっている。それにお堂の板敷に寝ていたはずなのに、頭には座布団が敷かれている。

こいしが体を起こすと念仏が聞こえる。見るといつも挨拶する仏像の前で誰かがお祈りをしている。もう夜だろうが明かりは付けていない。蠟燭の灯が二つ、三つとゆらゆらと動いている。

そこにいたのは黒い袈裟を着た女性だった。長いウエーブのかかった髪は頭頂が紫で毛先になるほど鮮やかな黄金色になっている。それが蠟燭の光で光って、美しい。

お堂では麗しい声で念仏が響く。まるで歌を唄っているように女性は言葉を紡ぐ。彼女の言葉には至誠が現れていると言つていいだろう。心の底からの声だった。

きゆううとこいしのお腹が鳴る。それを聞いて女性は念仏を中断して、ゆるりとした仕草で後ろを振り返る。女性の大きな瞳がこいしをみると、彼女は穏やかに笑みを浮かべた。優しいその笑みを見るとこいしは何かに含まれるような錯覚を覚えた。

「こいしさん。起きられたのですね？」

女性、聖 白蓮は聞いた。甘い声というよりは限りなく優しい声である。こいしはうんうんと首を縦に振つてこたえる。おそらく彼女にタオルケットを掛けたのも、頭に座布団を敷いたのも聖であろう。

「私寝ていたのね。お腹減ったあ」

「ふふ、よく眠られていましたよ」

聖は立ち上がる。彼女はこのいしの為に念仏を中断した。あまり頓着はしない。不真面目ではなく、その程度のことでは仏様が怒るわけがないと信じているのかもしれない。頑迷な考えは彼女は持ち合わせていない。

「ご飯を食べに戻りましょうか。こいしさん」

言いながら聖は手で蠟燭を扇いで消す。息を吹きかけて消したりはしない。何故ならば人の吐息は穢れていると仏教では考えられているからである。ただ、手の風圧で蠟燭の火を消す行為がこいしにはとてもかっこよく感じられた。

「わ、私がやるわ!」

「えっ? そうですか……それではお願いします」

聖は最後の蠟燭を消そうとしていた手を止めた。そのかわりに入り口に歩いていき、お堂の扉を開いた。夜とは言っても街中には街灯があり、空には月と星がある。だから夜の青い光が静かにお堂の中を照らしてくれる。先に蠟燭だけを消してしまうと真っ暗闇になってしまうから、聖はそうした。

そうやって舞台は整った。

炎の点つた蠟燭の前で「狼牙風風拳」の構えをするこいし。聖は眼をぱちくりさせて見ているしかない。揺らめく炎を見つめているこいしの顔は真剣そのものだったからだろう。何故真剣かと言われれば修行っぽいからである。

「はいっ、はいっ!」

手を振るうこいし。炎は揺らめくだけで消えない。ムキになってこいしは両手を動かすが蠟燭は消えない。びゅんびゅんと風を斬る音だけがお堂に響く。聖はそれを静かに見ている。

「はあ、はあ」

こいしはしばらく動いてから膝に手をついた。これだけ動いても炎は揺らめいている。あまり激しくやっても効果は薄いようである。

「だめね。このわざは……」

こいしはそう結論付けた。そうつけようとした、だが聖が口をはさんだ。

「こいしさん」

「んー？」

こいしはくるつと振り返る。そこには法衣の袖をまくった聖がいた。お淑やかな彼女は実のところ体を動かすことが好きである。だからこいしが何かの武術のような動きをしていて、むずむずしたのだろう。

「そういう時は、こう目標に対してやみくもに拳を振るつてはいけませんよ」

こうやってと聖は足を広げ両手を上げた構えを取る。こいしはよくわからないが「ほうほう」とわかったような口調でその構えをまねる。つまりお堂の仏像と一本の蠟燭の火をバツクに互いに向かいあったのだ。まるで格闘ゲームの一場面のようなのである。

それから単に蠟燭の炎を消すという作業の為に、二人は拳の角度や体の使い方などを話合うことになった。こいしはそれを聞いていく過程で聖への尊敬の念を強めていく。

「まるで亀仙人みたいっ！」

「うーん？　かめ？　私が仙人にということになると怒る人がいそうな気がしますけど……」

苦笑しつつ聖はこいしと戯れる。元々からお堂には人が来ることはすくなく、夜ということもあり。二人の時間がゆっくり、ゆっくりと過ぎていく。こいしは普段聞けなかった疑問などを聖と話し合うこともできた。

「気ってどうやって使うのかしら？」

「気……ですか。それも私が説明していいものかどうか……？」

またまた苦笑しつつ聖は「道教」における気を説明する。仏教の概念からは少し外れているからだ。仏教では「念」などという物はあるが、意味が違う。というよりはこいしの聞きたい「気」は別の物ではある。

結局蠟燭の炎が消えたのは一時間後だった。消したのではなく、自然に蠟燭が燃え尽きて消えたのである。その時には聖とこいしはお堂の外にでて、星空の下で仲良さげに話し込んでいる。それでも聖は蠟燭のことを忘れていないからしつかりしている。

こいしは身振り手振りで「かめはめは」をやって見せる。すると聖もよくわからないがぱちぱちと拍手してくれる。可愛らしい仕草に笑みがこぼれている。このあたりで聖にもこいしが言うことが「漫画」であることが分かってきた。

それでもこいしの話は尽きない。無意識に思うまま、心のまま話をする。聖も柔らか

い微笑を浮かべてうんうんと聞いてくれる。だから、こいしもさらに大きさに体を動かして話をする。言葉と動作が彼女のコミュニケーションなのだろう。

——きゆうう

突然そんな音が鳴る。こいしと聖は眼を合わせて、くすつとする。今の音はこいしのお腹の音だった。

「そういえばお腹が減っていたのだったわ」

「ふふ、楽しくお話もできて私もお腹がぺこぺこです」

聖が「ぺこぺこ」と愛らしい表現を使ったのはこいしの前だからか、それとも地なのかもわからない。彼女は立ち上がってから、お堂の中をひよいと覗き込む。蠟燭はすでに消えているようだった。だから、お堂の扉を閉めてからこいしを振り返る。

「さつ、行きましようか。こいしさん」

「うんー」

花のような笑顔でこいしは答える。楽しいと表情に表れている。

二人は並んで歩く。こいしの楽しげな声と聖の小さな笑い声が静かに、夜を彩っている。

☆☆☆

「う、うーん」

こいしは眼を覚ました。ゆらゆらと体が揺れているような気がするが、別に足を動かしてはいない。彼女の鼻がくんくんと動く。なにかいい匂いがする。

「こいしさん。起きられたのですね？」

あの日の様にやさしげな声が聞こえてくる。こいしははつとする。

こいしは気が付いた。旅館の廊下で聖におんぶされている。背中があたたかいのは、聖がお風呂に入ってきたからだろう。横には村紗。水蜜が頭にタオルを巻いた浴衣姿で立っている。髪の毛を抜いているのかもしれない。

「先ほど、とても珍しいお方に会いましてこいしさんを任されたのですよ」

「めずらしい……かた」

「ええ、まさかとは思いましたが……」

こいしは覚えていない。部屋で姉にお話を聞かせてもらっていたことからの記憶がすつぽりと抜け落ちている。しかし、そんなことはどうでもよくなっていた。

「くう……」

温かい背中が心地よい。こいしはまた、夢の世界に降りていく。それを見て聖も「あら」と言いつつ、くすりとしてしまう。彼女は足取り緩やかに、背中で寝ている可愛い少女がいい夢が見られるように歩んでいく。

聖は呟く。

「いい夢を見られますように」

16話A

リサイクルショップの二階で秦　　こころがチルノにかかと落としを食らったところ、下の階のリビングでスマートフォンが鳴っていた。早朝のことであるから、誰かが連絡をしてきたのではない。スマートフォンには目覚ましの機能があり、其の為に鳴っているのだった。

びびび。

狭いリビングで音が鳴る。この「リサイクルショップ永江」は住居と一体の店舗の形をしている。ただ、流石にメインになるのは「店」としての空間である。だからリビングとは言っても小さな机に本棚、それにソファーとテレビくらいしかない。

ちなみにこのリビングから「店」のスペースへの入り口がある。そこにはドアなどは付いていないが、のれんが付けてあった。そこからリビングを出ると「沓脱石（くつぬぎいし）」という長方形の石が置かれていて、その上にあるサンダルに履きかえる必要がある。もちろん沓脱石は中古である。

リビングのカーテンが閉まっているが、その隙間から朝の陽ざしが入ってくる。その光の中で、小さな埃が舞っているのが見えた。そして、とソファーで何かが動く。

タオルケットを被って寝ている女性がそこにいた。

その女性は紫の髪をして白いシャツを着ている。ゆっくりと開けた瞳は紅い。彼女は体を起こして机の上に合ったスマホを手に取ると音を止めた。どうやら彼女が設定したものであるようだった。

彼女は永江 衣玖。このリサイクルショップの名字と偶然同じだが、やとわれの上に店長代理で働いているものである。店長は今だ帰ってこない。もちろんのことであるが、店の名前ともなんら関係はない。

衣玖はスマホの液晶画面にその細い指をなぞらせる。発光する画面に彼女の白い肌が照らされて、赤い瞳が光る。彼女は流れるような手つきで「目覚ましタイマー」の項目を開いた。

現在は7時00分と表示される。この時間にセットしておいたから、目覚ましは問題なく起動してくれた。ただ、衣玖は別の画面を開く。それは「時間設定」の項目だった。彼女は何かかわからないが目覚ましの設定をさらに行うつもりなのだ。

目覚ましの時間はいくつか設定できる。それも機械が記憶していてくれるので、昔設定した時間を選ぶだけで良い。今、衣玖の手に持たれているスマホはその画面が表示された。

——7時10分

— 7時15分

— 7時25分

— 7時32分

— 7時45分

— 8時00分

繰り返すがこれは過去に衣玖が設定した「目覚ましの時間」、その履歴である。何故かあまり時間が離れていない数分後等の履歴が多い。そもそも衣玖は毎日「一旦」は7時に起きるので、このほとんどは必要がないはずだった。本来であれば。

衣玖の指が止まる。

「……30分は眠りすぎですね」

何かを言いながら「7時25分」に目覚ましを再設定して、スマホを机に放り投げる。それからころんとソファに横になつてくうくうと眠り始めた。先ほど起きたはずなのに目覚ましを再設定して眠りに入る。しかもその手つきが慣れているところから、今日昨日の癖ではないとわかる。

ある意味現代病かもしれない。しかし、衣玖はすぐに起こされることになる。

二階からドタドタと音が聞こえてきた。衣玖の眉がびくつと動く。どうやらこころ達が本格的に起きだしたようである。しようがないと衣玖も体を無理やり起こした。

そんな目覚めであるが衣玖の表情は涼やかである。しかし、行動が芋虫のごとく遅い。タオルケットをゆっくりと体から剥がして、首を鳴らして。立ち上がる。彼女は基本的にめんどくさがりやであり、本来であれば店長代理などやる気はない。だが、こころに任せるわけにはいかないし、ろくろ首はやりたがらないので仕方なくやっている。ふうーと衣玖は息を吐いて、ソファーに掛けてあつたズボンを取る。それはピツチリした履き心地のジーンズである。現代に来てからの衣玖はその手の服装が多くなってきた、元々の服のセンスでそろえようとすると「高い」上に「ない」のである。

ゴスロリシヨップにはあるのかもしれないが、衣玖はその存在自体を知らないからどうしようもない。実際服装の悩みは幻想郷の少女のほとんどが共有しているかもしれない。そのせいで一部の無頓着な者たちはジャージが普段着になっている。もしくは「アイランド・ウイレッジ」である。

そうやって着替えると、ぬつとりビンクに顔を出した桃色頭が一つ。無表情でじつと衣玖を見てくる彼女は、秦　　ころろである。彼女は衣玖が起きているのを確認してから「おはよう」と手をチョップの形にして挨拶してくれる。

「ええ、おはようございます」

衣玖も丁寧に戻す。柔らかな微笑を浮かべた彼女はそのまま、ころろに言う。

「ころろさん。実は今日の私は急用がありました……いまからでなければならぬので

す。その間、お店番はよろしくお願いいたします」

「……衣玖」

「はい？」

「こころは無表情で首を横に振る。桃色の髪が揺れて、少し甘いにおいがする。ただ、次に言う言葉ははつきりしていた。

「騙されない」

「……………」

「またもや無表情のまま言うところ。衣玖は先ほど起きて、二度寝したほどであるから急用などない。ただ「出かけた」だけである。散歩へ。のんびりしたい。ある意味それが急用と言えようであろうが、こころは騙せない。過去に何度となくフラフラと出ていく衣玖を見ていたからだ。

「衣玖は肩をすくめて、やれやれと首を振る。どうやら今日の店番はしつかりと行わなければならぬらしい、ろくろ首が来たなら任せて外に出ていくことも考えないでもない。そう思つて、部屋のカーテンを開ける。

「光が部屋に入ってくる。夏の日差しは強い、衣玖は眼を細めて光をさえぎる。考えてみれば朝起きてから体にじつとりと纏わりつくような感覚がある。それは寝ている間に汗をかいたかららしい。

——ルーミア！ 背中流してあげるわっ。それ

——つめたっあ!!?

お風呂場からは少女の悲鳴のような声が聞こえるが、衣玖は静かに椅子に座っている。できれば汗を流したいのであるが、客人もいるのに先に入るのは難しい。それは空気を乱しかねないのである。

「蛮奇さんは遅いですね。大切な仕事がありますのに……」

ぼつりと言う。蛮奇とはアルバイトの名前のことである。遅いとは言ってもまだ早朝であるから、別に遅刻しているというほどでもない。シフトがアバウトに決まっているので、何時に来るかはよくわからない。たいていそのアルバイトは「マツモトキヨール」に寄って朝ごはんのウインダーを買ってくるのでまだだろう。

それに衣玖の言う大切な仕事とは「店番」のことである。彼女は外に出ていきたいのである。蛮奇が来ればちゃんと店を任せられた状態で外出できる。大体お昼までに客が十人も来ればいい方なので、簡単な仕事ではある。反面暇だった。

暇である。衣玖はただ黙って座っている。彼女は目を閉じて、椅子に深々と身を預ける。手をだらんと垂らして、できる限り楽な体勢を取る。店に誰か来た場合には心配になる姿勢ではあるが、彼女はこれがよい。

遠くで風呂場のドアが開く音がする。衣玖の眼がぱちつと開いて、すくつと立ち上が

る。無駄に背筋が伸びていて、立てば姿勢がいい。シャツが少し小さめなのか、体のラインに引つ付いている。

衣玖はとてとて、のろのろと台所へ向かう。店のスペースと住居のスペース行き来できるようになっていいるから、彼女は沓脱石でサンダルを脱いでリビングに入る。それから台所へまっすぐに向かう。

こころ達が風呂呂から上がったのであれば、次に要求してくるのは明らかに「朝飯」である。ただ、衣玖は朝食を作るような面倒なことはしない。台所には冷蔵庫に詰め込まれた「御飯のおかず」が大量に備蓄されているのだ。

台所に衣玖は着く。狭いが綺麗でピカピカのシステムキッチンがある。要するに殆ど使っていないのである。ただ流し場には多少の食器はある。それは後で洗浄しなければならぬだろう。

衣玖は台所の隅にある小さな冷蔵庫を開けた。大きさが衣玖の首元くらいまでしかないが、少人数の食料を保存するには十分である。中には「ごはんですか？」というラベルの張られた黒い瓶が幾つか。それに「食べよラー油」やイカの塩辛というとりあえずはホカホカのご飯にかけるだけで食べられるものが入っている。

そのほかはゼリーや奥の方には何故かバナラエツセスなどが入っている。このリサイクルショップで料理をするものなどいない。衣玖はできない事は無いが、空気を読

んでしない。

「大丈夫ですね」

栄養的に大丈夫ではなさそうなおかずを見てから衣玖は言う。後はと彼女は振り向いた。そこには文明の利器である赤い「炊飯ジャー」があった。

幻想郷に住むものであれば、この炊飯ジャーの有難さはわかるであろう。なんといっても薪を拾ってきて火にくべ、数時間ほど炊き続ける原始的な炊飯とは一線を隔す、それこそ世紀の大発明である。現代人には殆どわからないが、これを見たところある巫女は炊飯ジャーだけは幻想郷に持つて帰ると決心した。電気は後でどうにかする。

衣玖も氣にいつている。彼女は無洗米を昨日のうちに炊飯ジャーに入れていた。これで今炊飯ジャーを開ければホッカホカの御飯が現れるだろう。それこそ良い香りと共にだ。最近の炊飯器は過去の竈で炊いていた時とも遜色がない。

何と言つてもめんどうくさくない。衣玖は炊飯ジャーを開けて、これからこころ達が「ごはんー」と言つてくることを先に空気を読んで準備しておくことにした。

ぱかっとながが開いた。中には水に浸った無洗米がある。衣玖はそつと蓋を閉じた。

「さて、どうしましょうか」

うーんと衣玖は悩んだ。まさか時間をセットしておくのを忘れるとは思っていなかった。過去には風呂の栓を抜いたまま、お湯を張ろうとして「お湯を排水管に流す作

業」を一時間ばかりしたことがあるが、今回はまだ可愛いほうであろう。

そして台所に現れた影が三つ。真ん中に桃色髪のアナトリア。彼女を首にタオルをかけて、しっとりとした髪が眼にかかっている。表情は変わらないがどことなくさっぱりしている。ただ、髪が乾くまでは煩わしいことはある。

服装は緑のチェックシャツ。それに短めなスカート。胸元には大きなリボン。幻想郷の服装に似ているがどことなく違う。かぼちやスカートは穿いていない。あれを着ていると街中を歩くときに恥ずかしいのだ。

残りの二人はチルノとルーミアである。チルノは青いワンピースを着ている。シンブルなものだが、腰をくるつと巻いた大きなリボンが愛らしい。ルーミアは紺のワンピースであるが首元が白く、細いボウタイが巻かれている。よく見るとスカートの裾はレースで、少し動くとそれが揺れてお洒落である。自分で選んだのかもしれない。

余談ではあるが、どちらの服も古明地 さとりと同じ店で買っている。

「衣玖」

こころが口を開く。衣玖はすつと眼を閉じて、思案する。この場における最適解は何かを考えているのだ。それは数秒の内に答えを得る事が出来た。

「はん」

そのこころの声にくるつと振り向く衣玖。彼女の眼がキラんと光るが表情はこころ

の様に変わらない。傍から見れば冷静沈着な落ち着いた女性である。

彼女はこころが次に何かを言う前に言った。

「こころさん。今日はピザを取りましょう」

「えっ? ぴ……ぎゃ?」

「こころは一步下がった。それから言う。

「まじか」

呆然と言うこころ。まさかこんな朝早くから「ピザ」を食べられるとは夢にも思わなかった。今日は何か祝い事があつたかと思つても何もない。いつも通りの朝であるはずなのに、嬉しくてたまらない。こころは無表情でふふーと鼻を鳴らす。彼女はチルノ達を振り向いてガッツポーズをした。

「ピザだつ! 朝御飯にピザを食べられるつ!!」

「な、なんですつて! あ、あの丸いあれを? まじか!」

チルノはこころと同じように興奮して同じように反応する。ルーミアも「そ、そうなのかつ!」といつもとは違うニュアンスで言う。三人はそれぞれ眼をきらきらと輝かせた。チルノに至つては「全部食べていいの!」と凄まじい発言をする。

それもさうだろ現代のピザは高い。特に文化的にピザを食さない日本では値段が高騰している。だからポロアパートに住んでいるチルノとルーミアが「ピザ」を食べた

など、見ているだけで食欲が湧いてくる。

事実チルノのお腹が鳴っている。彼女は自分の取り分を頭で夢想しつつ、ルーミアの分をどうやって減らすかを考えている。「あつUFO」と言えばアホなルーミアは簡単に騙されるだろうと、巧妙な策を練る。

そんなことをチルノが考えているとルーミアが「シーフードがいいわっ!」と手をはーいと上げて主張したので、半分はそれになった。半分というのは一枚のピザをに上下半分ずつトッピングを変えることができるからだ。一枚で二種類の味が楽しめるという形もある種の企業努力かもしれない。

「シー、ふーど?」

チルノは顎に手を当てて言う。明らかに意味が分かっていない。ルーミはにこっと笑って説明してあげる。

「すごくおいしいやつよっ」

「お腹減った!」

おいしいという単語を聞いただけでチルノは堪らない。それこそさつきまで考えていたことは全て忘れた。上に何が載っていようがどうでもいい。究極的に言えばもつとも幸せな食癖であろう。

チルノの「お腹が減ったという」のは全くの本音である。そうやってチルノが涎を垂

らしながらおなかを押えていると、見えないところでルーミアがペロつと舌を出して、あっかんべーとチルノにする。大体チルノがどういう思考をするかわかっているらしい。

結果だけを見ればルーミアはチルノをどうでもいいことで煙に巻いて、自分の主張を無条件で通したと言える。後の半分はこころがスタンダードの物を選んだ。何故かというところが好きだからである。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

30分して届いたピザの箱はリビングのテーブルに置かれた。それを囲むようにこころとルーミア、それにチルノが座っている。少し離れて衣玖が見ていた。

箱は六角形。表面には店のロゴが書かれているが、蓋を閉めた状態でもどこことなく良い香りが漂ってくる。チルノが飛び出そうとして、こころが「どうどう」と言いながら抑え込む。ルーミアの眼は真剣そのものであるのだが、口元がにやけていて少女らしい。

とりあえずこころが蓋を持って開けると、一枚のピザが中に閉じ込められていて、暖かい空気と共に現れた。焦げ目のわずかについた生地に、半分はエビやカニがマヨネーズとともにトッピングされていて半分はとろけたチーズにサラミやピーマンきのこ何

かがトツピングされている。

「お、おとお」

チルノが何故かガッツポーズをして目をキラキラと輝かせる。いい匂いに小さな鼻がくんくんと動く。すつと出して手を誰も止めない。彼女はピザの一切れを掴んで持ち上げる。

チルノの腕が上がるままに、チーズが伸びていく。それを覗き込むころとルーミア。物珍しいと思うのは、普段は金銭的なことで食べられないからだ。

チルノぱくりと齧り付く。大口を開けて、ピザの一切れのほとんどを口に入れた。ピザは配達する間に食べられる程度には冷えている。それは「ちょうどいい」熱さであった。

口に広がるのはチーズの味。チルノのほっぺたが上下に動いて、はむはむと食べる。

どことなく満足げな顔をしているのは堪能しているのであろう。彼女は良く噛んでから、ごくりと食べて言う。

「ウメエー！」

何を食べても最終的にチルノはそういうが、その一言でこころとルーミアも生唾を飲んだ。あまりにチルノがおいしそうに食べるから、早く食べたくなくなってしまった。

ルーミアはペロツと唇を嘗めてから、自分で頼んだシーフードピザを手を取った。エ

ビが上から落ちないように両手で持って、ガブリと噛みつく。噛むとエビの歯ごたえ。じゅわと広がる赤身エビの味。

「……」

ほつぺたが落ちそうである。ルーミアは頬を紅くして、眼をとろんとさせる。普段見せないような顔である。もちろんさとりのご飯も美味しいのであるが、野菜中心の食生活はどうかと思う。カレーにも肉がないのは普通である。

こころは二刀流であった。片手、片手にスタンダードのピザとシーフードのピザを持っただのだ。

「おおたに」

何か言うこころ。チルノもルーミアも意味が分からないが、二切れ一気に取られたことに戦慄した。二人の少女の眼がぎよろつと動いてこころを見る。

「こころっ！ それはずるいわ」

チルノはがたつと立ち上がってこころを指さす。だが当のこころ「ふっふっふ」と無表情で不敵に笑い、かぶりかぶりと二切れそれぞれに噛みついた。それからリスの様に頬を動かして食べる。

にこりともせずに夢中でこころは咀嚼する。チルノとルーミアの唾然とする表情を勝者の余裕というべきか、全く動じずこころは見返す。ごくんと食べて言う。

「うまい」

短く感想を言いつつ、さらに二切れのピザを手取る。それにさあと青くなつたのは二人の少女である。彼女達も負けじと食べ始めた。

それを見ながら衣玖は思う。

「食べられそうにはありませんね」

別にいいのだ。彼女はピザを頼むついでにピザ屋のやつている「お好み焼き」を頼んでいる。それは隠しておいたので、後で食べればよい。だから彼女は同じく頼んでおいた缶のコケコーラを飲む。少し身を引いて胸を張って飲む。

お腹いっぱいになりそうだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ごめんください」

のんびりした声がりサイクルショップに響く。お客であろう、衣玖はここに接客を頼もうと思つたがピザを口に入れたまま、チルノにプロレスを挑まれている。今は無理だろう。だから衣玖はとりあえず立ち上がって店に向かった。

店の前にはよれよれのスーツを来た少女がいた。カッターシャツもよれている。た

だ、衣玖を見た瞬間に歯を見せて笑った表情は、その少女の魅力をそれだけで表している。

髪は白く長い、リボンは赤い。藤原 妹紅である。何でも屋みたいなことを地域限定で行っている彼女がなんの用で来たのか、衣玖には見当もつかない。ただ挨拶はする。何度か来ているので面識はある。いや幻想郷の少女のだいたいはいりサイクルシヨップに来たことがる。花の妖怪は除く。

「いらつしやいませ。もいおさん」

「妹紅よ」

くつくくと笑う妹紅。衣玖の言う名前のイントネーションが可笑しくてつい笑ってしまふ。それだけで笑顔になれる。彼女は店内を見回して、衣玖に近づいてくる。どことなく猫背である。

「今日はちよつとした物を買いに来たのよ」

「それはどうも、何をお探しなのですか？」

「バケツが幾つか欲しいわ」

妹紅は店内をてきとうに物色して、良さげなバケツをてきとうに手に取った。あまり品定めはしていない。衣玖は何に使うのかはめんどくさいので聞かなかった。だから妹紅が聞いた。

「おいくらかしら?」

「そうですね、それは……そんなに良い物でもなさそうなので差し上げます」

「えっ、そう? それでいいの?」

くすくす笑う妹紅。ただ「悪いからいい値でかうわ」と付け加えた。仕方ないので衣玖は。

「では、ひやくまん」

「高い。もう少し安く」

「あら。ではもう少しお安くして……じゅう……えん?」

「安い。もっと高く」

なかなか交渉がまとまらない。衣玖は商売など殆ど興味が無い。妹紅はタダでもらう気はない。だから話は平行線になってしまふ。面白いのは双方とも利益には全く頓着していないことであろう。

あーだこーだ言い合っているうちに。衣玖と妹紅は座って世間話をしながら、価格交渉を進めた。時に億単位の価格が提示される。株価が上がった下がったと世の中では大騒ぎするがこのリサイクルショップのバケツ相場はさらにめまぐるしい。

しかし、衣玖が「では」とこういう。

「八百円で如何でしょう」

ぱんと妹紅は膝を叩いた。

「買った！ なかなか妥当なお値段ね」

妹紅は価格に満足しつつ、財布から八百円ちょうど取り出す。何枚かの小銭を衣玖につかませた。衣玖はお礼をいしつつ、レシートを取り出す為にレジに向かった。その時、ちょうどチルノが店に顔を出してきた。手にはピザ屋の箱を持っている。

「あ！ カツパノテサキだ」

チルノは妹紅を指さす。妹紅は妹紅で苦笑しつつ。

「ああ、巫女のところの妖精じゃない。しかし、河童の手先とはひどいなあ」

と言いつつも全然ひどいと感じていないようだった。チルノも別に深く思つての言葉ではない。だから妹紅は話を変えた。

「朝ごはんにピザ？ 豪勢ね」

「ちがうわ！ あたい、なんか奥の方で好み焼きを発掘したのよ！」

「発掘？ それはそれは」

くすくす笑う妹紅は事情を知らない。レジを打ちながら衣玖の眼が見開かれて、チルノを見る。よくよく見ると「ピザ屋の箱」であるが、中身はピザではない。チルノの手にあるのは「お好み焼き」である。

チルノは手でお好み焼きを掬い取り口に運んでいる。青のりが顔に張り付いて、ソー

スが顔についている。衣玖はお腹を押しさえて、空腹を思い出したがどうしようもない。妹紅はチルノの喰いっぷりにさらに苦笑しつつ、あつと思ひ出したように言った。

「ごはんが終わったら、神社に遊びに来るといいわ。楽しいこともあるかもね」
言つて、立ち上がる。手にはバケツがある。

「それじゃ、私はそろそろ行くわ。バケツ、ありがとう」

「おう！」

何故か威張っているチルノに軽く頭を下げてから妹紅はお店から出ていく。衣玖はその後ろ姿をみつつ、どうしようかと考えていた。何故か耳元には蟬の声がとてもクリアに聞こえてくる。お腹が減っているからかもしれない。

16話B

夜明け前が一日の中でもっとも暗い。そのわずかな時間は、世界が変わっていくことを「見る」ことのできる稀有な時間でもあった。

水平線に少しずつ太陽が昇ってくる。夜の黒と、朝の白が混ざり合って空が蒼く透き通っていくように染まっていく。その間を太陽のオレンジ色の光が幾筋か伸びて、天空へかかる橋の様にまっすぐ伸びていく。

遠くに見える島は黒い影のようだった。地上で明るいのはただ。太陽のまわりだけ。それでも空は星も月も隠れることを惜しんでいるかのように、一日で最後の輝きを見せられる。それがきらきらと天空を彩っては、少しずつ朝焼けの光の中へ消えていく。

そんな中を霊夢は浜辺で歩いている。イカ釣り漁船から解放されて、へとへと状態で海の家には歩いているのである。彼女は髪をポニーテールにしているが、それはお洒落だからではない。機動性を重視してそうなったのだ。

よろよろと浜辺に足跡を残しながら霊夢は歩く。彼女の背中には青い髪の少女が背負われている。その背中にはさらに大きなバッグがあるからさらに重い。霊夢は今すぐにも投げ捨ててしまいたいくらいである。

靈夢の背中にとりが「うええ」と気持ち悪そうに唸る。彼女は自分が水生生物だからと言って船を甘く見た為、このような結果になった。最終的に靈夢しか仕事をしなかったので日当も減らされるところだった。その点で言えば巫女が頑張ってくれて、漁師達は快く払ってくれた。おおらかなのも海の男である。

「な、なんで、私が」

その巫女はぶつぶつ言いながら歩く。河童を投げ捨てないあたりは面倒見がよいのかもしれない。ただ、今はとても眠くて今すぐにも倒れて眼を閉じたい。体のいたるところが重いのも疲れている証拠だろう。

「こ、こんなのは、こ、工場に比べれば」

昔の暗い記憶を思い出しながら精神力にブーストを掛ける巫女。彼女の過去には「単純労働」という、人間の限界を極め続けた記憶が満載されている。考えてみれば八時間の間、パンをねじり続けるなど正気の沙汰ではない。

「れ、れいむさん」

「にとり。あんた起きたの？　じゃあ、自分で歩きなさいよ」

「は、吐きそう」

「……」

波の音が靈夢には良く聞こえる。背筋がすうつと寒くなる。にとりはとても青ざめ

た顔をしているが、背中のことなので霊夢には見えない。そもそも少しでも刺激を与えれば、背中が大参事になることは間違いない。だから振り向くことができないのだ。

「や、やめなさい」

切実な思いを短い言葉で伝える霊夢。にとりも流石に恩人の背中に仇を返せないとかくりと頷く。ただ、小声で「お、降ろして」と言った。だから霊夢も砂浜に河童を降ろす。それこそゆつくりとである。

ごろんと転がるように浜辺でにとりは大の字になる。顔は死にかけた魚の様であり、息はヒューヒューとか細くしている。船に酔ったまま数時間の航海は本当の地獄だった。何度海に飛び込んでしまおうかと考えたかわからない。ただ、今の自分では夜の海で泳げるかもわからない。

それでこそ船をおちたら落ちたで「救出」という名目で漁師たちに船に引き上げられることも間違いない。それが本当ににとりを助けることになるかは、それもわからない。

「ふー。横になつたら落ち着いたよ……」

力なく言うにとり。その横に霊夢もごろんと寝転がる。二人の目の前に広がるのは夜明け前の星空。都会から離れているここでは、いくつもの星々が散りばめられて輝いている。それは夜空ではない。夜と朝の狭間の空を、なんといえぱいいのだろう。

そんな空のもとで、二人は浜辺の砂をベッドに寝転んでいる。

「つかれたわー。あんなにきつい仕事をしたからにはもう借金はチャラでいいわね。にとり」

「そうは……いかないよ霊夢さん。さつきもらった分だけでは半分程度だよ……」

「がめついわね。あんだけ頑張つて……いや、あんた何の役にも立たなかつたんだけど」
「本来であれば霊夢さん。私は働く必要はないんだよ……人材の派遣を指示するだけでいいんだけど。人手が多いほうが日当がよくしてくれるから、参加しただけさ」

霊夢ははあとため息をつく。それ以上はこの金銭的なことにきっちりした河童に文句を言う気はない。ある意味では戦友と言えないこともないのである。彼女は星空を眺めながら、だんだん明るくなっていく空を見つめている。

「海の空つてこんなにきれいなね。幻想郷じゃ絶対に見れないのよ、ね」

「まあ、海自体がないからね。霊夢さん。どうせなら帰ったら河童印のプラネタリウムをまた見せてあげるよつ。もちろん有料だけどね」

「帰つたらね」

霊夢は言う。ことも何気に河童は「帰る」と言うが、その目途など少しも付いていない。ただにとりはあまり気にしていないらしく、ころんと横を向く。目の前には小さな、小さな白い砂。彼女はそれを指でつまんでぱらぱらと落としてみる。川の砂とは似

ているが違う。たまに白い貝殻が混じっている。

「霊夢さん」

「なによ」

横を向いたから河童は霊夢に背中を向けている。それでも聞く。

「幻想郷の外に来て、よかったと思う？」

「……難しいことを聞くわね」

にとりは表情を見せない。霊夢にとっては何気ない質問であろうが、にとりにとっては少し違う。曲がりなりにもこの「異変」の参加した彼女は、昔からそれを気にしている。河城商会という物を立ち上げたのも、それが原因でもある。

ただ、霊夢は知らない。だから彼女は両手を頭の後ろにやってから思う。枕替わりであつた。そうして眼を閉じると潮風が心地よい。

キツイ仕事。毎日お金を考える生活。ぎゅうぎゅう詰めバス。思い出すだけで辟易することはたんまりとある。ただ、いつものアパートのドアを開けると、いつものメンバーがいることは、幻想郷にはない。神社では殆ど一人で夜を過ごす。

霊夢は一人でいることが苦痛なわけではない。今まではずっとそうしていたのだから。

それでも家に帰るたびにチルノとおかずの取り合いをして、たまにルーミアも参加し

てきたり。慧音が仲裁して、さとりが困ったように笑っている。なんとなくいつかのアートを思い浮かべる。霊夢はそこまで思い出して、にとりに背中を向ける。

「……案外、悪くはないかもね。もちろん帰らないといけないけど」

「そっか」

霊夢が何を想像して答えを出したのかは知らないが、にとりはそれだけ言つて黙つた。彼女自身の聞きたいことは聞けたような気もする。だから次は霊夢の質問の番だった。霊夢は眠いはずだったのに、潮風が少しだけ冷たいせいか話をした気もする。

「そういえば、あんたよく河城商会つて意味の分かんないことを言っているけど、あれなに？」

「い、意味わからないつて。霊夢さん。法人企業だよ。株式会社さ」

「ほーじん？ 何をいつてるのよ、会社つてアレじゃない。お金がないと作れるわけないじゃない」

「……甘いねれーむさん」

にとりは体を起こして、霊夢を見る。ただ、見えるのはその背中である。だからにやにやと笑う河童の顔を巫女は見なくて済んだのだ。

「今の時代は一円あれば株式会社を立てることができんだよー！」

「流石に、騙されないわよ……そんなの」

「えっ?! いや、ほんとだよ」

「はい、はい」

欠伸をしながら霊夢は河童の戯言を聞き流す。実際には登記などの手数料を取られるということがあるので「一元」では会社は立てることができない。それに施設費用もなければならぬ。

それでもとりは「本当だけどなあ」とボヤキながらまた、ころんと寝転がる。だんだんと眠たくなっていくが、僅かな理性が「今から熱くなるから、浜辺で寝るのは死活問題」だどどまらせた。だからもう一度にとりはのっそりと起き上がる。

「とりあえず海の家に帰ろうか、霊夢さん。ん？ れいむさん」

みるとすうすうと可愛らしい寝息を出しながらいつものまにやら霊夢は寝ている。にとりのははつとして。霊夢を揺さぶり、それから深刻な表情を作った。

「し、死んでる」

と河童は冗談を吐いておいた。

すでに太陽が顔を半分出して、暖かい日の光がにとりと霊夢を包み込んでいく。にとりはゆっくりと首を回して、眼を細める。潮風に青い髪がゆれて、ずり落ちそうな緑の帽子を整える。

「もう、私も眠いけど……今日も一日頑張つて儲けるか！」

ぱんぱんと頬を叩く。ちなみに頑張るといふのは他人をできる限り効率よくこきつかうことを言うのだ。

◇◇◇

河城にとりは激怒した。

海の家に戻ると誰もいないのである。代わりに文鎮代わりに小銭を上にした「領収書」が置かれてあつた。どうにも旅館の宿泊費用らしい。しかもその人数が尋常ではない。二桁に上る数の宿泊人数。もちろん料金もそれなりである。

海の家には人影ならぬ、河童影はない。どこに行ったのかはわからないが旅館で領収書を切つてからここに置いて、眠りに戻つていったのかもしれない。にとりは領収書を破り捨てたくなる衝動を押しえつけ、とりあえず奥の座敷に霊夢を寝かせた。体にはタオルケットを一枚かけておいた。

にとりには労働基準法がわからない。にとりは河童であるから仕方がないであろう。だが、経費については人一倍ならぬ河童一倍敏感であつた。それでもにとり自身が河童の労組の強さを知っている。それこそヘソを曲げたらテコでも動かなくなる。

なんととっても河童の労組は神への反逆を行ったことがあるのだ。自分にその牙を

向けたらどうなるのかわからない。

「……絶対回収してやる……」

領収書を握りしめて、机に突っ伏すにとりだったが、その心の底ではメラメラと情熱が滾っている。投資した分は取り返すのが商売である。もちろん経費を使ったからには利益が必要なのだ。だからこそ、今日に「ビーチバレー」を企画したのだ。

実は種目などどうでもよかった。だから内容を決めたのは昨日である。そもそも計画の骨子はそこにはない。

にとりは背中のカバンを下ろして、中からノートパソコンを取り出す。防水のためだろうか、ビニール袋にまかれている。出すとメタリックのボディ、ロゴは「松下電工」である。商品名は「レッツ&ノート」である。

にとりはパソコンを立ちあげて。カタカタと打ち込み始める。エクセルを起動させて、何やら数字が大量に打ち込まれたタブが表示される。にとりはそれを見ながら「仕入れ……粗利……」と謎の呪文のような言葉をつぶやく。

かたかたと打ち込んでターンとエンターキーをにとりは押す。それから彼女はぱつと立ち上がり、ぐつとガッツポーズをする。

「今日一日で全て回収してやるぞっ！ あの尼とかを使って大儲けだ！」

「うんやいー」

「あぶなっ!？」

にとりに向かつて水鉄砲が銃弾のように飛んできた。にとりは慌ててしやがみこんで避ける。もちろんそれを投げたのは霊夢であった。せつかく気持ちよく寝ていたのに起こされてしまったらしい。

霊夢は海の家の柱に寄りかかって、眠たげにしながらもとりを睨んでいる。充血した両目が普通に怖い。しかも強いのはイカ釣り漁船で同乗したにとりがもつともよく知っている。

「れ、れいむさん。あ、あぶないなあ」

「何をぎやあぎやあ言っているのよ。この朝っぱらから昨日から働きづめなんだから静かにしなさいよ!」

「は、はい」

にとりはなんとなく答えてしまう。霊夢は額に青筋を立てているから、本気で怒っているらしい。社会人の休日を邪魔するものは万死に値する。しかし、霊夢は呆れたようにため息をついた。それから座敷に引つ込んでいった。

にとりは真顔で突っ立っている。うるさくしてはいけないのだが、一人なのでやるこ
とがない。だからぼつねんと突っ立っているのだ。

「しかたない、仮眠をとろう」

にとりはやっと動き出して座敷に向かう。座敷と言っても大した広さではない上に、吹き抜けである。とりあえず先に寝ている霊夢の邪魔にならないようにのそのそと上がり込んでにとりは横になった。そして眠りに入った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

にとりが眠っていると、ゆさゆさと揺り動かす影がある。それは赤い髪をしていて、お下げの可愛らしい少女であった。口元には笑みを浮かべている。どこことなく猫の様だった。

その少女は白いレースのキャミソールに紺のスカート。ただ赤い髪に大きなサンングラスを載せているのはミスマッチだった。それをつけると雰囲気が変わる。それもそうだろうまるで昭和の刑事ドラマで出てきそうな黒サンングラスであった。

彼女はお燐である。本名は火焰猫燐と言うが、この小難しい名前を本人が好いておらず、親しい相手には「お燐」と呼ばせている。彼女はこの早朝に海の家にやってきていた。旅館から抜け出すことはそんなに難しいことはなかった。

「オヤブン、オヤブン。起きてください」

「ん？ あれ、もう朝……？」

にとりはゆつくりと体を起こして壁にかかっている時計を見る。さつき眠りに入ってから十分程度しかたっていない。本当に仮眠程度の休憩であった。にとりは少し恨

みがましげにお燐を見る。

「オヤブン」

お燐は冗談めかして言う。どことなく親しみを込めているが、その表情には「いたずら心」の加わっているように見えた。事実、半分はふざけているのであろう。しかし彼女が「準備ができた」と言ったことは本当である。

「昨日のうちに近所の印刷会社に頼んでおいた件、さつきあたいがもらつて来ましたよっ」

「お」

よく見るとお燐は手にポスターのような物を持っている。にとりはそれを受け取つて広げた。ポスターとは言うが上質紙で作られたもので経費は抑えている。ただポスターとしての「光沢」はない。

ただし、そのポスターは人をひきつける力があつた。

——ビーチバレー大会やりませう

という文言がでかかどと書かれたポスターに青い髪の少女がアップで載っている。

その少女は少しウェーブのかかった髪をしていて、笑顔の可愛い少女である。ただ、紫のビキニタイプ水着を着ていて、白い肌とふくよかな「女性らしさ」がある。まさに美少女と言つていいだろう。

要するに雲居 一輪の盗撮ポスターである。昨日のうちに河童か猫がデジタルカメラで撮影しておいたものを近くの印刷所に入稿、出来栄えが多少荒くなってもよいと急ピッチで作ってもらったのだ。ある意味では地方の印刷所には仕事が少ないので「win-win」と言えないこともない。残業は発生しただろう。

不思議かもしれないがこのような早い印刷方法が安くつくこともある。

にとりはまじまじとポスターという「撒き餌」を見てから笑う。これを見た人間はぞろぞろと海の家に釣り込まれてくるだろう。それこそ大会が盛り上がれば盛り上がるほどにとりは甘い蜜を吸うことができる。

「けけ」

邪悪な笑い声を出す河童。その横で猫が、

「にやり」

とわざわざ口に出して笑う。いたずらと言えばそれに近い。しかし、彼女は自分の主人を宣伝することも忘れてはいなかった。ポスターの下の方には海の家場所などが書かれているが小さく「さとり様もでるよ!」とデフォルメされたさとりのイラストとともに描かれている。もちろんそのイラストは昨日から海に張り出されていた絵である。

実際「さとり様も」と言われても「さとり」が誰なのか殆どの者が知らないはずであ

る。それでもお燐は主人の為、無理を言つて入れてもらったのだ。見事な忠誠心である。

「それで、これは何枚できたのかな」

にとりが聞くときささず猫が応える。

「五十枚！ この朝のうちに全部張つてくるよ」

「完璧だね。これで宣伝して寄つてきた連中に私たちはあれを大量に売るんだ、人間達には堪らない一品さ」

と言つたところで河童ははつと気が付く。彼女は指をたてて、口元にあてる。しーと猫に合図するのだ。なぜなら横で霊夢が寝ているから、これ以上騒げば顔にビール瓶が突き刺さつても不思議ではない。

幸い霊夢は幸せそうに眠っている。にとりはほつと胸をなでおろしつつ、にやりと笑う。それから「ひひ」と笑い声をかみ殺し、それを受けてお燐も「にやふふ」とわざとらしい猫笑いをする。どちらも小声である。

17話A

リサイクルショップを出てからの藤原 妹紅はのんびりと歩いてきた。両手には重ねたバケツを持つているが、これは夜まで使うことはない。今はただ荷物になるので、神社においていくつもりだった。

住宅街の真ん中、アスファルトの地面を歩く妹紅。とても暑い。空を見上げると、遠くに背の高い入道雲が見える。彼女はシャツの首元をはだけさせて、手を「扇」にして扇ごうと思った。直ぐに両手がふさがっていることに気が付いたから、できはしなかった。

妹紅の髪が光る。額から汗が流れていく。仕方ないので彼女は一旦バケツを下ろして、上着を脱いだ。黒のスーツを折りたたんで小脇に抱えと。その下に来たカッターシャツが汗で体に張り付いている。

「あ、うーん」

それで考え込んでしまう。汗がべとついて気持ちが悪くなる。神社に向かうのは別に急いでいないのだ。一つ風呂にでもと思ってもこの時間帯に銭湯が開いているわけではない。まだ太陽は昇りきつてもいないからだ。

それにお腹も減った。妹紅はすきつ腹を手で押さえてそう思う。流石にリサイクルショップに食べられるものは売ってはいなかった。それはそれで竜宮の使いが困っているはずであるが、妹紅は知らない。

とにかく妹紅はのんびり考えようと歩き出した。バケツは両手、スーツは小脇。なかなかの大荷物である。スーツを脱いで暑いことは多少軽減されたが、根本的には解決されてない。

白い髪が風に揺れる。ただ本人は多少煩わしいらしく、首を振って払った。

かつかつ靴音を鳴らしながら、のんびりと不死の少女は歩いてく。彼女の人生で急ぐべきことなどあんまりない。昔は何もなくとも急いでいたが、今では多少のことならば道草を食っていく。妹紅はみんなうるさい蝉の声を楽しみながら行く。

住宅地にある小さな公園の横を通っていく。いつかの日に吸血鬼と鴉天狗達が「鬼ごっこ」をした場所だった。妹紅が見ると、数人の子供達が遊んでいた。彼女はくすりとして微笑まじげに見る。ただ、一人だけ青髪の少女がいてヘンテコな紫の傘を持っていたのには妹紅も首を傾げた。

しばらくすると妹紅は商店街に出る。そのアーケードを通ると、日光が遮られて涼しい気がする。妹紅は並んでいる商店を横目で見ながらすきつ腹を撫でた。ただ、空腹は

慣れっことである。どうせ死なないのだから、あまり頓着はしない。これが地霊殿の主人なら買い物でもして帰るだろう。

そんなこんなで散歩しながら妹紅は行く。しかし、不老不死の彼女も滴る汗には辟易し始めた。手で拭ってもすぐに汗が噴き出てくる。シャツはびっしりよりで気持ちが悪い。妹紅は不死のみであり、怪我や病気はすぐに治るが「服がすぐに乾燥する程度の能力」はない。

「昔だったら、水浴びでもするんだらうなあ」

妹紅は思う。どこでもとは言わないが、彼女の言う「昔」には川や湖などで水浴びでもするかもしれない。ただ、現代でそれをやると逮捕される。一時期ではあるが幻想郷の少女達の中で「ケーサツ」は恐れられたのだ。

妹紅はそんなことを思っていると、とある時のことを思い出した。

あれは数百年昔のことである。こんな暑い日のことであつた。別に大した話ではない。

☆☆☆

森の中を少女が歩いていく。長い白髪をぞんざいに束ねている。そこには着飾ろうという気持ちは微塵もない。腰にはボロ刀を佩いている。それに紫の指貫袴に袖の長

い紺の水干。裾は破れ、とどころほつれている。

草履を履いているが、それもボロボロではだして歩いているのと大差はない。みすばらしいと言つてしまえばその通りであろう。ただ、その少女はそんな貧相な姿とは裏腹に美しかった。

白い肌。切れ長の目。鈍く光る紅い眼光。彼女を見た者がいれば、数人に一人は振り返るだろう。残念なことにここは山の中であるから、それも望むこともできない。それに彼女は人里に行くことができない理由がある。

全てが億劫なのだ。人と関わることも、ましてや妖怪と関わることも。何もしたくない。だが、それでも生き続けなければならぬ。何故ならば彼女は不死なのである。千年程度の昔に不老不死の薬を飲んでから死にたくても死ぬことができなくなった。

すでに半端な妖怪よりも生きた身である。全てを識っているわけではないが、心が動くことが殆どなくなっていた。少なくとも不老不死になってからの数百年はまだ人間らしかったのである。

それに今は人が人を殺して歩く時代である。土地と利権と誇りを賭けた戦争を日常的にやっている。なおさら人里にかかわる気は少女にはない。だからこうして人気のない森の中を進んでいるのである。すでに十日以上は何も食べてはいないが、死ぬはし

ない。

それでも行く当てはない。少女は太い幹をした木を見つけて、寄りかかった。疲れてはいる。空腹感ある。だが表情は変わらない。何か感情を表すのも面倒くさい。だから座り込んでから虚空を睨んでいる。理由などない。

——ダンッ！

突然の轟音。ざわつと空気が振動して、木々を揺らす。

少女は眼を見開いた。なんだとあたりを見回す。今まで聞いたとすらもない音。この時代「爆発音」などとはまだ誰も言わない。彼女は慌てるでもなく、駆けだす。何が何だかわからないが危険な気がする。

少女は森を駆け抜ける。逃げているのではない。音の方向に向かって掛けている。草をかき分け。枝を掃う。顔に傷がつき、足から血が出ても。数秒で治ってしまう。それはまるで「呪い」のようである。

湖畔に出た。森を抜けてみた湖は澄明な水を湛えている。少女は息を整えて、音の正体を見た。そこには対岸に若い総髪の方が立っている。上半身には何もつけてはいない。ただ鍛え上げた身体は赤銅色でいかにも——

「ブシね」

少女は言う。あまり好意的な口調ではない。元来が貴族である彼女の生まれからも、

また彼女の性格からも「ブシ」は相いれない存在なのかもしれない。しかし、男の持っている物は刀とは違っていた。

長い鉄棒のようなものである。その先端が煙を吹いている。音の正体はアレであろう。少女はそう思った。よくよく見るとその男は少女に気が付いているようであるが、「棒」を肩に担ぐ。赤い袴をつけた派手な男だった。

棒は後年『火縄銃』と言われるようになる。すくなくとも少女には全く知識がない。轟音を日本中に響かせる兵器だとは分からなかつただろう。

「おみやあは、誰だ！」

妙に甲高い声が響く。少女はじろりと男を睨んで言う。

「それ、何？」

「タネガシマである」

「……？」

さらに訳が分からない。だれも「島」のことなど聞いていない。しかし、男はまた聞いてきた。

「人であるか？ それとも天狗か？ その白い髪は」

「天狗？」

少女ははつと鼻で笑う。あんなものと一緒にされては困る。昔、京にいたころになん

どか退治してやったこともある。一人では辛かったが彼女を理解してくれた稀有な相手である「ハルアキラ」がいたから、簡単であった。退治自体は鞍馬寺に逃げ込んだとか聞いたが面倒になってやめた。数百年後に天狗の刀術そっくりの刀を操る「ブシ」と会ったが、子供のような男だった。名はクロウと言っていた。

ただ、それから天狗を見ることはまれになった。いったい「どこ」に行ったのだろうか。と少女は思ったが、直ぐに思考を打ち切った。やはりどうでもいいことである。

「あんなのと一緒にされたらこまるわ。一応私は人よ」
「で、あるか」

男は甲高い声で返す。妙に偉そうである。男は怒っているわけでもないだろうに眼が爛々と光、じろつと少女を見ている。その眼光は強い。まさに生きていと言っているだろう。少女はどきりとする。何故かはわからない。

「とりあえず。うるさいからやめてほしいのだけど」
「で、あるか」

馬鹿にしているのか。少女はむっとした。そしてはつとする。やはり何故かわからないがこの「男」を見ているとよくわからないが、腹が立つ。それは男が何も悪びれることもなく、傲岸不遜であるからだろうか。

「とにかく」

すらりと少女は刀を抜く。錆びた刀。だが、数枚のお札が刀身に貼つてある。ぼうと火の玉が少女を取り巻く。虚空に浮かぶ炎が湖に映り、あたりを照らす。それも彼女は永い時の中で会得した呪術なのである。

「さつさとどこかに行け」

ギリリと光る眼光で、にらみつける少女。彼女は自分からどこかに行くよりは、この不快な男をどうにかしてやろうと思つたのである。やはり、調子が悪い。

そうやって恰好つけている少女の前で男は袴を脱いだ。じゃぶじゃぶと湖に入っていく。火縄銃に火薬をつめながらである。

「なっ!?!」

びくつと震える少女。顔が赤くなる。完全に思考の死角であつた。どう考えてもおかしい。彼女は刀を男を指して叫ぶ。

「な、にをやっているのよ」

「俺がここに来たのは水練である。それにキサマ」

男は言う。余談であるが彼は後に誰に対しても「キサマ」と言うようになる。ただ、現代的な用語とは少々違う。可笑しな話であるが「貴様」とは「あなた様」という意味である。この男が言うとぞんざいなのか、敬つているのかわからない。

「火には水。道理であろう」

「は？」

半身を水につけて、男は火縄を担ぐ。つまりは少女の周りの「炎」に対してまるでひるんでいない。普通ならば「炎」を出す彼女に恐れを抱いて逃げ出すだろう、だが男は逃げない。それどころかニヤリと笑って、少女を見返してくる。

妙に合理的なことを言うが少女には何を言われているのかわからない。話しているとどンドン男の言葉につられてしまう。いや、それよりも自分を見る彼の眼が好奇心で溢れている。今まで感じた事のないそれに少女は困惑した。

男は叫ぶ。

「タケチヨォー！」

びくと少女は下がる。恐れたのではない、今度は何だと身構えたのだ。ただ何のことはない。草むらから小さな男の子が一人ひよっこり現れた。まだ髪は長い。「タケチヨ」とは彼の名前であろう。男の伴に付いていたのだろう。火縄の音に逃げたのかもしれない。

彼はあわてて湖畔に飛び出して言う。

「は、はい！」

「火を吹く天狗である。見物せぬと損である」

「は、はい」

タケチヨの声を受けて男は火縄を少女に向ける。タケチヨもブシであろう、ただ優しい顔に小さな体をしている。少女は彼を大したブシにはならないと思つたが、それよりも重要なことがあつた。男はまた「天狗」などと言つてゐる。少女はむきになつた。

「違う！ 私は」

「で、あるか！ では誰ぞ?!? どここの誰ぞ?!?」

楽しそうに男は言う。からわかれてゐるようすらも少女には感じる。しかし、男は知りたいのである少女の名前を、素性を。何故そんなことができるのか知りたくて知りたくてたまらない。世にも面妖な「火を操る少女」に彼は興味が湧いて仕方がない。

「わ、私は」

名前を名乗るのはいつぶりであろうか、少女はごくりと唾をのんだ。この変な男の言葉に感情が外にでてくる。彼女は不老不死になつて最初の三百年は人から逃げていた。次の三百年は無差別に妖怪を殺して回つた。今では何をするにも億劫だつた。今日、怒るまでは。

「わた、し」

目の前の男など嫌いである。一目見てから嫌いだ。久々に「嫌い」だつた。まるでさっきの「タネガシマ」に目が覚まされたように、男の自分を知りたいという声に魅かれるように少女は言う、前に男がしびれを切らした。

「はよう答えよ！」

「藤原 妹紅だっ！ いちいちうるさいなっ!!」

男はそれを聞いて満足げに言う。

「で、あるか！」

「……燃えろお！」

☆☆☆

この日から、妹紅の次の三百年が始まった。散々暴れまわった彼女はすつきりした表情で人里に下りて行ったことを覚えている。

男とも「タケチヨ」とも二度と会うことはなかったが、妙な魅力を持った男のことはずっと覚えている。死んではないはずであることは確かである。すったかたと森を高笑いしながら逃げ出していく後ろ姿を今思い出しても腹が立つ。そこは逃げていたのでまあよしと彼女は納得も無理やりした。

妹紅の歩いている歩道の横をダンプカーが通り過ぎていく。ぶおおと轟音を残して、風が妹紅の髪をさらさらとなびかせる。

「変わったなあ」

妹紅はしみじみと言う。少なくとも自分がいた時代には最速の乗り物は「馬」であった。今ではそれよりも早い車とか電車などが無数にある。

「マイカーと言えば、牛車だったんだけど」

くつくくと妹紅は道を歩きながら笑う。昔はえらくのんびりしていたことである。ただ、現代はどこに行っても何をしても妙な発見があつて楽しい。例えば――
「お、まんほーる」

妹紅は立ち止まる。下を見ると「下水の蓋」ことマンホールがある。その程度のことだが、そこには着物を着た女性と竹林の絵が描かれている。妹紅はふふと口元をほころばせる。彼女の時代には絵などはそれなりに特殊技能だったのだが、今ではありふれていて多用である。

しかし、この絵はいけない。明らかにモチーフが「かぐや姫」なのだ。妹紅はとりあえず女性の顔を踏みしめてから歩き始める。ほとんど自然な動きである。犬猿の仲の女性が描かれているマンホールなど愉快でありつつ、不愉快である。

過去から今まで彼女は人間のあらゆる面を見てきた。いろんな場所に生き、そこで生活をしている人間をその眼で見てきた。どこにいても、誰でも懸命に生きていたことをいくらかでも思い出すことができる。妖怪にはできないだろう。

「そう言えば、猿みたいな顔の針売りに押し売りされそうになつたなあ」

昔のことである。思い出しても笑えるのであるが、あの商人はどうしたのであろうか。えらく貧相な体をしていたから、病死したのかもしれない。昔はあまり医術も発達

していなかったのだ。

そんなことを思いながら妹紅はドラッグストア「マツモトキヨハル」の横を通り過ぎる。そこには医療品など掃いて捨てるほどにある。ここでの薬が効かなければ街に診療所はコンビニの数くらいある。

妹紅はそんな変わった世界で振り向く。彼女のいた時代からこの「外」は随分と変わっている。ただ、彼女はその街を見つめている。千年以上を見た、その瞳は澄んできらきらと光っている。しかし、本人はいつも眠たげな表情をしているのがたまに傷だらう。

「……………さて。今日は何があるかな……………」

そうして、けだるげな足取りで妹紅は行く。足取りは遅いが止まることはない。

☆☆☆

一方そのころ、秦　　こころはわなわなと無表情で怒っていた。彼女はリサイクルショップのカウンターに座って、手に持った紙を読んでいる。そこには竜宮の使いの書いた伝言が残っていた。

——探さないでください

「逃げやがった……………」

無表情で言い捨てるこころ。彼女は幻想郷の少女達の中でもかなり口が悪い。性格が悪いのではなく、正直なのであろう。しかし、これでリサイクルショップの店番は彼女がせざるを得なくなつたのだ。ろくろ首に押し付けようにもまだ来ない。

後ろではドタンバタンとお好み焼きを巡つて、二人の少女が争っている。こころはそれをちらと見て、チルノがルーミアのほつぺたを抓りながら、抓り返されていることだけ見た。

こころはそれで二人の少女に手伝つてもらふことは諦めた。仕方ないと思う。いつ帰つて来るかわからないが竜宮の使いは「ごはん」を食べに行つたのだろう。万が一程度の確率であるが、満腹になったら帰つて来るかもしれない。

17話B

旅館の一室で村紗　水蜜は目を覚ました。ぼけた視界がだんだんと光を帯びていく。彼女は布団の中でもそもそと動き、身を起こした。少し緩んだ浴衣から肩が見える。自然なしぐさで水蜜はそれを直す。

首をこきこき鳴らしながらあたりを見るとほとんど誰も起きていない。並んだ布団にはそれぞれ少女たちが寝息を立てている。水蜜の横にいるのは青い髪をした一輪だった。彼女は寝ているときもまじめな顔をしている。ほかにこの部屋にいるのは河童数人と毘沙門天、ねずみである。聖もいたが流石にもう起きているらしい。布団がきちんとたたまれている。

部屋の端つこにはねずみが転がっている。畳に顔からつつぶつして、お尻を突き出した奇妙な体勢をしていた。寝相が悪いなあと水蜜は思うのだが、まさか本当は寝相の悪いご主人に蹴り飛ばされたからこうなっているとは思わない。その寅丸は布団をかぶって寝ている。

「あつ早く起きすぎた」

そこで気がついた。水蜜が部屋の置時計を見るとまだ時間は5時をまわったばかり、

座敷の窓からは明るい光の入ってくる夏の朝。普段の水密ならばまだまだ起きていない。いつもならばお昼前までぎりぎりを攻めている。

一輪はたいてい朝早くに起きていたが今日はさすがに疲れたらしい。よく見るとうつすら笑っているから現実逃避に見えないこともない。たまに「んん」といいながら寝返りを打つ。水蜜はふうと息を吐いてころんと横になった。まだ誰も起きていないのであれば自分がおきる理由はない。聖はいないが同じ時間に起きる気はない。

ただしそう思うと眠れない。昨日は働き詰めだったことを考えれば体が休息を求めもおかしくはないはずであるが、肉体的には若いのであろう。体が妙に軽く、目が冴えている。水蜜はまた起きてから、少し考える。

少々汗で体がべとつく。時間でいえば数時間前に風呂に入ったばかりなのであるが、水蜜は気持ち悪さを感じた。そしてどうせ眠れそうにはない。だから彼女は四つんばいでのそのそと動き出して部屋の隅にあるビニール袋をあさった。そして手に取ったのは昨日着ていたスポーツタイプの水着である。

「どうせお風呂に入れば着ますしね……」

大きくあくびをしながら水蜜は独り言を言った。それに昨日の聖との会話から不穏なものを感じる。一輪のような水着を着せられてはたまらない。だから先に持っている物を着てしまおうという打算が彼女にはある。

水蜜は立ち上がって部屋を出て行く。がちやりとドアが閉められたと同時に、その瞬間に部屋に寝ていた河童たちの目がカツと開かれた。

☆☆☆☆

朝お大浴場にはだれもいなかった。水蜜は貸切のような気分で気分よさげに体を洗う。並んだ洗面台も一人しかない。彼女はバスチェアに腰掛けてごしごしと体をタオルでこする。ボディソープをたつぷりとつけているから泡がいっぱいである。

洗い終わると彼女はシャワーではなく、お湯をためておいた桶を頭の上でひっくり返した。それで体中を洗い流せるというのだ。これは好みであろう。シャワーの方が使い勝手は良いはずである。しかし、水蜜は満足げにぶるぶると頭を振って水滴を飛ばす。汗が流れて気持ちいいと感じていた。

体を洗ってからこれまた貸切の湯船に入る。水蜜はこのあと地獄が待っているとは知らずにご機嫌である。脱衣所にうごめく影に彼女は気が付けない。

「ああ」

朝風呂。それは夜の疲れたときの風呂と別の爽快感のあるものである。水蜜は一番乗りでそれを堪能することができた。そもそも昨日の彼女は日焼けが痛くてまともに湯船に入ることはできなかつたのだ。今日ももちろん痛い、慣れと一眠りで多少緩和

されている。

それでも体がびりびりする。

水蜜は大浴場の天井を見上げながら、一人でぼけえと口をあけてリラックスしている。黒髪に水が滴り、目を細く開けている。大浴場には外の露天とつながる入り口があるから電気がなくても明るい。

水蜜は肩まで湯にはいつて、お風呂の水面がきらきらと光るのを見ている。何か思案しているのではない。何も考えないでいいと楽なのだ。ただ、現在彼女はせまりきている危機には無頓着であった。

「今日の朝ごはんは何でしょう……」

誰に聞くでもなくいう。昨日のハンバーグはおいしかった。作ってくれたのが多少なりとも因縁のある旧地獄の管理者だったがおいしいものはおいしかった。親しく話したわけでもないがさとりとは少し打ち解けられたような気もする。

ハンバーグについては肉類ではなく「豆」で作られていたが、その点に水蜜はあまり関心はない。彼女は一応、仏門の一派であるが、別に宗教を信じているのではない。「聖白蓮」を信じているのだ。聖が信じているから信じているのであって、仏教を信じているから聖とも「ウマが合う」のではない。

それはそうと水蜜はぼわんと想像を膨らませていた。

「神戸牛っておいしいんでしょか？」

じゅるりと唾液の音を出して水蜜は夢想する。肉絶ちをしていなかったら彼女は居酒屋などに入り浸るかもしれない。ただ、仏門の正式な使いであるはずのナズーリンはねずみよろしく隠れて何でも食べている節がある。涼しい顔して実は食いしん坊なのだ。

水蜜はあわてて腕で口をぬぐった。流石に自分でも情けない顔をしていたと思ったのだろう。ただ、おいしい物を食べたいという欲求などは消えない。煩惱と言うべきであらう。

お風呂の中でおへそのあたりを水蜜は押さえる。なんだか空腹感が増してきた。仕方ないので部屋に備え付けられているお菓子でも食べてすごそうと湯船からあがった。そして昨日と同じようにタイルをぺたぺたと歩いて脱衣所に向かう。今度は迷い込まない。

そして脱衣所について水蜜はバスタオルで頭をごしごし拭いてから、念入りに体をぬぐう。水着に着替えた上で湿っていたら気持ちが悪いだらう、彼女はなにも知らずに鼻歌を歌いながら水着を取る。

淡いグリーンのトツプスを水蜜は手に取る。

「？」

間違えたかなと脱衣籠に戻す。見れば昨日着ていた水着がない、しかも浴衣すらも消えうせている。残っているのはさつき持ったグリーンのトツプスとこれまた淡いグリーンのリーンのボトム（パンツ）それに明るい緑の短いスカートが入っている。あとは腕につけるシユシユである。

「あ、ああ」

そこで水蜜は気がついた。明らかにすりかえられている。わずかに湯船にいた時間。その間に何者（河童）かによるすり替えが行われたのだ。おそらく昨日のうちに聖の話が「実行者」に行っていたに違いない。

「しまったあ……油断しました……」

水蜜は先手を取られる形になった。水着を着てしまえばこっちのものだと彼女は考えたが、着ることすらもできなかつたのである。それどころか着なければ全裸である。選択の余地すらもない。

かくんと肩を落としてしゅしゅ水蜜は水着を着始める。ただ、まだこの時点で彼女は重大なことには気が付いていない。だから何も考えずにボトムを太腿に通して穿く、そしてトツプスも来た。

上下とも淡いグリーンのビキニである。水蜜は少し顔を赤らめて、両肩を抱くように手で体を隠す。これで一日中浜辺を練り歩くと考えると、とても恥ずかしい。しかも妙

にボトムが小さい。ただこれには理由がある。

一輪とは違って明るい色のスカートが入っていた。水蜜は少しほつとしてそれも穿く。それでもわからない物が入っている。シユシユが二つ入っている。これは腕やまは髪留めとして使う装飾具なのだが水蜜にはわからない。

「これは……何ですかね？」

水蜜はうーんと見る。シユシユとはドーナツ状の飾りである。水蜜は伸ばしてみると、伸びるのでゴムだとは分かった。ただ使い方が分からない。

「髪?……」

とりあえず二つとも黒髪を左右で挟んでみる。二つ結びになった。使い方としては間違っていない。水蜜はそれでよしと思つて、脱衣所にある姿見の前に立つてみた。

黒髪の少女が可愛らしく二つ結びにして、グリーンの上からスカーツに明るい色のスカートを着ている。水蜜はそれをじつと見てから、スカートの裾をぎゅつと握つた。妙に着飾つた姿、昨日に比べて肌色の多い恰好。そもそもトップスからスカートまでは健康的な肌をそのまま見せている。おへそは小さい。

無意識に水蜜はお腹を隠す。両腕でお腹を隠すと、前屈みになる。そして無言である。

水蜜はすすつと鏡の前からどいて、髪をシユシユを取つた。そして右腕に両方付け

る。ダブルで右腕だけに付けたのはあまり気取っていないという精一杯の主張なのだろうか。

「な、なんで一輪は平気なんですか……」

言うが、一輪は平気なのではない。仏門のお経を無限に心に唱えることで耐え抜いているのだ。その点で言えば水蜜は修行が足りないのである。永い時間旧地獄に押し込められていて、外に出るなんて殆どなかった彼女だからこそ、この格好が恥ずかしい。

「と、とりあえず。部屋に。はっ!？」

そこでやっと気が付いた。浴衣がないのである。つまり上に着ていくものなど何もない。だから水蜜はがたがたと震えだした。浜辺を水着で泳ぐのではない。旅館のエントランスを水着で通り、階段を上がり部屋までいかなければならない。

水蜜の眼が泳ぐ。考えるだに恐ろしい。しかもおそらくであるが河……犯人たちはこの状況を考えて浴衣も回収したに決まっている。いたずらかそれとも他に何か目的があるかはわからない。

水蜜は脱衣所の出口にふらふらと歩いていく。水着着たまま地獄への門をくぐらなければならぬ。ある意味着ているからましともいえるし、逆にそれだからこそ恥ずかしいともいえる。

しばらく彼女は立っていた。顔は深刻である。青くすればいいのか赤くすればいい

のかわからない。この可愛い船幽霊はいつもぞんざいで、なんとなく気だるげな態度をしている。他人に対しては律儀で礼儀正しい一面もある。

ただ、それでも女の子であるらしい。

「よ、よし。行きますか」

恥ずかしげにしながら水蜜は脱衣所を出ていく。目指す部屋は二階。エントランスの階段を上がつてすぐの簡単な仕事である。

☆☆☆

体をひんやりした風が撫でていく。お風呂場から出ると風の冷たさが身に染みる。そもそもホカホカの体に水着を着ている時点でかなり変でもある。水蜜はそんなどうでもいいことを考えながら思考を紛らわしている。

廊下をびくびくと歩いていく。曲がり角からちよつと顔を出して、先を伺って進む。何をしているのだろうとこいしは思ったが、声をかけるのはやめた。

「よ、よし。だれもないようですね」

水蜜はおつかなびつくり進む。ぱたぱたとスリッパが歩くたびになる。左右の部屋の中には他の宿泊客がいるはずなので、いつ出てくるのかわからない。ちよつと物音がすると。

「ひっ」

びくつと身をちぢこませて水蜜はおびえる。それから誰もこないと分かるとふうと息を吐く。どきどきしているのが自分でもわかる。水蜜はとととと早足で廊下を過ぎていく。音を鳴らさないように廊下に行く。

幸いエントランスには問題なくついた。旅館のエントランスは小さなカウンターと待合室がある程度なのであるが、彼女は運が悪かった。ここのカウンター横の階段を上らないと上階へ行けないのだ。

「おまえらならべー」

ガタイの大きな野球のユニフォームを着た少年が言う。その周りには同じ姿の少女達がいた。

つまり少年野球団が陣取っていた。ただしエントランスの端に整列しているので邪魔にはならない様になっている。おそらく保護者兼引率者がしつかりと指導しているからであろう。しかしどんなに良い子達であろうと水蜜にはクライシスである。

少年野球団は二十人程度はいるだろう。要するにエントランスを水蜜が強行突破すればそれだけの少年たちに目撃されるのだ。まだ六時前であるから、他の宿泊客の姿はない。それだけは救いであろう。

廊下の角でへなへなと水蜜はへたり込む。このままでは恥ずかしすぎてもう一度くらい死ぬ。しかも多勢に無勢、多少の小細工ではどうあがいても強行突破は無理である

う。水蜜は泣きそうになってきた。

膝を抱え込むように座る水蜜。ぶつぶつと念仏を唱え始めている。精神的においやられていゝらしい。打開策がない時の仏頼みである。

「みなさん。それでは出発します」

その念仏が届いたわけでもないが仏は意外と近くにいた。正確に言えば違うが、少年たちの傍に閻魔王こと四季 映姫は近づいてきた。手には何かのバインダーを持って、少年たちのデータであろう。彼女はちらりと水蜜のいる角を見て言う。

「さて、みなさん。あまりここにいと他の宿泊客の方々に迷惑がかかります。外で整理して、グラウンドまでランニングです。よろしいですね」

「はいっ！」

「声は小さく。それではいきますよ」

映姫はいうがはやいか旅館から少年野球団を出発させる。自分は最後に行くつもりか入り口の前で最後の子供が出るまで見守っている。時折ちらりと廊下の角を見るが、何かを見ているのだろうか。

少年たちの後ろからこいしが混ざって出ていこうとするので映姫は首の後ろの襟を抑えて止める。ぶうぶういう彼女を軽く説教して部屋に返す。

「全員出ましたね。エントランスにはだれもいません」

映姫は最後に「確認するように」行って。自分も出ていく。まるで誰かに伝えているかのようにであった。

少年たちが出て行ってから水蜜はエントランスにおずおずと出てくる。なんだか配慮された気もしないではない。ただ、気が付かれていると思うと恥ずかしいので考えることをやめた。

「ふ、ふこれで帰れそうですね」

部屋の方向を見る。水蜜は希望に満ちた顔をしつつ、階段に向かって掛けた。もう一気に行ってしまいたい。カウンターには「呼び鈴」があるだけで今は誰もいない。細い手を振って走る。

「ふああ」

階段に差し掛かったところで一輪が降りてきた。水蜜は階段に上らず、ユーターンした。廊下の角に逆戻りしたのである。一輪はとととスリッパで階段を下りてくる。別にばれてもよさそうに見えるが、水蜜は昨日、一輪の姿をちやかしていたからそうもできない。どちらかというと同僚にばれる方が恥ずかしいこともある。

そんなことは知らない一輪は浴衣姿のままエントランスに来た。今日も一日が始まるんだなあと思っているのか、旅館の入り口から見える「外」をじっと見ている。彼女

は両手でぱちんとほつぺたを叩いて気合を入れる。

「よし、今日も頑張ろう!」

(いいから、そこをどいてください)

真面目に気合を入れる一輪に心からお願ひする水蜜。一輪は元気を出そうがどうでもいいので、とりあえずどいてもらいたい。しかし、水蜜は思った。確かに一輪に今の状況をばれたくはないが、それでもさつきと戻らないととんでもなく恥ずかしい目にかう気がする。

(ここは恥を忍んで……でも。行くべきなのですか、ね)

ちりーん。と音が出る。一輪がカウンターの呼び鈴を鳴らしたのだ。

(え? え)

水蜜はきよとんとした。一輪はカウンターにいつの間にかいる。店員を呼んだのだ。控室からよりによって男性店員がでてくる。柔和な顔をした彼に一輪は彼にこういった。

「部屋のお茶を替えたいのですが、どうすればいいですか?」

「ああ、それでしたら」

朝の何気ない会話を聞きながら水着姿の水蜜は廊下の角で膝を抱え込んだ。どうでもいいことで店員を召喚した一輪へぶつぶつと念仏を唱え始めた。しかし、彼女は一輪

を恨みに思っている暇はない。そもそも現在大きな目線で見ればピンチなのは一輪である。このピンチは後数時間で彼女のことを知ることになるのだから。

しかし水蜜には男性の笑い声が聞こえてくる。しかも背後からである。風呂場がある方向からと考えれば水蜜は挟み撃ちにされている。

「えっ？ ええ」

どうしよう、水蜜は狼狽した。

18話A 商店街の小さなお店の、小さいの

商店街に豪族が小料理屋のようなものを開いていることは、幻想郷の少女達の間では有名であつた。ともすれば食い逃げも可能とあれば、月末の厳しい時に計画的な食い逃げを行える場でもある。無論、ツケとして後々請求はされる。ただし、この話には少しだけ勘違いがある。

そのお店はそんなに広くはない。小さなキッチンに畳敷きの客席。テーブルは二つしかないが、真ん中に鉄板がありお好み焼きも食べることができる。それに加えて焼きそば、焼きおにぎりなどのお腹にたまるメニューもある。お品書きは手書きだった。

今日も今日とて豪族の少女は「新メニューの開発」を行つていた。銀髪のポニーテールを揺らしながら、「御飯櫃」を両手で抱え込んでいる。蓋が閉まつていて中は見えないが、少しよろけているところを見ると重そうである。

頭には烏帽子。何故かこれは幻想郷から変わらぬ身に着けている。黒のポロシャツに短パン。そして履いているのはクロックス。

「あんなーこといいいなー！ できてもいいな」

何かの歌を唄いながら、少女は座敷に上がる。テーブルの上に御飯櫃をドカンと置

く。彼女は物部 布都。最近では自分のことを料理人と勘違いし始めた豪族である。このお店の管理者とよく勘違いもされる。ちなみに彼女の唄っているのは「坂田」とかいう侍が唄っていたものである。

布都は小さな手でお櫃の蓋を開ける。もあつと広がる湯気。そこからかおるほのかな香り。彼女はちよつとだけ満足げに鼻をくんくんと動かす。出来栄は上々らしい。それは炊き込みごはん。ご飯の一粒、一粒が淡いページュ色に染められている。みじん切りにされた大根、ニンジン、タケノコ。それに舞茸などのきのこ類。色とりどりの具材がたっぷりと入った料理だ。

「なかなかよいではないか」

うんうんと頷く布都。烏帽子が落ちそうになったので、手で支える。これこそ彼女の「新メニュー」の素材である。つまりまだ完成はしていないのである。布都は手に団扇を持って、パタパタと炊き込みごはんを扇ぐ、水分を蒸発させなければならぬのである。実は彼女は一人ではない。座敷の隅でぱらぱらと雑誌を読んでいる少女が一人。癖のある金髪を肩まで伸ばした彼女は、ちらつと布都を見てから。親指を嘯む。何に嫉妬したのかは彼女しかわからないであろう。

恰好はあまり布都とあまり変わらない。お店で働くことにお洒落はそこまで必要はないのかもしれない。ただ、ポロシャツは同じでも下はロールアップされたデニムであ

る。服装に迷ったらとりあえずデニムというのは現代的ではある。旧地獄にいた彼女は、まるで民族衣装のようなものをよく着ていたが、それを着る勇氣はない。

手に持った雑誌はファッション雑誌。ただし膝で隠すように読んでいたので布都には見えない。たまに「ねたましいわ」とぼそぼそと言う。彼女の名前は水橋 パルスィである。客もまだいないのでそうやって座り込んでいる。

余談だが、その雑誌の表紙には銀髪の女の子が壁に寄りかかって、恰好を付けている。ハットを深くかぶって、片目を隠している。それにストライプワンピースにベージュの上着。何でか刀を持っている。

ちりんちりんと入り口の鐘が鳴る。「おっ？」と布都が振り向くと、そこには紫の髪をした女性が立っていた。白いシャツを着ている。永江 衣玖であった。リサイクルショップから逃亡を図り、ここに来たのだ。

「あら、まだやっていませんか？」

衣玖は奥でリラックスしているパルスィと何かをやっている布都を見て聞く。だが、布都とパルスィはそれぞれ挨拶する。

「よく来たな！」

「いらっしやい……」

☆☆☆

数か月前にやっとこさ仕事を見つけた水橋　パルスイはこのお店に就職した。その時に店をやっていたのは、年配の男性でアルバイトを探していたという。少なくとも生活には全く余裕のないパルスイに否応はなかった。

近くの小学校などから子供達が食事をしに来る程度の小さなお店である。商店街の住人も来てはくれるが儲かっているとは言えない。店の主人である男性はそれでもお店を閉めたくはなかった。子供の遊び場の一つであるから、笑い声は毎日聞ける。

男性は体調が思わしくはない。歳でもある。だからこそ、パルスイが雇われた理由はただ一つである。お店の切り盛りを誰かに任せたかったのだ。しかし、それはパルスイにとっては大変な毎日になった。

料理もする必要があるが子供達の相手もしなければならぬ。パルスイは人の子供の持つてくる「ぼけもん」や「かーど」の意味が分からないのである。スペルカードならわかるが、どうにもカードゲームをしているようだった。ランプならばわかる。

パルスイは毎日へとへとになって働いた。黙々と作業をしているのではなく、人と交わることがあまりにも新鮮であるし、だから過酷でもあった。肉体的な疲れはともかく、精神的な疲れはどうにもできない。そのうち土蜘蛛のように眼が死んでいくかもしれない。と思っていた

そしてある日のこと。

外はしのつく雨。扉をしめ切っているのに店の中にも「ぎあぎあ」と聞こえてくる、暗い日。パルスイはやることもなく、一人で新聞を読んでいた。それは市販の物ではなく、鴉天狗が発行しているゴシップ紙である。それによると巫女が転職したらしい。

「転職かあ。私も……ねたましわあ」

最終的に「妬ましい」に行きつく彼女が窓を見る。外はたたきつけるような雨で、室内は電気をつけても、どこことなく暗い。パルスイは元々人付き合いが苦手だからか、別に気にしてはいない。こんな日には誰も来ないだろうから、逆に楽なのだ。

ただ、今日という日は別だった。パルスイが何か洗い物でもしようと立ち上がった時である。

ドンツ！ と扉が開いた。雷が鳴り。ドーンという音が室内に響く。

「ふあつ?」

普段出さない可愛らしい悲鳴を上げて、パルスイはしりもちをついた。タイミングが悪すぎたのである。彼女が驚いて、入り口を見ると。そこにいたは一人の河童ならぬ、合羽姿の少女だった。

ぎんらり眼を光らせて、ふふと口角を吊り上げた彼女。背は低い。きゅぽきゅぽと間抜けな音を歩くたびに出すのは、足に履いた長靴のせいであろう。完全防備に見えるが、その軟かなそうなほっぺに水滴が付いている。

「たのもう！」

彼女こそが物部 布都であった。後々パルスイが聞くとアルバイトをさせてくれと頼みに来たらしい。それだけなのに騒がしい。よく言えばにぎやかである。

★★★

アルバイトが一人増えて、店はにぎやかになった。いきなり来た布都ではあつたが、パルスイは人事権など持っていないから、オーナーへ話をしてみると簡単に採用された。採用理由は「明るい」ということであつた。

パルスイはいきなり増えた同僚には、あまりかかわらずにいようと思つても店は狭い。自然と話をせざるを得なくなつた。ここではパルスイの方が先輩だからなおさらである。何故か数か月後には布都の方が主人と勘違いされるようになるが、それは別の話。

銀髪のポニーテールを揺らしながら、台を拭く少女が一人。厨房で沈んだ顔をしながら、いろいろな料理をする少女が一人。商店街の一つのお店には見せないほど、濃ゆい店員がいる店になつた。

料理はパルスイが行い、その他の雑務は布都がやるという役割分担がいつの間にかできていた。前には子供達もたまに遊びに来ていたが、布都がきてから何も食べる気がないのに来ることが多くなつた。

パルスィは嫌われているのではない。単にミステリアスな雰囲気の子供にはとつきにくいのであろう。反面、布都は子供が来れば「おお、来たか!」「ほれ、これを食べるのだ」などと気さくに話しかけているから、とつきやすい。そのせいか良くポニーテールを引つ張られる。

そんな布都もとある野望があつた。すでに外も暗くなつて、店にはお客はいない。パルスィは洗い物を乾燥機にかけて、脱いだエプロンをたたんでいる。すでに変える準備をしていたのだ。

そんな彼女に布都は話しかけた。

「今よいか、パルの字」

「????」

ぱるのじ、と言われてパルスィは困惑した。きよろきよろとあたりを見回してから、人差し指で自分を指す。布都が「うむ」と言つて、ようやく自分が呼ばれていると気が付いた。

「何? あとその妙な呼び方はやめて」

「すまぬ。水橋殿」

「……それも、いやね」

「むう」

むうと言って、両手を組んで布都は体を傾ける。「悩んでいる」と体で表しているであろう。それが分かってパルスイもため息まじりに言う。

「パルスイでいいわ」

それを聞いて、布都はぱつちり眼を開けて、ぱちぱちと瞬きをする。そしてニコツと歯を見せて笑う。花が咲いたよう、というよりはその笑顔で人の心を開かせるような愛嬌がある。パルスイは眼をそらして、爪を噛む。嫉妬している。

「そうか、それではそのようにしよう。パルシー」

嫉妬など頓着せず布都は言う。微妙に間違っているのにはパルスイは何も言わない。

布都が話しかけたのはとあるお願いがあったからである。布都はこのお店に来てから、ずっと気になっていることがあった。

「いつもおぬしに飯炊を任せてしまつては、悪いと思つてな。よかつたら、我と当番制にせぬか？」

「別に……悪いとかどうでもいいけど。あなた……できるの？」

「ふふっ、できぬ」

「そう、お疲れ様」

「まてまてまて」

帰ろうとするパルスイの前にはぎぎと立ちはだかる布都。焦っているのか、頬が赤

い。

「早まるでない。我もこちらに連れて来られるまでは幾度も料理自体はしたことはある。単に窯や、七輪などがなければな。それにやきそばやら、は作ったことがない」

「……それで」

「ふむ。教えを乞いたいのだ」

それから「頼む」といい、布都はぺこりを頭を下げた。歴史上の彼女が悪人であるとはだれも気が付かないだろう。パルスイはその素直な態度にねつとりとした嫉妬を思いつつ、自分の腰に手を当てる。

「まあ、いいけど」

嫉妬深い彼女も仕事の指導に関してはあまり頓着はしない。自分も楽になるからだ。

★★★

そんなこんなでパルスイと布都は仕事が終わってから、料理の勉強をすることになった。教師はパルスイで生徒は布都である。全般的なことではなく、このお店に出すものを練習するのだ。

ととんととパルスイはキャベツを千切りにする。「焼きそば」の具である。この麺類に入れるキャベツには大きく切って歯ごたえを残すやり方と、千切りにするやり方があるが、このお店は後者であるようだ。

その横で布都が先に墨の付いた筆と、ヨクコのミニノートを持ってみている。

パルスイは布都の鼻の頭に墨が付いているのに気が付いたが、何も言わずに手を動かす。言葉で説明するよりも、やって見せているのだろう。お昼時に大量に作っても、布都には子供の世話があるので見る事ができない。

「ふむふむ。良い手並みであるな。そんなに早いと、添えた手を切らぬか?」

「……そこは猫の手になっているから大丈夫」

包丁を持つ手とは別に、キャベツを抑える手は指を丸めている。これが「猫の手」である。これならば包丁で切る心配は少ない。ただ、布都には意味が分からなかった。「ねこのて?」と頭に疑問が浮かぶ。

何を思ったか布都は両手の手首を丸めて、片手は顔の横。もう片方を肩のあたりに持ってきた。招き猫のポーズを想像すると分かりやすいだろう。顔は「こ、こうか?」と聞いているように不安げである。

「……」

パルスイはぼおと布都を見る。そして猫のまねをしていると分かって、ぷつとふきだしてしまった。口元を抑えて、肩を震わせる。必死に笑い声をかみ殺しているのが、目元に涙がたまってきた。

「わ、笑うでない! 真面目にやっているのだっ」

真面目にやっているからこそ性質が悪い。

ふんすか怒る布都の顔を見ると、またパルスイは笑えてくる。嫉妬する暇がないほどに、くつくつくと笑い声をかみ殺しながら。笑顔を見られまいと、顔をそむける。布都はそこに至っては、もう苦笑いしかできなかつた。

毎日、夜はそんな感じで二人の「料理教室」は開催された。外はすでに暗い。客もいない。それでも布都が身振り手振り、それに口ぶりが明るいから思わずパルスイも笑ってしまふこともある。ただ、笑い顔は見られない様にそっぽを向いて逃げもする。

お店ではそんなに難しい料理はやっていながら布都はめきめきと腕を上げた。実は隠れて料理本を読んでいることもパルスイは知っている。布都が自分で口を滑らせて、気が付いていないからだ。

そしてとある日パルスイはふんふーんと鼻歌を歌いながら洗い物をしていた。そこではっと気が付く。なんで鼻歌なんて歌っているであろうか。首をふるふると振って、やめる。客席を見ると布都が子供達にお好み焼きを焼いている。

「楽には……なつたかな」

誰にも聞こえないようにパルスイは言う。なんとなく爪を噛んでしまう。

★★★

それが布都とパルスイのお店の短い歴史である。あれから、布都がいきなり「布都コ

ロツケ」という物を開発して、パルスイが窒息させられそうになったり、巫女を中心に幻想郷の少女達がお店にやってきたりとなかなか忙しい日々を送っている。

今日も今日とて布都は新開発のおにぎりを手で丸める。それは冒頭で作っていた味ごはんで作っているのだ。

「ふふふ、これこそ我が作ったふとおにぎりである」

目の前に座っているのは寝癖の付いた髪をした竜宮の使い。シャツも少し皺がある。衣玖である。彼女はお腹がくうくうとなるのを抑えつつ、布都がおにぎりを握っているのを見ている。

「布都おにぎり、ですか？」

「……」

にやつと布都が笑う。

「今、おぬし我の名前と掛けたな？」

「ええ」

「ふふふ」

布都はさらに目の前のお櫃からご飯を掬い上げる。そして元々手に合ったおにぎりと合体させた。それを小さな手で丸めていく。大きなおにぎりの出来上がりだった。おいしそうな色のついた、おにぎりである。

「これだけ大きなおにぎりだからな、これこそが太おにぎりである！」

手のひらに載せたおにぎりを持ち上げる布都。をばんばかばーんという擬音が付きそうなほど楽しそうに、自らが作ったおにぎりを顕示する。しかし、その空気を呼んだ衣玖も立ち上がった。

「それでは一つ」

「あっ!？」

ひよいと布都の手から「太おにぎり」を盗って衣玖は両手で持った。大きい。衣玖はどうしようかと少々迷ったが、布都がちらちらと見てくる。いきなり盗られたことにおこっているというよりは、何かに期待しているようだった。

かぶつと食らいつく衣玖。もぐもぐと頬を動かして、ちよつと目を見開く。

「歯ごたえがありますね」

「タケノコが入っておるのだ」

説明しながら流し目で見えてくる布都に衣玖は言う。

「美味しいですね」

布都はちよつと肩を動かしてから、横を向いた。

その頬がだんだんとゆるんでくる。

背筋をぴんと伸ばして、さらに胸を張る。

両腕は組んだまま。

「そうであろう、そうであろう」

心底嬉しそうに頷く布都。衣玖はもぐもぐと食べながら、それを見る。口に味ごはんを詰め込んだまま、ふつと笑う。どことなくシユールである。彼女はすくと座り直して、時間をかけて食べた。布都はそれをじつと見つめている。食べているところを見るだけで楽しいのかもしれない。

「ごくんと全て完食して衣玖は手を合わせる。だが、指にご飯粒がついていることに気が付いて親指を嘗める。無意識だったのではっきりとして、布都を見る。はっきりして彼女も拭くものを探すが、台拭きしかない。

「はっ」

と後ろから声が聞こえた。そこには黒のエプロンをつけたパルスイが両手でタオルを持つている。布都が「おお」と感心しながら付けとり、それを衣玖に渡す。奇妙なりーである。最後にパルスイに衣玖から「ありがとうございます」と返ってきた。

「っかっ」

布都はにやにやしなから言う。

「私の作る味ごはんの良さがわかるとはなかなかどうして……」

しみじみ呟く。かなり自信を持っていらしい。別に衣玖にも反論する意味もなく

実際美味しかったから

「ええ。ご馳走様でした」

と素直に返す。それに気を良くしたのか布都はさらに頷きながら。

「お粗末さまであった。これでこの味ごはんもマスターしたかもしれぬな」

「……………」

パルスイはじとつと調子の良いことを言う布都を見て、それから味ごはんを見る。むらつと湧いてくる嫉妬の感情。だが、彼女は黙っているだけではない。

お櫃にはまだまだ入っている。それは「今日必要」だからたくさん作ったのだ。あとでパツケージに入れておかなければならない。

パルスイはとてとてと厨房に戻って冷蔵庫を開ける。何かを取り出して、それとご飯茶わんとお箸を用意する。それとしゃもじ。くるつと踵を返して、布都の味ごはんの前に戻ってくる。

「な、なにをしておるのだ」

布都の疑問を聞き流しながら、味ごはんを茶碗によそつて。その上に冷蔵庫から持ってきたものを載せる。小さな四角形、白いもの。バターである。それごとお箸でかき混ぜながら、ご飯の熱でバターを溶かす。ご飯粒が融けたバターをまとつて、きらきらと光る。

「これ。食べてみなさい」

どんと衣玖の前に出す。彼女はいきなりのこと動ぜず、涼しい目で見ている。その眼は困惑する布都とパルスィをちらりちらりと見て、直感的に空気を読む。

「いただきます」

お箸をもらって衣玖は茶碗をとる。お箸で掬った味ごはんが輝いている。単にバターに反射しているだけではある。

ぱくりと食べた衣玖。もぐもぐと味わう。口の中に、広がる御飯の味は先ほどよりも、深い。なんとなく舌触りもいい。

「先ほどよりおいしいですね」

「なっ!?!」

率直な感想に布都が立ち上がった。

「そ、そのようなわけがないであろう。ばたーなんぞ、パンに付けて食べるもので……か、貸すのだ」

衣玖からお茶碗をもらって、自らも箸を持つ布都。

食べた。布都は眼を見開て、がっときて、ぐつとのけぞって。ばったん床に手をつく。「ま、負けた。このような使い方があったとは」

「……」

パルスイはその様子に鼻を小さく鳴らす。ただ、素直のそんなことが言える布都に嫉妬してしまう。それでも両手を組んでうつすらと笑う。料理の師匠としてまだ、負けるわけにはいかないのである。誰にも聞こえないように彼女は呟いた。

「まだまだね」

得したのは衣玖である。何も言っていないのにどんどん試食させてくれたので満足げであった。彼女はお腹をさすりながら、ふうと息を吐く。身をよじるとシャツがよれる。上着を着てくるべきかと思つたが、外は晴天。何も着たくはない。

衣玖はそう思いながら、窓の外を見る。

窓にへばりついている秦　　こころがいる。無表情だが怒っている気がする。おそらく影にチルノとルーミアもいるだろう。店番は誰かに任せてきたか、それともサボつてきたのかのどちらかである。

衣玖は何もみていないふりをして、目線をそらす。

ただ、「店員」は気が付いた。敗北者である布都は顔を上げる。

「お、おおお?」

窓にへばりついている不審者に悲鳴を上げる。ただ。これは癖になっているのであ

ろう。こういった。

「い、いらっしやい、ませ」

今日もお店にはお客が来る。

18話 B

旅館の窓から入る朝日。室内を明るく照らしている。

遠くには蟬の声。門から出れば丘の上の旅館だから、海が見える。きらきらと光る水面が見る者の心を惹きつけてくれるだろう。そんな清々しい朝のことであった。

早朝の旅館、その受付で青色の髪をした少女が世間話をしている。相手は旅館の店員である。少女はもちろん、使うべき入道がない「入道使い」である雲居 一輪である。彼女は屋で使うべきお茶葉が無くなったのでもらいに来たのだ。人数が多すぎるからだろう。

「へえ、ここで使っているお茶は嵯峨のものなんですか」

「ええ、佐賀の嬉野茶ですよ」

微妙にかみ合っていない会話を店員としつつ一輪はへえと頷く。とはいっても別になんてことない会話である。数分もかからない他愛のないものだ。平和そのものといつていいだろう。

だから雲居 一輪はこんな気持ちのいい朝に現在進行形で進んでいる自分の不幸に

は全く気付くこともなく、また同僚が近くで隠れていることにもさらさら気が付かず
いた。

(いちりん。はやくどつかにいつてください)

曲がり角から少しだけ顔を出した船長がいる。村紗 水蜜である。彼女はもじもじしながら、汗をかいていた。何でかなどとは説明の必要もないだろう。旅館の廊下で水着、そんな異常な状況に彼女は置かれている。上下とも淡い緑のビキニタイプにスカート、海で着ていれば可愛らしいだろう。ここで着ていると可愛そうだった。

しかも水蜜の後ろから聞こえてくる笑い声。おそらく彼女とは関係のない旅館の宿泊客の声だろう。男性の者であるが、朗らかに笑い話をしている。こんなよい場所に来て、湿っぽい声を出すはずもないし、少し廊下を歩けば水着の少女がいるとか思うはずもない。

「ギョギョギョ」

水蜜は菌を食いしばって一生懸命に焦燥をかみ殺す。漫画で覚えた台詞が気付かず出たが気にならない。手にじんわりと汗がにじむ。前に出ることもできず、後ろに行くこともできはしない。息が乱れてくる。

前門の一輪、後門の他人。ある意味ではどちらも対して変わらないであろう選択肢を彼女は与えられている。どっちに水着姿で徘徊しているとところを見られても恥ずかし

いが、一輪には店員というおまけもいる。

というかそもそも一輪が会話をさっさと切り上げてしまえば解決するのだが、彼女は気が付かず世間話を続けている。今はお茶の産地の話から、この海辺の町の話になった。

「私の暮らしていたところは海が見えないところだったから、とてもいい場所だなあと
思いますね」

にこやかに一輪は店員に言う。嬉しそうに言うものだから、店員も「そうですか」と嬉しそうに返す。そして物陰の水蜜は「は、はは」と小声で笑うしかない。恨めしくて仕方がないのだ、とつとどこかに行つてほしい。

(いちりん、お願いですから、どっかにきえてください)

焦っている心臓が鳴る。水蜜の心の中で一輪の消却が願われる。余裕がない。だんだんと後方から男性の笑い声が近づいているような気がする。真っ直ぐ向かっているというよりは世間話をしながら少しずつ近づいてきている。

それでもあと一分もないだろう。クライシスである。

水蜜はペろつと唇を嘗めた。きらつと眼が光る。ここであきらめるような性格を彼女はしていない。この黒髪の少女はちらつと一輪の様子をうかがって考える。まだ、何か話している。

そのままナズーリンは何故かここそと待合スペースに歩く。水蜜は何をやっているのか、見ている。ナズーリンは体をかがめて、ソファアールとテーブルの間で身を隠すようにしている。そしてナズーリンはきよろきよろとあたりを見回した。水蜜はとつさに顔を引つ込めるが、本当はこんなことをしている段ではない。

幸いネズミには見つからなかったようだ。水蜜はもう一度顔を出して、ナズーリンを見た。何をやっているのかさっぱりわからない。何で警戒しているのかも意味が分からないだろう。だが、次の瞬間には全てわかった。

待合スペースのテーブルの中央には、木製の容器が置いてある。それには蓋がしてあり、小さいものだ。それをナズーリンは開けた。中には袋入りの飴玉が詰まっている。色とりどりのそれは宿泊客の為に置かれているのだろう。

それをナズーリンはむんずと驚掴みにする。そして自分のポケットに詰め込んだ。

(……………)

見てはいけない物を見た気がする。水蜜は普段、毘沙門天の化身として、かっこつけているネズミの妙な一面をみてしまった。確かにこれは警戒するだろう。ナズーリンは何も気が付かず、飴玉を一つ袋から出して口に入れる。

何を言わないがもごもごとおつぺたが動いているのが水蜜には見えた。「飴が好きなんだなあ」と素朴な感想が頭をよぎる。多少呆けている。目の前で知り合いが飴玉を大

量にポケットに詰めこむところを見れば、何を言えbaikわからないだろう。

余談だがナズリーンは飴玉が好きなのではなく、小柄だがなんでもよく食べる。そのあたりはネズミであろう。やり方もこすい。

水蜜ははつとする。自分は危機なのである。ネズミにかまっている時間などない。

「そ、そうだ。……ひっ」

可愛い悲鳴を上げた水蜜の後ろで声がある。無駄な時間をネズミに食わされたせいで危機がすぐそばにまでやってきている。水蜜はびくつと肩を震わせる。いろんな要素が全て彼女の不幸にかかってくる。厄日とはこういう日というのだろうか。

進むも地獄。引くも地獄。待っているのも地獄。水蜜はどれかを選ばなければならぬ。普通の少女ならばその場でうずくまるかもしれない。

水蜜は一瞬だけ下を向いた。そしてふつと眼を閉じる。

たしかにどこにいても地獄だが、彼女は千年近く地獄にいたのだ。

見開いた水蜜の瞳が光る。彼女は意を決してどつと曲がり角から飛び出した。それは一輪側である、つまりはフロントに飛び出したのだ。だが、水蜜は階段には向かわない。そちらは必ず見つかるだろう。

一輪が物音に振り向こうとする。

水蜜は駆け抜ける。

ナズーリンが眼を見開く、しまったという表情。

水蜜は玄関のガラスドアを開けて――

外に飛び出した。このまま、海まで駆けてしまえば水着でも恥ずかしくはないだろう。それに受付にいた者の中で一輪は気が付いていない。ダメージは最小限に抑えられていた。

★★★

やつぱり恥ずかしかった。ぺたぺたとコンクリートで舗装された道を走る少女が一人。

勿論、村紗水蜜である。彼女は旅館を飛び出した上で浜辺まで一直線に走ろうとしていた、だが意外と遠い。坂の上の旅館なので、目の前が海なのであるが走るとなると中々近づいてこない。

太陽の降りしきる坂を駆ける、水蜜。

水着のスカート揺らしながら、健康的な姿であるが、横を車が通るたびに速度が落ちる。それにはだしだから、小石が痛い。

「……」

普通に恥ずかしい。燦々と光る太陽も、きらきらと輝く海も気にならない。早く浜辺に行きたい。水蜜はへえへえとばて始めても足を止めない。止めると恥ずかしいし、

走ってても恥ずかしい。

途中の電信柱には「ビーチバレー大会やります」と書いたポスター。モデルは青い髪の美人である。水蜜には見る余裕はなかった。

そんなこんなでやつとのことで浜辺に付いた時には、二桁以上の人間に目撃されていた。

水蜜はよろよるとビーチの入り口から、入る。眼前に広がるのはきめ細かい白い砂の浜辺。そして広がる大海原。

「……」

水蜜は無言で浜辺に手をつけて、息を整える。やつと着いたくらいと思うと、恥ずかしさがすうと消えていく。ここで水着ならば何も恥ずかしいことはない。ただ、彼女は最後の力を振り絞って立ち上がる。

「う、うみのいえ」

足が痛い。喉が渴いた。お腹が減った。そう考えると、水蜜は河童の海の家に向かう。すでに汗だくでせえせえまだ、息が整わない。できればもう一度眠りたい。



「こんどはいつたい何を始めたの? 霊夢」

「ん?」

霊夢は畳の上で胡坐をかきながら、声のした方へ顔を向ける。そちらは縁側で一人の少女が居た。顔は見えない。ただ、桃色の髪にシニヨンキャップを二つ。それだけで霊夢は彼女が誰なのかわかった。

桃色の髪の少女は手に五角形の薄い木の板を持っている。それはそこまで大きくはない。それに神社では珍しいものでもない。だから霊夢は簡単に答えた。

「ああ、絵馬よ」

「それはみればわかるけど……」

絵馬。それはその名の通りに「馬の絵」を描いて神社に奉納する板であった。とはいっても今ではそのようなことをしている物はむしろ少数派だろう。それは現代でも、幻想郷でも変わりはない。

今では願い事を書いて、神社に奉納する。あまり説明の必要のないほどありふれた習慣に今ではなっている。ただし、霊夢の神社ではあまりそれをやっていなかった。別に理由はないだろう。そもそも「能」や「祭り」でもしないと人が寄り付かない場所なのだ。

「そうじゃなくて、なんで絵馬をほとんどタダにしているのかと思って」

桃色の髪を揺らしながら少女は聞く。ミンミン蟬の音がうるさい。

霊夢は口を開けて、何かを言おうと思つたが、何故か言葉が出てこない。それもそうだろう、いつ自分は「絵馬」なんて物を神社に置いたのだろう。うまく思い出せない。

「……………絵馬つてなんの話だっけ？」

ずるつと縁側で桃色の髪の少女が姿勢を崩す。変なことを言つた霊夢に驚いたのだろう。彼女はくるりと振り向いたが、逆に霊夢はぼうと天井を見てしまったから、やはり顔は見えない。声だけは聞こえる。

「なんの話つて……………また、しようもな……………いえ。あなたが儲かるからつて人里の材木屋から取り寄せたんじゃない？」

「そうだっけ……………？」

「はあ、あんなに張り切つて性懲りもなく商売しようとしたのに……………まったく、ほら」
霊夢は気配で桃色の髪の少女が立ち上がったのがわかつた。包帯のこすれる音がする。霊夢はゆつくりと視線を彼女に向けると、また桃色の髪の少女は縁側から庭を見ている。立ち上がつてることがさつきとの違いだろう。

縁側から見える外は、草が少し茂つている。少し視線をあげると、遠く見える入道雲と青い空。太陽の光る、夏の空。

——そもそも、ここはどこだろう。

霊夢は思った。こんなに間抜けな問いもない。自分の家なのだ。しかし、彼女が深く考えようとして、目の前で立っている少女の声に思考を打ち切られた。

「あれを立てたのは霊夢でしよう？ なし崩し的に私も手伝ったけど」

桃色の少女は庭の一角を指さす。そこにあつたのは二本の柱に支えられた屋根付きの絵馬掛。要するに奉納する絵馬を掛ける場所である。これは霊夢と彼女の手作りであつた。だからところどころ稚拙な作りになっている。

ただ、かかっている絵馬は多い。風が吹くたびに、

カラカラカラカラ

絵馬と絵馬がぶつかつて音を立てる。心地良い音。願いを書いた板の音と言えば、少し詩的なかもしれない。

「……」

霊夢は思い出せない。あんなものを作つた覚えはな——と思つたところで、彼女はこめかみを抑えた。作つたような気もする。だが、あんなめんどくさいことを工場から帰ってきて作るだろうか、日曜日には寝ころんでいることが多いのだからするわけがない。

「……どう、じょう？ にちよう？」

霊夢は呟く。意味の分からないことを言った。自分で思つたことなのによくわから

ないのだ。それに絵馬掛のことも思い出せない。しかし、自分で作ったような気もする。目の前の少女もいやいやながら手伝ってくれたような気もする。

霊夢はよろよろと立ち上がる。視線を下に向けると、いつも着ている赤白の巫女服が見える。腋は涼しい。彼女はおぼつかない足取りで縁側にいき、とつと飛んで庭に下りた。靴下のままである。だから桃色の髪の少女はぎよつとした。

「霊夢!？」

霊夢はふらふらと絵馬掛けに近づいていく。草が音を立てる、気分が悪いわけでもないのに視界がゆがんでいる。彼女ははあ、はあと息を切らしながら、数歩の距離を歩く。後ろからはおろおろとする少女がいる。

カラカラカラカラカラカラ

絵馬が鳴る。そもそも神社なんて久しぶりである。

カラカラカラカラカラカラ

絵馬が鳴る。聞き慣れているのは神社にいつもいるからだ。

霊夢は絵馬掛けに手をつけて、息を整える。そして一枚絵馬を持って、見る。そこに描かれているのは「さんじゅつがうまくなりましますように」と他愛のない願い事だった。他の物を見ると「美味しいものがたべたい」という素朴な願い。

最初はお金を取っていたはずである。ただ、霊夢は今ある絵馬の在庫にはもうお金を

かける気はない。何故かは思いだしにくい。霊夢は一枚一枚絵馬を見ていく。そこに答えがあることを彼女は知っているからだ。

――足が速くなりたい

――妖怪に会いませぬように

――文々。新聞お買い得ですよ

――雨がふりますように

――簡単なお願いが続く。

――子供が生まれました。感謝いたします

――お兄ちゃんが元気になりますように

――出世祈願

――続く。

――あの子があちらでは元気でありますように

――お兄ちゃんが元気になりますように

――父がもともにもどりますように

霊夢は絵馬を離す。カランと持っていた絵馬が、他の絵馬にぶつかって音が鳴る。そこで彼女はなんとなく、自分は絵馬の料金を取らなくなった理由を思い出した。なんとなくなのだ。そう、これだけの文面だけではわからないから、なんとなく。

霊夢は後ろを振り返る。そこにあるのは、いつも見慣れた神社の姿。

そこは願いが集まる場所、それを聞くのは神様だが取り次ぐのは巫女の仕事である。

また風が吹く、カラカラと音が聞こえる。

霊夢は縁側に立っている桃色の少女が何かを言っているのが聞こえた。

「れ…………あな…………も…………」

カラカラカラカラカラと音が聞こえる。作った覚えのない自分で作った絵馬掛で願いが音を鳴らす。

★★★

水蜜が海の家につくと、奥の座敷席をとある巫女が占領していた。タオルケットを体に駆けて、扇風機からの涼やかな風の中で眠っている。河童と一緒にいた時は、扇風機が置いていなかったから誰かが置いたのだろう。

水蜜は座敷に腰を下ろして、はああと息を吐く。疲れた。朝なのに肉体的にも精神的にも疲れてしまった。元々は海の家に来て、畳に寝そべって休もうと思っていたのだが、黒髪の巫女が居てはそれもできない。

水蜜は巫女こと博麗 霊夢を見る。いつもは凶暴な彼女もすうすうと寝息を立てている。本当は水蜜がしたかったことであるが、気持ちよさそうに寝ている。それを水蜜

は恨めしそうに見て畳の上を這って霊夢に近づく。

顔を近づけてみるが、霊夢は起きない。

「……………」

なんだか可愛らしい。水蜜はそう思ってしまった。昔に一度ポコポコにされたとは思えない。しかもそのことをあまり覚えられていなかった。

水蜜は霊夢のほっぺたをやさしく摘まむ。弾力があつてモチみたいである。触っていると心地よいが、まだ起きない。だから海小屋で水蜜は調子に乗っていた。うりうりと寝ている霊夢のほっぺたをつねり、ひっぱりと苛めた。それでも水蜜は心の底で霊夢を可愛く思う。元から歳は離れている。

「ん、んん?」

霊夢がびくつと震えた。水蜜は「やばい」と顔に出して手を離す。ただ、霊夢が眼を覚ます前に逃げることはできなかった。この巫女は眼をゆっくりと開ける。

霊夢が見上げると、目の前にはキャプテンのぱっちりした青と緑の混ざったきらきらと光る瞳。お互い眼が合う。もちろん霊夢は疑わしげに彼女を睨むが水蜜はとりつころうようににへつと笑った。

「おはようございます」

「……………あんだ、なにやってんの?」

「……よく眠っているなあ、と思ひまして」

「なんだか、頬が痛いんだけど？」

「だ、大丈夫ですか？ それは大変ですから、直ぐに冷やすものをもって、ぎゃあ!」

姑息に水蜜は逃げようとしたが、霊夢はすばやくそのお腹を掴んだ。比喻ではない、霊夢はその手で水蜜のお腹を側面から掴み、指を喰いこませてから握りこんだ。剥き出しの肌には地味だがかなり痛い。そのまま、ぎゅううとお腹のお肉を握る。

「いっただただだ？」

水蜜は自分のやったことが数倍になって帰ってきたことを実感しながら、畳の上でのたうちまわった。内臓に響く握撃、それが水蜜には効果抜群だったようである。数秒後にやっと霊夢が手を離すと、彼女はお腹を押さええうずくまった。

そんなキャプテンの横で霊夢が体を起こした。頭を搔く。さつきまで変な夢を見ていた気がするが、内容がよく思い出せない。

「ねえ、今何時よ？」

「ふええ？」

うずくまっている水蜜に対して普通に時間を聞く霊夢。その緑色の水着には「変な奴」くらいにしか感想を持つていないし、のたうち回っていることも割とどうでもいい。逆に水蜜は半泣きになりながら霊夢を見る。冗談じゃなく痛かったらしい。

「は、はちじ、くらいじやないですが」

「八時？ そう、プリキュアの時間ね」

妙なことを口走る霊夢。別に見たいわけではない。単にそのイメージが強いのである。もう少し早いと「仮面ライダーの時間」と言っていた。ちなみにそれを見ているのは、それぞれ違う。

霊夢はこきこきと首を鳴らす。それからぐうとお腹が鳴るのがわかった。昨日はずつと海の上で働いていて、まともに物を食べていない。ただ、河童が船上でこつそりと食べようとしていたキツトカツツは食べた。というよりは奪った。

「お腹減ったなあ」

霊夢はそう言うのと、さらにお腹が減った気がしてきた。言葉に出すと実際に体も反応してしまふものなのだろう。しかし、今から何かを作るのはめんどくさい。空腹で調理することはなかなかの拷問である。

「それじゃあ霊夢さん。私が作りましようか？」

霊夢はじろつと声のした方向を見た。直ぐ横である。

そこには痛みから復活した水蜜が畳の上で胡坐をかいて、にやつとしている。別に何か含むところがあるわけではないのだが、どことなく何かを企んでいるようにも見え

靈夢は疑わしげに彼女を見たが、水蜜がどのようなつもりでもなにか作ってくれるのであればとは思った。最悪、何か悪事をするつもりならば埋めてしまえばいい。砂なら浜辺にたくさんある。しかし、靈夢にはそれ以上に心配なこともある。

「あんた。料理できるの？」

「あつ！ 心外ですね。お寺ではみんないない時に私が作っているのですよ。小傘さんにも好評です！」

「誰よ。それ」

聞いたことない名前を出されて靈夢は言う。ただ、どうやら水蜜には自信はあるらしい。

「それじゃあ、お願いしようかしら。早くね」

「は、はい。はきはきしてるなあ」

水蜜は苦笑しつつ、立ち上がる。

「それじゃあキャプテン村紗、特製の料理を持って来ますよ」

自信満々に胸を張る。靈夢は胡散臭げだった。

★★★

水蜜の料理は数分で終わった。彼女は厨房に行つて、片っ端から戸棚や冷蔵庫を開け、とあるものを二つ見つけた。どうせ河童はもっているだろうと思つていたら、案の

定である。

彼女は「それ」をもってお湯を沸かす。これは電気ポットがあるから楽である。文明の利器だ。ごぼごぼ、お湯を沸かして。ぷしゅーとポッドが蒸気を上げればしたごしらえは終了である。

ペリペリーと水蜜は「それ」の蓋を開ける。そして中の「かやく」は入れて「ソース」「あおのり」を取り出して、脇に置く。それからお湯を注いで、三分待つだけだ。その間に水蜜は割り箸を口にくわえて、ぱきつと割る。自分の分である。

カップメン焼きそばUFO（ウホオ）である。パッケージにゴリラの描かれたインスタント食品である。水蜜特製である点を除けば、そこらへんで買える。彼女はそれを二つ作って、霊夢のところまで持つて行った。一応、持つていく前にソースで味付けして、箸で麺をほぐしてあげた。

「できましたよ。霊夢さん」

「……………」

作ってきたものを見て霊夢は胡散臭げな顔をする。何を作つて来るのかわからない時にもしたが、今も水蜜は胡散臭い。しかし、当のキャプテンはニコニコとしながら、カップ焼きそばの片方を渡す。霊夢はそれをもらつて一応礼を言う。

「あんた、これで料理なの？」

「まあまあ。美味しいからいいじゃないですか」

水蜜も座つて、手を合わせて「いただきます」という。おそらく白蓮から躡けられているのだろう。ただ、彼女はソースの絡んだ麵を豪快にすする。もぐもぐと頬を動かして、それを噛む。ごつくんと飲み込んで美味しそうに小さく声を出す。

霊夢はお腹が減ってきた。それなので彼女もカップ焼きそばを食べ始めようとしたが、箸がない。それできよろきよろすると、水蜜が「あつ」と声を上げて厨房に行き、とと戻ってくる。手には割り箸がある。

存外面倒見がよいらしい。

19話B

「おや」

そう言つて海の家に入つてきたのは青い髪をした河童だった。暑いのか上着を脱いで腰に巻いている。彼女はいうまでもなく河城にとりであつた。

にとりはくんと鼻を動かす。なんだが焼きそばのにおいがするようないがした。彼女は額の汗を腕でぬぐい、暑い暑いと手を団扇代わりに扇ぐ。いままで外で作業をしていたらしく、額には玉の汗が浮かんでいる。

向かうのは店の奥。座敷の席である。そこには昨日死線をともした巫女が眠っているはずであつた。

だが、座敷にいたのは食事をする二人。一人は黒髪で緑の水着を着た少女、村紗 水蜜。もう一人はにとりもよく知っている漁師見習い兼巫女、博霊 霊夢である。二人の少女は手にカップ焼きそばをもつて、無言でずずと啜っている。お互い会話などしてないらしい。

「あ、霊夢さんと……ドレイそのさん……」

にとりは毒を吐きながら首をかしげた。二人の少女が食べているものは、なんとなく

見覚えがあるのだ。別に店の商品や、食材に手をつけていないのであれば特に文句はない。だが、カツプ麺を二人がどこから持ってきたのかと、少し疑問に思った。出所は河童の海の家、その戸棚の奥からである。

「あ、んとり」

口にやきそばを入れたまま霊夢がにとりに話しかけたから、微妙に名前を間違える。だが、にとりもてきとうに「おはよう」と答えた。水蜜は微妙に体を逸らす。それはそうだろう、このカツプ面は厨房の戸棚に合ったのをてきとうに取ってきたのだ。要するに本来の持ち主は河童である。

幸いなことににとりは霊夢と会話をし始めた。

「あんた、どこに行つてたの？」

「どこに行つていたもなにも、霊夢さん。ビーチバレーをするつて言つておいたじゃないか。その準備だよ」

「そんなこといつてたかしら、正直言えば昨日はイカのことしか覚えてないんだけど」
「うん、辛かったね」

にとりはしみじみ言いながら。座敷に腰を下ろす。水生生物としての自分を過信して船に乗ったのがそもそもの間違いであった。船にはもう乗りたくはないと思つてい

そんなにとりの横で水蜜がずずつと焼きそばを完食した。彼女は正座して、ぱんと手を合わせる。それから「ごちそうさまでした」と意外と行儀よく言う。確かに作法は成っているが焼きそばは河童の物。そして唇についたソースをぺろつとなめた仕草は地が出ている。愛嬌といえれば耳障りはいいだらう。

「あつ、おはようございませす。河童さん」

「あ、えつと、うん」

名前なんだつけこいつとにとりは思った。昨日徴集した労働者の一人だとはわかるが、名前までは覚えていない。何故か霊夢も一度たりとも彼女の名前を呼んだことはない。しかし、河童は白蓮から身分証を全員分渡されている。あのうちの一人であるはずだった。

「確か……あつ、そうだ。ミズミツだつけ」

「……みなみつです」

「へえ、覚えにくい名前だなあ」

にとりはそれだけの所管を述べた。この10秒足らずで水蜜に打撃を何度か与えたが気にしない。水蜜は「はは」と乾いた笑いを浮かべて、霊夢を見る。

「ひどい話ですね。霊夢さん？」

「えつ、そ、そうね」

靈夢は何故かそっぽを向いた。口で小さく「みなみつ、みなみつ」と呟いている。まるで暗記しているかのようであった。それを聞いて水蜜はひきつった笑みを浮かべたまま、靈夢に言う。

「……私、村紗　水蜜つていいいます……キャプテン村紗といわれています」

「な、なんでいまさら自己紹介をするのよ」

「いえ……別に……」

じとつとした目で水蜜は靈夢を見る。そもそも昨日も自己紹介をしていたはずなのだ。どうやらもう一回しなければならぬと感じてしまったのだ。靈夢は取り繕うようにそっぽを向くが、汗が額を流れている。暑いからではない。

「ま、そんなことはどうでもいいよ」

ぱんつと手を鳴らすにとり。彼女を水蜜と靈夢が見る。さらりと河童は言ったが「そんなこと」と流すにはなかなかひどくはあるだろう。

「取り合えずそろそろお店も開けないとね。旅館に泊まったうらぎ……労働者を連れてこないよ。あ、そだ。靈夢さん。こいつ私たちが大変なときに、たぶん温泉入っているよ」

「……」

唐突にとりは水蜜を指差す。靈夢は目を見開いて水蜜を見る。よくわからないが

水蜜は思った。やばいと。

「あ、あはは。れ、霊夢さん。い、一応私たちは温泉には入っていませんよ。そ、それに、昨日どこに行かれていたんですか」

「海の上よ」

「?、そ、そうですか」

なんで霊夢が海の上に行っているのかわからない。だがこの巫女の態度から謎の怒りを感じてしまう。まさか昨日の夜、肉体労働をしていたとは思わないだろう。そして反面水蜜は大浴場でのたうちまわっていた。

「まあ、まあ霊夢さん」

そこでなだめにかかったのが火種を蒔いたにとりであった。世間ではマッチポンプと呼ぶ。彼女は温和な笑みを浮かべて巫女をなだめつつ、水蜜に目を向ける。今の半分は冗談であるから、それ以上追求はしない。復讐は後で行う。

にとりはふうと息を吐いて、首を鳴らす。疲れているのは彼女も霊夢と一緒にからもしれないだろう。彼女はそんな気だるげな様子で水蜜を眺めた。

水蜜は腕や足はくつきりと日に焼けているが、肩のあたりにはつきりと線ができていて、肩口から下は白い肌をしている。多少ぞんざいなところがある水蜜も緑色のトップスとスカートがかわいらしさを引き立たせている。だがにとりはそんな水着を彼女に

支給した覚えなどない。

「あんたは、なんでそんな水着を着ているんだい？」

河童は思ったことを口にした。確か彼女にはワンピース型の水着を支給していたはずなのである。しかし、なんで着ているかといわれても水蜜には答える言葉がない。強いて言うのなら「あなたの仲間の河童の仕業では？」と反問したいくらいだ。風呂場にあつた着替えが全てすり替えられていたのだから、水蜜としてはそうとしか思えない。

「まあ、いろいろとありまして」

「ふーん。大変だね」

にとりは淡泊であつた。別に水蜜が多少露出の高い水着を着ていても損はないと判断しているのだろう。だからそれつきり興味を失つたようににとりは霊夢に話しかける。話題はビーチバレーの話や昨日のことであつた。水蜜はそれを見ながらなんとなく釈然としないものを感じているが、言うべきことが見つからなかつた。

「まあ、こんな」

水蜜は言いながら腕を上げる。自分の腕をなでながら、すこし身をよじると無駄なものついていない細い腰の「くびれ」が際立つ。昨日まで着ていた水着とは肌の露出が比べ物にならない。

恥ずかしいことは恥ずかしい。だが、まあ仕方ないという気持ちも水蜜にはある。何故ならば、同僚が同じ目にあっていたからだ。た。

(聖様も一輪も、それに寅丸さんもこれくらいの水着を着ていましたからね)

黒いビキニタイプの聖人。紫の恥ずかしい水着を着た僧侶。真っ白な水着の毘沙門天。

並べるだけで奇妙で、水蜜は自分の想像でくつくと笑ってしまう。昨日は彼女たちと比べて着けていても多少はましな物を支給されて安堵していたのだ。だが、確かに不公平であることには変わりない。だから水蜜は自分の今の姿に納得せざるを得ない。

と納得したところで、水蜜は「ん？」と違和感を覚えた。彼女は顎に手をあてて、ふむと考え込む。何かわからないのだが、どことなくおかしい気がする。

横ではにとりと霊夢が取り留めのない会話をしている。一日でも同じ仕事をすれば思ったよりも仲がよくなってしまいうらしい。しかし、水蜜の耳には聞こえない。

(あの露出の多い水着を支給されたのは……あの三人で)

ぼつと水蜜の頭の中に浮かぶ、ネズミの像。ナズーリンである。彼女も一緒に水着を着せられたが、上から服を着ても河童たちはまったく反応しなかった。それはパーカーを着ていた水蜜も同じである。つまり先の三人と彼女たちは別の「グループ」なのである。

「……………」

水着は要するに客寄せである。それはわかる。

「……………」

水蜜は思う。では、このまるで「グループ分け」されたような扱いの違いはなんだろう。先の三人。自分とネズミ。違うところである。水蜜はなんとなく視線を下に向ける。

「……………あ」

ぼかんと口をあけて水蜜は答えに至った。それを思った瞬間なんとなく、心の底から暗い者がこみ上げてくる。だから彼女はぎぎぎときこちない仕草で横の河童を見る。口が閉じて、歯軋りしながら、恨みのこもった目で河童に視線を向けた。その眼力に河童が気づき、うろたえる。

「な、なに？」

「いえ、別に」

ぎりぎり歯軋りしながら言う水蜜。どう考えても「別に」という態度ではないだろう。しかし、にとりはなんでもいきなり睨み付けられたのかわからず、両手で身をかばいつつ言う。意味が分からないがから適当な言い訳を口走った。

「ち、違うんだよ。こ、殺すつもりはなかったんだ」

突然火曜サスペンスのような冗談を言い出すにとり。いきなりのことに水蜜もきよんとんとしてしまう、それから意味はわからずともくすりとする。元々言い募る気もなかったのだから、あつさり引き下がった。

「ところで、あんた」

霊夢が水蜜に話しかける。

「バレーつてやったことあるの?」

「え? いえ……小傘さんがお寺の庭で子供たちとやっていた気はしますが、ハイキューしか知りませんね……それにビーチバレーとはまだ別物なんじゃないですか?」

「は、いきゅー? よくわからないけど、船から下りて昨日の今日だから、あんまり動きたくないのよね」

霊夢はこきこきと首を動かす。そこで水蜜はきらつと目を光らせる。なんとなくいたずらを考えている子供ような目である。

「霊夢さんっ。疲れたときは炭酸抜きのコケコーラがいいですよ。何でもエネルギーの吸収効率がよいらしくて、アスリートでも愛飲している方もいるそうです!」

にやり水蜜は言う。霊夢は「へー」と頷く。疲れている時には甘い物がよいとは、なんとなく霊夢も知っている。現代の様に栄養学の発達していない幻想郷でも経験則と

しての知識があつたからだろう。

「あの炭酸の飲み物って飲みにくいのよね……。でも、確かにあれだけ甘いなら効くかも。あんたって以外に物知りなのね」

「いやあ、それほどでも」

頭を掻きながら水蜜は胸を張る。にとりは水蜜の「物知り」のカラクリに気がついていいのか、冷ややかに船長を見ている。そう、いま水蜜が数分の間口走ったことと端々には彼女の趣味からやってきたことが多い。

要するに水蜜の言っているのは「漫画知識」である。同じ漫画を読んだことのない霊夢には水蜜が「物知り」に見えるが、逆ににとりのようにどこから「情報を仕入れ」たのかがわかっていると冷たい目で薄ら笑いができる。

「ところでお二人さん」

にとりは種明かしをすることない。ただ、自分の要件があるから二人に対して言う。霊夢と水蜜が彼女を見ると、この河童はにっこ笑った。

「実はさ。今回のビーチバレーには景品を用意するんだ。成績優秀者には御褒美があるんだ」

きらつと霊夢の目が光り、瞳におくに「？」のマークが映る。だが、河童は先に宣言した。

「おっと、お金じゃないよ」

「なんだ。じゃあいいわ」

霊夢はとたんに全ての興味を失ったらしく、すっと立ち上がって座敷から降りる。そのまんまどつかに行ってしまうおとしかたら、にとりがあわててその腰にすがりついた。

「ま、まって霊夢さん！ い、いろいろ早すぎるよっ！ いいもの。いいものだから！」
「……ちよ、ちよつとわかつたから、離れて！」

わずらわしげに河童を振り払うと巫女は向き直った。くすくすとどこかの船長は笑っているのが、多少癪に障ったが無視した。こほんと咳払い。改めてにとりは言う。「今回のビーチバレー大会は商品はみんなの垂涎の的、そんな商品を用意するよ。霊夢さん、その点は心配しないでいいよ。二、三ヶ月は働かないでよくなるものだとは言っておくよ。発表は全員集まってからだけどね」

「アクヲス？」と霊夢。

「い、いや。そ、そんな高価な液晶テレビじゃないけど……。というか、絶対霊夢さん売る気だね……。ああ、でも参加には条件があるよ」

にとりは腕を組む。すでに座敷から降りている霊夢は立って、彼女を見下ろしている。逆に河童は見上げているのだが、その目が不敵に光る。

「水着は着てもらわないと、ね」
にとりの表情はあくどい。

★★★

ビーチバレーとは通常のバレーとは多少違う。

まず人数が違う、普通のバレーの大人数制とは真逆に二人で一チームの少人数制である。そして「ビーチ」と銘打っているとおり、砂浜を舞台に勝敗を争う。足場の強度は屋内で行うよりも心もとないだろう。

そして、服装も違う。ビーチバレーをする選手はまるで水着のような恰好（水着であることもある）でプレーする。だが、今回はにとりの思惑もあり、幻想郷の少女達は普通の水着でプレーさせられるのである。半分は遊びで半分は強制労働なので仕方ない面もあるだろう。ちなみにボールは普通のバレーボールよりは多少柔らかい。

そのボールを水蜜はぽんと真上に放り投げた。

彼女は白い砂浜に立っている。じりじりと日差しが皮膚を焼いていることを実感しつつ、落ちてきたボールを両手でつかむ。ボールはにとりが用意したもので水色を基調としている。ぎゅっぎゅと両手で掴んでみると思ったよりは頑丈そうである。

水蜜と霊夢は砂浜に出て、練習を行うつもりであった。ただ霊夢が着替えているの

で、ここにはまだいない。だから水蜜は一人でボールを弄んでいる。にとりは暑いからと来なかった。

水蜜は砂浜を見る。下を向くのではない。海岸線を沿って続く白い砂浜を眺めている。

青い海から流れてくる穏やかな波が、ざあつと音をたてて白い飛沫を上げている。そんな波打ち際にはちらほらと海水浴客が遊んでいる。すでに朝はお昼に向かっているのである。人はだんだんと増えていくだろう。にとりのお店も旅館の「裏切り者」達が来れば開くはずである。そのあたり時間にはルーズであった。サマータイムならぬ幻想郷タイムとでもいえばいいのだろうか

水蜜はまた真上にボールを投げた。ボールが昇っていく様は蒼穹に吸い込まれていくようである。水蜜はなんと心が透き通るような爽快感を覚える。単に空の蒼さが心地よい。

「おまたせ」

上を向いているとそう声が聞こえた。水蜜は空を見上げたまま「とと」と声を出してボールをキャッチする。声の主は言うまでもなく、霊夢だろう。だから彼女は少しだけいたずらっぽく笑いながら振り返った。どんな水着を着ているのか気になったのだ。

が、期待は裏切られた。霊夢が着ているのはパーカーである。一応胸元のファスナー

は開いているので中に着ている水着が見える。白を基調とした水玉のトップスである。霊夢は涼しい顔をしている。

それを見て何とも言えない顔をしている船幽霊は知らないが、この水玉に似た水着を霊夢は幻想郷で来たことがある。とある吸血鬼の室内プールで来たのだ。真冬に。

水蜜はなんとなく昨日一輪が自分からパーカーを剥ぎ取ろうとしてきた奇行を思い出した。確かに自分が恥ずかしい恰好をしているのに、目の前にパーカー装備の少女がいたら剥ぎたくなる。

水蜜のそんな思考は知らず霊夢は足を上げてサンダルの履き心地を確認している。昨日は長靴だったのだから、えらい違いであろう。細い指でサンダルを引つ張る。ゴム手袋をしなくていいから楽だった。

いろいろと剥ぎ取りたいものもあるが水蜜はそんなことはおくびにも出さずに声を張り上げる。なんとなく霊夢に一輪がやってきたことをすれば酷い目にあわされそうだった。

「それじゃあ霊夢さん！ バレーの練習をしましょうか」

「あ、うん」

水蜜の声に素直に反応する霊夢。くりつとした目を動かすと可愛らしい。いつもさばさばとした言動からは少しギャップがある。そんななんてことないことに水蜜は眼

をぱちくりさせて、くすりとする。

直ぐに靈夢は胡散臭げに水蜜を見た。僅かな間に表情を変える靈夢がさらに可笑しくなつて水蜜はくすくすと笑う。

(あ、そうか)

水蜜はそこで気が付いた。目の前の少女は、自分と比べればはるかに年下なのである。普段はそんなことは全く思わないし、一度お寺の殆ど全員がボコボコにされているからということもある。この前は水蜜の恩人と殴り合いの宗教戦争をしていた。

「どうしたのよ」

「え、いえ」

ずいと近づいてくる靈夢。背はあまり変わらないが、今のことで見方が少し変わったらしく、水蜜には彼女が幼く見える。意識の問題であろう。まさかこの少女が工場で勤務しているとは知らない。

「よしつ、靈夢さん。私がしっかりと教えてあげますよ」

つついっどや顔をしてしまう水蜜。靈夢はこめかみに指をあてて、息を吐く。

☆☆☆

「ほっ」

水蜜がトスを上げる。ぽーんと緩やかな弧を描きながらボールが飛んでいく。靈夢

は砂に足と取られながらも追いついて、体の前で両手を組んでレシーブする。手に当たった瞬間のわずかに反発した感触を残して小気味よい音をたてて飛んでいくボール。

霊夢はバレーなどやったことはないから、少しずつ水蜜に教えてもらっている。彼女の知識も漫画程度なのだが、二人とも運動神経はよいからだろう徐々に上達した。

「うわっ、ととと」

水蜜の居た位置からずれた場所にボールが飛んでいく。慌てておうキャプテンだったが、間に合わずボールは砂浜に落ちる。水蜜はそれを拾って構え直す。すでにこのようならりのようなことは何度もやっている。

「あはは、霊夢さん。行きますよ」

訳もなく笑う。練習というよりは遊びだからこそ「はずれた方が」面白いこともある。理屈ではない。だから、水蜜はぺろつと小さく舌を出してから、構える。サーブの構え。左手でボールを持って、右手を鎮める。

仕返しである。取りにいかされたのだから、水蜜は霊夢に強いボールを撃つつもりだった。

しゅつと真上にボールが上がる。水蜜は落ちてくるそれに狙いを定めて、右手でパーンと叩く。良い音がした、船幽霊の心に小さな爽快感が広がる。

ボールは一直線、霊夢に向かう。

霊夢の驚いた顔、水蜜の「やばい」という顔。すでに船幽霊は逃走の体勢に入る。

霊夢の顔面にボールが突き刺さる。ばいんばいと音を立てて砂浜にボールが落ちた。すでに水蜜は背中を見せて走り去っている。そもそも素人の霊夢には取ることができない技術がない。避けるにも負けん気が強いのだろう。

「……………!!!」

まなじりを上げて霊夢がボールを掴む。背景には炎。ドッチボールの開幕である。

霊夢は砂煙をあげて駆けだした。両手で掴んだボールに満身の力を込めている。怒りの力と言っていいだろう。

一方の船幽霊は一目散に逃がっている。素早い状況判断を行った彼女はキャプテンとしての資質は抜群であろう。二人の少女が砂浜で追いかけてっこしている、と言えば字面はいい。実際には復讐劇である。

「れ、れいむさん、わ、わざとじゃないんですよ」

砂浜に足がとられて、スタミナが奪われる。水蜜は息を切らしながら言い訳をする。大体が意識的にサーブを撃ったのだからあまり説得力はない。

「わかったわ！ だから待ちなさい!!」

霊夢は返答する。わかったからと言って許すとは言っていない。高度なロジックであるが、水蜜は止まらなかつた。大体自分の運命が分かるからだろう。顔面にぶつけら

れて、無様に砂浜に転がされたくはない。

「はあ、はあ、はあ」

「ちよつ、ちよつ、まち、この」

だんだんとのろのろとした追いかけっこになる。二人とも全力で走り出したから、そこまで息が続かない。砂に足を取られていることから、無意識に浜辺に寄つて走る。砂けむりが水けむりに変わつて行つた。

霊夢はしびれを切らした。彼女は一瞬立ち止まつて、振りかぶる。足もとは波、横は海。彼女は踏み込んで水蜜に渾身のストレートを投げる。

「甘いですね！ れーむさん」

くるつと振り返る水蜜。この瞬間を待つていたのだ。彼女に迫るボールは早い、だが無理に取る必要がないのならば防御は簡単である。彼女は両手で迫るボールをプッシュした。反発したボールが宙にとび、海に入る。

残つたのはどや顔の船長である。息は切れている。

「はあ、はあ、れーむさん。だ、弾幕ごつこの腕がなまつたんじやないですか？ あつはは」

胸を張つて勝ち誇る船長。ドッチボールを弾幕ごつこに見立てるのはユーモアだろうか。

しかし、これは復讐であつて純粹なドッチボールではない。霊夢は波打ち際で立ち止まっている水蜜に駆け寄つた。

「ちよ、れれいむさん。ちよ」

「うがああ」

怒りの声を上げて水蜜の腰に抱き付く霊夢。二人の少女が抱き合っていると書けば、またもや字面はいい。しかし、霊夢は水蜜を腰から持ち上げる。船長は足をばたばたとさせてもがいている。だが次の瞬間には浮遊感が体を包んだ。

「うわあああ!?!」

ばしやーんと音をたてて水に放り込まれる船長。浅い浜辺でごろんと一回転。冷たい感触が体を包んだ。

☆☆☆

「で、ボールがあんなところに行つたんだね」

にとりは波打ち際に立つて呆れていた。見ているのは海原に浮かぶ一個の白い点。霊夢が放り投げて、水蜜がはじき返したボールである。波にさらわれ、潮に洗われて遠くまで行つてしまった。

にとりの後ろではずぶ濡れの水蜜と腕組した霊夢がいる。水蜜の肌が濡れて光っている。

「まあ、遠くには網があるから……外洋にはでないとおもうけど……。取ってきてね」
さらさらにとりは言う。霊夢は「それじゃあ、お願い」と即座に水蜜に押し付け、彼女は彼女で「一輪お願いします」とここにいない入道使いに押し付ける。とりはあ
とついた。

にとりの言う通り、海水浴場をぐるりと囲むように水中網が仕掛けられている。ブイが沖に浮かんでいるのがその目印であろう。要するに外から危険な生物が来ないようにするために仕掛けであろう。

それでも泳げるような距離かどうかは微妙である。可能であるし、やればできるかもしれないが足は着かないだろう。流石にとりもブラックな鬼畜かもしれないが鬼ではない。

「ゴムボートを貸すよ。オールもね。それで取ってきて。ツケとくから」

霊夢は水蜜の肩を叩く、任せたということである。

水蜜はにとりの肩を叩いた。代わりにやっておいてということだろう。こうして三人はつながったのだ。

☆☆☆

にとりの貸し出した「ボート」は半透明のゴムでできたものだった。要するに水遊び
よりのボートである。海の家で貸し出しているのだろう。

しかし、楕円の形をしており、膨らませて海に浮かべると床が透けて見える。それに船ベリのような囲いもあって、ちゃんと二人乗れる。反面二人しかのれない。にとりは面白がってイルカ型ボートも提案してきたが、それが沖でひっくりかえれば堪らないので水蜜が断った。

問題は膨らませる作業である。にとりが持ってきた時には少し空気が抜けていたの
で、それを憂えた船長が空気を全部抜いた。本当は空気キャップを開けて空気を注ぎ足
そうしたのだが、おそらく途中で換気が必要だと思っただのだろう。

その時、水蜜はへこんでいくボートの前に立ち尽くしていた。霊夢はその背中に哀愁
を感じたが何もいわなかった。

そんなこんなで水蜜がフットポンプで頑張つて空気を入れることになったのだ。

浜辺でちよつとずつ大きくなっていくボートとけきよけきよと足を動かして空気を
いれる黒髪の少女を霊夢はじつと見ている。

「れ、れいむさん。かわりましたししょう」

「あとでね」

永遠に來ない「後」を約束して霊夢はそっぽを向く。水蜜は頑張る。

「ま、まあこれで念願の船が手にはいると思えば……」

「そういえばあんた、キャプテンとか言ってたわね。船に詳しいの?」

「それは、もう」

水蜜は腕で額をぬぐう。肌を汗が流れていく。

彼女は頑張りながら霊夢に言う。

「週刊やまとも集めてますし。戦艦、商船、漁船、カンコレなんでも知っていますよ」

「へえ。あんたんとこお金があるのね」

「別にあるわけでは……お小遣い足りませんし」

「お小遣いねえ」

霊夢の所は生活費に全振りである。たまに慧音とさとりがルーミアたちにお菓子買ったりしているが、霊夢はあまり知らない。

そんなたわいのない会話をしていると、やつとボートが膨らんだ。水蜜は両膝に手を置いてせえせえと息を切らす。疲れる日だった。

「こ、これでムラサ号の完成です！」

「沈みそうね」

流れるような罵倒。霊夢はことも何気に言う。水蜜はそれで力が抜けて、浜辺に手をつく。

☆☆☆

出港したムラサ号は順調に進んだ。二人の少女が息を合わせずばたばたとオールで

波をかき分けて進む。ボートは小さいため、海の中に二人で引つ張つてから乗つただ。

波が弱いがボートは揺れる。当たり前だが、小型の船は良く揺れる。遠くに見えるボールの影。何かに引つかかっているようである。

「はあ、本当に肉体労働ばっかりね」

霊夢はオールをこぎながらつぶやく。熱い。ボートから手を出して「海」を触ると冷たい。

「あはは、けっこう楽しいじゃないですかっ」

水を得た河童ならぬ船を得たキャプテンは楽しそうである。久しぶりに船に乗ることができたのだ。ある意味では己のアイデンティティを復活できた。蛇足ではあるが「入道使い」は入道が居ない為失業している趣がある。

ちやぷちやぷ船は進む。半透明のボートの底を魚が数匹通る。それをみて霊夢は「あつ」と思う。内陸に住んでいると何でかわからないが魚を見るだけで心が反応する。その点は天空の船を操りしかない船長も同じである。

船は進む。船長が船員を気遣い始めた。

「霊夢さん」

「なこよっ」

「辛くないですか？ 熱いとか」

「まあ、熱いけど……。どうしようもないでしょ」

「いや、パーカーを脱いで、頭にかぶるだけで違いますよ」

霊夢には盲点である。彼女はパーカーを脱いで頭にかぶつてみた。細い腰がみえ、下のリボンのついた水着ショーツが見える。これで照り付ける日差しは多少緩和された。気休めかもしれないが。

「どれ、失礼」

キャプテンもパーカーを引っ張つてむりやり頭にかぶる。霊夢は抗議しようとしたが、やめた。汗がにじんでいるから恥ずかしいからだ。しかし、水蜜は何も言わない。

沖で二人羽織のようになった。一応後ろの霊夢にも前が見えるから、布の面積が少ないのだろう。霊夢は自分の為に言ったのか、本当は水蜜が頭が熱いから指示したのかわからないが、どことなく気遣いを感じた。

ボールが近づく。ブイの近くで引つかかっている。少し強い波があれば「外」に放り出されそうな様子だった。運がいいのだろう。霊夢はそれを見て「幻想郷」にいた自分たちにも「波」があつて放り出されたのか、と素朴なことを思った。根拠などない。

「よーし。ありましたよ霊夢さん」

水蜜が腰を浮かしてボールを取る。濡れたボールを頬に付けて、水蜜は嬉しがる。どこことなく抜け目ないところのあるこの船幽霊もこうすると可愛い。

「あんなたって、無害そうな妖怪ね」

「……」

ふと、口にした霊夢の言葉に水蜜は顔を上げる。後ろを向いているから霊夢には顔が見えない。ただ、いつもの軽口はなかった。

波の音だけが響く。振り向かない水蜜の向こうに広がる大海原。明るい日光と冷たい空気。

「霊夢さん」

ちよつとだけ頭を動かす水蜜。後ろは振り向かない。

「今日の海は綺麗ですね」

海鳥が舞うように飛ぶ。霊夢は黙っている。水蜜の言葉には温度がない。声は明るいのに暗い。

「でも、海の底は暗いんですよ」

ボートの下に広がる水の世界。そこに進むにつれて深まる闇。水蜜は続ける。

「知っていますか？ 特に夜が暗い。それに……とても寒い」

「……」

「上も下もわからないからでもがくんですけど、なんでか前に進まないんですよ。沈んでいるのか前に進んでいるか上がっているのかわからない。だんだんと分らないまま、目の前も見えなくなつて……それからずっとそんなところにいるとすね」

水蜜は何か思い出しているように言う。彼女はゆつくりと霊夢に顔を向ける。その眼に光はない、口元に浮かべた笑みも冷たい。

「この世の中の前すべてが恨めしいなあつて思えるものよ？」

敬語ではない。霊夢に言い聞かせるように言う。霊夢のつぶやきの返答のようで、どうなのかわからない。彼女はそれからつこりと元の笑顔に戻して明るく言う。

「まあ、長く生きていけばいろいろとあるもんですよ！」

これで話は終わりだとばかりに雰囲気を変える。霊夢は無言で水蜜の腰を掴んで、ゆつくりと力を入れる。

「え？　ちよつと、れ、霊夢さん？」

もがく水蜜。さつきの記憶がフラッシュバックする。

次の瞬間には水蜜が放り投げられていた。空中で一回転「そらきれい」と言いながら海にドボン。水蜜は水中であわてて体勢をなおして、水面に上がる。

「ぶ、はあ。れ、霊夢！　な、なにすんのよ！」

「……いや、むかついたから」

「そ、それだけの理由でええ」

水蜜はボートの縁を掴んで上がると霊夢にとびかかった。すでに霊夢に対する余裕のある態度はない。しれっとした顔をしている霊夢に本気で腹が立った。彼女と霊夢はボートの上でもがき合い、落とし合い、顔を引っ張る。

「このお、暴力巫女お!!」

「うさんくさいのよあんたあ!!」

お互いにつつまみ合う。水蜜にはなんで霊夢に投げ飛ばされたのかさっぱりとわからない。だからこそ、余裕なく地を出す。霊夢はそんな彼女をボートの中で押し出して、おさええつける、力は巫女の方が上らしい。

水蜜はもがく。

「このお離せ!」

「言いたいことがあるのなら、すつと言いなさいよつ!」

「はあ?」

「一から十まで気取ってんじやないわよつ」

「意味がわからないのよつ! 離せ人間!」

「……とりつくろってんのが最初から見え見えなのよつ。永く生きていればなんかあるって、短く生きててもなんでももあるわよ!」

「……」
「いいたい事があるなら、いくらでも聞いてやるわよ……その上で簀巻きにして封印してやるわ」

霊夢にも自分が言いたいのかわからない。だが、最初から彼女は水蜜を「胡散臭い」と思っていた。どことなく嘘をついているような、「作っている」ような、そんな気がしていた。ただ、本質を見ていたともいえる。

村紗 水蜜は危険な元来妖怪である。よい妖怪とは言えないだろう。地獄の紅い池が忘れられないこともあった。疼く心の底の暗闇を抱えて湖にすることもある。だが、人と接するときには「いつでも笑顔」であった。

多少の冗談は言う。軽く怒りもする。だが感情の底は見せない。薄い膜を張ったようにいつもいつも笑顔である。

「れいむさん……どいてください」
「……」

ああ、と水蜜は思った。霊夢がなんで怒っているのか、この巫女自身はわからないらしいが「永く生きている」自分にはわかった。簡単である。霊夢は水蜜の為に怒っている。憐れみでもなければ、慰めでもない。それは水蜜にはわかる。

水難事故は千年以上前。記憶も薄らいだずつと昔。いろいろな慰霊の人々が自分を

含めて「憐れんでいった」ことを覚えてゐる。それが恨めしい。自分たちはこのうとうと生きているのに、と暗い感情が心の奥にたまっている。

そして彼女の恩人が救ってくれた。役割も与えてくれた。だが、彼女はあまりに善人過ぎたのだ。水蜜はその恩に無上の感謝を思いつつも、自らの卑屈さをさらけ出すことができなかった。だから隠れて「いたづら」で憂き晴らしをしたこともある。

水蜜は霊夢と向かい合う。足の裏を合わせて、足首を持つ。

「霊夢」

「なによ」

「今から言うのは、正直言えばとても恥ずかしいことです。永いはなしになると思いますが」

「はっ、幻想郷には説教好きが何人いると思つてゐるのよ」

霊夢は何を水蜜が話をしようとしてゐるのかわからないが、大事なことを言おうとしているとは思つた。だから、ただ受け入れる。

水蜜が妖怪として心の底に落とし込んでゐる物は暗い、血の匂いがするはなしかもしれない。霊夢にはそれを取り除くことはできないが、聞くことはできた。

水蜜が口を開く。

☆☆☆

「およ。遅かったね」

河童の家にもどってくるともう店は開いていた。霊夢と水蜜は疲れ切った顔をしている。体力もつきかけているのだろう。少し眠りたい。

「うん」

青い顔で霊夢は言う。ボートとボールは直したことも告げた。にとりも流石にふたりのゾンビに仕事をさせようとは思わない。だから、こういった。

「裏でやすんでれば？」

「そうね」と霊夢。

「はい」と水蜜。

そう気のない返事をしつつ、二人はよろよろと裏に引っ込んでいく。にとりはそれを

みながら思う。

「海にでも潜ってたのかね？ 目、赤くして。あ、いらっしやませ」
にとりは直ぐに接客に戻った。書き入れ時である。店の隅では紫の水着の少女がポスターの前で絶望的な顔をしている。

裏では水蜜と霊夢が寄りかかって寝ている。

19話A

商店街の小さなお店で食事を終えた永江 衣玖はよそ見をしながら歩いてきた。蒸し暑い夏の熱気が頬を撫でる。彼女は家に帰ってから冷房をつけて、ソファでごろ寝をする自分を想像している。それが彼女の願望だろう。

しかし、衣玖は真つすぐ帰ることはできない。何故ならば彼女の腰には何故かゴムひもが巻かれている。そこから延びる先っぽを握っているのは衣玖の後ろにいる、桃色の髪をした少女だった。言うまでもなく秦 ころろである。

「きりきりあるけ」

無表情で「捕虜」に命令するころろ。店番から逃亡した衣玖をさがしていたら、行きつけの店でただ飯を食べていたのだから、少し怒っているのかもしれない。それでも表情は変わらないし声に抑揚もない。

紐は逃げないようにという保険だろう。それもとある嫉妬深い少女が切り盛りしている店でもらった。

「そこを右」

ここころの指示は短く的確である。商店街の角を衣玖は言われたとおりに曲がる。ど

ここに向かっていいのかはわからないが、逃げる算段はなんとなくしている。そのあたりもぼんやりしているのは性格なのかもしれない。

こころの後ろにはルーミアとチルノが並んで歩いている。ルーミアは暑い暑いと手のひらで顔を扇いでいる。チルノは一人だけ手にペッドボトルを持っている。表面には「Crystal Kaiser」と書かれたミネラルウォーターである。英語とドイツ語が併記されているのは奇妙である。

「こころさん、どこに行くのですか？」

ふと、衣玖は聞いてみた。どこに向かうのかは聞かされていないが、少なくとも自分にとつてプラスになる可能性は低いだろう。

「いんびこ」

こころは短く答えた。衣玖はちよつと考えたが、別に考えるまでもない。彼女はこういったのだ。「コンビニ」と。

☆☆☆

「で？ あんたは朝からなにやってんの？」

飲み物コーナーの前ではたては呆れながら聞いた。彼女は青と白のストライプの制服を着ている。これは彼女の働くコンビニエンスストアの制服である。つまり、彼女は勤務中であつた。

なのに、彼女の前にはへらへらと笑う同族の姿があった。

もちろんはたと同じ「鴉天狗」である。七分袖のぴったりした藍色のパーカーを着ている。胸元が少し開いていて、中に着たブラウスのフリルが見える。下にはショーツパンツを穿いている。動きやすい恰好が好きなのかもしれない。

艶のある短い黒髪を揺らしながらその少女は笑う。どことなくはたてに對していたずらを考えているような、そんな含みある笑みなのだが、整った顔立ちがそれを他人には感じさせにくい。ただし彼女、射命丸 文のだったら知り合いは普通に感じる。

普段の行いが悪いのであろう。それでも文はやれやれという風に肩をすくめて見せる。

「昨日言ったじゃないですか。付喪神を調べるんですよ。神社とかにいるみたいですよ。」

「ふーん。まあ、いまから調査するのね。私はまだまだバイトがあるから付き合えないけど、権も誘ってみれば?」

はたては少し羨ましそうに言う。なんとなく自分が働いているのに、のほほんとして文を見ると羨ましく感じてしまうのだろう。それでもはたては一人だけ蚊帳の外にいる気などはない。

「ま、バイトは夕方までだからそれが終わったら付き合っただけあげるわよ」

「さっすがはたてですね。伊達にブログは書いていません！」

「か、関係ないでしょ！ あと、あんた変なコメントしてくるのやめなさいよっ。気になるのよ」

「失礼な。私がいつそんなコメントをしたのですか。身に覚えがありません」

はたてはわなわなと震えたが、はあとため息一つついてからあきらめた。どうせ口では敵わない。文ははたての様子にちよつとだけ笑って、冗談ですと軽口をたたく。

「それよりもはたて、今日は何時にアルバイトが終わるのですか？」

「五時あがりよ」

「そうですか、それじゃあ先に楯を拾いに行きましょう。ダンボール箱で震えているかもしれないませんし」

「捨て犬かつ！ あんたいつか刺されるわよ」

「ふふっ」

少女らしい笑い声を漏らす文。

「まあ、楯はそんなことしますかね」

「……………」

はたては難しい顔をして腕組する。口調は荒っぽいところもあるが、楯はどちらかというと穏やかな性格である。それに甘い。なんだかんだといつても文に付いてきてい

る。その点文も信頼のような物を持っているかもしれない。純粹に「信頼」とは言えないにしてもである。

ただし、はたてはあることを思い出した。

少し前に権の住むマンションを訪ねた際「見てはいけない物を見た」ことで部屋に引きずり込まれたことがある。Rhineで文に助けを求めたが、最終的に返信もこの黒髪の鴉天狗はよこさなかつた。今考えると少々恨めしい。

「この前ヘッドロックされたし……文もされるかもね」

「へ？　そ、そんなことされたんですか？　詳しく話が聞きたいのですけど」

文はきらつと眼を輝かせる。面白いことを聞いたと、顔にありありと描かれている。はたては文に余計なことを言ったと悔やんだが、その前にピンポンと入り口から客が入ってきた音がした。コンビニは防犯の関係もあり、ドアが開くと音が鳴ることが多い。

「い、いらつしやいませー」

とはたてが接客モードに入ると文は「ちっ」と舌うちする。腹黒いところも彼女の魅力であり、欠点であろう。そのせいで多方面から恨みを買っているから、現実に財布からお金が無くなっている。

入り口の自動ドアからはぞろぞろと数人の少女達が入ってくる。先頭にいるのは

リールのような物を腰に巻かれた竜宮の使いこと衣玖。その後ろにこころとチルノ、ルーミアである。

こころは中に入ってからようやく衣玖に何をさせようとしているのかを歩きながら言った。その間も四人は店の奥に進む。場所はレジの前。巨大な冷凍用の什器が置かれた場所である、それは上に蓋がなく、多くのアイスが入っている。そこでこころは言った。

「衣玖。アイスをたらふく買おう」

こころはぐつと片手でガッツポーズをとる。

提案の様だが、殆ど強制である。もちろん衣玖のポケットマネーを使う。食べるのは彼女以外の三人である。そしてここで無表情のこころの代わりに、歓声を上げたのはルーミアとチルノであった。彼女達はアイスの詰まった什器に駆けだした。

「そーなのか。わたしは月見大福とソフトクリームと……これと」

えへへと涎を垂らすルーミア。普段は冷静な表情をする彼女のバックにはアイスの幻想が見える。あのアパートにはアイスなぞほとんどない。あるのは毎日の食事という「糧」(かて)である。たまにさとりが他の二人に隠れて食べさせてくれる程度で、甘味は貴重なのだ。

はつとルーミアは表情を整える、はしたなかった。ただ胸が高鳴るのは抑えられな

うとした少女達の一人なのである。

「これは、飛んで火に入る付喪神ですね」と文。

「ご悪いわね……ていうか、なんであの紫の髪をやつ紐でつながれてんのかしら」

はたてが言うが、その点文はわかっている。見た時に直ぐにわかった。

「何かして、アイスをおごらされているのでしょうか」

口元がにやけている。ちよつと前に彼女も一人の吸血鬼と行動して、カツアゲに会い、大量のお菓子を買わされたことがある。既視感から直ぐに分かったのだろう。それに過去の自分と同じ「不幸」を味わっているだろう者を見ると、心が安らぐ。

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ」

黒い笑いをもらす文。普段は平気そうな顔はしているが、とある花の妖怪との戦いで鴉天狗としてのプライドは傷ついていたのだろう。はたては意味が分からずぞつとするが、文は仲間を見つけて嬉しそうに黒く笑う。愉快である。

そんな黒い視線には全く気が付いている衣玖はふうと息を吐く。特に何も言わない。ちらつと入り口を見ながら、そつとおかしの什器から紐を外そうとしている。たまにこころが振り返ると、なにもなかったように手を離す。

こころもこころで衣玖が逃亡を図っている程度のこととはわかる。いままで何度も逃げられたのだから今度こそは逃がす気などはない。それはそれとして「メロンバー」な

る棒アイスをこころは手に取る。

文は陰でニコニコしている。やはり過去の自分の溜飲が下がる様な気がする。

そんなことだから、アイスに群がる少女も鴉天狗の二羽も新しく入ってきた、お客に気が付けなかった。それは一人の少女である。彼女はアイスコーナーのチルノ達を見てぎよつとするが、すぐにニヤツと八重歯を光らせる。

ウエーブのかかった金髪をポニーテールにしている。片手にはピカチュウの団扇。

揺れる、藍色の布地に描かれた美しい華。ぱたぱたなる、袖。腰紐は胸の下あたりで留めて、衣玖のような本物の紐ではない。

「チルノっ」

少女は叫ぶように呼んだ。彼女は足に履いたつつかけをかちつとならして、仁王立ちをする。どうだと言わんばかりにその「浴衣」姿を見せつけた。ふふんと鼻をならしながら、頬をちよこつと紅くしながら。

おっ？ と氷の妖精を初め、こころもルーミアも振り返る。聞き覚えのある声である。それに文も「おやつ？」とそちらを見た。聞き覚えがありすぎるのである。衣玖は逃走経路を頭に浮かべた、紐をこの一瞬で解いた。

「あっ」

と口を押えて思わず声を出したのはルーミアである。なぜならむわつと心にとある

感情が浮かんだからだ。逆にチルノは純粹に反応した。思ったままに口走る。

「おまえは!? 誰だっ!!」

「えっ?」

金髪の少女はかくつと体を傾けさせた。力が抜けてしまったのだろう。しかし、チルノが見間違えるのも無理がないかもしれない。その少女は普段とは全く別の恰好をしていたこともあるだろう。チルノを擁護するとすればその程度の理由はある。

「わ、私よ!」

フランドール・スカーレットはそう自分を指さして言った。せっかく浴衣を着てみたというのにチルノの反応は予想外だった。しかし、チルノはそれでもわからないように、頬に「ガリガリ様」という骸骨のイラストが載ったアイスを付けて考える。ひんやりして気もちいい。

「たわし?」

「わたし! フランよっ!」

「……! へ、変装するなんてヒキョウよ! あたいは最初からわかってたんだから!」

「へ、変装なんてだれもしてないわよっ! この馬鹿っ!」

「なにー! この、あほー!」

「だれがよ。ばーか、ばーか。馬鹿チルノ!」

「あほー！ この布都フラン！」

しようもない喧嘩が始まってしまった。ぐるる、齒を剥き出しにするチルノとフラン。吸血鬼の少女も氷の少女と一緒にになると、少々精神年齢が下がるらしい。そのうち掴みあいの喧嘩に発展してしまうのは眼に見えているので、すつと秦 ころろが間に入った。

「フラン」

「うつ、な、なによ」

「かわいい」

ぐつと無表情で親指を立てるころろ。一瞬ぼかんと口を開けたフランだったが、直ぐに意味が分かって、その間に衣玖は逃げて、フランはきゅつと胸が高鳴るのを覚えた。視線がすつと横を向いてしまう。それでポニーテールが揺れる。よく見ると。カチューシャをしていて小さな赤い花の飾りがついている。

「……」

うちわで顔を半分隠しながらフランはそっぽを向いてしまった。ころろの仲裁は成功したのだろう、しかし彼女のスカートを引っ張る者が居た。チルノである。ころろが振り返ると彼女はぱつと一歩下がって仮面ライダーよろしく、変身ポーズをとる。

「あたいは!? ころろ！」

「……かつけえ」

本心かはわからないが無表情で言うところ。親指をたてて、「グッド」を表すジェスチャー。それだけでチルノの表情はばあど明るくなり、最後には胸を張ってふふーんと鼻息荒く踏ん反りかえる。

「あたいの勝ちね」

「ばーか」

フランは呆れたようにいう。もう喧嘩する気はないらしい。幸いチルノの耳にも届かなかった。フランはチルノに見えないところでべつと小さな舌を出す。

「これにていつけんらくちやく」

腰に手を当てたこころは芝居がかった台詞を言う。表情は変わらないがどことなく満足げである。そんな三人の後ろでルーミアがぶくつと膨れて、フランの浴衣を羨ましげに見ているのには気が付かなかった。スカートをきゅつと掴んでいる。

「……よかつたですね」

影で見ている文はぽつりと言う。誰に言っているのか、傍にいるはたてにはわかつたが、彼女は静かに頷いただけで口は開かなかつた。強いているならば「さつさとアイスコーナーからどいてもらわないと困る」とは思っている。その点は店員である。

しかし、今の数分でとんでもないことが起こっていた。その異変に最初に気が付いたのは秦　　こころである。

「はっ。衣玖が居ない」

言われてみればその通り、いつの間にやら煙の様に消えた竜宮の使い。どのタイミングで消えたのかこころにはさっぱりわからない。こころは「ちつくしよ」と無表情で悔しがる。金蔓が消えてしまった。

「このままではアイスが買えないわ……」

こころは最大の懸念を口にした、その途端。

「な、なんですって!」

「そ、そうなのか!」

とルーミアとチルノが分かりやすく落胆する手に持っていたアイスに視線を落とし、ついでに肩も落とす。フランには何が何だか訳が分からないが、とにもかくにも彼女達が落ち込んでいることはわかった。

フランはちらつと後ろを見る。そちらにあるのは入り口である。

そもそも今日彼女は一人で行動しているわけではない。単に連れだつて来た「従者」と多少離れただけであった。その証拠にコンビニの駐車場に入ってきた、大きなエコバックを二つほど持った赤い髪の女性がいる。顔の左右で三つ編みにして、何故か野球

帽をかぶっている。

彼女はのっそのっそとコンビニに入ってくる。入り口が開いて、ピンポーンと音がした。その女性はカーキ色のハーフパンツに白のシャツを着たラフな格好である。それでも整った顔立ちをしていた。

「妹様あ。やっと追いつきましたよ」

フランにとって頼れる女性。紅 美鈴がそこにいた。彼女こそ、今日のフランの付き人である。手に持っている袋をメイドから頼まれた買い物であろう。妙に量が多いのは、一回の買い物で一気に買い込む性格なのかもしれない。両手がふさがって額もぬぐえやしない。

フランが入り口を見た理由はこれである。チルノ達の落胆を自分で解決することは難しいかもしれないが、美鈴ならやってくれるという妙な信頼がある。ポケモンの時もそうだったのだ。

「美鈴！ いいところに来たわ。こいつらに美鈴のすごいところをみせてやってー！」
「えっ？ は、はあ」

美鈴にフランはかつかつとつかかけを鳴らしながら歩み寄る。いきなりのことで意味の分からなかった美鈴だが、チルノとルーミアそれにこころがどことなく暗い雰囲気

を出していることに気が付いた、彼女達とは殆ど面識などないが美鈴はフラン可愛さに
いってしまふ。

「な、なんのことが、わかりませんが……妹様。私に任せておいてくださいっ！」

フランはにつこり笑つてえくぼを見せる。それにつられて、ぱあと美鈴も笑顔にな
る。次の瞬間には世の中、契約書も読まずに契約した場合にどのような破滅を迎えるの
かを学ぶ顔には思えないほど、美鈴は幸せそうだった。

「まじか！ チルノ、ルーミア。やっぱりアイスが食べられるわ」

こころが即座に現状を理解して、二人の少女に伝える。ルーミアとチルノも笑顔に
なつて「やったー」と声を合わせる。この場にいる者たちはみんな笑顔であつた。美鈴
は何も理解していないだけである。

「それで、妹様。私は何をすればいいのですか」

いまさら聞く美鈴。

「うー？ さあ？」

フランもよく知らない。だからこころに聞いた。

「ねえ、こころ。何をすればいいの？」

「アイスをおごつてほしいわ」

「だつてさ、美鈴」

さあ、と顔から血の気が引く。それを美鈴は感じた。なぜなら、こころとルーミアとチルノは両手に抱えられるだけのアイスを持つている。もちろん一人が持てる量などは所詮少女だから多くない。一人千円分程度だろう。

よって三千元。美鈴は単純計算で頭にはじき出す。小さな額ではない。一週間分の昼飯代よりも多い。

「ま、マカセテクダサイヨ」

ぎこちなく言う美鈴。明日から、アルバイトは昼飯を抜けばいいのだ。簡単な話である。一応メイドから共通の財産をいくらか預かっているが、手を付ければやられる。美鈴はまだ死にたくはない。だから、あくまでポケットマネーを使うのだ。

「ふ、ふふ。美鈴はね。この浴衣も借りられる場所も知っているのよ。今日はそこに言ってきた帰りよ」

無邪気なフランドールは、無邪気にお気に入りの彼女を自慢する。自らのことを語るよりもどこことなく嬉しそうである。しかし、ルーミアがぱつと反応した。

「そのゆかた、レンタルでできるの?」

何か期待している目である。フランはうんうんと頷いて、八重歯を光らせながら胸を張る。そこでふつと何かを思いついたらしく、ピカチュウの団扇を軍配のように美鈴を指す。

「そうだ！ 美鈴。こいつらにも浴衣を着せてあげよう！」
「え」

美鈴はびくと震えた。

これには多少説明がいるだろう。浴衣のレンタルというものは全国的に行われている。相場として一日数千円であろう。実際的には返すのが翌日などになれば、多少料金を取られる。

美鈴はエコバックを掴んでいる右手を見た。何故か震えている。

すでにフラン一人で数千円の経費、いやフラン費が飛んでいるのだ。そこにこの人数を知り合いの呉服屋に連れていけば、破滅する。昼飯どころの騒ぎではない。銀髪メイドに冥土に送られかねない。

「い、妹様。ちよ、ちよつとまってください」
「え」

言われてフランはきよんとする。可愛らしい瞳、実際美鈴はかわいくて仕方がないわけではある。そのせいで美鈴は「できません」とは言えない。エコバックを下ろして、ポケットから財布を取り出す。余談だかその財布は真っ赤ながま口であり、中央に「しばにゃん」の顔が描かれている。

「ひー、ひーふみ」

美鈴は数える。札束をであるが「福沢」ではない。「野口」である。とてもではないが難しい。むむむと美鈴は唸ってしまふ。眉を寄せて、頬を無意識に膨らませていることが少し可愛らしい、ただ修羅場である。

「美鈴」

「は、はい。い、妹様」

フランはちよつと残念そうに言う。

「無理ならいいわ」

責めるでもなく、すねているでもなく、只々美鈴にぎこちない笑みを浮かべている。それは紛れもなく美鈴を慮つた言葉であつた。少し前の騒動からフランは多少変わったのかもしれない。

美鈴は唇をかんだ。ここで折れるわけにはいかない。

「い、いえ。まっかせて下さい妹様！ 楽勝ですよ」

胸をどんと叩いて、必死に余裕のある表情をする。ただ、それだけでフランの顔が、少しづつほぐれて、やったとその場で飛び上がった。そばではルーミアがガツツポーズをしている。よくわからないがチルノとここも喜ぶ。

「めーりんー！」

フランは思わず美鈴に抱き付く。美鈴はかわいさに心を奪われながらも「は、ハハッ」

と乾いた笑みを浮かべる。眼には涙がたまってきた。嬉しいのか、それともこれから待ち受けるであろう試練を悲しんでいるのかはわからない。

だが、世の中には救世主はいるのだ。物陰に。

美鈴は幸運だった。誰か助けてほしいと心の底では思っている、口には出せなかったが、その思いが届いたのか店の奥の方の「彼女」と眼があった。黒髪的美少女である。流石としか言いようがないタイミングで目を合わせてくれた。

射命丸 文がそこ居ることに美鈴は気が付いた。あちらも気が付いたらしく、はっとしている。

思わず美鈴はにこおと笑みを浮かべた。汗をかいて、ひきつっている。重ねてになるが「笑みを浮かべた」だけで「笑っている」わけではない。むしろ眼は座っている。逃がすわけにはいかない。死がかかっているのだ。

美鈴は私に危険はないよ、と鴉天狗に必死にアピールしているのだった。

しかし、美鈴とて鬼ではない。少しお金を融通してもらおうと思っている程度で、ちゃんと後で返す気はある。それでも鴉天狗は厳しい表情をした。

「逃げます」

文の言葉はそれから始まった。はたては「は？」と言うが、文は全てを悟っている。こ

のまま此処にいれば、生活的に死ぬ。今でも毎日の食費を切り詰めているのであるから、これ以上の出費はまずい。

「それじゃあ、はたて。また連絡しますから。私はこれで」

「あつ。ま、まあいいけど。じゃあ。後でね」

文はそう言いつつ、いったん店の奥に向かった。はたては「？」を頭に浮かべたままである。しかし、これは心理戦がすでに始まっているのだ。美鈴は入り口付近にいる。奥に向かうことでそれを「釣っている」のだ。

お酒コーナーは他からは死角。文はそこに身を隠す。

『あつ美鈴。どこにいくの』

遠くでフランの声がする。敵は動いた。

「つかまりませんよ」

文はぺろつと唇を嘗める。汗が？でて、ブラウスを濡らす。お金を失う恐怖は十分すぎるほど知っている。国営放送から居留守を使って逃げる技術を磨くこともした。一日パン一枚で過ごすことも編み出したのだ。

文の横には柿ピーの袋。つまみの什器だろう。敵がどこから来ても逃げることできる体勢をとっている。

『妹様！ あちらからこのお店をぐるつと一周してきてくれませんか』

声がする。姿は見えないが、フランをつかつて挟撃を画策していることは明白である。

文はちらつと什器から顔を出す。見ると首を傾げたフランが歩いてきてる。文はすばやく顔を隠した。逃げ道の一方は崩されたのだ。

コンビニは長方形の形をしている。文のいる位置はレジの反対。入り口の対角線。つまり一番奥である。間にある什器の棚を考えれば逃走経路は数本。しかし、入り口は一つ。つまり最終的にはそこを突破しなければいけない。

時間も無い。フランに見つかれば、なんとなくではあるが文は逃げられない気がしている。

「ここは、いちかばちかですね」

文は移動する。身を低くして飲み物コーナーに沿って動く。ガラス張りで雑誌コーナーになってる方向である。あとは入り口まで走り抜ければよい。だからこそつと彼女は入り口を見る。ちなみにはたては「なにやってんだろう」と首をかしげている。

入り口に佇む桃色の髪。何故か仁王立ちをしている秦　　ころ。あれも敵であろうが、おそらく意味は分かかっていないはずである。文はふうと息を吐く。このまま一直線に駆け抜けて、入り口から一目散に脱出すればよい。こころは押しものけるしかない。

そこで気が付いた。文は美鈴がどこにいるのかさっぱりわからない。ただ、後ろから

はフランが来ている。数秒の猶予もない。

『うおおお』

遠くからチルノの声が聞こえる。おそらく意味はないだろう。

文はかつと眼を見開いて、物陰から飛び出した。雑誌コーナーに飛び出したのだ。こころははつと気が付くが、わつと両手を上げて無表情で驚くと、後ろを見せて逃げていく。何故かわからないが文にとっては好都合である。

たたとと数秒。文は短い回廊を駆け抜け、入り口の前にいく。そして、ぞくつと首筋が粟立った。

真後ろに美鈴。そう、全ては布石だったのだ。門番をこころだけに見せかけて、実は物陰にいたのだらう。伏兵を置くその知略は流石の年季である。つまり、こころは囷、本命の美鈴が鴉天狗の首を断つ（とやばいので気絶させる）策だった。

しかし、ずる賢さならば文はぴか一である。彼女はさつとしゃがむ。一瞬遅れて彼女を見る。美鈴は初撃を外して体勢を崩している。高速の攻防の中で文はちらつと後ろにやりと鴉天狗が笑う。

「ちい」

「あまいですねっ」

視線が交錯する。文は勝ち誇った顔を一瞬だけ見せて、だんと床を蹴る。その勢いで入り口を抜けようというのだ。完璧であった。あとはガラス張りの自動ドアを超えれば逃走は完了する。

——自動ドアがゆーっくりひらく。

「あ。あのちよつと。ねえ」

文は素に戻った口調で、ガラスを叩く。自動ドアは人が来れば感知して動くが、走って通り抜けようとすると、ひっかかる。その間にぼんと文の方に手が置かれた。美鈴だろう。

やつと開いた自動ドアの外は、とても明るい。コンビニの奥に引きずり込まれながら文は思った。

ただ、僅かな救いは、

「あつ文だ！」

と無邪気そうに喜ぶフランの声だけだろう。こうして幻想郷の少女達以外はコンビニ客が唾然として見ていた状況は終わったのだった。

20話A

商店街とは基本的に自己完結することができる。現代では全国のそれは大型チェーンのスーパーなど押されているが、昔ながらの「商店街」には肉屋や魚屋の食料品店から本屋などの趣向品、それに服屋などもあるものである。純粹に「生活」の為の店は揃っている物だ。

問題は品揃えであろう。現代の人々のニーズを満たすには多くの商品を並べておかなければならない。それこそ誰も買わないであろう物も「在庫」としておく程度でなければやっていけないのだ。

ある意味、それが世に言う「シャツター街」の原因にもなっている。

幸いにも幻想郷の少女達が住まざるを得なくなった街の商店街はまだまだ、多くの店が軒を連ねている。少女達という新たな労働者を得ることで活気が出てきたといつてもよいだろう。

その商店街の中にポツンと小さな呉服屋があった。

古ぼけた看板とささやかなシヨウウインドの向こうに掛けられた淡い桃色の着物。

入り口を入ると右手には一段高くなつた座敷がある。そこには敷布が敷かれていて、上にはくるつと巻かれた色とりどりの反物や綺麗に畳まれた着物が並べてある。それに着物に似合いそうな女性用の下駄が並び、これだけでも花緒が鮮やかに並んでいるように見える。

傍らには紫の着物を着たマネキンが一体だけいた。そう、この店にはこれ以上飾つてある物はない。

ここはもうこの商店街でも忘れかけられている店でしかない。申し訳程度の商品を並べ、いつかは終わる時を待っている、そんな店である。淘汰されているのではない。只々静かに終わっていく、そんな場所であつた。

だからあまり客はこない。店番をしている少女が一人いるだけで、彼女も最近たまたま雇われた臨時のアルバイトであつた。元々この店を経営している老夫婦がいるが、ある日やつてきた河童に説得されて短期のアルバイトで雇つたのだ。

その少女は少しくすんだ藤色の髪をしている。背はさほど高くないがやせ形で可愛らしい容姿をしていた。最初は悩んだ老夫婦も数日で彼女をすっかりと気に入つてしまった。なんとといっても笑顔が可愛らしかつた。

ただ、すこぶる物覚えが悪かつた。一度言われたことでもたいてい忘れてしまう。それでもその少女は一生懸命に仕事を覚えた。分からないことはメモをして、何度も何度

も繰り返し声にだして記憶する姿は不思議と応援したくなるような、奇妙な魅力を持っている。

どちらにせよ客など殆ど来ないのである。老夫婦は少女の物覚えがどうであろうともどうでもよいことであつたかもしれない。ただ、建前上は従業員であるからには店番程度は任せることにした。

その少女は今日も呉服屋の隅っこにパイプ椅子を出して座っている。

手に持っているのは「現代語訳 万葉集」という現代的な本である。ぱらぱらと彼女はそれを大きな瞳で文字を追いつながら読んでいる。時折「うん？」と顔を上げて、こんなと自分の頭を叩く。何かの癖であろう。

少女の肌は白い。上に着ているゆつたりとした黒のシャツから伸びる腕も細い、あまり外には出ないのかもしれない。下にはハーフパンツを穿いている。女の子らしく少し内またで座っていた。

静かな時間が過ぎていく。少女はただ黙々とゆつくりとした読書が続けている。たまに「万葉集」の一節を口ずさんでみたりもするが、それを聞いている者はいない。ただ、今日は珍しく先ほど客が来た。とある赤毛のメイドとその妹のような金髪の少女だった。

メイドの方はたまたま少女がお昼ご飯に立ち寄った店で知り合った相手であるから、

話はしやすかった。要件としては浴衣をレンタルしたいとのことだった。厳密に言えば買いに来たのだが、あまりにも高いのでレンタルに落ち着いただけである。

少女はくすくすと一人で笑う。赤毛のメイドが金髪の少女の浴衣姿に喜んでいたことを思い出した。もう、少女にはぼんやりした記憶ではあるが楽しそうに覚えているのだ。覚えていたかった。

しかし、今日はまた楽しいことがあるとは少女にはまだ、わからない。

☆☆☆

「きりきりあるけ」

哀れな鴉天狗が一羽、この炎天下の下連行されていた。腰には紐が付いていて、それを後ろで桃色の髪 of 少女、秦　　ところが片手で握っている。彼女は先ほどある竜宮の使いに逃亡を許してしまった経験から、じつと無表情で鴉天狗を監視している。

この鴉天狗の名は射命丸　文である。友人の働くコンビニエンスストアに出向いたのだが、そこで赤毛の拳法家に拘束されて、現在の醜態をさらしている。文は少々猫背で何もいわない。ただ眼だけは鈍く光っているから逃亡を考えているのだろう。

文の前にはわいわいと話しながら歩く少女が三人。ルーミアとチルノ、それに浴衣姿のフランが居た。それぞれ手にコンビニエンスアイスを持っている。歩きながらルーミアは「月見大福」を小さなほっぺたを膨らませるように頬張る。その甘味からか、無意識に笑

顔になっている。

チルノは両手にアイスクリームを持っている。その右手にはチョコ、左手にはバナナ。彼女はそれを交互に食べている。口の中で合成すればチョコバナナになる合理的な考えだろう。

「うめえー！」

チルノは感動した。うまい。甘い、冷たい。文句のつけようがない。チョコバナナとかどうでもいい。

その横でフランが「スイカ棒」というスイカをモデルにしたアイスを食べている。「これ種まで食べられる」などとフランは言うが、種の形をしたチョコである。彼女はそれを食べながら、こつちこつちとたまに後ろを歩く文とこころを案内する。目的を知っているのは一行で彼女だけだからだ。

アイス自体は結局のところ今ここにいない赤毛の女性がお金を出して買った。文はその件についてははなげなしの資金を出してはいない。

赤毛も赤毛でこれから数日間はお昼ご飯なしではあるが、フラン達が喜んでくれるのならばとそうなのだ。そして彼女は自分の買い物をマンションに置いてくるべく、帰宅した。

そこで哀れな鴉天狗の出番である。赤毛の代わりに彼女達の保護者兼財布という重要な任務に連行されることになった。向かうはフラングが浴衣をレンタルした呉服屋である。無論アイスなどとは比べようもない出費が待ち構えているだろう。

つまり、赤毛はアイス代を持つ代わりに、レンタル料を文が持つという役割分担がされているのだ。ちなみに赤毛はレンタル料の返済自体の約束はしている。

立て替えてくれという話だが、返済自体は来月という話である。文はその間に干からびてはどうしようもないので、こう思った。

(絶対逃げてやりますよ……)

ちらつとこころを見る文。こころも手に大量のアイスを入れたビニール袋を掛けている。一人分ではなく全員分である。買った物をまとめているのだろう。彼女自身はミルク・アイスキャンディーを無表情で頬張っている。それでも文への警戒を怠らないのは、竜宮の使いが全て悪い。

「えつと、こころさん？」

「なに？」

「私の友人に権という者が居るんですが……彼女を身代りにたててもいいですか？」

「駄目」

ふるふると首を横に振るこころ。しかし、文も今のは軽いジャブのつもりである。本

当に言い分が通るとは思っていない。ただし、文にジャブで売られる「楯」も友人といつていいのかは怪しい。ちなみに文は宗教戦争の関係でところを取材しているので名前を知っていた。

きらんと文の眼が光る。

「あやや、それは残念。でも実は私……財布を家に忘れてしまっていて……」

「嘘……なにがあつてもにがさない」

「いや、あの、とりあえず話だけを聞いてください……」

今のところには生半可な嘘は通用しない。文はそれがわかり、ごくりと唾をのむ。しかし、彼女として長く生きてきた天狗である。交渉の術は「詐術」のみではない。彼女は「買収」へと頭を切り替えた。

こほんと文はわざとらしく咳払いする。それから不敵な笑みを浮かべる。彼女はふっと立ち止まってところに近づく。文はこころの耳に口を近づけて、こそつと話す。

「もし、私を逃がしてくれればこころさん……とあるアイドルさんのサイン色紙を上げますよ。いや……なんだつたらアイドルさんの写真でもいいです」

三分で知り合いの二人目を保身の為に売る。こころはそんな腹黒い天狗をじつと無表情で見つめた。大きくてきらきらした瞳に天狗の顔が映る。

「ふっ……」

鼻で笑うところ。表情は変わらないが明らかに「そんな手にはのらない」という態度が分かる。彼女はアイスクャンディーを口に啜えて、嘗める。文はちよつと落胆した顔で思う。

「駄目ですか……今をときめく魂魄さんの写真なのですが……」

「こんぱく？ もしかして……妖夢……？」

「そう、そうですよ。こころさん。欲しいと思いませんか？」

「別に……」

「そうですか……」

かくつと肩を落とした文。少し離れたところではフランが彼女達を呼んでいる。早く来いということだろう。仕方なく、文は歩き出す。しかし、こころが否定した理由は「魂魄 妖夢」に興味がないからではなかった。

「色紙はいらないけど。妖夢ならコンピニで立ち読みする週刊誌でよくみるわ。水着で写真が載っている……」

こころの言う「週刊誌」というものは漫画のことである。彼女の読んでいるそれには妖精の尻尾の話やらボクシングの話やら学園生活のはなしやら、と多岐に渡るジャンルが連載されている。余談だがコンピニで立ち読みしている他の客も、横にいるのは付喪神だとは思わないだろう。こころは黙っていれば雰囲気の特徴な美少女でしかないの

だ。

そして週刊誌の漫画にアイドルが出る余地などない。つまり、このころの「魂 妖夢」とは巻頭のグラビア写真のことであろう。ある意味では現代のアイドルの宿命と言えるかもしれない。

「へえ。そうなんですか」

文は今度会ったらからかおうと心に決めてから、このころに言う。少し思いついた。

「じゃあ、こうしませんかこのころさん。今度本人に会わせてあげま……あ」

このままで言つて文はこの「買収」の重大な欠点に気が付いた。よくよく考えれば「魂魄 妖夢」は幻想郷になじみの深い人物である。つまり、アイドルという付加価値をこの現代で付けられても、幻想郷から来た少女達にはあまり意味をなさない。そもそも面識がある可能性が高いのだ。知り合いに会わせる、という言葉にはあまり魅力はない。

「ああ、魂魄さんは幻想郷の関係者ですからね……このころさんとしても会うは起こらないかもしれないね」

「……う？ ……」

このころはきよとんとした雰囲気で見文を見る。歩いているから文からは見えない。この桃色の髪の少女は文が「何を言っているのか」わからない。現代のアイドルが幻想郷に関係あるわけがないではないか、と彼女は思う。

「……………??」

文は勘違いしていた。ところが「妖夢」と口に出しているのは、テレビで「魂魄 妖夢」と紹介されていたのをそのまま言っているだけなのだ。

だからこころは頭に「？」を浮かべて考えた。

同じ場所から来たからと言って、全員が顔見知りというわけではない。それにこころは妖夢とは喋ったことはない。見たことはあるかもしれないが記憶に残っていない。ちなみに滑稽なことに妖夢は「秦 こころ」という能楽師を知っている。神社の興行を見たことがある。

こころはぼんと手を鳴らした。やっと文が何を言っているのか理解できたのだ。

彼女は先を歩く、文の背中を指さして言う。

「こいきなあめりんかんじょーく」

とりあえずそう結論付けた。暇な日は一日中テレビをみているからか、妙な単語をこころは良く知っている。

☆☆☆

その呉服屋で少女が一人、立ち上がって体を伸ばしている。よく柔軟をしないと体が固まってしまうとなかと思うのだ。事实体は固い、運動もあまり得意ではない。彼女は座っていたパイプ椅子に読んでいた本を置く。

「また、お客さんこないかしら」

ふと言つてみる。暇であることはそう喜ばしいことではない。

「あれ？ きょうつてお客さんきたっけ」

ふと思う。首を傾げて考えてみるがどうにも記憶があいまいになっている。彼女はポケットに入れておいたメモを取り出して見る。

——お客来た！ 二人 赤い人と黄色い子

「そうだ、そうだ」

誰か来たのだった。確かに背の高い赤毛の三つ編みがきたと思う。あとは金髪の可愛らしい少女が来た。それに今朝は屠——

「ハハハよ!!」

店内に響く声に少女はびくつと体を震わせる。眼を一瞬だけ瞑つて、直ぐに振り向いた。

そこにいたのは先頭に浴衣を着たフラン。それに後ろにはルーミアとチルノが居た。暗い店内から入り口に立つ三人を見ると、眩しいくらい可愛らしい。

後ろからは少し背の高い黒髪の女性と桃色の髪の少女がやってきた。何故かはわからないが黒髪の女性はリールのようなものが腰に巻き付いている。

「いらつしやいませ」

店番の少女はほんのり顔を赤らめて、それでもまたお客がきた喜びからか笑顔で接客する。彼女はともゆつくりと笑顔をつくる、眼を細めて口元を緩めることが相手にわかるくらい。

それでも少女は素敵な笑顔をフラン達に向けた。

「あ、さっきの店員」

フランは少女を見てから言う。フランは覚えていたのだろう。

金髪の吸血鬼、その浴衣の裾がちよつとだけ揺れる。彼女は帯に差していたポケモンの団扇をすつと抜くと、軍配のようにそれで店番の少女を指す。

「こいつらの浴衣を借りたいの」

フランの自信に満ちた「どうだ」という表情。知り合いに浴衣を借りる場所を紹介することが得意気であった。フランの頬を汗が伝うのは、外が暑かったからだろう。なんとなく店番の少女はくすくすと笑ってしまう。なんで笑っているのかはわからない。可愛かったからかもしれない。

少女はふと思った。目の前の三人の少女のことは知らないが、これだけ暑い中を歩いてきたのだから、喉が渴いているだろう。だから聞いてみた。

「麦茶飲む？」

「え!？」

急に少女言ったから、フランは素つ頓狂な声を出して驚いた。先に書いたとおり少女としては「暑そうだな」と思ったから反射的に言っただけである。本当の意味で他意はない。麦茶を飲むかどうかを聞いているのだ。しかし、聞かれたフランとルーミアは困惑した。

「飲むー！」

だから答えたのはチルノであった。彼女も「飲むか？」と聞かれたから反射的に「飲む」と答えただけである。臨機応変とは案外単純なものなのかもしれない。

外からは蝉の声が聞こえてくる。

☆☆☆

呉服屋の奥には居間がある。畳敷きの部屋で、扇風機が回っている。

角に置かれていたブラウン管のテレビは映っていない。部屋の間にはそれ以外にくすんだ色の箆笥が置かれている。部屋のまんなかにあるのは小さな円卓。昔ながらのそんな居間。

を、我が物顔でくつろぐ少女達が居た。

まず扇風機の前に陣取っているのは青い髪の少女、チルノである。

「ああああああああああああああああああ」

扇風機は首をゆっくり旋回させながら動いている。涼しい風を送ってくれる羽根、そ

れにチルノは大きく口をあけて声を出している。別に意味はない。なんだか声が震えて帰って来るので面白いだけである。

ごろんと寝転がっているのはフランである。手には4DSを持っている。うつ伏せで立てた肘でゲームを支えている。足がぱたぱたと動いている。携帯ゲームの発達によつてどこでもゲームができる「現代病」に見事なまでにフランはかかっている。

そんな中ルーミアはおとなしく座っている。彼女は片手に「ガリガリ様」を持って、がりがり食べている。ソーダ味のアイスである。

ただ、この居間の窓には障子があつた。白く薄いそれが、外からの光、それを柔らかく部屋に「通して」来てくれる。そんな日本の伝統的なものだ。

その障子の前でルーミアはなにをうずうずしているのかは分からないが、指を伸ばして障子に触ってみようとして、直ぐに指を引つ込める。何かやりたいらしい。しかし、やってはいけないという自制心はある。

だから円卓の近くでおとなしく座っているのは文とここらだけだった。

こころは手に「ウルトラカップ」という名前のバナラのカップアイスを持ってプラスチックのスプーンで食べている。そろそろ溶け始めるものもあり、彼女はもくもくと処理しているのだ。後々お腹が痛くなってくるが、それは別の話。

一応文もアイスの処理に参加していた。彼女は「ピノオ」というチョコアイスを食べている。それは小さな箱のパッケージの中につまめる程度のチョコアイスが入っている。もちろん手で直接触るのではない。プラスチックのピック（爪楊枝）が付いている。

「ほらほら、フランさんアイスですよー」

文はそのピックにアイスを一つ付けて、フランの口元でぶらぶらさせる。

「んあ」

フランもゲームに夢中なのだが、口を開ける。八重歯が愛らしい。ただし眼は画面から動かさない。しかし、器用にピックに食らいついて。もぐもぐとアイスを食べる。

文は思わずふつと笑って、ピックにアイスをもう一つさす。自分で食べる気だった。しかし、いつの間にかルーミアが何かを期待した目で文の前に座っていた。正座である。

後ろには「小さな穴」が開いた障子があった。何があったかはわからない。

「欲しいですか？」

にやつと文は言う。ルーミアはニコツと笑う。くれという合図であろう。文はやれやれという風にアイスの刺さったピックを差し出す。ルーミアはあーと口を開けて、待つふりをする。

「あげませんよ!」

すつと文が自分の口にピックを持っていかうとする、予測していたルーミアが文の片手を「両手」でがしつと押さえる。笑顔は変わらない。文も笑顔になる。アイスを巡って不毛な戦いが始まった。

文はなんとか自分にアイスを引き寄せるがルーミアはさせまいと全力で彼女の手を抑える。ぐぐぐと押しつ引きつの攻防戦。ある意味ルーミアをただの子供と侮った天狗が悪いだろう。

文は片手に持っていた、アイスのパッケージを円卓に置く。中にはまだ入っているが、それよりもピックに刺さった一個を奪われたくない。

「んん」

不意にフランが起き上がって、円卓のパッケージを取り、チョコアイスを指でつまんで食べはじめる。ゲームをしながらもぐもぐと食べる。天狗は気付かない。こころは無表情で全体を見ている。

「ああああああああ」

チルノはまだやっている。

そんな中で文はルーミアにアイスを食べられまいと抵抗している。しようもない戦いだ、意地の張り合いにもなっている。仕方なくルーミアは文の腕に噛みついた。

「あいた!?」

「いただきますーす!」

文がひるんだ一瞬、ルーミアはピックに刺さったアイスに食いついた。それから両手を左右のほつぺたにあてて幸せそうにもごもごアイスを食べる。

「く、食われるかと思いました」

文は微妙に菌型の付いた腕をさすりながらいう。妙な敗北感があるような気もするし、別にどうでもいい気もする。それから彼女はやつとフランにアイスを完全に奪われたことに気が付いたが、ふうとため息一つでゆるした。

「ほら、フランさん。口元にちよっこが付いていますよ」

「んー?」

文はハンカチを出してフランの口元を拭こうとする。この可愛らしい吸血鬼の口元はうつつすら解けたチョコが付いている。ただしゲームに集中しているフランにはどうでもいい。

だから急に口元に来たハンカチが邪魔だったので、反射的にフランは噛みついた。文の指ごとである。

「ぎゃあ! 噛まれましたっ!」

別に痛くないが、文はルーミアに続いて噛まれた。痛みよりも吸血鬼に噛まれたこと

もほうが驚きだった。文は指を見るとハンカチがカバーになって、フランの牙は届いていないようだった。

「うう。ひどいですね、みなさん……」

指をさすりながらちらつと文はこころを見る。こころは「ブラックモブラン」という棒アイスを食べている。先ほどと違うアイスをもう食べているといいことだった。

「……ごんまじ」

こころは無表情で文を励ます。それからアイスをがりがり食べる。溶ける前に食べないともつたない。文は「はは」と乾いた笑いをして、それからとあることに気が付いた。

——からんからん

その音の正体を文はすぐにわかった。あの少女が戻ってきたのだ。

居間と台所を結ぶ、短い廊下を藤色の髪を揺らしながら少女が歩いているのだろう。少女の手にはお盆、お盆の上にはコップが六つ、コップの中には麦茶と氷。

少女が歩くたびにカランカランと氷が音を鳴らしている。それが音の正体。

このお店は同じ商店街にある「永江リサイクルショップ」や妬ましい系の店と同じように住居スペースが一緒になったお店だから、奥には台所がある。

少女は居間の入り口からひよこつと顔を出して、にこつと笑う。それから言った。

「おまたせ」

☆☆☆

「それで、なんできてくれたんだっけ」

麦茶を配り終えた藤色の髪の少女は聞いた。さっきフランが説明したはずだが、すっかり忘れてしまった。だが、居間の少女達は我が家のようにくつろいでいるから、細かいことに言及などしない。

文は手に持った麦茶をちよつと飲む。そしてちらりとフランを見たが、ゲームに夢中である。彼女は麦茶を持っていないが、後ろのチルノは両手に麦茶を持っている。どこから手に入れたのだろう。

しかし、そんなことよりも文は説明する天狗は自分しかないと思い、目の前に座っている少女に話す。

「ええー。そのですね。この三人……」

麦茶を飲んでいるところ、飲み終わったチルノ、一人でアイスを食べているルーミアを指さした。

「に浴衣を借りたのですけど……あ」

と文は自分が資金を出すことを思いだした。だが、明らかに期待しているルーミアや

期待しているような気がするところを見れば言い出しにくい。「私も甘いですね」と自嘲しつつ、少女に語る。食料ははたてに借りることになるだろう。

「浴衣のレンタルって可能なんですか？ 無理なら大丈夫ですよ。大丈夫ですよ」

「なんで二回言うの？……あれ、あなたは？」

「え？」

「どうせなら、みんなで浴衣を着たら楽しいわ。あなたも着てみない？」

少女は眼をきらつと光らせて、文に近づく。この天狗は眼を少し泳がせて、首を振る。金銭面的なこともある。

「い、いやー私は大丈夫ですよ。お金ないですし……というかいくらなんですか？」

「えっ？ うーん、あれ」

少女は頭をこんこんと叩く、それから首を傾げて文に聞く。きよとんとした顔が少し可愛らしい。

「いくらだっけ？ わかる？」

少女はチルノに何故か聞く。

「あたいくらい……？」

よくわからないから、適当に答えるチルノ。高いのか安いのか判別がつかない。少女は「そっかー」と何故か納得してしまう。文は謎の会話に疑問符を浮かべつつ、言う。

「まあ、私はいいですよ。お金なんてほとんどな

「ふっふっふ」

言いかけたところで急に秦　　こころが立ち上がった。無表情で口で「ふっふ」と笑っている。

驚いた文は「こころさん？」と問いかけるが、こころは反応しない。そのかわりにスカートのポケットに手を入れて、小さな財布を取り出した。

こころはその財布を両手で持って、他の少女達を見下しながら言う。表情は変わらない。

——ばりばり

どこかの巫女の財布と同じ音を立てながら、こころの財布が開く。彼女はその財布の中から一枚の紙幣を取り出した。

「はっ!?　　そ、それは」

天狗が真っ先に気が付いた。こころの持っている紙幣は「福沢諭吉」である。

おそらく現代の日本でもっとも有名かつ人気のある歴史的偉人であろう。老若男女とわず、だいたい日本人が愛してやまない「彼」の描かれた紙幣を、こころは天高くかざした。

「ひれふせ」

金の王にひれ伏せ。自信満々に無表情で言うところ。

チルノとルーミア、それにフランは意味も分からず「おおー」と感嘆の声を上げる。藤色の髪の少女はぱちぱちと謎の拍手をする。文はきよとんとした顔でこころを見ている。お金を出すのは自分ではなかったではないのか。

こころはそんな文を見る。手を下して、短く伝える。

「しんぱいするな。いける」

何がいけるか分からないが、文には別のことが分かった。こころはわかりにくいがいこういつているのだ。

一緒に浴衣を着よう。ということだろう。

「こころー！ かっけー」

こころのポーズに感じ入ったチルノがこころに飛びつく。お金のことは眼中にない。それでもこころはまだ無表情で「ふっふっふ」と笑っている。

少し誇らしげである。まさかこの「福沢諭吉」がリサイクルショップの店長から預かった。非常用のお金だとは、おくびにも出さない。出すべき時に出ただけである。

お金には使うべき時がある。つまり秦　こころは今、文の為に使うべきと思ったのだらう。

文の方にぼんと手が置かれる。彼女が振り向くと、藤色の髪の少女がにこつと笑っている。

「たぶん、足りるわ」

「ぜったい、うそですよ。それ」

「さ？ ねだん、わすれちゃったから……」

「大丈夫なんですかね。この店」

「ふふつ。どうなんだろう？ おじいさん、おばあさんは許してくれるとおもうわ。あ、いやどうなんだろう」

「だから、私にきかれても……ぶ、あはは」

思わず文は笑ってしまった。つられて藤色の髪の少女も笑う。

しばらくしてから少女は立ち上がった。ふーと息をはいて「浴衣、もってくるわ」といいつつ居間から出ていく。ぼそつと「どこにあるっけ」と聞こえてきたのが文には不安で、呼び止めてしまう。

「あ、ちよつと待ってください」

「なにかしら」

「えっ、いや。あなたのお名前を聞いてなかったと思いました。私は射命丸 文と言い

ます」

「シャメイマルン？ 変な名前。スーパーみたい」

「ひ、ひどい！ しかもまちがってます！」

「え、あれ。シャメモールウ？ しよ、しよ、署名丸！」

「あや！ あやでいいです！ な、なんですか署名丸つて!?!」

だんだんと間違いがひどくなっていくので、文は仕方なく言った。だが藤色の髪の少女は眼を見開いて「あや……あや」と何度か言う。

「いい名前ね」

「それは、どうも」

少しはにかみながら文は言う。

「それで、あなたのお名前は？」

「私の名前……そうね。じゃあ、あや。みやこ……いや、芳香ってよんで」

「わかりました、いいお名前ですね」

うんうんと頷いた文だが、ふと思う。

すでに芳香はいなくなっている。浴衣を取りに行ったのだろう。

「あれ？ なんだか聞いたことがあるような……ん？」

文は思い出せない。

20話B 賢將、目覚める上

白い浜辺に少女が一人、青い海原を眺めていた。

大きな麦わら帽子をかぶっている。その帽子には小さなお花の飾りがある。彼女は潮風でゆれるそれを片手で押さえる。腕は細く、肌が白い。小柄な少女である。

白い砂浜に彼女はリボンのついたビーチサンダルで立っている。細い脚とフリルの付いた花柄のアンダー。それに背中を中心で留めている水着の紐。

足元によせては引いていく白い波。それに磨かれた砂がさらさらと海と踊る。少女は足に冷たさを覚えつつ、心地よい潮風を体中で受ける。

彼女はそれでも何も言わずに海を見ている。麦わら帽子が彼女の顔を見せてはくれない。ちよつとだけ見える、風にそよぐ肩まで伸びた黄緑の髪。彼女はふと、後ろを振り返る。誰かが来るのを待っているのだろう。

彼女はさらつと髪を揺らして振り返った。その口元に淡い笑みを湛えて。ただ、深く麦わら帽子が彼女の目を隠している。だから顔の全体が分からない。それでもそれは彼女からも同じだろう、このままでは前が見えない。

指で帽子の縁を摘まむ少女、そのままつと上にあげる。グリーンの瞳、その片方だけがきらりと見えた。にやつと白い歯を見せて、不敵に微笑む。

古明地 こいしはここで姉を待っている。彼女は初めてだったか久しぶりだったか分からないが海で遊ぶことができる、そのことにわくわくしている。しかし、彼女の待ち人である姉が遅い。まだ着替えているのであろうか。

「あつー！」

こいしは振り返る。彼女の後ろには澄み切った空。彼女の表情は屈託のない笑顔。胸元の淡い緑色のフリルが揺れる。彼女の水着はとある尼とは違い、見た目相応の可愛らしいものであった。

「おねーちゃん。こつちー！」

両手を挙げて振る。こいしの目線の先にはゆつくりと歩いてくる桃色の髪の少女が一人。

その少女はこいしとそっくりな背格好、で水着も色違い。ピンク色のそれを着ている。ただ、片目をつぶっていて天真爛漫なこいしをやれやれといった表情で見ている。実の妹であるからこそ可愛いこともあるが、心配なこともあるのであろう。

「こいし。そんなに叫ばなくても大丈夫よ」

桃色の髪の少女、さとりは言う。水着を着るなど殆ど経験のない彼女も表情には出さ

ないが剥き出しのおへそを隠すようにお腹をだいている。内心どう思っているのか分からない。

「お姉ちゃん。かわいい！」

「そ、そう」

「小さいほうのまじんぶうみたい！」

「そ、そう……？ よくわからないけど、ありがとうこいし」

はにかむさと。こいしが褒めてくれるだけで嬉しいらしい。「まじんぶう」という者がなんなのか知らないからよかつたのだろう。可愛いという基準は人によっても妖怪によっても違う。こいしの場合少し特殊である。

「お姉ちゃん。ほら、ほら。私もー」

こいしはニコツときとりに微笑んでから、その場でくるくると回る。水着のフリルがゆれて、両手を広げて回る姿にさとりは思わず微笑む。ようするにこいしは水着を「どうだ」といつているのだろう。麦わら帽子の花飾りが揺れている。

「わかつたわ。こいし。危ないから止まりなさい」

「あ、ははは」

こいしはそのままくるくる回りながら、海の中へ入っていく。飛沫をあげながら、彼女は海の中で回る。もちろん浅瀬であるのだが、心配性の姉としては「心配」である。

「こいし。止まりなさいー!」

「お、およつ」

こいしはさとりの声にびっくりしてぴたりと止まった。しかし、回っていたからだろ
う体はとまってくれても視界が止まらない。くらくらこいしはして、ふらふらする。足
から力がふつと抜ける。倒れそうだ。

がしつと倒れようとしているこいしの手をさとりが掴んだ。間一髪であるが、別に倒
れてもけがするような場所ではない。それでもさとりはかわいい妹の手をしっかりと
つかむ。

「お、ねえちゃん」

「しつかり立ちなさい。まったく、もう」

苦笑しつつきとりはこいしを引つ張り上げる。こいしはそんな姉にもう一回白い歯
を見せて、ニコツと笑みを見せる。それが感謝の表現なのだろう。さとりはくすりとす
る。笑顔は伝染するのであろう。

ただし、こいしは良い子なだけではなかった。彼女はにやりとすると腰を落とす。両
の掌を組んで水を掬う。そのまま笑顔のまま、さとり水をかけた。

「ちよつ、こいし」

身体をかばいつつ、それでも楽しそうな妹の姿にさとりは嬉しくなってしまう。眼に

水が入るまでは。地底にいるときに眼を塩水で洗ったことはあるまい。

☆☆

「なんで、さとりは浜辺で倒れているんだ……う？」

砂浜で倒れていたさとりを覗き込む、その女性は言った。さとりは両目とサードアイを手と腕で押さえて、仰向けに倒れている。傍にはその妹がいたが、女性は何があつたのかわからない。

「眼に……塩水がはいったのよ」

「ああ、それは痛そうだな」

合点がいったようにうなづく女性は上白沢 慧音である。

慧音はその長い髪を後ろで結んでいる。それに黒のキャップをかぶっている。凛々しい顔立ちの彼女がキャップをかぶると、涼しい目元が強調される。ただ、彼女を知らない者には冷たい印象を受けさせるかもしれない。知ってしまったらなんてことはない。

「しかし……この姿は恥ずかしいよ」

慧音は倒れているさとりの水着姿を見る。それで今の自分の姿を嫌でも認識させられるからだ。恥ずかしいと言ったのはさとりに対してだけではない。自分も含まれている。

つまり、慧音もさとりと同じく「着替えて」いるのである。ちなみにこいしは面白そうなことを見つけてどこかに行っている。

慧音は小さな白のパーカーを着ている。その前のフアスナーは締めていない。白い首筋から、赤いトップスを付けた胸元。それに意外に細い腰つき、と上に合わせた赤いパンツ（この場合水着）。ビキニ型の水着であった。

本来であれば彼女にはパレオという腰に付ける布を支給される予定であったが、河童からそれを渡された彼女は、

『なんだマントも付けるのか』

と肩から羽織ってしまったので、没収されている。パレオという物が幻想郷になかったからの悲劇であろう。そのかわりにキャップとパーカーが支給された、それを見てとある尼もパーカーを所望したが、無駄だった。

「ほら、さとり」

「……ありがとう」

慧音が差し伸べた手をさとりが掴んで立ち上がる。白い肌が付いた砂をばつばとさとりが手で払う。慧音はそれを見て、ふと思った。

「そういえば霊夢は何をしているんだろ。帰ってきたら多分また、面倒だと文句を言いそうな気がするが……」

「そうね」

二人は顔を見合わせてくすりとする。頭の中には霊夢の「苦虫を噛み潰したような顔」が浮かぶ。おそらく何を言うのかも大体想像がつく。それは巫女がない間に決まった「とあること」に起因している。慧音とさとりが働きもせずに水着に着替えている理由もそこにある。

だが、そんなことよりも慧音とさとりにはもつとおかしいことがある。だから笑ってしまふのだ。彼女達は、霊夢がないのに彼女が何を言うのか、どんな反応をするのか想像ができる。それが出来る関係は、どんなものだろう。

その答えを言葉にせず、慧音はさとりに言う。

「それじゃあ練習しよう。勝たないとね。ビーチバレー」

☆☆☆

慧音とさとりが海に入るときより、少し時間が戻る。とある船長と巫女が海で漂流している間のことであつた。

近くにある旅館から河童の集団を先頭にして、ぞろぞろと労働者達がにとりのいる海の家に戻ってきたのだ。にとりはのうのうと戻ってきた彼女達に言い知れぬ怒りを覚えたが、なんとか頭の中できゆうり畑を浮かべて耐え抜いた。むしろ幸せな気分になれ

た。

海水浴客もちらほらと現れ始めている時間である。無駄なことに時間を割くわけにはいかない。にとりは彼女達を「やあやあ、やっと戻ってきたね」と満面の笑みで迎えつつ、いずれは給料とかから天引きして帳尻を合わせようと考えていた。

河童達も自分たちのボスが何も言っていないことにアイコンタクトで頷き合う。だいたいにとりの考えていることなどわかる。しかし、河童達もさるもので笑顔で今日の労働も頑張ろうとにとりに言った。冷戦とっていい。今この場では「何も起こっていない」という暗黙の了解がある。

傍から見れば仲の良い河童達である。それを見ていた毘沙門天は「仲の良いことですね」と節穴つぶりを披露しつつ、横のネズミに呆れられたりもしたものである。しかし、ネズミは何も言わなかった。口の中で飴玉をころころさせている。

にとりも気をとりなして河童達に指示をする。とはいっても海の家はここ数日経営してきたから何も言わなくてもいいほど持ち場は決まっている。だから言葉は簡略だった。

「まあ、いいや。それじゃあ、みんな持ち場についてくれ。あ、どれ……河童以外は話があるから集まって」

ばんばんと手を叩きながらにとりは言った。毒は飲み込んでいる。

☆☆☆

海の家の座敷にぎゆうぎゆう詰めになりつつ、にとりを中心に円陣を組んだのは、一輪、寅丸、ネズミ、お空、慧音、さとり、こいしそれに天子だった。聖 白蓮はどこに行つたのかまだ顔を見せていない。

にとりは特に聖のことを気にする様子もなく、とある重大なことを口走つた。それを黙つて聞いていた一同だったが、ぽつりと一輪がこぼす。ちなみにこの時点で彼女は己の不幸には気が付いていない。

「気が、狂つたのか？」

にとりはぎよつとしつつ返す。

「ひ、ひどいなあ。私は昨日の労働をねぎらう為に、みんなにはお昼まで自由時間をあげようと思つたのに好きに遊んでいいよ」

「熱があるのですか？」と心配する寅丸。

「うん。わかつたよ。あんたらが私の事をどう思っているのか」

にとりは腕を組んでうんうんとうなずく。微妙に苦い顔をしている。彼女とて鬼ではないのである。それをここまであからさまに疑われると河童心にも響いてくる。にとりは悲しさを二秒くらいで振り払う。河童心は強い。

「ま、どう思われてもいいよ。あんた等には午後から大切な仕事があるからね。そう昨

日から言っている、例の件をやってもらうんだ」

にとりはダンッと床を鳴らして立ち上がる。

「全員水着でビーチバレー大会をねっ！」

きらんと眼を光らせて、ぐつと片手でガッツポーズ。そんなにとりを呆然と見ている、目の前の少女達は苦笑するか黙って赤面するしかない。ただ一人こいしのみがパチパチと小さな手のひらを打ち鳴らしている。意味は分かかっていないだろう。

「そうだね。うん。だいたいこんな反応だとは思っていたよ」

拍手してくれるこいしに手を挙げて答えつつ、にとりは普通に座る。えらく熱の差がある。それも仕方がないだろう、他の少女達からすれば利益はないのだ。しかし、ここはにとりも重々承知しているから説明を続ける。

「この数時間の自由時間で好きな相手とペアを作って欲しいんだ。二人一組だね。組み合わせには特に制限は付けないけど、この浜辺からいなくなるのは禁止だよ。隠れるのもダメだ——」

「ねえ、霊夢はどこにいったの？」

にとりの言葉を遮るように喋るのは天子である。にとりはやれやれと首を振る。

「ふうーまとまりがないなあ。これもだいたいわかってたけどね。今霊夢さんはミツミツと……あれ違ったっけ？ ああの黒い髪のアレとボールを探すたびに出掛けているよ」

「ドラゴンボールっ!? お姉ちゃんこうしちやいられないわ!」
「こいしっ。絶対違うわ!」

河童の言葉が琴線に触れらたらしいこいしが立ち上がり、そのまま駆け去ろうとするのをさとりが引き止める。さとりはこいしの腰に組み付く。こいしは頑張つてさとりを引きずつたままどこかに行こうとする。さとりも必死である。横の慧音は苦笑するしかない。

にとりはとりあえずその姉妹を無視して続ける。全員に反応していたら終わらない。「霊夢さんはその内戻ってくるよ。それよりもわたしばかりやる気があつてもダメだからね。この大会には豪華賞品を用意させてもらつたよっ」

おおつと声上がる。しかしまだ声は小さい。それもそうだろう欲があまりないのが集まっているのだ。毘沙門天に尼と教師、それに地底の主であるから多少の商品では播るぐことはない。そこはにとりとてわかっている。

しかし、にとりには自信があつた。彼女はにやりと笑い、指を鳴らす。するとわざとらしく足音を立てて、河童達が数人集まつてきた。そもそも下が砂浜であることもあり。河童達の中には海の家之机を蹴つて、健気に音を出している子もいる。

その河童達を労働者たる少女達が見る。なんだと怪訝な顔をしているのが殆どであり、こいしに至つては姉の膝を枕に寝そべっている。いつの間にかそうなつていた。そ

の頭をさとりが優しくなでている。

河童達は両手でとあるものを抱えていた。両手で抱えないと落としてしまうくらい重い。それは「生きていく上」で重要な物である。それを見て何かわからない物はいないだろう。だからこそにとりは「それ」を選んだ。

ぱんぱんと手を叩きながらにとりは座敷を降りて、「豪華賞品」を見て呆然としている少女達の前に仁王立ちをする。顔には自信が現れていて、河童の集団を後ろに控えさせている姿は流石にリーダー的ではある。

「優勝したチームにはこれをあげるよ。そう、見てくれればわかる通り——」

河童達が抱えている透明な袋に入ったそれは、

「お米、20kgだよー」

にとりは胸をはって言う。

労働者の一同は押し黙っている。えらく実用的な「豪華賞品」である。毘沙門天は苦笑し、尼は困惑する。それに教師はどういっていいのかわからない。天人は呆れている。しかし、それもにとりの予想通りではあった。

「まあ、最初はこのくらいの反応だよね」

何故かにとりも彼女達に理解を示す。ただ、彼女は多少の「説得」を込みでこの商品を選んだのだ。高いテレビやらを景品にすれば話題はあつても経費が掛かる。それで「きゆうりセツト」を考えたがそれをやるくらいなら自分で食べる結論に達した。

それにもう落ちた者もいる。

お米と聞いても古明地　こいしは全く興味がなかった。彼女は姉の膝の上でごろごろしている、ただいつの間にかさとりの撫でてくれていた手が止まっている。

「おねえちゃん……？」

こいしがそういつてさとりを見上げる。

そこには無言で押し黙りつつ、眼をぎらぎらさせているさとりがいた。彼女の聡明な頭脳は「お米」の重要性を強く認識している。あれが手に入れば家計が潤うことは疑いもない。そこはアパートの財布を握る者として、直ぐに直感できた。

「……シヨクヒ、ウク」

さとりがなにか呪文のような言葉を口走る。こいしには意味が分からなかったが、どうにも怖い。それでも姉なので膝の上でごろごろすることを止めない。姉の膝の上ほど安心できる場所はないだろう。

しかし、そう。ここからの主役はさとりではない。彼女は確かに「商品」を欲しがっているのかもしれない。だが、欲が深いのではない。情が深いからそうなるのである。

だが、勝負ごとに大切なものは、貪欲さであった。

人知れず、がりつと飴玉が割れた。それは小さな少女の口の中のことである。毘沙門天こと寅丸 星の後ろに隠れるように座っている灰色の髪をした少女、ナズーリンが眼を開いている。もちろん誰も気が付いていない。

彼女ががりがりりと飴玉を砕いてごくと飲む。そしてペロツと舌で唇を嘗めた。可愛らしい仕草だが、眼は座っている。それはそうだろう、彼女は只の少女ではない。そこらの妖怪でもない。彼の闘神、毘沙門天の使いなのである。

そんな彼女の気持ちの変化などつゆ知らず、にとりは説明を続けようとした。

「まあ、あんたらにこの商品を選んだ理由を説明しようか。まず——」

「君。ちよつといいかな」

ナズーリンが手をあげる。にとりは無視しようとしたが、まあいいかと片手をどうぞと動かす。それでネズミ、いや小さな賢將が立ち上がった。寅丸はきよとんと見ている。

「いくらなんでも、それはどうだろう？ 一日動き回って米だけというのは割に合わないと思うのだけど」

にとりはむつとする。

「そういうと思ったよ。だから今から」

「待つてくれ。まだ私の話を聞いてほしい河童君。私は米には不賛成ではないよ。つまり少ないと言っているのさ」

「追加しろつてことかい？」

「ああ、そうだよ。でも、なに。難しいことじゃない。君たちは欲に駆られているようだけれど、その『欲』を少しだけでもらおうつてだけさ。誰も損しないよ」

ナズーリンの言動は婉曲的である。なんとなく馬鹿にされているような気がするにとりだが、黙っていた。最後まで聞いてから水着に着替える命令を出そうと思つている。しかし、この賢将は利害が分かる。

「こうしようと言つているんだ。優勝したチームのメンバーの労働は免除、それでどうだい？ 君たちには軽いものだろう？ しかも私たちには——」

ちらりとナズーリンが雲居 一輪を見る。その青い髪の少女は何故か両手でガッツポーズを作っている。要するにやる気になっているのだろう。

「重いものだよ」

にやりとナズーリンが笑う。労働を免除というのは詰まるところ、水着を着なくてもよいということであろう。この一言で賢将は一輪をやる気にさせた。にとりもナズーリンの意見に「いいね」と言う。

河童の財布は痛まない。労働者は二人しか減らない。残りの労働者を酷使すれば穴

埋めはできる。とカシャカシャとにとりの脳が答えを導き出したのだ。それに参加者もやる気をだすだろう。すてに一人の尼が手のひらで踊っている。

「賛成だ！ やろう」

一輪がそういうのをナズーリンがちらりと見る。

(よし。あいつはちよろいね。それにあのピンク頭はやる気の様だし、その連れの大きいのも大丈夫だろう。こいしは、まあ。うん。それよりもあの青髪)

賢將の脳も回転する。彼女の視線は既に、天人に移っている。だが、直ぐにとりを見た。ターゲットをロックオンしただけである。

「しかし、河童君。二人一組というのは考えたね。我々は寺から来たから固まっているが、それ以外はバラバラだったからね。数の上では公平性が保たれているよ。単に」

ナズーリンの口がにやりと開く。

「仲のいい二人が居ればいいわけだからね」

天子がぴくりと動く。ただし何も言わない。顎に手を持って行って何かを思案している。

ナズーリンの術中である。天子の言動から、とある人物に彼女が執着していることを見破った賢將は「にとりに言うふり」をして「天人に聞こえる声で」言ったのだ。

ナズーリンはペロリと唇を嘗める。癖だろう。

(あと一息だね)

ナズーリンがそう思う。聖　白蓮は昨日のうちに河童と話を付けていた様子なので、反対はしないだろう。村紗と霊夢は帰ってきて状況の流れを変えられるとは思わない。隅っこの方で体操座りをしているお空とかいう地獄鴉はナズーリンの眼に入らない。

つまり、残りは一人。ご主人様こと寅丸　星だけが賛否のほどがわからない。彼女はさつきから黙って腕を組んでいる。ナズーリンが急にやる気になったことが解せない様子だった。彼女を落とさなければ、ナズーリンの計画は成就しない。

「ということでしょうか、ご主人様」

「え？　はい」

急にナズーリンが寅丸に話しかける。本当に唐突だったので寅丸の声が少し上ずる。しかし、ナズーリンは構わない。奇襲とは相手を驚かせてから平静になる隙を狙うのだ。今、毘沙門天はなぜ自分が話しかけられたのかわからない。

ナズーリンはさらに追い打ちをかける様に、寅丸の前に膝をついた。従者が主人に恭しく言上するには、こうするのが良い。

「ご主人様。このように河童の企画した遊びとはいえ『戦い』。それに勝てば『兵糧』の手にはいる戦いということです。三十六計逃げるに如かずとは申しますが……ここで『逃げれば』我らの名折れではないでしょうか」

「……………そうですか」

ふつと寅丸は笑う。どう考えても煽っている。そのくらいは分かるのであるが、それを彼女は「ナズーリンがビーチバレーをやったがっている」と解釈した。人がいいというより、虎がいい。ここまであからさまに賢将が言うということは裏の裏があり、寅丸には読み切れない。

「いいでしょう。鬨いと聞けば逃げるわけにはいきません。河童さん」

「ほえ？ ああ、私か」

寅丸の話しかけたのは「何を意味の分からないことをやっているんだ」と顔に書かれたにとりである。ナズーリンはにやりと笑っている。気が付かず、寅丸は宣言する。

「そういうことです。皆さんにも異論はないようですので、午後、勝負といきましょう」
 反対するものは誰もいない。

☆☆☆

「それにしても意外でした」

全員が水着に着替えに行く間、寅丸とナズーリンが座敷に座っていた。近くの河童からは「はよ脱げ」という視線が毘沙門天にかかっているが、ちよつと顔を紅くした寅丸は気付かないようにする。

「ナズーリンにもこのようなところがあるのですね」

「……」

寅丸は本当なら「子供の様なところ」がナズーリンにもあると言いたいのだろう。それを言えばヘソを曲げるかもしれないから言えないのである。宣言した手前、寅丸はナズーリンに逃げられてはたまらない。部下の責任は上司の責任であるからだ。

「それでは、これからしばらく時間もあるようですし。ナズーリン。ビーチバレーの練習を少し……」

「何を言っているのですか？」

「え？ 二人一組と河童さんたちが……」

「ご主人様。何で、私と組もうとしているのですか？」

「え？ それはどういうことでしょうか、ナズーリン」

「二人一組と言われたからには、誰と組んでもいいはずですよ。特にビーチバレーという物はやったことはありませんが、体格が大きいものが有利です。特に身長が重要なのは自明なこと」

ナズーリンの大きな瞳がぎらぎらとひかり、寅丸をとらえる。

「先ほど私がいったことには何一つ偽りはありません。ここで負ければ我らの名折れます。ご主人様」

「……まさか、本気ですか？」

「戦（いくさ）とは常に最善を尽くすものです」

ナズーリンは自分の体を見る。細い。腕も、足も。体つきも。少なくとも運動能力のアドバンテージはないだろう。だから寅丸のように体格に恵まれた者といれば、足を引つ張りかねないのである。しかし、寅丸も言う。

「そうですね……しかし、ナズーリン。戦とは『武』のみではなく『智』も必要です。あなたは後者を……」

「それはチーム外でもできます。『籌を帷幄の中に運らし勝ちを千里の外に決す』とは人間の言葉ですが、言いえて妙です。私は必要な時にそばにいればいいだけです。ご主人様が表で勝ち上がり、私が裏から支える。それが」

ぎらっとナズーリンが寅丸を見る。

「戦の神の名に恥じぬ戦い方ではないですか！」

熱い。珍しくナズーリンが言を重ねている。そこに寅丸の心も熱くなった。答えてやらなければいけないと思う。彼女は静かに目を閉じて、言う。

「確かに……ナズーリン。私が間違っていたようです。遊びとはいえ、勝負とあれば負けるわけにはいきません。誰か別の者と組みましょう、それでいいですね？」

「はい。流石です。ご主人様」

「ふふ。それでは、さっそく着替えてきます」

寅丸は立ち上がる。それからゆっくりとナズーリンの横を通って、海の家から出ていく。ナズーリンはその姿を目で追いつつ、完全に見えなくなつてから。座敷の上で胡坐をかいた。

「全く、無駄に体格がいいだけのご主人様と組んで、無駄に勝ち上がったらどうしてくれるっていうんだ。冗談じゃないよ」

けつと賢将は言つて、ポケットから飴を取り出して頬張る。ころころ嘗めつつ、寅丸の前とは打つて変わった態度で思案する。ちなみに『籌を帷幄の中に運らし勝ちを千里の外に決す』の『籌（はかりごと）』とは計略を示す。『帷幄』とは室内とでもいえばいい。

つまり、ナズーリンはこうだったのである

『私は前には出ませんけど、安全なところから口は出すので千里の外でもなんでも勝ちを拾つてきてください。水着で』

そもそも、あの河童の会合も最終的には寅丸が締めていた。つまり責任者がアジター（扇動者）であるナズーリンからすると毘沙門天という事になつている。それに彼女は一輪、天子を焚き付けるような発言をしたが「本人には何も言っていない」のだ。ナズーリンの言葉を聞いて、勝手にやる気になつたという構図が出来上がっている。

それを全て、この小さな少女が行ったのである。計略というより、謀略と言っていい。しかし、飴玉をころころと口の中で味わうナズーリンには大いなる野望がある。それは「米」などという矮小な物ではない。労働を免除してもらおうとも思わない。サボればいいのだ。

そう、ナズーリンの頭の中に浮かぶのは

——イチゴのショートケーキ。モンブラン。プリン。チョコレートケーキ。シュークリーム。バニラアイス。ダッツアイス。ゼリー。それに大判焼き、紅葉まんじゅうやら大福、ぜんざい。甘い物もろもろである。

お米とは主食である。つまり「食費」の中心にあるとわかっていい。もしも「お米」が無料で手に入れば、その余った「食費」の一部は「三時のおやつ」に変わるに違いない。お金は使うようである。ナズーリンはそこまで計算して、謀略を練ったのだ。

謀略というには随分と可愛らしい発想だが、彼女はあくまで冷酷である。一輪やら、寅丸が水着で恥ずかしい思いをしようがなんだろうがどうでもいい。自分はさっさとアパート組か天人と組んで足を引っ張って負け、あとは「寺の誰か」を勝たせればいい。自分が勝つ必要性など微塵もないのである。

彼女の御主人はビーチバレーを「ナズーリンがビーチバレーをやりたがっている」と解釈したが、実際は「ナズーリンは誰かにやらせたがっている」というのが正解である。これが賢将の壮大な計画の一端である。彼女はこの自由時間の間に、チーム編成を操らなければならない。それはとても辛い仕事だが、甘い物を考えれば智謀の捻りがいもある。

「ふ、ふふ。ふふふふ」

妄想の甘味で幸せそうな顔をしている少女。ちよつと鼻につくか、可愛いと思うかは人それぞれであろう。だが、彼女は自分にも危難が迫っていることは忘れていた。

ナズーリンの座敷を取り囲むように河童達が退路を塞いでいく。そのうちの一人は手にワンピース型の水着を握っている、着るのは河童ではない。そしてここにいるのは、河童とネズミだけである。

ナズーリンは次の手を考えている。不幸、5秒前。

21話A

フランドールは退屈していた。今で両足を投げ出して、呆然と天井を見ている。周りには誰もいない。それは別の部屋に行っているからだだった。

手には電源の切れた4DS。充電用のケーブルをしっかりと持ってこなかったことが仇になった。最近のゲームは充電時間かなり長くなっているとはいっても、そもそも子供のゲームする時間も長くなっている。

「おそいわ」

呟くフラン。浴衣で寝転がっていたからだだろう、藍色の着物は胸元が緩くなっている。彼女は襟を引つ張って整えた。部屋の扇風機が彼女の髪を揺らしている。一人がここまで暇だとはあまり思わなかった。

幻想郷では考えたことはあまりない。フランはテーブルに置いてあったコップを手にとる。透明な麦茶と溶けかけた水。それをフランは飲む。がりがり氷を牙でかみ砕く。冷たくて美味しかった。

彼女の紅い瞳が動く。その先にあるのは閉じられた障子。部屋の入口。誰か戻ってこないか今か今かと待っている。障子には誰が開けたのか小さな穴がある。フランは

それは特に気にせず、誰かが帰ってきて来るのを待っている。

足音が聞こえる。フランはちよつと目を見開いて、少しだけ微笑む。自分では気が付いていない。

障子に大きな影。シルエットからそれは秦　こころとわかる。どうやら一人らしい。髪が長ければ彼女しかない。

障子が僅かに開く。そこから覗き込む桃色の瞳。顔を半分だけ見せた無表情な彼女。フランは指をさしながら言う。

「こころー！　おそ」

「い」と言う前に、すつと障子がしまる。閉めたのはこころしかないだろう。自分で開けて自分で閉めたのだ。

「ちよ、ちよつと。なんで閉めるのよ！」

フランが立ち上がって抗議する。それは笑いながら。要するにツツコミである。一人ではできないことだった。それに反応してこころが声を出す。もちろん障子の向こうからだった。

「ふっふふ。覚悟はいいかしら」

「もう、早く！　これ破るわよ！」

「それはこまる」

基本的に紙でできた入り口をフランは破壊宣言。そのあたりの根本は変わっていない。もし破られたらこころが弁償することになりかねない。「こまる」とはなんの銜いもない言葉だった。ちよつとだけこころの声が焦っている。

ぱーんと障子が開く。勢いよく開けられたその先に、両手を広げたこころがいた。

桃色の髪が揺れている。無表情は変わらないが、ふふーんと鼻をならす。彼女はさっきまでの少女とは明らかに違っていた。

白い生地に桜が咲いている。こころの体を包んでいるのはそんな浴衣だった。

彼女の体にびったりあつたサイズ。白い下地に淡い桃色のラインが入り、胸元や袖に描かれた愛らしい桜の花。赤い腰ひもはちよつとだけの自己主張だろう。彼女はその場でくるりとまわり、フランに聞く。

「わたしきれい？」

この前心靈番組で見た言葉。使いどころが完全に間違っているのだが、間違っていない奇妙な状況。余談だが彼女は未来にこの言葉は幻想郷のあちこちで口走ることになる。しかし、それは未来の話。

今、目の前にいるのは金髪の少女だけ。フランは「おおー」とぱちぱちと手を鳴らす。こころはそれを片手で制す。どことなく誇らしげである。フランの反応に満足したのであろう。

そう、この場にはいない少女達は芳香に連れられて別の部屋にいる。目的はただ一つ。浴衣のレンタルであった。そしてまず帰ってきたのがここらだった。彼女は今に入ると、ちよつとあたりに鏡がないか探す。そのあたりは女の子であった。

そんなところが歩くと、ぽとりと小さな袋のような物が落ちた。こころは気が付いていないがフラン拾い上げてみる。手のひらに乗る程度の本当に小さな白い袋である。表面には「ダンスにドンドン」と書いてあるが、フランは首をかしげてゴミ箱に捨てた。「その程度で驚いているようなら、まだまだね」

声がする、フランは振り向く。誰かなど確認するまでもない、彼女にこんな口を利くのは一人しかいないのだ。チルノであろう。

壁に背を預けて、両手を組んだ青い髪の少女がいた。何故かわからないが勝ち誇っている表情。本当に理由などないのだろう。彼女はいつもなんとなく楽しいのである。

その頭にはリボンが無い。透き通るような蒼い髪が、肩までかかっている。リボンの代わりに花飾りのついたカチューシャをはめていた。少しだけ眼をひらくと、睫毛長い。こうしてみると知的な姿でもある。

チルノが着ているのは深い青の浴衣。ただその「柄」は彼女らしいものだった。

浴衣にきらめく花火の絵。青、赤、白で描かれたにぎやかな絵柄。どこでも明るくなれそうだが、彼女には似合っている。

「あたいの勝ちね」

チルノは勝利した。何にかは彼女にもわからない。見た目が知的だからといっても、本当はどうなのかなど関係ない。しかし、フランは言った。

「私は知っているわ。こういうのをマゴーに衣装っていうんでしょう？ チルノ」
「そんなに褒めても何もでないわ」

二人の少女は言葉の意味が分かっていない。フランも自分がほめてあげたいのか、貶したいのか半々といったところである。チルノはどちらにしるよくわかっていない。しかし、ぬつと後ろから顔をだしたところは親指をたてて言った。

「じょうでき」

チルノも親指を立てて返す。白い歯をにっこり見せる。天真爛漫という言葉は彼女の為にあるのかもしれない。天衣無縫といってもいい、何も考えていないともいえる。

「それじゃあ、あとは文だけね？ ところ、チルノ」

「そうね！ もうここらもいるから」

「……本気か？ ほんきでいっているのか？」

こころが愕然とした無表情で言う。チルノとフランは顔を見合わせて、同時に首をかしげる。このあたり似てきたのかもしれない。だが「彼女」はすでに二人の後ろにいた。フランとチルノの肩をがしつと掴む、可愛らしい手。妙に力が入っている。吸血鬼と

妖精は同じように振り返る。するとそこにはにつこりと微笑んでいるルーミアがいた。目元は笑っていない。

ルーミアの浴衣は落ち着いた赤。そこに咲いているのは白く紫陽花だろう。ちよつとだけ大人びたような柄をしているが、ルーミアの影のある笑みには似合っている。彼女は無言で「どう?」とチルノ達に黒く微笑みかける。

チルノがきよとんとした顔で応える。

「あいつ(文) は? もう来るのかしら?」

ルーミアは答えない。彼女の後ろに闇が見えるような、そんな錯覚をこころが感じた。あわててこころもフオローする。

「かわいい!」

にこおとルーミアは無言で笑う。こころは「あぶないあぶない」と胸をなでおろした。チルノには悪気など一切ない。フランは眼をぱちくりさせている。ゲームのし過ぎで目が疲れたのだろう。しかし、ともかくにもこれで4人の少女がそろった。あとは保護者だけである。いや、今回に限っていえばこころの財布に頼っているのでそうとも言えないかもしれない。

ぎしぎしと誰かが床を鳴らす。こころが耳ざとく聞いて、しいと口元で指をたてる。そして他の三人の少女に「サラララップ」と英語で「黙る」ように伝える。多少間違え

ても妖怪なのだから問題ないだろう。

ぎいぎいと床を鳴らしながら誰かが近づいてくる。その少女は黒い髪を揺らしながら、口元が少しだけ緩んでいる。少しだけ恥ずかしい気もする。元々自分は着る気が無かったのだ。

黒い浴衣の生地。廊下のほの暗さと溶け込んでいるようなそれ。ただ、彼女はこの浴衣の「柄」を気に入っていた。

射命丸 文はそうやって近づいていく。居間の入り口の前にくると、一度頭を掻く。それから袖を見たり、首元を整えたりした。そしてコホンと咳払い。につきり営業スマイル。準備万端で一步踏み出す。

星空を描いた文の浴衣。慎ましやかに光る星々と彼女の左肩のあたりに描かれた白い翼の柄。それが黒い浴衣の中で静かに映える。腰紐から下に描かれているのは翼から落ちた羽根。雪の様に白い。

「お待たせしましたみなさん」

はにかみながら文が片手をあげる。ちゃんと袖から中が見えない様に、空いた手で袖を抑えている。彼女はこころとチルノとフランそれにルーミアを見回して。手を下ろしてから襟元をもう一度整える。

「……どうでしょう？ ま、ちよつとこの柄は私には合わないかな、とも思いましたが」

「いいじゃない！ 文！ お姉さまにも負けないわ」

いち早く反応したのはフランだった。かつて一緒に小冒険をしたから、一番気安いのであろう。フランはうんうんと頷いて、自分のことのように嬉しそうにしている。続いて、チルノが「くっそー。鳩もいいわね」となにかよくわからないことを言い出す。一応褒めているのかもしれない。

ルーミアはぱちぱち拍手する。ちよつと悔しげでもある。

そしてこころは難しい顔をして両手を組んでいた。

「うーん」

「ど、どうしましたこころさん？ なにかおかしいところがありますか？」

文も聞いてみる。しかし、こころの鋭い眼光が帰って来るだけで、何も言葉はない。しばらくしてこころは文を指でびしつとさして、こういった。

「95点ね」

すかさず文はガッツポーズ。ノリがいいのだろう。

「やりました！ 高得点です」

文は屈託がない。このあたり恥じらうということがないのは、鴉天狗の余裕というものであろう。わざとらしいガッツポーズだが、笑顔は本物だろう。こころもそれで満足したのか「ふっ」とキザッぽく笑う。

「こころ！ あたいは!？」

だが、これで黙っていないのが他の少女達である。チルノがこころの袖を引っ張る。文はくすりとして、

「ふふ。そうそうにはこれ以上の高得点はできませんよ?」

と煽る。それでも彼女はチルノが自分より得点が高くても文句を言う気はさらさらしない。どうせ遊びである。楽しいことがよいだろう。ただ、チルノは挑発を真に受ける。

「なんだとお！ 勝負よ。ほらこころ」

「うーむ。きびしい審査をおこなうわ」

チルノは胸を張る。両手を腰につけた自信満々な格好。まるで媚びるきがない。可愛らしいといえはその通りだが、可愛こぶる気が全くない。その真剣な様子にこころも無表情で答える。

上から下までこころはチルノを見て、眼を閉じる。それから小さく息をはく。厳正な審査を頭の中で行っているのである。公平中立で清廉なこころ審査は十秒程度で終わる。彼女は眼を開いて、静かに告げる。

「849点……まだまだね」

「くっそー!」

チルノが悔しがる。思ったよりも点数が低かったらしい。

「あ、あの（こ）ころさん？」

95点が何か言っている。

しかし（こ）ころは忙しい。次はルーミアに袖を引かれている。桃色の髪の少女はさらに視線を移した。ルーミアはぱつと袖を離して、両手を小さく広げる。

「（こ）ころ！ どうぞ？」

「むむむ」

顎に手をあてて（こ）ころが唸る。ルーミアは少し不安げな顔をしている。

「852点……。高得点ね」

ぱあつと花が咲くような笑みを見せるルーミア。849点は「まだまだ」だが852点は「高得点」である一点ごとにランクが変わるのかもしれない。ただルーミアが嬉しいのはチルノに勝ったことが大きい。他の少女に見えない角度でルーミアが小さくガッツポーズをしている。

そしてフランの方へ（こ）ころが振り向く。きよとんとしている。あまり興味がないのかもしれない。（こ）ころは即断した。慣れてきたのか早くなっている。

「855点、かな」

「……あ、ありがとう」

フランはとりあえずお礼を言う。855点と言えば鴉天狗9羽分である。圧倒的であらう。

がしつとこのころの肩を掴む鴉天狗。ぴくぴくと表情筋を動かしながら作った笑顔で、言う。

「なるほど、素晴らしい御慧眼ですね。ところでこのころさんはどれくらいの点数なのですか？」

「私？ うーん」

ちらりと部屋の隅の鏡を見る。それからもう一度文を見る。

「せん……」

「え？ 聞けませんよ？」

このころの言葉を遮る文。実際このころはかなりアバウトな評価基準で判断している。ただ一つの原理は「相手が嬉しがつてくれる数字」である。貨幣価値が時代によって跳ね上がる様に、一番手の文は相対的に低いだけだった。

最初に文が思った通り、ただの遊びなのだ。ただ、このころが言いかけた言葉に他の少女も反応した。三人がじつとこのころを見ている。

「……」

このころの顔に浮かぶ大粒の汗。表情は全く変わらない。ただ、肩を掴んでいる文の手

に力が入っている。言いかけた言葉が出てこない。言えば間違ひなくプロレス技の餌食になるだろう。

「ああ、頭をつかつたわ。あれ、アヤ何しているの？」

そんな時に声がした。全員が振り向くとそこにいたのは藤色の髪の少女。芳香がいた。彼女は浴衣は着ていない。ただ、全員の着付けを行ったのも彼女だった。それもいちいちメモを見て、思い出しながら、チルノに相談しつつというやり方ではあった。

フランが待たされた理由と他の少女が衣装を替えたこと、それは芳香のおかげでもある。頭を使ったとはそういうことである。

「いやあ、芳香さん。今点数付けをしていました。ねえ、こころさん」

「え、ええ。そうね」

「点数……？」

芳香は小首をかしげる。仕草がどことなく愛嬌がある。彼女は全員を見回した。それからやわらかい微笑みを浮かべる。意識して作ったのではないだろう。

「みんなかわいいわ」

毒の無い言葉。くすくすと笑う少女。それにつられて文達も同じように笑ってしまふ。こころだけは「助かった」と文と間合いを取る。文も気が付いていたが、もう追及

する気はない。それよりもやることがある。

「よし。みなさんも着替えたことですし。一つ椀の家を襲撃しましょう！」

「「「おおー」」」

扇動されてこころ、チルノ、ルーミア、フランが呼応する。「椀」が誰かなどどうでもいい。大切なのは勢いである。楽しそうな方向へまっしぐらであるべきなのだ。文は思いつきで言っただけのこと。みんなが乗ってくれたので、これから椀の家を襲撃する気になった。

その前に文はくるりと振り返る。

「ああ、そうだ芳香さん」

「芳香でいいわ。文」

「あ、そうですか。じゃあ芳香……慣れるまでかかりそうですが。よかつたらあなたも来ませんか？」

「……え？　なんで？」

文は黙る。なんで自分が芳香を誘ったのかよくわからない。ただ、なんとなく誘いたくなっただけである。芳香もあまり考えていいなかつたらしく、素直に困惑している。両手の指を合わせて少しもじもじとしている。行きたいらしい。

文はチルノに振る。

「芳香が来た方がいいと思いませんか!？」

「あたについてこい!」

チルノも了解が速い。芳香に向き直って、親指で自分をさす。このようなとき、氷の妖精は間違えない。考えてもいない。芳香の頬がほんのり赤くなり、嬉しそうな、ちよつと困つたような顔つきをする。

「でも文、お店番があるわ……」

「他の人が帰ってくるまでいますよ。どうせお祭りは夜ですから、時間はあります」

「そう、そっか。じゃあ一緒に……いいかな」

「答えてやってください。チルノさん!」

「あたについてこい!」

便利だなと文は思う。チルノは。自分で言うのと恥ずかしいことも言ってくれる。

それでも芳香は両手を頬にあてて、静かに笑っている。これで良いのだろう。しかし、なぜ自分が彼女を誘つたのかはよくわからない。気まぐれであろうと思つた。「しかし、一つ問題があるわ」

そこで口をだしたのがこころである。彼女は片手をあげて、皆の注目を集める。

「問題って?」

と近くにいたフランが聞く。こころはうんと頷いて芳香を見る。

「浴衣、着ていないわ。着替えるといいと思う」

「……あ、だ、だつて」

芳香は言う。

「恥ずかしいから、その格好」

「……」

「……」

「……」

「……」

文とこころとフランとルーミアとチルノは「恥ずかしい恰好」をしていると言われて、心を一つにした。彼女達はアイコンタクトを取り合うと、こくりこくりと頷く。そしてじりじりと芳香を囲むように近づいていく。

「あ、あや。わあ!」

包囲された芳香はあっさりと拘束される。両手をこころが、両足をルーミアとチルノが持つて、担ぐ。そのまま浴衣を着付した部屋へ連行がされることとなった。文とフランは応援である。

★★★

犬走 柩は自宅でくつろいでいた。リサイクルショップで格安で手に入れた小さなソファアに背中からもたれかかっている。そのソファアはビーズが入った一人用で、レシートには「人がダメになるソファア」と書いてあった。

「ああ、いい……」

ソファアに背中を預けて駄目になっている白狼天狗。どうやら駄目になるのは人だけではないらしい。まさかとある呉服屋で自分の家の襲撃計画が立てられているとはつゆとも知らない。

実際人間の社会には天狗をダメにするものが多くある。スノーボーもそうであるが、惣菜屋などの食品店、かくかくの家電製品。便利すぎて幻想郷に帰ると困りそうな気柩はする。最近はお風呂に入れるだけで「温泉」が作れる粉も見つけた。起き上がりながら柩はスマートフォンを触る。かなりダメな動きである。

「そういうえばそろそろ文のところにかかないとな。何を着ていこうか……メールしておくか」

電話すら億劫である。正直ちよつと眠い。彼女は文に簡単なメールをする。どこに行けばいいのかというものだ。

眠たいが柩はそれでも体を起こして、体を伸ばす。家だからかシャツとハーフパンツ。体のラインがくつきりとわかる程度の薄着である。ある意味プライベートとして

普通だろう。

椛は立ち上がって筆筒を開ける。きつちりと折りたたんだ服が入っている。たいていヴィレッジ・アイランドかバザーで手に入れた安物だった。彼女が最初に手に取ったのは、最近五百円でセールをしていたシャツである。「Welcome Hello」と書かれた奇抜なもので買って損したと思っている。

「これははたてにやろう」

椛は筆筒に丁寧にしまう。几帳面なところがある。

ぶるつとスマートフォンが震える。仕事中にマナーモードにしているので家に帰ってから切っていない。見ると文から返信である。

『神社に集合で行きましょう』

「了解……と」

手慣れた手つきでメールを返す椛。少し時間はありそうだと、彼女はふと考えた。

椛は出る前にシャワーを浴びようと、風呂場へ向かう。

21話B 賢将、目覚める下

河童の海の家の前では工事が始まっていた。

工事と言っても河童数人で3m程度のポールを二本立てて、ネットを張るだけの簡単なものである。あとは長方形上のコートを手で区切って完成である。工事の責任者であるとりはスマートフォン片手に指示を飛ばす。

開いているページはウキペディアと言われる人類の英知の結晶である。最近では大学の論文にも広く引用されているというほど学術的な物で、ともすればコピーしたものを論文として提出されることすらまれによくある。

にとりはその文章を読みながら、付け焼刃のバレー知識を補強している。とりあえずコートの間取りなどは分かる。彼女は腕で汗をぬぐう。自分は水着になる気などさらさらないが、たまに羨ましくなることはある。

ポールに張られたネットは正規のルール上よりわずかに低い。素人の対戦を観客に見せるための工夫と言える。これでダイナミックなプレイが期待できるとにとりはほくそえんでいる。もちろんスポーティな面白さは二の次の話である。

「……がばれーこーとですか」

「おっ？」

にとりが振り向く。そこにいたのは何故か眼を輝かせている聖人こと、聖白蓮であった。ひきしまった体を黒いビキニタイプの水着で包んでいる。下はスカートを穿いている。彼女は海風にそよぐ髪を手で押さえている。

白蓮の手には幾重にも折りたたまれた紙がある。それは横幅も太く、厚みもある。

「おお、できたのか！ 見せてくれよ」

にとりは白蓮の紙を受け取る。ずっしりとしていて、広げれば相当な長さになるだろう。にとりは作業をしている河童の一人、おかつぱの河童を呼んで二人で持った。にとりはおかつぱに短く指示を出す。

おかつぱは端っこを持って、だつと駆けだす。白い砂を小さな足で蹴る。河童は小柄な少女が多いので、可愛らしい。髪はみるみるうちに広がる。そして直ぐに「正体」を現すことになった。

そこには達筆な字で墨書された、勇壮な文字があった。

『ビーチバレー大会開催!! 観戦無料!!』

ようするに横断幕である。昨日から白蓮の姿が途中からなかったのはこれを書いていたのだろう。姿を見せなかったということは何度も添削したのかもしれない。専用の筆は河童が用意した。

二人の河童に広げられた横断幕を見て、白蓮にはこにこしている。どうやら気に入ったらしい。よくよくみると端っこにハートが描かれている。にとりは白蓮を見ながら「こいつが描いたのか？」と心で思ったが口には出さなかった。

さとり様と一輪のポスターで外から客を呼び。

白蓮直筆の横断幕で内を飾る。

これがにとりの宣伝であった。犠牲になっっているのはピンク頭と尼の二人だけなので健全ともいえるだろう。しかし、にとりには「腹案」がある。これは河童達にしか明かしていない。にとりは横断幕を飾り付けるように、河童達に指示してから白蓮に向き直った。

「うん。いい感じだね。ごくろうさま」

「ありがとう」

にとりが褒めると白蓮は素直に笑顔になる。にとりは訳もなくきつとした、まるで心の中の悪いところを見透かされてような気分になる。白蓮はそんな気はないだろう。純粹な物は邪悪をひるませるのだ。

「どうしました？」

「い、いやなんでもないよ。それよりあんたもバレーに参加するんだろ？ お昼からやるから、パートナーを見つけてくるといいよ。誰でもいいからさ」

「ぱーとなー? ああ、相方のことですね。それではみんなもどこかに?」

「遊んでるんじゃないか? ま、私としても其処らへんで水着で走り回ってくれば宣伝……いや、労働者にも休みは必要だからさ」

ちよつと正直に毒を吐いた河童、それを分かっても責めずにくすくすと微笑む聖人。突つ込まれないと逆ににとりはバツが悪くなる。それで取り繕う様に言う。

「だからあんたも遊んできなよ。お昼からは働いてもらうし。まあ、パートナーはあいつでもいいじゃないか?」

「あいつ?」

「そう、そこにいるだろう? 最初から」

「え?」

にとりが何を言っているのか白蓮にはよくわからない。小首を傾げて河童達を見る。近くにいたおかつぱの河童のことかと思つたが、にとりの言葉はそんなニュアンスではない。まるで白蓮の知り合いを指しているような言葉だった。

「いや、そこにいるだろ。ほら地面」

にとりは指さす。砂浜に視線を移す白蓮。

頭が生えていた。くすんだ灰色の髪、白い肌。少し膨らんだほつぺた。そして赤い瞳。それは白蓮の知っている少女の頭だった。

「何を……しているの？ ナズーリン」

「……」

砂浜にナズーリンの頭が生えている。つまり首から下を埋められているのである。ネズミは数十分前に河童達に包囲襲撃されて、今の無様な状況になっている。ナズーリンは無表情で固まったまま、何も言わない。眼は死んでいる。

練っているのは河童への復讐案である。今は鬼に金棒ならぬ、毘沙門天にパールのような物を装備させて襲撃することを考えている。決して自分では表には出ない。

にとりは白蓮に説明する。

「いや、昨日サボっていたからね。水着隠していたし、その罰だよ」

白蓮は苦笑するしかない。別にナズーリンが物理的に痛めつけられたわけでもない。精神的にはダメージは大きいだろうが、追及するまでもない。いいお灸であろう。

と聖人は思うがネズミとしてはこの数十分前に行ったことを思うと腸（はらわた）が煮えくりかえりそうである。それは言葉で説明するよりも、襲撃現場を見ればわかるのだが白蓮はそれを見ることはなかった。

——ナズーリンが襲撃された海の家の部屋は今、誰もいない。脱ぎ捨てられた服が散らばっている。元はネズミが着ていたものだ。

ぎりぎりど歯を食いしばるナズーリン。屈辱の数分間であった。だが、保護者（かい

ぬし)の一人である聖人は「お手柔らかに」といいつつ、どこかに行ってしまった。少しうきうきしているのは海で泳ぐ気なのかもしれない。

にとりは片目でちらりとネズミを見る。

「まあ、バレーまで放置してもいいか……」

「!」

ネズミは眼を見開いた。空から照り付ける夏の太陽。流れ出る汗。この炎天下で放置されればたまったものではない。復讐に燃えていたはずのナズーリンは打算が脳内を駆け巡り、即座に妥協する。

「ちよつと待つんだ河童君。取引をしようじゃないか」

「取引?」

胡散臭げにナズーリンを見るにとり。彼女も頭に打算が浮かんでいる。労働者側に入り込んでいるネズミは「利用価値」がある。だから、にとりは聞く気になった。うすら寒い相互関係である。

「聞こうじゃないか」

「そこなくてはね。君もわかっているとは思うけど。君はあまり人望……河童望?がないようだね」

「だれかースコップを持ってきてー」

「待つてくれ。何をする気だ！　ま、まずは全て話を聞いてくれ」
「……いっよ」

にとりは埋まっているナズーリンの目線に近づけるために不良座りする。妙に様になっていく。ナズーリンは咳払いをする。妙なことを言えば埋められる可能性も大きい。汗が流れ落ちるのは熱さのためだけではないだろう。

「い、いいかい。君もいやしくも大将ならば」

ネズミの口調はナチュラルに上から目線である。河童は後で恥ずかしい目に会わせてやると誓いつつ、ニコツと笑う。ビジネスの技術である。ちなみに大将というのは河童の取締役ということである。

「部下を盲信しすぎてはいけない。こういった場合はしっかりと労働者の中にスパイを持つておくべきだ。それを買って出てあげよう」

「ふーん。それで？」

ビジネスの基本は興味があつても冷たい表情。にとりは自分から情報を一切出さず、ネズミの言葉を引き出すようにする。

「き、昨日のような旅館に勝手に泊まるようなことは未然に防止できるかもしれない」

「あんたも泊まつたらしいじゃないか？」

「あの時は私は君の味方でもなんでもない。ご主人様が泊まるのなら従うのがあたりま

えだろう?」

「そうか。ふーん。それで、あんたが裏切らない根拠は?」

「……………」

裏切らない根拠も何も、裏切る気しかないネズミは焦った。しかし、それは内心の話である。彼女の顔は涼やかで、表情には全く出さない。稀代の策士であり、ネズミなのだ。

ナズーリンはふつとちよつと小ばかにするような笑いを漏らす。

「それは河童君。私が何を言っても焼け石に水というものだろう? よく考えてくれ。ここで仮に私が何かを言っても君が信じるとは全く思えない」

「よーし。話は終わったー」

「ま、まて! 根本的な話だよ。私はこの取引で基本的に得をしていない。それじゃあ、自分で言うのもなんだけれど、いつ裏切ったっておかしくはないだろう?」

にとりが胡散臭げにネズミを見る。要するに自分の条件を吊り上げようとしていると思つたのだ。それも事実だが、ナズーリンは頭をフル回転させている。この炎天下で放置などシヤレにならない。

これは彼女にとつても危険なかけである。甘い言葉を一切使わずに相手を口説くことをしなければならないのだ。だからこそ「自分は裏切るかもしれない」というリスクの

ある言葉をつかった。

「純粋な利害を考えてほしい。君は労働者側にスパイが欲しい。私は身の安全と、それ相応の利益が欲しい。君にとって私が仲間になることは悪いことではないはずだ。ならば、ここで私が裏切るといふ行動をしない程度の利益を提示することが、得策だと思うだろうか？」

「ふーん」

「つまりだ。河童君。私を効果的に使い、裏切ることのないようケアをするのは、君が条件を吊り上げるしかない。……裏切らない根拠はむしろ君が出すべきだ」

ふふふと口元を吊り上げるナズーリン。彼女の言葉はつまりはこういう事にとりては理解した。

——にとりはナズーリンと手を組みことによつて利益を得る。

——ナズーリンはこの拘束を解かれ、雇用者側から利益を得る。

——ナズーリンが裏切るかどうかはにとりの条件次第である。要するに十分な「エサ」をネズミに与え続けている限りは安全だということだった。

「ふーむ」

にとりは両手を組んで考えた。道德もへつたくれもない考え方だが、理には適つてい

る。足元ではナズーリンが不敵に微笑んでいる。どうだと言わんばかりであるが、首から下が砂に埋まっていてダサイ。

にとりは考えた。

(まあ、こいつが裏切る前に裏切ればいいか)

河童にネズミへの信頼などない。条件を「空手形」で渡しつつ、裏切れれば河童総取りである。そして他方、ナズーリンもこう考えていた。

(これだけ言ってもこいつは私が裏切ると思っているはずだ。いいさ。それでも私が労働者側のスパイになる利益を捨てられるはずがないわ。解放されれば裏切るタイミングは来る。せいぜい、限界までしほりとってやる)

まるで戦国時代である。お互いが裏切ることを前提に策を練っている。お互いの利益が共に得られる範囲でのみ平和が訪れるのだ。そしてにとりはぼんと手を叩いて、決断した。

「よし、いいよ。条件としては、そうだな。バレーボールの時に商売をするから、その売り上げの三割でどうだい」

「三割か」

随分思い切った数字を出すなとナズーリンは思う。売り上げの30パーセントなど、普通の条件ではないが、ここで食いつかない。

「さんわりって、少くないかい？　せめてもう少しと、あと仕事中はのみ食べ無料かどうか？」

それっぽっち、と心底不思議そうな顔をつくるナズーリン。この場合できるだけ相手
が「馬鹿なことを言っている」という表情を作った方がよい。三割のインセンティブ（報酬）は破格である。一人でそれだけ貰えれば店自体を赤字にできる。だが、交渉は絶対に「良い」と一言目には口に出さない。ついでに追加注文も基本である。

にとりは難しい顔をつくる。本心かは不明である。

「少ないって？　もう、相場が分かかってないなあ。それじゃあ3割2分。これ以上はむりさ。飲んだり食べたりは常識の範囲なら止めないよ」

「……やれやれ。よくわからないけどそれで手を打とう」

途端にナズーリンはニコツと笑う。

（チツ。これ以上の吊り上げは無理か……まあ、こんな約束を河童が守るとは思っていないから。よしとしよう。ご飯も食べられるしね）

にとりもニコニコし始める。

（さっきのとぼけた顔。こいつも裏切るタイミングを狙っているね。破格の条件を出してやったのは、どうせ最後には私の物になるからだよ。でもこいつ、食い意地はつてなあ）

「それじゃあ河童君！ よろしく。一緒に頑張ろう」

「そうだね。いいたいかいにしようじゃないか！」

照り付ける太陽の下で行われるうすら寒い取引である。互いに信頼など粉屑程度もない。お互いが、お互いの心を見透かしているのに、何でかわからないが取引が成立した。ともかくネズミは河童の傘下に入ったような形になった。

「それじゃあ早速だけど、私を掘り起こしてくれよ」

「そうだね。おーい、誰かー」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

河童達の中からやってきたのは二人の少女だった。一人はおかつぱ頭の河童で、もう一人はくせ毛の少女である。顔にはそばかすが少しあった。二人ともにとりと同じような服装である。

スコップをザックザックと無遠慮に二人の河童は入れて、ナズーリンを発掘した。当たり前だが、少女一人埋めた穴は深い。やっとナズーリンは体が動くようになると、自分ではいい出てきた。

ナズーリンの体を包んでいるのは、明るめの紺に白いラインの入った競泳水着である。ピツチリとしたそれは彼女の細身の体を包み込んでいる。ナズーリンはよじよじと穴からはいい出るときに、少しお尻のあたりの布を引っ張った。

起伏の無い上半身にも、細い太腿にも砂が付いている。勿論水着に着替えたのは彼女の意思ではない。

「ぺっぺっ。水着の中まで砂が入ってざらざらしているじゃないか。全く」

砂を吐きながらナズーリンは目の前に座って待っていたにとりに聞く。

「それで何をすればいいんだい？ やらせたいことがあるからこそ、私を解放したんだろう？」

「あ、そうだね。簡単だよ。ほい、これ」

にとりは懐からデジタルカメラを取り出した。光沢のある表面がまだ新しいということ物語っている。ストラップに「文」と書かれているが、ナズーリンには何かかわからない。

「これでみんなの写真を出るだけ多くとってきてくれよ」

「それだけかい？」

「まずはね。あ、抜けているのが居るのは無しだぜ。全員まんべんなく撮ってきてくれよ」

「………わかった」

謎の部分はあるが、ナズーリンは承知した。自分以外の誰かの写真がどのような形で出回ろうともどうでもいい。デジタルカメラを手に彼女は立ち上がる。体から砂が落

ちる。

にとりは「あ」と思い出したように言う。

「そうそう、そいつらも助手として使っていいよ」

指さすにとり、そこにいるのはくせ毛とおかつぱの河童。

「そいつらもバレーのトーナメントに出すから。今から水着に着替えてもらおうしねっ」

え？ と顔を見合わせる河童二人。ナズーリンは無言である。にとりはニコニコ言う。

「私も心苦しいんだけど。人数は大いに越したことはないしね。我々河童からも選手を出すことがいいと判断したんだ。今」

最後の語尾はぼそり、程度の声だった。くせ毛とおかつぱの河童はぶるぶると震え、ぶんぶんと拒否するように顔を振るが、無駄な抵抗であった。昨日勝手に旅館に泊まったことへの報復では決してないと、にとりは言った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「さて、写真か……」

ナズーリンはデジタルカメラを持ちながら、砂浜を歩いてきた。後ろからナズーリンの競泳水着と殆ど同じ型で水色のラインの二人がとぼとぼ歩いてくるが、ネズミは殆ど

気にしていない。

左手をみると大海原が広がり、足元には白い波が満ち引きを繰り返している。

ナズーリンは海風に心地よさを感じつつ、デジタルカメラを海の中に落とせば仕事しなくていいなと思っている。

「とりあえず、見つけたら撮るか……どうせ一輪とかがそこら辺をうろうろしているはず……」

ナズーリンが言いながら浜辺を見回すとある人物を見つけて、足が止まった。

白い水着を着た、毘沙門天。彼女の周りには子供達が集まり、

—— 共に砂の城を作っている。

「ご主人……様」

ちよつと目を離すとこれである。しかし、彼女は容赦なく。

「まずは一人目か。あ、そういえば後ろの河童達も撮っておくべきなのかな？」

ナズーリンが振り向くと、くせ毛とおかっぱは首を高速で左右に振っていた。

2 2 話 A

犬走椀は普段は仏頂面である。

それは親しい間柄である天狗との交流でもあまり変わりはない。幻想郷でも妖怪の山の見張りをしていたことも原因としてあるだろう。現代風に言うのであれば職業病である。

そんな白髪の少女が鼻歌を歌いながらリラックスできる場所がある。風呂である。

椀のマンシヨンの浴室は狭い。それでも一人暮らしであるから、全く不足はない。文といい、はたてといい天狗は一人暮らしが多い。それでも椀はちよつと前、知り合いの河童と同居していた。

鼻歌が反響する。窓のないマンシヨンのバスルームである。

小さな浴槽とタイルの敷き詰められた床。あるのは壁の吸盤に掛けられたボデイスポンジとシャンプーなどのボトル。それに曇ったガラス。流星にまだ時間は昼、お湯は張っていない。

椀はバスチェアに座って、ボデイソープを手取る。すでに頭は濡れているから、洗った後だろう。彼女は壁に掛けてあった。丸いボデイスポンジを手を取った。そし

てボディソープをそれにかけてにぎにぎ、手で揉む。

白い泡があふれるように出てくる。そしてこのスポンジには白い犬のキャラクターであるスヌーポールの絵柄が付いている。完全に趣味であった。

ごしごし体を洗う。何故か腕を念入りにスポンジでこすり。手首、腰、胸、肩。あつちこつちスポンジを動かしていく。とりあえず気分にならせて擦るのは癖であろう。そして指に泡をつけて、両手を組んでにぎにぎと擦る。爪は大切である。その時スポンジは両腿を内また気味に組んでその上に載せている。床にスポンジを落とすとそれで洗う気がしなくなるのだ。

椀はそうしてシャワーを手に取るとお湯を出す。ちよつと持ち上げて体の斜め上から胸元辺りに掛ける。泡が落ちていくと、汚れが落ちていくような気になる。気の手であろが椀は清々しい気分になる。だから風呂は結構好きになっている。

「よし、と」

きゅとシャワーのお湯を止めて。ふるふると頭を振る。ぱつぱつと飛んでいく水滴。まるで子犬が体から水気を払っているかの様だ。彼女は意味なく首をこきこきと動かし。彼女は一度息をはく、心なしか満足そうな顔をしている。

★☆☆★

問題は服である。椀はデニムのショートパンツにキャミソールを着て、うむむと唸つ

ていた。祭りに着ていく服が無い。というか、仕事に着ていく服以外は適当に格安で買ってきたものばかりで「Welcome Hello」と描かれた黒いとんちきなシャツくらいしかない

「仕事ばかりしていると服がないなあ。幻想郷で着ていた服は……駄目だな。変人に見られかねない」

彼女のいるのはベッドの上である。シーツにタオルケットくらいしか置いていない夏のベッド。そこに数枚のシャツを並べている。どれを着ていこうか悩んでいるのだが、どれもあまり変わり映えがしない。

お洒落しようというのではない。単にみつともない服装が嫌なだけである。それには天狗衣装など言語道断である。椛は以前にアパートに住む巫女と教師、それにサトリ妖怪が幻想郷のままの服装で街を歩いているのを目撃したことがあったが、目に焼き付いて離れない。

そもそも、現代にきて数日間は幻想郷の少女達皆が己の服装で過ごしていた。同じ天狗仲間である射命丸文やはたては運のよい方であるが、椛の服装は言い訳のしようがなかった。ある意味過去の悲劇だろう。

それはともかくとして椛は適当に一枚、シャツを着こんだ。青いストライプのシャツだ。少し物足りない。彼女はふと思いついて、ベッドからジャンプして降りる。そして

筆筒をこそそし始めた。このあたり家に一人でいるときのテンションである。

椀の出したのは明るいグレーのパーカーであった。薄手で夏でも着こめる。

彼女はそれを着こんで前のフアスナーを上げる。胸元からチラリと見える程度のシャツ。ちよつと長い袖に手首が隠れる。まあいいか、と椀は洗面台にスタスタ歩く、そして姿見まで来ると。

くると回る。鏡に映っている自分の姿を確認しているのだ。

椀は一人で顔の角度を変えたり服装に乱れが無いか確認する。とりあえず問題はなさそうだと彼女は思った。本人は地味な服装だと思っているが、どちらかという短い髪型の彼女がショートパンツにパーカーを着ると「ボーイッシュ」と言っているのかもしれない。

「これでいいか……後は財布と携帯……それに……あ、MOZUKUを予約録画しておくか」

資金よし、連絡手段よし、見たいテレビ番組の録画もよしと椀は準備万端である。彼女は家を出てカギを締めてから。

「ガス止めたか……?」

などとのたまいながらカギを開けて家に戻っていった。完全に現代に毒されている。

★★★

椀は道を歩く。照り付ける太陽にアスファルトが焼かれている。

じりじりと身を焦がすような気温。椀はパーカーの襟を引つ張って少しでも涼しくしようとする。幻想郷ではこんな夏の暑い日には森で寝そべっていた。仕事だとしても幻想郷の山が仕事場だから、そこまで暑くはならない。

「この、こんくりーと、とかいうやつを全て剥がせばいいのに……な」

黒い地面に恨み言を述べる。コンクリートで舗装された地面を全て地肌に戻せば、自然が帰ってくるかもしれない。そしてデコボコでガタガタなカーライフも現代人に提供できる。

愚にもつかぬことを考えながら椀は腕で額の汗をぬぐう。

みーんみーんと響く蝉の声。

ちよつと歩いただけで感じる汗の感触。

椀は部屋に今すぐ戻って、エアコンをつけて寝たいと思っている。存外、最近のエアコンの消費電力は少なく、一日中つけていてもそこまでの請求は来ない。

商店街を抜けて、目指すのは目的の神社である。途中呉服屋のウインドウが眼に入ったが「浴衣か……」と少し羨ましそうにつぶやいただけで通り過ぎてしまった。今は道を急ぐし、財布は軽い。

いつもは入っていく豪族の軽食屋も通り過ぎていく。

道を曲がるトリサイクルショップ永江がある。もちろんそこも楯は通り過ぎていこうとしていたのだが、その店を伺う様に電柱の陰に佇む怪しい人影を見つけて思わず声を掛けた。知り合いである。

「あれはリサイクルショップの……何をしているんだ」

声に反応して不審者、いや永江 衣玖が振り返った。涼しい顔で楯を見るが、先ほどの怪しい行動がうさくささを醸し出している。そもそも自分の働く店を電柱から覗く行為が怪しい。

「おや、天狗の人ですね」

「……犬走 楯だ。それであなたは何をやっているんだ」

「いえ。店に帰ってきているとまずいので」

「誰が？」

「こどもたちと、こころさんが」

「()ろ？」

要領を得ない楯は首を傾げる。まさか衣玖がコンビニから逃亡を図っていたなどと想像もつかないだろう。逃げたはいいが、よく考えれば帰ってくる場所が同じであるので待ち伏せを警戒しているのである。

「よくわからないが……私は今から神社にいかないといけないんだ。失礼する」

「ちよつと待つててください」

「うん?」

「私も行つて宜しいでしょうか」

そこで椛はちよつと考えたが、文の顔を思い浮かべて配慮する必要なしと結論付けた。数秒のことである。

「それは、構わないと思うが……」

「それではお願いします」

すると物事を進める衣玖に椛は苦笑する。衣玖としては店に帰るのは危険な為、どこかに行きたいだけである。特に神社ならば、木陰が多そうに休めるだろう。彼女のシャツには汗が滲んでいるから、焦げ付くような空の下にいたくはないのだった。

さて、飛んで火に入る夏の衣玖とはこのことであろう。

彼女達は何も知らずに神社への道を歩き出した。椛は元来は無口だから、黙つたまま並んで歩く。正直言えばそれが椛には「有り難い」。良く知らない相手と喋るような習慣は普通天狗にはない。だからこそ山での閉鎖的な社会を形成しているのだ。

黒髪の鴉天狗のおかげで誤解されることもあるが、天狗の書く『新聞記事』は元来内輪で楽しむもので、外部に出すことを目的にしていない。つまり、他の種族と交流をするのは天狗の中でも「物好き」である。

衣玖は黙々と歩いている。涼しげな表情を一切崩さない。椀が横顔を見ると素直に綺麗な顔立ちだと思う。この童宮の使いは椀に合わせて何もしゃべらない。空気を読むのが染みついていいるのだろう。

だから、椀が「しゃべりたくなつて」しまった。

「それにしても暑いな……川で泳ぎたくなるくらいだ」

「それはよさそうですね。それならば、海に行かれてみては如何？」

「海か……テレビで連日見ているが……嫌だな。あんな水着とかいう破廉恥な格好をして泳ぐのは」

寺と神社と教師と地底に椀は喧嘩を売る。もちろん気付かない。衣玖は肯定も否定もしない。

「ふふ、ではあなたは幻想郷の川でどんな格好で泳がれるのですか？」

「……………秘密だ」

ちよつと赤くなつて椀は話題を変える。

「それにしても幻想郷か。もうまだ一年もたつていないのに、私も知り合いもこの社会になれてしまつてきている……逆にそれが恐ろしくなつてしまうことがある」

「恐ろしい？」

「帰りたいたいのとは変わらないさ、でもたまに……なんとなく。帰れなくてもなんとでもな

るのではないかと思ってしまう。生活は苦しいが、楽しいことも。うん」

椛はそこまで言ってもう一度赤くなった。言うのが恥ずかしいのだろうが、そこで口を紡ぐのは不自然だからとりあえず言い捨てるように声にだした。

「ある」

「ふふ」

衣玖は微笑で返す。

「住めば都というものかしら？ きつとそれは素晴らしいことですわ。でも、それはつまり『住んでいた』場所も都だったことなのかもしれません。家に帰りたくなるのは当然のことでしょう」

「家に帰る……か。そう確かに私にとっては幻想郷が家だからな。問題は帰り方が分からないだけで。うーん」

「来れたのだから帰れますわ」

「……なんだかほつとする言葉だな。でも来た方法も分からないんじゃないやどうしようもない。気が付いたらここにいたんだ。あなたも同じだろう？」

「そうですね」

「そうですねって。いきなり投げやりになってる……」

椛の口調が崩れてくる。いつも古武士のような言葉遣いをしているが、油断すると女

言葉になる。だからこういつてしまった。

「はあ。貴方みたいに飄々とできたら楽しそうね」

おや、と衣玖は権を見るが彼女は自分の変化に気がついていない。多少は心を許してくれたらしい。そこで竜宮の使いは以前テレビゲームをする秦ころろが口にした言葉を思い出した。

——『ちよろい』

「ちよろいですわ」

「チヨロイ？ なにそれ。おかし？」

ふるふると首を横に振る衣玖。彼女はこの言葉を追及されたらまずいと直感した。

「それでもこの外の世界に我々が来た理由はなんなのでしょようね？」

「黒幕がいるんだろう。今までの異変の様に」

「あら、断定的ですわね。なら、こちらに來たいと思ったその方は何を求めていたのでしょよう」

「ほしいものがあつた……？」

「とも限りませんわ。もしかしたら幻想郷の家というあなたとは逆の、そう」

衣玖は空を見ながら、つぶやく。

「帰りました……？ のかもしれません」

「なら、外から来た誰かが黒幕なのか！」

権ははつとした顔で言うが、衣玖の涼しい表情は、ゆるやかに、微笑に変わって行く。「あくまで仮定の話ですわ。それに幻想郷が本格的に外界と遮断されたのは百年程度……みなさん容疑者といつていいでしょう？ あなたも」

「わ、私はちがうぞ。そ、それにあなたも容疑者だろう!?! その理屈なら」
「ばれましたか。実はわたくしが黒幕ですわ」

口を開けて驚愕の顔をする権をくすりとする衣玖。冗談なのだろう。それでからかわれたとわかった権は無然とする。それでずんずんと歩いていく。衣玖も一歩遅れて付いていく。大通りに出て、信号を渡って。小道に入る。

住宅街といつていい場所。道は狭く、左右に家屋が立ち並ぶ。以前鬼の通った道とは少し違う。二人の少女はそこを通っていた。側道はない、前に進むか後ろに戻るかしかできない場所である。

伏兵には格好の場所だった。

権は「うん？」と何かを疑問に思つて立ち止まる。道の先で仁王立ちしている、青髪の少女が眼に入ったのだ。チルノである。

いつもと違うのは青い髪を下ろして、花火柄の浴衣を着ていることと、右手に握られた拳銃型の水鉄砲。なぜか背筋が冷たくなるのを権は感じた。後ろを向くと、無表情の

衣玖がそこにいる。彼女はチルノと他の少女をつい数時間前に裏切った女性である。

「やられましたわ。まさか貴方がグルだったとは……追い込むことが目的だったようですわね」

「な、なんの話だ。と、というかあいつはなんでこんなところにいるんだ」

水分をたつぷりを含んだ濡れ衣をかぶせられて柵は困惑した。そもそもチルノ達とも殆ど面識がないのだから、グルも何もない。だが、目の前のチルノは大きな声で叫んだ。

「ここで会ったが百年目よモミジ！ かずかずのあくぎよう、桜吹雪の印籠を目玉にいられても許せないわ」

「く、くそ。あいついろいろと勘違いしてる！ どうせ文の差し金だろう!!」

「差し歯?」

「さ・し・が・ね!!」

「うるさい！ わけわかんないわ！ であえーであえー!」

「は、話を通じない……?」

チルノは水鉄砲を片手に突っ込んでくる。言うまでもなくチルノは肚黒天狗の差し金である。柵に一瞬で見抜かれるあたり、普段の所業がわかる。それでも氷の妖精は自分で「であえ」と言っているのにセルフ突撃をしてくる。

「や、るしかないのか」

椀VSチルノ。絶望的な戦いが幕を開ける。椀に有効な攻撃手段はない。衣玖は後ろに撤退する。三十六計逃げるに如かず。ただし椀は含まない。

「う、おおお！ 冷符。瞬間冷凍ビーム」

チルノはてきとうなスペルカード名を言うと同時に水鉄砲で射撃。水流が椀に迫る。

「ちい」

流石に白狼天狗は身をかわす。この時点で子供と遊ぶお姉さんみたいになっているが、両方とも真剣である。濡れたくない。チルノは照準を椀に合わせる。椀の体が右に傾いた。

チルノは叫ぶ。

「もらったわー！」

発射。椀はにやりとする。右足に力を入れて左にステップ。外れた水流は虚空を飛ぶ。攻撃誘導、からの回避。戦闘においては白狼天狗に一日の長がある。だが、

遊びにはチルノに千日の長がある。

水の妖精は「左手」に水鉄砲をトスする。一瞬で銃を持つ手のチェンジ。考えていない。銃口が椀を追う。これには白狼天狗も面食らった。まだ姿勢が整っていない。やられる。直感した。

チルノが引き金をひく。椀も体が勝手に動いた。ステップした勢いをそのままに、この狭い小路の特性を利用する。すぐ横は壁。彼女はその壁を手で押す。体が反対方向へ動く。

反動で椀は水流を交わす。直感すらも超えた動き。双方が培ってきたものを出し尽くす戦いである。こんなところで出してどうするのか、そんな細かいことはない。

「やるわね……」

チルノはじりじりと間合いをつめながら言った。残りの水量は多くない。

「お、おまえこそ」

正直いえば左手からの右手へのチェンジ。迅速な攻撃に椀は驚いた。二人はこの勝負の場で笑い合う。勝つのは自分であると主張するかの様だった。

それでも現実には非情であった。椀は背中に何かが当てられたことを感じた。次いで声がする。

「手を、あげろ」

「な、仲間がいたのか……」

椀が両手を上げて、後ろを見ると。そこにいたのはルーミアだった。彼女も可愛らしい浴衣を着ている。しかし、手にしているのは大型の水鉄砲。それで撃たれば椀の服は一卷の終わりである

傍にはさらに大型の水鉄砲を持った、フランドルもいた。そしてシャツがびしょ濡れになった衣玖に銃口を突き付けている。逃げようとした末路である。つまりこの「道」は最初から封鎖されていたのだ。進もうが退こうが変わりはない。

「文め」

両手を上げて文の顔を思い浮かべる。どうせどこかであざ笑っているに違いない。椀はあの「神社に集合メール」が罠だったと悟った。神社におびき寄せるメールだったのだ。標的が来る場所が分かっていたれば襲撃ポイントを選び放題である。

いまさら後悔しても遅い。逃げようとすれば集中砲火を受けるだろう。

逃げきれてもびしょ濡れで商店街を歩くなど、恥ずかしすぎる。

そうやって観念した椀だったが、そのあたり理解していない氷の妖精が居た。彼女は銃口をゆつくりと彼女に合わせていた。やっと白狼天狗が気が付く。

「ま、まて。降参する。う、うつな」

「あたいのうしろにたつな」

「た、立ってないだろ！ ぎゃあ」

額に命中。チルノは水鉄砲をくるくると手で回して、口元に銃口を持ってきてふっと息を吹きかけた。

「やっぱりさいきようねー！」

★☆☆★

権と衣玖はそうやって連行された。権は水鉄砲を突き付けられながら歩くのは言語に絶するほど恥ずかしかったが、通りすぎる人間達は「遊んであげているのね」みたいな微笑ましい顔をして過ぎ去っていく。

たまにフランが。

「印籠を目に入れ込むんだっけ？」

と怖いことをいうと。

「や、やめてくれ」

と本気でお願いしたりした。衣玖は基本的に口を開かない。ただ、逃げだしそうな場面が幾つかあった。実際今、神社に連れていかれているのであるが、そこには彼女に恨みを持つているであろう付喪神がいる。

「よくきたな」

その付喪神、秦ころろは鳥居の前で仁王立ちしていた。ころろの前には衣玖と権が並ばされている。そしてチルノ、フラン、ルーミアは彼女達二人の後ろから銃口を突き付けている。ころろは桜柄の浴衣を着ている。衣玖には何故彼女はそんな恰好をしているのかは分からないが、ころろが自分に何を思っているのかはよくわかった。

襲撃に参加していないのは「おおももの」はどつしりと構えるべきだからだ。彼女の役目は尋問である。

「いいたいことがあればきくわ。じょーじょうしやくりようのよちもあるかもしれない」

衣玖は言う。

「ハハハ」

「いいたいことはそれだけか」

衣玖も言いたいことはあまり言えていないのだが、もう問答は無用である。こころは怒りの無表情である。最初からあんまり話を聞く気はない。ミンミンと蟬の声を背景に両手を構える。

「このわざを使う時がきたようね」

こころがボクシングのような構えをしながら、頭を「∞」をなぞりながら動かし始める。テレビで現役フェザー級のボクサーの試合を見てこころが習得した新必殺技である。まだ試したことはない。簡略に説明すると相手が倒れるまでフック（横殴りパンチ）を繰り返す続ける。

チルノ達が「かつつけえ」と声援を送る。神社の静寂を破り、子供の明るい声が響き渡る。そんな中で衣玖は空気を読む。

「ここで死ぬわけにはいきません。権さんバリアを破れますか?」
「え?」

衣玖が権の肩を持って盾にする。こころは頭を振りながら「ふっ」と口だけで笑い。
「うちやぶつてみせるわ」

と気概を見せる。はつきり言えばこころも衣玖もじやれているだけなのだが、打ち破られる方はたまったものではない。権の背中をぐいぐい押しながら衣玖がこころに近づいていく。

「おい、な、なにをするきなんだ。押すんじゃない!」

悲鳴のような声をあげる哀れな白狼天狗。その瞬間だった。

衣玖が権の背中を押した。「うわっ」とよろけて権がこころにとびかかる。無表情の付喪神もこれに慌てる。流石に本当に殴り倒すのは可哀想であった。だから権はよけたままこころに抱き付く。こけたくなかったのだ。

「うおう」

こころが変な声をあげている間に、衣玖が側面をダッシュで駆け抜けていく。神社の奥に走り去っていく。意外と乙女走りだった。無意識にチルノが追走する。追うというより、走っているものに反応しているだけであった。

ただ、チルノも浴衣である。青地に花火の浴衣は元気な彼女に似合っている。こころ

は追いかけてようとしても楯が邪魔である。代わりに銃を持ってフランとルーミアが追いかけていく。衣玖は逃げきれないことも半分わかつている。ある意味遊びに付き合っているのかもしれない。

白狼天狗はぱつと離れようとしてばしやりと音がする。

シャッター音がした方向を楯とところを見ると、茂みの中からごそごそと現れたのは文だった。その手にはデジタルカメラ。今の一瞬を撮られたのだろう。ろくなことに使わないのは楯にはわかった。

文は黒い生地と袖や裾に白い羽をあしらった浴衣を着ている。顔はなんだかうれしそうである。いたずらが成功しているのが嬉しいのだろうか。

「いやー面白かったですよ楯ー」

「貴様……ぬけぬけと。どうせあの小道での戦いみていたんだろー」

「まあ、まあこの埋め合わせはいつかしますから。それにこれから大切な用事があるんじゃないですか」

いつか、と日時は定めない。文はデジカメのデータを手元でいじくる。「大切な用事？」と楯は首をひねる。こころを見るが、こころは衣玖を追うかどうかを迷っている。走ると着物が崩れる、なんて気にしてはいないはずである。そんな可愛らしい女の子としての感性よりも「ボス」としての貫禄を大切にしている。はずである。

「もう忘れてたんですか。ほら権」

文はデジタルカメラを権に見せる。写真をスクロールして、いくつかの少女のデータを見せた。

赤い髪をした、ドラムの付喪神の写真。どこかのゲームセンターの写真だろう「ふるこんぼだどん」と画面に映ったゲームをしている。

青い髪で大きな傘を持った付喪神の写真。普通にポーズを決めてピースをしている。輝くような笑顔である。

シヨートヘアーカチューシャの付喪神。神社の巫女服を付けて大きく欠伸をしている。足もとにはアマノジャクが首だけ出して地面に埋まっている。

青紫色の長い髪を二つ結びした付喪神の写真。どこかのスパーであろうか、食品売り場でウインナーを口にいられて幸せそうに食べている。

桃色の髪をした無表情の付喪神の写真。チルノやルーミアとあそんでいる一場面を切り取ったものだった。

文は権を見て、なにか企んだ顔をする。

「この付喪神たちを今夜、お祭りにおびき寄せます。まあ、騒音を出す姉妹はいませんがあれはおいおい。一人一人物陰に誘い込んで尋問をしましょう。萃香さまのヒントを検証するんです！」

「……」

「どうしたんですか?」

「い、いや。だつて」

権は眼でこころをみる。何故か汗を掻いてる「桃色の髪の付喪神」がいる。目の前で自分を「物陰に誘い込んで尋問する計画」を聞けば当然の反応である。文は「あやや」としまったとばかりに自分の額を叩く。わざとらしい。

「違うんですよ。こころさん。これは」

「お、おう」

「全部権が計画したんです」

「おい! 嘘をつくな!」

狼狽するこころを見て文はくすりとする。ああ、これが目的かと権は思う。意味なんてないのだ。

★☆☆★

衣玖は物陰に隠れていた。ちらりと神社の境内を伺うと血に飢えた獣の様にフランとルーミア、それにチルノがうろついている。手には凶器(みずでつぼう)を装備している。こまま出れば間違いないくヤラレル。

「どうしましょうか……」

その場にしゃがんで考え込む衣玖。濡れたいとは思わない。かといって汗だくになりながらの逃走も嫌である。このまま物陰にいても埒は開かないが、かといって何も方策はない。

そんなときにふと、少女の声が出た。

境内にいた三人は声の主の方を見る。彼女は神社の社殿の中から出てくる。

淡く、青みがかった生地。そこに美しく描かれた朝顔。社殿から出てきた少女はそんな浴衣を着ていた。

『みんな。住職さんが洋カンをきつてくれるって』

どうやら少女はチルノ達を呼びに来たらしい。彼女の声に歓声を上げる三人。

その少女は「喜んでいるみんな」を見て、嬉しそうに微笑んでいる。さつき強制的に着物に着替えさせられたことはもう頭にない。忘れている。

芳香だった。藤色の髪が日に輝いている。

衣玖はこっそりそちらを覗き込む。

「あの、方はたしか……?」

見たことがあるような気がする。そう思い、もう少し顔を出してみる。逆に芳香が衣玖に気が付いた。最初はきよんとした顔だったが、次第にくすくすと愛らしい笑いを

見せる。それに何でか手を振ってくれた。

チルノ達もそれに気が付いて、物陰に隠れている衣玖を見つけた。戦闘準備。
衣玖は考えることをやめた。

22話 B

戦いの神である毘沙門天が砂で「築城」しているのには理由があった。

さきほどナズーリンに諭された彼女は、さっそく共に戦う相棒を探すために浜辺を出た。そうやって出たはいいが、彼女は輝く太陽に眼を奪われてしまった。

少しすました顔で寅丸は海辺を歩く。足もとをくすぐる波が心地よい。仕事からの解放感も手伝ってなんと楽しくなってしまう。実際のところ戦いの神が海水浴場を水着でうろつくというおそろく醜態をさらしているのだが気にならなかった。

寅丸は足もとに大きな貝を見つけた。彼女はゆっくりした動作でしゃがむ。貝を拾うと「おお」と子供の様な歓声を上げて、じつくりと観察する。手のひらくらいの巻貝である。きつと世界のどこからか旅をしてきたのだろう。

海で遊んだことなどない。彼女の両目が好奇心に輝いている。

彼女はどこかで聞いたことがあった。貝の中には波の音が広がっているという。

寅丸は立ち上がって、貝を耳に当ててみる。ぎあ、と聞こえた気がする。彼女の桃色の唇がちよっとほころぶ。本当だ、と思っっているのだろう。そっと目を閉じて彼女は浜辺を歩きはじめる。お伴は貝殻のオルゴールだけ。

そんなことをしているから波打ち際で遊んでいた子供に気が付かない。

正々堂々、正面から子供達が作った砂の城を踏みつぶした。寅丸が眼を開いた時、泣きそうな子供達の眼が彼女を見ていた。

☆☆☆

「そうですか」

事情を聞いたナズーリンはそつげなく言った。寅丸は砂の山を手で固めながら「ふ、不覚です」などのたまっている。ネズミの赤い眼が驚くほど冷たい。

寅丸の周りには水着を着た数人の少年少女達。まだ10歳にも満たないだろう彼らは毘沙門天の「お姉さん」によくなついている。何かあるたびに話しかけている。寅丸はそれにいちいち反応してやる。にこにこしている分、まんざらでもないのかもしれない。いい。

「いいですかみなさん。城には堀が大切です。敵がせめて来た時にはこうやって……」

寅丸は砂の城の周りに溝のような物を手で掘る。水着で両手と両膝をついた格好はナズーリン的にはどうかと思うが、本人はいたって真面目である。ありつたけの築城術を使い。砂の城の防御を完璧にしていく。真田丸ならぬ「寅丸」なる出城も完備した近世城郭である。砂でできているから火計にも耐えうる。ただ毘沙門天の踏みつけには勝てないだろう。

「いいですか。ここに敵が侵入してきた時には鉄砲で一斉に打ち破ります」

寅丸は砂を固めながら変なことを言っている。どうやら今作っているのは「大手門」付近らしい。両手を砂まみれにして楽しそうに砂遊びをする戦いの神を、哀れとナズーリンは見下ろしている。

（城の敵はあなただろう。踏みつぶしておいて）

ナズーリン静かに想うが口にはしない。そのかわりにちよつと違うことを言う。

「まったく……ご主人様は城を蹴り飛ばすなんて進撃の巨人かなにかですか？」

「……しん……げき？ 何を言っているのですかナズーリン？」

「……」

冗談が通じないことでナズーリンが赤くなる。特にサブカル関係が空振りになる場合、とても恥ずかしい。彼女は仕方なく「村紗の漫画ですよ」と悔しそうに言った。あんな船幽霊に感化された自分もどうかと舌打ちする。

「まあ、いいです。ご主人様。貴方のパートナーは見つけておきますのでここで子供達と戯れていてください」

「面目有りません」

「お言葉の通りです」

面目なんぞない。全くその通りだとナズーリンは呆れかえった。彼女は手に持った

カメラを寅丸に向ける。

「それじゃあ撮りますよ。ご主人様」

「え、いえ。なんでですか」

「まあ、まあ。いきますよー」

ちよつとむかついたからできるだけ恥ずかしい写真を撮ってやるとナズーリンはシャッターを押す。どうせ最終的に河童に渡せば碌な使い方はされないのである。少しはお灸をすえておきたい。

——寅丸が砂の城の横でピースしている。子供達も周りにいる写真。

——立ち上がった寅丸が海をバックに微笑んでいる写真。

——ナズーリンがけしかけた子供達が寅丸にじやれついている写真。他数枚。

☆★☆☆

「ふう。ご主人様は終わりか」

ナズーリンは河童二名を助手にして歩いていっている。言っている言葉は「写真を撮り終わった」のか「名譽的な終わり」を示しているのかは分からない。両方を掛けているとも考えられる。ただネズミにとってはどっちでもいい。

「さて、次の獲物は……」

雑食性のネズミがカメラを手にあたりを見回す。元々は一輪あたりをてきとうに写

真にとっておこうと思っていたのだ。まさか最初の標的がご主人とは思わなかった。彼女はきよろきよろと首を動かす。

その仕草が小動物、としか言いようがなく愛らしい。だが中身は非情である。

一生懸命に探すが海水浴客が増えてきた関係で見つけにくい。ナズーリンはビーチパラソルがだんだんと浜辺に「咲いて」きたことにうつとうしさを覚えた。白い砂浜に赤、青、黄色の傘が立ち並んでいる。

「全く人間は暇だな。こんな水遊びのどこかいんだ。そう思うだろう？」

とナズーリンが後ろの河童に言う。おかつぱとそばかすの河童の少女が二人、顔を見合わせる。河童の水遊びを否定するとなると存在も危うくなりそうである。だが、ネズミは同意を求めるよりも独り言に近かった。直ぐに視線を他に移す。彼女にとって二人はモブ河童に過ぎない。

「あ、いたいた……なんだ敵とじゃれあっているのか」

バレーのボールが宙を舞っているのが見えた。

☆★☆☆

ぱっしゅん。一輪は体ごと海にダイブする。惜しくも伸ばした手はボールには届かない。彼女は「くっそー」と微笑みながら立ち上がる。海の水が体を流れる。紫の水着の間の肌色、そこを太陽が照らしている。

彼女は浅瀬でビーチバレーの練習をしていた。ちよつと離れた場所に落ちたボールをばしやばしやと水しぶきをあげて拾いに行く。

「ははは。惜しいな」

その姿を見ながら上白沢慧音が言う。ボールをサーブしたのか彼女なのであった。彼女は紅い水着を着ているのだが前を開けたパーカーを着ている。彼女の足首より少し上まで海に浸かっている。その程度の浅瀬だった。

やつとこさボールを取った一輪が構える。

「行きますよこいしさん！」

「よーし！ハローい！」

間延びした返事をするのは古明地こいしである。フリルの付いた花柄のアンダーが揺れる。両手を前で組んでわくわくしたような顔をしている。一輪はしゅつとボールを上にあげて、バンとサーブする。結構本気である。

ボールが勢いよくこいしに向かう。少し低い。こいしは無意識に腰を捻り、足を繰り出す。ボールの芯を「蹴った」のだ。勢いが増した球体が慧音の方向へ向かう。

「う、うわっ」

驚いた慧音だが、なんとかレシーブする。急な動きもできるのは運動神経が良いのであろう。それでも流石にコントロールはできなかつた。一輪が彼女達の遊んでいるエ

リアから離れていくボールを懸命に追った。ぱしゃぱしゃ足を動かす。

そしてまたこけて。海に飛び込んだ。途端にこいしや慧音の笑い声が響き。自ら上がった一輪も笑う。

浜辺からそんな練習なのか遊びなのか分からない光景をナズーリンは見ていた。おそらく一人一人がパスし合つて、落とさないようにする単純なゲームなのだろう。彼女は楽しそうにしている彼女達を呆れてみる。

「子供じゃないんだから何を遊んでいるんだ。全く」

ナズーリンはカメラを構えて適当に写真を撮る。彼女の敵は「慧音」で味方は一輪とこいしだろう。一応寺の者は「仲間」であるらしい。

——両手を組んでレシーブしようとする一輪。青い空をバックに上目遣いで天空のボールを見ている。

——後ろまわし蹴りでボールを蹴るこいし。ベストショットと言えるタイミングな写真。

——水の中で転んで海底にお尻をついて座ってしまった慧音。きよとんとした顔の後ろでボールが波に浮かんでいる写真。他数枚。

「ふう。これでよし。後は」

「ねえねえ。なにしてるの?」

「その声は」

ナズーリンがピコピコデジカメを扱っていると、真後ろから声がする。古明地こいしである。あれだけ写真を撮れば目立って当然だろう。ナズーリンはいきなりの事態に驚くこともせず。後ろを向く。海辺では一輪と慧音がまだボール遊びをしている。

「君か。遊びを続けなくていいのかい？」

「ネズミさんは遊ばないのかしら？ 勝負する？」

「いいや。遠慮しておこうか」

首をちよつと傾げるこいし。なぜかじろじろとナズーリンを見てくる。ネズミはネズミで水着なんて着る気はなかったから恥ずかしくなる。ちよつと頬が赤くなつた。

「な、なんだい？」

「うーん。バレーのパートナーは貴女でいいわ。それじゃー！」

こいしはそれだけ言う和海に戻っていく。ボールを持つている慧音に「こつちこつちー!!」と元氣いっばいに要求する。ナズーリンはいきなり現れたこいしがいきなり言ってきた言葉を理解しかねて、呆然と口を開けている。

「ぱ、ぱーとなー？ 私が？ あれと？ じよ、冗談じゃない」

古明地こいしと組めば振り回される事必定である。ナズーリンは頭をぶんぶん振つて、聞かなかつたことにしようとした。だがその肩をがつつと掴んだ者が居た。びくつ

とナズーリンはおびえる。野生の直感だろうか、敵意を感じた。

そろそろと後ろを向いてみると、そこにはじつとりした目のピンク頭。古明地さとりがいた。怒っているのかどうかナズーリンを冷えた目で見ている。

さとりはこいしと色違い、ピンク色の水着を着ている。片手に抱えている数本のコケコーラのペットボトル。これを買ってきたから慧音達とは別だったのだろう。妹の為に持ってきたのかもしれない。

「あ、あんたか。ど、どうしたんだい？ 姉妹揃って」

「あれ？ とはだれのことかしら」

「あ、ああ言葉の綾さ。気にしないでくれよ」

「……それじゃあ、そのカメラは何？」

「……旅行の思い出を撮るのがおかしいかい？ 私物だよ」

すらすら嘘をつくネズミ。だが、この手の「ペット」の扱いをさとりは慣れている。彼女は手を出して言う。どうせ私物とは嘘だろう。大方河童の差し金である。

「そう……じゃああなたも撮ってあげるわ」

「いい、いや。私はいい」

さとりはナズーリンの耳元に唇を寄せて囁く。地底のさらに「底」から響いてくるような声だった。妹を「あれ」呼ばわりしたことが奥の奥、核の炎のように燃え盛ってい

る。まるで地霊殿のようである。

「……もくずにするわよ」

「ひっ」

びくと体を震わせて、本当は小心者のねずみが素直にカメラを渡す。少し怯えた目になっっているが強がつて腕組をしている。さとりは「おこ」であるから、容赦しない。

「ポーズを取りなさい」

「だ、だれがそんなことをするものかつ！」

「……………」

無言で睨みつけてくるさとり。普通に怖い。ナズーリンはそわそわし始める。彼女が強気に出られるのはあくまで自らの身に危機が迫っていると思えない場合とご主人様に守られる場合に限られる。今は違う。

「び、びーすでいいかい？」

「……………両手でするならいいわ。はい。笑いなさい」

にこおとひきつつた笑みを浮かべるナズーリン。

——砂場でワンピース水着の少女がダブルピースをしている写真。他ネズミソ口多数。

——砂場で寝そべって可愛子ぶっている（させられている） 写真

——カメラに向かってウインクしている写真。

ナズーリンの撮影会が小一時間続き。さとりが彼女を解放した時、ナズーリンは憔悴しきっていた。彼女はきりきりと痛むお腹を押さえている。ストレスであろう。さとりは彼女にカメラを返しながら言った。

「データを消去していないか、後でチェックするわ。思い出ですから」
「……………ち」

「舌打ちしませんでした？ やはりデータを消そうとしたようですね」
「い、いえ。し、していません」

敬語で話している。へへ、と愛想笑いを浮かべてナズーリンは立ち去ろうとした。その時である。どこから飛んできたビーチバレー用のボールがナズーリンの頭に直撃した。彼女は「はうつ!？」と可愛い悲鳴を上げて倒れる。

☆

「い、いただ」

仰向けて倒れているナズーリンが頭を押さえている。

空の蒼さが染みるくらいにくい。そんなことを思っていると何人かの少女達が彼女を囲んで見下ろしてきた。

「大丈夫ですか、ナズーリン」

心配しているのかしていないのか、普通に聞いてくる一輪。髪が濡れて少し色っぽい。

「だいじょーぶ？ ねずみさん」

大きな瞳をぱちくりとさせているこいし。声が明るくて、聞きやすい。というか耳に響く。

「すまない。不注意だった」

唯一心配してくれているらしい慧音。おそらくボールをぶつけたのは彼女であろう。ナズーリンは体を起こして。体についた砂を払う。すると頭にひんやりした感触があった。驚いてナズーリンを見ると、額に付けられたコケコーラのペットボトル。持っているのはさとりだった。一応河童二人もいるが、眼中にない。

「ほら、これで冷やしなさい」

このあたりやはり、さとりは甘い。いや、優しいのだろう。ナズーリンは素直にそれを受け取る。お礼は言わない。性格である。彼女はもう一度全員の顔を見る。一輪、慧音、さとり、こいしに見つめられている。一応は心配されている。

そんな事には慣れていない。ナズーリンは無性に恥ずかしくなつてペットボトルを開けて、ぐびぐびと飲み始めた。何故そうしたのはよくわからない。

「おおー。いつきのみね！」

こいしがぱちぱちと手を鳴らす。やんやと一人で明るい少女。ナズーリンは炭酸に苦戦しながら思った。

(くそ。こいつらといたらペースが崩れる)

ぷはつと口を離すナズーリン。彼女はその場で胡坐をかいて座る。じろりと全員を見回して言った。文句をいってやろうと思ったのだ。この場なら「被害者」である自分の立場が強い、と打算したはずだった。

だが、その前にこいしに両手を掴まれた。こいしの眼はきらきらと光っている。すでに彼女の中ではナズーリンは大切なパートナーなのである。よく調教しておかねばならない。

「さあ、特訓よ！」

「ちよ、ちよつと待つてくれ。どういう、ことなんだ」

もう完全にこいし「ペース」である。この無意識の少女を止める方法などない。ナズーリンは抗おうとしたが、無駄な抵抗であった。無理やり立たされて引つ張られる。落としたカメラが砂浜に落ちる。

無意識の少女に引つ張られて、意固地の塊のような少女が海に引つ張られる。二人の可愛い足が波を跳ねのけていく。

さとりがカメラを拾う。結局手元に戻ってきた。

ナズーリンは賢将として、裏でいろいろと操ろうとしたらしいが何もかもがうまくはいかない。ある意味人生の縮図のようなものだろうか。賢いだけでは、足りないのだ。

その証拠に賢将の少女はこいしに投げ飛ばされて海にダイブさせられている。

『う、うわあ。ながぼ』

『それくらいでへばつたらだめよ！ 界王星のほうが辛いわ』

さとりはふうと息を吐いて、カメラを構えた。とりあえずいじめられているネズミよりも近くに、慧音と一輪だろう。二人も気が付いて、振り向いて微笑む。さとりはカメラを構えてシャッターを押す。

——慧音と一輪が並んで肩を組んでいる写真

——ぐったりしたネズミを介抱している膝枕で介抱しているこいしの写真

——どこから連れてきた子供とビーチバレーに参加し始めた毘沙門天の写真。

——子供に投げ飛ばされるナズーリン。

——腰に手を当ててコケコーラを一気飲みするさとり。その後ろでこいしが両手を

上げて応援している写真。

——砂浜で体操座りをしている一輪。整った顔立ちが際立つ写真。

——少し深いところで慧音がバタ足するこいしを引つ張って、泳ぎの練習をしている写真。

海の真ん中でこいしの両手を掴んだまま、後ろを振り返った。そこには海の家から借りたゴムボートに乗ったさとりがいる。彼女の手には多くの「思い出」の詰まったデジタルカメラが掴まれている。一応濡れないように気を遣っているのだろう。

ゴムボートには一輪ものつている。二人乗ればいっぱいである。そんなふうには海に浮かんでいゝさとりに慧音は声を掛けた。

「さとり。バレーは私と組もう。妹さんはあの、えつとネズミと組むそうだしな」

「そうね。霊夢はどこに行ったのか分からないけど……まあ、あの子なら大丈夫でしょう」

「そうだな。一輪さんはどうするんだ？」

一輪はボートの上から海を見ていた。緩やかな波を見ているだけでなんとなく時間を忘れてしまう。慧音は苦笑しつつ、もう一度呼びかけた。

「一輪さん」

「えっ？ ああ。すみません。そうですね……村紗がどこにいったかわかりませんから星と組むことにしましょう。負けませんよ」

ぐつとガッツポーズ。ふふんと鳴らす鼻。一輪の真面目は作られた真面目である。本当は寺の中で一番荒いこともするし、軽い。面倒ごとには自分から突っ込むことは秦こころの起こした異変で証明されている。

ちなみに「星」とは寅丸である。部外者に身内の名をいう時には呼び捨てである。

一輪の言葉に慧音とさとりよりも、こいしが反応した。

「私も負けないわっ!」

「……こいしさんはどちらかという年味方な気もしますけど……」

困ったように一輪が苦笑する。つられて慧音とさとりも笑う。一応寺側の者とアパートの者の対立もある。一応としか言いようがない。

「さとり」

慧音が言う。

「そのデジタルカメラはどうするんだ。正直、なんだろう。その写真がにとりの手に渡ればいいことには使わないと思うんだが……」

「ええ、そうね。これは預かっておくわ。そもそもストラップに『文』と書かれています。多分鴉天狗のものでしょう。あのブン屋にカメラと引きかえに写真の現像をしてもらいましょう」

「意外に抜け目がないな」

「……あのネズミも悪用されることは分かっていたはずでしょうに。はあ。あれはお仕置きをしたほうがいいんじゃないかしら……」

★★★

「甘いんだよなあ」

河城にとりはノートパソコンの前で呟いた。映っているのは「デジタルカメラ」で撮られた写真の数々。恐ろしいことにその全てがリスト化されている。そう、現代的なデジタルカメラは映したものを「送信」する機能がある。

本来ならば「送信」の操作をしなければならぬが、鴉天狗のデジタルカメラを手に入れて河童は勝手に魔改造を施していた。撮った写真は何も操作せずともとりのパソコンに「送信」されるのだ。しかも、盗聴器付きであるからカメラを持った者の周囲数メートルの音声はまる聞こえである。慧音たちの会話などにとりにはお見通しである。

要するにナズーリンを信用などしていないし、無事にデジタルカメラが帰って来るとも思っていないかった。ゆえに仕組み。機械学の造詣の深さ。腹の黒さ。河童の面目躍如である。

「ふう。あとみずみつとか霊夢さんの分がないけど、まあ後で追加しよう」

にとりはノートパソコンに映った「WinMac 10」へのアップグレードの準備が

整いました」と書かれたウインドを「スパムが……」と吐き捨てるように言いながら消す。彼女はぱたんとノートを閉じて、小脇に抱える。

彼女のいるのは海の家。客の入りようは上々である。

立ち上がって窓から外を見ると用意されたビーチバレーのコートが完成している。にとりはごそごそと懐をさぐり、懐中時計を取り出して時間を確認する。そろそろ「選手」を呼び出すのもいいだろう。

「おやぶん」

そんなことを算段しているにとりを呼ぶ声があつた。おやとにとりが後ろを見ると、赤い髪に三つ編みの少女がいる。お燐である。一輪ポスターを張り終わつたのか、帰ってきている。おやぶんとは半分ふざけて言っている。

「帰ってきたんだね。ごくろうさま。それじゃあ今から」

「あたかもビーチバレーに参加したいんだ！ いいかな？」

「あ？　へーそうなんだ。いいよ別に、それじゃあ誰と組むの？」

お燐は猫のような口を吊り上げる。

「おやぶん」

「……はあ。私は出ないよ」

「お空が見当たらないから仕方ないね」

「だからでない……!?!」

ぞくり、にとりは背筋に冷たいものが流れるのを感じた。あわてて周りを見ると、何人かの河童に取り囲まれている。まさかにとりはお燐に言った。これは頼まれているのではない。脅されているのだ。

「う、裏切る気か!」

「やだなあ、裏切るなんて。ただあたいはおやぶんをビーチバレーに引きずり出したいだけです。そうすればみんなから良いもの……おっと」

ちよつと本音がポロリ。みんなとはこの場合労働者側の「河童」であろう。にとりは「反乱」の二文字が頭をよぎった。先に二人にモブ河童を水着にしたことで、危機感をいだいた別の連中がにとりを陥れる気なのである。

「だ、誰が出るか! 水着なんて私は着ないぞ!」

お燐はニコニコしながら。何故か紙の束を取り出す。

「じゃじゃーん。たいむかくど」

タイムカード。出社時間と帰社時間を記録する紙である。お燐は両手に河童全員分のそれを持つている。すべての紙が「9:00出勤 17:30退社」になっている。全部である。明らかにおかしい。

それもそのはず経営者（にとり）が労働者の知らない時に打刻しているからだ。こ

の意味が分かるのは大人だけであろう。

「な、なぜそれを！ き、金庫に隠していたはずなのに」

「みんなでこじ開けたよ。これを使えばおやぶんもビーチバレーに出てくれるね？」

獅子身中の猫。お燐を野放しにし過ぎたことをにとりは後悔した。仮に彼女がタイムカードを持つて労基に駆け込めば、にとりは終わる。しかも入れ知恵したのは明らかに他の河童である。お燐自身が「みんな」と言っているのだ。

のちに「お燐の乱」とにとりが個人的に日記に書く事件は、にとりの敗北で終わった。結局勝負に引きずり込まれたのだ。

★☆☆★

——みなみつ。 みなみつ

やわらかい女性に声と共に、ゆっさゆっさと体が揺らされるのを村紗水蜜は感じた。彼女は「う、うーん」と唸り。顔を振る。起きたばかりにぼやける視界。肩の傍がほのかに暖かい。

「起きましたか？」

水蜜の目の前にいたのは彼女の師である女性。聖 白蓮がいた。黒のビキニにス

カートをはいた美しい女性である。水蜜がそれが分かってびっくりする。あわててその場で正座してあわあわと何か言う。

「すみません。聖様。こんなところで」

「よく寝ていましたね。少し起こすのをためらってしまいました」

「……ちよ、ちよつと疲れてしまつて」

水蜜はそこで思い出したように驚いた。自分は今メロンのような明るい緑の水着を着ている。こんな姿で寝ていたのかとなんとなく両手で体を隠す。意味などないが、少し恥ずかしい。

彼女はそれで立ち上がろうとしたが、聖が止めた。しーと人差し指を唇にあてて、この聖人はいたずらっぽく笑う。どこことなく少女のようだった。

横では霊夢が村紗と同じように眠っていた。水蜜は「あつ」と思い出したように声をだして。直ぐに両手で口を押える。聖はそんな彼女を優しいまなざしで見つめる。

——いつの間に仲良くなったの？

とても聞いているかのようなうだ。水蜜はなんといえはいいのかわからず。そもそも声を出しては横で寝ている霊夢を起こしてしまいそうだった。だから聖はにこりと笑つて、両の掌をみせて「ゆっくり」とジエスチエーで伝える。

水蜜はこくこくと頷く。

微笑みながら聖もこくこくと頷く。それで立ち上がってそろりそろりと後じさり、立ち去っていく。何をしに来たのだろうと水蜜は思ったが、わからない。聖は「パートナー」を探しに来たのだが、つつい水蜜と霊夢と一緒に寝ているのを見て言い出せなかったのだ。

水蜜は正座を崩して胡坐をかく。すぐにビキニでそれをする少しいけないと思ひ、何故か女の子座りをする。しつくりこない。一人で何をやっているのかと苦笑してしまふ。

横を見る。だらしなく巫女が寝ている。水蜜はまたほつぺたをひっぱってやろうかと思ひ、手を伸ばす。だが、やめた。とりあえず髪を撫でてやった。

いたずらでもなんでもなく、二回三回そうした。水蜜はそしてぼそりと呟く。

「可愛い、妹分……。みたいなもの、なのかな？」

自分の言葉に戸惑いつつ優しく手を動かす。いつもの作った表情でもなく、敬語でもない。素の声だった。

★☆☆★

困ったことに聖は相手がない。彼女は遠くからこっそり水蜜と「本来は凶暴な巫

女」を眺めつつ、困ったと頭を掻いた。彼女は大きな松の木に背中を預けている。海岸に防風林として植えられているのだ。

「困りましたね。私も、あなたも」

誰かに聖は言う。松の木の後ろに「先客がいる」。それは返さない。青髪がちよつと見える。聖とは背中合わせ。

「私としてはあなたと組むのはやぶさかではないけれど……どうかしら？」

相手はすぐには答えない。本当は組みたかった相手はキャプテンに取られている。少しの沈黙のあと。松の木の後ろから声がする。

『いいわ』

聖は微笑む。

★★★

お空はうろろうろしていた。どこに行ってもお燐が居ない。彼女はにとりがビーチに居るように言った事を普通に破り、道を歩いている。

猫背、というかうなだれた肩。少女としては大柄な彼女だが、とぼとぼ歩く。黒の上着とシヨートパンツにサンダル。動きやすそうな恰好でも、彼女の気持ちは重い。

核の力。有り余るパワー。それが一気に失われてからは何をやっても悲しくなる。元々自分の力だったわけでもないのだが、一度手に入れてしまつてからは完全に依存していた。今のお空の眼は死んだ魚のようなものだ。

「はあ、どうせビーチバレーなんて勝てるわけありません……」

お空は意外に言葉遣いは丁寧である。ただ声が本当に暗い。今、お燐を探しにきたのだが、本当は逃げることに目的が合つたりする。こいしやお燐の前ではかろうじて強がつてみることもあるが、今はそんな気力はない。一人だからだ。

燦々と照り付ける太陽。それに負けない核融合の力をお空は失っている。日すらも恨めしい。

彼女は当てもなく歩く。

汗が頬を伝う。潮風が顔を撫でる。

坂を上る。道の途中で駄菓子屋を見つけて入ろうとしたが、やめた。外の壁には一輪のポスターが貼つてある。

お空はそんなふうに興味なく歩いている。すると、ふといつもは気にならないものが眼に入った。道のわきにある石の人形。いや、正確に言えば「お地藏さま」である。お空はぼけーとそれを眺めて、一分くらい立ち尽くした。

それは単なる気まぐれである。人間はお地藏さまに手を合わせることを思いだして、

お空は両手を合わせてみた。試しに願いも言ってみる。

「どうか、強くなれますように」

いつても無駄なことくらいは鳥頭でもわかる。神様は信じている。というか、見たことがある。お空ははあと大きなため息をついた。現代ではあまり力になってくれるとは思えない。

それでも聞いている者はいたらしい。お空の後ろから声がある。いつの間にか「彼女」は近くにいたのだ。もしかしたらお空の暗さを見て心配しているのかもしれない。

『その子はまだ、修行中の身です。あなたの願いをかなえることはできないでしょう』

お空はびくつと身を震わせる。声の主は続ける。「彼女」はお地藏さまだったことがある。

『不本意ですが……その子の代わりに力になりましょう。それに貴方には以前からいい事が山ほどありました』

説教をするような口調。

『そう、あなたは力に頼りすぎている』

23話 B

とあるポスターが話題になっていた。

モデルであろうか、スタイルの良い青髪の美少女とさとり様の描かれたそれはビーチバレーの告知するものである。貼つてあるところと言えば節操がない。駅はもちろんのこと、コンビニ、ガソリンスタンド、街役所、小さな建設会社の壁。とにかくいろいろなところにべたべたと張り付けてあるのである。

それを行ったのは主に赤毛の猫であるが、それはもはやどうでもいい。このビーチにやって来る人々は少なからずポスターを目にした。なんといつても駅の改札近くに貼られているのが大きい。そして「さとり様も出るよ」と謎のキャッチフレーズも頭に残る。さとりとはいったい誰のことなのだろう。

そんなこんなで日が高くなるほど河童の海の家の前には人が集まりつつあった。ただの海水浴客もいれば、近隣の住民もいる。

海の家の前に整備されたビーチバレーのコートの周りでは河童の数人が肩から下げた番重（立ち売り箱）に飲み物やお菓子を入れて売り歩いている。商機は見逃さないのが河童である。もちろん買ってくれた人には雲居一輪の表紙のパンフレットを渡し

ている。

その雲居一輪。海の家の中で河城にとりの胸倉をつかんでいた。

さつき帰ってきてみれば大量の客。しかも自分を見て騒いでいる。彼女は自分のポスターの存在を知つてはいたが、ここまで出回つていとは思わなかった。いや、正確に言えば必死に遊んで忘れようとしていた。どうせ撤回することはないだろうと思つたのだ。

それが甘かった。普通に流通している。

「かつばあ……」

「たんま。たんま」

どうどうとにとりは両手を上げる。真っ赤な顔をして胸倉をつかまれると、どうしていいのか微妙に困る。しかし、そんなにとりも着替えている。

にとりは頭に緑の帽子を被つている。真ん中に「L」の文字の入ったもので幻想郷で被つていたものと少し違う。それに可愛らしいふわりとしたツインテール。そして彼女も水着に着替えていた。

上下水色のビキニタイプ。胸元にオプショで白のリボンが付いている以外は質素なもので、布の面積も多い。しかも上からパーカーを羽織っている。それが一輪の癪に障つたのであるが、河童的にはどうでもいい。

「最初から商売するって言うていただろ。それにポスターを作ることもあんたに文句言う権利はないよ」

「な、なんで!」

「そりゃあそうだろ。酒を飲んで罰で働いている奴に人権……妖怪権があると思ってるのか? 全く払わなくてもいいけど特別に時給四百円だしているんだから我慢してくれよ」

「よ、四百円……!? そ、そんな薄給で働いていたの……?」

一輪は別の衝撃を受けている。最低賃金などない。ちなみに時給四百円から控除もされる。労働規約も一輪はじめ他の妖怪も知らない。にとりはパーカーの襟を直しつつ、そこでだと続ける。

「あんたにやってほしい仕事があるんだよね」

「な、なんですか」

一輪はびくつと怯えた何をさせられるかさっぱりわからない。売り子程度であれば今までやってきたので問題はないだろう。しかしにとりはそれくらいで終わらせるようなものではない。だが、はつきりと伝えれば逃亡する可能性もあるので言わない。

にとりは店内を見る。テーブルは客で埋まり活気がある。河童達はせわしなく働いている。できれば他の少女も働かせたいのであるが、ビーチバレーという別の仕事があ

る。どちらかと言えばそちらの方がもうかりそうである。

別に観覧料を取るわけではない。ただにとりには「腹案」がある。彼女は一輪の手を掴んだ。

「あんたにしかできないことをやってもらいたいんだ。他の奴には任せられないんだよ」

「……な、何をさせるつもり……？」

「まあまあ、こっちに来てくれよ」

にとりは一輪の背中に回りぐいぐいと押して、外に連れ出す。一輪が外に出るとビーチバレーコートを囲んでいる人々が騒めいた。なかなか人が来ている。一輪は「ちよ、とまで」とわめくがにとりはコートの中心に彼女を連れていく。

ざわざわ。たまにカメラの光が一輪を映す。

青い髪に白い肌、紫のちよつと大人な水着。長い間修行をしていたからか、どこもなく清楚な印象がある。ほんのりと赤い顔で一輪はあたりを見回す。彼女は恥ずかしい気がして、体を抱くように手を回す。

「それじゃ、はい」

にとりは一輪にカンペを渡す。この青髪の少女は何も考えずにもらつてしまう。あとは、にとりは子分の河童を呼んでマイクを取ってこさせる。それも一輪に渡した。

「それじゃ、宜しく」

「えつ、え？」

にとりともう一人の河童はそれだけ言つて海の家に戻つていく。もつとわかりやすく言えば、一輪を一人だけ置いて言つた。彼女は眼をぱちくりさせている。その仕草が可愛い、いきなり衆目の中に放置されてしまった。

手元のカンペをみるとこう書いてある。

——レディース&ジェントルメン。長らくお待ちいたしました、これから私、雲居一輪主催のビーチバレー大会を始めます（ここで投げキッスすること）。今日は私の為に集まってくれてありがとう、とつてもがんばるからみんな応援してね！（以下略）

一輪は眼が泳いでいる。これをここで言うとなると、切腹する方がいいかもしれない。全員に自己紹介もすることになっている。一輪はぶるぶると震えている。しかし、なんだなんだと大勢の観客が増えていく。

一輪はマイクを持っているのだ。それを見れば「何か始まる」と皆が感づいてもおかしくはないだろう。冷酷な河童はそこまで計算している。灼熱の太陽の下冷汗が体を流れる、うつつすらと汗の滲んだ彼女は、悲しいことに美しい。

『あーあー』

エコーの利いた声が響く。一輪の者ではない、にとりの声である。彼女は海の家の前

でメガホンを手にしている。

『お待たせいたしました。今よりビーチバレー大会の開会式を始めます!』

一輪ははつとした。観客たちは全員にとりを見ている。まさか躊躇しているのを見て、にとりが助け舟を出したのかと彼女は勘違いした。にとりはメガホンを口に当てたまま、声を出す。

『それじゃあ、今からルールの説明と挨拶を兼ねて主催者である雲居さんに引き継ぎます。それじゃあ後はどうぞ』

振ってきた。にとりは一輪の退路をコンクリートで固めて塞いだ。このまま黙っていれば一輪が助かる道はなくなったのである。こうなつては道は一つ、開き直るしかない。

大勢の期待した瞳が雲居一輪を見ている。彼女はマイクを両手で胸の前で掴んでいる。今にも泣きそうである。勘違いしてはいけないのは一輪はあがり症ではない。付喪神の異変の時に派手なバトルを戦ったこともある。水着であることが恥ずかしいのである。

一輪はぎりりと奥歯をかみしめた。河童の策略にあれよあれよと引つかかった自分も腹立たしいが、おどおどしているのも見苦しい。お釈迦さまの苦難に比べれば苦行には入るまい。比べられても困るかもしれない。

それに身近でもテレビに出て頑張っている半分霊のアイドルがいるではないか。一輪は彼女の顔を一瞬思い出した。なんとなく空を見ると、蒼いそこに半分霊の彼女の笑顔が見える気がする。「がんばれ」と言っているかのようだ。別に仲がいいわけではない。

一輪は意を決した。マイクを手に勇気を振り絞る、ちよつと内またである。元々ノリだけはよい。

「れ、れでえーす……じえんとるめーん!!」

「&」とはどう読むのか知らない。それを感じさせない明るい声。

「お待たせしました! これから私、雲居一輪しゅ、主催のビーチバレー大会を始めます!!」

一輪は投げキッスをできない、とりあえずウイנקで場をお茶を濁す。と本人は思っているが観客は受けた。おおと騒めく。主催もこれで名実ともに一輪のものになった。ぐんぐんファンが増えていく。

「き、今日はわ、わた……みんなの為に集まってくれてありがとうございます! みんな! 頑張るから応援お願いします!!」

ぱちぱちと拍手。にとりは「ちっ」と舌打ち。ちよつと改変している。赤い顔で一輪はカンペをめくりつつ、説明を続ける。

「それじゃあ、ルールですが。二人一組の八チームで、あ、こんなにいるんですね……あ、ちが、今のは」

笑いが起きる。一輪はこほんと一息。

「試合はトーナメント形式で行います……一回戦はくじ引きで対戦を決めます。チームの紹介は試合の時にしますから楽しみにしていってください」

いい声である。毎日お経を唱えているだけはある。単にカンペを読んでいるだけとは思えない。そんな彼女の前におかつばの河童が走り寄ってきた。手には箱、彼女も顔が赤い。競泳水着を着ている。

おかつばの河童は一輪に耳打ちする。箱の中身ついてだ。一輪は頷いて言う。

「え、えー、この箱の中にはチームリーダーの名前の書かれたボールが入っています。それを、え？ 今引くの？」

こくりこくりと河童。一輪は箱の上に空いた場所から手を入れる。片目を閉じて、舌をちよつと出す。無意識だろうがあざとい。彼女はボールを二つ取り出した。片方には「いいし」片方には「とらまる」と書かれている。

「いいし……とらまる……のボールが出ました！」

観客はいいしやお空と呼ばれてもわかりはしない。しかし、声が出た。

「よんだー!？」

「わっ!？」

いつの間にか一輪の後ろにこいしが立っている。フリルの付いた花柄のアンダーが印象的な水着を着た少女、古明地こいしがいる。片手には首根っこを押さえたナズーリンがぐったりしている。何があったかはわからないが、振り回されていたのだろう。

どよめく会場、こいしが観客を振り向くと髪が揺れる。いきなり現れた美少女に会場の人たちは釘付けである。ネズミなどどうでもいい。

一輪は驚きながら、言う。カンペにどのチームが出てもいいようにそれぞれの紹介文が描かれている。

「一回戦はあのさとり様の妹である古明地こいしさん率いるお元気玉チームの登場ですね。こいしさんいきなりですが大丈夫ですか？」

——さとり様のいもうと

——あのさとり様の

——それなら期待できる

観衆はさとのりの何を知っているのか、口々に言い合う。こいしはマイクを取って言う。

「みんなー私に元気をわけてー!!」

唐突な可愛らしいセリフ。こいしは両手を上げて体を伸ばす。体のラインが細い。

拍手が彼女を包む。求めているのはそれではないのであるから、こいしはちえーとマイクをネズミの頭にのせる。ピクリとも動かない。

(ここで起きれば妙なことを押し付けられるかもしれない)

ナズーリンは気絶したふりを続ける。砂浜に体を投げ出したように倒れたままだ。一輪はその頭からマイクを取り、続ける。構図的に足もとに倒れているナズーリンがシニールである。

「もう一つのチームは寅丸チーム……これは私のチームですね」

一瞬「おお」とざわめきが起こり、謎の拍手が起こる。一輪ははつとして、頭をかく。腕を上げた時に腋が見える。横ではこいしが拍手している。ノリであろう。それはそれとして一輪はちらりと遠くから見守るにとりを見る。

一輪の眼は「自分の自己紹介はいらないですよね」と言っているのにとりはにっこり笑って、両手でバツをつくる。顔をゆがめた一輪はカンペを見る。

——セクシーコンビ一輪寅丸ペアの登場。

と心の中で読んだところまでで一輪はカンペを隠す。これを全て読めば、いろんなものを失うことになるだろう。一輪は危ないところだった。しかし、ここからはアドリブでやらなければならない。

ちよつと困った顔をする一輪。顎に手をあてて、片足を上げる。考える仕草。一度目

を閉じて、直ぐにぱちぱちと瞬き。そしてよしと考えがまとまったが小さなガッツポーズ。彼女はマイクを両手で持って声を上げる。

「えー、こいしさん率いるチームの対戦するのは私となんとあの毘沙門天が登場します!!」

びしゃもんでん、てなんだろうと観客。もしかしたらアイドルの名前か何かかもしれない。一輪は戦いの神がビーチバレーに登場するというニュアンスで言ったが、伝わるわけがないのである。

「普段滅多に姿を現さないのでもとても貴重です。ご利益があるはずですよー」

引きこもりかな、と観客。一輪は知らず知らずに自分よりも相方の評価を下げている。しかし、それも「毘沙門天」が姿を現すまでのことであった。急にコートを囲む観衆の輪が乱れた。見れば幾人かの河童が交通整理をしている。

その真ん中に立っているのは金髪に白い水着を着た、麗しい姿の少女であった。

寅丸 星である。闘いの神としての名に恥じず、河童の従者を連れての登場であった。実際は逃亡しようとしたので河童に囲まれているだけである。

すました顔で両手を組んでいる寅丸。内実はともかく凛々しい顔立ちをしている。

あれが「びしゃもんでん」かと感嘆の声が上がる。もう完全に愛称になってしまった。

「……」

彼女は沈黙して騙らない。両腿が震えているが、表情は涼しい。それが何とも言えない美しさを表している。水着姿を大勢に注目された程度で揺らぐのでは、毘沙門天としてはどうなのだろうか。

実は観衆の中に他の幻想少女達もいるのだが、誰も声を上げない。むしろほつとしている。たまたま寅丸は運が無かった。一輪には海に來た時から欠片もない。だが、そんな彼女だから寅丸が強がっているのが分かる。

優しい目をする一輪。一緒に恥ずかしい思いをする仲間ができてうれしいのだろう。こいしはちよつと違う。ナズーリンなど眼中にない。

一輪はカンペを取り出して読んだ。

「二回戦は私と毘沙門天。そしてこいしさん率いるチームが戦います。そしてこの大会で優勝したチームには豪華……？ 商品のお米20kgがプレゼントされます……」

景品のくだりはトーンダウンしている。一輪としてはお米などどうでもいい。ただ変な景品なので笑いはおこった。一輪はとりあえず最後の結びをする。胸をちよつと張って、声をあげる。

「さあ、優勝するのはどのチームでしょうか。最後まで私の応援よろしく願います
！」

カンペをそのまま口に出してしまつたが、気付かずに一輪はぺこりと頭を下げる。つ

られてこいしもさげる。そして拍手が彼女を包んだ――

「全部やり切った……しびれるなあ……」

頭を下げてたまま一輪は妙な達成感を覚えている。自分の応援をお願いしているなどと思いつくのは少し後のことである。

★☆☆

海の家の際で霊夢はにとりの両頬を抓りあげた。やわらかいほつぺたが容赦なく左
右に延ばされ、にとりがわめく。

「い、いやひやいやよ霊夢さん」

「うっさい！ なによあの一位の景品は！ 米ってバカじゃないの!？」

「ば、ばって欲しいだろ、いででで」

「あんなの欲しがるなんてさとりくらいよ!」

身内を下げつつ霊夢は抗議する。だが欲しがっているのは本当なのでよくわかって
いるともいえる。

垂涎の景品と聞いていたのに話を聞いてみたら「米俵」である。裏切られたと思つて
も仕方ないのかもしれない。霊夢の思っていたのは「金目のもの」なのである。とこと

ん俗世にまみれている。

霊夢はにとりを抓っている指にさらに力を入れようとして、片腕を掴まれるのを感じた。みれば水蜜がなだめるような笑顔をしている。水蜜のしなやかな腕を霊夢に絡ませるようになってくるので妙にあつたかく、なれなれしい。

「まあまあ霊夢さん。いいじゃないですかー。どうせ遊び半分なんだからビーチバレーを樂しめば」

「そんなのするなら寝ておきたいんだけど」

「いい、いいがふえんはざじえて」

にとりが一瞬のスキについては慣れる。両手で顔を包むように頬をかばう。どこことなく可愛らしい。だが、彼女は霊夢をキツと睨んで指をさす。

「もうひどいじゃないか。そもそも霊夢さんが私への借金を返すために来たんだから、ちよつとくらいは協力してくれてもいいだろ！」

「昨日イカ釣り漁船で借金分は返したわ！」

にべもない。霊夢はそれだけ言うのと踵を返した。彼女の気持ちははつきりしている。あの雲居一輪なる入道連れていない入道使いのような恥ずかしい真似をしたくないのだ。衆目の中で水着でバレーなど拷問に近い。

だから霊夢は海の家を出ていこうとした。水蜜も慌てて追おうとする。その背をに

とりが見ている。この河童の青い双眸は温度を感じさせない。いつも騒がしく、いつも何かにきらめいている彼女も黙っていれば、印象が変わる。

河童は言う。

「本当に霊夢さん。優勝の景品はいらなんだね」

霊夢は振り返る。なんと言わせる気なのかという顔であった。ただ、河童はその顔を見て別のことを思い出していた。今日の朝、いや朝と夜の狭間で巫女と話した数分のことである。この世界にきてよかつたのか、どうか。

そんなことは分からない霊夢はびしやりと言った。

「いらないわよ」

にとりは「そう」と口に出す。彼女は一度霊夢を見て、ふと今朝のことを思い出す。彼女は柄にもなく霊夢に「こちらに来て楽しいか」と聞いた。それに霊夢は「悪くない」と答えることがにとりの心に刺さっている。

なぜ、刺さっているのかは彼女はまだ言う気はない。だが、にとりは霊夢に対してこういった。

「そっか。異変の真相の一部。私の知っていることはいらなんだ」

「……はあ。」

こいつは何を言った。霊夢は困惑する。無意識に水蜜をみるとこの船幽霊も驚いた

顔でにとりを見ている。河童は店の奥、日の光の当たらない場所で目を光らせている。霊夢は彼女に近づいてパーカーの襟をつかんだ。

「今のどういう意味よ。あんた何か知っているの？」

「……二度は言わないよ」

「はきなさい。さもないと」

「霊夢さん」

にとりの声は冷たい。表情は変わらない。妖怪として、人間の霊夢を見ている。

「私は嘘が得意だよ。きつと霊夢さんを騙すくらいできる。本当のことかどうかわからないときとうな事なら、いくらでもいうよ」

「あ、あんた」

「なに。取って食おうってんじやないよ。尻子玉も触らない。ただ、ビーチバレーで優勝すれば知っていることを話すっていうんだ。悪いことじやないだろ」

「そ、それだつて保証はないじやない」

「そうかな。でも、いま私が何を言っても疑わしいと思うけどね。優勝すれば垂涎の景品。それは嘘じやないだろ？ 約束するよ。できれば、だけどね。もちろんこの『景品』

は霊夢さんだけの特別だから、他の人に漏らしたら取り消すよ。ああそのムラサもそうだよ」

にとりは霊夢の襟をつかんだ手をゆっくりと離させる。彼女数歩離れて、霊夢を挑発するように笑顔を見せる。顔をゆがめて、口角を吊り上げただけの顔。本気のいたずらをするときの黒さ。

「なーに霊夢さん。相手は……」

相手は寺の住職。聖人と名高い体術の使い手。

相手は天空の住人。天人という稀有な存在。

相手は毘沙門天。言わずと知れた戦いの神。

相手は閻魔王。聡明な頭脳を持った裁断の主。

両手を広げる。にとりは首をちよつと傾けて霊夢を見る。全て闘うわけでもないが、霊夢の相手を説明してくすりとする。

「巫女様にとつては軽いよね。この異変の一面はここさ。勝てなきや教えてあげないよ」

24話 B

異様な熱気に包まれている。

輝ける太陽は一年で最も世界の天を照らす。「彼女」も今日の試合を観戦しているかのようなだった。白い砂浜に集まる群衆、それらが囲むのは一枚のビーチバレーのコート。少女達に配慮してか、わずかに低いネット。おかつば頭の河童が座る審判台。

それを挟んで向かい合う、二組のチーム。片方には青い髪のリと毘沙門天。もう一つには地底の少女とネズミ。四人は思い思いに体を動かして、準備体操をしている。その一人である雲居一輪は空をふと、空を見上げた。

「おてんとさんもみている、のかな」

そんな彼女へ声がかかる。

「一輪」

「はい」

見れば虎のような髪の少女。寅丸が彼女を呼んでいた。その手には丸いボールが一つ。ビーチバレーのボールだった。屋内でやるバレーよりも少し大きい。寅丸はそれをぼんと投げた。一輪は両手で胸の前でキャッチする。

「こちらからサーブだそうです。まずはお願いします」

一輪は頷く。にやりと不敵に笑うのは彼女の勝負強さであろう。恥ずかしい水着でも勝負となればテンションが上がる。

一方の古明地こいしは肩を伸ばして、屈伸して、ジャンプをしながら気をためている。相棒のナズーリンは砂浜に体操座りをしてぶすつとしてしている。彼女からはあまりやる気は感じられない。

(最終的にこ主人様と敵対している。ああ、もう。幻想郷のやつらは扱いにくくて嫌いだ！)

心の中で悪態をつくがナズーリンはすました顔をしている。ただ、どうやってうまく負けるかを考えていた。とりあえず一輪・寅丸ペアと敵対しているが、考え方を変えれば相手に勝たせればネズミとしてはプラスになる。何より面倒ごとから一抜け出来る。

「よーし。かつぞー！」

やる気満々なこいしは両手を振り回している。ナズーリンはそれを見て、「あれ」をどうするかを考えている。

★☆☆

ピーとおかつぱの河童が笛を鳴らす。ほつぺたを膨らませて笛を鳴らす姿が観客からくすくすと笑いものになっている。そもそも審判というが、おかつぱはビーチバレー

なんてやったことはない。ノリとやる気で頑張るようにとりに言われているだけだ。まずは一輪がサーブ。

彼女は手でボールを数回弄ぶ。感覚を掴んでいるのだろう。ふう、はあと息を吐いて意識的な呼吸を行う。バレーは長方形のコートの外からサーブを撃たなければならぬ。彼女は前衛に寅丸を残して下がる。

爛々と光る一輪の瞳。彼女の対角線にいるのはこいしだった。彼女もにやりと笑う。

——いきますよ。こいしさん！

——髪が青いってスーパースイヤー人ごととみたい！

アイコンタクトを終えて、一輪がもう少し下がる。

観客は微笑ましい目で見ている。それはそうだろう、こいしにしろナズーリンにしろどう見ても少女である。スポーツとしてのエンターテインメントよりも彼女達の可愛らしさに期待しているのだ。だが、その期待は全て打ち砕かれることになる。

しゅつとボールが空に浮かぶ。高く上がったそれより、一瞬遅れて一輪は砂を蹴る。前に出ながらのジャンプ、右手を伸ばすように天へ向ける。ジャンプサーブである。

ボールがぼしつと音をたてて、飛ぶ。速い。

その瞬間である。こいしが思いつきり前にダツシユする。

「ネズミさん！ かがんで！」

「へ？」

ナズーリンは無意識に無意識なこいしの命令を聞く。僅かに腰を落として、曲げる。こいしは猛然とダツシユしてその背中に、

乗った。

「げっ！」

ナズーリンが情けない声を上げながら砂に倒れる。こいしはネズミを踏み台に空を飛ぶ。

少女が宙に浮かんでいる。そこに飛んでくるサブボール。こいしはくるりと回転しながら足を繰り出す。彼女のスカートが揺れる。胸のフリルがなびく。そんな彼女のオーバーヘッドキック。

ボールの芯を打ち抜く蹴り。ぼしっと高い音。あつけにとられる観客。鋭い角度で一輪達のコートへ打ち込まれるボール。

一秒にも満たぬ時間。動けたのは毘沙門天だけだった。前衛にいた彼女は反応する。考えていない、横に全力で飛んだ。腕を伸ばしてこいしのキックボールをレシーブする。ぼんと上にあがるボール。

「一輪！」

寅丸の声に前に出たのは青髪の彼女。やっどこいしが着地する一瞬。

一輪は全力で走る。浮かんだボールは絶好のスマッシュチャンス。彼女は飛んだ、弓なりに体をそらして落ちてくるボールにスマッシュを合わせる。振りぬかれる腕、ボールはネットへ突き刺さった。

一瞬の静寂。ぽとりと地面に落ちるボール。ぴーと審判が手を上げる。それが契機だった。

歓声が空気を揺らした。囲んでいる群衆はパチパチと手を鳴らし、何かを叫び、口笛を鳴らしている。今の数秒で魅了され切っていた。事実数秒しかたっていない今を、もつと長く感じた者は多いだろう。

こいしはすつと立ち上がって、にこにここと両手を振り回す。くううと悔しがる一輪、肩に手を置く毘沙門天。砂から立ち上がるネズミ。点を取ったというのにナズーリンは体についた砂を無言で払っている。ゴムに纏わりついて気持ちが悪い。

鳴りやまぬ声。オーバーヘッドをする少女が全ての固定概念を奪い去っていた。老若男女問わず一気にボルテージを上げている。多少男性の方が高いだろう。

そんな観客の中に一人の青年がいる。別にどうという事はない水着を着た青年である。彼は一輪をなんとなく見てしまっている。それこそがこの大会を主催した河童の狙いだった。

青年に近づく一つの影。小さな背が河童の一人だと分らせる。ただ、今の状況では

殆どの者が見向きもしない。彼女はモブ河童と言えはいいのだろうか、にとりの手下の一人である。肩から掛けたボックスには清涼飲料水が詰まっている。しかし、今はそれを売りに来たのではない。

彼女は言う。おにいさんおにいさんと。青年はそれに気が付いて横を向けば河童。その手には「ブロマイド」。見れば雲居一輪が水着姿でくいこんだ水着をなおしている姿。河童は指を二つ立てる。

青年。真顔になり指を一つ立てる。

河童首を横に振る。右手の人差し指を一本、左手を五本。青年は考えてぼそりという「にまい」と。河童はさらに指を二本たてた。青年は頷く。そして二千円を河童に渡して「商品」を受け取った。

河童は人ごみに消えていく。

★☆☆★

「へーけっこう順調だね」

海の家でにとりは遠くから試合を眺めながらやってきた河童の報告を聞いている。横には無然とした顔をしている霊夢。彼女は聞いた。

「何が順調なのよ、にとり」

「あ、ああ？ 試合だよ。見てればわかるだろ？ すごい熱気で飲み物も売れてるよ」

「まあ、あれだけ盛り上がるとは思っていなかったけど……」

霊夢は腕を組んでにとりを睨みつけている。警戒しているのだろう。

「霊夢さん。そんなに警戒しなくてもいいよ。私は逃げも隠れもしないから」

「異変を起こした奴を信用なんてできるわけないわ」

「いや、私は起こしたわけじゃないから。依頼を受けただけだよ、アウトソーシングさ」

「あ、あう。意味が分からないんだけど」

「おっとこれ以上はこの話はやめておこう。ぼろつと何かを言ってもつまらないしね」

そこに近づく緑の水着の少女。短い黒髪に細身の彼女は村紗水蜜だ。両手にはビンに入ったラムネ。ビー玉がころころと転がる妙なピン。

水蜜がラムネを手にとっそりと霊夢の横に来る。すうとキンキンに冷えたラムネを霊夢のほっぺたの近くに持っていく。そして声を掛けた。

「霊夢さん」

「……」

無視する。気が付いているわけではないが水蜜を無視するのは霊夢にとっては自然かもしれない。水蜜は仕方なくラムネを押し付けた。

「つめたっ!? あ、あんた何するのよ」

「……うりうり」

水蜜は無視された恨みからかラムネをさらに彼女へ押し付ける。肌には直接当てられた冷えたラムネ。霊夢は背中にそれを当てられて「ひっ」といつもの彼女らしくない声を上げる。もちろん反撃として水蜜の剥き出しのお腹をつまみ上げる。

「いて、いてでで霊夢さんぎヴ、ぎぶ」

「あ、あんた。いみがわ、わかんないのよ」

にとりは口を半開きにしている。仲のいいことだね、と呟く。妖怪と人間が戯れるのは、幻想郷では殆どあり得ない。にとりはそれを思ってみたが、どうでもいいことかと思考を切かえる。

「ところでミズミツ」

「はい、水蜜はここにいますよ。なんですか」

「そのラムネ……海の家のだろう。まあ、いいけどさ。後々千円くらい徴収するから」

「が、がめつい。霊夢さんどう思います?」

「……………」

霊夢はビーチバレーを見ている。こめかみがぴくぴくしているのは怒っているからかもしれない。水蜜は苦笑をしつつ、ラムネを霊夢に渡す。巫女はふんと言いなから、取るとぐびぐびと飲んで炭酸を喉に直撃させる。

「げほっげほ」

「ほらほら、仕方ありませんね霊夢さん」

「あ、あんたこれ、た、炭酸じゃない」

「いつから炭酸じゃないと錯覚していたんですかね？ ラムネって炭酸なんじゃないですか」

「うちは水か麦茶が普通なのよ！」

経済的理由で。水蜜はそれにもくすりとして背中をさする。

「どうどう、そうなんです。今度霊夢さんちに遊びに行つてもいいですか？」

「いいわけないじゃない」

「固いこと言わず。ケーキ持つていきますから」

「置いて帰りなさいよ」

「宅配業者じゃないんだから」

どうでもいい会話を水蜜はする。なんでか分からないがこの幽霊の少女は嬉しそうに、楽しそうな顔をしている。長く「死んで」いる彼女にも思う所はいろいろとある。彼女は自分のラムネをぐいっと飲む。しゅわしゅわとしたのだ越しをむしろ楽しみながら、遠くのパレーを見る。

「霊夢さんはこの試合どっちが勝つと思えますか？」

「ああ？」

霊夢はぶすつとした顔でラムネをちびちび飲んでゐる。見ると白い水着の毘沙門天が見えた。

「白いほうが勝つわ」

その瞬間にとりと水蜜が霊夢を見た。霊夢は「な、なによ」と下がる。水蜜の眼は何故かきらきらしている。別に同僚のチームが勝つと言われているから喜んでいるわけではない。彼女は気取った口調で言う。

「ふふふ、霊夢は賢いな」

「はあ？ 何よそれ。見てればわかるじゃない。青と白の方が体も大きいし。さとりの妹は……よく動いているけど相方のあれの動きが悪いわ」

「なるほどなるほど」

「とりあえず。あいつらを倒さないと河童も退治できないわ」

にとりは「ん？」と首を傾げる。霊夢は水蜜へ続ける。

「この試合よりも私はあんたの方が心配なんだけど」

「私ですか？」

「あんた寺に味方する気じゃないでしょうね？ わざと手を抜いたら承知しないわよ」

「おつ。そう言う意味ですね。普通思っけても言わないことをズバズバ言ってくれるその性格、私は好きですよ」

「……………」

霊夢はそつぽを向く。水蜜はラムネを飲み干して、カランコロンとビー玉を転がす。透明なビンを手でもてあそびながら静かな口調で言う。

「まあ、本当の鬨いであるならば私は聖に味方しますよ。千年前に救ってもらった恩もありますしね。でもね、霊夢さん」

優しく微笑みながら、水蜜は言う。いつも、どことなく作っていた笑顔でなく、自然な顔と声で霊夢へ伝える。

「今日は貴女の味方ですよ。楽しくいきましよう。ね？」

「……………」

「ま、れーむは私の妹みたいなもんですから」

「意味が分からないんだけど……………」

「まあまあ、一緒に河童を退治して異変の秘密をゲットしましょう」
にとりは「ん？」と首を傾げる。

★☆☆★

「うあああああああああ！」

ナズーリンは投げ飛ばされた。投げたのはこいしである。ネズミの少女は地面に着く前のボールに当たり、レシーブする「ような形」になった。無意識というより不可抗

力である。浮き上がったボールをこいしがすかさず駆け寄って撃つ。相手のコートに突き刺さった。

「やったあ！」

可愛くガッツポーズするこいし。ピーとなるおかつぱの笛。一応彼女も選手なのであるがブラック企業に休み時間など書類上にしかない。審判の横にはスコアボード。「こいしチーム 10」「一輪・寅丸チーム 14」と書かれている。

こいしは汗を手で拭って「まだまだだ」と唸る。流石に疲れも出ているらしい。殆ど一人で得点していると考えれば、健闘であろう。肌に汗がまとわりついている。それは対面の一輪や寅丸も同じである。汗で肌が光って見える。

そんな中汗ではなく、砂まみれのネズミが立ち上がった。試合は中盤。なんとか負けようと工夫していたがこいしのトリツキーな動きに付いていけず、振り回されている。(く、くそいつまでたつても点差が「広がらない」じゃないか。こんなはずじゃなかったのに)

ナズーリンはこの数分間で投げられ、踏まれと「チームプレイ」に参加させられていた。それもうまく決まるのだ。こいしの無意識な勝負勘がハマる。それに彼女が動くたびに観衆が揺れ動く。次の読めない動きが、見たい様だった。

「ナズーリン。なかなかやりますね」

ネットの後ろから声を掛けてくるご主人様。ナズーリンは真つ直ぐな彼女を見て、ちよつとげつそりする。武略は得意でも謀略が苦手な毘沙門天である。はあため息をついて彼女はこいしへ振り返った。

見れば三つ編み赤毛の少女に向かつてピースサインしている。お憐である。彼女の手には板のような物があり、それで写真を写しているのだろう。タブレットである。

ナズーリンは「ちよ、え？」と普段の彼女らしくない素っ頓狂な声を上げて慌てる。あのタブレットは見たことがある、というより自分で設定した記憶がある。何故ならばご主人様がどこかで「お失くしになられた」物とそっくりである。

そのご主人様をナズーリンは振り返れば、既に一輪と話し手ながら「ここからですよ」と励ましている。見ていない。

「ち、ちー」

舌打ちのような妙な声を上げてナズーリンはこいしに駆け寄った。彼女の肩を掴むと「なーに？」ときよんとした顔でこいしが振り返る。目の前にはお憐がいる。

「い、いやそのタブレット。ど、どこにあつたんだい」

「タブレット？　なーにそれ？」

「こ、こほん。それだよ。その猫君が持っている」

「これ？　これは砂浜に落ちてたのよ」

（やっぱりじゃないか！ く、くそ。宝塔のことといい。何で砂浜にタブレットを落とすんだ、あのご主人様は！）

しかし、あわてて奪い取ろうとしてもナズーリンはうまくいかないだろう。こいしが無意識に何らかの「Z戦士」の技を繰り出して来るかもしれない。ナズーリンはできるだけ穏やかな顔をしながら言う。

「猫君。それをちよつと見せてくれないかな」

天敵に下手に出るネズミ。お燐はこいしを見た。こいしは頷く。

無事にタブレットがナズーリンの手に渡る。どうやら壊れているところも傷が増えているという事もない。ほつとするナズーリンだが、なんで自分がほつとしなければならぬのかとも思った。

一応写真のフォルダを解放してみる。こいし達が撮っている写真がかなり入っていたが、前の方にはお寺の写真などがある。ナズーリンはこれは毘沙門天ご用達タブレットと確信しつつ、写真をスライドさせていく。

おそらくお寺で撮られたナズーリンの寝顔の写真。ネズミはそれを見つけた時たたく割りそうになった。それでも抑えた。ナズーリンはさらに写真をめくっていく。お寺の風景。一輪や水蜜が縁側で談笑している風景。白蓮が袈裟姿でピースしているもの。ナズーリンがテレビを見ているだけのもの。

「……………」

ナズーリンはタブレットをお隣に返す。別に彼女にとってはこんな機械の塊はどうでもいいのである。だが、なぜだか、しつかりと取り返してやりたいと思ってしまった。理由は自分でもよくわからない。

力づくではうまくいかかわからない。正直に話せばこいしとて返してくれるかもしれないが、妙な条件を付けられるかもしれない。だからナズーリンは考えた。今現在古明地こいしが欲しがっているものは何か。

少ししてナズーリンはこいしにこう持ち掛けてみた。

「なあ、君。これを譲ってくれないか」

「えー?」

「もちろんただでとは言わない。そうだなこの試合に勝ったらただで欲しい」

試合の勝利。それがこいしが欲しがっているはずのもの。優勝などと言わないのは、もしも断れた場合に「吊り上げる」為である。最初から最高の条件を出すのは交渉に置いてベストではない。

こいしは少し考えてちらちら、タブレットを見る。やはり多少は執着もあるのである。その後スコアボードを見る。負けている。やる気の薄いナズーリンが動いてくれればうれしくもある。

「んー。負けたら、そこんところどーなんですか？」

とある魔法使いの真似をするこいし。ナズーリンは「ああ、それは」と返す。

「私が一つだけいう事を聞くとよ。それで返してくれ」

どちらにせよナズーリンはタブレットを手に入れる。多少自己犠牲もあるかもしれないが、それでも目的を達成できる。こいしはまた少し考え込んで。「わかったわ」と答えた。

「それじゃあ、ネズミさん。私とフュージョンしてね？」

「ふゆー、じょん……？」

ナズーリンは一瞬呆けたが、思い出した。彼女の言うそれはとある漫画の合体技である。昨日はこいしの姉が「犠牲」になった。ぞわぞわと毛が逆立つのをナズーリンは感じた、あんなみつともないことをしてたまるか、と反射的に思う。

だが眼はお隣の持つタブレットに行く。彼女は歯ぎしりをして、

「わかった」

と言った。それから。

「勝てばいいんだろう」

吐き捨てるように言った。素直さがほとんどない。少なくとも彼女は相手となる毘沙門天を振り返った時、眼の奥に闘志を燃やしていた。ネズミと虎が戦うのである。

25話 B

毘沙門天は思い出す。目の前に広がる青く、暖かな海を見ながら。

遠い昔のことである。人間の寿命が何度も入れ替わるくらいにの時間。彼女の記憶の中にある北の海。越後の海原。そこに一人の少年が立っていた。

降り注いでいる冷たい雪。

荒れた海と誰もいない砂浜。

見上げれば空は白く、風は冷たい。

その少年は一人、そこで念仏を唱えていた。着ているのは麻でできた粗末な着物。腰に差した一振りの刀。首から掛けた大きな数珠。両手を合わせて一心不乱に念仏を唱えている。着物の袖をまくり上げ、見えている腕は太い。

時は乱世。権謀と暴力の渦巻く世の中。少年は降りしきる雪を一身に受けながら、力を求めている。神仏にすがるといよりは只々、己を鍛えているかのようにだった。

「なぜ、力を求めるのですか？」

少年の後ろから声がする。彼は読経を止めて振り返る、切れ長の目がきらきらと光っている。見ればそこにいたのは一人の女性。

まるで虎の毛皮のような髪。頭頂に乗せた蓮の髪飾り。法衣をまとい、その上から虎柄の羽織を付けている。手には長い鉾。ぼんやりと光る彼女は人の身ではない。

毘沙門天こと寅丸星がそこにいる。少年の願いが神仏に届いたのだろう。彼女は柔らかに微笑みながら、もう一度少年に問いかける。

「我は毘沙門天。もう一度問います何故あなたは力を求めるのですか？」

「……………」

少年は黙って刀を抜く。寅丸は「え？」と困惑する。少年は肩に刀を担ぐように載せ、ゆるゆると歩いてくる。眼は血走り、寅丸を睨んでいる。

「毘沙門天を騙る……斬る……許さん」

「え？ ちょっとまってください。あの、ちよつと」

「問答無用……」

寅丸は思ったよりも狂信的な少年に語りかけてしまったらしい。寅丸のような麗しい女性が毘沙門なわけなので斬るといふ短絡的な行動に彼は出てきた。寅丸は片手を前だして後ろに引く。子供に反撃するわけにはいかなない

「な、ナズーリン！ どこにいるのですか？ 彼を止めてください」

ネズミは出てこない。いないわけがないのにどこにもいない。少年は砂を蹴って奇声を上げながら切りかかってきた。これは毘沙門天が初めて行った砂浜での追いかけつ

こである。この少年はのちに「我こそが毘沙門天」などと言いながら生涯を戦いに傾ける。

★☆☆

「おねーちゃん」

「寅丸ねーちゃん」

「勝てるよ」

時は現代。太陽光の降りしきる砂浜。

寅丸はビーチバレーを見に来た少年少女達に囲まれてニコニコしていた。一緒に砂遊びをした固い仲である。彼女は纏わりついてくる子供達をあやししながら「必ず勝ちます」などと言っている。

「ふふふ、最近の子供は刀で切りかかってこないからいいですね」

ふつう言わないことを言うところに辛うじて「毘沙門天」らしさを残しつつ、寅丸は数百年前の子供と比べている。少し離れて一輪がタオルで顔を拭いている。体に纏わりついた汗で肌が光っているが気にしていられない。

一輪はタオルを近くにいた河童に渡し、ぱんぱんと顔を叩く。気合を入れているのだ。彼女がチラリと得点版を見れば「こいしチーム 15」「一輪・寅丸チーム 18」と書かれている。多少リードしているが、まだ分からない。

ビーチバレーは先に「21点」を先取した方の勝利となる。一輪が相手コートを見ればナズーリンとこいしが何かを話し込んでいる。少し前からナズーリンが心なしか動き回るようになっていたが、いろんな意味で危険なのはこいしである。

こいしの動向は殆ど読めない。取れないはずのボールは取るし、打てないはずの場所からスマッシュしてくる。飛び上がったのキックが不思議と外れない。トリックスターとしかいいようがない。

「相手にとつて不足はありませんね」

一輪はぐつと両手を握って不敵に微笑む。キラリとした瞳に映る太陽、流れる汗。楽しみ始めている。

★☆☆★

「それもここまでだよ」

ナズーリンはやる気を見せ始めている一輪を見て「どうせこんなことを考えているのだろうな」と呆れている。それに自分のことをノーマークにしていることもわかってい。だが、既に準備は整っている。

彼女はこいしと取引してからじっと待っていた。15点目を取る時である。動かざる事朝のネズミのごとく。じっと機をうかがっていたのだ。今からはこいしのサブがはじまる。受け手は一輪である。

軍事に置いての「戦略」とはシナリオのことである。要するにこうやって勝つという道筋を考えることをさういう。毘沙門天の代理であるナズーリンは15点から21点までの道筋を考えていた。

「さて、そろそろやろうか」

こきと首を鳴らす。ネズミは後ろを向いてこいしに言う。彼女はいつでもここにこしている。楽しいと思っているのだろうか。無意識に楽しんでるだけで考えていないかもしれない。

そして審判であるおかつば河童の笛が鳴る。

「いぐよー！」

こいしはボールを天に投げる。一歩下がって合わせてジャンプ。一輪のジャンプサーブを真似ている。ぼしっとこいしの手とボールが小気味よい音をたてる。ボールが緩やかな回転をしながら敵陣へ向かう。

一輪が真下へ。胸を挟むように脇を締めて両手を組み。レシーブする。

ネットぎりぎりへ向かうボール。待機していた寅丸には絶好球である。ネットを挟んで向かい合うのはネズミ一匹、造作もなく抜けるだろう。

「行きますよナズーリン」

ネットの向こうから毘沙門天がネズミに声を掛ける。ナズーリンの眼は暗く沈んで

いる。邪悪なことを考えているのは間違いない。ナズーリンはパンと手を鳴らす。音につられてチラリと寅丸も見てしまった。

ナズーリンの体が横を向く。指さしながら言う。

「あー！ なんだあれ！」

「え？」

思わず寅丸も横を見る。何も無い。しかし、その一瞬で時期を逃した。ボールが寅丸の傍に落ちる。そして河童の笛が鳴る。こいしチームの点であった。

戦いとは騙された方が悪いのである。古典的な方法を使うネズミもそうだが、引つかかる方も毘沙門天として問題であろう。観客からは笑いすらも漏れている。プロの試合でやればブーイングだろうが少女がやればこの程度である。

「ひ、卑怯ですよナズーリン」

闘いの神が言い訳すらしている。猫騙しならぬ虎騙しを決めたナズーリンはつーんと横を向いている。汚かろうと何だろうと一点は一点である。これで16点。後5点。謀略とはいっても後ろ暗いものであるのだ。

（これも、あんたがタブレッドを失くしたのが悪いんだろう。さて、次は一輪か……）

サーブはこいしのまま、ナズーリンが少し移動して前衛で向かい合うのは一輪である。この寅丸と交代で青髪の少女は前にきてニヤリとする。

「もう、同じ手に引つかからないわよ」

「はあ、同じ手を使うわけがないだろう？ それにしてもあんた」

ナズーリンはネットを挟んだ。相手に暗い声で言う。過去の名将は「心を攻める」ことを軍略の最上としたが、ナズーリンは「心を責める」ことをする気だった。

「そんな破廉恥な格好をすき好んでして恥ずかしくないのかい？」

「こ、これはすき好んでしているわけじゃない！」

一輪は分かりやすく顔を振って否定する。その間にこいしがまたサーブする。寅丸も動いている。それなのにこの二人は喋っている。ちよつとムキになってしまった一輪は気付かない。

「やれやれ。あの開会宣言の時もそうだけど、そんなに肌を出して、あんなに可愛子ぶっているなんてね。それでも仏教徒かい？ どうでもいいけどボールをレシーブするたびに強調するのやめてくれないかな。どこことはいわないけど」

「そ、そんなことしてない！」

「ふーん。そつかー。へー。ふーん」

「ぐ、ぐぐ。ね、ねずみ」

「そうだ。あ！ あれはなんだろう！」

「え？」

ナズーリンはいきなり横を向く。すると一輪も横を向いた。その頭にボールが落ちてきて「きや」と声を上げて頭を抑える。寅丸のレシーブがちょうど落ちてきてしまったのだ。彼女達が話している間にも試合は続いていた。

とりあえず17点。ナズーリンは本当に同じ手に引つかかった尼を憐みの眼で見つ、あと4つと数える。くすくすともれる周りの声に一輪は歯ぎしりしつ、真つ赤になつた何も言わない。

青い髪 of 尼はしょんぼり肩を落として後ろへ下がっていく。これ以上ネズミの口車に乗せられないためだ。

ナズーリンはとりあえず首尾よく二点取れたことに安堵する。後四点を追加しなければならぬ。方策はあるが、一度使った策は使えないだろう。そもそも寅丸も一輪もナズーリンをジロリと警戒した目で見ています。

「ねずみさん。さつきから何しているの？」

「ああ、こいし君。いいところに近くに来てくれたね、ちよつと耳をかしてくれよ」
「？」

続けて不可解な得点を得たことでこいしがナズーリンに近づいてきた。ただ、ナズーリンも流石にこれ以上は猫騙しで点は稼げないと分かっている。だから新たな「策」を彼女はこいしに耳打ちする。

こいしはきらりと笑つて「いいわ!」と答える。ネズミはどろりとほくそえむ。
 「そうかいそれじゃあ頼むよ」

こいしは頷いてサーブの線までたつたと戻る。単に走っているだけなのだが、揺れるスカートやうつすらと微笑む彼女が愛らしい。こいしは一番後ろの線まで戻ると、ふううと息を吐く。そして体を低く構える。

今までの構えと違う。身を沈めた彼女の右手、左手にはボールを載せている。

「よーし! 弾けてまぎーれ!」

叫んだこいし一歩前が出る。そしてボールを「下」から思いつき叩いた。下打ちのサーブである。ぐんとボールは一直線に天空へ向かう、高く高く上がったそれに観衆がどよめく。寅丸や一輪も口を開けて空を見る。

「な、な」

と慌てているのは一輪だった。高い、蒼い空に点の様なボールを目で追う。そこにあるのは、輝く太陽。ボールの影が光に消えて、一輪は「あ」と明るさに眼を閉じる。見失う。それでもまだアウトになる可能性もある。天空へ放り投げたボールがコート内に落ちるとは限らない。

それでもナズーリンは笑う。

「天も味方の内だ。そして、こいし君のサーブは不思議と」

ボールが空から落ちてくる。一輪は慌てて探すが間に合わない。見つけた時、彼女は体を投げ出して飛んだ。そこへ寅丸も飛ぶ。ごっちゃん、高い悲鳴を上げて二人は頭を抑える。

それをあざ笑うかのようにばあんと一輪達のコート内にボールが突き刺さる。砂を舞わせながら。

「決まるんだよなあ。どういう原理なんだ」

冷静なナズーリンは両手を組んでいるだけである。ぴーと河童の笛。飛び上がって喜ぶこいし、あふれだす観客の声。少女達の可愛さにはかどる闇取引。これで18点、一輪達の得点と並んだ。それにしても本気になったネズミは地味な策ばかりを講じている。

所詮は従者なのである。本当の戦いを知るのはやはり、毘沙門天であった。

★☆☆★

「め、めんぼくありません」

地面に倒れている一輪に寅丸は手を差し伸べる。謝る屁にいえ、と首を静かに振る。既に点差はない。それに妙な動きを敵はしている。どう考えても寅丸は自分の従者がなりふり構わずに勝ちに来ていると思った。

形などどうでもいい勝利。それをナズーリンは求めている。何故かは知らないが、今

は自分に本気で向かってきている。寅丸は一輪を引き起こすと、彼女の体についた砂を払う。

「仮にも毘沙門天たる身です。従者に負けては示しがつきません」

抑揚のない声。一輪が顔を上げて寅丸の顔を見る。心なしか逆立った金髪。瞳孔が締まっている。猫が怒りを見せるときの表情。一輪はごくりと息をのむ。遊びであるが、負ける気はないようだった。

——とらまるおねーちゃんがんばってね！

応援席からは子供の声援も届いている。というかそれが寅丸には一番重要な物であった。ここで負けるわけにはいかないのだ。彼女は一輪に「次はとります」と告げる。凜々しい顔つきである。

ゆつくりと下がる毘沙門天。サブ権はまだこいしにある。ここまで連続で得点さ
れているのだ。これ以上取られる気はない。虎は身を沈める。

「いっくよー」

対角線でこいしが手を上げる。今度はナズーリンはどんな手をしてくるか分からないが、既に獣として感性を研ぎ澄ましている寅丸には関係が無い。はあ、はあ、はあと息を整える。心臓の音を聞くように眼を閉じ、心を落ち着ける。

寅丸はだんだんと世界を意識から「消していく」。

音が消えていく。

色が消えていく。

ただ思うのは自分の息遣い。ゆっくりと動くこいしの動き。一輪の位置。ネズミの動き。必要最低限な情報だけが脳に入ってきて来る。彼女だけの世界がそこにある。

こいしがボールを投げ、撃つ。ゆっくり飛ぶボールへ寅丸が駆けだした。無音の世界を虎が奔る。ボールはネットの上、彼女は飛ぶ。サーブを空中戦で迎え撃つ。

目の前にある「ボール」を渾身の力をい込めて打ち込む。寅丸の頭の中でバシイと音が鳴る。本当の音かは分からない。

★☆☆

「は？」

ナズーリンは何が起こったかわからなかった。それは一輪もこいしも見ていた観衆ですらそうだった。こいしがサーブを撃った。いつの間にかそれがナズーリンの傍に打ち返されて砂煙を上げていた。事実を書けばその程度である。

見れば着地している毘沙門天の姿。あまりの速さにこの場のだれもが付いていけない。ただ、一瞬遅れて審判であるおかつぱの河童がぴーと笛を鳴らす。寅丸の得点である。

会場が湧く。拍手と歓声で包まれる。男も女も子供も万雷の拍手で毘沙門天を湛え

ている。

ナズーリンは肌が震えることを感じるほどのそれを指で耳に栓をして耐えた。

(な、なんだ今の動き。ご主人様……)

常識と意識の範囲外の動きである。今なお寅丸はコートの上で黙っている。涼やかなその表情。まるで何も感じていないかのようなそれは毘沙門天の戦いの顔。ネズミは「くそ」と悪態をつく。あれは戦場で見せる顔である。それをネズミは知っている。

スポーツでは「ゾーン」と呼ばれるものがある。プロアスリートでも殆どが自由に得られない最高の感覚。己の潜在能力を全て出すことのできる、異次元の扉。それを毘沙門天は戦場で磨かれた感性を持って入り込める。

ナズーリンは爪を噛む。あそこまで規格外の動きをされるとは思わなかった。策が策として形を成す前にやられてしまう。大体半分以上は遊びなのに本気で戦う時の毘沙門天の動きをされるとナズーリン的に引きそうだ。

「すごい、すごい!!」

そんな歓声に驚いてナズーリンが振り向けば、こいしがはしゃいでいる。相手がすごければ素直に喜ぶ彼女。だがこれで「18—19」リードされている。最短二点で敗北が決定してしまうのだ。

ナズーリンはこいしに近づいていく。気が付けば少し足が重い。動き回っていた時

は疲れなど感じなかったが、寅丸の動きで体に鈍いそれがにじみ出てきている。

(まずいな。私自身があきらめてきている)

ナズーリンは自己分析を冷静に終わらせて、現状での最善を思う。勝利の可能性がかなり低くなっているとしても、あきらめる気はない。フュージョンとかはしたくない。

こいしはくりつと瞳を動かしてナズーリンを見る。この無意識の少女も腕で汗を拭っている。

「疲れているかい？」

「大丈夫！」

にっこりこいしは笑う。ぐつと親指を立てて、ナズーリンに突きだす。不覚にもナズーリンは少し驚き、少し元気になった。

「くく。まあ、君に聞くだけ野暮だったね。とりあえずあと三点で勝利だよ。どうやらご主人様は本気になっているから、あっちの入道使い、いや使う入道のいない妖怪を狙おう」

「……それじゃあだめよ。私わくわくしてきたわ」

「は？ さっきのご主人様の動きを見ただろう？ あれについていけるはずはないさ」

「ふっふ。そこは界王拳を使えるわ」

「はあ」

漫画の技なんて使えるわけないだろうとナズーリンは呆れてしまう。しかし、こいしは気を貯めるようにゆっくりと息を吸い、吐く。静かに、穏やかに、精神を集中させていく。

「だから、いい加減に……」

「とりあえず二倍ね……」

こいしの世界。だんだんと音が消えていく。雑音が気にならない。ただ見えているのは目の前の仲間、ナズーリンだけ。彼女はゆっくりと優雅に微笑む。どこか高貴でどこまでも無邪気なその表情。ナズーリンは眼をぱちくりとさせる。

「まさかご主人様と同じように集中できるのかい？」

「みだから」

「見たから？ 見て、真似をしている……!?!」

無意識に天才な彼女。寅丸が「ゾーン」に入ったのを見たからできるようになったという。考えるよりも行動するという感性はこの世もあの世も古明地こいし以上の者はいないのかもしれない。ナズーリンは苦笑してしまふ、するしかない。

「あーもう。いやだな。負ければ楽なのに、ご主人様に対抗できるのなら勝つてしまえそうじゃないか」

独り言のように呟く。頭を掻きながら、どうやって得点するか戦略を再構築する。

規格外の寅丸星の動きに狂わされた策を頭の中で練り直し、新たに得た古明地こいしの集中心力をそれに加味する。ナズーリンはうんと一声。

ゆっくりと振り返る。

目が合った。

寅丸も静かにナズーリンを見ている。主従考えることはあまり変わらないらしい。どうせあと数分で決着がつくのだ。こいしとナズーリンはいつの間にか肩を並べて立っている。そして仁王立ちする戦いの神と相對していた。

三人の決着が迫っている。

26話

争え……もつと争え。

河城にとりは白熱している試合を見て、心の底からそう思った。彼女にとつてはどちらが勝とうともグッズが売れないと話にならない。逆に考えれば売り上げの為にはどちらが勝つてもいい。ある意味では究極の中立であろう。

そんな黒い思考をしている河童は涼しげな顔で両手を組んでいる。横にはいつの間にか焼きトウモロコシを片手に頬張っている巫女と船長。にとりは流し目でそれを見て静かに言う。

「ところでミナミツ。そのトウモロコシ代も貰うからな」

「なんで、もぐもぐ、私が持ってきたと、思うんですか。霊夢さんかもしれないじゃないですか」

「持ってきたのはこいつよ。にとりの隙を見て勝手に持ってきたのよ」

霊夢はもぐもぐと食べながら水蜜に全てを押し付けている。にとりはどっちでもいい。とりあえず水蜜から徴収することを腹の中で思う。別に金の出どころなどどこでもいい。責任論には河童は与しない。

水蜜は苦笑しつつ、太いトウモロコシの両端を持つ。横にしてこんがり焼けた「おこげ」と香ばしい醤油の匂いが食欲をそそる。彼女は口を開けて、がぶり。気持ちよくシヤクシヤクとコーンをかみ砕く。

「……もう少し、焼いてもいいかもしれませぬね」

美味しいが批評もしておく、昨日は一日中焼きトウモロコシを販売していたのだ。今は河童の一人がやっている。無意識に霊夢も水蜜と同じ食べ方をする。なんとなく見て、なんとなく真似る。

水蜜は目ざとく見つけてにやり。黙っておく。それよりも彼女達の見物している試合も佳境である。体格的には毘沙門天がいるチームが有利かと思っていたが、トリックスターこと古明地こいしが頑張っている。それでいたずらっぽく笑い、水蜜が言う。

「さて、霊夢さんの予想はあたりますかね？」

「別に当たらなくてもどうでもいいわ」

つんとした霊夢の返事。彼女にとつても河童同様にどちらが勝とうとどうでもいい。ただ、毘沙門天の方が勝つと厄介かもしれないとは思っている。しかし、彼女はとりあえずいう事があった。

「まあ、あのさどりの妹も頑張っているなら、そっちが勝てばいいんじゃないの」

どっちが勝つてもいいのであれば知り合いの関係者を応援するのが人情である。水

蜜の身内二人は応援しない。どうなるうとも所詮は遊びでもある。にとりも霊夢も水蜜も程よく応援しつつ、トウモロコシを食べる。にとりもいつの間にか持っている。

そんな三人の後ろに影が一つ。

頭にタオルを巻いて、水着の上から黒いシャツ。丈が短いそれはおへそまでは隠せない。下に穿いた水着のスカートはピンク色。ちよつとたれ目で片目を瞑った少女。

「霊夢」

「……なんだ、さとりにね。何その格好」

「いろいろあるのよ……あの半分霊のアイドルの気持ちがあつた気がするわ」

いきなり呼ばれてちよつと驚く霊夢。振り返れば「髪の色」を隠した古明地さとりが立っている。手には一つのデジタルカメラ。河童の手先であるネズミから徴発した物である。にとりは気が付くが、気付かないふりをする。

「ちよつと偶然にカメラが手に入ったの……持ち主には帰ってから返すわ。みんなの写真も撮ったんだけど、霊夢も撮っておこうと思つて」

「いい、いらぬわよ。そんなの」

「はい。ちーず」

さとりは問答無用でカメラを構える。霊夢は下がろうとするが、その首に手を回す船幽霊が一人。ノリのいい幽霊である。

「ほらほら霊夢さん、せっかく写してくれるんだからにつこり笑って」

「だ、だれが！ 笑うわけないじゃない」

「こちよこちよ」

と腋の下に手をやる水蜜、霊夢はその足をおもいつきり踏みつける。ぴぎやつと妙な悲鳴を上げて涙目になるキャプテンだが、怨念を込めてくすぐりにかかる。負けん気の強いところはお互いに幻想郷の少女である。

「ややめなさいって、あはは」

「今ですよ。ほら、私が押えているうちに！ は、ハヤク」

笑いながら霊夢は水蜜を引きはがしにかかっている。じゃれついているように見えて、結構本気である。さとりははつとして、シャッターを切る。

とりあえず、仲良くじゃれつくような写真が撮れた。霊夢と水蜜は肩で息をしながら、間合いを取り合う。写真一枚とるのに難儀である。さとりはふふ、と微笑してデジカメを下ろす。

にとりはわれ関せずという表情だが、今デジタルカメラの機能で新しく撮った写真が彼女のパソコンに送信されているはずである。この河童は心の中で舌を出している。

そんなことは知らない地霊殿の主はちらと河童を見てから、巫女へ言う。

「お米は必ず手に入れましょう。それじゃあ後でね……」

「あ、あんたは妹の試合を見ないの？ はあはあ」

「遠くから双眼鏡を使ってみているわ。観客に近寄りたいたいのが分かるでしょう。ほら」

さとりが指をさす。その方向には逆にこちらを指さしている者たち「あれ、さとり様じゃない？」と聞こえてくる。霊夢は「あんたも大変ね」と言う。

「どこかの河童のせいね……」

さとりがため息をつくにとりが、

「そりゃあ、大変だね」

と他人事のように言う。

さとりのじつとりした視線を受けながら。河童はさりげなく物陰に歩いて行って、ノートパソコンを取り出す。届いた写真を確認するつもりなのだ。早速商品化しなければいけない。

開いてみればまたあの「WinMac 10へのアップグレードの準備が整いました」のウインド。ちつと舌打ちをしてにとりはタッチパネルになっている画面を押す。

消そうと思ったのだ。しかしウインドにはこう書いてある。

——「今すぐアップデート」

——「今からアップデート」

にとりは後者のボタンを押してしまった。OSが起動を開始していく。

夏の蝉の声と熱い観客の声がにとりにはクリアに聞こえてしまう。

★☆☆★

体を深く沈めて、かかとを浮かせる。ナズーリンは火照った体から深い息を吐く。

ちよつと涼しくなった気がする。頭はクリアにしてクールで居なければ参謀たりえない。それも今日の相手はあろうことか目の前にいる毘沙門天。補佐しなければならぬ者と相対する。

ネットの向こうにいる寅丸星は片手にボールを載せて、金色の瞳でこちらを見ている。

熱気のせいだろうか、寅丸の周りの空気がゆがんで見える。息一つ乱さず、ナズーリンとその後方を見ている。サーブは彼女であるから、打ち込むタイミングを見ているのかもしれない。

後ろにいるこいしがびよんびよんと小さなジャンプをしている。よーしと口でいいつつ、スカートを揺らす。ナズーリンはそれをちらりと見る。意外と頼もしいなど絶対的口には出さないことを思う。

こいしの瞳はきらきらと緑色に光っている。彼女はたまに前に出たり、後ろへ下がったりとせわしない。無意識に最適のポジションを探しているのだ。逆に寅丸も小さく

目線を動かしたり、立つ位置を変えている。

ナズーリンはそれを静かに観察している。

寅丸もこいしも考えて行動しているのではない。現状での最適な行動を一方は野性でもう一方は無意識に選択している。だから寅丸が動けばこいしもうごく。こいしが動けば寅丸も動く。

プレーの前から戦いは始まっている。お互いが必勝のポジションを探しながら、相手を牽制し合っている。もちろん観客からはわからない。ただ、ネズミは理解している。

ナズーリンはそれとなく動く。彼女はしっかりとフォームを作って防御の構え。本気のように見えるが、少し違う。彼女は自分の「守備範囲」を限定している。

(後ろに行つたボールはこいし君にすべて任せる。私は前方の取れるボールだけを取る)

既にこいしには説明している。寅丸が撃ってくるサーブの場所は、決まる可能性が高い場所である。ナズーリンはそれを全て推測している。そうすると大体打ち込める場所はわかるのだ。それを封鎖するために彼女はゆっくりと歩幅を小さく移動する。

動き出す一瞬に打ち込まれる、それはさつきやられた。すでにナズーリンには通用しない。移動の歩幅を小さくすれば隙は少ない。彼女は可能性の高い場所を自分の守備範囲で塗りつぶす。

するとこいしもナズーリンの取れない場所を無意識にカバーする。自然に鉄壁な陣形が出来上がる。無意識なこいしと意識的なナズーリンは意外にかみ合う。本気でやればである。

「さあ、どうするんだい。ご主人様……」

ナズーリンはにやりと笑い、動く。立っている場所は固定しない。常に幻惑する。そしてたたたとこいしが移動する。

日差しが降り注いでいる。寅丸の首元から胸元へ汗が流れる。それでもこの戦いの神は表情を崩さない。すうと大きく息を吸い。しゅつとボールを天に投げる。一歩前へ。ジャンピングサーブ。

ばあんと小気味の良い音を立てたボールが放物線を描く。速度はそれほどでもない。——まずい

ナズーリンは即座に判断する。着弾点は彼女のわずかに後ろ。こいしが取るべき場所。

しかし、サーブと同時に寅丸が前進してくる。

ナズーリンの直ぐ後ろであれば、こいしの体勢が崩れる。それはネズミが一人で寅丸の相手をする時間が生まれるかもしれない。

「私が取る！」

ネズミは叫んでからバックステップ。こいしは即座に前へ。声に反射して行動している。ナズーリンは後ろに下がって思う。

(高い)

頭に当たる。とおもったから頭に当てる。ちよつとジャンプしてヘディングする。おとおと歓声。ひりりとする額を抑えてナズーリンの眼が動く。

ぼーんと上がったボール。前にいるこいし。構えているご主人様。情報を即座に理解するネズミ、いや小さな智将。

「叩きこめー」

ナズーリンが叫ぶ。合わせてこいしが飛ぶ。落ちてくるボールに合わせてのスマッシュ。小さな体を空中でそらせるこいし。胸を張り、右手を振る。落ちてくるボールを思いつき相手のコートへと撃つ。

一瞬のことだった。

そう寅丸は一瞬身を沈めた。こいしの動きを余すところなくその両目に映して、飛ぶ。ブロックではない。彼女は右手を振った。こいしのスマッシュを自らもスマッシュで迎え撃つ、一秒でもずれば成立しない攻撃。こいしの顔の横をボールが横切る、無意識の少女は「わ」と驚きながら眼だけはそれを追えた。体は空中。どうしようもない。風圧で綺麗な髪がそよぐ。

「わかつていたよ」

曲がりなりにも数百年から千年の時を過ぎたのだ。ナズーリンにだけは寅丸の動きが予想できた。こいしの体が邪魔で打ち込めない場所以外。そこに反撃が来るとわかつていた。ネズミは着弾点に身構える。

迫るボール。ナズーリンは膝をやわらかく曲げ、両手を組んでレシーブする。

(お、重い)

レシーブしたナズーリンは後ろへ転げた。それでも辛うじてボールは上がる。しかし、上げすぎた。ボールは相手のコートへ、それもネットのギリギリへいく。寅丸が見逃すはずがない。

——虎が飛ぶ。体を伸ばして、とどめのスマッシュの一撃を打ち込む。これで決まり。

——こいしが横つ飛び、片手でレシーブ。砂煙を上げてごろごろ、反動を利用して立ち上がる。舌をペロリ。目元はきりり、口元にやり。まだ決めさせない。

「もう、通さないわ」

それでもボールは寅丸の真上。流石にこいしでも返すので精一杯。だからもう一度、虎が飛ぶ。こいしが腰を落とす。お互いが視線を交わす。龍虎ではなくこいし虎相撃つ。

寅丸の頭上でボールが音を鳴らす。力強いスマッシュ。

こいしはボールしか見えていない。もう何も余計なことは消えている。全てはゆつくりと見えている。彼女は右に一步。そして飛ぶ。またも片手でボールを拾う。ばちんと音がする。

歓声は聞こえない。こいしは空気が震えることだけ、なんとなく心地いい。

「よーし、もう一回！」

天真爛漫。にこにこしながらの鉄の守り。すべての事象に素直に反応する。だから彼女は無敵なのだ。ふつと寅丸も笑う。彼女の真上にボール。またもスマッシュの構え。これで三撃目。良い敵に出会うことこそ戦いの楽しみである。

だからこそその最高の一撃。腰を捻り、腕を振り。闘いの神がスマッシュを放つ。

空気を切り裂く高速のそれ。こいしの真正面。一番取りやすい角度。につこりこいしは迎え撃つ。両手組んでレシーブ。

「ふえ」

こいしの足が浮いた。後ろに倒れていく。ボールの衝撃に体が負けている。

空が見える。太陽が見える。手元のボールがどこかに行ってしまう。

(あ、まって)

無邪気にボールに問いかけるこいし。声の出せない一瞬。ゆっくり流れる世界の中

で、ボールが砂浜につこうとしている。もうだめだ、とこいしがを閉じる。だが、あきらめていないネズミもいる。

「うわああー！」

柄にもなく叫び。ダツシユ。砂を蹴りあげ、ボールは足もと。だから彼女は足を引いて、そのまま蹴り上げた。ナズーリンの紅い瞳が空を見る。ボールは高く上がっている。推測した落下地点はナズーリン達のコート。攻撃のチャンス。

「立ってくれー！」

ぱつちりこいしの眼が開く。仲間の声に答えないこいしではない。

ここでやるべきことがある。高く舞い上がったボール。それに合わせた寅丸殺し。ナズーリンの考えた策は条件がある。今度は太陽の逆光は利用しない。彼女はたたとネット際に向かう。

そして、相手に背を向けた。そのまま両手を組む。

「来るんだー！ こいしくん」

「おーうー！」

こいしも立ち上がり元気に返事。ナズーリンに向かってダツシユ。彼女は言わなくてもわかつている。ネズミの二歩前で大きくジャンプ。その片足をナズーリンの腕に着地。

「ん、んん！」

ナズーリンは顔を真っ赤にして「こいし」をレシーブする。腕を上にあげる。

その瞬間、こいしが空を飛んだ。この場居る全員がこの可愛らしい少女を見ている。胸元のリボンもスカートのフリルも風になびかせて。太陽のような笑顔で全員を魅了する。

ボールが落ちてくる。こいしはそれに体を捻り、足を上げる。かかとを構える。

——そうさ、あの状態のご主人様は何だって反応する。

ナズーリンはそれを見ながら、思う。こいしは一瞬の空中散歩をたのしむ。雲がちよつとと近い。

——だったらネットの間際。真上からの角度から攻撃すれば、反撃すらさせてやらない。

空中かかと落とし。

落ちてきたボールをこいしは「蹴り下げる」。凄まじい勢いとも垂直に寅丸のコートへ落ちていく。まるで流星のように落ちるのはネット間際。レシーブすらも難しい。寅丸は真上から落ちてくるボールを見て慌てた。集中力すら、こいしに見とれてなくなってしまった。

「やい、させません」

それでも毘沙門天の代理は両手を構えてレシーブする。押される。手元で跳ねる。

ナズーリンは片手で小さくガッツポーズをした。如何に運動能力が抜きんでいても防げない攻撃はあるはずだった。幸いにもその攻撃を実行できるパートナーが今日はナズーリンにいた。

「やあああ」

そう、パートナーは寅丸にもいる。一輪が前に出る。こいしはまだ空。ナズーリンは油断。

誰にも注目されていなかった雲居一輪が跳ねたボールに合わせて彼女も飛ぶ。やつと来た出番にはしやぐ彼女は思い切りスマッシュする。

ボールがナズーリンに迫る。彼女は顔面でキャッチする。今度は跳ねない。バーンと小さな智将は後ろに倒れた。瞬間おかつば河童の笛が鳴る。

「やったー！ やったー」

両手を上げて無邪気に喜ぶ一輪、一秒遅れて観客から大きな歓声。得点は彼女である。寅丸も完全に忘れていたらしく「よ、よくやりまひた、いちりん」と嘯む。ふふーんと得意な顔をする一輪。彼女は自分が他の三人の眼中から消えていた自覚はない。とんと着地したこいしは「ちえー」と悔し気に唸る。でも実はまだ、試合は終わっていない。今ので一輪達は「20点」なのだからあと一点取られなければ負けではない。

「よーしネズミさん。もうひと踏ん張りね！ あれ、ねずみさん？」

倒れているナズーリンからは反応が無い。仕方なくこいしがきよとんとした顔で覗き込むと、このネズミは眼をぐるぐるさせて気絶している。一瞬気が抜けたところに一輪スマッシュが決まってしまったのだろう。

こいしは「んー」と人差し指を下唇にあてて、上目遣い。おかつば頭の河童に手を「はいはい」と上げて、告げる。

★☆☆★

「ん。あれ」

起きた時ナズーリンは目の前にこいしの顔があった。ぎよつとしたがどうやら膝枕されているらしい。ここは海の家の中で畳敷きの部屋。からからと回っている古い扇風機がある。

「試合はどうなったんだい」

ナズーリンは直ぐに仏頂面を作ってこいしに聞く。彼女は「ネズミさんが倒れたから、きけんしたわ」と正直に答える。ナズーリンは「そうか」と何でもない様に答えるが、内心ちよつと悔しい。本気で考えて、本気で遊んでしまった。少しだけ清々しいのも恥ずかしい。

「まあ、さつさと終わってよかったよ」

とナズーリンは正反対のことを言う。こいしはぱちぱちと瞬きして「あ」と立ち上がる。膝からずり落ちたナズーリンが頭を打ち、手で押さえて転がる。

「そうそう。貴女にこれあげる」

こいしは部屋の隅に置かれていた「板」を手にして、またナズーリンの前に座る。そのまま「はい、これー。おめでとー！」とにつこり。こいしはタブレットをネズミに手渡す。

「ああ、そういえば、そうだったね」

起き上がりつつナズーリンはタブレットを抱える。はあ、とため息をつく。本当に疲れた。楽しかったとは口が裂けても言えないだろう。そんな彼女の頭に小さな手。こいしはナズーリンの頭をなでなでする。

「よしよし」

「やめてくれないか、子供じゃないんだ」

「顎の下？」

と顎の下を撫でるこいし。

「猫じゃないんだ！」

少しムキになってナズーリンは言う。全くともう一度ため息。達成感は少しある。

「それじゃあ、私はこれをご主人様に返しにいかないといけないから。まあ、君も頑張ったよ。それじゃ」

がっしりとこいしがナズーリンの肩を掴む。にこにこしながら、引く。

「負けた時にはフュージョンの約束だったわ。できるだけ大勢いるところでやると成功するかも」

「い、いや。……いやだ！ あんなことしてたまるか！ 忘れたふりしていたのには、はなせえ!!」

ナズーリンの首根っこを掴み、こいしはどこかに引きずっていく。

27話

少女は海を見る。

海岸線のうねる道をタクシーは走り、窓の外に見える夏の景色に心が癒される。

心地よい空調の効いた車内。昨日は遠く南まで飛行機で行き、今日急いで帰ってきた。体はどことなく重い。身体的疲れよりも心理的な疲れの方が大きいだろう。

彼女はタクシーの後部座席に座りながら、今日の予定を考えている。夜は「斬る」相手がいる。しかし、温泉地で受けた甚大な心理的なダメージを癒すために無性に誰も知り合いのいない場所へ行きたくなくなった。姿勢を正し。両手を膝に置き、背筋を伸ばしたこの少女。白い髪に緑のベスト。それに無理やり車内に詰め込んだ長い刀と別のもう一振り。

どこにでもいる普通のアイドルである。

彼女が車内の窓に顔を近づけて、遠くを眺める。大勢の集まる砂浜が見える。声は聞こえない、何をやっているのかは知らない。それでも水着姿ではしゃぐその人と波を見るだけでなんとなく嬉しくなる。

人の楽しんでいるところを見て嬉しいと思える彼女は、とても純粋なのかもしれない。それはいろいろと利用されていることに繋がつてもいるが、美点であることは間違いない。真つ直ぐな性格なのだ。

タクシーはカーブを曲がる。見れば海水浴客用の駐車場とその前の広場、車は満杯だと一目で見える。そう、一目だけそれが見えた。

広場の人ばかりで灰色の髪をした少女と光るような緑の髪の少女がへんてこりんなポーズを決めている。なんだろう、と思う暇もなくタクシーはその前を通り過ぎてしまった。それはとあるネズミの苦悩の果てに行つた地獄の苦行であるが、降り注ぐ陽光の下では関係がない。むしろ微笑ましい顔で少女は見送つた。

少女は運転手に声を掛ける。

「いこいで止まってください」

少し歩こう。と思う、潮風と共に。

★☆☆★

一回戦が終わり、河城にとりはふうと息を吐いた。

その顔は面白くなさげであるが、内心は全く違う。近くに霊夢や水蜜が居なければ小躍りして悦びたいくらいであつた。小柄で容姿「は」愛らしい彼女が小躍りすればなかなか可愛いかもしれない。

実際の試合はナズーリンがダイレクトアタックを受けて退場してしまつたが、それ以外はおおむね計画通りである。飲み物の売り上げも順調。闇取引は快調と幸先がいい。にとりは頭の中のそろばんを弾きながら、遠くを見ている。

「あの計画まで……まあ、あとちよつとくらいかな」

にとりは海の家で商売する上であるとある「計画」を立てている。そのためにも今は幻想郷の少女達にしっかりと働いてもらわなければならない。彼女は指をぱちんと鳴らした。河童の合図である。

すかさず一人の河童が寄ってきてにとりに紙切れを渡す。そして即座にいなくなつた。

その紙切れにはいくつか文字が書かれており、それが丸でかこまれている。「一」「寅」「い」

「ねずみ」といった具合であり、その横の数字が描かれている。

「ふーんあの尼とか金髪が売れてるね。意外とネズミも人気かあ。もちつと値段を吊り上げればよかつたかな？」

涼しげな顔で邪悪なことを言うにとり。ふんふんと満足げに頷きつつ「ん？」と首を傾げた。紙切れの端っこに「に」と書かれた文字。丸で囲まれており、数字が描かれている。おそらく商品として売れたのだろうがなんのことかわからない。

「なんだこりや。に、つて誰だ？」

自分も知らない何かの暗号らしいが、とりあえず売れたのなら文句はない。企業とは営利の最大化を目的としているのだ。従業員が裏で静かなる反抗をしているくらいは笑つて見逃すくらいの度量は経営者には必要だろう。

にとりは確認した紙切れをびりびりと破つてゴミ箱に捨てる。証拠は残さない。それに今からちよつと忙しい。彼女は海の家を出て、バレーコートに向かう。

試合が終わつてもがやがやと賑わつているそこ。にとりはパーカーに両手を突っ込んで背筋を無意識に曲げながら近づいていく。見れば勝者である一輪と寅丸が大勢に囲まれているらしい。

らしいというのは、にとりからは見えないからだ。それだけ人だからできていく。ただその中から「サインください」だとか「デビューはいつするんですか？」などと、いくらか勘違いしている声が漏れてきている。それに返答する尼と毘沙門天の返事ははかばかしくはない。

一輪などはサインの要望に対して、

「ふ、筆が無いから」

と時代錯誤な返答している。寅丸は何故か子供にじやれつかれている。砂遊びを一緒にやった仲であるから、彼女は悪い気はしていないのかもしれない。にとりは人だけ

りの一歩後ろで両腕を組んで、じっと待っている。

本当であれば少し話したいこともあるが、これはこれで面白そうだから放置しようかと彼女は考えている。しかしそれでは時間が進みやしない。彼女は仕方なくマイクを一本持つてこさせると「あーあー」とマイクテスト。

「みせも……あー皆さん選手は疲れていきますんで、サインは全て終わった後におねがいします。あと写真は禁止です。ほら離れて離れて」

にとりはほらほらと人だかりを手で払い、一輪と寅丸の周りから人を遠ざける。一輪などは河童がかばつてくれていると勘違いして「河童……」と感動したように言う。写真を撮られることまで禁止にしてくれるのはありがたい。涙が出るほどだ。

河童としては単に写真が欲しければ買え、というだけなので「なんで涙目で私を見ているんだこいつ？」としか思えない。しかし河童にとりは物怖じしない。人だかりを手に際よく払う。

一応観衆は顧客であるが、にとりはしつかり駄目なものは駄目だという。少し冷たいくらいに彼らをコートの外にやる。スタッフには頼もしい河童かもしれない。そうしてから一輪にマイクと新しいカンペを渡す。

「ほこ」

「えっ？　これほ？」

「司会だろう。それじゃ、あとは頑張つて」

「え、ちよ、ちよつと」

とりあえず子供に囲まれてる寅丸だけを連れてにとりは外に出ようとする。他の河童達が人だかりに向かつて拡声器でコートの外に出るようにただしている。ただし、尼は出ることはできない。それでも焦つた一輪は背中を見せて行こうとする寅丸の肩を掴まえて

「ま、待つて」

と懇願するような目で言うが、寅丸は寅丸で振り向きもせずにごう返す。

「これも修行です」

方便というものが仏教ではある。寅丸は巧みにそれを使用してそそくさと離れていく。にとりはちらりと二人の少女を見たが何も言わない。一輪は一人でまた残されることになった。

★☆☆★

寅丸は海の家裏で座り込んだ。近くにはにとりが居る。

「ほい。とりあえず一回戦突破おめでとう」

キンキンに冷えたアーク・エリアースをとりは手渡す。そしてから彼女は手近にあったゴムの浮き輪に腰掛ける。寅丸はその飲み物を受け取り、軽く礼を言う。それか

ら開けてぐびりと飲んだ。

試合で運動した体に冷たいスポーツドリンク。ほのかに甘い味。思わずぐつと彼女は飲んでしまう。ペットボトルを傾けて、喉を鳴らしながら。唇から離すときに少し音がする。それから彼女は脱力したように肩を落とす。

「ああ、おいしいですね」

「あんたCMに出られるかもね」

にとりはちよつと自分も飲みたくなつてしまった。だが持つてきていないから悔やむ。おいしそうに飲む毘沙門天がちよつとうらやましい。

「まあ、すごい盛り上がったし。結果は上々だったよ。あんたも本気だったしね」

「……勝負とは手を抜けば相手に対して非礼に当たります」

「ふーん。私には単にムキになつていられるようにも見えたけどね」

「そ、そんなことはありません」

にとりは少しにやつとする。それを見て寅丸は眼を閉じてふんと鼻を鳴らす。毘沙門天の代理とは聞いていたが、存外「普通」などところがあるにとりは思った。

遠くからは笑い声が聞こえてくる。にとりが一輪に渡したカンペはいろいろと思いついたことを書きなぐつたから、真面目な尼に読ませればさぞ面白いのだろう。要するに雲居一輪が一人バレーコートで役に立たないカンペを手に司会進行をしているのだ。

それを思うとにとりは、くすり。少女らしく無邪気に微笑む。

寅丸はそれを意外な顔で見る。少しイメージと違うらしい。ただ、彼女にはもう一つ気になることがあった。

「そういえばナズーリンはどうしたのですか？　あの程度なら怪我はないでしょうが……」

「なず？　ああ、あのネズミ科の。さつきあの相方に連行されて行ったみたいだよ」

「ああ、遊びに行ったのですね」

「へえ、あんたってそうとるんだ。あれは子供と遊ぶタマじゃない気がするんだけどなあ」

「でも、意外と面倒見がいいのですよ？」

「それは、うん。わかるよ」

寅丸にとりてはくすくすと笑う。ネズミはかなり意図的に周りに冷たく当たる、それに策を練って普通におぼれる。だから欲深いように見えるが実は義理堅い。そもそもこの試合に参加した理由もこの二人は知らないが、寅丸の為である。

それでも寅丸はナズーリンの性格上「何かなければ」こんなことには参加しないことは知っている。

「伊達に永い間一緒にいるわけではありませんからね」

寅丸はナズーリンのことをよく知っている。普段考えていることはよくわからないが、最終的にあの灰色の髪の毛の食いしん坊が寅丸にとつて悪いことをしないことを知っている。それはお互いを知った上での信頼であろう。

にとりは聞く。

「あのネズミは結構食わせ物なところがあるんじゃないかな？ 飼い主としてそこらへんはどうなのさ。しつても必要なんじゃないの？」

「かい、ぬし。ふふ。それはあの子が聞けば怒りそうですね。確かにナズーリンはいろんなことを考えていますからね。ただ……あの子はきつと人のことを良く見ているのです」

寅丸は河童を真つ直ぐに見る。大きな瞳に黄金の瞳。

「ナズーリンは常に相手のいいところも悪いところも真つ直ぐに相手のことを見ています。少し口にする言葉はひねくれているかもしれないが。そもそもどんな知略も相手を知らなければ成り立ちません。彼女はああ見えて、一番他人を気にしているのです」

「単純に臆病なんじゃないの？」

「そういつてしまつては身も蓋もありませんが……それでも、あの子は誰に対してもそつけない態度をとる代わり、誰であろうとみています。それでももう少し慈悲の心を

学んでくれればいいのですが……」

「……………飲酒をして捕まったやつだからね」

「……………嘆かわしいことです」

はあ、とため息をつく寅丸をにとりはちよつとからかつてやりたくなつた。彼女は肘を太腿にのせて行儀悪く片肘をつく。ほつぺたを手にのせるようにして、細めた眼で寅丸を見る。

「実はあんたも隠れて酒を飲んでるんじゃないの？」

「……………」

寅丸は眼を閉じて、息を吐き、静かに言う。

「そんなわけありません」

「わかりやすいやつだなあ」

苦笑するにとりと冷や汗をかいている寅丸。仏の化身と言つても根本的などころが抜けていない。それでも堅苦しいことよりもにとりはそんな相手の方が好みではある。彼女は立ち上がつてお尻のあたりの砂を払う。

「そんじゃ、次も頑張つてね。しばらくここで休んでいいよ。もう一人の相方はこき使うからさ、あの一輪とかいうの」

「こ、交代させてあげてはどうでしょう」

「あんた代わりにやるかい？ 別に私はそれでもいいけど」

「……一輪。これも修行です」

くつくつと笑うにとり。彼女はまたパーカーに手を突っ込んですたすたと歩いていく。選手が休んでくれれば次の試合頑張るだろう。それはにとりとしても望むところなのである。海の家裏手から彼女は角を曲がる。

「ああ、あんたいたんだ」

そこには背中を壁に預けるように立っているネズミが一匹いた。心なしかげつそりしている。そしてその胸には大事に抱えたタブレット。ご主人様が大切にしている持ち物である。それを持ったまま彼女は寅丸に見えない位置に居たのだ。無論話は聞いていただろう。まさにネズミである。

「河童君。随分好きに私の陰口を言ってくれたね」

「陰口だって？ 私は何も言っていないよ。ただ、あんたのご主人様があんたはよく相手を見ている良いやつだって言っていただけさ」

「……ちえ。節穴もいいところだよ」

「そうかなあ。ま、いいや。それよりもあんた口だけだね。スパイするって言いながら全然役に立っていないじゃないか。全く」

ネズミことナズーリンは深いため息をつく。返す言葉が無い「のではない」。単純に

今日のことはいろいろと疲れているのだ。特に最後の古明地こいしと一緒に合体もどきのポーズをさせられたのが精神的にトラウマになりそうである。

「それは早合点という物だよ河童君。私はね、君たちが試合中に『妙な物』を売っていたことを知っている。こそこそしてもばれているんだ。あまりネズミを営めてはいけない」

にとりばちはぱちぱちと瞬きして、にっこり笑う。

「よく他人のことを見ているんだね」

「……………」

ナズーリンは眼を見開いて、ほんのり頬を染める。それから余計なことを言ったと悔やんだ顔をする。少し恥ずかしい。ただ、こほんと咳払い。わざとらしい。

「ま、まあ。それはいい。君には私の分の販売は中止にしてもらいたい。忌々しいことだけどうせ売っているんだろ」

「ふーん。見返りは」

「……………」

ナズーリンは手者タブレットを指でなぞる。映った画面にパスワードを打ち込む。寅丸が落としたときはロックがかからず、他人に好きに使われてしまっていたのだ。だから取り戻してから即座にロックを掛けておいた。

彼女は写真フォルダを開く。画面に映ったのは麗しい少女。白い水着をまとい、蒼い海をバックにピースしている昆虫沙門天の画像であった。ナズーリンは無言でタブレットの画面を河童に見せる。

「これで不足かい？」

にとりはポケットからスマートフォンを取り出す。眼に浮かぶ「？」のマーク。素晴らしい写真である。

「ブルートゥースで通信できるよね」

「もちろん」

主人の写真を保身の為に売り払うネズミと打算にたけた河童の取引。にとりはスマートフォンにデータを収めてからにやりと笑う、ナズーリンもつられて黒く笑った。

「好き勝手私のことを言ったご主人様へお灸をすえるのは悪いことだと思ukai? 河童君」

「いや全く。全然」

ナズーリンは満足げに頷き、タブレットを小脇に抱える。小柄な彼女が持つと意外に大きい。彼女は砂浜に足跡を残しながらぺたぺたととりの横を通る。今からタブレットの「持ち主」に返しに行くのだろうか。

にとりはスマートフォンを指でフリックしながら、つぶやくように言う。

「あんたは他のやつのことをよく見ているけど、あんたのご主人様はあんたのことよく見ていると思うなあ、どう思う？」

「……………」

ナズーリンはふん、と鼻を鳴らしてから歩き去る。答えないことしか不器用なネズミにはできない。

★☆☆

『さて、これから第二回戦の組み合わせを発表したいと思います』

涙目で必死に「司会進行」を務めている雲居一輪がそこにいた。手にはマイク、傍にはおかつぱ頭の河童が中にチーム名の載ったボール入りの箱を抱えている。にとりの渡したカンペは意外に分厚くここまで進めるのに時間がかかった。

カンペには観客に投げキッスだとか、ウインクだとか悶え死にそんなことが描かれており、一輪はできるだけ不真面目に黙殺していた。しかし如何せん一回戦での彼女の勇姿を慕って人は増えるばかりである。

そんな中にとりも戻ってきた。スマートフォンをポケットに戻して、海の家に入るとアーク・エリアースを一本ぐいっと飲む。海の家も中々に盛況らしい。河童達が忙しく立ち回っている。霊夢達は外に置いておいたベンチに腰掛けている。

水蜜は一輪の「勇姿」をにやにやにやと見ている。同僚の不幸は蜜の味である。

にとりはそれをちらりと見てから、なんだかんだいっても一緒に座っている霊夢にくすりとする。

彼女はそれからにぎやかな海の家の周りを見る。

幻想郷では見ることができだろうか。少なくとも人間と妖怪が普通に存在し合っているこの状況は幻想郷の「ルール上」あり得てはいけないう。最近ではかなり緩くなっているとしてもだ。にぎやかに過ぎていく時間、普段は喋らない相手と親しく話すことのできる今。

「所詮、これは一種の祭りなんだ」

にとりは誰に言うでもなく呟く。多くの人が集まる祭りはどこの世界の人間でも妖怪でも大好きである。そして、だからこそ祭りが終わるときの寂しさを知っている。だからだろうかととりは一度胸に手を当てる。そして直ぐに外す。

「さて、とりあえず楽しむかな」

いつものあくどい顔をして金儲けを考え始める。念願という訳でもないが毘沙門天の特別プロマイドを手に入れた。にとりは海の家に置いておいたパソコンを持ってきて開く。どうやらまだ「WinMac10」とやらにはアップデートが終わっていないらしい。彼女は仕方なく商品のソーダアイスを持ってきて口に啜える。

細めの青いアイスで名前は「アイス・ソード」という。剣っぽい形をしていないでも

ない。はむはむと口に唾えたままにとりはパソコンをたたんだ。

★☆☆★

人は極限状況に置かれるとテンションがハイになる場合がある。それが元人間である雲居一輪にも特性として残っていてもなんら不思議はないだろう。彼女はおかつぱ頭の河童が持つている箱に手をつ突っ込んでマイクに叫ぶ。

『よーし二つ同時にひくわよー!』

なんの意味もなくみよんなことをし始める、それがハイになってしまっている証左である。彼女は片目を閉じて舌をちよつと出して唇を嘗める。わずかに片足のかかたを浮かせている。

手に二つのボールの感覚。きらつと光る一輪の瞳。彼女は勢いよく箱からそれを取り出す。

いちいち動作が大きいので観客も「おおお」と歓声を上げる。一輪は高々と二つのボールを器用に片手で掴んだまま、天に向かって手を上げる。

ボールは二つ。一つは「お値段異常にとりチーム」。もう一つには「地獄鳥の閻魔様チーム」と書かれている。恨み連なる河童ボールを引き当てた一輪は清々しい笑顔になり、さらにファンを増やした。

そんなとき、歓声を聞きつけてふらふらと歩いて来る一人の白い髪に黒いリボンの憐れ

な少女がいた。まだ彼女は己の不幸には気が付いていないが、無邪気に「なにかしら」などとのんきしている。次の試合に出る河童がスケープゴートを探しているなどと想像できまい。

おまけ 名前はないけど

わがはいは妖怪である。名前はまだない。

なんて人間の書いた猫の本の真似を試みる。私にはちゃんと名前がある。ただ、独りで自己紹介なんて変人な真似はしない。それにここは図書館。ちゃんと黙っていないとつまみだされる。

私は妖怪。別に言うべきことでもないけど、特徴といたら本が好きなくらいだろうか。幻想郷では貴重な書物も外の世界ではうなるほどある。ふふふー。いけない。おまわらず顔がにやけてくる。

結構前に暴力巫女から追いはぎに会った時は本を数冊強奪されたっけ。あれはひどかった。とりあえず今は図書館の長い机に本を積み重ねて朝から読んでいる。このごろは人間の管理人？ いつも図書館にいるやつから挨拶されることもある。

私は妖怪だ。人間とじゃれあうなんてしない。だから挨拶にはまあ、うん。会釈するくらいはいいだろう。それくらいはオツケーだよ。うん。

他のやつらはいろんなところに散っていて、クリーニングや定食屋なんかをしている

みたい。人間の世界は働かないと食べていけない。どんなに強がってもくうくうお腹が鳴ればひもじいとよくわかった。

こちらではあのとときの巫女みたいに強盗はできない。けいさつこわい。

だから私は平和的に暇なときは読書しているの。これが一番お腹が減らない方法。走れメロスみたいなのをしていたら直ぐに食費があがつちゃうわ。アルバイトの給料もう少し上げてほしいな。

ふあーあ。お腹減った。いい天気だし。

だつてしかたないじゃん。本を読むのだつてエネルギーがいるのよ。それにもうお昼時だしね。だからとりあえず机に置いておいた本を片付けないとね、よつと。おも。欲張りすぎたかなあ。まあ、大丈夫だいじょうぶげ！

いたた、こけた。

本をばらまいちやつたわ。人間達が心配そうによつてきているけど、大丈夫よ。私のことはほつといて……あ、ありがとうございます。

会釈くらいはしてやるわ。本を集めるのを手伝ってくれたしね。

★☆

図書館から外に出るだけで汗が滲みでてきたわ。

ああークーラーの効いた部屋って天国ね。家にもあればいいんだけど、あるのは古ぼ

けた扇風機くらいね。夜は暑くて仕方ないわ。

蝉がみーみんうるさいなあ。遠くのアスファルトがゆがんで見える。ああ、もうシャツがべとつく。いやだいやだ。とりあえず図書館の隣にある小さなカフェにいこうかしら、あの豪族のところじゃないわよ。

てくてく、からからーん。

ドアを開けて無言でカフェに入ってカウンター席にどっかかり座って手繰り寄せたお品書きをばらばら。決まりきったいつもの動きだから、こわいくらい完璧な気がする。

このカフェはちよつとおしゃれな場所ですが座っている椅子は背が高く、足がつかない。ぷらぷら両足を動かしてみる。意味なんてないわ。

店に居るのはいつも銀髪の人。幻想郷でも見たことあると思うけど、メイドっぽい恰好をしているわ。どうでもいいかな。それよりも今日のカレーはどうしようか、な。

カツカレーにするか、カレーにするか。うーん、うーん。うううーん。お金ないしなあ。でもなあ。ここのカツカレー美味しくて好きなのよね。うーん、うーん。うん、決めた。

サンドイッチください。

しかたないじゃん。お金ないんだもん。あ、コーヒーは食後に。

てきばき注文した私に店員はにつこりして奥に引つ込んでいくわ。周りを見ても私以外お客がいらないから静か。店内に掛けてあるクラシックも私は好きだな。あの八目うなぎを出すあいつのやかましい音楽はいやだけど。

こういつたところでポケットから文庫を出すのが、私のたしなみ。

静かなカフェで小さな文庫をめくる。なんとなくこの瞬間が好き。食事が運ばれてくる間のちよつとの時間の息抜きね。まあさつき図書館でいっぱい読んだけど。

それでもさなだたいへいき、はやめておいた方がよかつたかしら。空気に合っていない気もするけど、いいかな。いつもいる吸血鬼はどこにいるのかしら。

そうしていると店員が私の前に食事の用意をしてくれる。まるいグラスに氷いっぱいの水。長方形の小さなバスケットに入れたフォークやスプーン。そして大きな皿には赤い何かが大量にかかった御飯

なに、これ。

どうみてもサンドイッチではないわ。ちよつと私こんなの注文していないわよ。え、赤カレー？ 新しい商品の試食をしてくれって言われてもお金ない、え？ 無料なの。先に言つてよ。

ほかほか御飯にかかった赤いカレー。ところどころにお肉があつて、いい匂い。思わず笑顔になってしまったけど、不可抗力。これでただは素晴らしいわ、でもなんで赤い

のかしら。幻想郷ではこんな色の食べ物はないからなあ。

でも安心。こつちに来てからみようちくりんな美味しいものをいっぱい食べたから、そのあたりは信頼できるわ。特にカレーのまずいことなんて、きつとない。だからいた
だきまーす。ぱくり。

びぎい。

ひーひー。か、からい。なにこれ。水、みずう。ぐびぐび。

なによこれ！　とうがらし？　なにそれ？　か、からい。唇がひりひりする。ちよつ
と店員、笑っていないで。え？　全部食べないと料金を取るって、お、おうぼうよ。こ、
こんなの全部たべられるわけないじゃない。

……な、なんで私の文庫本を持つてるの、い、いつの間にとったのよ。あ、やめて。カ
レーにつけると汚れが絶対取れない。わかったわよ。食べるわ。食べればいいんで
しょ。

私は椅子に座り直して目の前にある真つ赤なカレーを睨みつける。手に大き目のス
プーンを持って。水を注ぎなおしておく。額から汗がたらたら。ご飯を多めにスプー
ンにカレーを掬ってみる。

目を瞑って、口にぱくり。辛い。それでももぐもぐとかんでやる。辛いけど、ご飯と
絡み合ったカレーの味がちよつとわかってくる。美味しい。でも、辛い。飲み込んで、

直ぐに水を飲まないと耐えられない。

おいしくて無料だけ。これは、きつい。

★★★

ひいー。

舌がぴりぴりする。あの全然怖くない唐傘お化けみたいにべろりと舌をだしまま歩くのはすごく恥ずかしい。そうしないと耐えられない。タダより高いものはないってよくわかったわ。

まあ、それでもとりあえず本は取り戻すこともできたし、まあお腹はいっぱいになれたからいいわ。

クーラーがあるカフェで涼むつもりだったのに逆に体が熱いつてどういうことかしら。……でも、赤カレーおいしかった。次も頼みそうでちよつと怖いな。あ、大丈夫ね。頼むことはないわ。高いから。

アーケードをぶらぶらする。

商店街を意味もなく歩いてるとたまに声を掛けられることもあるのよね。八百屋の人とか肉屋の人とか。安くしておくよって言われても図書館のカードで払えるんなら買ってあげるわ。無理だと分かっているけど。でも、冗談で言ったらたまにお土産くれちゃうからなあ。

うげ。商店街の100円シヨップだ。

軒先にへんてこりんな模様の書かれた風船が置いてあるからここ通りたくないのよね。なんなのかしらあれ。あ、商品名が書いてある。鳥よけ？ 私は避けられてるの？

というか本当に鳥には効くのね。身をもつてしるつて変かな。

そうやって私は警戒しながら歩きさる。

そしてとある小料理屋の前。なんだか人だからできている。あ、馬鹿だ。馬鹿つていうのはいつも烏帽子をつけた変なやつ。今日はかき氷を店の前で実演販売しているみたい。

子供達が群がってる。うう。私も食べたいなあ。

あれ、あの馬鹿が何か言っているわ。ジャンケンで「我」に勝てれば食べられるつて。気がついたら子供達に混ざって行列に並んでいたわ。元氣よくじゃんけんぽんつて声が聞こえてくる。負けたらああーつて残念がつてる子供。買ったらやったーつて嬉しがつている子供。

ふふ。

あ、違う。私は妖怪だから人間とじゃれあつたりなんてしない。微笑んだりもしてやるもんか。アルバイトはあれね、ぎぶあんどていくつてやつ。

そうこうしているうちに私の番。目の前にいるのは烏帽子を被つた変な奴。ぎらぎら

らしている瞳で私を見てきたから、私だつて睨み返してやる。

ばちばちばちと火花が散るようなならみ合い。よく考えたら負けた時に払うお金がない。かき氷を食べることもできずにとぼとぼ帰るなんていやだ。

それじゃさーいしよはぐー、じゃーんけんぽん！ チョキ。あいこ。

やるな。と相手が言ってくる。正直周りより明らかに一人だけ身長の高い私がかき氷につられていてるだけで恥ずかしいからやめてほしいわ。でも、ここまで来たからにはまけてなんてやるもんか。

それじゃ。

あーいこーでしょ！ ぱー！ 勝った。やった。やった！

こほん。

ちよこつとはしゃいじやった。悔しそうに烏帽子の馬鹿はブルーハワイのかき氷をくれる。透明なスプーンをもささつていいる。私はいそいそとそれを持って列から離れる。だつて次の勝負に邪魔じやない。

備え付けられた長椅子に座る。店の中をのぞけば金髪の別の店員がいる。でも、どうでもいいわ。かき氷をいっぱいスプーンですくつて口に入れる。甘くて、冷たくて、ん。おいしい。熱い体に気もちいらい。

じゃんけんしている子供達を見ながらしゃくしゃくと食べるって、あ、やばい。んー

頭がいたい。これ、なんでなのかしら。あーきーんってするう。

★☆☆★

からの容器を捨てる。椅子に座ったままお茶を飲む、冷たい麦茶だ。これも無料。ふうと息をはくと、なんだか気が抜けちやった。別のいいかな。とりあえずポケットの中から文庫本を取ってひらく。

ばらばらとめくる。続きが気になる。

28話

試合開始は15分後という事になった。

コート周りに観客がそれぞれシートを敷いたり、砂の上にじかに座ったりして場所取りをしている。その間を飲み物を売り歩く河童達が商売に励んでいる。流星にこのタイミングでの闇取引は行われていない。

そんな光景を海の家の前にあるベンチで雲居一輪は眺めていた。顔は疲れ切っており、大きなため息を吐く。片手にはアーク・エリアースのペッドボトルを半分飲みかけで持っている。

試合の疲れもあるが精神的な疲れもある。ここまで肌を人前で晒したのは彼女の長い命の中にあつただろうか。少なくとも司会をしたことはなかった。

そんな一輪の横に座りにやにやしている短髪黒髪の少女が一人。言うまでもない。水蜜だった。

「いやあ、素晴らしかったわね。一輪」

「……あ？」

ギラリと光る目で一輪は水蜜を睨む。その眼を真っ直ぐに水蜜も見る。同僚として

一番近い関係性であるからか、あまり遠慮という物が無い。水蜜は一輪にはぞんざいな言葉遣いをしている。そんな彼女は一輪の肩をぽんぽんと叩きながら言う。

「みんなの注目の的だったわ。よっ、人気者」

「……いずれお前も同じ目に合うわ」

「……それは、ほら。霊夢さんを目立たせればね」

的確な反撃にちよつと目をそらす水蜜。実際試合になればあの大観衆の前でいろいろと動かないといけない。逃げようにも参加者の中に「聖 白蓮」が居る限りとんずらは不可能である。後が怖い。

しかし、一輪は口元をゆがめる。それを見て水蜜は「くらーい笑い」と思った。

「ふふふ……でも次はあのにつき河童の順番よ。これだけの大観衆の前で肌をさらすことの恥ずかしさを存分に味わうといいわ」

「なるほど」

水蜜は両手を組んでささやかな復讐を思い、満足げに頷く。一輪も両手を組んでうんうんと頷く。ちよつと仕草が似ているが前者は「乗っていない」が後者は「乗っている」。何が、というのは無粋だろう。水蜜はちらりと見て、イラッとした顔をしている。

「それはそうと一輪。河童との対戦相手だけど、閻魔？ ってだれ」

「さあ？ 閻魔っていえばあの人だけ……」

水蜜と一輪はそれぞれ顔を合わせて苦笑い。お互い同じ人物をイメージしたらしい。

「まさかねー」

意味の分からないところだけ息が合う。しかし、この場合はおかしくはあるまい。忙しいはずの閻魔がこの外の世界にいるわけがないのである。普通に考えればの話であるが。

一輪は深くベンチに腰掛ける。背中をつけて空を見ながら、そのまま体を伸ばす。ナチュラルにそんな動きをするので水蜜はチョップを繰り出してやろうと思ったが、やめた。そんなことは知らずのんびりと一輪が言う。

「どちらにせよあの河童が選んだのだから……幻想郷の誰かかかもね」

「じゃあ一筋縄ではいきませんね」

「そうだねえ」

肩肘張らない関係性とはこの二人のことだろうか。

水蜜も空を見る。二人の少女はなんとなく同じように青いそれを眺めながら、飛んでいく一羽の海鳥を目で追いかける。数秒の間同じ動きをしているということだ。そのあまりにのんきな光景がおかしかったのか噴き出したものがある。

「ふ」

と笑われるのを聞いて水蜜がそちらに顔を向ける。見れば二本目のトウモロコシを

手に博麗の巫女が立っている。取りに行っていたのだろう。

醤油の香ばしいにおいがする。だがこの巫女の少女は水蜜を見た瞬間顔をそらす。眼をそらしているのではない。笑顔を妖怪に見られるのは少し恥ずかしいのかもしれない。

「あ、霊夢さん。またモロコシ食べるんですか。私の分は？」

「砂でも食べれば？ それよりあんた、雲居一輪だっけ？」

「あ、はい。な、なんででしょう」

一輪も顔を霊夢に向ける。霊夢はトウモロコシを軍配のように使い、彼女を指す。その横で何かに衝撃を受けたかのように水蜜が固まっている。そっちを霊夢は無視した。

彼女は片手を腰にあてながらトウモロコシを一輪の顔の前を持ってくる。

「出場するだけでも不本意だけどこの大会に負けるわけにはいかないから」

短くそう伝えて、霊夢はコーンを齧る。一応何故負けられないのかは口に出来ないから、微妙な宣戦布告である。霊夢とて一回戦の毘沙門天と一輪の動きには強敵として思う所があったのだろう。実際に戦うかはわからないとしても。

一輪はきよんとしたまま瞬きを二度して、

(そんなにお米欲しいのかな)

と勘違いしてしまう。公表されている商品はそれなので仕方ないだろう。しかし、勝

負事となればこの青い髪の少女も負けん気が強い。彼女は不敵に笑い、立ち上がる。そして一輪睨みながらトウモロコシを食べている不良の様な巫女に「望むところですよ」と答えようとした。

「のぞむとつう!」

「れ、れーむさんそんなことより」

水蜜が焦りながら一輪の顔に手をあてて押しつける。変な顔をしながら一輪は押され、倒れる。一輪の片手を頬にあてて何が起こったか分からない表情とポーズは御姫様の様である。それでも水蜜にはどうでもいい。

「こ、この入道連れていない入道使いの名前を憶えているんですか!? 私のことは覚えていなかったの!!」

それが大切らしい。霊夢はコーンをシャリシャリ齧りながら答える。実際には水蜜も一輪も霊夢は名前を最初覚えていなかったが、あれだけ紹介されたのだから記憶できたのだ。しかし博麗の巫女は言い訳しない。

「どうでもいいわそんなこと」

「ど、どうでもよくないですよ……」

「別にあんたの名前も覚えてるからいいじゃない。ムラサ……………ミナミツ」

「な、何ですか今の間! 思いだしながら言いませんでした!? さつき一輪の名前は

すつとでてきたのに」

ぐううと赤い顔で詰め寄ってくる水蜜を霊夢はトウモロコシを棍棒代わりに追い払おうとしたが、まだコーンが残っているから断念する。しかし、水蜜の肩を掴んだ者が居た。

さつき張り飛ばされた一輪である。顔を片手で口元を抑えている。だから険しい目元だけが見える。

「それを言うならキャプテンなんて言ってるあんたも大概じゃないか。こ、この本屋！」
「本屋を馬鹿にしないでください！ それに今日はムラサ号を手に入れました！」

「どうせ浮き輪か何かでしょう!?!」

「ぐ、ぐぐ。一輪の分際で、す、鋭い」

「ぶんざいつて」

幻想郷であればここから派手な弾幕ごっこが始まるのであろうが、そんなものは始まらない。お互いどうでもいいことを言い合いながら、水蜜が一輪の両頬を引っ張る。負けじと一輪も同じことをやる。霊夢は食事に忙しい。

少し離れた場所では困ったように微笑む虎とあきれ顔のネズミがいるが、三人は気が付かない。

水蜜と一輪のバトルはヒートアップしていく。止めてくれる人がいないのである。

二人の少女は意地で互いのほつぺたを離せないが普通に痛い。ちよつと目元に涙がうつすら見える。しかし先に離れた方がたぶん負けである。

そんなしようもない戦いを千年生きた二人の妖怪は繰り広げている。実は観客からちらちらとみられておりすでに有名な一輪はともかく水蜜の注目度も上がっていく。それに気が付いたわけでもあるまいが水蜜が停戦を持ちかけた。

「ふあ、ふあかりましたいちりん。おたがいふあなしましょう」

「わ、わかつふあ」

即座にお互いに相手のほつぺたを離し、ひりひりする自分のほつぺたをさする。色々と子供っぽいことをしてしまい恥ずかしいと一輪は思う。彼女はジロツとキャプテンを見て文句を言おうと思った。

水蜜はさらに速い、一輪が自分を見るのを待つていたかのように。

「ばーか」

煽る。

一輪は一瞬意味が理解できなかったが、純粋な挑発だと気が付いて頭に血が上つてしまふ。何より相手が同僚なのが大きい、霊夢や他の外部の人間ならばそこまで激昂はないだろう。

「ハ、ハの」

とまた一輪は水蜜に手を伸ばすが、それをキャプテンはするりと回避する。それどころか指で自分の目の下をひっぱつぱりながら舌を出す。あかんべえ、ということだろう。

一輪はそれでムキになってとびかかるが水蜜は半身になって避ける。さらに小さなステップで一輪の伸ばした腕から逃れる。こういう場合は逃げる方が有利だ。

「くそ。う、雲山が居ればひねり潰せるのに……」

悔し気に同僚を捻り潰すなどと言う厄。実際弾幕ごっこでも純粋な戦闘でも一輪は連れている「雲山」に頼っている部分が多い。だが、それを言えば水蜜も本来は「碇」を振り回している。

外から見れば単に可愛らしい水着の少女が二人じゃれあっているだけにも見える。既に霊夢は一輪達が立ったことで空いたベンチに座っている。トウモロコシを両手で持ってもぐもぐと食べる。こいし以外は誰も見ていないからかちよつと嬉しそうな顔で。

こいしはいつも通り大きな瞳をキラキラさせている。胸元のフリルを無意識に指でつまんでいる。特に意味はない。彼女はくうとなるお腹を押さえてトウモロコシを凝視している。霊夢から強奪は難易度が高いかもしれない。

「ねーねー。もしもーし。それおいしーですかー？」

「うわばらっ！」

奇声を上げて霊夢がのけぞる。気付かなかった。視界の隅ではいつの間にか攻守逆転した水蜜が一輪を羽交い絞めしている。

「あ、あんたどこから湧いて出たのよ！」

霊夢は年上の少女のバトルは無視してこいしを睨む。油断しているところをみられてバツが悪い。それに応えてこいしは言う。

「気を抑えていたのー。それよりそれちよーだい。ちよつとでいいわ」

「あ、あげないわよ」

「けちー」

「しっし」

払うように手を振る霊夢。誰隔てなくクールな対応ができるのは彼女の欠点であり、魅力でもあろう。しかし、こいしは探偵の様に顎に手をやり「ふむ」と一言、片目をつぶって考えるような仕草。実際には考ちやいない。全て無意識な彼女にとっての最適解。ちよつとカッコつけたいお年頃なのだろう。

それから考えがまとまったかの「よう」にはちゃんと指を鳴らす。彼女は全力で振り返った。スカート下のフリルが揺れる。

「ねーねー水蜜！」

たったか眼もとまらぬ速さで一輪を抑え込んでいる水蜜に近寄るこいし。そのまま

その剥き出しのせなかを指ですつとなぞる。寺では水蜜が昼の食事を作っている関係でちよつかいを出されたのだろう。

「ひっ！」

びくつと動き水蜜がかわいい悲鳴を上げる。その瞬間一輪の瞳がきらり、抜け出す。そして三人が同時に声を上げる。

「な、なにするんですかこいしさん！」

「よくもやってくれたわね。覚悟しろ水蜜！」

「トウモロコシがほしいんだけどー！」

ばらばらである。全員が全員の話を聞いちやいない。会話が成立していないのだ。単純に声を上げただけと言える。ただし、水蜜には不覚だった。彼女はこいしに抗議するため今度は背中を一輪に見せてしまったのだ。

「はっ!?!」

水蜜はそこに気が付く。真後ろには怒りの炎を燃やす尼が一人。修行が足りない。

一秒にも見えない刹那。一輪は両手で水蜜を捕まえようとびかかる。船幽霊危機一髪である。水蜜は砂を蹴り前へ逃げようする。

「おっ！」

こいしがそれを受け止める。一輪に協力しているのではない。そういう位置関係な

ただだ。水蜜は「やばっ」と冷や汗を流す。

そう、それは不幸な位置関係に合っただけなのだ。

一輪は後ろにいる。こいしは前にいる。挟まれた水蜜の不幸を河童以外はそれを望んでないなかった。

一輪の手が水蜜のトップスの紐にかかる。掴んでしまう。そのままもいつきり引き寄せようとして、するりと結び目がとける。力を入れ過ぎたのだ。

時間がゆっくり流れる。

引き抜かれる緑色の布。

光るこいしの瞳と太陽。

芯を齧ると甘い、などとのんきしている霊夢。

目を開いて腕で「前」を抑えてしやがみこむ水蜜。

ぬるりとデジカメを手に現れるにとり。

全員が黙っている。しやがみこんだ水蜜の背中にはくつきり残った昨日の日焼けのあと、そして焼けていない白い肌。膝を抱え込むように座った彼女は髪が短いから背中を隠せない。

「緑の布」を片手に掴んだまま、滝のような汗を流している一輪。

「え、えつと。わ、わざとじゃないわ。その、うん。えつと。うん」

訳の分からないことを言いながら、右にそわそわ左にあわあわ。一輪の眼がダンスパーティーしている。合わせて水蜜の肩がガタガタと震えだす。彼女の頬が赤くなつていく。

「い、今のはは、アブナカッタ、あぶなかつた。い、一輪」
「は。はい！」

いい返事をする一輪。後ろめたいのだろう。

水蜜は首だけを動かして後ろを睨む。体ごと前を向くなどできない。潤んだ瞳が「冗談ではない」と語っている。しかし、そこがシャッターチャンス。

にとりが一輪に体当たりして強制的に排除する。「うえ」と変な声を上げて倒れ込む。一輪を無視して河童は手元のデジカメのボタンを押す。パシャとわざとらしく音を出して、にとりは笑う。

にやあ。

黒い笑いを残して反転。ダツシユで人ごみに消えていく。いきなり現れてから一言もしやべっていない。呆然とする水蜜と海鳥を目で追いかけるこいし。実の無くなつたトウモロコシを手に悲しそうな顔をする霊夢。

数秒後やつと水蜜が言葉を発した。

「な、何なのよ今の！ ちよ、河童。わつ」

立ち上がれない。というか状況がクリアになつていくほどただの少女の様に水蜜の顔はゆでだこのようになる。胸元を抑えてあたりを見回せばこいし。

にとりがどんなことに写真を使うかはまだ彼女達は知らない。ナズーリンは知っているが教える性格ではない。しかし、一点だけは分かる。碌な使い方はされないだろう。

事実この一か月後には肚の黒い天狗と暗い密室で黒い河童の間でダークな取引が行われた。その数日後には新聞に掲載されることになる。それは余談である。

ただ今はそれを阻止するために水蜜は匍匐前進（ほふくぜんしん）して一輪から自分の水着を奪い取り、隠しながらも急いで着けた。長くこの世とあの世に存在してきて最速の行動だったかもしれない。

彼女は砂まみれの体も気にせずにとりの逃げた方を睨み。全力で追いかけていった。流石にあのデジカメは破壊しておかないと夜も眠れない。幽霊だから眠れなくてもいいかもしれないがレム睡眠は大事である。

「ま、待て河童あ!!」

微塵の余裕もなく水蜜も砂浜へダッシュしていく。

そして入れ替わるように戻つて来るにとり。のんきにデジカメを操作している。データをパソコンへ送っているのだろう。海の家物ではなく、街にある彼女のサー

バーへである。これでデジカメを破壊しても無駄である。

「けけ。いい絵が撮れたよ」

心底嬉しそうにとりは哂（わら）う。

そのケラケラ笑う姿はいたずらが成功したような子供っぽいものだが、実際には水蜜が居なくなるまで身を隠していた策士である。ある意味それが彼女なのかもしれない。

しかし、そんな彼女もさつきまでとはちよつと違う。動きやすいようにだろう髪を横に分けて後ろはポニーテール。そこに「L」のイニシャルの緑帽子。そしてちゃんとパーカーを脱いで胸元にリボンのついたトップスと下には海用のショートパンツ。

姑息にも下を隠しているがそれなりにやる気なのだろうか、少なくとも多少は真面目にやる気はあるのかと霊夢は思った。

「あんた」

霊夢是水蜜とのいざこざは無視して話しかける。手には新しいトウモロコシ。

「意外とやる気があるの?」

「え。ないよ?」

「はつきり言うね」

「そりゃあそうさ。言いよどんだっていいことはないよ。本心も嘘もすつぱり言うのがいいのさ」

「妙な説得力があるのが癪だけど。どちらにせよあんたにも負けないわよ」

冷たい目で霊夢はにとりを見る。異変解決の糸口が見えたこの場所である。彼女も言いよどむことはない。

霊夢はこの「外の世界」に来たときのことを不意に思い出す。それは彼女が異変解決へまだ情熱を向けられていた時。だが口にはしない。ただにとりを睨む。

それを見ているだけの一輪は、

(霊夢さん……そんなにお米が……)

と話には付いていっていない。

にとりはふつと肩をすくめる。

「まあまあ。霊夢さん。そんなに肩肘張らなくていいぜ。もうすぐ私から試合だしね。どちらにせよ結果は出るんだ、だったら」

にやりとにとり。口元を緩めて霊夢の睨みを笑顔で返す。

「楽しめないよ、損だぜ」

ウインクしてみる彼女に毒気に霊夢はトウモロコシをシュツと棍棒代わりに使う。なんか腹が立ったことが理由である。

「あぶなっ!!? れ、霊夢さんい、意味わかんないよ!」

「あ、体が勝手に。……食料が無駄にならなくてよかった」

「う、うわーすごい。なにそれ、ぼ、暴力反対だよ。やるなら相撲とかで決めよう」

「二人でやりなさい」

「二人で相撲つて寂しいレベルが振り切れてるね」

そんな二人を見ながらこいしはくすりくすり。無意識に笑っている。いつの間にかやってきたお燐もその後ろにいる。アメリカ国旗を元にした水着トップスと普通シヨートパンツを着ている。がんばったのだろうが目立っていない。

にとりは頭を掻きながら含み笑い。

「霊夢さんは変なところで真面目なところがあるからなあ。ほら、あの人を見習った方がいいよ。いろいろと外の世界でデビューした半分霊の人とか」

「見習うところつて……どこよ」

「チャレンジしているじゃないか。まるで大企業みたいにさ」

にとりは実は事情を知らないから「半分霊の人」が自分からはつちやけたと思っっている。霊夢は見習うべき場所を本気で聞いている。彼女の意識の中では「変人」以上の何物でもない。

その変人。実は近くにいる。

白い髪をなびかせ。ちやきちやき二振りの刀剣を帯びた変装用サングラスを付けた彼女。

手にはビーチの案内チラシ。水着は着ていないが、なんとなく海をみれてちよつと嬉し気な顔をしながら、河童の巣窟である海の前前に立つ。

「ここが海の家なのね。初めて見たわ」

霊夢、にとり、こいし、一輪、お燐は噂を聞きつけたかのように現れた彼女を凝視している。のんびりと「何を食べようかな」などとたわごとを言っている彼女を見て口々に言う。

「あーテレビによく出るヨームだ！」

とこいし。

「アイドルの人だ、ななんでここに」

と一輪。

「捕えろ」

と即座にかつ冷たく近くを通りかかったおかつぱ河童に言うにとり。

「誰かあたいに反応して」

とお燐。

「なんでいんのよ……」

と妖夢に呆れる霊夢。

彼女達の声を聴いた白髪の少女、つまり魂魄妖夢はからくり人形の様な動きで首を動

かして、うめくように言う。

「な、なんでここに」

逆に霊夢達が聞きたいことを聞いてきた。しかし、天狗に世の中の闇を教えられた彼女である、ハイエナのような瞳で真っ直ぐ自分を見るにとりに危機感を持つ。即座に刀の柄を掴んで臨戦態勢を整える。危ない人である。

にとりによりその前へ押し出されるおかつぱ河童。ワンピースの水着以外は帽子しかない彼女はいきなり銃刀法違反者の前に出されて「しゃ、しゃー」と猫の様な威嚇をする。混乱している。シヨツカーの戦闘員の気持ちがよく分かった。

妖夢は居合の姿勢である。

おかつぱは土下座するタイミングを測っている。そろそろ怖くて号泣したい。

「やめなさい」

そんな緊張した場所に澄んだ声が響く。大きな声ではないはずだった、だが全員の耳にすつと入ってくるほどに穏やかで淀みがない。

その声の主は肩にかかった緑の髪を手で払い。妖夢とおかつぱの間に恐れなく歩き、入る。その「主」を見た瞬間。にとり以外は固まっていた。

透き通るような白い肌を持った一人の少女がいる。片方だけ長い緑色の髪をリボンで結び。芯の入ったような真っ直ぐな姿勢。それでいて上下には分かれていても黒を

基調としてオレンジのラインの入ったスポーティな水着。細い体のラインに張り付いたそれ。

地味な水着でも彼女を見れば誰もが眼を奪われるような、そんな可憐さがある。

「警察を呼ばたいのですか？　そう、あなたは少し刃物に頼りすぎている」

四季映姫は登場と同時に正論を言った。迷いのない彼女を照らす陽光が後光のようだ。

おまけ 人間社会の闇

とある秋の午後。とあるおんぼろアパートのことである。

丸い食卓を囲む三人がいた。

一人はお茶碗を片手に黙々と食べている地霊殿の主こと古明地さとり。

一人は全員でつつけるように大皿に盛られた一口餃子を一生懸命に食べているチルノ。

そして最後の一人は金髪の髪をした少女ルーミアであった。

別になんてことの無い日である。残りの住人は外に働きに出ている。みかん箱の上に乗った小さなテレビにはお昼のニュース番組。ミヤケ屋なるレポーターが大きな声で騒いでいる。それをこの三人は聞いているわけではない。

食卓の上には二人のお茶碗、さとりは手に持っている。そしてその地霊殿の主、特性の一口餃子を載せた大皿。最近主婦が板についてしまい結構さとりは本気で悩んでいる。おかずはそれだけである。いたってシンプルなお昼ご飯。

「お代わりー!」

チルノは空になった茶碗をさとり突きだす。眼はきらきら、叫んだ時に口から米

粒。ルーミアはちらりとそれを見て、われ関せずとばかりにもぐもぐ小動物の様に口を動かす。ちゃっかりと彼女のお茶碗の中には白飯といくつかの餃子。チルノに取られる前に確保しているのだろう。

やれやれとばかりにさとりは茶碗を受け取って立ち上がる。炊飯ジャーに残ったご飯をよそってから、

「霊夢達の分もあるから……これだけよ」

と大盛のご飯を出す。そのあたり甘い。

「ええー！」

元気に言うチルノはさらに餃子にがつつく。噛むたびに「うまいうまい」と素直な感想を漏らすのでさとりもつい口元が緩んでしまう。この狭いアパートの一室でも楽しめることはなんでもあるようだった。

しかし、それは突然訪れた。

「いたっ」

ルーミアがうめく。片目をつぶり、びくつと肩を震わす。チルノはナチュラルに無視して、さとりだけが顔を向けた。

「どうしたのかしら？ ルーミア」

「うう？ なんか歯が、いたいわ」

「歯？ ちょっと見せてみて」

さとりが膝をついたままにじり寄る。ルーミアは口の中に合った物をかみかみ、ごくりと慌てて飲み込む。その時も歯が少し痛む。

「んあ」

大きく口を開けるルーミア。犬歯が鋭い。さとりは「ん」と言いながら覗き込んでみるが、やってみてわかったことは見てもよくわからない。

「もしかしたら虫歯かしら……」

「むひば」

口を開けたまま言うルーミア。今までの妖怪生で虫歯などになった記憶はない。遠い昔にあったとしても覚えていない。一応知識としては知っているので彼女は口を閉じて言った。無論歯医者など無縁である。

「治るの？」

「そうね……自然に治癒はしないでしょうから……歯医者に行くしかないわね」

「はいしや？ 人間の病院に行くの、めんどいなあ」

ちえーとルーミアは特に深く考えない。歯が痛いのは困るので治したいが、それはそれで「歯医者」などという場所に行きたいとは思わない。それでも彼女はしぶしぶ行くことにした。

チルノはぺろりとすべての一口餃子を完食している。

★☆☆★

ルーミアとさとりは近くの歯医者に来た。それは最近できたのか真新しいビルクリニツクの二階にある。入口をルーミアが開けるとからんからんと鈴の音がして、中からクラシックの緩やかな音楽が流れてくる。

それよりもむわつとした独特な薬品の匂いにルーミアは顔をしかめた。彼女は黒のベストに赤いリボン。そして赤と黒のチエックのスカートを穿いている。彼女は黒の

受付はさとりがしてくれた。霊夢の扶養家族であるため健康保険は使える。そのあたりのからくりには河童がからんでくるが、それは別の話である。

ルーミアは意外にお洒落な待合スペースをキョロキョロ。愛らしい少女そのままの仕草で見回す。ゆったりしたソファアが壁にそつておかれている。その色も明るいグリーンであった。壁には何なのか彼女にはわからないが表彰状などが飾られている。

それはそうと本棚にある漫画を目ざとく見つけたルーミアは、数秒物色してからお好みの少女漫画を手に取り、ぼすりとソファアに座る。どうやって治るのか分からないが、これだけリラックスした空間だから、既に油断している。

しばらくするとさとりが「問診票」なる物を持ってきた。

「てきとうにかいておいてー」

と漫画から眼を離さず言うと、ペしりと軽くさとりに叩かれた。「いた」

少し頬を膨らませたルーミアは痛くもないが叩かれた頭を撫でながら、問診票を書く。趣向品はなんですかなどよくわからない項目には空白で答えにした。

地獄の時が迫る。

哀れにもこの少女。無知である。

この「歯医者」はこの世の屈強な男でも嫌がる場所なのであるが、妖怪の彼女にはわからない。さとりは雑誌を開いてばらばらとめくっている。ルーミアも受付に問診票を返してからまたそそくさと漫画を読む体勢に入った。「もつつべ守護月天」と日焼けした表紙に書かれている。格闘家のヒロインが男子達を守るユニークな内容である。

『ルーミアさん。お入りください』

遠くで「死神」の声があるがルーミアは気付かない。仕方なくさとりがペしりと軽く頭を叩く。

☆☆☆

診療室にもクラシックが流れている。

ここには奇妙な形をした椅子がある。頭を載せるカバーのついた大きなそれにルーミアは座った。ちよつと大きくて足が付かないが、ちゃんとスカートの手で押さ

えているあたりしつかりしている。

担当してくれたのは優しい気な看護婦であった。少しふくよかな彼女はルーミアの首にはエプロンのような物をかけてくれた。

「肌がきれいねー。外国から来たの？」

「ふふ、そーう？」

素直に笑顔なルーミアはえへへのんきしている。看護婦は椅子の後ろに回って「倒しますね」と一声、椅子ががくと動いてからぐつと後ろへ倒れ込んだ。まるでベッドの様だとルーミアは思い、結構素直に動く椅子におおと驚く。

横には壁掛けのテレビがあり、そこには猫とネズミが仲良く喧嘩しているアニメが映っている。ただし、無音だった。眼だけで楽しませるためにだろう。

彼女の目の前に大きなライト、ちよつと眩しい。口の中を鮮明に映すためにライトをつけていると聡明な彼女にはわかる。そして看護婦も横に座って、ルーミアの耳元でカチャカチャと何かしらの金属を扱っているが、顔が横を向きにくいのでわからない。

ちよつといやな予感がルーミアにする。

「ねえ」

「どうしたのルーミアちゃん」

「今からどんなことをするのかしら？」

「すぐ終わるわ」

にっこり看護婦は抽象的なことを言う。何をするとかは言わない。ルーミアは経験が無いから「すぐ終わるのか」と言う。そのつぶやきが可愛かったからか看護婦は微笑む。

★☆☆

「それじゃあちよつと見ますから。お口を開けてくださいね」

しばらくしてやってきたのは若そうな女医だった。大きなマスクをしているので顔立ちはよくわからない。最近では頭に「CD」のような額帯鏡をつけることは少ない。むろんルーミアには関係のない話だった。

「あぐ、あぐ」

ルーミアはの口によくわからないがスプーンのような棒をいれたり、女医の手がゴム手袋をしているから気持ち悪い。それに女医は「かけ」だとか番号だとか意味の分からないことを後ろの看護婦に言っている。

(まだ、終わらないかしら)

薬か何か塗るのだろう。その程度にしか認識していない。

女医は少しして、言う。

「うーん奥歯にちよつと小さな虫歯が出来ていますね。とりあえず今日治療しておきま

しようね」

「……」

こくりと頷くルーミア。眩しいので眼はつぶっている。それから女医はブラシの様な物で妙な味にする液体を歯に塗りたくってきたが、ルーミアは「すぐ終わる」という迷信を信じて我慢した。

そして女医の手には薄手のタオルが一枚。ルーミアの顔に載せる。それは口元だけが開いているものであった。彼女はそれから言う。

「それじゃあ削りますね」

「……………?」

ルーミアは今の言葉の意味が分からない。「けずる」とは何の事であろうか、いきなり目隠しされたことも驚いたが、それ以上に驚いたのは。

——ウイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

突然耳元に響く金切り音。ルーミアは焦った。

「な、何の音よ!?!」

「ドリルですよーはーいすぐ終わりますからね。お口を開けてください」

「ど、ドリル!?!?!」

ドリルを口の中に入れるのか。ルーミアは混乱した。それにさらに。

——しゅここおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!

勢いよく空気を吸い込む音もする。要するに涎を吸い取る機械なのだが、ルーミアは知らない。しかし逃げようとしてもすでにルーミアはまな板の上のルーミアなのである。目隠しされて恐怖は倍加している。

椅子の上で彼女の体ももぞもぞと動く、心配なのだろうが女医が上から体重を掛けて抑え込む。手慣れている。余談だがドリルと言つても細いものである。ただ目隠しされているルーミアの頭には岩盤を貫く用のドリルがイメージされている。

震えるルーミアに女医はにこやかに言う。

「それじゃあ痛かったら右手を上げてくださいね」

「いい、痛いのか?」

「ダイジョウブですよ。右手をあげてくださいね」

実際最近の歯医者者は目覚ましい進歩を遂げている。古代から科学の発展には犠牲がつきものであるが、その過去の恩恵で現代人は快適な医療を受けることができる。ただ、幻想郷のような場所にいたルーミアに「ドリルで削ります」と言つても拷問にしか聞こえない。

ルーミアはごくりと息をのんだ。それから逃げようとする。

「せ、せつかくだけどもまた今度に」

「はい口を開けてください」

歯医者者は治療中に患者の相手などしない。基本的に会話は片手間である。ルーミアは女医の言葉に負けて震えながら口を開けた。目の前はタオルで遮られているが、ドリルらしき影と空気を吸い込む何かのシルエツトが見える。

無論、音は全てクリアに聞こえる。金切音が近づくとルーミアは「あ、ああ」と弱々しい声を上げる。逃げようとしても起き上がれない。

その小さな口にドリルが入っていく。

——ウイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

——きいいいイイイイイイイイイイイイイイイイイい

——しゅここおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！

——ガリガリガリ

ルーミアの体が痙攣する。「んんん」とくぐもった悲鳴を上げながら、膝を立てたり足をばたばたさせたりと抵抗するが、そこは歯医者も軽くない。スカートを気にしている余裕などない。タオルの下は涙目である。

ばったばった動くルーミアを笑顔で抑え込む女医と看護婦。

口の中で轟音が響くような錯覚があるが、事実ほんの小さな穴をあけているに過ぎ

ない。それでもルーミアはまるで歯が底から削り取られるような恐ろしさを覚えた。事実、必死に右手を上げている。

「我慢してくださいねー?」

(ええええええ???) み、右手あげているのにつ?)

右手を上げてアピールするルーミアだが、何一つくみ取ってはくれない。痛いというか凄まじく不愉快な高音が響く。彼女は最終手段として口を閉じようとしてたが、女医はうまく指を入れて閉めさせない。

ドリルから水があふれ、それを吸い込む謎の機械をルーミアは啞えさせられている。たまにもすごい風を生み出す訳の分からない棒のような物を口に入れられては、ルーミアの混乱を深くしていく。何の役に立つのかわかりやしない。

「はい。それじゃあうがいしてくださいね」

そう女医が言うのと口の中からドリルが抜かれた。ルーミアはだらしなく開けた口から涎を垂らしている。精神的に極限まで疲れている。目隠しを看護婦に取られると死んだ魚のように光の無い目で虚空を見ている。

正直騙された気しかない。ある意味人間社会の闇の一つを学んだと言える。

「う、うああ」

当たり前であるが椅子が起き上がると、死んだ表情のままルーミアも起き上がる。

中々にシユールであった。椅子の傍にはうがい用のコップと洗面台がある。彼女はやつと終わったと思い、ふらふらと立ち上がってうがいをする。

「それじゃあルーミアちゃん。もう一回寝てね」

女医が言うたびくつとルーミアの肩が震える。しかし、彼女はにこやかである。

「大丈夫大丈夫、もうほとんど終わっているから」

子供には簡単な嘘がいい。ルーミアは怯えつつそれを信じてしまった。どんな者でも都合のいいことを信じてしまうのだ。彼女はまた椅子に座って、横になった。その時ルーミアは女医の持っているスティックの様な物を見た、その先に尖ったドリルがある。

予想よりはるかに小さいがそれよりも「なんでまだ持っているか」の方がルーミアには重要である。その答えが出る前に彼女の眼にあのタオルがかけられ、また押さえつけられる。

「だ、だましたな」

「お口開けてねー」

——ヴィヴィヴィヴィヴィイイイイイイイン！

ルーミアの傍で新しい音がする、さつきよりも重量感のある音。ドリルは用途により先端を変えることができ、それによって「太く」なる。ルーミアは流石に逃げようとし

た。しかし、逃げられない。

ばったばた。金髪の少女が哀れに治療される。

待合室ではさとりが優雅に雑誌を読んでいる。

★☆☆

帰り道さとりの足は重い。

その背にはいろいろと絶望を知ったルーミアがいた。つまりはおんぶをされているのだ。もちろんのことさとり達は車などという気の利いたものは持つていない。だから歩きのだが、この状態のルーミアを歩かせるのは無理だった。

さとりのポケットの中には診察券が一枚。そこには来週の「予約」が書かれていた。

理由はよくわからないがもう一回来なければいけないらしい。それを聞いた瞬間、ルーミアはその場で膝をついて空を見上げた、そのままこの様である。

「…………ふ、ふう」

さとりは歩道を少女を背負ったまま歩いている。

それだけ見るのならば微笑ましい光景なのかもしれない。

29話

そこにあるのは灰色の太陽。それは薄い雨雲の上に浮かんだシルエツト。

それが靈鳥路空が外の世界に来てから目にした初めての物だった。

感じたのは体の重さ。いつも胸の奥でくすぶっていた莫大で強力なエネルギーを感じることはできない。わずかに降り注ぐ雨に身を濡らしながら、強烈な喪失感に襲われたことを今でも常に思い出し続けている。

彼女の力は自力で得たといえるものでもない。とある気まぐれな神様のきまぐれが重なった結果だった。しかし、一度手に入れた「熱」は彼女の自信と地底を燃え上げながらせた。

思い出すのは旧地獄の窯。火焰地獄跡。マグマと熱気が渦巻く、地の底。力を得た彼女の炎は灼熱すらも焼くようなもの。心地よい高揚感に満ちた毎日を路空は楽しんでた。それを外の世界に来て失うまで。

路空は外の世界の道端で呆然としていたことを覚えている。言ってしまうれば本来の自分に戻ったともいえるが、一度得た何かを失うことの辛さを彼女は身をもって学んだ。

呆然と光の無い目で、
雨に冷えていく体で、
曇天を見上げる虚しさを、
忘れることができなかつた。

★☆☆★

「ひい……ひい」

汗だくになりつつ霊鳥路空ことお空はベースランニングをさせられていた。頭には野球帽がある。

場所は丘の上の野球場。とある闇魔率いる少年野球団が練習している場所である。野球場のベースを線で結べば宝石の形になるので「ダイヤモンド」と称されることがある。そのベースを走り抜ける練習方法がベースランニングである。なぜ地獄鳥がしているのかはわからない。

ホームベースには綺麗に整列した少年たちと一人の麗しい少女が背筋を伸ばしてお空を見ている。上は野球帽とユニフォーム、下はハーフパンツにアップシューズという

動きやすい合理的な格好をした虎ファンで元地蔵。

閻魔兼野球監督である四季映姫である。彼女は道端で地蔵に「強くなりたい」とお願いしていたお空を連れてきて野球の練習に参加させていた。

三塁ベースをお空が蹴る。やり方は二十分位掛けて映姫が教えている。

少年たちが「がんばれ!」と新たな野球仲間にも本来男女の別などない。少年スポーツに男女の別はない。「少年」という言葉にも本来男女の別などない。

お空は黒いシャツが汗で張りついている。下に穿いたジーンズ生地のハーフパンツから覗く太ももを精一杯動かしながら、本塁へ突入していく。だだだと走り込んで白いホームプレートを踏み込む。

「ひい、……はあ、はあ」

膝に両手をついてお空は汗をぬぐった。

強くなりたいと言ったが、野球がうまくなりたいたいと言っていない。山の神様は神様らしく「力」を与えてくれたが、閻魔はベースランニングの技術を与えてくれるらしい。

その閻魔、パンと両手を叩く。

「それでは走塁練習はここまでです」

少年たちの方を向いて。

「今から十分間の休憩後実戦形式でのバッティング練習を行います。空を見ればわかることですが、とても暑いので各自用意しておいた塩を嘗めること、それに水は喉が渴いているかどうかは別として一口飲んでください。そして休み時間中に練習してはいけません」

長い。少年達はそれでも素直にいい返事をして従う。破ればマンツーマンでの説教である。絶対にその愚は犯さないと彼らは学習している。だから元氣よく彼らは休み始めた。彼らの見えないところで微笑した閻魔はくるりお空と振り返る。

「お疲れ様です。貴女も休んでください」

「はあ、はあ、あ、あの」

「なんででしょうか」

「な、なんで私はこんなことをしているのでしょうか？」

「……………」

お空の質問に映姫は答えず。こちらへと手招きする。当たり前だが野球グラウンドにはベンチが二つある。今ここには映姫のチームしかいないから、一塁ベース側は少年たちが思い思いに使っている。ただし散らかせばいろいろと説教なので気を付けている。

ベンチ前にはシート上に並べられたヘルメットやバッドなどがある。

映姫はお空を連れて三塁ベース側のベンチに入った。そこで二人は並んで腰かける。

そのまま数十秒黙ったままの二人。だんだんとお空は焦ってきた。何でかは分からない。無言が続けば話さなければという焦燥がある。

グランドには陽炎が立っている。ゆらゆらと揺らぐ明るい世界。

映姫たちのいるベンチにはちゃんと屋根が合る。少し暗く感じるくらいしつかりしたものだ。地方のグランドにしては良い造りであろう。

「あなたにはあの子達はどう映りますか？」

何を話そうと考えているお空の横でふと映姫はそう言った。お空は「へ？」と顔に書いたように呆けて、首を傾げる。ちよつと考えてよくわからなかったので素直に聞いた。

「ど、どういふこと？」

「……あちらの」

映姫は一塁ベースのベンチを見る。そちらのでは子供達がわいわいと談笑している。それぞれがユニフォームを土色に汚しているが、何を話しているのか分からないがなんとなく楽しそうであった。

「楽しそうね……地獄の怨霊とは全然違うわ」

お空は思ったことをそのまま言った。分かりやすい思考回路を持っている。映姫は子供達を怨霊と比べる言葉に苦笑しつつ、流し目でお空を見る。その澄んだ瞳を見てお

空はちよつと怖気づく。まるで全てを見通すかのようだった。

お空は「四季映姫・ヤマザナドゥ」を覚えていない。単なる変な野球監督と思つてゐる。ゆえに彼女は相手の「格」ではなく、純粹に映姫の持つ雰囲気には圧されている。この閻魔は静かに桃色の唇を開く。

「そう、あなたは少し過去にとらわれ過ぎている」

「え？　へ？」

「物事を全て過去に結び付けて、自分のことを不幸に映している。どんな幸福なことがあつても昔からの何かに縛られて拗ねている。それではすべてが灰色に見えるでしょう。」

「な、なにが、いきなり、なに」

「不意に力を得て、不意にそれを失つた事。そこに縛られている今をあなたは変える必要がある」

「……………」

お空は一瞬頭の中に何もなくなつた。つまり思考が消えた。

直ぐにむわつとした怒りが胸の奥から湧き出てくる、それが素直に顔に出る。彼女はペンチを立ち、閻魔を指さす。緑の髪は涼しげな顔で見返している。一塁ベース側で子供達が騒ぐ。

「お、お前なんか何が分かる！」

「……………」

「あの、あの素晴らしいエネルギーが感じられなくなって……そ、それがわかるもんか！」

語彙が少ない。それでもお空は感情の束をぶつけるように映姫に叫んだ。その激情を閻魔は逃げることなく受け止めている。力を失ったこと、それは彼女とて変わらないが自分のことは言わない。

映姫はゆっくりと立ち上がり。お空の前に立つ。

「わかる、ということとはとても難しい。人も妖怪も何かを真に理解することはできない。それは自分のことでも同じ」

「……………」

「あの子達が楽しそうだと、いいましたね」

映姫は視線を子供達の方に移す。お空もそれお目で追った。

少し呆然としながら、心配そうな顔の彼らを見ながら閻魔は言う。

「あの子達も隣にいる子のことを理解しているわけではないでしょう。それでも共に居たいと思えるものです。それは人の子でも、あなたのような子でも一緒。……彼らにも悩みはあります。ここ以外では一人のものいる」

「つだ、だからなんだつてのよ。そんなのことが私になんの関係があるの?」

「私は気の遠くなるほど昔からいろんなものを見てきました。あの子達に限らず。多くの苦悩も喜びもこの目で見てきた」

ふと、思い出すように眼を閉じる映姫。だが、口には出さない。

彼女が眼をつぶったまま静かに息を吐く、それだけで絵画の様に美しい。数秒くらいの間。それをお空は数倍に感じた。映姫は眼を開けて、それは「やさしい」としか言えないような、不思議な微笑みをお空に向ける。

「あの子達は今となりにいる子達と一緒にいたいからここにいる。あなたにもいるのではないかしら? それは貴女の言う『エネルギー』よりも大切なのです。周りを全てよりも優先するほど必要な物だったのですか?」

「なに、言っているの……?」

「あなたには此方に来てから、あなたを氣遣つてくれたものが居るでしょう。それに出来ることができましたか? 不幸だからと全てを拒絶してはいけません」

——げんきだーせ! おくうー

などという猫の顔。

——修行すればいいわ!

と謎の誘いをしてくる妹様。

——美味しいものでも食べましょう

こちらにきて主婦らしくなったご主人様。

いままで聞き流してきた言葉が何故かお空の頭に浮かんだ気がした。

しかし、そこに「どうせ自分なんか」と妙な考えが浮かぶ。自身が喪失した状態で聞く励ましは辛いこともある。事実思い出したことは「灰色」の世界を思い浮かべている。「ゆえにあなたは応えなければいけない」

映姫はお空が何を考えているのかなど知らない。能力もなく「理解」などできない。彼女はゆつくりとお空の横を通り、ベンチから一步外に出る。そこは太陽の降り注ぐ明るいグラウンド。お空のいるのはベンチのひさしの下、暗い影の下。

お空は映姫を見ている。いつの間にか拳を握っている。それを自分で少し驚く。彼女は一步前に入る。本来、この地獄鳥はお調子者で真面目なのだ。それが今までは悪く作用していた、だから今からを彼女は歩かなければいけない。

悩んでいようが、悩んでいまいが歩くことになる。単に下を向いているか、上を向いているかの違いだけだった。それだけで顔つきも変わる。特に素直な子ならなおさらである。

お空はベンチから出る。

急に明るい場所に出たからか、眩しい。彼女は手を彼の前にかざして空を見る。

そこにあるのは焼けるような太陽。それは青い空に浮かび、世界を照らしている。雨雲の上だろうと太陽はそこにある。それを見る者の心が違うだけなのだ。

お空は野球帽のツバを持って深くかぶる。背は高いが腕はしなやか。黒い髪が太陽に光り、風に揺れる。ただポニーテールをしているので大丈夫。

黒いシャツはちよつと丈が短い。半そでだが、色が悪く熱い。下に穿いたハーフパンツはカーキ色でポケットが付いている。そして胸の谷間には赤い水晶の様なペンダント。それは幻想郷で胸元に有ったものと同じような物をご主人様が用意してくれたのだ。

光の元に来た霊鳥路空はまるで舞台上上がった役者の様。口元はにやつき、本来の素直な彼女がやってきたかの様。

「ふ、ふ、ふ」

「……」

目の前の映姫はふうと息を吐く。説教を行ったことが実ったことは実は少ない。そもそも死神の部下すらも結構てきとうしている。一時あまりに部下が仕事をしないせいで一人可愛く花占いに興じたことのある閻魔など彼女くらいだろう。

そして今回も別にうまくいったわけではない。お空はくつくと笑いそれから大声で笑い始めた。

「ふっふ。あ、あはは。あーはっはは！　そうですね。悩むなんて面白くないです！」

「そんな風には言っではいせんが」

「ありがとう野球監督さん！」

「本職ではありませんが」

「よし!!　午後のビーチバレー、勝つぞ〜！　あなたと組んであげるわ」

「頼んでいませんが」

「私が全員けちよんけちよんにしてあげます！　お米を持っていけばさとり様喜ぶなあ」

きらきらと踊るようにお空はしゃべりだす。映姫はそれを見ながら思う。

お空は素直である。そもそも謎の神様から力を貰ってから調子に乗ったこともある。つまり今は映姫の言葉を聞いて一時的に精神が高揚しているに過ぎない。仮にビーチバレーで成果なく負ければ、元に戻る。

危うい橋の上にお空はいる。

やれやれと首を振る映姫。気は全く進まない。それにコンピニなどに貼られた破廉恥な尼さんのポスターを見ればわかる通り、妙な思惑がからんでいるのは明白である。しかし、乗りかかった船でもある。

「仕方ありません。どうせ午後は熱すぎで野球の練習には向きませんから。海にいきま

しよう」

「うんうん。私ならやれるでしょう！」

「そう……」

話聞いていないなどと映姫はため息を一つ。それはともかく休み時間は終わっている。この後はバツティングを行う。何故かお空も参加して、元氣よく三振した。

最初の話。何故ベースランニングをお空にさせたのか、単純である。身体を動かせば心も動くからだだった。その証拠にお空はヘルメットをかぶったまましりもちをついて大声で笑った。

★☆☆★

映姫が海に行くということを告げると子供達のはしやぎようと言ったらない。全員が口々に歓声をだし、それをお空が両手を組んでコーチで頷いている。彼女は今何しているのかよくわからないが楽しそうなのでよかった。

海に行くという事は、と何人かは映姫のことをちらりと見て、顔を赤らめたりしている。少年は初心でもあろう。たまにお空を見る者もいる。

「それではダウンを行ってからグラウンド整備を行いますよう。道具類の砂はしっかりと落とすこと。そしてちゃんと来た時よりもごみを拾っていきましよう。一度旅館に戻ってから荷物は部屋に戻して、貴重品は管理して……」

云々。映姫の話をもみんなが真面目に聞いているのだが、お空には何がおかしいのかニコニコしている。彼女はたまらなくなつたのか。

「よし、海に行くぞー!!」

映姫の話をもまるきり無視しつつ、両手を天に突きだす。それに応えて子供達もまた「おー!」と言ひ出す。閻魔はお空には説教が必要だと思つた。

ともかくにもグラウンド整備を全員で行つた。

お空はホースの水を何故か全身に被り。映姫にも飛散させている。それはそれで朗らかな笑いがグラウンドを包むことにもなつた。最後に全員で「グラウンドへ」挨拶して、旅館に戻つていつた。この時映姫は一人一人の顔を見ている。

脱水症状起こしている子はいないか、怪我している子はいないか等。お地藏さまよろしく見えない優しきを出す。

旅館に戻つた一行はそれぞれの部屋で着替えるようにした。海の近くに来るのである。水着を用意していない子などいない。大体がスクール水着と言われるものである。余談だが殆ど男の子である。

映姫も部屋に戻る。エントランスにはお空を置いてきた、おそらく今頃はドラゴンなボールを読んでいるだろう。後々とある妹と意気投合することになる。

「まったく……」

映姫の部屋の隅にあるスポーツバック。彼女はそのファスナーを開けて中からビニール袋を出す。そこに入っているのは上下別れたスポーティな水着。黒生地にライオンの入っただけのシンプルな物。

備えというものである。海の近くだから泳ぐこともあるかもしれないと期待、いや映姫に言わせればそういった事態に対応するために用意しておいた。別に楽しみにしてなどいなかった。

楽しみにしてなどいなかった。

彼女はそれを手に部屋に備え付けられたお風呂場へ向かう。少し砂を被った野球帽を丁寧に壁に掛け、ユニフォームのボタンを開ける。それをはらりと脱いだ。

★★★

海の家で他の幻想少女のいないときを狙ってエントリーした時、流石に河童は驚いた。

まさかここまで大物がやって来るとは思わなかったのだ。一応パートナーは浜辺で探すように言っておいたが、にとりは

「別にいいよ」

とおおらかさを見せた。歴史上「商人」ほど差別しない階級はない。そこに利はあればだいたい許す。逆にそれが問題になることもあるが、この青い髪の河童はけ

らけらと笑いつつ邪気に微笑む。

まさかこの河童が一回戦の相手になるとはお空も映姫も、河童本人もわかつてはいなかった。

そういうわけでアイドルが刀をふりまわそうとしているところに映姫はやってきたのだった。

おまけ とある日のお食事

土蜘蛛。

古来から人々に鬼と共に恐怖の対象とされていた妖怪である。その由緒は古く、各地に伝説を残している。また、病（やまい）をつかさどる妖怪ともされた。

それが今、現代のぼろアパートに住み着いている。

5畳半のがらりとした薄暗い部屋。その端っこに金髪の少女が寝ころんでいた。灰色の作業着を着て、ピクリとも動かない。大きなピカチュウのぬいぐるみを胸に抱いている。なぜそうしているとかいうと理由があるが、少なくともその表情は「無」である。このアパートとはある神社の巫女の物とは違う。昨今住宅の空き家化が進んでいる。特にえり好みしなければ住む場所は比較的簡単に手に入る。逆に考えれば空き家になるしかない部屋に入り込んでしまったともいえる。

この金髪の少女の名を黒谷ヤマメという。恐怖の土蜘蛛である。

頬を伝う涙。寝ころんだまま無表情で泣く哀れな「恐怖の土蜘蛛」。

「おなかへったなあ……」

ぬいぐるみを抱いておけば多少気がまぎれる。つまり少女としての可愛さの表現の

為にぬいぐるみを使っているのではない。生存戦略の為に使っているのだ。

とは言っても食料がないわけではない。台所に行けば山の様なミルクねじりパンが存在する。それは彼女の職場から持ってきたもので元手もかかっていない。

黒谷ヤマメは工場勤務である。株式会社「アングル・ジャム」のパートだ。

朝早くから出勤して一日中ミルクなパンをねじる仕事に従事している。最初は簡単だと高をくくっていた土蜘蛛も8時間ねじるパンには考えを変えた。死んだ目をしなからパンをねじり続ける自分を、

「ふふ、ふふふふ」

と意味なく笑ってしまい。やばいと思った。

しかし、現代は世知辛い。仕事をしなければ生きてはいけけないのだ。しかも単純労働をしていると工場に対して妙な義務感まで生まれてしまった。だから一時期パン工場で働いていた「巫女」が転職するときに一緒にやめる決断が付かなかった。

給料は多少マシ、ということもある。精神的ダメージを換算してよく考えたら安いがか月分は賄える。

そんなヤマメも今日は楽しい休日。行くところなどない。作業着がそれを表している。

外から聞こえてくる自動車音も遠い世界のここのようだ。明日仕事、という気持ちだが

強い。そろそろお昼だがミルクねじりパンを食べるくらいなら工場長の首をねじって
から出頭するくらいいの気持ちである。

がながんが、彼女の部屋を叩く音。どうせ「放送協会」の輩だろうとヤマメは無視
した。既にテレビは故障している「設定」なのだ。

「ヤマメ！ いるんでしょ」

だが、ドアを叩く声は聞き覚えがある。ヤマメはピカチュウをぞんざいに放り投げ
て、がバリと起き上がる。壁にぶち当たる電気ネズミがポインポインと畳の上で跳ね
る。

ヤマメはそんなことは気にせずいそいそと立ち上がりドアを開ける。

「おお？ 霊夢じゃない。珍しい」

ガチャリとドアを開ける。外から入ってきた光がヤマメの表情を明るく見せる。髪
を結んだ黒いリボンが揺れる。

案の定そこに立っていたのは仁王立ちしている博麗の巫女であり、ヤマメと同じく単
純労働者である博麗霊夢であった。彼女はいつも通り、妖怪に見せるぶすつとした表情
である。

「あんたお昼は？」

不躰に言う霊夢。ヤマメはポケットに手を入れて中の布を引き出す。それから苦笑

いして首を振る。金なんかないとジエスチャーをする。パンならあるが、あれは後で蟻にでも食わせる。

霊夢も苦笑して。

「ちようどいいわ、今日はあいつが」

と霊夢は親指をたてて後ろを指す。そちらに二人の少女が居た。

一人は黒のショートカット。紺の長袖チュニツクを着ている。首輪周りに白い襟とボーダー。そして小さなネクタイには「？」のマーク。袖にも白いボーダーライン。海兵をモデルにしたような服装をしている、ちよつと困った顔したキャプテン。

村紗水蜜だった。下はホットパンツを穿いている。ボーイッシュな格好である。

もちろんのことヤマメは胡散臭げに見てしまう。見た目は若いがどうせ幻想郷の妖怪の一種だろう。

もう一人は青い水色の髪をした最恐の忘れ傘。多々良小傘である。

茄のような変な色の傘をかざして、白いワンピースには刺繍が入っている。その上から明るいブルーのカーデイガンを羽織っている。その肩を水蜜に抑えられているのは、そうしなければヤマメを驚かせようと飛び出していこうとしていたからだ。とりあえず挨拶としてヤマメは彼女を胡散臭そうにみた。どこかで見たこともあるかもしれない。

しかし、次の霊夢の言葉が彼女には福音に聞こえた。

「あいつらがお昼ご飯連れてってくれるらしいわ」

「……………? ……………!」

ヤマメは一瞬霊夢の顔を凝視して、眼をぱちくりさせてそれから口角が自然に上がる。

「な、なんだって!? 見ず知らずの私を連れてってくれるなんて……もしかしてあいつらまぞなの!」

褒めない。ヤマメはきらきらした目で水蜜を胡散臭がる。霊夢は苦笑する。この作業着の二人が並んでいると少し妙な「絵」になる。飾り気がないところが逆によいのかもしれない。

ともかく霊夢は首をくいっと動かして「行くわよ」とジエスチャーする。ヤマメは元々仕事仲間とのこともあり気安い関係でもあるのだろう。このみよんな状況も外の世界でなければあり得ない。

ヤマメは親指をたてて、部屋の中から軽い財布を持ってくる。それから鍵も閉めずに言う。

「行くかう行くかう」

言った時にお腹が鳴る。どこに連れて行ってもらえるのかは知らないが、既にヤマメ

は水蜜に「たかる」気だった。そのあたり恐怖の土蜘蛛として容赦しない。遠くで水蜜は後ろを向いて自分の財布をこっそり覗いている。予想外に人が、いや妖怪が増えた。

★★★

ビュツフエ、というスタイルのレストランがこの街には一つだけある。

メニューを見ながら注文していく従来の飲食店とは違い、和食、洋食、中華それにデザートなどを各々のテーブルに用意して、それを客自らが取りに行くスタイルである。大体は入場料のようなものを人数分払えば食べ放題である。比較的にしろ安く、いっぱい食べることができる。

わかりやすく言えばバイキングである。

水蜜は少し奮発して小傘と霊夢を連れていくつもりだったが、ヤマメという謎のイレギュラーが現れたことにより少々焦った。だがそこは「妹分」と勝手に思っている霊夢にかっこつける為。

「それじゃあいきますか!」

と全員の前で言ってしまった。この瞬間全て彼女持ちになった。

小傘は「おー!」とたつぷりの笑顔で答えてくれたが、霊夢はそつぽを向きながら拳をあげ。ヤマメは頭の後ろで手を組んでじつと水蜜を見ている。このあたりドライな面がある。

しかし、そんな風にそっけない態度をとっていた霊夢やヤマメもレストランの前に来ると態度が変わった。

まず駐車場が広い。別に車で来ていないが霊夢はそこでぎよつとした。

それから外観が白い。真新しいレストランの建物に流石のヤマメも「な、なんだっこ」と妙なうろたえを見せた。それに水蜜はくすりとする。内心いくらになるか不安だった。

店の入り口にはイタリア語で書かれた店名。そこで小傘が「英語ね」とどや顔。霊夢とヤマメは「え、英語」とたじろぐ。普段豪族のいる小料理屋くらいしか行かないからだろう。

ヤマメはもじもじと作業着を恥ずかしくなってきた。不安げにズボンを意味なく引つ張る。それは霊夢も変わらない。

だが、色気よりもという言葉がある。

入り口をくぐり、からんからんと鈴が鳴る。

中に入れば聞こえるクラシック。明るい店内。

がやがやと大勢の客。その笑い声。

水蜜が受付しているのすらももう「三人」には見えていない。

もう「料理」にしか目に行かない。

「おおー！」

「おおー！」

「おおー！」

何故か真ん中に小傘。それに左右にヤマメと霊夢。

それぞれ口を開けて眼をきらきらさせている。さつきまで恥ずかしがっていたり、そつけない態度をしていたのが嘘のように幼い顔をしている。

並べられたテーブルには色とりどりのサラダ。緑、赤、黄色。いろんな見たことのない野菜達。そしてちよつと目を移せば並んだ大皿に盛られた料理。

パスタは赤いケチャップで味付けしたナポリタンも白いソースを絡めたカルボナーラも何でもある。その横にはこんがり焼けたピザ。ふらふら近づいていくヤマメの鼻をいい匂いがくすぐる。

スライスされた大きなお肉。新鮮な生ハム。それにデミグラスソースのかかった小さなハンバーグ。霊夢達は目移りしてしまいそうになる。いや、目移りしても「追いつかない」ほどの種類の豊富さだった。

それに中華も和食もある。ドリンクサーバーやスープバー、さらにデザートコーナー。豪族の店では絶対に出来ないだろう。更に奥にはガラス張りの厨房がある。そこは霊夢達からは良く見えないが客が並んでいる。

受付を終わらせた水蜜が呆然としている三人の前に立つ。ちよつと得意気な顔をしている。背景には料理。彼女の真上に小さくて瀟洒なシャンデリア。

「ふふふ。今から一時間。これは全て食べ放題です」

手を広げて、ウインクする。芝居がかったその仕草に横を通った一般客が胡散臭そうにしている。

しかし、霊夢はふるふると震え、ともすれば目がほんのり湿っている。彼女は水蜜に近づきながら言う。

「これ全部食べていいの？」

水蜜はちよつと考えて、両手を組んで鼻を鳴らす。何故か得意気である。お姉さんぶっていると言えば、多少微笑ましい。

「おかわりもいいわよ。遠慮せずに今まで分も食べなさい……カレーもありますよ」

「あ、あなた」

普段と違う口調で何故かカレーを進めてくる水蜜。霊夢は自分の口元を手で押さえながら言う。

「あ、あたまおかしいの？」

感動すると人はたまに変なことをいう。それでも一応褒める気持ち根底にあるのだろう。水蜜はかくと肩を落として苦笑する。頭を搔いてそれから三人に簡単な

ビュツフェの説明をしようとした。

すでにヤマメがいない。

小傘もない。

霊夢もどこかに行こうとしているので水蜜があわてて抱きとめる。

「ちよ、ちよつとみ、皆はどこに行つたんですか？」

「は、離しなさいよ。あんたの連れてきた奴はあそこよ」

見れば小傘は既にお盆とお皿を手にサラダを物色している。一人だけお洒落している。人目を引いているが、本人は「何食べようかしら」とご機嫌で目を輝かせている。

水蜜は抱きとめた霊夢に暴れられながらヤマメを探す。完全に問題児の保護者のようになっている。本来は彼女も奔放な性格だが、この面子では仕方がない。

水蜜が見れば作業着の上を腰に巻いて、細身のラインが浮かぶ黒いインナー姿のヤマメが片っ端から料理を手元の皿に積んでいく姿があつた。顔はほくほくしている。肉類が多い。

「……うーん。あの妖怪はなんの妖怪なんでしょうか……大食い……もしかしてネズミの妖怪」

頭に一人の少女を思い浮かべながらヤマメを見る水蜜。推論は完全に外れている。その彼女の手元で暴れる巫女。霊夢は「離せ」と抗議している。それは水蜜に抱き付か

れている状況が気に食わないだけだろうが、キャプテンから見れば子供が暴れているよ
うで微笑ましい。

そんなことを思っていると水蜜は手を抓られる。

「いたっ！ ひ、ひどい」

「ふん。さつさと離さないからよ。あと、ヤマメは土蜘蛛よ」

「へえ。そうなんですか、往年の大妖怪もおちぶ……そんなことよりも霊夢さんに料理を取りに行きましよう」

「なんであんたと取りにいくのよ」

「ちつつち」

水蜜は一指し指を立てて左右に振る。

「実はルールがあるんですよ。いろいろと」

「あいつらは……それを知っているの？」

「まあ、妖怪はノーカンということだ」

「なによそれ、ならあんたもじゃない」

「でも霊夢さんはだめっすわー。ほら、こつち」

しづしが霊夢は水蜜の後ろについていく。とことこ歩いていく場所は食器、つまりは取り皿が置かれた場所。そこで水蜜がひよいひよいとお盆やらお箸やらを取る。それ

を霊夢も横目で見ながら真似る。

実はこの船幽霊はビュツフエに來たことなどない。地底の底にそんなものはなかった。しかし現代はインターネットという便利なツールがある。つまり、事前にこのような場所を調べてきているのだ。

「いいですか霊夢さん」

その程度の知識だがぐるりと霊夢を振り返つてにやりとする。

「基本的に料理は食べきれぬ量を取つてください。無駄に多くを取つてはだめですよ」

「あれは？」

霊夢はヤマメを見る。今はチャーハンをこんもりよそつている。水蜜は首を振り。

「妖怪はノーカンですから」

「……………」

「ま、まあとりあえず行きましょう」

水蜜は気を取りなおしてサラダバーの前に行く。そこで適当にサラダをとりつつ、置かれていたドレッシングをかける。霊夢も同じようにする。

以外にスーパードで買う野菜は高い。ゆえに霊夢をはじめアパートの住民はもやしなどを主に食べている。ドレッシングもひさびさに巫女は使った。逆に水蜜は一応は仏教徒なので野菜を主に食べている。

それが今日は仇になる。

水蜜は照り焼きハンバーグの前にやってきた。ソースのついた小さなハンバーグはいい匂いがする。

「むむう」

唸りながら素通りするしかない。霊夢はハンバーグを取って皿に置く。

次は海産物。

バターでいためたムール貝。

赤々とゆであがったエビ。

塩焼きの鮭。

お刺身もお寿司も水蜜は取れない。

「ううう」

ちよつと悲しそうに水蜜は素通りする。彼女はたまにキノコなどの炒め物や純粹に白飯、それにお味噌汁だけをとる。霊夢は美味しそうと直感的に思った物は取る。これが宗教の違いと言つていいだろう。

★★★

窓際の席が取れた。ちょうど他の客が帰つてすぐだったのでだろう。運がよかつたと

言える。霊夢と水蜜、ヤマメと小傘が向かい合うように座っている。

ヤマメは肉の積まれた皿、パスタが山盛りの皿、チャーハンの皿、スープ。それにピザだとかのいろんなものが重なった皿。

野菜などない。

スプーンで大きなステーキを指して、もぐもぐ食べるヤマメ。眼が蕩けるようで心底幸せそうである。昨日のご飯は「どんべい」であった。一人すするカップうどんの寂しさといったらない。

小傘はとりどりのお寿司を綺麗に並べている。イカやイクラ、マグロ、エビ、たまごお皿の上で二列に並んだそれらはちよつと斜めに置いてある。小傘のこだわりである。彼女は赤い舌をちよつとだけ出して、にっこり微笑むながら両手を合わせる。

「うまくできたわ！ それじゃあいただきます」

「えびもらい」

ヤマメが「エビ」と言いながら両手でエビとイクラを持っていく。ああ、と小傘は悲鳴を上げるが既にヤマメの口の中に奪われた寿司は入っている。

「ひ、ひびこら」

「……」

ヤマメは話など聞かずにさらにたまごとマグロを奪い、喰らう。殆ど初対面の相手に

も容赦などしない。

「うまひ、うまひ」

「う、うう。私もあなたのためてやる」

小傘はヤマメのピザ取って怒りのまま齧る。

「ひー」

タバスコを付けていたらしい。涙目で口を押える小傘。慣れていないとキツイのだろう。彼女は水を取ってぐぐつと飲む。その間にヤマメは小傘の寿司をペロリ。最終的に哀れな忘れ傘は一貫も食べられない。

霊夢は御飯にお味噌汁。それにハンバーグやサラダ。適度なおかず。

元々幻想郷では自炊していた彼女である。ヤマメのように手あたり次第には手を出していない。

いただきますと静かに手を合わせて、ヤマメと小傘の騒がしさに眉をひそめつつ、器用に箸でハンバーグを等分。一切れずつ口に運ぶ。

それを水蜜は意外そうな目でみている。もっと粗く食べるかと思っていた。今度は彼女が霊夢を真似て、いただきます。黒い漆塗りのお椀を手取る。白米である。さらに彼女の皿は一言でいえば地味である。

サラダ以外はゴボウの和え物やキノコの炒め物、それに卵焼きなどの無難な物。肉、

魚の類は全くない。代わりに漬物が小皿に山を作っている。おかずであろう。

「ふむふむ。アキタヒカリですね」

おコメの品種らしきものを言いながら、よく白米を噛み、ゆっくりと食べる水蜜。

霊夢は彼女をちらりと見て、ハンバーグを食べる。

横ではヤマメがナポリタンを食べ口周りを赤くしている。それを小傘は笑って新しいお手拭きを持ってきてあげる。その間にヤマメは小傘の皿からエビチリを奪う。土蜘蛛は恐ろしい。

それを横目で見る霊夢。どことなく表情は沈んでいる。彼女は味噌汁をすすりながら、ヤマメ達に苦笑している水蜜を見る。くせつ毛の彼女は困ったような表情でくすくすとしている。

「……………」

霊夢にはわかつている。妖怪とは仮面をかぶっている。

妖怪は人に恐れられなければ存在できない。仮に妖怪の所業が「人間」に解明されてしまえば、それでなくても人々が妖怪を忘れてしまったらもう、そこにはいない。

だから常に妖怪は恐れられる為に何かをしている。人間よりも強者であることを強いられている。それが実体としてどうであれ、人間と交わり続けることはできない。

水蜜の瞳。明るい笑顔を振りまく彼女の青緑色の瞳、その奥は暗い。

薄い膜を張った様な水蜜の外面の奥底を一度だけ霊夢は見た。別に驚くことはない、本来妖怪とは「そういうもの」なのだ。それはヤマメも変わらないはずだ。本来は恐るべきものなのだ。有体に言えば人間と妖怪は「敵」である。

「霊夢さん帰りはケーキ屋さんによりましょう」

「あ？」

そんな恐るべき船幽霊がニコニコしながら言うから霊夢は口を開けて呆けてしまう。

「ケーキ？」

「そうです。どうせ私も寺のみんなに買っついていきたいですしね」

「ほんとー！」と小傘。

急に眼を光らせる小傘に水蜜と霊夢はたじろぐ。だが、直ぐに小さな笑みに変わる。ヤマメはあれだけあった料理を平らげて、お腹を撫でている。変な風に平和な光景である。

それをみて霊夢は小さくつぶやく。

「これが、続くのかしら……？」

小傘とヤマメが霊夢を見る。二人とも「？」という顔をしている。巫女はあわてて打ち消す。

「な、なんでもない」

ふいと顔を背けて白飯をかきこむ。急いで食べたからか、せき込んだ。

それを水蜜の青緑色の瞳が見つめている。彼女も味噌汁をすする。やはりレストラ
ンに来たにしては味気ない。美味しくないわけでもない。

★☆☆

「それじゃあデザートを取って来るわ!」

謎のやる気をみなぎらせた小傘が立ち上がった。ヤマメもゆっくり立ち上がる。食
後のデザートを楽しむために少し時間を空けたのだ。二人はいそいそとデザートコー
ナーへ向かう。

その時には水蜜と霊夢も食べ終わっている。だから船幽霊から言う。

「よし! 霊夢さん私達もとりにいきましよう」

「なんでそんなに元気なのよ……」

「まあまあ、いいじゃないですか。アイスが食べたいんですよ。付いてきてください」
「ま、まあ仕方ないわね」

食べたらしい、と本音は隠して霊夢は立ち上がる。にやにやとする水蜜がその背中を押
すようにデザートコーナーとは少し違う場所に向かう。

何故ならアイスはソフトクリームサーバーという機械がある。だからドリンクサー
バーに隣接しておかれている。ヤマメと小傘とは少し離れる。

「ちよ、ちよつと押さないでよ」

「まあまあまあ」

にここのこと水蜜はソフトクリームサーバーの前に来る。そこには専用のアイスを入れる小さなガラス容器とトッピング用の細かくカラフルなチョコ。サーバーには口が二つ付いていてそれぞれ「バニラ」と「チョコ」が出る仕組みになっている。

水蜜は自分の容器を取ってバニラを入れて、それからチョコをいれる。二つの色がからんだけアイスが簡単にできる。

「これ、欲しいわね」

霊夢が言う。アパートにこれが置かれていればシユールだろう。

水蜜はくすりとして自分の分を脇に置き、霊夢の容器を受け取る。

「作ってあげますよ」

「あ……そう」

あまりうまく作れる自信のなかった霊夢は素直に渡す。水蜜はサーバーに向き合つてアイスを出す。目線は合わせずに呟く。

「続かないでしょうね」

「え？」

二人は視線を合わせていない。静かに船幽霊は言う。

「独り言ですよ。……私達と貴方たちでは居れる場所がちがうから、交わってる時は続かないだろうなあって」

「あんた……」

「でも！」

水蜜は勢いよく振り向く。これは独り言ではない。彼女の手にバニラのソフトクリームが入った容器。

「霊夢さん。アイス食べましょう?」

「……は?」

「今はね、一緒に、アイス食べましょう? ……ね?」

優しく笑みを浮かべる水蜜がアイスを霊夢に差し出す。それだけのこと。

霊夢は一度水蜜の顔と眼を合わせてから、ゆつくりと両手で受け取る。冷たい。彼女はそれをじつと見つめる。それからバツが悪そうに横を向く。

「あ、あー。えーと」

「どうしました? 霊夢さん」

何事もなかったように水蜜は自分のアイスを片手にスプーンを二つ取っている。霊夢はさつきから言いたくても、喉から出てこなかった言葉を横を向きながら言う。

「その、まあ。今日は、連れてきてくれて、あ、ありがとう」

「……………おやおやあ」

急にわざと「うざい」笑顔を見せる水蜜。

「どうしたんですかいきなり。急に素直になつて」

「ああ、もううるさい！ 二度と言わないからね！ 言つて損したわ！」

「ふっふふ。私は得しました」

にやにやする船幽霊と苦虫を嘔み潰したような巫女。二人は席に戻ろうとする。

だが、小走りに寄つてくる金髪の土蜘蛛が一匹。

「霊夢霊夢！ あつちにマシユマロにチョコつける機械があるわ」

「何よそれ」

「それだけの為に無限にチョコが湧き出てくるわ」

「ほんとに何よそれ。それよりもう一人のやつはどうしたのよ」

「あいつ？ なんかプリンを探してこけてた」

「なんでそんなのよ……」

はあ、と霊夢はため息をつく。このどうでもいい一瞬を少しでも意識的に記憶する。なんでそうしたくなつた。

ちよつと後ろで水蜜がアイスを透明なスプーンですくつてぱくり。甘さに微笑む。

30話

虎をモデルにした野球の帽子を被った地獄鳥が一羽不敵に笑っていた。お空である。

黒く潮風に揺れる髪。そこに被った白黒の縞帽子。それは彼女のものではない。彼女の恩人といふべきだろうか、ともかく現代に迷い込んだ一人の閻魔大王の私物である。地獄の裁判官がそんなものを持つているなど、どこの誰が信じるだろう。とある死神なら笑い転げるかもしれない。

彼女のいるのはこの浜辺を見下ろす駐車場の入り口。広がる大海原にこの地獄鳥の少女は堂々と相對している。目前に迫るような輝く太陽。それをお空はきらきらした眼光で真正面から見つめる。胸の前で両手を組んで、にやり、意味なく笑う。

「今の私が負けるわけはありません」

挑戦するように太陽を指さしてお空は言う。意味は全くわからないが、なんとなく人を納得させる勢いくらいはある。彼女は指を天に向けて、大きく笑う。

「あーはっはっはっはっ！」

なんで笑っているのか意味はない。ただ、彼女を見たものは、一緒に笑いたくなくなってしまうような屈託無い、いい声でだった。

お空は頭の回りが悪いわけでは決してない。むしろ核融合の知識などは、河童こときよりも存在する。いろんな大切な事柄を忘れてしまうことはあるが、好きなことには一直線。落ち込むのも、頑張るのもまっすぐなのである。言つて仕舞えば性格にねじれがない。

「あはははは！ げっほ、っほ」

一頻り笑い声をあげて咳き込む可愛らしい、地獄鳥。どこかの幻想郷の烏天狗とは純真さで天と地以上の差がある。

彼女の胸元に挟まれるように赤い石のペンダント。彼女の飼い主がなけなしのお金で買ってくれた、ものである。お空はそれを握りしめて。青空を見上げる。

空という青いキャンバスに笑顔の「さとり様」を描いて。

「空から見守つててください……さとり様」

つぶやくお空の瞳は陽光に輝く。彼女の目には空から優しく見下ろしてくれているさとり様が浮かんでいるのだろう。まるで死んでいるかのようなのである。それはともかくお空は後ろを振り向いた。

そこにいるのは閻魔率いる少年野球チームの面々であった。それぞれ地味な紺の水着をつけている

少年少女たちはよく焼けた顔をしている。首元や二の腕あたりでくつきりと「焼けた

肌」と「白くわかい肌」の境目がはつきりしている。

全員が帽子をしつかりと被っているあたり、教育が行き届いている。むろん緑の髪の少女がくどくどと言いつつ含んでいるのだろう。

むろんお空も水着を着ている。さつきまで太陽に向かっていた彼女が後ろを向いたから、背に光を受けている。そのくせひとなつっこい笑顔をしているから、少年たちの中でのに監督とお空の「派閥」ができることになるが、それは蛇足であろう。

「よし。いきましようか」

お空は腕を突き上げる。上下紺のビキニに薄い白い上着。胸元にある企業のロゴマーク。スカートの横ついた小さなリボン。地味な水着ではあるが、彼女が着ると地味にはならない。

子供達は勢いに負けて「はいっ」と野球チームらしい返事する。その瞬間彼らも笑顔になった。夏空の下で水遊びに心躍らせる子供達はたちはと地獄鳥。微笑ましい光景だろう。

★★

そのころとあるアイドルが白目をむいていた。

白い髪その魂魄妖夢と呼ばれる少女はなぜか、横で白い目をしている雲居一輪とともに解説席に座っていた。一回戦で使われたビーチバレーコート横に置かれた、解説

席。河童たちに囲まれてなりゆきで、なんとなくこのようになった。ちなみに実況は一輪である。一応一回戦の激戦を戦い抜いたはずだが、休む時間があればブラック企業失格である。ちなみに妖夢は先ほど閻魔に砂浜に正座で説教をされている。

解説席にはビーチパラソルがあり、その上に「魂魄妖夢始めました」と冷やし中華のような謳い文句の下で、冷たい汗を流す半分霊の人と尼。

さらにひとが増えてくる。口々に「ようむ」だ「こんぱくだ」やら言いながら、あつまってくるのだ。もちろん「さとり様」や「一輪」目当てのものもいる。すでに追っかけがいてかかんがえれば、彼女たちの魅力も大したものであろう。

「か、かいせつのようなむさん」

「な、なんでしよう実況のいちりんさん」

幻想郷でもほとんど喋ったことのない二人の初めての会話である。二人とも前を見ながら、一輪は純粹に肉体的疲れで妖夢は精神的な疲れでそれぞれが震えている。一応日陰にいることくらいが彼女たちの安らぎだろう。前には飲み物もある。経費削減のために水である。

一輪はたまにテレビでみるように、少し気取った口調で妖夢に言った。

「きよ、きよの試合はどうでしょう。ようむさん」

「ど、どうっていわれても。そもそもなんの試合をしているの……う」

「び、ビーチバレーです」

「な、なんで？」

なんでと聞きたいのは一輪である。彼女は一度妖夢を見てから机に肘をかけて、はあため息をついた。不覚にも一回戦は燃えてしまった。正直言えばネズミがあそこまでやる気を出すとはおもわなかったし。最後に勝負を決めたのは自分で痺れた。

桃色の唇からため息を漏らす一輪。少し気だるげに机によりかかる。自然に流し目になりつつ、妖夢を見る。

一輪はこの魂魄妖夢を好き好んでアイドルになった変な人と思っただけで、さつき全員の前で一輪が開会宣言をした時には精神的な支えにはなつた。あんなことをしている人もいるから、頑張らないとという気持ちである。まさか本人が傷心をいやすためにおとずれるとは夢にも思わなかった。

そんなことは知らない妖夢は一輪の水着を見ながら思う。

(変なひとだなあ……?)

河童にむりやり選ばれた水着とは思わない妖夢は、大胆な格好の一輪をみて、自分が恥ずかしい気になった。よく着れるな、ということである。

この世に天狗以上に邪悪な存在はいないだろう、と思う純粋な少女なのだ、河童という別のベクトルでの邪悪はわかりはしないだろう。まだ知らないだけではあるが、彼女

が精神的に無事帰れる保証などするものはいない。

そんなことを考えているとこれもこき使われているおかつぱ河童がはしりよつてきた。手には一枚の紙。そこに書いてあるのは「GO」の文字。開始の宣言をしろうということだろう。

「英語……。これなんて読むんですか」

妙なところで引つかかる妖夢は一輪にメモを渡す。彼女も首を傾げて、メモを見つめる。とある大妖怪たる狸もイングリッシュには苦戦している。しかし、一輪は河童はどうせはじめるように言っているのだろう、とあたりをつけた。

「はじめるようにと書いてあるのではないかしら」

一輪がいう。妖夢もうなづく。たぶんそうだろうと妖夢も当たりくらいはつけていたらしい。そのまま、お互いに見つめあう。一輪も妖夢もしばらく顔を眺めあつて、不思議な顔をしている。

(早く開始の合図をすればいいのに)

一輪も妖夢にも自分でやるという考え方はない。お互いになんで見られているのかわからない、謎の見つめ合いがしばらく続いた。おかつぱも首を傾げている。

★★

熱気あふれるビーチバレーコートに青いにポニーテールな河童がいた。河城にとり

である。後ろでは柔軟体操をしている一匹の赤い猫。派手な水着を着ているお燐ではあるが、起伏は薄い。

にとりは両手を組んでわあわあとうるさい人間たちの歓声を聞いていた。幻想郷でもイベントを企画してきた彼女である。こういう雰囲気は嫌いというわけではない。しかし、かといって自分が見世物になる気は無かった。

「どうしてこうなったんだ。まあいいや。結構儲かっているみたいだしね」

コートの真ん中で黒い笑みを漏らす河童。海の家の方を見れば、虎だとかネズミだとか巫女だとか船長だとかが、食べ物や飲み物を持って見物している。自分たちのプロマイドが売買されているとは気がつかず。

(かけ、最後に勝つのはどうせ私だしね)

にとりは澄まし顔のまま、心の中で舌を出す。毘沙門天だとか幻想郷の巫女だとかも、ここでは河童の手のひらで踊る孫悟空みたいなものである。まさかにとりは自分の写真が売買されているとは気がつかない。しかも意外と売れている。

敗北を知らずに勝ったつもりのはにとりは、哀れな少女でもある。これは過信の報いというべきだろう。

そこでにとりは思う。

(さて、どうしようか)

にとりとしてこの試合勝とうが負けようがどうでもいい。はつきり言ってしまうえば、負けてしまえば楽ではある。ただ、彼女にも小さな意地がある。にとりは河童である。彼らは人間ともっとも縁が深い妖怪と言つていいだろう。時には神として祭られることもある。天狗や鬼の下に甘んじてはいるが、知名度でも負けてはいない。古来から人間とお遊ぶ妖怪となれば、河童と相場が決まっている。

そしてビーチバレーは人間の遊びである。

相手は地の果てでふんぞり返っている冥界の裁判官。にとりはほんのわずかな、意地を思う。静かな瞳に燃える勝負の炎。別に知識や生命観で負けていようがどうでもいいが、遊びで負けるのは癪ではある。ただし利害関係などを考えても別に勝てなくても損はない。

「まー」

わざとらしく口を開けてにとりはやれやれと首を振る。

「ちよつとはまじめにやつてやろうかな」

素直ではない。

★☆☆

「遅い」

上下別れたスポーティな水着を着た少女。緑の髪が片方だけ長い。

澄んだ瞳に白い肌。道を歩けばハツと人を振り返らせる容姿。そんな彼女は海の家の前で呆れたように言った。

彼女こそ地獄の裁判官である四季映姫。そして今はしががない少年野球団の監督である。

苛立たし気に言う彼女はとある地獄鳥を待っている。形としてはこうである。河童にエントリーするために映姫は先に来た、少年少女達はお空をボディーガードのようなものとして引率させて、あとで海に来るようにした。

お空は決して保護者ではない。むしろ野球団の主将こそがお空を連れてくるように言い含めてある。

それが来ない。試合の時間はもうすぐである。正確に言えば一輪と妖夢が謎の譲り合いをしていることで時間が伸びている。

「まあ、まあ。どこかで道草でもたべてるんでしよう」

声を掛けたのはグリーンの水着を着た船幽霊である。片手にはラムネを持って、閻魔に進めている。だが、閻魔はじつとこの胡散臭い船幽霊こと村紗水蜜の顔を見て、断る。

「ありがとうござます。せつかくですが」

「……………そうですか?」

「……………炭酸を運動する前の者に渡す行為はわかってやるのはどうかと思いますが

「？」

水蜜はちえーと苦笑する。見透かされている。仕方ないので後ろでだらけている霊夢の背中にラムネを押し付けた。飛び起きた巫女は水蜜からラムネを取り上げて、肌押し付ける。本気で怒っている顔をしている。

そのあとラムネの瓶を逆手に持ち鈍器として霊夢は使おうとする。

『「このお、なんどもなんども』』

『「これ、霊夢さんそれ。硬いですからー！』』

「……………」

映姫は「楽しそうな」船幽霊を横目にみつつ、あたりを見る。海の家河童達は普通だが、遠巻きにしているネズミや毘沙門天は冷ややかに閻魔を見ている。

コートを見ればなんだかやる気で睨んでくる河童。と背景にネコ。

解説席ではやつとわかったかマイクを押し付け合っている一輪と妖夢とこいし。

そして何故か嬉しそうな船幽霊を追い回す霊夢。その彼女と一瞬目があうと、霊夢はあわてて眼をそらす。明らかに何かを聞いたそうにしている。

四季映姫が来たことに一同は驚いたが、それでも素直に近寄るようなことはできなかった。

「ふう」

異変解決の巫女。今回の異変では「このごろ」殆どやる気を失い、仕事に追われる日々に興じている。最初のころとは違う。映姫としてはだいたいその理由は理解できる。本人も無意識に感じているのだろう、異変の立役者なのだ。が、今は関係などない。

「おおい」

遠くから声がする。映姫がそちらを見れば大手を振って走って来る地獄烏。旅館から来れば駐車場の方向からくるべきなのに何故か浜辺から、海と太陽をバックに笑顔で向かってくる。

虎の帽子を被り、肩に砂バケツ。後ろには野球の少年たち。一様に楽しそうな顔をしている。まるでひと遊びしてきたような顔である。

近寄ってきたお空はまず一言。

「あさりとってきましたよ」

差し出される砂バケツ。海水を吸った黒い砂。その中に「あさり」が居るのだろう。映姫はそれを冷たく見て。

「なんであさり取ってきたんですか？」

長い閻魔の命でもこのセリフは初めて言った。潮干狩りをしたことを尋問した閻魔はおるまい。お空はきよんとした顔で、後ろの少年たちを振り返る。ただ、振り返っただけなのだが、後ろの少年がどきりとした顔をしている。

「おみそしるにあればおいしいじゃないですか？　ねえ？」
『はい』

はい。と少年は応える。映姫はこめかみに手のひらをあてて、もう一度ふうと息を吐く。いろいろと言いたいことはある。説教したくて仕方がない。当のお空は頭に「？」の文字を出している。なんで映姫が呆れているのか分からない彼女の顔は、眼を開いてばちばちと瞬きをしている。

ただ、映姫は飲み込んだ。全体を考えれば説教するのは後である。彼女はその瞳で真っ直ぐお空をみる。それだけでお空は何故かうろたえながら一步下がった。曇りのない閻魔の瞳は誰にでも恐ろしいのかもしれない。

「それでは今から試合です。準備はいいですか？」

「しあい……？」

「ビーチバレーです」

「ああ、そうでした！　大丈夫よ。監督」

「監督……相手はあそのコートにいる二人です」

「にとり……河童が相手なのね。楽勝です！　ネズミはまだ消し炭にできてないけど、まとめてだつてやってやるわ」

瞬間、にとりの近くで「ぶちん」という擬音がした。顔は変わらない。いきなり消し

炭にするといわれたナズーリンは首を傾げている。横では毘沙門天がタブレットを扱っている。

映姫はにとりの様子に気が付いている。しかし、当のお空はやる気満々。勢いよく手で胸を叩く。胸の間にあつたペンダントが揺れる。

「任せといてください！」

自信も十分。はちきれんばかりである。

映姫ににこつと笑いかける地獄鳥は別の意味で眩しい。だが、映姫は危うさも感じる。テンションが熱しやすいのであれば、冷めやすい。横目で見ればコート上でにとりが一人、砂を蹴っている。人間の遊びで「河童」に勝てると言えば十分な挑発だろうと、聡明な映姫にはわかる。

しかし、過去は戻せない。一度聞かれたことは戻らない。それはそれで、前に進むことに変わりなどない。映姫はお空に軽く微笑みかける。こんな時彼女の表情は限りなく、優しい。

「それでは行きましょうか」

「はい！」

珍しく説教をしない映姫を少年たちはひそひそと話す。それは後で説教すると映姫は思う。

コートをつむ人々は「客寄せパンダ」ならぬ「客寄せ妖夢」に集まっている。さらに熱気高まる会場で開始宣言をするために立っている「おかつぱ河童」。涙目である。どう考えても一輪などに押し付けられている。

閻魔はコートに入る。彼女を睨みつけている青い髪の河童が一人。

「かつぱなめんなよ」

ぎりど歯ぎしりが聞こえてきそうだった。

31話

地獄の沙汰はカネでは決まらない。

全ての人と命はその終わりの「後」に裁かれる。それは法律や道徳を超越したなにかで。

彼女の仕事はそんなもの。元々は小さなお地蔵さんだったと言われる麗しい彼女。

何者にも染まらない瞳と惑うこともない心、地獄の裁判にふさわしい絶対的な公平性を持つ彼女。

それが四季映姫・ヤマザナドゥ。この可愛らしい裁判長がそこに「座っている」だけでなんとなく侵し難い何かを感じさせる。透き通った声に濁りはなく、いつも死者へ厳正に行き先を告げる。一人として無下にすることはなく、一人として優遇することもない。

そんな彼女の元にある日、彼女の執務室へ部下の一人がやってきた。紅い髪を二つ結びにした「軽い」死神である。良くサボるので映姫としては悩みの種にはなっている。それによく幻想郷にも顔を出しているようでふらふらといなくなることもある。

会話はたわいもない。簡単な報告と幻想郷で流行っていることだった。

以外にあの「箱庭」はミーハーが多い。直ぐ物事が流行るし、直ぐに飽きられる。宗教騒動があった時、映姫も見物に出かけてしまったことがあるが、熱は殆ど刹那的に去った。実際とある妖怪、ともいえぬ面霊気が起こしたことでだったので元凶が落ち着いたのだろう。

「今はこんなのが流行っているらしいですよ」

ごとりと机に置かれた一枚の板。先が尖った五角形のそれは厚みが少しある。

「絵馬ですか」

映姫は言い当てる。別に難しくなどない。部下の死神は、軽く頷く。真面目な顔をしているが映姫とて、非番の時に幻想郷へ行くことも多い。公事ではないが私事でもない。幻想郷の者たちに説教を行って、死ぬ前に悔い改めさせることをしている。ただ、中々曲者ぞろいの幻想郷ではうまくいかない。

「なんだか博麗神社を中心に妖怪やら人間達やらがこぞつて書いては奉納しているらしいです。それで一儲けしようとしているんですかねえ」

「あの巫女ですか」

「はい」

けらけらと笑ってしまった死神はあわてて口をふさいだ。巫女とは「博麗の巫女」のことであろう。映姫は少し考えるような顔をして、絵馬を手取る。そして手元にあつ

た筆でさらさらと「部下が良く努めるように」と書いて死神に手渡す。

むろん、神社の神様に言っているのではない。目の前の死神にそのまま言っている。受け取った死神はたはは、と頭を搔いてから絵馬を懐に入れる。そしてどうにかして自分から話題をそらそうとした。飄々と仕事はしたい。ゆつくりと船を漕いでいたいのだ。などと思っていると座っている映姫がじとりと見てくる。

死神は冷や汗が出る。

「で、でもこんなことを書いて意味あるんですかねえ……。世の中の願いを全て聞いてりや、神様も大忙しですし」

「意味は大いにあります」

「……それは何ですか？」

「世の中すべての願いはかありませんが、絵馬に書き付けること、心で祈る行為自体に嘘はないでしょう。人々のすべての声を聴いてあげることが難しいですが」

いったん映姫は言葉を切る。

「絵馬を書くとき、それをほかならぬ自分が見ています。心で祈るとき、それも自らが聞いています。他のだれもが知らなくても、自分が知らないなんてことはない。願いとは本来そういう物よ。いわば、自らの契約。それはある種の魔力を持っているわ」

「へー」

「……………」

「あ、いえ！　ち、ちがうですよ。今のは。映姫様のお言葉に聞き入っていたので生返事してしまっただけで、無意識に」

「……………まあいいでしょう。あまり死者と近づきすぎないことね。変なことを聞いていませんか、普段聞いていることはいずれ口に出ます。願っても同じそれを持てば人は変わる、意識するともせずともね」

ため息を一つ。映姫は死神をちらりと見て、机に置いてある書類に目を通す。

「そう、願いはいつでも心と体を繋げているものです。呪いと願いにそこまでの違いはない」

言ってから映姫は「だから早く死者をおくつて来てください」と死神に伝えた。要するに仕事をちゃんとしろということだろう。

☆☆☆☆

そんな閻魔大王とて今はしがたない野球監督に過ぎない。応援席に詰めかけた人々を冷たい目で見返しながら、ちよつと誰にも気が付かれない程度に水着のお尻の部分を押えている。観客の中には自らの指揮する少年野球団の子供達が居て、野球の応援歌を唄おうとしている。

それはやめさせた。昔に流行った歌に合わせて、妙なことを口走る野球特融の応援歌

は別段好きではない。四季映姫の名がキン肉マンに合わせて歌われた日には説教しかできない。

コートに立つ映姫は右側だけ長い髪をリボンで纏めている。スポーティな水着から伸びる手足は細く、しなやかである。たまにちらりと観客席を見れば、一瞬そこが静まり返る。理由は簡単である、単に美しい。

「あつはつはつは。覚悟してください河童！」

対照的に明るく笑うお空も傍にいる。体格が大きな彼女は両手を組んでいる。どうやら映姫は「この手」の少女とは縁があるらしい。映姫の脳裏に死神の顔がふつと浮かんだ、少しは思慮的であるとしても根は一緒な気がする。

審判はおかつぱの河童。審判台によじよじ昇る後ろ姿は少し可愛い。

そんな無邪気なおかつぱとは別に、映姫に対するコートでは青い髪をポニーテールにしたにとりがぎらつく瞳で睨みつけてきた。その後ろには背景の様な赤毛の猫。

映姫にはなんでそうなっているのかだいたいわかる。それにもため息をつく。

「そう、貴女は少し直情的すぎる」

小さく呟く映姫。彼女はかがんで一握の砂を掴んだ。さらさらとして熱い砂。手を開けばぱらぱらと落ちていく。流星にあの死神と話している時にはこんなことになるとは思わなかった。

今の「これ」は様々な思惑が絡み合った結果だろう。おそらく知らずに協力しているものもいるはずである。ドミノのようなものである。最初に倒した誰かがすべての元凶だろう。自分は前に出ずに何かを動かすことのできる、そんなも少女を映姫は一人思いつかべた。

その背中をお空がばーんと叩く。映姫はたたらを踏んで、倒れないようにする。

「なんですか」

振り返ればお空の笑顔。何故かガッツポーズをしている。

「核のパワーを見せてあげるわ」

会話がかみ合わない。

★★★

ぴーと鳴るおかつぱの笛。てきとうに決めたサーブ権はにとりチームのものだった。もちろん最初にサーブをするのは河童である。対面しているのはお空。ばんばんと両手を鳴らしている。

にとりは上下青い水着を着ている。一応設置した実況席からちらりと「負ければいいのに……」と何輪の声があった。

しかし、そんなことを気にするほど河童とて心は狭くない。単にプロマイドをさらに売りさばいてやると心に念じただけである。彼女は深く息を吸い。吐く。夏の熱気で

体が熱い。

「人間とどれだけ遊んできたと思っっているんだ……遊びで負けてやる気はないね」

しゅつと天空に投げたバレーボール。にとりの体感が少し反り、構える。

ぱーんと軽く打つ。芯を撃つたが勢いは弱い、事実一回戦の毘沙門天が見せた強烈さはない。それを見た瞬間お空が前に出た。

「貰ったわ」

砂を蹴る地獄鳥、にとりはサーブ位置から動かずに冷ややかに見ている。よれよれのボールが緩やかな弧を描いてお空の手元へ向かっていく。お空はぺろつと唇を嘗める。両手を組んで思いつきリレーしようとして、空ぶつた。そのまま勢い余ってよろけた。

弱く、砂場に突き刺さるボール。先制点はにとりである。彼女は映姫をジロつとみて片手を上げる。瞬間応援席からがワツと沸騰した。

「?????」
歓声の中でお空は疑問符を浮かべている。何故取れなかったのかさっぱり分からな
い。

しかし、映姫や観客からは見えた。つまり傍から見ればわかった。にとりのサーブは殆ど回転せずによれよれと向かっていった。お空の手元で妙な変化をしたことも横か

ら見ればわかる。

「なるほど、無回転でのサーブ……ナツクルですか」

野球用語で説明してしまい、はつと映姫は口元を抑える。ナツクルとは変化球の一種である。特殊なボールのにぎりで回転を抑え、どこに曲がるかわからない軌道を描く。過去には魔球として持て囃されたこともあり、今にとりがやったことも原理としては同じである。

映姫は片手を上げて挑発的な顔をしているにとりを見た。

河童、それは人間に最も近いであろう妖怪である。古代から水辺に住み着き、人々との間で多くの伝説を残している。それは天狗などと比べてもなお多いかもしれない。特に相撲などで人間とあそぶ妖怪と成れば筆頭と言つていい。

「……………」

映姫はまだ迷っているお空に近寄る。彼女は手元で曲がったボールの原理がよくわからない。

★☆☆★

「いちりーん」

肩を組みながら水蜜が一輪にちよつかいを掛けている。河童達が勝手にかつ、急造で作った実況席であるが、試合が始まって見れば黙りこくっている。当然と言えば当然な

のだろう、一輪としても別に目立ちたいわけではない。

語弊の無いように言えば一輪は目立ちたがりではある、単に肌をさらしていたくないだけである。妖夢は横で姿勢良く座っている。

そんな一輪にどこか手に入れたのか酢昆布をくちやくつちやわざとらしく噛みながら、にやにやと水蜜が一輪を見ている。彼女はからかいに來ただけで直ぐに戻るつもりであろう、可愛い妹分を放っておくようなことはしない。からかえる時にはする。

「あんた……何しに來たの」

青筋を立てながら一輪が睨んで來る。それをできるだけうざい顔をしながら水蜜はにやにやする。なんでこういうことをするかというと、さつき剥かれたからである。ある意味正当な復讐なのだ。

「いえいえ。実況さんが頑張ってるか見に來たんですよ」

「余計なことだから早くもど……」

れ、と言いかけてそれはそれで水蜜を逃がすことになる。むしろ無駄に注目度だけ高いこの場に居させた方がダメージはあるだろう。

「こほん、まあいいわ。水蜜こそ次か次あたりに試合でしょう。河童に当たらなければそれなりに強敵なんじゃないの？」

「私と靈夢さんなら大丈夫でしょう」

「……あんだ。聖様に当たったらどうするの」

「……！」

目をぱちくりさせる愛らしいキャプテン。彼女はにやりと歯を見せて微笑む。

「遊びは全力でやるものよ？ あんただってそうするでしょう？」

「まーね」

頬を指で掻きながら、困った様な顔で苦笑する一輪。これから未来、とあるヘンテコボールを集めるときに「大変失礼なこと」を聖白蓮に口走る彼女である。妖怪である彼女を真面目一辺倒に考えていると間違える。

「よし、そろそろ戻りますかね。霊夢さんも寂しがっているでしょうし」

「それはないと思うけど……」

「いやー結構あの子は……からか、かまいがいがあります」

目を瞑ってうんうんと両手を組んでうんうん頷くキャプテン。一輪はははと乾いた笑いをしつつ、さつき地獄鳥が両手を組んでた時は「載ってたな」と思い、キャプテンの首から下あたりを見る。すらりとしている。

何も言わない一輪に気が付かず、水蜜はその瞳をコートに向ける。さつき青い髪の毛がやったことを彼女は思い出す。無回転ボールである。一回戦の毘沙門天やこいしの技は難しくとも、

「あれなら」

ぎらりと光る瞳。いたずらを考えている悪い顔。

魂魄妖夢は真顔でコートを見ている。解説らしいがすることがない。

★★★

続けてにとりがサーブをする。胸に空気を吸って、吐く。じりじりと焼かれる肌が心を熱くさせてくれるような気がする。とりあえず奇襲としての攻撃はうまくいった。ただ今度はボールを取るのは映姫だ、同じ手は通用しないととりは分かっていた。

「それじゃあ、やっぱり」

にとりは片手に構えたボールを低く構える。それをふわりと投げた。今度は高くない。

一下から右手で突き上げるように叩く。バインと音を立てて上がるボール。高く弧を描きながら相手のコートに行く。

映姫は太陽の光に惑わされないう様に気を付けながらボールの下へ素早く回る。あの打ち方では変化球など不可能であろう。それであればレシーブは容易である。下手打ちのサーブなどその程度である。

数秒、落下まで時間がある。映姫の眼が動く。お空の位置が悪い。

「三步、前へ行ってください」

短く伝えるとお空は「え？」と言いつつ、三歩前へ進む。ネット際。

映姫はそれを確認した後、膝を柔らかく構え、両手を組む。ぱんと綺麗に落下球を受け止める。上がったボールはちょうどお空の上空、絶好のスマッシュ・ボール。

「来ました!」

きらきら光るような笑顔で待つお空の首元でペンダントが揺れる。先に説明した通り、このコートのポールとネットはわずかに正規より低い。それは盛り上げるための要素である。だからこそ体格の大きなお空がさらに有利なのだ。

お空が砂を蹴り、飛ぶ。観客が湧く。決まるだろうと一身に期待と声援を受ける。

「こっちだ。こっい!!」

にとりが叫んだ。コート奥である。レシーブの構えをしている。お空の眼に「めら」と燃える勝負の炎。映姫は「まずい」と瞬時に判断したが、伝えるすべはない。

「メガ!」

消し飛べ河童の気合と共にお空がアタックする。振り上げた右手が勢いよくボールを叩く。

「フレア!!」

直線、にとりに向かって打ち出されたスマッシュ。にとりは近づくとそれに「かかった」と不敵に笑った。彼女は、構えを解いてととととと横へ「避け」た。一瞬あと彼女のや

や後方にボールが突き刺さった。コートラインの向こうである。

ぴーと鳴るおかつぱ。それから「アウト」を宣告する。にとりはわざわざコート後方でお空を挑発してきたのはこの為である。有り余ったパワーは利用するに限る。会場から「ああー」と嘆声が漏れる。

「けけ」

にとりは次の策を考える。本来一回戦でねずみも同じことをしたかった可能性もあるが、彼女は相方の「古明地こいし」に精神的、物理的にふりまわされてできなかった。その点この腹黒い河童は幸運である。普段は仄暗い水の底からやってきたような河童である。黒い波動をだしているような錯覚すら感じる。

「おやびん、すごいー！」

とお隣が近づいてきた。にとりは「ああ。ありがと」とそっけなく返す。お隣はにははと笑う。おそらくお空が元気になって嬉しいのであろう。それはそれとして河童は彼女をことを冷ややかに見ている。元々クーデターに参加していた彼女である。

（反乱なんてしてただで済むと思っているのかな？）

と思いつつ、

「これで二点先取だよ。張り切っていこうぜ！」

「おおっ！」

ハイタッチとかする。ぱーんと手を仲良くならず可愛らしい少女達。一方の腹の中は泥が出そうな暗さである。証拠にくるりと振り向いた河童の顔はこれ以上ない程あくどいものである。にとりチームに足りないのは攻撃力である。それには「お燐」を捨て猫にするしか方法はない。

「く、くっそー。次こそは」

悔しがるお空の肩をぽんと叩く映姫。彼女はお空を優しく見つめつつ。

「いいですか。コートの中中央付近を狙って打ってください。仮に河童を倒すことが出来なくてもそれで充分です」

「で、でもそれじゃ」

「でもではありません。そもそもこれはビーチバレーであってボクシングではないのです」

「は、そうね！ 流石監督！」

なんか納得してくれたらしい。映姫は眼を閉じる。ここでお空を責めても何にもならない。むしろテンションが高いことを維持しつつ微妙に修正をする気だった。短い攻防を制したにとりチームではあるが、映姫は地力を見抜いていた。

いくらにとりがトリッキーな策をつかおうとも、パワーではお空がその他のことには映姫が対応できる。長期戦ではまず間違いない勝てるだろう。

それでいいのだ。映姫がこの勝負に出たのはお空のためが9割である。しかし、流石に能力の使えない四季映姫には河城にとりの邪悪さが算出できていない。

仕切り直しである。サーブはにとりである。彼女はまた無回転ボールを撃つだろうか、と映姫は予想した。むろん外れる。今度は情け容赦ない本気のサーブを撃つつもりである。にとりは少し前にいるお燐にと、

「あーもうちよつと右にきてよ」

「はい」

とポジションの調整をしている。そこには駄目である。

「あ、いいよそこで」

にとりはいいい位置についてくれたお燐を止める。とてもいい位置である。

「ところでさ、お燐」

「はいおやびん」

「先に言っておくけど。ごめん」

「はい?」

「いいや、こつちの話」

しゅつと河童がボールを天空に投げる。狙うは一点。反逆者の頭。鈍く光る河童の両目、と容赦ないサーブの動き。打ち出された右手がボールと接触して、一直線にお燐

「まんまき。まだ試合は始まったばかりじゃなか。選手交代くらいは認めてくれるだろう?」

にとりは映姫に薄ら笑いを見せつつ、観客席に近づく。そして途中で歩みを曲げて、実況席へ。そこにいるのはちよっかいを掛けるキャプテンと尼、そして、アイドル。

にとりは呆けている一輪からマイクを貰うと、実況席に腰を預けたまま、観客に向かって言う。

「みなさん、選手交代のお知らせをいたします。今負傷しましたお隣選手に変わりました」

あくどい顔を妖夢に向ける。

「アイドル街道幕進中の魂魄妖夢さんが水着で参戦します。あしからずー」

一瞬の静寂の跡、立ち上がる観客たち。だんだんと大きくなる声、地鳴りがするような拍手。わあわああと盛り上がる会場がそこにあった。にとりは口を開けて放心している妖夢に顔を向ける。実況席はパラソルがあるから影になった河童の顔はとても悪い顔だった。

ただ、それが彼女の一番の魅力なのかもしれない。

「ということで、水着。宜しく」

「は、? え。き、貴様。まさか最初からこのつもりで……」

妖夢はバンと席を立ちあがる。それを見て勘違いした観客がさらに大きな声を出した。もう逃げることはできないよ、と河童は言っている。これでチームの補強はできた。お燐よりも戦闘力が高い不審者兼アイドルが仲間に入ったのだ。

おまけ 異次元からの来訪者①

——やっちまった。

北白河ちゆりは錆びたパイプ椅子を片手に目の前で倒れ伏している少女を見下ろしていた。草むらに倒れている赤い髪の彼女はうつ伏せでピクリとも動かない。耳に聞こえる蝉の音がクリアだった。

「……」

その辺で拾っただけのパイプ椅子を放り投げて、ちゆりは腕を組んだ。多分大丈夫だろうが当たり所が悪かったのか気絶したらしい。ちゆりは赤い髪の少女の両足をもつてずりずりずりと運んでいく。重いので担ぐなんてしない。

ちゆりはか弱い少女なのである。頭に小さな白い帽子を載せて、金髪のツインテール。セーラー服と青いリボンがその細い体に妙に似合っている。

ことの発端は数日前のことである。

ちゆりが「ご主人様」と読んでいる赤髪が何度目かの「魔法」云々の学説を発表して学会追放を食らったらしく、またも幻想郷へいくなどと言い出した。ひよんなことから

手に入れたぶちぶちを潰すのに忙しかったちゆりは即座に「いやだぜ」と言ったが、普通に殴られてしまった。

そして「いつもの方法」で幻想郷へ行くつもりだったのだが、どこで座標がずれたのか中途半端な場所に来てしまった。

幻想郷よりはどちらかというところちゆり達の世界に近い。少しばかり、そう五世紀分ほど遅れている世界。

ちゆりは河原で赤髪を引きずっている。街を流れる大きな川に太陽の光が反射している。向こう岸を見れば団地が立ち並んでいる。少なくともちゆりの世界では過去の遺物になっているようなものだ。

赤髪は顔とかこすったり、スカートで引きずられているから恥ずかしいことになっているがちゆりは気にしない。どうせ魔法とかを正面から受けても死にもしない「ご主人様」である。多少の無茶は大丈夫だろう。

パイプ椅子で殴ったのもなんだか妙なことを言いだして、世界を破滅させるような言動をしたからである。

「ふう。重かったぜ」

ちゆりは大きな橋の下に赤髪を横たえた。日陰になっているからここならば、放置していても死にはしないだろう。それに仰向けにして両手を胸の前で組ましてあげたの

はユーモアである。

赤髪は美しい少女だった。

全身が赤い服に身を包んでいる。顔のあたりも別の意味で赤い。

赤いマント、シャツの上に赤いベスト。それに赤いリボン。それに赤いスカート。とにかく赤い。ちゆりのシンプルな格好とは少し違う。

一仕事終えたちゆりのお腹がなった。彼女は両手でお腹を押さえるような仕草をしながら、少し考える。この世界はおそらく「お金」を実物として使っているだろうと、推測する。こう見えてもちゆりは頭がいい。

ともかくにも「お金」の現物がないと始まらない。彼女の持っている電子的な「お金」は役に立ちほしくないだろう。そんなことを考えているとちゆりの背後で音が鳴った。

「君。何をしているのかな？」

ちゆりははつと後ろを振り向いた。そこに立っているのは精悍な顔立ちをした男性だった。青い服に肩のあたりにトランシーバーを付けている。

「……ぼ、ポリス？」

ちゆりはこの相手をそう予想した。おそらくそうだろう。

「今、何をしていたんだい？」

男は作った笑顔で対応している。ちゆりはあわてて手を振る。

「ひ、ひえ。ち、ちがうんですよ。誤解だぜっ」

「……最近ここらへんには不審者が多く出ているんだ。よれよれのウサギ耳をした変人や通行人に襲い掛かろうとした輩やら。その女の子はどうしたんだい？」

「女の子……ご主人様……ただ……」

そこで「あ」と気が付いた。

ちゆりはさつきご主人様をパイプ椅子でぶん殴った。これは傷害罪に当たるのはないか。彼女の聡明な頭脳はくるくると回る、そしてすました顔でこういった。

「知らない人だけど、なんか頭打ってて動かないのよ」

「な、なんだって!」

即座に警官は駆け寄りばんばん、と赤髪の顔を叩く。けっこう強めに叩くのでちゆりは冷や汗をかいた。起きないで欲しい。

「君、しっかりしろ。本当だたんこぶができています」

「ひどいぜ。いったい誰が……」

後ろではちゆりがなにか言っている。犯人はこの中にいる。

★☆

ピーポーピーポーとうなるサイレンを見送るちゆり。

救急車が迅速にやってきて、「ご主人様」を載せて行ってしまった。ちゆりは一応無関係を伝えてしまったのでどうしようもない。

「どなどなぞーなーって、どうしよう……」

妙な歌を唄いながらちゆりはさっそく途方に暮れた。伝手の無い平行世界で無一文。これ以上に厳しい状況があるだろうか。実は同じような境遇の少女達が山のようにいるが、ちゆりはそんなことは知らない。

お腹が鳴って仕方がない。ポケットに手をつ突っ込んで中の布を引つ張り出してもほこりでもない。彼女は取り合えず、街のありそうな方向に向かうことに決めた。もしかしたら爆弾の材料くらいはあるかもしれない、それを川に投げれば大量の魚は取れる。

高い科学技術を持つというのは、危険と隣り合わせである。危険なのは本人よりも主に回りである。

世界にとって運のいいことに爆弾の材料はなかった。

それどころかお腹は減るばかり。ちゆりは肩を落としてどんよりした目でうろついた。明らかに不審者ではある。いや、セーラー服の時点で妙に存在感はある。

「くっそー。ご主人様から研究費の一部くらいせび……そっか。どうせつかえないや」

この金髪の少女は口調が適当である。以前とある巫女に注意というか、すっぱり言われたが、特に直すきはないらしい。彼女はふらふらと歩きながら、なすびみたいな傘を

持ったヘンテコな青い髪の少女とすれ違った。

その時のちゆりは目つきが悪い。メンチを切っているかのように相手はびっくりしてどこかにいった。

裏道へ入ってみる。ちゆりの顔は汗でべとべとである。服の下が気持ち悪い。

空からは照り付ける太陽。焼けてしまいそうな日の光。ちゆりはうんざりしながら、腕で額を拭う。

小さな小道。

小さな水路。

小さな足で歩くちゆり。彼女は角を曲がる。

そこにあつたのは古びたりサイクルショップである。どうみても食料品は売ってそこにはないが、彼女は日陰を求めて中に入っていく。入口には大量の冷蔵庫が立ち並んでいる。リサイクルショップの様式美の様な物だろう。

「へい、らっしやい」

変な挨拶をする桃色の髪をした店員がいた。ひまわり柄のエプロンを付けて可愛いしいが不愛想である。ちゆりは積まれたいろんな「商品」を見て回る。

その間に店員は奥に戻る。パイプ椅子に座り、傍らにディスプレイにひびの入ったレジスターとぼていとチップスの袋。それに手を入れてぱりぱりと食べる無表情の彼女。

濃いブラウンのエプロンと下にはブラウスとスカート。桃色の髪をした彼女はまるで人形の様だが、前を見ながら顎を動かしている姿はシユールである。ちゆりはちらりと見て、お腹が鳴るのを覚えた。

近くにはフライパンやら七輪などがある。もちろん食材が無ければ使いようがない。

「店員さん」

「……ん」

店員が立ち上がり、ちゆりを見た。表情が全く変わらないのでちゆりも少し驚いたが別にいい。

「なにか食べ物売ってない?」

ちゆりの算段とはこうだ。ここは質屋なのだから、物々交換くらいはできるだろう。交換といっても彼女は服と帽子とみょうちくりんな銃みたいなものくらいしか持ってない、ダメ元で行ってみた観がある。

しかし店員は妙な風にそれを取った。質屋に食べ物があるわけない。あるとすれば彼女の持つポテイトチップスくらいだ。それを奪おうとしているのではないかと疑念が湧いたのだ。だから言ってみよう。

「やろうってのか」

「な。なんでそうなるんだぜ」

無意識にフライパンを取るちゆり。店員も大切なおやつを守る為にパイプ椅子を畳んで構える。

★☆☆

犬走権は公園のベンチに座って一息ついていた。恰好はパーカーにショートパンツである。いつも通り動きやすい恰好をしている。彼女は大切そうに包みを持っている。胸元に隠すように持って、あたりを見回す。卑しい鴉天狗（個人）が居ないか見ているのだ。

「よし」

いうと包みを開ける。開けると香ばしい匂い。イチゴとクリームをのぞかせたクレープが其処にパッケージと共にある。彼女はこれを買っていそいそと公園に移動したのだ。店で食べるとなんだか恥ずかしい。

ふふ、と少女らしく笑う厳格な彼女。白い髪が揺れる。

今から甘いそれを食べることに胸が高鳴る。幻想郷では食べることなど適わない甘味であろう。実際には紅魔館なので食べられているのかもしれないが、そんなことは権にはなんの関係もない。

「それじゃあ、いただ、は」

瞬間だった。権は立ち上がり、構える。眼を吊り上げ、赤い瞳であたりを見回す。

どろりとした感覚がした。凄まじい魔力を感じる。現代でこれほどの力を感じるとは夢にも思わなかった。事実椀の肌は粟立っている。

「な、なんだこれ」

明らかに自分の手に負える何かではない。椀はどくどくと鳴る心臓を抑え、文に電話をする気になっていた。こういう場合、ノータイムで頼れる相手として頭に浮かぶ当たり、そういう関係なのである。

しかし、直ぐに圧迫感は無くなった。椀はベンチに無意識に座りはあはあと荒い息を吐く。なんだったのかと自問したが、無論回答は出ない。

「まあいいか。くれーぶ食べよう」

そのあたりは幻想郷の少女である。どこかあつけらかんとしている。せつかく若い人間の女の子達と一緒に並ぶ、などという恥ずかしい思いまでして買ってきたのだ。食べなければ損ではないか。

そう思っ取れ出したクレープ。こんがり焼けた良い匂いのする生地イチゴとクリームが包み込まれている。へへ、と不覚にも笑ってしまった。犬のように椀はあたりを見回す。一応誰にも見られてはいないだろう。

と思っていたが、草むらに赤い頭が見える。少し包帯も見える。いつの間にそこにやってきたのだろう。

「……………」

怪しい。楯はクレープをそのままに立ち上がって近づいてみる。すると「赤い頭」がじりじりと下がっていく。人間だろうか？と楯は思うが、なんでこんなことをしているのか分からない。

「そこにいる奴。出てこい」

「……………よくわかりましたね……………素敵」

草むらで立ち上がった少女が言った。頭に包帯を巻いている。

赤い、とにかく赤い服装をしている。髪が赤く三つ編みにしている。胸元のリボンは大きく赤い。ブラウスは白いが上から赤いマントをしている。大きなスカートも赤い。

不敵に笑いその瞳も朱い。彼女は両手を組んで楯に向かいあった。

「私の名は岡崎夢美。しがない大学教授です。貴女は……………本当は人間ではないわね」

「なっ！ 何!?!」

下がった楯はステップで後方へ。ぐるると唸り、戦闘態勢をする。警官のいる現代でこんなことになるとはこのごろ全然思っていなかった。彼女は探るように言う。クレープを守る為に。

それはそうだろう自らの正体に感づかれるとも思っていなかったし、それができる夢美は尋常の人間ではない。

「貴様……さっきの魔力の主か」

「ふふ、救急車を止めるためにやったのよ。ところで、その」

「なんだ！」

「……その、あれね。お腹が減って」

「恥ずかしそうに夢美は途端にシユンとする。両手でお腹を押さえてぐうと鳴る。

「私もこの平行世界で騒ぎは起こしたくないわ。ちゆりのあほを見つけた直ぐに出ていくつもりよ。だから、そのクレープを掛けて勝負をしましょう！」

「断る！」

「……断れると思っているのかしら。私は魔法をまたあの場所へ行かないといけないのよ」

「夢美の後ろに赤い魔力の渦ができる。びりびりと体にたたきつけられるそれに楯は一步下がった。なんでこんな強力な力をクレープのカツアゲに使うんだろう、と至極まっとうな意見を思う。」

「夢美からすればいくら空腹でもこの平行世界で何らかの犯罪行為をすれば、普通に自分の世界に犯罪者になるかもしれない、そこに人間ではない犬走権を見つけたことで仕方なくカツアゲしているのだ。」

「くそ、勝負とは何をするんだ」

「受けてくれるのね。素敵」

にっこり笑って魔力を抑える夢美。そこで椀はこの夢美という少女が「自分たちと全く別の方法」でここにいることに気が付いた。出なければ魔力などつかえまい。それこそ現代ではなく幻想郷で使えば数倍の力になるはずだ。

ゾクリとする。もし岡崎夢美が幻想郷へ来れば十分な脅威となるだろう。だが、そんなことはどこ吹く風、夢美はクレープを見て笑顔のまま涎を垂らしている。

所詮、大学教授と言えども一八歳の少女なのである。彼女はにやりとして、一枚のコインを出した。

「手っ取り早くすましましょう。コイントスで」

教授はお腹が減っている。勝負を焦る者はたいてい負ける。

3 2 話

試合は5分間の中断になった。それはアイドルこと魂魄妖夢が着替える時間を取るためである。

逆に考えればこの哀れな半分霊の少女に「5分」しか与えないことで抵抗の暇を奪うということでもあるのだ。海の家裏にある簡易的な更衣室（屋外）にとりが水着と一着と一緒に彼女を閉じ込め、SPのように外に河童を二名配置するという手配も完璧である。逃がす気はない。

一応嫌だなのなんなの往生際が悪い妖夢が抗議したが、人間達の大歓声に押し切られた形で涙目で承知した。

それでも彼女は刀を振り回す危険人物である。SPもどきとして配置された河童と少女。いつ切りかかれるかという恐怖に耐えながらの警備の為、ガタガタと震えている。時折中から衣擦れの音と共に「かっぱきる」とか物騒な声が聞こえてくる。

そしてまた一人河童がやって来る。それはおかつぱの彼女である、にとりはこの子を便利に使っていた。数か月前に山童（河童とは違う）に転向しそうになったことの償いでもあるのだ。

手に持っているのはデジカメ一つ。更衣室に侵入して写真を撮るのが目的である。いい写真が取れたら、キャツシユに替える為にいろいろと使う。しかし相手は辻斬り。おかつぱの心境はライオンの檻に飛び込む気持であつた。

ちなみに門番の河童は見て見ぬふりをしている。おかつぱがどうなろうと知つたことではない。このあたりドライである。河童とて己の身が一番かわいいのである。しかし、おかつぱがドアノブに手を掛けようとする前にドアが「切れた」。

悲鳴をあげて転げるおかつぱ。慌てずにおかつぱを見捨てて逃げるSP河童。

がたん、ごとん。美しく切り裂かれたドアが砂の地面に落ちる。見えているのは中に入ったアイドルのお腹から下、そして煌めく二振りの白刃。着替え終わってからたまらなくなつて抜いたのだろう。辻斬りの面目は躍如といつたところだ。

閃光が奔る。

更衣室に刻まれる「線」。一瞬遅れてそこからかりと壁も、ドアも切れる。斬撃に飛ばされた残骸が僅かに宙を舞つてから地面に落ちる。そして更衣室だつたところから出てきたのは上下淡いグリーンのビキニを着た少女だつた。トップスは深い緑に白い線で文様が描かれている。

鍛えあげられたしなやかな身体はあられもなく肌を見せている。下に至つては側面でもりポンのようになつた紐で支えられたビキニである。

そしてうつすらと笑った殺気に満ち溢れた顔。

銀髪が一本彼女の口元にかかり、冷たい瞳で見下ろされると恐ろしい。それに普通に両手に持った日本刀が太陽の光に煌めいている。黒塗りの柄を握りしめたまま。つかつかとおかっぱに近づく妖夢。おかっぱは手にもったデジカメを後ろに隠して今にも泣きそうな顔で首を横に振る。彼女の頭に流れるバトル漫画を読んだ時の記憶。まさか自分が似たようなことに陥るとは思っていなかった。

「かっぱあ」

首元に刃を突き付けられるおかっぱ。現代日本でこのようなことになるのはある意味珍しい。それに相手がアイドルというのであれば有史以来初めてかもしれない。おかっぱは正座して必死に身振り手振り、平身低頭で自分は悪くない。すべてはにとりが悪いのだと弁解した。

事実妖夢がここまで可愛く、そして肌を魅せざるを得ない水着を着させたのはにとりである。

妖夢は冷たく彼女を見おろしている。流石になますにするのは可愛そうだが、肩ひもくらい切つて恥ずかしい目に合わせてもいいだろうか、と思つた。最近温泉のロケやらで全国的に肌をさらすようなことをしてしまったのでストレス的はかなりまずいことになっているのだろう。

おかつぱとして必死である。こんなところであつぱの刺身になりたくはないし恥辱を受けるのも嫌だ。彼女は震えながら妖夢の容姿を褒めた。水着姿が可愛いだとか、刀が良く似合っているだとかまるで宮本武蔵のようだと言つて褒めて褒めちぎつた。客観的に見れば女性にそのようなことをいう事が褒め言葉かはわからない。

しかし、妖夢は刀を下ろして、顔をうつむけてしまった。前髪で隠れた目元、恥ずかしそうに引き結んだ口元。ほんのり赤い頬。握りしめる刀。ちやりと、響く金属の音。

だんだんと染まつていく耳元。尻尾の様な先つぽを振りながら右往左往する半霊。

生と死の狭間でおかつぱは命乞いにも等しい褒め言葉を並べている。刀が少し揺れるたびにこの小さな少女はびくうと体をそらせる。競泳水着で座っていると尻に食い込んで来るが、気にする暇などない。

「に、にとりはどこにいるの?」

たまらなくなった妖夢は聞いた。ここで勝利を確信したおかつぱは指をさして、あつちですと案内した。妖夢は少し小走りで両手に刀を握りしめたまま去つて行つた。

ふうと息を吐いたおかつぱはぺたりと姿勢を崩しておしりから座る。ちよつと肩ひもを引つ張つて戻す。

★★★

「そういうことだったんですね! おかしいと思つてたわ」

お空はうんうんと頷く。臨時で建てられたビーチパラソルの下で少年野球の子供達に囲まれた状態で得意気首を上下させる彼女はふふんと何故か笑う。目の前には映姫が姿勢良く座り、先ほどのにとりがやった「無回転ボール」や「アウト」を誘う戦術について解説していた。

それを聞いてお空はわかったとぱちんと指を鳴らす。笑顔でウインクする。ノリである。

「今度は外さないよ！」

「はあ……」

映姫は困ったようにため息を吐く。だいたい何が言いたいのかはわかる。要するにどんなボールが来ても細かいことを考えずに叩き、相手がアウトを誘っていても「にとり」にぶち当てればそれでいいだろう、という事だ。

「一応彼女に当てれば点にはなりません」

特に否定せずに映姫は言う。にとりにダイレクトアタックしても得点にはなる。現状は1点負けている状況ではある。先ほどお燐がダウンした時に映姫チームに1点入ったのだ。リードされているとはいえ、まだ試合は始まったばかりである。

などと思っているとパラソルににじりよる青い髪の少女。言うまでもなくにとりで

ある。緑の帽子を被り、ポニーテールな幻想郷では殆ど見せない姿。

青い上下の水着からこぼれる肌色。不敵な笑み。彼女は映姫を見下ろしている。

映姫も上目遣いで彼女を見た。静かな瞳はどことなく威圧感がある。少年たちは口々に「相手の人だ」と名前ではなくそういう。お空は「あ、河童だ」とそのまま言った。この場合お空の方が正しい。

「なんででしょうか？」

映姫が聞く。

「いやさ。どうせ勝負するならなんらかの罰ゲームもあっていいんじゃないかなと思っ
てさ」

「それは、どんなものかしら？」

「別に。ただ一枚写真を撮らせてもらいたいだけだよ。あんたの」

「……あなたが負けた場合は？」

「同じことをするだけだよ。それか浜辺をランニングしてきてもいいよ」

「なんでそうなるのかわかりませんが」

映姫は立ち上がる。少しにとりより背が高いから見下すような目つきになる。整った顔立ちの彼女に見られるととりも「う」と少し下がる。要するに映姫のアップの写真
をラインナップに入れて儲けたいだけである。試合中に撮ってもいいのだが、この閻

魔は鋭いからばれる恐れが高い。

映姫はそんなにとりの心を見透かすように、よどみなく声を出す。

「まず『おなじことをする』とは定義が明確ではありません。それでは勝つても負けても私の写真を撮るという意味にも取れます。最終的に自分だけは逃れようとしている」

「そ、そんなわけないじゃないか！」

「見え透いているわ。そう、貴女は少し小細工を弄しすぎる。嘘をついているわけではないけれど、相手を誤解させることを分かった上で言うなら、それは嘘をつくよりも罪が重い。あなたは今のうちに悔い改めなければ地獄に落ちることになる」

「ふ、ふん！ なんだよ。どつかのほそきみたいなきことをいつてさ。それに私はそんなこと一言も言っていないぜ」

「……」

映姫はふと、小さく微笑む。ある意味河童らしいとても思ったのだろう。それににとり調子が狂った。両手を組んで横を向いた。どうにもとり程度の詐術であれば映姫は騙せそうにない。ことごとく見破られている。

「そこまでいうならいいよ。負けたら私はなんだってしてやるよ。でも金銭的なこととか犯罪的なこととかは無しだよ。文句ないだろ！」

「そうですね。特にありません。どちらせよ勝つのは私達ですから」

「な、なに！」

にとりがずいとな前にでて閻魔を睨みつける。河童が遊びで負けるわけにはいかないのである。それこそ相手が神だろうがなんだろうが関係ない。

そんな彼女の首元に白刃がびつたりと突き付けられた。

「見つけたわ……」

特に空気を読んだりせずに河童の首を狙う半分霊のアイドルがにとりの後ろに立っている。水着を着ているので愛らしいビキニにいたりボンが揺れている。にとりはごくりと息をのみつつ、目の前で「ようむだ」「ヨームだ」とはしゃぐ子供達を見つめていた。一歩間違えれば戻される。

刀がチャームポイントの新感覚アイドルである。子供にも有名なだろう。

一応お空も子供達に合わせて「ヨームだ」と言っているが、よくわかっていない。映画はすすつと下がって。妖夢の間合いから外れる。また前に出ようとすると子供達を体で押さえる。少し嬉しそうな少年がいる。

にとりと妖夢の周りに空白の空間ができています。にとりは冷や汗を流しながら言う。

「あ、ああ。着替えたんだ。見えないけど。それじゃあ早速試合しようか」

「遺言はそれだけですか？」

話が通じそうにない。

にとりは眼で映姫に助けを求めるが、この閻魔は子供を守るのに忙しい。いや、この河童はここで気が付くべきことがあった。確かに河童は古来人間の傍にいて、共に生き、共に遊んできた。しかし四季映姫という存在が何故遊びに勝つなどと言っているのかの答えが其処にある。

命かかっている状態でそんなことを気にする余裕もない。にとりの頭脳が生存に動き出している現状で無駄な思考は不可能だった。彼女の脳内に生まれたのは腹黒い天狗の顔。にとりの情報網には類まれな情報網がある。彼女はアイドルと鴉天狗の因縁程度は天狗本人から聞いて知っていた。情報網はあまり関係ない。

「ふ、ふふ。ここの試合に勝てばあの天狗の恥ずかしい写真を売ってもいいよ」
「えっ？」

「二度はいわないよ。お安くしときますぜ」

商売の基本であり最も難しいことは相手の欲しい時に欲しいものを出すことである。妖夢にとつてそれは喉から手が出るほど欲しいものであった。だがここでも映姫は冷ややかに見ている。天狗とは言ったが腹黒い天狗お写真とは一言も言っていない。

実際にとりの懐にあるのは白い頭をしたパフェをおいしそうに食べる天狗の写真である。人間に毒されている点で言えば確かに妖怪として恥ずかしい。普通にみればいとけない。

ころりと騙された妖夢は刀を下ろして。深刻な表情をしている。天狗の写真を手に入れることができれば一矢報いることができるかもしれない。本当は一死くらい報いてやりたい。ただ、水着でビーチバレーは恥ずかしい。

だが、現代に来て最もヘンテコな方向に成長したのは間違いなくこの魂魄妖夢である。既に全国デビューを果たしているこの売り出しアイドルの腹は決まった。

「いいわ。あの恨み積み重なる天狗を斬ることができのなら……ちよつとくらいなら」

覚悟をきめた表情は凛々しい。詐欺に会っていると知ればどうなるだろう。ちなみに写真があらうとも斬ることに変更はない。

★☆☆★

アイドルが笑顔で両手を振りながら入場すると、歓声が沸き上がった。

ビーチバレーのコートの周りにはさらに人だかりができていく。口コミでアイドルの噂が流れてしまったのだろう。飛ぶように飲み物が売れており、河童達は忙しく立ち回っている。人手が足りないからだろう。「敗北者」であるネズミを捕まえてきてクローボックスを担がせて商売させたりしている。

このネズミ。デジタルカメラを首から下げている。明らかに河童側に雇われている。緑の水着を着た妖夢が腰に刀を布で巻き付け、両手を振りながら営業スマイルをして

いる。

これが彼女の成長の一つである。四日ほど刀を研ぎ続けて、刀身に映った笑顔であった。重度のストレスなどから生まれた武術で言う開眼であろう。営業スマイルを開眼したと聞けば、彼女の主人であれば笑い転げてしまうだろう。

それに笑い切れていない。ちよつとひきつつている。まじめな性格が災いしているのだろう。

にとりは後ろで首を回したり、軽くジャンプしていたりと準備している。ちらりと妖夢を見る目は冷ややかで、光がない。

「それじゃあ、踊ってもらおうかな」

「えっ？」

不穏な言葉に妖夢が振り返る。にとりはにっこりとプロの営業スマイルをして「いやいや」と意味のない言葉を言う。

結局のところ機械類の助けの無いにとりの力など高がしている。映姫やお空を向こうに回して戦えば必ずと言っていいほどスタミナが持たないだろう。だからこそ策を弄して妖夢を引っ張り出した。

今の状況では幻想郷での力関係は殆ど意味を持たない。

それは幻想少女達が実感として感じていることである。ただ、体格や知力はそのまま

反映される。そして巫女のように妙に力仕事をしているものは一步抜きんでるのも自明の理である。

翻つて考えれば魂魄妖夢ほどの逸材はいない。四六時中重たい刀剣類を腰に差して、全国を行脚している。体力的に言えばトップクラスであろう。そして頗るにとりとしては「扱いやすい」。

「それじゃあ妖夢さん。とりあえずその凶器……刀を預かるよ」

「な、なんでですか？」

「いや、そんなの持つてスポーツとかできないだろ？ 安心していいよ、責任もつて預かるから」

「し、信用できないんだけど」

「あつそ……。傷つくなあ。まあいいや」

けろりとした顔で「傷つく」などというにとり。

「それなら誰かに預かっていてもらおう。霊夢さんでもいいし、船幽霊でもいいしね」
「……壊さないでくださいね」

刀を壊すとはどうすればいいのだろうか、岩にでもたたきつけない限り折れも曲がりもしないだろう。妖夢としてもなんとなく言ってしまっただけである。にとりは二振りの刀を胸元で抱える。重い。それを外した妖夢の戦闘力は上がるだろうと頭の中で

計算している。

「それじゃあこの試合。私が指示をするから」

「な、なん」

「ナンデと言われればあんた……いや妖夢さん素人だからね。ここだけさ、いいだろう？」

不承不承妖夢は頷いた。にとりは余計なことをいわずくりと後ろを向く。にやけた顔。うまくいったとほくそえんでいる。彼女は刀を霊夢に渡すために早足で歩いきなり渡された巫女が仮に刀を粗大ごみに出そうともそれはそれでいい。本当ならばこの二振りの刀は妖夢が大事にする価値などない。それはにとりが知っている。

(とりあえず、恥かかせてやるよ。えんまさま)

にとりは勝つためにいろいろなプランを頭に描く。実行するのは妖夢である。

★☆☆

「ヨーム！」

「はひっ!？」

いきなり呼ばれてびくと妖夢が跳ねる。腰に重しがないと落ち着かない。彼女はくりりと振り向く。どことく手持無沙汰に小さな手のひらを、祈るときのように指を合わせて。無意識である。

相手はビーチバレーコートの方の反対側。ネットの向こう側でにやにやとしている、白黒の帽子を被った少女。お空である。彼女は両手を組んで、太陽の下で艶やかに光る黒髪を潮風になびかせている。

「この勝負。私が勝ちます！」

「……そんなことやってみないとわからないわ」

ムツとした妖夢がお空を睨む。お空は余裕の笑みを崩さずに続ける。

「貴方の方が小さいですから。楽勝ですね」

「……………?……………!」

妖夢は少し考えて、何かを思って、顔を赤くして、胸元を隠す。

「か、関係ないじゃないですか!」

「核エネルギーと一緒にです! 大きくて熱いものに勝てるわけないわっ」

「……そ、そんなことを言うなら。貴女のパートナーだって同じような物じゃないですか!!」

お空の少し後ろで考え事をしていた映姫が、ちらりと、冷たい目を、妖夢に向けて、直ぐ戻す。気にしているというほどではないだろうが、無関心というほどでもないらしい。

しかし当のお空は首を傾げる。

「それはまあ、監督も私より背は小さいですが……」

「……背？……」

途端に赤くなる妖夢。何か勘違いしていたとお空は合点がいった。自分と妖夢を見比べて、ああと思う。彼女は片目を閉じてから顎を上げる。両手のひらを上に向けて。ふっと息を吐く。

「器のことじゃないわよ」

「だ、誰もそんなことを気にしていないわっ！」

勘違いしているお空に過剰に反応する妖夢がびしっとお空を指さす。リボンが揺れる。それを映姫は見ている。

おまけ 異次元からの来訪者②

岡崎夢美には勝算があった。彼女は手に持った一枚のコインを楯に示す。このコイントスに勝てば晴れてクレープを食べることができると。しようもない勝負である。

翻って犬走楯は小さく口を開けて、まるで自分の上司を見るときの様な冷たい目をしていた。上司とは黒髪の鴉天狗ピンポイントである。好奇心旺盛なところは似ているかもしれない。

可愛らしい容姿からは分らないが、彼女は一度幻想郷へ誰かしらを「拉致」しよとした前科がある。ある意味そこも天狗と似ているかもしれない。

楯はクレープの包みを両手で胸元に抱いている。普通に渡したくはないらしい。そもそも彼女から見れば不審者相手に受ける義理などない。単に夢美に消し炭にされる可能性があるから付き合っているだけである。

「勝負は一回きりでいいですね」

コインを示したまま夢美は言う。楯としては頷くしかない。しかし、一応警告する。「そのコイン……何か細工はしていないだろうな」

「……………あら。気になるのね。触ってみる？」

ぽーんと投げられたコイン。きらきらと陽光に光りつつ、両手がふさがっている椀の横を通り抜けて地面に落ちる。あわあわと夢美はそれを追いかけるが、走り出そうとして片足が地面に引っかかる。運動不足の人がよくなる動きである。

こほんこほんごまかしの咳をしながら夢美が椀へコインを手渡す。この白狼天狗は完全に胡散臭そうに夢美を見ている。

「なんの変哲もないコインだな……」

というよりも何のコインだろうと椀は思う。見たことのないものだった。金色の表面に「B」を象った物だった。表と裏で文様が少し違う。英語で何かが刻まれてるが椀には読めないしどうでもいい。

「いいだろう。私は表に賭ける」

ぴんと指ではじく椀。目算が外れて夢美の顔面の横を通り、後ろへ飛んでいく。「あ」と言った後、あわあわ今度は椀が取りに行く。かっこつけたのが間違いだった。やっと椀の手から夢美へ砂にまみれたコインが手渡される。

椀は少し恥ずかしそうにしたが、そっぽを向いて聞く。

「そういえば私は勝った場合は何をしてくれるんだ？」

「……クレープ……？」

「これは元々私の物だ!!」

ぐるると歯を剥いて怒る椀。クレープを早く食べたい。夢美はくすりとして、冗談だと笑った。彼女は紅い瞳を煌めかせて不敵に微笑みを浮かべる。

「ふふ、私に勝てたなら願いを叶えてあげますよ」

「それなら自分でクレープを創ればいいじゃないか！」

「……いや、あのICBMなら用意出来るけど、クレープ製造機は持ってないの……あとこの世界のお金も」

「あ、あいしー？ なんだそれ」

呆れたように椀は言う。仕方ないと少し諦めている。負ければ悔しいが命は惜しい。不惜身命など天狗とは関係がない。上司の為に働くことがあっても強敵がくれば普通に丸投げしていた彼女である。

「まあいい。さっさとしてくれ」

椀はため息とともに言う。それで夢美も頷く。

夢美は真剣な顔でコインを構えた。まるで椀に挑戦するかのような顔である。

「それじゃあいきます」

夢美は右手をかざす。親指に載せられたコインが光っている。

そして左手に用意する「別のコイン」。これこそが彼女の必勝法である。落ちてきたコインをすり替えることで賭けを優位に進めることができる。

——おい、ご主人様。おやつを掛けてコイントスしようぜー

と少し前に研究室で助手にやられたことが心底悔しかったので練習したのだ。しかし、助手は仕掛け手であるから勝負に乗ってこない。マジックなどもそうだが、練習したことはどこかで人に見せたくなるものなのだろう。

その標的がたまたま杖だったのだ。彼女はくんと鼻を鳴らしているが、そこに夢美は気が付かない。

ぴーんと小気味よい音がしてコインが飛ぶ。回転しながら落ちてくる。夢美はそこに手の甲を合わせて、コインの上に左手をかぶせる気なのだ。もちろん裏にしてすり替える。その瞬間、

「へくち」

杖が抑えたくしやみをする。びくりとした夢美の手の甲にコインが当たって、地面に落ちそうになる。抑えようとして左手のコインがするりと落ちる。

「わ、わあー！」

「……」

夢美は慌てる。コロコロ転がる二枚のコイン。

冷えた杖の眼。見下すような瞳。彼女は転がるコインを足の裏で踏みつけて止める。

「おい。なんで二枚あるんだ？」

「……」

「文のような奴だな……」

夢美は頬を赤くしてうつむくしかない。しようもない勝負でしようもないことをしてしまった。しかも誰かは知らないが棍にイカサマをしそうな誰かの様だと言われてしまう。頭の中で助手が馬鹿にしてくる。イメージの中でもうまく動かない助手である。

夢美は固く拳を握りつつ、地面に座り込む。

「……………」、こうなったら四次元ポジトロン爆弾を出すしか……」

「何をする気かは知らないが、何か私に危害を加える気なら不審者として」

棍は冷ややかに見つめながら携帯を取り出す。

「警察を呼ぶぞ」

天下の天狗も警察を呼ぶ時代である。スペルカードよりも強力な存在なのだろう。

★☆☆★

「わかりましたわ。この勝負私の負けです」

とあるカフェに棍と夢美は移動した。街角にありお洒落な場所である。小さなテーブルに二人は向かい合わせで座り。棍だけが紅茶とケーキを頼んだ。夢美は水である。

周りには棍と同じように人間の少女達が着飾って談笑している。

あれから楯は公園で物欲しそうに眺めてくる夢美の前でクレープを急いで食べた。そのせいで殆ど味わうことができずに不満がたまっていたのだ。夢美は殊勝にしているように見えるがイカサマがバレれば負けは当然である。

「あたりまえだろう」

楯はぶすつとした顔で吐き捨てる。楽しみにしていたクレープの恨みは深い。特に恥を押して人間の少女達の行列に混ざって買ったのだ。パーカーを頭から被ったまま、恥ずかしさから殺気だった目をして並んでいたとは彼女も分からない。

「それでもなんでも願いをかなえてくれると言っていたな」

「なんでもとは言っていない……」

夢美はお腹を押さえてシユンとしている。普通に空腹だった。楯はとんとんと指でテーブルを叩きつつ、肘をたてて頬杖を突く。少し考えているような仕草である。ほつぺたが柔らかかそうであった。

ちらちと夢美を見る楯。

(いろいろと変な奴だが魔力だけは本物ね。もしかしたら)

「帰り方もわかるのか?」

口に出してしまう。きよとんとした顔で夢美が見てくる。

「帰り方ですか?」

椛はきよろきよろとあたりを見回して、誰も聞いていないことを確認する。

「幻想郷に行つた事があると言つていたな。なら、私達を帰すこともできるのか？」

「……………そういう方法で来ているのではないのね」

「……………？」

「無理ですわ。いろんな禁則事項的なこともありますが、私達は一旦自分たちの世界に帰らないといけませんから…………」

何をいつているのか椛には少し分からない。質問しようにもうまい言葉が浮かんでこないのだ。仕方なく椛は手元にあつた水を飲む。よく考えると夢美の物だったが気にしない。これではない大学教授には水すらない。

「あ、あー」

ごくごく飲まれる水を見ながら口を開けて呆ける夢美。それからがつくりと肩を落とした。椛はやつと自分が彼女の水を飲んだことに気が付いた。少し落ち着いてみると、空腹に耐えている夢美のことが哀れになってくる。

自分も甘い、そう椛はため息を吐いた。彼女は手元にあつたお品書きを夢美に差し出す。

「安いのなら頼んでいい」

ぱちくりと眼を瞬かせる夢美。それから花が咲くように笑顔になる。両手を合わせ

て心底嬉しそうに微笑みを見せる彼女。幼いその仕草に椀はちよつと目をそらした。

★☆☆★

財布の中身が足りない。

椀と夢美は姿勢良く座りつつ、下を向いていた。瞳孔がお互い開いている。

彼女達の間には二杯分のコーヒーのカップだとか、ケーキの皿だとか、夢美が美味しく食べたハンバーグプレートが置いてある。もちろんこの大学教授は無一文。ポケットにある二枚のコインはガラクタ同然である。

椀はレシートの入った財布から一枚の野口英世を取り出して戻す。少なくともこれでは足りないだろう。あとは小銭とポイントカードとレンタルビデオのカードしかない。

そんな彼女達に可愛らしい制服のウェイトレスが近づいてくる。

「お皿おさげしてもよろしいでしょうか？」

「ひっ」

「ひっ」

びくびくとビビる天狗と教授。辛うじて椀が「よ、よろしいですね」と妙な日本語を使い。下げてもらった。だからだと汗を掻きながら、焦点の定まっていない食い逃げ予備犯な犬走椀。

ウエイトレスはにっこりして「ごゆっくりと」と言ってくれた。現状ゆっくりするか方法がない。

「ど、どうするのよ」

夢美は椀に顔を近づけて聞く。椀も言う。

「こ、ここの支払いを願いで叶えて欲しい」

「金銭的な願いは厳しいのよ」

「や、役立たず」

「な、なんですって」

大声を上げてしまい夢美ははつとあたりを見る。ちらちらと注目を浴びている。彼女は座って小声で言う。

「お金は持ってないって最初から言ったじゃない」

「お、お前もハンバーグをうまいうまいって食べてたじゃないか」

「そ、それなら貴女だって嬉しそうにケーキを食べてたじゃない」

「嬉しそうになんてしていない」

「してたわ!」

「してない!」

お互いに何故か胸倉をつかみ合っている。しかし、同時にはつと気が付いたこれ以上

騒げば店員に怪しまれ、最終的にサイレン付き「護送車」がやって来るだろう。椀と夢美はそれぞれあたりを見回して、お嬢様のように「ほほほ」と似合いもしない演技をした。

気にしないでください、という事だろうがそもそも白頭と赤頭が目立つ。

「そうだよ」

夢美は椀にずいっと身体を寄せる。

「あなたのお友達に連絡をできるんじゃないの。この場だけ来てもらえば」

「……き、金銭的なことで頼りたくはないが背に腹は代えられない……」

椀は携帯を取り出してアドレスを開く。

「こういう時ははたてだな」

ツインテールの天狗の顔が浮かぶ。姫海棠はたてである。相方とは違って信頼できる。椀はさっそく電話した。しばらくコール音が鳴って、がちやりと音がする。

『はい姫海棠です』

「あ、はたてか」

『現在電話に出ることができないわ。ピーという発信音』

「……る、留守電を自分の声で登録している」

切る。椀は頭を抱えた、また友人の一面を見つけてしまった。しかも留守番電話の音

声が本人だったので話しかけてしまった。なんとなく恥ずかしい。

権はアドレス帳を開いて「射命丸 文」を選ぶがしばらく「うー」と犬のように唸り、苦悩した。金のことで借りをつくれれば未来永劫言われ続ける気もする。意を決して権は電話を掛けた。

コール音が耳元でなる。さつきから横で夢美は祈るようなポーズをしている。

『はい、なんですか権？』

「あ、文」

『はいはい。今少し忙しいんですけど、どうしました』

「じ、実は今カフェにいるんだ」

権はよく考えたら「お金がない」とか「お金貸して」などとこの場で言つて店員に聞きとがめられたらまずいと思ひ直した。

「よ、よかつたら来ないか」

『権のおごりですね！』

「え、ええ」

権は携帯を握つたまま「ニゴオ」と力なく笑う。眼が死んでいる。まずはこの鴉天狗をおびき寄せなければいけない。嘘をついてしまい、胃が少し痛くなってきた。しかし、電話の向こうの少女は残念そうに言う。

『それはとても魅力的な提案ですが……残念ながら私は今お仕事でして……』

「そ、そうか」

『また今度行きましようね。それじゃあ』

ぴつと普通に電話を切られる。本当に普通の会話と普通の電話をこの危機的状況で行ってしまった権はなんともいえない気分になった。どつと疲れた顔で権は夢美に言う。

「自首するか……」

「!？」

聡明な夢美の脳が混乱している。こうなったら店ごと消し飛ばして会計を消滅させればと凄まじいほどに短絡的な答えが脳内に出ている。余談だが青い狸型ロボットも一度世界を消し飛ばそうとしたことがある。個体に圧倒的な武力を詰め込むと危険である。

しかし、世の中には捨てる神もあれば拾うカモ、いや神もいる。

「いらつしやいませー」

とウエイトレスの声が響く。権がなんとなくそちらを見れば、大きな傘を持った青い髪の少女が入って来る。ゆつたりとした淡い水色シャツに可愛いキュロットスカートを穿いた妖怪。

多々良 小傘であつた。ただ手にもつたナスビ色の傘だけが浮いている。楯は眼だけで夢美に合図をした。この白狼天狗と小傘は親しいわけでもないが、クリーニング屋で働いている彼女のことを知っている。

小傘がきよろきよろと店の中を見回しながら店員に席に案内されたところを見計らつて、二人は立ち上がった。そして一人で可愛らしくお品書きを開いている小傘を挟み込むように楯と夢美は座る。

「え？」

ぱちくりと愛らしい仕草をする小傘。現状が理解できていない。楯は眼をそらしながら言う。座つたはいいが夢美も遥かに力が劣る小傘に眼を合わすことができない。

「その、絶対返すから、げ、幻想郷のよしみで」

天下の天狗が頭を下げる。

「お、お金貸してください……」

小傘は呆けた顔のまま、固まっている。

★☆☆★

一方ちゆりは二尾のさんまを焼いていた。

ここはリサイクルショップの裏にある小さな庭である。先ほどパイプ椅子とかで店員と死闘を数秒間演じたが、何か相通ずるものがあつたらしく秦こころと固く握手をし

た。それで仲が良くなったのかどうかは、相手が無表情なので分からないが何故か七輪と炭を貸してくれた。

正確に言うとは貸したというより商品を勝手に使っている。

七輪の上ではちばちちとサンマが焼けている。香ばしいにおいがちゆりの空腹を一層刺激する。ぱたぱたと手で団扇を動かしている。ぱちぱちと鳴る「火の音」がなんとなく心地よい。

「おい、まだか」

こころは近くで小皿とポン酢を用意している。ちゆりは汗が出てきたので腕で額を拭う。丈の短いセーラー服は涼しくていい、となんとなく再認識にした。素で頭の中からご主人様が消えている。

「おう、もう少しだけ」

「魔理沙のようなしやべりかた」

「まりさ？ あーあのうふふとか笑うやつだな。ん？ 知ってるの？」

「？ 笑わない」

「？ あーおんなじ名前のやつがいるんだなあ」

ちゆりとこころは顔を見合わせた。正直どうでもいいので話を変えた。昔のことはよい。

さんまの焦げの方が重要である。こころは安い日本酒を引つ張り出してきたよう
傍らに置いている。さんまを肴に「昼間から」飲もうとしているのかもしれない。

ちゆりは団扇を動かしている。

「そろそろかな」

正直初めてサンマなど焼いた。美味しそうになるまでできとうに焼いただけな
が、ちゆりは中々うまく焼けたと思つている。こころから皿を受け取りつつ、菜箸で七
輪の上でサンマを転がして端に追いやる。そして端っこから皿へ落とす。かなりでき
とうであるが、ちゆりの性格を表している。

皿のサンマを持ってこころとちゆりは縁側に座つた。こころもちゆりも靴を脱げば
裸足である。こころがポン酢をとくとくとくとくと、とサンマに掛ける。きゅつとしまつた味
を想像してこころの口から涎が出る。

「おっと、いけない、いけない」

ポケットから出したハンカチで拭くこころ。ちゆりもてきとうにポン酢を掛ける。
それから二人ともぱんと手を合わせる。

「いただきます」

「いったーきあーす」

ちゆりが何と言ったのかこころにはよくわからなかった。だが、もぐもぐと橋でサンマの身を取り、ポン酢のかかった其処を食べる。口に広がる少し酸っぱい味、なんとなく癖になる。こころはコップも用意してちゆりに持たせる。

「おう、つぱこ」

こころは何か言いながらちゆりに酒を注ぐ。清酒は幻想郷にもあるが、外の世界ではいろんな種類がある。冷蔵庫で冷やしておいた冷酒でコップを満たしていく。ちゆりは軽く礼を言つて、こころに注ぎ返す。

「こころはコップを両手で持つて無表情でちゆりを見ている。

「お前……こころニコツとしたほうが可愛いぜ」

「ふむ」

ふむ、といつてもこころとしては表情は動かない。しかし、最近とある技術を見つけた。彼女は縁側にコップを置いて両手を頬に充てる。そこから口元を上げるように頬を上げる。笑っているようには見えない。

「ふ。ふふ、あはは」

それを見てからつと笑うちゆり。彼女の笑い声は聞いているだけで楽しくなるくらいに明るい。こころも口だけで「ふ」と息を吐く。二人はカンとコップを合わせて乾杯する。

ちゆりはにこにここところを見ながら、コップを唇に付けようとしたり。

「ちゆり！ 見つけたわよっ！」

「ぶー！ げえ。ご主人様」

笑い声を聞きつけた赤い髪の少女が庭の塀から見えている。外からジャンプしているらしく、見えたと思つたら消えるを繰り返している。飛べばいいのだが、それをする目立つと思つているのだろう。

ちゆりはコップをそつと縁側に置くと、ぱつと庭に飛び出した。少なくともさつきご主人様にやったことは覚えていいる。逃げなくてはめんどくさいかつ痛い目に会いそうである。

「も、もつたいないぜ」

サンマと酒を見て残念そうにするちゆり。そして何が起こっているかは知らないが、こころは任せろと親指を立てている。食べてやるということだろう。そう言う事ではないのだが、ちゆりも気分分で親指をたててウインク。

「また会おうぜ」

いつもどおり変な喋り方をしながら、庭を回つて逃げ出した。

残つたこころはお酒を飲む。ふううとホクホクしながら息を吐いた。

おまけ フランちゃんGO

吸血鬼とはかつて西洋諸国で恐れられた妖怪である。

無数の使い魔を使役し、

不死身の肉体を持ち、

人々の生き血をすする、理外の化け物。

その吸血鬼の中でも「破壊」の力を持つ少女が居る。これは彼女の恐怖が伝染していく物語である。

★☆☆★

人がダメになるソファアという物がある。とある白狼天狗が好んで使い、良く自宅で駄目な天狗になっているが大きなクッションでも代用することができる。

そのクッションは大きい。そして黄色い。ネズミの頭をかたどった奇妙なものだ。つぶらな瞳とほつぺたに電気袋と言われるまん丸の模様が描かれたふかふかの「ピカチュウクッション」であった。

フランドール・スカーレットはそれに背中を預けながら、寝そべったまま4DSでポケモンに興じていた。傍らには口の開いたポケモンのスナック菓子の包みと半分飲み

かけの「ウー」のオレンジジュースのベッドボトル。

ハーフパンツで足を組み、細い足を組んだままだらしなく寝そべるフラン。吸血鬼は現代でここまで駄目になったと標本として使えそうなほどリラククスしている。たまに4DSを持ったまま、クツションの上でごろごろする。

ここは吸血鬼の巣窟である。要するにマンションの一室、リビングである。部屋にはフラン以外はいない。他は仕事に出ているか、私用で居ない。

『明日は晴れるでしょう』

誰も見ていないテレビが寂しく天気予報を流している。フランはそれをちらりと見て、またゲームに眼を戻す。最近氷の少女やその「妹分」とあそびに出ることもあるが、一人の時間も彼女は多く持っている。数百年引きこもっていた実績があるのだ。

ちなみに氷の少女の「妹分」とはフランから見た主観であり。その本人は全く認めていない。むしろ自分の方が精神的に上と思ひ、いろいろと苦労している。

フランはしばらくぴこぴこことゲームをしていたが、テレビの音が煩わしくなったのだろう。のそのそと起きて、テレビのリモコンを探す。目的は消すことである。

「あれ、ない……」

リモコンがない。どうでもいい時は普通にあるが、必要な時は大抵ない。彼女は気が付いていないがクツションの下にある。「りもこんかくし」という現代の妖怪の一種と

言われるほどありふれた光景である。

仕方なくフランは立ち上がってテレビに近づく。主電源を直に消そうというのだろう。だが、彼女がそのモニターの前に立ったときこう、映像が流れていた。

『では次のニュースです。欧米ではスマートフォンを通してポケモンが出現するアプリが人気を博しています』

がつ、とテレビの枠を掴むフラン。眼が開かれている。

「な、何ですって」

小さな肩を震わせる。テレビを掴むために中腰になっているから、後ろから見れば可愛くお尻を突き出しているようにも見える。しかし、フランはそんなことを気にする余裕などない。

画面に映るのはスマートフォンを通して、道端でポケモンをゲットしている人々の映像である。シャカイモンダイだとか、アルキスマホだとか意味の分からないことをキヤスターが喋るが、フランにはどうでもいい。

「ほっく」

ぼつりと言うフラン。片手に持った4DSが床に落ちそうになったのであわてて、足の甲で受け止める。痛い。壊さないようにとつさの行動だったが、フランはうづくまり足を抑えた。

だがしかし、そんなことを気にする余裕はない。

「ほしい、ほしいー!」

きらきらと光るフランの瞳。一人ではしゃぐ吸血の少女。彼女の頭の中にはポケモンをゲットするために街を歩く自分が居る。それを見て羨ましがる氷の少女のイメー
ジまで出来上がっている。

彼女はどたどたと家の電話まで走った。

★☆☆

「はあ……? ポケモンのあぶりですか……?」

路地裏でメイド服を着た赤毛の彼女。紅美鈴という麗しい女性が首を傾げた。バイト中に電話がかかってきたので外に出たのだ。狭い路地で壁に寄りかかりながら話す。彼女はスマートフォンを耳に当て、片足をちよつと上げて壁につける。そんな気取っているような恰好をしている。すらりとした太腿がスカートの間から見えている。別段本人は意識的にやっているわけではない。

電話の相手はフランドール・スカーレット。可愛い「ご主人様」である。眼に入れてもなんとか耐え抜いて見せるだろう。美鈴はくすりと笑う。

『今ニュースでやってたのよ! すまーとふおんのあぶりとか言ってたわ。めーりん、あれが欲しいわ!』

「もう、妹様。この前ポケモンのオメガ何とかを買ったばかりじゃないですか。それにまた新作がでるらしいじゃないですか」

『う……まあ。うん』

「仕方ありませんね……」

ふうーと息を吐く美鈴だが、表情がまんざらでもない。じやれつかれるのは嫌いではない。彼女はぼんと胸を叩く。その場にはいない吸血鬼の少女の為に。

「任せてください妹様。なんとかかしてみます」

『……………!』

フランは何も言っていないが、何故か美鈴には電話の向こうの彼女が笑顔になっっている気がした。

「楽しみにしてくださ妹様!」

その一言が今日を憂いの一日にするとは美鈴は思っていなかった。電話の向こうから「うん」と元気よく聞こえてきたのを笑顔で聞いている彼女には、想像もできないことであつた。

★☆☆★

さて、アプリとはなんぞや。美鈴はそこから解を始めなければならぬ。一応商品名くらいはフランも覚えていたらしく「ポケモンGO」とかいうらしい。頭にアルファベツ

トが浮かばないのか哀れな想像ではある。まるでネットスラングのようだ。

美鈴はスマホを持ってはいるが格安スマホであり。基本的に通話にしか使わない。

しかし、彼女には。いや正確には彼女の所属する「紅魔館」には頼りになる少女が居る。たいていの面倒ごとは彼女がなんとかヒントをくれる気がする、美鈴は仕事が終わってから、ジーンズとノースリーブの白シャツというラフな格好に着替えて、とあるカフェへ足を向けた。

そのカフェ、客がいるのかいないのか分からない。いるときはいるが、いないときはいない。経営が成り立っているのかよくわからない。オーナーは半分趣味で経営しているらしくほとんどいない。そのせいで単なるバイトである美鈴の会いに来た少女が店主のようになっている。

美鈴がカフェの入り口を開けると「カランカラン」と鈴の音がお出迎えしてくれる。ほのかコーヒーの香りが鼻をくすぐる。シックな照明に照らされたカウンター席には誰もいない。美鈴が其処に座ると目の前に「目的の少女」が居た。

「珍しいわね。ここに来るなんて」

短い銀髪が照明でにぶく光る。深い藍色のエプロン姿なメイド長。

十六夜咲夜は美鈴を見てそういった。

「いや、実は咲夜さんに頼みごとがありました」

へへ、とどこことなく卑屈な笑いをしながら美鈴は言った。何でかこの遥かに年下の少女に頭が上がらない。

「ふーん」

と咲夜もお手拭きを投げて渡す。それを美鈴が「どうも」と掴む。この二人だけの動作だろう。場合によってはクレームになりかねないが、瀟洒なメイドは相手を選ぶ。

美鈴は手を拭きつつ、簡単にコーヒートを注文する。別に飲みたいわけでもないのだが、一応頼んでいかないと咲夜はあまりいい顔はしない。

「咲夜さん。そこで早速なんですけど、ポケモンゴつて知ってますか？」

「ポケモン……ゴ? ああ、また妹様のことね」

「そうなんですよー。テレビを見て欲しくなったらしくて、私も大変で」

「……へえ」

へえ、という言葉が冷たい。紅い瞳で咲夜は美鈴を見抜いている。大変などとほざいてはいるが、むしろ自分から安請け合ひしたのだろう。そう咲夜は推測、いや確信した。美鈴の満更でなさそうな顔が既に全てを語っている。

咲夜は手元でコーヒーカーップなどを準備しながら、聞く。かちやかちやと音が静かに響く。「ポケモンⅡ妹様」と見抜いた瞳が用意したコーヒータケトルに映る。

「それで私に何をさせたいのかしら？」

「実は妹様が欲しがられているのがスマホフォのあぶりとかいうらしくて……それをどうやって手に入れればいいのか、と相談を……」

「……なんでそれを私に相談するのかしら？」

「いや、咲夜さんなら知っているかなと」

「何でも屋でもないんだけど……まあいいわ。そう難しいことじゃないし、ただダウンロードすればいいのね？」

「打雲老弩？」

「……とりあえずスマホを貸しなさい」

きよとんとした顔の美鈴から咲夜はスマホを預かる。それから手慣れた手つきで右手の親指だけで操作する。美鈴の場合「人差し指」で操作するから天と地と言っている。何をしているかは美鈴もよくわからないが、多少安心している。咲夜に任せれば何とかなる気がする。

「ん？」

「どうしました？」

咲夜は眉間にしわを寄せて難しそうに画面を見ている。少し困惑しているようにも見えないことはない。彼女はしばらく操作して、美鈴に向き直る。

「確かポケモンゴとかいうアプリと言ったわね」

「はい」

「そんなものなかったのだけど、似ている名前の物はあったわ。でもまだこの国では配信されていないみたいね。カミングスーンって書いてあるわ」

「へ？ それはどういうことですか？」

「……簡単に言えば入手不可能という事ね」

美鈴の口が、開く。何を言われているのか分からないというような呆けた顔。頭に浮かぶのはフランドールの姿。そして「入手不可能」の言葉が耳に響く。

「ほんとカウンターを叩いて美鈴は立ち上がった。彼女はカウンター越しに咲夜のエプロンを掴んだ。」

「な、何でですか!! 咲夜さん!!」

「いや、離して。そう言われても私にどうすることもできるわけでもないわ」

「そ、そこをなんとかしてくださいよ!」

「私は猫型ロボットじゃないのよ」

「意味わかんないこと言わないで下さいよ! こっちは真剣なのよ!!」

「……………」

サブカルチャーを冗談として使う時、相手も知っていないと空ぶる。しかも恥ずかしい。咲夜はそれを思い知ったが、美鈴の手を払い、代わりに腕を組んで堂々と立つ。

「安請け合いましたあなたが悪いわ。とにかくまた、妹様が不機嫌にならない様に謝る事ね」

「だって、でも」

「でもじゃないわ」

「た、楽しみにしててくださいって言ってしまったんですよ?」

「……………別に私もいじわるで言っているわけではないわ。手に入れることのできないものはどうしようもないでしょう?」

★☆☆★

「はあ?……………ポケモン?」

レミリア・スカーレットは心底呆れた顔をしながら電話をしている。耳に当てたスマートフォンから聞こえてくるのは、仕事に真面目とはあまり言えない門番の声。彼女はメイドの

少女に突き離されてしまい、思い余って紅魔館のトップに相談を持ち掛けている。

世の中ではこういう行為を「乱心」と呼べる。

ここはとある高級マンションの踊り場。ネットオークションで稼ぐ人形遣いの住む場所である。彼女はそこでとある仕事をしているのだ。しかし、今回は関係がない。

レミリアは頭に帽子を被らずにブラウスと肩からまわしているサスペンダーが伸びて、支えられている黒の半ズボン。それにミニネクタイ。動きやすい恰好である。遠くから見れば少年のようにも見える。

『そうなんですよ……ど、どうしようか迷ってまして』

「……美鈴。私は猫型ロボットじゃないのよ?」

レミリアからすればそんなことを相談されても困るだけである。しかも彼女はこう考えている。まさか自分が自分の従者と同じことを言っているとは露とも知らない。

(アプリとは確かアレね。スマホにいれる。そんな程度のこと自分でやってほしいわね。美鈴にもフランにも困った物だわ)

聡明な吸血鬼の彼女は直ぐにそう見抜いた。現代で頭が良くてもこんなものなのかもしれない。

めんどろだどレミリアは思うが、反面これを解決しなければフランが駄々をこねる可能性があるともわかっている。少し前に肚黒い天狗をまきこんだ小さな事件のようなことになつてもやはりめんどくさい。

深いため息をつき、彼女は唇を開く。

「いい? 美鈴」

『は、はい!』

「今回はこの私が直々に解決してあげるわ。今後、このような小事で私の手を煩わせないで欲しいわ。……あなたはフランを甘やかし過ぎよ」

『あ、ありがとうございます。す、すみません』

情けない声に向こう側から聞こえてくる。レミリアは思わず小さく笑ってしまい、牙がきらりと見えた。基本的に部下から上司に頼みごとをする場合、言葉足らずであり説明不足に陥ってしまう例が往々にしてある。今回はその典型であろう。

レミリアが聞いたのはアプリの名前とフランが頼んでいることだけだった。

★☆☆

とあるカフェにレミリアがやってきた。まだ昼の間である。普段なら朝方にふらふらと来て、新聞と紅茶を楽しんでからまた外に行く。今回は目的がある。

スマートフォンでアプリをなんたら、とレミリアはおぼろげな理解しかない。やればその聡明な頭脳は即座に理解するだろうが、今までそれを使う場面が無かった。だから彼女の従順な「従者」にそれを代行させようとしているのだ。要するに頼りに来た。

レミリアはカウンタ―席に座り、足を組む。そして肘をつき、顎を載せる。気取ったポーズで店員に声を掛ける。

「咲夜」

「はい。何になさいませしょうか。お嬢様」

先ほどとは打って変わって変わっての丁寧な物腰と柔らかな言葉。軽く会釈しながら、銀のお盆を胸にあてて、レミリアの傍に立つ咲夜。その姿がなんとも似合っている。

レミリアは眼をかるく閉じたまま、口を開く。

「紅茶をいれてちょうだい」

「かしこまりました」

また、小さく会釈をして離れる咲夜。しばらくしてこぼこぼとお湯を沸かす音が聞こえてくる。

「咲夜。頼みたいことがあるのだけど」

「はい、何なりとお嬢様」

手を止めずに澄んだ発音で咲夜は応える。レミリアはこのメイドの声が少し好きだ。

「フランのことよ」

「妹様の、ことですか？」

咲夜は嫌な予感したが顔には出さない。もちろんレミリアは知らない。

「そうよ、困ったことにまたゲームが欲しいと言いつ出したのよ。美鈴に頼んでいるみたいだけど」

「美鈴、ですか」

「そうよ。それでほけもんご、とかいうアプリを手に入れて欲しいのだけど。いいかし

ら」

「……………」

いいかしら、と言われて咲夜はどう返していいか迷った。レミリアが美鈴から相談されたのか、フラン自身から言われたのかまでは分からないが、このメイドは既に答えを知っている。入手など不可能なのである

「お嬢様」

「何？ 何か問題があるのかしら」

「その。申し上げにくいことなのですが」

本当に言いにくそうに手短かに、そして簡潔に咲夜は先ほどあったことを伝えた。美鈴が来たことも相談されたこともレミリアに伝えた。この吸血鬼の少女は黙って聞き、涼しそうな顔を崩すことはなかった。

咲夜がより香りのする紅茶をいれたカップを彼女の前に置く。それを取ろうとしてみても、レミリアは音を立てた。普段ならそうはならないだろう。手が震えている。

「なるほどね。既にあなたには相談済みということね」

「恐れ入りますわ」

「入手不可能……はあ、またフランが不機嫌になって飛び出ていかなければいいけれど」

「その時はまたあの天狗を付けますか？ 前のように」

「ああ、アレね」

アレ、呼ばわりされるあれ。

レミリアはカップを持ち上げて、小さな唇につける。今回は良い味がする。前はドクダミで作った紅茶を飲まされた。吸血鬼だからと言ってなんでも飲ませていいわけではないだろう。彼女は続ける。

「それでもいいのだけど、フランがポケモンなんかでまた駄々をこねているなんてすれば沽券に……沽券にかかわるのかしら？ ……仕方ないわね」

「どうされるのですか？」

「電話するのよ」

レミリアは半ズボンのポケットに入れているスマホを取り出してどこかに電話をかけ始める。耳にスマホを当てて、何故かそのクリツとした目で「電話を見ながら」、首を少し傾けている。癖だろう。

『はい』

気だるそうな声がある。咲夜にはもちろん誰か分からない。しかし、知らない魔法使いでは決していない。

「パチエ？ 今いいかしら」

『いいわよ。なにかしら』

「実は……」

咲夜はこのあたりで相手がだれか完璧に分かった。だから特に詮索することも無い、身内である。彼女はとりあえず、店の作業にもどった。レミリアは自分の親友に良い知恵を借りるつもりなのだろう。

カウンタ―からは事情を説明している声が聞こえる。しばらくするとレミリアも携帯を切り、優雅に紅茶を飲み始めている。何かいい案があったのだろうと咲夜はその顔を見て思った。

お尻が震える。咲夜は眼をぼちくりさせて、後ろポケットを見た。携帯が鳴っている。嫌な予感しかしない。着信を確認すれば「パチュリー様」である。二秒考えて、咲夜はため息とともに電話に出た。

「はい、どうされました？」

『ああ、今いいかしら』

「はい」

『ポケモンゴつて知ってるかしら？』

どうやら紅魔館という物は、どこから入っても最終的にメイドに行きつくらしい。おそらくレミリアからの電話を貰ったパチュリーもそのまま十六夜　咲夜に丸投げしようとしているのだろう。美鈴もレミリアも思考回路は同一である。

つまり美鈴に相談しようが、レミアに相談しようが、パチュリーに相談しようがメイドネットワークがつかうてしまう。

咲夜は誰もいないところでもにっこり笑う。

「ええ、知っていますわ。ポケモンということは妹様のことですか？」

『……わかつているなら話が早いわ。さっきレミイから電話があつたのよ』

「えい!? そうなのですか？」

『なんで私にそんなことを言うのか分からないのだけど、貴女に何とかしてほしいのだけ』

「そうですねえ。今日は御夕飯の買い物などがありますので……」

『……なんでちよつと怒っているのよ』

「え? そんな事全然ありませんわ」

咲夜はニコニコしながら電話をしている。しかし、パチュリーは何かを感じ取っているらしい。しかし、大魔女として威厳たつぷりに言う。

『そう……怒っていないならいいわ。咲夜。レミイが言っていた物は手に入らないようなの。放置していたらまたトラブルになるかもしれない。だったら代わりに何か買って与えれば取り合えず落ち着く』

「なるほど、では何を妹様にご準備しましょうか?」

『そこは咲夜に任せるわ』

「ま、まかせるとおっしゃられましたも」

『私は……電気ネズミには全く興味がないの』

「私も興味があるわけではないですし。あと御夕飯の……」

『買物ついででいいわ』

「………はあ。かしこまりました」

パチュリーはそれを聞くと「頼んだわよ」と一声残して電話を切る。どこで何をしているのかと言えはおそらく自宅で引きこもっているのだ。よくアマゾンゾからパチュリー宛ての代引きが来るので部屋で何をしているか少し咲夜には想像できる。

咲夜は少し視線を上げる。

「………ぼけもん………はあ」

何を買えばいいのかわからない。一応「妹様」が欲しがっていたのはポケモンを捕まえるゲームだとは知っている。咲夜は少し考えて、ぱんと両手を合わせる。思いついたのかぱちつと眼を開く。

そうだ、と顔に書いてある。彼女の思い浮かべているのは行きつけのスーパーの衣類コーナーで見た「あれ」である。

それから一人でくすくすと笑う。いたずらっぽい顔が似合う少女である。咲夜はし

ばらくして携帯を取り出して、最初に相談してきた門番へ連絡した。彼女はこう伝えた。

「美鈴？ 渡したいものがあるから一時間……いえ、二時間後にカフェに来て」

★☆☆

フランは一人でごろごろしている。彼女は先ほど手に入れたついさつきテレビの情報で頭を抱えていた。美鈴に頼んだことである。どうやら「あれ」はまだ手に入れることができないらしい。とすれば美鈴に少し悪いことをしたような気もする。

「うー」

ピカチュウのぬいぐるみの首のあたりを抱きしめてうめく吸血鬼。もふもふのぬいぐるみの毛が顔に当たる。顎をそれにぐりぐりと押し付けている。特に意味はない。

彼女は単に美鈴の帰りを待っているだけである。まさか紅魔館を巻き込んだ話になっっているとは夢にも思わない。

そんな風にながら既に30分。彼女の周りには開かれたまま放置された4DSやお菓子、それにタオルケットなどがある。中々満喫した恰好である。当初、この世界に来たときは何もせずうづくまっていたことを考えれば大きな「進歩？」であろう。

がちや、と遠くで音がする。玄関の開く音である。その音にフランはぱつと飛び起きる。まるで本当に誰かの帰りを待つ子供のようであった。

「ただいま帰りました」

聞こえてくる声は美鈴の物である。フランはもう一度「うー」とうめくと立ち上がる。ピカチュウのぬいぐるみを抱いたまま。凜々しい顔つきなのが、ミスマツチで愛らしい。彼女は部屋のドアノブを開けようとして、ぬいぐるみが邪魔なので投げた。

がちやりと開ければ、外からむわつとした空気。フランの部屋は常に冷房か除湿がさ
れているのだ。

「めいりん」

「……あ、妹様」

ひよこり顔を出してフランは電気を付けていない廊下を伺う。美鈴の声はするが姿は見えない。フランはむぐ、と小さく口を動かすが声がでない。どういえばいいのだろうか。謝るべきなのだろうか。

しかし、その前に暗闇から声がある。美鈴の声である。

「申し訳ありません妹様……じ、実は頼まれていた物はまだ発売していませんでした……手に入れることができませんでした」

あ、とフランは思った。美鈴の言葉に小さく首を振る彼女。いいのだ。そう伝えようとした。だが、美鈴は続ける。

「しかし、妹様。代わりにこれを」

ぱちつと電気を付ける音がする。廊下の照明が一斉につき、そこに立っている美鈴の姿が鮮やかに映し出された。

黄色いフードに突き出た二つの「耳」。体を包む黄色の布にぎざぎざの尻尾。それを着て真っ赤な顔をした赤毛の女性。紅美鈴がそこに、ピカチュウを模した全身パジャマを着て立っていた。

フランは眼を開けて。口を開けて。ふらふらと廊下から出てくる。それから徐々に口元が開いて、嬉しそうな顔をする。

「め、美鈴。そ、それなに!？」

「え、えつと。あの咲夜さんがあなたがポケモンになればいいということ……。渡されました」

くるりと回る美鈴の尻尾が揺れて、背中に茶色の2本線の模様。正直言えば恥ずかしい。フランの頭からゲームのことを一瞬で忘れさせる程度には印象的な姿。

そして、咲夜はこれを渡すときに美鈴に一言秘策を授けた。この姿であれば鳴かなければならない。美鈴はフランに向き直った。

「ぴ、ぴつかあ……」

顔から火が出そうなほど恥ずかしい。何故か両手でピースしている。フランはそれを聞いて、ぷつと嘔き出してからころころと笑った。お腹を押さえて心底楽しそうに笑

う。

「ふふふ、あはは、ああははは！」

涙が出そうなほど笑うフラン。彼女は目元を腕で拭つて、美鈴に近づく。

「な、なんでこうなるの？ ふふ、あはは」

「さ、咲夜さんがあ」

「いいの。美鈴」

優しく微笑みかけるフラン。綺麗に整った顔立ちな彼女、怪しく光る紅い瞳。人形の様だと美鈴は思った。フランは美鈴の服を引っ張りながら、美鈴を見上げる。

「これを買ってくれたなら少しくらい我慢するわ」

「……え。これ妹様のサイズにはあわないとおもい、ますけど」

「……え？」

「え？」

フランの顔から途端に表情が消える。彼女の頬が僅かに膨らんだ。よく見ないとわかりかねるくらいに少しだけである。彼女はそれから踵を返す。ぺたぺたと廊下を歩き、部屋に入つてはたとドアを締める。それからガチャリと鍵まで閉めた。

一人残された美鈴はしばらく呆然と佇んでから、現実を理解する。慌ててドアに駆け寄り、縋りつくようにして声を掛ける。

「い、妹様あ！」

中から返事がない。ドアに張り付きながら美鈴が動くたびに、尻尾が揺れている。

33話

いつかの日。

幻想郷での朝は早かった。竹林に風が吹く。からからと青い竹が鳴り、さあさあと笹が唄う。清涼な朝。

魂魄妖夢は一人、刀を構えている。目の前には太い竹がある。

腰を沈め、鞘に収まった一刀の柄を優しく握る。彼女の瞳は揺らがない。凜とした目元、わずかに動く唇。着飾った美しさではなく、静かにそこにある彼女。ほんのわずかに前へ足をすり出す。じやりと砂が鳴る。腰を僅かに沈める。

風が吹く。白刃が煌めき、音が遅れていく。

妖夢は凄まじい速さで抜き、右手に握った剣を一振り、二振り。感触を確かめるように動かす。彼女がくるりと刀を回して、鞘にするりと納める。

やつとのことで、妖夢の前にある竹に一筋の線浮かんだ。両断されているはずのそれは動かない。彼女の美しい一閃は狂いなく、斬る事だけを為したのだろう。両断した竹がそのまま載っているのだ。

妖夢は踵を返す。笹の音を背に、ご主人様の為だけのこを取りに行かなければいけな

い。

このように魂魄妖夢は修行を怠ることはない。彼女は幼少のころから祖父より刀劍の術を叩きこまれ、その精神性を見様見真似でなんとなく曲解しながら取得していた。霊夢達と初めて会った時はとりあえず切りかかってきたこともあり、さらには酒の席で普通に切りかかったりもしている。

しかし、一日一日を修行に費やす彼女は幻想郷の中でも類まれな努力家と言つていいだろう。それも庭師としての仕事をこなしながらである。そんな魅力的な彼女は現代に来てから変な方向に覚醒してしまった。それも腹の黒い天狗のせいでもある。

そのことを深い恨みと共に毎日劍を研ぎながら、アイドル活動に勤しむ毎日。昨日は温泉に連れていかれてのロケ。そしてとんぼ返りしてでの仕事。流石に妖夢も精神的にくるものがあつたらしく、思い立って海を見に来たら地獄を見ることになった。

まさか天狗と同じように黒い河童が海に生息しているとは思わなかっただろう。それも蟻地獄に吸い込まれる蟻のごとく妖夢は吸い込まれてしまい、水着にさせられてのビーチバレーに参加させられることになった。もうなにがなにやら分からないだろう。

それでも――

青い空にボールが舞う。ネットの向こうには自信を滲ませて笑うお空が居る。砂を

蹴り、身体を捻りながら飛んだ彼女。落ちてくるボールに合わせて、右手を振る。スパイク。ボールが音を立てて、にとり達のコートへ跳ね返される。

スピードを乗せてボールが宙を奔る。良い攻撃である。

砂を蹴らず、一足で追いつく妖夢。リボンが揺れている。それでもボールは足もとに砂へ突き刺さろうとしている。妖夢は流れるように腰を落とし、身体を傾ける。一瞬片足で立ち、右手を振る。彼女は体勢を崩しながらのレシーブ。体幹がぶれないことが彼女の強さの証である。

無力化されたボールが浮かぶ。

「わたしがとるよっ」

走る河童。にとりな青いポニーテールの彼女。妖夢が打ったボールはネット際に落ちてくる。絶対球である。

「通しませんよっ!」

しかし、大柄な地獄鳥も防御の姿勢。単純な背比べで言えばお空にとりでは前者に分がある。つまりは普通にスパイクするだけであればにとりのボールは止められてしまっただろう。

白い歯を見せて不敵に笑うにとり。胸を張り、ジャンプする彼女。お空も合わせて両手を広げてのジャンプ。

にとりはばあんと目の前に「ネット」めがけてスパイクする。全力ではない。ボールはネットの一番上の部分に少しだけ引つかかる。急激に勢いを失くして、お空側のコートにぼとりと落ちる。こすい手である。

「わ、わ、ちよつと」

空中で驚くお空。顔に「慌てている」と書いているような表情の彼女は力なくおちてしまったボールを追って、空中で足をバタバタさせてしまう。もちろん着地に失敗して落ちた。

「べっぺ」

砂まみれになったお空のよそにぴいと笛が鳴る。得点の合図である。審判のおかっぱが右手を上げている。そして一気に周りの観客が声を上げる。拍手と歓声の入り混じった、熱のある空間。それがビーチバレーのコートである。

妖夢は汗を拭いながら、息を整えていた。いろんな不本意なことが重なって参加したビーチバレーだったが、歓声を聞いて小さくガッツポーズをする。肌を流れる玉の様な汗と少ししつとりした髪、嬉しそうな顔。刀を持っていないだけで普通の少女として生きてくことができるのだ。

そこににとりがにやにやしなながら、そして片手を掲げながらやつて来る。妖夢はちよつとむつとしたがぱんとその手を弾く。ハイタッチである。

「……出てあげるのはこの試合だけですから」

「はいはい。勝ったら天狗の写真あげるからさ」

ふんと鼻を鳴らす妖夢。同じように汗を焔めかせるにとりはまだにやにやしている。

(とりあえず決まってよかつたね。さっきの)

スパイクをネットの上部に当てる小技を成功させ内心ほつとしているのだが、そんなことはおくびにも出さない。彼女はちらりとコートの外を見る。

紫の水着を着た、青い髪の美少女が板を掲げている。もちろん雲居一輪である。実況しろとにとりが言ったのに履行しない彼女を、仕方なく得点板として使っているのだ。会場中の視線が集まるため、笑っているような泣いてような悔しそうな妙な表情を一輪はしている。それにビキニで両手を上げると腋が見える。

彼女の持ち上げている板には「え 2— 8 に」と書かれている。「え」は映姫又は閻魔のそれで「に」は言うまでもないだろう。

(とりあえずリードはできてるけどね。あいつも何もせずには終わるとは思えないなあ)

一輪のことは一顧だにせず、にとりは閻魔を見る。なにやらお空に説教をしているらしい。緑の髪の彼女。妖夢がゲームに参加してから数分の攻防があった。基本的に前衛にいるのはお空でその穴を埋める形で前後に出てくる映姫というバランス型の動き

をしている。

もちろんにとりのようなトリックスターには操りやすい。動きがなんとなくわかるからだ。

それに妖夢の身のこなしは尋常ではない。一回戦でこいしや寅丸が見せたような異常な運動ではなく、無駄をそぎ落とした理のある動きである。地味ではあるが、武術で鍛えた勘と動きは攻撃よりは防御に有効に作用している。

★★★

サーブは魂魄妖夢である。常に会場のどこからか「かわいいー」などとアイドルに対する声が聞こえてくる状況。

それでもこの少女は集中していた。吐く息のリズムは変わらない。手に載せたボールをしゅつと真上に投げる。すうつと上がった軌道。それをなぞるように落ちてくるボール。

妖夢はそれを撃つ。

放物線を描いて閻魔のコートへ放たれたサーブ。早さはよりも、おそらく落ちればコートの上に着弾するであろう正確さが恐ろしさである。アウトと見間違えるようなぎりぎりを襲うからだ。事実「ふふん。アウトですね」と歩いて避けた地獄鳥が二度ほど点を取られた。にとりの真似がしたかったらしい。

受けるのは映姫である。彼女にごまかしは通用しない。腰を落として、両手を組み受ける。

コートの上を飛ぶボールは、お空の打ちやすい場所へ向かう。さつきからずっと映姫はお空のサポートに徹している。

「いきましたよ」

映姫の声は澄んでいる。歓声に包まれた場所でも聞きほれるてしまうような、美しい声。命を裁く閻魔として言葉を伝えきれないようにだろう。しかし、お空は聞いていない。

「よーし。今度こそいつちやうよー」

彼女は唇を嘗める。太腿にさつきこけた時の砂が付いたままだ。

興奮したり、周りが見えなくなるとお空は敬語が崩れていく。映姫は眉を寄せて、相手のコートを確認する。妖夢が前に来ている。にとりは後ろだ。閻魔は冷静に状況を頭に入れる。逆に闘志に燃えるお空は飛ぶ。

「メガあフレアアア!!」

さつきよりも気合を込めて、全身全霊の力でスパイクを撃ちだす。体をいっぱい使ったその動き、元気な姿は観客の一部を魅了してしまう。少年野球の子供達はお空の口上を真似し始めている。

だが、現実には非情である。得点というかにとりを狙って打ち出されたそれは大きくはずれ、観客席に突き刺さってしまふ。どよめく会場でお空は頭を掻きながら「すみません……」とちよつと申し訳なきさそうにしている。

ともかくこれにてとり達に点が入ることになった。実は自滅点がかなり多い。それも閻魔チームの映姫よりもお空に関連している。

「次、こそは。やってやるわ」

お空は元氣よくそういった。この場合は得点を取るというよりは「にとり」をとるということだろうか。他の球技にも言えることだが、力の有り余った子でかつ初心者はどこでもホームランをしてしまうことがある。高笑いするお空はその典型だと言えるだろう。

それだからこそ危うさを映姫は感じている。彼女の淀みの無い瞳が捕えているのは「敵」であるにとり達だけではない。いや、最初から彼女の関心ごとはお空一人にある。元々元氣のかけらもなかった彼女が今は高笑いしているが、負ければどうなるかわからない。

太陽の様な熱さを持つ今、そして冷え切った昨日までの彼女。今は狭間であるからこそ、映姫は静かに目を閉じて思索する。

(……私も人の子と関わりすぎましたね)

此方に来てあまりに幼い情熱や人に関わりを持ち過ぎたと映姫は思う。いつの間にか少年野球の監督の様なことまでしてしまっている。彼女は手で口元を隠して、誰にもみせないように、

くすり、とした。

しかし、楽しいものは仕方のないことであるかもしれない。四季映姫は河童などよりは永く子供達を見守ってきたのだ。何故なら彼女は、お地蔵さまのだから。だからこそ河童が人の遊びで負けることができないうのであれば、映姫も負けるわけにはいかない。いや、勝たなくてもいい。そこに拘りはない。

「あつはっはっはー」

何がおかしいのか笑っているお空を見る。

お地蔵さまのような優しい表情、その半分を手のひらで隠した四季映姫。こちらに來なければ厳格な閻魔のままだったのだろうが、今は少し昔に戻る気になっている。ただし「悪いこと」をしている河城にとりも叱ってやる気になっている。

裁くのではなく、叱るのである。もちろん慈悲はあるが、容赦なく。

★☆☆

博麗霊夢は刀を装備していた。

海の家の前で佇み、水玉のトップスにショートパンツを穿いたその腰に二振りの刀。

もちろん魂魄妖夢の持ち物である。さつき河童が来て預かるように頼まれたのでこうして持っている。刀を差したのは初めての体験であるが。

「こんな重いものずつとつけてるなんて、あいつ馬鹿じゃないの?」

毒舌を吐きながらも律儀に預かっている霊夢。横ではベンチに座って観戦している村紗水蜜と「せんずだ。くえ」と言いながら寝ころんでいるお燐の口に枝豆を詰め込んでいる古明地こいし。一応お燐の傍に小さな傘が立てかけられている。

「でも似合っていますよ霊夢さん」

冗談っぽく水蜜がそういうと、霊夢はじろつと見てから何も言わずに試合に眼を戻す。くすくすとにやにやと水蜜はしながら続ける。

「でもまあ、律儀に預かってあげている霊夢さんは友達思いで良い子ですね」

「……あいつ、友達じゃないんだけど……! へ、変なこと言うんじゃないわよ!」

「そうですかね。私にはそうは見えませんが。いやあ、お姉さんは霊夢さんがちゃんと友達がいて安心ですわあ」

「あんだ、斬るわよ」

「こわいっ」

おどけながら降参のポーズをする水蜜。なんとなく無意識におどけて、同じポーズをするこいし。霊夢は苦虫を噛み潰したような顔をしている。その足元で枝豆を口から

出して倒れている猫が一匹。安らかな顔している。しかし、霊夢の視界には入らない。水蜜はこいしから一つ枝豆を貰ってもぐもぐしている。その横でこいしももぐもぐと食べる。

霊夢はそんな二人を呆れたように見ながら。刀を捨てようかと思案する。ただ、こんなものをそのあたりに捨てても犯罪関係に巻き込まれそうで嫌である。だが、聡明な彼女には思いつくことがあった。

「……そっか。海に捨てればいいんだ」

的確で効果的なことを呟く霊夢。海中深くに沈めてしまえば銃刀法違反を立証できないし、いずれ錆びるので茸しても無力化できるだろう。妖夢が泣きわめく以外は問題はない。ただ、霊夢ははあとため息をつく。本気で実行する気などない。する気があればそんなことを呟く前に青い海へ投擲している。

試合は進んでいる。今は閻魔チームが点を取ったようである。霊夢はそれを真剣に見ている。ここで勝った方と戦うかもしれないのだ。横にいる古明地こいしなどが一回戦で見せた驚異的な動きを見ればわかるが、幻想郷の少女は一筋縄ではいかない。

「そういえば天子はどこにいったのかしら。あいつ」

なんだか水蜜と行動し始めたくらいから見ていない。今日はまだまともに会話すらしていない。さとりは頭のことがあつてどこかに隠れているのだろう。慧音もそれに

付いているのだろうと霊夢は思う。ネズミは海の家でこき使われている。

一輪は公開的な修行をしている。寅丸は裏で寝ていた。

「……あんた」

「はいはい。なんですか霊夢さん」

「べつに」

なんとなく近くにいた水蜜に話しかける。意味などない。今また試合は閻魔のペースで進んでいるらしい。歓声が聞こえる。そんなことよりも霊夢は無駄に優し気な顔をしている自称「お姉ちゃん」がうつとおしくて仕方ない。それにいつもからかうような言動をしているので反撃してやりたくもなる。

「そういえばさつきにとりに写真撮られてたけど」

「ああー。あれは必ず回収しますよー」

明るい顔で声は冷たい。如何に村紗水蜜のような陽気な怨霊でも半裸の写真撮られれば思う所があるのだろう。河童を水の底に沈める覚悟程度はある。

霊夢の頭に「船幽霊VS河童」の映画のような映像が勝手に作られて、ちよつと笑ってしまう。実際どっちが勝つのかよくわからない。そんな少女の笑いを水蜜はむつとみる。この話題は少しデリケートである。

「何を笑っているんですか。霊夢さん」

「なんでもないわ。にとりのことだから天狗にでも横流しして新聞に載ったりしてね」
実現する。そんな運命を知らない水蜜はちよつと真面目な顔をしている。少し後にそれを見た豪族の少女に水蜜は公民館で変態のような風に言われる。

歓声が上がると。地獄烏が点を取つたらしい。

「れいむさん」

目が座っている。水蜜は霊夢に近づく。この船幽霊は表情を消すと少し怖い。だから博麗の巫女と言えどもわずかにたじろいでしまった。思わず腰に帯びた刀の柄を握ってしまう。

「そんなことを言う人とは思いませんでしたよ」

「な、なによ。あんただっていろいろ言うじゃない」

「……………」

唇を尖らせて流し目で霊夢を見る船幽霊。後ろでは無意識な少女が同じことをしている。

水蜜の瞳は暗い。見ていると吸い込まれてしまいそうな、そんな彼女の視線である。霊夢はむぐと困った様に下がる。しかしここで怒るわけ理由もない。それでも素直になれない霊夢は横をむいてツンとした顔をする。ただ、言葉はこうであった。

「わ、わるかったわよ」

「……………ぶ、くく」

はつとした霊夢は水蜜を見る。すごく楽しそうな顔をした船幽霊が其処にいた。両手を口に当てて、笑い声が漏れないようしている。どうやらたばかられたらしい。真面目に怒ったふりをしていただけのさ。こいしもこれにはくすくすとしている。下では枝豆にリスみたいになっている猫がいる。

「あんたあー！」

「だ、だつて霊夢さん。すごい良い反応してくれるから、あ、いたいいたい」

霊夢は水蜜にチョップする。それを手で押さえて楽しそうにしている水蜜。長く生きている分腹の黒さは船幽霊の方に軍配が上がるようだ。だが、どこからともなくひゅんと桃が飛んできた。それが水蜜の頭に当たる。

「いたいいつ!? え? な、なんですかこれ」

急に現れた桃。水蜜はあたりを伺うがさらに増えていく観客たちと霊夢達だけである。彼女は頭を抑えつつ、なんとなく色艶のよいその桃を齧る。

「全く誰がこんなのを…………」

「なんで食べてんのよ。あんた。あれ?」

「どうしました?」

「試合…………いつの間にかにとり達がリードされてない?」

★☆☆★

(お、おかしい)

にとりにはあはあと息を切らしていた。噴き出る汗を腕で拭いながら、水着の紐を直している。彼女の頭の中にはあらゆるトリッキーな手。悪く言えばこすつからい手が詰まっている。「カーブボール」や「アウトの誘導」、「ネットに当てて威力を殺すスパイク」のことである。

「あはは。私の敵ではありませんねー！」

相手のコートではお空が胸を張り、両手を組んで仁王立ち。それでいて高らかに笑っている。妖夢を見れば彼女も息を切らして膝に手をつけている。

雲居一輪のボードには「え 15-12 に」と書かれている。この適当な取り決めのビーチバレーは21点先取制のワンゲームマッチである。少し前までにとり達が大量リードしていたはずであった。少なくとも初心者同士での短期戦である。早々には逆転は難しいはずだった。

「なんだってんだ…」

にとりの顎から汗が落ちる。あれから地味に点を取られ続けている。お空が驚くべき行動しているわけでもないし、閻魔が逆に凄まじい動きをしているわけではない。

それどころか時間がたつほどに妖夢の動きは鋭さを増していった、はずである。だが

お空の放ったボールがたまたま妖夢にとりの間に決まったり。ネットに引っかかったボールがたまたまにとり達側に落ちたりして点差が開いていった。

変わった点と言えば四季映姫がプレー前に、

「もう少し前にかまえてください」

などと簡単な指示をお空にしているくらいである。最初にとりはデータに基づいた動きかと思った。しかしである。お空は制御不能な女の子である。特に試合中に何か指示しても聞きはしないだろう。

一回戦ではネズミが毘沙門天の動きを封じる動きをしていた。それが確率論に基づいたものだったんだろうが、ことお空に関してはそうはいかない。序盤でアウト連発していたのだから、映姫がどうしても失点するはずなのだ。

だが、お空は最後に「ホームラン」を打ってからアウトをだしていない。もはやデータなどという生易しい物を超えている。

にとりは相手のコートでサーブの構えをしている映姫を睨む。その緑の髪の少女は線が細い。現代での運動能力は魂魄妖夢はおろか、他の少女にも負けるかもしれない。よく見れば映姫は大粒の汗を流している。ただ涼し気な表情は変わらないので対峙しているだけで何を考えているか分からない恐ろしさがある。

それでもこのまま終わる気などない。何かされているはずなのだが、そんなことより

もにとりは勝ちたい。

「ようつむ」

「なんですかつ！」

にとりは妖夢に叫ぶ。妖夢は水着の食い込みをなおしていたので微妙に恥ずかしく怒鳴り返す。

「この勝負絶対勝つよ。あんなやつに負けてたまるもんかつ！」

おまけ 異次元からの来訪者 l a s t

ちゆりは逃げに逃げた。夢美という追っ手を撒くために小道に入り、烏帽子を被った豪族とぶつかり、謝り。さらには公園の滑り台の陰に隠れたりと縦横無尽に逃げ続けた。

この炎天下の中である。

「ひい、ひい」

岡崎夢美は暑苦しそうな恰好のまま街中を練り歩いている。目指すは自分を物理的に倒して逃亡した、助手の少女。捕まえてどうするかと言えば助走をつけて殴りつける気である。相手は人をパイプ椅子で殴りかかってきたのだから、比べれば可愛い。

「あ、あつい」

その後ろをついていくのは汗だくの犬走権。なんとなくついてきてしまったことを今は後悔している。さっきのカフェでお化けに半ば強引に借財をしてから、離れる機会はあったのだが成り行きじょうなんとなっていくてしまった。少し犬の行動に似ている。

それはそうと今は完全にちゆりのことを見失ってしまっている。リサイクルショツ

プで騒いでいた彼女を走って追い詰めようとしたが、まさかちゆりの逃亡ルートが普通に民家に侵入して庭から壁を乗り越える破天荒の物だったことが災いした。

「そ、そもそもなんであいつを追っているんだ」

椀に至っては何で追っているのかもわかっていない。本当に薄着してきてよかったと彼女は思っていた。あと、普通のシャツだったら透けていたと今は安心している。薄手のパーカーは汗でべとついても大丈夫である。

「あ、あの子は私の助手です」

夢美が短く説明すると椀は「人望がないのか……」とぼそりと呟いた。

「いや、なんで逃げるんだ」

「さつき私をパイプ椅子で殴ったからじゃないですか？」

「……は?」

椀は混乱するしかない。何を言っているのか分からない。

★☆

一方のちゆりはお腹を押さえていた。さつき食べそこなったサンマが恋しい。そして喉はからからである。彼女も汗にまみれているが、お腹の大きく空いた服装幸いした。少なくとも彼女のご主人様のように暑苦しい恰好に比べればましである。

「うう。のみたいぜ」

どこを歩いてても、どこに行っても自動販売機がある現代。ちゆりは幻想郷の少女達とは別の科学の世界の住民であるから、その機械が何なのかすぐにわかる。彼女は赤い自動販売機の前に立つ。

そしてしゃがんで地面ほつぺたをつけて、自販機と地面の隙間を見る。

「……お、コイン見つけたぜ」

やりいと手を伸ばして自販機の下をまさぐるちゆり。手にとつて見ればかなりさびたゲームセンターの「メダル」であった。

だからその後ろを紙袋を胸に抱きしめ、日傘を差して歩く少女に気が付かなかった。緑の髪の涼やかな目元をした彼女は、ちゆりをちらりと見てから特に何も言わずに通り過ぎていく。

「これはいくらなんだぜ?」

地面に胡坐をかいてメダルを眺める。黄色い髪がゆらゆら揺れているのは、メダルをいろんな角度から見ているからだろう。それはお金ではないと言ってくれるものはここにはいない。

「えーと、SEG……最後のアルファベットが読めないわ」

どうやら擦り切れているらしい。メダルの表面の文字が見えない。ちゆりはまあいいかと自動販売機に投入してみるが、案の定おつりの出る穴からちやりんと返つて来

る。ちゆりはがつくりと肩を落とした。

「どうやら足りないみたい」

足りないのではないが、ちゆりはメダルを手の中でもてあそぶ。それにしても喉が渇いて仕方がないのである。唇をなんとなく嘗めても別に意味はない。

「仕方ない。ご主人様にそろそろ謝るか」

頭に両手をやって身体を伸ばすちゆり。そろそろ戻る気になっていた。これ以上逃げることに意味はないだろう。そう思っていると声がした。

「見つけた。ちゆり！」

少し離れたところに荒い息をついている赤い恰好の少女。岡崎夢美である。後ろには白髪の少女がついている。ちゆりはあれは誰だろうとのんきに思った。ちゆりは近寄って来る夢美にタイミングよく頭を下げようと両手をだらりと下げる。

謝るといふのは、先制攻撃でなければならぬ。後で謝るといふのは下策である。ちゆりはいつでも来い、いつでも謝ってやるといふ気持ちなのである。

夢美は少し頬を膨らませたような顔で三つ編みを揺らしながら歩いてくる。コンクリートの地面に足音高くならしながら、マントをばたばたと風に揺らしながらである。逆に言えばこの格好で街中を走り回っていたともいえる。

向かい合う二人。教授と助手である。ちゆりの方が少し背が低いから見上げている。

「何か言う？」

「ごめんなさいい。ご主人様あ」

ちゆりの考え方は人の心の動きに乗っ取った物だったが、彼女自身が軽すぎて誠意が全く伝わらないという弱点があった。

★☆☆

思いがけないことはいつも起こる。夢美の頬が赤くなり、少し目つきが鋭くなつてしまふ。ちゆりは慌てて流石に今のはフランク過ぎたと気が付いた。彼女は手に持ったメダルを後方へ投げ捨てて、身振り手振りで言い訳を始めた。

メダルが飛んでいく。宙をきらきら、弧を描くように。

とある少女が自動販売機の前に居た。さっきジュースを3本ほど「家の」ものに買うとしたら不審者が小銭をあさくっていたので素通りしてから戻ってきたのだ。

日傘を畳んだ彼女は財布を取り出すところだった。

その頭に、メダルがささる。がちんと金属の痛そうな音がして、地面に落ちたメダルがチャリんと音を立てる。被害者の少女はそのメダルを指でつまんで後ろを見る。ゆつたりとした動きである。

顔は笑っている。紅い瞳でちゆりと夢美をじつとみている。

身をひるがえせば白地に慎ましやかな花びらが彩られたスカート。少し体に張り付

く無地で黒のカットソー。首元の肌色が少し目を引く。

そんな彼女を見て犬走椀は戦慄していた。

「あ、あいつは」

以前カツアゲされた記憶がある。それも射命丸文のくだらない何かに巻き込まれる形で初対面初カツアゲである。もつとも金銭を盗られたわけではない。ありつたけの持ち金でお菓子を買わされたのだ。

「あ、あの」

ちゆりの襟を掴んでいた夢美が近づいてくる。「少女」に声を掛ける。メダルが当たるところを確認はしていないが、何か得も言われぬ恐ろしさを感じる。

その少女は口角を少しづつ吊り上げる。右手に紙袋を抱えて左手に日傘。この場合、傘というよりはウエポンと言った方がいいのかもしれない。

「あなたたち。人に物を当てる詫びの一つもないのかしら？」

風見幽香はにつこりとそういった。

★☆☆

「ぐ、ぐええ」

教授と助手は仲良く並べて首を締めあげられていた。幽香はニコニコとしている。整った顔立ちは逆に恐ろしい者に見える。少なくとも夢美にはそう見えているだろう。

ちゆりは反応していない。

夢美は必死に弁解する。本来であればその力を遣い、なんとかできるかもしれないが幽香の妙な迫力と一日に何度も警察を呼ばれそうになった心理的ストツパーがその行動を選ばせなかった。

「な、なにを怒っているのかわかりませんが、め、迷惑をかけたのなら謝りますわ」

夢美はメダルを確認していない。少し涙目である。だが、その言葉を聞いて幽香は首を少し傾けながら、ふふと小さく笑みを浮かべる。

「謝って済むのなら警察も崖もいらさないじゃない」

「お、お金は持っていません……」

「あら、そんなものは求めていないわ。貴女も見たところただの人間には見えないから、少しくらい乱暴に扱っても大丈夫ね」

「い、いえ。一応普通の人間、ぐえ」

大学教授として出したことない声を出している。一応千年を生きた由緒正しい天狗も同じようなことになったことがあるので恥ずかしい事ではないかもしれない。

その天狗の仲間である柁は電柱の陰にびったりと張り付いていた。逃げることを考えたが逃げられない。夢美とちゆりをほっておくわけにはいかない、のではなく隠れていないと猛獣に見つかる可能性があるから。

「く、くそ。な、なんで私がこんな目に」

そもそも最初は買ったおやつを公園で食べようとしただけなのである。それが妙な大学教授にからまれ、カフェで食い逃げをすることをすらも考え、今はこの街で最大の天敵に出会っている。

「そこにいるのはひじきのお仲間ね」

(ひ、ひじきってなんだ)

髪の色で幽香が「ひじき」とあだ名している者がいる。ひどい様にも見えるが逆にひじきも「わかめ」などと言っている。椀はばくばくなる胸をパーカーの上から両手で抑える。自然と息が荒くなってくる。冷えた汗まででてきた。

「さっさと電柱の陰から出てこないとただじゃ置かないわよ」

「……………」

両手を上げて投降する椀。観念している。どうせ狭い町であるから今日逃げても明日には捕まる。反撃しようものなら、さらなる報復を食らいそうで怖い。それを見て幽香は笑顔のまま、手元でのびている二人を掴んだままである。

「意外と素直に出てきたわね。出て来なければあなたの上司を責めようと思っていたの
に」

「文のことか」

「そんな名前だったかしら。よく覚えていないわ。逃げてもいいのよ。全ての責任はあいつに取らせるから」

椀はきつと目元を吊り上げる。そして幽香を強く見つめながら言う。

「なめるな。本人にいう事は絶対しないが、私にとつて文は大事な奴だ」

張りのある声で叫ぶ椀。両手は上げたままである。幽香は意外な答えを聞いたような顔をしている。しかし、椀の話には続きがある。

「だから、心苦しいが文も私の身代わりになってくれると思う」

大切だからこそ身代りに仕立て上げる行為はメロスもやっている。要するに椀は相当遠まわしに見逃してくれと言っているのである。しかも「ひじき」を売っている。その答えにに何を満足したのかうんうんと頷いた幽香はばつさりと、

「だめよ」

と一声。それにもう少し付け加える。

「あなたたち三人にはやってもらいたいことがあるの」

★☆

どんどーん。

「お、おおあたりー！」

黒いシャツの上に「おいでませ商店街」と襟に抱えた半被を着た少女が太鼓を鳴らす。

赤く短い髪はちよつと癖がある。若いバイトである。

ここは商店街の入り口。彼女の周りには商店街の人間であろう、年配で同じ格好をした人がいる。それ目の前には長机とでん、と置かれた抽選機。いや、「がらがら」の方が通りが良いかもしれない。

どうやらがらがらを回して当てた者がいるらしい。机の前には年配の女性。バイトは自分も嬉しそうになって景品を手渡している。かき氷機らしい。大きな箱である。

バイトの後ろには景品表が飾つてある。

一等「温泉旅行」、二等「商品券3万円分」、三等「かき氷機」、などで後はお菓子や竹べらなどと妙な物が並んでいる。小さな商店街の福引としては頑張つている方かもしれない。バイトは楽しそうにしている。

そのバイトを楽しそうに見ている周りの人間もいるのでそれだけで意義はあるかもしれない。まさかそのバイトの正体が太鼓の達人だとは思わないだろう。

「あれよ」

物陰から幽香が言った。同じように物陰から顔出す、椀に夢美にちゆりにこいし。

まず疑問に思つたのは椀であつた。

「あ、あれよと言われても。もしかして福引をしてくるだけか？」

「そうよ。簡単でしょう。はい、あなたたちの一人一枚分チケットはあるわ」

椀達にそれぞれ一枚づつチケットを手渡す幽香。こいしも両手を「頂戴」していたが、彼女の分はない。だからちえーと一言たったか何処かに去って行った。

「はいー」

ちゆりが学生のように手を上げる。幽香は「なにかしら」と聞く。

「わたしたちがあの中でのいいもの当ててくればいいんだぜ？」

「言葉へんね」

「照れるぜ」

「……くす。そうよ。良いもの当ててくれば許してあげるわ。ちようど買い物をしたチケットが手元にあつたから使わないと損でしょう？」

それを聞いて夢美が困ったような顔をする。

「それなら自分で行けばいいのではないかしら……」

「え？ チケットを食べていいかって？ いいわよ。手伝ってあげるわ」

「い、いえ！ 行きますわ」

幽香のフィルターを通ると恐ろしいことになる。いや、風見幽香に出会ったことでもゆりも夢美も争いをやめている。猛獣の前で仲たがいでいる場合ではないとしても、それはそれで幽香は平和をもたらしているのかもしれない。

ぱんと幽香は手を叩く。それから親指をたてて、くいつと福引の方向を指す。速くい

けという事だろう。椛達はそれでのろのろと物陰から出ていく。こんな滑稽な姿は珍しいだろう。その後ろ姿に幽香は声を掛けた。

「ああ、そうだわ。もし大したものが取れなかつたら道の真ん中で自己紹介をしてもらうわ。趣味とかいろいろと話すだけよ。簡単な罰」

「自己紹介？」

夢美が振り返った。ちゆりと椛は首を傾げている。しかし、次の瞬間には三人はことの重大さがわかった。

——わたしは岡崎夢美です。大学教授をしており、専攻は魔法についてです

これを大来で叫べということである。それは椛達も変わらない。やればほぼ確実に不審者として見られるだろう。

★☆☆

抽選場の熱がほんのり上がっている。

「いい？　ちゆり絶対なにかしら当てるのよっ！」

「そうだ。えっと、ちゆりとかいうの。私達の名誉がかかっているんだ」

うるさいギャラリーをバックにちゆりはがらがらの取っ手を持っている。何故か目の前で赤毛のバイトがガッツポーズをしてくる。がんばれと言うことだろう。それにちゆり自身が小柄だからだろう、人が集まってきて彼女を見ている。

がんばれよ。と周りに声。何を頑張れと言うのか。

「ふう。期待を一身に受けるのはつらいなあ」

金髪の彼女は人目を引きそうだが、真つ赤なギャラリーの方が目立つ。彼女はしっかりと取っ手を持って。少し動かす。がらがらと抽選機に入っている玉の音がする。彼女は精神を統一させるような気になりつつ、一度目を閉じる。

それからカツと眼を見開いてからがらがらと勢いよくまわした。

かつんと出てくるのは青い玉。バイトは「ああ」とわざとらしい声を出して、手元にあつた柿ピーの袋をちゆりに渡した。

「しまったぜ」

受け取りつつ、滑らかに袋を開けて柿ピーを食べるちゆり。後ろでは教授と天狗がそれぞれどちらが先にいくのか「どうぞどうぞ」と手で促し合っている。ちゆりはぼりぼり食べながらきとうに謝る。

次に前に出てきたのは椀である。彼女もバイトにチケットを渡す。このバイトは一応顔見知りだったりするので「がんばるのよ」と声を掛けてくれた。

「よーし白いのが勝つぜ」

「きつとあたるわ! ……ちゆり、それちよつと頂戴」

椀も取っ手を掴む。福引にここまで緊張したのは初めてである。正直に言えばもう

何が当たろうとどうでもいい。あの幽香が納得する何かが出てくれればいい。

「……神に祈ったことなど殆どないが……」

椀ははあと息を吸い、吐く。ゆつくりとがらがらを回す。鯛の頭も信心からうきつと福引でも信じれば何かしらの返礼があるかもしれない。

(頼む、頼むぞ)

「気合が足りないぜ」

はつと後ろを見る椀。ちゆりが強い目で彼女を見ている。

(気合？ 関係あるのか？ いや、もうやるしかない)

「うおおおー」

言いながら勢いよくがらがらを回す椀。周りの人々も「おお」と何故か感心している。ような声を出している。

かつーんと出る白い球。バイトがそつと手渡してくるティッシュを椀は呆然と両手で受け取り、下がった。参加賞のようなものである。それを持つてずこずこ椀は後ろへ下がる。

「はいはい」

ウザつたい顔で顎を上げてる。そんな勝ち誇ったちゆりがむしやむしやと柿ピーを食べている。椀はかつとなつていった。

「な、なんだその顔は。ティツシユもそれも変わらないだろう！」

低次元の戦いである。二人とも殆どはずれのような物だったのだが、僅かな差が明暗を分けた。奴隷は鎖の重さを誇ると言うが、この二人は柿ピーとティツシユを比べている。

それはそうととうとう残ったのは岡崎夢美一人である。椀もちゆりも彼女へ期待をかけるよりほかはない。当の夢美もどきどきしている胸に手をあてて、落ち着く。引けなければ人生でもかなり上位に入る恥辱を受けざるをえない。学会から追放されるというある意味すごいことをしたときと同じ気持ちである。

「ご主人様リラックスなんてせずに気合をいれるといいぜ」

「うっさいちゆり！」

夢美はちゆりに対してだけ口調が少し違う。長年一緒に居ればそうなるのも当然と言っていいだろう。それに応援しているようでもちゆりはピーナッツだけを選んで食べている。

そもそもちゆりだけのほほんとしているところがある。実際往来で大声で叫べと言われれば普通にやりかねない顔をしている。へそ出しルックなど夢美であれば、恥ずかしくてどうしてもできない。

そんなことを思っていると夢美は頭の中でへそ出しのシャツを着た自分を想像して

しまう。くだらない想像をしてしまったからか。眼を開いて顔をゆでだこのように赤くする。これで全身真っ赤に成れたのだ。

そんな彼女に権が声を掛ける。

「おいつ。さつきなんでも願いを叶えてくれるといっただろう。今いいものをひいてくれ」

「そ、そんなあ。プラズマなら用意できますけど」

「そ、そんなものいらん。私は恥ずかしい目に会いたくない」

夢美もそこは同じ気持ちである。彼女はふと、空を見る。蒼穹、とはいかない。電柱の顔が見える、そんな空。周りに響いてくるのは応援の声。

(いい、ところだなあ)

なんとなく、そう。なんとなくそう思った。視線を戻した夢美はきりつとした顔でと自信満々に口角を吊り上げる。吹っ切れたのだろう。

「当てるわ。それじゃあ、いくよっ」

取っ手を掴む。それからがらがらと勢いよくまわす。固唾をのんで見守るみんなが、一瞬しんとなつている。それからかつんと音が鳴った。

いつの間にか夢美は眼を閉じている。福引の玉はまだ見ていない。片目だけそつと開けて、ちらつと球を見る。見ればそこにあつたのは、

きらきら光る金色の玉だった。とたんに響き渡るバイトの太鼓の音。どどんと景気よく「おおあたりー」と声が響く。

「やったああ」

ぴよんとジャンプして年相応な姿を見せる夢美。両手を組んで、眼をきらきら。心底嬉しそうな顔をしている。後ろではちゆりと椀が両手を取り合って喜んでいる。

周りから聞こえる拍手。みんなが彼女を祝福している。夢美はなぜかちよつと目が潤んできてしまった。目の前のバイトも手に「商品券」の封筒を持っている。

バイトは両手でそれを捧げ持つて夢美に手渡す。夢美はそれを受け取つてから胸で抱きしめる。

「ありがとう」

歯を見せて笑う彼女は、本当に可愛らしい。

★☆☆

「あれ、二等だったんだな」

とある豪族が活躍する小料理屋の座敷で椀がいった。目の前で焼けているのはお好み焼き、いい匂いがする。対面にいるちゆりは皿に切り分けたお好み焼きにかじりついてはマヨネーズを付けている。

店員は忙しく立ち回っているようである。いつものことながら子供が多い。

「まさか二等がレインボーの玉を用意しているとおもわなかったわ」

夢美もかつくり肩を落としている。少し仲が良くなっているのか、椀にも口調が砕け始めている。

「まあ、もぐ。あの緑の髪も許してくれたし、いいぜ」

結局風見幽香は二等で満足していた。ぼそりと服を三着買えるなどと言っていたが、自分で着る為かどうかはわからない。

——これはあげるわ。

と一万円分の商品券をくれた。もとはと言えばチケットも彼女の物である。ただし、もらった商品券を見ると商店街専用であった。表面に描かれたのは聖徳太子の絵らしいが、ヘッドホンをしている妙な人物である。誰がデザインしたのだろう。

ということで料理屋に来たのだ。今日は一万円分商店街で使い切らないといけない。明日は使えないのだ。ちゆりと夢美は明日にはいないかもしれないのだから。

「これが終わったらどこに行こうか？」

椀がお好み焼きを食べながら言う。

「どこと言われても、なにか素敵な物があるところがいいわ」

夢美は科学者の癖に抽象論を言う。

「わたしコンビニにいきたいぜ。こっちではどんなのなんだろう」

ちゆりは口にも物をつめながらも器用にしゃべる。

かちやかちやと食器を鳴らしながら、遊びの計画を立てる三人。今日は楽しかったと分かれることができる、そんな予感が三人にはしている。

34話

鴉は飛ぶ。

灼熱の太陽の元に元氣いっぱい、両足に力を込めてできるだけ高く。その顔は自信に満ち溢れて、輝いてるかのよう。

お空は刹那の浮遊感に妙な心地よさを覚えながら、宙に浮いているボールをスパイクする。バシツと小気味よく音が響いて、相手のコートに角度厳しく打ち込む。

「っー！」

砂を蹴るのは白髪の少女。緑の水着のリボンが揺れているが、顔は真剣そのもの。妖夢は全身全霊かつ最速のでボールを追いかける。腰をかがめて、砂に着く前のボールを右手ではじく。よろけて砂浜にばしゅと倒れる。

「河童ー！」

宙に浮くボール。そこに走り寄る青い髪の河童が一匹。

わずかに低く張ったネットのおかげで彼女でも問題なく敵陣へ攻撃できる。きらりと瞳を輝き、汗が飛ぶ。彼女は飛んだ。ネット際。

お空も飛ぶ。大柄な彼女は両手をあげて、ブロックの構え。一秒にもみたないにとり

と彼女の対峙。その瞬間ににとりは体をあえて傾けて、にやりと微笑む。

「うえだよ」

にとりは軽くボールを上にあげるようにはじく。

「わっ?」

お空が宙で手を伸ばしても届かない。その上を超えていく。観衆の驚くような声。しかし、にとりは落ちていく数秒間にそれを見た。彼女の撃ちだしたボールは柔らかく相手のコートに落ちるはず、だった。

その落下地点に既にいるのは緑の髪の閻魔。髪を片方だけ邪魔にならない様に結んでいる、おさげな彼女。四季映姫は涼しげな顔のまま、下打ちする。手を握って振った。弧を描くきながらにとりと妖夢の上を飛んでいくボール。その的確な弾道ににとりは無駄と知りつつも手を伸ばす。だが、現実は無常である。その手がボールを拾うには数メートル以上も足りない。

ぱあんとコートの最奥。ライン上に落ちるボール。これ以上ない程のカウンターである。必要以上に力まず、無駄なく、精度も高く。にとりは両手を膝につきながら、得点の笛が鳴るのを聞く。

これで「16-12」。もちろん閻魔たちは前者である。お空は監督に抱き付いて、喜びを表そうとして避けられている。



無駄がない。とにかく四季映姫にはゆきぶりも小細工も通用しない。

にとりと妖夢はコートの後ろで短いミーティングをしながら、細かいルールは観客も審判もとりも誰もしらないので、タイムアウトは結構適当である。にとりはアーク・エリアースのペットボトルをごきゅごきゅと飲む。

「ぶはあ。まったたく。なんだあいつ……」

前衛に出てくるお空を超えること自体は簡単である。彼女のレシーブもスパイクも強力ではあるが、魂魄妖夢の身体能力の前には通用しない。だからこそ殆ど無茶なことをしてにとりは引きずり出したのである。

妖夢は胸に手をあてて息を整えている。激しい動きをしているからか体がほんのり赤い。はつきり言つて彼女が居なければ既に負けていた可能性が高い。

「弾幕ごっこなら引けを取らないんですが」

「ある意味これも弾幕ごっこみたいなものじゃないの？ 妖夢さん」

ふたりはちよつと眼を合わせてくすりとする。ほんのちよつと体から力が抜けた気がした。にとりはそれでもいい策は思いつかない。映姫はまるで自分たちの動きを先読みしたかのようにお空をフォローしてくる。自分はあまり前に出ないとしても。

「データの分析をしてるのかな？」

と試みてみたが、先ほどの攻防でもお空の上を超えるボールの落下点に既に彼女はいた。確かにあの状況で言えば軽く上げるボールも選択肢から言つて予想できるかもしれないが、的確すぎるような気がにとりにはしている。

(……)

四季映姫は閻魔である。それを証明するように彼女は聡明である。しかし、現状では力の大半は使えないはずであることにはとりにはわかる。ただ、知能的には別であるから、その予測を予知にまで昇華させている、ととりあえず結論付けた。

妖夢の息も整つたらしい。彼女の胸のあたりがリズムよく動いている。だが、にとりは現状を打開する策がまだ見えない。

★

その四季映姫のサーブである。コートの一番禺でボールを片手に静かに構える。

それだけで少し威圧感を妖夢は感じた。彼女は腰を下げて、目の前の状況にだけ集中している。相手のコートでお空が「アーコイシサマ」などと言っているのは耳に入らない。

映姫はすつと手の載せたボールを上げる。何故だろうか、その動きがあまりに自然すぎて美しい。一瞬妖夢は意識が映姫自身に奪われてしまった。ぱんと音がしてからはつとする。

妖夢に迫る青と黄色の混ざったバレーボール。殆ど回転の無い。綺麗なサーブ。
「くっ」

両手を組んで受ける。ボールの反発を腕で感じつつ、妖夢はにとりの受けやすい前方へボールを弾いた、つもりだった。勢いよく飛んでいくボールは観客席へ吸い込まれていく。しまったと妖夢が思った時には笛が鳴っていた。

これで「17-12」である。妖夢は申し訳なさそうにとりに言う。

「すみません。少しぼおつとしてました」

「いや、うん」

にとりほうわの空で答える。今少し気になる物を見た。彼女は映姫と妖夢を交互に視ながら、状況を観察していたのだ。映姫がサーブを撃った後も少しの間だけ見ていた。

わざとらしく構えを解き、じつとにとりを見る映姫が其処に居た。まるで妖夢が取れないことを知っているかのような動きだと、にとりは思ってしまう。正直言えば彼女は混乱している。

映姫の視線と動きの意味。にとりは考えた。クイズにヒントを与えられているかのような妙な感覚。ぞくりとするような予感。にとりは顔に手をあてて俯いた。

「ど、どうしたんですか」

妖夢が気遣うのをにとりは手を振って大丈夫とジャスチャーする。逆にくくくととりは笑う。

「くく。ああ、そうか。そりゃあ反則だよね」

「え？ は、反則をしているんですか？」

「厳密には違うかな……妖夢さん」

「はい？」

にとりは妖夢を見る。不敵に笑うその顔はちよつと小悪魔のよう。

「この勝負負けたらあんたの写真をばらまくから。水着のやつ」

につこり、とてもいい笑顔でにとりは脅しをかける。彼女なりの激励である。相手は顔を白黒させて、赤くしたり青くしたりとても面白い反応をしてくれた。

★☆☆

何かもめている。映姫は相手のコートを冷ややかに見ている。彼女は息を大きく吸って、静かに吐く。だんだんと体に倦怠感が広がっていくのを抑えきれなくなってきた。体を遣っているというよりは、全てを遣っていると言っている。

「監督っ。このまま勝ちましようっ」

「そうですね」

きらきらと瞳を輝かせるお空にさらりと返す映姫。少しめまいもする。熱中症など

ではない。使い過ぎているのである。汗が出ない。むしろ体が冷えてきた気すらもする。

「とにかく勝ちましょう。貴女もこのままお願いします」

「ふふふ。任せてください」

つらそうなそぶり一つ見せず映姫はお空に言う。お空が顔に自信をにじませながら。右手で胸を叩く。どんと任せておけという事であろう。映姫はこくりと頷いて、審判からボールを受け取る。サーブ権はまだ彼女の物である。

「……」

映姫は空を見る。穏やかに広がる青い世界。彼女はさらに深く息を吸う。

太陽が黒く染まっていく。そこから滲むように空が白くなっていく。世界が黒と白に染まっていく。ただ、それだけの世界。

——白黒つける程度の能力

四季映姫の前に「ゆらぎ」はない。全てにはつきりとした色に分けられる。本来であればもつと強力な能力かも知れないが、ここで使うだけならば「事象に白黒結果をつけられる程度の能力」と言っていいたいだろう。

アウトになるボールも、得点も、その状況での最善手も映姫にはわかる。状況やデータを元に判断するよりも数段、いや次元の違う能力である。代償として今の映姫には凄

まじい負担となつて体に降りかかつてくる。

だるい。映姫でなければ倒れているかもしれない。

(今の私なら仕方ありません)

映姫は思う。本来的に言えば、自分の能力で疲れたりすることなど殆どないはずである。しかし、今は状況が違う。一応他の少女達も能力は使える。事実、古明地さとりはその気になれば心を読めるし本人も気が付いている。ただ、最大限に集中すればの話ではある。

「靈鳥路空。もう少し前へ」

「はいー」

サーブをする前に映姫はお空の位置を調整する。どうでもいいことであるが、お空の返事はとても良い。聞いているものの心を明るくさせるような、そんな声である。映姫も思わずくすりとする。

彼女は少なくとも今日は閻魔のつもりではない。周りがそう見ようとも、今日だけは昔に戻っているつもりなのだ。無邪気な願いはできるだけ助けてあげる、そんな存在であつた昔にである。

映姫は桃色の唇を薄く開いて、小さく唇を嘗める。彼女それからいつものように涼しげな顔で相手のコートを見た。

そこにいたのは、さつきまでとは比べものにならないほど闘志に満ち溢れた少女であった。潮風に揺れているのは銀髪だけではない。その額に巻いた長い緑の鉢巻きがたなびいている。いつの間に付けたのだろうか。

足を開いて、腕を組んで。ぎらぎら光る眼で映姫とお空を見ている少女の肩にはいつも連れている半分こされた霊。そう、彼女こそ退路を断たれた魂魄妖夢の姿である。この勝負に負けたらこの観衆にプロマイドをばらまかれると聞いて、闘志があふれてきたのだ。

刀を持っていたら途端に危険人物になっていただろう。

★

にとりにはわかつている。映姫が予知をしているわけでも運命を操るようなことをしているわけでもないことは。この幻想郷から外に出たからくりの一部を造った河童は能力の使用自体は無理ではないという事もわかる。ただ、かなり無茶なだけ。

「どうせ、あいつは入る確率が高い場所が分かる程度だろ。ただ、こぎ……私の技術とかが効かないのがうつとうしいけどね」

にとりは一人で喋る。彼女はコートの後衛。前衛には闘志燃やすアイドル。

（無理してなんかしているのなら、スタミナもたないはずだからね。それにあいつはきつとこつちの攻撃とかが始まってからしか判断できてないはず）

さつきから映姫自身が攻撃に積極的ではないのは、単純に体が動かないからかもしれない。そうにとりは思う。それにこの試合の結果のような「未来の事象」の白黒も今はつけられないはずである。付けられるなら勝ち目はない。

どんなまやかしも四季映姫には通用しない。なら使わなければいい。映姫が後ろでお空をフォローし続けるのであれば、にとりはアイドルを支援する。アタックとフォローを明確に分ける。

そう映姫自身がいくらこの場での最適解を分かっているようにと、

「あつはははははは」

何故か笑っている霊鳥路空には全部は伝えられない。

だからこそ多少なりともにとり達は得点できたのだ。にとりはコートが一番後ろで構えて、ペロりと唇を嘗める。汗で前髪が少し濡れている。この河童は不敵な面構えの時間が一番輝いている。

(ここからが勝負さ、私の考えが正しいって)

四季映姫が向かいでサーブする。にとりにめがけて弧を描く、美しい軌道。

(証明してやるよ！)

にとりは熱意とは裏腹に軽やかに落下地点に来て。ぽーんとボールを上げる。無造作に上げているように見えてにとりはしっかりとネット際に落ちるように上げている。

鉢巻をはためかせながら、妖夢が動く。彼女はちらりとネットの向こうで構えているお空を見た。

「なに？ 勝負？」

無邪気に何か言っているお空。彼女は受けて立ったと言わんばかりにネット際で構える。妖夢との一騎打ちである。比較的大柄なお空と細身な妖夢の間には一枚のネットと落ちてくるボール。

両者が同時に飛ぶ。

妖夢の瞳はボールを見ていない。ただお空を見ている。

もう一つ、見ている「眼」がある。にとりはお空の後衛である映姫がどこにいるのかを見つめていた。頭でどう攻撃すれば入るか組み立てて、声にする。

「そこだよ、右側に撃って！」

にとりの声がある。妖夢は空中で腰を捻り。角度を付けて右側にボールを撃ちだす。殆ど反射的である。お空も慌てて腕を伸ばすが間に合わない。ぱしんと砂に突きささったボールが砂煙を上げた。

「あああ」

残念そうに地面に着地したお空。それとは逆にアイドルが得点して盛り上がる会場。わあああ、ざわざわと観客が囁す。それは審判の笛の音も聞こえなくなるほどの歓声

であつた。

これで「177-13」。

妖夢はその場で両手でガッツポーズをする。そこににとりがきて、二人はハイタッチする。薄暗い脅し脅されの関係とは思えないほど微笑ましい。

「やりましたっ」

「うん。この調子だよ」

「写真ばらまいたら斬りますね？」

「あはは」

恐ろしい会話を明るくする二人、実際ニコニコしている。

にとりの策など単純である。映姫が白黒つけようとつけないと、自分たちのできる「最高」のパフォーマンスは決まっているのだ。最短最速でアタックまで持っていき、にとりの指示に反応した妖夢が最高の一撃を相手のコートに穿つ。

小細工や他を一切抜いて、相手に「点を取られる」と白黒つけさせてしまうくらい協力すればいい。常に全力で当たらざるを得ないが、妖夢はうってつけである。

「よし。反撃するぞっ」

にとりは両手を組んで相手を睨む。視線の先にはお空に何か説教をしている映姫がいる。



わあわあと遠くから歓声が聞こえてくる。

その女性は浜辺の片隅でぽんぽんとトスの練習をしていた手を止めた。その柔らかな笑みはいろんなものを包み込んでくれそうな、そんな優しさにあふれた物である。まさか数か月後にバイクを乗り回しす女性とは思えない。

髪を後ろで結んでいる。紫色の髪が毛先になるほど薄色になりやがて茶髪になっている。それでいて肌色がまぶしい。黒いビキニを付けて、その上からやはり黒く短いスカートをはいている。

聖白蓮であった。彼女はビーチバレー大会の横断幕を作ってから、チーム造りに「余ったもの同士」で隠れて練習をしていた。

「盛り上がっているようですね」
「どうでもいいわ」

白蓮の相手はそつけない。頭に小さな麦わら帽子を被っていて、蒼い髪をしている。帽子には桃の飾りがついている。

着ている水着のトップスは白地に華やかなフラワーの模様。下はショートパンツを穿いているが、腰のあたりから中に穿いているのだろう、トップスと同じ柄のビキニが

見える。お腹には小さなおへそが開いていて、無駄な物のついていない腰回り。

「どうせ私が勝つから」

比那名居天子は少し不機嫌そうに言った。いろいろとあつて、いろいろ間に合わずにいろいろとたまっているのだ。

白蓮はそれを聞いて頼もし気になつこりと頷く。彼女もビーチバレーはやったことがない。だからこそやってみたいという気持ち強い。まるで少女のような屈託のない顔で、彼女は楽しみにしている。

35話

劍術とは最善を尽くすことである。

武器を握るということの意味。そして、武器と相對するという意味。それは常に死と隣り合わせであることである。だからこそ白刃の妖しい美しさは人を惹きつける。それは紙一重の世界に人々は心の底に憧れを抱いているからかもしれない。

今、魂魄妖夢の両手に劍はない。彼女は空手を握って、息を整えている。落ち着いて静かに、深く。彼女の表情は穏やかである。ゆつくりと肺から全身に力を通していくように、いや浸透させるように深呼吸を繰り返している。

劍術での敗北は死を意味する。そしてピーチバレーでの敗北は社会的死を意味する。

二つは似ているのかもしれない。だからこそ妖夢は真劍に戦う準備をする。彼女はゆつくりとした手付きで額に付けた長く、紅い鉢巻きをきゅつと締める。彼女は

ばたばたと潮風にゆれる鉢巻き。気合を入れるために巻いたそれが、少し似合っている。

サーブは彼女の後ろで構えている青い髪の河童からである。にとりは妖夢の精神統一を、

(早く終わんないかな)

と思いつつも待っている。しかし、そこは彼女である。遠くから他の河童が精神統一をしている魂魄妖夢の写真をしっかりと撮っている。抜かりはない。実は自分も取られているとは夢にも思っていない。

にとりは既に妖夢へ指示は終わっている。敵の映姫がどう出ようと関係ないようにするしか勝ち目はない。

「いいですよ」

妖夢は振り向かずににとりへ言う。彼女の煌めく両目の先にいるのは、一人の閻魔である。向こう側のコートで佇む彼女を打倒しなければならぬ。妖夢は眼をそらすことはない。

後ろで音がする。にとりのサーブの音。妖夢が僅かに顔を上げると頭上をボールが通過していく。

彼女の清廉な瞳に映る空に浮かぶボール。それは相手のコートで構えていた映姫の手元に吸い込まれるように落ちていく。まるで落下点が分かっていたかのように、いや実際に映姫にはボールの落ちる場所が分かっていたのだろう彼女は綺麗にボールを受け止めた。

ネット際に寄せられるボール。その下で構えているのは地獄鳥。妖夢の相手は彼女

である。

縞々帽子を深々と被った黒髪のお空。キラリと光る瞳を真つ直ぐ空に向ける。落ちてくるボールを見定めて、彼女は飛ぶ。比較的大柄な彼女の手は長い。

自身に満ち溢れた顔のお空は叫ぶ。

「ハイテンションー！」

強烈にボールを叩く。

「ブレーエドー！」

お空の放ったスパイクは妖夢の後方へ。そこにいるのは一人の河童である。

青い髪の彼女が身を投げ出して、両手でレシーブする。砂が飛び、河童が倒れる。しかし、ボールを受け止めた。

「そやつ」

にとりは狙ったわけではないが、ボールはふらつと上がり、鉢巻きを浜風に翻す妖夢の下へ。彼女は一瞬相手のコートにいるお空を睨む。彼女の両手はだらりと下がり、まるで刀を「持っているか」のように構える。

「桜花閃々ー！」

よせばいいのにお空に合わせて叫ぶ。彼女の声に周り観衆は合わせて「おおお」と沸く。雰囲気はまた熱くなっていく。妖夢の体が宙に浮き、腰を捻り、リボンを揺らしな

がら全力でスパイクする。

小柄な体を目いっぱいに使った一撃。閃光のようなそれは、お空の真横に突き刺さる。

「へ？」

反応できなかったお空が変な声を出す。

一瞬遅れて妖夢が着地する。凜々しい顔つきにばたばたと音を立てる鉢巻き。鳴り響く笛と大歓声。アイドルが決めると盛り上がる。

妖夢はお空を睨んでからふんと、身をひるがえす。それから地面に倒れている河童に駆け寄って手を貸す。立ち上がったにとりと二人はパンと軽くハイタッチする。

「一点だね」

にとりの言葉に妖夢は頷く。

二人は基本的な方針を立てていた。それは「四季映姫」を狙わないことである。にとりの推測では能力を使っているかもしれない危険人物である。小細工を弄すれば逆に付け込まれる。

ゆえに出した結論は一つ。霊鳥路 空 を正面から突破するというものだ。彼女の制空権を力技で決じ開ける。単純明快でそれでいて難しいものである。

四季映姫は後方で最善の位置を常に占めている。ならば逆に比較的しる前方にい

つもいるお空の反応できない速度で攻撃をする。それは魂魄妖夢のような身体能力を持つていなければ無理だろう。

彼女は鉢巻きを締め直す。

「写真なんてばらまかせません」

執念がある。

★

ぴーと笛が鳴る。映姫は足もとに転がったボールを拾って審判に返した。また、お空の足元に突き刺さった敵の攻撃を止めることができなかつたのだ。

しかし勝負は互角。お空たちも得点をしているが既にリードは消えて「20―20」。前者が映姫たちである。21点を先取すれば勝ちなのである。マッチポイントである。

会場はアイドルを応援する声、野球の応援歌。それにやんやと囁す観衆。それは空気が震えるようだった。

四季映姫はお空に軽く説教をした。さつきから気が付いてたが相手は小細工を捨てたらしい。相変わらず体は重いが、別に気にはしていない。冷静にどの程度動けるかを測っている。彼女は水着の食い込みを直しつつ、涼やかな顔でお空に言う。

「やはり相手は貴方を狙っているようですね」

「……私をねらう?」

「ええ」

ちらりと映姫がお空の顔を見れば、きよとんとしている。はつきり言ってしまったお空を弱点としてにとりたち見ているわけである、正直に伝えてもいいのだがそれで落ち込まれても困る。

映姫の聡明な頭脳が、刹那の間だけ考えた。

「相手は貴方のパワーに正面から向かってくるようです」

「あはは、消し炭だよっ!」

「……空」

「はい、監督!」

返事は良い。ちよつとまた、映姫は口元をほころばせてしまった。不覚である。

「私はアシストに回りますから、全力で戦いなさい」

変な指示は無駄だと映姫は分かっている。妖夢を主軸にとりたちが来るのであれば、お空をぶつけるくらいにしか方法はない。いや、この勝負を通してお空に本質的な「自信」を付けさせたいのだから、むしろ好都合である。

全力で戦えと言われてお空は、眼をぱちぱちさせながら嬉しそうな顔をした。何度も映姫から小難しいことを言われたが、頭に入ってこなかったのだ。それは今の言葉はよ

くわかった。

「任せてくださいっ！」

胸をまた叩く。大きく笑うお空が楽しそうにしている。映姫も軽く微笑む。お空には底と天井がない。テンションが上がればどこまでも上がり、下がればどこまでも下がる。映姫にもだんだんとお空の扱いが分かってきた。

映姫は頭に赤毛のサボリ魔を考えながら、人事とは難しいと感じている。

お空は笑いながらコート際に行く。ニコニコしながら、汗を焔めかしている彼女。頭に被った縞々の帽子を脱ぐ。さらさらと髪が揺れる。観客席から何故か声上がる。

お空は本気を出すために帽子を投げた。映姫は「あ！」と声を上げて追いかける。元々は彼女の物である。彼女は地面に落ちた、帽子を拾い上げてみると目の前に彼女の引率してきた少年野球団の顔があった。

すました顔でばっばと砂を払い。映姫はとりあえず自分で被る。

そんなことは眼中にないお空が胸を張り、コートの向こうにいる白髪の少女。魂魄妖夢へいう。鉢巻きをした彼女もお空を真っ直ぐ睨んでいる。

「こんなちんちくりんに負けるわけありませんっ！」

「なっ!?!」

太陽のような笑顔で挑発するお空。ぐぐと怒りながら胸を張り返す妖夢。対峙する

二人の写真はよく売れそうだから、遠くから撮影された。

★

じりじりと焼かれるような炎天下の下、お空は飛んだ。何かを叫んで思い切りスパイクを放つ。砂を蹴って追いかけるのは、青髪にとり。彼女はまた倒れつつも腕にボールを当てる。

すかさず妖夢も走り寄りレシーブ。その間ににとりが立ち上がった。

「いくよー！」

上がったボールの下にとりが付く。彼女は両手を組んで丁寧にもう一度上げる。

「妖夢っ！」

「はいっー！」

短い掛け合いで分かり合える。妖夢は落ちてくるボールに合わせて飛ぶ。彼女の瞳が光る。そこに映るのはお空である。全身のばねを使って、妖夢はアタックする。ぼしんと音がしてお空のボールが胸の少し上へ当たる。

「うわっー！」

のけぞるお空。ボールは跳ねて地面に落ち、る前に駆け寄った映姫が蹴り飛ばした。

上がる歓声。彼女の小さな足に蹴飛ばされたボールは弧を描いてにとり達のコートへ飛ぶ。

「チャンスっ！」

にやつと笑つてにとりは両手を上にあげる。天へ押し上げるようにボールを押す彼女。映姫は苦し紛れに蹴つたのだろうと彼女は思った、それが運よく自分の下へときた。

「妖夢つとどめだよ」

「はいっ」

腰をかがめて見えない刀を構える妖夢。ここで決める。妖夢は一步、二歩。助走をつける。にとりの上げてくれたボールに最高の一撃を叩きこんで決着をつける。それだけに全精神を集中させている。

彼女は飛ぶ。体を弓なりに反らせて、勢いをつける。腰を捻るとリボンが揺れる。浮遊する一瞬、構えているお空が見えた。

汗の輝く顔が、歯を見せて笑っている。自身に溢れて挑戦的な顔。それに対する妖夢の瞳に熱がこもる。彼女は思った、もつとも取りやすいところに一撃を叩きこもうと。「いきますよっ！」

叫んでから、身体のばねを使つてアタックする。狙いはお空の構えている手元。一番レシーブしやすい場所である。正々堂々、真つ向勝負こそが本当の勝負なのである。

閃光のような一撃が、一直線にお空へ向かつていく。この地獄鳥の少女も体を捻る。

髪がさらりと流れる。

「爆符！」

左足を引き、右のかかとを浮かす。

「ペタフレアあ!!」

勢いよく腰を回す。力の伝わった右足をボールに向かって蹴り上げる。

どよめきの後に、お空のキックしたボールが上がる。妖夢から撃ちだされた軌道を伝って戻るかのように空へあがろうとする。しかし、少し低い。

ネットの最上部に引つかかる。急激に勢いを失くしたボールはゆらりと一瞬だけネットに「載った」。刹那の時間を観衆も、映姫もとりも妖夢も見ている。お空だけは足を抑えてうずくまっている。

ネットの上で揺れるボール。瞬きをする程度の時間。

にとりはそこでわかっていた。

(あの閻魔……私にボールを上げたのは)

傾いたボールがコートに内側に落ちていく。完全に力を失っている。ネットに沿っての軌道は拾うことはできないだろう。

(こうなることがわかってたんじゃないのか……?)

驚愕の顔をするにとり達の目の前に、ボールはぽとんと落ちた。

それを目の前で見た、鉢巻きの少女は体に力を抜いて、悔し気に空を見る。

そして、一瞬の静寂の後。審判席からおかつぱの河童が思いつきり笛を吹く。それにつられてお空が顔を上げる。目元にちよつと涙があつた。蹴つたはいいが打ち所が悪かつたらしい。だが、直ぐに飛び上がつて。

「やつたあ!!」

青空の太陽にむかつてジャンプしながら右手を突き上げた。それに答えるように観衆からの大きな歓声。このビーチ全体を包み込むようなそれに、お空は両手を振つて応える。こいしと少し似ているのかもしれない。

彼女は嬉しそうに映姫に駆け寄る。彼女の手を掴んでブンブン振り回しながら言う。

「監督っ。勝ちました」

「……て、てをはなじてください」

体全体が揺さぶられるほど映姫の手を振り回すお空。映姫はその手を優しく振り払い一言「勝つて兜の緒を締めるべきです」と説教くさくさいう。

「かぶ、とむしっ」

お空はよくわからなかつたが、うんうん頷く。原子力関係以外の小難しいことは頭に入つてこない。映姫はかつくりと肩を落としたがとりあえずはお空の「自信」の地盤は強くなつただろうと思う。

「あんた」

そう呼びかける声に映姫は顔を向ける。にとりが両手を組んで立っている。顔が火照っているし近くで見ると汗だくである。映姫も疲れているが顔に出さない。

「今回はあんたの勝ちにしておいてやるけどさ」

不愛想に言うにとり。

「次やつたら私が勝つよ。能力が使えるんなら先に言えばいいのに」

「……使おうと思えばあなたも使えるでしょう？」

「使うわけないじゃん。疲れるし。私の力がビーチバレーに何の関係があるんだよ。まあ、いいや」

にとりはとりあえずとばかりに手を出す。握手をしようというのだろう。映姫は少しその手を見てから、自らも手を差し伸べた。

観客から惜しみない拍手。その後ろで河童に取り押さえられているアイドル。負けた者へは容赦などない。

★

「あー疲れた」

海の家のは後ろは涼しい。影になった場所で正直な河童は折りたたみ式のビーチチェ

アに座った。体全体を預けるようにどすんと座る。手に持った冷たいおしぼりを顔にかけて、上を向く。目元は見えない。

「きもちい」

ひんやりと顔を包んでくれるおしぼり。炎天下の中でビーチバレーを下のは河童として生まれて初めての経験である。にとりの口元が少し緩む。火照った頬が僅かに動く。

結果から見れば敗北であるが、普通にアイドルの写真を販売することができることは大きい。プレミアがつくだろう。著作権として事務所に訴えられるかもしれないが、別に表向きは「販売していない」ことになっている。

人の群れの中でたまたまプロマイドを持っている河童達が取引しているだけである。にとりの海の家は関与していない。

「あんだ。何負けてんのよ」

「……その声は霊夢さんだね」

にとりはおしぼりを顔に付けたまま、うすら笑う。彼女から見えるのはぼんやりとした霊夢の影である。

「負けたって言っても霊夢さん。別に私が勝とうとも負けようとも賭けには関係ないぜ。だって、ほら。霊夢さんたちが勝ち上れるかどうかポイントなんだからさ」

「それはそうだけど、なんか釈然としないじゃない」

「あれ？ 霊夢さんは私達を応援してくれてたの？ けけ」

「そ、そんなんじゃないわ！」

霊夢の影が動く。にとりはおしぼりを外すことはない。何故ならまだ少し冷たいから。彼女はそんな姿のままにやにやと笑っている。

「次の試合は霊夢さんたちか、あいつらが出るだろうね」

「なにか細工したかのような良い方ね」

「とんでもないね。何もしてないよ。ただ、霊夢さんの同居人と私の同胞チームが戦つたらさ、ね？」

「……地味ね」

「だろう？」

特におかっぱとそばかすの河童の二人は地味である。にとりは彼女達のプロマイドも情け容赦なく売っているが。彼女はまだ「に」の文字で売られている写真の正体を知らない。だからこそにやにやできる。

「そういう訳だからきつと、霊夢さんかあの尼のチームが出てくると思うな。まあ、これは私の直感だけだよ」

「根拠がないのによく言えるわね……」

「遊びに根拠なんていらないうらなう？ 楽しむためにやっているんだから、楽しくしなきゃ損だぜ？」

にとりの視界で影が動く。彼女の前に立っていた霊夢が立ち去ろうとしているのだろう。少しため息が聞こえてくる。だからこそにとりは顔からおしぼりを取ることせずに行った。

「霊夢さん……勝っちゃっていいの？」

その言葉におしぼりの向こうの「影」が振り向いた。どんな顔をしているのだろうか。とにとりは思う。ただ、声は思ったよりも穏やかだった。

「どういう意味よ」

冷たさすら感じさせるほど、波の無い声である。にとりは両手をわざとらしく上げて言う。椅子から立ち上がったりはしない。

「別に。……とりあえず私は疲れたから、少し寝るよ……。次の試合くらいになったら起こして……」

★

霊夢はにとりを起こす気など微塵もなかった。

今頃あの河童は海の家裏でぐうぐうと寝ているだろう。霊夢はにとりの言っていた戯言を払うように、肩にかかった髪を払う。

異変は解決するものである。巫女として当然のことであり、疑うべきことなどない。霊夢が地面をなんとなく見ながら歩く、意識しているわけでもない。どうして自分が少し下を向いているかはわからない。

ただ、そうやって歩いていると足が見えた。その彼女はメロン色の水着を着ている、よく顔だけは知っている妖怪である。

「あんた、幽霊の癖に足はあるのね」

「そりゃあ、ないと歩くとき困りますわー。……というかいまさらですわね」

おちゃらけた言葉に呆れて顔を上げる霊夢。そこにいるのはいつも通り、村紗水蜜であった。いや、こうやって一緒にいるのは今日が初めてである。そのはずなのだが、霊夢は普通に接することができる。

「河童も負けたし。あの説教好きなやつを倒さないといけないわね」

「うちの輪とかが上にあがってくるかもしれないよ」

「身内なんですよ。その時はワイロでも渡しなさいよ」

「……」

目をぱちくりさせるキャプテン。それからくすくすとして、頭を掻く。巫女の口から「ワイロ」などという言葉が出るとは少し思っていなかった。逆に言えば、ちよつと思っていた。

「そうですねえ。一輪って何をあげれば喜ぶのでしょうか」

「あんた昔から知り合いなんじゃないの？」

「とはいいいましても、殆ど贈り物をしあつた記憶はありませんね」

「そこら辺の砂でもあげてみれば？」

「あ、貝殻とか入つた砂を綺麗なビンに入れて渡したら、ちよつと喜びそうですね」

真面目に返されて霊夢はちよつと言葉に詰まる。だから彼女は顔を背けた。その仕草は別に霊夢に嫌われているわけではないと、水蜜も短い付き合いながら少しわかつてきた。

霊夢のしているのはビーチバレーのコートである。また、駆り出されたおかつぽと哀れなニコと雲居一輪がマイク片手に観衆にむかつて何か言っている。顔はやはり赤いが、霊夢には興味がない。

おそらく次の対戦のカードを決めているのだろう。おかつぽはまた手に箱のような物を持っている。中にはそれぞれ河童が適当に決めたチーム名の書かれたボールが入っている。

「れいむさんれいむさん」

「なによ」

「次あたり私達の試合になりそうですね」

「はあ？ そんなの分からないじゃない。にとりと同じようなことを言っているわね」
「あの河童は今どこに？」

教えたら写真の恨みでにとりを海へ沈めかねない。霊夢は「さあ」と軽く流した。水蜜は少し腑に落ちないような顔をしつつも、言う。

「試合はチームプレイが大事ですからね。私のことはお姉ちゃんと呼んでもいいですよ」

「よばないわよ……」

「まあ、そういうと思いましたが……。じゃあ無難に水蜜でいいですよ」
「……………」

呼んで、と言われれば呼びたくなる。気恥ずかしいこともある。だから霊夢は普通に通に断る。

「いやよ、むぎ」

そんな霊夢の両頬を水蜜は両手で挟んだ。

「あんは、なにふんのよ」

「だめよ霊夢。勝たないといけないんだからね」

水蜜の眼が座っている。彼女は両方の掌で霊夢の頬をぐりぐりする。妙なことにこ
だわりを見せている。

「わはったから離して」

「あ、そうですか」

ぱつと離して、ニコツと笑う船幽霊。霊夢はそれをじとつとみる。コートでは歓声が上がっている。おそらく次の対戦カードが決まったのだろう。しかし、そんなことよりも水蜜は両手の人差し指を自分の顔に向けて、

「さあさあ」

などとニコニコしている。名前を呼べという事だろうが、彼女は半分以上わざとやっているのだ。こうしてやれば霊夢は「呼びにくい」と水蜜は確信している。

案の定霊夢は言いくさを感じたのだろうが、口を開けて「ああ？」とドスの利いた声を出す。少女というよりは不良のようである。その後、こめかみに指をあてて、ため息をつく。どうせ呼ばなければからまれ続けるだけであるから呼ぶことにした。

「はあ、わかったわよ。おねえちや……水蜜！」

「え？ え？ 霊夢さん今なんて言いました？」

言葉は言い間違えることがある。霊夢は最低のタイミングで言い間違えた。

「なんですか？ もう一度いいですか？」

からんでくる船幽霊。霊夢はそのほっぺたに手をあてて、後ろに追いやろうとする。言い間違えたことを心底後悔した。力を込めて押しやると、水蜜はむしろほっぺたから

体重を押し付けてくる。うざい、霊夢は思った。

そんな風にじやれついていると、遠くから一輪の音がする。

『次の対戦は巫女と幽霊チームときとり様と先生チームです!』

「お」

水蜜はほつぺたを霊夢の手に押し付けたまま、眼だけを動かす。次の試合は自分たちらしい。それに相手は霊夢と同居している者たちのものである。水蜜は同じ姿勢のまま霊夢を見ると、彼女も目線をコートの方へ向けていた。

「次ね」

霊夢は静かに言う。水蜜は何度か瞬きをしながら、その横顔を見た。できるだけ感情を抑え込んでいるような、そんな顔を巫女はしている。

★

雨の日というのは霊夢は好きでも嫌いでもない。

幻想郷にいる時も今でもそれは変わらない。

彼女一人には広い神社。地を叩くような、雨音。霊夢は縁側で降り続ける雨を見つめていた。適当に煎れたお茶ときとうに用意した煎餅にそこから借りて来た本を膝にして、ただ黙って読書している。

雨の日に外に出る用事はない。幻想郷の雨の日は静かである。こんな日には来客も

ほとんどない。偶には金髪の魔法使いや小さな妖精たちも自分の家で何かやっているのだと霊夢は思う。

家の中は暗い。当たり前である。電気などないのだ。だから、多少は明るい縁側にいるのだ。寒ければ中に入って火にあたるべきだろうが薪代も馬鹿にはならない。参拝客が少ない神社は常に金欠である。

かといって、霊夢はちつとも寂しくはない。元々「雨の日」とはこういう物なのである。彼女は意外と行儀よく座布団に座り、お茶をすすったりする。

なんてことはない、いつものことなのである。霊夢はそこになんの感慨もなく、感情もない。

ある日突然その世界に放り出された日も雨の日だった。

遠くに響く電車の音を聞きながら、曇天の空を見上げたことを博麗霊夢は覚えていゝる。彼女はその瞬間にはこれは「異変」であると直感した。そうであるならば彼女のやることは一つだけである。

ただ、現実には厳しい。異変に対して何とかしようという気概があろうとも霊夢は生活に迫られた。解決の前に生きなければいけない。

ひよんなことから出会った何人かの妖怪や妖精と共同でポロアパートに入り込めた時は、正直に言えば嬉しかったりもした。とはいえ巫女は巫女として何かするよりも労

働者としてなんとか生活を支えなければいけなかった。毎日は辛く厳しい工場勤務。寝言でパンの個数を数えていたと同居人に言われた時には頭を抱えた。

霊夢は雨の日が好きでも嫌いでもない。それは変わらない。

外の世界での初めての梅雨の時はむしろ毎日が雨で嫌になったことはある。

とある日のことを彼女はなんとなく覚えていて。別にどうという事もない日だ。朝は久しぶりの晴天で同居人と一緒に洗濯物を干していた。窓の外に付けられたぼろぼろの物干し竿を使っていた。

しかし、昼には空は曇り一気にバケツをひっくり返したような土砂降りになった。一瞬のことである。その時、霊夢は突如降り始めた雨に慌てて、立ち上がった。

「け、慧音。雨が降り始めたー！」

「あ。まづい！」

慧音と呼ばれた髪を一つにまとめて、赤い伊達眼鏡を付けた女性。就職活動の帰りでリクルートシャツにパンツルックである。霊夢と一緒に立ち上がって、窓に駆け寄った。二人は窓を勢いよく開けて、窓の外に掛けた洗濯物を掴んでは室内に放り投げた。

慧音が洗濯物のハンガーを引っ張った時、するりと掛けてあつたシャツが落ちた。外へである。下は剥き出しの地面だ。

「ああああ、お、おとしたあ」

「何やってんのよ慧音!!」

霊夢も驚愕の顔をしている。シャツは自分のような気がする。ひらひらと落ちて、水たまりにホールインするシャツ。声に反応したのか後ろからピンク色の髪をした少女、さとりが近寄ってきた。その後ろにひよこひよこ何故かゆで卵を齧りつつついてくる、金髪と青髪の小柄な少女達。ルーミアとチルノだ。

三人は窓に顔を近づけて外を見る。それぞれ窓ガラスに手をつけて、下をのぞくような顔。

「……とりあえず拾いに行かないといけないわね」

さとりが言う。

「め、面目ない」

心底そう思っているのだろう、慧音は申し訳なさそうに言う。霊夢は両手を組んでわずかに頬を膨らませている。

「とりあえず外に出て取ってきなさいよ!」

霊夢の言う通り外に出なければシャツは回収できない。慧音は肩を落として玄関へ行き、ビニール傘を手取る。100円均一で買った傘である。彼女ががちやりと玄関を開けるとそこに飛び込むように走るチルノ。

「あたいもいくつ!」

「うっ!？」

チルノは慧音に後ろから抱き付いた。それにのけぞる慧音。部屋中に響き渡る声に霊夢は呆れる、雨の日に好きこのんで外へ出ること「ばかね」という。しかしその横にいたルーミアも。

「わたしもいーこつと」

などと言いながら外へ出ようとしたから、霊夢は肩を掴んだ。

「あんだ、何か企んでない？」

ルーミアは霊夢をちらりと見る。それからにつこり笑う。

「失礼しちゃうわ」

言いつつ、手を振りほどいて早足に外へ出ていく。彼女は慧音の背中をチルノと押しながら足で玄関を締める。霊夢とさとりはお互いに顔を見かわして、殆ど同時に首を傾げた。

とりあえず霊夢は窓を閉めて、小さな円卓の前に座る。それからミカン箱の上に置かれたちよつと壊れたテレビをぼけえと見始める。仕事のない日はだいたいこんなものである。

さとりは台所から急須を持ってきて、お茶の葉を入れてリサイクルショップで買った電気ポッドからお湯を注ぐ。こぼこぼ音を立ててポッドの口から白湯が流れ込んでい

く。ポッドは表面が色あせた花柄である。

「美味しく入れるお茶の淹れ方は……どうすればいいのかしら」

さとりはひとりごちる。霊夢はチラリと冷たく見てから言う。

「安物お茶なんてどれも一緒じゃないの？」

「……みもふたもないわね……」

さとりは一応地霊殿の主である。いわゆる地主だろうか。彼女がこちらに来るまではスーパーやらで安物のお茶の葉を買うことなど想像すらしていなかった。さとりは100均で買ったお湯のみを二つ用意して、急須を傾ける。

テレビの音とともにさとりと霊夢が偶に話をする声がある。ただそれだけの時間である。内容と言えば他愛もないことである。夕飯の話や明日をどう生きるかの相談などである。

「それにしても、おそいわね」

時計を見ながらさとりがぼつりと言う。慧音たちはあれからまだ帰ってきていない。それに霊夢ははたと思いついた。彼女は手に持った湯呑をがんと円卓に置く。

「あいつら……。もしかして買い食いと言ってるんじゃないの？」

「……慧音が一緒にいるのよ？」

「ルーミアがあんなことについていくのはおかしい思ったわ、あいつがシャツを拾いに

行くだけでついていくやつじゃないわ」

いつもだらけている癖にアイランド・ヴィレッジに行くとは一番時間を使うのは金髪の少女である。いつもチルノと一緒にいるが霊夢は危機感を覚えて立ちあがった。

「ちよつと見てくるわ」

急いで玄関歩み寄り開ける霊夢。

そこに立っているのは青い髪をと濡れたシャツを持った長身の女性。少し暗い顔をしている。もちろん慧音である。

「すまん」

何故か謝る彼女。顔は暗いが後ろにいるチルノとルーミアはもぐもぐと口を動かしている。よく見ればルーミアの手には一つの赤い箱。それにはアイスが入っていることは霊夢も知っている。

「な、なに。月見大福買ってきてんのよ!」

外はモチモチ中ひやひや、それが「月見大福」である。その名の通り大福の形をしたアイスであった。霊夢は慧音の肩を揺らしながら、問い詰める。

「あんたがついていきながら!」

「わ、悪い霊夢。あのシャツはルーミアのだったらしくて泣かれて仕方なく……」

「そのシャツは私のよ! あいつの涙なんて信じてどうするのよつ。そんなのだから訪

問販売とかテレビ局とかにからまれるのよっ」

「え？ このシャツは霊夢のなのか？」

「え、じゃないわよ」

その後ろでニコニコしながら大福を頬張るルーミア。同じようにチルノも何故か大福の皮だけを食べる妙なことをしている。霊夢がそれをぎぎぎと睨んでいると、その後ろからひよっこりとさとりが顔を出す。

「まあまあ、霊夢。いいお茶菓子が出来た……と思えばいいんじゃないかしら」

「……………」

ちようどお茶を淹れたところでもあったのだ。霊夢はふんと鼻を鳴らして、ずかずかと部屋の中に戻っていく。慧音はしまったと肩を落としている。その彼女の肩をさとりは優しく。ぼんぼんと叩く。

ぞろぞろと狭い部屋に入り込むと、狭い部屋はさらに狭い。それに真ん中の円卓は小さいのでそれぞれの肩身も狭い。普通に横にいる者と当たる。

霊夢も慧音もさとりもルーミアもチルノも目の前に湯呑を置いているが、氷の妖精の前身だけは炭酸の抜けたサイダーである。熱いお茶をあまり彼女は飲まない。

「ちよつとルーミア！ よこしなさいよ」

霊夢がルーミアと箱を取り合っている。ああは言ったが霊夢とて甘いものは嫌いで

はない。慧音とさとりは苦笑いしつつお茶をすすする。

「あ」

と言いつつほっとする慧音。雨の降りしきる外から帰ってきてから、温かいお茶は美味しい。さとりに「おいしい」と素直に言うと、さとりも薄く笑って「そう……ありがとう」と軽く返す。

「チルノぱーすー!」

ルーミアは立ち上がってチルノに箱を放り投げる。霊夢は「あ」と言いながら、チルノに迫る。氷の妖精はいきなり渡されたアイスの箱を見て、中に手を入れて月見大福をいくつか手に取ると全部口に入れ込む。むしゃむしゃと噛む。

「あたいがたへる」

「ああ!!」と叫ぶルーミア。

「ああ!!」と同じように霊夢。

リスのように口を膨らませたチルノの両肩をルーミアと霊夢は掴んで抗議する。

「あんた何独り占めしようとしてんのよっ」

霊夢も少女である。普通に食べたいらしい。ぎやあぎやあと三人でわめきつつ、もがきつついつの間にかルーミアが二人の下敷きになりつつも、やっとこさ霊夢は箱を取り上げることができた。

中を見ればひとつしかない。殆どチルノに食べられている。霊夢はそれを掴んで、食べようとしたが、ふと思ひ直した。彼女は手で月見大福をちぎり、三つにする。

「ほら」

不愛想に霊夢はさとりと慧音に千切れたアイスを渡す。よく言えばワイルドで悪く言えば粗野であろう。普通はしないだろうが、普通はこのアパートの内部に甘味などないのである。

「い、いや霊夢が食べてくれ」

などと慧音が言えば霊夢も言い返す。

「食べないなら捨てるわよ」

「そ、それじゃあ。いただくよ」

一口サイズの小さな欠片を慧音はとる。さとりもため息をついたが、軽くお礼を言つて取る。小さな大福を三等分するなど貧しさの象徴のようである。だが、もぐもぐと三人は冷たくて甘いそれを食べた。

「少ない」

仏頂面で霊夢が正直に言おうと、慧音とさとりは吹き出してしまふ。それはそうだろう。

さとりは霊夢の湯飲みを引き寄せて、こぼこぼとお茶を淹れ直してあげる。甘いもの

の後にちよつと渋くて安いお茶。彼女の後ろではルーミアが狭いスペースをうまく使いながら寝ころんでいる。チルノは窓にべったり張り付いて「冷たい」などと言っている。

それにつられてか霊夢と慧音とさとりは窓の外を見る。口を開くのはさとりからだつた。

「良く降るわね……」

曇天の空が泣いているかのように降る雨。

「幻想郷の雨の日は道がぬかるむけど、コンクリートの道は便利だつたなあ」

なんとなく慧音も言う。剥き出しの地面であつた幻想郷では雨の後の道は危険すらも付きまとうくらいに荒れる。現代以前の社会は常にそうだつた、という部分が幻想郷には残っている。

霊夢はそれを聞きながら思う。

(幻想郷……)

見上げた空は「ここ」も「あちら」も変わらない。いつかは異変を解決して帰らなければいけない。霊夢は一度この狭い部屋を見回す。神社よりもはるかに小さなボロの部屋である。見るものすべてが中古品で壁ははげている。

それでも、

「……」

霊夢はお茶を飲みながら考える。

(雨の日は好きでも嫌いでもないけど、いつか)
雨の日は、嫌いになるかもしれない。

36話

なんでこんなことになったんだ、

とナズーリンは肉焦がしエビ焼く鉄板の前で腕を組んで考え込んでいた。彼女の両手には一対のヘラがある。鉄板の上にはじゅうじゅうと音を立てる野菜や肉、それにエビと主役の「そば」。つまりは焼きそばが出来上がりつつある。

それをナズーリンはヘラで器用にかき混ぜる。しゃっしゃとヘラと鉄板のこすれ合う音を軽快に刻みつつ、彼女は自問を繰り返す。

彼女は頃合いを見て濃い茶色なソースをソバに掛ける。広がる匂いが焼きそばを作っている、と感じさせてくれる。ナズーリンはそれをヘラでかき混ぜて、ムラのないように味付けする。

耳がびくびくしているネズミ。さらにちよつとだけ鼻歌が漏れる。

器用に紙の皿に焼きそばを置いて、ネズミはさらに次の焼きそばに取り掛かる。

「上がったよ。ほら持って行ってくれよ」

「はいはい」

ナズーリンの居る厨房の「仕切り」に机がある。その上に出来上がったものを置いて

おくとウエイトレスが持つて行つてくれるのだ。だからナズーリンも出来上がった焼きそばを置いておいた。

しかし、眼を離れたすきにそれはもうない。ナズーリンはそれをちらちと確認したただけで料理に集中した。

(これ……今は河童の店でやっているけど、自分でやったら儲かるんじゃないか?)

ヘラを操りながらネズミは思う。その時にはご利益のあるとか適当なことを書いておくとも客も増えるのではないかと思うのだ。

ウエイトレスはするりするりとごった返す海の家の中、無意識に人歩いている。顔はいつも笑顔だが、それに誰も気が付かない。手には焼きそばの皿を持つている。着けている絵プリンにはフリル。可愛らしいそれが揺れる。少しメイドのような恰好。

しかし、誰も気が付かない。注文すればいつの間にか料理が来ているという不思議さが体験できる。

外では今、巫女とその仲間たちの試合が始まっている。

ただ、ウエイトレスは忙しい。注文に手を上げる者がいれば、するりと近寄つて驚かせる。

「私あなたの後ろにいるよ?」

などと客を驚かせている。

その傍を一人の青い髪なウエイトレスが通る。恰好はやはり水着の上にエプロンだが無地の黒である。彼女は両手にビールジョッキを持って忙しく動き回っている。

海家は商売繁盛。眼が回るような忙しきである。

☆★

それは少し時間をさかのぼる

ぐーすか寝ていた河城にとりを起こしたのは、彼女の同胞だった。

ゆさゆさと体を揺らされたにとりは顔に掛けていたタオルを取ると、気だるげに身体を起こした。まだ眠たいのか指で目を擦っている。彼女は仮眠を取り始めたばかりの時に起こされて少しイライラもしている様子だった。

しかし、彼女の目の前に並んだにとりの同胞、つまりは河童の少女達はぎゃあぎゃあとか口々に「危機的状況」をにとりに説明した。

「なんだよ。私は金づ……聖徳太子じゃないんだから、一人ずつ喋ってくれ」

にとりは口を滑らしつつ河童達に質した。目の前にいるのはおかつぱとそばかすな河童と他数名である。それぞれがちらちらと相手を見つつ、譲りつつ最終的にそばかすが説明する。

余談ではあるが彼女達のおかつぱは手にデジタルカメラを握りしめながら、背に隠している。寝ている「被写体」は丁度良いプロマイドの材料であった。水着で無防備に寝

る者ではない。

それはそれとしてそばかすが説明する。それを聞いてにとりはがばりと立ち上がった。

「なんだって?!」 海の家になんかに人間達が入ってきているのかっ」

☆☆☆

ビーチバレーなどにとりの商売の戦略の一つに過ぎない。

見た目は美しい少女達を使って人々を集めてから飲み物を中心に売りさばく、そして巨大な副業としてプロマイドを販売する、その程度の物だった。いや、それだけで十分なほど利潤が求められるからこそその始めたのだ。

にとりにとって巫女との賭けなどおまけのおまけのおまけに過ぎない。

しかし、物事は予想より悪くなる時もある、逆に良くなりすぎることもある。

「な、なんだこりゃ」

にとりは絶句した。彼女は海の家の前からその光景を見た。

人で溢れかえる店内。子供連れからカップルや、それでいてどう見ても地元民としか思えないような格好の者。狭い店内に入りきれなかった者たちは、海の家近くにたむろしている。

レジには長蛇の列。

注文を泣きそうな顔で受けているのはおかつば河童。にとりを呼びに来た幾人かの河童達は慌ただしく仕事に戻っている。がやがやと熱気に包まれた店内で悲痛なほど必死に彼女達は働いている。

ビーチバレーに思ったよりも人が集まってしまった。

観衆は試合の終わった合間を縫って、どうにも関係者らしい海の家で物を買おうと津波の様に押し寄せている。明らかに従業員の処理できるキャパシティを超えている。

スポーツとビジネスは現代では切っても切れない状況にある。それは人がお腹を減らし、喉が渇くからこそ仕方のないことである。ビジネスとはスポーツから生まれるというより、人の集団に生まれるのかもしれない。

「こりやあまずい」

にとりはとつきに判断した。これは人員を増強しなければということである。自分は働きたくない。

彼女は顎に手を当ててわずかに考え込んでいると、となりから「ファンです」などとほざく人間が寄ってきたので走って逃げた。彼女も顔が売れてしまっている。

ぱっぱと砂を蹴りながら海の家から離れた彼女だが、既に脳裏に名案が浮かんでいた。

☆

「い、いや。私は次の試合もあるんですが……というか、私だけ働けばなしじゃない！」

雲居一輪は少し素な感じで怒った。

紫のビキニを着た美しい彼女も、既にビーチに人気者である。幸せかどうかは別の話である。さつきまで人の試合に実況もどきとしてかかわったり、いろんなことをして汗もかいている。逆にそれが艶をだしていることには気が付いていない。

危機的状況にとりは例によってビーチバレーの選手たちを流用しようとしていた。とりあえず雲居という考えもすでにとりにはある。

「そこをなんとか頼むよ。これも修行だと思つてさ」

「水着で海の家に通きに出る修行はわが宗教にないわよ」

「……そもそもあなたは飲酒の罰でここにいるんだろ。選り好みできる立場じゃあない気がするけどな」

「う……そ、それを言うなら水蜜もそうじゃないですか」

にとりはふるふると首を動かす。ポニーテールが揺れる。

「さつき聞いたけどあいつは本当に次の試合だから」

「だ、だからと言つて私ばかり……。またウエイトレスを昨日みたいにさせる気なんですよっ！」

「ああ、いや。別に。ソソナワケナイジャン」

「なんで片言なのよ」

「河童だからさ。ニホンゴムズカシイデスなんてね。……冗談はおいといて。ま、いいよ。忙しいのはほんとのほんだからさ、厨房で何か作ってくれよ。カレーくらい作れるだろ、あんただって子供じゃないんだから」

「……か、……れー?」

無意識に一輪は下がった。砂浜に一つ足跡を残しながら。表情がひきつっている。

にとり「はあ?」と心底呆れたような顔をしている。一応のところ博麗霊夢以外の少女はそれなりに人生経験ならぬ、妖怪経験を積んでいる。子供では断じてない。

「あんた、もしかして簡単な料理もできないのか? 幻想郷ならともかくこつちに来て多少はしただろ。もしかして……カツパ麺派?」

にとりは疑わし気に聞いた。一輪ははっとした。

「そ、そんなわけないじゃないじゃない。子供じゃあるまいし」

背筋を伸ばして少しだけ強がる。

脳裏に広がるのは最近の光景である。

——水蜜、今日のご飯なに? 皮むきくらいするわよ

蘇る情けない記憶。

特に話しかけている相手が目上ですらないところが物悲しい。扱った調理器具はピーラーだった。

それはとある日の記憶である。お寺に備え付けられたキッチンでの何気ない一場面であった。一輪はそれを思い出しながら脂汗を流している。この思い出の中の彼女は料理をしているような、していないような中途半端な立場にある。

雲居一輪とて長生きしている、ゆえに料理ができないわけではない。ただし、彼女の知識のメインは火打石だとかかまどだとか、少々レトロなだけである。遭難した時くらいは役に立つだろう。

個人的に思い出す料理の記憶と云えば川で釣った魚に木の枝を刺し通して、火であぶりながら塩をふりかけたことなどである、どちらかというといわゆる「男の料理」とでもいえるかもしれない。満天の星空の下で食べた魚は美味しかったが、だからどうしたとも言える。

余談だが彼女も電子ジャーに感動を覚えた一人ではある。

——え？ 無洗米って洗わなくてもいいんですか？ わあ、電子ジャーが炊き上がり
の時間を喋った！ すごいなあ。これって粟や稗も炊けるのかしら？

くだらない記憶も蘇ってきたところで一輪は首を振った。

「ま、まあ厨房で何かする程度なら問題ないわ」

少々女の子ぶりながら答える妖怪。眼を閉じて顎を少し上げて、そつぽを向きながら言う。内心の焦りを気取られない様に頑張っている。

にとりは疑わし気な目で見ていたが、猫の手以下でも借りたい状況ではある。深くは追及することなく、じゃあ任せたといいながら海の家に戻っていった。

☆★

雲居一輪とて永い時を生き抜いた妖怪である。その深い過去には深遠な知識と経験が存在する。だからこそカレーなどを作るとしても大して苦ではないだろう。というにとりという経営者の視点。

これこそが人生経験を積んでいる「であろう」人材が新しい職場では過度な期待を受けることになる。世に言う「即戦力」という言葉である。現代の闇の一つといってもいい。

一輪は河童に貸してもらった黒い無地のエプロンを水着の上からつけた。それから髪をゴムで結わえる。手をあげて髪を扱うと腋が見える。服を着ているわけではなく、水着のままなので肌の露出が多く、油が飛んでくると少し危ない。

彼女はごった返している海の家にこそこそと入るいなや、そんな風にエプロンを渡されて持ち場を持たされた。初日でやっていたのは売り子であることを考えれば、かなり仕事内容は変わっている。

「よし、がんばるか」

一輪は手に包丁の柄を握りしめた。その持ちかたは斬ることよりも、突くほうに向いている。それを見て厨房で働く他の河童はぎよつとする。一瞬作業が止まった。

それに気がつかない一輪。彼女も流石にカレーの作り方は知っている気がした。要するに野菜を叩き切り、お湯に沈めた後に黒い塊を入れてからかき混ぜればいいのだ。それからご飯とカレーを適当に皿に盛れば完成である。

一輪の前にはまな板が置いてある。その上に人参がある。皮は？いてある。彼女はだいたい食べやすいくらいのお大きさに切ればいいのだろうと、目分量でゴスンガスンと包丁を握りしめたまま切り始めた。

そこににへらと愛想笑いをしながらおかつぱ河童がやってくる。

「え？ なんですか？」

一輪は包丁を握ったままきよんとしている。おかつぱはカレーは手が足りているのだと言いながら、厨房の端にある鉄板を指さした。そこで作られているのは「焼きそば」である。

あれをやつてくれと、おかつぱは言った。なんとなく刃物を握っている相手に話しかけるのは怖い。さつきも日本刀系のアイドルに切り殺されそうになったのだ。それでも一輪に妙な怪我をされるわけにもいかないしと勇気を出しておかつぱは出てきたの

だ。

焼きそばであれば材料を入れて焼くだけであるから刃物は殆どいらぬ。既にキャベツなどは切つて用意してある。

「やき……そば」

一輪はそれを見て焦つた。カップ焼きそばであればよく水蜜が作るのと一緒に食べている。お湯を入れて捨てるような形である。そんな程度の知識しかない彼女だが、言われるままに鉄板の前に来た。

小ぶりの鉄板である。海の家のおける程度の物だからそれで充分なのだろう。既に油もよく塗つてあり、良く温まつている。後は作るだけなのだが、一輪は考えた。

焼きそばとてそう難しい料理ではないはずである。要は焼いてしまえばいい。後はキャベツやトッピングを入れるのである。そう思つて彼女は傍らに置いてあつたパツケージに入つたそばを取る。

表に「味沢匠先生監修 おいしい中華麺」と書かれたその中には黄色がかった麺が入つている。一輪はそれを両手で持つて首を傾げた。

「色が違うなあ」

いつもはもつと濃い茶色をしている気がする。彼女があたりを見ればソースの入つたケースも置いてあつた。

「なるほどこれを掛けるのね」

一人で勝手に納得しながらうんうんと頷く一輪。そして聞き耳を立てれば立てるほど不安になっていく周りの河童達。手順を確認しているという状況がかなりの不安を掻き立てる。とはいっても河童達も忙しすぎて教える暇もない。典型的な教育カリキュラム不足な職場である。

「あの」

その時厨房に二つの影。

虎の毛皮のように艶々した短い髪に白い水着を着た毘沙門天、そしてその後ろにめんどくさげな顔しているネズミが一匹。言うまでもなく寅丸星とナズーリンだった。

「また昨日のように店を手伝うようにとりさんに言われたのですが」

要するににとりがまた連れてきたのだろう。

だが寅丸の言葉に河童達は眼を輝かせて彼女を見た。いわば彼女は一輪の上司のような存在である。押し付けてしまえと、その彼女達の一見純粋な瞳は言っている。河童の一人が丁寧に敬礼を言いつつ、一輪の状況を詳しく説明した。

寅丸はふむふむと頷いた。

「なげかわしいことですね。永く生きていながら料理の一つもちゃんとできないとは、一輪。こちらに來なさい！ 私がちゃんとやきそばについて説明をしてあげましょう」

「えっ?」

寅丸は少し大きな声で一輪を呼ぶ。いきなり呼ばれてソースケースを落としそうになった。彼女は寅丸を見てから、少しむっとして歩いてくる。

「焼きそばの作り方を教えてくれるというけど、できるのですか?」

「一輪、仮にも毘沙門天の代理である私に失礼ではありませんか? そのようなことすらも分からないでどうするといふのですか?」

「ええー?」

一輪の癖の一つに親しかったり、身内だったりすると口調が崩れることがある。寅丸を胡散臭げに見る仕草も、少し不良のようである。眼を細めて下から上を見上げるような仕草だ。

寅丸はやれやれと肩をすくめる。一輪のように不心得者には正しい知識を授けてあげるのも仏の役割である。

(一)主人様が料理?)

失礼なのは毘沙門天の後ろにもいた。だが口を噤んでいるのでわからない。

寅丸は胸を張ってふふんと鼻を鳴らす。毘沙門天の代理として修行研鑽に明け暮れた彼女には焼きそばの作り方など手のひらをかえすよりもたやすい。

毘沙門天は戦いの神である。古来より人に限らず多くの動物や妖怪が相争ってきた。

時には神々としてその因果からは逃れることはできなかつた。そして戦いとは華々しく剣をぶつけ合うだけではない、ありとあらゆる手段を使つてでも相手に勝つということである。

つまり戦いの神とは賢くなければならない。

「ふふふ、良いですか一輪。そういう時はですね」

寅丸はタブレットを取り出す。ある意味英知の結晶のそれを指で押してインターネットに接続する。後ろでは口を開けて無言で驚いているネズミ。

(こいつ……あ、いやご主人様は毘沙門天だからわからないことはないとかいつていなかったか? な、なにググろうとしているんだっ!!)

ナズーリンはともすれば言つてはいけないことを言いそうになる自分を抑えて、ひよっこりと寅丸の肩ごしに画面を見る。見れば検索エンジンに文字を打ち込んでいようだった。

——「やきそばの作り方をどうすればいいか」 検索

(ああああ)

なんか恥ずかしくなってきた。ナズーリンは無言で両手を顔に当てる。

(そういう時は「やきそば 作り方」とかで検索すればいいんですよ!!)

最新の機械を使いつつ、考え方が古い毘沙門天。もしかして将来的に戦場に出るとき

もタブレット検索をする気なのかとナズーリンは背筋が寒くなる。そんな締まらない戦いの神は嫌である。

寅丸と一輪は一つのタブレットを覗き込み、肩を並べてみている。瞳にデジタルな光が反射してきらきらしている。それを見て河童達も思う所があるらしくナズーリンにアイコンタクトを送ってくる。どうかしろということだろう。

ナズーリンは大きくため息をついてから、顔を覆っている手、その指の間から赤い瞳で尼と毘沙門天を見る。もしかしたら料理などの分野だけで言えば人間の子供のほうが役に立つかもしれない。

「ご、ご主人様」

「なんですかナズーリン」

「……」

実際なんといえればいいのだろうか、聡明な彼女にもぱつとは思いつかなかった。しかし、このままでは色々が無様である。ナズーリンの眼が泳いでいる。必死に次の言葉を考えているのだ。寅丸は別段悪いことはしていない。

「や、焼きそばくらい私がつくりますよ。ご主人様と一輪は昨日と同じように注文とか取ったらいんじゃないですか？」

ナズーリンは自分の働くことなど望んでいない。しかし、今を打開するにはこれしか

なかった。寅丸と一輪は顔を見合わせた、それから寅丸はくすりとした。

「ナズーリンが自分から手伝いを言い出すとは殊勝なことです。いいでしょう、そちらはお任せします」

「は、はい。はは」

ナズーリンはお腹がきゆうと締まるような感覚を覚えたが、顔は薄ら笑いしている。逆に寅丸はナズーリンが自発的に手伝いを言い出したことが嬉しいらしくニコニコしている。一輪とこいしは「んー？」と並んで首を傾げている。

☆★

ぱんと緩やかに上がったボールを霊夢は軽くレシーブする。それを水蜜がまた拾って、上にあげる。試合までの簡単なウォーミングアップである。水蜜は一つ打ち返すときに「そーれ」だとか「そりゃ」だとか声を出している。

明るく、楽しげな声は船幽霊であると信じられない。いや、妙なくらいにご機嫌なのである。さつき間違つて霊夢が「お姉ちゃん」と口走つた時に思いつきからかえたのでほくほくしている。

逆に霊夢の表情は少し暗かった。

「れーむさん」

「なによ水蜜」

パスをしあいながら話し合っている。

「楽しくやりましょうね」

「……………」

霊夢はその言葉に答えることができなかった。頭にはなんとなくアパートでのたわいもないことが反芻している。

37話

いっばい恨んだ。

いっばい憎んだ。

いっばい見てきた。

いっばい考えた。

考える時間はいっばいあつた。

笑顔で話せるようになった。

気さくに問いかけられるようになった。

水の底に沈んでいく感覚なかでも、

魔界の暗い闇の底でも。

自分は自分だったのだ。

それなりに楽しく死んでいるけど生きていける。

救われた恩を忘れることはない。

難しく考える必要はない。

嫌われるのには慣れている。

いつか終わるのはなんてことはない。

たくさん苦しんだから、苦しんでいる人の顔だけはわかる。

それは

損な役回りなのかもしれないけれど

平気だ。

☆★

試合の時間になった。

試合会場に戻ってきた観客は今か今かと「古明地さとり様」の登場を待っている。あれだけ「来るよ」と横断幕に書いてあったのだ。来ることに何故かみんなが期待を持っている。一回戦で「古明地こいし」があれだけ可愛らしく活躍したことも拍車をかけた。

それに何故か審判台に縄で括り付けられた白髪のアイドルもいる。口にホイッスルを咥えて息をするたびに「ふえ〜」と気の抜けた音がするのが哀れである。これは負けた者の定めである。

そのさとり。頭に黒いバンダナを巻いて上白沢慧音の陰に隠れている。ピンクの水着は上下ともフリルが付いている。それにお腹周りには無駄なものが付いていない。小さなおへそを何故か隠そうとする仕草。

慧音は上下赤いビキニとパーカーを着ている。趣味ではない。河童に勝手に選ばれ

たのだ。

「さとり、そろそろ行こう」

「こめ、こめ、こめ」

手に「米」の文字を書いているさとり。中々に追い詰められている。彼女のペットたちが存分に宣伝してくれたおかげで雲居一輪と一緒に有名人、いや有名妖怪になってしまった彼女である。

慧音はポニーテールにした髪を払い、苦笑する。

「そろそろ霊夢達も来るわよ」

「そ、そうね。一回戦から身内と当たるなんてね……でも霊夢はあの漫画妖怪と一緒に居るから……」

漫画妖怪。妙な妖怪もいたものだなと慧音は思った。言うまでもなく陸上のキャプテンのことだろう。意を決したのかさとりはぱんぱんと顔を叩いている。気合を入れて入れているのだろうか、ほっぺがそのたびに揺れて愛らしい。

(身内か)

慧音はそんなさとりにも。さとりの言葉にも小さく微笑む。いつの間にかそんな言葉で表す

「おねーちゃん」

ぬっとそのさとりの後ろから出てきたこいし。何故かエプロンを付けている。彼女はさとりの背中をぐいぐいと押し、試合会場まで運んでいこうとする。

「がんばれー」

「ちよ、ちよつとこいし。待って」

抗議するさとりだが、そんな風に近づいてくる古明地姉妹を観衆は目ざとく見つけた。だんだんと「さとりさま」「こいしさま」と何故か様を付けられた妹の名前と共にざわめきが大きくなっていく。

観衆が自発的に道を開ける。妙に気が利いている。まるでモーセのようである。

さとりの頭から黒いバンダナがとれる。人垣の中を歓声とともに歩き出した彼女の頬は赤い。今すぐにでも逃げ出したい。しかし、それでも生活の為に何としてでも勝たなければいけない。

何故かこいしがさとりと手を繋いで天に向けて掲げる。そんな姉妹に何故か拍手が起きる。慧音はその後ろから早足で、かつさとりとちよつと距離を開けながら試合会場に入った。

「いやあ。大人気ですね」

先に来ていたのだろう。コートの中で腕組をしている一人のキャプテンが巫女に話しかける。

「そうね」

とあしらうように言う巫女こと博麗霊夢。彼女にとつては慧音とさとりは「身内」なのである。いつの間にかそうなったのか、自分でもよくわからない。それについて先ほどさとりも同じような表現をしていたことを彼女は知らない。

「そういえばあの二人はバレエうまいんですかね?」

と水蜜が聞けば、

「本人に聞きなさいよ」

とにべもない。だが飽きることなく水蜜は話しかけてくる。周りの大歓声も彼女は聞き流しているかのようである。だが時間は進む。試合時間になり哀れなアイドルが笛を慣らす。ちよつと現状に泣いている。手が使えないので笛を離せないから話せない。もしも笛を離せば「恥ずかしい写真をばらまく」と脅されている。

——びい——

笛の音が響く。哀愁が漂っている。

それにコートの真ん中でさとりと慧音、それに霊夢と水蜜が向かい合った。慧音は少し困ったような顔、水蜜はにこにこ、霊夢は仏頂面でさとりは水蜜を睨んでいる。いろんな感情があるのだろう。

さとりの眼は本気だった。勝たなければいけない。だからこそ霊夢にもちゃんと

言っておかなければいけないと感じた。

「霊夢。悪いけど本気でやるわ……。その船幽霊に賞品を渡す訳にはいかないのよ……」

霊夢は「のぞむところよ」と本当に望んでいるのかどうかわからない口調で答える。米を求めて戦う地霊殿の主も堕ちたものである。しかし、それを聞いた水蜜は言った。

「え？ 賞品ですか？ かつぱの？ げふっ」

霊夢の肘打ちが水蜜の細いウエストに入る。巫女は言う。

「米のことでしょ」

「……うう。幽霊でも痛いものはいたいんですよ。そんなの勝てば霊夢さんに全部あげますよ」

その言葉に、さとりが本気で反応した。

「え？」

ぱちくりと眼を瞬かせて、霊夢と水蜜を見る。霊夢はため息をついた。

「水蜜あんた本気にされているわよ」

「いやあ。本気なんですけどね。お米なんていらないうすし。あげますよ」

「そう。だってさ、さとり」

霊夢の声にさとりははっとする。その顔はいつもの穏やかな顔になっている。張り

つめていたものがそっくり抜け落ちていた。横で慧音が苦笑しつつ言う。

「なんだか悪いな。それにいつの間に霊夢は村紗さんを名前で呼ぶようになったんだ？」

「なっ、いや、こいつが呼べてたってんのよ！」

水蜜は両手を組んでうんうん何故か頷いている。

「霊夢さんがどうしても、とおお。もう肘打ちは見切りましたよ霊夢さん」

繰り出された鋭いエルボーを軽やかに交わした水蜜は足を取られて砂浜に倒れた。だが、霊夢は気にせず、というよりは無視した。試合前なのに緊張感がそぎ落ちていく。特にさとりは憂鬱そうな顔になった。つまりはいつもの表情である。

「いらいらー。しごきんしでーす」

そこを正したのは古明地こいしだった。何故か審判のような顔で彼女達の間にいる。他の四人は「なんでいるの？」と顔を見合わせた。

☆★☆☆

一戦目には虎とこいしプラスネズミの激闘。

二戦目にはニューヨークリアなパワーと小細工にアイドルと閻魔の戦いであった。それぞれの思いを掛けた気合といろんな小細工の入り乱れた戦いだったが、この三戦目であの戦いは少し違った。

気合が抜けている。互いに近い間柄だという事もあるかもしれないが、試合前に水蜜が相手に譲歩したことが止めになつていた。

会場が笑い声に包まれていた。

ぽーんと上がったボールの下に入り込むのは緑の水着の船幽霊。ショートカットな彼女は舌で唇を嘗めてから狙いを定める。

「よし、おーらい」

といんぐりっしゅを使う。本人も意味はよくわかつていないが、そういう物らしい。彼女は両手を組んでボールを上げる。するととんでもない方向へ向かつていく。

「あれ?」

と可愛く小首を傾げる水蜜と、必死に追いかける博麗の巫女。霊夢はコートの外に落ちそうになったボールをダイビングして無理やり上げる。砂煙が上がり、ぱちぱちと拍手が起こる。セルフピンチである。

「水蜜!! どこ上げてんのよっ!」

「すみませーん、おーらいおーらい」

抗議は流して今度は戻ってきたボールをしつかりとさとり達のコートへ返す。

「わわ」

と慌てるのは慧音だった。意外と落下してくるボールを取るのはタイミングが難し

い。弾幕ならばよければいいだけなのだが、ちゃんとはじき返さないといけないのだ。ただ少し足が砂に取られた。

よろけた慧音はそれでも踏ん張る。そしてまるでサッカーのように胸でトラップする。普通やることはない。何故か歓声が上がります。

それでもほとんどボールは上がらない。そこにさとりが奔る。

大歓声。

さつきからこんな調子である。さとりが何かすれば声上がり。原因は観客席の前で「せーの」と音頭を取って観衆を無意識に操っている妹のせいだろう。プラカードが途中から出始めているのはどういことだろう。

ただ、実際さとりは意外に働いていた。砂を蹴り、素早く動いた彼女。だが手では届かない。

だから慧音からの「パス」に足を延ばす。美しいトウキックにボールが天高く上がり、今太陽と一つになる。もちろん謎の拍手がある。流石さとり様だ、と意味の分からない称賛の声にさとりは赤面した。

さとり側はサッカーのようなことになっている。空から落ちてきたボールはネットの真上。ネットを挟んで対峙するのは慧音と水蜜。なんとなく身長が大きく見える慧音も、実はそこまで変わらない。

落ちてくるボールは慧音側。チャンスである。

水蜜はブロックをするために両足をそろえて、膝を曲げる。

二人は同時にとんだ。

ばっこーん。慧音のスパイクが水蜜に直撃する。

「あああああ」

砂に落ちて転がる船幽霊。顔を抑えている。しつかり顔面でブロックできたのだ。

「だ、大丈夫か」

と心配する慧音の後ろにボールが落ちる。アイドルが悲しい笛を吹く。言葉も出せない不遇な状況である。よく考えれば霊夢は刀をどこにやったのかもわからない。とにかくこれで霊夢チームの得点である。

霊夢は倒れている水蜜に近寄って。

「この調子よ」

と激励の言葉を掛ける。この調子で当たって砕けてしまえということだろう。

「ひどいなあ」

のっそり鼻を抑えながら起き上がるキャプテン。そんな会話に周りから笑いが起こる。一番前でニコニコしているのは古明地こいしである。いや、彼女だけいつも何かしらの理由で笑っている。

慧音はおろおろしている。冷やしてきたらどうだと言ったりするが、水蜜は「大丈夫ですよ」と返して親指を立てる。軽い。

そのように和やかに試合は進む。お互いに真剣さが足りないこともあり、選手である彼女達も笑いながらである。特に霊夢から見ればさとりの妙な持ち上げられ方が滑稽で少しおかしい。

「いくわよ。さとり様！」

霊夢はサーブの前にそんな挑発したりする。さとりはその声に関か言っている。聞こえないのだが、おそらく「やめて、れいむ」などと言っているのだろうと霊夢は考えた。聞こえなくても何を言うかくらいはなんとなくわかる。

「あ」

霊夢の頬が緩んでいる。コホンと咳払いする。いつの間にか冗談まで交えながら、楽しんでしまっていた。負けるわけにはいかないはずの戦いなのである。彼女はボールを片手で上げて、前が出るジャンピングサーブをする。

ぱんとい音が響いて、一直線にさとりのコートへボールは向かう、はずだった。ネットに引つかかる。

それを水蜜が拾って「どんまいどんまい」などと言いながら投げ返してきた。何故か相手コートの慧音も「気にするな」などと言ってくる。建前上は敵のはずなのだ。

ルールは河童独自の適当ルールである。サーブが失敗すればもう一回である。つまりダブルフォルトから敵の得点になる。霊夢はもう一度ボールを構える。

——負ければ

一瞬考えてはいけないことを考えた。

ボールが上がる。霊夢は今度はその場で止まって撃つ。あたりどころが悪かったのか、自分のコートに砂に刺さって、転がっていく。

「わっ」

と水蜜が健康的な足を上げて避ける。彼女は振り返り、霊夢に近づいて言う。

「気にしない気にしない。これからですよ」

と明るく歯を見せる。得点が相手に行っても気にすることなどない。

ただ、霊夢はその顔を見ながら低い声で言う。

「悪かったわ。次は失敗しないから」

「ええ、お任せしましたよ」

霊夢の横の水蜜が通る、流し目でどことなく沈んでいる彼女の表情を見ながら。「ああ、そうですか」と口した。水蜜は少し顎に手をあてて、くりつと眼を動かす。それから審判のアイドルに向かっていった。

「タイムお願いますっ」

ぴい〜と笛が鳴る。なるたびに何か悲しみが湧いてくる音である。審判台の下には河童が待機している。逃げられるものではない。いつか河童を一匹残らず駆逐してやると、アイドルは思っている。天狗共々だ。

「なんでいきなりタイムなんてすんのよ。水蜜」

霊夢はいぶかし気に聞いてくる。水蜜は笑顔のまま、顔を近づけてくる。

「この試合勝ちましようね。霊夢さん」

「はあ？ 何をいまさら言ってるのよ」

「せっかく、試合前にお米の件で油断してもらったんですから」

「……あんだ、まさか。全部分かって」

「……言ったでしょ？ この遊びは霊夢。私は貴女の味方だつてね」

村紗水蜜の言葉が霊夢の耳に冷たく響く。

「あなたはこの勝負で勝って、異変の情報を手に入れるんでしょう？ 幻想郷へ帰る為に」

耳元で喋る船幽霊の言葉に霊夢の体がほんの少しだけ震える。小さな動きである。水蜜はそれを見逃さない。だからわかる。霊夢は抱え込もうとしているということ。水蜜も過去に一人で何年も何十年も恨みや憎しみを抱え込んだのだから、それは出口がないと知っている。

（永く生きるのは善し悪しだなあ。死んでますけど）

嘆息しつつと眼を閉じる。それからゆっくりと開けた彼女の声は、いつもの明るさを取り戻していた。

「まあまあ、霊夢さん。お米は全部れーむさんの物ですから、誰も損しませんよ？ それじゃあ『作戦』の通りに張り切っていきましよう！」

含みを持たせた言葉。水蜜はそれから霊夢の肩を叩く。彼女は自分のポジションに戻っていく。それは霊夢から一步一步遠ざかっていくかのようにある。

(やだなあ……………)

☆☆

ぱーんと砂に突き刺さったサーブ。慧音が身体で留めようとしたが間に合わなかった。ぴーとなる笛が試合終了を告げる。あれから霊夢達が僅かに優勢なシーソーゲームになった。それでも結局最後に霊夢が決めた。

「すまないさとり」

「いえ、いいわ」

と汗で肌を煌めかせている慧音の手をさとりが取ると、周りの観衆からも拍手が起きた。こいしは姉が負けたがそれでも口で「ぱちぱちぱち」と言ってくれている。もちろん手も動いている。だが、直ぐにどこかに消えた。

さとりは神出鬼没な妹に苦笑する。前髪をかきあげて息を吐く。相手コートを見れ

ば靈夢と水蜜が何か話している。どことなく靈夢が嬉しくなさそうな氣もしたが、所詮遊びである。いつものことだろうとさとりは首を振った。

後は靈夢達を応援すればいい。最後にお米を持って帰れば何も言うことはない。

さとりはそう思いコートを後にする。後ろから拍手が鳴りやまない。正直やめてほしい。慧音もパーカーを着こんでから早足に追いついてくる。

次の試合はくじ引きするまでもない。残ったのはあまり河童と天子と聖である。よく考えたら一番強そうだとさとりは思った。彼女は慧音と肩を並べて歩く。途中でサインをせがまれた時は「行つていません」と言つておく。

そんな二人の肩を抱くように後ろから誰かが飛びついてきた。

「！」

「なんだ」

さとりは眼を見開き、慧音は声を出して驚く。見ればそこにいたのは村紗水蜜だった。彼女もその肌にくっすらと汗が浮かんでいる。

「いやあいい試合でしたね」

なんとなくうさん臭さを感じたさとりは頷くだけにしておいた。慧音は「そうだな。勝てると思つただけだな」と純粹に答えている。水蜜はそれに愛想よく笑いかけながら、二人を誘う。

「ちよつと付き合つてくれませんか？」

☆★

にとりたちの海の家から少し外れた場所。そこに昔は同じように店をやっていただろう廃屋があった。中は陰になっていて、少しだけ涼しい。水蜜はそこら辺からてきとうに座れそうな「何か」を4つ集めて並べた。石だとか、木箱だとかである。又は機関戦車トーマスの大きな玩具もある。

「あんだ。何を考えてるのよ」

霊夢は木箱に座りながら言う。手にはラムネの瓶。

その後ろには慧音とさとりがいた。おなじような透明なビンの中、しゅわしゅわと音を出す冷たいラムネを持っている。

「いやー。せっかく試合したのでお近づきになればと思ひまして。とりあえず乾杯しましょう。ジュースしかありませんけど」

霊夢は胡散臭げである。なんでいきなり渡されたラムネで乾杯しないといけないのかわからない。だが、水蜜はまあまあいいながら自分も持つ。慧音とさとりと霊夢と水蜜はそれぞれ瓶を上げて。

「かんぱーい」

と打ち合わせる。ラムネでしたのは初めての経験だろう。

だが火照った体に冷たいラムネが美味しikai。慧音はごくごく飲み、さとりはビールに苦戦している。霊夢は両手で持って少し上品に飲んでいる。水蜜は何故かニコニコしている。

別に何をするわけでもない。彼女達はそれぞれ座り、さとりはトーマスに乗る。

「なにかしら……この顔の生えた……ナニカは？」

さとりは疑問に思う。初めて見たが怖い。青い塗装も「顔」の部分もさび付いていて、恐ろしい。霊夢は言う。

「怨霊には慣れてるでしょ？」

「これ……怨霊なの？ 霊夢」

さとりは首をひねる。慧音も気味悪げに見ながら言う。

「いや流石に何か遊ぶ道具だろう、あのはろういんとかで使うような」

「どうやって使うのよ」

霊夢が言う。慧音も「も、持ち上げて？」などというからさとりと霊夢はくすりとした。これを持ち上げて街を練り歩けば怖いだろう。

それから他愛もない話をしながら、試合の話を少ししていく。先ほどからずっとそうだが、霊夢達が集まるとなんとなく和やかになる、お互いが気を許しているような関係なのだろう。

と水蜜はラムネを持ちながら思う。少しだけ、太ももを閉じてラムネの瓶の先を咥える。霊夢と一緒にいるのはどう見ても人ではない。幻想郷ではありえない光景が、緩やかに過ぎていく。おそらく未来には――

(なるほどね)

すーと息を吸い。はーと吐く水蜜。お腹に力を込めて、ラムネは空になるまで一気飲み。それから地面に置く。彼女はのそのそと霊夢の隣に行く。何をしに来たのかわからないが霊夢は横に座った水蜜を邪険にはしなかった。

水蜜は会話に自然に入るように、爆弾を投げた。

「いやあ、さつき河童とお話をしましてね」

慧音とさとの前で水蜜は話し始める。霊夢はびくりと肩を震わせて、眼を開く。何を言おうとしているのかわからない船幽霊を呆然と見る。

「このビーチバレーに勝ち残った場合に特別な商品をくれるという話をしたんですよ」
「そうなのか」

水蜜の言葉に慧音が軽く反応する。普通であれば「特別な商品」を水蜜達だけにあることに抗議したり、不快感を表すべきかもしれないが慧音にしろさとりにしろあまり欲が深くない。反応は素朴である。そもそも霊夢が手に入れば結局は独り占めすることはないと本能的にわかっている。

「それで？　なんの景品を貰うことになったのかしら」

だからさとりも簡単に聞いた。霊夢はその言葉に目線を泳がせる。水蜜は彼女をちらつとだけ見て、口を開こうとする。だが、何か言う前に霊夢がその背中に軽くパンチした。言うなどということだろう。

「ぐえっ」

水蜜は少しふざけた悲鳴を上げる。全部わかってやっている。霊夢はいつの間にか立ち上がっていた。

それから水蜜の前に出て、慧音とさとりは笑いかけながら言った。その笑顔はなんとなく乾いている。慧音とさとりは少しいぶかし気だった。それに霊夢は気が付きながらも演技を押し通そうとした。

「にとりとさつき話したのはあれよ。この勝負に勝てばもうこんな仕事やめて帰っていいっていうことよ」

できるだけ、という言葉が似あうほどに「明るく」喋る霊夢。この場だけを乗り切ろうとしているその態度はまだ幼い。その必死なほどの虚勢はすぐに崩れることになる。

「さつき霊夢さんと河童が話したのはこの異変で知っていることを話してくれる、ことですよ」

「…………あ」

水蜜の冷たい声に靈夢は言葉を失った。数秒の間をおいて靈夢は、勢いよく振り返り、

水蜜の体を海の家の壁に両手でたたきつける。木造のそれが揺れる音が響いた。

「あんたあ。どういうつもりよ……」

敵意の籠った眼だった。靈夢は水蜜を抑え込んだまま歯を剥き出しにした表情で言う。その声音は意外に静かで、心の底から滲んでくるような低い声だった。

それを見返す水蜜の両手は下がったままである。抵抗の素振りすらも見せない。ただ、その深い色の瞳で靈夢を見返している。暗い海の底のように何があるかわからない、何を考えているのかわからない深い色の瞳。

「靈夢さんは真面目ですねー。あんな河童との約束なんて律儀に守るなんて」

その瞳を軽く閉じて、わざとらしく明るく言う水蜜。靈夢はその水蜜の仕草に馬鹿にされたように感じてさらに彼女を睨みつけた。河童との条件は言っではいけないという事は約束したことなのだ。それを破ったのは水蜜である。

靈夢は拳を握り込んだ、震えたそれを振り上げようとしたところで、後ろから抱き付かれる。

「お、おい靈夢。やめるんだ」

慧音が靈夢に抱き付いて、暴れる彼女を何とか水蜜から引きはがす。さとりも同じよ

うに靈夢を抑えこむ。それを水蜜はさつきと同じような瞳で見ている。静かな、さざなみすら立たない表情だった。

「水蜜！　なんで、なんでいうのよっ」

靈夢は慧音とさとりを振り払おうとしているが、二人はそれをさせないために力を込めている。ここまで感情的になった靈夢を二人はおそらく初めて見た。

「落ち着け靈夢」

「うっさい、離しなさい慧音！」

火照ったように赤い顔で靈夢は慧音もにらむ。その顔は怒っているようにでいて、どことなく困っているようでそれでいて悲しんでいるような。慧音はそんな不思議なことを思った。だが、靈夢に今好きにさせるわけにはいかない。抱き付いたままさらに力を籠める。

なんとか落ち着かせようとする慧音たちを無視するかのようには水蜜が言う。

「靈夢さんは隠し事がへたですね」

「……」

その挑発めいた言葉に靈夢は何も返さず、ただ「感情」の籠った眼で水蜜を見た。

怒りすらも通り越した靈夢の瞳に水蜜は両手を後ろで組む、ちよつとだけ萎えそうになる。だが靈夢はおとなしくなった。感情の線を超えたのかもしれない。

慧音は水蜜に言う。

「あんたも、下手に挑発しないでくれ」

それに水蜜は両手を上げて応える。言葉では返さない。わかったと仕草で示す。

ともかくおとなしくなった霊夢にさとりが語りかける。声音は優しい。いつもそんなのだ。

さとりは薄々霊夢の挙動がおかしいとは感じていた。それを気のせいだと思っていた。だが、今はその理由がなんとなくわかってくる。

「霊夢」

「……」

「霊夢」

「……」

答えずに水蜜を見続ける霊夢にさとりは語りかけ続ける。

「さっきの話だけ……にとりがこの異変にかかわっているのね……」

「……」

「それでこのビーチバレーに勝てば知っていることを話すと言われたのね……」

「……そうよ」

やっと反応した霊夢にさとりは小さくうなずく。霊夢はどもりながら言う。いまさ

ら隠しても意味はない。

「このいきなり、放り出された異変だけど、やっと解決の糸口が見つかった、のよ」

作ったように考えながら言っている。さとりはそれでも頷く。うんと小さく相槌を打ち続ける。

「全部終わるまで、他のだれにも喋ったらいけないって、にとりは言ったわ。だから、だから。それだから私はあいつが、水蜜が許せないのよ」

さとりに詳しく事情を説明する霊夢。だが言い終わってから唇を噛んで少し俯いた。彼女の言うとおりであるのなら「異変」に対する手掛かりが無くなってしまいうとに怒り、落ち込んだとでもいえばいいだろう。

霊夢はそう自分に言い聞かせるように言う。

「せっかく。糸口を見つけた。のよ。それを台無しにされて、怒らない、わけないじゃない」

「そう……」

さとりはそんな霊夢の肩に手を置いた。彼女は霊夢に顔を近づけて、小さな声で囁くように伝える。

「ここにきて……私は心の声が聞こえないことを喜んだわ。今はそれが少しだけ悔しく感じるわ……」

さとりは続ける。

「そうね。にとりがそういつていたのなら……博麗の巫女であるあなたが解決に動くのなら、きつと近いうちに……たぶんみんな帰ることができのね」

霊夢は少しだけ沈黙して、それから合わせるように「そうね」と静かに答えた。さとりはその言葉にも頷いてあげる。彼女も帰ることは望んでいる、いや帰らなければいけないとは感じている。だから霊夢の言うことは素直に受け入れた。

さとりは唇を少し開く、それから閉じる。何かを言いかけた。だが言葉にならなかった。

「もどかしいわ。言葉は難しいものね……」

言いたいことが言葉に出来ないときとりは思った。なんといえいいのかわからな
い。今の霊夢に何を言えば、伝わるのだろうか。

四季映姫と同じように無理をして能力を使い、相手の心を見てしまえば、それは分かるのかもしれない。だが、さとりはそれをしたくないような気がした。

たぶん、今の霊夢の心に映っているのは他愛もないことだとさとりは思う。とても他愛のないことであると「わかる」。おそらく、さとりの思い出している光景と同じようなことを霊夢は考えているのだろう。どうせ何もないアパートのことだろうと思う。

ふと、霊夢を後ろから抱いていた慧音の腕に力がこもった。霊夢の頭に慧音は額を当

てながら名を呼ぶ。

「霊夢」

「なによ。そろそろ……離れなさいよ。熱いんだけど」

霊夢はあくまでぶつきらぼうに言う。慧音からは見えないが、その視線は慧音もさとりも水蜜もない虚空に向けている。そんな彼女を慧音は叱るように言う。

「……………お前は巫女なんだ。霊夢の言う通り異変を解決する糸口があるのなら、最後までやりとおさないといけない」

「……………何が言いたいのよ」

「この異変は解決しないといけないんだ。どんなに、思う所があつたとしても」

「だから！ なんなのよ。私は最初から、最初からずっと」

霊夢は慧音を振り払おうとする。逆に慧音は離さない。

「解決して、幻想郷に帰るっていつているでしょ!!」

霊夢は力づくで慧音を振り払う。そして振り返る。

そこにいたのは真っ直ぐに霊夢を見ている上白沢慧音の姿だった。霊夢はぎりと奥歯をかみしめて、彼女に食ってかかる。彼女は慧音の来ているパーカーの襟元を掴んだ。赤い顔で睨みつける霊夢。

「あんたらと……、あんたらと一緒にいるのは仕方ないからよ。訳の分からないまま

こつちに来てから、成り行きで一緒に暮らしているだけなんだ！ チルノは馬鹿で食べることで遊ぶことしか頭がないし！ ルーミアは腹黒いし何も手伝わないし、あんたは無職でおせっかい焼きで、さとりは他のやつを甘やかすしっ!!」

霊夢の声が大きくなっていく。慧音はそれから眼をそらすことをしない。

「いつもいつも狭い部屋で寝るのは暑苦しいのよ。チルノは蹴るし。あんたは大きいし。朝早く起きて、さとりにどやされて仕事行つて。帰つてくれば部屋の中うるさい。なんで毎日毎日おかずの取り合いなんてしないといけないのよつ。一人でいるときはもつと、もつと落ち着いていたわよ」

荒い息をついて、霊夢は叫ぶ。

「私は幻想郷にか、帰れた……帰らないといけなのよつ！ あ、あんたなんか、あんたらなんか言われなくてもわかつてる！」

霊夢はともすればへたり込んでしまふような自分の足に力を入れる。少しうなだれながら彼女は慧音のパーカーを離して黙り込んだ。離された慧音は近くにいたさとりと眼で会話する。こんなことができるのもしばらく暮らしていたからだろう。

慧音とさとりは霊夢に少し近寄って、それぞれ彼女の肩に手を置き自分の額を霊夢の額にそつと合わせる。霊夢が下を向いているからお互いに顔は見えない。それから静かに言葉を紡ぐ。

「霊夢。私は今の生活が好きだ。いつも大変でいろいろと悩ましいことも多いけど、それでも楽しいと思っているよ。お前にもかなり迷惑をかけてしまつて悪いと思つてる」

「そうね……………霊夢はずつと頑張つてくれているわ。私もうまくいえないけれど……………こちらでのことは、良いこともたくさんあるわ……………」

「……………」

「なあ、霊夢。私やさとりは少しだけお前より永く生きて居るから、ほんの少しだけいろんなことを知っているつもりなんだ。……………それでも何かを終わるときは寂しいこともある。それに少しずつ慣れてしまつただけなんだ」

「……………いつ、私がそんなことを言ったのよ」

「ああ、言つていないな……………こうやつてお前が怒つてくれないと気が付くことも私にはできないんだ……………ごめんな」

「なんで、謝んのよ」

「……………ふふ。霊夢はどんな時でも変わらないな。私よりもずつとしつかりしている。でも霊夢……………それでも、たまにでいいから」

「慧音は額を優しく動かす。霊夢に何かが伝わればという仕事。さとりはうつすらと微笑んでいる。」

「悩みを分けてくれ……知つての通り、私は抜けているところもあるからそこまで役には立てないかもしれないが、私もさとりもできるだけのことはしてやりたい」
霊夢は唇を噛んだ。それから細い声で絞り出すように言う。霊夢は慧音とさとりにだけ聞こえるように、たつた二文字だけの言葉を伝える。少し湿った言葉で、少しだけ嬉しさのにじむような言葉だった。

☆★

三人を見ていた水蜜はちよつとだけ下を向いて、つま先で砂を蹴った。背けた視線をどこに向けていいのかわからずにきよろきよろとあたりを見ている。それからもう一度霊夢達をみてから、こつそりとその場からいなくなろうとして踵を返した。

なんでもない、平気である。

ゆつくりと歩く。気が付かれないよう。

「あんたどこに行く気よ」

「ぐええ」

声と共に水蜜は後ろに引つ張られた。水着の彼女を引つ張る場所など限られている。肩ひもを後ろから霊夢が押えて引いてきた。

後ろにいたのはいつものようにふてぶてしい態度な博麗の巫女である。胡散臭げに水蜜をみるのはいつものとおりである。彼女は引つ張りながらぶつきらぼうに言う。

「で？ あんたどこに行こうとしていたのよ」

「れ、霊夢さんそこは駄目です、さつき一輪にやられて取れたじゃないですか！」

「ごまかそうとしているんじゃないわよ」

霊夢は「ああ？」とまるで不良少女のように口を開けて威嚇するような目で水蜜を見る。彼女は肩ひもを引つ張つたまま前に進もうとしている。水蜜は慌てる。

「れ、霊夢さんどこへ？」

「ビーチバレーの次はたしかあんたの所のやつでしょ？ 見に行くわよ」

「……へ？ まだやるんですか？」

「あたりまえじゃない。何言つてんのよ」

「私とですか？」

「……………あたりまえじゃない。他に誰がいんのよ」

霊夢はぱつと手を離す。水蜜は指で肩ひもを直しつつ、あえて言う。一度桃色の唇を嘗めてから。わざと笑いながら明るく踏み込む。他の物ならば、いらぬことと蔑まれるかもしれない。

「いやー。意外ですねー。もしかしたら河童さんもどこかで聞いているかもしれないかったかもしれないのにそしたら骨折り損ですね？」

「はあ？ にとりのやつがどんなに言つても情報を吐かなかつたり変なことをいったり

盗聴していたら河童汁にしてやるわよ。勝とうが負けようが吐かせるわ」

なんとなく、いつもの博麗の巫女が其処にいる気が水蜜にはする。

「え……あ、ああ。そうですか。流石霊夢さんっ。えっと、ああその」

「ああもう。わずらしいっ」

霊夢はずいと水蜜の前に顔を出して、脅すように言う。

「あ・り・が・と・う！ 終わりよ。二度と言わないし、めんどくさいことすんじゃないわよ」

「……………なんで？」

感謝の脅し。霊夢らしいそれを、遠くでやれやれとみている二人がいる。ちゃんとしてくるようにそのふたりが言ったのだろう。なんで突っかかっているのかは遠くからでは訳がわからないが、霊夢ならば大丈夫だろうと思っっている。

38話

下剋上の時は来た。

いままでさんざんにモブ扱いの様にされていたおかつぱ河童とそばかす河童は真剣な表情で向かいあっている。彼女達はありとあらゆる雑用やとりあえず人手が足りない時に駆り出される哀れな役割を青い髪の上司に押し付けられていた。

今こそ雪辱を拭い、幻想郷でのパワーバランスを超えて河童として、そして労働者としての権利を確立するときなのだった。彼女達とて名前はある。だが、海の家にきてから誰も呼んでくれやしない。

おかつぱの河童はきらきら光る瞳にワンピース型の体をすっぽり包む水着、それはそばかすも一緒である。頭に緑色の「L」をトレードマークにした帽子を被る。一応着ている水着はとあるネズミと同一のものである。起伏のない彼女達にはなかなか似合っている。本人に言ったら怒るかもしれない。

ばんぱーんと顔を叩くおかつぱ。武者震いに体が震えると同時に、叩いた拍子に柔らかいほっぺたが震える。それからむふーと息を吐きだす。一度は山童に寝返ろうとした反骨心を持つ彼女である。

そのとなりでよーしと闘志に燃えているそばかす。ショートなくせつ毛な彼女はとある仙人に賭け事を提案したことがあるほど相手を選ばずに社交的である。二人は腕を合わせて眼をきらきらと輝かせている。

にとりもそうであるが本来的に河童とは人間と遊ぶことは好きである。

二人は照り付ける太陽の元ビーチバレーのコートに立つ。審判台に括り付けられた泣き虫なアイドルが暗い目で見下ろしてくるが、それを気にしてはいられない。観客席では白い水着の毘沙門天が売り子をしているのが見える。

二人の河童は一度大きく息を吸い込んだ。全く同じ仕事を考えるでもなくやって見せる。長年一緒にいたのだから、それなりに愛艇のことは分かっている。肺に空気を満たして胸をわずかに膨らませる。

☆☆☆

空気が変わった。盛り上がっていた人間達は息を潜めて「彼女達」を見ている。

観客に通路をふさがれない様に作られたゲートを潜った少女は美しい。

髪は青い、それは空のようで海のように太陽の光に輝いている。七色の花、その模様のちりばめられたトップス。下にはショートパンツをはいている。そこからこぼれた透き通るような白い肌。

鈍く光る紅い瞳が観客席をちらりと見てから、一步一步歩いていく。ただそれだけの

ことなのに、どこことなく映画の一場面の様。

その天人の少女、比那名居天子は髪をさらりと払う。なんて来ない仕草だが、青い髪がさらさらと風に

揺れる。

「河童が相手ですか」

どうでもよさそうに言う天子。いつも霊夢に使うような碎けた口調とは少し違う。冷えた目で「モブ河童×2」を見てから、ため息を吐く。彼女にかかれればおかつぱとそばかすなど背景に過ぎない。

「油断大敵ですよ」

「……………」

後ろからの声に天子は振り向かない。そこに立っているのは長い髪をゴムひもで纏める仕草をしているとある聖人である。上下黒のビキニ姿なので見た者は仏教関係者とは思えないだろう。

聖白蓮は口にゴムひもを咥えてから、片手を上げて髪をまとめ。腋を隠すように肘畳んでいる。彼女の表情はいつも優しい。それはどこことなく見たものを癒してくれるような微笑みだった。

「足を引つ張らないですよ」

天人は振り向かずに言う。

「はい」

につこり微笑みながら小さくガッツポーズして応える聖人。楽しもうとしているのがその顔からよくわかる。遠くで毘沙門天が応援しているのに小さく手を振って、ニコニコ応えたりしている。

天子はそれには関心を払わずに後々敵になるであろう、博麗の巫女を探した。ゆつくりとあたりを見まわす。彼女にとつて観衆など有象無象に過ぎない。巫女はどこに行っているのかいない、それに少しむつとする。

見れば陸の上でキャプテンなどと言っているメロン色の水着の少女が見物しているのを見つけた。腕を組んで何故か真剣に見ているので天子は知らず、睨みつけている。「どうしましたか?」

聖にぼんと肩を叩かれて天子はそちらを見る。だが、何故かわくわくしているような顔の聖を見て困惑した。天子は苦笑いする。

「あなたの所のお弟子さん? 真剣な目で偵察しているみたいだけ」

「ああ、水蜜のことですか。まさか巫女とペアを組んだ時は驚きましたが、これも何かの縁です。きつと彼女なりに考えがあるのでしよう」

「……あれも一応勝ち残っているらしいわ。ということは後で当たるかもしれないわけ

「ただ、それはいいのかしら？」

聖はきよんとした顔をしている。しかし、直ぐに笑顔に戻る。それでも弟子の修行に関する事になると心を鬼にすることもある彼女である。

「ええ！ 完膚なきまでに」

きらきらした顔で言いながら水蜜へ手を振る彼女。天子が水蜜をみればなぜかビビるような仕草をしている。カチコチとロボットのようには手を振り返してきている。天子はそれには興味を示さずに審判台の下に歩いていく。

そこに置いてある。ビーチバレー用のボールを手に取り、ぽんと投げてから、キャッチする。

☆★

スパイクチャンスに聖がダツシユする。しなやかな肢体を躍動させ、何故か楽しそうにボールを追いかける聖人。彼女は砂を蹴り、身体を空中で捻る。その反動のまま強烈なスパイクを叩きこむ。

ばしいと音が響き、ぱーんと砂に突き刺さる。それから笛が鳴ってからの大歓声。パワフルなアタックである。

そして聖は両手で小さなガッツポーズをして喜ぶ。大げさに手を振らないのは。はしやぎ過ぎないと自制している「つもり」らしい。彼女は得点の笛を鳴らしてくれた審

判台のアイドルに手を合わせた。吊っているかのようだ。

観客席では毘沙門天がうんうんとこやかに頷いている。

相手のコートにいる河童達は手を膝について、肩で息をしている。彼女達のボスが闇魔に苦戦したのとは違い、純粹に力負けてしている。それでも健気にむふーと息を吐くおかつぱは煌めく汗を手で拭う。

にとりの写真を勝手に販売している一味なおかつぱだが、彼女も自分のプロマイドがこの砂浜の太陽輝く明るい闇マーケットで捌かれていることを忘れている。

「こころを連れてきたかったなあ」

決意の河童をよそに聖は人差し指を唇につけて、ぼやいている。「こころ」とは彼女の可愛がっている少女である。連れてくれば、無表情で驚くだろう。おそらく水着を着せられて河童を恨む一人になったかもしれない。

「なにしているの？ さっさと終わらすから構えてよ」

そんな聖に天子が声を掛ける。彼女の手でボールを弄んでいる。「はい」と一声、聖はとてとて砂浜を走って定位置に戻る。それを目では追いかけずに天子は息を吸う。体を斜に構えて、左手にボールを載せる。そのまますうっとボールを上げる。

綺麗に空に舞い上がるボール。ゆっくりと回転しながら落ちてくる。天子は砂を蹴る。

空中でしなやかに腕を振る。細い体を目いっぱい使い、弾けるような音を立ててサーブを撃つ。弧を描きながら、河童のコートへ向かっていく。

そばかすが両手を組んでばしりと止める。それからおかつぱが前に走る。ここからが反撃だとはかりにおかつぱは膝を曲げて構える。ボールはネット際に緩やかに落ちてくるチャンスボール。

彼女は飛んだ。これからだど渾身の力を込めてスパイクする——その目の前に現れた青い髪の天人がブロックする。

「へぎゅあ」

妙な言葉を言いながらおかつぱは地に墮ちる。ブロックされたボールは跳ね返ってそのまま顔に当たったのだ。ネット向こうを見れば天子がその姿を見下ろしている。

明らかにおかつぱの方が構えていたのだ。それを覆すほどの速さで前に出てきた彼女に押しとどめられた。聖に比べれば細い体つきをしている天子だが、息一つ乱してはいない。それは体の使い方が極端にうまいということである。

本気を出した毘沙門天やそれに追いついた古明地こいし。そして体格が純粋に大きいためにパワーのある地獄鳥。彼女達とは明らかに違うのは、

「他愛もないわね」

手を抜いてでもそれらと遜色のない動きをすることだろう。体術で彼女に勝てる者

は少女達の中にはほとんどいない。握力ではパンを振じり鍛えた巫女には負けるかも
しれないが、殆ど関係がない。

河童二人は泣きたくなくなった。

なんでよりによってこの相手なんだろうと思うが、よく考えれば別の組と相手しても
戦いの神やら無意識やら暴力巫女やらさとり様やらと一筋縄ではいかない相手が揃っ
ている。一番勝てそうな相手はむしろ河城にとりだっただろう。

ちよつと泣きながらおかつぱはかまえる。その健気な様子に自然応援の声は高まっ
ていく。何故か相手コートの聖まで「がんばりましょう」などと声援を送っている。天
子も眼を少しきよろきよろとさせて困ったように「がんばれ」という。

数分後。

コートでばたんと倒れてきゆうと疲れ切っているおかつぱとそばかすがいた。それ
を見ながらも聖と天子は困ったような顔をしている。彼女達は息を乱してはいない。

得点は「20-4」どちらが大量得点したかはいう必要はないだろう。こうして河童
の下剋上は失敗に終わったのだ。だが、例によって担架を持ってきたこいしと復活して
いるお燐が入ってくる。

おかつぱは仰向けに寝ている。薄い胸板が緩やかに上気している。

お燐はこれも記念と商品とばかりにかしやりと手に「偶然」持っていたカメラで写す。

そばかすはうつ伏せで倒れている。それもお燐は後ろからカシヤリと写す。

「これでおやぶん（にとり）からおやつがもらえますね。こいし様」

「わーい」

両手を上げてはしゃぐこいしは担架に河童を重ねて載せる。一つしかないから仕方がないだろう。お燐とこいしは重そうに担架を二人で担ぎ、どこかに持っていく。何度も言うが医務室などない。どこにいくのかは無意識の先にある。

「哀れね……」

天子がそれを見ながらつぶやいた。聡明な彼女には今の一部始終が何を意味しているのかよく分かった。今までほとんど表に出なかつた理由の一つに写真を売っている河童を見たことからの不信感もある。

そんな彼女の手を聖は取る。それから一緒に手を上げる。わあと会場が盛り上がる。

「勝ちましたね！」

「……あたりまえよ。離してください」

天子は少し強引に手を振りはらう。それから急ぎ足に一人でコートを出ていく。

☆★

四季映姫は浜辺に一人。体操座りをしている。

目の前は大海原である。その波打ち際でお空と少年野球団の少年たちが潮干狩りをしている。お空は少年たちと話が合うような雰囲気を持つているが、

「いいですかみな。この海の水は冷却用水に使えます。ニューヨークアのパワーを……あああ、そのあさり大きい！」

などとよくわからないことを伝えている。好きなことは何でも覚えるくせに子供っぽいことがあるお空である。話よりもその朗らかな笑顔が子供を惹きつけているのかもしれない。何も考えていないともいう。

それでも先ほどまでに比べればよい顔をするようになったと映姫は思っている。

彼女は試合が終わった後に少年野球団を招集して、しっかりと準備体操させた後にくどくどとやってはいけないことと危険のないようにする注意を言い聞かせてから、遊ばせている。

「……ん」

映姫の頭が揺れている。うつらうつらと眼が閉じそうになるのを彼女は、ごしごしと左手でこする。こんな体で無理やり能力を使ったことの反動なのか、身体がだるい。純粋に疲れている。

映姫は座りっぱなしで喰いこんだ水着を指で直した。引率するべき子供達プラス1が遊んでいるのだから、それが危ないことをしないか見ていなければいけない。

「ここにいたのね」

そんな映姫の横に座る少女が一人。黒髪を赤いリボンで縛った博麗の巫女である。

「あなたですか。私に聞きたいことがあるのですか?」

映姫は目線を子供から離さずに言う。博麗の巫女、博麗霊夢はその仕草にちよつとむつとする。何か知つていそうなことを感じ取つたのだ。

「察しがいいね。とりあえずなんであなたがここににいるのかしら?」

「:…:有体に言えば少年野球の合宿です」

「????」

霊夢は混乱した。意味が分からない。なぜ閻魔が少年野球を引率するのだ。

「意味が分からないんだけど」

「でしようね。だから無駄な説明を省きました。事実ですから」

さらりと言う閻魔。巫女は一つため息。

霊夢は話題を変える。

「さっきの試合。天子が勝つたわよ。途中で私が見ていることにあいつ気が付いて、得点決めるたびに見てきたけど」

「そうですか」

映姫の口調は変わらない。目線も子供達にむけたままである。だが、彼女は霊夢に語

りかける。

「私は貴女が近寄ってこないとおもっていました」

「なんでよ」

「貴女は、知りたかったのですか？」

「……………それはこの異変ことかしら」

「ええ。それを私がかか知っている、そう思ったから今近寄ってきたのでしよう？　そして知りたくなかったからこそ中々来なかった」

　霊夢は空を見る。なんてことないそこに白い鳥が飛んでいる。あれはカモメだろうか？　かともういいことを考えた。それから答える。

「ほんと、察しがいいわね。それで？　何を知っているの？」

「その前に私から聞きたいですね。何かあったのですか？　今まで異変の解決に中々動かなかつたあなたがそういうには」

「……………」

「そう。分かりました」

「なにも言っていないんだけど」

「言葉なんていりませんよ。……………人が錯覚するように終わりとはただ終わるのではない。何かの始まりでもあるのです」

「なんの話よ」

「貴女はこれを終わらせる気がありますか？」

「ああ、そういうことね。あるわ」

霊夢はぱんと言いつ切る。もう迷いはない。居心地の良さも、今の大切さもわかつたうえで自分のやるべきことをやらないといけないのだ。この異変が終われば、きつというんなことが「終わり」になる。そして別の何か「始まる」だろう。

ただ、それだけのことである。

「わかりました」

映姫は短く答えた。彼女は視線を霊夢に向ける。真つ直ぐなその瞳を霊夢は怖じけることなく見返す。映姫はその桃色の唇をゆっくりと開く。

「この異変の正体は願いです」

「……はあ？」

「人であれ、妖怪であれ常に願いを心に持っています。それが無意識だろうと、たとえ何千万年生きた者であろうと変わりはしません。どんなものだったとしても、たとえ言葉に出来なかつたとしても願いを忘れることはありません」

「一体なんの話をしているのよ。私は外の世界に來たいなんて願ったことはないわ」

霊夢は怪訝な顔である。映姫は眼を閉じる。

ただ眼を瞑っただけの映姫の顔は穏やかで、どことなく安らぐような美しさがある。「魂は願いを持つ。願うとは自分との契約でもあります。それはどこにあるかと願ったことを消すことはできない。霊夢。貴女はここ一年の間に人々の願いに向き合ったことがあるのではないですか？」

映姫は眼を開ける。その澄んだ瞳に霊夢は吸い込まれそうな錯覚を覚える。

——からからからからからから

音が響く。

それは霊夢の心に残った音。文字の書かれた絵馬の、いや「願い」が風になる音。単なる気まぐれで始めた商売のつもりだった、それを続けるうちに彼女の心に淡い願いを残したこと。

——ああ、前に言っていた絵馬を始めるのね。手伝おうか？

「……………絵馬……………？ え、でもなんでそんなもの。なんの関係があるのよ!!」でも絵馬を勧めてきたのはあいつ……………」

「……………さて、その頭に浮かべている者にも最初は他意はなかったのかもしれませんが。いえ、もしかしたら他の誰かに示唆された、または……………誘導されたか。今の私では見極めることは難しいでしょう」

映姫はゆつくりと立ち上がり、一步前に出てお尻の砂を払う。霊夢にかからないよう

に横を向いてだった。それから片方だけ長い髪を手で払い、振り返る。

「霊夢。眼に見えていることだけがすべてではありません。また、今のあなたの考えがすべてを写し取っているわけでもないでしょう。先ほど貴女は願っていないと言いましたが……貴女は此方に来てから楽しいと思えますか？」

「その質問、たぶん他のやつ合わせて三回目くらいね。だいたいいつもこういつているわよ、悪くはないわ」

「そう」

くすくすと少女として笑う映姫。

「なら……この異変は。きつと楽しく過ごしたいと誰かが願ったのでしょうか」

映姫は前を向く。霊夢は慌てて立ちあがった。

「ま、待つてよ。それだけじゃ何もわかっていないじゃない。絵馬がなんの関係があるのよ。それに黒幕は誰なのよ。抽象的過ぎてわかんないのよっ！」

「おつきいあさりとれたああ！」

霊夢の声を打ち消す大きな声。お空が砂浜から飛んできて映姫の前にやってきた。映姫は困ったような笑顔で聞く。

「お空。どうでしたか」

「ふふん」

にやにやしなから手のひらを開くお空。大きな貝が蠢いている。あさりであろう。もう映姫は「潮干狩り」に突っ込む気などない。別に悪いことをしているわけでもないのだ。

「あいつら（少年野球団）の中で一番大きいのが取れたわ」

少年たちと張り合って勝ち、胸を張って鼻を鳴らすお空に映姫は「なるほど」と答える。彼女はもう一度霊夢を振り返った。

「いつか天狗に真実を変える力の話をしましたが、真実を変えるよりもたどり着くことの方が難しいでしょう。それでも意外に最初の真実など、他愛もないでしょう」

「……だからー。その言い方が分かんないのよっ！」

霊夢は叫んだ。

☆★

同じころ海の家でにとりは叫んだ。彼女は顔を真っ赤にして河童が持ってきた「プロマイド売り上げ一覧」を地面にたたきつけた。そこに書かれた「一輪」や「寅」「ねずみ」などと同じく「に」の文字。

「これ、私じゃないか!! あいつらああ」

頭を抱えてごろごろ転がるにとり陰からお隣がほくそえんでみている。手にはおかつぱなどを被写体に捉えたことの褒美である。チヨコビが握られており、口の中でぼりぼり食べている。

「あああああああああ」

黒歴史が見つかった中学生のようにとりは悶え苦しんだ。彼女の心に黒い願いが渦巻いている。死なば諸とも思っている。

短話：カゲロウ・デイズ

狼。それは古来より人々に恐れられていた、今は亡き獣。

夜にその瞳を鈍く光らせ、行き交う旅人をその闇の底へ引きずりこむ。それは恐怖の対象でありつつも、その姿に人々は畏敬の念を覚えた。ゆえに時に神として祭る事すらもあつたのだ。

時は冬。雪の降る12月。これは現代に降り立った一匹の狼の観察き……物語である。

☆★

雪が降っていた。白いそれが空から落ちていく。

窓の向こうはほのかに明るい。夜だというのに雪がほんのりと光っているかのようだった。おそらく今年の冬は寒くなるだろう、野生の動物たちも必死に生き延びるためにあらゆる知恵を使うことになる、今泉影狼はこたつでぬくもりながら思った。

狭い部屋に大きな炬燵がある。唐草模様の蒲団をつけたその上にみかんとだらけた影狼の頭が載っている。

茶髪に赤い瞳。一目見るだけではとさせるような整った顔をした彼女は、テレビを

なんとなくつけて動物特集を見ている。番組名はダーウィンだがなんだかが来るとか来ないとか、影狼はよく覚えていない。

狼は厚い毛皮に守られているからこそ冬を物ともしない。

だからこそ影狼もちゃんと赤いちゃんこを着てぬくぬくしている。しかも手すらも出さずにこたつに入れてる。

雪がふつているというのに外に出るわけがない。

影狼は何をするでもなくこたつに足を突っ込んだまま動ける範囲という「なわばり」を動く。昨日買ったクッションを枕代わりにしつつ、身体をすっぽりとこたつに入れてテレビを見たりする。

しかし、彼女とて一匹の狼である。時に「肉」を食べたくなる時もある。

影狼はふつと立ち上がり、早足で歩く。狩をする狼は鈍重な行動はしない。矢のような動きとこたつへの帰還を果たしたい心を軸に影狼は台所に行く。

戸棚からビーフジャーキーを取り出す。赤い肉がパッケージされているそれをニコニコしながら持つて帰ろうとする。狩は成功したのだ。

だが、狼は強欲の象徴でもある。彼女はさらに冷蔵庫を開けてビール缶を取り出す。ふふふんという笑顔で巣（こたつ）に戻る影狼。滑り込むようにこたつにもぐりこみ、ぶるぶると震える。戻った時に外気がこたつの中に入ったらしい。しかし、強い狼

である影狼はそんなことに負けはしない。

果敢にビーフジャーキーの口を牙で開ける。狙った獲物の喉笛を食いちぎるための牙は健在なのだ。彼女は中に入っている塩気の強いビーフジャーキーを取り、噛み、ちぎる。口に広がる濃厚な味つけ。影狼は「くせになる」などと思う。

そしてビール。ぷしゅと開けて、ぐいと飲む。喉を鳴らしながら冷たいビールを飲むのだ。

これには秘策がある。影狼は冷蔵庫に入れる前に「外へ」放置していたのだ。雪の冷たさがビールを極上の冷たさへ誘ってくれている。寒くてもビールは冷たいほうがいい。これこそ外の世界の「厳しさ」を知る野生の知恵である。

それからビーフジャーキーをカミカミしながら、ちびちびビールを飲み始める影狼。

ちようど歴史ものだがなんだかの赤い武士のドラマを見終わった影狼はふと思った。ざらりとその赤い瞳で窓の外を睨む。その凜々しい横顔は絶滅したニホンオオカミのありし日を移しているかのようだ。

——おでんたべたい

狩の目標は決まった。牛すじなんかを買えば一応肉食としての体面は保てる。

しかし、影狼は難しい決断も同時に迫られている。安全な巢(こたつ)を離れて外に出るのはどうだろうか。しばらく考えた後やはり狩に行くことに決めた。非情に難し

い判断だった。

だが、決めた狼はすばやい。狩の道具である財布を持ち。

ちやんちやんこを脱ぎ棄てる。こんなものは不要である。元々は狼は寒さに強い。外に出るにも影狼にはふさわしい恰好がある。

下に履いていたショートパンツと黒のストッキングはそのまま、上はタンクトップである。健康的だった。さらにその上から洋服いれからシャツを取り出して着る。それからもこもこしたダウンジャケットを羽織り。フードを被る。それからリツプクリムを取り出して、柔らかそうな唇に塗る。ちよこちよこ唇を動かして馴染ませる姿は微笑ましくはある。

さらにホットカイロを出してきて、しゃかしゃかと手で振る。もちろん両手用に二つである。片方ずつポケットに入れておくのだ。

玄関を出る影狼。ドアを開けると冷たい風が顔を叩いた。

行くのを止めるか悩んだが、獣の食欲を抑えることはできない。彼女は一步踏み出す。ちやんと家の鍵を閉めてから――

近くのコンビニエンスストアまで徒歩5分もかかる。長旅だ。

影狼は冷たい風にも負けず、肩に積もる雪にもめげずに歩いた。野生の心あふれる彼

女にはなんてことはない。ちよつと帰りたいだけだった。彼女は街灯の光を反射する雪がきれいだと心を紛らわせながら歩く。

途中に自動販売機がある。いつもおしることコーンスープに目が行く。ずずつと鼻を鳴らしながら影狼は我慢した。

いつかどんな旅も終わる。影狼の辛い旅もコンビニをその眼に見た時、全てが報われた気持ちだった。雪を蹴りながらはつはつと犬、いや狼のように走る影狼。乙女走りをしている。獣は時に自らの敵意を隠したりすることがあるのだ。おそらく狼としての凶暴性を擬態しているのだろう。

明るい光の中に影狼は入っていく。

黄緑の看板にガラス張りのコンビニ。外から見えるのは並べられた雑誌と、クリスマスの飾り。影狼が入り口をくぐると「とうるるるるるるー。るるーるるるーるるー」と軽快な音楽が出迎えてくれた。

入口を潜れば出迎えてくれるコーヒーマシーナバーと向かい合った栄養ドリンクの棚。影狼は眼もくれない。おでんに一直線。おでんの什器はたいがいレジの目の前にある。だから影狼は力強く歩いた。彼女を物理的に止められるものはいない。

レジの前に他の客がいた。その横でおでんを物色するのは少し恥ずかしいので、影狼は右に90度カーブしておかしコーナーを抜けてしまう。抜けた先はドリンクコー

ナーである。

気を取り直して何か買おうとする影狼。ビールでもいいのだが、高い。チューハイなどを物色しつつ。ワインなども飲んでみようかと思いつつも、つまみも物色したりしている。

お酒コーナーで近くにあるお寺にいる一輪とかいう尼に会ったときは会釈する。狼は、いや強いものは礼儀正しいのである。彼女は入り口にいったん戻ってから買い物かごを取ると、いろいろと欲しいものを詰め込んでいく。

冬は寒い。外に出た時のため込むのも野生の知恵である。これも一種の狩であろう。

影狼はお酒やつまみや電池などが入った買い物かごを手にレジに向かった。什器に入った肉まんを見て

——よし

と狙いを定める。獰猛な肉食動物の本能であろう。隠すことはできないのだ。

影狼はそんなことを思いながらポケットに手を入れる。その瞬間、さあと血の気が引いていくのが分かった。影狼は買い物かごをその場に下ろして、あれあれと至る所のポケットをまさぐる。ショートパンツに両手を入れて探す。

財布がない。家に置いてきた可能性が高かった。

影狼は苦悩した。あの「長い」道のりを往復するのは辛い。偶に洗濯の時にポケット

に千円が入っていたりすることを期待してみたが、あいにく出てきたのは飴玉だけだった。影狼はむっとして飴玉を口に含んだ。ころころしながら、考える。

手はない。戻るしかないのだ。狼はちゃんとお金を払う。

影狼は泣く泣く買い物かごに入れていたものを一つ一つもとあつた場所に戻していく。律義さが無ければ野生の世界では生きてはいけないということなのかもしれない。影狼は涙をのんで家へいったん帰る為には出口へ戻る。

扉を潜るとあの妙な音がする。

それを振り切つて影狼はたたたと雪の中に走っていく。空は厚い雲がかかり、吐く息は白く立ち上る。しゃくしゃくと雪を踏む音と感触と、肌を指すような冷たい空気。

影狼は泣いている。冷たい風が眼に当たつて涙が出てくる。

雪の日は静かだ。影狼のアパートまでは誰とも会わない。彼女はアパートに着くのがたがた震えながら自分の部屋まで行き鍵を出す。だが、手がかじかんでうまくドアノブに鍵がささらない。

わずと寒さに鼻を鳴らす。涙目の狼。その時後ろで気配がした。

影狼がはつと振り返るとそこには短く切った赤い髪に大きなリボン。それに首元がすつぽり隠れるくらい大きな黒いPコートを着た少女が立っていた。手にはコンビニの袋をぶら下げている。

赤蛮奇という。近くで買ってきたコンビニおでんを食べるために持ってきたのだ。要するに遊びに来た。

☆★

こたつを挟んで影狼と蛮奇の小さなパーティーが始まった。

蛮奇が買ってきたおでんを中心にビーフジャーキーや残ったビールなどを分け合いながら、だらだらテレビを見る。

影狼はおでんのこんにやくにからしをつけてガブリ。もぐもぐ幸せそうに食べる。蛮奇はもらったビールをぐびぐび飲んでいる。Pコートの下には黒のインナーと何故かチヨーカーを付けている。おしゃれのつもりだろうか。

蛮奇は酔ったのだろうか、顔をほのかに赤くしながら思った。影狼を見つめながらだ。

——こいつ野生を失つてるなあ

口には出さない。それを聞けば影狼は烈火のごとく怒るだろう。ちゃんと肉食もしているのだ。最近はとんかつをうまく作れるようにもなった。

テレビの音を聞きながら二人はこたつの中で話す。偶に影狼が蛮奇の足を蹴ると足相撲が始まったりもする。窓の外の雪は強くなっている。これは泊まるしかないだろうと蛮奇は思う。蒲団などいらない。

こたつがある。

39 話

少しだけ前のことである。

お燐は駐車場で目覚めた。何故か一人で駐車場のスペースで寝ていた。横に王冠のマークのついた車や、オリンピックマークを少し減らしマークの車が駐車している中、彼女も駐車、いや駐猫していたのだ。白い枠線で囲まれたところに寝ころんだ猫は別に珍しくないが、水着を着て寝ころんでいるのは珍しいだろう。

「??」

さつきまで浜辺でビーチバレーをしていたはずだ。そう思ってあたりを伺う。三つ編みが首の動きに合わせて左右に揺れている。

「ど、どうなっているんだ?」

困惑した顔で彼女は腕を組んで胡坐をかいて、小首を傾げる。くつと「悩んでますよ」という感じで首を傾げる姿は愛らしい。駐車場の真ん中でなければ。

彼女は覚えていない、というよりは気絶していたので知らないが、古明地こいしの担架に載せられて連行。医務室などという気の利いた場所でなく、駐車場に連れて来られた。お燐は膝を抱えて、その上に顎を載せる。

「なんだか、頭がずきずきする」

急に目の前が真つ暗になってからあまり物事を覚えていない。しかし、ここにいても仕方がないからかお燐は立ち上がり、お尻の砂を払う。

その時、車と車の陰から誰かが動く気配が下。お燐は猫よろしくぼつと反射的にそちらを見る。しかし、誰もいない。ただ一枚の写真が落ちていた。それはお燐のパートナーこと「河城にとり」のプロマイドである。

ニコニコ可愛い顔をさらした写真。腕を畳んだポーズで水着で少し胸が寄っているように見える。明らかに盗撮である。その写真のにとりの視線は下を向いているが、写真にはその視線の先に何が在るのかを写していない。

巧みに見せない撮り方をしている。実は単に売り上げを数えているの俗物的笑みである。本来は視線の下に金庫か現金かがある。上半分だけを切り取ればスマイルな写真の出来上がりだ。

「これは」

お燐はそれを手に取って頭をぼりぼりと搔く。その時、どこからか声がしてきた。

「アーシマッター、オトシテシマッター。タイセツナモノナノニ」

片言の言葉。お燐はきよるきよるとするが相手は見えない。車の向こうから声がする。お燐は回り込むでもなく、かがんだ。膝をそろえてから車の下を覗き込むとその向

こうにワンピースタイプの水着を誰がいた。あちらは気が付いていないのか、かがんだままお尻だけ地面と車の間に晒している。

「どこのネズミなんだい。あたいの前で隠れようなんて甘いわ」

お燐はにやにやしながら言う。びくつと車の向こうの少女が震えた。だが声は続ける。

「なんのことかな。猫君。私はただここにいただけだよ」

正体不明のネズミは言う。お燐はくすくすしているが、駐車場で車の下を覗き込んでいる姿の方が滑稽であることには気が付いてない。猫として鈍感なのかもしれない。

「まあ。いいさ。君は河童君に裏切られたんだよ。まあ、浜辺に戻ってみればわかるさ」
「にやっ」

「その写真は単なる武器。あいつはまだ自分のプロマイドが売られていることに気が付いていないみたいだからね。こっそり、おっと失礼。……『間違えて』彼女の目の前に落としてやれば楽しい反応をしそうじゃないか？」

飛び上がるだろう。お燐はネズミがそうしろと示唆していることが分かった。そしてきつと楽しい反応を見せることもわかる。いたずら好きな猫は、ぱつと飛び上がって花が咲くかのように笑った。

「あはは、それはよさそうだね。それで、なんであたいにそんなことを言うんだ？」

「別に。気まぐれだよ。君の境遇を哀れに思っつてね」

「ネズミが猫に肩入れなんて、妙なことだねえ」

お燐が立ち上がる。

「そうそう、ネズミさんさ。お尻の所が破けてるよ」

「え!？」

ナズーリンが飛び上がって手で尻を隠す。顔が真っ赤だが、直ぐに苦虫を噛み潰したような顔になった。どこも破けてなどいない。

「やれやれ。まったく」

ナズーリンが振り向くとすでにお燐は遠く、駐車場から出るところだった。ペロツと舌を出して、ウインクしながら走り去っていく。少なくともネズミはこれで一波乱起ころだろうとは思っている。

★☆☆

犯行とはそう簡単に実行してはつまらない。お燐はにとりの下に戻り、おかつばやそばかすを写真に撮るなどの雑用を務めた。報酬はチョコビである。アクシヨン何とかのカードが入っていたがお燐はいらないので水蜜にあげた。

「ど、どうも。あ、あのおそのお菓子の方はくれませんか？」

「え、あげないよ」

ぼりぼりチョコビを食べながら水蜜に何らかのヒーローのカードを渡す。ちなみにチョコビとは小さな恐竜型のクッキー菓子である。中にチョコが入っている。お燐は口にそれを含んでいるからちよつとだけリスの様だった。

「大切におくれよ」

とお燐は笑顔で言っておいた。水蜜はカードを持ったまま、どうしようかと悩んだがそんなことは猫には関係ない。彼女は満を持してにとりの写真をすつと海の家に「偶然」落としした。

★

海の家に写真が落ちていた。

そこに歩み寄るのは青い髪の少女である。いつものツインテールをポニーテールにして上下清涼なライトブルーな水着を着た河城にとりである。彼女は何気なしにその写真を撮ると、一秒程度凝視した。

少しずつ開いていく瞳孔。

開いていく口。

ほのかに赤くなっていく頬。上がっていく肩。

「ぎゃあ」

可愛くはない悲鳴を上げて自分のスペースへ戻っていく。それから物陰で頭を抱え

てうずくまったり、何かをぶつぶつ喋ったり。聡明な彼女は既にこれが一枚だけでなく、海の家の周辺で売買されていること分かっている。

「これ、私じゃないか!! あいつらああ」

などと「プロマイド売上表」を地面にたたきつけたのはこのころである。にとりのいう「私」とは売上表の中の「に」という文字のことである。

狼狽するにとりを物陰から猫が見ていた。赤毛で三つ編みな彼女はお燐である。お燐は「にしし」と猫つぼく笑う。声を抑えて、頬をゆるめ、目じりが下がる。ちよつとだけ艶やかな表情をしているが、やっていることはいたずらである。胸にはチョコビを抱いている。

彼女の目の前にとりは一人、膝をついて頭を抱えている。彼女の手元には一枚の写真があった。それにはキュウリを食べている水着の河城にとりが写っている。現在これが何枚流通しているかについては分からない。

いや正確に言えば売上表を見ればわかる。だが、見たくなかない。

「くそお……」

にとりは唸る。お燐はくすりとする。

そもそもお燐には正当な復讐の理由がある。それは一緒に試合に出たのの後背からの奇襲で気絶させられて、強制的に退場することになった。しかも帰ってきてみれば見

知らぬアイドルが居る。

メラメラと復讐の炎が燃えがったことにして、お燐はこれを決行したのだ。今楽しくて仕方がない。姿を現して「どうしたんですか」と言つてやりたいが、にやけ顔になるのは必定なので無理だろう。

「こうなつたら、あいつらも道ずれにしてやる……」

恐ろしいことを言いながらにとりは立ち上がった。声が暗い。既に写真は出回っているので一輪や寅丸はにとりよりも恥ずかしい思いをしているのであるが、彼女はさらに恐ろしい計画を立てた。

「大会が終わつたら、SNSにアップしてやるぞ……みなごろしだ……」

ソーシャル・ネットワーキング・サービス。ある意味現代の処刑台である。

とある天狗も知り合いが見ていることを知らずにブログ更新などをして恥ずかしい目に会った。大体腹の黒い天狗のせいではある。

お燐は、とつさに思った。彼女は物陰から出る。

「お、おやぶん」

「わああ。いきなり出てくるな！ てなんだ、ネコか」

「なんかその言い方心外だなあ」

「なんだよ私は忙しいんだ」

「……ちつち。話は全部聞かせてもらいましたぜ」

にとりはぎよろりと眼を向いた。明らかに「始末」を考えている目である。お燐はそんな眼圧にもものともせずと言う。お燐は逆にきらきらした純粋な目にとりを見ている。彼女は明るい声で言った。

「ネットにアップするならば是非ともさとり様をトップに！ これでさとり様の人気も上がるってもんさ。お手伝いしますよ〜」

「……………」

どうやら純粋な気持ちでお燐は出てきたらしい。ご主人様の為ならということだろう。本当にそれがさとの為になっているかどうかは分からない。実際「さとり様」ポスターを張りまくり、彼女の知名度を上げることには一役買ったのは彼女である。ネットにあげるとなれば世界デビューと言っても過言ではない。

その意図に気が付きにやにやしだす河童。利用を考えている。

そしてニコニコしている猫。噛み合っていない同盟が再度出来上がった。

★☆

博麗霊夢は考えていた。

目の前にはひいては寄せるさぎなみ。白い泡を残して去っていくと、すぐに違う波がやってくる。それを無限に繰り返している。

映姫との問答を頭で反芻しながら、難しい顔で腕を組んでいる。わかったようなわからないようなもやもやした感覚がある。しかし、あの様子であれば四季映姫は犯人までは教える気はないだろう。

湿った砂を手で掻きだす霊夢。それを海に投げる。行為に意味などない。

砂は海に溶け無数の粒になって海面に広がり、落ちる。目を凝らしても果てにはないも見えない広大な海原には何の影響もない。霊夢は指に着いた砂を波で洗う。ぱっぱと片手を振って水気を払った。

「まあ、勝たないと分かんないってことね」

にとりから白状させる一番の近道はそれであろう。仮に問題があっても困んで袋叩きにすればいい。SNSでの報復というよりは八つ当たりを計画している河童とどちらが野蠻であろうか。

立ち上がった霊夢はうーんと腰に手をあてて伸びをした。別に心の中に迷いはない。いつも通りの異変解決なのだ。要は黒幕を捕まえてとつちめればいい。にとりなどその道中の一人にすぎない。

「さーと。あの馬鹿船長はどこに行ったのかしら？」

砂浜を踏みしめて歩き出す。口には悪態。少し不機嫌そうに見える表情場いつも通りだ。

★☆☆★

一方、村紗水蜜はぶらぶらしていた。先ほどは天子たちの戦いを見学という名の偵察をしたりしたが、いつの間にか霊夢とはぐれている。彼女はやることもないので海の家に戻ってきた。

「うわあ。なんか人が多いですね」

中に入ろうとしたが、お客さんでごった返す店内に入る気が失せた。それによくよく見れば寅丸やナズーリンや一輪が働いているのが吹き抜けの海の家だから、外からわかる。

手伝いたいわけではない。むしろ積極的にサボる方向で行きたい。しかし現実は甘くなかった。店の中から目ざとく彼女を見つけた少女が飛び出してきた。紫のビキニにエプロンをしたウエイトレスである。

「みなみつう」

なんか呼んでいる。水蜜は「あーあーきこえない」などと言いながらダツシュで逃げ出した。するとそれに触発されたのか追っかけてきた。奇妙な構図での追いかけてこである。

「くらー！ あんたも手伝いなさい」

「一輪にお任せしておきますよ」

追っているのは尼である。今の姿では誰も信じないだろう。もちろん雲居一輪だ。二人は何か言い合いながら砂浜を駆けまわる。無駄に体力があるから、中々終わらない。そんな二人を周りの海水浴客は見ている。偶にポスターの人と一輪が言われたりした。

「……ま、まっつてえ」

「へえへえ、も、もうあきらめてくださいい」

数分で汗だくになりながらよろよろと続ける二人。炎天下の中で砂浜での全力ダッシュである。ともすればボクシングなどのトレーニンングと同じであった。傍から見れば可愛らしい少女の追いかけてこだが、実態は仕事の押し付けである。

逃げる水蜜に苦戦した一輪だが、彼女には意地がある。足に力を入れて加速する。

砂が舞いあがり、一步一步逃げる水蜜の背中が見える。後ろから見れば背中に紐の結び目が見える。一輪はエプロンを脱ぎ捨てて最後の力を振り絞る、どうでもいいことに二人は必死だった。

一輪が水蜜に接近する。

(も、もう少し)

息を止めて一輪は手を伸ばす。水蜜は気配を察した。これはやばいと本能で感じる。

「はっ!」

その場で体勢を崩してローリングする水蜜。明らかに珍妙な回避行動はある恐怖から来ていた。手を伸ばす一輪に？かれたことがある。もはやそんな辱めに会う気はない。だからこそ過剰ともいえる行動に出た。

「わ、わおあああ」

しかし、一輪は止まらない。サッカーボールよろしく、水蜜に足が当たる。しかもそのまま跨ぐ。

「いったあい!!？」

ぱあんと背中でのいい音が鳴る。ナイスキックだ。一輪の会心の一撃に素の声が出る水蜜。

さらに一輪は両手を一瞬だけばたばたさせて崩れ落ちる。むろん水蜜をまきこみながらだった。二人は絡み合いながら、もがき合い。ほっぺたを引っ張り合う。まさにこれが千年を生きた妖怪の戦いなのである。

「な、なんで逃げるのよ。手伝いなさいよ。海の家！」

「い、一輪こそことあるごとくに人を脱がそうとしないでくださいよっ」

膝立ちになり闘牛のように両の掌を掴みあつたまま額で押す。歯を食いしばる二人の姿はどう表現すればいいのだろうか。

「だれがあんたを脱がそうとするのよ！」

「前科があるじゃないですかあ！」

「ぐ、ぐぬぬ」

一輪に言い返せる言葉がない。だが彼女の脳裏には様々な思いが突如として去来した。

海の家に行き連行されてから露出の多い水着を着せられて今に至り。

妙なポスターに印刷されて町中に張り出され、

しかも河童にあらゆることで雑用を押し付けられている。それに比べて水蜜は飄々としている。やったことと言えばトウモロコシを焼いたことくらいだ。何故か一輪は泣けてきた。實際涙を目に湛えた。

一輪は渾身の力を込めた。全ての怒りを込めるつもりだった。

「このおお。なんで水蜜ばかりが楽なことを」

水蜜も負けじと力を籠める。細腕の二人がぐぐぐぐと押し合う。

「ギョギョ」

水蜜は頭に血が上っていく感覚を覚えた。それから何故か力が湧いてくるような気がする。どこからか流れてくるような、そんな不思議な感覚である。

「わ、わわ」

一輪が突如、乙女のような声を出して慌てだす。水蜜の力が不意に上がったのだ。

このままでは押し負ける。そう思った瞬間であった。頭突きをくらわせたのだ。

一輪の頭が船幽霊に当たるとつきの一撃。水蜜は何か叫びながら転がり、一輪は荒い息をつく。胸が上下する。息が切れ、汗が流れ落ちてくる。しかし勝利したのだ、苦しい戦いだった。

「か、勝った。やったあ」

よしと両手を胸の前でガッツポーズする。矮小な勝利に対して無邪気に喜ぶ一輪。その前で水蜜が鼻を抑えて起き上がる。

「いててて。ひどいですよ一輪」

「自業自得。働かざる者食う……えつと、ちよつと違うか。あれよ、働かざるものは働かせないとね」

意味の分からないことを言う一輪に水蜜は苦笑する。

「わかりましたよ。全く暴力的なんですから」

「……船幽霊に言われたくないなあ」

「やだなあ。私達は柄杓でお水をいれたりしているだけですよ」

「いや、碇とか振り回しているじゃない」

「あれは……あれですよノーカン。ノーカウント。船幽霊としての装備かという微妙

ですし。柄杓でぶん殴ってたらアウトですけどね」

「基準がよくわからない……」

柄杓で殴ってくる船幽霊。一輪は少し想像して笑った。だが、水蜜は何かを考えるかのように両の掌を見つめる。さつき感じたものが何なのかわかる気がする。だが、今は少しだけ疲労感がある。

「ああ、そういうことですか」

何かわかったような顔で言う水蜜。その言葉が何を意味するのか分からないが、一輪は水蜜に手を差し出す。水蜜もその手をすぐに掴んだ。別に考えることも、迷うこともなくぶつかりあえるのは悪い関係ではないかもしれない。

「あんたらさつきから何やってるのよ？」

そんな二人に声がかかる。見れば仁王立ちして胡散臭げに一輪と水蜜を見ている黒髪で白に水玉な水着な巫女。博麗霊夢がいた。

「あ、霊夢さん。お姉さんを探しに来たんですか？」

水蜜が一輪の手を適当にぱいと離して言う。霊夢は「ああ？」と威嚇するかのようになんて答える。

「私に姉なんていないわよ。……あんたを探しにきたのよ」

「なんだ。やっぱりそうじゃないですか」

「だから！ ……つてもういいわ。なんかさつきから砂浜で相撲してたけど恥ずかしくないの?」

「それは一輪がやろうつていったんで」

驚いた一輪が何か言おうとする前に、水蜜が手で口をふさぎ後ろに回り込む。そのま
ま両手で口をふさぐ。

「へっへっへ。霊夢さんこいつどうせ倒すべき敵ですよ。今のうちにやつちまいましたよ
う」

「んんん???」

霊夢はにやあと悪い顔をする。水蜜に合わせるでもなく自然に呼吸が合った。

「ちゃんと海に捨ててくるのよ?」

「んんんんんう???!」

哀れな囚われ妖怪一輪は突如として訪れたピンチに困惑した。この二人のことである。縛り上げられて放置される可能性は十分にある。方や船幽霊、方や暴力巫女である。波打ち際に捨てられることも十分に考えられる。

「待ちなさい」

それを止める誰かが言った。一輪達が見ればそこにいたのは白い上下ビキニの毘沙門天。字面だけ見れば落ちぶれているかのようだが、凛々しい顔つきでぎらぎらと瞳を

光らせているのは寅丸 星である。

一輪が帰ってくるのが遅いので逃げたと思ひ追ってきたのだ。相手を疑うことから武略は始まる。金髪が風に揺れて、腋に挟んだダブルレッドが光る。

「巫女よそれに水蜜。そんなやり方で勝つてうれしいのですか？」

「はい」と水蜜。

「うん」と霊夢。

かくりと肩を落とす寅丸。ちよつと考えていった。

「なげかわしい……しかし、一寸の虫にも五分の魂という言葉もあります。離してあげなさい」

さらりと慈悲深い暴言を吐く毘沙門天。もとから冗談のつもりだった水蜜はぱつと一輪を離す。解放された一輪は凄い形相で寅丸を睨みつけながら、彼女の方へ歩いてきた。下から見上げつつ睨む一輪。妙な迫力がある。

「誰が虫ですか？」

声が低い。相手が仏でなければ胸倉をつかんでいただろう。

「あ、こ、言葉の絢ですよ。一輪怒ってはいけません。怒りは禁物です」

都合よく仏っぽいことを言い募る毘沙門天。そもそも全国の毘沙門天の像は怒った顔をしている者が多い。しかし今の寅丸はちよつと困り顔で一輪と眼を合わせること

ができない。情けない顔している。

それに興味を示さずに水蜜は霊夢へ猫からもらったアクション何とかのカードを渡そうとしたが、いらないと突き返されている。しかし霊夢は少し考えて。

「チルノにでもあげようかしら」

と更に誰かに渡すためにもらった。その氷の妖精が喜ぶところを考えると自然に口許がほころぶ。だがすぐにハツとして水蜜を見る。いつも通り笑顔である。彼女は霊夢の視線に首を傾げる。

水蜜は思った、もしかして人からもらったものをさらに誰かにやることを気にしているのだろうか。単なる推測かも知れないが水蜜は言う。

「霊夢さんが好きなようにどうぞ使ってください。誰にあげてもいいですよ」

「そう。ありがと」

そっけない返事をしてくる。水蜜としては使い道のないお菓子のおまけなのでどうでもよかったのだが、意外と細かいことを気にしてくることがよくわかった。少しずつ知っていけるのも、一興である。

そこにひとり駆け寄ってくる影がある。見ればお燐である。手にはデジタルカメラを持っている。

「おーい。そのみなさん。おやぶんが呼びですよ、勝ち残ったチーム全員だよ」

お憐が呼びに来てくれたことでほっとしたのは毘沙門天である。その手元にタブレットは既に、ない。

正月 もちつき短話

元旦には近所の公民館で餅つきをする。そんなポスターが町内に張り出されていた。そのポスターはクレヨンで描いたのか、色鉛筆で描いたのかわからないがそれを見た者は「子供が書いた」とすぐにわかるデザインだった。

よれよれ耳の紫の髪をしたウサギが杵で餅をついている微笑ましい絵柄のポスター。それに群がったのは子供だけではない。

むしろ砂糖にたかる蟻のように集まってきたのは、食い意地を人より数倍張った連中であつた。

★☆☆★

公民館に掛け声が響く。夏には小さな祭りもできる広場を持つそこには大勢の人々と妖怪が集まっていた。広場にはブルーシートの張られたエリアが数か所ある。その上には一組の杵と臼。それにそれらを洗うためにお湯の張られたバケツが置いてある。公民館の中には簡単な調理室もあるが、そんなものの生産力では足りない。

「店からもつてきた」

などと言いながら売り物を私物化しているのは桃色の髪の付喪神。いつも不愛想な

がら、この日の為に大八車を用意して。そこに詰め込んだのはステンレスでできた現代的なレジャー用の「カマド」や水を入れるバケツなどの道具である。

それらを手伝うのは青い髪の妖精や押しているふりをしながら大八車を押していない金髪に赤いリボンをした宵闇の妖怪。そして4DSをポケットに突っ込んだ吸血鬼の妹である。一応その後ろからぼてぼてと竜宮の使いを名乗る美人も煎餅を齧りながらついてきている。

それらの「道具」を見た食い意地の張った連中は自ら用意を手伝った。楽しそうにカマドを並べていく小さな鬼は酒を飲みながら、とある船長もニコニコしながら並べている。その横で青い髪の尼が小さな鬼の酒を飲みたそうに手伝っている。

しばらくしてまるで軍隊の野営地のように竈が立ち並ぶ公民館。リサイクルショップにあったものだからカマドは多少汚れているが関係ない。

「新聞紙大量に持ってきたぞ。あと木材も」

とある白狼天狗が燃やす用に「新聞紙」を持ってくる。木材はアイドル事務所のス Teeジづくりなどで知り合った業者からもらった。袋に満載してまたまた大八車を使って持ってきた。燃料にするのだ。

「いや、これ私の新聞じゃないですか!？」

「燃やしてしまえばいい資源になるじゃないか」

白狼天狗に抗議している一人の天狗の少女に関心を持つ者はいない。そんなどうでもいいことよりももち米がすっかり入ったセイロをカマドに設置する方が忙しい。普段は人々をきょうふのどん底に陥れている青い髪でオッドアイな少女も三角巾にエプロンをして、セイロを近所のおばさんたちと共にうんしょんしょと運んでいる。

セイロは三段。カマドの数を考えれば一度でかなりのもち米を炊くことができる。

かまどに火を入れているのは白髪で不死な少女。よれよれのスーツ姿の何でも屋である。白狼天狗の持ってきた「燃やせるゴミ」と木材を入れては火をつける。何故か、指をパチリとするとマッチもライターもないのにぼやつと明るい炎が上がる。

不愛想な彼女の周りには子供が何故か集まってくる。町内の少年少女に妙な人気があるのは、普段ぶらぶらしがてらに遊んであげるからだろう。三人の妖精なども彼女に懐いている。不死の少女は彼らに「と」と言われながら「ちがうちがう」と軽く返している。

元々町内会で用意していたもち米程度では足りないのか、勝手に買ってきたりもらってきたりする者も後を絶たない。主に人手が、いや河童手の力を借りることが多い。とあるキュウリを好きなツインテール河童の号令で河童達は各地のスーパリーに向かう。

だがとあるスーパリーに買い出しに行った数名は帰らぬ妖怪と成った。意気揚々と出かけた和太鼓の少女などは、どこかで泣いているかもしれない。

それぞれが勝手に持ち寄ったもち米を運ぶのは力のある者でなければならぬ。

そんなこんななどある巫女と土蜘蛛が重労働をさせられていた。もちろん教師やピクンク髪の旧地獄の地主も手伝ったが、単純労働者としてはやはり巫女たちが役に立った。もちろん近所の男手もある。

「こ、これえ。鬼がやればいいじゃない……なんで私がやるのよお」

もち米の袋を抱えてうめく巫女。

「……しよくひがうく。しよくひがうく」

生活的な呪文を唱える土蜘蛛。モチを持って帰る計画がある。

それらを苦笑しながら見ていたとある僧侶がいた。比較的到他の少女よりも肉付きの良い彼女は、自信満々な顔をしたながら袈裟を脱ぐともち米担ぎを手伝う。それを見てとある毘沙門天もち米を持ってからこけた。ネズミはいない。食べる時まででてこないだろう。

湯氣を立てて。もち米が炊けていく。不死の少女は炊けて居そうなセイロを開けてはもち米を摘まんで食べる。はむはむと噛んでからよさげなものは、杵と臼のエリアに運ばせる。妖精に持たせるのは怖いので近くにいた狼少女に持たせたりしていた。

忍び寄る影は一人の姫。不死の少女がセイロを開けた瞬間におかつばで黒髪な彼女はしやもじを突つ込む。それから手に持っていたお椀に入れて、さらに後ろにいたよれ

よれ耳ウサギに醤油を掛けさせて食べる。

もち米の炊き立ては粒が立っていて、醤油とよく合う。ぱくりと姫がおいしそうに食べるのを青筋を立てて怒る不死の少女。やくぎのようなならみ合いに発展している。

それはそうともちつきがやっと始まった。事前に数人がかりで杵を使いもち米を潰す。それからよく知られている杵で餅をたたき上げる作業に入る。

まず杵を持ったのは無意識な少女だった。するりと現れて、いつの間にか湯気の立つお餅の入った臼の前に立っている。それを見て、前に出たのはとある喫茶店で働く少女である。銀髪を三つ編みにして、店で使う「あんこ」などを大量に持ってきたメイド兼英雄であつた。

「ほいー ほいー」

と妙な掛け声をしながら無意識な少女は杵を打ち込む。そのタイミングを見ながら合いの手をするメイド。一瞬でもずれたら手が粉碎されるこの状況。無意識な少女の合わせにくいタイミングにもメイドは瀟洒な姿勢を崩さずに対応している。

「よーし。私も」

と言いながら別の場所で杵を撮つたのは、地獄鳥である。大柄な少女はあたりを睥睨している。餅の前に仁王立ちする。自身に満ち溢れた顔は可愛らしいが、誰も合いの手をやりたがらない。

ツインテールの河童が近くにいた赤髪で三つ編みな猫に「行け」と親指を立てて示すと。猫は両手の掌をまあまあと出して、小刻みに首を横に振った。死にたくはないということだろう。

いつの前にか地獄鳥のエリアから人々が数歩下がった。

だが、捨てる神あれば残る少女もいる。正確には周りの動きに気付かず一人前に出る格好になった烏帽子をかぶった豪族の少女である。カシミアのコートなどを着こんでいるが、下はショートパンツという健康的な格好をした彼女。

「な、なぜ私の周りには誰もおらぬ!?!? はっ?」

地獄鳥と眼があつた。不敵な顔で見ってくる。

豪族の少女は「よ、よかろう」と腕まくり。彼女は泣きそうな顔で合いの手に向かう。いつもの小料理屋で働く相棒を目で探すがいない。仕方なく、白の横でウルトラマンのように構える豪族。

「か、かかってくるがよい」

剥き出しの足が震えている。

実は遠くから嫉妬深い瞳が見ていた。深い緑の瞳をした美少女は三角巾をしている。さつき唐傘お化けに借りたのだ。そのお化けは今餅をついている。よろつとしながらも頑張る姿に応援の声上がる。

翻つて豪族の方は悲愴だ。「でいやああああ」と全力で打ち込む地獄烏に豪族の少女は全神経を研ぎ澄ませて対応している。

嫉妬深い少女のそれには憐れみを込めた目で見ているが、あれだけ元気なのは妬ましい。ちなみに彼女が何をやっているかというと、餅にいれるヨモギを絞っている。ぎゅうと手で丸めて水気を抜く。あとで餅に入れて付けば、緑色が鮮やかなヨモギ餅になる。

その横には小柄な吸血鬼がいた。青みがかつた淡い銀の髪。赤い瞳に映っているのはやはりヨモギ。さらにその横には赤い髪で何故かメイド服を着こんだ中国拳法の達人がヨモギを丸めている。さらに横には携帯を扱うのが好きな天狗がヨモギを地面に落としておろおろしている。これほど豪華なヨモギ餅づくりもないだろう。

吸血鬼。拳法の達人。橋姫。天狗である。彼女達はぎゅつぎゅつとヨモギを握り続ける。

一方、豪族は地獄烏との死闘を終えていた。白にはきらきら光るかのような白い餅が湯気を立てている。口に含めばほのかに甘いだろう。そしてよく伸びるに違いない。豪族はその出来に涙を浮かべて感動した。命を懸けた甲斐があった。

その餅を丸めるためにとある朱鷺で読書好きな少女が公民館に熱がりながら持つていく。その様にほろりとする豪族だったが、彼女のクライシスはまだ続いていた。

「つぎはあたいなね」

豪族は固まる。ぎぎぎと後ろを見れば杵を持った青い髪の少女。地獄烏に劣らずに自信に満ち溢れた顔である。豪族は生きた心地がしない。

★

出来上がったお餅はどんどん調理されていく。それに伴って公民館の至る所で座り込んで食事が始まっている。いつの間にかネズミもやってきた。

つきたてのお餅を大根おろしと醤油に付けて食べる船長。はむはむと食べては噛み切る。彼女は巫女を見つけるとそちらに歩いていく。

その前に立ちほだかるのは青い髪をした美しい少女だった。天人たる彼女はじつとりとした目で船長を睨みつける。彼女も船長と同じく餅を食べているが、彼女の持っているのはきなこ餅である。

「な、なんでしょう」

「別に、なんでもありません」

といいながら互いに餅を食べ合う妙なならみ合いが続く。船長が巫女の所に行こうとするとすうとスライドして邪魔してくる天人。

「あつ UFO」

船長の妙なフェイントにどここと寄ってくる唐傘の少女。手にはヨモギ餅。天人は動かない。

公民館の入り口では何か「怖い目」にあつたスーパー帰りの太鼓の少女が戻つてきた。彼女は近くにいた狼少女から餡子餅を貰つておいしいおいしいと食べ始める。つきたてのお餅は柔らかいのである。

豪族の少女などは生き残つた感慨からか両手に餅つかんで食べている。その横には無表情で「ぐっじよぶ」などと親指を立ててくれている面霊気。小さな妖精たちや妖怪は気にせずにいよいよと食べている。

この喰いっぷりには町内会の人々も負けてはいなかつた。公民館から出てきたのは年配の女性が「おしるこだよ」というと、きらきらとした目で妖怪達が集まつていく。百鬼夜行である。ただ、聖人たる僧侶も一人きらきらした目でお汁粉によつていった。

不死の少女も貰つた餅をちびちび食べている。火の前にいたのが熱かつたからか、汗を掻いてる。彼女はシャツの胸元を緩めて、手で扇ぐ。いろんな人間や妖怪が来ていることをなんとなく見ている。

近くの駐在所で働く警察官の青年とよれよれ耳のウサギが何かを喋っている。ウサギは言い訳をしているようである。天狗達は寄り集まつて食べ比べをしているようだが、黒髪为天狗が白髪为天狗をなんらかの理由で怒らしている。

わいのわいのと餅を食べつつもまだまだもちつきは終わらない。

地霊殿の主などはどれだけ持って帰れるかを楽しみにしつつ、その横ではとある教師が重労働で疲れている巫女の肩を揉んでいる。土蜘蛛はお汁粉をずずすとニコニコしながら食べている。

巫女は思う。

「つかれた」

口に出てしまった。

40話

天に昇りきったお天道様がだんだんと沈んでいく。夏の長いお昼はゆるやかに流れていく。河城にとりはそんな空を見上げながら、薄いパーカーを羽織った。これ以上肌を見せるのは他のやつでいい。

「それじゃあ、二回戦を始めるとしようかな」

しかし、元々この勝負はにとりの商戦の一部に過ぎない。あまり長い時間、観客を拘束すると帰ってしまう可能性もあるのだ。それでは食べ物も飲み物も「グッズ」も売れない。プロマイド関係はさっそく自分の分を回収したから問題はない。

——ちっ

回収される時に陰で舌打ちをした河童達。

それでもすでに市場に流れてしまったものは取り返せないだろう。にとりはそちらはそちらとして、今はどれだけ儲けるかを考えている。

商売に置いて「利益」を高める方法はふたつある。一つはコストカットである、わかりやすく言えば従業員の給料を極限まで減らせばよい。その時重要になるのが転職す

る暇を与えないことである。

もう一つは現代的資本主義の王道である。投資を行って全体の生産性を上げることだ。

にとりはずでに前者を実行している。時給数十円程度で寺の者たちを雇用しているから、これ以上は奴隷制と変わらない。それに他に削れるものはない。

だからこそにとりは後者をとった。

一試合ずつやるから観客が帰ってしまうかもしれないという不安がでる。ならば「同時に行えばいい」のだ。ビーチバレーのコートは今朝河童達が一つだけ整備したが、もう一つ作ればいい。

ポールなどは簡単である。ネズミやその他の敗北者に両側を持たせて試合時間中立たせておけばいいのだ。あとはライン程度だが、これも正確である必要などない。ルール自体もあいまいなまま進めてきたのだ。

これを今忙しすぎてひいひい言っている河童にやらせればいい。忙しいから無理はうそつきの言葉と有名な経営者も語る。やらせればできる。為せば成るのだ、なにごと

も。
このような美辞麗句でコーティングした思考をにとりはくりつとした瞳を動かしながら、かわいい顔で思っていた。

「そうだな。あとは何をしようかな」

にとりは腕を組んで考えている。

彼女がお金を欲しがっているのにはとある理由がある。それについても少し楽しみではあるが、にとりは次の手を考えるのに忙しい。

見ればお燐に呼びに行かせた一輪、水蜜、寅丸、霊夢がのろのろと戻ってきている。にとりはきらりと瞳を輝かせて、にやりとする。

★

「え？ 本当に水着を着替えてもいいですか？」

雲居一輪はそれを聞いて、ぱあと花が咲いたような笑顔を見せた。だが、直ぐにいぶかし気にいう。

「もしかして、また変なものを着せる気じゃないの？」

喜んだり疑ったり忙しいやつだなにとりは思いつつ、両手を上げて言う。

「違うよ。二回戦も始まることだしさ、あんたにももつと動きやすい恰好してもらおうと思ってる。……別にそのままでもいいんだよ」

いぶかし気で、胡散臭いものを見る目を一輪がしている。

にとりはやれやれと首を振って、近くにいたお燐に持たせた小ぶりのポストンバッグを手に取った。その中からごそごそと一枚の水着を出す。

背中の空いたワンピース型の水着である。前に水蜜が着ていた物と同型であった。にとりはそれをぽいと一輪に渡す。

「わ、っ」

一輪は受け取ると少しほっとした顔をした。これでかなり恥ずかしさも軽減されるだろう。じーんと今まで味わってきた恥辱が脳裏を駆け巡った。

突然紫の派手な水着を着せられて、妙な謝罪ムービーを撮られ、知らないところでポスターかされたものを町中に張り出され、海の家でこき使われた上にビーチバレーなるもので衆目を浴びた。

今、手に持っている水着を着直すならば、かなり心は楽にある。少なくとも谷間は見えなくなる。

そう思いつつ、一輪の手は新しく渡された水着をまさぐっている。

「なにやってんの?」
にとりが聞く。

「え、いや、穴があげられるんじゃないかなと思って……」

かなり用心深くなっている。にとりを全く信用していないらしい。

「そんなわけないじゃん。そんなことをしても私にはなんの得もないし。……まあさ、その今着ている水着も洗って干すから。着替える気があるんなら早くしてくれよ」

にとりが親指を立てて、自らの後ろを指す。さしたのは海の家に隣接したアイドルに切り刻まれた更衣室である。痛々しいつきはぎがされている。応急処置直したのだろう。ドアを付ける金具などはないから、入り口には厚いカーテンが張つてある。

「わ、わかりました」

一輪も領いてそこに向かおうとしたのでにとりは、ボストンバッグを押し付けた。

「ほら、これ。持つて行つてくれよ。中にこんなやつがはいっているから」

にとりが手にしたのは髪留めである。それはヒマワリをもした小さなものである。

「なんですかこれ」

「見ての通り何の変哲もない髪留めだよ、これを付けてきてくれよ。……あー疑い深いから言つておくけど、単なる小道具だから」

「別にいいですけど……」

疑うということを仏教徒がしているのか。にとりはそこまで言わない。

一輪はボストンバッグを肩にかけて、更衣室に消えていく。シャツとカーテンが締まる音がした。にとりはその前に立つ。

カーテンは分厚いのでシルエツトも見えないが、足首が見える。片足でとんとんしたり、中をちよつと歩き回つたりしてから、どすんと置かれたボストンバッグの底のあたりが見える。

「ああ、水着は返してくれよ。脱いだらそのバッグに小さな袋があるだろう？ 入れて投げてくれよ」

『……………はいはい』

てきとうな返事が返ってきた。

(着替えている途中で更衣室を解体してやろうかな…………)

まるコントのようなことになるであろうが、一輪からは乾いた笑いしか出ないことになるだろう。

中で布こすれる音がする。下から見えている足首に紫の水着が降りてくる。それを片足ずつ脱いでから、一輪の手につままれてにとりの視界から消える。

こそこそという音はボストンバックの中から袋を探しているのだろう。

「上から投げていいよ」

『……………はいっ』

勢いをつける音がしてから更衣室からポーンと仮面ライダーの袋が飛び出してくる。それをにとりはキャッチした。中に脱いだものが入っているのだろうが、外からはライダーキックしているキャラしか見えない。

『なんでそんな袋を…………？』

「意味なんてないない。単にその辺にあったからさ」

疑問には適当に答えて、にとりはいう。一輪はそれには答えずにごそごそと動く。足首にさつきにとりからもらったワンピース型の水着を通して、上にあげていく。それからしばらく無言になった。

『あの。ちよつといいですか?』

「なんだよ」

『……これ。サイズが小さいんだけど、きついというよりは着れない……上にあがらない』

「だろうね」

『!!?!?』

「……ことも何気にいうにとり。一輪の指がカーテンにかかる、それを勢いよく開けて抗議しようとした。だが、少し開けて、直ぐしまった。はめられたと気が付いてももう遅い。」

『き、貴様……』

更衣室から怨念が漏れる。さつき危うく恥ずかしいというよりは、警察沙汰になる格好で外に出るところだった。それはできない。つまりは今牢獄にいるのと変わらない。「おっと。勘違いしてもらったらこまるよ。私だつて鬼でも天狗でもないんだ。ちゃんとそのバッグには着替えて入れているだろう? よく探してみてくれよ」

『……中には髪留めが幾つかしか入ってないけど』

「側面のポケットを見てみたらいいよ」

しばらく何かを探す音が響く。一輪の方からは何も言っていない。怒りと悔しさなどがないまぜになっているのだろう。にとりは全く気にすることなく聞いた。

「あつた？」

『……あのこれ。さっきのあんまり変わらない、なんで胸元がリングで留めてあるの？』

「ほら、あんたも幻想郷ではリングで戦ってたじゃん。へいきへいき」

『な、な。なんの関係があるのよ！』

中は見えない。にとりは追い打ちをかけた。

「べつにいいんだよ。無理強いはしないさ。カーテンを開けて出てきてもいいよ」

『で、でてこれるわけない……』

他に着替えなどない。

「そうなんだ。更衣室は簡単に壊れるから、早くしないと意図的に壊すよ」

『!?!』

「それじゃ、私は忙しいからいくけど、あんまり出て来なかつたらわかつてるな」

『ちよ、ちよつとまつで』

なんか声が滲んでいるような気がしたが、にとりは気にしない。

★

にとりは近くの浜辺をなんとなく歩いてゐる。直接海の家に戻れば、手伝わされる可能性もある。サンダルで砂が指に挟まるたびに波で流す。

「また、何か考えていますね」

声と呼んでくる。

にとりはその声のした方をちらりと見る。

そこに立っているのはスポーティな水着を着ている閻魔である。泳いでいたのか髪が濡れている。四季映姫は濡れた前髪をそつと、手で払う。その静かな仕草にはどことなく品がある。

「あんたか。なに？ 閻魔でも遊びたいときくらいあるの？」

「……………貴女は少し言葉が多すぎる、それでは」

「あーあー。いーいー。お説教はお金貰わないと聞きたくないよ」

映姫はじとつとにとりを見てから、ふうと息を吐いた。眼を閉じると整ったまつげが長いことが分かる。にとりは頭を掻く。

「考えてるって言ったって遊びだよ、悪いことしてるわけじゃない」

一輪はノーカウントである。

「それにさ。そろそろ私も疲れてきたし、ここらで一気にはああと勝負して、盛大に在庫処分しようってだけだよ。それとも閻魔様は金儲けはだめなのか」

「いいえ、お金についてあまり執着するのは感心しませんが、無頓着であるのもいけません。それよりも、一つ警告をしに来ただけです」

「警告だつて？」

にとりの眼が光る。彼女も目の前の閻魔がこの異変について感づいていることがあることくらいは分かっている。だから、おちやらけた口調を質して鋭い目つきで問う。

「なんの警告なのさ」

「……貴女は少し勘違いをしている。私は貴女がやっている根本的なことに何か言いに来たわけではありません」

映姫は右手で左ひじを持って立つ。小首を傾げて、苦笑している。

「貴女は敵を作りすぎています。気を付けなさい」

「敵？ そんなのがどこにいるのさ」

映姫は憐みの眼でにとりを見た。まだ何も知らぬ河童にため息をついて教えてやる。

「さつき路空（うつほ・お空のこと）があなたに縛られていた魂魄妖夢を遊び半分で開放していました」

にとりは空を見上げた。

ああ、来るのか。そう思った。

刀をとりあげてて本当によかったとも思った。おそらく今頃は血眼になつてにとり

を探しているだろう。この炎天下の中で審判席に縛り付けて、幽霊としての尊厳なんて与えてなかった。

「やばいね」

端的に言った。現状を表すことでそれ以上はない。にとりは急いで海の家に戻ろうとする。ただ、彼女はパーカーの中からハイビスカスの花を象った髪飾りを取り出して、映姫に投げる。

映姫は胸の前で両手でキャッチする。

「それ、頭につけといってくれよ」

「私が、ですか？」

「他に誰がいるんだよ。お空にも後で渡すからさ」

そういつてにとりは走り出す。

後ろではちよつと迷いながら、映姫が髪飾りを頭に付けている。自分で自分の髪を撫でている姿は、ただの少女である。

★

西部劇のように水蜜が回転しながら海の家からたたき出された。

日焼けした少女がごろりと砂浜に倒されるのは、人目を引くだろう。彼女はすぐに起き上がった。指で肩ひもを直して、ばんばんとお尻を叩く。

「なんだか、今日は転がされてばかりな気がするんですけど……」

水蜜をたたき出したのはいきなり「河童」と言いながら乱入してきたアイドルである。近くにいたウエイトレスをしていた河童を捕まえようとしたので水蜜と霊夢で取り押さえようとしたら、水蜜が柔術で転がされた。

ついさつき妖夢は真つ赤な顔をしながら、駆け込んできたのだ。少々、気が立っているのか焦っているのか、息が荒い。彼女の目的は二つである。自らの大切な二振りの刀とにとりである。

店の中では妖夢と霊夢が対峙している。妖夢は手に刀ではなく、何故かイルカ型の浮き輪を持っている。小形のそれは尻尾のあたりを持ってばシルエツトくらいは刀っぽく見えなくもない。

一方の霊夢は大きな手に大型の水鉄砲を持っている。二人はじりじりと間合いを測りながら円の動きをしている。二人の表情は真剣そのものである。

「霊夢さん。私の刀はどこに行っただんですか！ あと河童は！」
「知らないわよ。試合に合わせて誰かに預けた気がするけど」

妖夢の体が沈む、

霊夢が瞬きをする間、妖夢が懐に入った。

イルカの斬撃が空から降ってくる。

「ちっー」

霊夢が水鉄砲を横にしてガードする。

二人の少女はそのまま力比べをするかのように押し合い、それから離れる。すかさず妖夢は横にイルカを振る。鋭いそれに霊夢は一步引いた。だが、三の太刀、いや三のイルカがさらに霊夢の頬をかすめる。切り返しが恐ろしく速い。

霊夢は斬撃をグレイズしつつ、引き金を引く。一直線に水が発射された。しかし、妖夢はイルカでそれを弾き、横に移動する。ぴしゃつと弾かれた水が地面に落ちる。

妖夢がイルカを虚空で振る。それで円の形に水滴が飛んだ。

緊迫した空気に支配される海の家。何をやっていいのか全く分からないがやっている本人達にも河童にも妖怪にも人間にもわからない。それでもその動きは少女のそれではない。

「がんばれーれいむきーん」

水蜜が明るく声援を送る。それがきつかけだった。

ぬっと現れたのは比那名居天子である。青い髪をなびかせて両手組む。彼女は水蜜の横に立ちつつ、いう。

「霊夢が勝つわ」

断言しながら鼻を鳴らして、ふんと水蜜をちらりと見た天子。水蜜は水蜜で何故か対

抗心が湧いてきた。

「ふふ、霊夢さんは私が育てましたから」

妙な冗談を口走る。天子が軽く睨む。水蜜もふふんと鼻を鳴らす。

どたどたと厨房からきらきらし目で出てきたのは、そばかす河童である。彼女は「どつちが勝つか」などと喚き、張った張ったと賭けを始めた。幻想郷でもやっていたくらいである。

それにつられて、海の家に来ていた客もこれはなにかのイベントと認識したらしい。そもそも妖夢は芸能人である。どこかにカメラか何かがあるのだろう。それでわいわいし始める。

厨房からは一匹のねずみがひよっこり顔を出して、直ぐに戻した。両手に卵を持っている。ナズーリンである。彼女は猫の絵柄のエプロンをしている。

その近くでメモを取っている毘沙門天。闘いの神として霊夢と妖夢の戦いが見逃せないらしい、眼を見開いて微笑しながら仁王立ちをしている。

「なにをしているのかしら……」

三角頭巾をしてウエイトレスを手伝いに来ていたさとりがぼやく。彼女がテーブルに近づくだけで「さとりさま」「さとり様だ」と人間達が騒めくので妙なことになる。しかも満員なのにさとりは歩く道はモーゼが歩くように人が避けていく。ウエイトレス

にはうってつけだった。

外から顔を出したのは赤い水着を着ている教師こと無職、いや上白沢慧音だった。手にはボールを持っている。昨日と同じように備品の管理をしていたのだろう。彼女に膨らまされたボールは空気がよく入っている。

「わ」

その背中に無意識に乗りかかるこいし。にこにこしながら「おんぶしてー」と来る。何故か腰には二振りの刀を佩いてる。

それで慧音がおんぶする。苦笑しながら慧音はこいしが落ちないようにする。股を持って引き上げる。そこで気が付いた。こいしが腰にしているものを妖夢が探しているのではないだろうか。

「あ、やじろべーだ」

慧音の疑問をよそに刀をいつも持っているからのあだ名を妖夢に付けるこいし。慧音がさらに聞こうとすると妖夢と霊夢がさらに切り結んでいる。霊夢が近くにあった机を蹴り飛ばすと妖夢はそれをするりと抜けて、距離を詰める。

「霊夢さん、覚悟！」

「甘いわよっ」

イルカを水鉄砲で払う霊夢。周りからは歓声が上がります。動きが良いのである。それ

で慧音は聞くタイミングを失った。さらにどこからともなく少年たちと共に黒い水着の地獄鳥、お空がやってきた。海の家窓に寄りかかって見物し始める。

少年たち、お空、聖。彼らは並んで見物している。一人は聖人として名をはせたはずだが、柔らかく微笑んでいる姿は保護者のようである。しかし、見方を変えれば少年たちと並んでいる姿は純粋な少女のようでもある。

「何やってんだこいつら」

にとりは正直に口に出した。帰ってきてみれば店の中でチャンバラが始まっている。全く予想の外のことだった。

「まあ、いいや」

楽し気にやっているようである。全員が集まって何かをやっている。一輪がないが、今頃苦惱でもしているのだろう。仏教の修行を手伝ってやったのだから、お礼が欲しいくらいだ。

「そうさ、楽しければいいよ」

にとりは歩く。水蜜と天子の間を「ちよいとごめんよ」と手でどけて、海の家に入っていく。中では妖夢と霊夢がつばぜり合いをしている。それを囲んでみんなでワイワイしている。妖夢がいるから、なんかの企画と思われる。

本当は刀をとり返しにきたら、こじれてこうなった。幻想郷であれば弾幕ごっこでも起こっただろう。それでもいいのだろうとにとりは本能的にわかっている。

「ほらほら、何をしているんだよ」

にとりは手をぱんぱんと叩いてわざとらしく妖夢を挑発する。妖夢は一步下がってから、ぎらりとにとりを睨んで、一足飛び。滑らかに上段に構えてイルカを落とす。

それをにとりは片手で止めた。ぱあんとゴムのイルカの弾く音がする。にとりはふつと笑う。

「そんななまくらじゃ私はきれないよ」

そりゃあ、そうだろうな。

誰もが思ったが誰も言わない。ただ一人妖夢だけが焦った顔で叫ぶ。涙を浮かべて訴えるかのようだ。

「私の剣はあ?」

刀が無くては不安なのだろう。にとりは妖夢に「あとで返すよ、いつ返すかはわからないけど」と言つて宥める。ついでに「暴れると売るよ」と脅すと、妖夢はしゅんとなった。そもそも刀を物の人質に取られたからこそ、縛られたのだ。

悔し気に肩落とす妖夢にとりは「どんまい」という。

それから、周りを見回す。それぞれが何かを期待していたり、困惑していたり、呆れ

ていたり、つまみ食いしている毘沙門天がいたりと多種多様である。にとりはいろんな表情があるなと思いつつ言った。

海の家の内も外もいっぱいである。

「それじゃあみなさん、余興も終わったことだし。残りのビーチバレーの試合を」

これは余興だったのだと、とりあえず一区切りして、にとりは拳を突き上げながら言った。

「選手に休みなしでやるぞー！」

ノリのいい店の観衆がわああと答えてくれる。

4 1 話

ブラックな海の家は忙しい。

来る決戦の時に向けて、臨時でビーチバレーコートを簡易的に作る仕事も合わさって、もはや通常の生物の回せる状況ではなくなっていた。

「店番？ とりあえず一人はいてよ」

オーナーである河城にとりの凄まじい一言によってミッション・ワンオペレーションも発動されている。

そこで稼働しているのは一人のネズミである。

「か、カレライイスふたつ、やきそばひとつ……。ビール、びーる、びーる」

死にそうな顔をして動く聡明なナズーリン。片手にはメモを握りしめ、片手には常にお玉であるとか、菜箸であるとかを持っている。彼女は戦いの神である毘沙門天の使いである。

戦いとは常に物資との兼ね合いがある。つまりは兵站だ。その物流の回し方がまずくては戦争などできはしない。それをネズミはよくわかっている。

「お、おかしいだろ……河童共はどこにいったんだ……」

ひいひい言いながら自分で作った料理を自分で持っていきつつ、注文を取りつつ、会計をする。むろん洗いや物も欠かさない。すべて同時並行だった。

例えば火にかけている料理を何秒放置していいのか、店で次に注文しそうなのはだれかを計算しつくしているのだ。彼女はおそらくコンマ数秒の無駄のない動きで仕事をしている。

つまり奇跡的なワンオペを支えているのはこの赤い瞳をした少女の能力にある。ぎらりとネズミの鋭い眼光が海の家を見通す。

「ひい、ひい」

ネズミはちよつと泣いている。もはや自分が泣いていることを認識する頭のキャパシティも惜しい。なんだかよくわからないが次の仕事のことしか頭にない。

それでもこんな可愛らしい少女が切り盛りしているということ、店に客が入ってくる。

★

「回っているようだね。とりあえずあいつに任せておこう」

にとりは海の家をちらりとみて冷たく言う。

ナズーリンはその優秀さによつて店を回してしまっている。だから大丈夫。という

邪悪な理論において放置されることになった。破たんしなければ問題は「存在しない」のだ。よって増員もいらぬ。

彼女はとりあえず目の前に出来上がっている二面のビーチバレーのコートを見ている。一方は先ほどからずっと使っているものである。もう一方はありあわせの廃材などをそれっぽく見せて作ったポールなどである。

それぞれ河童を中心に作られている。意外と見た目だけは良い。これから残り三試合のビーチバレーを休むことなく行おうというのである。

そしてコートとコートの間近くに近くなつた朝礼台を持ってきて設置した。上にはこの試合を両方とも審判をさせる予定のアイドルを載せる。

刀がどうなるんだろうね、とささやかな疑問をにとりが口にするだけでアイドルこと魂魄妖夢はおれた。膝から。

にとりは足もとにあるボストンバッグを手を取った。中には花のついた髪飾りがいっぱい入っている。さつき雲居一輪に預けた物が帰ってきたのだ。

結局一輪は水着を着替えていた。当然と言えば当然である。

「せめて、身体に巻くものがあれば……」

などと言っていたのでにとりは快く体のすっぽり包める大きなタオルを貸してやった。それを警戒しつつ受け取り、身体に巻いた一輪だったが、にとりは思う。

——なんで自分を恥ずかしい方向にもっていくんだらう。

よくわかつていないタオルの意味を一輪を生暖かい目でみやり、ふつと憐みの眼を向ける。ただし一輪がにとりに視線を移すころにはしつかりと営業スマイルをしている。一輪の髪留めにはヒマワリが明るく咲いている。

にとりはさらに考えるのは、この観衆を呼び寄せたのは元々ポスターと垂れ幕なのである。一輪がアップで映っていたものであり、さらに「さとり様もくるよ」とのフレーズも効果があつたかもしれない。

よつてそのさとり様を観客席のVIP席っぽいところに座らせることにした。頭にはおもちゃのぴかぴか王冠を載せてもらう。まるでさとり観覧の試合のようになる。こいしにはさとりが目立ちそうなときに花びらをまいてあげるようにアドバイスした。特に意味はないのであるが、さとりに報酬として米を渡すというと、苦虫を噛み潰したような顔で苦惱して、数分後に了承した。

あとには慧音などは会場の設置が終われば海の家で働いてもらうのである。にとりはそして残りの選手たちに花飾りを配ることをした。

★

かくしてきらきらの王冠を被った古明地さとりが足を組んだ状態で見守るなか、最終決戦の火ぶたが落とされようとしていた。詰めかけた観衆も静かに待っている。

衆目の集まる中。

コート中央にある朝礼台に上るのは、一人のアイドル。小さな足に、小さなサンダルを履いて。とんとんと錆びた朝礼台を軽やかに駆け上がる。

細身の体を淡い緑の水着で包む。銀髪につけたのはいつもの黒いリボンではない。カチューシャに咲いているのは赤いコスモスの花。

両手にマイクを持ったまま、につこりとアイドルスマイルをすると観衆が騒ぐ。

人前でこの「あいどるすまいる」をするためにこの魂魄妖夢は数十日の特訓を鏡の前でしたのだ。そんな過去を思わせない、愛らしい笑顔。

「さあ、皆さん。今日はこれだけの人にあつまってもらってありがとうございます」

静かで、透き通った声である。発声練習は妖夢は現代に来て、何度もしている。

「これからこのビーチバレー大会の決戦を行いたいと思います。まずは一気に二試合を行い、それから休むことなく決勝戦を行います。ぜひみなさまの温かいご声援をお願いいたします」

すうと空を妖夢が見れば、嘲笑っている天狗の顔が見える。にこりとして、帰ったら覚えてろ。その純粋な笑顔に観衆からは「かわいー」などと聞こえてくる。いつもなら妖夢も恥ずかしがるが、今は無になっているのだ。

「それでは選手の入場です。まずは、一回戦でこいしチームと激戦を繰り広げた毘沙門天チームの入場です」

妖夢はその試合を見ていないので完全に伝聞から想像している。

そして姿を現したのは、金髪の美少女である。まるで虎の美しい毛並みを連想させるような髪には紫の菖蒲の花。ゆったりと歩く彼女は戦いの神らしく、泰然自若としている。その長いまつげ、涼やかな目元であたりを見回している。

ちよつと手が汗ばんでいる何てことはこれっぽっちも感じさせない。

着ているのは上下白のビキニ。下にはスカートも履いているのだった。

その後ろからやってくるのは青い髪の子。体をタオルで包みながらに入場である。彼女は心底しまったと思っっている。顔を赤くして、ちよつと下を向きながら髪を一本にまとめている。その髪留めに光る元気なひまわりの花。

彼女がタオルをそつと脱ぐと、中からはトロピカルな水着が明るく、太陽に照らされる。構造自体は先ほどまでできていた紫の水着とほとんど変わらない。細い腰回り、しなやかな肢体が健康的である。

トップスの胸元を支えているのは胸の間にある、小さなリングである。幻想郷でリングを使っていたから大丈夫とには言ったが、リングの中に肌色が見える。

ざわめきが生まれるが、一輪は空を何かを悟ったように見上げている。顔が多少赤い

し、下手にタオルなど着てきたからパフォーマンクス性が上がってしまった。タオルが砂浜にひらひらと落ちることも、まるで映画のワンシーンの様。

一瞬だけ壇上のアイドルと一輪の眼があつた。お互いにいつくしむような目で見合う。妙な絆が生まれていた。

「さて、次はあのさとり様に勝つた！ 巫女と船長のチームの登場です」

さとり様に何故か視線が集まるが、さとりが右手を上げると静まる。既に王の貫禄がある。後ろではこいしが花びらをまいている。

「つたく。なんでこんなもの付けないといけないのよ」

「まあまあ、霊夢さん。楽しんで逝きましよう」

「？　なんか、違和感があるんだけど」

仲良さそうに話しながら出てきたのは片方は黒い髪に赤いリボン。そしてちよつと大きなタンポポの花をつけた巫女である。

物怖じせず無表情でのしのし歩く貫禄ある姿。それをさとりが小さな声で「がんばれ」と応援している。しかし、さとりが応援すれば観衆もそれに同調されかねない。

だから慧音が遠くから応援している。霊夢は水玉模様の少女らしい水着を来て、下にはホットパンツを履いている。

「なんでここまで来てタンポポなのよ……」

何か不満がありそうな彼女の背中をまあまあ、と押しているのはにこやかな船幽霊である。ちよつと癖のある黒髪に大きくて淡い藍のあじさいの花。

着ているのはメロン色な上下別れた水着。幽霊の癖にこんがり焼けた肌は、トウモロコシを焼いた時の残り。彼女は観客にサーブで両手を振る。なかなかの人気である。両手にはシユツシユを付けていたりもした。

それを見て妖夢もすうと息を吸う。既に彼女は仕事モードである。数か月の練磨により個人的な感情を置いておいて仕事に専念できるスキルを彼女は身に着けている。もちろん夜はベッドの中で悶え苦しんでいる。

「さあ、次は地獄からのやってきた地獄烏と閻魔大王の登場です」
その瞬間である。

わああと大きくて幼い声が出た。見れば小さな子供達が並んで「えいきかんとく」やら「おくうねえちゃん」などと叫んでいる。彼らはとある町のとある少年野球団である。閻魔が監督を代行しているという稀有なことを除けば、純粋な子供達である。

「あつはつはつは。もう優勝したかな？」

その歓声の中、微妙に意味の分からないことを突き抜けるような笑い声と笑顔でやってきたのは、黒いビキニをつけた比較的恵体な少女、お空である。彼女は両手を組んで、白い歯を店ながら大口を開けて、足高く堂々と行く。

今朝までの彼女はどこにもいない。自信を取り戻した輝いた笑顔。

さっきの試合までつけていた白黒縞々の野球帽はかぶっていない。

そのかわりに大きな黄色のパンジーが咲いている。

お燐の後ろからついてくるのは、艶やかな緑の髪。そして太陽に光るハイビスカス。

涼やかな顔立ちをした少女である。四季映姫だった。

「油断してはいけませんよ」

穏やかな声でお空をたしなめる彼女。お空は「はい。監督！」といい返事をする。映姫はちよつとこめかみに手をやってから、ふうと息を吐く。彼女のよく知る死神よりも素直だが、それはそれで問題なのかもしれない。

彼女の着ているのは上下別れたスポーティな水着である。体に張り付いたそれは、彼女の細身のラインを表している。派手さもないが、佇んでいるだけでなんとなく美しい。無駄がないからだろう。

おへそのあたりが少し出ているが、映姫はなんとなく隠している。思考がさとりになっているところもあるかもしれない。

当のさとりはいつの間にかこいしが持つてきたソーダをストローで飲んでいる。

本当はフロートだったのだが、上についていたアイスはどこにいったのかわからない。ただ、後ろで待機しているこいしのほつぺたがもぐもぐ動いている。

妖夢はさらにマイクを両手握りしめる。この程度コンサートに比べればなんでもないのだ。

「さあ、それでは最後に登場してもらいます。圧倒的な力で河童を」

と言ったところで観客が「河童？」と小首を傾げる。妖夢は気が付かない。

「やつつけた二人。比那名居天子と聖白蓮さんです」

★

この入場の少し前である。河童がそれぞれに花の付いた髪飾りを渡し終わってからわずかな時間。霊夢は天子に呼び止められていた。

「霊夢。今回は悪いけど、私が勝たせてもらおうわ」

天子は霊夢を見ずに言った。遠くの海を見ている彼女。霊夢は「はあ？」と口を開ける。何を当たり前のことを言っているのかと思う。

それは自分が負けるのがあたりまえと言っているのではない。天子の言いぐさではまるで「勝ちを譲ってくれるつもり」があったかのようなのではないか。天子たちが本気でやるかとはともかく、勝ちを狙うなど当たり前である。

「いまさらによ。わるいけど、私も今回は本気でやらせてもらおうわ。前の異変みたいにならないから」

天子がすつと眼を閉じる。

今朝のことを思い出す。

チームを作るように河童にいわれてから、あたりを探し回ってみた。

目的の「人物」はおらず。

やっとみつけたら、なんかなれなれしい幽霊に取りつかれていた。天子はそれをどう思うでもなく離れていった。

天子の表情は全く変わらない。その冷淡とも入れる無表情のまま、霊夢に向き直る。

「それはむりね。貴女は私には勝てません」

何故かいきなり丁寧な言葉使いになる天子。その瞳の美しさはまるで一枚の鏡のよう。彼女は霊夢を真っ直ぐに見つめている。少し感情の読み取りにくい顔である。

★

「それでは入場でーす」

アイドルスマイルとあとあと胃が痛くなることと引き換えの可愛らしい声で、妖夢が叫ぶ。頭がいいので細部まで覚えていることは、ふとんで足を何回バタバタさせればいいのか、本人にもわからない。

それでも会場に歩いてくる天子の姿に、観衆は息をのんだ。

透き通るような白い肌、浜風に揺れる結んだ蒼い髪。そこに咲いた淡くはかなげな桃

の花。花柄の水着に起伏は薄い彼女の赤い瞳がちらりとみると、その視線の先にいる人々がのけぞりそうになる。

「おお、れいむさん。みんなびびってますね」

一瞬、声が聞こえた方に天子が視線を移す。そちらにはとあるキャプテンが霊夢に親し気に耳打ちしている。天子はうつすらと笑う。スパイクの餌食にしてあげようと、なんとなく思った。

「そんなに殺気立たなくてもいいんですよ」

柔らかな声は身を黒のビキニに身を包んだ聖人である。

ポニーテールにした髪留めに桃色の桜が二つ付いている。聖白蓮は何故か楽しそうにしている。天子とは違い、にこにここと笑顔でひらひらとスカートを揺らしている。体がうずうずして仕方ないかもしれない。

それでいて天子を見つめる目には優しさがある。天子はそれを無表情に見る。それから言った。

「とりあえず、足を引つ張らないでくださいね。聖」

「はいー」

お空のような返事をする聖人。ちっさく右手を上げている姿は茶目っ気がある。彼女達、桃と桜の揺れる二人はそれから、くすくすと笑い合う。

「これで全チームがそろいました！」

妖夢の声が響く。見びり手ぶり。全身で表現するプロ。刀を持っていないのを残念がっている観客もいる。

彼女は汗を煌めかせながら、お仕事をしている。ある意味現代にきて一番修行になったのかもしれないだろう。

「今から、この四つのチームで同時に戦ってもらいます。対戦カードはトーナメント通り！」

霊夢と水蜜が、一輪と寅丸のペアと眼を合わせる。

天子はそっぽをむきつつ、聖はにこにこ。お空は空を見上げて高笑い、映姫は地面を向いてため息。

「この試合から頭にお花の髪飾りを付けてもらっています」

妖夢が自分の頭につけた、赤いコスモスを指さす。深い赤には品がある。観客席から「かわいい」「かわいい」などと聞こえてくる。

「か、かわ……。はい！ そんなことよりも勝ったチームは負けたチームの髪飾りを頭に付けてもらいます。そして最後にはお花のできるようにしてもらいますっ！」

にとりの発案である。最終的な勝者の頭がお花畑になる。妖夢はかわいいと言われたからか、顔を赤くしつづつもじもじしている。だがきらりと眼を煌めかせた。

「さあ、試合開始しましょう。終わったら私の刀を返してくださいっ！」
割れんばかりの拍手が起こる。その中で互いにならみ合う四チーム。

その中で霊夢が両手を組んでいる。彼女は水蜜に言う。

「とりあえず、あんたの同僚をけちらすわよ」

「あいあいさー」

おーと右手を太陽に、水蜜は振り上げた。

4 2 話

過酷な環境は人の明暗を別つ。

ある者は絶望し、ある者は先へ進むために「眼を覚ます」のだ。

そして今、ビーチのちっぽけな海の家。いや、海の牢獄で一人奮闘するナズーリンの中で何かがはじけようとしていた。

海の家は満員御礼。店員は一人。接客・料理・会計という全てをありとあらゆる雑務をこなしつつ行う。それが今の小さな賢者に課せられた使命であった。

厨房に一人立つナズーリンの紅い目が動く。

(一番テーブル1650円あと数分で食べ終わる、あの様子ならしばらくいる)

右手でかき氷機をくるくる回しながら、左手で熱い鉄板でじゅうじゅう音を立てる焼きそばをヘラでかき混ぜる。両手を同時に「同じ作業」に使う暇などない。

「そうだ、ラムネをさらに持ってきてくれ。大至急だ！」

さらに彼女は首で電話の子機を抑えてどこかに材料の注文をしている。

(三番テーブルの人間はそろそろ会計だ、2930円。3、2、1)

「すみませーんお会計お願いしま〜す」

「2930円になるよー!」

カウントダウンともに振り向いたナズーリンの後ろでは財布に手を掛けたお客の姿。三番テーブルの女性グループだ。もちろん振り向いた時に片手にきらきらと光るかき氷を持っている。

振り向くという一動作すら、惜しい。

ナズーリンはその聡明な頭脳で全てを数式化している。どのテーブルで誰が座り、食事の進捗状況はどうか、雑談をしているかなど様々な情報が頭の中で数字に変わり、神のともでもいうべきタイムラインを作り出している。

手早く会計を終わらせたナズーリンはかき氷のシロップを手に取り、掛けながら焼きそばの下へ戻る。戻った時の焼き加減が一番いいように歩幅を調節している。

ナズーリンの額に汗が光る。労働の素晴らしさに泣いてしまいそうである。

「あ」

くる。

何かが来るとナズーリンは思った。彼女の紅い目がきらきらと星のように光る。彼女は焼きそばを皿に移すと「それ」が来る方向に体を向けた。

「すみません。席空いてますか?」

「いらつしやい。三番テーブルを片付けるよ」

子供連れのカップルが店に入ってくる。間髪入れずにナズーリンは無意識に言葉を出していた、いや右手には小さなおもちゃ。子供が来た時に渡すためにとりがなんとなく用意したものだ。小さくてカラフルなおもちゃの銃だ。

(なんで私はこれを持っているんだ?)

子供が来ることなんてわかつてはいなかった。なのにナズーリンの手にはおもちゃが握られている。いや、そもそも「来店」への強烈な予感があった。

あまりに忙しすぎて、ナズーリンは未来予測までするようになっていたのだ。

彼女はテーブルを一瞬で片付け、掃除してナズーリンの水着を引っ張る子供におもちゃを渡す。もはや何も考えていない。

幼い子供が水着を引っ張ってくる手をクレームにならないぎりぎりのラインで払い。彼女は自問している。

(いやそんなことを考えている場合じゃない。やきそば……やきそばを焼かないと。私は焼きそばを焼くんだ……あれ、なんで私は……)

ふと、頬に手をやると濡れている。汗だろうとナズーリンは手で振り払い仕事へ赴く。

ナズーリンの眼が光り輝いている。この仕事へのやる気が。とある小料理屋の少女の小さな諍いを起こす種がここで撒かれることになる。

☆

試合が始まってもう何分が立っただろうか、にとりはスマートフォンを取り出そうと思つて自分が水着なことに気が付いた。時間を確かめるすべは時計を取りに行かなければない。

手に巻くスマホでも買おうかなにとりが思ったが、直ぐに「いらね」とやめた。彼女は汗で気持ち悪いの肩ひもを引つ張ったりしている。ちらつと見た海の家ではネズミが頑張っているようだ。

「よくやってくれているようだね。あれなら時給を10円、いや15円増やしてもいいよ」

にとりはナズーリンの働きぶりに昇給を決めた。普通にアルバイトをすれば10円の昇給を叶えるために半年は働かなければならないことを考えれば素晴らしいことだろう。

ただ仕事が終わるまでを考えればナズーリンの所得上昇は百円玉一枚に届くかどうかとも分らないが、仕事の価値はお金ではないのだ。

それよりも今は試合である。人の波にどれだけプロマイドと飲み物売り込むかが

最大の課題なのである。書き入れ時に別部署に人員など回さない。ナズーリンがとりあえず「店を回している」から大丈夫だ。多少疲れているかもしれないが、ちゃんと労働者も経営者視点で働いてもらわなければ困るといふものだ。

傾きかかった日の光に照らされた二面のビーチバレーコートで同時に行う試合。にとりもナズーリンほどではないが、売り上げを計算している。あの野望の為にはもう少しお金がいるのだ。

「決まったー！」

がんばって実況をしているアイドルこと魂魄妖夢をみながらにとりは思っている。

彼女に宵越しのお金を持つ気などない、この日が終わるまでにお金はばあと使うのだ。せっかく幻想郷でたまたま鬼に、いや鬼っぽい少女に教えてもらった海に来たのだから派手にやりたいことがある。

その時のことを考えてにとりはちよつと、微笑んだ。愛らしい笑いである。

☆

この試合は天覧試合の形式をとっている。

河童製謎の王座に座る地底の地主、こと古明地さとりは無表情の冷たい目でコートを見守っている。どういう表情をしていいのかわからないのである。

後ろではその妹と赤毛の猫が花びらをまいている。どこから持ってきたのだろうか。

さとりは既に王者の貫禄を身に着けている。今日は早く帰って寝たいと秦ころのよ
うな顔で思っている。それでも彼女とて、ひいきはある。

彼女の眼は先ほどから勝負の一つに向けられている。博麗の巫女と船幽霊の珍妙な
コンビと哀れな入道使いと毘沙門天のペアの試合である。

(霊夢がんばって……)

たんぽぽの花が揺れる。

博麗の巫女が飛んだのだ。コート際すれすれの場所で落ちてくるボールを小気味よ
くスパイクする。一直線に相手のコートに突き刺さる。一瞬遅れて一輪が滑りこむ。
尼は砂まみれになった体を「うえー」といいながら払い、立ち上がる。

「よし」

汗のじむ体でガツポーズする霊夢。いつもの気取ったところはない、素の彼女が
そこにいる。

「霊夢さんナイス！」

たつたか近づいてくるメロン色の水着を着た少女。水蜜は片手を上げる。霊夢はめ
んどくさげにぱんと思いい切り弾く。痛がる水蜜。霊夢は腕を組んでふんと鼻を鳴らす。

ちらりと見たそばかすの河童のつけているスコアボードは「8—10」、前者が霊夢達
である。20点先取の試合は既に折り返し地点である。端的に言えば負けている。

「ちゃんとやりなさいよ。仲間だからって手を抜いてんじやないわよ」

「べ、別に手を抜いているわけじやないですけど……」

いつも通りキツイ口調で霊夢が水蜜に言う。確かに相手コートを見れば青髪の尼も白い水着に身を包んだ毘沙門天も水蜜の仲間ではある。黒髪の船長はちらつと霊夢を見て言う。

「まあまあ、お姉ちゃんに任せていてください」

「誰がお姉ちゃんよ……」

「ほら、相手はあれですよ」

水蜜が指さす。コートの反対側には雲居一輪と寅丸星がいる。

「入道のいない入道使いなんてカレーからルーとご飯を失くしたみたいなものですよ」

「なにも残っていないじゃない」

「そうそう、いちりんなんてそんなもんですよ」

ふはーとわざとらしくため息をつく水蜜。両手を天に向けて肩をすくめる。

「ちよつと聞こえてるわよ!？」

そこに割り込んできたのはネットを掴んで睨みつけてくる一輪である。ネットに寄りかかる一輪の肌にそれが喰いこんでいる。

もちろん水蜜はわざと大きな声で言ったのである。

「あ、福神漬けだ」

「だ、誰が福神漬けだ！　う、雲山がいなくなつてあんたなんか楽勝だから。霊夢さんも覚悟してください！」

「霊夢さん。あんな生意気な入道使えないは得意の無想転生でやつちやつてください。ほらほら」

水蜜は霊夢の後ろに回って、彼女をけしかける。

「ちよ、押すな。それになんかニューアンスが違う気がするんだけど。それにスペルカードなんて使えたらすでにあんたに使っているわよ！」

力が使えるのならば水蜜は今頃ぴちゅんとなつているのかもしれない。だが現実の水蜜はわざとらしく「こわいこわい」とニコニコしながら言いつつ、霊夢の耳元で呟く。「ほら、霊夢さん。一輪と寅丸はさっきのこいしさんとの試合で疲れていますから、チャンスですよ。多少苦戦するかもしれませんが、そこは気合で」

「……あんた。それでもいま、負けてんだけど」

「あらら」

「いや、あららじゃないわよ」

確かに一輪と寅丸は様々なことで疲れているはずである。逆に霊夢と水蜜の疲労度はかなり薄い。それでも甘い相手ではないことは確かなはずである。現に今は押され

ているのだ。

水蜜は霊夢が点を入れてくれたことによってサーブ権を手に入れた。彼女は手にボールをもつて後ろに下がる。

(まあ、私が霊夢さんを勝たせたいのは本当ですよ)

ボールを持つて構える水蜜。周りの歓声よりも目に入るのは相手の顔。

すました顔でたたずむ闘いの神。寅丸星。彼女の動きは一回戦でも見せたようにながら獣ようである。だがしかし、さつきからちらちらと隣のコートを見ている。

(ああ。星。気にしていますね聖様の方を……力を抑えて決勝に温存しようといところね)

横のコートでは彼女達の慕う「聖白蓮」がいた。黒い水着で動き回る姿に歓声が巻き起こっている。その姿を嬉しそうに見ているのが寅丸なのである。

(聖様が活躍しているのを見てうれしがっていますね、ああ、こう付き合いが長いとわかってしまいますわー)

不意に思うのは霊夢とアパート組のことである。ほんのり羨ましい。

水蜜はあとため息をつく。それはともかく寅丸が真剣に「こちらを向いていない」ことは僥倖なのである。勝負の全体像を考えてこいしと張り合つたような全力を出さないようにしているのだろう。

「逆に全力で行かせてもらいますけどね」

ぼつりとつぶやく。

水蜜は大きく息を吸う。しゅつとわずかに前に投げたボール。彼女はゆつたりと近づきながら右手を構える。

彼女はずつと見ていた。今までの試合を一番真剣に見ていたのだ。

にとりやナズーリンのやる細かな芸も、こいしや寅丸のアクロバティックな動きも。そして、四季映姫のやっていたことも。

できるようになったのはついさっきなのだ、だが映姫が力を仕えるのならば水蜜にも

バンツと弾けるような音がした、

水蜜の右手に当たったボールは鋼鉄でも打ち込んだかのようにくにやりと変形してどつとすさまじい勢いで寅丸に向かう。

「！」

超スピードのそれを寅丸は眼で追う。腰を落として、ネコ科の鋭い視線がぎよろりと動く。彼女は一步前が出る。両手を前で組んでレシーブの構えだった、だが飛んできたサーブは手元で「曲がった」。

「くあつ」

突然のことに寅丸は体を投げ出して反応しようとしたが、無理である。彼女の近くにボールが落ち、ばあんと砂煙を上げる。

しんとなる会場は、数秒後におおと豪快な歓声上がる。おかつぱの河童がぴーと笛を鳴らす。水蜜は「いえー」と軽いガッツポーズを霊夢に見せる。彼女は片手を上げて霊夢に近づく。

霊夢は少し呆けたような顔で言う。

「あんた、今のは……」

「だから言ったじゃないですかー。私に任せておいてくださいってね」

水蜜は上げた手を優しく霊夢のほつぺにやった。ぺちんと叩く。にこにこしている水蜜にそれ以上言えず霊夢は呆けている。

（あ、これ。思った以上にきついですね。流石は閻魔ですわー）

くらりとする。どういう原理かは自分でもよくわからないが「幻想郷」での自分の力に戻そうとすると強烈な疲労感がある。彼女は手をさすりながら「霊夢さん。一気にいきましよう」と明るく言う。

彼女は屈伸するふりをして膝に手をつく。はあと息を吐いて、自分の黒髪が煩わしいと指でつまむ。冷たい流し目であたりを見るが、この格好は真後ろから見ればお尻を強調するだけだといきなり直立した。

傍から見ればヘンテコな動きをしている。

「寅丸……今のは」

一輪がいぶかしげな顔で寅丸に近づいた。今の水蜜のサーブは異常である。

速いなどという話ではない。サーブの一瞬に思い切りボールを叩くことで変形させ、寅丸までに届くまでに反発で戻る。むろんボールは変則的な動きをする。にとりのやった回転で曲げるやり方とは違う。完全な力技である。

寅丸は頭に差した菖蒲の花かざりを整えた。その口元はゆるみ、うつすらと歯が光る。

「一輪、水蜜もこのような力を使うのであれば覚悟があるのでしょうか？」

かっこつけながら肩ひもをしっかりなおす毘沙門天。そんな彼女でも戦の神の代理なのである。彼女の眼はぎらりと輝き、その金色の光の中に闘志が湧きたっている。ペロりと舌で口元を嘗めながら、ちゃんと水着の下をはきなます。お尻のあたりの布をお指で整える。

「……一輪。毘沙門天が水着で戦う事ってあるのでしょうか？」

「……………な、なかったでしょうね、あ。で、でもほら。昔の武士はフンドシで戦っている人もいたらしいじゃないですか！ その時地獄にいたからよく知らないんですけど

……………」

「……………」

なんの励みにもならないことを言われて寅丸は肩を落とした。武士がフンドシで戦っていたからなんだというのか。しかも大体そんなことをしているのは下っ端か賭け事にでも負けて具足を取られた輩である。

恰好つけないのに恰好がすぐきになる。むしろ今の痴態を毘沙門天に知られたら代理を首になりかねないのではないかと心配にすらなる。それどころか毘沙門天の監視役は労働者に成り下がってもいる。

不安になり、ううと体を抱くように毘沙門手は震える。両手を胸の下で組む。

「なんかいらつとしますね」

水蜜は次のサーブを撃つためにボールを握っている。視線を一瞬下にして、直ぐ戻す。彼女はすうと息を吸い込んだ。今日は倒れるくらいまではやってやる気ではある。

☆

「メガ・フレアあ〜!!」

天空からお空が思いつき叩きつけたスパイク。天子は両手を組んで受ける。

「うっ」

天子がわずかに顔をしかめる。重い。それでもぼんと空に上げるのが彼女であった。落下地点に走るのは長い髪を後ろで纏めた聖人である。聖白蓮はジャンプする。髪に

付けた桜の髪飾りがひらひらと揺れる。

弓なりにした体がタメを作る。聖が打ち込もうとしたその一瞬。

「よっしやー」

目の前に現れた大きな壁。いやお空である。

聖は「面白いですね」と一言。容赦なく、お空の構えた手にスパイクを打ち込む。

「！」

お空は一瞬目をつぶった。それから手に衝撃が走る。押し込まれるような勢いに後ろへ飛ばされた。彼女は砂の上に倒れる。大の字に倒れた彼女の近くにボールが落ちる。

ぴーと河童の笛が鳴る。桜を頭につけた聖がにっこりとして両手でガッツポーズ。それから「比那名居さんっ」と後ろを見たが、天子は霊夢の側を見ている。

「あはははー。次こそはやってやるわ」

がばりと起き上がったお空は両手を腰に当てて高笑い。なんで笑っているのかはわからない。ただ、少なくともそんな彼女の姿を見ている少女。いや、閻魔こと四季映姫が優しい顔をしている。

4 3 話

あれ？　ここはどこだ。

ナズーリンはあたりを見回していた。ちゅんちゅんと遠くで鳥が鳴く声がする。彼女は顎に手を添えて小首をかしげる。さつきまで自分は何をやっていたのだろうか考えるが思い出せない。

ここはお寺の中である。いつもの通りではないか、と彼女は思った。

外はよく晴れている。洗濯物がばさばさと風に揺れているのが見える。お寺の庭は広いのである。だから彼女たちの今日寝るためのお布団が並んで干されている。

「ああ、なんだっけ」

とても大切なことを忘れている気がナズーリンにはするが、さっぱりと思い出すことができない。それどころかあんまり思い出したくはない気もする。

彼女がどうでもいいかと一人で肩をすくめてお寺の中のリビングへ向かう。ナズーリンや仲間たちが活躍した過去に比べると「お寺」の中も近代的になっている。最近ではコンクリートで固めたお寺もよくある。

ナズーリンは戸棚からせんべいを取り出してぼすんとソファーに座り、テレビをつけ

る。かちかちとチャンネルを変えてから、

「なにも面白いものがない」

と最近の若者ようなことを言つてテレビを消す。さらに新聞をぱさりと広げて適当に読み流し始めた。

「まったくトランプだかU N Oだか知らないけど、連日へんてこな報道がつづくなあ」

呆れた顔で感想を言うナズーリン。足を組んでソファーにもたれかかり、適当にメディアを拝読する平和な姿。暇な中に現代の素晴らしさが息づいているのかもしれない。

「それにしてもみんなどこに行つたんだらう?」

ナズーリンが新聞を下ろしてふと思う。目をくりくりさせてあたりを見ても誰もいない。そこで彼女ははつとした「みんな」などと気を遣う連中ではないはずだ。彼女はこめかみに手を当てて流し目で左右を見る。特に意味はない。単になんとなく恥ずかしさを紛らわせたかっただけだ。

「(バ)しゅじんさまー」

人が特に意味もなく名前を呼ぶときは、何か別のことをごまかそうとしている時だ。それはネズミでも変わりがなくらしい。しかし返事がない。彼女は「やれやれ」といながら適当に新聞を折りたたんでソファーに投げた。そのあたりずさんである。

彼女は素足のまま廊下に出て誰もいないことに気が付いた。ひんやりした廊下がどことなく寂しい。

廊下から玄関が開いている。光り輝く外。その先に洗濯物を干している毘沙門天の姿が遠くに見える。洗濯ものを干す戦いの神とは彼女くらいのものだろうか。

ナズーリンはちよつとほつとしました。しかし、はつとして頭を振る。

「いしゅじんさまー」

と言いながら玄関で草履をはく彼女。隣には水蜜のクロックスがおいてある。完全に現代に染まっている妖怪の持ち物に憐みの目を向けながら、彼女自身の草履もこつそりと鼻緒に柄が入っている。

ナズーリンはけんけんとなつまずいで地面をたたいて、玄関から外に出た――

「は!?」

気が付いた時ナズーリンは洗い物の真つ最中だった。

どうやら白昼夢を見ていたらしい。それでも彼女の手は休むことなく仮面ライダー柄のコップを洗っている。一応どうやったのかはわからないが河童が水道を海の家まで引いている。役所に見られれば河童数匹がお縄になるかもしれないが、どこからか水が来ている。

(いまのは……幻覚?)

ナズーリンは洗いの物を辞めずにおもった。そろそろやばいのではないだろうか、今朝から働きづめでいつの間にかワン・オペレーションが当たり前になっている。おそらく河童からの援軍はないだろう。

(くそ、早くこんな仕事を終わらせてやる)

邪悪な労働環境にいとだんだんと逃げるといふ発想が消えていく。彼女はモルモットではないが、そのサンプルになつている自分に気が付いていない。彼女は洗いの物を超人的な速さで一段落させると、また別の作業に戻る。

「つぎは、つぎは」

ぶつぶつとつぶやく。水蜜と倉庫で読んだ海の家を手伝うイカの漫画が脳内を駆け巡っている。しかし、彼女にはもつと強く思うことがある。

(なにをほつとしていたんだ、私は)

さっきの白昼夢。激務の中の悲劇に違いはないだろうが、なぜかふんわりした気持ちになつてしまった。本来であれば毘沙門天の使いである自分が、毘沙門天代理に「なに洗濯物を干しているんだい！」と怒るべきなのだろう。

(ああ、情けないご主人様だ)

白昼夢のことで批判される毘沙門天代理もかわいそうである。状況的に見ればナズーリンが勝手に見た妄想でしかない。それでも彼女がピーチパレーで盛り上がる会

場に目を移した。恥ずかしい格好でバレーしている「びしゃもんでんだいり」がいる。はあと、もう一つダメ息をつく。

「やきそば、つくらないと」

なんとなく肩を落としていうナズーリン。その肩にそつと置かれる手。

「ひいぎやあああああ！」

体中でびつくりするナズーリン。元来偉そうにしているもネズミは臆病なのである。しかし彼女は見栄っ張りでもある。何事もなかったかのようにすぐにとりすました顔に戻り、くるりと後ろを向く。ほってぺたがわずかに赤い。

見れば青い髪に赤いビキニの女性が立っている。顔はひきつり、びつくりした後だ。慧音であった。

「なんだ。君か」

冷静に聞くネズミ。「君か」という冷静さが見ようによつては滑稽である。慧音はこほんとひとつ。彼女はあえて突っ込んだりはしない。天狗であればからかい倒すだろう。

「い、いや手伝えることがあればと思つて。たいへんそうだったから」

「な、ん……だつて。ふ、ふーん。それは物好きだね」

ネズミは純粋に驚いた、というよりも目が潤んでしまった。ただ流石に泣くわけにはいかない。彼女は「ふん」と鼻を鳴らしてから「そうかい」とぶつきらぼうに言う。

「じゃあ、オーダーでも頼もうかな。エプロンの場所はあそこ……」

ここ、あそこ、とてきぱきと仕事を指示する姿が凛々しさがある。幼い姿はかわいらしいものではあるが、腐っても毘沙門天の使いなのだ。

慧音もくすりとして「わかった」とにこにこしている。まさか自分が地獄の職場に足を踏み入れたとは微塵も考えてはいない。しわ寄せはいつも、お仏壇屋といい人に来るのだ。

☆

「ハイテンションブレード！」

ネット際で叫ぶ少女が、飛んだ。

お空は不敵な笑みとともに、全体重をかけてボールをスパイクする。ハイテンションに打ち出されたそれは敵陣に一直線。文字通りハイテンションに元気いっぱいの一撃。周りから上がるのは歓声と必死なアイドルの実況。

素早く反応したのは最初から楽しそうにしている尼。聖白蓮。

身を投げだして片手でレシーブ。ぱあんと痛そうな音がしたとおり、ボールはあらぬ方向に上がってしまう。白蓮は「天子！」と叫ぶ。

「あいつ、天人を呼び捨てにして、いまさらか」

どうでもよさげにどうでもいいという感じでつぶやきながら砂を蹴る天子。胸元の花柄の模様が揺れ、頭に咲いた花飾りが光る。細い脚で信じられないほど素早くボールの下に回り込むと、後ろも見ずに下からたたく天子。

空にあがったボールはちようどネット際。もちろんちようど待つている白蓮も笑顔。おおと上がる歓声にむしろ胸躍る、普段はおつとりした僧侶も、今日は目を光らせている。もともと体を動かすのは大好きである。

「させないわー！」

それに向かい合うのは黒髪の少女である。自身に満ち溢れた顔が白蓮にもネット越しに見える。ペろつと舌を出して白蓮はお空を挑発する。長い間仏門で修行していたとは思えないほどあどけなくて、愛らしい挑発。

ついでに白蓮は片目でウインク。お空はやり返そうとして両目をつむる。慣れてないというなる。

「あら」

白蓮はとんだ。お空は目を見開いた。ワントンポの絶対的差。

別に狙っていたわけではないがウインクがフェイントになっちゃった。白蓮は空中で困ったような顔をしているが、すぐにきりつと敵陣で空いている場所を見つけ。体

をひねってスパイクを叩き込む。

比較的にしろ恵まれた体の白蓮のアタックは強烈である。だが、それを予測している者がいる。走り寄ったのは四季映姫だ。彼女はまるで来る場所がわかつていたかのよううに、両手を組んでボールを受ける。

(重い)

体に重い衝撃。映姫は腰を落としたためをつくり、ボールをあげる。一瞬両手にしびれが走る。

「頼みましたよ」

「任せて！」

汗をきらめかせながら映姫が声を出す。その凛々しい表情は崩れない。いつでもまっすぐに前を見ているのだ。

ゆらゆら落ちてくるボールの下にはお空の影。今度は外さないとばかりにきらきらとした笑顔。観客席からは子供の声援が聞こえてくる。お空はそんな声を素直に自分の応援として聞き入れる。力が湧いてくる気がする。

地獄鴉はとんだ。空までは届かなくても十分なのだ。

「ハイテンション・ブレイエド！」

大技を繰り出そうとするお空。極限まで腰をひねって、ばしいと全力でスパイクす

る。スペルカードは使えなくても楽しささえあればいい、そんな一撃である。

角度は鋭角、真下に落とすかのように地面に突き刺さる。

「やったああああ!」

両手をあげて喜ぶお空。水着の姿でも全然気にすることもなく、映姫に走り寄って全力で抱き着こうとしたので、映姫はするりとよけた。お空は勢い余って何も無い空間にヘッドスライディング。

「おぶふう」

砂浜に転げるお空の上でなる河童の笛。得点の合図。それにアイドルが「きまつたー」というそれだけの声。ただ、人気も相まって会場の人々が乗っかって大歓声。

蛇足だがアイドルは抽象的なことを「とんだ」だとか「やった」だとかの適当な実況をしているが、必要なのはライブ感なので問題はない。

「だいじょうぶですか?」

「へーきょ」

手を差し伸べる映姫。お空の視点では後ろに太陽を背負っている。

お空は映姫の手を握って立とうとすると、少しよろけた。「??」とわからないような顔をしてもたつ。ひっぱる力が強くてむしろ映姫がこけそうになるが、片足で耐える。

映姫は薄目でお空を見る、長いまつげが美しいのだがお空はどこかを見ている。はあ

と映姫はため息。

「お空、いいですか？ 人の手を借りるときにはあまり力を入れてはいけません」

「アイスを後で食べたいなあ」

全然話を聞いてはいない。お空はかつくり肩を落とす映姫をすり抜けて王であるさとり「がんばったアピール」をこれでもかとする。具体的には両手を振ったりなどだ。さとりは片手をあげて答えた。玉座に座ったまま無言で片手をあげるしぐさが板についてきた。

さとのりの後ろではこいしとお隣がどこからか持つてきた花びらを撒いている。

「やられましたね」

それでも楽しそうに言うのは白蓮だ。片腕で額の汗をぬぐう彼女。黒い水着のスカートを指でつまんで整える。

巫女や水蜜のように河童との取引などしていない彼女には純粹に楽しい勝負なのであろう。ただし河童のプロマイド事業の取引対象ではある。明るい太陽のもとでも闇は蠢くのだ。

白蓮ははちらりと天子を見る。

「……………」

比那名居天子は隣のコートをちらちらとみている。だいたいその視線の先に誰がい

るのかはわかつている。たぶん自分の弟子だろうと白蓮は思った。なぜかわからないが巫女と仲良くしている子だろう。

「よかつたら今度お寺に遊びに来ますか？」

「いけたら行きます」

適当な返事をする天子。だいたいこう返事をする人は来ない。天人はどうだろうか。少なくとも興味はなさげである。白蓮は天子の真横にきて耳元に息を吹きかける。

「……!?!?!」

びくびくびくとその場で痙攣する天子。訳も分からずに横を見ればニコニコ顔の僧侶。いや、今の全身汗を張り付けたビキニ姿がのどくに僧侶としての何かを見出せばいいのだろう。しいて言うならば、優しい笑顔からだろうか。

「まだこちらの勝負は終わっていませんよ？ あなただつてここで負けるのは本意ではないのでは？」

「誰が負けるのかしら。そもそもあいつ」

耳元を片手で抑え向き直る天子。見るのはお空である。「これからは核の時代」と大声で言おうとして「これからはカキのじだい」と言ってしまった。牡蠣と判断されているようだ。

「どう考えてもガス欠するんじゃない？」

全身全霊で動き回るお空。もちろんのことエネルギーを大量に消費するだろう、彼女は「こちら」では核融合炉を持つてはいないのである。せいぜいが今朝食べたご飯くらいのエネルギーなのだ。

天子は冷静に状況を見ていた。以前はわざと負けるような真似をしたことはあるが、別に今回は負ける気はない。おかつぱの河童の下にある得点表では現在でも天子・白蓮が勝っている。別にピンチでもなんでもない。

個人的な身体能力では自分たちが勝っているだろうと天子は思う。それでも肉薄してくるのはお空の全力と、すました顔をしている「閻魔」のせいだろうと思う。アタックしようとするようにと実にいやなところにもいつも映姫がいるのだ。

それでも地力で押しつければ勝つ。そして横のコートから上がってきたチームを倒して終わり。それだけの話なのである。天子にとってはだが。彼女はこの試合仏頂面を崩してはいない。そのどことなく冷たさのある表情が逆に人気を呼んでいるとは知らない。

白蓮はそんな天子の両ほほを引つ張ろうとして天子に両手で拒否される。

「笑う門には福が来るとも言いますし、楽しんでもいいのではないですか？ 仏様もあちらにいらしていますし」

「それは……あの閻魔のことを言っているのかしら？ それを言うならあなたは仏相手

にビーチバレーなんてしていいのかしら？」

「それはまあ、してはいけないという教義もありませんから」

そんな教義を残したものがいれば仏教界も評価も変わるだろう。

白蓮はそう思ってた。そのあとけない顔つきにしろ、たまに子供っぽいことをするところにしてしまった。そのあとけない顔つきにしろ、たまに子供にしろ一般的な評価で彼女を割り切ることは難しい。

白蓮は「とにかく、がんばりましょう」と背を向ける。白い肌にトップスのひもが通っただけの背中。天子はふと、先ほどいたずらされたことを思い出してつーと指でなぞってみる。

「……!!!」

つま先立ちでびくびくする白蓮。復讐を果たした天子はにやり。

自らの両肩を抱くようにして、ちよつと背を丸めながら振り向く白蓮。別に睨んでいなくてもないが目が厳しい。顔がほんのり赤い。

「あちらは何をしているのでしょうか」

タオルで顔を拭いてからという映姫。相手のコートでは天子と白蓮がよくわからない行動をしている。話しかけたお空は空に浮かぶポケモンジェットを見ている。話を全

然聞かない。

映姫はもう何も言わずにお空の横顔を見た。自然体で微笑んでいるその姿、時折見せる聡明さはどこへやら天真爛漫としか言いようのない言動と行動に映姫はやれやれと思う。ただし、表情は柔らかい。

「お空。残りも頼みますよ？」

「ん？ もちろん。監督も私のことをよく見ておいてよ」

「はいはい」

試合など短いのである。フルセット勝負などではない。映姫とお空はまたコート並んで戻っていく。

☆

灼熱の中立ち尽くすのはアイドルこと魂魄妖夢である。

淡い緑の水着がイメージぴったり。カチューシャにつけた赤いコスモスの花。死にそうな顔。近頃グループで売り出されることの多いアイドルの中でも正々堂々と一人で仕事をしている孤高の女。

（河童が56匹、天狗も56匹。ああ、刀、刀、刀）

張り付いた笑顔の裏で練り広げられる果てしない戦いの妄想。湧き出てくる青い髪の毛と黒髪の天狗を一匹一匹始末する精神安定法をついさつき思いついたのだった。

いつからか忘れていた。妖夢は思った。

切れないものなどあんまりなかった昔。そして、とりあえず切ってみればすべてがわかると悟っていた昔。満月を見るなど西園寺幽々子に言われて、目をつぶったら真つ暗なのに驚いていた昔。

(そうだわ、切つたらいいんだ)

刀にこだわることはないのだ。切つた後に話をすればいい。多少現実逃避が入っているのだろうが、妖夢の思考回路は暑さのせいに変になっていた。これくらい暑いことが幻想郷でもあればその手の妖精達がわらわらでてくるかもしれない、などと考えてみる。

「なあなあ、あんた」

妖夢が足元を見ればにとりの顔。お立ち台に立っている妖夢は自然見下ろす形である。

「何の用?」

「特に何もないけど、写真撮っていい?」

「だ、ダメに決まっているじゃないですか!」

真下から写真を撮ろうとしているにとりに抗議する妖夢。にとりは冗談冗談と肩をすくめながらお立ち台に背をもたれかからせる。このお立ち台、金属でできている。

「あつつうう」

背中が焼けるような痛みにとりは一瞬間的に前に出た。背中をさすろうとして届かない。

妖夢はサンダルを履いているから特に被害はないが「よし」と反射的に言う。

「ひ、ひどいなあ。人が熱がっているのにさ。心が汚れていると閻魔様から舌を抜かれるらしいよ」

「いろいろとごつちやにしていませんか？ それに辛子を塗られないだけありがたいか
思ってください」

「いや、それ、たぬきだよ。かちかち山じゃないんだからさ」

「泥船にのせてやりたいなあ」

「……………」

以外に容赦ないことをいつてくるなどにとりは思う。にとりがここに来た理由は妖夢が油断したすきに先ほどとつてきたスマートフォンで写真を撮ろうとするだけではない。「泥船」ではないが、船のない船長達の試合をよく見るためである。

「そもそもあんなに河童がいるんだから、一人くらいアイドルをしてみればいいんですよ」

ちよつとふてくされて言う妖夢の言葉に「それいいね」と返すにとり。ちらつと審判

台のおかっぱを見る。一度河童から山童に寝返ろうとしたものの末路してはちようどいいかもしれない。

おかっぱはみよんな、いや妙な視線を感じて震えている。

にとりは気を取り直して霊夢と水蜜の試合をみることにした、集中してみようとしてまた背中をお立ち台にくつつけてしまう。

44話

流れる汗はとめどなく。

水蜜は腕で額をぬぐう。片目をつぶりごしごしと意味なくこする。さらに汗がべったりついた気がして、うえつと小さく声をあげた。

自分は何をやっているのたまにわからなくなる。なんとなく感情的になってしまった気もする。水蜜ははふーと大きく息を吐いて、後ろを向いた。そこではむっとした顔でこちらを見る巫女が一人。

なんでむっとしているかはわからないが、水蜜はくすりとしてしまう。なんとなくかわいく思ってしまう。口では「いもうと、いもうと」と冗談で言っているつもりだが、いつの間にかそのつもりになってしまっているかもしれない。

そう思つて、やれやれと肩をすくめて見る。もちろん巫女の、いや霊夢の目の前で。「な、なによ。なんか言いたいことがあるの?」

「いえいえ。ありませんよー」

にへえと笑つて見せる水蜜。うさん臭げに不愉快そうな顔をする霊夢。

なんとなく水蜜は霊夢に抱き着こうとする。にやにやしなからである。巫女は「さわ

んな」とにべなく、水蜜のほつぺたに手を当てて思いつきり押した。水蜜は腰に力を込めて無駄な抵抗をする。

本当に無駄な行為である。意味などない。

「ちよつと。打つわよ！」

二人はその声で現実に引き戻されてた気がした。周りにがやがやした声が聞こえてくる。

声をあげたのは向こう側のコートで突っ立っている、一輪だった。わざわざ声をかけてくるあたり人が、いや妖怪がいい。水蜜と霊夢はたつたか自分のポジションに戻る。

「へまするんじゃないわよ。つ水蜜」

「大丈夫ですよ」

水蜜はなんとなく砂を蹴りながら笑う。ぱさあと砂が舞い上がって、落ちる。それからまた、大きく息を吸い込む。胸を膨らませてからふはーと息を吐く。それが熱い。

(息が熱いなんて、船幽霊としてあるまじきですかね？ どうなんだろう?)

別に悪いというわけでもない気もする。ただイメージからは離れてしまいそうですりとした、水蜜は腰を落として構えを取る。視界の先で一輪が真剣な表情でサーブしてきた。水蜜は弧を描いて落ちてくるボールの下に構えて、両手ではじく。ゆつたり上がったその下には霊夢がいる。彼女はそれに合わせてとんだ。

「させませんよー！」

白い水着に身を包んだ戦の神である寅丸。彼女が霊夢の前で両手をあげ、ブロックする。霊夢はきらりと目を光らせて、にやりと笑う。落ちてきたボールを軽くなでるように触る。

「えっ、ちょよ」

何か言っている寅丸の顔にボールがべちんと当たる。

「ひゃっ」

戦の神のくせにかわいらしい悲鳴を上げる寅丸。痛くはないが驚いたらしい。全力で打ち込んでくるボールをガードしようとしたら、鼻先に緩いアタックが来た。ぼてぼて落ちたボールを両手で鼻を押さえながら彼女は追う。

ぴーとなる笛。おかつぱの頭に乗った緑帽子が揺れる。得点の合図にばちばちとなる拍手。悔しがる一輪と、ハイタツチする霊夢と水蜜。河童たちは得点ボードをめくる。もちろん霊夢たちの。

アイドルは何か叫んでいる。得点のよりもその声に歓声が上がる。さすがは半分幽霊の芸能人である。

そんな中で水蜜が冗談めかくし片手で口元を隠しながら、霊夢をにやにや見る。

「寅丸をだますなんて。さっすが霊夢さん。あくどい！」

「? ほめてるつもり水蜜」

はあとため息をつきながら霊夢は言う。ちらりとみた得点ボードは「16-14」。後者が自分たちである。まだ負けている。その理由は言うまでもない。さっきだました寅丸の存在が重い。

霊夢のところにはぽーんと投げられたボール。彼女は両手で「よつと」と取る。

いったん線まで下がる。自分がサーブである。汗が流れて、落ちるのは水蜜と変わらない。霊夢はまたちらりと水蜜を見る。少し前で構えている彼女、背中を向けたまま首をこきこき動かしている。

霊夢はしゅつと空高くボールをあげる。

広い空はボールを吸い込んでほくれない。空に浮かんだボールがスキマのような時間を挟んで落ちてくるのを霊夢は叩く。ぱんとい音が出た。

ボールは一輪に向かっていく。コースを間違えたとき霊夢はちよつと舌打ち。

一輪は両手を低く組んで、ボールをレシーブする。難しいボールでは決していないが、一輪は後ろに崩れる。ただ、ボールはちゃんと上がった。

「なーにかわい子ぶっているんですか、一輪」

水蜜がちやかす声が霊夢の耳にとどく、しかし瞳は「彼女」を見つめている。

肉食動物の鋭い瞳が霊夢を射すくめる。寅丸がすでにアタックの態勢に入っている。

少しでも気を抜けば、見逃してしまいそうなほどの身のこなし。一回戦ではこいしの無意識をもって反応できた身体能力である。

「ハッ！」

霊夢は腰を低くして構える。その意気やよしとばかりに寅丸が刹那の時間に、薄く笑う。そして体全体をひねって、強烈なスパイクを行う。

シユウウ、ボールの風を切る音が聞こえる。霊夢は歯を食いしばって全力で横に飛ぶ。体制を崩してしまつたが、地面に刺さる直前のボールを拾う。

「痛っ」

当たった手に衝撃が走る。霊夢がそれでもはじく。そのまま砂浜に倒れた。

上がったボールは水蜜のもとへ、行かない。高く上げてしまつたそれは敵のコートへのイージーボール。それを狙うのは寅丸の瞳。

金と黒の髪が太陽に光る。寅丸のしなやかな体が絶好球へ飛ぶ。

霊夢は体を起こそうとするが、間に合わない。とつさに声が、でた。

「み、水蜜っ！」

「あいあい！」

ふざけた返事が返ってくる。視界の端で動く水蜜に霊夢は、小さく笑ってしまう。

「水蜜っ！ 容赦はしませんよ」

寅丸は短く言い切る。水蜜は完全に無視してブロックするために飛ぶ。

両手をあげる水蜜、その瞳は真剣なものだった。それは寅丸にしか見えない。だが、毘沙門天には好ましい瞳。

言葉の通り容赦のない一撃が寅丸から放たれる。寅丸は「あ」と手元が狂ったことを知らせるとぼけた声を出す。

ばあんと水蜜の顔面にヒットするボール。彼女が空中で体を崩す。その姿を見ている、霊夢の体がとつさに動いた。何も考えてはいない。騒然とした空気に満たされていく会場で、水蜜の体が砂浜に、落ちる。

「水蜜ー」

霊夢が駆け寄る。バツが悪そうにしている寅丸は目が泳いでいる。一輪も駆け寄ってきた。

「大丈夫!? あんた」

霊夢の声が響く、アイドルも黙り込む中。水蜜が片手をあげて、親指を立てる。

ふらふらと、空からボールが落ちてくる。それは一輪と寅丸の後ろへ、ぼすつと情けなく落ちる。水蜜は倒れたまま霊夢ににやりと笑いかける。

「おや、心配してくれているんですか? とりあえず得点ですわー」

「……………」

霊夢はぎぎぎよ水蜜的にとても面白い顔をしてれる。恥ずかしさやら腹立たしいやらの何やらが混じつたそんな少女の顔を見ながら、水蜜は立ち上がり。小さなおしりをぱんぱんとたたたく。それから誰に向けてでもなく、にっこり笑う。

わああと広がる歓声。パフォーマンスも相まって楽しい気な空気があたりを包んでくれる。

水蜜がネットに寄り掛かって、寅丸に「あーいたいいたい」とわざと顔をさする。寅丸は「こ、これも修行です」などと供述している。水蜜はそれを聞いて、舌を出す。近しいもののしぐさだろう。

おかつばの笛が鳴る。16—16である。顔面レシーブでの得点であった。

水蜜は座り込んでぶすつとしてゐる霊夢の脇を両手でつかんで立たせる。

「ほらほら。もうちよつとですよ」

返事もしない霊夢の鼻を水蜜は人差し指で押す。ぎろりとすさまじい眼力でにらまれた。

さすがに水蜜は手を引つ込めて、ペーと舌を出す。馬鹿にしているかのようなしぐさに霊夢は胸ぐらをつかんでくる。

「れ、霊夢さん。冗談ですよ。み、水着をつかまないでくださいっ!!」

「あんた、いつまでたってもうさん臭いんだけど……」

じゃれあいながら二人ははつとした。何かを感じる。それは純粹な闘気のような、力のようなものだった。霊夢と水蜜がコートに向こうを見れば、寅丸が両手を組んでまっすぐ二人を見ている。

「二人ともなかなかやりますね。霊夢さんは幻想郷では不覚を、いやあれは魔界ででしたか。しかし、この場では私が本気やらせてもらいます。あと、水蜜は覚悟しなさい」「あのー私だけできてきとうじゃないですかー」

水蜜が抗議するが寅丸の瞳が輝く、かのような錯覚を霊夢たちは覚えた。これは一回戦での状況と一緒だろう。決勝戦にまで体力を残しておこうとしていた、寅丸がやつと本気になったのだ。

「この毘沙門天のほう……前にひざまづきなさいー」

宝塔と言いかけて、言い直す毘沙門天。彼女の装備は今、薄い水着と頭に咲いた紫の菖蒲だけである。それでも彼女のこれからは伊達ではないだろう。

それを「はっ」と笑い飛ばす巫女。いつだって不敵で素敵な巫女は顎をあげて口を開く。

「妖怪風情がなめてるんじゃないわよ」

「そうですよ、霊夢さんは後、2回変身を残しているんですからね。この意味が分かりますか？」

「わけわかんないこと言ってるんじゃないわよ水蜜」

二人と毘沙門天は両手を組んでばちばちと火花を散らす。

少し離れたところで一輪がポ・カリというドリンクをおいしそうに飲んでいる。汗にまみれた水着姿で片手に腰をあげて、胸を張って飲んでいいる。いろいろ全然気が付いていない。

むしろその横でこいしが「巫女つて変身できるの!？」と目を輝かせている。どちらにせよこちらの決着は近いだろう。

★

昔々はどうだっただろうかと彼女は考えていた。

柄にもないと映姫は思ってしまったのだろうか、白黒とはつきりをつけることのできない思考は現状でしか味わえないと彼女にはわかっている。

「あははは!!」

映姫の視界の端から端まで走り去っていくのは笑顔のお空である。それを見て映姫は手を口元を隠してくすくすと笑う。ただそれだけなのに、どことなく気品を感じさせるのはさすがに閻魔なのだろう。

お空は首元のペンダントをきらきらと光らせながら、元気いっぱい走り回っている。ビーチバレーをするために動いているのだろうが、明らかに無駄な動きも多い。そ

れでもどこか、いや愛嬌の塊のような女の子だった。

朝の暗い顔は今、どこにもない。太陽のように燦燦と笑顔を振りまいている。相手など選んではない。ある意味仏の領域にすら踏み込んでいるのかもしれない。何も考えてはいないだけかもしれないが、それでも得点するたびに観客にも誰のでも気さくに話しかけている。

「監督！」

映姫に抱き着いてくるお空。ぎゅううと抱き着かれても映姫は困ったような顔をするだけである。背丈が多少違うので映姫は息が止まりそうになる。なぜお空がこうしているのかはわからない。

(このようなことがあるとは、さすがに思いませんでしたね……)

悪い気はしない。そんな気持ちになることも予想はしていなかった。

冷たい執務室で仕事をしていた時を思い出す、一人無限に増えていく書類と向かい合う日々が嫌であったわけでは決していない。仕事をさぼる部下を口には絶対出さないが、かわいく思ってもお空のように互いには互いにしないだろう。

「お空。そろそろ離れなさい」

「はーん！」

お空は素直に離れる。ペンダントが首元で揺れて、胸元で止まる。それはお空を思っ

て、さとりがプレゼントしたものである。単なる安物に過ぎないが、それでもお空は肌身離さず持っている。

王は見ている。

さとりは霊夢と水蜜の試合も、お空と閻魔の試合も祈るような気持ちで見ている。どちらも勝つてほしいと思う。相手のチームには悪いが、正直ビーチバレーで負けても痛くもかゆくもないのだから我慢してもらおうと思う。

「じゃは」

隣でニコニコしているのはお隣である。お空の姿がともうれしいらしい。

「よかったですね、さとりさま」

明るくそれだけ言う。深く言う必要などはない。さとりも「そうね」と笑いながら言う。お隣はほんのわずかな返答で笑顔になり、どこからか持ってきたワイングラスをさとり handed す。そして、さらにスプールドという清涼飲料水をどくとくしゅわーと入れる。

「お隣……なんで?」

なんでワイングラスでジュースを飲まないといけないのかを聞くさとり。そこで、

「ふ」

と噴き出してしまった。お隣の心が読めないのである。本当ならば疑ったり、聞いた

りすることもないのである。それがこちらではこう、なつてしまふ。

おそくからお燐もてきとうだろう。それでもこうしてワイングラスに透明で炭酸ははじけるジュースを入れてみると、何か深いわけがあるのかと思つてしまふ。無論ないとはわかつていても。

さとりは冷たいそれに唇をつけてゆつくりと飲む。桃色の唇をワイングラスにあてて。そしてゆつくりと唇を話す。甘くて、冷たくて、おいしい。グラスでワイン以外を飲みことになるとは思わなかつただろう。

ちなみにアパートでは第三のビールや格安酎ハイしかない。それでも慧音や霊夢と飲む酒は悪くはない。さとりはどうでもいい思考だと、笑う。

「ふふふ」

「ふつふつふ」

さとりに合わせていきなり隣で不敵に笑うこいし。おそらく意味などはないのだろう。だから、姉妹仲良く微笑む。朗らかなに笑う。それに猫も加わつて明るい場が広がっていく。

「あつはつはつ!!」

会場ごと明るくさせるようなお空の声が響いている。聞いているだけで誰も心も明るく軽くさせそうな、素敵な声だった。笑顔を広げていくのはお空の力であるかもし

れない。裏表がないからこそ、見ていて楽しい。

だから、観客もおかつばもなぜか口元が緩んでしまう。一人にとりだけはお空の人気に伴う「売り上げ」に口元がにやける。

相手のこととはいえ、聖白蓮も髪をかき上げながらニコニコしている。ある意味彼女の理想がここにあるのかもしれない。人と妖怪がともに手を取って笑いあえる世界。永久に続く今ではないが、だからこそ今が嬉しいと感じることができる。

聖が横をちらりと見れば天子も呆れた顔はあきれ顔である。何を笑っているのかと困っているようでもある。それもお空に引き込まれているかもしれない。さっきまでの仏頂面よりは表情が柔らかくなっている。

聖は勝手に決心した。この勝負は楽しく勝とうと。むつと顔に力を込めて、気合を込めるために腰を引いて、両手にぐつと力を込めてファイティングポーズ。

余談だが、聖はお寺のテレビでスポーツがあれば一番見ているのだ。バレーも一番気合を入れて応援している。見ている距離がテレビに近づきすぎて寅丸に怒られたりしたこともある。

——いいですか聖様。テレビは一日一時間です。

どうでもいいことを思い出してしまい、赤面しつつなんとなく胸に手を当てる聖。しかし、すぐに凛々しい顔つきに戻る。

聖はお空に強い視線を送る。それに気が付いたお空は強く見返してくる。

聖は「負けないわ!」と少女のようなことを言い。お空は「なんで頭の上のほうだけ紫なのさ!」と負けずに声を出す。

聖はボールを持つ。どうせならば楽しまなければ損であろう。相手が明るいのであれば、それに乗っていくのもいいのだ。だからこそ、聖はまっすぐにボールを上げる。

全身全霊の一撃を打ち込むために。

45話

彼女は無敵だ。

お空は体にみなぎるエネルギーを感じている。両手を腰にやって笑う姿は見ている者に元気をくれる。屈託のない笑顔、遠慮のない笑い声と手を振れば返してくれる愛嬌。

ゆるる黒いポニーテールとその頭にのせた花飾り。胸元のペンダントは赤く太陽の光を反射する。まさに無敵な女の子である。無敵であることに理屈などいらないのである。

ここにはいないが青髪で最強の女の子も特に理由もなく最強なのだ。

お空はその大きな瞳をキラキラさせながら、とんだり跳ねたりする。元気が有り余っているかのように彼女は動く。足ではねあげた飛び散る砂を見て笑う。

もしも目の前で箸が転がれば大笑いするだろう。きつとそんなお空を見た人は笑顔になつてしまうかもしれない。

事実、周りの観客から漏れる朗らかな笑い声はきつと彼女からの釣られ笑い。

お空はまっすぐな瞳で相手を見ている。相手のコートにいるのは不機嫌そうな顔で

ボールを構えているのはいつも笑顔の僧侶。聖白蓮だ。

彼女も負けずに不敵な顔。お空はその気持ちを言葉でなく心で受け取れる気がした。

「さあ、ハッシー」

張りのある声でお空は腰を落とす。楽しいとそれ以外に興味が行かなくなる。まるで人間の子供のようである。今がずっと続いてほしいという、勝ちだとか負けだとかよりも試合が終わることのほうが「いや」な彼女。

ととくなる胸。脈打つ心臓からやってくる熱い気持ち。唇を舐めてみる。

早くボールを打ってこいと体中が言っている。彼女の目にはもはやスコアボードもなにもないのだ。今の瞬間に全力を尽くすこと、それだけが楽しいのである。

「いきますっ」

聖が叫ぶ。必要のないそれをあえてやる。彼女は高くボールを上げた、くるくるとバレーボールが空に上がる、お空はかわいらしく口を開けて空を駆けるボールを見ている。しかし、すぐにボールは落ちてくる。

聖はわずかに助走をつける。落ちてくるボールに合わせて飛ぶ。弓なりに沿った彼女の体が、渾身の力をもってボールをたたいた。

勢いよくボールは飛び込んでくる。すさまじい勢いだった。

「来たっ！」

嬉しそうに言つてしまふお空。瞳を開けて、のんきに瞬き。一瞬の贅沢。

ボールは一直線。お空に向かつてくる。回転をくわえられたそれが空気を切つて音を出す。お空は両手を構えて受け止めようとした。そこで気が付く。

ちよつとボールが高い。このままではお空の胸に直撃する。

普通に胸の前でレシーブをすればいいのであるが、お空は両手を組んでしまつてゐる。なぜならそつちの方が格好がいいからだ。お空は一瞬あたふたして、すぐに名案を思い付いた。

「飛ばばいいんだわっ」

その場でジャンプ。胸元の位置に来たボールを下からたたき上げる。

「お、おわ」

がつんと体に来る衝撃。両手に食い込んだボールを背中ので何とか跳ね返そうとする力が足りない。お空は不格好に体勢を崩してしまふ。受け止めそこなつたボールは明後日の方向にたまたまいたアイドルの顔面目掛けて飛んでいく。

「あふああ」

妙な声を出してしやがみ込む妖夢。それを無視して笛を鳴らす河童。

その一瞬後にお空は背中から地面に落ちた。砂の感触が熱い。青い空が視界いっぱいに広がる。寝そべてみると一瞬お昼寝したくなるような心地よさに襲われた。

「大丈夫ですか？ お空」

のぞき込んできたのは片方だけ長い髪を手で押さえている閻魔。お空はむっくり元気に体を起き上がらせる。髪についた砂は首を振って払う。

四季映姫は彼女の手を取ってくれて立ち上がらせてくれる。ちよつとお空よりも視線の下に顔のある彼女を、お空は笑顔で見る。

「失敗しましたっ。でも、もっともつと爆発できると思うよ！」

楽しそうに申告するから映姫もくすりする。

彼女はお空の様子を見ている。いつだって優しくである。何が爆発するのかなんてどうでもいい。

とりあえず次にボールを受けるのは映姫である。お空は残念そうに横にずれる。向こうのコートでは聖が天子にガッツポーズをしている。お空はむつと頬を膨らませて息をふうーとはく。こきこき首を鳴らし、その場でジャンプする。胸元でゆれるペンダント。

映姫は流し目でお空を見ている。お空はそんな映姫と目が合う。にこつと条件反射。太陽が分け隔てないように笑顔に条件はない。映姫は片方だけ長い髪をそつと手でもけた。

「監督。髪を切れば？」

「……………それよりも」

「千円カットってあるみたいよ。安いよねー。行ったことないけど、こんどさとり様を連れていったら喜ぶかな？」

「私が千円カットで髪を切ったらいろいろと閻魔としてどうかと思いますが、あとご主人様にそれはやめておきなさい。それよりもお空」

映姫の目がお空に問いかけてくる。任せましたよ、と。

「??」

お空は何も言わない映姫に首を傾げた。

目に込めたメッセージは届かないのだ。仕方なく映姫は口で言った。

「任せましたよ」

「もちろん、任せてくださいよー」

よくわからないが任されたのだ。映姫は前を向く。お空も前を向いた。

コートの前こうに居る僧侶がこくりとうなづく。じっくりと待ってくれていたのだ。彼女はもう一度のサーブを打つために少し下がり、ボールを天空に投げた。

お空は心が鳴る音を聞いている。映姫が失敗するなんて微塵も考えていない。疑いもない。

任されたことはよくわからないが、やることは一つである。全身全霊の力を込めて相

手を倒すのだ。バレエで相手をKOしても意味がないことはこの際どうでもいいのである。

がっとな音がする。お空を呼ぶ映姫の音がする。見れば空にふわりと上がったチャンスボール。映姫はお空の「心配すらしなかった」とおりにやってくれたのだ。

お空は駆けだしていた。大きな瞳に移る、ビーチバレーボール。全力で走る、全力で飛ぶ。

目の前に来たのはサーブを放った聖だった。両手を上にあげてのブロック。表情を見れば、お空に片目をつぶった。ウインクである。

お空は口を開ける。少しでも空気がほしい。核エネルギーのような彼女の元気にも空気は必要なのである。

お空は体を目いっぱいひねった。その胸のペンダントが太陽を受けて光る。聖からはお空が一瞬だけ、輝いたように見える。

「アビス・ノヴァ!!」

これまで以上の力でお空は必殺の「スペル」スパイクを繰り出す。聖のブロックにあたる。

(抑えきれない)

聖は直感した。だから両手を少し緩めて天子のいる方向へボールを流そうとする。

だが、勢いが強すぎた。聖の流しきれなかった力強いボールがアイドルの方向へ飛んでいく。

「しまった……抑えきれませんでした」

聖がそういった瞬間、天子がボールを追いかけているのが見えた。青い髪を揺らしながら、妖夢の立っているお立ち台の角を蹴つて飛ぶ。一瞬声音がなくなるような、そんな美しい跳躍を、ボールキックで締める天子。

ありえないような動きに歓声が上がる。天子の蹴ったボールが相手のコートに戻っていく。天子が地面に降り立って、髪を手で跳ねる。そのままとてコートに戻る姿はギャップがあった。後に残されたのはビビっていたアイドルだけだった。

聖は立ち上がって天子に「ナイス」とむふーといった顔で言う。天子は「次が来ますよ」というだけである。隣ばかり気にしているくせに意外と負けたくはないのかもしれない。

そう、まだプレーは終わっていない。天子のボールをレシーブしたのは閻魔である。彼女は胸の前でぽんとボールを上にあげる。天子の動きへの驚きに包まれている会場の中で一人クレーバーである。

「監督っもう一回、もう一回やるわ」

子供のようなことを言いながらボールを待つお空。映姫に反対する意味はない。

「お願いしますよ。お空」

「よし。今度こそ消し炭にするわ!」

「消し炭にはしなくてもいいですよ」

映姫は楽しそうに呆れるしかない。はあとというため息もどこか軽い。

お空は聖を見る。勝負だという顔だった。今度こそ真正面から打ち破る気だった。お空の動きにフェイントはない。猪突猛進。全速前進。お空の後退のネジは外しているのだ。

そして、もう一度ブロックに行く僧侶。彼女も赤くなっている手を構える。今度こそは止めると顔に書いてある。

「勝負ね」

聖が短く宣戦布告。お空は言葉で答えずにジャンプする。聖もブロックに飛ぶ。

お空は息を吸う。叫ぶにはこれくらい空気が必要なのだ。楽しさに何もかもが輝いて見える。お空はただ、体を動かす。引き絞った弓のように体を反らせて、全エネルギーをここに集中させる。

「ギガフレアあああ!!!」

一瞬のことだった。

聖の目にお空の手と太陽が重なった。煌くような輝きに包まれた一撃が視界を包む。

聖はやられると直感して、うつすら微笑む。彼女のブロックに強い衝撃が来たのは次の瞬間だった――

ばしい、砂浜に勢いよくボールが突き刺さる。今までにないくらいに砂煙が上がって消える。聖は地面に降りて、後ろを向いた。片手を立てて「ごめん」のポーズを天子にする。聖人としてかなりフランクである。

お空は着地して、膝をついた。なんだかふらふらする。それでも相手のコートに一撃叩き込んだうれしさが心の底から湧いてくる。周りからはわああと波のような歓声。

太陽の下でお空は体を反らして叫んだ。

「やったああ!! 勝ちました」

流れる汗が顎から滴り落ちて体を流れていく。嬉しさを全身で表す彼女はその場に大の字で寝転がる。はあはあと胸が呼吸に合わせて上気する。お空は満足げに満点の笑顔を空に向けて目をつぶる。

「かったあ」

勝ったのだ、お空は聖とのブロック合戦に勝利した。試合はまだ終わっていない。

「お空。やりましたね。ここから……お空?」

駆け寄った映姫の声が少し明るい、隠しきれないうれしさのようなものがある、といえば彼女は否定するかもしれない。しかし、彼女の顔はすぐに困った表情になった。

お空が笑顔のまま動かない。というよりも目をつぶって「かったあ」と寝言を言っている。

「本当に子どもものようですね」

全力で遊んでばたとバッテリー切れ。お空は目をつぶってしまった時に意識が切れていた。優しくその顔を撫でる映姫。そう思いきやほつぺたをつねってみたりもする。意外と茶目っ気があるのかもしれない。

「どうしたのですか?」

ネットに体を預けながら聖が聞いてくる。映姫は困ったような顔のまま首を静かに振る。その瞬間に聖は火曜日に見ているサスペンスドラマを思い出した、もうこと切れているなんて思ってしまった。

口元に手をあてて、笑みを隠す聖だがわかってしまった。お空は遊びきったのだろう。少なくともすぐに目を覚ましそうにないし、覚ますのも悪いように可愛らしい寝顔をしている。

おかつぱ河童も駆け寄ってくる。途中で砂に足を取られてよろけたりしている。その後ろにはアイドルもいた。実況の仕事を全然していない。

映姫は審判役のおかつぱに言う。

「しかたありません。勝負はまだ終わってはいませんが、私たちの——」
「私たちが棄権するわ」

いきなりの声は比那名居天子だった。彼女のいきなりの発言に全員がぎよつとした。聖が「え？ ええ？」と心底困惑している。そのくせ両手を後ろに組んだままだ。天子はそんな彼女を見て言う。

「……この勝負はこいつの気絶で私たちの勝ち。でも、貴方の腕は冷やした方がいいわ」
「……そうですね」

かっくりと肩を落とした聖。二度にわたるお空渾身のアタックをまともにブロツクして腕が赤くなっている。楽しい勝負だった証でもあり、ちよつと無理をした証でもある。

天子は空を見上げてみる。さつきまでずっと彼女は隣のコートに目を奪われていた。だが、いつの間にか足元で転がっている元氣鳥のことを見ていて、思うところがあつた。天真爛漫で一直線。天子は顔を上げたまま目を閉じる。

小さな引つかかりを気にすることなく動き回るお空が目には浮かぶ。

「馬鹿みたいですね」

それは誰に言ったのだろうか、天子は誰かに向かつて「馬鹿」と言ってみる。

彼女にとってビーチバレーなどもともとどうでもよかつた。ちつぽけな意地によ

な何かがあったのである。それを後で晴らすつもりになっている。

天子は目を開けて、おかつばを見る。おかつばは妖夢を見る。さっさとしろとばかりに天子は妖夢を見る。

「え、ええーそれではこの勝負、勝者は」

妖夢の声会場に響き渡ると、歓声が返ってくる。

その中で閻魔は鴉のほつぺたをつねっている。運も実力のうちですか、と歓声にかき消されている言葉を放っている。

★★★

「いいか、アルバイトだからといっても仕事に責任を持たないといけない」

哀れであった。

精神が完全に汚染されている毘沙門天の使いがいた。その名はナズーリンである。彼女は一人でお店の切り盛りを押し付けられ、すべてを一人で回しきるといふ神の御業をなしたかったのである。

しかし、個人で優秀なものがリーダーとして優秀になるかという別である。特に真つ黒な職場にいるものはその傾向が強いかもしれない。

「ほ、ほこ」

水着の上にエプロンをつけた慧音が頭を下げている。彼女は幻覚を見るくらいに

弱っていたナズーリンを憐み、自らブラックな職場に踏み入れてきたのである。聖人の行いと言つてもよい。

ナズーリンは彼女を見ながらも海の家に入ってくる客を考えている、頭の中には仕事のことしかない。彼女は踵を返すと、焼そばを焼き始める。

慧音は注文を取りに走り回ることになる。目が回るほどに忙しい、注文を取りながら料理や飲み物を運びつつ、様々な備品の補充を行わなければならない。これに加えて料理をしていたナズーリンはもはや神域の働きをしていたと言いようがない。

ただしブラックな職場で報われることなどはないのである。仕事ができるということとは人員も補充をしなくてよいと考えられるのだ。

「はあはあ、ビール、ラムネ、ラムネ。焼きそば」

呪文を繰り返すように手元のメモを見る慧音。とんでもないところに来たと彼女は心の底から思ってしまう。二人でも手が回らないのである。むしろ目の前のピーチバレーが盛り上がるほどに人が増える。

ちょうど片方の試合も終わったらしい。そのせいで人がどぼつと流れ込んできた。ナズーリンが「ひい」と悲鳴を上げているのが慧音にも聞こえた。慧音も心中泣き出したい気分である。

河童たちは完全に手伝わないわけではない。一瞬にとりがやってきて、料理や飲み物

の補充を済ませていった。つまり、物資が切れたという理由でこの店が閉まることはない。地獄で炎が尽きぬように、海の家ラムネが尽きることはない。

「こ、これが働くということか」

そのくせ慧音は心中でうれしがってもいた。普段無職だというコンプレックスがあるからこそなおさらである。苦しみながら笑っている。だんだんと心が黒く染まっていることに彼女は気が付いていない。

映姫はそんな海の家を素通りしていく。ただ足取りはひどく重い。

頭には相手のつけていた花がかわいく乗っている。月桂冠ではないが、優勝した者はお花の冠が手に入るのだ。

「……………ぐうぐう」

背中で寝息を立てるのはさつきまで遊びまわっていた地獄鴉である。大柄な彼女を抱っこするのは映姫には大変な作業ではある。映姫は海を家の裏手、日陰になっているところに彼女を下ろした。

おなかを掻きながらにやむにやうと口を動かしているお空。目を覚ましたらまた元気前回で暴れまわるのだろうと思うと、映姫は苦笑するしかない。

「監督」

「は、こ」

寝言に答える映姫。彼女もその場に座ってしばしの休息をとる。いつのまにか、こつくりこつくり頭が揺れる。それでも眠ることはしない。今朝からの能力の使用にしろ、単純な運動からの疲労であるにしろ。体が重い。

それでも映姫はただお空の髪をなでる。くすぐったそうに身をよじるお空を見て映姫のほほが緩む。

【番外】董子のうままー【挿絵付き】

それはそれはとても寒い冬の日のことでした。

ちらほらと白い雪が降りてきては、すぐにアスファルトの地面に溶けていく都会の冬です。なんとなく静かな町は人々も寒さにほんのちよつとだけ背を丸めて歩いています。

バスがぶおおと音をたてて、通りを走っていくのが一番大きな音でしょう。

そんな中、一人の少女がかばんを振りながら速足で歩いています。

ふわつとした茶色の髪をふたつに結びしてした眼鏡をかけた少女です。

名前は董子といます。彼女はとてもすごい力を持った女の子なのですが、今は必死な形相です。とにかく寒いさむいと口にしながら、たまに両手で口を覆って。はー。とあつたかい息をあてています。

着ているのは黒いPコート。ちよつと裾が長くて彼女の体のほとんどを隠しています。ちらちら見える可愛らしいスカートは高校の制服でしょう。

雪は降りますが、積もりません。

ビルの間から冷たい風がひゅーひゅー吹いています。

董子は恨めし気に空を眺めますが。彼女の視界に入ってくるのは小さな雪たちだけ

です。彼女は高校も終わった帰宅途中。速く帰って「いいゆめ」をみたいと思つています。

少しあかくなつた鼻をこすつて董子は歩きます。

「身がひきしまる寒さつていうけど、これじゃあ……」

董子は愚痴が多いようです。

ともかくにも彼女はすたすたと帰り道を歩んでいきます。「飛んでいけたらいいのに」とよくわからないことも言うのです。

彼女とすれ違ふのは、スーツに身を包んだサラリーマンさん。もこもこのダウンジャケットを羽織つて首にマフラーをぐるぐる巻いた子供たち。それと彼女と同じような学生たち。それがそれが何かしらを考えながら笑い、どこかに行くのでしょうか。

まあ董子にはそんなことは関係ありません。彼女はいつも以上にぶすつとした顔で背を丸めながら歩いていくのです。

せつかくのかわいい顔がだいなしです。

董子はそんな調子で家までたどり着きました。玄関をあけると中のひやつとした空気を感じます。どうやら誰もいないようです。

彼女はただいまも言わずにぽいぽいと靴をぬぎすてると、居間に直行します。Pコートを脱いできてとうにぽーんと投げすてて、すさまじい速さでこたつの電源を入れま

した。

するっとこたつに入り込む董子ですが、こたつについたお布団すらもひんやりしていません。

「う、う、うう」

こたつに両手足を入れて何かうめく董子です。寒いのがたと震えています。こたつの中では両手をさすっているのでしょう。もぞもぞと動いています。

厳しい顔つきの董子ですが、だんだん、そうだんだんとそのほほが緩んでいきます。

ほっぺたがほんのり赤くなり、はーとゆっくりと息を吐く姿はリラックスしています。

どうやらこたつがあつたかになつてくれたようです。董子は体をさらにこたつにもぐりこませていきます。

どうせなら猫のように中で丸くなりたいたいかもしれませんが。董子はあごをこたつにつけて、ぐたーとそのほっぺたをつけました。だらしがありませんね。

「あ」

なにか気が付いたように董子は立ち上がります。それから速足で台所にいくと冷蔵庫をがちやりとあけて中から目的のものを見つけます。

「月見だいふく」

人がいないとテンションが上がってしまうことがありますがよね。董子は冷蔵庫から出したアイスを片手で天に掲げてドラ猫ロボットのような声を出しました。

ちよつと恥ずかしいのでこほんとせきをして、あたりを見回します。誰もいないのは当たり前です。天井には一つスキマが開いて「ふふ」と声が出て閉じます。

董子はペリペリとアイスのふたを取り外して、こたつにもどります。

寒い時にこそアイスを食べたい、そんな気持ちに彼女はなっているのです。「月見だいふく」は大きなふたつの大福状のアイスです。もちもちの外側の中はおいしいバナラアイスです。

董子は一つとって大きな口でぱくり、大きいので頑張つて食べます。たいへんですけど顔は笑顔です。ペろつと台所からこたつに入るまでに平らげてしまいました。彼女はもうひつしかなないことがとても残念です。自分で食べたとしても、もうあとひとつと思ふと寂しい気がします。

さらに大きな問題がありました。董子はこたつに潜り込むと両手を外に出すのが嫌になつてしまったのです。これには困りました。

「そっかわー！」

そこで董子はがんばつて月見だいふくを啜えると、はむはむと食べていきます。とても幸せそうな顔でした。

「うまーっ！」

妙なことをまだ言っています。

46話

浜辺の一本のビーチパラソルが立っている。

白い砂浜に立ったそれは優しい木陰を抱くように、ほんのり潮風に揺れている。その陰の下には丸い小さなテーブルが一つ。その横には白いビーチチェアで寝そべっている青い髪の少女が一人。

比那名居天子は試合で疲れた体をそうやって休めていた。白い椅子に体を預けて海を眺めている。あの海の家は遠い。喧噪だけが聞こえてくる。もう自分は終わった。ビーチバレーの試合にはあまり興味はない、最後の結果さえわかればそれでいいのだ。テーブルに乗ったグラスには淡い桃色の中でしゅわしゅわと炭酸が丸い泡になって消えていく。そのビーチサワーを天子はちよつと口をつけて、戻す。からん、と氷が鳴る。彼女は両手を頭にのせて遠い遠い青空を眺めているのだ。

しなやかな太ももを組んでちよつとむつすりした顔はいつもの通りかもしれない。彼女はざあざあと波の音を聞きながら、そして誰かのビーチバレーの勝負の喧騒を聞きながら一言もしゃべらない。

あの閻魔との勝負は勝ちを主張しようと思えばいくらでもできた。それでもなんと

なく負けを認めたのだ。彼女は自らの腕を見る、白い肌にはんのりと赤みが差している。強烈なスパイクを何度も受けたからだろう。聖と同様彼女にもダメージはあるのだ。

「あーあ。もう少しやり返してもよかったかも」

ちよつと呆れたような声を出す。その声は明るい。さっきまで黙っていた美しい女性が無性に突然に幼い女の子になったようだった。いや、どちらも彼女の魅力なのだろう。

からんとピーチサワーが音を鳴らす。

今度は天子はそれをがつつと掴んで、刺さったストローからちゅーと吸う。透明なストローに桃色のそれが満たされて、天子の喉が鳴る。はあとストローを離れた彼女は自分の唇をちよつとだけ舐める。

「ぶはっ」

小さな声を出した。

それからピーチチェアアの上で両足を抱くようにして座る。綺麗な髪がさらさらと肌を流れていく。

「い」一緒してもいいですか?」

「……」

天子はその声をうげつとした顔をしたが、声がしたのは後ろである。彼女の顔は相手

には見えない。だからそのまま振り向かずに行った。

「好きにしたらいんじやない？」

「ありがとう。よいしょと」

わざわざ「よいしょ」などと言いながら、新しいビーチチェアをテーブルを挟んだ向かい側に置いたのは聖白蓮である。

手には白い何か巻いている。さっきの試合で痛めたのかもしれない。天子はちらりとみてから、何か言おうとしたが。なぜか両腕を組んでふんと鼻を鳴らしてしまった。

そんなことはお構いなしに聖は楽し気に椅子の上で寝そべる。こんなことは幻想郷ではできないだろう。寺の住職が寺だろうと川辺だろうと水着で寝そべっていたら、もう何が何だかわかるまい。しかし、ここではそんなことは気にする必要もない。

「楽しかったですねえ。ああいうことは私は大歓迎でした。体を動かすのは気持ちがいいわ」

聖はうーんと体を伸ばしながら言う、いつもどこか楽しんでいるような顔をしている。天子はじとつと聖を見て言う。その目線は聖の顔から首、その下に行つたところまで。「……」と黙り込んでしまった。

「ある意味私が望んだものはこんなことだったのかもしれないね」

聖の言葉に天子は言う。聖の願いはもともと人間と妖怪の調和に近いことだったの

だ、ある意味というのは「ビーチバレー」など夢にも思わなかったからだ。

「望みなんてものはかなってみても分からないものよ」

「意外と悟ったようなことを言うのね？ 天子さん」

「……私は天人よ。前から聞きたかったことがあるんだけどどうせ悟ったところで何にもないのになんで修行しているの？」

「……さあ？ なんででしょう？」

くすくすと聖は笑い、その柔らかな笑顔を天子にむける。微笑んだ彼女はただそれだけで優しい。それでも天子には効かない。青い髪の少女は桃色のサワーをつかんでゆっくり飲んでいる。

天子がなんとなく視線を下に向けると浜辺を歩く一匹の小さな蟹。ぼんやりと眺めているとなんだか気持ちが悪くなっていくような気がするが、「その子」はどこかに行ってしまった。もう会うことはないだろう。

「ねえ」

「はい」

天子の言葉に明るい返事が返ってくる。

「もし過去をやり直せるならあんなならどうするかしら？」

「……過去、ですか。そうですね……わかりませんね」

少し寂しそうな声で聖は言う、天子はお構いなしに続けた。

「この異変を起こした奴はきつと何かをやり直したかったのよ。くだらない話ね。ほんとかくだらなーいわ」

最後は投げやりに天子は言った。聖は「……」何か考えるように彼女を見たが、最終的にくすりとしただけであった。

☆☆

社会では忘れてはいけないことが多々ある。

たとえ世界のどこかに緩やかな時間が流れていようとも違法労働は終わらないという真実である。

海の家で働く一匹のネズミはやきそばを焼きながら明鏡止水の心を悟っていた。

妙なことを考えて現状を認識するとストレスが堰を切って襲ってくる気がする。彼女は絶対に余計なことは考えないようにしていた、というかそうなってしまった。考えるのは海の家をいかにして回すかの一点だけである。社畜にはそれ以外の思考など必要はないのである。

ナズーリンは目の輝きすらもエネルギー節約のために消しているかのようだった。

彼女は黙々と動く姿に無駄はなく。さらに休みもない。さつきどこかの天人がやってきてピーチサワーなどと言ったときにはフライパンを熱く握りしめたが、我慢した。

しかし、レンタルのビーチパラソルとビーチチェアを貸してくれと言われては断れなかった。一応レンタルメニューにあるのであるから正統な注文なのだ。その対応に上白沢慧音が手を取られたことによりナズーリンは一人で海の家は少しの間一人だけになった。

「らっしやい」

来客に反応するのはすさまじい速さだ。

いらっしやいませなどというのは文字の無駄である。普段の彼女なら絶対に口にしてない言葉を使うほど追い詰められている。ナズーリンはお冷を即座に用意してから、お客をテーブルに案内する。

ちやんと可愛らしい笑顔をするのでナズーリンは人気だった。そのいじらしさに負けてみんな多くの注文をくれるのだ。

(しねえ)

注文用紙にペンを走らせながらナズーリンは思った。

接客業では絶対に出させない言葉を心に、ナズーリンは一生懸命仕事する。水着にエプロンを着ているからたまにずれた布を指でなおす。そんな小さな時間も惜しいくらいのは忙しさだった。

彼女の頭にはこの店のすべてが積み込まれている。机の位置から、料理の進捗状況ま

で同時のタイムラインが出来上がっているのだ。今はちようどラムネが切れそうだった。

小走りで裏手に回って、ナズーリンは新しく補充されたラムネのケースを持ち上げた時、その間に一片の紙が挟まっていることに彼女は気が付いた。このケースは商品切れになりそうになったときに河城にとりが置いていったものである。本人はラムネを一つつかんでどこかに消えていった。

商品が切れれば売ることすらもできないのである。しかし、人員は使えなくなるまで使う。ある意味もつたいたいの精神である。ちなみにもつたいたいののは人件費である。労働者という「個体」の話ではない。

「なんだこれ」

哀れにもナズーリンは紙を開きながら歩く。一秒も止まっているわけにはいかなないのである。ぱらりと開いたそこには一言、

——ちゃんと評価しているから

と書いてあった。もちろんにとりだろう。

それを見てナズーリンは目頭が熱くなってしまった。完全に不覚である。普段の聡明な彼女なら気が付いたはずなのである。「評価する」とは書いてあるが、給料に反映するととも人員を増やすとも書いていないのである。

しかし、ナズーリンの心に余裕などない。彼女は腕で目元をこすって「ふん、河童ごときが」とどことなく嬉しそうに言ってしまう。ブラック企業を長くするコツはたまに優しい言葉をかけておくことである。

ナズーリンはフライパンを握る。おいしい焼そばを焼くために――。そして河童の養分になるために。

☆☆

自分の部下がそんなことになっているとは知らない毘沙門天代理は高鳴る胸を抑えきれなかった。彼女は両手を胸にあてて大きく息を吸うって吐く。

そうやって息を整えてから空を見る一匹の虎。その身を純白の水着に包んだ彼女は今、熱い体に心地よさを感じている。体を動かすこと自体は嫌いではない。むしろ幻想郷のお寺の奥にいるとなかなか暴れる機会がないのである。

ほんとは外を駆けまわるのも好き、と思つてからなんとなく恥ずかしくなつて寅丸は頭を振つた。そのしぐさがどことなく猫のようである。

「はああ」

一回戦ではこいしの無意識を超えるために全力で動いたこともあり、疲労はかなりある。寅丸は自分の手を開いては閉じ、感覚を確かめている。隣のコートは決着がついたようである。寅丸は煌く瞳を相手コートにむける。

構えているのは自分の「仲間」であるはずの村紗水蜜。彼女は片手にボールを載せて、じつとこちらの様子をうかがっている。決着をつける気があるのは彼女たちも同じなのだろう。

得点は「16—16」である。先に20点を先取した方が勝ちの単純なルールだからこそ、ここで気を抜くことはできない。水蜜の手前ではあの巫女がぴよんぴよんとジャンプしている、体の調子を確かめているのだろうかと寅丸はくすりとした。

審判台ではおかつぱ河童が両チームの状態をみている、あとは笛を吹けばいいのだ。口にくわえたホイッスルを彼女は鳴らす。

ぴー。

「行きますよつ。寅丸っ」

水蜜がパンとサーブを撃つ。寅丸は素早く反応して受けそうになる。

「まかせて」

声がある。雲居一輪が前に飛び出したのだ。このひまわりの髪飾りを揺らしながら彼女はビーチボールを両手の掌で受ける。

ゆつくりと回転しながらボールが空に浮かぶ。完全に一輪のことを忘れていた寅丸だが、獣のように前へ飛び出した。口では「ありがとう一輪」などち言っている。

体をひねり勢いをつけてジャンプする。きらきら光るのは彼女の髪。自信に満ちた

瞳の先には水蜜と巫女の真剣な顔。

「受けてみなさいっ！」

一撃。

寅丸はしなやかな打撃から、強烈なスパイクを打ち込む。

それを水蜜が受ける。顔を少ししかめて、なんとか上にあげた。一度、霊夢が修正するトスをして水蜜が寅丸にスパイクを打ち込む。この金髪の少女はそれを両手でレシーブ。相手のコートに跳ね返した。

すかさず霊夢がそれを拾うと水蜜が合わせてもう一発スパイクを打ち込んでくる。意外と息の合ったプレーをすることに寅丸は感心してしまう。ただ、もちろん負ける気はない。

彼女は歯を食いしばって両足に力を籠める。人間の走り方ではなく肉食獣としてのダッシュだった。

撃ち込まれたスパイクに瞬間的に反応する体。寅丸は腕でボールを打ち上げる。

「でばん。でばんね」

はしやぎながら一輪がそれを追いかけていく。一番影薄いが楽しそうである。ある意味では一番しがらみがないのである。

彼女はネット際に落ちてくるボールに合わせてとんだ。

「させませんよ一輪！」

ブロックする村紗。

それを一輪はにやりと微笑んで構わず全力でスパイクを打ち込んだのだった。同僚に遠慮するような理由はどこにもないのである。むしろなんとなくうれしい。その健康的な体をめいっばい使つての一撃は強烈だった。

「あいたあ」

水蜜のひょうきんな悲鳴とともに歓声が上がった。村紗の両手をあげたブロックにちようど当たったボールがあらぬ方向に飛んでいく。しかし、地面に落ちれば寅丸たちの得点である。

わあー。歓声の中、巫女が奔った。白い砂を巻き上げて必死になっている。

「はあ、はあ、はあ、今更負けてたまるかあ」

飛びつき、めいっばい腕を伸ばす霊夢。しかし無情にもその前にボールが落ちてしまう。ぽんぽんと音をたてて二度、三度跳ねたボール。河童の笛と歓声が大きく響き。霊夢はぽんと砂をたいた。

これで寅丸たちはリーチである。一輪は両手をあげてやったやったと小さなジャンプを繰り返している。水着でそれをする意味をあまり考えていないのだろう。

しかし、立ち上がったときには何もなかったかのように涼しい顔で太ももに砂をばん

ぱんと払っている。

「追い詰められましたねえ」

とことこ寄ってくる村紗が霊夢の肩をたたく。

「あ？ まだ負けたわけじゃないわ！」

「それでこそ霊夢さん！ あんな、水着ではしゃいでいる入道使えない妖怪を相手に負けるわけにはいきませんからねっ」

にやつと白い歯を見せて笑う村紗に巫女はクスツとする。それから村紗が手をあげる、霊夢はあきれ顔で「はいはい」と眩きながらぱーんとタツチした。

「おーいたいたい」

にぎにぎと村紗は手のひらを動かす。彼女はちよつと下を見れば汗にまみれた自分の体が見えた、船幽霊としてはあるまじきことかもしれない。肩ひもを整えながらそんなことを想うのである。

「ねえ。水蜜」

「はいはい霊夢さんなに？」

「ラムネ」

「はい？」

「この試合にかつたらとりあえずラムネをおごりなさいよ」

「な、なんでですか？ ……いや、いいですよ。一緒に乾杯しましょう。悔しがっている顔を見ながらっ」

「そんな陰湿なことをしたいなんて言つてないんだけど……まあいいわ。どつちにせよ負けるわけにはいかないしね。あんたのにやけ顔をみながらでも、あ、やつぱりやめとこう」

「な、なんでですか」

水蜜は苦笑しながらコートにもどつていく。どちらにせよ決着は近いのである。吐く息は熱い。それはきつと霊夢も一緒だろう。

☆

——霊夢がんばって

そういいたい気持ちを抑えながらさとりは観戦している。特設のさとり様用のエリアを作られてから出るにでられず声も出しにくい。たまにこいしが「お姉ちゃん、お姉ちゃん」と甘えてきたりするがそれは仕方なくでなでしたりはする。

古明地さとりはこのビーチでは謎の尊敬を受けている。ポスターに「さとり様も来るよ」と書かれていたから妙な期待が生まれているのである。ピンク頭の芸人と思つている者もいるだろう。

たまに観客から「いんすたばえするわー」と呪文のような言葉が聞こえてくるがなん

のことかはおもしろんさとりにはわからない。彼女は用意されたワイングラスに注がれたブドウ味のフアンタというジュースを飲む。なんか癖で手元で回してしまつたが後で顔が赤くなるくらい恥ずかしくなつてしまふ。

ジュースを用意したのはこいしである。そのこいしは缶ジュースをごくごく飲んでいる。この妹とこんなに長い時間一緒にいたのは久々な気もする。いつもどこに行つたのかわからないのである。

「もうすぐ勝負が決まるわ……」

「そうだねっ！ 巫女の変身が見られるかもっ!」

「いい、こいし？ 霊夢は変身できないのよ？ あれはあの船幽霊の冗談よ……」

「変身するタイプの宇宙人じゃないの……?」

「巫女はまず、宇宙人じゃないわ。普通の女の子……でもない気がするわね……いや、これもちがうのかしら」

さとりはちよつと考える。

その横でこいしは首をぐいーとかしげている。ただそれだけのしぐさなのに可愛らしくさとりには映つてしまふ。姉として甘いのだろうかと彼女は思った。しかし、今の彼女には巫女も同じくらい可愛らしいのである。彼女のことを応援しかできないが「大人として」の対策はちゃんと売つておいてあげることができる。

さとりは地底の主である。彼女の智謀は本来的に家計のやりくりに適しているわけではない。

「まあ、そんなことはいいわね。こいしちよつとお願ひあるのだけど……。ちよつと耳を貸してくれないかしら」

「はいはい」

こいしはさとりに耳を近づける。ごによごによと姉妹は密談を始めた。

☆

「とどめと行きましようか？」

寅丸は相手のコートを睨みながらそう言った。肉食獣の煌く瞳は美しい。彼女がすぐそこまで来た勝利に舌なめずりをする。それがどことなく妖しい魅力があった。

だからプロマイド写真が売れるのであるが、そんなことは知らないし、知ったが最後に寅丸も一輪も小娘にもどるだろう。顔を赤くして逃亡を図る可能性もある。

「ふう、ふう」

知らぬが仏、いや知らぬ毘沙門天。余裕の笑みをこぼす。

その前で一輪が構えている。あと少して勝つことができるのである。それが終わったらとりあえず勝ち誇りたい、という矮小なことを想っている。ある意味で言えば邪気がないと言つていいだろう。一番彼女のプロマイド写真のラインナップが闇取引され

ているとはまだ気が付いていない。河童の高笑いはこの暑さにかき消されているのかもしれない。

寅丸の肌から湯気の立ちそうな暑さだった。汗が鎖骨から胸へ流れていく。

彼女はもう一度息を整える。最後のサーブを決めて終わるつもりなのだ。ふいに隣のコートで暴れていたあの地獄ガラスの元気のよい声が脳裏をかすめた、スペルカードを叫びながら打ち込んだスパイクは素晴らしい勢いを持っていた。

寅丸は思う、最後のとどめに相応しい一撃を与えてあげましょう、と。寅丸はボールにつぶやいた

——絶対的正義〔アブソリュート・ジャスティス〕

「ふあああ」

寅丸は途端に恥ずかしくなり頭を抱えた。スペルカードの名前を言っただけなのになぜここまで恥ずかしいのかはさっぱりわからない。なんか逃げたくなった。お空はこんなことをずっとしていたのだ。

「やりますね、あの子は……」

妙などころでお空の評価を上げた寅丸は改めてサーブを構える。

「さあ、行きますよ」

彼女の視界の先にたたずんでいるのは幻想郷の巫女。彼女の体からはうつすらと光

の
よ
う
な
も
の
が
立
ち
上
が
っ
て
い
る
—